

COBOL for Windows



プログラミング・ガイド

バージョン 7.0

COBOL for Windows



プログラミング・ガイド

バージョン 7.0

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、833 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、COBOL for Windows in IBM WebSphere Developer for System z バージョン 7.0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。製品のレベルに応じた正しい版を使用していることを確認してください。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： SC18-9975-00
COBOL for Windows
Programming Guide
Version 7.0

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2006.11

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1996, 2006. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2006

目次

表	xiii
---	------

まえがき	xv
------	----

本書について	xv
本書のアクセシビリティ	xv
本書の使い方	xv
略語	xv
構文図の読み方	xvi
例の示し方	xvii
改訂の要約	xviii
バージョン 7 (2006 年 12 月)	xviii
バージョン 6 (2005 年 5 月)	xix

第 1 部 プログラムのコーディング . . . 1

第 1 章 プログラムの構造 5

プログラムの識別	5
プログラムを再帰的として識別する	6
収容プログラムによってプログラムに呼び出し可能のマークを付ける	6
プログラムを初期状態に設定する	6
ソース・リストのヘッダーの変更	7
コンピューター環境の記述	7
例: FILE-CONTROL 段落	8
照合シーケンスの指定	8
シンボリック文字を定義する	10
ユーザー定義のクラスを定義する	10
オペレーティング・システムに対してファイルを識別する	10
データの記述	12
入出力操作でのデータの使用	12
WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の比較	14
別のプログラムからのデータの使用	16
データの処理	17
PROCEDURE DIVISION 内でロジックが分割される方法	18
宣言	22

第 2 章 データの使用 23

変数、構造、リテラル、および定数の使用	23
変数の使用	23
データ項目とグループ項目の使用	24
リテラルの使用	26
定数の使用	26
表意定数の使用	27
データ項目への値の割り当て	27
例: データ項目の初期化	28
構造の初期化 (INITIALIZE)	31
基本データ項目への値の割り当て (MOVE)	33

グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)	34
算術結果の割り当て (MOVE または COMPUTE)	35
画面またはファイルからの入力への割り当て (ACCEPT)	35
画面上またはファイル内での値の表示 (DISPLAY)	37
組み込み関数の使用 (組み込み関数)	37
テーブル (配列) とポインターの使用	38

第 3 章 数値および算術演算 41

数値データの定義	41
数値データの表示	43
数値データの保管方法の制御	44
数値データの形式	45
外部 10 進数 (DISPLAY および NATIONAL) 項目	45
外部浮動小数点 (DISPLAY および NATIONAL) 項目	46
2 進数 (COMP) 項目	47
固有 2 進数 (COMP-5) 項目	47
2 進数データのバイト反転	48
バック 10 進数 (COMP-3) 項目	49
内部浮動小数点 (COMP-1 および COMP-2) 項目	49
例: 数値データおよび内部表現	49
データ形式の変換	52
変換および精度	52
ゾーン 10 進数およびバック 10 進数データのサイン表記	53
非互換データの検査 (数値のクラス・テスト)	54
算術の実行	55
COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用	55
算術式の使用	56
数字組み込み関数の使用	56
例: 数字組み込み関数	58
固定小数点演算と浮動小数点演算の対比	60
浮動小数点計算	60
固定小数点計算	61
算術比較 (比較条件)	61
例: 固定小数点計算および浮動小数点計算	62
通貨記号の使用	62
例: 複数の通貨符号	63

第 4 章 テーブルの処理 65

テーブルの定義 (OCCURS)	65
テーブルのネスト	67
例: 添え字付け	68
例: 指標付け	68
テーブル内の項目の参照	69
添え字付け	69
索引付け	70
テーブルに値を入れる方法	71

テーブルの動的なロード	72
テーブルの初期化 (INITIALIZE)	72
テーブルの定義時の値の割り当て (VALUE).	73
例: PERFORM と添え字付け	75
例: PERFORM および索引付け	76
可変長テーブルの作成 (DEPENDING ON)	77
可変長テーブルのロード	79
可変長テーブルへの値の割り当て	80
テーブルの探索	80
逐次探索 (SEARCH)	81
二分探索 (SEARCH ALL).	82
組み込み関数を使用したテーブル項目の処理	83
例: 組み込み関数を使用したテーブルの処理	84

第 5 章 プログラム・アクションの選択と反復 85

プログラム・アクションの選択	85
アクションの選択項目のコーディング	85
条件式のコーディング	90
プログラム・アクションの繰り返し	94
インラインまたはライン外 PERFORM の選択	94
ループのコーディング	95
テーブルのループ処理	96
複数の段落またはセクションの実行	97

第 6 章 スtringの処理 99

データ項目の結合 (STRING).	99
例: STRING ステートメント	100
データ項目の分割 (UNSTRING)	102
例: UNSTRING ステートメント	103
ヌル終了Stringの取り扱い	105
例: ヌル終了String	106
データ項目のサブStringの参照	106
参照修飾子	108
例: 参照修飾子としての演算式	109
例: 参照修飾子としての組み込み関数	109
データ項目の計算および置換 (INSPECT)	110
例: INSPECT ステートメント	110
データ項目の変換 (組み込み関数)	111
大文字または小文字への変換 (UPPER-CASE, LOWER-CASE)	112
逆順への変換 (REVERSE)	112
数値への変換 (NUMVAL, NUMVAL-C)	113
あるコード・ページから別のコード・ページへの変換	114
データ項目の評価 (組み込み関数)	114
照合シーケンスに関する単一文字の評価	115
最大または最小データ項目の検出	115
データ項目の長さの検出	118
コンパイルの日付の検出	118

第 7 章 ファイルの処理 121

ファイルの識別	121
Btrieve ファイルの識別	122
STL ファイルの識別	122
RSD ファイルの識別	122

ファイル・システム	123
STL ファイル・システム	123
RSD ファイル・システム	126
ファイル・オープン時のエラーからの保護	127
ファイル編成およびアクセス・モードの指定	127
ファイル編成およびアクセス・モード	127
ファイル状況フィールドの設定	132
ファイル構造の詳細記述	132
ファイルの入出力ステートメントのコーディング	133
例: COBOL でのファイルのコーディング	133
ファイル位置標識	135
ファイルのオープン	135
ファイルからのレコードの読み取り	138
ファイルへのレコードの追加	140
ファイル内のレコードの置換	140
ファイルからのレコードの削除	141
ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント	142

第 8 章 ファイルのソートおよびマージ 145

ソートおよびマージ・プロセス	146
ソートまたはマージ・ファイルの記述	146
ソートまたはマージへの入力記述	147
例: SORT 用のソート・ファイルおよびの入力ファイルの記述	147
入力プロシージャのコーディング	148
ソートまたはマージからの出力記述	149
出力プロシージャのコーディング	150
入出力プロシージャに関する制約事項	150
ソートまたはマージの要求	151
ソートまたはマージ基準の設定	152
代替照合シーケンスの選択	153
例: 入出力プロシージャを使用したソート	153
ソートまたはマージの成否の判断	154
ソートおよびマージ・エラー番号	155
ソートまたはマージ操作の途中停止	158

第 9 章 エラーの処理 159

Stringの結合および分割におけるエラーの処理	159
算術演算でのエラーの処理	160
例: 0 による除算の検査	160
入出力操作でのエラーの処理	161
ファイルの終わり条件 (AT END) の使用	161
ERROR 宣言のコーディング	162
ファイル状況キーの使用	162
ファイル・システム状況コードの使用	164
プログラム呼び出し時のエラーの処理	166

第 2 部 各国語環境に合わせたプログラム対応 169

第 10 章 国際環境でのデータの処理 171

COBOL ステートメントと国別データ	172
組み込み関数と国別データ	175
Unicode および言語文字のエンコード	175

COBOL での国別データ (Unicode) の使用	176
国別データ項目の定義	177
国別リテラルの使用	178
国別文字表意定数の使用	179
国別数値データ項目の定義	180
国別グループ	180
国別グループの使用	181
国別データの保管	184
国別 (Unicode) 表現との間の変換	185
英数字、DBCS、および整数データから国別データへの変換 (MOVE)	185
英数字および DBCS データから国別データへの変換 (NATIONAL-OF)	186
国別データの英数字データへの変換 (DISPLAY-OF)	186
デフォルト・コード・ページのオーバーライド	187
例: 国別データとの間の変換	187
UTF-8 データの処理	188
中国語 GB 18030 データの処理	189
国別 (UTF-16) データの比較	189
2 つのクラス国別オペランドの比較	190
クラス国別オペランドとクラス数値オペランドの比較	191
国別数値オペランドと他の数値オペランドの比較	191
国別文字ストリング・オペランドと他の文字ストリング・オペランドとの比較	192
国別データ・オペランドと英数字グループ・オペランドの比較	192
DBCS サポートを使用するためのコーディング	192
DBCS データの宣言	193
DBCS リテラルの使用	193
有効な DBCS 文字に関するテスト	195
DBCS データを含む英数字データ項目の処理	195

第 11 章 ロケールの設定 197

アクティブ・ロケール	197
ロケール付きのコード・ページの指定	198
環境変数を使用したロケールの指定	199
システム設定からのロケールの決定	200
変換が使用可能なメッセージのタイプ	201
サポートされるロケールおよびコード・ページ	201
ロケール付きの照合シーケンスの制御	203
ロケール付きの英数字照合シーケンスの制御	204
ロケール付きの DBCS 照合シーケンスの制御	205
ロケール付きの国別照合シーケンスの制御	206
照合シーケンスに依存する組み込み関数	207
アクティブ・ロケールおよびコード・ページ値へのアクセス	207
例: コード・ページ ID の取得および変換	208

第 3 部 プログラムのコンパイル、リンク、実行、デバッグ 211

第 12 章 プログラムのコンパイル、リンク、実行 213

環境変数の設定	213
COBOL for Windows の環境変数の設定	214
コンパイラ環境変数	215
リンカー環境変数	217
ランタイム環境変数	217
コンパイル済みプログラム	222
コマンド行からのコンパイル	223
バッチ・ファイルまたはコマンド・ファイルを使用したコンパイル	224
PROCESS (CBL) ステートメントによるコンパイラ・オプションの指定	224
ソース・プログラムのエラーの訂正	225
コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード	225
コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成	226
cob2 オプション	228
コンパイルに適用されるオプション	228
リンクに適用されるオプション	229
コンパイルとリンクの両方に適用されるオプション	230
プログラムのリンク	231
cob2 でサポートされるファイル名および拡張子	232
リンカー・オプションの指定	232
コンパイラを使用したリンク	233
コマンド行からのリンク	233
リンカーの入出力ファイル	235
ファイル名のデフォルト	236
リンク内のエラーの訂正	237
リンカーの戻りコード	237
プログラム名内のリンカー・エラー	237
NMAKE を使用したプロジェクトの更新	238
コマンド行での NMAKE の実行	238
コマンド・ファイルでの NMAKE の実行	239
NMAKE の記述ファイルの定義	240
プログラムの実行	240
COBOL for Windows DLL の再配布	241

第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行 243

オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル	243
オブジェクト指向アプリケーションの準備	244
例: COBOL クラス定義のコンパイルおよびリンク	245
オブジェクト指向アプリケーションの実行	245
main メソッドで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行	246
COBOL プログラムで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行	247

第 14 章 コンパイラ・オプション 249

矛盾するコンパイラ・オプション	251
ADATA	251
ARITH.	252
BINARY	253
CALLINT.	254
CHAR	255
CICS	257

COLLSEQ	258
COMPILE	260
CURRENCY	260
DATEPROC	261
DIAGTRUNC	263
DYNAM	263
ENTRYINT	264
EXIT	265
文字ストリング形式	267
ユーザー出口作業域	267
リンケージ規約	267
出口モジュールのパラメーター・リスト	267
INEXIT の使用	268
LIBEXIT の使用	269
PRTEXIT の使用	270
ADEXIT の使用	270
FLAG	271
FLAGSTD	272
FLOAT	274
LIB	274
LINECOUNT	275
LIST	275
LSTFILE	276
MAP	276
MDECK	277
NCOLLSEQ	279
NSYMBOL	279
NUMBER	280
OPTIMIZE	281
PGMNAME	282
PGMNAME(UPPER)	283
PGMNAME(MIXED)	283
PROBE	283
QUOTE/APOST	284
SEPOBJ	285
バッチ・コンパイル	285
SEQUENCE	286
SIZE	287
SOSI	287
SOURCE	289
SPACE	289
SQL	290
SSRANGE	291
TERMINAL	292
TEST	292
THREAD	293
TRUNC	293
TRUNC の例 1	295
TRUNC の例 2	296
VBREF	297
WSCLEAR	297
XREF	297
YEARWINDOW	299
ZWB	299

第 15 章 コンパイラー指示ステートメント 301

第 16 章 リンカー・オプション 307

/?	308
/ALIGNADDR	309
/ALIGNFILE	309
/BASE	309
/CODE	310
/DATA	311
/DBGPack、/NODBGPACK	311
/DEBUG、/NODEBUG	312
/DEFAULTLIBRARYSEARCH、 /NODEFAULTLIBRARYSEARCH	312
/DLL	313
/ENTRY	313
/EXECUTABLE	313
/EXTDICTIONARY、/NOEXTDICTIONARY	314
/FIXED、/NOFIXED	315
/FORCE、/NOFORCE	315
/HEAP	315
/HELP	316
/INCLUDE	316
/INFORMATION、/NOINFORMATION	316
/LINENUMBERS、/NOLINENUMBERS	317
/LOGO、/NOLOGO	317
/MAP、/NOMAP	318
/OUT	318
/PMTYPE	319
/SECTION	320
/SEGMENTS	320
/STACK	321
/STUB	322
/SUBSYSTEM	322
/VERBOSE、/NOVERBOSE	322
/VERSION	323

第 17 章 ランタイム・オプション 325

CHECK	325
DEBUG	326
ERRCOUNT	326
FILESYS	327
TRAP	327
UPSI	328

第 18 章 デバッグ 329

ソース言語によるデバッグ	329
プログラム・ロジックのトレース	330
入出力エラーの検出および処理	330
データの妥当性検査	331
初期化されていないデータの検出	331
プロシージャに関する情報の生成	332
コンパイラー・オプションを使用したデバッグ	333
コーディング・エラーの検出	334
行シーケンス問題の検出	335
有効範囲の検査	335

診断するエラーのレベルの選択	336
プログラム・エンティティ定義および参照の検出	338
データ項目のリスト	339
デバッガーの使用	340
リストの入手	340
例: 短縮リスト	342
例: SOURCE および NUMBER 出力	343
例: MAP 出力	344
例: XREF 出力 - データ名相互参照	347
例: VBREF コンパイラ出力	349
ユーザー出口のデバッグ	350
アセンブラー・ルーチンのデバッグ	351

第 4 部 データベースへのアクセス 353

第 19 章 DB2 環境用のプログラミング 355

DB2 コプロセッサ	355
SQL ステートメントのコーディング	356
DB2 コプロセッサを用いた SQL INCLUDE の使用	357
SQL ステートメントでのバイナリ項目の使用	357
SQL ステートメントの成否の判断	358
コンパイル前の DB2 の起動	358
SQL オプションを使用したコンパイル	358
DB2 サブオプションの分離	359
パッケージ名およびバインド・ファイル名の使用	359

第 20 章 COBOL プログラムの開発 (CICS の場合) 361

CICS のもとで実行する COBOL プログラムのコーディング	362
CICS のもとでのシステム日付の取得	363
CICS での動的呼び出し	363
CICS プログラムのコンパイルおよび実行	365
組み込みの CICS 変換プログラム	366
CICS プログラムのデバッグ	366

第 21 章 Open Database Connectivity (ODBC) 369

ODBC と組み込み SQL の比較	369
バックグラウンド	370
ODBC 対応ソフトウェアのインストールおよび構成	370
COBOL からの ODBC 呼び出しのコーディング:	
概要	370
ODBC に適したデータ型の使用	371
ODBC 呼び出しにおける引数としてのポインタの受け渡し	371
ODBC 呼び出しにおける関数戻り値へのアクセス	373
ODBC 呼び出しにおけるビットのテスト	373
ODBC API 用の COBOL コピーブックの使用	375
例: ODBC コピーブックを使用したサンプル・プログラム	376
例: ODBC プロシージャ用のコピーブック	377

例: ODBC データ定義用のコピーブック	380
COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名	380
ODBC 呼び出しを行うプログラムのコンパイルおよびリンク	382
ODBC エラー・メッセージについて	382

第 5 部 XML と COBOL の連携 385

第 22 章 XML 入力の処理 387

COBOL での XML パーサー	387
XML 文書へのアクセス	389
XML 文書の構文解析	389
XML-EVENT の内容	391
例: XML イベントの処理	394
XML を処理するためのプロシージャの作成	396
XML 文書のエンコード方式についての理解	404
XML 文書のコード化文字セット	405
コード・ページの指定	406
XML パーサーが検出する例外の処理	407
XML パーサーによるエラーの処理方法	408
コード・ページの矛盾の処理	410
XML 構文解析の終了	412

第 23 章 XML 出力の生成 413

XML 出力の生成	413
例: XML の生成	416
XML 出力の拡張	419
例: XML 出力の拡張	420
例: エレメント名のハイフンを下線に変換する	423
生成される XML 出力のエンコードの制御	424
XML 出力生成時のエラーの処理	424

第 6 部 オブジェクト指向プログラムの開発 427

第 24 章 オブジェクト指向プログラムの作成 429

例: 口座	430
サブクラス	431
クラスの定義	432
クラス定義用の CLASS-ID 段落	434
クラス定義用の REPOSITORY 段落	435
クラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION	436
例: クラスの定義	437
クラス・インスタンス・メソッドの定義	438
クラス・インスタンス・メソッド定義用の METHOD-ID 段落	439
クラス・インスタンス・メソッド定義用の INPUT-OUTPUT SECTION	439
クラス・インスタンス・メソッド定義用の DATA DIVISION	440
クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION	441

インスタンス・メソッドのオーバーライド	442
インスタンス・メソッドの多重定義	443
属性 (get および set) メソッドのコーディング	444
例: メソッドの定義	445
クライアントの定義	447
クライアント定義用の REPOSITORY 段落	448
クライアント定義用の DATA DIVISION	449
オブジェクト参照の比較および設定	450
メソッドの呼び出し (INVOKE)	452
クラスのインスタンスの作成および初期化	456
クラスのインスタンスの解放	458
例: クライアントの定義	459
サブクラスの定義	460
サブクラス定義用の CLASS-ID 段落	461
サブクラス定義用の REPOSITORY 段落	461
サブクラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION	462
サブクラス・インスタンス・メソッドの定義	462
例: サブクラスの定義 (メソッドに関して)	463
ファクトリー・セクションの定義	464
ファクトリー・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION	465
ファクトリー・メソッドの定義	466
例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)	468
プロシージャ指向 COBOL プログラムのラッピ ング	474
オブジェクト指向アプリケーションの構造化	474
例: java コマンドを使用して実行できる COBOL アプリケーション	475

第 25 章 Java メソッドとの通信 . . . 479

JNI サービスへのアクセス	479
Java 例外の処理	481
ローカル参照とグローバル参照の管理	482
Java アクセス制御	484
Java とのデータ共有	484
COBOL および Java での相互運用可能なデータ 型のコーディング	485
Java 用の配列およびストリングの宣言	486
Java 配列の取り扱い	487
Java ストリングの取り扱い	490

第 7 部 複雑なアプリケーションを扱う作業 . . . 493

第 26 章 プラットフォーム間でのアプリケーションの移植 . . . 495

コンパイルするメインフレーム・アプリケーション の取得	495
実行するメインフレーム・アプリケーションの取得: 概要	497
データ表現による違いの修正	497
移植性に影響する環境の違いの修正	500
言語エレメントによる違いの修正	501
メインフレーム上で実行するコードの作成	501

Windows ベースのワークステーションと AIX ワ ークステーション間で移植可能なアプリケーションの 作成	502
--	-----

第 27 章 サブプログラムの使用 . . . 505

メインプログラム、サブプログラム、および呼び出 し	505
メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再 入	506
ネストされた COBOL プログラムの呼び出し	507
ネストされたプログラム	507
例: ネストされたプログラムの構造	509
名前の有効範囲	509
ネストなし COBOL プログラムの呼び出し	510
CALL identifier および CALL literal	511
呼び出しインターフェース規約	512
CDECL	512
OPTLINK	513
SYSTEM	514
COBOL および C/C++ プログラム間の呼び出し	515
環境の初期設定	515
COBOL と C/C++ 間でのデータの受け渡し	515
COBOL と C/C++ 用のリンケージ規約の設定	516
スタック・フレームの縮小と実行単位またはプロ セスの終了	517
COBOL および C/C++ のデータ型	517
例: C/C++ DLL を呼び出す COBOL プログラム	518
再帰呼び出しの実行	520

第 28 章 データの共有 . . . 521

データの受け渡し	521
呼び出し側プログラムの中での引数の記述	523
呼び出し先プログラムの中でのパラメーターの記 述	523
OMITTED 引数に関するテスト	524
LINKAGE SECTION のコーディング	524
引数を受け渡すための PROCEDURE DIVISION の コーディング	525
受け渡されるデータのグループ化	526
ヌル終了ストリングの取り扱い	526
チェーン・リストを処理するためのポインターの 使用	527
プロシージャ・ポインターと関数ポインターの使 用	530
Windows の制約事項への対処	530
複数の入り口点のコーディング	531
戻りコード情報の引き渡し	532
RETURN-CODE 特殊レジスタの理解	532
PROCEDURE DIVISION RETURNING . . . の使 用	532
CALL . . . RETURNING の指定	533
EXTERNAL 文節によるデータの共有	533
プログラム間でのファイルの共有 (外部ファイル)	533
例: 外部ファイルの使用	534
コマンド行引数の使用	537
例: コマンド行引数	537

第 29 章 ダイナミック・リンク・ライ

ブラリーの構築 539

スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク 539

DLL への参照をリンカーが解決する方法 540

DLL の作成 541

例: DLL ソース・ファイルおよび関連ファイル 542

モジュール定義ファイルの作成 544

モジュール・ステートメントの予約語 545

モジュール・ステートメントの要約 545

BASE 546

DESCRIPTION 546

EXPORTS 547

HEAPSIZE 548

LIBRARY 549

NAME 549

STACKSIZE 549

STUB 550

VERSION 551

第 30 章 マルチスレッド化のための

COBOL プログラムの準備 553

マルチスレッド化 553

マルチスレッド化による言語エレメントの処理 555

実行単位の有効範囲を持つエレメントの処理 555

プログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つ

エレメントの処理 556

マルチスレッド化を使用した COBOL 言語エレ

メントの有効範囲 556

マルチスレッド化サポートのための THREAD の選

択 557

マルチスレッド化されたプログラムへの制御権移動 557

マルチスレッド化されたプログラムの終了 558

マルチスレッド化による COBOL 制限の処理 558

例: マルチスレッド環境での COBOL の使用 559

thr cob.c のソース・コード 559

subd.cbl のソース・コード 561

sube.cbl のソース・コード 561

第 31 章 COBOL ランタイム環境の事

前初期設定 563

永続的な COBOL 環境の初期設定 563

事前初期設定された COBOL 環境の終了 564

例: COBOL 環境の事前初期設定 566

第 32 章 2 桁年の日付の処理 569

2000 年言語拡張 (MLE) 570

この拡張の原則と目標 571

日付に関連したロジック問題の解決 572

世紀ウィンドウの使用 573

内部ブリッジングの使用 574

完全フィールド拡張への移行 575

年先行型、年単独型、および年末尾型の日付フィー

ルドの使用 577

互換性のある日付 578

例: 年先行型日付フィールドの比較 579

その他の日付形式の使用 579

例: 年の分離 580

リテラルを日付として操作する 580

仮定による世紀ウィンドウ 581

非日付の処理 582

符号条件の使用 583

日付フィールドに対する算術の実行 584

ウィンドウ化日付フィールドのオーバーフローの

考慮 585

評価の順序の指定 586

日付処理の明示的制御 586

DATEVAL の使用 587

UNDATE の使用 587

例: DATEVAL 587

例: UNDATE 588

日付関連診断メッセージの分析および回避 588

日付処理上の問題の回避 590

パック 10 進数フィールドの問題の回避 590

拡張日付フィールドからウィンドウ化日付フィー

ルドへの移動 591

第 8 部 パフォーマンスおよび生産

性の向上 593

第 33 章 プログラムのチューニング 595

最適なプログラミング・スタイルの使用 596

構造化プログラミングの使用 596

一括表示表現 596

シンボリック定数の使用 597

定数計算のグループ化 597

重複計算のグループ化 597

効率的なデータ型の選択 598

効率的な計算データ型の選択 598

一貫性のあるデータ型の使用 599

算術式の効率化 599

指数の効率化 599

テーブルの効率的処理 600

テーブル参照の最適化 601

コードの最適化 603

最適化 604

パフォーマンスを向上させるコンパイラー機能の選

択 605

パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプシ

ョン 605

パフォーマンスの評価 608

第 34 章 コーディングの単純化 609

反復コーディングの除去 609

例: COPY ステートメントの使用 610

日時の取り扱い 611

日時の呼び出し可能サービスからのフィードバッ

クの取得 612

日時の呼び出し可能サービスからの条件の処理 612

例: 日付の操作 612

例: 出力用の日付形式 613

フィードバック・トークン	614
ピクチャー文字項およびストリング	615
例: 日時のピクチャー・ストリング	617
世紀ウィンドウ	618

第 9 部 付録 621

付録 A. ホスト COBOL との違いの要

約 623

コンパイラ・オプション	623
データ表現	624
2 進数データ	624
ゾーン 10 進数データ	624
パック 10 進数データ	624
浮動小数点データの表示	624
国別データ	624
EBCDIC および ASCII データ	624
データ変換用のコード・ページの決定	625
DBCS 文字ストリング	625
環境変数	625
ファイル指定	626
言語間通信 (ILC)	626
入出力	627
ランタイム・オプション	627
ソース・コード行のサイズ	627
言語エレメント	627

付録 B. zSeries ホスト・データ形式に

ついての考慮事項 631

CICS アクセス	631
日時呼び出し可能サービス	631
浮動小数点のオーバーフロー例外	631
DB2	632
Java とのインターオペラビリティのためのオブジ ェクト指向構文	632
MQ アプリケーション	632
ファイル・データ	632
SORT	632

付録 C. 中間結果および算術精度 . . . 635

中間結果用の用語	636
例: 中間結果の計算	637
固定小数点データと中間結果	637
加算、減算、乗算、および除算	637
指数	638
例: 固定小数点の算術での指数	639
中間結果での切り捨て	640
バイナリー・データと中間結果	640
固定小数点算術で評価される組み込み関数	641
整数関数	641
混合関数	641
浮動小数点データと中間結果	642
浮動小数点演算で評価される指数	643
浮動小数点演算で評価される組み込み関数	643
非算術ステートメントの算術式	644

付録 D. 複合 OCCURS DEPENDING

ON 647

例: 複合 ODO	647
長さの計算方法	648
ODO オブジェクトの値の設定	648
ODO オブジェクト値の変更の影響	648
ODO オブジェクト値を変更する際の指標エラー を防止する	649
エレメントを可変テーブルに追加する際のオーバ ーレイを防止する	650

付録 E. 日時呼び出し可能サービス . . . 653

CEECLDY - 日付から COBOL 整数形式への変換	655
CEEDATE - リリアン日付から文字形式への変換	659
CEEDATM - 秒から文字タイム・スタンプへの変換	663
CEEDAYS - 日付からリリアン形式への変換	667
CEEDYWK - リリアン日付からの曜日の計算	670
CEEGMT - 現在のグリニッジ標準時の取得	673
CEEGMTO - グリニッジ標準時から現地時間までの オフセットの取得	674
CEEISEC - 整数から秒への変換	677
CEELOCT - 現在の現地日時の取得	680
CEEQCEN - 世紀ウィンドウの照会	682
CEESCEN - 世紀ウィンドウの設定	683
CEESECI - 秒から整数への変換	685
CEESECS - タイム・スタンプの秒への変換	688
CEEUTC - 協定世界時の取得	693
IGZEDT4 - 現在日付の取得	693

付録 F. XML 参照資料 695

継続を許可する XML PARSE 例外	695
継続を許可しない XML PARSE 例外	700
XML 準拠	703
XML GENERATE 例外	706

付録 G. JNI.cpy 707

付録 H. COBOL SYSADATA ファイル

の内容 713

SYSADATA ファイルに影響する既存のコンパイラ ー・オプション	713
SYSADATA レコード・タイプ	714
例: SYSADATA	715
SYSADATA レコード記述	716
共通ヘッダー・セクション	717
ジョブ識別レコード - X'0000'	719
ADATA 識別レコード - X'0001'	719
コンパイル単位の開始終了レコード - X'0002'	720
オプション・レコード - X'0010'	720
外部シンボル・レコード - X'0020'	732
構文解析ツリー・レコード - X'0024'	733
トークン・レコード - X'0030'	747
ソース・エラー・レコード - X'0032'	761
ソース・レコード - X'0038'	761
COPY REPLACING レコード - X'0039'	762

記号レコード - X'0042'	762
記号相互参照レコード - X'0044'	775
ネストされたプログラム・レコード - X'0046'	776
ライブラリー・レコード - X'0060'	777
統計レコード - X'0090'	777
EVENTS レコード - X'0120'	778

付録 I. ランタイム・メッセージ 783

特記事項. 833

商標	833
--------------	-----

用語集 835

資料名リスト 863

COBOL for Windows	863
関連資料	863

索引 865

表

1. FILE SECTION 記入項目	13
2. プログラム内でのデータ項目の割り当て	27
3. COMP-5 データ項目の値の範囲	47
4. ネイティブの数値項目の内部表現	50
5. BINARY(S390)、CHAR(EBCDIC)、および FLOAT(HEX) が有効である場合の数値項目の 内部表記	51
6. 算術演算子の評価の順序	56
7. 数字組み込み関数	57
8. ユーロ記号の 16 進値	63
9. STL ファイル・システムの戻りコード	124
10. STL ファイル・システムのアダプター・オー プン・ルーチン戻りコード	126
11. ファイル編成およびアクセス・モード	128
12. 順次ファイルに有効な COBOL ステートメン ト	136
13. 行順次ファイルに有効な COBOL ステートメ ント	137
14. 索引付きファイルおよび相対ファイルに有効 な COBOL ステートメント	137
15. ファイルへのレコード書き込み時に使用する ステートメント	139
16. ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント	142
17. ソートおよびマージ・エラー番号	155
18. COBOL ステートメントと国別データ	172
19. 組み込み関数と国別文字データ	175
20. グループ・セマンティクスを使用して処理さ れる国別グループ項目	183
21. エンコード方式と英数字、DBCS、および国別 データのサイズ	184
22. サポートされるロケールおよびコード・ペー ジ	201
23. 照合シーケンスに依存する組み込み関数	207
24. TZ 環境パラメーター変数	222
25. cob2 コマンドからの出力	223
26. コンパイル・エラー・メッセージの重大度コ ード	226
27. リンカーで想定されるデフォルトのファイル 名	236
28. リンカーの戻りコード	237
29. クラス定義のコンパイルおよびリンクのコマ ンド	244
30. JVM をカスタマイズするための Java コマン ド・オプション	246
31. コンパイラー・オプション	249
32. 互いに排他的なコンパイラー・オプション	251
33. 被比較数のデータ型および照合シーケンスが 比較に与える影響	259
34. 出口モジュールのパラメーター・リスト	268
35. リンカー・オプション	307
36. コード・セクションの属性	310
37. データ・セクションの属性	311
38. 名前付きセクションの属性	320
39. セクションのデフォルト属性	320
40. ランタイム・オプション	325
41. コンパイラー・メッセージの重大度レベル	336
42. コンパイラー・オプションとリストの対応	340
43. MAP 出力で使用する用語およびシンボル	346
44. ODBC C タイプおよび対応する COBOL 宣 言	371
45. ODBC コピーブック	375
46. COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名	380
47. XML パーサーが使用する特殊レジスター	396
48. XML エンコード宣言の別名	406
49. 生成された XML 出力のエンコード	424
50. クラス定義の構成	433
51. インスタンス・メソッド定義の構成	438
52. COBOL クライアントの構成	447
53. COBOL クライアントでの引数の合致	453
54. COBOL クライアントでの戻されるデータ項 目の合致	455
55. ファクトリー定義の構成	465
56. ファクトリー・メソッド定義の構成	466
57. ローカルおよびグローバル参照の JNI サービ ス	484
58. COBOL および Java で相互運用可能なデー タ型	485
59. COBOL および Java で相互運用可能な配列 およびストリング	486
60. COBOL および Java で相互運用可能でない 配列型	487
61. JNI 配列サービス	487
62. jstring 参照と国別データ間の変換サービス	490
63. jstring 参照と UTF-8 データ間の変換サービ ス	491
64. メインフレーム COBOL とは異なる言語機能	496
65. ASCII 文字と EBCDIC 文字との対比	498
66. ASCII での比較と EBCDIC での比較の対比	498
67. IEEE と 16 進数の対比	499
68. CDECL で返される非浮動小数点の項目の場 所	512
69. SYSTEM で返される非浮動小数点の項目の場 所	514
70. COBOL および C/C++ のデータ型	517
71. CALL ステートメントでデータを渡す方法	522
72. リンカー・モジュール・ステートメントの要 約	546
73. マルチスレッド化を使用した COBOL 言語エ レメントの有効範囲	556

74. 2000 年問題のソリューションの利点および欠点	572	102. SYSADATA ジョブ識別レコード	719
75. パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション	606	103. ADATA 識別レコード	720
76. パフォーマンス調整のワークシート	608	104. SYSADATA コンパイル単位の開始終了レコード	720
77. ピクチャー文字項およびストリング	615	105. SYSADATA オプション・レコード	720
78. 日本元号	617	106. SYSADATA 外部シンボル・レコード	732
79. 日時のピクチャー・ストリングの例	617	107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード	733
80. Enterprise COBOL for z/OS および COBOL for Windows 間の言語の違い	627	108. SYSADATA トークン・レコード	747
81. 最大浮動小数点値	632	109. SYSADATA ソース・エラー・レコード	761
82. 日時呼び出し可能サービス	653	110. SYSADATA ソース・レコード	761
83. 日時組み込み関数	654	111. SYSADATA COPY REPLACING レコード	762
84. CEECBLDY のシンボリック条件	656	112. SYSADATA 記号レコード	762
85. CEEDATE のシンボリック条件	660	113. SYSADATA 記号相互参照レコード	775
86. CEEDATM のシンボリック条件	663	114. SYSADATA ネストされたプログラム・レコード	776
87. CEEDAYS のシンボリック条件	668	115. SYSADATA ライブラリー・レコード	777
88. CEEDYWK のシンボリック条件	671	116. SYSADATA 統計レコード	777
89. CEEGMT のシンボリック条件	673	117. SYSADATA EVENTS TIMESTAMP レコードのレイアウト	778
90. CEEGMTO のシンボリック条件	675	118. SYSADATA EVENTS PROCESSOR レコードのレイアウト	779
91. CEEISEC のシンボリック条件	678	119. SYSADATA EVENTS FILE END レコードのレイアウト	779
92. CEELOCT のシンボリック条件	681	120. SYSADATA EVENTS PROGRAM レコードのレイアウト	779
93. CEEQCEN のシンボリック条件	682	121. SYSADATA EVENTS FILE ID レコードのレイアウト	780
94. CEESCEN のシンボリック条件	684	122. SYSADATA EVENTS ERROR レコードのレイアウト	781
95. CEESECI のシンボリック条件	686	123. ランタイム・メッセージ	783
96. CEESECS のシンボリック条件	690		
97. 継続を許可する XML PARSE 例外	695		
98. 継続を許可しない XML PARSE 例外	700		
99. XML GENERATE 例外	706		
100. SYSADATA レコード・タイプ	714		
101. SYSADATA 共通ヘッダー・セクション	717		

まえがき

本書について

IBM^(R) COBOL for Windows^(R) へようこそ。本製品は、IBM が提供する Windows 2000 および Windows XP 対応の COBOL コンパイラーです。

ホスト用の COBOL とワークステーション用の COBOL には多少の違いがあります。COBOL for Windows と Enterprise COBOL for z/OS^(R) の言語およびシステムの違いについての詳細は、623 ページの『付録 A. ホスト COBOL との違いの要約』を参照してください。

本書のアクセシビリティ

本書の XHTML 形式は、視覚障害のある方にご利用いただけます。

スクリーン・リーダーが、構文図やソース・コード例、ピリオドまたはコンマの PICTURE 記号を含む本文を正しく読み上げるようにするためには、スクリーン・リーダーを、すべての句読点を読み上げるように設定する必要があります。

JAWS for Windows を使用した場合、利用できる構文図へのリンクが使用できないことがあります。利用できる構文図を読み取るには、IBM ホームページ・リーダーをご使用ください。

本書の使い方

本書は、IBM COBOL for Windows プログラムの記述、コンパイル、リンク・エディット、および実行に役立ちます。さらに、オブジェクト指向クラスおよびメソッドの定義、メソッドの呼び出し、およびプログラムでのオブジェクトの参照を行うのに役立ちます。

本書は、アプリケーション・プログラムの開発の経験と、COBOL に関する多少の知識を前提としています。本書では、COBOL 言語の定義ではなく、プログラミングの目的に合った COBOL の使用に重点を置いています。COBOL 構文に関する完全な情報については、「*COBOL for Windows 言語解説書*」を参照してください。

また、本書では Windows の知識がある方を対象としています。Windows については、ご使用のオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

略語

本書では、短縮形で使用される用語があります。最も頻繁に使用される製品名の省略形を以下にリストします。

使用される用語	長形式
CICS ^(R)	IBM TXSeries ^(R)
COBOL for Windows	IBM COBOL for Windows
DB2 ^(R)	Database 2 ^(TM)

使用される用語	長形式
RSD	レコード順次区切りファイル・システム
STL	標準言語ファイル・システム

これらの略語のほかに、本書では「COBOL 85 標準」という用語が使用されています。この用語は、以下の規格の組み合わせを示します。

- ISO 1989:1985、プログラム言語 - COBOL
- ISO/IEC 1989/AMD1:1992、プログラム言語 - COBOL - 組み込み関数モジュール
- ISO/IEC 1989/AMD2:1994、プログラム言語 - COBOL - COBOL 用修正および説明改訂
- ANSI INCITS 23-1985、プログラム言語 - COBOL
- ANSI INCITS 23a-1989、プログラム言語 - COBOL 用組み込み関数モジュール
- ANSI INCITS 23b-1993、プログラム言語 - COBOL 用修正と改訂

ISO 規格は、米国標準規格と一致しています。

その他の用語（一般に理解されていない場合）は、初出時にイタリック体で示され、巻末の用語集にリストされています。

構文図の読み方

本書中の構文図を読むには、以下の説明を参照してください。

- 構文図は、左から右、上から下へと線をたどって読んでください。

>>— 記号は、構文図の開始を示します。

—> 記号は、構文図が次の行に続くことを示します。

>— 記号は、構文図が前の行から続いていることを示します。

—<< 記号は、構文図の終わりを示します。

完全なステートメントではない構文単位の図は、>— 記号で始まり、—> 記号で終わります。

- 必須項目は、水平線（幹線）と同じ高さに示されます。

▶▶—required_item————▶▶

- オプション項目は、幹線の下側に示されます。

▶▶—required_item—└optional_item┘————▶▶

- 複数の項目から選択できる場合には、それらの項目は縦方向に重ねて示されます。それらの項目のうち 1 つを選択しなければならない場合には、それらの項目のうちの 1 つが幹線上に示されます。

▶▶—required_item—└required_choice1
└required_choice2┘————▶▶

項目の選択が任意である場合には、それらの項目全体が幹線より下に置かれます。

改訂の要約

ここでは、IBM COBOL for Windows に対して行われた主要な変更点を挙げます。本書で解説されている変更には、読者の便宜のため、参照ページが記載されています。技術上の変更については、PDF 版の左側の余白にリビジョン・バーが付いています。

バージョン 7 (2006 年 12 月)

- 国別 (Unicode UTF-16) データのサポートが拡張されました。幾つかの種類のデータ項目がさらに暗黙的または明示的に `USAGE NATIONAL` として記述できるようになりました。
 - 外部 10 進数 (*national decimal*) 項目 (41 ページの『数値データの定義』)
 - 外部浮動小数点 (*national floating-point*) 項目 (45 ページの『数値データの形式』)
 - 数字編集項目 (43 ページの『数値データの表示』)
 - 国別編集項目 (176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』)
 - `GROUP-USAGE NATIONAL` 文節によってサポートされるグループ (*national group*) 項目 (181 ページの『国別グループの使用』)
 - 数多くの COBOL 言語エレメントが、新しい種類の UTF-16 データをサポートするか、または国別データの処理を新たにサポートします。
 - `USAGE NATIONAL` (国別 10 進数および国別浮動小数点) が指定された数値データは、算術演算で、また数値オペランドをサポートする任意の言語構造体で使用できます (45 ページの『数値データの形式』)。
 - `USAGE NATIONAL` が指定された編集データは、移動に関連した編集操作および編集解除操作を含め、既存の編集タイプと同じ言語構造体でサポートされます (43 ページの『数値データの表示』および 176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』)。
 - すべての国別データを含むグループ項目は、`GROUP-USAGE NATIONAL` 文節で定義できます。これにより、グループは、ほとんどの言語構造体で基本項目として動作するようになります。このサポートにより、`STRING`、`UNSTRING`、および `INSPECT` などのステートメントでの国別グループの使用が容易になります (180 ページの『国別グループ』)。
 - `XML GENERATE` ステートメントは、国別グループを受信データ項目としてサポートし、国別編集、`USAGE NATIONAL` の数字編集、国別 10 進数、国別浮動小数点、および国別グループの項目を送信データ項目としてサポートします (413 ページの『XML 出力の生成』)。
 - `NUMVAL` および `NUMVAL-C` 組み込み関数は、国別リテラルまたは国別データ項目を引数として取ることができます (113 ページの『数値への変換 (NUMVAL、NUMVAL-C)』)。
- これらの新規の国別データ機能を使用することにより、Unicode のみをすべてのアプリケーション・データで使用する COBOL プログラムの作成が、実用的なものになりました。
- 個別の変換ステップなしで、`CICS` ステートメントを含むプログラムおよびサンプル集をコンパイルするためのサポートが追加されました (366 ページの『組み込みの CICS 変換プログラム』)。

- 新規コンパイラー・オプション CICS が追加され、組み込みの CICS 変換プログラムの使用と CICS オプションの指定が可能になりました (257 ページの『CICS』)。
- 新規の呼び出し可能サービス、iwzGetSortErrno により、ソートまたはマージ操作がそれぞれ実行された後、ソートまたはマージ・エラー番号を取得できるようになりました (154 ページの『ソートまたはマージの成否の判断』)。
- REDEFINES 文節は拡張されて、レベル 01 ではないデータ項目の場合、再定義するデータ項目よりも項目のサブジェクトを大きくすることができるようになりました。
- クラス国別のデータ項目用の VALUE 文節のリテラルは、英数字にすることができ (74 ページの『グループ・レベルでのテーブルの初期化』)。

このリリースでは、以下の用語の変更も行われています。

- 英数字グループ という用語が導入されて、国別グループ以外のグループを特に指しています。
- グループ という用語は、明らかに英数字グループのみまたは国別グループのみを指しているコンテキストで使用されている場合を除き、英数字グループと国別グループの両方を意味します。
- 外部 10 進数 という用語は、ゾーン 10 進数項目と国別 10 進数項目の両方を指しています。
- 表示浮動小数点 という用語が導入されて、USAGE DISPLAY を持つ外部浮動小数点項目を指すようになっています。
- 外部浮動小数点 という用語は、表示浮動小数点項目と国別浮動小数点項目の両方を指します。

バージョン 6 (2005 年 5 月)

- COBOL データ項目サイズのいくつかの限界値が大幅に引き上げられました (12 ページの『データの記述』)。以下に、その例を示します。
 - 最大データ項目サイズが 2,147,483,646 バイトに引き上げられました。
 - 最大 PICTURE シンボル複製が 2,147,483,646 に引き上げられました。
 - 最大 OCCURS 整数が 2,147,483,646 に引き上げられました。

こうしたサポートにより、大量データに関連したプログラミングが容易になります。例として次のようなものがあります。

- DB2 BLOB および CLOB データ・タイプを使用する DB2/COBOL アプリケーション
- 大きな XML 文書を構文解析または生成する COBOL XML アプリケーション

変更されたコンパイラー限界値の詳細については、コンパイラー限界値 (「COBOL for Windows 言語解説書」) を参照してください。

- ライブラリー処理からの出力をファイルに書き込むよう指定するコンパイラー・オプション MDECK が追加されました (277 ページの『MDECK』)。
- リンカーが割り振るスタック・スペース量に影響する cob2 オプション -s が追加されました (228 ページの『cob2 オプション』)。
- CICS Transaction Server のサポートはなくなりました。

第 1 部 プログラムのコーディング

第 1 章 プログラムの構造	5
プログラムの識別	5
プログラムを再帰的として識別する	6
収容プログラムによってプログラムに呼び出し可能のマークを付ける	6
プログラムを初期状態に設定する	6
ソース・リストのヘッダーの変更	7
コンピュータ環境の記述	7
例: FILE-CONTROL 段落	8
照合シーケンスの指定	8
例: 照合シーケンスの指定	9
シンボリック文字を定義する	10
ユーザー定義のクラスを定義する	10
オペレーティング・システムに対してファイルを識別する	10
実行時の入出力ファイルの変更	11
データの記述	12
入出力操作でのデータの使用	12
FILE SECTION 記入項目	13
WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の比較	14
例: ストレージ・セクション	15
別のプログラムからのデータの使用	16
別個にコンパイルされたプログラムでのデータの共用	16
ネストされたプログラムでのデータの共用	16
再帰的またはマルチスレッド化されたプログラムでのデータの共用	17
データの処理	17
PROCEDURE DIVISION 内でロジックが分割される方法	18
命令ステートメント	19
条件ステートメント	19
コンパイラ指示ステートメント	20
範囲終了符号	21
宣言	22
第 2 章 データの使用	23
変数、構造、リテラル、および定数の使用	23
変数の使用	23
データ項目とグループ項目の使用	24
リテラルの使用	26
定数の使用	26
表意定数の使用	27
データ項目への値の割り当て	27
例: データ項目の初期化	28
構造の初期化 (INITIALIZE)	31
基本データ項目への値の割り当て (MOVE)	33
グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)	34
算術結果の割り当て (MOVE または COMPUTE)	35

画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)	35
画面上またはファイル内での値の表示 (DISPLAY)	37
組み込み関数の使用 (組み込み関数)	37
テーブル (配列) とポインタの使用	38
第 3 章 数値および算術演算	41
数値データの定義	41
数値データの表示	43
数値データの保管方法の制御	44
数値データの形式	45
外部 10 進数 (DISPLAY および NATIONAL) 項目	45
外部浮動小数点 (DISPLAY および NATIONAL) 項目	46
2 進数 (COMP) 項目	47
固有 2 進数 (COMP-5) 項目	47
2 進数データのバイト反転	48
パック 10 進数 (COMP-3) 項目	49
内部浮動小数点 (COMP-1 および COMP-2) 項目	49
例: 数値データおよび内部表現	49
データ形式の変換	52
変換および精度	52
精度が失われる変換	53
精度を保つ変換	53
丸めを生じさせる変換	53
ゾーン 10 進数およびパック 10 進数データのサイン表記	53
非互換データの検査 (数値のクラス・テスト)	54
算術の実行	55
COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用	55
算術式の使用	56
数字組み込み関数の使用	56
例: 数字組み込み関数	58
一般数値処理	58
日時	58
金融	59
数学	59
統計	59
固定小数点演算と浮動小数点演算の対比	60
浮動小数点計算	60
固定小数点計算	61
算術比較 (比較条件)	61
例: 固定小数点計算および浮動小数点計算	62
通貨記号の使用	62
例: 複数の通貨符号	63
第 4 章 テーブルの処理	65
テーブルの定義 (OCCURS)	65
テーブルのネスト	67

例: 添え字付け	68
例: 指標付け	68
テーブル内の項目の参照	69
添え字付け	69
索引付け	70
テーブルに値を入れる方法	71
テーブルの動的なロード	72
テーブルの初期化 (INITIALIZE)	72
テーブルの定義時の値の割り当て (VALUE)	73
それぞれのテーブル項目の個別の初期化	74
グループ・レベルでのテーブルの初期化	74
ある特定テーブル・エレメントのすべての出現の初期化	75
例: PERFORM と添え字付け	75
例: PERFORM および索引付け	76
可変長テーブルの作成 (DEPENDING ON)	77
可変長テーブルのロード	79
可変長テーブルへの値の割り当て	80
テーブルの探索	80
逐次探索 (SEARCH)	81
例: 逐次探索	81
二分探索 (SEARCH ALL)	82
例: 二分探索	83
組み込み関数を使用したテーブル項目の処理	83
例: 組み込み関数を使用したテーブルの処理	84
第 5 章 プログラム・アクションの選択と反復	85
プログラム・アクションの選択	85
アクションの選択項目のコーディング	85
ネストされた IF ステートメントの使用	86
EVALUATE ステートメントの使用	87
条件式のコーディング	90
スイッチおよびフラグ	91
スイッチおよびフラグの定義	91
例: スイッチ	92
例: フラグ	92
スイッチとフラグのリセット	92
例: スイッチをオンに設定する	93
例: スイッチをオフに設定する	93
プログラム・アクションの繰り返し	94
インラインまたはライン外 PERFORM の選択	94
例: インライン PERFORM ステートメント	95
ループのコーディング	95
テーブルのループ処理	96
複数の段落またはセクションの実行	97
第 6 章 スtringの処理	99
データ項目の結合 (STRING)	99
例: STRING ステートメント	100
STRING の結果	101
データ項目の分割 (UNSTRING)	102
例: UNSTRING ステートメント	103
UNSTRING の結果	104
ヌル終了Stringの取り扱い	105
例: ヌル終了String	106
データ項目のサブStringの参照	106

参照修飾子	108
例: 参照修飾子としての演算式	109
例: 参照修飾子としての組み込み関数	109
データ項目の計算および置換 (INSPECT)	110
例: INSPECT ステートメント	110
データ項目の変換 (組み込み関数)	111
大文字または小文字への変換 (UPPER-CASE、LOWER-CASE)	112
逆順への変換 (REVERSE)	112
数値への変換 (NUMVAL、NUMVAL-C)	113
あるコード・ページから別のコード・ページへの変換	114
データ項目の評価 (組み込み関数)	114
照合シーケンスに関する単一文字の評価	115
最大または最小データ項目の検出	115
英数字または国別関数によって戻される可変長結果	116
データ項目の長さの検出	118
コンパイルの日付の検出	118
第 7 章 ファイルの処理	121
ファイルの識別	121
Btrieve ファイルの識別	122
STL ファイルの識別	122
RSD ファイルの識別	122
ファイル・システム	123
STL ファイル・システム	123
STL ファイル・システムの戻りコード	124
RSD ファイル・システム	126
ファイル・オープン時のエラーからの保護	127
ファイル編成およびアクセス・モードの指定	127
ファイル編成およびアクセス・モード	127
順次ファイルの編成	128
行順次ファイル編成	129
索引付きファイル編成	129
相対ファイル編成	130
順次アクセス	130
ランダム・アクセス	130
動的アクセス	130
ファイル入出力に関する制限	131
ファイル状況フィールドの設定	132
ファイル構造の詳細記述	132
ファイルの入出力ステートメントのコーディング	133
例: COBOL でのファイルのコーディング	133
ファイル位置標識	135
ファイルのオープン	135
順次ファイルに有効な COBOL ステートメント	136
行順次ファイルに有効な COBOL ステートメント	136
索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント	137
ファイルからのレコードの読み取り	138
ファイルへのレコード書き込み時に使用するステートメント	139
ファイルへのレコードの追加	140

ファイル内のレコードの置換	140
ファイルからのレコードの削除	141
ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント	142
第 8 章 ファイルのソートおよびマージ	145
ソートおよびマージ・プロセス	146
ソートまたはマージ・ファイルの記述	146
ソートまたはマージへの入力の記述	147
例: SORT 用のソート・ファイルおよびの入力フ ァイルの記述	147
入力プロシージャークォーディング	148
ソートまたはマージからの出力の記述	149
出力プロシージャークォーディング	150
入出力プロシージャークォーに関する制約事項	150
ソートまたはマージの要求	151
ソートまたはマージ基準の設定	152
代替照合シーケンスの選択	153
例: 入出力プロシージャークォーを使用したソート	153
ソートまたはマージの成否の判断	154
ソートおよびマージ・エラー番号	155
ソートまたはマージ操作の途中停止	158
第 9 章 エラーの処理	159
ストリングの結合および分割におけるエラーの処理	159
算術演算でのエラーの処理	160
例: 0 による除算の検査	160
入出力操作でのエラーの処理	161
ファイルの終わり条件 (AT END) の使用	161
ERROR 宣言のコーディング	162
ファイル状況キーの使用	162
例: ファイル状況キー	164
ファイル・システム状況コードの使用	164
例: ファイル・システム状況コードの検査	165
例: FILE STATUS および INVALID KEY	166
プログラム呼び出し時のエラーの処理	166

第 1 章 プログラムの構造

COBOL プログラムは、IDENTIFICATION DIVISION、ENVIRONMENT DIVISION、DATA DIVISION、および PROCEDURE DIVISION という 4 つの部で構成されます。各部には、特定の論理機能があります。

プログラムを定義するには、IDENTIFICATION DIVISION だけが必須です。

COBOL クラスまたはメソッドを定義するには、プログラムの場合とは違った方法でいくつかの部を定義することが必要です。

関連タスク

『プログラムの識別』

7 ページの『コンピューター環境の記述』

12 ページの『データの記述』

17 ページの『データの処理』

432 ページの『クラスの定義』

438 ページの『クラス・インスタンス・メソッドの定義』

474 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの構造化』

プログラムの識別

IDENTIFICATION DIVISION (見出し部) は、プログラムの名前を指定し、また必要があればその他の識別情報を与えるために使用されます。

オプションの AUTHOR、INSTALLATION、DATE-WRITTEN、および DATE-COMPILED 段落を使用して、プログラムに関する記述情報を指定することができます。

DATE-COMPILED 段落に入力したデータは、最新のコンパイル日付で置き換えられます。

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
Program-ID.      Helloprog.  
Author.          A. Programmer.  
Installation.    Computing Laboratories.  
Date-Written.    09/30/2006.  
Date-Compiled.   09/30/2006.
```

PROGRAM-ID 段落を使用して、プログラムの名前を指定します。割り当てるプログラム名は、以下のように使用されます。

- プログラムを呼び出すために他のプログラムがその名前を使用します。
- プログラムのコンパイル時に生成されるプログラム・リストの各ページ (最初のページを除く) のヘッダーにその名前が入れられます。

ヒント: プログラム名に大/小文字の区別がある場合は、コンパイラーの探索対象である名前とのミスマッチが起こらないようにしてください。PGMNAME コンパイラー・オプションでの該当する設定が有効であるか検査してください。

関連タスク

7 ページの『ソース・リストのヘッダーの変更』

『プログラムを再帰的として識別する』
『収容プログラムによってプログラムに呼び出し可能のマークを付ける』
『プログラムを初期状態に設定する』

関連参照

コンパイラ限界値（「*COBOL for Windows* 言語解説書」）
プログラム名の命名規則（「*COBOL for Windows* 言語解説書」）

プログラムを再帰的として識別する

前の呼び出しがまだアクティブである間にプログラムに再帰的に再入できるようにするには、PROGRAM-ID 文節に RECURSIVE 属性をコーディングしてください。

RECURSIVE は、コンパイル単位の最外部のプログラムにのみコーディングすることができます。ネストされたサブプログラムも、ネストされたサブプログラムを含むプログラムも、再帰的にすることはできません。

関連タスク

17 ページの『再帰的またはマルチスレッド化されたプログラムでのデータの共用』
520 ページの『再帰呼び出しの実行』

収容プログラムによってプログラムに呼び出し可能のマークを付ける

プログラムを、収容プログラムまたは収容プログラム内の任意のプログラムによって呼び出せることを指定するには、PROGRAM-ID 段落で COMMON 属性を使用してください。ただし、COMMON プログラムは、それ自体に含まれているプログラムによって呼び出すことはできません。

含まれているプログラムだけが COMMON 属性を持つことができます。

関連概念

507 ページの『ネストされたプログラム』

プログラムを初期状態に設定する

プログラムを呼び出すたびに、そのプログラムとそれに含まれるネストされたプログラムを初期状態にすることを指定するには、INITIAL 属性を使用します。

プログラムが初期状態になるのは、以下の場合です。

- VALUE 文節を持つデータ項目が、指定された値に設定された。
- 変更された GO TO ステートメントおよび PERFORM ステートメントが、それぞれ初期状態になった。
- 非 EXTERNAL ファイルがクローズされた。

関連タスク

506 ページの『メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入』

ソース・リストのヘッダーの変更

ソース・リストの最初のページのヘッダーには、コンパイラおよび現行リリース・レベルの識別、コンパイルの日時、およびページ番号が入れます。

以下の例はこれら 5 つのエレメントを示しています。

PP 5724-L44 IBM COBOL for Windows 7.0.0 Date 09/30/2006 Time 15:05:19 Page 1

ヘッダーは、コンパイル・プラットフォームを示します。コンパイラ指示 TITLE ステートメントを使用すれば、リストの後続のページのヘッダーをカスタマイズすることができます。

関連参照

TITLE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

コンピューター環境の記述

ENVIRONMENT DIVISION (環境部) では、コンピューター環境に依存するプログラムの局面について記述します。

以下の項目を指定するには、CONFIGURATION SECTION を使用します。

- プログラムをコンパイルするコンピューター (SOURCE-COMPUTER 段落)
- プログラムを実行するコンピューター (OBJECT-COMPUTER 段落)
- 通貨記号やシンボリック文字などの特殊な項目 (SPECIAL-NAMES 段落)
- ユーザー定義のクラス (REPOSITORY 段落)

INPUT-OUTPUT SECTION の FILE-CONTROL および I-O-CONTROL 段落は、以下の目的に使用します。

- プログラム・ファイルの特性を識別および記述する。
- ファイルを、対応するシステム・ファイル名と直接的または間接的に関連付ける。
- 必要に応じて、ファイルと関連付けられたファイル・システム (STL ファイル・システムなど) を識別する。これは実行時に行うことも可能です。
- ファイルへのアクセス方法に関する情報を提供する。

8 ページの『例: FILE-CONTROL 段落』

関連タスク

8 ページの『照合シーケンスの指定』

10 ページの『シンボリック文字を定義する』

10 ページの『ユーザー定義のクラスを定義する』

10 ページの『オペレーティング・システムに対してファイルを識別する』

関連参照

セクションおよび段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: FILE-CONTROL 段落

次の例は、FILE-CONTROL 段落を使用して、COBOL プログラム内の各ファイルと、ファイル・システムに既知の物理ファイルに関連付ける方法を示しています。この例は、索引付きファイル用の FILE-CONTROL 段落を示しています。

```
SELECT COMMUTER-FILE (1)
  ASSIGN TO COMMUTER (2)
  ORGANIZATION IS INDEXED (3)
  ACCESS IS RANDOM (4)
  RECORD KEY IS COMMUTER-KEY (5)
  FILE STATUS IS (5)
  COMMUTER-FILE-STATUS
  COMMUTER-STL-STATUS.
```

- (1) SELECT 文節は、COBOL プログラム内のファイルを対応するシステム・ファイルに関連付けます。
- (2) ASSIGN 文節は、プログラム内のファイル名を、システムに既知のファイル名と関連付けます。COMMUTER は、システム・ファイル名または環境変数名を表す場合があります。この値は、(実行時に) オプションのディレクトリーおよびパス名とともに、システム・ファイル名として使用されます。
- (3) ORGANIZATION 文節は、ファイルの編成を記述します。これを省略した場合は、デフォルトの ORGANIZATION IS SEQUENTIAL が使用されます。
- (4) ACCESS MODE 文節は、ファイル内のレコードを処理できるようにする方式(順次、ランダム、または動的)を定義します。この文節を省略した場合は、ACCESS IS SEQUENTIAL が定義されたものと見なされます。
- (5) 使用するファイルおよびファイル・システムのタイプによって、FILE-CONTROL 段落に追加のステートメントを指定することができます。

関連タスク

7 ページの『コンピューター環境の記述』

照合シーケンスの指定

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節や、SPECIAL-NAMES 段落の ALPHABET 文節を使用すれば、英数字項目に対する幾つかの操作で使用される照合シーケンスを設定できます。

これらの文節は、英数字項目に対する以下の操作の照合シーケンスを指定します。

- 比較条件および条件名条件で明示的に指定された非数値比較
- HIGH-VALUE および LOW-VALUE の設定
- SEARCH ALL
- SORT および MERGE (SORT または MERGE ステートメントの COLLATING SEQUENCE 句でオーバーライドされていない場合)

9 ページの『例: 照合シーケンスの指定』

以下のいずれかのアルファベットを基に、使用するシーケンスを選択できます。

- EBCDIC: EBCDIC 文字セットに関連付けられた照合シーケンスを参照します。

- **NATIVE:** ロケール設定によって指定された照合シーケンスを参照します。ロケール設定は、コンパイル時に有効な各国語のロケール名を参照します。通常は、インストール時に設定されます。
- **STANDARD-1:** *ANSI INCITS X3.4, Coded Character Sets - 7-bit American National Standard Code for Information Interchange (7-bit ASCII)* により定義された ASCII 文字セットに関連付けられた照合シーケンスを参照します。
- **STANDARD-2:** *ISO/IEC 646 — Information technology — ISO 7-bit coded character set for information interchange, International Reference Version* により定義されたコード化文字セットに関連付けられた照合シーケンスを参照します。
- **SPECIAL-NAMES** 段落で定義された ASCII シーケンスの代替です。

また、定義した照合シーケンスを指定することもできます。

制限: コード・ページが DBCS の場合は、ALPHABET-NAME 文節を使用できません。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節は国別または DBCS オペランドを含む比較に影響を及ぼしません。

関連タスク

- 153 ページの『代替照合シーケンスの選択』
- 203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』
- 197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』
- 189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

例: 照合シーケンスの指定

次の例で示している ENVIRONMENT DIVISION コーディングは、比較およびソート/マージの場合に大文字と小文字が同様に処理される照合シーケンスを指定するものです。

SPECIAL-NAMES 段落の ASCII シーケンスを変更すると、SPECIAL-NAMES 段落に含まれている文字の照合シーケンスだけでなく、全体の照合シーケンスが影響を受けます。

```
IDENTIFICATION DIVISION.
. . .
ENVIRONMENT DIVISION.
CONFIGURATION SECTION.
    Object-Computer.
        Program Collating Sequence Special-Sequence.
        Special-Names.
            Alphabet Special-Sequence Is
                "A" Also "a"
                "B" Also "b"
                "C" Also "c"
                "D" Also "d"
                "E" Also "e"
                "F" Also "f"
                "G" Also "g"
                "H" Also "h"
                "I" Also "i"
                "J" Also "j"
                "K" Also "k"
                "L" Also "l"
                "M" Also "m"
                "N" Also "n"
                "O" Also "o"
```

```
"P" Also "p"  
"Q" Also "q"  
"R" Also "r"  
"S" Also "s"  
"T" Also "t"  
"U" Also "u"  
"V" Also "v"  
"W" Also "w"  
"X" Also "x"  
"Y" Also "y"  
"Z" Also "z".
```

関連タスク

8 ページの『照合シーケンスの指定』

シンボリック文字を定義する

SYMBOLIC CHARACTERS 文節を使用すると、指定したアルファベットの任意の文字に記号名を与えることができます。序数位置を用いて文字を識別してください。位置 1 は文字 X'00' に対応します。

例えば、プラス文字 (ASCII アルファベットでは X'2B') に名前を与えるには、次のようにコーディングします。

```
SYMBOLIC CHARACTERS PLUS IS 44
```

ロケールによって示されるコード・ページがマルチバイト文字のコード・ページの場合は、SYMBOLIC CHARACTERS 文節を使用できません。

関連タスク

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

ユーザー定義のクラスを定義する

CLASS 文節は、文節内にリストされている文字のセットに名前を与えるために使用します。

例えば、数字のセットに名前を与えるには、次の文節をコーディングします。

```
CLASS DIGIT IS "0" THROUGH "9"
```

このクラス名は、クラス条件の中でのみ参照することができます。(このユーザー定義クラスは、オブジェクト指向クラスと同じ概念ではありません。)

ロケールによって示されるコード・ページがマルチバイト文字のコード・ページの場合は、CLASS 文節を使用できません。

オペレーティング・システムに対してファイルを識別する

ASSIGN 文節は、プログラム内のファイル名を、オペレーティング・システムに既知のファイル名と関連付けます。

ASSIGN 文節には、環境変数、システム・ファイル名、リテラル、データ名のいずれかを使用することができます。環境変数を割り当て名として指定した場合は、実行時に環境変数が評価され、その値が (オプションのディレクトリーおよびパス名とともに) システム・ファイル名として使用されます。

デフォルト以外のファイル・システムを使用する場合は、システム・ファイル名の前にファイル・システム ID を指定するなどの方法で、ファイル・システムを明示的に示す必要があります。例えば、MYFILE が Btrieve ファイルで、プログラム内でファイル名として F1 を使用する場合、ASSIGN 文節は次のようになります。

```
SELECT F1 ASSIGN TO BTR-MYFILE
```

MYFILE が環境変数ではない場合、前述のコードは MYFILE をシステム・ファイル名として扱います。MYFILE が環境変数の場合は、その環境変数の値が使用されます。例えば、環境変数 MYFILE が MYFILE=STL-YOURFILE として設定されている場合、システム・ファイル名は実行時に YOURFILE となり、ファイルは STL ファイルとして扱われ、ASSIGN 文節で使用されているファイル・システム ID はオーバーライドされます。

ただし、割り当て名が引用符または一重引用符で囲まれている場合は (例: "BTR-MYFILE")、環境変数に値が指定されていても無視されます。この場合、割り当て名はリテラルとして扱われます。

関連タスク

『実行時の入出力ファイルの変更』

121 ページの『ファイルの識別』

関連参照

327 ページの『FILESYS』

ASSIGN 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

実行時の入出力ファイルの変更

SELECT 文節でコーディングした *file-name* は、COBOL プログラム全体にわたって定数として使用されますが、ファイルの名前を、実行時に別の実際のファイルと関連付けることもできます。

COBOL プログラム内の *file-name* を変更するには、入カステートメントと出カステートメントを変更し、プログラムを再コンパイルしなければなりません。別の方法として、実行時に別のファイルを使用するように、SET コマンド内の *assignment-name* を変更することもできます。

OPEN ステートメントの使用時に有効な環境変数値は、COBOL ファイル名とシステム・ファイル名の関連付け (任意のドライブおよびパス指定を含む) に使用されます。

『例: さまざまな入力ファイルの使用』

例: さまざまな入力ファイルの使用: この例では、プログラムの実行前に環境変数を設定することにより、同じ COBOL プログラムを使用してさまざまなファイルにアクセスする場合は示します。

次の SELECT 文節が含まれる COBOL プログラムを考えてみてください。

```
SELECT MASTER ASSIGN TO MASTERA
```

プログラムは、そのプログラム内の MASTER というファイルを使用して、checking または savings ファイルにアクセスするものとします。これを行うには、プログラムの実行前に次の 2 つのうち該当する方のステートメントを使用して、MASTERA

環境変数を設定します。なお、次のステートメントでは、checking および savings ファイルが d:\accounts ディレクトリーにあることを前提としています。

```
set MASTERA=d:\accounts\checking
set MASTERA=d:\accounts\savings
```

ソースを変更または再コンパイルしなくても、同じプログラムを使用して、プログラム内の MASTER というファイルとして checking または savings ファイルのどちらにでもアクセスすることができます。

データの記述

データの特徴を定義し、データ定義をグループ化して、DATA DIVISION のセクションの 1 つに入れなければなりません。

これらのセクションは、以下のタイプのデータを定義するときに使用できます。

- 入出力操作で使用するデータ (FILE SECTION)
- 内部処理用に作成するデータ
 - ストレージを静的に割り振り、実行単位 の存続期間中存在させる場合 (WORKING-STORAGE SECTION)
 - プログラムに入るたびにストレージを割り振り、プログラムからの戻り時に割り振りを解除させる場合 (LOCAL-STORAGE SECTION)
- 別のプログラムからのデータ (LINKAGE SECTION)

COBOL for Windows コンパイラーでは、DATA DIVISION エLEMENTの最大サイズの制限があります。LOCAL-STORAGE SECTION、WORKING-STORAGE SECTION、および LINKAGE SECTION におけるデータ量のコンパイラー限界値は、合計で 2 GB になります。ただし、操作に必要なコンパイラー生成の一時データがあるため、ユーザー・データの実際の限界値は約 1 GB になります。cob2 -s オプションについては、以下の『関連参照』も参照してください。

関連概念

14 ページの『WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の比較』

関連タスク

『入出力操作でのデータの使用』

16 ページの『別のプログラムからのデータの使用』

関連参照

228 ページの『cob2 オプション』

コンパイラー限界値 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

入出力操作でのデータの使用

入出力操作で使用するデータは、FILE SECTION で定義します。

データに関する以下の情報を提供してください。

- プログラムが使用する入出力ファイルの名前を指定します。FD 記入項目を使用して、PROCEDURE DIVISION の入出力ステートメントで参照できるファイルに名前を与えます。

FILE SECTION 内で定義されたデータ項目は、ファイルが正常にオープンされるまでは PROCEDURE DIVISION のステートメントにとって使用可能ではありません。

- FD 記入項目の後のレコード記述で、ファイル内のレコードとそのフィールドを記述します。レコード名は、WRITE および REWRITE ステートメントの対象となります。

同じ実行単位内のプログラムは、同じ COBOL ファイル名を参照することができます。

別個にコンパイルされたプログラムには EXTERNAL 文節を使用することができます。EXTERNAL として定義されたファイルは、実行単位の中でそのファイルを記述する任意のプログラムによって参照することができます。

ネストされた構造、すなわち含まれている構造の中のプログラムには、GLOBAL 文節を使用できます。あるプログラムが別のプログラムを（直接または間接的に）含む場合には、どちらのプログラムも GLOBAL ファイル名を参照することによって共通のファイルにアクセスすることができます。

COBOL ソース・プログラムで外部ファイル定義やグローバル・ファイル定義を使用しなくても、物理ファイルを共用することができます。例えば、アプリケーションに 2 つの COBOL ファイル名があっても、これらの COBOL ファイルが同一のシステム・ファイルと関連付けられるように指定することができます。

```
SELECT F1 ASSIGN TO MYFILE.  
SELECT F2 ASSIGN TO MYFILE.
```

関連概念

507 ページの『ネストされたプログラム』

関連タスク

533 ページの『プログラム間でのファイルの共用 (外部ファイル)』

関連参照

『FILE SECTION 記入項目』

FILE SECTION 記入項目

FILE SECTION 内の項目の要約を以下の表に示します。

表 1. FILE SECTION 記入項目

文節	定義対象
FD	PROCEDURE DIVISION の入出力ステートメント (OPEN、CLOSE、READ、START、DELETE) 内で参照される <i>file-name</i> 。SELECT 文節内の <i>file-name</i> と一致しなければなりません。 <i>file-name</i> は、 <i>assignment-name</i> を通してシステム・ファイルと関連付けられます。
RECORD CONTAINS <i>n</i>	論理レコード (固定長) のサイズ 整数サイズは、レコード内のデータ項目の USAGE とは無関係に、レコードのバイト数を示します。
RECORD IS VARYING	論理レコード (可変長) のサイズ 整数サイズを指定した場合は、レコード内のデータ項目の USAGE とは無関係に、レコードのバイト数を示します。

|
|
|
|
|
|

表 1. FILE SECTION 記入項目 (続き)

文節	定義対象
RECORD CONTAINS <i>n</i> TO <i>m</i>	論理レコード (可変長) のサイズ 整数サイズは、レコード内のデータ項目の USAGE とは無関係に、レコードのバイト数を示します。
VALUE OF	ファイルに関連付けられているラベル・レコードの項目。コメントのみ。
DATA RECORDS	ファイルに関連付けられているレコードの名前。コメントのみ。
RECORDING MODE	順次ファイルのレコード・タイプ。

関連参照

File セクション (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の比較

データ項目がどのように割り振られ、初期化されるかは、その項目が WORKING-STORAGE SECTION か LOCAL-STORAGE SECTION のどちらにあるかによって変化します。

プログラムの呼び出し時には、そのプログラムに関連付けられた WORKING-STORAGE が割り振られます。

VALUE 文節を持つすべてのデータ項目は、そのときに適切な値に初期化されます。その実行単位の存続期間中、WORKING-STORAGE 項目はそれぞれ最後に使われた状態を維持します。例外は次のとおりです。

- PROGRAM-ID 段落に INITIAL が指定されたプログラム。

この場合、WORKING-STORAGE データ項目は、プログラムに入るたびに再初期化されます。

- 動的に呼び出されてから取り消されるサブプログラム。

この場合、WORKING-STORAGE データ項目は、CANCEL 後のプログラムへの最初の再入時に再初期化されます。

WORKING-STORAGE は、実行単位の終了時に割り振り解除されます。

COBOL のクラス定義における WORKING-STORAGE については、関連するタスクを参照してください。

LOCAL-STORAGE データの別のコピーがプログラムまたはメソッドの個々の呼び出しに対して割り振られ、プログラムまたはメソッドから戻る時点で解放されます。LOCAL-STORAGE 項目で VALUE 文節を指定すると、起動または呼び出しのたびに、項目はその値に初期化されます。VALUE 文節を指定しないと、項目の初期値は未定義になります。

15 ページの『例: ストレージ・セクション』

関連タスク

506 ページの『メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入』

553 ページの『第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備』
436 ページの『クラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE
SECTION』

関連参照

Working-storage セクション (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

Local-storage セクション (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: ストレージ・セクション

以下に、WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の両方を使用する再帰的プログラムの例を示します。

```
CBL apost,pgmn(1u)
*****
* Recursive Program - Factorials
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
Program-Id. factorial recursive.
ENVIRONMENT DIVISION.
DATA DIVISION.
Working-Storage Section.
01 numb pic 9(4) value 5.
01 fact pic 9(8) value 0.
Local-Storage Section.
01 num pic 9(4).
PROCEDURE DIVISION.
    move numb to num.

    if numb = 0
        move 1 to fact
    else
        subtract 1 from numb
        call 'factorial'
        multiply num by fact
    end-if.

    display num '! = ' fact.
    goback.
End Program factorial.
```

このプログラムは、次のような出力を生成します。

```
0000! = 00000001
0001! = 00000001
0002! = 00000002
0003! = 00000006
0004! = 00000024
0005! = 00000120
```

次の表は、プログラムの連続する再帰呼び出し (CALL) および結果として起こる戻り (GOBACK) における、LOCAL-STORAGE および WORKING-STORAGE 内のデータ項目の値の変化を示しています。戻り時、fact は 5! (5 階乗) の値を次々に累算します。

再帰呼び出し (CALL)	LOCAL-STORAGE の num の値	WORKING-STORAGE の numb の値	WORKING-STORAGE の fact の値
メイン	5	5	0
1	4	4	0
2	3	3	0

再帰呼び出し (CALL)	LOCAL-STORAGE の num の値	WORKING-STORAGE の numb の値	WORKING-STORAGE の fact の値
3	2	2	0
4	1	1	0
5	0	0	0

戻り (GOBACK)	LOCAL-STORAGE の num の値	WORKING-STORAGE の numb の値	WORKING-STORAGE の fact の値
5	0	0	1
4	1	0	1
3	2	0	2
2	3	0	6
1	4	0	24
メイン	5	0	120

関連概念

14 ページの『WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の比較』

別のプログラムからのデータの使用

データを共有する方法は、プログラムのタイプによって異なります。別個にコンパイルされたプログラムでは、ネストされたプログラムや、再帰的またはマルチスレッド化されたプログラムの場合とは異なる方法でデータを共有します。

関連タスク

『別個にコンパイルされたプログラムでのデータの共有』

『ネストされたプログラムでのデータの共有』

17 ページの『再帰的またはマルチスレッド化されたプログラムでのデータの共有』

521 ページの『データの受け渡し』

別個にコンパイルされたプログラムでのデータの共有

多くのアプリケーションは、相互に呼び出し、データを受け渡す、別個にコンパイルされたプログラムから構成されます。呼び出されるプログラム内の LINKAGE SECTION を用いて、別のプログラムから渡されるデータを記述します。

呼び出し側プログラムでは、CALL . . . USING または INVOKE . . . USING ステートメントを使用してデータを渡してください。

関連タスク

521 ページの『データの受け渡し』

ネストされたプログラムでのデータの共有

アプリケーションの中には、ネストされたプログラム (他のプログラムに含まれているプログラム) から構成されるものもあります。レベル 01 のデータ項目には、GLOBAL 属性を指定できます。この属性を使用すると、宣言を含むネストされたプログラムがこれらのデータ項目にアクセスできるようになります。

ネストされたプログラムは、COMMON 属性で宣言された兄弟プログラム (同一の含まれているプログラム内で同じネスト・レベルにあるプログラム) のデータ項目にもアクセスできます。

関連概念

507 ページの『ネストされたプログラム』

再帰的またはマルチスレッド化されたプログラムでのデータの共用

プログラムが RECURSIVE 属性を持っている場合、またはプログラムを THREAD コンパイラー・オプションを指定してコンパイルする場合、プログラムの以降の呼び出しでは、LINKAGE SECTION で定義されたデータにアクセスできません。

LINKAGE SECTION のレコードをアドレッシングするには、以下のいずれかの技法を使用します。

- プログラムに引数を渡し、プログラムの USING 句に適切な位置のレコードを指定する。
- フォーマット-5 の SET ステートメントを使用する。

プログラムが RECURSIVE 属性を持っている場合、またはプログラムを THREAD コンパイラー・オプションを指定してコンパイルする場合、レコードのアドレスは、プログラム起動の特定のインスタンスについて有効です。同じプログラムの別の実行インスタンスにあるレコードのアドレスは、その実行インスタンスに対して再設定する必要があります。アドレスが設定されていないデータ項目を参照すると、予測できない結果が生じます。

関連概念

553 ページの『マルチスレッド化』

関連タスク

520 ページの『再帰呼び出しの実行』

関連参照

293 ページの『THREAD』

SET ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

データの処理

プログラムの PROCEDURE DIVISION (手続き部) では、他の部で定義したデータを処理する実行可能なステートメントをコーディングします。PROCEDURE DIVISION には、1 つまたは 2 つのヘッダーと、プログラムのロジックが入れられます。

PROCEDURE DIVISION は、部のヘッダーとプロシージャ名のヘッダーで始まります。プログラムの部のヘッダーは、単に次のようにすることができます。

PROCEDURE DIVISION.

あるいは、USING 句を使用してパラメーターを受け取ったり、RETURNING 句を使用して値を戻すような部のヘッダーをコーディングすることができます。

参照によって (デフォルト) あるいは内容によって渡された引数を受け取るには、プログラムの部のヘッダーを次のようにコーディングしてください。

PROCEDURE DIVISION USING *dataname*
PROCEDURE DIVISION USING BY REFERENCE *dataname*

dataname は、DATA DIVISION の LINKAGE SECTION で定義しなければなりません。

値によって渡されたパラメーターを受け取るには、プログラムの部のヘッダーを次のようにコーディングしてください。

PROCEDURE DIVISION USING BY VALUE *dataname*

結果として値を戻すためには、部のヘッダーを次のようにコーディングしてください。

PROCEDURE DIVISION RETURNING *dataname2*

また、PROCEDURE DIVISION のヘッダーの中で USING と RETURNING を組み合わせることもできます。

PROCEDURE DIVISION USING *dataname* RETURNING *dataname2*

dataname および *dataname2* は、LINKAGE SECTION で定義しなければなりません。

関連概念

『PROCEDURE DIVISION 内でロジックが分割される方法』

関連タスク

609 ページの『反復コーディングの除去』

関連参照

手続き部のヘッダー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

The USING 句 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

CALL ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

PROCEDURE DIVISION 内でロジックが分割される方法

プログラムの PROCEDURE DIVISION は、セクションと段落に分割されます。セクションおよび段落には、文、ステートメントおよび句が含まれています。

セクション

処理ロジックの論理的な副区分。

セクションにはセクション・ヘッダーがあり、オプションとして後ろに 1 つまたは複数の段落が続きます。

セクションは、PERFORM ステートメントのサブジェクトにすることができます。セクションのタイプの 1 つは宣言用です。

段落 セクション、プロシーチャー、またはプログラムの再分割。

段落は、後ろにピリオドが付いた名前を持ち、その後に文が続く場合と続かない場合があります。

段落は、ステートメントのサブジェクトにすることができます。

文 1 つまたは複数の COBOL ステートメントの並びであって、ピリオドで終わるもの。

ステートメント

2 つの数値の加算など、COBOL 処理の定義されたステップを実行します。

ステートメントは、COBOL 動詞で始まる、ワードの有効な組み合わせです。ステートメントには、命令ステートメント (無条件アクションを示す)、条件ステートメント、およびコンパイラ指示ステートメントがあります。ステートメントの論理的な終わりを示すためには、ピリオドではなく明示範囲終了符号を使用することをお勧めします。

句 ステートメントの再分割。

関連概念

20 ページの『コンパイラ指示ステートメント』

21 ページの『範囲終了符号』

『命令ステートメント』

『条件ステートメント』

22 ページの『宣言』

関連参照

PROCEDURE DIVISION 構造 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

命令ステートメント

命令ステートメント (例えば、ADD、MOVE、INVOKE、または CLOSE など) は、取るべき無条件アクションを指示します。

命令ステートメントは、暗黙のまたは明示的な範囲終了符号を使用して終了することができます。

明示範囲終了符号で終わる条件ステートメントは、**範囲区切りステートメント** と呼ばれる命令ステートメントになります。命令ステートメント (または範囲区切りステートメント) のみをネストすることができます。

関連概念

『条件ステートメント』

21 ページの『範囲終了符号』

条件ステートメント

条件ステートメントには、単純な条件ステートメント (IF、EVALUATE、SEARCH) と、条件句またはオプションを含む命令ステートメントから構成された条件ステートメントの 2 種類があります。

条件ステートメントは、暗黙のまたは明示的な範囲終了符号を使用して終了することができます。条件ステートメントを明示的に終わらせると、それは範囲区切りステートメント (命令ステートメント) になります。

範囲区切りステートメントは、次のような方法で使用できます。

- COBOL 条件ステートメントの操作の範囲を区切り、ネストのレベルを明示的に指示する場合。

例えば、ネストされた IF の中の IF ステートメントの範囲を終了させるために、ピリオドではなく END-IF 句を使用します。

- COBOL 構文が命令ステートメントを必要とする条件ステートメントをコーディングする場合。

例えば、インライン PERFORM のオブジェクトとして条件ステートメントをコーディングします。

```
PERFORM UNTIL TRANSACTION-EOF
  PERFORM 200-EDIT-UPDATE-TRANSACTION
  IF NO-ERRORS
    PERFORM 300-UPDATE-COMMUTER-RECORD
  ELSE
    PERFORM 400-PRINT-TRANSACTION-ERRORS
  END-IF
  READ UPDATE-TRANSACTION-FILE INTO WS-TRANSACTION-RECORD
  AT END
    SET TRANSACTION-EOF TO TRUE
  END-READ
END-PERFORM
```

インライン PERFORM ステートメントには、明示範囲終了符号が必須ですが、これはライン外の PERFORM ステートメントについては無効です。

追加のプログラム制御として、条件ステートメントと一緒に NOT 句を使用することもできます。例えば、NOT ON SIZE ERROR のように、特定の例外が発生しない場合に実行される命令を指定することができます。NOT 句は、CALL ステートメントの ON OVERFLOW 句とは一緒に使用できませんが、ON EXCEPTION 句とは一緒に使用できます。

条件ステートメントをネストしてはなりません。ネストされるステートメントは、命令ステートメント（または範囲区切りステートメント）でなければならず、命令ステートメントの規則に従っていなければなりません。

以下に、範囲終了符号なしでコーディングされる場合の条件ステートメントの例を示します。

- ON SIZE ERROR が指定された算術ステートメント。
- ON OVERFLOW が指定されたデータ操作ステートメント。
- ON OVERFLOW が指定された CALL ステートメント。
- INVALID KEY、AT END、または AT END-OF-PAGE が指定された I/O ステートメント。
- AT END が指定された RETURN。

関連概念

19 ページの『命令ステートメント』

21 ページの『範囲終了符号』

関連タスク

85 ページの『プログラム・アクションの選択』

関連参照

条件ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

コンパイラ指示ステートメント

コンパイラ指示ステートメントは、コンパイラに、プログラム構造、COPY 処理、リスト制御、制御フロー、または CALL インターフェース規則について特定のアクションを行わせます。

コンパイラ指示ステートメントは、プログラム・ロジックの一部ではありません。

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラ指示ステートメント』
コンパイラ指示ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

範囲終了符号

範囲終了符号は、動詞またはステートメントを終了させます。明示的または暗黙的な範囲終了符号にすることができます。

明示範囲終了符号は、文を終了させることなく、動詞を終了させます。これは、END の後にハイフンと、終了させる動詞の名前を続けたものから構成されます (例えば、END-IF)。暗黙の範囲終了符号はピリオド (.)で、これはまだ終了されていないすべての先行ステートメントの範囲を終了させます。

次のプログラムの断片における 2 つのピリオドは、それぞれ IF ステートメントを終了させます。そのため、このコードは、明示範囲終了符号を持つ以下の例と同等です。

```
IF ITEM = "A"
    DISPLAY "THE VALUE OF ITEM IS " ITEM
    ADD 1 TO TOTAL
    MOVE "C" TO ITEM
    DISPLAY "THE VALUE OF ITEM IS NOW " ITEM.
IF ITEM = "B"
    ADD 2 TO TOTAL.

IF ITEM = "A"
    DISPLAY "THE VALUE OF ITEM IS " ITEM
    ADD 1 TO TOTAL
    MOVE "C" TO ITEM
    DISPLAY "THE VALUE OF ITEM IS NOW " ITEM
END-IF
IF ITEM = "B"
    ADD 2 TO TOTAL
END-IF
```

暗黙の範囲終了符号を使用すると、ステートメントの終わる場所が不明確になることがあります。結果として、ステートメントを意図に反して終了させ、プログラムのロジックが変わる可能性があります。明示範囲終了符号を使用すると、プログラムが理解しやすくなり、ステートメントを意図に反して終了させることがなくなります。例えば、次のプログラム断片で、最初の暗黙の範囲例の最初のピリオドの位置を変更すると、コードの意味が変更されます。

```
IF ITEM = "A"
    DISPLAY "VALUE OF ITEM IS " ITEM
    ADD 1 TO TOTAL.
    MOVE "C" TO ITEM
    DISPLAY " VALUE OF ITEM IS NOW " ITEM
IF ITEM = "B"
    ADD 2 TO TOTAL.
```

最初のピリオドが IF ステートメントを終わらせるため、その後の MOVE ステートメントおよび DISPLAY ステートメントは、字下げの意味を無視し、ITEM の値に関係なく実行されます。

プログラムをより読みやすくし、ステートメントの意図しない終了を防ぐために、特に段落内では、明示範囲終了符号を使用するようにすべきです。暗黙の範囲終了符号は、段落の終わりまたはプログラムの終わりでのみ使用してください。

条件ステートメント内にネストされている命令ステートメントについての明示的範囲終了符号をコーディングする際には、注意が必要です。範囲終了符号が、それが意図されたステートメントと対にされるようにしてください。次の例では、範囲終了符号は最初の READ ステートメントと対になるように意図されましたが、実際には 2 つ目と対にされます。

```
READ FILE1
  AT END
    MOVE A TO B
  READ FILE2
END-READ
```

明示範囲終了符号が意図されたステートメントと対にされるようにするために、上記の例を次のようにコーディングし直すことができます。

```
READ FILE1
  AT END
    MOVE A TO B
  READ FILE2
  END-READ
END-READ
```

関連概念

- 19 ページの『条件ステートメント』
- 19 ページの『命令ステートメント』

宣言

宣言は、例外条件が起こったときに実行される 1 つまたは複数の特殊目的セクションを提供します。

各宣言セクションは、そのセクションの機能を識別する USE ステートメントで始まります。プロシージャールの中に、条件が起こった場合に取りべきアクションを指定します。

関連タスク

- 330 ページの『入出力エラーの検出および処理』

関連参照

宣言 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

第 2 章 データの使用

ここに示す情報は、非 COBOL プログラマーが、データに関する COBOL 用語を他のプログラム言語で使用する用語と関連付けるのに役立ちます。変数、構造、リテラル、定数、値の割り当てと表示、組み込み関数、テーブル (配列) とポインターに対応する COBOL の基本事項を紹介します。

関連タスク

『変数、構造、リテラル、および定数の使用』
27 ページの『データ項目への値の割り当て』
37 ページの『画面上またはファイル内での値の表示 (DISPLAY)』
37 ページの『組み込み関数の使用 (組み込み関数)』
38 ページの『テーブル (配列) とポインターの使用』
171 ページの『第 10 章 国際環境でのデータの処理』

変数、構造、リテラル、および定数の使用

大半の高水準プログラム言語では、変数、構造 (グループ項目)、リテラル、または定数としてデータを表すという概念は同じです。

COBOL プログラムのデータは、英字、英数字、2 バイト文字セット (DBCS)、国別、または数値が可能です。また指標名を定義したり、USAGE POINTER、USAGE FUNCTION-POINTER、USAGE PROCEDURE-POINTER、または USAGE OBJECT REFERENCE として記述されたデータ項目を定義することもできます。データ定義はすべて、プログラムの DATA DIVISION に入れます。

関連タスク

『変数の使用』
24 ページの『データ項目とグループ項目の使用』
26 ページの『リテラルの使用』
26 ページの『定数の使用』
27 ページの『表意定数の使用』

関連参照

データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

変数の使用

変数は、プログラム実行時に値を変更できるデータ項目です。ただし、値は、データ項目に名前と長さを与えるときに定義されたデータ型に制限されます。

例えば、お客様名がプログラム内の英数字データ項目である場合、次のようにお客様名を定義して使用することができます。

```
Data Division.  
01 Customer-Name           Pic X(20).  
01 Original-Customer-Name Pic X(20).
```

```

. . .
Procedure Division.
    Move Customer-Name to Original-Customer-Name
. . .

```

代わりに、PICTURE 文節を Pic N(20) と指定し、その項目に USAGE NATIONAL 文節を指定することにより、上記のお客様名を国別データ項目として宣言できます。国別データ項目は Unicode UTF-16 で表され、その場合、ほとんどの文字が 2 バイトのストレージで表されます。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

関連参照

279 ページの『NSYMBOL』

184 ページの『国別データの保管』

PICTURE 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

データ項目とグループ項目の使用

連データ項目は、階層データ構造の一部となることができます。従属データ項目を持たないデータ項目は、**基本項目** と呼ばれます。1 つ以上の従属データ項目で構成されるデータ項目を**グループ項目**と呼びます。

レコードは、基本項目またはグループ項目のどちらでも構いません。グループ項目は、英数字グループ項目または**国別グループ項目**のいずれでも構いません。

例えば、以下の Customer-Record は英数字グループ項目であり、それぞれが基本データ項目を含んでいる 2 つの従属英数字グループ項目 (Customer-Name と Part-Order) で構成されています。これらのグループ項目は暗黙的に USAGE DISPLAY を持ちます。以下に示すように、PROCEDURE DIVISION の MOVE ステートメントで、グループ項目全体またはグループ項目の一部を参照できます。

```

Data Division.
File Section.
FD Customer-File
   Record Contains 45 Characters.
01 Customer-Record.
   05 Customer-Name.
      10 Last-Name          Pic x(17).
      10 Filler              Pic x.
      10 Initials            Pic xx.
   05 Part-Order.
      10 Part-Name           Pic x(15).
      10 Part-Color          Pic x(10).
Working-Storage Section.
01 Orig-Customer-Name.
   05 Surname                Pic x(17).
   05 Initials                Pic x(3).
01 Inventory-Part-Name       Pic x(15).
. . .
Procedure Division.
   Move Customer-Name to Orig-Customer-Name
   Move Part-Name to Inventory-Part-Name
. . .

```

代わりに、以下に示すように DATA DIVISION の宣言を変更することにより、Customer-Record を、2 つの従属国別グループ項目で構成される国別グループ項目として定義できます。国別グループ項目の振る舞いは、ほとんどの操作でカテゴリー国別の基本データ項目と同じです。GROUP-USAGE NATIONAL 文節は、グループ項目およびその従属グループ項目が国別グループであることを示します。国別グループ内の従属基本項目は、明示的または暗黙的に USAGE NATIONAL として記述されている必要があります。

```
Data Division.
File Section.
FD Customer-File
   Record Contains 90 Characters.
01 Customer-Record      Group-Usage National.
   05 Customer-Name.
      10 Last-Name      Pic n(17).
      10 Filler         Pic n.
      10 Initials       Pic nn.
   05 Part-Order.
      10 Part-Name      Pic n(15).
      10 Part-Color     Pic n(10).
Working-Storage Section.
01 Orig-Customer-Name   Group-Usage National.
   05 Surname           Pic n(17).
   05 Initials          Pic n(3).
01 Inventory-Part-Name  Pic n(15) Usage National.
. . .
Procedure Division.
   Move Customer-Name to Orig-Customer-Name
   Move Part-Name to Inventory-Part-Name
. . .
```

上記の例のグループ項目は、グループ・レベルで USAGE NATIONAL 文節を指定することもできます。グループ・レベルの USAGE 文節は、グループ内のそれぞれの基本データ項目に適用されます (ですから、これは便利な省略表現と言えます)。ただし、USAGE NATIONAL 文節を指定しているグループは、グループ内の基本項目の表記にもかかわらず、国別グループではありません。この USAGE 文節を指定しているグループは英数字グループであり、多数の操作 (移動や比較など) において USAGE DISPLAY の基本データ項目と同様の振る舞いをします (ただし、データの編集や変換は行われません)。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

181 ページの『国別グループの使用』

関連参照

13 ページの『FILE SECTION 記入項目』

184 ページの『国別データの保管』

グループ項目のクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

PICTURE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

USAGE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

リテラルの使用

リテラル とは、値が文字それ自体によって与えられる文字ストリングのことです。データ項目に使用したい値がわかっている場合には、PROCEDURE DIVISION でデータ値のリテラル表記を使用できます。

値のデータ項目を宣言したり、データ名を使用してデータ項目を参照したりする必要はありません。例えば、英数字リテラルを移動することにより、出力ファイル用のエラー・メッセージを準備できます。

```
Move "Name is not valid" To Customer-Name
```

数値リテラルを使用すれば、データ項目を特定の整数値と比較できます。次の例では、"Name is not valid" は英数字リテラルであり、03519 は数値リテラルです。

```
01 Part-number      Pic 9(5).  
...  
    If Part-number = 03519 then display "Part number was found"
```

英数字リテラルで制御文字 X'00' から X'1F' を表すには、16 進表記形式 (X') を使用できます。これらの制御文字を基本形式の英数字リテラルで指定すると、結果が予測不能になります。

NSYMBOL(NATIONAL) コンパイラー・オプションが有効であるときには、開始区切り文字 N" または N' を使用して国別リテラルを指定でき、NSYMBOL(DBCS) コンパイラー・オプションが有効であるときには、同様にして DBCS リテラルを指定できます。

開始区切り文字 NX" または NX' を使用すれば、(NSYMBOL コンパイラー・オプションの設定とは無関係に) 16 進表記の国別リテラルを指定できます。4 桁の 16 進数字のそれぞれのグループが、単一国別文字を指定します。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

178 ページの『国別リテラルの使用』

193 ページの『DBCS リテラルの使用』

関連参照

279 ページの『NSYMBOL』

リテラル (「COBOL for Windows 言語解説書」)

定数の使用

定数 は、1 つの値しか持たないデータ項目です。COBOL では、定数を表す構造を定義していません。しかし、(INITIALIZE ステートメントをコーディングする代わりに) データ記述に VALUE 文節をコーディングすることにより、初期値でデータ項目を定義することができます。

```
Data Division.  
01 Report-Header   pic x(50) value "Company Sales Report".  
...  
01 Interest        pic 9v9999 value 1.0265.
```

上の例では、英数字データ項目と数値データ項目を初期化します。 VALUE 文節を同様に使用して、国別定数または DBCS 定数を定義できます。

関連タスク

- 176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』
- 192 ページの『DBCS サポートを使用するためのコーディング』

表意定数の使用

通常用いられる特定の定数およびリテラルは、表意定数 と呼ばれる予約語として次のものが用意されています。ZERO、SPACE、HIGH-VALUE、LOW-VALUE、QUOTE、NULL、および ALL literal。これらは固定値を表すため、表意定数はデータ定義を必要としません。

以下に、その例を示します。
Move Spaces To Report-Header

関連タスク

- 179 ページの『国別文字表意定数の使用』
- 192 ページの『DBCS サポートを使用するためのコーディング』

関連参照

表意定数 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

データ項目への値の割り当て

データ項目を定義した後、いつでもそれに値を割り当てることができます。COBOL における割り当ては、その背後にある目的によって多くの形式を取ります。

表 2. プログラム内でのデータ項目の割り当て

目的	方法
データ項目または大きいデータ域に値を割り当てる。	以下のいずれかの方法を使用する。 <ul style="list-style-type: none">• INITIALIZE ステートメント• MOVE ステートメント• STRING または UNSTRING ステートメント• VALUE 文節 (データ項目を、プログラムが初期状態にあるときにそれに与えたい値に設定する場合)
算術の結果を割り当てる。	COMPUTE、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、または DIVIDE ステートメントを使用します。
データ項目内の文字または文字グループを検査または置換します。	INSPECT ステートメントを使用する。
ファイルから値を受け取る。	READ (または READ INTO) ステートメントを使用する。
システム入力装置またはファイルから値を受け取る。	ACCEPT ステートメントを使用する。

表 2. プログラム内でのデータ項目の割り当て (続き)

目的	方法
定数を設定します。	データ項目の定義内で VALUE 文節を使用し、そのデータ項目を受け取り側として使用しない。このような項目は、コンパイラが読み取り専用の定数としての扱いを強制しなくても、実際には定数になります。
以下のいずれかのアクション。 <ul style="list-style-type: none">テーブル・エレメントに関連付けられた値を指標に設定する外部スイッチの状況を ON または OFF に設定する条件名にデータを移動して、条件を真にするPOINTER、PROCEDURE-POINTER、または FUNCTION-POINTER データ項目にアドレスを設定するOBJECT REFERENCE データ項目にオブジェクト・インスタンスに関連付ける	SET ステートメントを使用する。

『例: データ項目の初期化』

関連タスク

- 31 ページの『構造の初期化 (INITIALIZE)』
- 33 ページの『基本データ項目への値の割り当て (MOVE)』
- 34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』
- 35 ページの『画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)』
- 99 ページの『データ項目の結合 (STRING)』
- 102 ページの『データ項目の分割 (UNSTRING)』
- 35 ページの『算術結果の割り当て (MOVE または COMPUTE)』
- 110 ページの『データ項目の計算および置換 (INSPECT)』
- 171 ページの『第 10 章 国際環境でのデータの処理』

例: データ項目の初期化

以下の例は、INITIALIZE ステートメントを使用して、英数字、国別編集、および数字編集データ項目を含めた、いろいろな種類のデータ項目を初期化する方法を示しています。

INITIALIZE ステートメントは、機能の面で 1 つ以上の MOVE ステートメントと同等です。初期化に関する関連作業を見るならば、グループ項目に対して INITIALIZE ステートメントを使用して、ある特定データ・カテゴリー内にあるその従属データ項目すべてをどのように便利な仕方で初期化できるかが分かります。

データ項目のブランクまたはゼロへの初期化:

INITIALIZE identifier-1

identifier-1 PICTURE	identifier-1 (初期化前)	identifier-1 (初期化後)
9(5)	12345	00000
X(5)	AB123	bbbb ¹
N(3)	410042003100 ²	200020002000 ³
99XX9	12AB3	bbbb ¹

<i>identifier-1</i> PICTURE	<i>identifier-1</i> (初期化前)	<i>identifier-1</i> (初期化後)
XXBX/XX	ABbC/DE	bbbb/bb ¹
**99.9CR	1234.5CR	**00.0bb ¹
A(5)	ABCDE	bbbbbb ¹
+99.99E+99	+12.34E+02	+00.00E+00
1. 記号 <i>b</i> は、ブランク・スペースを表します。 2. UTF-16LE エンコードでの、国別 (UTF-16) 文字「AB1」の 16 進表記。例では、 <i>identifier-1</i> が Usage National を持っているとして想定しています。 3. UTF-16LE エンコードでの、国別 (UTF-16) 文字「 」 (3 個のブランク・スペース) の 16 進表記。 <i>identifier-1</i> が Usage National として定義されておらず、また NSYMBOL(DBCS) が有効である場合、INITIALIZE は代わりに DBCS スペース (「2020」) を <i>identifier-1</i> に保管することに注意してください。		

英数字データ項目の初期化:

```

01 ALPHANUMERIC-1    PIC X    VALUE "y".
01 ALPHANUMERIC-3    PIC X(1) VALUE "A".
...
    INITIALIZE ALPHANUMERIC-1
      REPLACING ALPHANUMERIC DATA BY ALPHANUMERIC-3

```

ALPHANUMERIC-3	ALPHANUMERIC-1 (初期化前)	ALPHANUMERIC-1 (初期化後)
A	y	A

英数字右揃えデータ項目の初期化:

```

01 ANJUST            PIC X(8)  VALUE SPACES JUSTIFIED RIGHT.
01 ALPHABETIC-1      PIC A(4)  VALUE "ABCD".
...
    INITIALIZE ANJUST
      REPLACING ALPHANUMERIC DATA BY ALPHABETIC-1

```

ALPHABETIC-1	ANJUST (初期化前)	ANJUST (初期化後)
ABCD	bbbbbbbbb ¹	bbbbABCD ¹
1. 記号 <i>b</i> は、ブランク・スペースを表します。		

英数字編集データ項目の初期化:

```

01 ALPHANUM-EDIT-1   PIC XXBX/XXX VALUE "ABbC/DEF".
01 ALPHANUM-EDIT-3   PIC X/BB     VALUE "M/bb".
...
    INITIALIZE ALPHANUM-EDIT-1
      REPLACING ALPHANUMERIC-EDITED DATA BY ALPHANUM-EDIT-3

```

ALPHANUM-EDIT-3	ALPHANUM-EDIT-1 (初期化前)	ALPHANUM-EDIT-1 (初期化後)
M/bb ¹	ABbC/DEF ¹	M/bb/bbb ¹
1. 記号 <i>b</i> は、ブランク・スペースを表します。		

国別データ項目の初期化:

```

01 NATIONAL-1      PIC NN  USAGE NATIONAL  VALUE N"AB".
01 NATIONAL-3      PIC NN  USAGE NATIONAL  VALUE N"CD".
. . .
      INITIALIZE NATIONAL-1
      REPLACING NATIONAL DATA BY NATIONAL-3

```

NATIONAL-3	NATIONAL-1 (初期化前)	NATIONAL-1 (初期化後)
43004400 ¹	41004200 ²	43004400 ¹
1. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「CD」の 16 進表記。 2. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「AB」の 16 進表記。		

国別編集データ項目の初期化:

```

01 NATL-EDIT-1     PIC 0NN  USAGE NATIONAL  VALUE N"123".
01 NATL-3          PIC NNN  USAGE NATIONAL  VALUE N"456".
. . .
      INITIALIZE NATL-EDIT-1
      REPLACING NATIONAL-EDITED DATA BY NATL-3

```

NATL-3	NATL-EDIT-1 (初期化前)	NATL-EDIT-1 (初期化後)
340035003600 ¹	310032003300 ²	300034003500 ³
1. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「456」の 16 進表記。 2. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「123」の 16 進表記。 3. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「045」の 16 進表記。		

数値 (ゾーン 10 進数) データ項目の初期化:

```

01 NUMERIC-1       PIC 9(8)      VALUE 98765432.
01 NUM-INT-CMPT-3  PIC 9(7)  COMP VALUE 1234567.
. . .
      INITIALIZE NUMERIC-1
      REPLACING NUMERIC DATA BY NUM-INT-CMPT-3

```

NUM-INT-CMPT-3	NUMERIC-1 (初期化前)	NUMERIC-1 (初期化後)
1234567	98765432	01234567

数値 (国別 10 進数) データ項目の初期化:

```

01 NAT-DEC-1       PIC 9(3)  USAGE  NATIONAL VALUE 987.
01 NUM-INT-BIN-3   PIC 9(2)  BINARY VALUE 12.
. . .
      INITIALIZE NAT-DEC-1
      REPLACING NUMERIC DATA BY NUM-INT-BIN-3

```

NUM-INT-BIN-3	NAT-DEC-1 (初期化前)	NAT-DEC-1 (初期化後)
12	390038003700 ¹	300031003200 ²
1. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「987」の 16 進表記。 2. UTF-16LE エンコードでの、 国別文字「012」の 16 進表記。		

数字編集 (USAGE DISPLAY) データ項目の初期化:

```

01 NUM-EDIT-DISP-1 PIC $ZZ9V VALUE "$127".
01 NUM-DISP-3      PIC 999V  VALUE 12.
. . .
      INITIALIZE NUM-EDIT-DISP-1
      REPLACING NUMERIC DATA BY NUM-DISP-3

```

NUM-DISP-3	NUM-EDIT-DISP-1 (初期化前)	NUM-EDIT-DISP-1 (初期化後)
012	\$127	\$ 12

数字編集 (USAGE NATIONAL) データ項目の初期化:

```

01 NUM-EDIT-NATL-1 PIC $ZZ9V NATIONAL VALUE N"$127".
01 NUM-NATL-3      PIC 999V  NATIONAL VALUE 12.
. . .
      INITIALIZE NUM-EDIT-NATL-1
      REPLACING NUMERIC DATA BY NUM-NATL-3

```

NUM-NATL-3	NUM-EDIT-NATL-1 (初期化前)	NUM-EDIT-NATL-1 (初期化後)
300031003200 ¹	2400310032003700 ²	2400200031003200 ³

1. UTF-16LE エンコードでの、国別文字「012」の 16 進表記。
2. UTF-16LE エンコードでの、国別文字「\$127」の 16 進表記。
3. UTF-16LE エンコードでの、国別文字「\$ 12」の 16 進表記。

関連タスク

- 『構造の初期化 (INITIALIZE)』
- 72 ページの『テーブルの初期化 (INITIALIZE)』
- 41 ページの『数値データの定義』

関連参照

- 279 ページの『NSYMBOL』

構造の初期化 (INITIALIZE)

INITIALIZE ステートメントをそのグループ項目に適用することによって、グループ項目内のすべての従属データ項目の値を初期化することができます。ただし、グループ内のすべての項目を初期化することが必要な場合を除き、グループ全体を初期化することは非効率的です。

以下の例は、プログラムが作成するトランザクション・レコードの各フィールドをスペースおよびゼロにリセットする方法を示しています。フィールドの値は、作成される各レコードで同一というわけではありません。(トランザクション・レコードは、英数字グループ項目 TRANSACTION-OUT として定義されています。)

```

01 TRANSACTION-OUT.
   05 TRANSACTION-CODE      PIC X.
   05 PART-NUMBER           PIC 9(6).
   05 TRANSACTION-QUANTITY  PIC 9(5).
   05 PRICE-FIELDS.
      10 UNIT-PRICE         PIC 9(5)V9(2).
      10 DISCOUNT          PIC V9(2).
      10 SALES-PRICE        PIC 9(5)V9(2).
. . .
      INITIALIZE TRANSACTION-OUT

```

レコード	TRANSACTION-OUT (初期化前)	TRANSACTION-OUT (初期化後)
1	R0013830002400000000000000000	b0000000000000000000000000 ¹
2	R0013900004800000000000000000	b0000000000000000000000000 ¹
3	S0014100001200000000000000000	b0000000000000000000000000 ¹
4	C001383000000000425000000000	b0000000000000000000000000 ¹
5	C002010000000000000100000000	b0000000000000000000000000 ¹
1. 記号 <i>b</i> は、ブランク・スペースを表します。		

同様に国別グループ項目内のすべての従属データ項目の値は、そのグループ項目に INITIALIZE ステートメントを適用することにより、リセットできます。以下の構造は、上記の構造と似ていますが、Unicode UTF-16 データを使用している点で異なります。

```

01 TRANSACTION-OUT GROUP-USAGE NATIONAL.
   05 TRANSACTION-CODE          PIC N.
   05 PART-NUMBER                PIC 9(6).
   05 TRANSACTION-QUANTITY      PIC 9(5).
   05 PRICE-FIELDS.
       10 UNIT-PRICE            PIC 9(5)V9(2).
       10 DISCOUNT             PIC V9(2).
       10 SALES-PRICE           PIC 9(5)V9(2).
   . . .
   INITIALIZE TRANSACTION-OUT

```

トランザクション・レコードの直前の内容とは無関係に、上記の INITIALIZE ステートメントの実行後には次のようになります。

- TRANSACTION-CODE には、NX"0020" (国別スペース) が含まれます。
- TRANSACTION-OUT の残りの 27 の国別文字の各位置には、NX"0030" (国別 10 進数のゼロ) が入ります。

INITIALIZE ステートメントを使用して英数字または国別グループ・データ項目を初期化する場合、データ項目はグループ項目として、つまりグループ・セマンティクスを使用して処理されます。グループ内の基本データ項目は、上記の例に示されているように認識および処理されます。INITIALIZE ステートメントの REPLACING 句をコーディングしない場合、次のようになります。

- SPACE は、英字、英数字、英数字編集、DBCS、カテゴリ国別、および国別編集の各受信項目用の暗黙の送信項目です。
- ZERO は、数字および数字編集受信項目用の暗黙の送信項目です。

関連概念

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

72 ページの『テーブルの初期化 (INITIALIZE)』

181 ページの『国別グループの使用』

関連参照

INITIALIZE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

基本データ項目への値の割り当て (MOVE)

MOVE ステートメントを使用して、値を基本データ項目に割り当てます。

以下の文は、基本データ項目 `Customer-Name` の内容を、基本データ項目 `Orig-Customer-Name` に割り当てます。

```
Move Customer-Name to Orig-Customer-Name
```

`Customer-Name` が `Orig-Customer-Name` より長い場合は、右側で切り捨てが起こります。`Customer-Name` が短い場合には、`Orig-Customer-Name` の右側の余分な文字位置がスペースで埋められます。

数値を含んでいるデータ項目の場合、文字データ項目の場合よりも移動が複雑になることがあります。これは、数値には表現方法が幾通りもあるためです。文字データでは桁ごとの移動が行われますが、一般に数値では、可能な場合には代数値が移動されます。例えば、以下の MOVE ステートメントの場合、`Item-x` には、値 3.0 (0030 で表される) が入ります。

```
01 Item-x      Pic 999v9.
...
    Move 3.06 to Item-x
```

英字、英数字、英数字編集、DBCS、整数、または数字編集の各データ項目を、カテゴリー国別または国別編集データ項目に移動でき、送信項目が変換されます。国別データ項目をカテゴリー国別または国別編集のデータ項目に移動できます。カテゴリー国別データ項目の内容に数値が含まれている場合、その項目を、数値、数字編集、外部浮動小数点、または内部浮動小数点のデータ項目に移動できます。国別編集データ項目は、カテゴリー国別データ項目または別の国別編集データ項目にのみ移動できます。埋め込みや切り捨てが行われることがあります。

基本移動の全詳細については、MOVE ステートメントに関する以下の関連資料を参照してください。

以下の例は、国別データ項目に移動される、ギリシャ語の英数字データ項目を示しています。

```
...
01 Data-in-Unicode Pic N(100) usage national.
01 Data-in-Greek   Pic X(100).
...
    Read Greek-file into Data-in-Greek
    Move Data-in-Greek to Data-in-Unicode
```

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』

185 ページの『国別 (Unicode) 表現との間の変換』

関連参照

データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)

グループ・データ項目に値を割り当てるには、MOVE ステートメントを使用してください。

国別グループ項目 (GROUP-USAGE NATIONAL 文節で記述されているデータ項目) を別の国別グループ項目に移動できます。それぞれの国別グループ項目がカテゴリ国別の基本項目であるかのように、すなわち、それぞれの項目が PIC N(*m*) (ここで、*m* はその項目の長さ (国別文字位置数) です) として記述されているかのように、コンパイラは移動を処理します。

英数字グループ項目を、英数字グループ項目または国別グループ項目に移動できます。国別グループ項目を英数字グループ項目に移動することもできます。コンパイラはこのような移動をグループ移動として実行します。すなわち、送信グループまたは受信グループ内の個々の基本項目を考慮に入れずに、また送信データ項目を変換せずに実行します。送信および受信グループ項目内の従属データ記述の互換性が保たれるようにしてください。実行時に破壊オーバーラップが起きたとしても移動は行われます。

CORRESPONDING 句を MOVE ステートメントにコーディングすれば、従属基本項目を、あるグループ項目から別のグループ項目の同一名の対応する従属基本項目に移動できます。

```
01 Group-X.  
    02 T-Code    Pic X    Value "A".  
    02 Month     Pic 99   Value 04.  
    02 State     Pic XX   Value "CA".  
    02 Filler    PIC X.  
01 Group-N      Group-Usage National.  
    02 State     Pic NN.  
    02 Month     Pic 99.  
    02 Filler    Pic N.  
    02 Total     Pic 999.  
...  
    MOVE CORR Group-X TO Group-N
```

上記の例では、Group-N 内の State および Month は、Group-X から State および Month の国別表現の値をそれぞれ受け取ります。Group-N 内の他のデータ項目は未変更のままです。(受信グループ項目内の Filler 項目は、MOVE CORRESPONDING ステートメントによっては変更されません。)

MOVE CORRESPONDING ステートメントでは、送信グループ項目および受信グループ項目はグループ項目として扱われ、基本データ項目としては扱われません。グループ・セマンティクスが適用されます。すなわち、それぞれのグループ内の基本データ項目が認識され、結果は、対応するデータ項目のそれぞれのペアが、別個の MOVE ステートメントで参照された場合と同じになります。データ変換は、以下の関連した解説書に明記されている MOVE ステートメントの規則に従って実行されます。どのタイプの基本データ項目が対応するかについての詳細は、CORRESPONDING 句に関する関連した解説書を参照してください。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

33 ページの『基本データ項目への値の割り当て (MOVE)』

181 ページの『国別グループの使用』

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の変換』

関連参照

グループ項目のクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

CORRESPONDING 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

算術結果の割り当て (MOVE または COMPUTE)

データ項目に数値を割り当てるときには、MOVE ステートメントではなく COMPUTE ステートメントを使用することを考慮してください。

```
Move w to z  
Compute z = w
```

ほとんどの場合、上の例の 2 つのステートメントは同じ効果を持ちます。しかし、MOVE ステートメントは、切り捨てを伴う割り当てを実行します。ただし、DIAGTRUNC コンパイラ・オプションを使用して、数値受け取り側で切り捨てが起こる可能性のある MOVE ステートメントについてコンパイラが警告を出すように要求することができます。

ただし、実行時に左側の有効数字が失われる場合、COMPUTE ステートメントを使用するとこの条件を検出し、それに対処することができます。COMPUTE ステートメントの ON SIZE ERROR 句を使用すると、コンパイラはサイズ・オーバーフロー条件を検出するコードを生成します。条件が起こると、ON SIZE ERROR 句内のコードが実行され、z の内容は未変更のままになります。ON SIZE ERROR 句が指定されていない場合には、割り当ては切り捨てを伴って実行されます。MOVE ステートメントの ON SIZE ERROR サポートはありません。

COMPUTE ステートメントを使用して、算術式または組み込み関数の結果をデータ項目に割り当てすることもできます。以下に、その例を示します。

```
Compute z = y + (x ** 3)  
Compute x = Function Max(x y z)
```

関連参照

263 ページの『DIAGTRUNC』

組み込み関数 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)

データ項目に値を割り当てる方法の 1 つとして、画面またはファイルから値を読み取ることができます。

画面からデータを入力するには、最初にモニターを SPECIAL-NAMES 段落内の簡略名と関連付けます。次に、ACCEPT を使用して、画面から入力された入力行をデータ項目に割り当てます。以下に、その例を示します。

```
Environment Division.
Configuration Section.
Special-Names.
    Console is Names-Input.
. . .
    Accept Customer-Name From Names-Input
```

画面ではなくファイルから読み取る場合は、次のいずれかの変更を行います。

- `Console` を `device` に変更します (ここで、`device` は任意の有効なシステム装置 (例えば、`SYSIN`) です)。以下に、その例を示します。

```
SYSIN is Names-Input
```

- `SET` コマンドを使用して、環境変数 `CONSOLE` を有効なファイル指定に設定します。以下に、その例を示します。

```
SET CONSOLE=%myfiles%myinput.rpt
```

この環境変数名は、使用しているシステム装置名と同じでなければなりません。上記の例では、システム装置は `Console` ですが、有効なシステム装置であればシステム装置名に環境変数を割り当てることができます。例えば、システム装置が `SYSIN` の場合は、ファイル指定を割り当てる環境変数も `SYSIN` でなければなりません。

`ACCEPT` ステートメントは、入力行をデータ項目に割り当てます。入力行がデータ項目より短い場合は、適切な表記となるようデータ項目にスペースが埋め込まれます。画面から読み込む場合に入力行がデータ項目より長いと、残りの文字は破棄されます。ファイルから読み込む場合に入力行がデータ項目より長いと、残りの文字はファイルの次の入力行として保持されます。

`ACCEPT` ステートメントを使用するなら、値を英数字または国別グループ項目に割り当てたり、`USAGE DISPLAY`、`USAGE DISPLAY-1`、または `USAGE NATIONAL` が指定されている基本データ項目に割り当てたりすることができます。

値を `USAGE NATIONAL` データ項目に割り当てると、ターミナルからの入力の場合にのみ、入力データが、現行のランタイム・ロケールに関連付けられたコード・ページから国別 (Unicode UTF-16) 表記に変換されます。

入力データが他の装置からのものであるときに変換を実行したい場合は、`NATIONAL-OF` 組み込み関数を使用します。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

213 ページの『環境変数の設定』

186 ページの『英数字および DBCS データから国別データへの変換 (NATIONAL-OF)』

363 ページの『CICS のもとでのシステム日付の取得』

関連参照

`ACCEPT` ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

`SPECIAL-NAMES` 段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

画面上またはファイル内での値の表示 (DISPLAY)

DISPLAY ステートメントを使用すると、データ項目の値を画面に表示したり、ファイルに書き込むことができます。

```
Display "No entry for surname '" Customer-Name "' found in the file."
```

上記の例で、データ項目 *Customer-Name* の内容が JOHNSON の場合、ステートメントは、次のメッセージを画面に表示します。

```
No entry for surname 'JOHNSON' found in the file.
```

データを画面以外の宛先に書き込むには、UPON 句を使用します。例えば、次のステートメントは、SYSOUT 環境変数の値として指定されたファイルに書き込みを行います。

```
Display "Hello" upon sysout.
```

USAGE NATIONAL データ項目の値を表示するときには、出力データが、現行のロケールに関連付けられたコード・ページに変換されます。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

186 ページの『国別データの英数字データへの変換 (DISPLAY-OF)』

362 ページの『CICS のもとで実行する COBOL プログラムのコーディング』

関連参照

217 ページの『ランタイム環境変数』

DISPLAY ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

組み込み関数の使用 (組み込み関数)

一部の高水準プログラム言語には組み込み関数があります。組み込み関数は、プログラム内で、定義済み属性および事前定義値を持つ変数であるかのように参照することができます。COBOL では、これらの関数は **組み込み関数 (intrinsic functions)** と呼ばれます。これらの関数はストリングと数値を操作する機能を提供します。

組み込み関数の値は参照時に自動的に導き出されるため、関数を DATA DIVISION で定義する必要はありません。引数として使用する非リテラル・データ項目だけを定義してください。表意定数を引数として使用することはできません。

関数 *ID* は、COBOL 予約語 FUNCTION と、それに続く関数名 (Max など) と、それに続く関数の評価に使用される任意の引数 (x、y、z など) の組み合わせです。例えば、以下の例で強調されているワードのグループは、関数 *ID* です。

```
Unstring Function Upper-case(Name) Delimited By Space  
        Into Fname Lname  
Compute A = 1 + Function Log10(x)  
Compute M = Function Max(x y z)
```

関数 ID は、関数の呼び出しと、関数によって戻されるデータ値の両方を表します。関数 ID は、実際にデータ項目を表すため、戻り値の属性を持つデータ項目が使用できる場所ならば、PROCEDURE DIVISION のほとんどの場所で使用することができます。

COBOL ワード `function` は予約語ですが、関数名は予約されていません。このため、関数名を他のコンテキスト（データ項目の名前など）で 사용할 ことができます。例えば、`Sqrt` は、組み込み関数を呼び出し、プログラム内のデータ項目を指定するために使用できます。

```
Working-Storage Section.  
01  x                      Pic 99  value 2.  
01  y                      Pic 99  value 4.  
01  z                      Pic 99  value 0.  
01  Sqrt                    Pic 99  value 0.  
.  
.  
.  
    Compute Sqrt = 16 ** .5  
    Compute z = x + Function Sqrt(y)  
.  
.  
.
```

関数 ID は、英数字、国別、数字、または整数のいずれかのタイプの値を表します。英数字関数または国別関数の関数 ID には、サブstring指定（参照修飾子）を組み込むことができます。数字組み込み関数は、それらが戻す数値のタイプに応じてさらに分類されます。

関数 `MAX`、`MIN`、`DATEVAL`、および `UNDATE` は、指定された引数の型に応じていずれかのタイプの値を戻します。

関数 `DATEVAL`、`UNDATE`、および `YEARWINDOW` は、ウィンドウ化日付フィールドの操作および変換を援助するために、2000 年言語拡張として提供されています。

関数は、ネストされた関数の結果が外側の関数の引数についての要件を満たす限り、引数として他の関数を参照することができます。例えば、`Function Sqrt(5)` は数値を戻します。したがって、下記の `MAX` 関数への 3 つの引数はすべて、この関数についての許容される引数型である数値になります。

```
Compute x = Function Max((Function Sqrt(5)) 2.5 3.5)
```

関連タスク

83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』

111 ページの『データ項目の変換（組み込み関数）』

114 ページの『データ項目の評価（組み込み関数）』

テーブル (配列) とポインターの使用

COBOL では、配列はテーブルと呼ばれます。テーブルは、`OCCURS` 文節を使用して `DATA DIVISION` に定義される論理的に連続するデータ項目の集合です。

ポインターは、仮想記憶アドレスを含むデータ項目です。ポインターは、`USAGE IS POINTER` 文節を使用して `DATA DIVISION` の中に明示的に定義するか、または `ADDRESS OF` 特殊レジスターとして暗黙的に定義します。

ポインター・データ項目には以下の操作を実行することができます。

- `CALL . . BY REFERENCE` ステートメントを使用してプログラム間でそれらを受け渡す。
- `SET` ステートメントを使用してそれらを他のポインターへ移動する。
- 比較条件を使用して他のポインターと比較し、等しいかどうかを調べる。
- `VALUE IS NULL` を使用して、それらが無効なアドレスを含むように初期化する。

ポインター・データ項目は、以下のことを行うために使用してください。

- 限定された基底アドレッシングの実施。特に、レコード域 (`OCCURS DEPENDING ON` で定義されるために可変位置である) のアドレスを受け渡ししたい場合。
- チェーン・リストの処理。

関連タスク

65 ページの『テーブルの定義 (`OCCURS`)』

530 ページの『プロシージャ・ポインターと関数ポインターの使用』

第 3 章 数値および算術演算

一般的に、COBOL 数値データは、一連の 10 進数字の桁として表示することができます。ただし、数値項目は、算術符号や通貨記号などの特殊な特性を持つこともできます。

算術演算を効率よく実行できるように、数値データを定義、表示、および格納する方法について説明します。

- 数値データを定義するには、PICTURE 文節と、文字 9、+、-、P、S、および V を使用します。
- 数値データを表示するには、PICTURE 文節と、MOVE および DISPLAY ステートメントと一緒に編集文字 (Z、コンマ、ピリオドなど) を使用します。
- 数値データの格納方法を制御するには、さまざまな形式を指定した USAGE 文節を使用します。
- データ値が適切であるかどうかを妥当性検査するには、数値のクラス・テストを使用します。
- 算術を実行するには、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、DIVIDE、および COMPUTE ステートメントを使用します。
- 必要な通貨記号を指定するには、CURRENCY SIGN 文節と適切な PICTURE 文字を使用します。

関連タスク

『数値データの定義』

43 ページの『数値データの表示』

44 ページの『数値データの保管方法の制御』

54 ページの『非互換データの検査 (数値のクラス・テスト)』

55 ページの『算術の実行』

62 ページの『通貨記号の使用』

数値データの定義

数値項目を定義するには、数値の 10 進数の桁数を表すためにデータ記述で文字 9 を指定した PICTURE 文節を使用します。英数字データ項目用の X を使用しないでください。

例えば、以下の Count-y は数値データ項目であり、USAGE DISPLAY を持つ外部 10 進数項目 (ゾーン 10 進数項目) です。

```
05 Count-y          Pic 9(4) Value 25.  
05 Customer-name   Pic X(20) Value "Johnson".
```

同様に、国別文字 (UTF-16) を保持する数値データ項目を定義できます。例えば、以下の Count-n は USAGE NATIONAL を持つ外部 10 進数データ (国別 10 進数項目) です。

```
05 Count-n          Pic 9(4) Value 25 Usage National.
```

デフォルトのコンパイラ・オプションである ARITH(COMPAT) (互換モード と呼ばれる) を使用してコンパイルする場合は、PICTURE 文節には最大 18 桁までコーディングすることができます。ARITH(EXTEND) (拡張モード と呼ばれる) を使用してコンパイルする場合は、PICTURE 文節には最大 31 桁までコーディングすることができます。

それ以外にコーディングできる特殊な意味を持つ文字は、次のとおりです。

P 先行ゼロまたは後続ゼロを示します。

S 正または負の符号を示します。

V 小数点を暗黙指定します。

次の例の s は、値が符号付きであることを意味します。

```
05 Price Pic s99v99.
```

したがって、このフィールドには、正または負の値を格納することができます。v は、暗黙の小数点の位置を示しますが、ストレージ上の位置を占めないのので、項目のサイズには含まれません。デフォルトでは s はストレージ上の位置を必要としないので、通常、s は数値項目のサイズに含まれません。

しかし、プログラムまたはデータを別のマシンに移植する予定である場合、ゾーン 10 進数データ項目用の符号をストレージ上の別個の位置としてコーディングすることができます。次の場合、符号は 1 バイトを占めます。

```
05 Price Pic s99V99 Sign Is Leading, Separate.
```

このようにすれば、現在使用中のマシンとは非分離符号を格納するための規則が異なるマシンを使用する場合に、予測外の結果が生じることがなくなります。

分離符号は、印刷または表示されるゾーン 10 進数データ項目にとっても望ましいものです。

分離符号は、符号付きの国別 10 進数データ項目には必要です。符号は、以下の例のように 2 バイトのストレージを占有します。

```
05 Price Pic s99V99 Usage National Sign Is Leading, Separate.
```

PICTURE 文節に内部浮動小数点データ (COMP-1 または COMP-2) を指定することはできません。しかし、VALUE 文節を使用して、内部浮動小数点リテラルの初期値を提供できます。

```
05 Compute-result Usage Comp-2 Value 06.23E-24.
```

外部浮動小数点データについては、以下に参照されている例および数値データの形式に関する関連概念を参照してください。

49 ページの『例: 数値データおよび内部表現』

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

関連タスク

43 ページの『数値データの表示』

44 ページの『数値データの保管方法の制御』
55 ページの『算術の実行』
180 ページの『国別数値データ項目の定義』

関連参照

53 ページの『ゾーン 10 進数およびパック 10 進数データのサイン表記』
184 ページの『国別データの保管』
252 ページの『ARITH』
SIGN 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

数値データの表示

数値項目を特定の編集記号 (小数点、コンマ、ドル記号、借方記号、貸方記号など) を付けて定義すると、項目の表示または印刷時に、項目をより見やすく理解しやすいようにすることができます。

例えば、以下のコードの Edited-price は、USAGE DISPLAY を持つ数字編集項目です。 (数字編集項目に文節 USAGE IS DISPLAY を指定することができますが、これは暗黙の指定です。これは、項目が文字形式で保管されることを意味します。)

```
05 Price          Pic      9(5)v99.  
05 Edited-price   Pic      $zz,zz9.99.  
...  
Move Price To Edited-price  
Display Edited-price
```

Price の内容が 0150099 (値 1,500.99 を表す) であった場合には、コードを実行すると、\$ 1,500.99 が表示されます。 Edited-price の PICTURE 文節内の z は、先行ゼロの抑止を示します。

英数字ではなく国別 (UTF-16) 文字を保持する数字編集データ項目を定義できます。そのためには、数字編集項目を USAGE NATIONAL と宣言してください。 USAGE NATIONAL を持つ数字編集項目の場合の編集記号の効果は、USAGE DISPLAY を持つ数字編集項目の場合と同様ですが、編集が国別文字で行われる点は異なります。例えば、上記のコードで Edited-price が USAGE NATIONAL と宣言された場合、項目は国別文字を使用して編集および表示されます。

基本数値項目または数字編集項目に BLANK WHEN ZERO 文節をコーディングすることにより、値ゼロが項目に保管されたとき、その項目がスペースで充てんされるようにすることができます。例えば、以下のそれぞれの DISPLAY ステートメントの場合、ゼロではなくブランクが表示されます。

```
05 Price          Pic      9(5)v99.  
05 Edited-price-D Pic      $99,999.99  
                  Blank When Zero.  
05 Edited-price-N Pic      $99,999.99 Usage National  
                  Blank When Zero.  
...  
Move 0 to Price  
Move Price to Edited-price-D  
Move Price to Edited-price-N  
Display Edited-price-D  
Display Edited-price-N
```

算術式の中、あるいは ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、DIVIDE、または COMPUTE ステートメントの中で、数字編集項目を送信オペランドとして使用することはできません。

ん。(これらのステートメントのいずれかで数字編集項目が受信フィールドであるとき、あるいは MOVE ステートメントが数字編集受信フィールド、および数字編集または数値送信フィールドを持っているとき、数字編集が行われます)。数字編集項目は、主として、数値データの表示または印刷のために使用されます。

数字編集項目は、数値項目または数字編集項目に移動することができます。以下の例では、数字編集項目の値 (USAGE DISPLAY を持っているか USAGE NATIONAL を持っているかにかかわらず) は数値項目に移動します。

```
Move Edited-price to Price  
Display Price
```

上記の最初の例のステートメントの直後にこれら 2 つのステートメントが続いている場合、Price は 0150099 (値 1,500.99 を表す) と表示されます。Edited-price が USAGE NATIONAL を持っている場合にも、Price は 0150099 と表示されます。

数字編集項目を、英数字データ項目、英数字編集データ項目、浮動小数点データ項目、および国別データ項目に移動することもできます。数字編集データの有効な受信項目の完全なリストについては、MOVE ステートメントに関する関連した解説書を参照してください。

49 ページの『例: 数値データおよび内部表現』

関連タスク

37 ページの『画面上またはファイル内での値の表示 (DISPLAY)』

『数値データの保管方法の制御』

41 ページの『数値データの定義』

55 ページの『算術の実行』

180 ページの『国別数値データ項目の定義』

185 ページの『国別 (Unicode) 表現との間の変換』

関連参照

MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

BLANK WHEN ZERO 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

数値データの保管方法の制御

データ記述記入項目に USAGE 文節をコーディングすることによって、コンピューターが数値データを保管する方法を制御することができます。

次のような理由から、形式を制御する場合があります。

- 計算データ型で実行される算術の方が、USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL データ型での算術より効率的である。
- パック 10 進数形式の方が、USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL データ型に比べ、1 桁当たりのストレージが少なく済む。
- パック 10 進数形式の方が 2 進数形式の場合よりも、DISPLAY または NATIONAL 形式との変換が効率的である。
- 浮動小数点形式は、位取りが大きく変化するような算術オペランドおよび結果を格納するのに最適であり、最大数の有効数字が維持される。

- データをあるマシンから別のマシンに移すときに、データ形式を保持する必要がある。

プログラム内で使用する数値データは、COBOL で使用可能な以下の形式のいずれかです。

- 外部 10 進数 (USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL)
- 外部浮動小数点 (USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL)
- 内部 10 進数 (USAGE PACKED-DECIMAL)
- 2 進数 (USAGE BINARY)
- 固有 2 進数 (USAGE COMP-5)
- 内部浮動小数点 (USAGE COMP-1 または USAGE COMP-2)

COMP および COMP-4 は BINARY と同義であり、COMP-3 は PACKED-DECIMAL と同義です。

コンパイラは、表示可能な数値をそれらの数値の内部表現に変換してから、それらを算術演算で使います。ですから、データ項目を DISPLAY または NATIONAL ではなく、BINARY または PACKED-DECIMAL と定義すると、さらに効率的になることがよくあります。以下に、その例を示します。

```
05 Initial-count Pic S9(4) Usage Binary Value 1000.
```

どの USAGE 文節を使用して値の内部表現を制御するかにかかわらず、使用する PICTURE 文節の規則および VALUE 文節の 10 進値は同じです (ただし、内部浮動小数点データの場合は別で、この場合、PICTURE 文節を使用できません)。

49 ページの『例: 数値データおよび内部表現』

関連概念

『数値データの形式』

52 ページの『データ形式の変換』

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

関連タスク

41 ページの『数値データの定義』

43 ページの『数値データの表示』

55 ページの『算術の実行』

関連参照

52 ページの『変換および精度』

53 ページの『ゾーン 10 進数およびパック 10 進数データのサイン表記』

数値データの形式

数値データに使用できる形式には幾つかあります。

外部 10 進数 (DISPLAY および NATIONAL) 項目

カテゴリ数値データ項目で USAGE DISPLAY が (コーディングされているゆえに、あるいはデフォルトにより) 有効である場合、ストレージのそれぞれの位置 (バイ

ト) は 1 つの 10 進数字を含みます。すなわち、項目は表示可能な形式で保管されます。USAGE DISPLAY を持っている外部 10 進数項目は、ゾーン 10 進数データ項目と呼ばれます。

カテゴリ数値データ項目で USAGE NATIONAL が有効である場合、それぞれの 10 進数字ごとに 2 バイトのストレージが必要です。項目は UTF-16 形式で保管されます。USAGE NATIONAL を持つ外部 10 進数項目は、国別 10 進数データ項目と呼ばれます。

国別 10 進数データ項目は、符号付きの場合には、SIGN SEPARATE 文節が有効になっている必要があります。ゾーン 10 進数項目のその他の規則すべてが国別 10 進数項目に適用されます。国別 10 進数項目は、他のカテゴリ数値データ項目を使用できる場所ならどこでも使用できます。

外部 10 進数 (ゾーン 10 進数と国別 10 進数の両方) データ項目は、プログラムと、ファイル、端末、またはプリンターとの間で数値をやり取りすることを主な目的としています。外部 10 進数項目は、算術処理で、オペランドおよび受け取り側として使用することもできます。ただし、プログラムで多数の算術計算を集中的に実行し、効率を優先させるのであれば、算術計算で使用するデータ項目には、COBOL の計算数値タイプを使用した方がよい場合もあります。

外部浮動小数点 (DISPLAY および NATIONAL) 項目

浮動小数点データ項目で USAGE DISPLAY が (コーディングされているゆえに、あるいはデフォルトにより) 有効である場合、PICTURE 文字位置 (使用されている場合、暗黙の小数点である v を除く) は 1 バイトのストレージを占有します。項目は表示可能な形式で保管されます。USAGE DISPLAY を持つ外部浮動小数点項目は、本書では表示浮動小数点 データ項目と呼ばれます。そのように呼ぶのは、USAGE NATIONAL を持つ外部浮動小数点項目と区別する必要がある場合です。

以下の例では、Compute-Result が暗黙的に表示浮動小数点項目として定義されています。

```
05 Compute-Result Pic -9v9(9)E-99.
```

負符号 (-) は、仮数および指数が必ず負の数値でなければならないことを意味するものではありません。負符号は、数値が表示されるときに、正数であれば符号がブランクとなり、負数であれば符号が負符号となることを意味しています。正符号 (+) をコーディングすると、符号は、正数であれば正符号となり、負数であれば負符号となります。

浮動小数点データ項目で USAGE NATIONAL が有効である場合、それぞれの PICTURE 文字位置 (使用されている場合、v を除く) は 2 バイトのストレージを占有します。項目は国別文字 (UTF-16) として保管されます。USAGE NATIONAL を持つ外部浮動小数点項目は、国別浮動小数点 データ項目と呼ばれます。

表示浮動小数点項目の既存の規則は、国別浮動小数点項目に適用されます。

以下の例では、Compute-Result-N は国別浮動小数点項目です。

```
05 Compute-Result-N Pic -9v9(9)E-99 Usage National.
```


Compute-Result-N が表示される場合、Compute-Result について上述したように符号が表示されますが、国別文字で表示されます。

外部浮動小数点項目に VALUE 文節を使用することはできません。

浮動小数点数は、外部 10 進数と同様、(コンパイラによって) 数値の内部表現に変換しなければ、算術演算で使用することはできません。デフォルト・オプションの ARITH (COMPAT) を使用してコンパイルした場合、外部浮動小数点数は長精度 (64 ビット) の浮動小数点形式に変換されます。ただし、ARITH (EXTEND) を使用してコンパイルすれば、外部浮動小数点数は拡張精度 (80 ビット IEEE) の浮動小数点形式に変換されます。

2 進数 (COMP) 項目

BINARY、COMP、および COMP-4 は、同義語です。2 進数形式の数値は、2、4、または 8 バイトのストレージを占めます。バイト反転の 2 進データ (右端バイトの左端ビットが符号ビット) を除き、この形式は、左端ビットを演算符号とした固定小数点になります。

2 進数は、付随する PICTURE 記述が 4 個以下の 10 進数字であれば 2 バイトを占め、5 個から 9 個の 10 進数字であれば 4 バイトを占め、10 個から 18 個の 10 進数字であれば 8 バイトを占めます。9 桁以上の 2 進数項目には、コンパイラによる余分な処理が必要となります。

2 進数項目には、例えば、指標、添え字、スイッチ、および算術オペランドや結果を入れることができます。

2 進データ (BINARY、COMP、または COMP-4) の切り捨て方法を指定するには、TRUNC(STD|OPT|BIN) コンパイラ・オプションを使用してください。

固有 2 進数 (COMP-5) 項目

USAGE COMP-5 として宣言したデータ項目は、ストレージ内では 2 進データとして表されます。しかし、これらは、USAGE COMP 項目とは異なり、PICTURE 文節の 9 の数で暗黙指定される値に制限されるのではなく、固有 2 進数表現 (2、4、または 8 バイト) の容量までの大きさの値を含むことができます。

数値データを COMP-5 項目に移動または保管すると、COBOL PICTURE サイズ制限ではなく、2 進数フィールド・サイズで切り捨てが行われます。COMP-5 項目を参照する場合、演算では完全な 2 進数フィールド・サイズが使用されます。

したがって、COMP-5 は、データが COBOL PICTURE 文節に適合しない可能性のある非 COBOL プログラムから生じる 2 進データ項目の場合に特に有用です。

次の表は、COMP-5 データ項目に指定可能な値の範囲を示しています。

表 3. COMP-5 データ項目の値の範囲

PICTURE	ストレージ表現	数値
S9(1) から S9(4)	2 進数ハーフワード (2 バイト)	-32768 から +32767

表 3. COMP-5 データ項目の値の範囲 (続き)

PICTURE	ストレージ表現	数値
S9(5) から S9(9)	2 進数フルワード (4 バイト)	-2,147,483,648 から +2,147,483,647
S9(10) から S9(18)	2 進数ダブルワード (8 バイト)	-9,223,372,036,854,775,808 から +9,223,372,036,854,775,807
9(1) から 9(4)	2 進数ハーフワード (2 バイト)	0 から 65535
9(5) から 9(9)	2 進数フルワード (4 バイト)	0 から 4,294,967,295
9(10) から 9(18)	2 進数ダブルワード (8 バイト)	0 から 18,446,744,073,709,551,615

COMP-5 項目の PICTURE 文節に、スケーリング (すなわち、小数部の桁数または暗黙の整数桁数) を指定することができます。その場合は、上記にリストされた最大容量とほぼ同じ大きさをスケーリングする必要があります。例えば、PICTURE S99V99 COMP-5 として記述したデータ項目は、ストレージ内では 2 進数ハーフワードとして表され、-327.68 から +327.67 までの範囲の値をサポートします。

VALUE 文節のラージ・リテラル: COMP-5 項目の VALUE 文節に指定されたリテラルは、一部の例外を除いて、固有 2 進数表現の容量までの大きさの値を含むことができます。例外については、「*COBOL for Windows 言語解説書*」を参照してください。

TRUNC コンパイラー・オプションの設定に関係なく、COMP-5 データ項目は、TRUNC(BIN) でコンパイルされたプログラムでは、2 進データのように動作します。

2 進数データのバイト反転

Windows ベースのワークステーションでは、バイト反転に注意しなければならない場合があります。2 進数データの格納方法は、ご使用のハードウェアおよびソフトウェアによって異なります。例えば、Intel^(R) プラットフォームのデフォルトでは、リトル・エンディアン 形式 (最大重み数字が最上位アドレスに格納される) で 2 進数データが格納されます。zSeries^(R) と AIX^(R) では、ビッグ・エンディアン 形式 (最小重み数字が最上位アドレスに格納される) で 2 進数データが格納されます。

BINARY(NATIVE|S390) コンパイラー・オプションを使用すると、2 進数データの型 (BINARY、COMP、COMP-4) をビッグ・エンディアン形式とリトル・エンディアン形式のどちらで格納するかを指定することができます。

コンパイラーは、BINARY(NATIVE|S390) の設定にかかわらず、COMP-5 をネイティブの 2 進数データ形式で処理します。

ご使用のアプリケーションが、ネイティブの 2 進数データ形式を前提とする他の言語 (C/C++ など) または他の製品 (CICS や DB2 など) とのインターフェースとなる場合は、COMP-5 を使用します。ただし、SORT または MERGE ステートメントに、ビッグ・エンディアンとリトル・エンディアンの両方のバイナリー・キーを含めることはできません。例えば、BINARY(S390) オプションが有効で、SORT または

MERGE キーの一方が COMP-5 データ項目になる場合は、他方の SORT または MERGE キーを COMP、BINARY、または COMP-4 データ項目にすることはできません。

パック 10 進数 (COMP-3) 項目

PACKED-DECIMAL と COMP-3 は同義語です。パック 10 進数項目は、PICTURE 記述でコーディングされる 2 つの 10 進数字ごとに 1 バイトのストレージを占めます。ただし、右端のバイトだけが例外で、右端のバイトには 1 つの数字と符号が入ります。この形式が最も効率的に使用されるのは、PICTURE 記述で奇数の桁をコーディングして、左端のバイトが完全に使用されるようにするときです。パック 10 進数項目は、算術演算の目的では固定小数点数として扱われます。

内部浮動小数点 (COMP-1 および COMP-2) 項目

COMP-1 は短精度浮動小数点形式を指し、COMP-2 は長精度浮動小数点形式を指します。これらの形式は、それぞれ、4 バイトと 8 バイトのストレージを占めます。

FLOAT(NATIVE) コンパイラ・オプション (デフォルト) が有効な場合は、COMP-1 および COMP-2 データ項目が IEEE 形式で表されます。FLOAT(S390) (またはその同義語 FLOAT(HEX)) が有効な場合は、COMP-1 および COMP-2 データ項目が一貫して zSeries、つまり 16 進数の浮動小数点形式で表されます。詳細については、後述の FLOAT オプションに関する説明を参照してください。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

関連タスク

41 ページの『数値データの定義』

180 ページの『国別数値データ項目の定義』

関連参照

184 ページの『国別データの保管』

293 ページの『TRUNC』

253 ページの『BINARY』

274 ページの『FLOAT』

データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

SIGN 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

VALUE 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: 数値データおよび内部表現

次の表は、数値項目の内部表現を示します。

次の表は、ネイティブ・データ形式の数値項目の内部表現を示しています。USAGE NATIONAL を持つ数値項目は、UTF16-LE (リトル・エンディアン) エンコードで表現されます。ここでは、BINARY(NATIVE)、CHAR(NATIVE)、および FLOAT(NATIVE) コンパイラ・オプションが有効であるものとします。

表 4. ネイティブの数値項目の内部表現

数値タイプ	PICTURE および USAGE 文節と オプションの SIGN 文節	値	内部表現
外部 10 進数	PIC S9999 DISPLAY	+ 1234	31 32 33 34
		- 1234	31 32 33 74
		1234	31 32 33 34
	PIC 9999 DISPLAY	1234	31 32 33 34
	PIC 9999 NATIONAL	1234	31 00 32 00 33 00 34 00
	PIC S9999 DISPLAY SIGN LEADING	+ 1234	31 32 33 34
		- 1234	71 32 33 34
	PIC S9999 DISPLAY SIGN LEADING SEPARATE	+ 1234	2B 31 32 33 34
		- 1234	2D 31 32 33 34
	PIC S9999 DISPLAY SIGN TRAILING SEPARATE	+ 1234	31 32 33 34 2B
		- 1234	31 32 33 34 2D
	PIC S9999 NATIONAL SIGN LEADING SEPARATE	+ 1234	2B 00 31 00 32 00 33 00 34 00
		- 1234	2D 00 31 00 32 00 33 00 34 00
	PIC S9999 NATIONAL SIGN TRAILING SEPARATE	+ 1234	31 00 32 00 33 00 34 00 2B 00
		- 1234	31 00 32 00 33 00 34 00 2D 00
2 進数	PIC S9999 BINARY PIC S9999 COMP PIC S9999 COMP-4	+ 1234	D2 04
		- 1234	2E FB
	PIC S9999 COMP-5	+ 12345 ¹	39 30
		- 12345 ¹	C7 CF
	PIC 9999 BINARY PIC 9999 COMP PIC 9999 COMP-4	1234	D2 04
	PIC 9999 COMP-5	60000 ¹	60 EA
内部 10 進数	PIC S9999 PACKED-DECIMAL PIC S9999 COMP-3	+ 1234	01 23 4C
		- 1234	01 23 4D
	PIC 9999 PACKED-DECIMAL PIC 9999 COMP-3	1234	01 23 4C
内部浮動小数点	COMP-1	+ 1234	00 40 9A 44
		- 1234	00 40 9A C4
	COMP-2	+ 1234	00 00 00 00 00 48 93 40
		- 1234	00 00 00 00 00 48 93 C0
外部浮動小数点	PIC +9(2).9(2)E+99 DISPLAY	+ 12.34E+02	2B 31 32 2E 33 34 45 2B 30 32
		- 12.34E+02	2D 31 32 2E 33 34 45 2B 30 32
	PIC +9(2).9(2)E+99 NATIONAL	+ 12.34E+02	2B 00 31 00 32 00 2E 00 33 00 34 00 45 00 2B 00 30 00 32 00
		- 12.34E+02	2D 00 31 00 32 00 2E 00 33 00 34 00 45 00 2B 00 30 00 32 00

表 4. ネイティブの数値項目の内部表現 (続き)

数値タイプ	PICTURE および USAGE 文節と オプションの SIGN 文節	値	内部表現
1. この例では、COMP-5 データ項目に含めることのできる値が、PICTURE 文節の 9 の数によって暗黙指定された値に制限されるのではなく、固有 2 進数表現 (2、4、または 8 バイト) の容量までの大きさの値を入れることができます。を示しています。			

次の表は、zSeries データ形式の数値項目の内部表現を示しています。 USAGE NATIONAL を持つ数値項目は、UTF16-LE エンコードで表現されます。ここでは、 BINARY(S390)、CHAR(EBCDIC)、および FLOAT(HEX) コンパイラ・オプションが有効であるものとします。

表 5. BINARY(S390)、CHAR(EBCDIC)、および FLOAT(HEX) が有効である場合の数値項目の内部表記

数値タイプ	PICTURE および USAGE 文節と オプションの SIGN 文節	値	内部表現
外部 10 進数	PIC S9999 DISPLAY	+ 1234	F1 F2 F3 C4
		- 1234	F1 F2 F3 D4
		1234	F1 F2 F3 C4
	PIC 9999 DISPLAY	1234	F1 F2 F3 F4
	PIC 9999 NATIONAL	1234	31 00 32 00 33 00 34 00
	PIC S9999 DISPLAY SIGN LEADING	+ 1234	C1 F2 F3 F4
		- 1234	D1 F2 F3 F4
	PIC S9999 DISPLAY SIGN LEADING SEPARATE	+ 1234	4E F1 F2 F3 F4
		- 1234	60 F1 F2 F3 F4
	PIC S9999 DISPLAY SIGN TRAILING SEPARATE	+ 1234	F1 F2 F3 F4 4E
		- 1234	F1 F2 F3 F4 60
	PIC S9999 NATIONAL SIGN LEADING SEPARATE	+ 1234	2B 00 31 00 32 00 33 00 34 00
		- 1234	2D 00 31 00 32 00 33 00 34 00
	PIC S9999 NATIONAL SIGN TRAILING SEPARATE	+ 1234	31 00 32 00 33 00 34 00 2B 00
		- 1234	31 00 32 00 33 00 34 00 2D 00
2 進数	PIC S9999 BINARY PIC S9999 COMP PIC S9999 COMP-4	+ 1234	04 D2
		- 1234	FB 2E
	PIC S9999 COMP-5	+ 12345 ¹	39 30
		- 12345 ¹	C7 CF
	PIC 9999 BINARY PIC 9999 COMP PIC 9999 COMP-4	1234	04 D2
	PIC 9999 COMP-5	60000 ¹	60 EA
内部 10 進数	PIC S9999 PACKED-DECIMAL PIC S9999 COMP-3	+ 1234	01 23 4C
		- 1234	01 23 4D
	PIC 9999 PACKED-DECIMAL PIC 9999 COMP-3	1234	01 23 4C

表 5. BINARY(S390)、CHAR(EBCDIC)、および FLOAT(HEX) が有効である場合の数値項目の内部表記 (続き)

数値タイプ	PICTURE および USAGE 文節とオプションの SIGN 文節	値	内部表現
内部浮動小数点	COMP-1	+ 1234	43 4D 20 00
		- 1234	C3 4D 20 00
	COMP-2	+ 1234	43 4D 20 00 00 00 00 00
		- 1234	C3 4D 20 00 00 00 00 00
外部浮動小数点	PIC +9(2).9(2)E+99 DISPLAY	+ 12.34E+02	4E F1 F2 4B F3 F4 C5 4E F0 F2
		- 12.34E+02	60 F1 F2 4B F3 F4 C5 4E F0 F2
	PIC +9(2).9(2)E+99 NATIONAL	+ 12.34E+02	2B 00 31 00 32 00 2E 00 33 00 34 00 45 00 2B 00 30 00 32 00
		- 12.34E+02	2D 00 31 00 32 00 2E 00 33 00 34 00 45 00 2B 00 30 00 32 00

1.

この例では、COMP-5 データ項目に含めることのできる値が、PICTURE 文節の 9 の数によって暗黙指定された値に制限されるのではなく、固有 2 進数表現 (2、4、または 8 バイト) の容量までの大きさの値を入れることができることを示しています。

データ形式の変換

異なるデータ形式を持つ項目との相互作用を含むプログラムをコーディングすると、コンパイラーがそれらの項目を、一時的 (比較および算術演算の場合) に、あるいは永続的 (MOVE、COMPUTE、またはその他の算術ステートメント内の受け取り側への割り当ての場合) に変換します。

可能であれば、コンパイラーは、直接的な 1 桁ずつの移動ではなく、数値を保持する移動を実行します。

変換には、通常、追加のストレージと処理時間が必要とされます。これは、演算が実行される前に、データが内部作業域に移動され、変換されるためです。さらに、結果を作業域に戻し、再度変換することが必要な場合もあります。

固定小数点データ形式 (外部 10 進数、パック 10 進数、または 2 進数) 間の変換は、ターゲット・フィールドがソース・オペランドのすべての桁を含むことができれば、精度が失われることなく完了します。

固定小数点データ形式と浮動小数点データ形式 (短精度浮動小数点、長精度浮動小数点、または外部浮動小数点) 間の変換では、精度が失われる可能性があります。このような変換は、固定小数点と浮動小数点の両方のオペランドが混在する算術計算時に起こります。

関連参照

『変換および精度』

53 ページの『ゾーン 10 進数およびパック 10 進数データのサイン表記』

変換および精度

一部の数値変換では、精度が失われる可能性があります。また、精度を保つ変換、丸めを生じさせる変換もあります。

固定小数点項目と外部浮動小数点項目は、どちらも 10 進数の特性を持つため、以下の例での固定小数点項目への参照は、特に明記しない限り、外部浮動小数点項目への参照を含みます。

コンパイラーが固定小数点形式を内部浮動小数点形式に変換するときには、基数 10 の固定小数点数は、内部で使用する数体系に変換されます。

コンパイラーが比較のために短精度形式を長精度形式に変換するときには、短精度数値の埋め込みにはゼロが使用されます。

精度が失われる変換

USAGE COMP-1 データ項目が 6 桁を超える固定小数点データ項目に移動される時には、固定小数点データ項目は有効数字を 6 個だけ受け取り、残りの桁は 0 になります。

精度を保つ変換

6 桁以下の固定小数点データ項目が USAGE COMP-1 データ項目に移動され、その後で固定小数点データ項目に戻される場合は、元の値がリカバリーされます。

USAGE COMP-1 データ項目が 6 桁以上の固定小数点データ項目に移動され、その後で USAGE COMP-1 データ項目に戻される場合は、元の値が復元されます。

15 桁以下の固定小数点データ項目が USAGE COMP-2 データ項目に移動され、その後で固定小数点データ項目に戻される場合は、元の値がリカバリーされます。

USAGE COMP-2 データ項目が 18 桁以上の固定小数点 (外部浮動小数点ではなく) データ項目に移動され、その後で USAGE COMP-2 データ項目に戻される場合は、元の値がリカバリーされます。

丸めを生じさせる変換

USAGE COMP-1 データ項目、USAGE COMP-2 データ項目、外部浮動小数点データ項目、または浮動小数点リテラルが固定小数点データ項目に移動されると、ターゲット・データ項目の低位桁で丸めが起こります。

USAGE COMP-2 データ項目が USAGE COMP-1 データ項目に移動されると、ターゲット・データ項目の低位桁で丸めが起こります。

固定小数点データ項目の PICTURE に外部浮動小数点データ項目の PICTURE よりも多くの桁位置が含まれている場合に、固定小数点データ項目が外部浮動小数点データ項目に移動されると、ターゲット・データ項目の低位桁で丸めが起こります。

関連概念

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

ゾーン 10 進数およびパック 10 進数データのサイン表記

サイン表記は、ゾーン 10 進数データおよび内部 10 進数データの処理や相互作用に影響します。

$X'sd'$ (ここで s はサイン表記であり、 d は数字を表します) が与えられた場合、SIGN IS SEPARATE 文節を持たない ゾーン 10 進数 (USAGE DISPLAY) データの有効なサイン表記は次のとおりです。

正: 0、1、2、3、8、9、A、および B

負: 4、5、6、7、C、D、E、および F

CHAR(NATIVE) コンパイラー・オプションが有効なときに内部生成される符号は、正および符号なしの場合は 3、負の場合は 7 になります。

CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションが有効なときに内部生成される符号は、正の場合は C、符号なしの場合は F、負の場合は D になります。

$X'ds'$ (d は数字、 s は符号表現を表す) の場合、内部 10 進数 (USAGE PACKED-DECIMAL) データの有効な符号表現は次のようになります。

正: A、C、E、および F

負: B および D

内部生成される符号は、正および符号なしの場合は C、負の場合は D になります。

符号なし内部 10 進数を使用するサイン表記は、COBOL for Windows とホスト COBOL とで異なります。ホスト COBOL は、符号なし内部 10 進数の記号として内部で F を生成します。

関連参照

299 ページの『ZWB』

624 ページの『データ表現』

非互換データの検査 (数値のクラス・テスト)

コンパイラーは、データ項目に指定された値が PICTURE および USAGE 文節に対して有効であると想定し、妥当性検査を行いません。データ項目を追加の処理で使用する前に、そのデータ項目の内容が PICTURE および USAGE 文節に適合していることを確認してください。

値がプログラムに渡され、それらの値に対する互換性のないデータ記述を持つ項目に割り当てられることがよくあります。例えば、非数値データが、数値として定義されたフィールドに移動されたり、渡されたりすることがあります。あるいは、符号付き数値が、符号なしとして定義されたフィールドに渡されることがあります。いずれの場合にも、受信フィールドには無効なデータが入れられます。項目にそのデータ記述と互換性のない値が与えられると、PROCEDURE DIVISION 内でのその項目への参照が未定義になり、結果が予測できなくなります。

数値のクラス・テストを使用して、データ妥当性検査を行うことができます。以下に、その例を示します。

```
Linkage Section.
```

```
01 Count-x Pic 999.
```

```
...
```

```
Procedure Division Using Count-x.
```

```
    If Count-x is numeric then display "Data is good"
```

数値のクラス・テストでは、データ項目の内容が、そのデータ項目の PICTURE および USAGE にとって有効な値のセットと照合されます。

算術の実行

幾つかの COBOL 言語機能 (COMPUTE、算術式、数値組み込み関数、数学呼び出し可能サービス、および日付呼び出し可能サービスを含む) のいずれかを使用して、算術を実行できます。どれを選択するかは、特定の必要を機能が満たすかどうかによって違ってきます。

ほとんどの一般的な算術計算の場合、COMPUTE ステートメントが適切です。数値リテラル、数値データ、または算術演算子を使用する必要がある場合は、算術式を使用できます。数値表現が許可されている場合には、数値組み込み関数を使用すれば時間を節約できます。

関連タスク

『COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用』

56 ページの『算術式の使用』

56 ページの『数値組み込み関数の使用』

COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用

ほとんどの算術計算では、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、および DIVIDE ステートメントではなく、COMPUTE ステートメントが使用されます。幾つかの個々の算術ステートメントの代わりに、1 つの COMPUTE ステートメントをコーディングするだけでよいことがよくあります。

COMPUTE ステートメントは、算術式の結果を 1 つまたは複数のデータ項目に割り当てます。

```
Compute z      = a + b / c ** d - e
Compute x y z = a + b / c ** d - e
```

COMPUTE 以外の算術ステートメントを使用した算術計算の中には、いっそう直感的なものがあります。以下に、その例を示します。

COMPUTE	等価の算術ステートメント
Compute Increment = Increment + 1	Add 1 to Increment
Compute Balance = Balance - Overdraft	Subtract Overdraft from Balance
Compute IncrementOne = IncrementOne + 1 Compute IncrementTwo = IncrementTwo + 1 Compute IncrementThree = IncrementThree + 1	Add 1 to IncrementOne, IncrementTwo, IncrementThree

さらに、剰余を処理したい除算については、DIVIDE ステートメント (REMAINDER 句を指定した) を使用したい場合もあります。REM 組み込み関数も、剰余を処理する機能を提供します。

算術計算を実行するとき、ゾーン 10 進数データ項目を使用するのと同様に、国別 10 進数データ項目をオペランドとして使用できます。また、表示浮動小数点オペランドを使用するのと同様に、国別浮動小数点データ項目を使用することもできます。

関連概念
60 ページの『固定小数点演算と浮動小数点演算の対比』
635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

関連タスク
41 ページの『数値データの定義』

算術式の使用

数値データ項目が許可されているステートメント内の多くの場所で、算術式を使用できます (ただし、どの場所でも使用できるわけではありません)。

例えば、算術式を比較条件の被比較数として使用することができます。

If (a + b) > (c - d + 5) Then. . .

算術式は、単一の数字リテラル、単一の数値データ項目、または単一の組み込み関数参照で構成することができます。また、これらの項目のいくつかを算術演算子で結合して構成することもできます。

算術演算子は、次の優先順位に従って評価されます。

表 6. 算術演算子の評価の順序

演算子	意味	評価の順序
単項 + または -	代数符号	1 番目
**	指数	2 番目
/ または *	除算または乗算	3 番目
2 項 + または -	加算または減算	最後

優先順位が同じレベルの演算子は、左から右へと評価されます。ただし、演算子とともに括弧を使用して、それらが評価される順序を変更することができます。括弧の中の式は、個々の演算子が評価される前に評価されます。必要であるかどうかにかかわらず、括弧を使用するとプログラムが読みやすくなります。

関連概念
60 ページの『固定小数点演算と浮動小数点演算の対比』
635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

数字組み込み関数の使用

数字組み込み関数は、数式を使用できる場所でのみ使用することができます。これらの関数を使用すると、時間の節約に役立ちます。これは、これらの関数を取り扱う多種類の一般的な計算をコーディングする必要がなくなるためです。

数字組み込み関数は、符号付き数値を戻し、これらは一時数値データ項目として扱われます。

数字関数は、以下のカテゴリーに分類されます。

整数 整数を戻すもの。

浮動小数点

長精度 (64 ビット) または拡張精度 (80 ビット) の浮動小数点値を戻すもの (これは、デフォルト・オプション ARITH(COMPAT) を使用してコンパイルするか、ARITH(EXTEND) を使用してコンパイルするかによって決まります)。

混合 引数によって、整数、浮動小数点値、または小数部の桁がある固定小数点数を戻すもの。

組み込み関数を使用すると、次の表に概説されているようなさまざまな種類の算術演算を実行することができます。

表 7. 数字組み込み関数

数値処理	日時	金融	数学	統計
LENGTH MAX MIN NUMVAL NUMVAL-C ORD-MAX ORD-MIN	CURRENT-DATE DATE-OF-INTEGER DATE-TO-YYYYMMDD DATEVAL DAY-OF-INTEGER DAY-TO-YYYYDDD INTEGER-OF-DATE INTEGER-OF-DAY UNDATE WHEN-COMPILED YEAR-TO-YYYY YEARWINDOW	ANNUITY PRESENT-VALUE	ACOS ASIN ATAN COS FACTORIAL INTEGER INTEGER-PART LOG LOG10 MOD REM SIN SQRT SUM TAN	MEAN MEDIAN MIDRANGE RANDOM RANGE STANDARD-DEVIATION VARIANCE

58 ページの『例: 数字組み込み関数』

ある関数を別の関数の引数として参照することができます。ネストされた関数は、外側の関数からは独立して評価されます。(ただし、コンパイラーが混合関数を固定小数点命令と浮動小数点命令のどちらを使用して評価すべきかを判別するときは例外です。)

算術式を数字関数への引数としてネストすることもできます。例えば、次のステートメントで関数引数は 3 つ (a、b、および算術式 (c / d)) あります。

Compute x = Function Sum(a b (c / d))

ALL 添え字を使用すると、あるテーブル (または配列) のすべてのエレメントを関数の引数として参照することができます。

また、整数タイプの特種レジスターは、整数の引数を使用できる場所であればどこでも引数として使用することができます。

関連概念

60 ページの『固定小数点演算と浮動小数点演算の対比』

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

関連参照

252 ページの『ARITH』

例: 数字組み込み関数

以下の例と付随する説明では、それぞれのカテゴリーごとに組み込み関数を示します。

以下の例がゾーン 10 進数データ項目を示している場合、代わりに国別 10 進数項目を使用できます。(ただし、符号付き国別 10 進数項目の場合、SIGN SEPARATE 文節が有効でなければなりません。)

一般数値処理

2 つの価格 (ドル記号付きの英数字項目として以下に示されています) のうちの最大値を見つけ、その値を出力レコードの数値フィールドに入れ、それから出力レコードの長さを判別したいとしましょう。そのためには、NUMVAL-C (英数字または国別リテラルあるいは英数字または国別データ項目の、数値を戻す関数)、および MAX 関数と LENGTH 関数を使用できます。

```
01 X                      Pic 9(2).
01 Price1                  Pic x(8)  Value "$8000".
01 Price2                  Pic x(8)  Value "$2000".
01 Output-Record.
   05 Product-Name        Pic x(20).
   05 Product-Number      Pic 9(9).
   05 Product-Price       Pic 9(6).
...
Procedure Division.
  Compute Product-Price =
    Function Max (Function Numval-C(Price1) Function Numval-C(Price2))
  Compute X = Function Length(Output-Record)
```

さらに、Product-Name の内容が大文字になるようにするために、次のステートメントを使用することができます。

```
Move Function Upper-case (Product-Name) to Product-Name
```

日時

次の例は、今日から 90 日後の満期日を計算する方法を示しています。

CURRENT-DATE 関数から戻される最初の 8 文字は、日付を 4 桁の年、2 桁の月、および 2 桁の日という形式 (YYYYMMDD) で表します。この日付がその整数値に変換されます。そのあと、この値に 90 が追加され、整数が YYYYMMDD 形式に再度変換されます。

```
01 YYYYMMDD              Pic 9(8).
01 Integer-Form          Pic S9(9).
...
  Move Function Current-Date(1:8) to YYYYMMDD
  Compute Integer-Form = Function Integer-of-Date(YYYYMMDD)
  Add 90 to Integer-Form
  Compute YYYYMMDD = Function Date-of-Integer(Integer-Form)
  Display 'Due Date: ' YYYYMMDD
```

金融

ビジネス投資の判断では、計画された投資の利益率を評価するために、予期される将来の現金流入の現在価格を計算することがしばしば必要になります。将来の特定の時期に受け取ることが期待される金額の現在価格は、今日特定の利率で投資された場合に、累積されてその将来の金額になるであろう金額です。

例えば、計画された \$1,000 の投資で、次の 3 年間にわたり、それぞれ年 1 回の支払いで \$100、\$200、および \$300 の支払いの流れになるとします。次の COBOL ステートメントは、10% の利率でこれらの現金流入の現在の値を計算する方法を示しています。

```
01 Series-Amt1      Pic 9(9)V99      Value 100.
01 Series-Amt2      Pic 9(9)V99      Value 200.
01 Series-Amt3      Pic 9(9)V99      Value 300.
01 Discount-Rate    Pic S9(2)V9(6)   Value .10.
01 Todays-Value     Pic 9(9)V99.
. . .
    Compute Todays-Value =
        Function
            Present-Value(Discount-Rate Series-Amt1 Series-Amt2 Series-Amt3)
```

ANNUITY 関数は、ローンの元金および利息を返済するために必要な分割払いの支払金（年賦金）の金額を判断することが必要とされるビジネス問題で使用できます。一連の支払いの特徴は、各期間の長さ、期間ごとの金額および利率が一定であるということです。次の例は、\$15,000 のローンを 12% の年利で 3 年間で返済するのに必要な月賦金額を計算する方法を示しています（36 か月払い、1 か月当たりの利率 = .12/12）。

```
01 Loan             Pic 9(9)V99.
01 Payment          Pic 9(9)V99.
01 Interest         Pic 9(9)V99.
01 Number-Periods   Pic 99.
. . .
    Compute Loan = 15000
    Compute Interest = .12
    Compute Number-Periods = 36
    Compute Payment =
        Loan * Function Annuity((Interest / 12) Number-Periods)
```

数学

次の COBOL ステートメントでは、組み込み関数をネストし、算術式を引数として使用し、前の複雑な計算を簡単に行う方法を示しています。

```
Compute Z = Function Log(Function Sqrt (2 * X + 1)) + Function Rem(X 2)
```

ここでは、組み込み関数 REM (REMAINDER 文節を指定した DIVIDE ステートメントではなく) が、X を 2 で割った剰余を加数に戻します。

統計

組み込み関数を使用すると、統計情報の計算が簡単になります。さまざまな市民税を分析していて、平均値、中央値、および範囲（最高税額と最低税額の差）を計算したいとします。

```
01 Tax-S            Pic 99v999 value .045.
01 Tax-T            Pic 99v999 value .02.
01 Tax-W            Pic 99v999 value .035.
01 Tax-B            Pic 99v999 value .03.
01 Ave-Tax          Pic 99v999.
```

```

01 Median-Tax      Pic 99v999.
01 Tax-Range       Pic 99v999.
. . .
Compute Ave-Tax    = Function Mean  (Tax-S Tax-T Tax-W Tax-B)
Compute Median-Tax = Function Median (Tax-S Tax-T Tax-W Tax-B)
Compute Tax-Range  = Function Range  (Tax-S Tax-T Tax-W Tax-B)

```

関連タスク

113 ページの『数値への変換 (NUMVAL、NUMVAL-C)』

固定小数点演算と浮動小数点演算の対比

プログラム内の算術計算では (それが算術ステートメント、組み込み関数、式、または相互にネストされたこれらの組み合わせのいずれであっても)、算術計算のコーディング方法によって、浮動小数点演算になるか、固定小数点演算になるかが決まります。

プログラム内の多くのステートメントには、算術計算が伴うことがあります。例えば、以下のそれぞれの COBOL ステートメントには、ある種の算術計算が必要です。

- 一般算術計算

```

compute report-matrix-col = (emp-count ** .5) + 1
add report-matrix-min to report-matrix-max giving report-matrix-tot

```

- 式および関数

```

compute report-matrix-col = function sqrt(emp-count) + 1
compute whole-hours       = function integer-part((average-hours) + 1)

```

- 算術比較

```

if report-matrix-col <      function sqrt(emp-count) + 1
if whole-hours          not = function integer-part((average-hours) + 1)

```

浮動小数点計算

通常、算術計算に以下のいずれかの特性がある場合、それは浮動小数点演算で評価されます。

- オペランドまたは結果フィールドが浮動小数点である。

オペランドは、浮動小数点リテラルとしてコーディングするか、あるいは USAGE COMP-1、USAGE COMP-2、または外部浮動小数点 (浮動小数点 PICTURE を指定した USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL) として定義されたデータ項目としてコーディングした場合に浮動小数点になります。

オペランドがネストされた算術式である場合、または数字組み込み関数への参照である場合、そのオペランドは次の条件のいずれかが当てはまるとき、浮動小数点演算になります。

- 算術式内の引数が浮動小数点になる。
- 関数が浮動小数点関数である。
- 関数が 1 つまたは複数の浮動小数点引数を持つ混合関数である。

- 指数に小数部の桁が含まれている。

これは、小数部の桁が含まれるリテラルを使用するか、小数部の桁が含まれる PICTURE を項目に与えるか、あるいは結果が小数部の桁を持つ算術式または関数を使用する場合に当てはまります。

算術式または数字関数は、オペランドまたは引数 (除数および指数を除く) に小数部の桁がある場合に、小数部の桁がある結果をもたらします。

固定小数点計算

通常、算術演算に上記の浮動小数点についての特性がない場合、コンパイラーはそれを固定小数点演算で評価します。すなわち、算術計算が固定小数点として処理されるのは、すべてのオペランドが固定小数点で、結果フィールドが固定小数点と定義されており、しかもどの指数も小数部の桁がある値を表さない場合だけです。また、ネストされた算術式および関数参照も、固定小数点値を表さなければなりません。

算術比較 (比較条件)

関係演算子を使用して数式を比較する場合、数式 (それらがデータ項目、算術式、関数参照、またはこれらの組み合わせのいずれであっても) は、計算全体のコンテキストでは、被比較数です。すなわち、それぞれの属性が互いの計算に影響を与える可能性があり、両方の式が固定小数点で評価されるか、または両方の式が浮動小数点で評価されることになります。これは、簡略比較にも当てはまります (比較の中で一方の被比較数が明示的に指定されない場合でも)。以下に、その例を示します。

```
if (a + d) = (b + e) and c
```

このステートメントには、 $(a + d) = (b + e)$ と $(a + d) = c$ の 2 つの比較があります。 $(a + d)$ は、2 番目の比較では明示的に指定されていませんが、その比較の被比較数です。したがって、 c の属性が $(a + d)$ の計算に影響を与える可能性があります。

比較演算 (および比較の中にネストされた算術式の評価) は、一方の被比較数が浮動小数点値であるかまたは結果が浮動小数点値になる場合、コンパイラーによって浮動小数点演算として処理されます。

比較演算 (および比較の中にネストされた算術式の評価) は、両方の被比較数が固定小数点値であるかまたは結果が固定小数点値になる場合、コンパイラーによって固定小数点演算として処理されます。

暗黙の比較 (関係演算子を使用されない) は、単位として扱われません。しかし、2 つの被比較数は、浮動小数点演算または固定小数点演算における評価に関しては別々に扱われます。以下の例では、実際には、それぞれの属性に関係なく評価され、その後で相互に比較される 5 つの算術式があります。

```
evaluate (a + d)
  when (b + e) thru c
  when (f / g) thru (h * i)
  . . .
end-evaluate
```

62 ページの『例: 固定小数点計算および浮動小数点計算』

関連参照

644 ページの『非算術ステートメントの算術式』

例: 固定小数点計算および浮動小数点計算

次の例は、固定小数点演算および浮動小数点演算を使用して評価されるステートメントを示しています。

従業員表のデータ項目を次のように定義すると仮定します。

```
01 employee-table.
   05 emp-count          pic 9(4).
   05 employee-record occurs 1 to 1000 times
       depending on emp-count.
       10 hours          pic +9(5)e+99.
. . .
01 report-matrix-col      pic 9(3).
01 report-matrix-min      pic 9(3).
01 report-matrix-max      pic 9(3).
01 report-matrix-tot      pic 9(3).
01 average-hours         pic 9(3)v9.
01 whole-hours           pic 9(4).
```

以下のステートメントは、浮動小数点演算を使用して評価されます。

```
compute report-matrix-col = (emp-count ** .5) + 1
compute report-matrix-col = function sqrt(emp-count) + 1
if report-matrix-tot < function sqrt(emp-count) + 1
```

以下のステートメントは、固定小数点演算を使用して評価されます。

```
add report-matrix-min to report-matrix-max giving report-matrix-tot
compute report-matrix-max =
    function max(report-matrix-max report-matrix-tot)
if whole-hours not = function integer-part((average-hours) + 1)
```

通貨記号の使用

多くのプログラムでは金融情報を処理する必要があり、それらの情報を適切な通貨記号で出力表示する必要があります。COBOL 通貨サポート (およびご使用のプリンターやディスプレイ装置に合ったコード・ページ) を使用するなら、プログラムで幾つかの通貨記号を使用できます。

以下の記号の 1 つ以上を使用できます。

- ドル記号 (\$) のような記号
- 複数文字からなる通貨記号 (USD または EUR など)
- 欧州経済通貨同盟 (EMU) によって確立されているユーロ記号

金融情報を表示するための記号を指定するには、それらの記号に関連付けられる PICTURE 文字を指定した CURRENCY SIGN 文節を (CONFIGURATION SECTION の SPECIAL-NAMES 段落の中で) 使用してください。次の例で、PICTURE 文字 \$ は、通貨記号として \$US を使用することを示しています。

```
    Currency Sign is "$US" with Picture Symbol "$".
. . .
77 Invoice-Amount      Pic $$,$$9.99.
. . .
    Display "Invoice amount is " Invoice-Amount.
```

この例で、Invoice-Amount に 1500.00 が含まれている場合は、次のように出力されます。

```
Invoice amount is $US1,500.00
```

プログラム内で複数の CURRENCY SIGN 文節を使用することにより、複数の通貨記号を表示することができます。

16 進リテラルを使用して通貨記号の値を表すことができます。ソース・プログラムのデータ入力方法では、対象とする文字を簡単に入力できない場合、16 進数リテラルを使用すると役立つことがあります。次の例は、16 進値 X'D5' を通貨記号として使用する方法を示しています。

```
Currency Sign X'D5' with Picture Symbol 'U'.  
01 Deposit-Amount Pic UUUUU9.99.
```

キーボード上にユーロ記号に相当する文字がない場合は、それを CURRENCY SIGN 文節で 16 進値として指定する必要があります。

ユーロ記号の 16 進値は、次の表に示すように、使用されているコード・ページに応じて、X'80' または X'88' のいずれかです。

表 8. ユーロ記号の 16 進値

コード・ページ	ユーロ記号
1250 (Latin 2)	X'80'
1251 (キリル文字)	X'88'
1252 (Latin 1)	X'80'
1253 (ギリシャ語)	X'80'
1254 (トルコ語)	X'80'
1255 (ヘブライ語)	X'80'
1256 (アラビア語)	X'80'
1257 (バルト語)	X'80'
874 (タイ語)	X'80'

『例: 複数の通貨符号』

例: 複数の通貨符号

次の例は、ユーロ通貨 (EUR) とスイスのフラン (CHF) の両方で値を表示する方法を示すものです。

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
PROGRAM-ID. EuroSamp.  
Environment Division.  
Configuration Section.  
Special-Names.  
    Currency Sign is "CHF " with Picture Symbol "F"  
    Currency Sign is "EUR " with Picture Symbol "U".  
Data Division.  
Working-Storage Section.  
01 Deposit-in-Euro Pic S9999V99 Value 8000.00.  
01 Deposit-in-CHF Pic S99999V99.  
01 Deposit-Report.  
    02 Report-in-Franc Pic -FFFFF9.99.
```

```

      02 Report-in-Euro      Pic -UUUUU9.99.
01 EUR-to-CHF-Conv-Rate  Pic 9V99999 Value 1.53893.
. . .
PROCEDURE DIVISION.
Report-Deposit-in-CHF-and-EUR.
  Move Deposit-in-Euro to Report-in-Euro
  Compute Deposit-in-CHF Rounded
    = Deposit-in-Euro * EUR-to-CHF-Conv-Rate
  On Size Error
    Perform Conversion-Error
  Not On Size Error
    Move Deposit-in-CHF to Report-in-Franc
    Display "Deposit in euro  = " Report-in-Euro
    Display "Deposit in franc = " Report-in-Franc
  End-Compute
  Goback.
Conversion-Error.
  Display "Conversion error from EUR to CHF"
  Display "Euro value: " Report-in-Euro.

```

上記の例は、次のような表示出力を作成します。

```

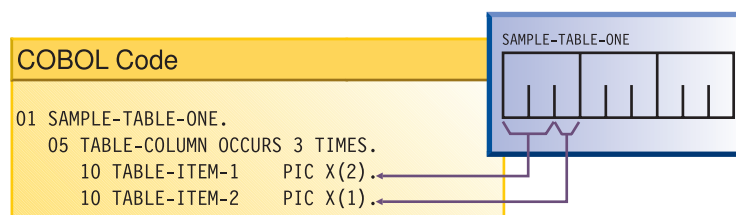
Deposit in euro  = EUR 8000.00
Deposit in franc = CHF 12311.44

```

この例で使用されている交換レートは例として使われているだけです。

第 4 章 テーブルの処理

テーブル は、合計額や月平均額のような同じデータ記述を持つデータ項目の集合です。テーブル名と、テーブル・エレメント と呼ばれる従属項目から構成されます。テーブルは、配列に相当する COBOL 用語です。



上記の例では、SAMPLE-TABLE-ONE が、テーブルを含むグループ項目です。TABLE-COLUMN は、3 回出現する 1 次元テーブルのテーブル・エレメントを指しています。

反復項目を別個の連続する項目として DATA DIVISION に定義するのではなく、DATA DIVISION 記入項目の OCCURS 文節を使用してテーブルを定義することができます。この方法には、次のような利点があります。

- コードは、項目 (テーブル・エレメント) の単位を明確に示します。
- 添え字と指標を使用してテーブル・エレメントを参照することができます。
- データ項目の反復が容易です。

テーブルは、プログラムの処理速度、特にレコードを探索する速度を高めるうえで大切なものです。

関連タスク

- 67 ページの『テーブルのネスト』
- 『テーブルの定義 (OCCURS)』
- 69 ページの『テーブル内の項目の参照』
- 71 ページの『テーブルに値を入れる方法』
- 77 ページの『可変長テーブルの作成 (DEPENDENT ON)』
- 80 ページの『テーブルの探索』
- 83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』
- 600 ページの『テーブルの効率的処理』

テーブルの定義 (OCCURS)

テーブルをコーディングするには、テーブルにグループ名を与え、 n 回繰り返される従属項目 (テーブル・エレメント) を定義します。

```
01 table-name.
  05 element-name OCCURS n TIMES.
  . . . (subordinate items of the table element)
```

上の例で、table-name は 英数字グループ項目の名前です。 テーブル・エレメント定義 (OCCURS 文節が組み込まれている) は、テーブルを含むグループ項目に従属しています。 OCCURS 文節をレベル 01 記述で指定することはできません。

テーブルに入れるのが Unicode (UTF-16) データのみであり、テーブルを含んでいるグループ項目がほとんどの操作で基本カテゴリー国別項目と同様に振る舞うようにさせたい場合には、グループ項目に GROUP-USAGE NATIONAL 文節をコーディングできます。

```
01 table-nameN Group-Usage National.  
   05 element-nameN OCCURS m TIMES.  
       10 elementN1 Pic nn.  
       10 elementN2 Pic S99 Sign Is Leading, Separate.  
       . . .
```

国別グループに従属する基本項目は、明示的または暗黙的に USAGE NATIONAL として記述する必要があります。また符合付きの従属数値データ項目は、暗黙的または明示的に SIGN IS SEPARATE 文節で記述されている必要があります。

2 次元から 7 次元までのテーブルを作成するには、ネストされた OCCURS 文節を使用してください。

可変長テーブルを作成するには、OCCURS 文節に DEPENDING ON 句をコーディングしてください。

テーブルの 1 つ以上のキー・フィールドの値に基づいて、テーブル・エレメントが昇順または降順に配列されるよう指定するには、OCCURS 文節の ASCENDING または DESCENDING KEY 句 (あるいはその両方) をコーディングしてください。キーの名前は重要度の高い順に指定します。キーは、クラス英字、英数字、DBCS、国別、または数値にすることができます。(USAGE NATIONAL を持っている場合、キーはカテゴリー国別にすることができます。あるいは国別編集、数字編集、国別 10 進数、または国別浮動小数点の項目にすることもできます。)

テーブルの二分探索 (SEARCH ALL) を行うには、OCCURS 文節の ASCENDING または DESCENDING KEY 句をコーディングする必要があります。

83 ページの『例: 二分探索』

関連概念

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

67 ページの『テーブルのネスト』

69 ページの『テーブル内の項目の参照』

71 ページの『テーブルに値を入れる方法』

77 ページの『可変長テーブルの作成 (DEPENDING ON)』

181 ページの『国別グループの使用』

82 ページの『二分探索 (SEARCH ALL)』

41 ページの『数値データの定義』

関連参照

OCCURS 文節 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

SIGN 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

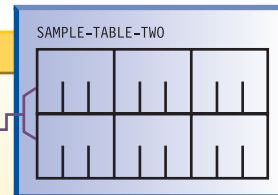
ASCENDING KEY 句と DESCENDING KEY 句 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

テーブルのネスト

2 次元テーブルを作成するには、ある 1 次元テーブルのそれぞれのオカレンス (出現) の中で別の 1 次元テーブルを定義します。

COBOL Code

```
01 SAMPLE-TABLE-TWO.  
  05 TABLE-ROW OCCURS 2 TIMES.  
    10 TABLE-COLUMN OCCURS 3 TIMES.  
      15 TABLE-ITEM-1 PIC X(2).  
      15 TABLE-ITEM-2 PIC X(1).
```

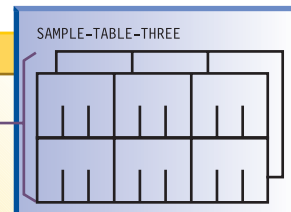


例えば、上の SAMPLE-TABLE-TWO の TABLE-ROW は、2 回出現する 1 次元テーブルの要素です。TABLE-COLUMN は、2 次元テーブルの要素で、TABLE-ROW のそれぞれのオカレンスで 3 回出現します。

3 次元テーブルを作成するには、ある 1 次元テーブル (それ自体が別の 1 次元テーブルのそれぞれのオカレンスに含まれている) のそれぞれのオカレンスの中で別の 1 次元テーブルを定義します。以下に、その例を示します。

COBOL Code

```
01 SAMPLE-TABLE-THREE.  
  05 TABLE-DEPTH OCCURS 2 TIMES.  
    10 TABLE-ROW OCCURS 2 TIMES.  
      15 TABLE-COLUMN OCCURS 3 TIMES.  
        20 TABLE-ITEM-1 PIC X(2).  
        20 TABLE-ITEM-2 PIC X(1).
```



SAMPLE-TABLE-THREE の TABLE-DEPTH は 1 次元テーブルの要素で、2 回出現します。TABLE-ROW は 2 次元テーブルの要素で、TABLE-DEPTH のそれぞれのオカレンスで 2 回出現します。TABLE-COLUMN は 3 次元テーブルの要素で、TABLE-ROW のそれぞれのオカレンスで 3 回出現します。

2 次元テーブルでは、2 つの添え字が行番号と列番号に対応します。3 次元テーブルでは、3 つの添え字が深さ番号、列番号、および行番号に対応します。

68 ページの『例: 添え字付け』

68 ページの『例: 指標付け』

関連タスク

65 ページの『テーブルの定義 (OCCURS)』

69 ページの『テーブル内の項目の参照』

71 ページの『テーブルに値を入れる方法』

77 ページの『可変長テーブルの作成 (DEPENDENT ON)』

80 ページの『テーブルの探索』
83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』
600 ページの『テーブルの効率的処理』

関連参照

OCCURS 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: 添え字付け

以下の例は、リテラル添え字を使用する `SAMPLE-TABLE-THREE` への有効参照を示しています。2 番目の例では、スペースは必須です。

```
TABLE-COLUMN (2, 2, 1)
TABLE-COLUMN (2 2 1)
```

いずれのテーブル参照でも、最初の値 (2) は `TABLE-DEPTH` 内の 2 番目のオカレンスを参照し、2 つ目の値 (2) は `TABLE-ROW` 内の 2 番目のオカレンスを参照し、3 つ目の値 (1) は `TABLE-COLUMN` 内の 1 番目のオカレンスを参照します。

次の `SAMPLE-TABLE-TWO` への参照では、変数添え字が使用されています。SUB1 と SUB2 が、テーブルの範囲内の正の整数値を含むデータ名であれば、この参照は有効になります。

```
TABLE-COLUMN (SUB1 SUB2)
```

関連タスク

69 ページの『添え字付け』

例: 指標付け

次の例は、指標で参照されるエレメントへの変位がどのように計算されるかを示しています。

次の 3 次元テーブル `SAMPLE-TABLE-FOUR` を考えてみてください。

```
01 SAMPLe-TABLE-FOUR
   05 TABLE-DEPTH OCCURS 3 TIMES INDEXED BY INX-A.
      10 TABLE-ROW OCCURS 4 TIMES INDEXED BY INX-B.
         15 TABLE-COLUMN OCCURS 8 TIMES INDEXED BY INX-C PIC X(8).
```

`SAMPLE-TABLE-FOUR` に対して次の相対指標付け参照をコーディングするとします。

```
TABLE-COLUMN (INX-A + 1, INX-B + 2, INX-C - 1)
```

この参照によって、`TABLE-COLUMN` への変位が次のように計算されます。

```
(contents of INX-A) + (256 * 1)
+ (contents of INX-B) + (64 * 2)
+ (contents of INX-C) - (8 * 1)
```

この計算は、次のエレメント長に基づいています。

- `TABLE-DEPTH` のそれぞれのオカレンスは 256 バイトの長さです (4 * 8 * 8)。
- `TABLE-ROW` のそれぞれのオカレンスは 64 バイトの長さです (8 * 8)。
- `TABLE-COLUMN` のそれぞれのオカレンスは 8 バイトの長さです。

関連タスク

70 ページの『索引付け』

テーブル内の項目の参照

テーブル・エレメントは集合名を持ちますが、その中の個々の項目は固有のデータ名を持っていません。

項目を参照するには、次の 3 つの方法のいずれかを使用できます。

- テーブル・エレメントのデータ名と一緒に、そのオカレンス番号 (添え字 と呼ばれる) を括弧で囲んで使用する。この手法は、添え字付け と呼ばれます。
- テーブル・エレメントのデータ名と一緒に、項目を位置指定するために (テーブルの先頭からの変位) テーブルのアドレスに追加される値 (指標 と呼ばれる) を使用する。この手法は、指標付け、または指標名を使用する添え字付けと呼ばれます。
- 添え字と指標の両方を使用する。

関連タスク

『添え字付け』

70 ページの『索引付け』

添え字付け

可能な一番小さい添え字値は 1 であり、これはテーブル・エレメントの最初に現れるものを指します。1 次元テーブルでは、添え字は行番号に対応します。

添え字としてはリテラルやデータ名を使用できます。リテラルの添え字を持つデータ項目が固定長である場合は、コンパイラーがそのデータ項目の位置を解決します。

データ名を変数添え字として使用する場合、データ名を基本数値整数として記述する必要があります。最も効率的な形式は、PICTURE サイズが 5 桁よりも少ない COMPUTATIONAL (COMP) です。添え字として使用されるデータ名に添え字を付けることはできません。アプリケーションのために生成されるコードが、実行時に変数添え字の位置を解決します。

リテラルまたは変数の添え字を、指定した整数ぶんだけ増分または減分することができます。以下に、その例を示します。

TABLE-COLUMN (SUB1 - 1, SUB2 + 3)

テーブル・エレメント全体ではなく、その一部を変更することができます。そのためには、変更するサブストリングの文字位置と長さを参照します。以下に、その例を示します。

```
01 ANY-TABLE.  
   05 TABLE-ELEMENT    PIC X(10)  
      OCCURS 3 TIMES     VALUE "ABCDEFGHIJ".  
   . . .  
   MOVE "???" TO TABLE-ELEMENT (1) (3 : 2).
```

上の例の MOVE ステートメントは、ストリング「??」を、文字位置 3 から始めて 2 の長さだけ、テーブル・エレメント 1 に移動します。

ANY-TABLE 変更前: ABCDEFGHIJ ABCDEFGHIJ ABCDEFGHIJ	ANY-TABLE 変更後: AB??EFGHIJ ABCDEFGHIJ ABCDEFGHIJ
---	---

68 ページの『例: 添え字付け』

関連タスク

『索引付け』

71 ページの『テーブルに値を入れる方法』

80 ページの『テーブルの探索』

600 ページの『テーブルの効率的処理』

索引付け

指標名を識別する OCCURS 文節の INDEXED BY 句を使用して、指標を作成します。

例えば、以下のコードにおける INX-A は指標名です。

```
05 TABLE-ITEM PIC X(8)
   OCCURS 10 INDEXED BY INX-A.
```

コンパイラーは、指標に含まれる値を、オカレンス番号 (添え字) から 1 引いた値にテーブル・エレメントの長さを掛けた値として計算します。したがって、TABLE-ITEM の 5 回目のオカレンスの場合、INX-A に含まれる 2 進値は、 $(5 - 1) * 8$ 、すなわち 32 です。

指標名を使用して別のテーブルを参照できるのは、両方のテーブル記述のテーブル・エレメントの数が同じであり、テーブル・エレメントが同じ長さである場合のみです。

USAGE IS INDEX 文節を使用して指標データ項目を作成でき、また任意のテーブルで指標データ項目を使用できます。例えば、以下のコードの INX-B は指標データ項目です。

```
77 INX-B  USAGE IS INDEX.
...
  SET INX-A TO 10
  SET INX-B TO INX-A.
  PERFORM VARYING INX-A FROM 1 BY 1 UNTIL INX-A > INX-B
    DISPLAY TABLE-ITEM (INX-A)
  ...
END-PERFORM.
```

上のテーブル TABLE-ITEM を全探索するのに、指標名 INX-A を使用します。テーブルの最後のエレメントの指標を保持するには、指標データ項目 INX-B を使用します。このタイプのコーディングの利点は、テーブル・エレメントのオフセットの計算が最小限で済み、UNTIL 条件の変換が不要であることです。

上のステートメント SET INX-B TO INX-A のように、SET ステートメントを使用すれば、指標名に保管した値を指標データ項目に割り当てることができます。例えば、レコードを可変長テーブルにロードするとき、最後のレコードの指標値を、USAGE IS INDEX として定義されたデータ項目に保管できます。そのあと、現行の指

標値を最後のレコードの指標値と比較することによって、テーブルの終わりをテストすることができます。この手法は、テーブルを初めから終わりまで検索したり、テーブルを処理したりする場合に有用です。

基本整数データ項目またはゼロ以外の整数リテラルによって指標名を増分したり、減分したりすることができます。例えば、次のとおりです。

```
SET INX-A DOWN BY 3
```

整数は出現回数を表します。索引に対して加算または減算される前に、指標値に変換されます。

SET、PERFORM VARYING、または SEARCH ALL ステートメントを使用して、指標名を初期化してください。そのあと、索引名を SEARCH ステートメントまたは関係条件ステートメントでも使用できるようになります。値を変更するには、PERFORM、SEARCH、または SET ステートメントを使用してください。

物理的変位を比較するので、SEARCH および SET ステートメントでのみ、あるいは指標または他の指標データ項目との比較にのみ、指標データ項目を直接使用できません。指標データ項目を添え字または指標として使用することはできません。

68 ページの『例: 指標付け』

関連タスク

69 ページの『添え字付け』

『テーブルに値を入れる方法』

80 ページの『テーブルの探索』

83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』

600 ページの『テーブルの効率的処理』

関連参照

INDEXED BY 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

INDEX 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

SET ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

テーブルに値を入れる方法

テーブルを定義するときに、テーブルの動的ロード、INITIALIZE ステートメントによるテーブルの初期化、または VALUE 文節による値の割り当てによって、値をテーブルに入れることができます。

関連タスク

72 ページの『テーブルの動的なロード』

79 ページの『可変長テーブルのロード』

72 ページの『テーブルの初期化 (INITIALIZE)』

73 ページの『テーブルの定義時の値の割り当て (VALUE)』

80 ページの『可変長テーブルへの値の割り当て』

テーブルの動的なロード

テーブルの初期値がプログラムの実行のたびに異なる場合は、初期値を指定せずにテーブルを定義することができます。代わりに、プログラムでテーブルを参照する前に、変更済みの値を動的にテーブルに読み込むことができます。

テーブルをロードするには、PERFORM ステートメントと添え字付けまたは索引付けのいずれかを使用してください。

データを読み取ってテーブルをロードするときは、データがテーブルに割り振られているスペースを超えないように確認してください。最大項目カウントには、名前付きの値（リテラルではなく）を使用してください。そうすれば、テーブルをより大きくする場合に、リテラルへのすべての参照を変更する代わりに、1 つの値を変更するだけで済みます。

75 ページの『例: PERFORM と添え字付け』

76 ページの『例: PERFORM および索引付け』

関連参照

VARYING 句を持つ PERFORM (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

テーブルの初期化 (INITIALIZE)

1 つ以上の INITIALIZE ステートメントをコーディングすることにより、テーブルをロードできます。

例えば、以下に示す TABLE-ONE という名前のテーブルのそれぞれの基本数値データ項目に値 3 を移動するには、次のステートメントをコーディングできます。

```
INITIALIZE TABLE-ONE REPLACING NUMERIC DATA BY 3.
```

文字「X」を、TABLE-ONE のそれぞれの基本英数字データ項目に移動するには、次のステートメントをコーディングできます。

```
INITIALIZE TABLE-ONE REPLACING ALPHANUMERIC DATA BY "X".
```

INITIALIZE ステートメントを使用してテーブルを初期化するとき、テーブルはグループ項目として（つまりグループ・セマンティクスを使用して）処理されます。グループ内の基本データ項目が認識されて処理されます。例えば、TABLE-ONE が、以下のように定義された英数字グループであるとしましょう。

```
01 TABLE-ONE.  
  02 Trans-out Occurs 20.  
    05 Trans-code Pic X Value "R".  
    05 Part-number Pic XX Value "13".  
    05 Trans-quan Pic 99 Value 10.  
    05 Price-fields.  
      10 Unit-price Pic 99V Value 50.  
      10 Discount Pic 99V Value 25.  
      10 Sales-Price Pic 999 Value 375.  
      . . .  
  Initialize TABLE-ONE Replacing Numeric Data By 3  
                                Alphanumeric Data By "X"
```

以下の表は、上記の INITIALIZE ステートメントの実行前および実行後に 12 個の 12 バイト・エレメント Trans-out(n) のそれぞれが含んでいる内容を示しています。

Trans-out(n) (実行前)	Trans-out(n) (実行後)
R13105025375	XXb030303003 ¹
1. 記号 <i>b</i> は、ブランク・スペースを表します。	

同様に INITIALIZE ステートメントを使用して、国別グループとして定義されたテーブルをロードできます。例えば、上に示す TABLE-ONE で GROUP-USAGE NATIONAL 文節を指定した場合で、Trans-code および Part-number の PICTURE 文節に X ではなく N が指定されている場合、以下のステートメントは、上記の INITIALIZE ステートメントと同じ効果を持つことになります。ただし、TABLE-ONE のデータは代わりに UTF-16 でエンコードされます。

```
Initialize TABLE-ONE Replacing Numeric Data By 3
                        National Data By N"X"
```

REPLACING NUMERIC 句は、浮動小数点データ項目も初期化します。

INITIALIZE ステートメントの REPLACING 句を同様に使用して、テーブル内の基本データ項目 ALPHABETIC、DBCS、ALPHANUMERIC-EDITED、NATIONAL-EDITED、および NUMERIC-EDITED すべてを初期化できます。

INITIALIZE ステートメントでは、値を可変長テーブル (OCCURS DEPENDING ON 文節を使用して定義されたもの) に割り当ててはできません。

28 ページの『例: データ項目の初期化』

関連タスク

31 ページの『構造の初期化 (INITIALIZE)』

『テーブルの定義時の値の割り当て (VALUE)』

80 ページの『可変長テーブルへの値の割り当て』

96 ページの『テーブルのループ処理』

24 ページの『データ項目とグループ項目の使用』

181 ページの『国別グループの使用』

関連参照

INITIALIZE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

テーブルの定義時の値の割り当て (VALUE)

テーブルに安定値 (日や月など) が入る場合、テーブルの定義時に特定の値を設定できます。

テーブル内の静的値は、次のいずれかの方法で設定します。

- 各テーブル項目を個別に初期化する。
- テーブル全体をグループ・レベルで初期化する。
- 特定のテーブル・エレメントのすべてのオカレンスを同じ値に初期化する。

関連タスク

74 ページの『それぞれのテーブル項目の個別の初期化』

74 ページの『グループ・レベルでのテーブルの初期化』

75 ページの『ある特定テーブル・エレメントのすべての出現の初期化』

31 ページの『構造の初期化 (INITIALIZE)』

それぞれのテーブル項目の個別の初期化

テーブルが小さい場合は、VALUE 文節を使用してそれぞれの項目の値を個別に設定できます。

下記のサンプル・コードに示す、次の技法を使用します。

1. テーブルに入れられる項目を含むレコード (以下の Error-Flag-Table など) を宣言します。
2. 各項目の初期値を VALUE 文節で設定します。
3. そのレコードをテーブルに入れるための REDEFINES 記入項目をコーディングします。

```
*****  
***          E R R O R   F L A G   T A B L E          ***  
*****  
01 Error-Flag-Table                                Value Spaces.  
   88 No-Errors                                    Value Spaces.  
      05 Type-Error                                Pic X.  
      05 Shift-Error                               Pic X.  
      05 Home-Code-Error                           Pic X.  
      05 Work-Code-Error                            Pic X.  
      05 Name-Error                                 Pic X.  
      05 Initials-Error                             Pic X.  
      05 Duplicate-Error                            Pic X.  
      05 Not-Found-Error                            Pic X.  
01 Filler Redefines Error-Flag-Table.  
   05 Error-Flag Occurs 8 Times  
      Indexed By Flag-Index                        Pic X.
```

上の例で、01 レベルの VALUE 文節は、それぞれのテーブル項目を同じ値に初期化します。代わりに、それぞれのテーブル項目に独自の VALUE 文節を記述して、その項目を別個の値に初期化することもできます。

もっと大きなテーブルを初期化する場合は、MOVE、PERFORM、または INITIALIZE ステートメントを使用します。

関連タスク

31 ページの『構造の初期化 (INITIALIZE)』

80 ページの『可変長テーブルへの値の割り当て』

関連参照

REDEFINES 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

OCCURS 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

グループ・レベルでのテーブルの初期化

英数字または国別グループ・データ項目をコーディングし、VALUE 文節でそれにテーブル全体の内容を割り当てます。次に、従属データ項目で、OCCURS 文節を使用して個々のテーブル項目を定義します。

以下の例の英数字グループ・データ項目 TABLE-ONE は、TABLE-TWO の 4 個のエレメントそれぞれを初期化する VALUE 文節を使用しています。


```

01 TABLE-ONE VALUE "1234".
05 TABLE-TWO OCCURS 4 TIMES PIC X.

```

以下の例の国別グループ・データ項目 Table-OneN は、従属データ項目 Table-TwoN の 3 個の要素それぞれを初期化する VALUE 文節を使用しています (要素のそれぞれは暗黙的に USAGE NATIONAL です)。英数字リテラルを使用する VALUE 文節 (以下に示されている) または国別リテラルを使用する VALUE 文節で国別グループ・データ項目を初期化できることに注意してください。

```

01 Table-OneN Group-Usage National Value "AB12CD34EF56".
05 Table-TwoN Occurs 3 Times Indexed By MyI.
10 ElementOneN Pic nn.
10 ElementTwoN Pic 99.

```

Table-OneN の初期化後に、ElementOneN(1) には NX"00410042" (「AB」の UTF-16 表現) が入り、国別 10 進数項目 ElementTwoN(1) には NX"00310032" (「12」の UTF-16 表現) が入ります。以下同様です。

関連参照

OCCURS 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

GROUP-USAGE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ある特定テーブル・要素のすべての出現の初期化

テーブル・要素のデータ記述の VALUE 文節を使用して、その要素のすべてのインスタンスを指定の値に初期化することができます。

```

01 T2.
05 T-OBJ PIC 9 VALUE 3.
05 T OCCURS 5 TIMES
    DEPENDING ON T-OBJ.
10 X PIC XX VALUE "AA".
10 Y PIC 99 VALUE 19.
10 Z PIC XX VALUE "BB".

```

例えば、この場合はすべての X エlement (1 から 5) が AA に初期化され、すべての Y エlement (1 から 5) が 19 に初期化され、すべての Z エlement (1 から 5) が BB に初期化されます。その後、T-OBJ が 3 に設定されます。

関連タスク

80 ページの『可変長テーブルへの値の割り当て』

関連参照

OCCURS 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: PERFORM と添え字付け

この例は、設定されたエラー・コードが検出されるまで、添え字付けを使用してエラー・フラグ (error-flag) テーブルを全探索します。エラー・コードが見つかったら、対応するエラー・メッセージが報告書印刷フィールドに移動されます。

```

*****
***      ERROR FLAG TABLE      ***
*****
01 Error-Flag-Table Value Spaces.
88 No-Errors Value Spaces.
05 Type-Error Pic X.
05 Shift-Error Pic X.
05 Home-Code-Error Pic X.

```

```

05 Work-Code-Error          Pic X.
05 Name-Error               Pic X.
05 Initials-Error          Pic X.
05 Duplicate-Error          Pic X.
05 Not-Found-Error         Pic X.
01 Filler Redefines Error-Flag-Table.
05 Error-Flag Occurs 8 Times
    Indexed By Flag-Index    Pic X.
77 Error-on                 Pic X Value "E".
*****
***      E R R O R   M E S S A G E   T A B L E      ***
*****
01 Error-Message-Table.
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Transaction Type Invalid".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Shift Code Invalid".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Home Location Code Inval.".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Work Location Code Inval.".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Last Name - Blanks".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Initials - Blanks".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Duplicate Record Found".
05 Filler                   Pic X(25) Value
    "Commuter Record Not Found".
01 Filler Redefines Error-Message-Table.
05 Error-Message Occurs 8 Times
    Indexed By Message-Index Pic X(25).
. . .
PROCEDURE DIVISION.
. . .
Perform
    Varying Sub From 1 By 1
    Until No-Errors
    If Error-Flag (Sub) = Error-On
        Move Space To Error-Flag (Sub)
        Move Error-Message (Sub) To Print-Message
        Perform 260-Print-Report
    End-If
End-Perform
. . .

```

例: PERFORM および索引付け

この例は、設定されたエラー・コードが検出されるまで、指標付けを使用してエラー・フラグ (error-flag) テーブルを全探索します。エラー・コードが見つかると、対応するエラー・メッセージが報告書印刷フィールドに移動されます。

```

*****
***      E R R O R   F L A G   T A B L E      ***
*****
01 Error-Flag-Table          Value Spaces.
88 No-Errors                 Value Spaces.
05 Type-Error               Pic X.
05 Shift-Error              Pic X.
05 Home-Code-Error          Pic X.
05 Work-Code-Error          Pic X.
05 Name-Error               Pic X.
05 Initials-Error          Pic X.
05 Duplicate-Error          Pic X.
05 Not-Found-Error         Pic X.
01 Filler Redefines Error-Flag-Table.

```

I

```

05 Error-Flag Occurs 8 Times
    Indexed By Flag-Index          Pic X.
77 Error-on                        Pic X Value "E".
*****
***      E R R O R   M E S S A G E   T A B L E      ***
*****
01 Error-Message-Table.
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Transaction Type Invalid".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Shift Code Invalid".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Home Location Code Inval.".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Work Location Code Inval.".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Last Name - Blanks".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Initials - Blanks".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Duplicate Record Found".
    05 Filler                      Pic X(25) Value
        "Commuter Record Not Found".
01 Filler Redefines Error-Message-Table.
    05 Error-Message Occurs 8 Times
        Indexed By Message-Index    Pic X(25).
. . .
PROCEDURE DIVISION.
. . .
Set Flag-Index To 1
Perform Until No-Errors
    Search Error-Flag
        When Error-Flag (Flag-Index) = Error-On
            Move Space To Error-Flag (Flag-Index)
            Set Message-Index To Flag-Index
            Move Error-Message (Message-Index) To
                Print-Message
            Perform 260-Print-Report
        End-Search
    End-Perform
. . .

```

可変長テーブルの作成 (DEPENDING ON)

テーブル・エレメントが出現する回数を実行前にわからない場合には、可変長テーブルを定義しなければなりません。そのためには、OCCURS DEPENDING ON (ODO) 文節を使用します。

X OCCURS 1 TO 10 TIMES DEPENDING ON Y

上の例で、X は *ODO* サブジェクト と呼び、Y は *ODO* オブジェクト と呼びます。

可変長レコードを正しく操作するためには、次の 2 つの要因が影響します。

- レコード長を正しく計算すること

グループ項目の可変部分の長さは、DEPENDING ON 句のオブジェクトと OCCURS 文節のサブジェクトの長さとの積です。

- OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクトにおけるデータの PICTURE 文節との適合性

ODO オブジェクトの内容がその PICTURE 文節と一致していない場合には、プログラムが異常終了することがあります。ODO オブジェクトに、テーブル・エレメントの現在のオカレンス回数を正しく指定するようにしてください。

次の例は、OCCURS DEPENDING ON 文節のサブジェクトとオブジェクトの両方を含むグループ項目 (REC-1) を示しています。グループ項目の長さがどのようにして決定されるかは、それがデータを送り出しているのか、データを受け取っているのかによって異なります。

```
WORKING-STORAGE SECTION.  
01 MAIN-AREA.  
    03 REC-1.  
        05 FIELD-1                      PIC 9.  
        05 FIELD-2 OCCURS 1 TO 5 TIMES  
            DEPENDING ON FIELD-1        PIC X(05).  
01 REC-2.  
    03 REC-2-DATA                      PIC X(50).
```

REC-1 (この場合は送り出し項目) を REC-2 に移動したい場合、REC-1 の長さは、FIELD-1 の現行値を使用して、移動の直前に決定されます。FIELD-1 の内容がその PICTURE 文節と一致している場合 (すなわち、FIELD-1 がゾーン 10 進数項目を含んでいる場合)、REC-1 の実際の長さに基づいて移動は続行可能です。それ以外の場合は、結果は予測できません。移動を開始する前に、ODO オブジェクトに正しい値が含まれていることを確認してください。

REC-1 (この場合は受け取り項目) に移動を行う場合、REC-1 の長さは、最大のオカレンス回数を使用して決定されます。この例では、FIELD-2 の 5 回のオカレンスと FIELD-1 の合計で 26 バイトの長さになります。この場合、REC-1 を受け取り項目として参照する前に、ODO オブジェクト (FIELD-1) を設定する必要はありません。ただし、移動によって受信フィールドの ODO オブジェクトを有効に設定するために、送信フィールドの ODO オブジェクトを 1 から 5 の間の有効な数値に設定しなければなりません。

しかし、REC-1 の後に可変位置グループ (複合 ODO) が続いているような REC-1 (この場合も受け取り項目) に移動を行う場合は、REC-1 の実際の長さは、移動の直前に ODO オブジェクト (FIELD-1) の現行値を使用して計算されます。次の例では、REC-1 と REC-2 は同じレコードにありますが、REC-2 は REC-1 に従属していないため、可変位置項目です。

```
01 MAIN-AREA  
    03 REC-1.  
        05 FIELD-1                      PIC 9.  
        05 FIELD-3                      PIC 9.  
        05 FIELD-2 OCCURS 1 TO 5 TIMES  
            DEPENDING ON FIELD-1        PIC X(05).  
    03 REC-2.  
        05 FIELD-4 OCCURS 1 TO 5 TIMES  
            DEPENDING ON FIELD-3        PIC X(05).
```

コンパイラーは、実際の長さが使用されたことを知らせるメッセージを出します。この場合には、グループ項目を受信フィールドとして使用する前に、ODO オブジェクトの値を設定することが必要となります。

次の例は、ODO オブジェクト (下の LOCATION-TABLE-LENGTH) がグループの外側にあるときの、可変長テーブルの定義方法を示します。

```

DATA DIVISION.
FILE SECTION.
FD LOCATION-FILE.
01 LOCATION-RECORD.
   05 LOC-CODE          PIC XX.
   05 LOC-DESCRIPTION   PIC X(20).
   05 FILLER            PIC X(58).
WORKING-STORAGE SECTION.
01 FLAGS.
   05 LOCATION-EOF-FLAG PIC X(5) VALUE SPACE.
   88 LOCATION-EOF     VALUE "FALSE".
01 MISC-VALUES.
   05 LOCATION-TABLE-LENGTH PIC 9(3) VALUE ZERO.
   05 LOCATION-TABLE-MAX   PIC 9(3) VALUE 100.
*****
***          L O C A T I O N   T A B L E          ***
***          FILE CONTAINS LOCATION CODES.        ***
*****
01 LOCATION-TABLE.
   05 LOCATION-CODE OCCURS 1 TO 100 TIMES
      DEPENDING ON LOCATION-TABLE-LENGTH PIC X(80).

```

関連概念

647 ページの『付録 D. 複合 OCCURS DEPENDING ON』

関連タスク

80 ページの『可変長テーブルへの値の割り当て』

『可変長テーブルのロード』

650 ページの『エレメントを可変テーブルに追加する際のオーバーレイを防止する』

118 ページの『データ項目の長さの検出』

関連参照

OCCURS DEPENDING ON 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

可変長テーブルのロード

do-until 構造 (TEST AFTER ループ) を使用して、可変長テーブルのロードを制御することができます。例えば、次のコードが実行されると、LOCATION-TABLE-LENGTH には、テーブルの最後の項目の添え字が入れられます。

```

DATA DIVISION.
FILE SECTION.
FD LOCATION-FILE.
01 LOCATION-RECORD.
   05 LOC-CODE          PIC XX.
   05 LOC-DESCRIPTION   PIC X(20).
   05 FILLER            PIC X(58).
. . .
WORKING-STORAGE SECTION.
01 FLAGS.
   05 LOCATION-EOF-FLAG PIC X(5) VALUE SPACE.
   88 LOCATION-EOF     VALUE "YES".
01 MISC-VALUES.
   05 LOCATION-TABLE-LENGTH PIC 9(3) VALUE ZERO.
   05 LOCATION-TABLE-MAX   PIC 9(3) VALUE 100.
*****
***          L O C A T I O N   T A B L E          ***
***          FILE CONTAINS LOCATION CODES.        ***
*****
01 LOCATION-TABLE.
   05 LOCATION-CODE OCCURS 1 TO 100 TIMES

```

```

                DEPENDING ON LOCATION-TABLE-LENGTH    PIC X(80).
        . . .
PROCEDURE DIVISION.
        . . .
        Perform Test After
            Varying Location-Table-Length From 1 By 1
            Until Location-EOF
            Or Location-Table-Length = Location-Table-Max
        Move Location-Record To
            Location-Code (Location-Table-Length)
        Read Location-File
            At End Set Location-EOF To True
        End-Read
        End-Perform

```

可変長テーブルへの値の割り当て

DEPENDING ON 句を持つ OCCURS 文節を含んでいる従属データ項目のある英数字または国別グループ項目に、VALUE 文節をコーディングできます。DEPENDING ON 句を含むそれぞれの従属構造は、最大オカレンス回数を使用して初期化されます。

DEPENDING ON 句を使用してテーブル全体を定義する場合、ODO (OCCURS DEPENDING ON) オブジェクトの最大定義値を使用して、全エレメントが初期化されます。

ODO オブジェクトが VALUE 文節で初期化される場合、これは必然的に、ODO サブジェクトが初期化された後に初期化されます。

```

01  TABLE-THREE          VALUE "3ABCDE".
   05  X                   PIC 9.
   05  Y OCCURS 5 TIMES
       DEPENDING ON X     PIC X.

```

例えば、上記のコードで、ODO サブジェクト Y(1) は「A」に、Y(2) は「B」に、・・・Y(5) は「E」に初期化され、最後に ODO オブジェクト X が 3 に初期化されます。TABLE-THREE への参照 (DISPLAY ステートメントでの参照など) は、X とテーブルの最初の 3 つのエレメント (Y(1) から Y(3)) を参照します。

関連タスク

73 ページの『テーブルの定義時の値の割り当て (VALUE)』

関連参照

OCCURS DEPENDING ON 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

テーブルの探索

COBOL には、逐次探索 と 二分探索 (バイナリー・サーチ) の 2 つのテーブル探索技法があります。

逐次探索を行うには、SEARCH と索引付けを使用します。可変長テーブルの場合は、PERFORM と添え字付けまたは指標付けを使用することができます。

二分探索を行うには、SEARCH ALL と索引付けを使用します。

二分探索の方が、逐次探索よりも効率が相当よくなる可能性があります。シリアル検索の場合、比較の数は、 n の次数、すなわちテーブルの項目の数です。二分探索の場合、比較の数は、 n の対数 (基底 2) の次数にすぎません。ただし、二分探索を行うには、テーブル項目をあらかじめソートしておく必要があります。

関連タスク

『逐次探索 (SEARCH)』

82 ページの『二分探索 (SEARCH ALL)』

逐次探索 (SEARCH)

SEARCH ステートメントを使用して、現行指標設定値を開始点として逐次 (順次) 探索を行います。指標設定値を変更するには、SET ステートメントを使用してください。

WHEN 句内の条件は、それらが指定された順番に評価されます。

- どの条件も満たされない場合には、指標が次のテーブル・エレメントに対応するように増加され、WHEN 条件が再度評価されます。
- WHEN 条件の 1 つが満たされると、探索は終了します。指標は条件を満たしたテーブル・エレメントを指したままになります。
- テーブル全体が探索され、どの条件も満たされなかった場合には、AT END 命令ステートメントが実行されます (存在する場合)。AT END をコーディングしなかった場合、制御はプログラム内の次のステートメントに渡ります。

それぞれの SEARCH ステートメントでは、テーブルの 1 つのレベル (1 つのテーブル・エレメント) だけを参照することができます。テーブルの複数のレベルを探索するには、ネストされた SEARCH ステートメントを使用してください。ネストされたそれぞれの SEARCH ステートメントは、END-SEARCH で区切らなければなりません。

パフォーマンス: 検出された条件がテーブル内のある中間点より後にくる場合には、SET ステートメントを使用して、そのポイントより後から探索を開始するよう指標を設定することにより、探索を速めることができます。さらに、最も頻繁に使用されるデータが先頭になるようにテーブルを配置すると、逐次探索をより効率的に行うことができます。テーブルが大きくて、事前にソートされている場合には、二分探索の方が効率的です。

『例: 逐次探索』

関連参照

SEARCH ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: 逐次探索

次の例は、3 次元テーブルの最も内部にあるテーブルの中で、特定のストリングを見つける方法を示しています。

テーブルの各次元には独自の指標があります (それぞれ、1、4、および 1 に設定されています)。最も内部のテーブル (TABLE-ENTRY3) には昇順キーがあります。

```
01 TABLE-ONE.  
   05 TABLE-ENTRY1 OCCURS 10 TIMES  
      INDEXED BY TE1-INDEX.  
   10 TABLE-ENTRY2 OCCURS 10 TIMES  
      INDEXED BY TE2-INDEX.  
   15 TABLE-ENTRY3 OCCURS 5 TIMES  
      ASCENDING KEY IS KEY1  
      INDEXED BY TE3-INDEX.  
   20 KEY1                                PIC X(5).
```



```

                20 KEY2                                PIC X(10).
. . .
PROCEDURE DIVISION.
. . .
    SET TE1-INDEX TO 1
    SET TE2-INDEX TO 4
    SET TE3-INDEX TO 1
    MOVE "A1234" TO KEY1 (TE1-INDEX, TE2-INDEX, TE3-INDEX + 2)
    MOVE "AAAAAAA00" TO KEY2 (TE1-INDEX, TE2-INDEX, TE3-INDEX + 2)
. . .
    SEARCH TABLE-ENTRY3
    AT END
        MOVE 4 TO RETURN-CODE
    WHEN TABLE-ENTRY3(TE1-INDEX, TE2-INDEX, TE3-INDEX)
        = "A1234AAAAAAA00"
        MOVE 0 TO RETURN-CODE
    END-SEARCH

```

実行後の値

```

TE1-INDEX = 1
TE2-INDEX = 4
TE3-INDEX points to the TABLE-ENTRY3 item
               that equals "A1234AAAAAAA00"
RETURN-CODE = 0

```

二分探索 (SEARCH ALL)

SEARCH ALL を使用して二分探索を行う場合、開始する前に指標を設定する必要はありません。指標は常に、OCCURS 文節内の最初の指標名と関連付けられるものです。この指標は、探索の効率を最大にするために、実行中に変わります。

SEARCH ALL ステートメントを使用してテーブルを探索するには、テーブルで OCCURS 文節の ASCENDING KEY または DESCENDING KEY 句 (あるいはその両方) を指定する必要があります。また ASCENDING および DESCENDING KEY 句で指定されたキーに基づいてすでに順序付けられている必要があります。

SEARCH ALL ステートメントの WHEN 句では、テーブルの ASCENDING または DESCENDING KEY 句で指定されているキーをテストできますが、前に現れているすべてのキー (ある場合) をテストする必要があります。テストは等価条件でなければならず、WHEN 句ではキー (テーブルに関連した最初の指標名で添え字が付けられている) かまたはキーに関連した条件名を指定する必要があります。WHEN 条件は、論理連結語として AND のみを使用した複数の単純条件から形成した複合条件であっても構いません。

それぞれのキーとその比較の対象は、データ項目の比較規則に従って互換性がなければなりません。ただし、キーを国別リテラルまたは ID と比較する場合、キーは国別データ項目にする必要があることに注意してください。

83 ページの『例: 二分探索』

関連タスク

65 ページの『テーブルの定義 (OCCURS)』

関連参照

SEARCH ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
 一般比較条件 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: 二分探索

次の例は、テーブルの二分探索をコーディングする方法を示しています。

テーブルにそれぞれが 40 バイトの 90 個のエLEMENTが含まれており、3 つのキーがあるとします。1 次キーと 2 次キー (KEY-1 と KEY-2) は昇順ですが、最も重要でないキー (KEY-3) は降順です。

```
01 TABLE-A.  
   05 TABLE-ENTRY OCCURS 90 TIMES  
       ASCENDING KEY-1, KEY-2  
       DESCENDING KEY-3  
       INDEXED BY INDX-1.  
   10 PART-1      PIC 99.  
   10 KEY-1       PIC 9(5).  
   10 PART-2      PIC 9(6).  
   10 KEY-2       PIC 9(4).  
   10 PART-3      PIC 9(18).  
   10 KEY-3       PIC 9(5).
```

このテーブルは、次のステートメントを使用して探索することができます。

```
SEARCH ALL TABLE-ENTRY  
  AT END  
  PERFORM NOENTRY  
  WHEN KEY-1 (INDX-1) = VALUE-1 AND  
        KEY-2 (INDX-1) = VALUE-2 AND  
        KEY-3 (INDX-1) = VALUE-3  
    MOVE PART-1 (INDX-1) TO OUTPUT-AREA  
END-SEARCH
```

3 つの各キーが比較対象の値 (それぞれ VALUE-1、VALUE-2、および VALUE-3) と等しい項目が検出された場合、その項目の PART-1 は OUTPUT-AREA へ移動されます。TABLE-A 内のどの記入項目でも一致するキーが検出されない場合には、NOENTRY ルーチンが実行されます。

組み込み関数を使用したテーブル項目の処理

組み込み関数を使用して、英字、英数字、国別、または数値のテーブル項目を処理できます。(DBCS データ項目は NATIONAL-OF 組み込み関数でのみ処理できます)。テーブル項目のデータ記述は、関数の引数要件と互換性があるようにする必要があります。

個々のデータを関数引数として参照するには、添え字または指標を使用してください。Table-One が 3 x 3 の数値項目の配列であるとする、次のようなステートメントを使用して中間ELEMENTの平方根を求めることができます。

```
Compute X = Function Sqrt(Table-One(2,2))
```

テーブル内のデータを繰り返し処理することが必要な場合もあります。複数の引数を受け入れる組み込み関数の場合、添え字 ALL を使用して、テーブル内またはテーブルの単一次元内のすべての項目を参照することができます。反復は自動的に処理されるため、コードがより短く、単純になります。

複数の引数を受け入れる関数の場合は、スカラーと配列引数を混在させることができます。

```
Compute Table-Median = Function Median(Arg1 Table-One(ALL))
```

『例: 組み込み関数を使用したテーブルの処理』

関連タスク

37 ページの『組み込み関数の使用 (組み込み関数)』

111 ページの『データ項目の変換 (組み込み関数)』

114 ページの『データ項目の評価 (組み込み関数)』

関連参照

組み込み関数 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: 組み込み関数を使用したテーブルの処理

以下の例は、ALL 添え字を使用して、テーブル内の一部またはすべてのエレメントに組み込み関数を適用する方法を示しています。

Table-Two が 2 x 3 x 2 の配列であるとする、次のステートメントによってエレメント Table-Two(1,3,1)、Table-Two(1,3,2)、Table-Two(2,3,1)、および Table-Two(2,3,2) の値が加算されます。

```
Compute Table-Sum = FUNCTION SUM (Table-Two(ALL, 3, ALL))
```

次の例は、全従業員のさまざまな給与値を計算します。給与は Employee-Table でエンコードされています。

```
01 Employee-Table.
   05 Emp-Count      Pic s9(4) usage binary.
   05 Emp-Record      Occurs 1 to 500 times
                       depending on Emp-Count.
       10 Emp-Name     Pic x(20).
       10 Emp-Idme     Pic 9(9).
       10 Emp-Salary   Pic 9(7)v99.
. . .
Procedure Division.
   Compute Max-Salary = Function Max(Emp-Salary(ALL))
   Compute I          = Function Ord-Max(Emp-Salary(ALL))
   Compute Avg-Salary = Function Mean(Emp-Salary(ALL))
   Compute Salary-Range = Function Range(Emp-Salary(ALL))
   Compute Total-Payroll = Function Sum(Emp-Salary(ALL))
```

第 5 章 プログラム・アクションの選択と反復

COBOL 制御言語を使用すると、論理テストの結果に基づいてプログラム・アクションを選択すること、プログラムおよびデータの選択された部分を繰り返すこと、および 1 つのグループとして実行すべきステートメントを識別することができます。

これらの制御には、IF、EVALUATE、PERFORM の各ステートメントと、スイッチおよびフラグの使用が含まれます。

関連タスク

『プログラム・アクションの選択』

94 ページの『プログラム・アクションの繰り返し』

プログラム・アクションの選択

1 つまたは複数のデータ項目のテストされた値に基づいて、さまざまなプログラム・アクションに備えることができます。

COBOL の IF および EVALUATE ステートメントは、条件式によって 1 つまたは複数のデータ項目をテストします。

関連タスク

『アクションの選択項目のコーディング』

90 ページの『条件式のコーディング』

関連参照

IF ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

EVALUATE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

アクションの選択項目のコーディング

IF . . . ELSE は、2 つの処理アクション間での選択項目をコーディングする場合に使用します。(THEN という語は、オプションです。) 3 つ以上の可能なアクションの間で選択項目をコーディングする場合は、EVALUATE ステートメントを使用します。

```
IF condition-p
  statement-1
ELSE
  statement-2
END-IF
```

処理選択項目の 1 つがアクションを取らない場合は、IF ステートメントに ELSE を指定してもしなくても構いません。ELSE 文節はオプションであるため、次のように IF ステートメントをコーディングすることができます。

```
IF condition-q
  statement-1
END-IF
```

このようなコーディングは、簡単な場合に適しています。ロジックが複雑になった場合は、おそらく、ELSE 文節を使用する必要があります。例えば、処理選択項目の 1 つだけに対応するアクションがある、ネストされた IF ステートメントがあるとしてします。その場合は、次のように、ELSE 文節と CONTINUE ステートメントを使用して IF ステートメントの NULL ブランチをコーディングすることができます。

```
IF condition-q
    statement-1
ELSE
    CONTINUE
END-IF
```

EVALUATE ステートメントは IF ステートメントの拡張形式であり、これを使用すると、IF ステートメントのネスト（論理エラーやデバッグ問題の一般的な原因となる）を避けることができます。

関連タスク

『ネストされた IF ステートメントの使用』

87 ページの『EVALUATE ステートメントの使用』

90 ページの『条件式のコーディング』

ネストされた IF ステートメントの使用

IF ステートメントが、可能な分岐の 1 つとして IF ステートメントを含む場合、これらの IF ステートメントはネストされている といいます。論理上は、ネストされた IF ステートメントの深さに制限はありません。

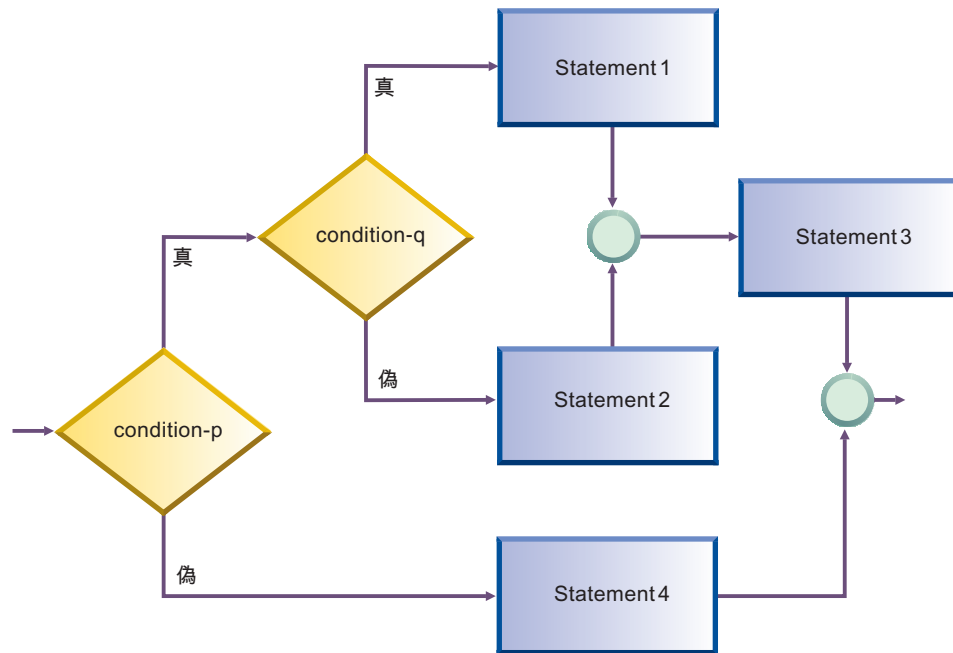
ただし、ネストされた IF ステートメントを多用しないでください。明示範囲終了符号および字下げが役に立つとはいえ、ロジックをたどるのが困難になる可能性があります。プログラムが 2 つを超える値について変数をテストしなければならない場合には、EVALUATE を使用する方が適切です。

以下に、ネストされた IF ステートメントの疑似コードを示します。

```
IF condition-p
    IF condition-q
        statement-1
    ELSE
        statement-2
    END-IF
    statement-3
ELSE
    statement-4
END-IF
```

上の疑似コードで、IF ステートメントと順次構造は、外側の IF の 1 つの分岐でネストされています。このような構造では、ネストされた IF を閉じる END-IF が非常に重要になります。ピリオドは外側の IF 構造も終了させるため、ピリオドではなく END-IF を使用してください。

次の図は、上の疑似コードの論理構造を示しています。



関連タスク

85 ページの『アクションの選択項目のコーディング』

関連参照

明示範囲終了符号（「*COBOL for Windows* 言語解説書」）

EVALUATE ステートメントの使用

ネストされた一連の IF ステートメントではなく、EVALUATE ステートメントを使用して、幾つかの条件をテストし、かつそれぞれについて異なるアクションを指定できます。したがって、EVALUATE ステートメントを使用すると、ケース構造 または デシジョン・テーブルをインプリメントすることができます。

また 以下の例に示されているように、EVALUATE ステートメントを使用して、複数の条件で同じ処理が行われるようにすることもできます。

88 ページの『例: THRU 句を使用した EVALUATE』

89 ページの『例: 複数の WHEN 句を使用する EVALUATE』

EVALUATE ステートメントでは、WHEN 句の前のオペランドは選択サブジェクトと呼ばれ、WHEN 句の中のオペランドは選択オブジェクトと呼ばれます。選択サブジェクトは、ID、リテラル、条件式、あるいはワード TRUE または FALSE にすることができます。選択オブジェクトは、ID、リテラル、条件式、算術式、あるいはワード TRUE、FALSE、または ANY にすることができます。

複数の選択サブジェクトを ALSO 句で分離することができます。複数の選択オブジェクトも ALSO 句で分離することができます。それぞれの選択オブジェクト・セット内の選択オブジェクトの数は、次の例に示されているように、選択サブジェクトの数と等しくする必要があります。

89 ページの『例: 複数の条件をテストする EVALUATE』

選択オブジェクト内に現れる ID、リテラル、または算術式は、選択サブジェクト・セット内の対応するオペランドと比較できるよう、有効なオペランドにする必要があります。選択オブジェクト内に現れる条件あるいはワード TRUE または FALSE は、選択サブジェクト・セット内の条件式あるいはワード TRUE または FALSE に対応していなければなりません。(選択オブジェクトとしてワード ANY を使用すると、任意のタイプの選択サブジェクトに対応付けることができます。)

EVALUATE ステートメントの実行は、次のいずれかの状態が発生すると終了します。

- 選択された WHEN 句に関連付けられているステートメントが実行された。
- WHEN OTHER 句に関連付けられているステートメントが実行された。
- いずれの WHEN 条件も満たされない。

WHEN 句は、ソース・プログラムに現れている順序どおりにテストされます。ですから、最高のパフォーマンスが得られるようにこれらの句を順序付ける必要があります。最初に、適合する可能性が最も高い選択オブジェクトを含んでいる WHEN 句をコーディングし、その後、次に可能性の高いものという順にコーディングしてください。例外は WHEN OTHER 句です。これは最後に置かなければなりません。

関連タスク

85 ページの『アクションの選択項目のコーディング』

関連参照

EVALUATE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

一般比較条件 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: THRU 句を使用した EVALUATE: この例は、THRU 句をコーディングすることにより、幾つかの条件をある範囲の値でコーディングして同じ処理が行われるようにする方法を示しています。THRU 句内のオペランドは、同じクラスにする必要があります。

この例では、CARPOOL-SIZE は選択サブジェクト であり、1、 2、 および 3 THRU 6 は選択オブジェクトです。

```
EVALUATE CARPOOL-SIZE
  WHEN 1
    MOVE "SINGLE" TO PRINT-CARPOOL-STATUS
  WHEN 2
    MOVE "COUPLE" TO PRINT-CARPOOL-STATUS
  WHEN 3 THRU 6
    MOVE "SMALL GROUP" TO PRINT-CARPOOL STATUS
  WHEN OTHER
    MOVE "BIG GROUP" TO PRINT-CARPOOL STATUS
END-EVALUATE
```

次のネストされた IF ステートメントも同じロジックを表します。

```
IF CARPOOL-SIZE = 1 THEN
  MOVE "SINGLE" TO PRINT-CARPOOL-STATUS
ELSE
  IF CARPOOL-SIZE = 2 THEN
    MOVE "COUPLE" TO PRINT-CARPOOL-STATUS
  ELSE
    IF CARPOOL-SIZE >= 3 and CARPOOL-SIZE <= 6 THEN
      MOVE "SMALL GROUP" TO PRINT-CARPOOL-STATUS
    ELSE
```



```

        MOVE "BIG GROUP" TO PRINT-CARPOOL-STATUS
    END-IF
END-IF
END-IF

```

例: 複数の WHEN 句を使用する EVALUATE: この例は、いくつかの条件で同じ処置が行われるようにしなければならない場合に、複数の WHEN 句をコーディングできることを示しています。この方法は、THRU 句のみを使用する場合と比べてさらに柔軟性があります。条件が、ある範囲の値または同じクラスを持つ値に評価される必要がないからです。

```

EVALUATE MARITAL-CODE
    WHEN "M"
        ADD 2 TO PEOPLE-COUNT
    WHEN "S"
    WHEN "D"
    WHEN "W"
        ADD 1 TO PEOPLE-COUNT
END-EVALUATE

```

次のネストされた IF ステートメントも同じロジックを表します。

```

IF MARITAL-CODE = "M" THEN
    ADD 2 TO PEOPLE-COUNT
ELSE
    IF MARITAL-CODE = "S" OR
        MARITAL-CODE = "D" OR
        MARITAL-CODE = "W" THEN
        ADD 1 TO PEOPLE-COUNT
    END-IF
END-IF

```

例: 複数の条件をテストする EVALUATE: この例は、ALSO 句を使用して、2 つの選択サブジェクトを分離し (True ALSO True)、対応する 2 つの選択オブジェクトをそれぞれの選択オブジェクト・セットごとに分離する (例えば、When A + B < 10 Also C = 10) 方法を示しています。

WHEN 句の中の選択オブジェクトはどちらも、関連した処置が実行される前に、TRUE、TRUE 条件を満たす必要があります。両方のオブジェクトが TRUE に評価されなければ、次の WHEN 句が処理されます。

```

Identification Division.
    Program-ID. MiniEval.
Environment Division.
    Configuration Section.
Data Division.
    Working-Storage Section.
    01  Age                Pic 999.
    01  Sex                Pic X.
    01  Description        Pic X(15).
    01  A                  Pic 999.
    01  B                  Pic 9999.
    01  C                  Pic 9999.
    01  D                  Pic 9999.
    01  E                  Pic 99999.
    01  F                  Pic 999999.
Procedure Division.
    PN01.
        Evaluate True Also True
            When Age < 13 Also Sex = "M"
                Move "Young Boy" To Description
            When Age < 13 Also Sex = "F"
                Move "Young Girl" To Description

```

```

When Age > 12 And Age < 20 Also Sex = "M"
  Move "Teenage Boy" To Description
When Age > 12 And Age < 20 Also Sex = "F"
  Move "Teenage Girl" To Description
When Age > 19 Also Sex = "M"
  Move "Adult Man" To Description
When Age > 19 Also Sex = "F"
  Move "Adult Woman" To Description
When Other
  Move "Invalid Data" To Description
End-Evaluate
Evaluate True Also True
  When A + B < 10 Also C = 10
    Move "Case 1" To Description
  When A + B > 50 Also C = ( D + E ) / F
    Move "Case 2" To Description
  When Other
    Move "Case Other" To Description
End-Evaluate
Stop Run.

```

条件式のコーディング

IF および EVALUATE ステートメントを使用して、条件式の真理値に従って実行されるプログラム・アクションをコーディングすることができます。

指定できる条件の一部を以下に示します。

- 次のような比較条件
 - 数値比較
 - 英数字比較
 - DBCS 比較
 - 国別比較
- クラス条件 (データ項目が次の条件に当てはまるかどうかのテストなど)
 - IS NUMERIC
 - IS ALPHABETIC
 - IS DBCS
 - IS KANJI
 - IS NOT KANJI
- 条件名条件 (定義した条件変数の値のテスト)
- 符号条件 (数値オペランドが IS POSITIVE、NEGATIVE、または ZERO の条件に当てはまるかどうかのテスト)
- 切り替え状況条件 (SPECIAL-NAMES 段落で名前を付けた UPSI スイッチの状況のテスト)
- 次のような複合条件
 - 否定条件。NOT (A IS EQUAL TO B) など
 - 複合条件 (論理演算子 AND または OR を組み合わせた条件)

関連概念

91 ページの『スイッチおよびフラグ』

関連タスク

『スイッチおよびフラグの定義』
92 ページの『スイッチとフラグのリセット』
54 ページの『非互換データの検査 (数値のクラス・テスト)』
189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』
195 ページの『有効な DBCS 文字に関するテスト』

関連参照

328 ページの『UPSI』
一般比較条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
クラス条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
条件名項目の規則 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
符号条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
複合条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

スイッチおよびフラグ

プログラム中のいくつかの決定は、データ項目の値が真か偽か、オンかオフか、はいかいいえかに基づきます。スイッチとして働くレベル 88 項目に意味のある名前 (条件名) を付けて定義して、これらの両方向決定を制御してください。

その他のプログラム決定は、データ項目の特定の値または値の範囲に依存します。フィールドに単にオンまたはオフ以外の値を与えるために条件名を使用するときには、そのフィールドはフラグと呼ばれるのが普通です。

フラグおよびスイッチを使用すると、コードの変更が容易になります。条件の値を変更する必要がある場合は、そのレベル 88 条件名の値を変更するだけで済みます。

例えば、特定の給与範囲についてフィールドをテストするために、プログラムが条件名を使用するとします。別の給与範囲を検査するようにプログラムを変更しなければならない場合は、DATA DIVISION 内の条件名の値を変更するだけで済みます。PROCEDURE DIVISION で変更を行う必要はありません。

関連タスク

『スイッチおよびフラグの定義』
92 ページの『スイッチとフラグのリセット』

スイッチおよびフラグの定義

DATA DIVISION では、スイッチまたはフラグとして機能するレベル 88 項目を定義して、分かりやすい名前を与えます。

フラグを使用して 2 つを超える値をテストするには、複数のレベル 88 項目を使用することによって、フィールドに複数の条件名を割り当ててください。

意味のある条件名が選択されており、かつ割り当てられた値が論理値に関連付けられているならば、プログラムを読むときコードを追跡するのが容易になります。

92 ページの『例: スイッチ』
92 ページの『例: フラグ』

例: スイッチ

次の例は、レベル 88 項目を使用して、プログラム内のさまざまな 2 進値 (オン/オフ) 条件をテストする方法を示しています。

例えば、Transaction-File という名前の入力ファイルについてのファイル終わり (EOF) 条件をテストするには、データ定義を以下のように記述できます。

```
Working-Storage Section.  
01 Switches.  
    05 Transaction-EOF-Switch Pic X value space.  
    88 Transaction-EOF      value "y".
```

レベル 88 記述では、Transaction-EOF-Switch の値が 'y' なら、Transaction-EOF という名前の条件がオンになることが指定されています。PROCEDURE DIVISION 内で Transaction-EOF を参照することは、Transaction-EOF-Switch = "y" をテストすることと同じ条件を表します。例えば、以下のステートメントの場合、Transaction-EOF-Switch が「y」に設定されている場合にのみ、報告書が印刷されます。

```
If Transaction-EOF Then  
    Perform Print-Report-Summary-Lines
```

例: フラグ

次の例は、EVALUATE ステートメントと一緒にいくつかのレベル 88 項目を使用して、プログラム内のいくつかの条件のうちのどれが真であるかを判別する方法を示しています。

例えば、マスター・ファイルを更新するプログラムを考えてみましょう。更新内容は、トランザクション・ファイルから読み取られます。ファイル内のレコードは、3 つの機能 (追加、変更、または削除) のうち、実行する機能を示すフィールドを含んでいます。入力ファイルのレコード記述で、レベル 88 項目を使用して機能コード用のフィールドをコーディングします。

```
01 Transaction-Input Record  
    05 Transaction-Type      Pic X.  
    88 Add-Transaction      Value "A".  
    88 Change-Transaction   Value "C".  
    88 Delete-Transaction   Value "D".
```

これらの条件名をテストしてどの機能が実行されるかを判別するための、PROCEDURE DIVISION 内のコードは、次のようになります。

```
Evaluate True  
    When Add-Transaction  
        Perform Add-Master-Record-Paragraph  
    When Change-Transaction  
        Perform Update-Existing-Record-Paragraph  
    When Delete-Transaction  
        Perform Delete-Master-Record-Paragraph  
End-Evaluate
```

スイッチとフラグのリセット

プログラムの随所で、スイッチやフラグをそれらのデータ記述における元の値にリセットすることが必要になる場合があります。そのためには、SET ステートメントを使用するか、またはスイッチまたはフラグに移動するデータ項目を定義します。

SET *condition-name* TO TRUE ステートメントを使用すると、スイッチまたはフラグは、データ記述の中で割り当てられた元の値に設定されます。複数の値を持つレベル 88 項目の場合、SET *condition-name* TO TRUE は、最初の値 (次の例では A) を割り当てます。

```
88 Record-is-Active Value "A" "0" "S"
```

SET ステートメントと意味のある条件名を使用すれば、他のプログラマーにもコードが容易に追跡できるようになります。

『例: スイッチをオンに設定する』

『例: スイッチをオフに設定する』

例: スイッチをオンに設定する

次の例は、値 TRUE をレベル 88 項目に移動させる SET ステートメントをコーディングして、スイッチを入れる方法を示しています。

例えば、次の例の SET ステートメントは、Move "y" to Transaction-EOF-Switch をコーディングした場合と同じ効果を持ちます。

```
01 Switches
   05 Transaction-EOF-Switch Pic X Value space.
   88 Transaction-EOF      Value "y".
. . .
Procedure Division.
000-Do-Main-Logic.
   Perform 100-Initialize-Paragraph
   Read Update-Transaction-File
   At End Set Transaction-EOF to True
End-Read
```

次の例では、入力レコードのトランザクション・コードに基づいて、出力レコード内のフィールドに値を割り当てる方法を示します。

```
01 Input-Record.
   05 Transaction-Type Pic X(9).
01 Data-Record-Out.
   05 Data-Record-Type Pic X.
   88 Record-Is-Active Value "A".
   88 Record-Is-Suspended Value "S".
   88 Record-Is-Deleted Value "D".
   05 Key-Field Pic X(5).
. . .
Procedure Division.
   Evaluate Transaction-Type of Input-Record
   When "ACTIVE"
      Set Record-Is-Active to TRUE
   When "SUSPENDED"
      Set Record-Is-Suspended to TRUE
   When "DELETED"
      Set Record-Is-Deleted to TRUE
End-Evaluate
```

例: スイッチをオフに設定する

次の例は、値をレベル 88 項目に移動させる MOVE ステートメントをコーディングして、スイッチをオフにする方法を示しています。

例えば、以下のコードのように、SWITCH-OFF という名前のデータ項目を使用して、オン/オフ・スイッチをオフに設定できます。これにより、スイッチをリセットして、ファイルの終わりに達していないことを示します。

```
01 Switches
   05 Transaction-EOF-Switch      Pic X Value space.
   88 Transaction-EOF            Value "y".
01 SWITCH-OFF                    Pic X Value "n".
. . .
Procedure Division.
. . .
    Move SWITCH-OFF to Transaction-EOF-Switch
```

プログラム・アクションの繰り返し

PERFORM ステートメントを使用すると、指定された回数だけ、または判断の結果に基づいて、同じコードを繰り返す（つまり、ループする）ことができます。

PERFORM ステートメントを使用すると、段落を実行し、その後で次の実行可能なステートメントに暗黙的に制御権を戻すこともできます。実際には、この PERFORM ステートメントは、プログラムの異なる多くの部分から入ることができる閉じたサブルーチンをコーディングするための手段です。

PERFORM ステートメントはインラインまたはライン外にすることができます。

関連タスク

『インラインまたはライン外 PERFORM の選択』

95 ページの『ループのコーディング』

96 ページの『テーブルのループ処理』

97 ページの『複数の段落またはセクションの実行』

関連参照

PERFORM ステートメント（「*COBOL for Windows 言語解説書*」）

インラインまたはライン外 PERFORM の選択

インライン PERFORM は、プログラムの通常フローで実行される命令ステートメントです。ライン外の PERFORM には、指定された段落への分岐と、その段落からの暗黙の戻りが必要です。

インラインまたはライン外のいずれの PERFORM ステートメントをコーディングするかを決定するには、以下の質問に回答してください。

- PERFORM ステートメントを複数の場所で使用しますか。

プログラム内の幾つかの場所で同じコード部分を使用したい場合、ライン外 PERFORM を使用してください。

- どちらのステートメントの配置の方が読みやすいですか。

実行するコードが短い場合、インライン PERFORM の方が読みやすくなります。しかし、コードが複数の画面に展開する場合は、ライン外 PERFORM を使用すると、プログラムのロジック・フローがより明確になります。（ただし、構造化プログラミングにおいて、各段落は 1 つの論理機能を実行しなければなりません。）

- 効率性を優先させますか。

インライン PERFORM は、ライン外 PERFORM で発生する分岐のオーバーヘッドを回避します。しかし、ライン外 PERFORM コーディングでもコード最適化を利用できるので、効率性を過度に重要視する必要はありません。

1974 COBOL 標準では、PERFORM ステートメントはライン外であり、このため、別個の段落への分岐が必要であり、暗黙の戻りがあります。実行された段落が、プログラムのそれ以降の順次フローの中にある場合は、ロジック・フローの中でもう一度実行されます。この追加の実行を回避するためには、段落を通常の順次フローの外側 (例えば、GOBACK の後) に置くか、または段落のそばに分岐をコーディングしてください。

インライン PERFORM のサブジェクトは、命令ステートメントです。したがって、インライン PERFORM 内の (命令ステートメント以外の) ステートメントは、明示範囲終了符号を付けてコーディングしなければなりません。

『例: インライン PERFORM ステートメント』

例: インライン PERFORM ステートメント

この例では、インライン PERFORM ステートメントの構造を示します。この例は、必要な範囲終了符号と必要な END-PERFORM 句を持っています。

```
Perform 100-Initialize-Paragraph
* The following statement is an inline PERFORM:
  Perform Until Transaction-EOF
    Read Update-Transaction-File Into WS-Transaction-Record
    At End
      Set Transaction-EOF To True
    Not At End
      Perform 200-Edit-Update-Transaction
      If No-Errors
        Perform 300-Update-Commuter-Record
      Else
        Perform 400-Print-Transaction-Errors
  * End-If is a required scope terminator
  End-If
  Perform 410-Re-Initialize-Fields
* End-Read is a required scope terminator
End-Read
End-Perform
```

ループのコーディング

PERFORM . . . TIMES ステートメントは、段落を指定された回数だけ実行する場合に使用します。

```
PERFORM 010-PROCESS-ONE-MONTH 12 TIMES
INSPECT . . .
```

上の例で、制御が PERFORM ステートメントに達すると、段落 010-PROCESS-ONE-MONTH のコードが 12 回実行されてから、制御が INSPECT ステートメントに移ります。

PERFORM . . . UNTIL ステートメントは、選択した条件が満たされるまで段落を実行する場合に使用します。以下のいずれかの形式を使用することができます。

```
PERFORM . . . WITH TEST AFTER . . . UNTIL . . .
PERFORM . . . [WITH TEST BEFORE] . . . UNTIL . . .
```


PERFORM を使用する。 . . . WITH TEST AFTER UNTIL ステートメントは、段落を少なくとも 1 回実行し、その後テストしてからそれ以降を実行したい場合に使用します。このステートメントは、do-until 構造と同等です。

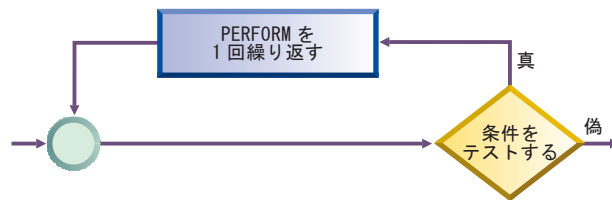


次の例では、暗黙の WITH TEST BEFORE 句によって do-while 構造が提供されます。

```

PERFORM 010-PROCESS-ONE-MONTH
  UNTIL MONTH GREATER THAN 12
INSPECT . . .
  
```

制御が PERFORM ステートメントに達すると、条件 MONTH GREATER THAN 12 がテストされます。条件が満たされると、制御が INSPECT ステートメントに移ります。条件が満たされない場合には、010-PROCESS-ONE-MONTH が実行され、条件が再度テストされます。このサイクルは、条件が真になるまで継続されます。(プログラムを読みやすくするために、WITH TEST BEFORE 文節をコーディングすることが必要な場合もあります。)



テーブルのループ処理

PERFORM . . . VARYING ステートメントを使用してテーブルを初期化することができます。この形式の PERFORM ステートメントでは、条件が満たされるまで変数が増分または減分され、テストされます。

そのあと、PERFORM ステートメントを使用して、テーブルを操作するループを制御することができます。以下のいずれかの形式を使用することができます。

```

PERFORM . . . WITH TEST AFTER . . . . VARYING . . . . UNTIL . . .
PERFORM . . . [WITH TEST BEFORE] . . . . VARYING . . . . UNTIL . . .
  
```

以下のコードのセクションは、テーブル全体をループ処理して無効データがないか検査する例を示しています。

```

PERFORM TEST AFTER VARYING WS-DATA-IX
  FROM 1 BY 1 UNTIL WS-DATA-IX = 12
  IF WS-DATA (WS-DATA-IX) EQUALS SPACES
    SET SERIOUS-ERROR TO TRUE
    DISPLAY ELEMENT-NUM-MSG5
  END-IF
END-PERFORM
INSPECT . . .
  
```

上記の PERFORM ステートメントに制御が達すると、WS-DATA-IX は 1 に設定され、PERFORM ステートメントが実行されます。その後、条件 WS-DATA-IX = 12 がテストされます。条件が真である場合には、制御が INSPECT ステートメントに渡ります。条件が偽である場合、WS-DATA-IX が 1 だけ増やされて、PERFORM ステートメントが実行され、条件が再度テストされます。この実行とテストのサイクルは、WS-DATA-IX が 12 になるまで継続されます。

上記のループは、項目 WS-DATA の 12 個のフィールドに関する入力検査を制御します。アプリケーションでは空のフィールドは許可されません。ですから、コードのセクションはループし、必要に応じてエラー・メッセージを発行します。

複数の段落またはセクションの実行

構造化プログラミングでは、通常 1 つの段落を実行します。しかし、PERFORM . . . THRU ステートメントをコーディングすれば、段落のグループ、1 つのセクション、またはセクションのグループを実行することができます。

PERFORM . . . THRU ステートメントを使用するときには、段落 EXIT ステートメントをコーディングして、一連の段落のエンドポイントを明確に示してください。

関連タスク

83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』

第 6 章 スtringの処理

COBOL は、String・データ項目に対して多種類の操作を実行するための言語構造体を提供します。

例えば、次のようなことが可能です。

- データ項目の結合または分割
- ヌル終了Stringの操作 (文字のカウントや移動など)
- 通常の位置 (必要があれば、および長さ) によるサブStringへの参照
- データ項目の計算および置換 (データ項目内に特定文字が現れた回数のカウントなど)
- データ項目の変換 (大文字または小文字への変更など)
- データ項目の評価 (データ項目の長さの判別など)

関連タスク

『データ項目の結合 (STRING)』

102 ページの『データ項目の分割 (UNSTRING)』

105 ページの『ヌル終了Stringの取り扱い』

106 ページの『データ項目のサブStringの参照』

110 ページの『データ項目の計算および置換 (INSPECT)』

111 ページの『データ項目の変換 (組み込み関数)』

114 ページの『データ項目の評価 (組み込み関数)』

171 ページの『第 10 章 国際環境でのデータの処理』

データ項目の結合 (STRING)

STRING ステートメントは、幾つかのデータ項目またはリテラルのすべてまたは一部を 1 つのデータ項目に結合する場合に使用します。1 つの STRING ステートメントを、幾つかの MOVE ステートメントの代わりに使用できます。

STRING ステートメントは、示された順序でデータを受信データ項目に転送します。STRING ステートメントでは、以下のものも指定します。

- 送信フィールド・セットごとの区切り文字。検出されると、これにより送信フィールドの転送は停止されます (DELIMITED BY 句)
- (オプション) すべての送信データが処理される前に受信フィールドが満杯になっている場合に実行する処置 (ON OVERFLOW 句)
- (オプション) データの転送先である受信フィールド内の左端文字位置を示す、整数データ項目 (WITH POINTER 句)

受信データ項目を編集項目にしてはなりません。また表示浮動小数点項目や国別浮動小数点項目にしてもなりません。受信データ項目が何を持っているかによって次のような違いが生じます。

- USAGE DISPLAY を持っている場合、ステートメント内のそれぞれの ID は (POINTERID を除いて) USAGE DISPLAY を持っている必要があり、ステートメント内のそれぞれのリテラルは英数字にする必要があります。
- USAGE NATIONAL を持っている場合、ステートメント内のそれぞれの ID は (POINTER ID を除いて) USAGE NATIONAL を持っている必要があり、ステートメント内のそれぞれのリテラルは国別でなければなりません。
- USAGE DISPLAY-1 を持っている場合、ステートメント内のそれぞれの ID は (POINTER ID を除いて) USAGE DISPLAY-1 を持っている必要があり、ステートメント内のそれぞれのリテラルは DBCS でなければなりません。

STRING ステートメントによってデータが書き込まれる、受信フィールドの特定部分のみが変更されます。

『例: STRING ステートメント』

関連タスク

159 ページの『ストリングの結合および分割におけるエラーの処理』

関連参照

STRING ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: STRING ステートメント

次の例は、レコードから出力行に、情報の選択およびフォーマット設定を行う STRING ステートメントを示しています。

FILE SECTION は以下のレコードを定義します。

```
01 RCD-01.
   05 CUST-INFO.
       10 CUST-NAME      PIC X(15).
       10 CUST-ADDR      PIC X(35).
   05 BILL-INFO.
       10 INV-NO          PIC X(6).
       10 INV-AMT         PIC $,$,$$.99.
       10 AMT-PAID        PIC $,$,$$.99.
       10 DATE-PAID       PIC X(8).
       10 BAL-DUE         PIC $,$,$$.99.
       10 DATE-DUE        PIC X(8).
```

WORKING-STORAGE SECTION は以下の各フィールドを定義します。

```
77 RPT-LINE             PIC X(120).
77 LINE-POS             PIC S9(3).
77 LINE-NO              PIC 9(5) VALUE 1.
77 DEC-POINT            PIC X VALUE ".".
```

レコード RCD-01 には、以下の情報が含まれています (記号 *b* はブランク・スペースを示します)。

```
J.B.bSMITHbbbbbb
444bSPRINGbST.,bCHICAGO,bILL.bbbbbbb
A14275
$4,736.85
$2,400.00
09/22/76
$2,336.85
10/22/76
```

PROCEDURE DIVISION では、以下の設定値は STRING ステートメントの前にきます。

- RPT-LINE は SPACES に設定されます。
- LINE-POS (POINTER フィールドとして使用されるデータ項目) は 4 に設定されます。

STRING ステートメントを以下に示します。

```
STRING
  LINE-NO SPACE CUST-INFO INV-NO SPACE DATE-DUE SPACE
  DELIMITED BY SIZE
  BAL-DUE
  DELIMITED BY DEC-POINT
  INTO RPT-LINE
  WITH POINTER LINE-POS.
```

STRING ステートメントが実行される前、POINTER フィールドの LINE-POS は値 4 を持っているので、データは受信フィールド RPT-LINE に移動されるとき、文字位置 4 から開始されます。位置 1 から 3 の文字は未変更のままです。

DELIMITED BY SIZE を指定している送信項目は、その全体が受信フィールドに移動されます。BAL-DUE は DEC-POINT で区切られているので、受信フィールドへの BAL-DUE の移動は、小数点 (DEC-POINT の値) が検出されると停止します。

STRING の結果

STRING ステートメントが実行されると、次の表に示されるように、項目は RPT-LINE に移動されます。

項目	位置
LINE-NO	4 - 8
スペース	9
CUST-INFO	10 - 59
INV-NO	60 - 65
スペース	66
DATE-DUE	67 - 74
スペース	75
BAL-DUE の小数点より前の部分	76 - 81

STRING ステートメントの実行後、LINE-POS の値は 82 であり、RPT-LINE は以下に示す値を持ちます。

Column					
4	10		60	67	76
↓	↓		↓	↓	↓
00001	J.B. SMITH	444 SPRING ST., CHICAGO, ILL.	A14275	10/22/76	\$2,336

データ項目の分割 (UNSTRING)

UNSTRING ステートメントは、送信フィールドを複数の受信フィールドに分割するために使用します。1 つの UNSTRING ステートメントを、幾つかの MOVE ステートメントの代わりに使用できます。

UNSTRING ステートメントでは、以下のものを指定することができます。

- 区切り文字。区切り文字の 1 つが送信フィールドで検出されると、現行受信フィールドは受け取りを停止し、次のフィールド (ある場合) が受け取りを開始します (DELIMITED BY 句)
- 区切り文字用のフィールド。送信フィールドで区切り文字が検出されると、現行受信フィールドは受け取りを停止します (DELIMITER IN 句)
- 現行受信フィールドに入れられた文字の数を保管する整数データ項目 (COUNT IN 句)
- UNSTRING 処理が開始される送信フィールド内の左端文字位置を示す、整数データ項目 (WITH POINTER 句)
- 操作対象の受信フィールドの数の計算値を保管する、整数データ項目 (TALLYING IN 句)
- 送信データ項目の最後に達する前にすべての受信フィールドが満杯になった場合に実行する処置 (ON OVERFLOW 句)

送信データ項目および DELIMITED BY 句の区切り文字は、カテゴリ英字、英数字、英数字編集、DBCS、国別、または国別編集にする必要があります。

受信データ項目は、カテゴリ英字、英数字、数値、DBCS、または国別にすることができます。数値の受信データ項目は、ゾーン 10 進数または国別 10 進数にする必要があります。受信データ項目が何を持っているかによって次のような違いが生じます。

- USAGE DISPLAY を持っている場合、送信項目およびステートメント内のそれぞれの区切り文字項目は USAGE DISPLAY を持っている必要があり、ステートメント内のそれぞれのリテラルは英数字でなければなりません。
- USAGE NATIONAL を持っている場合、送信項目およびステートメント内のそれぞれの区切り文字項目は USAGE NATIONAL を持っている必要があり、ステートメント内のそれぞれのリテラルは国別でなければなりません。
- USAGE DISPLAY-1 を持っている場合、送信項目およびステートメント内のそれぞれの区切り文字項目は USAGE DISPLAY-1 を持っている必要があり、ステートメント内のそれぞれのリテラルは DBCS でなければなりません。

103 ページの『例: UNSTRING ステートメント』

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

159 ページの『ストリングの結合および分割におけるエラーの処理』

関連参照

UNSTRING ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: UNSTRING ステートメント

次の例は、選択された情報を入力レコードから転送する UNSTRING ステートメントを示しています。情報の中には、印刷用に編成されているものもあれば、その後の処理用に編成されているものもあります。

FILE SECTION は以下のレコードを定義します。

```
* Record to be acted on by the UNSTRING statement:
01 INV-RCD.
   05 CONTROL-CHARS          PIC XX.
   05 ITEM-INDENT             PIC X(20).
   05 FILLER                  PIC X.
   05 INV-CODE                PIC X(10).
   05 FILLER                  PIC X.
   05 NO-UNITS                PIC 9(6).
   05 FILLER                  PIC X.
   05 PRICE-PER-M             PIC 99999.
   05 FILLER                  PIC X.
   05 RTL-AMT                 PIC 9(6).99.

*
* UNSTRING receiving field for printed output:
01 DISPLAY-REC.
   05 INV-NO                  PIC X(6).
   05 FILLER                  PIC X VALUE SPACE.
   05 ITEM-NAME               PIC X(20).
   05 FILLER                  PIC X VALUE SPACE.
   05 DISPLAY-DOLS            PIC 9(6).

*
* UNSTRING receiving field for further processing:
01 WORK-REC.
   05 M-UNITS                 PIC 9(6).
   05 FIELD-A                 PIC 9(6).
   05 WK-PRICE REDEFINES FIELD-A PIC 9999V99.
   05 INV-CLASS               PIC X(3).

*
* UNSTRING statement control fields:
77 DBY-1                      PIC X.
77 CTR-1                      PIC S9(3).
77 CTR-2                      PIC S9(3).
77 CTR-3                      PIC S9(3).
77 CTR-4                      PIC S9(3).
77 DLTR-1                     PIC X.
77 DLTR-2                     PIC X.
77 CHAR-CT                    PIC S9(3).
77 FLDS-FILLED                PIC S9(3).
```

PROCEDURE DIVISION では、以下の設定値は UNSTRING ステートメントの前にきます。

- 区切り文字用としてピリオド (.) を DBY-1 に入れます。
- CHAR-CT (POINTER フィールド) は 3 に設定します。
- 値ゼロ (0) を FLDS-FILLED (TALLYING フィールド) に入れます。
- データは読み取られてレコード INV-RCD に入れます。このレコードのフォーマットを以下のとおりです。

Column						
1	10	20	30	40	50	60
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
ZYFOUR-PENNY-NAILS			707890/BBA	475120	00122	000379.50

UNSTRING ステートメントを以下に示します。

```
* Move subfields of INV-RCD to the subfields of DISPLAY-REC
* and WORK-REC:
  UNSTRING INV-RCD
    DELIMITED BY ALL SPACES OR "/" OR DBY-1
    INTO ITEM-NAME      COUNT IN CTR-1
      INV-NO            DELIMITER IN DLTR-1  COUNT IN CTR-2
      INV-CLASS
      M-UNITS          COUNT IN CTR-3
      FIELD-A
      DISPLAY-DOLS DELIMITER IN DLTR-2  COUNT IN CTR-4
    WITH POINTER CHAR-CT
    TALLYING IN  FLDS-FILLED
    ON OVERFLOW GO TO UNSTRING-COMPLETE.
```

UNSTRING ステートメントの実行前には POINTER フィールドである CHAR-CT の値は 3 であるので、INV-RCD 内の CONTROL-CHARS フィールドの 2 つの文字位置は無視されます。

UNSTRING の結果

この UNSTRING ステートメントを実行すると、以下のステップで処理が行われます。

1. INV-RCD の桁 3 から 18 (FOUR-PENNY-NAILS) が ITEM-NAME に入れられ、区域内で左寄せされ、未使用の 4 つの文字位置にスペースが埋め込まれます。値 16 が CTR-1 に入れられます。
2. ALL SPACES が区切り文字としてコーディングされているので、桁 19 から 23 の 5 つの連続スペース文字は 1 つの区切り文字とみなされます。
3. 桁 24 から 29 (707890) が INV-NO に入れられます。区切り文字のスラッシュ (/) が DLTR-1 に入れられ、値 6 が CTR-2 に入れられます。
4. 桁 31 から 33 (BBA) が INV-CLASS に入れられます。区切り文字は SPACE ですが、区切り文字の受取域としてフィールドが定義されていないので、桁 34 のスペースは迂回されます。
5. 桁 35 から 40 (475120) が M-UNITS に入れられます。値 6 が CTR-3 に入れられます。区切り文字は SPACE ですが、区切り文字の受取域としてフィールドが定義されていないので、桁 41 のスペースは迂回されます。
6. 桁 42 から 46 (00122) が FIELD-A に入れられ、領域内で右寄せされます。高位桁位置にはゼロ (0) が埋め込まれます。区切り文字は SPACE ですが、区切り文字の受取域としてフィールドが定義されていないので、桁 47 のスペースは迂回されます。
7. 桁 48 から 53 (000379) が DISPLAY-DOLS に入れられます。DBY-1 内のピリオド (.) 区切り文字が DLTR-2 に入れられ、値 6 が CTR-4 に入れられます。
8. すべての受信フィールドに対して操作が行われたが、INV-RCD の 2 文字が検査されなかったため、ON OVERFLOW ステートメントが実行されます。UNSTRING ステートメントの実行は完了です。

UNSTRING ステートメントの実行後、フィールドには以下の値が入っています。

フィールド	値
DISPLAY-REC	707890 FOUR-PENNY-NAILS 000379
WORK-REC	475120000122BBA
CHAR-CT (POINTER フィールド)	55
FLDS-FILLED (TALLYING フィールド)	6

ヌル終了ストリングの取り扱い

さまざまな手段を使って、ヌル終了ストリング (例えば、C プログラムとの間でやり取りされるストリング) を構成し取り扱うことができます。

例えば、次のようなことが可能です。

- ヌル終了リテラル定数 (Z". . . ")。
- INSPECT ステートメントを使用して、ヌル終了ストリング内の文字数をカウントする。

```
MOVE 0 TO char-count
INSPECT source-field TALLYING char-count
                        FOR CHARACTERS
                        BEFORE X"00"
```

- UNSTRING ステートメントを使用して、ヌル終了ストリング内の文字をターゲット・フィールドに移動し、文字カウントを得る。

```
WORKING-STORAGE SECTION.
01 source-field          PIC X(1001).
01 char-count            COMP-5 PIC 9(4).
01 target-area.
   02 individual-char OCCURS 1 TO 1000 TIMES DEPENDING ON char-count
                        PIC X.
. . .
PROCEDURE DIVISION.
   UNSTRING source-field DELIMITED BY X"00"
                        INTO target-area
                        COUNT IN char-count
   ON OVERFLOW
      DISPLAY "source not null terminated or target too short"
   END-UNSTRING
```

- SEARCH ステートメントを使用して、後続ヌルまたはスペース文字を見つける。検査するストリングを単一文字からなるテーブルとして定義してください。
- ループのフィールドの各文字を検査する (PERFORM)。フィールドの各文字は、source-field (I:1) のような参照修飾子を使用して検査することができます。

106 ページの『例: ヌル終了ストリング』

関連タスク

526 ページの『ヌル終了ストリングの取り扱い』

関連参照

英数字リテラル (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: ヌル終了ストリング

以下の例は、ヌル終了ストリングを処理できる幾つかの方法を示しています。

```
01 L pic X(20) value z'ab'.
01 M pic X(20) value z'cd'.
01 N pic X(20).
01 N-Length pic 99 value zero.
01 Y pic X(13) value 'Hello, World!'.
. . .
* Display null-terminated string
  Inspect N tallying N-length
    for characters before initial x'00'
  Display 'N: ' N(1:N-Length) ' Length: ' N-Length
. . .
* Move null-terminated string to alphanumeric, strip null
  Unstring N delimited by X'00' into X
. . .
* Create null-terminated string
  String Y      delimited by size
    X'00' delimited by size
  into N.
. . .
* Concatenate two null-terminated strings to produce another
  String L      delimited by x'00'
    M          delimited by x'00'
    X'00' delimited by size
  into N.
```

データ項目のサブストリングの参照

参照修飾子を使用することにより、USAGE DISPLAY、DISPLAY-1、または NATIONAL を持つデータ項目のサブストリングを参照します。参照修飾子を使用すると、組み込み関数によって戻される英数字または国別文字ストリングのサブストリングを参照することもできます。

以下の例は、参照修飾子を使用して、Customer-Record という名前のデータ項目の 20 文字のサブストリングを参照する方法を示しています。

```
Move Customer-Record(1:20) to Orig-Customer-Name
```

データ項目の直後に括弧で囲んだ参照修飾子をコーディングします。例に示されるように、参照修飾子は、コロンで分離された 2 つの値を含むことができます。

1. サブストリングを開始したい文字の序数位置 (左からの)
2. (オプション) 望ましいサブストリングの長さ (文字位置の数)

USAGE DISPLAY を持つ項目の参照修飾子の位置および長さは、1 バイト文字で表されます。USAGE DISPLAY-1 または NATIONAL を持つ項目の参照修飾子の位置および長さは、それぞれ DBCS 文字位置および国別文字位置で表されます。

参照修飾子の長さを省略すると (先頭文字の序数位置とその後のコロンのみをコーディングすると)、サブストリングは項目の最後まで延長されます。可能であれば、より単純でエラーになりにくいコーディング手法として、長さを省略してください。

参照修飾子を使用すると、英数字グループ、英数字編集データ項目、数字編集データ項目、表示浮動小数点データ項目、およびゾーン 10 進数データ項目を含め、USAGE DISPLAY データ項目のサブストリングを参照できます。これらのデータ項目

のいずれかを参照修飾した場合、結果はカテゴリ英数字になります。英字データ項目を参照修飾した場合、結果はカテゴリ英字になります。

参照修飾子を使用すると、国別グループ、国別編集データ項目、数字編集データ項目、国別浮動小数点データ項目、および国別 10 進数データ項目を含め、USAGE NATIONAL データ項目のサブストリングを参照することができます。これらのデータ項目のいずれかを参照修飾した場合、結果はカテゴリ国別になります。例えば、次のように国別 10 進数データ項目を定義するとしましょう。

```
01 NATL-DEC-ITEM Usage National Pic 999 Value 123.
```

NATL-DEC-ITEM はカテゴリ数値なので、NATL-DEC-ITEM を算術式で使用できます。しかし、NATL-DEC-ITEM(2:1) (国別文字 2、つまり 16 進表記は NX"0032") はカテゴリ国別なので、これを算術式で使用することはできません。

参照修飾子を使用すると、可変長項目を含め、テーブル項目のサブストリングを参照することができます。テーブル記入項目のサブストリングを参照するには、参照修飾子の前に添え字式をコーディングします。例えば、PRODUCT-TABLE は、正しくコーディングされた文字ストリング・テーブルであると想定しましょう。D をテーブル内の 2 番目のストリングの 4 文字目に移動するために、次のステートメントをコーディングできます。

```
MOVE 'D' to PRODUCT-TABLE (2), (4:1)
```

参照修飾子の中の 2 つの値の一方または両方を、変数または算術式としてコーディングできます。

109 ページの『例: 参照修飾子としての演算式』

数字関数 ID は、算術式を使用できる場所ならどこでも使用できるので、左端文字位置または長さ (あるいはその両方) として、数字関数 ID を参照修飾子の中でコーディングできます。

109 ページの『例: 参照修飾子としての組み込み関数』

参照修飾子の中のそれぞれの数値は少なくとも 1 の値でなければなりません。サブストリングの最後を越えて参照することがないよう、2 つの数値の合計が、データ項目の全長を 2 文字位置以上超えるようなことがあってはなりません。

左端の文字位置または長さ値が固定小数点の非整数の場合には、整数を作成するために切り捨てが行われます。浮動小数点の非整数の場合には、整数を作成するための丸めが行われます。

以下のオプションを使用すると、範囲外の参照修飾子が検出され、実行時メッセージによって違反が示されます。

- SSRANGE コンパイラー・オプション
- CHECK ランタイム・オプション

関連概念

108 ページの『参照修飾子』

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

69 ページの『テーブル内の項目の参照』

関連参照

291 ページの『SSRANGE』

参照変更 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

関数定義 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

参照修飾子

参照修飾子を使用すると、データ項目のサブストリングを容易に参照できます。

例えば、システムから現在の時刻を取り出して、その値を拡張形式で表示したいとします。現在の時刻は、ACCEPT ステートメントを使用して取り出すことができます。このステートメントは、次の形式で、時、分、秒、および 100 分の 1 秒を戻します。

HHMMSSss

しかし、現在の時刻を次の形式で表示したいとします。

HH:MM:SS

参照修飾子を使用しない場合は、両方の形式についてのデータ項目を定義しなければなりません。さらに、1 つの形式を別の形式に変換するためのコードも書く必要があります。

参照修飾子を使用する場合は、TIME エlementを記述するサブフィールドに名前を指定する必要はありません。必要なデータ定義は、システムによって戻される時刻用のデータ定義だけです。以下に、その例を示します。

```
01 REFMOD-TIME-ITEM    PIC X(8).
```

次のコードは、時刻値を取り出して、拡張します。

```
ACCEPT REFMOD-TIME-ITEM FROM TIME.
DISPLAY "CURRENT TIME IS: "
* Retrieve the portion of the time value that corresponds to
* the number of hours:
REFMOD-TIME-ITEM (1:2)
": "
* Retrieve the portion of the time value that corresponds to
* the number of minutes:
REFMOD-TIME-ITEM (3:2)
": "
* Retrieve the portion of the time value that corresponds to
* the number of seconds:
REFMOD-TIME-ITEM (5:2)
```

109 ページの『例: 参照修飾子としての演算式』

109 ページの『例: 参照修飾子としての組み込み関数』

関連タスク

35 ページの『画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)』

106 ページの『データ項目のサブストリングの参照』

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

関連参照

参照変更 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: 参照修飾子としての演算式

あるフィールドに右揃えされたいいくつかの文字が入っている場合に、文字を別のフィールドに移動し、右ではなく左に揃えたいとします。これは、参照修飾子と INSPECT ステートメントを使用して行うことができます。

プログラムに次のデータが入っているとします。

```
01 LEFTY      PIC X(30).  
01 RIGHTY     PIC X(30) JUSTIFIED RIGHT.  
01 I          PIC 9(9)  USAGE BINARY.
```

プログラムは、先行するスペースの数をカウントし、参照修飾子内の算術式を使用して、右揃えされた文字を別のフィールドに移動し、左寄せします。

```
MOVE SPACES TO LEFTY  
MOVE ZERO TO I  
INSPECT RIGHTY  
    TALLYING I FOR LEADING SPACE.  
IF I IS LESS THAN LENGTH OF RIGHTY THEN  
    MOVE RIGHTY ( I + 1 : LENGTH OF RIGHTY - I ) TO LEFTY  
END-IF
```

MOVE ステートメントは、RIGHTY の文字を、I + 1 で計算された位置から、LENGTH OF RIGHTY - I で計算された長さだけ、フィールド LEFTY に移動します。

例: 参照修飾子としての組み込み関数

コンパイル時にサブストリングの左端位置またはその長さを知らない場合、参照修飾子の中で組み込み関数を使用できます。

例えば、以下のコード・フラグメントにより、Customer-Record のサブストリングがデータ項目 WS-name に移動されます。サブストリングは、実行時に決定されます。

```
05 WS-name      Pic x(20).  
05 Left-posn    Pic 99.  
05 I            Pic 99.  
...  
Move Customer-Record(Function Min(Left-posn I):Function Length(WS-name)) to WS-name
```

整数関数を使わなければならない位置で非整数関数を使用したい場合、INTEGER または INTEGER-PART 関数を使用して結果を整数に変換できます。以下に、その例を示します。

```
Move Customer-Record(Function Integer(Function Sqrt(I)): ) to WS-name
```

関連参照

INTEGER (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

INTEGER-PART (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

データ項目の計算および置換 (INSPECT)

INSPECT ステートメントを使用して、データ項目内の文字または文字グループを検査し、必要に応じてそれらを置換します。

INSPECT ステートメントを使用して以下のタスクを行います。

- データ項目内に特定文字が現れる回数をカウントします (TALLYING 句)。
- データ項目またはデータ項目内の選択部分に、指定された文字 (スペース、アスタリスク、またはゼロなど) を充てんします (REPLACING 句)。
- データ項目内に特定文字または文字ストリングがあればそれらすべてを、指定された置換文字に変換します (CONVERTING 句)。

検査する項目として、以下のデータ項目の 1 つを指定できます。

- USAGE DISPLAY、USAGE DISPLAY-1、または USAGE NATIONAL として明示的または暗黙的に記述された基本項目
- 英数字グループ項目または国別グループ項目

検査する項目に何が指定されているかによって次のような違いが生じます。

- USAGE DISPLAY が指定されている場合、ステートメント内のそれぞれの ID は (TALLYING カウント・フィールドを除いて) USAGE DISPLAY が指定されている必要があります、ステートメント内のそれぞれのリテラルは英数字でなければなりません。
- USAGE NATIONAL が指定されている場合、ステートメント内のそれぞれの ID は (TALLYING カウント・フィールドを除いて) USAGE NATIONAL が指定されている必要があります、ステートメント内のそれぞれのリテラルは国別でなければなりません。
- USAGE DISPLAY-1 が指定されている場合、ステートメント内のそれぞれの ID は (TALLYING カウント・フィールドを除いて) USAGE DISPLAY-1 が指定されている必要があります、ステートメント内のそれぞれのリテラルは DBCS リテラルでなければなりません。

『例: INSPECT ステートメント』

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連参照

INSPECT ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: INSPECT ステートメント

次の例では、文字を調べて置換するために INSPECT ステートメントの使用法をいくつか示します。

次の例では、INSPECT ステートメントを使用して、データ項目 DATA-2 内の文字を調べ、置換します。データ項目内に現れる先行ゼロ (0) の数は、累算されて COUNTRY に入れます。文字 C の最初のインスタンスの後に続く文字 A の最初のインスタンスは、文字 Z に置き換えられます。

```

77 COUNTR          PIC 9   VALUE ZERO.
01 DATA-2         PIC X(11).
. . .
  INSPECT DATA-2
    TALLYING COUNTR FOR LEADING "0"
    REPLACING FIRST "A" BY "2" AFTER INITIAL "C"

```

DATA-2 (実行前)	COUNTR (実行後)	DATA-2 (実行後)
00ACADEMY00	2	00AC2DEMY00
0000ALABAMA	4	0000ALABAMA
CHATHAM0000	0	CH2THAM0000

次の例では、INSPECT ステートメントを使用して、データ項目 DATA-3 内の文字を調べ、置換します。引用符 (") の最初のインスタンスより前にある各文字は、文字 0 で置き換えられます。

```

77 COUNTR          PIC 9   VALUE ZERO.
01 DATA-3         PIC X(8).
. . .
  INSPECT DATA-3
    REPLACING CHARACTERS BY ZEROS BEFORE INITIAL QUOTE

```

DATA-3 (実行前)	COUNTR (実行後)	DATA-3 (実行後)
456"ABEL	0	000"ABEL
ANDES"12	0	00000"12
"Twas BR	0	"Twas BR

次の例では、AFTER 句と BEFORE 句を指定した INSPECT CONVERTING を使用して、データ項目 DATA-4 内の文字を調べ、置換します。文字 / の最初のインスタンスより後にあり、文字 ?(もしあれば) の最初のインスタンスより前にあるすべての文字が、小文字から大文字に変換されます。

```

01 DATA-4         PIC X(11).
. . .
  INSPECT DATA-4
    CONVERTING
      "abcdefghijklmnopqrstuvwxyz" TO
      "ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ"
    AFTER INITIAL "/"
    BEFORE INITIAL "?"

```

DATA-4 (実行前)	DATA-4 (実行後)
a/five/?six	a/FIVE/?six
r/Rexx/RRRr	r/REXX/RRRR
zfour?inspe	zfour?inspe

データ項目の変換 (組み込み関数)

組み込み関数を使用して、文字ストリング・データ項目を他のいくつかのフォーマットに変換できます。例えば、大文字または小文字、逆順、数値、別のコード・ページからあるコード・ページに変換できます。

NATIONAL-OF および DISPLAY-OF 組み込み関数を使用して、国別 (Unicode) ストリングとの間で変換を行うことができます。

INSPECT ステートメントを使用して文字を変換することもできます。

110 ページの『例: INSPECT ステートメント』

関連タスク

『大文字または小文字への変換 (UPPER-CASE、LOWER-CASE)』

『逆順への変換 (REVERSE)』

113 ページの『数値への変換 (NUMVAL、NUMVAL-C)』

114 ページの『あるコード・ページから別のコード・ページへの変換』

大文字または小文字への変換 (UPPER-CASE、LOWER-CASE)

UPPER-CASE および LOWER-CASE 組み込み関数を使用すれば、英数字、英字、または国別ストリングの大/小文字を容易に変更できます。

```
01 Item-1 Pic x(30) Value "Hello World!".
01 Item-2 Pic x(30).
...
Display Item-1
Display Function Upper-case(Item-1)
Display Function Lower-case(Item-1)
Move Function Upper-case(Item-1) to Item-2
Display Item-2
```

上記のコードは、次のメッセージをシステムの論理出力装置に表示します。

```
Hello World!
HELLO WORLD!
hello world!
HELLO WORLD!
```

DISPLAY ステートメントは、Item-1 の実際の内容は変更せず、文字の表示方法にのみ影響を与えます。しかし、MOVE ステートメントでは、Item-2 の内容が大文字に置き換わります。

この変換では、現行のロケールで定義されたケース・マッピングが使用されます。関数結果の長さと引数の長さは異なっても構いません。

関連タスク

35 ページの『画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)』

37 ページの『画面上またはファイル内での値の表示 (DISPLAY)』

逆順への変換 (REVERSE)

REVERSE 組み込み関数を使用すると、ストリング内の文字の順序を逆にすることができます。

Move Function Reverse(Orig-cust-name) To Orig-cust-name

例えば、上のステートメントは、Orig-cust-name 中の文字の順序を逆にします。開始値が JOHNSONbbb であれば、ステートメントの実行後の値は bbbNOSNHOJ になります (b はブランク・スペースを表します)。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

数値への変換 (NUMVAL、NUMVAL-C)

NUMVAL および NUMVAL-C 関数は、文字ストリング (英数字または国別リテラル、あるいはクラス英数字またはクラス国別データ項目) を数値に変換します。これらの関数を使用して、数値的に処理できるよう、フリー・フォーマット文字表現の数値を数値形式に変換します。

```
01 R      Pic x(20) Value "- 1234.5678".
01 S      Pic x(20) Value " $12,345.67CR".
01 Total  Usage is Comp-1.
. . .
Compute Total = Function Numval(R) + Function Numval-C(S)
```

NUMVAL-C は、上の例で示されているように、引数に通貨記号またはコンマ (またはその両方) が含まれているときに使用します。文字ストリングの前または後ろに代数符号を入れることができ、その符号が処理されます。引数は、デフォルト・オプション ARITH(COMPAT) (互換モード) でコンパイルするときは 18 桁を超えてはならず、ARITH(EXTEND) (拡張モード) でコンパイルするときは 31 桁を超えてはなりません (桁数には編集記号は含みません)。

NUMVAL および NUMVAL-C は、互換モードでは長精度 (64 ビット) 浮動小数点値を返し、拡張モードでは拡張精度 (80 ビット) 浮動小数点値を返します。これらの関数への参照は、数値データ項目への参照を表します。

最大でも、正確に長精度浮動小数点に変換できるのは 15 桁の 10 進数字までです (変換および精度に関する以下の関連参照で説明されています)。NUMVAL または NUMVAL-C の引数が 15 桁を超える場合、ARITH(EXTEND) コンパイラー・オプションを指定して、引数の値を正確に表現できる拡張精度関数結果が戻されるようにすることをお勧めします。

NUMVAL または NUMVAL-C を使用する場合は、数値データを固定形式で静的に宣言したり、入力データを正確な方法で入力したりする必要はありません。例えば、次のように入力される数値を定義するとします。

```
01 X      Pic S999V99 leading sign is separate.
. . .
Accept X from Console
```

アプリケーションのユーザーは、PICTURE 文節で定義されているとおりに正確に数値を入力しなければなりません。以下に、その例を示します。

```
+001.23
-300.00
```

しかし、NUMVAL 関数を使用する場合は、次のようにコーディングすることができます。

```
01 A      Pic x(10).
01 B      Pic S999V99.
. . .
Accept A from Console
Compute B = Function Numval(A)
```

入力は次のようにすることができます。

1.23
-300

関連概念

45 ページの『数値データの形式』
52 ページの『データ形式の変換』
175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の間の変換』

関連参照

52 ページの『変換および精度』
252 ページの『ARITH』

あるコード・ページから別のコード・ページへの変換

DISPLAY-OF 組み込み関数と NATIONAL-OF 組み込み関数をネストすると、任意のコード・ページを別の任意のコード・ページに簡単に変換できます。

例えば、次のコードでは、EBCDIC のストリングを ASCII のストリングに変換しています。

```
77 EBCDIC-CCSID PIC 9(4) BINARY VALUE 1140.  
77 ASCII-CCSID PIC 9(4) BINARY VALUE 819.  
77 Input-EBCDIC PIC X(80).  
77 ASCII-Output PIC X(80).  
.  
.  
.  
* Convert EBCDIC to ASCII  
  Move Function Display-of  
    (Function National-of (Input-EBCDIC EBCDIC-CCSID),  
     ASCII-CCSID)  
  to ASCII-output
```

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の間の変換』

データ項目の評価 (組み込み関数)

組み込み関数を使用して、照合シーケンス内の文字の序数位置を判別したり、一連のものから最大項目または最小項目を検出したり、データ項目の長さを検出したり、あるいはプログラムがコンパイルされた時間を判別したりできます。

以下の組み込み関数を使用します。

- CHAR および ORD は、プログラム内で使用される照合シーケンスを基準にして、整数および単一の英字または英数字を評価するためのものです。
- MAX、MIN、ORD-MAX、および ORD-MIN は、USAGE NATIONAL データ項目を含む一連のデータ項目から最大項目または最小項目を検出するためのものです。
- LENGTH は、データ項目の長さ (USAGE NATIONAL データ項目を含む) を調べるためのものです。

- WHEN-COMPILED は、プログラムがコンパイルされた日時を調べるためのものです。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

関連タスク

『照合シーケンスに関する単一文字の評価』

『最大または最小データ項目の検出』

118 ページの『データ項目の長さの検出』

118 ページの『コンパイルの日付の検出』

照合シーケンスに関する単一文字の評価

照合シーケンス内のある特定の英字または英数字の序数位置を検出するには、引数として文字を持つ ORD 関数を使用します。ORD はその序数位置を表す整数を返します。

データ項目の 1 文字のサブストリングを ORD への引数として使用する方法があります。

```
IF Function Ord(Customer-record(1:1)) IS > 194 THEN . . .
```

ある文字の照合シーケンスにおける序数位置がわかっていて、それに対応する文字が知りたい場合には、CHAR でその整数の序数位置を引数として使用することができます。CHAR は、要求された文字を返します。以下に、その例を示します。

```
INITIALIZE Customer-Name REPLACING ALPHABETIC BY Function Char(65)
```

関連参照

CHAR (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ORD (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

最大または最小データ項目の検出

2 つ以上の英数字、英字、または国別データ項目のうち、どれが最大値を持つかを判別するには、MAX または ORD-MAX 組み込み関数を使用します。最小値を持つ項目を判別するには、MIN または ORD-MIN を使用します。これらの関数は、照合シーケンスに従って評価します。

USAGE NATIONAL を持つ数値項目も含めて、数値項目を比較するには、MAX、ORD-MAX、MIN、または ORD-MIN を使用することができます。これらの組み込み関数では、引数の代数值が比較されます。

MAX および MIN 関数は、指定された引数の 1 つの内容を返します。例えば、プログラムに以下のデータ定義が含まれているとします。

```
05 Arg1   Pic x(10) Value "THOMASSON ".
05 Arg2   Pic x(10) Value "THOMAS    ".
05 Arg3   Pic x(10) Value "VALLEJO   ".
```

次のステートメントは、VALLEJObbb を Customer-record の最初の 10 文字位置に割り当てます (ここで b はブランク・スペースを表します)。

```
Move Function Max(Arg1 Arg2 Arg3) To Customer-record(1:10)
```

代わりに MIN を使用すると、THOMASbbbb が割り当てられます。

ORD-MAX および ORD-MIN 関数は、指定された引数のリストの中で最大値または最小値を持つ引数の (左からカウントした) 序数位置を表す整数を戻します。上記の例で ORD-MAX 関数を使用すると、数字関数への参照が有効場所にないので、コンパイラーはエラー・メッセージを出すことになります。次のステートメントは、ORD-MAX の有効な使用例を示しています。

```
Compute x = Function Ord-max(Arg1 Arg2 Arg3)
```

上のステートメントは、直前の例と同じ引数を使用された場合、整数 3 を x に割り当てます。代わりに ORD-MIN を使用した場合には、整数 2 が戻されます。Arg1、Arg2、および Arg3 が配列 (テーブル) の連続エレメントであったなら、上の例はもっと現実的なものになると思われます。

任意の引数に国別項目を指定する場合、すべての引数をクラス国別と指定する必要があります。

関連タスク

55 ページの『算術の実行』

83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』

『英数字または国別関数によって戻される可変長結果』

関連参照

MAX (「COBOL for Windows 言語解説書」)

MIN (「COBOL for Windows 言語解説書」)

ORD-MAX (「COBOL for Windows 言語解説書」)

ORD-MIN (「COBOL for Windows 言語解説書」)

英数字または国別関数によって戻される可変長結果

英数字または国別関数の結果は、関数引数によって、長さや値が異なることがあります。

次の例では、R3 に移動されるデータの量および COMPUTE ステートメントの結果は、R1 および R2 の値とサイズによって異なります。

```
01 R1    Pic x(10) value "e".
01 R2    Pic x(05) value "f".
01 R3    Pic x(20) value spaces.
01 L     Pic 99.
. . .
      Move Function Max(R1 R2) to R3
      Compute L = Function Length(Function Max(R1 R2))
```

このコードの結果は次のようになります。

- R2 は R1 より大きいものと評価されます。
- スtring 'fbbbb' が R3 に移動されます (ここで b はブランク・スペースを表します)。(R3 内の残りの文字位置にはスペースが埋められます。)
- L は値 5 と評価されます。

R1 が「e」ではなく「g」を含んでいたなら、コードの結果は以下のようになります。

- R1 は、R2 より大きいと評価されます。

- スtring 'gbbbbbbbbb' が R3 に移動されます。(R3 内の残りの文字位置にはスペースが埋められます。)
- 値 10 が L に割り当てられます。

プログラムが関数引数として国別データを使用する場合、同様に関数結果の長さおよび値が変化します。例えば、以下のコードは上のフラグメントと等しいですが、英数字データではなく国別データを使用します。

```
01 R1    Pic n(10) national value "e".
01 R2    Pic n(05) national value "f".
01 R3    Pic n(20) national value spaces.
01 L     Pic 99    national.
. . .
      Move Function Max(R1 R2) to R3
      Compute L = Function Length(Function Max(R1 R2))
```

このコードの結果は以下のようになります。これらは、国別文字についてのものであることを除けば、最初の結果のセットと似ています。

- R2 は R1 より大きいものと評価されます。
- String NX"0066 0020 0020 0020 0020" (国別文字「fbbbb」と同等のもの。ここで、b はブランク・スペースを表します) は、ここでは読みやすくするためスペースが挿入された 16 進表記で示されており、R3 に移動されます。充てんされていない R3 内の文字位置には、国別スペースが埋め込まれます。
- L は値 5 (R2 の国別文字位置の長さ) と評価されます。

英数字または国別の関数からの可変長出力を取り扱うことがあります。それに応じてプログラムを設計しなければなりません。例えば、書き込むレコードによって長さが異なる可能性があるときには、可変長レコード・ファイルの使用を考えることが必要になります。

```
File Section.
FD Output-File Recording Mode V.
01 Short-Customer-Record Pic X(50).
01 Long-Customer-Record Pic X(70).
Working-Storage Section.
01 R1    Pic x(50).
01 R2    Pic x(70).
. . .
      If R1 > R2
        Write Short-Customer-Record from R1
      Else
        Write Long-Customer-Record from R2
      End-if
```

関連タスク

115 ページの『最大または最小データ項目の検出』

55 ページの『算術の実行』

関連参照

MAX (「COBOL for Windows 言語解説書」)

データ項目の長さの検出

LENGTH 関数をさまざまなコンテキスト (テーブルおよび数値データを含む) で使用して、項目の長さを判別することができます。例えば、LENGTH 関数を使用して、英数字または国別リテラルの長さ、あるいは DBCS 以外の不特定タイプのデータ項目の長さを判別できます。

LENGTH 関数は、国別項目 (リテラル、あるいは USAGE NATIONAL を持つ任意の項目 (国別グループ項目を含む)) の長さを、引数の長さ (国別文字位置の数) に等しい整数として戻します。これは、他の任意のデータ項目の長さを、引数の長さ (英数字位置の数) に等しい整数として戻します。

次の COBOL ステートメントは、データ項目を、顧客名を入れるレコードのフィールドに移動する例を示しています。

```
Move Customer-name To Customer-record(1:Function Length(Customer-name))
```

LENGTH OF 特殊レジスターを使用することもできます。この特殊レジスターは国別データの場合でも、長さをバイト単位で戻します。Function Length(Customer-name) または LENGTH OF Customer-name のどちらをコーディングしても、英数字項目の場合は同じ結果 (Customer-name のバイト単位の長さ) が戻されます。

LENGTH 関数は、算術式が許可される場所でしか使用できません。しかし、LENGTH OF 特殊レジスターはさまざまなコンテキストで使用することができます。例えば、整数引数が認められる組み込み関数への引数として LENGTH OF 特殊レジスターを使用することができます。(組み込み関数を LENGTH OF 特殊レジスターに対するオペランドとして使用することはできません。) LENGTH OF 特殊レジスターは、CALL ステートメントのパラメーターとして使用することもできます。

関連タスク

55 ページの『算術の実行』

77 ページの『可変長テーブルの作成 (DEPENDING ON)』

83 ページの『組み込み関数を使用したテーブル項目の処理』

関連参照

LENGTH (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

LENGTH OF (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

コンパイルの日付の検出

WHEN-COMPILED 組み込み関数を使用して、プログラムがコンパイルされた日時を判別することができます。結果は、コンパイル時の 4 桁の年、月、日、および時刻 (時間、分、秒、および百分の 1 秒)、ならびにグリニッジ標準時との差 (時間と分) を示す 21 文字位置です。

最初の 16 桁の形式は次のとおりです。

```
YYYYMMDDhhmmsshh
```

代わりに WHEN-COMPILED 特殊レジスターを使用して、コンパイルの日時を次の形式で判別することもできます。

```
MM/DD/YYhh.mm.ss
```

WHEN-COMPILED 特殊レジスターは、2 桁の年のみをサポートし、時刻を秒までしか扱いません。この特殊レジスターは、MOVE ステートメントの送信フィールドとしてのみ使用できます。

関連参照

WHEN-COMPILED (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

第 7 章 ファイルの処理

ファイルからのデータ読み取りとファイルへのデータ書き込みは、大半の COBOL プログラムで重要となります。プログラムは情報を検索し、それを要求どおりに処理した後、結果を書き込みます。

ただし、処理を行う前に、各ファイルを識別してそれらの物理構造を記述し、順次、相対、索引付き、行順次のいずれでファイルが編成されているかを示す必要があります。ファイルを識別するには、ファイルとそのファイル・システムに名前を付ける必要があります。また、処理が正しく行われたことを確認するために、後で検査が可能なファイル状況フィールドを設定することも可能です。

ファイルの処理で実行できる主なタスクでは、まずファイルをオープンして読み取り、(ファイル編成およびアクセスのタイプに応じて) レコードの追加、置換、または削除を行います。

関連概念

123 ページの『ファイル・システム』

関連タスク

『ファイルの識別』

127 ページの『ファイル・オープン時のエラーからの保護』

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モードの指定』

132 ページの『ファイル状況フィールドの設定』

132 ページの『ファイル構造の詳細記述』

133 ページの『ファイルの入出力ステートメントのコーディング』

ファイルの識別

ENVIRONMENT DIVISION の INPUT-OUTPUT SECTION の FILE-CONTROL 段落では、以下に示されているような、使用するファイルの名前を指定する必要があります。また、オプションでファイル・システムの名前を指定できます。

```
SELECT file ASSIGN TO FileSystemID-Filename
```

file は、ファイルを参照するためにプログラム内部で使われる名前です。この名前は、必ずしも、システムに認識されているファイルの実際の名前でなくても構いません。

FileSystemID は、次のファイル・システムのいずれかを識別します。

STL 標準言語ファイル・システム

BTR Btrieve (Pervasive.SQL) ファイル・システム

RSD レコード順次区切りファイル・システム

ファイル・システムの指定がない場合は、ランタイム・オプション FILESYS を使用してファイル・システムが選択されます。FILESYS ランタイム・オプションのデフォルトは STL です。

Filename は、アクセスする物理ファイルの名前です。別の方法として、環境変数を使用して実行時にファイル名を指定することも可能です。

関連概念

123 ページの『ファイル・システム』

関連タスク

『Btrieve ファイルの識別』

『STL ファイルの識別』

『RSD ファイルの識別』

関連参照

123 ページの『STL ファイル・システム』

126 ページの『RSD ファイル・システム』

217 ページの『ランタイム環境変数』

327 ページの『FILESYS』

Btrieve ファイルの識別

ファイルに Btrieve (Pervasive.SQL) ファイル・システムを使用する場合は、以下に示すように、SELECT 文節を使用してファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN TO 'BTR-MyFile'
```

ランタイム・オプション FILESYS(BTRIEVE) が有効な場合は、次の割り当てが有効です。

```
SELECT file1 ASSIGN TO 'MyFile'
```

環境変数 *MYFILE* (例: SET *MYFILE*=BTR-*MYFILE*) を定義している場合は、次の割り当てが有効です。

```
SELECT file1 ASSIGN TO MYFILE
```

STL ファイルの識別

ファイルに標準言語ファイル・システムを使用する場合は、以下に示すように、SELECT 文節を使用してファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN USING 'STL-MyFile'
```

ランタイム・オプション FILESYS(STL) が有効な場合は、次のようにファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN TO 'MyFile'
```

環境変数 *MYFILE* (例: SET *MYFILE*=STL-*MYFILE*) を定義している場合は、次のようにファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN TO MYFILE
```

RSD ファイルの識別

ファイルにレコード順次区切りファイル・システムを使用する場合は、以下に示すように、SELECT 文節を使用してファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN USING 'RSD-MyFile'
```

ランタイム・オプション FILESYS(RSD) が有効な場合は、次のようにファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN TO 'MyFile'
```

環境変数 *MYFILE* (例: SET *MYFILE*=RSD-*MYFILE*) を定義している場合は、次のようにファイルを識別します。

```
SELECT file1 ASSIGN TO MYFILE
```

ファイル・システム

順次、相対、または索引付きで編成されたレコード単位ファイルへは、ファイル・システムを通してアクセスします。ファイル・システム関数を使用すると、これらのタイプのファイルのレコードを作成および操作することができます。

COBOL for Windows では、次のファイル・システムをサポートしています。

- STL (標準言語) ファイル・システムは、基本的なローカル・ファイル機能を備えています。COBOL for Windows に備わっており、順次ファイル、相対ファイル、および索引付きファイルに対応しています。
- Btrieve ファイル・システムでは、Btrieve ファイルにアクセスすることができます。Btrieve は、Pervasive Software から提供されている別売の製品である Pervasive.SQL ファイル・システムを表す IBM の名前です。
- RSD (レコード順次区切り) ファイル・システムでは、他の言語で書かれたプログラムとデータを共用することができます。RSD ファイルは順次のみですが、レコード内のあらゆる COBOL データ型に対応しています。レコード内のテキスト・データは、大半のファイル・エディターで編集することができます。

大半のプログラムは、どのファイル・システムでも同じように動作します。ただし、あるファイル・システムで書き込まれたファイルを、別のファイル・システムで読み取ることはできません。

ファイル・システムを選択するには、割り当て名の環境変数を設定するか、FILESYS ランタイム・オプションを使用します。どのファイル・システムでも、COBOL ステートメントを使用して COBOL ファイルの読み取りと書き込みを行うことができます。

関連タスク

121 ページの『ファイルの識別』

関連参照

『STL ファイル・システム』

126 ページの『RSD ファイル・システム』

zSeries ホスト・データ形式についての考慮事項 (632 ページの『ファイル・データ』)

327 ページの『FILESYS』

STL ファイル・システム

STL ファイル・システム (標準言語ファイル・システム) は、順次ファイル、索引付きファイル、および相対ファイルに対応しています。これは、ファイルにアクセスするための基本のファイル機能を提供します。

STL ファイル・システムは COBOL 85 標準に準拠しており、パフォーマンスが高く、AIX システムと Windows ベースのシステムの間で容易に移植できることも特長です。LINE SEQUENTIAL 編成は、STL ファイル・システムによってサポートされない唯一のファイル編成タイプです。

このファイル・システムは、スレッドとともに使用しても安全です。ただし、複数のスレッドが同時にファイルのレベル 01 のレコードにアクセスしないようにしてください。複数のスレッドが同一の STL ファイルを操作することは可能ですが、オペレーティング・システム呼び出し (WaitForSingleObject など) を使用して、アクティブ・スレッド上でのファイル・アクセスが完了するまで、他のすべてのスレッドを待機させるようにする必要があります。

STL ファイル・システムを使用すると、PL/I プログラムと共用するファイルの読み取りと書き込みを容易に行うことができます。

関連概念

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

122 ページの『STL ファイルの識別』

関連参照

『STL ファイル・システムの戻りコード』

STL ファイル・システムの戻りコード

STL ファイルに対する入出力操作後に、複数のエラー・コードのいずれかが発生することがあります。

FILE STATUS *data-name-1 data-name-8*

FILE-CONTROL 段落で、STL ファイルに関する、上述の文節をコーディングするとします。ファイルに対する入出力操作の後、*data-name-1* には使用するファイル・システムに依存しない状況コードが含まれ、*data-name-8* には次の表に示す STL ファイル・システムの戻りコードのいずれかが含まれます。

表 9. STL ファイル・システムの戻りコード

コード	意味	注
0	正常終了	入出力操作が正しく完了しました。
1	無効な操作	この戻りコードは、通常は戻されません。これはファイル・システム内のエラーを示します。
2	入出力エラー	オペレーティング・システムの I/O ルーチンへの呼び出しからエラー・コードが戻されました。
3	ファイルがオープンしない	ファイルに対して (OPEN 以外の) 操作を試行しましたが、ファイルがオープンしません。
4	キー値が検出されない	キーを使用してレコードを読み取ろうとしましたが、キーがファイル内にありません。
5	キー値の重複	重複できないキーを 2 回使用しようとした。
6	無効なキー番号	この戻りコードは、通常は戻されません。これはファイル・システム内のエラーを示します。

表 9. STL ファイル・システムの戻りコード (続き)

コード	意味	注
7	別のキー番号	この戻りコードは、通常は戻されません。これはファイル・システム内のエラーを示します。
8	操作に対する無効なフラグ	この戻りコードは、通常は戻されません。これはファイル・システム内のエラーを示します。
9	ファイルの終わり	ファイルの終わりを検出しました。これはエラーではありません。
10	I/O GET 操作の前に入出力操作が必要	この操作は現行レコードを検索しますが、現行レコードはまだ定義されていません。
11	スペース取得ルーチンから戻されたエラー	オペレーティング・システムがメモリー不足を示しています。
12	重複したキーの受け入れ	当該操作で指定したキーが重複しています。
13	順次アクセスおよびキー・シーケンスの不良	順次アクセスが指定されましたが、レコードが順序どおりになっていません。
14	レコード長 < 最大キー	レコード長で許可しているスペースが足りないため、すべてのキーを格納できません。
15	ファイルへのアクセス拒否	オペレーティング・システムがファイルにアクセスできないことを報告しました。当該ファイルが存在しないか、またはオペレーティング・システムがファイルにアクセスするための適切なアクセス権がユーザー側にありません。
16	ファイルがすでに存在する	新規ファイルをオープンしようとしたますが、そのファイルがすでに存在することをオペレーティング・システムが報告しました。
17	(予約済み)	
18	ファイル・ロック	ファイルをオープンしようとしたますが、そのファイルはすでに排他モードでオープンしています。
19	ファイル・テーブルがいっぱい	ファイル・テーブルがいっぱいであることをオペレーティング・システムが報告しました。
20	ハンドル・テーブルがいっぱい	これ以上ファイル・ハンドルを割り振れないことをオペレーティング・システムが報告しました。
21	タイトルが STL でない	STL ファイル・システムによる読み取り用にオープンしたファイルには、特定のオフセット位置に“STL”を含むヘッダー・レコードがなければなりません。
22	作成用の indexcount 引数が不良	この戻りコードは、通常は戻されません。これはファイル・システム内のエラーを示します。
23	索引または相対レコード > 64 KB	索引および相対レコードの長さは 64 KB に制限されています。
24	オープン中の既存ファイルのファイル・ヘッダーまたはデータ内で検出されたエラー	STL ファイルはヘッダーで始まります。ヘッダーまたは関連データの値が矛盾しています。
25	順次ファイルの索引付きオープン	順次ファイルを索引付きファイルまたは相対ファイルとしてオープンしようとした。

次の表に、アダプター・オープン・ルーチンで検出されるエラーに対する戻りコードを示します。

表 10. STL ファイル・システムのアダプター・オープン・ルーチン戻りコード

コード	意味	注
1000	索引付きまたは相対ファイルの順次オープン	索引付きファイルまたは相対ファイルを順次ファイルとしてオープンしようとした。
1001	索引付きファイルの相対オープン	相対ファイルを索引付きファイルとしてオープンしようとした。
1002	順次ファイルの索引付きオープン	索引付きファイルを順次ファイルとしてオープンしようとした。
1003	ファイルが存在しない	当該ファイルが存在しないことをオペレーティング・システムが報告しました。
1004	キー数が異なる	キー数が異なるファイルをオープンしようとした。
1005	レコード長が異なる	レコード長が異なるファイルをオープンしようとした。
1006	レコード・タイプが異なる	レコード・タイプが異なるファイルをオープンしようとした。
1007	キー位置または長さが異なる	キー位置または長さが異なるファイルをオープンしようとした。

関連タスク

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

123 ページの『STL ファイル・システム』

FILE STATUS 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

RSD ファイル・システム

RSD (レコード順次区切り) ファイル・システムは、順次ファイルに対応しています。RSD ファイルは、ブラウズ、編集、コピー、削除、印刷などの標準的なシステム・ファイル・ユーティリティ機能を使用して処理することができます。

RSD ファイルは優れたパフォーマンスを提供します。また、AIX システムと Windows ベースのシステムとの間でファイルを容易に移植でき、異なる言語で書かれたプログラムやアプリケーションの間でファイルを共用することができます。

RSD ファイルは、固定長レコード内のあらゆる COBOL データ型に対応しています。書き込まれた各レコードの後には、改行制御文字が続きます。読み取り操作の場合は、ファイル・レコード域にレコード長を示すデータが格納されます。このレコード域にデータが格納される前にファイル・マークが検出された場合は、レコード域にスペース文字が埋め込まれます。

RSD ファイルをテキスト・エディターで編集する場合は、各レコードの長さを必ず維持してください。

RSD ファイルに対して AFTER ADVANCING または BEFORE ADVANCING 句を持つ WRITE ステートメントを試行すると、このステートメントは失敗し、ファイル状況キーが 30 に設定されます。

RSD ファイル・システムは、スレッドとともに使用しても安全です。ただし、複数のスレッドが同時にファイルのレベル 01 のレコードにアクセスしないようにしてください。複数のスレッドが同一の RSD ファイルを操作することは可能ですが、オペレーティング・システム呼び出し (WaitForSingleObject など) を使用して、アクティブ・スレッド上でのファイル・アクセスが完了するまで、他のすべてのスレッドを待機させるようにする必要があります。

関連概念

『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

122 ページの『RSD ファイルの識別』

ファイル・オープン時のエラーからの保護

存在しないファイルのオープンや読み取りをプログラムが試みると、通常はエラーが発生します。

ただし、存在しないファイルのオープンが意味をなす場合もあります。このような場合は、SELECT とともにオプション・キーワード OPTIONAL を使用します。

```
SELECT OPTIONAL file ASSIGN TO filename
```

ファイル編成およびアクセス・モードの指定

FILE-CONTROL 段落では、以下に示すように、ファイルの物理構造とアクセス・モードを定義する必要があります。

```
FILE-CONTROL.  
  SELECT file ASSIGN TO FileSystemID-Filename  
  ORGANIZATION IS org ACCESS MODE IS access.
```

org に対しては、SEQUENTIAL (デフォルト)、LINE SEQUENTIAL、INDEXED、RELATIVE のいずれかを選択することができます。

access に対しては、SEQUENTIAL (デフォルト)、RANDOM、DYNAMIC のいずれかを選択することができます。

順次ファイルおよび行順次ファイルは、順次にアクセスする必要があります。索引付きファイルと相対ファイルの場合は 3 つのアクセス・モードをすべて使用することができます。

ファイル編成およびアクセス・モード

ファイル編成は、順次、行順次、索引付き、相対のいずれかの形式で行うことができます。アクセス・モードは、ファイルの編成方法ではなく、COBOL でのファイルの読み取り方法と書き込み方法を定義します。

プログラムの設計時には、ファイル編成とアクセス・モードを決定する必要があります。

次の表は、COBOL ファイルのファイル編成とアクセス・モードをまとめたものです。

表 11. ファイル編成およびアクセス・モード

ファイル編成	レコードの順序	レコードは削除または置換可能か	アクセス・モード
順次	レコードが書き込まれた順序	レコードは削除できないが、そのスペースを同じ長さのレコードに再利用することが可能	順次のみ
行順次	レコードが書き込まれた順序	いいえ	順次のみ
索引付き	キー・フィールドによる照合シーケンス	はい	順次、ランダム、または動的
相対	相対レコード番号の順序	はい	順次、ランダム、または動的

ファイル管理システムは、入出力装置からの入出力要求とレコード検索を処理します。

関連概念

- 『順次ファイルの編成』
- 129 ページの『行順次ファイル編成』
- 129 ページの『索引付きファイル編成』
- 130 ページの『相対ファイル編成』
- 130 ページの『順次アクセス』
- 130 ページの『ランダム・アクセス』
- 130 ページの『動的アクセス』

関連タスク

- 127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モードの指定』

関連参照

- 131 ページの『ファイル入出力に関する制限』

順次ファイルの編成

順次ファイルに含まれるレコードは、それらが入力された順序で編成されています。レコードの順序は固定されます。

順次ファイル内のレコードの読み取りや書き込みは、順次形式でのみ行うことができます。

順次ファイルにレコードを挿入したら、そのレコードの長さを調整したり、削除することはできません。ただし、長さが変わらなければ、レコードを更新 (REWRITE) することはできます。新しいレコードはファイルの終わりに追加されます。

ファイル内のレコードの順序が重要でない場合は、レコード数の多少にかかわらず、順次編成を選択することをお勧めします。順次出力は、レポートを印刷する際にも便利です。

関連概念

130 ページの『順次アクセス』

関連参照

136 ページの『順次ファイルに有効な COBOL ステートメント』

行順次ファイル編成

行順次ファイルは順次ファイルと似ていますが、レコード内にデータとして文字しか含めることができない点が異なります。行順次ファイルは、オペレーティング・システムのネイティブ・バイト・ストリーム・ファイルでサポートされています。

ADVANCING 句を持つ WRITE ステートメントで作成される行順次ファイルは、プリンターまたはディスクに送信することができます。

関連概念

128 ページの『順次ファイルの編成』

関連参照

136 ページの『行順次ファイルに有効な COBOL ステートメント』

索引付きファイル編成

索引付きファイルには、レコード・キーによって順序指定されたレコードが含まれています。レコード・キーは、レコードを固有に識別し、それがアクセスされる順序を他のレコードとの関連で判別します。

各レコードには、レコード・キーを含むフィールドがあります。レコードのレコード・キーは、例えば、従業員番号や送り状番号にすることができます。

また、索引付きファイルでは、代替索引 (レコードの別の論理配置を使用してファイルにアクセスできるレコード・キー) を使用することも可能です。例えば、従業員番号ではなく、従業員の部門を介してファイルにアクセスすることができます。

索引付きファイルについて認められるレコード伝送アクセス (アクセス) モードは、順次、ランダム、または動的です。索引付きファイルの順次読み取りまたは書き込みの順序は、キー値の順序になります。

EBCDIC についての考慮事項: 照合シーケンスが変更された場合と同様に、索引付きファイルがローカル EBCDIC ファイルの場合は、EBCDIC キーが COBOL プログラムの外部にあるものとして認識されません。例えば、外部ソート・プログラムは、EBCDIC にも対応していない限り、期待どおりの順序でレコードをソートすることはありません。

関連参照

137 ページの『索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント』

相対ファイル編成

相対レコード・ファイルには、相対キー、すなわちファイルの先頭から相対したレコードの位置を表すレコード番号によって順序指定されたレコードが含まれています。

例えば、ファイルの最初のレコードの相対レコード番号は 1 で、10 番目のレコードの相対レコード番号は 10 というようになっています。レコードは、固定長でも可変長でも構いません。

相対ファイルについて認められるレコード伝送モードは、順次、ランダム、または動的です。相対ファイルの順次読み取りまたは書き込みの順序は、相対レコード番号の順序です。

関連参照

137 ページの『索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント』

順次アクセス

順次アクセスの場合は、FILE-CONTROL 段落で ACCESS IS SEQUENTIAL をコーディングします。

索引付きファイルのレコードは、ファイル位置標識の現在位置から始まって、選択されたキー・フィールド (基本または代替) の順にアクセスされます。

相対ファイルのレコードは、相対レコード番号の順にアクセスされます。

関連概念

『ランダム・アクセス』

『動的アクセス』

関連参照

135 ページの『ファイル位置標識』

ランダム・アクセス

ランダム・アクセスの場合は、FILE-CONTROL 段落で ACCESS IS RANDOM をコーディングします。

索引付きファイルのレコードは、キー・フィールドに入れられた値 (基本、代替、相対) に従ってアクセスされます。代替索引は 1 つ以上存在する可能性があります。

相対ファイルのレコードは、相対キーに入れられた値に従ってアクセスされます。

関連概念

『順次アクセス』

『動的アクセス』

動的アクセス

動的アクセスの場合は、FILE-CONTROL 段落で ACCESS IS DYNAMIC をコーディングします。

動的アクセスでは、同じプログラム内での順次アクセスとランダム・アクセスの混在がサポートされています。動的アクセスでは、順次処理とランダム処理の両方を実行する 1 つの COBOL ファイル定義を使用することで、あるレコードへは順次にアクセスし、別のレコードへはキーによってアクセスすることができます。

例えば、従業員レコードの索引付きファイルがあり、従業員の時間給がレコード・キーを形成しているものとします。また、プログラムでは、時間給が \$12.00 から \$18.00 の従業員と、時間給が \$25.00 以上の従業員について処理するものとします。この情報にアクセスするには、1200 のキーに基づいて (ランダム検索 READ を使用して) 最初のレコードをランダムに検索します。次に、給与フィールドが 1800 を超えるまで、(READ NEXT を使用して) 順次読み取りを行います。今度は 2500 のキーに基づいて、ランダム読み取りに切り替えます。このランダム読み取りの後、ファイルの終わりに到達するまで、順次読み取りを行います。

関連概念

130 ページの『順次アクセス』

130 ページの『ランダム・アクセス』

ファイル入出力に関する制限

レコードおよびファイルのサイズ制限は以下に示されているとおりです。

- 行順次ファイルの場合
 - 最大レコード・サイズ: 64 KB
 - ファイルに割り振られる最大バイト数: 2 GB
- STL ファイルの場合
 - 最小レコード・サイズ: 1 バイト
 - 最大レコード・サイズ: 65,535 バイト
 - 最大レコード・キー長: 255 バイト
 - 代替キーの最大数: 253
 - 相対キーの最大値: $2^{32} - 1$
 - ファイルに割り振られる最大バイト数: $2^{31} - 1$ (相対ファイルおよび索引付きファイル)
 - ファイルに割り振られる最大バイト数: 制限なし (順次ファイル)
- RSD ファイルの場合
 - 固定長レコードのみ
 - 最小レコード・サイズ: 1 バイト
 - 最大レコード・サイズ: 65,535 バイト
 - ファイルに割り振られる最大バイト数: 2 GB

ターゲット・ファイルが置かれているプラットフォームによっては、追加またはその他の制限が適用される場合があります。

関連参照

コンパイラ限界値 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ファイル状況フィールドの設定

ファイル状況キーは、FILE-CONTROL 段落の FILE STATUS 文節および DATA DIVISION のデータ定義を使用して設定します。

```
ENVIRONMENT DIVISION.  
INPUT-OUTPUT SECTION.  
FILE-CONTROL.  
    . . .  
    FILE STATUS IS file-status  
WORKING-STORAGE SECTION.  
01 file-status PIC 99.
```

ファイル状況キー *file-status* は、2 文字のカテゴリ英数字またはカテゴリ国別項目として、あるいは 2 桁のゾーン 10 進数 (USAGE DISPLAY) (上記に示すとおり) または国別 10 進数 (USAGE NATIONAL) 項目として指定します。

制限: FILE STATUS 文節で参照されるデータ項目を可変的な場所に置くことはできません。例えば、可変長テーブルの後に置くことはできません。

関連タスク

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

FILE STATUS 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ファイル構造の詳細記述

DATA DIVISION の FILE SECTION では、キーワード FD と、FILE-CONTROL 段落内の対応する SELECT 文節で使ったファイル名を使用して、ファイル記述を開始します。

```
DATA DIVISION.  
FILE SECTION.  
FD filename  
01 recordname  
    nn . . . fieldlength & type  
    nn . . . fieldlength & type  
    . . .
```

上記の例では、*filename* は、OPEN、READ、および CLOSE ステートメントでも使用されるファイル名です。

recordname は、WRITE および REWRITE ステートメントで使われるレコードの名前です。1 つのファイルに対して複数のレコードを指定することができます。

fieldlength はフィールドの論理長です。*type* はフィールドの形式を指定します。この方法でレコード記述項目をレベル 01 以上に分ける場合、各エレメントはレコードのフィールドに対して正確にマップしなければなりません。

関連参照

データ関係 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

レベル番号 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

PICTURE 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

USAGE 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ファイルの入出力ステートメントのコーディング

ENVIRONMENT DIVISION および DATA DIVISION でファイルの識別と記述を行った
ら、プログラムの PROCEDURE DIVISION でファイル・レコードを処理することがで
きます。

COBOL プログラムは、使用するファイルのタイプ (順次、行順次、索引付き、相対
のいずれか) に従ってコーディングします。入力および出力のコーディングを行う
際の一般的なフォーマット (後述の例を参照) には、ファイルのオープン、読み取
り、情報の書き込み、およびクローズが含まれます。

『例: COBOL でのファイルのコーディング』

関連タスク

- 121 ページの『ファイルの識別』
- 127 ページの『ファイル・オープン時のエラーからの保護』
- 127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モードの指定』
- 132 ページの『ファイル状況フィールドの設定』
- 132 ページの『ファイル構造の詳細記述』
- 135 ページの『ファイルのオープン』
- 138 ページの『ファイルからのレコードの読み取り』
- 140 ページの『ファイルへのレコードの追加』
- 140 ページの『ファイル内のレコードの置換』
- 141 ページの『ファイルからのレコードの削除』

例: COBOL でのファイルのコーディング

入出力コーディングの一般形式を、以下の例に示します。コードの後、ユーザーが
指定した情報 (例内の小文字のテキスト) について説明します。

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
.  
.  
ENVIRONMENT DIVISION.  
INPUT-OUTPUT SECTION.  
FILE-CONTROL.  
    SELECT filename ASSIGN TO assignment-name (1) (2)  
    ORGANIZATION IS org ACCESS MODE IS access (3) (4)  
    FILE STATUS IS file-status (5)  
.  
.  
DATA DIVISION.  
FILE SECTION.  
FD filename  
01 recordname (6)  
   nn . . . fieldlength & type (7) (8)  
   nn . . . fieldlength & type  
.  
.  
WORKING-STORAGE SECTION.  
01 file-status PIC 99.  
.  
.  
PROCEDURE DIVISION.  
    OPEN iomode filename (9)  
    .  
    .  
    READ filename  
    .  
    .  
    WRITE recordname  
    .  
    .  
    CLOSE filename  
STOP RUN.
```

(1) *filename*

任意の有効な COBOL 名。SELECT 文節および FD 項目、および OPEN、READ、START、DELETE、および CLOSE の各ステートメントでは、同じファイル名を使用する必要があります。この名前は、必ずしも、システムに認識されているファイルの実際の名前でなくても構いません。各ファイルには、独自の SELECT 文節、FD 記入項目、および入出力ステートメントが必要です。WRITE および REWRITE では、ファイルに対して定義されたレコードを指定します。

(2) *assignment-name*

ASSIGN TO *assignment-name* をコーディングして、システムに認識されているターゲット・ファイル・システム ID とファイル名を直接指定するか、または環境変数を使用して値を間接的に設定することができます。

OPEN の際にシステム・ファイル名を識別したい場合は、ASSIGN USING *data-name* を指定できます。当該ファイルに対して OPEN ステートメントが実行されるときには、*data-name* の値が使用されます。また、オプションにより、ファイル・システムのタイプを識別することでシステム・ファイルの識別を処理することも可能です。

次の例は、inventory-file を動的に (MOVE ステートメントにより) ファイル d:\inventory\parts と関連付ける方法を示しています。

```
SELECT inventory-file ASSIGN USING a-file . . .  
  . . .  
FD inventory-file . . .  
  . . .  
77 a-file PIC X(20) VALUE SPACES.  
  . . .  
    MOVE "d:\inventory\parts" TO a-file  
    OPEN INPUT inventory-file
```

(3) *org*

編成 (SEQUENTIAL、LINE SEQUENTIAL、INDEXED、または RELATIVE) を示します。この文節を省略した場合は、デフォルトの ORGANIZATION SEQUENTIAL が使用されます。

(4) *access*

アクセス・モード (SEQUENTIAL、RANDOM、または DYNAMIC) を示します。この文節を省略した場合は、デフォルトの ACCESS SEQUENTIAL が使用されます。

(5) *file-status*

COBOL ファイル状況キー。 ファイル状況キーを、2 文字の英数字または国別データ項目として、あるいは 2 桁のゾーン 10 進数または国別 10 進数項目として指定してください。

(6) *recordname*

WRITE および REWRITE ステートメントで使用するレコードの名前。1 つのファイルに対して複数のレコードを指定することができます。

(7) *fieldlength*

フィールドの論理長。

(8) *type*

ファイルのレコード形式と一致していなければなりません。レコード記述項目をレベル 01 以上に分ける場合は、各エレメントはレコードのフィールドに対して正確にマップします。

(9) *iomode*

オープン・モードを指定します。ファイルから読み取りだけを行う場合は、INPUT をコーディングします。ファイルへの書き込みだけを行う場合は、OUTPUT (新規ファイルのオープンまたは既存ファイル上での書き込み) または EXTEND (ファイル末尾へのレコードの追加) をコーディングします。読み取りと書き込みの両方を行う場合は、I-O をコーディングします。

制限: 行順次ファイルの場合、I-O は OPEN の有効なパラメーターにはなりません。

ファイル位置標識

COBOL の順次要求では、ファイル位置標識は次にアクセスされるレコードを示します。

ファイル位置標識は、プログラマーがプログラム内に設定するものではありません。この標識は、成功した OPEN、START、READ、READ NEXT、および READ PREVIOUS ステートメントによって設定されます。その後の READ、READ NEXT、または READ PREVIOUS 要求は、設定されたファイル位置標識の位置を使用した後、それを更新します。

ファイル位置標識は、出力ステートメント WRITE、REWRITE、または DELETE によって使用されたり、影響を受けたりすることはありません。ファイル位置標識は、ランダム処理では意味がありません。

ファイルのオープン

WRITE、START、READ、REWRITE、または DELETE ステートメントを使用してファイル内のレコードを処理するためには、前もってそのファイルを OPEN ステートメントでオープンしておかなければなりません。

PROCEDURE DIVISION.

```
      . . .  
      OPEN iomode filename
```

上記の例では、*iomode* はオープン・モードを指定します。ファイルから読み取りだけを行う場合は、オープン・モードに対して INPUT をコーディングします。ファイルへの書き込みだけを行う場合は、オープン・モードに対して OUTPUT (新規ファイルのオープンまたは既存ファイル上での書き込み) または EXTEND (ファイル末尾へのレコードの追加) をコーディングします。

すでにレコードが入っているファイルをオープンするには、OPEN INPUT、OPEN I-O (行順次ファイルの場合は無効)、または OPEN EXTEND を使用してください。

順次ファイル、行順次ファイル、または相対ファイルを EXTEND としてオープンする場合には、ファイル内の最後の既存レコードの後に、追加されたレコードが置か

れます。索引付きファイルを EXTEND としてオープンする場合には、追加するそれぞれのレコードが、ファイル内の最高位レコードよりも大きいレコード・キーを持っていなければなりません。

関連概念

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

127 ページの『ファイル・オープン時のエラーからの保護』

関連参照

『順次ファイルに有効な COBOL ステートメント』

『行順次ファイルに有効な COBOL ステートメント』

137 ページの『索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント』

OPEN ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

順次ファイルに有効な COBOL ステートメント

次の表に、順次ファイルに対して使用可能な入出力ステートメントの組み合わせを示します。「X」のマークは、当該列の最上部に記載されているオープン・モードで、当該ステートメントが使用できることを示しています。

表 12. 順次ファイルに有効な COBOL ステートメント

アクセス・モード	COBOL ステートメント	OPEN INPUT	OPEN OUTPUT	OPEN I-O	OPEN EXTEND
順次	OPEN	X	X	X	X
	WRITE		X		X
	START				
	READ	X		X	
	REWRITE			X	
	DELETE				
	CLOSE	X	X	X	X

関連概念

128 ページの『順次ファイルの編成』

130 ページの『順次アクセス』

行順次ファイルに有効な COBOL ステートメント

次の表に、行順次ファイルに対して使用可能な入出力ステートメントの組み合わせを示します。「X」のマークは、当該列の最上部に記載されているオープン・モードで、当該ステートメントが使用できることを示しています。

表 13. 行順次ファイルに有効な COBOL ステートメント

アクセス・モード	COBOL ステートメント	OPEN INPUT	OPEN OUTPUT	OPEN I-O	OPEN EXTEND
順次	OPEN	X	X		X
	WRITE		X		X
	START				
	READ	X			
	REWRITE				
	DELETE				
	CLOSE	X	X		X

関連概念

129 ページの『行順次ファイル編成』

130 ページの『順次アクセス』

索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント

次の表に、索引付きファイルおよび相対ファイルに対して使用可能な入出力ステートメントの組み合わせを示します。「X」のマークは、当該列の最上部に記載されているオープン・モードで、当該ステートメントが使用できることを示しています。

表 14. 索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント

アクセス・モード	COBOL ステートメント	OPEN INPUT	OPEN OUTPUT	OPEN I-O	OPEN EXTEND
順次	OPEN	X	X	X	X
	WRITE		X		X
	START	X		X	
	READ	X		X	
	REWRITE			X	
	DELETE			X	
	CLOSE	X	X	X	X
ランダム	OPEN	X	X	X	
	WRITE		X	X	
	START				
	READ	X		X	
	REWRITE			X	
	DELETE			X	
	CLOSE	X	X	X	

表 14. 索引付きファイルおよび相対ファイルに有効な COBOL ステートメント (続き)

アクセス・モード	COBOL ステートメント	OPEN INPUT	OPEN OUTPUT	OPEN I-O	OPEN EXTEND
動的	OPEN	X	X	X	
	WRITE		X	X	
	START	X		X	
	READ	X		X	
	REWRITE			X	
	DELETE			X	
	CLOSE	X	X	X	

関連概念

129 ページの『索引付きファイル編成』

130 ページの『相対ファイル編成』

130 ページの『順次アクセス』

130 ページの『ランダム・アクセス』

130 ページの『動的アクセス』

ファイルからのレコードの読み取り

READ ステートメントを使用して、ファイルからレコードを取り出します。レコードを読み取るには、OPEN INPUT または OPEN I-O (OPEN I-O は行順次ファイルでは無効) を使用してファイルをオープンする必要があります。各 READ の後で、ファイル状況キーを検査してください。

順次ファイルおよび行順次ファイルの中のレコードは、それらが書き込まれたシーケンスでしか検索することができません。

索引付きおよび相対レコード・ファイルの中のレコードは、順次 (索引付きファイルの場合は使用中のキーの昇順に従い、相対ファイルの場合は相対レコード位置に従う)、ランダム、または動的に検索することができます。

動的アクセスの場合、順次検索には READ NEXT と READ PREVIOUS を使用し、(キーによる) ランダム検索には READ を使用することによって、特定のレコードの直接読み取りと、レコードの順次読み取りを切り替えることができます。

特定のレコードから順次に読み取りを行いたい場合には、READ NEXT または READ PREVIOUS ステートメントの前に START ステートメントを使用して、ファイル位置標識を、特定のレコードを指すように設定してください。START の後に READ NEXT をコーディングすると、次のレコードが読み取られ、ファイル位置標識は次のレコードにリセットされます。START の後に READ PREVIOUS をコーディングすると、前のレコードが読み取られ、ファイル位置標識は前のレコードにリセットされます。ファイル位置標識は、START を使用してランダムに移動することができますが、すべての読み取りはそのポイントから順次に行われることになります。

レコードの順次読み取りを続行することも、START ステートメントを使用してファイル位置標識を移動することも可能です。以下に、その例を示します。

```
START file-name KEY IS EQUAL TO ALTERNATE-RECORD-KEY
```

重複が存在する代替索引に基づいて、索引付きファイルに対して直接 READ が実行されると、その代替キー値を持つファイル（基本クラスター）の最初のレコードのみが検索されます。同じ代替キーを持つデータ・セット・レコードのそれぞれを検索するためには、一連の READ NEXT ステートメントが必要です。同じ代替キーを持つ読み取り対象レコードが複数ある場合は、ファイル状況値 02 が戻されます。そのキー値を持つ最後のレコードが読み取られると、値 00 が戻されます。

関連概念

- 130 ページの『順次アクセス』
- 130 ページの『ランダム・アクセス』
- 130 ページの『動的アクセス』
- 127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

- 135 ページの『ファイルのオープン』
- 162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

- 135 ページの『ファイル位置標識』
- FILE STATUS 文節（「*COBOL for Windows* 言語解説書」）

ファイルへのレコード書き込み時に使用するステートメント

次の表に、ファイルの作成または拡張時に使用できる COBOL ステートメントを示します。

表 15. ファイルへのレコード書き込み時に使用するステートメント

除算	順次	行順次	索引付き	相対
ENVIRONMENT	SELECT ASSIGN FILE STATUS ACCESS MODE	SELECT ASSIGN ORGANIZATION IS LINE SEQUENTIAL FILE STATUS ACCESS MODE	SELECT ASSIGN ORGANIZATION IS INDEXED RECORD KEY ALTERNATE RECORD KEY FILE STATUS ACCESS MODE	SELECT ASSIGN ORGANIZATION IS RELATIVE RELATIVE KEY FILE STATUS ACCESS MODE
DATA	FD 記入項目	FD 記入項目	FD 記入項目	FD 記入項目
PROCEDURE	OPEN OUTPUT OPEN EXTEND WRITE CLOSE	OPEN OUTPUT OPEN EXTEND WRITE CLOSE	OPEN OUTPUT OPEN EXTEND WRITE CLOSE	OPEN OUTPUT OPEN EXTEND WRITE CLOSE

関連概念

- 127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

- 127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モードの指定』
- 135 ページの『ファイルのオープン』

132 ページの『ファイル状況フィールドの設定』
『ファイルへのレコードの追加』

関連参照

142 ページの『ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント』

ファイルへのレコードの追加

COBOL の WRITE ステートメントは、既存のレコードを置き換えずに、ファイルにレコードを追加します。追加されるレコードは、ファイルの定義時に設定された最大レコード・サイズを超えてはなりません。それぞれの WRITE ステートメントの後で、ファイル状況キーを検査してください。

レコードを順次に追加する場合: OUTPUT または EXTEND としてオープンされたファイルの終わりにレコードを順次に追加するには、ACCESS IS SEQUENTIAL を使用し、WRITE ステートメントをコーディングしてください。

順次ファイルおよび行順次ファイルは、必ず順次に書き込まれます。

索引付きファイルの場合、新規のレコードは昇順キー配列で書き込む必要があります。ファイルが EXTEND としてオープンされている場合、追加されるレコードのレコード・キーは、ファイルがオープンされた時点のファイルの最高位基本レコード・キーよりも大きくなければなりません。

相対ファイルの場合、レコードは正しい順序になっていなければなりません。SELECT 文節に RELATIVE KEY データ項目を組み込むと、書き込まれるレコードの相対レコード番号がそのデータ項目に入れます。

レコードをランダムまたは動的に追加する場合: ACCESS IS RANDOM または ACCESS IS DYNAMIC をコーディングしているレコードを索引付きデータ・セットに書き込むとき、レコードは任意の順序で書き込むことができます。

関連概念

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モードの指定』

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

139 ページの『ファイルへのレコード書き込み時に使用するステートメント』

142 ページの『ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント』

FILE STATUS 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ファイル内のレコードの置換

ファイル内のレコードを置換するには、I-O としてオープンしたファイルに対して REWRITE を使用してください。ファイルが I-O としてオープンされなかった場合、レコードは置換されず、状況キーが 49 に設定されます。それぞれの REWRITE ステートメントの後で、ファイル状況キーを検査してください。

順次ファイルの場合、置換レコードの長さは元のレコードの長さと同じでなければなりません。索引付きファイルまたは可変長相対ファイルの場合、置換するレコードの長さを変更することができます。

レコードをランダムまたは動的に置換する場合、そのレコードに対して最初に READ を実行する必要はありません。置換対象のレコードは、次のように位置指定します。

- 索引付きファイルの場合、レコード・キーを RECORD KEY データ項目に移動してから、REWRITE を発行します。
- 相対ファイルの場合、相対レコード番号を RELATIVE KEY データ項目に移動してから、REWRITE を発行します。

圧縮フォーマットで割り振った拡張フォーマットのデータ・セットを、I-O としてオープンすることはできません。

関連概念

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

135 ページの『ファイルのオープン』

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

FILE STATUS 文節 (『*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ファイルからのレコードの削除

索引付きファイルまたは相対ファイルから既存のレコードを削除するには、ファイルを I-O としてオープンし、DELETE ステートメントを使用します。順次または行順次ファイルには DELETE を使用できません。

ACCESS IS SEQUENTIAL の場合は、削除するレコードを COBOL プログラムがまず読み取る必要があります。DELETE ステートメントは、読み取られたレコードを除去します。DELETE の前の READ が成功しなかった場合には、削除は行われず、ファイル状況キー値が 92 に設定されます。

ACCESS IS RANDOM または ACCESS IS DYNAMIC の場合は、削除するレコードを COBOL プログラムが読み取る必要はありません。レコードを削除するには、レコードのキーを RECORD KEY データ項目に移動してから、DELETE を発行します。

それぞれの DELETE ステートメントの後で、ファイル状況キーを検査してください。

関連概念

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

135 ページの『ファイルのオープン』

138 ページの『ファイルからのレコードの読み取り』

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

FILE STATUS 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント

次の表に、順次ファイル、行順次ファイル、索引付きファイル、および相対ファイルの PROCEDURE DIVISION で使用できるステートメントを示します。

表 16. ファイルの更新に使用する PROCEDURE DIVISION ステートメント

アクセス方式	順次	行順次	索引付き	相対
ACCESS IS SEQUENTIAL	OPEN EXTEND WRITE CLOSE または OPEN I-O READ REWRITE CLOSE	OPEN EXTEND WRITE CLOSE	OPEN EXTEND WRITE CLOSE または OPEN I-O READ REWRITE DELETE CLOSE	OPEN EXTEND WRITE CLOSE または OPEN I-O READ REWRITE DELETE CLOSE
ACCESS IS RANDOM	適用されない	適用されない	OPEN I-O READ WRITE REWRITE DELETE CLOSE	OPEN I-O READ WRITE REWRITE DELETE CLOSE
ACCESS IS DYNAMIC (sequential processing)	適用されない	適用されない	OPEN I-O READ NEXT READ PREVIOUS START CLOSE	OPEN I-O READ NEXT READ PREVIOUS START CLOSE
ACCESS IS DYNAMIC (random processing)	適用されない	適用されない	OPEN I-O READ WRITE REWRITE DELETE CLOSE	OPEN I-O READ WRITE REWRITE DELETE CLOSE

関連概念

127 ページの『ファイル編成およびアクセス・モード』

関連タスク

135 ページの『ファイルのオープン』

138 ページの『ファイルからのレコードの読み取り』

140 ページの『ファイルへのレコードの追加』

- 140 ページの『ファイル内のレコードの置換』
- 141 ページの『ファイルからのレコードの削除』

関連参照

- 139 ページの『ファイルへのレコード書き込み時に使用するステートメント』

第 8 章 ファイルのソートおよびマージ

SORT または MERGE ステートメントを使用すると、レコードを特定のシーケンスで並べることができます。同じ COBOL プログラムの中に SORT ステートメントと MERGE ステートメントを混在させることができます。

SORT ステートメント

(ファイルまたは内部プロシージャから) 順序付けられていない入力を受け入れ、要求されたシーケンスで出力を (ファイルまたは内部プロシージャに) 作成します。ソートの前に、レコードを追加、削除、または変更することができます。

MERGE ステートメント

2 つ以上の順序付けられたファイルからのレコードを比較し、それらを順序正しく結合します。マージの前に、レコードを追加、削除、または変更することができます。

プログラムにいくつかのソート操作およびマージ操作を含めても構いません。また、同じ操作を何度も実行しても構いませんし、異なる操作を実行しても構いません。ただし、1 つの操作が終了してからでなければ、別の操作を開始することはできません。

一般に、ソートまたはマージの手順は、次のとおりです。

1. ソートまたはマージに使用するソート・ファイルまたはマージ・ファイルを記述する。
2. ソートまたはマージする入力を記述する。レコードをソート前に処理したい場合には、入力プロシージャをコーディングしてください。
3. ソートまたはマージからの出力を記述する。レコードをソートまたはマージした後処理したい場合には、出力プロシージャをコーディングしてください。
4. ソートまたはマージを要求する。
5. ソートまたはマージ操作が成功したかどうかを判別する。

関連概念

146 ページの『ソートおよびマージ・プロセス』

関連タスク

146 ページの『ソートまたはマージ・ファイルの記述』

147 ページの『ソートまたはマージへの入力の記述』

149 ページの『ソートまたはマージからの出力の記述』

151 ページの『ソートまたはマージの要求』

154 ページの『ソートまたはマージの成否の判断』

158 ページの『ソートまたはマージ操作の途中停止』

関連参照

SORT ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

MERGE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ソートおよびマージ・プロセス

ファイルのソート時に、ファイル内のレコードはすべて、それぞれのレコード内の 1 つ以上のフィールドの内容 (キー) に従って順序付けられます。レコードは、各キーの昇順または降順にソートすることができます。

複数のキーがある場合は、レコードはまず最初の (基本) キーの内容に従ってソートされ、次に 2 番目のキーの内容に従ってソートされる、というようになります。

ファイルをソートするには、COBOL の SORT ステートメントを使用します。

複数のファイルのマージ時には (これらのファイルはソート済みでなければなりません)、レコードは、各レコード内の 1 つまたは複数のキーの内容に従って結合され、順序付けされます。レコードは、各キーの昇順または降順に順序付けすることができます。ソートの場合と同様、レコードはまず最初の (基本) キーの内容に従って順序付けされ、次に 2 番目のキーの内容に従って順序付けされる、というようになります。

MERGE . . . USING を使用して、順序付けられた 1 つのファイルとして結合したい複数のファイルの名前を指定します。マージ操作では、入力ファイルのレコード内のキーを比較し、順序付けられたレコードを 1 つずつ、出力プロシージャの RETURN ステートメントに、または GIVING 句で指定されたファイルに渡します。

関連タスク

152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』

関連参照

SORT ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

MERGE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ソートまたはマージ・ファイルの記述

ソートまたはマージに使用するソート・ファイルは、次のように記述してください。WORKING-STORAGE または LOCAL-STORAGE からのデータ項目のみをソートまたはマージする場合でも、SELECT 文節および SD 項目が必要です。

次のようにコーディングします。

1. ENVIRONMENT DIVISION の FILE-CONTROL 段落に 1 つまたは複数の SELECT 文節をコーディングし、ソート・ファイルの名前を指定します。以下に、その例を示します。

```
ENVIRONMENT DIVISION.  
INPUT-OUTPUT SECTION.  
FILE-CONTROL.  
    SELECT Sort-Work-1 ASSIGN TO SortFile.
```

Sort-Work-1 は、プログラム内のファイルの名前です。この名前を使用してファイルを参照してください。

2. そのソート・ファイルを、DATA DIVISION の FILE SECTION の SD 記入項目で記述します。それぞれの SD 記入項目がレコード記述を含んでいなければなりません。以下に、その例を示します。

```

DATA DIVISION.
FILE SECTION.
SD  Sort-Work-1
    RECORD CONTAINS 100 CHARACTERS.
01  SORT-WORK-1-AREA.
    05  SORT-KEY-1    PIC  X(10).
    05  SORT-KEY-2    PIC  X(10).
    05  FILLER        PIC  X(80).

```

SD 記入項目で記述するファイルは、ソートまたはマージ操作に使用される作業ファイルです。このファイルに入力または出力操作を実行することはできません。

関連参照

13 ページの『FILE SECTION 記入項目』

ソートまたはマージへの入力の記述

ソートまたはマージ用の入力ファイルは、以下の手順に従って記述してください。

1. ENVIRONMENT DIVISION の FILE-CONTROL 段落に 1 つまたは複数の SELECT 文節をコーディングし、入力ファイルの名前を指定します。以下に、その例を示します。

```

ENVIRONMENT DIVISION.
INPUT-OUTPUT SECTION.
FILE-CONTROL.
    SELECT Input-File ASSIGN TO InFile.

```

Input-File は、プログラム内のファイルの名前です。この名前を使用してファイルを参照してください。

2. その入力ファイル (マージの場合は複数のファイル) を、DATA DIVISION の FILE SECTION の FD 記入項目で記述します。以下に、その例を示します。

```

DATA DIVISION.
FILE SECTION.
FD  Input-File
    RECORD CONTAINS 100 CHARACTERS.
01  Input-Record  PIC X(100).

```

関連タスク

148 ページの『入力プロシージャのコーディング』

151 ページの『ソートまたはマージの要求』

関連参照

13 ページの『FILE SECTION 記入項目』

例: SORT 用のソート・ファイルおよびの入力ファイルの記述

次の例は、ソート作業ファイルおよび入力ファイルを記述するのに必要な ENVIRONMENT DIVISION および DATA DIVISION の記入項目を示しています。

```

ID Division.
Program-ID. Smp1Sort.
Environment Division.
Input-Output Section.
File-Control.
*
* Assign name for a working file is treated as documentation.
*
    Select Sort-Work-1 Assign To SortFile.

```

```

        Select Sort-Work-2 Assign To SortFile.
        Select Input-File Assign To InFile.
    . . .
Data Division.
File Section.
SD Sort-Work-1
   Record Contains 100 Characters.
01 Sort-Work-1-Area.
   05 Sort-Key-1    Pic X(10).
   05 Sort-Key-2    Pic X(10).
   05 Filler        Pic X(80).
SD Sort-Work-2
   Record Contains 30 Characters.
01 Sort-Work-2-Area.
   05 Sort-Key      Pic X(5).
   05 Filler        Pic X(25).
FD Input-File
   Record Contains 100 Characters.
01 Input-Record     Pic X(100).
. . .
Working-Storage Section.
01 EOS-Sw          Pic X.
01 Filler.
   05 Table-Entry Occurs 100 Times
       Indexed By X1    Pic X(30).
. . .

```

関連タスク

151 ページの『ソートまたはマージの要求』

入力プロシージャのコーディング

入力ファイルのレコードを、それらがソート・プログラムに解放される前に処理するには、SORT ステートメントの INPUT PROCEDURE 句を使用してください。

入力プロシージャーを使用して、以下のことを行うことができます。

- データ項目を WORKING-STORAGE または LOCAL-STORAGE からソート・ファイルに解放する。
- プログラム内の別な場所ですでに読み取られているレコードを解放する。
- 入力レコードからレコードを読み取り、それらを選択または処理し、それらをソート・ファイルに解放する

それぞれの入力プロシージャーは、段落またはセクションのいずれかで構成されなければなりません。例えば、WORKING-STORAGE または LOCAL-STORAGE の表からのレコードをソート・ファイル SORT-WORK-2 に解放するには、次のようにコーディングすることができます。

```

        SORT SORT-WORK-2
          ON ASCENDING KEY SORT-KEY
          INPUT PROCEDURE 600-SORT3-INPUT-PROC
    . . .
600-SORT3-INPUT-PROC SECTION.
  PERFORM WITH TEST AFTER
    VARYING X1 FROM 1 BY 1 UNTIL X1 = 100
    RELEASE SORT-WORK-2-AREA FROM TABLE-ENTRY (X1)
  END-PERFORM.

```

レコードをソート・プログラムに転送するためには、すべての入力プロシージャに少なくとも 1 つの RELEASE または RELEASE FROM ステートメントが含まれていなければなりません。例えば、X から A を解放するには、次のようにコーディングできます。

```
MOVE X TO A.  
RELEASE A.
```

あるいは、次のようにコーディングできます。

```
RELEASE A FROM X.
```

次の表では、RELEASE ステートメントと RELEASE FROM ステートメントを比較しています。

RELEASE	RELEASE FROM
MOVE EXT-RECORD TO SORT-EXT-RECORD PERFORM RELEASE-SORT-RECORD ... RELEASE-SORT-RECORD. RELEASE SORT-RECORD	PERFORM RELEASE-SORT-RECORD ... RELEASE-SORT-RECORD. RELEASE SORT-RECORD FROM SORT-EXT-RECORD

関連参照

150 ページの『入出力プロシージャに関する制約事項』
RELEASE ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

ソートまたはマージからの出力の記述

ソートまたはマージからの出力がファイルである場合は、以下の手順に従ってファイルを記述しなければなりません。

- 1. ENVIRONMENT DIVISION の FILE-CONTROL 段落に SELECT 文節をコーディングし、出力ファイルの名前を指定します。以下に、その例を示します。

```
ENVIRONMENT DIVISION.  
INPUT-OUTPUT SECTION.  
FILE-CONTROL.  
    SELECT Output-File ASSIGN TO OutFile.
```

Output-File は、プログラム内のファイルの名前です。この名前を使用してファイルを参照してください。

- 2. その出力ファイル (マージの場合は複数のファイル) を、DATA DIVISION の FILE SECTION の FD 記入項目で記述します。以下に、その例を示します。

```
DATA DIVISION.  
FILE SECTION.  
FD Output-File  
    RECORD CONTAINS 100 CHARACTERS.  
01 Output-Record PIC X(100).
```

関連タスク

150 ページの『出力プロシージャのコーディング』
151 ページの『ソートまたはマージの要求』

関連参照

13 ページの『FILE SECTION 記入項目』

出力プロシージャのコーディング

ソート済みのレコードをソート作業ファイルから別のファイルに書きこむ前に、それらの選択、編集、またはそれ以外の変更を行うには、SORT ステートメントの OUTPUT PROCEDURE 句を使用してください。

それぞれの出力プロシージャは、セクションまたは段落のいずれかで構成されなければなりません。また、出力プロシージャには、以下の両方を含めなければなりません。

- 少なくとも 1 つの RETURN ステートメント、または INTO 句を指定した 1 つの RETURN ステートメント。
- レコードの処理に必要なステートメント。レコードは、RETURN ステートメントによって一度に 1 つずつ使用可能になります。

RETURN ステートメントによって、ソート済みの各レコードが出力プロシージャから使用可能になります。(ソート・ファイルに対する RETURN ステートメントは、入力ファイルに対する READ ステートメントに似ています。)

RETURN ステートメントとともに AT END および END-RETURN 句を使用することができます。AT END 句の命令ステートメントは、ソート・ファイルからすべてのレコードが戻された後で実行されます。END-RETURN 明示範囲終了符号は、RETURN ステートメントの有効範囲を区切る役割をします。

RETURN ではなく RETURN INTO を使用すると、レコードは WORKING-STORAGE、LOCAL-STORAGE、または出力域に戻されます。

関連参照

『入出力プロシージャに関する制約事項』
RETURN ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

入出力プロシージャに関する制約事項

SORT によって呼び出されるそれぞれの入出力プロシージャ、および MERGE によって呼び出されるそれぞれの出力プロシージャには、以下に示す制約事項が適用されます。

- プロシージャに SORT または MERGE ステートメントを含めてはなりません。
- プロシージャの中で ALTER、GO TO、および PERFORM ステートメントを使用することによって、入力または出力プロシージャの外側にあるプロシージャ名を参照することができます。しかし、GO TO または PERFORM ステートメントの後で、その入力または出力プロシージャに制御権を戻さなければなりません。
- PROCEDURE DIVISION のその他の部分に、入力または出力プロシージャの内部への制御権の移動を記述してはなりません (ただし、宣言セクションからの制御権の戻りは例外です)。
- 入力または出力プロシージャの中から、プログラムを呼び出すことができます。ただし、呼び出されるプログラムから、SORT または MERGE ステートメントを発行することはできません。また、呼び出されたプログラムは呼び出し元に戻る必要があります。
- SORT または MERGE 操作時には、SD データ項目が使用されます。出力プロシージャの中で、最初の RETURN が実行される前に、このデータ項目を使用してはな

りません。最初の RETURN ステートメントの前に、データをこのレコード域に移動すると、戻される最初のレコードが上書きされます。

関連タスク

148 ページの『入力プロシージャのコーディング』

150 ページの『出力プロシージャのコーディング』

ソートまたはマージの要求

事前処理を行わずに 1 つの入力ファイル (MERGE の場合は複数のファイル) からレコードを読み取るには、SORT . . . USING または MERGE . . . USING および SELECT 文節で宣言された入力ファイル (1 つまたは複数) の名前を使用してください。

ソート済みまたはマージ済みレコードを、これ以上処理せずに、ソート・プログラムまたはマージ・プログラムから別のファイルへ転送するには、SORT . . . GIVING または MERGE . . . GIVING、および SELECT 文節で宣言された出力ファイルの名前を使用してください。以下に、その例を示します。

```
SORT Sort-Work-1
  ON ASCENDING KEY Sort-Key-1
  USING Input-File
  GIVING Output-File.
```

SORT . . . USING または MERGE . . . USING の場合、コンパイラーは、ファイルをオープンし、レコードを読み取り、レコードをソートまたはマージ・プログラムに解放し、そしてファイルをクローズするための入力プロシージャを生成します。SORT または MERGE ステートメントが実行を開始するとき、ファイルがオープンされているわけではありません。SORT . . . GIVING または MERGE . . . GIVING の場合、コンパイラーは、ファイルをオープンし、レコードを戻し、レコードを書き込み、そしてファイルをクローズするための出力プロシージャを生成します。SORT または MERGE ステートメントが実行を開始するとき、ファイルがオープンされているわけではありません。

147 ページの『例: SORT 用のソート・ファイルおよびの入力ファイルの記述』

ソート・レコードがソートされる前に、それらのレコードに対して入力プロシージャが実行されるようにしたい場合は、SORT . . . INPUT PROCEDURE を使用してください。ソート済みレコードに対して出力プロシージャが実行されるようにしたい場合は、SORT . . . OUTPUT PROCEDURE を使用してください。以下に、その例を示します。

```
SORT Sort-Work-1
  ON ASCENDING KEY Sort-Key-1
  INPUT PROCEDURE EditInputRecords
  OUTPUT PROCEDURE FormatData.
```

153 ページの『例: 入出力プロシージャを使用したソート』

制約事項: MERGE ステートメントで入力プロシージャを使用することはできません。マージ操作への入力ソースは、すでにソート済みのファイルの集合でなければなりません。しかし、マージ済みレコードに対して出力プロシージャが実行されるようにしたい場合は、MERGE . . . OUTPUT PROCEDURE を使用してください。以下に、その例を示します。


```
MERGE Merge-Work
ON ASCENDING KEY Merge-Key
USING Input-File-1 Input-File-2 Input-File-3
OUTPUT PROCEDURE ProcessOutput.
```

FILE SECTION で、*Merge-Work* は SD 記入項目に定義しなければならず、入力ファイルは FD 記入項目に定義しなければなりません。

関連参照

SORT ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

MERGE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ソートまたはマージ基準の設定

ソートまたはマージ基準を設定するには、その操作を実行する対象となるキーを定義します。

以下の手順を実行します。

1. ソートまたはマージするファイルのレコード記述の中で、キー (複数の場合もある) を定義します。

制約事項: キーは可変位置にすることはできません。

2. SORT または MERGE ステートメントの中で、ASCENDING 句または DESCENDING KEY 句 (あるいはその両方) をコーディングすることにより、順序付けに使用するキー・フィールドを指定してください。複数のキーをコーディングする場合、一部を昇順にし、残りを降順にすることができます。

キーの名前は重要度の高い順に指定します。左端のキーが基本キーです。次のキーが 2 次キー、というようになります。

SORT および MERGE キーは、クラス英字、英数字、国別 (コンパイラ・オプション NCOLLSEQ(BIN) が有効な場合)、または数値 (ただし、USAGE NATIONAL の数値ではない) にすることができます。USAGE NATIONAL を持っている場合、キーはカテゴリー国別にするか、あるいは国別編集または数字編集データ項目にすることができます。キーを、国別 10 進数データ項目にしたり、国別浮動小数点データ項目にすることはできません。

国別キーの照合順序は、そのキーの 2 進順序によって決まります。キーとして国別データ項目を指定する場合は、SORT または MERGE ステートメントの COLLATING SEQUENCE 句はいずれもそのキーに適用されません。

同じ COBOL プログラムの中に SORT ステートメントと MERGE ステートメントを混在させることができます。プログラムはいくつのソート操作およびマージ操作でも実行することができます。ただし、1 つの操作が終了してからでなければ、次の操作を開始することはできません。

関連タスク

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

関連参照

279 ページの『NCOLLSEQ』

SORT ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
MERGE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

代替照合シーケンスの選択

照合シーケンスで、1 バイト文字のキーに対して指定したレコードをソートまたはマージすることができます。OBJECT-COMPUTER 段落で PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節をコーディングしない限り、デフォルトの照合シーケンスは、コンパイル時に有効なロケール設定によって指定された照合シーケンスです。

デフォルト・シーケンスをオーバーライドするには、SORT または MERGE ステートメントの COLLATING SEQUENCE 句を使用してください。プログラムの SORT または MERGE ステートメントごとに異なる照合シーケンスを使用することができます。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節および COLLATING SEQUENCE 句は、クラス英字または英数字のキーにのみ適用されます。COLLATING SEQUENCE 句は、単一バイトの ASCII コード・ページが有効である場合にのみ有効です。

関連タスク

8 ページの『照合シーケンスの指定』
203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』
152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』

関連参照

OBJECT-COMPUTER 段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
SORT ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: 入出力プロシージャーを使用したソート

以下は、SORT ステートメントにおける入出力プロシージャーの使用例です。この例では、基本キー SORT-GRID-LOCATION と 2 次キー SORT-SHIFT を SORT ステートメントで使用する前に、それらのキーをどのように定義できるかも示します。

```
DATA DIVISION.
. . .
SD SORT-FILE
  RECORD CONTAINS 115 CHARACTERS
  DATA RECORD SORT-RECORD.
01 SORT-RECORD.
  05 SORT-KEY.
    10 SORT-SHIFT          PIC X(1).
    10 SORT-GRID-LOCATION   PIC X(2).
    10 SORT-REPORT        PIC X(3).
  05 SORT-EXT-RECORD.
    10 SORT-EXT-EMPLOYEE-NUM PIC X(6).
    10 SORT-EXT-NAME       PIC X(30).
    10 FILLER              PIC X(73).
. . .
WORKING-STORAGE SECTION.
01 TAB1.
  05 TAB-ENTRY OCCURS 10 TIMES
    INDEXED BY TAB-INDX.
    10 WS-SHIFT          PIC X(1).
    10 WS-GRID-LOCATION   PIC X(2).
    10 WS-REPORT        PIC X(3).
    10 WS-EXT-EMPLOYEE-NUM PIC X(6).
    10 WS-EXT-NAME       PIC X(30).
```

```

        10 FILLER                                PIC X(73).
    . . .
PROCEDURE DIVISION.
    . . .
    SORT SORT-FILE
      ON ASCENDING KEY SORT-GRID-LOCATION SORT-SHIFT
      INPUT PROCEDURE 600-SORT3-INPUT
      OUTPUT PROCEDURE 700-SORT3-OUTPUT.
    . . .
600-SORT3-INPUT.
    PERFORM VARYING TAB-INDX FROM 1 BY 1 UNTIL TAB-INDX > 10
      RELEASE SORT-RECORD FROM TAB-ENTRY(TAB-INDX)
    END-PERFORM.
    . . .
700-SORT3-OUTPUT.
    PERFORM VARYING TAB-INDX FROM 1 BY 1 UNTIL TAB-INDX > 10
      RETURN SORT-FILE INTO TAB-ENTRY(TAB-INDX)
      AT END DISPLAY 'Out Of Records In SORT File'
    END-RETURN
    END-PERFORM.

```

関連タスク

151 ページの『ソートまたはマージの要求』

ソートまたはマージの成否の判断

それぞれのソートまたはマージが完了すると、SORT または MERGE ステートメントは、完了コード 0 (正常終了) または 16 (不成功な完了) を戻します。完了コードは、SORT-RETURN 特殊レジスターに保管されます。

それぞれの SORT または MERGE ステートメントの後で、正常終了かどうかをテストしなければなりません。以下に、その例を示します。

```

    SORT SORT-WORK-2
      ON ASCENDING KEY SORT-KEY
      INPUT PROCEDURE IS 600-SORT3-INPUT-PROC
      OUTPUT PROCEDURE IS 700-SORT3-OUTPUT-PROC.
    IF SORT-RETURN NOT=0
      DISPLAY "SORT ENDED ABNORMALLY. SORT-RETURN = " SORT-RETURN.
    . . .
600-SORT3-INPUT-PROC SECTION.
    . . .
700-SORT3-OUTPUT-PROC SECTION.
    . . .

```

プログラムの中で SORT-RETURN をまったく参照しないと、COBOL ランタイムで完了コードがテストされます。16 の場合は、ランタイム診断メッセージが発行され、実行単位 (またはマルチスレッド環境ではスレッド) が終了します。診断メッセージには、ソートまたはマージ・エラー番号が含まれており、これを使用して問題の原因を判別できます。

SORT または MERGE ステートメントの 1 つ以上 (しかし、必ずしも全部ではない) について SORT-RETURN をテストすると、COBOL ランタイムで完了コードが検査されません。ただし、SORT または MERGE ステートメントの後で、例えば以下のようにして `iwzGetSortErrno` サービスを呼び出すことにより、ソートまたはマージ・エラー番号を取得できます。

```

77 sortErrno    PIC 9(9)    COMP-5.
...
    CALL 'iwzGetSortErrno' USING sortErrno
...

```

iwzGetSortErrno を呼び出すには、SYSTEM 呼び出しインターフェース規則 と、PGMNAME(MIXED) および NODYNAM コンパイラ・オプションを使用する必要があります。

エラー番号およびそれらの意味のリストについては、以下の関連参照をご覧ください。

関連参照

『ソートおよびマージ・エラー番号』

514 ページの『SYSTEM』

ソートおよびマージ・エラー番号

プログラム内で SORT-RETURN を参照しない場合で、ソースまたはマージ操作からの完了コードが 16 である場合、COBOL for Windows はランタイム診断メッセージを発行します。これには、以下の表に示すゼロ以外のエラー番号のいずれかが含まれています。

表 17. ソートおよびマージ・エラー番号

エラー番号	説明
0	エラーなし
1	レコードの順序が間違っています
2	同等鍵付きレコードが検出されました
3	複数の main 関数が指定されました (内部エラー)
4	パラメーター・ファイルにエラーがあります
5	パラメーター・ファイルをオープンできませんでした
6	オペランドがオプションから欠落しています
7	オペランドが拡張オプションから欠落しています
8	オプション内のオペランドが無効です
9	拡張オプション内のオペランドが無効です
10	無効なオプションが指定されました
11	無効な拡張オプションが指定されました
12	無効な一時ディレクトリーが指定されました
13	無効なファイル名が指定されました
14	無効なフィールドが指定されました
15	フィールドがレコード内にありません
16	フィールドがレコード内で短すぎます
17	SELECT の指定に構文エラーがあります
18	無効な定数が SELECT で指定されました
19	SELECT 内の定数とデータ型の間の比較が無効です
20	SELECT 内の 2 つのデータ型の間の比較が無効です
21	形式の指定に構文エラーがあります

表 17. ソートおよびマージ・エラー番号 (続き)

エラー番号	説明
22	再フォーマットの指定に構文エラーがあります
23	無効な定数が再フォーマットの指定で指定されました
24	合計の指定に構文エラーがあります
25	フラグが複数回指定されました
26	指定された出力が多すぎます
27	入力ソースが指定されませんでした
28	出力宛先が指定されませんでした
29	無効な修飾子が指定されました
30	合計は許可されません
31	レコードが短すぎます
32	レコードが長すぎます
33	無効なバックまたはゾーン・フィールドが検出されました
34	ファイルに読み取りエラーがあります
35	ファイルに書き込みエラーがあります
36	入力ファイルをオープンできません
37	メッセージ・ファイルをオープンできません
38	VSAM ファイル・エラー
39	ターゲット・バッファのスペースが不十分です
40	一時ディスク・スペースが足りません
41	出力ファイルのスペースが足りません
42	予期しないシグナルがトラップされました
43	エラーが入力出口から戻されました
44	エラーが出力出口から戻されました
45	予期しないデータが出力ユーザー出口から戻されました
46	無効なバイトを使用した値が入力出口から戻されました
47	無効なバイトを使用した値が出力出口から戻されました
48	SMARTsort がアクティブではありません
49	実行を継続するためのストレージが不十分です
50	パラメーター・ファイルが大きすぎます
51	単一引用符が一致しません
52	引用符が一致しません
53	競合オプションが指定されました
54	レコード内の長さフィールドが無効です
55	レコード内の最終フィールドが無効です
56	必要なレコード形式が指定されませんでした
57	出力ファイルをオープンできません
58	一時ファイルをオープンできません
59	ファイル編成が無効です
60	指定されたファイル編成のユーザー出口がサポートされていません
61	ロケールがシステムに認識されていません

表 17. ソートおよびマージ・エラー番号 (続き)

エラー番号	説明
62	レコードに無効なマルチバイト文字があります
63	VSAM 編成がファイルに指定されましたが、ファイルが VSAM ではありません
64	SORT に指定されたキーが、索引付き出力ファイルの定義に使用できません
65	ファイルの VSAM 固定レコード長が、指定されたレコード形式と合致しません
66	SMARTsort オプションのファイル作成が失敗しました
67	完全修飾された、非相対パス名を作業ディレクトリーとして指定する必要があります
68	必須オプションを指定する必要があります
69	パス名が無効です
79	一時ファイルの最大数に達しました
501	関数が無効です
502	レコード・タイプが無効です
503	レコード長が無効です
504	タイプ長エラー
505	タイプが無効です
506	キー数が一致しません
507	タイプが長すぎます
508	キー・オフセットが無効です
509	昇順または降順キーが無効です
510	オーバーラップ・キーが無効です
511	キーが定義されませんでした。
512	入力ファイルが指定されませんでした
513	出力ファイルが指定されませんでした
514	入力ファイルのタイプが混在しています
515	出力ファイルのタイプが混在しています
516	入力作業バッファが無効です
517	出力作業バッファが無効です
518	COBOL 入力の入出力エラー
519	COBOL 出力の入出力エラー
520	関数がサポートされていません
521	無効なキー
522	無効な USING ファイル
523	無効な GIVING ファイル
524	作業ディレクトリーが提供されませんでした
525	作業ディレクトリーが存在しません
526	ソート共通が割り振られませんでした
527	ソート共通用のストレージがありません
528	バイナリー・バッファが割り振られませんでした

表 17. ソートおよびマージ・エラー番号 (続き)

エラー番号	説明
529	行順次ファイル・バッファが割り振られませんでした
530	ワークスペースの割り振りが失敗しました
531	FCB の割り振りが失敗しました

ソートまたはマージ操作の途中停止

ソートまたはマージ操作を停止するには、SORT-RETURN 特殊レジスターに整数 16 を移動します。

次のいずれかの方法で、レジスターに 16 を移動してください。

- 入力または出力プロシージャーの中で MOVE を使用する。

ソートまたはマージ処理は、次の RELEASE または RETURN ステートメントが実行された直後に停止されます。

- USING または GIVING ファイルの処理中に入る宣言セクションの中でこのレジスターをリセットする。

ソートまたはマージ処理は、宣言セクションの終了時に停止されます。

制御は、その後、SORT または MERGE ステートメントの次のステートメントに戻ります。

第 9 章 エラーの処理

システムまたはランタイムの問題が起こることを予期したコードをプログラムに入れておきます。このようなコードを入れておかないと、出力データやファイルが破壊される可能性があり、ユーザーは問題があることさえ気付かない可能性があります。

エラー処理コードでは、状態の処理、メッセージの発行、プログラムの停止などのアクションを取ることができます。例えば、データ入力エラーまたはご使用のシステムで定義されたエラーに対して、独自のエラー検出ルーチンを作成することができます。どのようなイベントであっても、警告メッセージをコーディングするのはよいことです。

COBOL for Windows には、エラー状態を予想して訂正するのに役に立つ特殊なエレメントがいくつか含まれています。

- STRING および UNSTRING 操作の ON OVERFLOW
- 算術演算の ON SIZE ERROR
- 入力または出力エラーを処理するエレメント
- CALL ステートメントの ON EXCEPTION または ON OVERFLOW

関連タスク

『ストリングの結合および分割におけるエラーの処理』

160 ページの『算術演算でのエラーの処理』

161 ページの『入出力操作でのエラーの処理』

166 ページの『プログラム呼び出し時のエラーの処理』

ストリングの結合および分割におけるエラーの処理

ストリングの結合や分割を行うときに、STRING または UNSTRING によって使用されるポインターが受信フィールドの範囲を超えることがあります。オーバーフロー条件が存在する可能性はありますが、COBOL ではオーバーフローの発生を許可しません。

その代わりに、STRING 操作や UNSTRING 操作は完了せず、受信フィールドは未変更のままとなり、制御は次の順次ステートメントに移動します。STRING または UNSTRING ステートメントの ON OVERFLOW 句をコーディングしないと、操作未完了の通知が出されません。

次のステートメントを考えてください。

```
String Item-1 space Item-2 delimited by Item-3
      into Item-4
      with pointer String-ptr
      on overflow
      Display "A string overflow occurred"
End-String
```

以下に、ステートメントの実行前と実行後のデータ値を示します。

データ項目	PICTURE	実行前の値	実行後の値
Item-1	X(5)	AAAAA	AAAAA
Item-2	X(5)	EEEEAA	EEEEAA
Item-3	X(2)	EA	EA
Item-4	X(8)	bbbbbb ¹	bbbbbb ¹
String-ptr	9(2)	0	0
1. 記号 <i>b</i> はブランク・スペースを表します。			

String-ptr の値は (0) で、受信フィールドには達しないため、オーバーフロー条件が発生し、STRING 操作は完了しません (String-ptr が 9 より大きい場合にも、オーバーフローが起こります)。ON OVERFLOW が指定されていなかった場合は、Item-4 の内容が未変更のままであったことについて通知されません。

算術演算でのエラーの処理

算術演算の結果が、それらを入れる固定小数点フィールドより大きかったり、0 除算が試みられたりすることがあります。いずれの場合も、ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、DIVIDE、または COMPUTE ステートメントの後の ON SIZE ERROR 文節でその状況进行处理することができます。

固定小数点オーバーフローおよび 10 進数オーバーフローの場合に ON SIZE ERROR が正しく機能するためには、TRAP(ON) ランタイム・オプションを指定する必要があります。

以下の場合、ON SIZE ERROR 文節の命令ステートメントが実行され、結果フィールドは変更されません。

- 固定小数点オーバーフロー
- 0 による除算
- 0 の 0 乗
- 0 の負数乗
- 負数の分数乗

『例: 0 による除算の検査』

例: 0 による除算の検査

次の例は、0 による除算を行うとプログラムが通知メッセージを出すように、ON SIZE ERROR 命令ステートメントをコーディングする方法を示しています。

```

DIVIDE-TOTAL-COST.
    DIVIDE TOTAL-COST BY NUMBER-PURCHASED
        GIVING ANSWER
        ON SIZE ERROR
            DISPLAY "ERROR IN DIVIDE-TOTAL-COST PARAGRAPH"
            DISPLAY "SPENT " TOTAL-COST, " FOR " NUMBER-PURCHASED
            PERFORM FINISH
        END-DIVIDE
    . . .
    FINISH.
    STOP RUN.

```

0 による除算を行うと、プログラムはメッセージを書き出し、プログラム実行を停止します。

入出力操作でのエラーの処理

入力または出力操作が失敗しても、COBOL が自動的に訂正処置をとることはありません。重大エラーではない入出力エラーの後でプログラムの実行を継続するかどうかを選択してください。

特定の入力または出力条件またはエラーの代行受信および処理には、以下のいずれかの技法を使用することができます。

- ファイル終わり条件 (AT END)
- ERROR 宣言
- FILE STATUS 文節とファイル状況キー
- ファイル・システム状況コード
- READ または WRITE ステートメント上の命令ステートメント句
- INVALID KEY 句

プログラムの継続を選択した場合には、適切なエラー・リカバリー手順もコーディングする必要があります。例えば、ファイル状況キーの値を検査する手順をコーディングすることができます。入力または出力エラーを前述の方法で処理しないと、COBOL ランタイム・メッセージが出され、実行単位が終了します。

関連タスク

『ファイルの終わり条件 (AT END) の使用』

162 ページの『ERROR 宣言のコーディング』

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

164 ページの『ファイル・システム状況コードの使用』

関連参照

ファイル状況キー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ファイルの終わり条件 (AT END) の使用

READ ステートメントの AT END 句をコーディングすると、エラーまたは正常な条件をプログラムの設計に従って処理することができます。ファイルの終わりで、AT END 句が実行されます。AT END 句をコーディングしないと、対応する ERROR 宣言が実行されます。

多くの設計では、ファイルの終わりまでの順次読み取りが意図的に行われており、AT END 条件が予期されます。例えば、マスター・ファイルを更新するために、トランザクションが入っているファイル进行处理していると想定します。

```
PERFORM UNTIL TRANSACTION-EOF = "TRUE"
  READ UPDATE-TRANSACTION-FILE INTO WS-TRANSACTION-RECORD
  AT END
    DISPLAY "END OF TRANSACTION UPDATE FILE REACHED"
    MOVE "TRUE" TO TRANSACTION-EOF
  END READ
  . . .
END-PERFORM
```

NOT AT END 句が実行されるのは、READ ステートメントが正常に完了した場合だけです。ファイルの終わり以外の何らかの条件のために READ 操作が失敗すると、AT END 句も NOT AT END 句も実行されません。その代わりに、関連する宣言型プロシージャを実行した後で、READ ステートメントの終わりに制御が渡されます。

AT END 句または EXCEPTION 宣言型プロシージャのいずれもコーディングせずに、ファイルの状況キー文節をコーディングすることもできます。その場合は、ファイルの終わり条件を検出した入力ステートメントまたは出力ステートメントの後の次の順次命令に、制御が渡されます。その場所に、適切なアクションを取るためのコードを記述する必要があります。

関連参照

AT END 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ERROR 宣言のコーディング

プログラムの実行中に入力または出力エラーが発生した場合に制御が与えられる ERROR 宣言型プロシージャを 1 つ以上コーディングすることができます。そのようなプロシージャをコーディングしないと、入力または出力エラーの発生後に、ジョブが取り消されるか、異常終了します。

このようなプロシージャをそれぞれ PROCEDURE DIVISION の宣言セクションに入れます。以下のものをコーディングすることができます。

- プログラム全体用の単一の共通プロシージャ
- それぞれのファイル・オープン・モードごとのプロシージャ (INPUT、OUTPUT、I-O、または EXTEND かどうか)
- それぞれのファイルごとの個々のプロシージャ

ERROR 宣言型プロシージャでは、訂正処置のコーディング、操作の再試行、実行の継続または終了を行うことができます。(ブロック化ファイルの処理を継続する場合、エラーが発生したレコードより後ろにあるブロック内の残りのレコードが失われることがあります。)エラーについてさらに詳しい分析を行う場合は、ERROR 宣言型プロシージャとファイル状況キーを組み合わせで使用することができます。

関連参照

EXCEPTION/ERROR 宣言 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ファイル状況キーの使用

それぞれの入力または出力ステートメントがファイルに対して実行された後、システムはファイル状況キーの 2 つの桁位置の値を更新します。一般に、最初の桁がゼロの場合、操作が正常に行われたことを表し、両方の桁がゼロの場合、異常がなかったことを意味します。

ファイル状況キーは、次のようにコーディングして設定してください。

- FILE-CONTROL 段落の FILE STATUS 文節:
FILE STATUS IS *data-name-1*
- DATA DIVISION (WORKING-STORAGE、LOCAL-STORAGE、または LINKAGE SECTION) のデータ定義 (一例として):

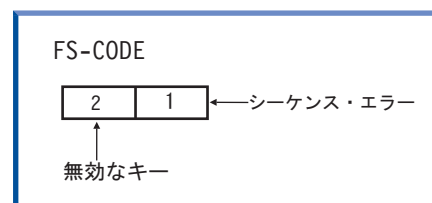
WORKING-STORAGE SECTION.
01 data-name-1 PIC 9(2) USAGE NATIONAL.

ファイル状況キー *data-name-1* を、2 文字のカテゴリ英数字またはカテゴリ国別項目として、あるいは 2 桁のゾーン 10 進数または国別 10 進数項目として指定してください。この *data-name-1* を可変位置にすることはできません。

プログラムはファイル状況キーを検査して、エラーが発生したかどうか、また発生した場合にはどんなタイプのエラーが発生したかを発見できます。例えば、FILE STATUS 文節が

FILE STATUS IS FS-CODE

とコーディングされると、次のような状況に関する情報を保持するために、FS-CODE が COBOL によって使用されます。



各ファイルごとに、次の規則に従ってください。

- ファイルごとに異なるファイル状況キーを定義します。

すると、アプリケーション論理エラーやディスク・エラーのような、ファイル入力または出力例外の原因を判別することができます。

- それぞれの入力または出力要求の後で、ファイル状況キーを検査します。

ファイル状況キーが 0 以外の値を含んでいる場合、プログラムはエラー・メッセージが発生するか、またはその値に基づいてアクションを実行できます。

ファイル状況キー・コードをリセットする必要はありません。ファイル状況キー・コードは各入出力が試みられた後で設定されます。

Btrieve ファイル: 以下のファイル状況キーの値 は、Btrieve については設定されません。

- 02
- 21
- 39

FILE STATUS 文節に 2 番目の ID をコーディングすることで、ファイル状況キーだけでなく、ファイル・システムの入力または出力要求に関する詳細情報を取得することができます。ファイル・システム状況コードについては、以下の関連参照をご覧ください。

ファイル状況キーは単独でも、INVALID KEY オプションと一緒にでも使用でき、EXCEPTION または ERROR 宣言を補足するためにも使用できます。このようにファイル状況キーを使用すると、それぞれの入力または出力操作の結果に関する正確な情報が得られます。

『例: ファイル状況キー』
165 ページの『例: ファイル・システム状況コードの検査』

関連タスク

132 ページの『ファイル状況フィールドの設定』
『ファイル・システム状況コードの使用』

関連参照

FILE STATUS 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
ファイル状況キー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: ファイル状況キー

次の例は、ファイルのオープン後にファイル状況キーの簡単な検査を実行する方法を示しています。

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
PROGRAM-ID. SIMCHK.  
ENVIRONMENT DIVISION.  
INPUT-OUTPUT SECTION.  
FILE-CONTROL.  
    SELECT MASTERFILE ASSIGN TO AS-MASTERA  
    FILE STATUS IS MASTER-CHECK-KEY  
    . . .  
DATA DIVISION.  
    . . .  
WORKING-STORAGE SECTION.  
01  MASTER-CHECK-KEY          PIC X(2).  
    . . .  
PROCEDURE DIVISION.  
    OPEN INPUT MASTERFILE  
    IF MASTER-CHECK-KEY NOT = "00"  
        DISPLAY "Nonzero file status returned from OPEN " MASTER-CHECK-KEY  
    . . .
```

ファイル・システム状況コードの使用

要求の処理を正確に特定する上で、2 桁のファイル状況コードは一般的過ぎることがよくあります。FILE STATUS 文節に 2 番目のデータ項目をコーディングすることにより、STL および Btrieve ファイル・システムの入力または出力要求に関する詳細情報を取得することができます。

FILE STATUS IS *data-name-1 data-name-8*

データ項目 *data-name-1* は 2 桁の COBOL ファイル状況キーを指定します。これは、2 文字のカテゴリ英数字またはカテゴリ国別項目、あるいは 2 桁のゾーン 10 進数または国別 10 進数項目でなければなりません。データ項目 *data-name-8* は、COBOL ファイル状況キーが 0 でないときにファイル・システムの状況コードが入れられるデータ項目を指定します。*data-name-8* の長さは 6 バイト以上で、英数字項目でなければなりません。

data-name-8 の長さが 6 バイトの場合、状況コードが含まれます。*data-name-8* の長さが 6 バイトを超える場合は、詳細情報付きのメッセージも含まれています。

```
01  my-file-status-2.  
    02 exception-return-value PIC 9(6).  
    02 additional-info       PIC X(100).
```

上記の例で、ファイルの作成に使用した定義と異なる定義でファイルをオープンしようとすると、戻りコード 39 が `exception-return-value` で戻され、オープンを実行するために必要なキーを示すメッセージが `additional-info` で戻されます。

『例: ファイル・システム状況コードの検査』

関連参照

123 ページの『STL ファイル・システム』

例: ファイル・システム状況コードの検査

次の例は、索引付きファイルを 5 番目のレコードから読み取り、それぞれの入力または出力要求の後で、ファイル状況キーを検査します。

さらに、以下に、処理中のファイルに 6 つのレコードが入っていたことを想定した場合の、このプログラムからの出力を図示しています。

```
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. EXAMPLE.
ENVIRONMENT DIVISION.
INPUT-OUTPUT SECTION.
FILE-CONTROL.
    SELECT FILESYSFILE ASSIGN TO FILESYSFILE
    ORGANIZATION IS INDEXED
    ACCESS DYNAMIC
    RECORD KEY IS FILESYSFILE-KEY
    FILE STATUS IS FS-CODE, FILESYS-CODE.
DATA DIVISION.
FILE SECTION.
FD  FILESYSFILE
   RECORD 30.
01  FILESYSFILE-REC.
    10 FILESYSFILE-KEY          PIC X(6).
    10 FILLER                   PIC X(24).
WORKING-STORAGE SECTION.
01  RETURN-STATUS.
    05 FS-CODE                  PIC XX.
    05 FILESYS-CODE             PIC X(6).
PROCEDURE DIVISION.
    OPEN  INPUT FILESYSFILE.
    DISPLAY "OPEN INPUT FILESYSFILE FS-CODE: " FS-CODE.

    IF FS-CODE NOT = "00"
        PERFORM FILESYS-CODE-DISPLAY
        STOP RUN
    END-IF.

    MOVE "000005" TO FILESYSFILE-KEY.
    START FILESYSFILE KEY IS EQUAL TO FILESYSFILE-KEY.
    DISPLAY "START FILESYSFILE KEY=" FILESYSFILE-KEY
           " FS-CODE: " FS-CODE.

    IF FS-CODE NOT = "00"
        PERFORM FILESYS-CODE-DISPLAY
    END-IF.

    IF FS-CODE = "00"
        PERFORM READ-NEXT UNTIL FS-CODE NOT = "00"
    END-IF.

    CLOSE FILESYSFILE.
    STOP RUN.

READ-NEXT.
```



```

      READ FILESYSFILE NEXT.
      DISPLAY "READ NEXT FILESYSFILE FS-CODE: " FS-CODE.
      IF FS-CODE NOT = "00"
        PERFORM FILESYS-CODE-DISPLAY
      END-IF.
      DISPLAY FILESYSFILE-REC.

FILESYS-CODE-DISPLAY.
  DISPLAY "FILESYS-CODE ==>", FILESYS-CODE.

```

例: FILE STATUS および INVALID KEY

次の例は、ファイル状況コードおよび INVALID KEY 句を使用して、入力または出力ステートメントが失敗した理由をもっと明確に判別する方法を示しています。

マスター顧客レコードを含んでいるファイルがあり、トランザクション更新ファイルの情報が反映されるようそれらのレコードの一部を更新する必要があると想定しましょう。プログラムは、各トランザクション・レコードを読み取り、マスター・ファイルの中の対応するレコードを見つけ、必要な更新を行います。どちらのファイルのレコードにもそれぞれ顧客番号用のフィールドがあり、マスター・ファイルの中の各レコードには固有の顧客番号があります。

顧客レコードのマスター・ファイル用の FILE-CONTROL 記入項目には、索引編成を定義するステートメント、ランダム・アクセス、基本レコード・キーとして MASTER-CUSTOMER-NUMBER、およびファイル状況キーとして CUSTOMER-FILE-STATUS が含まれています。

```

.
. (read the update transaction record)
.
MOVE "TRUE" TO TRANSACTION-MATCH
MOVE UPDATE-CUSTOMER-NUMBER TO MASTER-CUSTOMER-NUMBER
READ MASTER-CUSTOMER-FILE INTO WS-CUSTOMER-RECORD
  INVALID KEY
    DISPLAY "MASTER CUSTOMER RECORD NOT FOUND"
    DISPLAY "FILE STATUS CODE IS: " CUSTOMER-FILE-STATUS
    MOVE "FALSE" TO TRANSACTION-MATCH
END-READ

```

プログラム呼び出し時のエラーの処理

プログラムが別個にコンパイルされたプログラムを動的に呼び出すとき、呼び出されるプログラムが使用できないことがあります。例えば、システムがストレージ不足だったり、ロード・モジュールを見つけることができない場合があります。CALL ステートメントに ON EXCEPTION 句も ON OVERFLOW 句もない場合、アプリケーションは異常終了します。

一連のステートメントを実行してユーザー定義のエラー処理を行う場合は、ON EXCEPTION 句を使用します。例えば、次のコード・フラグメントでプログラム REPORTA が利用不可である場合、制御は ON EXCEPTION 句に渡されます。

```

MOVE "REPORTA" TO REPORT-PROG
CALL REPORT-PROG
  ON EXCEPTION
    DISPLAY "Program REPORTA not available, using REPORTB."
    MOVE "REPORTB" TO REPORT-PROG
    CALL REPORT-PROG
  END-CALL
END-CALL

```

ON EXCEPTION 句は、呼び出されるプログラムの可用性についてのみ適用されます。呼び出されるプログラムの実行中にエラーが発生した場合、ON EXCEPTION 句は実行されません。

第 2 部 各国語環境に合わせたプログラムの対応

第 10 章 国際環境でのデータの処理	171	ロケール付きの国別照合シーケンスの制御	206
COBOL ステートメントと国別データ	172	照合シーケンスに依存する組み込み関数	207
組み込み関数と国別データ	175	アクティブ・ロケールおよびコード・ページ値への	
Unicode および言語文字のエンコード	175	アクセス	207
COBOL での国別データ (Unicode) の使用	176	例: コード・ページ ID の取得および変換	208
国別データ項目の定義	177		
国別リテラルの使用	178		
国別文字表意定数の使用	179		
国別数値データ項目の定義	180		
国別グループ	180		
国別グループの使用	181		
国別グループを基本項目として使用	182		
国別グループをグループ項目として使用	183		
国別データの保管	184		
国別 (Unicode) 表現との間の変換	185		
英数字、DBCS、および整数データから国別データへの変換 (MOVE)	185		
英数字および DBCS データから国別データへの変換 (NATIONAL-OF)	186		
国別データの英数字データへの変換 (DISPLAY-OF)	186		
デフォルト・コード・ページのオーバーライド	187		
例: 国別データとの間の変換	187		
UTF-8 データの処理	188		
中国語 GB 18030 データの処理	189		
国別 (UTF-16) データの比較	189		
2 つのクラス国別オペランドの比較	190		
クラス国別オペランドとクラス数値オペランドの比較	191		
国別数値オペランドと他の数値オペランドの比較	191		
国別文字ストリング・オペランドと他の文字ストリング・オペランドとの比較	192		
国別データ・オペランドと英数字グループ・オペランドの比較	192		
DBCS サポートを使用するためのコーディング	192		
DBCS データの宣言	193		
DBCS リテラルの使用	193		
DBCS リテラルの比較	194		
有効な DBCS 文字に関するテスト	195		
DBCS データを含む英数字データ項目の処理	195		
第 11 章 ロケールの設定	197		
アクティブ・ロケール	197		
ロケール付きのコード・ページの指定	198		
環境変数を使用したロケールの指定	199		
システム設定からのロケールの決定	200		
変換が使用可能なメッセージのタイプ	201		
サポートされるロケールおよびコード・ページ	201		
ロケール付きの照合シーケンスの制御	203		
ロケール付きの英数字照合シーケンスの制御	204		
ロケール付きの DBCS 照合シーケンスの制御	205		

第 10 章 国際環境でのデータの処理

COBOL for Windows は、実行時に国別文字データとして Unicode UTF-16 をサポートします。UTF-16 は、プレーン・テキストをエンコードするための一貫性のある効率的な方法を提供します。UTF-16 を使用すると、さまざまな国の言語で動作するソフトウェアを開発できます。

COBOL 機能を使用して、以下のデータのような国別データや文化に依存した照合順序を処理するプログラムのコーディングおよびコンパイルを行います。

- データ型およびリテラル:

- 文字データ型。USAGE NATIONAL 文節や、カテゴリ国別、国別編集、または数字編集のデータを定義する PICTURE 文節で定義します。
- 数値データ型。USAGE NATIONAL 文節や、数値データ項目 (国別 10 進数項目) または外部浮動小数点データ項目 (国別浮動小数点項目) を定義する PICTURE 文節で定義します。
- リテラル接頭部 N または NX で指定される国別リテラル
- 表意定数 ALL 国別リテラル
- 表意定数 QUOTE、SPACE、HIGH-VALUE、LOW-VALUE、または ZERO。これらは、国別文字コンテキストで使用されるときには国別文字 (UTF-16) 値を持ちます。

- COBOL ステートメント。COBOL ステートメントおよび国別データに関する以下の関連参照に示されています。

- 組み込み関数

- NATIONAL-OF は、英数字または 2 バイト文字セット (DBCS) 文字ストリングを USAGE NATIONAL (UTF-16) に変換します。
- DISPLAY-OF は、国別文字ストリングを選択されたコード・ページ (EBCDIC、ASCII、EUC、または UTF-8) の USAGE DISPLAY に変換します。
- その他の組み込み関数は、組み込み関数および国別データに関する以下の関連参照に示されています。

- GROUP-USAGE NATIONAL 文節。USAGE NATIONAL データ項目のみを含み、ほとんどの操作でカテゴリ国別基本項目と同様に振る舞う、グループを定義するためのものです。

- コンパイラー・オプション:

- NSYMBOL は、リテラル内の N 記号および PICTURE 文節に対して国別処理と DBCS 処理のどちらを使用するかを制御します。
- NCOLLSEQ は、国別オペランドを比較するための照合シーケンスを指定します。

英数字または DBCS データ項目から国別表現への暗黙変換を利用することもできます。ユーザーがこれらの項目を国別データ項目へ移動させるとき、またはこれらの項目を国別データ項目と比較するとき、コンパイラーは (ほとんどの場合に) この変換を実行します。

関連概念

- 175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』
- 180 ページの『国別グループ』

関連タスク

- 176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』
- 185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の変換』
- 188 ページの『UTF-8 データの処理』
- 189 ページの『中国語 GB 18030 データの処理』
- 189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』
- 192 ページの『DBCS サポートを使用するためのコーディング』
- 197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

関連参照

- 『COBOL ステートメントと国別データ』
- 175 ページの『組み込み関数と国別データ』
- 279 ページの『NCOLLSEQ』
- 279 ページの『NSYMBOL』
- データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
- データ・カテゴリーおよび PICTURE 規則 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
- MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
- 一般比較条件 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

COBOL ステートメントと国別データ

PROCEDURE DIVISION および以下の表に示すコンパイラ指示ステートメントで、国別データを使用できます。

表 18. COBOL ステートメントと国別データ

COBOL ステートメント	国別にできるもの	コメント	詳細の参照先
ACCEPT	<i>identifier-1, identifier-2</i>	<i>identifier-1</i> は、入力ターミナルからのものである場合にのみ、ランタイム・ロケールで示されたコード・ページから変換されます。	35 ページの『画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)』
ADD	ID はすべて USAGE NATIONAL を持つ数値項目にすることができます。 <i>identifier-3</i> (GIVING) は、USAGE NATIONAL を持つ数字編集にすることができます。		55 ページの『COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用』
CALL	<i>identifier-2, identifier-3, identifier-4, identifier-5; literal-2, literal-3</i>		521 ページの『データの受け渡し』

表 18. COBOL ステートメントと国別データ (続き)

COBOL ステートメント	国別にできるもの	コメント	詳細の参照先
COMPUTE	<i>identifier-1</i> は、USAGE NATIONAL を持つ数値または数字編集にすることができます。 <i>arithmetic-expression</i> は、USAGE NATIONAL を持つ数値項目を含むことができます。		55 ページの『COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用』
COPY . . . REPLACING	REPLACING 句の <i>operand-1</i> 、 <i>operand-2</i>		301 ページの『第 15 章 コンパイラ指示ステートメント』
DISPLAY	<i>identifier-1</i>	<i>identifier-1</i> は、現在のロケールに関連付けられたコード・ページに変換されます。	37 ページの『画面上またはファイル内の値の表示 (DISPLAY)』
DIVIDE	ID はすべて USAGE NATIONAL を持つ数値項目にすることができます。 <i>identifier-3</i> (GIVING) および <i>identifier-4</i> (REMAINDER) は、USAGE NATIONAL を持つ数字編集にすることができます。		55 ページの『COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用』
INITIALIZE	<i>identifier-1</i> 。REPLACING 句の <i>identifier-2</i> または <i>literal-1</i> 。	REPLACING NATIONAL または REPLACING NATIONAL-EDITED を指定する場合、 <i>identifier-2</i> または <i>literal-1</i> は、 <i>identifier-1</i> への移動における送信オペランドとして有効でなければなりません。	28 ページの『例: データ項目の初期化』
INSPECT	ID はすべてリテラルです。(TALLYING 整数データ項目である <i>identifier-2</i> は USAGE NATIONAL を持つことができます。)	これらのいずれか (TALLYING ID である <i>identifier-2</i> を除く) が USAGE NATIONAL を持っている場合、すべてが国別でなければなりません。	110 ページの『データ項目の計算および置換 (INSPECT)』
INVOKE	<i>identifier-2</i> または <i>literal-1</i> としてのメソッド名。BY VALUE 句の <i>identifier-3</i> または <i>literal-2</i> 。		452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』
MERGE	NCOLLSEQ(BIN) を指定した場合はマージ・キー	COLLATING SEQUENCE 句は適用されません。	152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』
MOVE	送り出し側と受け取り側の両方、または受け取り側のみ	有効な MOVE オペランドについては、暗黙変換が実行されます。	33 ページの『基本データ項目への値の割り当て (MOVE)』 34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』

表 18. COBOL ステートメントと国別データ (続き)

COBOL ステートメント	国別にできるもの	コメント	詳細の参照先
MULTIPLY	ID はすべて USAGE NATIONAL を持つ数値項目にすることができます。 <i>identifier-3</i> (GIVING) は、USAGE NATIONAL を持つ数字編集にすることができます。		55 ページの『COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用』
SEARCH ALL (二分探索)	キー・データ項目とその比較対象の両方	キー・データ項目とその比較対象は、比較規則に従って互換性がなければなりません。比較対象がクラス国別である場合、キーもそうでなければなりません。	82 ページの『二分探索 (SEARCH ALL)』
SORT	NCOLLSEQ(BIN) を指定した場合はソート・キー	COLLATING SEQUENCE 句は適用されません。	152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』
STRING	ID はすべてリテラルです。(POINTER 整数データ項目である <i>identifier-4</i> は USAGE NATIONAL を持つことができます。)	<i>identifier-3</i> (受信データ項目) が国別である場合、すべての ID およびリテラル (POINTER ID である <i>identifier-4</i> を除く) は国別でなければなりません。	99 ページの『データ項目の結合 (STRING)』
SUBTRACT	ID はすべて USAGE NATIONAL を持つ数値項目にすることができます。 <i>identifier-3</i> (GIVING) は、USAGE NATIONAL を持つ数字編集にすることができます。		55 ページの『COMPUTE およびその他の算術ステートメントの使用』
UNSTRING	ID はすべてリテラルです。(<i>identifier-6</i> および <i>identifier-7</i> (それぞれ COUNT および TALLYING 整数データ項目) は USAGE NATIONAL を持つことができます。)	<i>identifier-4</i> (受信データ項目) が USAGE NATIONAL を持っている場合、送信データ項目およびそれぞれの区切り文字は USAGE NATIONAL を持っている必要があり、それぞれのリテラルは国別でなければなりません。	102 ページの『データ項目の分割 (UNSTRING)』
XML GENERATE	<i>identifier-1</i> (生成された XML 文書)、 <i>identifier-2</i> (ソース・フィールド (1 つまたは複数))		413 ページの『第 23 章 XML 出力の生成』
XML PARSE	<i>identifier-1</i> (XML 文書)	XML-NTEXT 特殊レジスターには、構文解析時に国別文字文書フラグメントが入ります。	387 ページの『第 22 章 XML 入力の処理』

関連タスク

41 ページの『数値データの定義』
43 ページの『数値データの表示』
176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』
189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

関連参照

279 ページの『NCOLLSEQ』
データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

組み込み関数と国別データ

以下の表に示す組み込み関数で、クラス国別の引数を使用できます。

表 19. 組み込み関数と国別文字データ

組み込み関数	関数型	詳細の参照先
DISPLAY-OF	英数字	186 ページの『国別データの英数字データへの変換 (DISPLAY-OF)』
LENGTH	整数	118 ページの『データ項目の長さの検出』
LOWER-CASE, UPPER-CASE	国別文字	112 ページの『大文字または小文字への変換 (UPPER-CASE、LOWER-CASE)』
NUMVAL, NUMVAL-C	数字	113 ページの『数値への変換 (NUMVAL、NUMVAL-C)』
MAX, MIN	国別文字	115 ページの『最大または最小データ項目の検出』
ORD-MAX, ORD-MIN	整数	115 ページの『最大または最小データ項目の検出』
REVERSE	国別文字	112 ページの『逆順への変換 (REVERSE)』

ゾーン 10 進数引数が許可されていれば、国別 10 進数引数を使用できます。表示浮動小数点引数が許可されていれば、国別浮動小数点引数を使用できます。(整数または数値引数を取ることのできる組み込み関数の完全なリストについては、引数に関する以下の関連参照を参照してください。)

関連タスク

41 ページの『数値データの定義』
176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

関連参照

引数 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

Unicode および言語文字のエンコード

COBOL for Windows では、Unicode の基本的な実行時サポートを提供しています。Unicode では、全世界で一般的に使用されている文字や記号をすべて網羅する数万文字の取り扱いが可能となります。

文字セット は、定義された文字のセットですが、コード化表現と関連してはいません。コード化文字セット (本書ではコード・ページ と呼んでいます) は、セットの文字をそのコード化表現に関係付ける明確な規則セットです。各コード・ページ

には名前があり、文字セットを表現するための記号を設定した一種のテーブルとなっています。それぞれの記号は、固有のビット・パターン、すなわちコード・ポイントを持ちます。コード・ページにはそれぞれ、コード化文字セット ID (CCSID) があり、1 から 65,536 までの値をとります。

Unicode には、*Unicode Transformation Format (UTF)* と呼ばれる幾つかのエンコード・スキーム (UTF-8、UTF-16、および UTF-32 など) があります。COBOL for Windows では、国別リテラルおよび USAGE NATIONAL を持つデータ項目の表現として、リトル・エンディアン形式で UTF-16 (CCSID 1202) を使用します。

UTF-8 は、ASCII のインバリエント文字 a から z、A から Z、0 から 9、および一定の特殊文字 (' @ , . + - = / * () など) を ASCII の場合と同様に表します。UTF-16 は、これらの文字を NX'00nn' として表します (ここで、X'nn' は ASCII の文字表現です)。

例えば、ストリング「ABC」は、UTF-16 では NX'004100420043' として表されます。UTF-8 では、「ABC」は X'414243' として表されます。

1 つまたは複数のエンコード・ユニットを使用して、コード化文字セットから文字を表します。UTF-16 の場合、エンコード・ユニットは 2 バイトのストレージを使用します。任意の EBCDIC、ASCII、または EUC コード・ページで定義された文字はいずれも、国別データ表現に変換されたときに 1 つの UTF-16 エンコード・ユニットで表現されます。

クロスプラットフォームの考慮事項: COBOL for Windows は、国別データで、リトル・エンディアン形式の UTF-16 をサポートしています。Enterprise COBOL for z/OS および COBOL for AIX は、国別データで、ビッグ・エンディアン形式の UTF-16 (UTF-16BE) をサポートしています。UTF-16BE 表現でエンコードされた Unicode データを別のプラットフォームから COBOL for Windows へ移植する場合、データを国別データとして処理するため、そのデータをリトル・エンディアン形式の UTF-16 に変換する必要があります。COBOL for Windows では、このような変換は、NATIONAL-OF 組み込み関数を使用して実行できます。

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の変換』

関連参照

184 ページの『国別データの保管』

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

文字セットとコード・ページ (「COBOL for Windows 言語解説書」)

COBOL での国別データ (Unicode) の使用

COBOL for Windows では、幾つかの方法で国別 (UTF-16) データを指定できます。

次の国別データ型が使用可能です。

- 国別データ項目 (カテゴリー国別、国別編集、および数字編集)
- 国別リテラル
- 国別文字としての表意定数
- 数値データ項目 (国別 10 進数および国別浮動小数点)

加えて、明示的または暗黙的に USAGE NATIONAL を持つデータ項目のみを含んでおり、ほとんどの操作でカテゴリー国別基本項目と同様に振る舞う、国別グループを定義できます。

これらの宣言は、必要とされるストレージ量に影響します。

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

『国別データ項目の定義』

178 ページの『国別リテラルの使用』

179 ページの『国別文字表意定数の使用』

180 ページの『国別数値データ項目の定義』

181 ページの『国別グループの使用』

185 ページの『国別 (Unicode) 表現との間の変換』

189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

関連参照

184 ページの『国別データの保管』

データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別データ項目の定義

国別 (UTF-16) 文字ストリングを保持する国別データ項目を、USAGE NATIONAL 文節で定義します。

以下のカテゴリーの国別データ項目を定義できます。

- 国別文字
- 国別編集
- 数字編集

カテゴリー国別データ項目を定義するには、1 つ以上の PICTURE 記号 N のみを含む PICTURE 文節をコーディングしてください。

国別編集データ項目を定義するには、以下のそれぞれの記号の少なくとも 1 つを含む PICTURE 文節をコーディングしてください。

- 記号 N
- 単純追加編集記号 B、0、または /

クラス国別の数字編集データ項目を定義するには、数字編集項目を定義する PICTURE 文節をコーディングし (例えば、-\$999.99)、USAGE NATIONAL 文節をコーディングしてください。USAGE NATIONAL を持つ数字編集データ項目は、USAGE DISPLAY を持つ数字編集項目を使用するのと同様に使用できます。

また、PICTURE 文節により数値として定義された基本項目に BLANK WHEN ZERO 文節をコーディングすれば、データ項目を数字編集として定義することもできます。

PICTURE 文節をコーディングしたが、1 つ以上の PICTURE 記号 N のみを含むデータ項目用に USAGE 文節をコーディングしなかった場合、コンパイラー・オプション NSYMBOL(NATIONAL) を使用して、そうした項目が国別データ項目 (DBCS 項目ではなく) として取り扱われるようにしてください。

関連タスク

43 ページの『数値データの表示』

関連参照

279 ページの『NSYMBOL』

BLANK WHEN ZERO 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別リテラルの使用

国別リテラルを指定するには、接頭部文字 N を使用し、オプション NSYMBOL(NATIONAL) を指定してコンパイルします。

次のいずれかの表記を使用できます。

- N"character-data"
- N'character-data'

オプション NSYMBOL(DBCS) を指定してコンパイルすると、リテラル接頭部文字 N は国別リテラルではなく DBCS リテラルを指定します。

国別リテラルを 16 進値として指定するには、接頭部 NX を使用します。次のいずれかの表記を使用できます。

- NX"hexadecimal-digits"
- NX'hexadecimal-digits'

次の MOVE ステートメントのそれぞれは、国別データ項目 Y を文字「AB」の UTF-16 値に設定します。

```
01 Y pic NN usage national.  
...  
    Move NX"00410042" to Y  
    Move N"AB"         to Y  
    Move "AB"          to Y
```

国別リテラルを必要とするコンテキストで英数字 16 進数リテラルを使用しないでください。そのような使用法は誤解を招きやすくなります。例えば、次のステートメントの場合も、UTF-16 文字「AB」(ビット・パターン 4142 の 16 進数ではない) が Y に移動されます。ここで、Y は USAGE NATIONAL として定義されています。

```
Move X"4142" to Y
```

国別リテラルは、SPECIAL-NAMES 段落で使用したり、プログラム名として使用したりすることはできません。国別リテラルは、METHOD-ID 段落のオブジェクト指向メソッドを指定したり、INVOKE ステートメント内のメソッド名を指定したりするのに使用できます。

国別リテラル内のシフトアウト文字とシフトイン文字の処理方法を制御するには、SOSI コンパイラー・オプションを使用します。

関連タスク

26 ページの『リテラルの使用』

関連参照

279 ページの『NSYMBOL』

287 ページの『SOSI』

国別リテラル (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別文字表意定数の使用

国別文字を必要とするコンテキストでは、表意定数の `ALL 国別リテラル` を使用できます。`ALL 国別リテラル` は、国別リテラルを構成する連続したエンコード・ユニットの連結によって生成される、ストリングの全部または一部を表します。

国別文字を必要とするコンテキスト (`MOVE` ステートメント、暗黙移動、または、国別オペランドを持つ比較条件など) では、表意定数 `QUOTE`、`SPACE`、`HIGH-VALUE`、`LOW-VALUE`、または `ZERO` を使用できます。こうしたコンテキストでは、表意定数は国別文字 (UTF-16) 値を表します。

国別文字を必要とするコンテキストで表意定数 `HIGH-VALUE` を使用すると、その値は `NX'FFFF'` です。国別文字を必要とするコンテキストで `LOW-VALUE` を使用すると、その値は `NX'0000'` です。`NCOLLSEQ(BIN)` コンパイラー・オプションが有効な場合にのみ国別文字を必要とするコンテキストで、`HIGH-VALUE` または `LOW-VALUE` を使用できます。

制限事項: `HIGH-VALUE` または `HIGH-VALUE` から割り当てられた値を使用する場合、あるデータ表現から別のデータ表現への値の変換 (例えば、`USAGE DISPLAY` と `USAGE NATIONAL` との間の変換、または `CHAR(EBCDIC)` コンパイラー・オプションが有効な場合は `ASCII` と `EBCDIC` との間の変換) が起こるような仕方では使用してはなりません。`X'FF'` (`EBCDIC` 照合シーケンスが使用されているときの、英数字コンテキストでの `HIGH-VALUE` の値) は有効な `EBCDIC` または `ASCII` 文字を表しませんし、`NX'FFFF'` は有効な国別文字を表しません。このような値を別の表現に変換すると、置換文字が使用されることとなります (`X'FF'` でも `NX'FFFF'` でもなくなります)。次の例を見てください。

```
01 natl-data PIC NN Usage National.
01 alph-data PIC XX.
...
MOVE HIGH-VALUE TO natl-data, alph-data
IF natl-data = alph-data...
```

上の `IF` ステートメントは、オペランドのそれぞれが `HIGH-VALUE` に設定された場合であっても、偽と評価されます。基本英数字オペランドが国別オペランドと比較される前に、英数字オペランドは、一時国別データ項目に移動させられたかのように扱われ、英数字文字は対応する国別文字に変換されます。しかし、`X'FF'` が `UTF-16` に変換される場合、`UTF-16` 項目は置換文字値を取得するので、`NX'FFFF'` と比較して等しいとはみなされません。

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の変換』

189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

関連参照

255 ページの『CHAR』

279 ページの『NCOLLSEQ』

表意定数 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

DISPLAY-OF (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別数値データ項目の定義

国別文字 (UTF-16) で表される数値データを保持するデータ項目を、USAGE NATIONAL 文節で定義します。国別 10 進数項目および国別浮動小数点項目を定義できます。

国別 10 進数項目を定義するには、記号 9、P、S、および V のみを含む PICTURE 文節をコーディングしてください。PICTURE 文節が S を含んでいる場合、その項目で SIGN IS SEPARATE 文節が有効でなければなりません。

国別浮動小数点項目を定義するには、浮動小数点項目を定義する PICTURE 文節をコーディングしてください (例えば、+99999.9E-99)。

国別 10 進数項目は、ゾーン 10 進数項目と同じように使用できます。国別浮動小数点項目は、表示浮動小数点項目と同じように使用できます。

関連タスク

41 ページの『数値データの定義』

43 ページの『数値データの表示』

関連参照

SIGN 文節 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別グループ

GROUP-USAGE NATIONAL 文節で明示的または暗黙的に指定される国別グループは、USAGE NATIONAL を持つデータ項目のみを含みます。ほとんどの場合、国別グループ項目は、PIC N(*m*) (ここで、*m* はグループ内の国別 (UTF-16) 文字の数です) として記述されたカテゴリー国別基本項目として再定義されているかのように処理されます。

ただし、国別グループに対する操作の中には (英数字グループに対する一部の操作の場合と同様に)、グループ・セマンティクスが適用されるものがあります。そのような操作 (例えば、MOVE CORRESPONDING や INITIALIZE) は、国別グループ内の基本項目を認識または処理します。

可能な場合、USAGE NATIONAL 項目を含んでいる英数字グループではなく、国別グループを使用してください。国別グループでの国別データの処理の場合、英数字グループ内の国別データの処理と比較して、幾つかの利点があります。

- 国別グループを、USAGE NATIONAL を持つもっと長いデータ項目に移動させると、受信項目に国別文字が埋め込まれます。これに対して、国別文字を含む英数字グループを、国別文字を含むもっと長い英数字グループに移動させると、埋め込みには英数字スペースが使用されます。その結果、データ項目の取り扱いを誤ることがあります。

- 国別グループを、USAGE NATIONAL を持つもっと短いデータ項目に移動させると、国別グループは国別文字境界で切り捨てられます。これに対して、国別文字を含む英数字グループを、国別文字を含むもっと短い英数字グループに移動させると、国別文字の 2 バイト間で切り捨てが起こります。
- 国別グループを国別編集または数字編集項目に移動させると、グループの内容が編集されます。これに対し、英数字グループを編集項目に移動させた場合、編集は行われません。
- 国別グループを、STRING、UNSTRING、または INSPECT ステートメントのオペランドとして使用した場合、次のようになります。
 - グループの内容は、1 バイト文字としてではなく、国別文字として処理されます。
 - TALLYING および POINTER オペランドは、国別文字の論理レベルで作動します。
 - 国別グループ・オペランドは、他の国別オペランド・タイプの混じり合ったものと一緒にサポートされます。

これに対し、これらのコンテキストで国別文字を含む英数字グループを使用した場合、文字はバイトごとに処理されます。結果として、取り扱いが無効になったり、データの破壊が起こることがあります。

USAGE NATIONAL グループ: グループ項目では、グループ内のそれぞれの基本データ項目の USAGE の便利な省略表現として、グループ・レベルで USAGE NATIONAL 文節を指定できます。ただし、このようなグループは国別グループではなく、英数字グループであり、多数の操作 (移動や比較など) において USAGE DISPLAY の基本データ項目のように振る舞います (ただし、データの編集や変換は行われません)。

関連タスク

34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』
 99 ページの『データ項目の結合 (STRING)』
 102 ページの『データ項目の分割 (UNSTRING)』
 110 ページの『データ項目の計算および置換 (INSPECT)』
 『国別グループの使用』

関連参照

GROUP-USAGE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別グループの使用

グループ・データ項目を国別グループとして定義するには、グループ・レベルで項目の GROUP-USAGE NATIONAL 文節をコーディングしてください。グループは、明示的または暗黙的に USAGE NATIONAL を持つデータ項目のみを含むことができます。

以下のデータ記述項目は、01 レベル・グループとその従属グループが国別グループ項目であることを指定します。

```
01 Nat-Group-1    GROUP-USAGE NATIONAL.
   02 Group-1.
       04 Month    PIC 99.
       04 DayOf     PIC 99.
       04 Year      PIC 9999.
   02 Group-2     GROUP-USAGE NATIONAL.
       04 Amount   PIC 9(4).99  USAGE NATIONAL.
```

上の例で、Nat-Group-1 は国別グループであり、その従属グループ Group-1 および Group-2 も国別グループです。Group-1 に関して GROUP-USAGE NATIONAL 文節が暗黙指定され、Group-1 の従属項目に関して USAGE NATIONAL が暗黙指定されています。Month、DayOf、および Year は国別 10 進数項目であり、Amount は USAGE NATIONAL を持つ数字編集項目です。

英数字グループ内の国別グループは、次の例のようにして従属させることができます。

```
01 Alpha-Group-1.  
   02 Group-1.  
       04 Month    PIC 99.  
       04 DayOf    PIC 99.  
       04 Year      PIC 9999.  
   02 Group-2     GROUP-USAGE NATIONAL.  
       04 Amount   PIC 9(4).99.
```

上の例で、Alpha-Group-1 および Group-1 は英数字グループであり、Group-1 内の従属項目に関して USAGE DISPLAY が暗黙指定されています。(Alpha-Group-1 が USAGE NATIONAL をグループ・レベルで指定した場合、Group-1 の従属項目のそれぞれについて USAGE NATIONAL が暗黙指定されることになります。しかし、Alpha-Group-1 および Group-1 は (国別グループではなく) 英数字グループになり、移動や比較などの操作時に英数字グループと同様の振る舞いを示します。) Group-2 は国別グループであり、数字編集項目 Amount に関して USAGE NATIONAL が暗黙指定されています。

国別グループ内で英数字グループを従属させることはできません。国別グループ内の基本項目はすべて明示的または暗黙的に USAGE NATIONAL として記述されている必要があります、国別グループ内のグループ項目はすべて明示的または暗黙的に GROUP-USAGE NATIONAL として記述されている必要があります。

関連概念

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

『国別グループを基本項目として使用』

183 ページの『国別グループをグループ項目として使用』

関連参照

GROUP-USAGE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別グループを基本項目として使用

ほとんどの場合、国別グループは基本データ項目であるかのように使用できます。

次の例で、国別グループ項目 Group-1 は国別編集項目 Edited-date へ移動されます。Group-1 は移動時に基本データ項目として扱われるので、受信データ項目で編集が行われます。移動後の Edited-date 内の値は、国別文字で 06/23/2006 となります。

```
01 Edited-date  PIC NN/NN/NNNN  USAGE NATIONAL.  
01 Group-1     GROUP-USAGE NATIONAL.  
   02 Month     PIC 99    VALUE 06.
```

```

02 DayOf      PIC 99  VALUE 23.
02 Year       PIC 9999 VALUE 2006.
. . .
MOVE Group-1 to Edited-date.

```

Group-1 が代わりに英数字グループであり、その中で従属項目のそれぞれが USAGE NATIONAL を持っているとした場合 (それぞれの基本項目ごとに USAGE NATIONAL 文節で明示的に指定されるか、あるいはグループ・レベルで USAGE NATIONAL 文節で暗黙的に指定されている場合)、基本移動ではなくグループ移動が行われます。移動時には編集も変換も行われません。移動後の Edited-date の最初の 8 つの文字位置の値は、国別文字で 06232006 になり、残りの 2 つの文字位置の値は 4 バイトの英数字スペースになります。

関連タスク

34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』
 192 ページの『国別データ・オペランドと英数字グループ・オペランドの比較』
 『国別グループをグループ項目として使用』

関連参照

MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別グループをグループ項目として使用

国別グループを使用するようなことがある場合、それはグループ・セマンティクスを使用して処理されます。つまり、グループ内の基本項目は認識または処理されません。

次の例で、国別グループ項目 Group-OneN に作用する INITIALIZE ステートメントにより、国別文字の値 15 はグループ内の数値項目にのみ移動されます。

```

01 Group-OneN    Group-Usage National.
   05 Trans-codeN  Pic N  Value "A".
   05 Part-numberN Pic NN Value "XX".
   05 Trans-quanN  Pic 99 Value 10.
. . .
Initialize Group-OneN Replacing Numeric Data By 15

```

上の Group-OneN の Trans-quanN のみが数値なので、Trans-quanN のみが値 15 を受け取ります。その他の従属項目は未変更です。

以下の表は、国別グループがグループ・セマンティクスを使用して処理されるケースを要約したものです。

表 20. グループ・セマンティクスを使用して処理される国別グループ項目

言語機能	国別グループ項目の使用法	コメント
ADD、SUBTRACT、または MOVE ステートメントの CORRESPONDING 句	CORRESPONDING 句の規則に従って、グループとして処理する国別グループ項目を指定してください。	国別グループ内の基本項目は、英数字グループ内の USAGE NATIONAL を持つ基本項目と同様に処理されます。
INITIALIZE ステートメント	INITIALIZE ステートメントの規則に従って、グループとして処理する国別グループを指定してください。	国別グループ内の基本項目は、英数字グループ内の USAGE NATIONAL を持つ基本項目と同様に初期化されます。

表 20. グループ・セマンティクスを使用して処理される国別グループ項目 (続き)

言語機能	国別グループ項目の使用法	コメント
名前の修飾	国別グループ項目の名前を使用して、国別グループ内の基本データ項目の名前および従属グループ項目の名前を修飾してください。	英数字グループの場合と同じ修飾の規則に従ってください。
RENAMES 文節の THROUGH 句	THROUGH 句で国別グループ項目を指定するには、英数字グループ項目の場合と同じ規則を使用してください。	結果は英数字グループ項目です。
XML GENERATE ステートメントの FROM 句	XML GENERATE ステートメントの規則に従って、グループとして処理する国別グループ項目を FROM 句で指定してください。	国別グループ内の基本項目は、英数字グループ内の USAGE NATIONAL を持つ基本項目と同様に処理されます。

関連タスク

31 ページの『構造の初期化 (INITIALIZE)』
 72 ページの『テーブルの初期化 (INITIALIZE)』
 33 ページの『基本データ項目への値の割り当て (MOVE)』
 34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』
 118 ページの『データ項目の長さの検出』
 413 ページの『XML 出力の生成』

関連参照

修飾 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
 RENAMES 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別データの保管

以下のテーブルを使用して英数字 (DISPLAY)、DBCS (DISPLAY-1)、および Unicode (NATIONAL) のエンコード方式を比較し、ストレージの使用法について計画を立ててください。

表 21. エンコード方式と英数字、DBCS、および国別データのサイズ

特性	DISPLAY	DISPLAY-1	NATIONAL
文字エンコード・ユニット	1 バイト	2 バイト	2 バイト
コード・ページ ¹	ASCII	ASCII DBCS	UTF-16LE
図形文字当たりのエンコード・ユニット数	1	1	1 または 2 ²
図形文字当たりのバイト数	1 バイト	2 バイト	2 または 4 バイト

1. ソース・プログラム内の国別リテラルは、実行時に使用できるように UTF-16 に変換されます。

2. 大部分の文字は 1 つのエンコード・ユニットを使用して UTF-16 で表現されます。特に次の文字は、文字ごとに単一の UTF-16 エンコード・ユニットを使用して表現されます。

- COBOL 文字 A から Z、a から z、0 から 9、スペース (SP)、+ -*/= \$,;:“()><.’
- EBCDIC、ASCII、または EUC コード・ページから変換されるすべての文字

関連概念

175 ページの『Unicode および言語文字のエンコード』

国別 (Unicode) 表現との変換

暗黙的または明示的にデータ項目を国別 (UTF-16) 表現に変換できます。

MOVE ステートメントを使用すれば、暗黙的に、英字、英数字、DBCS、または整数データを国別データに変換できます。暗黙変換は、英数字データを USAGE NATIONAL 付きデータ項目と比較する IF ステートメントなど、他の COBOL ステートメントでも行われます。

組み込み関数 NATIONAL-OF および DISPLAY-OF をそれぞれ使用して、明示的に国別データ項目に変換したり、国別データ項目から変換したりすることができます。これらの組み込み関数を使用することにより、データ項目で有効なコード・ページとは異なる変換用のコード・ページを指定することができます。

関連タスク

『英数字、DBCS、および整数データから国別データへの変換 (MOVE)』

186 ページの『英数字および DBCS データから国別データへの変換 (NATIONAL-OF)』

186 ページの『国別データの英数字データへの変換 (DISPLAY-OF)』

187 ページの『デフォルト・コード・ページのオーバーライド』

189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

英数字、DBCS、および整数データから国別データへの変換 (MOVE)

MOVE ステートメントを使用して、暗黙的にデータを国別表現に変換できます。

次の種類のデータをカテゴリー国別または国別編集データ項目に移動させることができ、そのようにしてデータを国別表現に変換できます。

- 英字
- 英数字
- 英数字編集
- DBCS
- USAGE DISPLAY の整数
- USAGE DISPLAY の数字編集

同様に次の種類のデータを、USAGE NATIONAL を持つ数字編集データ項目に移動させることができます。

- 英数字
- 表示浮動小数点 (USAGE DISPLAY の浮動小数点)
- USAGE DISPLAY の数字編集
- USAGE DISPLAY の整数

国別データへの移動に関する完全な規則については、MOVE ステートメントに関する関連参照を参照してください。

例えば、以下の MOVE ステートメントは、英数字リテラル「AB」を国別データ項目 UTF16-Data に移動させます。

```
01  UTF16-Data  Pic N(2) Usage National.  
    . . .  
    Move "AB" to UTF16-Data
```

上記の MOVE ステートメントの実行後、UTF16-Data には、英数字「AB」の国別表現である NX'00410042' が入ります。

USAGE NATIONAL を持つ受信データ項目で埋め込みが必要な場合、デフォルトの UTF-16 スペース文字 (NX'0020') が使用されます。切り捨てが必要な場合、それは国別文字位置の境界で行われます。

関連タスク

- 33 ページの『基本データ項目への値の割り当て (MOVE)』
- 34 ページの『グループ・データ項目への値の割り当て (MOVE)』
- 43 ページの『数値データの表示』
- 192 ページの『DBCS サポートを使用するためのコーディング』

関連参照

MOVE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

英数字および DBCS データから国別データへの変換 (NATIONAL-OF)

英字、英数字、または DBCS データを国別データ項目に変換するには、NATIONAL-OF 組み込み関数を使用してください。データ項目で有効なコード・ページとは異なるコード・ページでソースがエンコードされている場合は、ソース・コード・ページを 2 番目の引数として指定します。

187 ページの『例: 国別データとの変換』

関連タスク

- 188 ページの『UTF-8 データの処理』
- 189 ページの『中国語 GB 18030 データの処理』
- 195 ページの『DBCS データを含む英数字データ項目の処理』

関連参照

NATIONAL-OF (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
コード・ページ名 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別データの英数字データへの変換 (DISPLAY-OF)

2 番目の引数として指定されたコード・ページで表現される英数字 (USAGE DISPLAY) 文字ストリングへ国別データを変換するには、DISPLAY-OF 組み込み関数を使用してください。

2 番目の引数を省略すると、出力コード・ページはランタイムのロケールから決定されます。

1 バイト文字セット (SBCS) 文字と DBCS 文字を結合した EBCDIC または ASCII コード・ページを指定すると、戻されるストリングは SBCS 文字と DBCS 文字の混合になることがあります。関数で有効なコード・ページが EBCDIC コード・ページである場合、DBCS サブストリングはシフトイン文字とシフトアウト文字で区切られています。

『例: 国別データとの間の変換』

関連概念

197 ページの『アクティブ・ロケール』

関連タスク

188 ページの『UTF-8 データの処理』

189 ページの『中国語 GB 18030 データの処理』

関連参照

DISPLAY-OF (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

コード・ページ名 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

デフォルト・コード・ページのオーバーライド

場合によっては、実行時に有効なコード・ページとは異なるコード・ページとの間でデータ変換が必要になることがあります。そうするには、コード・ページを明示的に指定した変換関数を使用して項目を変換します。

DISPLAY-OF 組み込み関数の引数としてコード・ページを指定した場合に、そのコード・ページが実行時に有効なコード・ページとは異なる場合、暗黙の変換を伴う操作 (国別データ項目への割り当てまたは国別データ項目との比較など) で関数結果を使用しないでください。このような操作では、実行時のコード・ページを使用することを前提としています。

例: 国別データとの間の変換

次の例は、国別 (UTF-16) データ項目との間で変換するための NATIONAL-OF および DISPLAY-OF 組み込み関数ならびに MOVE ステートメントを示しています。また、複数のコード・ページでエンコードされたストリングに対して操作を行うときの明示的な変換の必要性も示しています。

```
* . . .
01 Data-in-Unicode pic N(100) usage national.
01 Data-in-Greek   pic X(100).
01 other-data-in-US-English pic X(12) value "PRICE in $ =".
* . . .
    Read Greek-file into Data-in-Greek
    Move function National-of(Data-in-Greek, "IBM-1253")
      to Data-in-Unicode
* . . . process Data-in-Unicode here . . .
    Move function Display-of(Data-in-Unicode, "IBM-1253")
      to Data-in-Greek
    Write Greek-record from Data-in-Greek
```

上記の例は、入力コード・ページが指定されているので正しく機能します。

Data-in-Greek は IBM-1253 (ASCII ギリシャ語) で表されるデータとして変換され

ます。しかし、以下のステートメントの場合、項目内の文字すべてが、たまたまギリシャ語と英語の両方のコード・ページで表現が同じであるものでなければ、変換が誤ったものになります。

Move Data-in-Greek to Data-in-Unicode

有効なロケールを en_US.IBM-1252 とした場合、Data-in-Greek は、上記の MOVE ステートメントにより、コード・ページ IBM-1252 から UTF-16LE への変換に基づいて Unicode に変換されます。この変換は、Data-in-Greek が IBM-1253 にエンコードされるため、期待される結果になりません。

ロケールを el_GR.IBM-1253 に設定した場合（つまり、プログラムが ASCII データをギリシャ語で処理する場合）は、上記と同じ例を次のようにしてコーディングすることができます。

```
* . . .
01 Data-in-Unicode pic N(100) usage national.
01 Data-in-Greek   pic X(100).
* . . .
    Read Greek-file into Data-in-Greek
* . . . process Data-in-Greek here ...
* . . . or do the following (if need to process data in Unicode):
    Move Data-in-Greek to Data-in-Unicode
* . . . process Data-in-Unicode
    Move function Display-of(Data-in-Unicode) to Data-in-Greek
    Write Greek-record from Data-in-Greek
```

関連タスク

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

UTF-8 データの処理

UTF-8 データを処理する必要がある場合は、最初にデータを国別データ項目の UTF-16 に変換します。国別データを処理したあとで、データを出力のために再び UTF-8 に変換します。この変換には、それぞれ組み込み関数 NATIONAL-OF および DISPLAY-OF を使用します。UTF-8 データにはコード・ページ 1208 を使用します。

ASCII または EBCDIC データを UTF-8 に変換するには、次の 2 つのステップを実行する必要があります。

1. 関数 NATIONAL-OF を使用して、ASCII または EBCDIC ストリングを国別ストリング (UTF-16) に変換します。
2. 関数 DISPLAY-OF を使用して、国別ストリングを UTF-8 に変換します。

次の例は、ギリシャ語の EBCDIC データを UTF-8 に変換しています。

```
01 Greek-EBCDIC pic X(10) value "αβγδεζηθ".
01 UnicodeString pic N(10).
01 UTF-8-String pic X(20).
    Move function National-of(Greek-EBCDIC, 00875) to UnicodeString
    Move function Display-of(UnicodeString, 01208) to UTF-8-String
```

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現との間の変換』

中国語 GB 18030 データの処理

GB 18030 は、中華人民共和国の政府機関によって指定された国別文字標準です。

GB 18030 文字は、UTF-16 またはコード・ページ 1392 でエンコードできます。コード・ページ 1392 は ASCII マルチバイト・コード・ページで、文字あたり 1、2、または 4 バイトを使用します。GB 18030 文字のサブセットは、中国語 ASCII コード・ページ CCSID 1386、または中国語 EBCDIC コード・ページ CCSID 1388 でエンコードできます。

COBOL for Windows は GB 18030 を明示的にはサポートしていませんが、幾つかの方法で GB 18030 文字の処理をサポートします。以下のことが可能です。

- DBCS データ項目を使用して、CCSID 1386 で表される GB 18030 文字を処理できます。
- 国別データ項目を使用して、UTF-16、CCSID 01202 で表される GB 18030 文字を定義および処理できます。
- データを UTF-16 へ変換し、その UTF-16 データを処理した後にデータを元のコード・ページ表現へ逆変換することにより、任意のコード・ページ (CCSID 1386 を含む) のデータを処理できます。

変換を必要とする中国語 GB 18030 を処理する必要がある場合、まず入力データを国別データ項目の UTF-16 に変換してください。国別データ項目を処理した後、出力用としてそれを中国語 GB 18030 に逆変換してください。この変換には、それぞれ組み込み関数 NATIONAL-OF および DISPLAY-OF を使用し、コード・ページ 1386 を各関数の 2 番目の引数として指定します。

次の例は、これらの変換を示しています。

```
01 Chinese-ASCII pic X(16) value "奥林匹克运动会".
01 Chinese-GB18030-String pic X(16).
01 UnicodeString pic N(14).
...
Move function National-of(Chinese-ASCII, 1386) to UnicodeString
* Process data in Unicode
Move function Display-of(UnicodeString, 1386) to Chinese-GB18030-String
```

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の変換』

192 ページの『DBCS サポートを使用するためのコーディング』

関連参照

184 ページの『国別データの保管』

国別 (UTF-16) データの比較

国別 (UTF-16) データ、すなわち USAGE NATIONAL を持つデータ項目 (クラス国別かクラス数値かにかかわらず) および国別リテラルを、比較条件の他の種類のデータと明示的または暗黙的に比較することができます。

以下のステートメントで、国別データを使用する条件式をコード化できます。

- EVALUATE

- IF
- INSPECT
- PERFORM
- SEARCH
- STRING
- UNSTRING

続く各節では、国別データとその他のデータ項目との比較について概説します。詳細については、関連参照を参照してください。

関連タスク

『2 つのクラス国別オペランドの比較』

191 ページの『クラス国別オペランドとクラス数値オペランドの比較』

191 ページの『国別数値オペランドと他の数値オペランドの比較』

192 ページの『国別文字ストリング・オペランドと他の文字ストリング・オペランドとの比較』

192 ページの『国別データ・オペランドと英数字グループ・オペランドの比較』

関連参照

Relation 条件 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

一般比較条件 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

国別比較 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

グループ比較 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

2 つのクラス国別オペランドの比較

クラス国別の 2 つのオペランドの文字値を比較できます。

一方 (または両方) のオペランドは、次の項目タイプのいずれかにすることができます。

- 国別グループ
- カテゴリ国別または国別編集の基本データ項目
- USAGE NATIONAL を持つ数字編集データ項目

オペランドの 1 つは、代わりに国別リテラルまたは国別組み込み関数にすることができます。

実行する比較のタイプを決定するには、NCOLLSEQ コンパイラー・オプションを使用します。

NCOLLSEQ(BINARY)

長さが等しい 2 つのクラス国別オペランドを比較するときは、対応する文字の対がすべて等しい場合に等しいと判断されます。対応する文字の対に等しくないものがある場合は、等しくない最初の文字のペアの 2 進値を比較することによって、より大きい 2 進値を持つオペランドが判別されます。

長さの異なるオペランドを比較する場合、短いほうのオペランドは、長いほうのオペランドの長さの位置までその右側にデフォルトの UTF-16 スペース文字 (NX'0020') が埋め込まれているものとして扱われます。

NCOLLSEQ(LOCALE)

ロケールに基づいた比較を使用する場合は、有効なロケールに関連付けられた照合順序のアルゴリズムを使用して、オペランドが比較されます。後続のスペースはオペランドから切り詰められます。ただし例外として、全桁スペースで構成されるオペランドはシングル・スペースに切り捨てられます。

長さの異なるオペランドどうしを比較する場合、短い方のオペランドにスペースを足して長さが調整されることはありません。このような長さ調整を行うと、ロケールで期待される結果が変わってしまう可能性があるためです。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節は、2 つのクラス国別オペランドの比較には影響しません。

関連概念

180 ページの『国別グループ』

関連タスク

181 ページの『国別グループの使用』

関連参照

279 ページの『NCOLLSEQ』

国別比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

クラス国別オペランドとクラス数値オペランドの比較

国別リテラルまたはクラス国別データ項目を、整数リテラルまたは整数として定義された数値データ項目 (すなわち、国別 10 進数項目またはゾーン 10 進数項目) と比較できます。リテラルにできるのは多くても 1 つのオペランドです。

国別リテラルまたはクラス国別データ項目を、浮動小数点データ項目 (すなわち、表示浮動小数点または国別浮動小数点項目) と比較することもできます。

数値オペランドは、まだ国別表現でない場合には、国別 (UTF-16) 表現に変換されます。オペランドの国別文字値が比較されます。

関連参照

一般比較条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別数値オペランドと他の数値オペランドの比較

国別数値オペランド (国別 10 進数オペランドおよび国別浮動小数点オペランド) は、USAGE NATIONAL を持つクラス数値のデータ項目です。

USAGE とは無関係に、数値オペランドの代数値を比較できます。ですから、国別 10 進数項目または国別浮動小数点項目を、バイナリー項目、内部 10 進数項目、ゾーン 10 進数項目、表示浮動小数点項目、または他の任意の数値項目と比較できます。

関連タスク

180 ページの『国別数値データ項目の定義』

関連参照

一般比較条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別文字ストリング・オペランドと他の文字ストリング・オペランドとの比較

国別リテラルまたはクラス国別データ項目の文字値を、英字、英数字、英数字編集、DBCS、USAGE DISPLAY の数字編集の、他の文字ストリング・オペランドのいずれかの文字値と比較できます。

これらのオペランドは、基本国別データ項目へ移動されたかのように扱われます。文字は国別 (UTF-16) 表現へ変換され、2 つの国別文字オペランドの比較が進行します。

関連タスク

179 ページの『国別文字表意定数の使用』

194 ページの『DBCS リテラルの比較』

関連参照

国別比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別データ・オペランドと英数字グループ・オペランドの比較

国別リテラル、国別グループ項目、または USAGE NATIONAL を持つ任意の基本データ項目を、英数字グループと比較できます。

どちらのオペランドも変換されません。国別オペランドは、国別オペランドと同じサイズ (バイト単位) の英数字グループ項目に移動されたかのように扱われ、2 つのグループが比較されます。英数字比較は、英数字グループ・オペランドの従属項目の表現とは無関係に行われます。

例えば、Group-XN は、USAGE NATIONAL を持つ 2 つの従属項目からなる英数字グループです。

```
01 Group-XN.  
  02 TransCode PIC NN    Value "AB"  Usage National.  
  02 Quantity  PIC 999   Value 123   Usage National.  
  . . .  
  If N"AB123" = Group-XN Then Display "EQUAL"  
  Else Display "NOT EQUAL".
```

上記の IF ステートメントが実行されると、国別リテラル N"AB123" の 10 バイトが、バイトごとに Group-XN の内容と比較されます。項目は比較されて同じと見なされると、「EQUAL」が表示されます。

関連参照

グループ比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

DBCS サポートを使用するためのコーディング

IBM COBOL for Windows では、2 バイト文字セット (DBCS) を使用する言語を含む各国語のいずれかでアプリケーションを使用することができます。

以下のリストは、DBCS のサポートを要約したものです。

- ユーザー定義語 (マルチバイト名) 内の DBCS 文字
- コメントでの DBCS 文字

- DBCS データ項目 (PICTURE N、G、または G と B で定義します)
- DBCS リテラル
- 照合シーケンス
- SOSI コンパイラー・オプション

関連タスク

『DBCS データの宣言』

『DBCS リテラルの使用』

195 ページの『有効な DBCS 文字に関するテスト』

195 ページの『DBCS データを含む英数字データ項目の処理』

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

関連参照

287 ページの『SOSI』

DBCS データの宣言

DBCS データ項目を宣言するには、PICTURE および USAGE 文節を使用してください。 DBCS データ項目では、PICTURE 記号の G、G と B、または N を使用できます。

DBCS データ項目は、USAGE DISPLAY-1 文節を使用して指定できます。 PICTURE 記号の G を使用する場合、USAGE DISPLAY-1 を指定する必要があります。 PICTURE 記号の N を指定したが、USAGE 文節を省略した場合、NSYMBOL コンパイラー・オプションの設定に応じて USAGE DISPLAY-1 または USAGE NATIONAL が暗黙指定されます。

DBCS 項目の宣言で USAGE 文節と一緒に VALUE 文節を使用する場合、DBCS リテラルまたは表意定数 SPACE または SPACES を指定する必要があります。

データ項目に USAGE DISPLAY-1 (明示的または暗黙的) がある場合は、選択したロケールが、DBCS 文字を含むコード・ページを示している必要があります。ロケールのコード・ページに DBCS 文字が含まれていない場合は、このようなデータ項目にエラーのフラグが立てられます。

参照変更の処理の目的のため、DBCS データ項目のそれぞれの文字は、コード・ページ幅に相当するバイト数 (つまり、2) を占有するとみなされます。

関連タスク

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

279 ページの『NSYMBOL』

DBCS リテラルの使用

DBCS リテラルを表すには、接頭部 N または G を使用できます。

すなわち、次のいずれかの方法で DBCS リテラルを指定できます。

- `N'DBCS 文字` (コンパイラー・オプション `NSYMBOL(DBCS)` が有効である場合)
- `G'DBCS 文字`

APOST または QUOTE コンパイラー・オプションの設定にかかわらず、引用符 (") または単一引用符 (') を DBCS リテラルの区切り文字として使用できます。DBCS リテラルに対して、同じ開始区切り文字と終了区切り文字をコーディングする必要があります。

SOSI コンパイラー・オプションが有効な場合、シフトアウト (SO) 制御文字 `X'1E'` は開始区切り文字の直後に続けなければなりません。シフトイン (SI) 制御文字 `X'1F'` は終了区切り文字の直前に来るようにする必要があります。

DBCS リテラルのほかにも、英数字リテラルを使用して、サポートされるコード・ページの 1 つの任意の文字を指定できます。ただし、SOSI コンパイラー・オプションが有効な場合、英数字リテラルに含まれる DBCS 文字のストリングは、SO および SI 文字で区切る必要があります。

マルチバイト文字を含んでいる英数字リテラルを継続させることはできません。さらに DBCS リテラルの長さは、B 領域の単一ソース行で使用可能なスペースによって限定されます。したがって、DBCS リテラルの最大長は 28 個の 2 バイト文字です。

マルチバイト文字を含んでいる英数字リテラルはバイトごとに、すなわち 1 バイト文字に適したセマンティクスによって処理されます。ただし、例えば、国別データ項目への割り当てや国別データ項目との比較のように、明示的または暗黙的に国別データ表現に変換された場合は、そのような仕方で処理されません。

関連タスク

『DBCS リテラルの比較』
27 ページの『表意定数の使用』

関連参照

279 ページの『NSYMBOL』
284 ページの『QUOTE/APOST』
287 ページの『SOSI』
DBCS リテラル (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

DBCS リテラルの比較

DBCS リテラルの比較は、コンパイル時のロケールに基づきます。このため、対象とする実行時のロケールがコンパイル時のロケールと同じでない限り、2 つの DBCS リテラル間の暗黙的な関係条件を表すステートメント内で (VALUE `G'literal-1'` THRU `G'literal-2'` など) DBCS リテラルを使用することは避けてください。

関連タスク

189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』
197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

関連参照

258 ページの『COLLSEQ』

DBCS リテラル (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

DBCS 比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

有効な DBCS 文字に関するテスト

漢字クラス・テストでは、有効な日本語図形文字に関するテストが行われます。このテストには、カタカナ、ひらがな、ローマ字、および漢字の文字セットが含まれます。

漢字および DBCS クラス・テストは、zSeries の定義と整合するように定義されます。どちらのクラス・テストも、2 バイト文字を z/OS 用に定義された 2 バイト文字に変換することで、内部的に実行されます。変換された 2 バイト文字は、DBCS および日本語の図形文字についてのテストが行われます。

漢字クラス・テストは、最初のバイトの X'41' から X'7E' および 2 番目のバイトの X'41' から X'FE' の範囲の変換された文字、さらにスペース文字 X'4040' を検査することで行われます。

DBCS クラス・テストでは、コード・ページの有効な図形文字に関するテストが行われます。

DBCS クラス・テストは、それぞれの文字の最初と 2 番目のバイト双方の X'41' から X'FE' の範囲の変換された文字、およびスペース文字 X'4040' を検査することで行われます。

関連タスク

90 ページの『条件式のコーディング』

関連参照

クラス条件 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

DBCS データを含む英数字データ項目の処理

DBCS 文字を含んでいる英数字データ項目に対してバイト指向の操作 (例えば、STRING、UNSTRING、または参照変更) を行うと、結果は予測不能です。そうではなく項目を国別データ項目に変換してから、処理する必要があります。

すなわち、以下のステップを実行してください。

1. MOVE ステートメントまたは NATIONAL-OF 組み込み関数を使用して、項目を国別データ項目の UTF-16 に変換します。
2. 必要に応じて国別データ項目を処理します。
3. DISPLAY-OF 組み込み関数を使用して、結果を英数字データ項目に逆変換します。

関連タスク

99 ページの『データ項目の結合 (STRING)』

102 ページの『データ項目の分割 (UNSTRING)』

106 ページの『データ項目のサブストリングの参照』

185 ページの『国別 (Unicode) 表現との間の変換』

第 11 章 ロケールの設定

アプリケーションの実行時に有効になるロケールの国/地域別情報を反映させるようにアプリケーションを記述することができます。国/地域別情報には、ソート順、文字種別、各国語、さらには日付と時刻、数値、通貨、住所、および電話番号の形式が含まれます。

COBOL for Windows では、適切なコード・ページや照合シーケンスを選択したり、言語エレメントやコンパイラー・オプションを使用して、Unicode、1 バイト文字セット、および 2 バイト文字セット (DBCS) を処理することができます。

関連概念

『アクティブ・ロケール』

関連タスク

198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

207 ページの『アクティブ・ロケールおよびコード・ページ値へのアクセス』

アクティブ・ロケール

ロケール とは、国/地域別環境に関する情報をエンコードするデータの集合をいいます。アクティブ・ロケールとは、プログラムをコンパイルまたは実行するときに有効なロケールです。アプリケーションの国/地域別環境を設定するには、アクティブ・ロケールを指定します。

一度にアクティブにできるロケールは 1 つだけです。

アクティブ・ロケールは、プログラム全体を通して国/地域別依存のインターフェースの動作に影響します。

- 文字データに使用されるコード・ページ
- メッセージ
- 照合シーケンス
- 日時形式
- 文字の種別および大/小文字の変換

アクティブ・ロケールは、次の項目には影響しません。これらについては、COBOL 85 標準で特定の言語および動作が定義されています。

- 小数点およびグループ化された分離文字
- 通貨記号

アクティブ・ロケールは、プログラムをコンパイルおよび実行するためのコード・ページを決定します。

- コンパイルに使用されるコード・ページはコンパイル時のロケール設定に基づきます。
- アプリケーションの実行に使用されるコード・ページは実行時のロケール設定に基づきます。

ソース・プログラム内のリテラル値の評価は、コンパイル時にアクティブなロケールを使用して処理されます。例えば、プログラムを実行するために国別リテラルをソース表現から UTF-16 に変換する処理では、コンパイル時のロケールを使用します。

COBOL for Windows は、該当する環境変数とシステム設定の組み合わせからアクティブ・ロケールの設定を決定します。まず最初に、環境変数が使用されます。該当するロケールのカテゴリが環境変数によって定義されていない場合、COBOL ではデフォルトとシステム設定を使用します。

関連概念

200 ページの『システム設定からのロケールの決定』

関連タスク

『ロケール付きのコード・ページの指定』

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

関連参照

201 ページの『変換が使用可能なメッセージのタイプ』

ロケール付きのコード・ページの指定

ソース・プログラムでは、COBOL の名前、リテラル、およびコメント内では、サポートされるコード・ページで表現される文字を使用できます。(ユーザー定義語の構造の詳細については、以下の関連参照で引用されている、「*COBOL for Windows 言語解説書*」の情報を参照してください。)

実行時に、USAGE DISPLAY、USAGE DISPLAY-1、または USAGE NATIONAL で記述されているデータ項目内では、サポートされるコード・ページで表現される文字を使用することができます。

特定の英数字データ項目に対して有効となるコード・ページは、以下の側面によって決まります。

- 使用される USAGE 文節
- NATIVE 句を USAGE 文節と共に使用したかどうか
- CHAR(NATIVE) または CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用したかどうか
- アクティブなロケール

COBOL for Windows は、ASCII と EBCDIC のコード・ページを以下のように選択します。

- USAGE 文節の NATIVE 句で記述されたデータ項目は、ASCII コード・ページでエンコードされます。

- USAGE 文節の NATIVE 句なしで記述されたデータ項目は、CHAR コンパイラー・オプションに従って次のようにエンコードされます。
 - CHAR(NATIVE): ASCII の場合
 - CHAR(EBCDIC): EBCDIC の場合

COBOL では、適切なコード・ページを次のように決定します。

ASCII 実行時のアクティブ・ロケールから。

EBCDIC

EBCDIC_CODEPAGE 環境変数から (設定されている場合)。それ以外の場合は、現行のロケール設定からデフォルトの EBCDIC コード・ページが使用されます。

USAGE NATIONAL データ項目および国別リテラル用のコード・ページは、UTF-16、CCSID 1202 です。

関連タスク

『環境変数を使用したロケールの指定』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

217 ページの『ランタイム環境変数』

255 ページの『CHAR』

1 バイト文字の COBOL ワード (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

マルチバイト文字のユーザー定義語 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

環境変数を使用したロケールの指定

COBOL プログラムのロケール情報を提供するには、いずれかの環境変数を使用します。

すべてのロケール・カテゴリー (メッセージ、照合シーケンス、日付と時刻形式、文字種別、および大/小文字の変換) に使用するコード・ページを指定するには、LC_ALL を使用します。

特定のロケール・カテゴリーの値を設定するには、以下の該当する環境変数を使用します。

- LC_MESSAGES は、肯定応答および否定応答の形式を指定するために使用します。また、これを使用して、メッセージ (エラー・メッセージやリスト・ヘッダーなど) が米国英語か日本語のどちらになるかを決定できます。日本語以外のロケールの場合は、米国英語が使用されます。
- LC_COLLATE は、関連条件内や SORT および MERGE ステートメント内などの、より大比較またはより小比較に有効な照合シーケンスを指定するために使用します。
- LC_TIME は、コンパイラー・リストに示される日付と時刻の形式を指定するために使用します。それ以外の日付および時刻の値はすべて COBOL 言語の構文に従います。
- LC_CTYPE は、文字の種別、大/小文字の変換、およびその他の文字属性を指定するために使用します。

上記のロケール環境変数のいずれかで指定されないロケール・カテゴリーは、LANG 環境変数の値から設定されます。

ロケールの環境変数を設定するには、以下のフォーマットを使用します (*codepageID* はオプションです)。

```
SET LC_XXXX=ll_CC.codepageID
```

ここで、LC_XXXX はロケール・カテゴリーの名前、ll は小文字の 2 文字の言語コード、CC は大文字の 2 文字の ISO 国別コード、および *codepageID* はネイティブ DISPLAY と DISPLAY-1 データに使用されるコード・ページです。COBOL for Windows では、POSIX で定められたロケール規則を使用しています。

例えば、ロケールを IBM-863 でエンコードされるカナダ・フランス語に設定するには、COBOL アプリケーションをコンパイルして実行するコマンド・ウィンドウで、次のコマンドを発行します。

```
SET LC_ALL=fr_CA.IBM-863
```

ロケール名の有効な値 (ll_CC) と、指定するコード・ページ (*codepageID*) はロケール名に有効でなければなりません。有効な値は、後述のロケールおよびコード・ページの表に示されています。

関連概念

『システム設定からのロケールの決定』

関連タスク

198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

217 ページの『ランタイム環境変数』

システム設定からのロケールの決定

COBOL for Windows が該当するロケール・カテゴリーの値を環境変数から決定できない場合は、次のデフォルト設定が使用されます。

デフォルトのロケールは en_US.ibm-1252 に設定されています。

言語および国別コードは環境変数から決定されるが、コード・ページは決定されないという場合、COBOL for Windows では Windows の地域設定から Windows OEM コード・ページが使用されます。このコード・ページと、言語および国別コードの組み合わせは、互換性がなければなりません。

Windows API: COBOL ランタイムでは、Windows の地域オプション設定や、ネイティブの Windows API で使用されるプロセス・ロケールは変更されません。

関連タスク

198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

207 ページの『アクティブ・ロケールおよびコード・ページ値へのアクセス』

213 ページの『環境変数の設定』

関連参照

『サポートされるロケールおよびコード・ページ』
217 ページの『ランタイム環境変数』

変換が使用可能なメッセージのタイプ

以下のメッセージは各国語サポート、すなわちコンパイラー、ランタイム、およびデバッガー・ユーザー・インターフェース・メッセージ、およびリスト・ヘッダー (ロケール・ベースの日付と時刻形式を含む) に対応しています。

アクティブ・ロケールで指定された該当するテキストおよび形式が、これらのメッセージおよびリスト・ヘッダーに使用されます。

メッセージの言語とロケールに影響する LANG および NLSPATH 環境変数については、下の『関連参照』を参照してください。

関連概念

197 ページの『アクティブ・ロケール』

関連タスク

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

関連参照

217 ページの『ランタイム環境変数』

サポートされるロケールおよびコード・ページ

次の表に、COBOL for Windows でサポートされるロケールと、各ロケールで有効なコード・ページを示します。

表 22. サポートされるロケールおよびコード・ページ

ロケール名 ¹	言語 ²	国または区域 ³	ASCII コード・ページ ⁴	EBCDIC コード・ページ ⁵	言語グループ
ar_AA	アラビア語	アラビア諸国	IBM-864、IBM-1256	IBM-16804、IBM-420	アラビア語
be_BY	ベロルシア語	ベラルーシ	IBM-866、IBM-1251	IBM-1025、IBM-1154	Latin 5
bg_BG	ブルガリア語	ブルガリア	IBM-855、IBM-1251	IBM-1025、IBM-1154	Latin 5
ca_ES	カタロニア語	スペイン	IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-285、IBM-1145	Latin 1
cs_CZ	チェコ語	チェコ共和国	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
da_DK	デンマーク語	デンマーク	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-277、IBM-1142	Latin 1
de_CH	ドイツ語	スイス	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-500、IBM-1148	Latin 1
de_DE	ドイツ語	ドイツ	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-273、IBM-1141	Latin 1
el_GR	ギリシャ語	ギリシャ	IBM-1253	IBM-4971、IBM-875	ギリシャ語
en_AU	英語	オーストラリア	IBM-437、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1

表 22. サポートされるロケールおよびコード・ページ (続き)

ロケール名 ¹	言語 ²	国または区域 ³	ASCII コード・ページ ⁴	EBCDIC コード・ページ ⁵	言語グループ
en_BE	英語	ベルギー	IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-500、IBM-1148	Latin 1
en_GB	英語	英国	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
en_JP	英語	日本	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
jp-Jp	英語	米国	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
en_ZA	英語	南アフリカ	IBM-437、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
es_ES	スペイン語	スペイン	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-284、IBM-1145	Latin 1
et_EE	Estonian	エストニア	IBM-1257	IBM-1157	Estonian
fi_FI	フィンランド語	フィンランド	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-278、IBM-1143	Latin 1
fr_BE	フランス語	ベルギー	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-297、IBM-1148	Latin 1
fr_CA	フランス語	カナダ	IBM-863、IBM-850、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
fr_CH	フランス語	スイス	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-500、IBM-1148	Latin 1
fr_FR	フランス語	フランス	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-297、IBM-1148	Latin 1
hr_HR	クロアチア語	クロアチア	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
hu_HU	ハンガリー語	ハンガリー	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
is_IS	アイスランド語	アイスランド	IBM-861、IBM-850、IBM-1252	IBM-871、IBM-1149	Latin 1
it_CH	イタリア語	スイス	IBM-850、IBM-1252	IBM-500、IBM-1148	Latin 1
it_IT	イタリア語	イタリア	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-280、IBM-1144	Latin 1
iw_IL	ヘブライ語	イスラエル国	IBM-862、IBM-1255	IBM-12712、IBM-424	ヘブライ語
ja_JP	日本語	日本	IBM-943	IBM-930、IBM-939、IBM-1390、IBM-1399	表意文字言語
ko_KR	韓国語	大韓民国	IBM-1363	IBM-933、IBM-1364	表意文字言語
lt_LT	リトアニア語	リトアニア	IBM-1257	IBM-1112、IBM-1156	リトアニア語
lv_LV	ラトビア語	ラトビア	IBM-1257	IBM-1112、IBM-1156	ラトビア語
mk_MK	マケドニア語	マケドニア	IBM-855、IBM-1251	IBM-1025、IBM-1154	Latin 5
nl_BE	オランダ語	ベルギー	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-500、IBM-1148	Latin 1
nl_NL	オランダ語	オランダ	IBM-437、IBM-850、IBM-5348、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
no_NO	ノルウェー語	ノルウェー	IBM-437、IBM-850、IBM-1252	IBM-277、IBM-1142	Latin 1

表 22. サポートされるロケールおよびコード・ページ (続き)

ロケール名 ¹	言語 ²	国または区域 ³	ASCII コード・ページ ⁴	EBCDIC コード・ページ ⁵	言語グループ
pl_PL	ポーランド語	ポーランド	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
pt_BR	ポルトガル語	ブラジル	IBM-850、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
pt_PT	ポルトガル語	ポルトガル	IBM-860、IBM-850、 IBM-5348、IBM-1252	IBM-037、IBM-1140	Latin 1
ro_RO	ルーマニア語	ルーマニア	IBM-852、IBM-850、 IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
ru_RU	ロシア語	ロシア連邦	IBM-866、IBM-1251	IBM-1025、IBM-1154	Latin 5
sh_SP	セルビア語 (ラテン語)	セルビア	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
sk_SK	スロバキア語	スロバキア	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
sl_SI	スロベニア語	スロベニア	IBM-852、IBM-1250	IBM-870、IBM-1153	Latin 2
sq_AL	アルバニア語	アルバニア	IBM-850、IBM-1252	IBM-500、IBM-1148	Latin 1
sv_SE	スウェーデン語	スウェーデン	IBM-437、IBM-850、 IBM-1252	IBM-278、IBM-1143	Latin 1
th_TH	タイ語	タイ	IBM-874	IBM-9030	タイ語
tr_TR	トルコ語	トルコ	IBM-857、IBM-1254	IBM-1026、IBM-1155	トルコ語
uk_UA	ウクライナ語	ウクライナ	IBM-866、IBM-1251	IBM-1123、IBM-1154	Latin 5
zh_CN	中国語 (簡体字)	中国	IBM-1386	IBM-1388	表意文字言語
zh_TW	中国語 (繁体字)	台湾	IBM-950	IBM-1371、IBM-937	表意文字言語

1. サポートされる ISO 言語コードと ISO 国別コードの有効な組み合わせ (*language_COUNTRY*) を示します。

2. 関連した言語を示します。

3. 関連した国またはエリアを示します。

4. 対応する *language_COUNTRY* 値を持つロケールのコード・ページ ID として有効な ASCII コード・ページを示します。

5. 対応する *language_COUNTRY* 値を持つロケールのコード・ページ ID として有効な EBCDIC コード・ページを示します。これらのコード・ページは、EBCDIC_CODEPAGE 環境変数の内容として有効です。EBCDIC_CODEPAGE 環境変数が設定されていない場合は、デフォルトにより、この列内の右端に示すコード・ページ項目が、対応するロケールの EBCDIC コード・ページとして選択されます。

関連タスク

198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

ロケール付きの照合シーケンスの制御

比較、ソート、マージなどのさまざまな操作は、プログラムおよびデータ項目に有効な照合シーケンスを使用します。照合シーケンスの制御方法は、データのクラスに対して有効なコード・ページに応じて、英字、英数字、DBCS、または国別のいずれかになります。

英字、英数字、または DBCS クラスを持つ項目にロケール・ベースの照合シーケンスが適用されるのは、COLLSEQ(LOCALE) コンパイラー・オプションが有効な場合のみで、COLLSEQ(BIN) または COLLSEQ(EBCDIC) が有効な場合には適用されません。同様に、国別クラス項目のロケール・ベースの照合シーケンスが適用されるのは、NCOLLSEQ(LOCALE) コンパイラー・オプションが有効な場合のみで、NCOLLSEQ(BIN) が有効な場合は適用されません。

COLLSEQ(LOCALE) または NCOLLSEQ(LOCALE) コンパイラー・オプションが有効な場合、ロケール・ベースの照合順序によって影響を受ける構文または意味体系規則を持つ言語エレメントには、コンパイル時のロケールが使用されます。それらは以下のようなものです。

- 条件名 VALUE 文節内の THRU 句
- EVALUATE ステートメント内の *literal-3* THRU *literal-4* 句
- ALPHABET 文節内の *literal-1* THRU *literal-2* 句
- SYMBOLIC CHARACTERS 文節で指定された文字の順序位置
- CLASS 文節内の THRU 句

COLLSEQ(LOCALE) コンパイラー・オプションが有効な場合、SORT または MERGE ステートメントの英数字キーの照合シーケンスは常に実行時のロケールに基づきます。

関連タスク

- 8 ページの『照合シーケンスの指定』
- 198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』
- 199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』
- 『ロケール付きの英数字照合シーケンスの制御』
- 205 ページの『ロケール付きの DBCS 照合シーケンスの制御』
- 206 ページの『ロケール付きの国別照合シーケンスの制御』
- 207 ページの『アクティブ・ロケールおよびコード・ページ値へのアクセス』
- 152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』

関連参照

- 201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』
- 258 ページの『COLLSEQ』
- 279 ページの『NCOLLSEQ』

ロケール付きの英数字照合シーケンスの制御

プログラム照合シーケンスの場合、1 バイト英数字の照合シーケンスは、コンパイル時または実行時のロケールに基づきます。

ソース・プログラムで PROGRAM COLLATING SEQUENCE を指定すると、照合シーケンスはコンパイル時に設定され、実行時のロケールに関係なく使用されます。逆に、COLLSEQ コンパイラー・オプションを使用して照合シーケンスを設定すると、実行時のロケールが優先されます。

有効なコード・ページが 1 バイト ASCII コード・ページの場合、SPECIAL-NAMES 段落で以下の文節を指定できます。

- ALPHABET 文節

- SYMBOLIC CHARACTERS 文節
- CLASS 文節

有効なソース・コード・ページに DBCS 文字が含まれている場合にこれらの文節を指定すると、文節が診断され、コメントとして扱われます。COBOL のユーザー定義の英字名およびシンボリック文字の規則では、複数文字のシーケンスに依存する照合シーケンスではなく、文字単位の照合シーケンスを前提としています。

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節を OBJECT-COMPUTER 段落内で指定した場合、*alphabet-name* に関連付けられている照合シーケンスを使用して、英数字比較の真の値が決定されます。また、PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節は、SORT または MERGE ステートメントで COLLATING SEQUENCE 句を指定していない限り、USAGE DISPLAY のソートおよびマージ・キーに適用されます。

COLLATING SEQUENCE 句または PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節を指定しない場合、有効な照合シーケンスはデフォルトで NATIVE になり、アクティブなロケール設定に基づきます。この設定は、SORT および MERGE ステートメントと、プログラムの照合シーケンスに適用されます。

この照合シーケンスは、次の項目の処理に影響します。

- ALPHABET 文節 (*literal-1* THRU *literal-2* など)
- SYMBOLIC CHARACTERS 仕様
- レベル 88 の項目、比較条件、SORT および MERGE ステートメントに対する VALUE 範囲の指定

関連タスク

8 ページの『照合シーケンスの指定』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

『ロケール付きの DBCS 照合シーケンスの制御』

206 ページの『ロケール付きの国別照合シーケンスの制御』

152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』

関連参照

258 ページの『COLLSEQ』

データのクラスおよびカテゴリ (「COBOL for Windows 言語解説書」)

英数字比較 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

ロケール付きの DBCS 照合シーケンスの制御

実行時のロケール・ベースの照合シーケンスは、リテラルの比較の場合を除き、常に DBCS データに適用されます。

クラス DBCS のデータ項目およびリテラルは、任意の関係演算子を持つ比較条件で使用することができます。その他のオペランドはクラス DBCS かクラス national、または英数字グループでなければなりません。DBCS 項目と編集済み DBCS 項目の間に区別はありません。

2 つの DBCS オペランドを比較する場合、COLLSEQ(LOCALE) コンパイラー・オプションが有効であれば、照合シーケンスはアクティブ・ロケールによって決定されます。有効でない場合、照合シーケンスは DBCS 文字のバイナリー値によって決定さ

れます。 PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節は、 クラス DBCS のデータ項目またはリテラルを含む比較には影響しません。

DBCS 項目を国別項目と比較する場合、DBCS オペランドは、DBCS オペランドと同じ長さの基本国別項目に移動されるかのように処理されます。 DBCS 文字は国別表現へ変換され、2 つの国別文字オペランドの比較が進行します。

DBCS 項目を英数字グループと比較する場合、変換または編集は行われません。 2 つの英数字オペランドについては、比較が実行されます。比較は、データ表現には関係なくデータの各バイトを処理します。

関連タスク

8 ページの『照合シーケンスの指定』

193 ページの『DBCS リテラルの使用』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

204 ページの『ロケール付きの英数字照合シーケンスの制御』

『ロケール付きの国別照合シーケンスの制御』

関連参照

258 ページの『COLLSEQ』

データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

英数字比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

DBCS 比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

グループ比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ロケール付きの国別照合シーケンスの制御

USAGE NATIONAL の国別リテラルまたはデータ項目は、任意の関係演算子を持つ比較条件で使用することができます。 PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節は国別オペランドを含む比較に影響を及ぼしません。

実行時にアクティブなロケールと関連付けられた照合順序のアルゴリズムに基づく比較を有効にするには、NCOLLSEQ(LOCALE) コンパイラー・オプションを使用します。 NCOLLSEQ(BINARY) が有効な場合、照合シーケンスは国別文字のバイナリー値によって決定されます。

SORT または MERGE ステートメントが クラス国別になるのは、NCOLLSEQ(BIN) オプションが有効な場合のみです。

関連タスク

189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

205 ページの『ロケール付きの DBCS 照合シーケンスの制御』

152 ページの『ソートまたはマージ基準の設定』

関連参照

279 ページの『NCOLLSEQ』

データのクラスおよびカテゴリー (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

国別比較 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

照合シーケンスに依存する組み込み関数

次の組み込み関数は、文字の順序位置によって異なります。

ASCII コード・ページの場合、これらの組み込み関数は有効な照合シーケンスに基づいてサポートされます。DBCS 文字を含むコード・ページの場合は、1 バイト文字の順序位置が、1 バイト文字の 16 進数表現に対応するものとします。例えば、「A」の順序位置は 66 (X'41' + 1)、「*」の順序位置は 43 (X'2A' + 1) となります。

表 23. 照合シーケンスに依存する組み込み関数

組み込み関数	戻り	コメント
CHAR	順序位置引数に対応する文字	
MAX	最大値を含む引数の内容	引数は、英字、英数字、国別、または数字です。 ¹
MIN	最小値を含む引数の内容	引数は、英字、英数字、国別、または数字です。 ¹
ORD	文字引数の順序位置	
ORD-MAX	最大値を含む引数の、引数リスト内での整数順序位置	引数は、英字、英数字、国別、または数字です。 ¹
ORD-MIN	最小値を含む引数の、引数リスト内での整数順序位置	引数は、英字、英数字、国別、または数字です。 ¹
1. 関数に数値の引数が含まれている場合は、コード・ページと照合シーケンスが適用されません。		

これらの組み込み関数は、DBCS データ型ではサポートされません。

関連タスク

8 ページの『照合シーケンスの指定』

189 ページの『国別 (UTF-16) データの比較』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

アクティブ・ロケールおよびコード・ページ値へのアクセス

コンパイル時に有効なロケールを検証するには、コンパイラー・リストの最後の数行を検査します。

アプリケーションによっては、実行時にアクティブなロケールおよび EBCDIC コード・ページを検証し、コード・ページ ID を対応する CCSID に変換することが必要な場合もあります。このような照会や変換は、呼び出し可能なライブラリー・ルーチンを使用して実行することができます。

実行時にアクティブなロケールおよび EBCDIC コード・ページにアクセスするには、以下のようにライブラリー関数 `_iwxGetLocaleCP` を呼び出します。

```
CALL "_iwxGetLocaleCP" USING output1, output2
```

変数 `output1` は、次のフォーマットでヌル終了ロケール値を表す、20 文字の英数字項目です。

- 2 文字の言語コード

- 下線 (_)
- 2 文字の国別コード
- ピリオド (.)
- ロケールのコード・ページ値

例えば、en_US.IBM-1252 は、言語コード en、国別コード US、コード・ページ IBM-1252 のロケール値を表しています。

変数 *output2* は、有効なヌル終了 EBCDIC コード・ページ ID を表す、10 文字の英数字項目 (IBM-1140 など) です。

コード・ページ ID を対応する CCSID に変換するには、次のようにライブラリー関数 *_iwbzGetCCSID* を呼び出します。

```
CALL "_iwbzGetCCSID" USING input, output RETURNING returncode
```

input は、ヌル終了コード・ページ ID を表す英数字項目です。

output は、4 バイトの符号付き 2 進数データ項目 (PIC S9(5) COMP-5 として定義された項目など) です。入力コード・ページ ID ストリングまたはエラー・コード -1 に対応する CCSID が戻されます。

returncode は、次のように設定される、4 バイトの符号付き 2 進数データ項目です。

0 成功

1 コード・ページ ID は有効だが、関連する CCSID がない。 *output* は -1 に設定されます。

-1 コード・ページ ID が有効なコード・ページではない。 *output* は -1 に設定されます。

これらのサービスを呼び出すには、SYSTEM 呼び出しインターフェース規約と、PGMNAME(MIXED) および NODYNAM コンパイラー・オプションを使用する必要があります。

『例: コード・ページ ID の取得および変換』

関連タスク

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

関連参照

254 ページの『CALLINT』

263 ページの『DYNAM』

282 ページの『PGMNAME』

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

514 ページの『SYSTEM』

例: コード・ページ ID の取得および変換

次の例は、呼び出し可能サービス *_iwbzGetLocaleCP* および *_iwbzGetCCSID* を使用して、有効なロケールと EBCDIC コード・ページをそれぞれ取得し、コード・ページ ID を対応する CCSID に変換する方法を示しています。

```

cb1 pgmname(1m)
  Identification Division.
  Program-ID. "Samp1".
  Data Division.
  Working-Storage Section.
  01 locale-in-effect.
    05 ll-cc          pic x(5).
    05 filler-period  pic x.
    05 ASCII-CP       Pic x(14).
  01 EBCDIC-CP        pic x(10).
  01 CCSID            pic s9(5) comp-5.
  01 RC              pic s9(5) comp-5.
  01 n               pic 99.

  Procedure Division.
  Get-locale-and-codepages section.
  Get-locale.
    Display "Start Samp1."
    Call "_iwzGetLocaleCP"
      using locale-in-effect, EBCDIC-CP
    Move 0 to n
    Inspect locale-in-effect
      tallying n for characters before initial x'00'
    Display "locale in effect: " locale-in-effect (1 : n)
    Move 0 to n
    Inspect EBCDIC-CP
      tallying n for characters before initial x'00'
    Display "EBCDIC code page in effect: "
      EBCDIC-CP (1 : n).

  Get-CCSID-for-EBCDIC-CP.
  Call "_iwzGetCCSID" using EBCDIC-CP, CCSID returning RC
  Evaluate RC
    When 0
      Display "CCSID for " EBCDIC-CP (1 : n) " is " CCSID
    When 1
      Display EBCDIC-CP (1 : n)
        " does not have a CCSID value."
    When other
      Display EBCDIC-CP (1 : n) " is not a valid code page."
  End-Evaluate.

  Done.
  Goback.

```

ロケールを ja_JP.IBM-943 (set LC_ALL=ja_JP.IBM-943) に設定した場合、このサンプル・プログラムからの出力は次のようになります。

```

Start Samp1.
locale in effect: ja_JP.IBM-943
EBCDIC code page in effect: IBM-1399
CCSID for IBM-1399 is 0000001399

```

関連タスク

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

第 3 部 プログラムのコンパイル、リンク、実行、デバッグ

第 12 章 プログラムのコンパイル、リンク、実行 213

環境変数の設定	213
COBOL for Windows の環境変数の設定	214
コンパイラ環境変数	215
リンカー環境変数	217
ランタイム環境変数	217
TZ 環境パラメーター変数	221
コンパイル済みプログラム	222
コマンド行からのコンパイル	223
例: コンパイルでの cob2 の使用	223
バッチ・ファイルまたはコマンド・ファイルを使用したコンパイル	224
PROCESS (CBL) ステートメントによるコンパイラ・オプションの指定	224
ソース・プログラムのエラーの訂正	225
コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード	225
コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成	226
コンパイラ検出エラーに関するメッセージおよびリスト	226
コンパイル・エラー・メッセージの形式	227
cob2 オプション	228
コンパイルに適用されるオプション	228
リンクに適用されるオプション	229
コンパイルとリンクの両方に適用されるオプション	230
プログラムのリンク	231
cob2 でサポートされるファイル名および拡張子	232
リンカー・オプションの指定	232
コンパイラを使用したリンク	233
コマンド行からのリンク	233
例: リンクでの cob2 の使用	234
例: リンカー・オプションのオーバーライド	234
リンカーの入出力ファイル	235
リンカーの検索規則	235
例: リンカーの検索規則	236
ファイル名のデフォルト	236
リンク内のエラーの訂正	237
リンカーの戻りコード	237
プログラム名内のリンカー・エラー	237
NMAKE を使用したプロジェクトの更新	238
コマンド行での NMAKE の実行	238
コマンド・ファイルでの NMAKE の実行	239
NMAKE の記述ファイルの定義	240
プログラムの実行	240
COBOL for Windows DLL の再配布	241

第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行 243

オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル	243
オブジェクト指向アプリケーションの準備	244
例: COBOL クラス定義のコンパイルおよびリンク	245

オブジェクト指向アプリケーションの実行	245
main メソッドで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行	246
COBOL プログラムで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行	247

第 14 章 コンパイラ・オプション 249

矛盾するコンパイラ・オプション	251
ADATA	251
ARITH.	252
BINARY	253
CALLINT.	254
CHAR.	255
CICS	257
COLLSEQ	258
COMPILE.	260
CURRENCY.	260
DATEPROC	261
DIAGTRUNC	263
DYNAM	263
ENTRYINT	264
EXIT	265
文字ストリング形式	267
ユーザー出口作業域	267
リンケージ規約	267
出口モジュールのパラメーター・リスト	267
INEXIT の使用	268
LIBEXIT の使用	269
PRTEXIT の使用	270
ADEXIT の使用	270
FLAG	271
FLAGSTD	272
FLOAT	274
LIB.	274
LINECOUNT.	275
LIST	275
LSTFILE	276
MAP	276
MDECK	277
NCOLLSEQ	279
NSYMBOL	279
NUMBER.	280
OPTIMIZE	281
PGMNAME	282
PGMNAME(UPPER)	283
PGMNAME(MIXED)	283
PROBE	283
QUOTE/APOST.	284
SEPOBJ	285
バッチ・コンパイル	285
SEQUENCE	286

SIZE	287
SOSI	287
SOURCE	289
SPACE	289
SQL	290
SSRANGE	291
TERMINAL	292
TEST	292
THREAD	293
TRUNC	293
TRUNC の例 1.	295
TRUNC の例 2.	296
VBREF	297
WSCLEAR	297
XREF	297
YEARWINDOW	299
ZWB	299

第 15 章 コンパイラー指示ステートメント 301

第 16 章 リンカー・オプション 307

/?	308
/ALIGNADDR	309
/ALIGNFILE	309
/BASE	309
/CODE	310
/DATA	311
/DBGPACK、/NODBGPACK	311
/DEBUG、/NODEBUG	312
/DEFAULTLIBRARYSEARCH、 /NODEFAULTLIBRARYSEARCH	312
/DLL	313
/ENTRY	313
/EXECUTABLE	313
/EXTDICTIONARY、/NOEXTDICTIONARY	314
/FIXED、/NOFIXED	315
/FORCE、/NOFORCE	315
/HEAP	315
/HELP	316
/INCLUDE	316
/INFORMATION、/NOINFORMATION	316
/LINENUMBERS、/NOLINENUMBERS	317
/LOGO、/NOLOGO	317
/MAP、/NOMAP	318
/OUT	318
/PMTYPE	319
/SECTION	320
/SEGMENTS	320
/STACK	321
/STUB	322
/SUBSYSTEM	322
/VERBOSE、/NOVERBOSE	322
/VERSION	323

第 17 章 ランタイム・オプション 325

CHECK	325
DEBUG	326

ERRCOUNT	326
FILESYS	327
TRAP	327
UPSI	328

第 18 章 デバッグ 329

ソース言語によるデバッグ	329
プログラム・ロジックのトレース	330
入出力エラーの検出および処理	330
データの妥当性検査	331
初期化されていないデータの検出	331
プロシージャーに関する情報の生成	332
例: USE FOR DEBUGGING	333
コンパイラー・オプションを使用したデバッグ	333
コーディング・エラーの検出	334
行シーケンス問題の検出	335
有効範囲の検査	335
診断するエラーのレベルの選択	336
例: 組み込みメッセージ	337
プログラム・エンティティー定義および参照の検 出	338
データ項目のリスト	339
デバッガーの使用	340
リストの入手	340
例: 短縮リスト	342
例: SOURCE および NUMBER 出力	343
例: MAP 出力	344
例: 組み込みマップ要約	345
MAP 出力で使用される用語およびシンボル	345
例: ネストされたプログラム・マップ	347
例: XREF 出力 - データ名相互参照	347
例: XREF 出力 - プログラム名相互参照	348
例: 組み込み相互参照	348
例: VBREF コンパイラー出力	349
ユーザー出口のデバッグ	350
アセンブラー・ルーチンのデバッグ	351

第 12 章 プログラムのコンパイル、リンク、実行

続くセクションでは、環境変数の設定、コンパイル、リンク、NMAKE を使用したプロジェクトの更新、実行、エラーの訂正、および DLL の再配布の方法について説明します。

COBOL for Windows コンパイラーおよびランタイム環境では、他の IBM COBOL 製品と同様に、COBOL 85 標準機能の上位サブセットをサポートしています。IBM COBOL 言語はどのプラットフォームでもほぼ同じですが、Enterprise COBOL for z/OS と COBOL for Windows には多少の違いがあります。

関連タスク

『環境変数の設定』

222 ページの『コンパイル済みプログラム』

225 ページの『ソース・プログラムのエラーの訂正』

231 ページの『プログラムのリンク』

237 ページの『リンク内のエラーの訂正』

238 ページの『NMAKE を使用したプロジェクトの更新』

240 ページの『プログラムの実行』

241 ページの『COBOL for Windows DLL の再配布』

関連参照

623 ページの『付録 A. ホスト COBOL との違いの要約』

環境変数の設定

プログラムに必要な値を設定するには、環境変数を使用します。環境変数の値を指定するには、SET コマンドを使用するか、または「システムのプロパティ」ウィンドウを使用します。環境変数を設定しなかった場合は、デフォルト値が適用されるか、またはその変数は定義されません。

環境変数 は、変化する可能性のあるユーザー環境またはプログラム環境の一部分を定義します。例えば、プログラムが別のプログラムによって動的に呼び出されたときに、COBOL ランタイムでそのプログラムを検索できる場所を定義するには、COBPATH 環境変数を使用します。環境変数は、コンパイラーおよびランタイム・ライブラリーの両方で使用されます。

一般に、次の 2 つの方法のいずれかで、環境変数を設定します。

- SET コマンドを使用する。変数の値は、SET コマンドを発行したウィンドウから実行するプログラムにのみ適用されます。SET コマンドは、コマンド・プロンプトまたはコマンド・ファイル (.cmd または .bat) で使用します。
- 「システムのプロパティ」を使用する。「ユーザー変数」ウィンドウで追加または変更した環境変数は、現行の Windows ユーザー ID に対して有効になります。「システム変数」ウィンドウで追加または変更した環境変数は、システムに対して有効になります。変更した環境変数の値をプロセスに使用できるようにするには、新規のコマンド・ウィンドウをオープンする必要があります。

一部の環境変数 (COBPATH や NLSPATH など) は、ファイル検索を行うディレクトリーを定義します。複数のディレクトリー・パスがリストされる場合は、各パスがセミコロンで区切られます。例えば、ウィンドウで次のコマンドを発行すると、そのウィンドウからプログラムを実行するときに 2 つのディレクトリーを組み込むための COBPATH 環境変数が設定されます。

```
SET COBPATH=d:¥cobdev¥d11;d:¥dev¥d11
```

環境変数で定義されたパスは、最初のパスから最後のパスへの順番に評価されます。環境変数のパス内で同じ名前のファイルが複数定義されている場合は、最初に見つかったファイルのコピーが使用されます。

SET コマンドを使用して環境変数に割り当てる値には、他の環境変数または変数自体を含めることができます。例えば、COBPATH がすでに設定されていると想定した場合は、次のコマンドを発行することで COBPATH の値に直接追加することができます。

```
SET COBPATH=%COBPATH%;d:¥myown¥d11;
```

関連タスク

『COBOL for Windows の環境変数の設定』

関連参照

215 ページの『コンパイラー環境変数』

217 ページの『リンカー環境変数』

217 ページの『ランタイム環境変数』

COBOL for Windows の環境変数の設定

WebSphere Developer for System z には、コマンド・ファイル setenvWDZ70.bat が用意されています。これを使用すると、COBOL for Windows コンパイラーおよびランタイム・ライブラリーにアクセスするための環境変数を設定することができます。

現在のコマンド・ウィンドウで COBOL for Windows 環境をセットアップするには、次のコマンドを出す方法があります。このコマンドは、ファイルへの完全修飾パスを使用します。

```
"%WDZ70INSTDIR%¥bin¥setenvWDZ70"
```

また、最初にコマンド・ファイルにアクセスするための PATH 環境変数を設定し、次にファイル名のみを使用してコマンド・ファイルを呼び出す方法もあります。

```
SET PATH=%PATH%;%WDZ70INSTDIR%¥bin
setenvWDZ70
```

開いているコマンド・ウィンドウから、ファイルへのパスを指定することなく、setenvWDZ70 コマンドを呼び出せるようにしたい場合は、「システムのプロパティ」ウィンドウで次のストリングを PATH システム環境変数に追加してください。

```
;%WDZ70INSTDIR%¥bin
```

コマンド・ファイルを呼び出すことで COBOL の環境変数を設定する代わりに、「スタート」->「すべてのプログラム」-> *install_name* -> 「IBM WebSphere Developer for System z」-> 「ローカル・コンパイラーのコマンド環境 (Command Environment for Local Compilers)」をクリックして COBOL 環境を

起動することができます。 *install_name* はインストール時に割り当てた名前 (デフォルトでは **IBM Rational Application Developer**) です。

コンパイラ環境変数

COBOL コンパイラでは、いくつかの環境変数を使用します。

COBCPYEXT

COPYname ステートメントにファイル拡張子が指定されていない場合は、コピーブックの検索に使用するファイル拡張子を指定します。 3 文字のファイル拡張子を 1 つ以上指定します。拡張子の前のピリオドはなくても構いません。複数のファイル拡張子を指定する場合は、スペースまたはコンマで区切ります。

COBCPYEXT が定義されていない場合は .CPY、.CBL、.COB (またはその小文字、あるいはその大/小文字混合のもの) の各拡張子が検索されます。

COBLSTDIR

コンパイラ・リスト・ファイルの書き込み先ディレクトリーを指定します。有効な任意のドライブおよびパスを指定することができます。絶対パスを指定するには、先頭にドライブ名または円記号 (¥) を指定します。それ以外の場合は、現行ディレクトリーからの相対パスになります。末尾の円記号 (¥) はオプションです。

COBLSTDIR が定義されていない場合は、コンパイラ・リストが現行ディレクトリーに書き込まれます。

COBOPT

コンパイラ・オプションを指定します。複数のコンパイラ・オプションを指定するには、各オブジェクトをスペースまたはコンマで区切ります。以下に、その例を示します。

```
SET COBOPT=TRUNC(OPT) TERMINAL
```

個々のコンパイラ・オプションにデフォルト値が適用されます。

COBPATH

EXIT コンパイラ・オプションで識別された、ユーザー定義のコンパイラ・エグジット・プログラムを探すためのパスを指定します。

DB2DBDFT

組み込み SQL ステートメントでプログラムをコンパイルするためのデータベースを指定します。

DB2PATH

DB2 がインストールされているディレクトリーを指定します。

LANG 詳しくは、下のランタイム環境変数についての『関連参照』を参照してください。

library-name

ユーザー定義語として *library-name* を指定した場合は、名前が環境変数として使用され、この環境変数の値がコピーブックの位置を指定するパスに使用されます。以下に、その例を示します。

```
SET MYLIB=C:¥CPYFILES¥COBCOPY
```

ライブラリー名を指定しない場合は、コンパイラーが次の順序でライブラリー・パスを検索します。

1. 現行ディレクトリー
2. -Ixxx オプションで指定されたパス (設定されている場合)
3. SYSLIB 環境変数で指定されたパス

ファイルが検出されると、検索は終了します。詳細については、コンパイラー指示ステートメントに関する下記の関連参照で COPY ステートメントのドキュメンテーションを参照してください。

NLSPATH

詳しくは、下のランタイム環境変数についての『関連参照』を参照してください。

SYSLIB

ライブラリー名による修飾なしのテキスト名で、COBOL の COPY ステートメントに使用するパスを指定します。また、SQL INCLUDE ステートメントに使用するパスも指定します。

TEMPMEM

コンパイラーの作業ファイルが、メモリー・ファイル内かディスク上のどちらに格納されるかを指定します。メモリー・ファイル (TEMPMEM=ON) を使用すると、コンパイル時間を大幅に短縮することができます。

ソース・プログラムが非常に大きい場合などには、メモリー不足エラーが発生する可能性があります。このような場合は、TEMPMEM を NULL に設定します。

text-name

ユーザー定義語として *text-name* を指定した場合は、環境変数の値がファイル名として使用され、またコピーブックのパス名として使用される場合があります。

複数のパス名を指定するには、各パス名をセミコロン (;) で区切ります。

詳細については、コンパイラー指示ステートメントに関する下記の関連参照で COPY ステートメントのドキュメンテーションを参照してください。

関連概念

355 ページの『DB2 コプロセッサ』

関連タスク

357 ページの『DB2 コプロセッサを用いた SQL INCLUDE の使用』

関連参照

217 ページの『ランタイム環境変数』

228 ページの『cob2 オプション』

249 ページの『第 14 章 コンパイラー・オプション』

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

リンカー環境変数

リンカーは LIB 環境変数を使用します。これは、オブジェクト (.OBJ)、ライブラリー (.LIB)、またはモジュール定義 (.DEF) ファイルを検索するディレクトリーを指定します。

関連タスク

231 ページの『プログラムのリンク』

関連参照

235 ページの『リンカーの検索規則』

ランタイム環境変数

COBOL ランタイム・ライブラリーでは、次の環境変数を使用します。大/小文字にはこだわりません。

assignment-name

ASSIGN 文節で指定する COBOL ファイルです。この *assignment-name* の用法は、COBOL ワードの規則に従います。以下に、その例を示します。

```
SET OUTPUTFILE=d:¥january¥results.car
```

すべての *assignment-name* を設定する必要があります。

環境変数として設定されていないユーザー定義語に対して割り当てを行う場合は、ユーザー定義語のリテラル名を持つファイル (下記の例では OUTPUTFILE) に対して割り当てが行われます。割り当てが有効であれば、このファイルが現行ディレクトリーに書き込まれます。

assignment-name を設定したら、この環境変数を COBOL ユーザー定義語として ASSIGN 文節で 사용할 ことができます。

前の SET ステートメントに基づいて、COBOL ソース・プログラムには次の SELECT および ASSIGN 文節が含まれます。

```
SELECT CARPOOL ASSIGN TO OUTPUTFILE
```

OUTPUTFILE は環境変数で定義されているため、上記のステートメントにより、ファイル d:¥january¥results.car ヘデータが書き込まれます。

ASSIGN を使用して、標準言語ファイル・システム (STL)、レコード順次区切りファイル・システム (RSD)、Btrieve ファイル・システムなどの代替ファイル・システムに格納されるファイルを指定することができます。

CLASSPATH

オブジェクト指向アプリケーションに必要な Java™ .class ファイルのディレクトリー・パスを指定します。

COBVMINIOPTIONS

COBOL が JVM を初期化するときに使用される Java 仮想マシン (JVM) オプションを指定します。

COBMSGGS

ランタイム・エラー・メッセージの書き込み先ファイルの名前を指定します。

ランタイム・エラー・メッセージをファイルに取り込むには、SET コマンドを使用して COBMSGS をファイル名に設定します。アプリケーションを強制終了させるランタイム・エラーがプログラム内で発生した場合は、COBMSGS の値として設定されたファイルに、強制終了の理由を示すエラー・メッセージが入ります。

COBMSGS が設定されていない場合は、エラー・メッセージが端末に出力されます。

COBPATH

COBOL ランタイムが .DLL (ダイナミック・リンク・ライブラリー) ファイルなどの動的にアクセスされるプログラムを探すためのディレクトリー・パスを指定します。

動的ロードが必要なプログラムを実行するには、この変数を設定する必要があります。以下に、その例を示します。

```
SET COBPATH=C:\pgmpath\pgmdl1
```

COBRTOPT

COBOL ランタイム・オプションを指定します。

ランタイム・オプションが複数ある場合は、コンマまたはコロンの区切りをします。サブオプションの区切り文字には、括弧または等号 (=) を使用します。オプションは大/小文字の区別をしません。例えば、次の 2 つのコマンドは同じです。

```
SET COBRTOPT=TRAP=ON,errcount  
SET COBRTOPT=trap(on):ERRCOUNT
```

各ランタイム・オプションにはデフォルトが適用されます。詳細については、ランタイム・オプションに関する下記の関連参照をご覧ください。

EBCDIC_CODEPAGE

CHAR(EBCDIC) または CHAR(S390) コンパイラー・オプションを使用してコンパイルされるプログラムが処理する EBCDIC データに適用できる EBCDIC コード・ページを指定します。

EBCDIC コード・ページを設定するには、次のコマンドを発行します。この場合、codepage には使用するコード・ページの名前が入ります。

```
SET EBCDIC_CODEPAGE=codepage
```

EBCDIC_CODEPAGE が設定されていない場合は、サポートされるロケールとコード・ページに関する下記の関連参照に示されているように、現在のロケールに基づいてデフォルトの EBCDIC コード・ページが選択されます。CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションが有効で、有効なロケールに対して複数の EBCDIC コード・ページを適用できる場合は、ロケールのデフォルト EBCDIC コード・ページが受け入れ可能でなければ、EBCDIC_CODEPAGE 環境変数を設定する必要があります。

LANG

ロケールを指定します (環境変数を使用してロケールの指定に関する関連タスクを参照)。後述のように、LANG は NLSPATH 環境変数の値にも影響を与えます。

例えば、次のコマンドは言語ロケール名を米国英語に設定します。

SET LANG=en_US

LC_ALL

ロケールを指定します。LC_ALL を使用するロケール設定は、LANG またはその他の LC_xx 環境変数を使用する設定よりも優先されます (環境変数を使用したロケールの指定に関する関連タスクを参照)。

LC_COLLATE

ロケールの照合動作を指定します。LC_ALL が指定されている場合は、この設定がオーバーライドされます。

LC_CTYPE

ロケールのコード・ページを指定します。LC_ALL が指定されている場合は、この設定がオーバーライドされます。

LC_MESSAGES

ロケールのメッセージの言語を指定します。LC_ALL が指定されている場合は、この設定がオーバーライドされます。

LC_TIME

日時情報の形式に使用するロケールを決定します。LC_ALL が指定されている場合は、この設定がオーバーライドされます。

LOCPATH

ロケール情報データベース用の検索パスを指定します。パスは、ディレクトリー名を示すセミコロン区切りのリストです。

LOCPATH は、英数字データ項目のロケール・ベースの比較など、ロケールを参照するすべての操作に使用されます。

NLSPATH

メッセージ・カタログおよびヘルプ・ファイルの絶対パス名を指定します。NLSPATH の設定は必須です。インストール時には初期値が設定されます。

NLSPATH を設定する際には、値を置き換えるのではなく NLSPATH に値を追加してください。この環境変数は、他のプログラムが使用する可能性があります。以下に、その例を示します。

```
SET NLSPATH=C:¥cobolpath¥MESSAGES¥%L¥%N;%NLSPATH%
```

%L および %N は大文字でなければなりません。%L には、LANG 環境変数で指定された値が代入されます。%N には、COBOL で使用されるメッセージ・カタログ名が代入されます。

この製品には、次の言語によるメッセージが組み込まれています。

cs_CZ チェコ語

de_DE ドイツ語

en_US 英語

es_ES スペイン語

fr_FR フランス語

hu_HU

ハンガリー語

ja_JP 日本語

ko_KR

韓国語

pl_PL ポーランド語

pt_BR ブラジル・ポルトガル語

ru_RU ロシア語

zh_CN 中国語 (簡体字) (中国本土)

zh_TW

中国語 (繁体字) (台湾)

メッセージの言語とロケール設定の言語は別に指定することができます。例えば、環境変数 **LANG** を **en_US** に設定し、環境変数 **LC_ALL** を **ja_JP.IBM-943** に設定することが可能です。この例では、COBOL コンパイラー・メッセージまたはランタイム・メッセージはすべて英語で処理され、プログラム内のネイティブ ASCII (DISPLAY または DISPLAY-1) データはコード・ページ IBM-943 (ASCII 日本語コード・ページ) のエンコードとして処理されます。

コンパイラーは、**NLSPATH** および **LANG** 環境変数の値の組み合わせを使用して、メッセージ・カタログにアクセスします。**NLSPATH** が正しく設定されているが、**LANG** が上記のロケール値のいずれかに設定されていない場合は、警告メッセージが生成され、コンパイラーは **en_US** メッセージ・カタログをデフォルトに設定します。**NLSPATH** 値が無効の場合、終了エラー・メッセージが生成されます。

ランタイム・ライブラリーも **NLSPATH** を使用してメッセージ・カタログにアクセスします。**NLSPATH** を正しく設定しないと、ランタイム・メッセージが短縮形で戻されます。

PATH

実行可能プログラムのディレクトリー・パスを指定します。

SYSIN, SYSIPT, SYSOUT, SYSLIST, SYSLST, CONSOLE, SYSPUNCH, SYSPCH

これらの COBOL 環境名は、ACCEPT および DISPLAY ステートメントで使われる簡略名に対応する環境変数名として使用されます。これらは、既存のディレクトリー名ではなくファイルに対して設定します。

環境変数を設定しない場合、デフォルトでは、**SYSIN** および **SYSIPT** が論理入力装置 (キーボード) に割り当てられます。**SYSOUT**、**SYSLIST**、**SYSLST**、**CONSOLE** は、システムの論理出力装置 (画面) に割り当てられます。**SYSPUNCH** および **SYSPCH** には、デフォルトでは値が割り当てられません。これらは明示的に定義しない限り無効です。

例えば、次のコマンドは **CONSOLE** を定義します。

```
SET CONSOLE=c:%mypath%terminal.txt
```

CONSOLE は、次のソース・コードとともに使用される場合があります。

```
SPECIAL-NAMES.  
CONSOLE IS terminal  
.  
.  
.  
DISPLAY 'Hello World' UPON terminal
```

TMP SORT および MERGE 関数の一時作業ファイル (必要な場合) の場所を指定します。デフォルトは不定で、ソート・ユーティリティー・インストール・プログラムによって設定されます。

以下に、その例を示します。

```
SET TMP=c:%shared%temp
```

TZ ロケールによって使用される時間帯情報を記述します。TZ の形式は次のとおりです。

```
SET TZ=SSS[+|-]nDDD[,sm,sw,sd,st,em,ew,ed,et,shift]
```

デフォルトは、現行のロケールによって異なります。

TZ がない場合は、デフォルトのロケール値として EST5EDT が使用されます。標準時間帯しか指定しない場合は、*n* (GMT からの時間差) のデフォルト値が 5 ではなく 0 になります。

sm、*sw*、*sd*、*st*、*em*、*ew*、*ed*、*et*、*shift* のうち 1 つでも値を指定する場合は、これらすべての値を指定する必要があります。これらの値のうち 1 つでも無効な場合は、ステートメント全体が無効と見なされ、時間帯情報は変更されません。

以下に、その例を示します。

```
SET TZ=CST6CDT
```

上記のステートメントは、標準時間帯を CST、夏時間調整を CDT、CST と UTC の時間差を 6 時間に設定します。夏時間調整の開始値と終了値は設定されません。

これ以外に考えられる値としては、Pacific United States を表す PST8PDT や、Mountain United States を表す MST7MDT があります。

関連タスク

199 ページの『環境変数を使用したロケールの指定』

121 ページの『ファイルの識別』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

『TZ 環境パラメーター変数』

255 ページの『CHAR』

325 ページの『第 17 章 ランタイム・オプション』

TZ 環境パラメーター変数

TZ 変数値の定義は次のとおりです。

表 24. TZ 環境パラメーター変数

可変	説明	デフォルト値
SSS	標準時間帯 ID。アルファベットで始まる 3 文字でなければなりません が、スペースが含まれていても構いません。	EST
<i>n</i>	標準時間帯と、協定世界時 (UTC) (以前はグリニッジ標準時 (GMT)) との時間差。正数はグリニッジ子午線より西の時間帯を示します。負数 はグリニッジ子午線より東の時間帯を示します。	5
DDD	夏時間調整 (DST) 時間帯 ID。アルファベットで始まる 3 文字でなけ ればなりませんが、スペースが含まれていても構いません。	EDT
<i>sm</i>	DST の開始月 (1 から 12)	4
<i>sw</i>	DST の開始週 (-4 から 4)	1
<i>sd</i>	DST の開始日 (<i>sw</i> が 0 以外の場合は 0 から 6、 <i>sw</i> が 0 の場合は 1 から 31)	0
<i>st</i>	DST の開始時刻 (秒単位)	3600
<i>em</i>	DST の終了月 (1 から 12)	10
<i>ew</i>	DST の終了週 (-4 から 4)	-1
<i>ed</i>	DST の終了日 (<i>ew</i> が 0 以外の場合は 0 から 6、 <i>ew</i> が 0 の場合は 1 から 31)	0
<i>et</i>	DST の終了時刻 (秒単位)	7200
<i>shift</i>	時間変化量 (秒単位)	3600

コンパイル済みプログラム

プログラムのコンパイルに使用するオプションは、次の方法で指定することができます。

以下のことが可能です。

- コマンド行または Windows の「システムのプロパティ」ウィンドウで COBOPT 環境変数を設定する。
- バッチ・ファイルまたはコマンド行で、コンパイラ環境変数および cob2 オプションを指定する。
- PROCESS (CBL) または *CONTROL ステートメントを使用する。PROCESS を使用して指定するオプションは他のオプション指定をオーバーライドします。

関連タスク

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

224 ページの『PROCESS (CBL) ステートメントによるコンパイラ・オプションの指定』

495 ページの『第 26 章 プラットフォーム間でのアプリケーションの移植』

関連参照

215 ページの『コンパイラ環境変数』

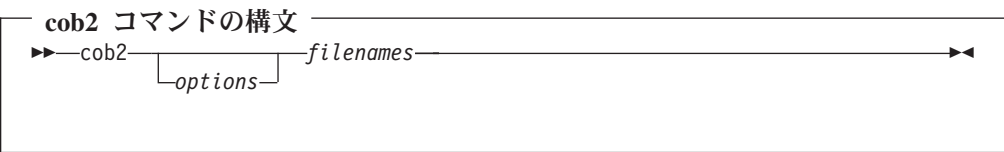
228 ページの『cob2 オプション』

249 ページの『第 14 章 コンパイラ・オプション』

623 ページの『付録 A. ホスト COBOL との違いの要約』

コマンド行からのコンパイル

コマンド `cob2` を発行して、コマンド行から COBOL プログラムをコンパイルします。(cob2 コマンドはリンカーも呼び出します)。



複数のファイルをコンパイルするには、コマンド行の任意の位置でファイル名を指定します。オプションおよびファイル名を区切るには、スペースを使用します。例えば、次の 2 つのコマンドは同じです。

```
cob2 -g filea.cbl fileb.cbl -v -qflag(w)
cob2 filea.cbl -qflag(w) -g -v fileb.cbl
```

`cob2` は、コマンド行で任意の順番でコンパイラーとリンカーを受け入れます。指定したオプションは、コマンド行のすべてのファイルに適用されます。`cob2` とそのオプションを大文字にする必要はありません。

`cob2` は特定の拡張子 (`.cbl` など) を持つファイルをコンパイラーに渡し、それ以外のファイルをすべてリンカーに渡します。

コンパイラー入出力のデフォルトの位置は、現行ディレクトリーです。

『例: コンパイルでの `cob2` の使用』

関連タスク

231 ページの『プログラムのリンク』

関連参照

232 ページの『`cob2` でサポートされるファイル名および拡張子』

228 ページの『`cob2` オプション』

249 ページの『第 14 章 コンパイラー・オプション』

例: コンパイルでの `cob2` の使用

次の例に、さまざまな `cob2` 指定で生成される出力を示します。

表 25. `cob2` コマンドからの出力

コンパイル対象	入力	生成されるファイル
alpha.cbl	<code>cob2 -c alpha.cbl</code>	alpha.obj および alpha.lst
alpha.cbl および beta.cbl	<code>cob2 -c alpha.cbl c:%mydir%beta.cbl</code>	alpha.obj および beta.obj、alpha.lst および beta.lst (現行ディレクトリー内)
alpha.cbl (LIST および ADATA オプションを使用)	<code>cob2 -qlist,adata alpha.cbl</code>	alpha.asm、alpha.obj、alpha.lst、alpha.adt、alpha.exe

関連タスク

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

関連参照

251 ページの『ADATA』

275 ページの『LIST』

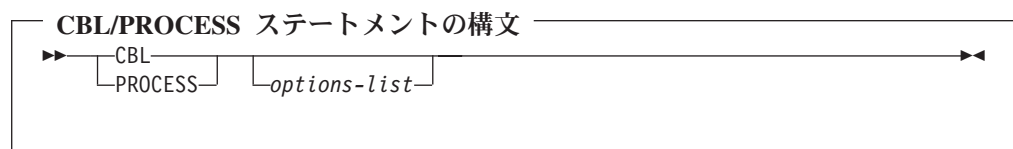
バッチ・ファイルまたはコマンド・ファイルを使用したコンパイル

バッチ・ファイルまたはコマンド・ファイルを使用して、cob2 タスクを自動化することができます。

ただし、無効な構文が cob2 コマンドに渡されるのを防ぐため、オプション・ストリングを引用符 (") で囲む場合を除き、ストリング内にはブランクを使用しないでください。

PROCESS (CBL) ステートメントによるコンパイラー・オプションの指定

COBOL プログラムの PROCESS ステートメントにコンパイラー・オプションをコーディングすることができます。これは、IDENTIFICATION DIVISION ヘッダーの前、かつコメント行またはコンパイラー指示ステートメントの前にコーディングする必要があります。



シーケンス・フィールドをコーディングしない場合、PROCESS ステートメントは 1 から 66 桁目の間で開始できます。シーケンス・フィールドとしては 1 から 6 桁目を使用できます。シーケンス・フィールドが使用される場合には、そこに 6 文字が含まれていなければならない、最初の文字は数字でなければなりません。シーケンス・フィールドを付けて使用する場合には、PROCESS は 8 から 70 桁目の間で開始することができます。

CBL を PROCESS の同義語として使用することができます。CBL は 1 から 70 桁目の間で開始することができます。シーケンス・フィールドを付けて使用する場合には、CBL は 8 から 70 桁目の間で開始することができます。

PROCESS と *options-list* の最初のオプションとは、1 つ以上のブランクで区切らなければならない。オプションはコンマまたはブランクで区切ります。個々のオプションとそのサブオプションの間にスペースを入れてはなりません。

複数の PROCESS ステートメントを使用することができます。その場合は、間にステートメントを入れずに、PROCESS ステートメントを続けて指定する必要があります。複数の PROCESS ステートメントにわたってオプションを継続することはできません。

プログラミングの編成で、COBOL コンパイラーのデフォルト・オプション・モジュールを使用して、PROCESS ステートメントを使用することを禁止することができます。編成で許可されていない PROCESS ステートメントが COBOL プログラムで見つかった場合、COBOL コンパイラーはエラー診断を生成します。

関連参照

CBL (PROCESS) ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ソース・プログラムのエラーの訂正

ソース・コード・エラーに関するメッセージは、そのエラーが発生した場所 (LINEID) を示します。メッセージのテキストは何が問題なのかを知らせます。この情報を使用して、ソース・プログラムを訂正することができます。

エラーを訂正するとしても、すべてのエラーを修正する必要はありません。警告レベルまたは通知レベルのメッセージは、プログラムの中に残っていても支障はなく、それらのエラーを除去するために、再コーディングやコンパイルを行う必要はありません。ただし、重大レベルやエラー・レベルのエラーは、プログラム障害の可能性が大きいため、訂正しなければなりません。

低い方の 4 つのレベルのエラーとは対照的に、回復不能 (U レベル) エラーは、ソース・プログラムの間違いの結果として生じたものではない場合があります。コンパイラー自体あるいはオペレーティング・システム中の欠陥から生じる可能性があります。この場合は、コンパイラーが強制的に早期終了させられ、完全なオブジェクト・コードまたはリストを作成しないため、問題を解決するしかありません。多くの S レベルの構文エラーを持つプログラムに関するメッセージが発生した場合には、これらのエラーを訂正し、プログラムを再度コンパイルしてください。また、コンパイル・ジョブに変更を加えることによって、ジョブ・セットアップの問題 (データ・セット定義の欠落やコンパイラー処理用のストレージの不足などの問題) を解決することが可能です。コンパイル・ジョブ・セットアップが正しく、S レベルの構文エラーを訂正した場合は、IBM に連絡して他の U レベル・エラーの調査を要求してください。

ソース・プログラムのエラーを訂正した後で、プログラムを再コンパイルしてください。この 2 回目のコンパイルが成功した場合は、リンク・エディット・ステップに進んでください。コンパイラーによってまだ問題が検出される場合は、通知メッセージだけが戻されるようになるまで、上記の手順を繰り返さなければなりません。

関連タスク

226 ページの『コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成』

231 ページの『プログラムのリンク』

関連参照

226 ページの『コンパイラー検出エラーに関するメッセージおよびリスト』

コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード

コンパイラーが検出できるエラーは、重大度に応じて 5 つのカテゴリーに分けられます。

表 26. コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード

メッセージのレベル	戻りコード	目的
通知 (I)	0	通知にすぎません。アクションを取る必要はありません。プログラムは正しく実行されます。
警告 (W)	4	エラーの可能性あることを示します。プログラムはおそらく、書かれたとおりに正しく実行されます。
エラー (E)	8	明確にエラーである条件があることを意味します。コンパイラーはエラーの訂正を試みましたが、プログラムの実行結果は予期したものではない可能性があります。エラーを訂正しなければなりません。
重大 (S)	12	重大なエラーを示す条件があることを意味します。コンパイラーはエラーを訂正できませんでした。プログラムは正しく実行されず、また、実行を試みてはなりません。オブジェクト・コードは作成されない可能性があります。
回復不能 (U)	16	コンパイルが終了するほどの重大なエラー条件があることを示します。

コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成

コンパイラー診断メッセージとその説明の完全なリストを生成することができます。これを行うには、プログラム名 `ERRMSG` を持つプログラムをコンパイルします。

次のように、PROGRAM-ID 段落だけをコーディングすることができます。プログラムの残りの部分は省略します。

```
Identification Division.  
Program-ID. ErrMsg.
```

関連参照

『コンパイラー検出エラーに関するメッセージおよびリスト』
227 ページの『コンパイル・エラー・メッセージの形式』

コンパイラー検出エラーに関するメッセージおよびリスト

コンパイラーはソース・プログラムを処理するときに、COBOL 言語を調べてエラーがないかどうかを検査します。エラーが見つかるたびに、コンパイラーはメッセージを出します。これらのメッセージは、コンパイラー・リスト内では (FLAG オプションに従って) 照合されます。

コンパイラー・リスト・ファイルはコンパイラー・ソース・ファイルと同じ名前ですが、拡張子 `.LST` が付きます。例えば、`myfile.cbl` のリスト・ファイルは `myfile.lst` です。リスト・ファイルは、`cob2` コマンドの発行元のディレクトリーに書き込まれます。

リスト内の各メッセージは、以下の情報を提供します。

- エラーの性質
- エラーを検出したコンパイラー・フェーズ
- エラーの重大度レベル

可能な限り、メッセージはエラーを訂正するための具体的な指示を与えます。

コンパイラー・オプション、CBL および PROCESS ステートメント、および BASIS、COPY、または REPLACE ステートメントの処理中に検出されたエラーに関するメッセージは、リストの上部近くに表示されます。

プログラム (行番号で順序付けされた) の中で検出されたコンパイル・エラーに関するメッセージは、プログラムごとにリストの終わり近くに表示されます。

コンパイル中に検出されたすべてのエラーの要約は、リストの下部に表示されます。

関連タスク

225 ページの『ソース・プログラムのエラーの訂正』

226 ページの『コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成』

関連参照

『コンパイル・エラー・メッセージの形式』

225 ページの『コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード』

271 ページの『FLAG』

コンパイル・エラー・メッセージの形式

コンパイラーが出すメッセージにはそれぞれ、ソース行番号、メッセージ ID、およびメッセージ・テキストがあります。

メッセージはそれぞれ、次のような形式になっています。

nnnnnn IGYppxxxx-l message-text

nnnnnn

コンパイラーが処理している最後の行のソース・ステートメントの番号。ソース・ステートメント番号は、プログラムのソース印刷出力にリストされます。コンパイル時に NUMBER オプションを指定すると、それらは元のソース・プログラム番号になります。NONNUMBER を指定すると、番号はコンパイラーによって生成された番号になります。

IGY このメッセージが COBOL コンパイラーから出されたものであることを識別する接頭部。

pp コンパイラーのどのフェーズまたはサブフェーズでエラーが発見されたかを識別する 2 文字。アプリケーション・プログラマーはこの情報を無視することができます。コンパイラー・エラーの疑いがあると診断した場合は、IBM にサポートを依頼してください。

xxxx エラー・メッセージを識別する 4 桁の数字。

l エラーの重大度レベルを示す文字 (I、W、E、S、または U)。

message-text

メッセージ・テキスト。エラー・メッセージの場合は、エラーの原因となった条件の簡単な説明。

ヒント: FLAG オプションを使用してメッセージを抑止した場合は、プログラム内にさらにエラーがある可能性があることを認識してください。

関連参照

225 ページの『コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード』

271 ページの『FLAG』

cob2 オプション

cob2 のオプションを指定するには、先頭にハイフン (-) を付けます。cob2 を使用してリンカーにオプションを渡す場合以外は、スラッシュ (/) をオプションに使用しないでください。cob2 コマンドで指定するオプションのうち、以下にリストされていないものはリンカーに渡されます。

コンパイルに適用されるオプション

-c プログラムをコンパイルしますが、リンクしません。

-comprc_ok=*n*

コンパイラからの戻りコードに基づいて動作を制御します。戻りコードが *n* 以下であれば、cob2 は継続してリンク・ステップに進むか、またはコンパイルのみの場合には、ゼロの戻りコードで終了します。コンパイラで生成された戻りコードが *n* より大きい場合は、cob2 は同じ戻りコードで終了します。

デフォルトは -comprc_ok=4 です。

-dll[:*xxx*]

cob2 を使用してリンカー・ファイル (.LIB および .EXP) を生成し、*xxx* という名前の DLL を作成します。*xxx* を省略した場合は、cob2 コマンドで指定されたオブジェクト・ファイル (.OBJ) または COBOL ソース・ファイル (通常は .CBL) の名前が、DLL (.LIB および .EXP ファイルも同様) の名前になります。

-host ホスト COBOL データ表現と言語セマンティクスに対してコンパイラ・オプションを設定します。

- BINARY(S390)
- CHAR(EBCDIC)
- COLLSEQ(EBCDIC)
- NCOLLSEQ(BIN)
- FLOAT(S390)

また、以下に参照される関連タスクで説明されているように、-host オプションはコマンド行引数の形式にも影響を与えます。

-l*xxx* *library-name* が指定されていない場合に、コピーブックの検索に使用するディレクトリへのパス *xxx* を追加します。(このオプションは、小文字の *l* ではなく大文字の *I* です。)

各 -I オプションに使用できるパスは 1 つだけです。複数のパスを追加するには、-I オプションを必要な数だけ使用してください。I と *xxx* の間にスペースを入れないでください。

COPY ステートメントを使用する場合には、LIB コンパイラ・オプションを必ず有効にしなければなりません。

-qxxx コンパイラーにオプションを渡します。xxx には任意のコンパイラー・オプションが入ります。-q と xxx の間にスペースを入れないでください。

コンパイラー・オプションまたはサブオプションに括弧が含まれている場合や、一連のオプションが指定されている場合には、各オプションを引用符で囲みます。

複数のオプションを指定する場合は、各オプションをブランクまたはコンマで区切ります。例えば、次の 2 つのオプション・ストリングは同じです。

```
-qoptiona,optionb  
-q"optiona optionb"
```

リンクに適用されるオプション

-b“xxx”

ストリング xxx をパラメーターとしてリンカーに渡します。xxx は、スペース区切りのリンカー・オプション・リストです。また、cob2 のデフォルト・パラメーターも渡されます。-b の直後にスペースを使用しないでください。

別の方法として、リンカー・オプションを個々の cob2 オプションとして直接指定することも可能です。例えば、/DE オプションをリンカーに渡すには、次のコマンドを使用します。

```
cob2 /DE myprog.cbl
```

-cmain

メインルーチンを含む C または PL/I オブジェクト・ファイルを、実行可能ファイル (.EXE) 内のメインの入り口点にします。C の場合、メインルーチンは関数名 main() で識別されます。PL/I の場合、メインルーチンは PROC OPTIONS(MAIN) ステートメントで識別されます。

リンクする C または PL/I オブジェクト・ファイルに、1 つ以上の COBOL オブジェクト・ファイルを持つメインルーチンが含まれている場合は、-cmain を使用して、C または PL/I ルーチンを実行可能ファイル内のメインの入り口点として指定する必要があります。C または PL/I メインプログラムを含む実行可能ファイル内のメインの入り口点として、COBOL プログラムを指定することはできません。これを行うと、予測不能な動作が発生し、診断は行われません。

例えば、次の 2 つのコマンドは同じです。

```
cob2 -cmain myCmain.obj myCOBOL.obj  
cob2 -cmain myCOBOL.obj myCmain.obj -main:myCmain
```

どちらのコマンドも、実行可能ファイル myCmain.exe を生成します。メインの入り口点は、myCmain.obj オブジェクト・ファイルに含まれる C main() 関数です。

このオプションは、ランタイム・コマンド行引数をホストのデータ形式 (つまり、文字データの場合は EBCDIC、2 進数データの場合はビッグ・エンディアン) で示します。

-imp:xxx.lib

xxx.lib がインポート・ライブラリーであり、標準ライブラリーではないことを示します。この値は、生成済み ILINK コマンドで渡され、生成済み ILIB コマンドでは渡されません。

-main:xxx

オブジェクト・ファイル xxx を実行可能ファイル (.EXE) のメインプログラムにします。xxx は、cob2 に指定されたオブジェクト・ファイル (.OBJ) または COBOL ソース・ファイルの名前でなければなりません。xxx をリンカー応答ファイル内に使用することはできません。例えば、次のコマンドは abc をメインプログラムにします。

```
cob2 -main:abc a1.cbl d:¥cats¥abc.obj b2.cbl
```

-main を指定しない場合は、最初に指定されたオブジェクト・ファイルまたはソース・ファイルが COBOL メインプログラムになります (リンカー応答ファイルなし)。

-main:xxx の構文が無効な場合や、xxx が cob2 によって処理されるオブジェクト・ファイルまたはソース・ファイルのファイル名でない場合は、cob2 が終了します。

-s:0xxxxxxxx

リンカーに xxxxxxxx バイトのスタック・スペースを実行可能プログラムに割り振るように指示します (ここで xxxxxxxx は、16 進数です)。このスペースは、非常に大きな定義済みデータ項目を持つプログラムで、特に LOCAL-STORAGE SECTION にデータ項目のあるプログラムを実行するために必要になる場合があります。

/HEAP:0xxxxxxxx

リンカーに xxxxxxxx バイトの静的ユーザー・データ用のヒープ・スペースを割り振るように指示します (ここで xxxxxxxx は、16 進数です)。(デフォルト値は 0x100000 で最大は 0xfffffffffe です。) このスペースは、非常に大きな定義済みデータ項目を持つプログラムで、特に WORKING-STORAGE SECTION にデータ項目のあるプログラムを実行するために必要になる場合があります。

コンパイルとリンクの両方に適用されるオプション

-g デバッガーで使用されるシンボリック情報を生成します。このオプションは、TEST コンパイラー・オプションを使用してコンパイルを実行し、/DEBUG リンカー・オプションを使用してリンクを実行することと同じです。

-h cob2 ヘルプ・テキストを表示します。

-v コンパイルおよびリンクのステップを表示し、各ステップを実行します。

-# コンパイル・ステップとリンク・ステップを表示しますが、それらを実行しません。

-.?, ? cob2 ヘルプ・テキストを表示します。

関連タスク

537 ページの『コマンド行引数の使用』

関連参照

- 232 ページの『cob2 でサポートされるファイル名および拡張子』
- 215 ページの『コンパイラ環境変数』
- 217 ページの『ランタイム環境変数』

プログラムのリンク

コンパイラがソース・ファイルからオブジェクト・モジュールを作成したら、リンカーを使用してそれらを COBOL for Windows のランタイム・ライブラリーとリンクし、.EXE ファイルまたは .DLL ファイルを作成します。

リンカー・オプションまたはステートメントをモジュール定義ファイル (.DEF) で使用して、必要な出力の種類を指定することができます。

- .EXE ファイルを生成するには、/EXEC オプションを指定するか、モジュール・ステートメント NAME を組み込みます。デフォルトでは、リンカーは .EXE ファイルを生成します。
- .DLL ファイルを生成するには、/DLL オプションを指定するか、モジュール・ステートメント LIBRARY を組み込みます。

リンカー・オプションは、次のどの方法でも設定することができます。

- コマンド行上。cob2 /M myprog.obj と同様に、コマンド行の任意の場所にオプションを指定することができます。
- コマンド行またはコマンド・ファイルの ILINK 環境変数内。オプションは、現行セッションに対してのみ有効になります。
- 「システムのプロパティ」ウィンドウの ILINK 環境変数内 (ユーザーごと、またはシステムごと)。

コマンド行で指定したオプションは、ILINK 環境変数で指定したオプションよりも優先されます。リンク時に同じコマンド行オプションを使用する場合は、頻繁に使用するオプションを ILINK 環境変数に格納すると手間が省けます。ただし、この環境変数でファイル名を指定することはできません。

リンカーは、次の方法で起動することができます。

- cob2 を使用して、コンパイラからリンカーを自動的に起動する。
- MAKE ファイルを使用して、コンパイラとリンカーの両方を起動する。
- コマンド行から起動する。

関連タスク

- 213 ページの『環境変数の設定』
- 232 ページの『リンカー・オプションの指定』
- 233 ページの『コンパイラを使用したリンク』
- 233 ページの『コマンド行からのリンク』
- 544 ページの『モジュール定義ファイルの作成』

関連参照

- 217 ページの『リンカー環境変数』
- 235 ページの『リンカーの入出力ファイル』

cob2 でサポートされるファイル名および拡張子

特定の拡張子を持つファイルは、コンパイラーによって処理されます。ファイル拡張子 .CBL は、一般に COBOL ソースに使用されます。

それ以外のファイルはすべてリンカーに渡されます。ファイル拡張子が認識されるファイルは、次のように処理されます。

- .DEF** モジュール定義ファイルの名前です。
- .DLL** 生成されたダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL) の名前です。デフォルトの DLL は、cob2 コマンドで最初にリストされた、拡張子 .DLL の付いたソース・ファイルです。
- .EXP** エクスポート・ファイルの名前です。
- .EXE** 生成された実行可能ファイルの名前です。指定されない場合は、cob2 コマンドで最初にリストされた、拡張子 .EXE の付いた COBOL ソース・ファイルの名前がデフォルトとして使用されます。
- .IMP** プログラムで参照されるシンボル (通常は外部ルーチンの名前) を含む .DLL と関連付けられたインポート・ライブラリーの名前です。このファイルは、リンカーがこれらの参照を解決するために使用します。
- .LIB** プログラムで参照されるシンボル (通常は外部ルーチンの名前) を含む、インポートまたは標準ライブラリーの名前です。このファイルは、リンカーがこれらの参照を解決するために使用します。
- .MAP** マップ・ファイルの名前です。/MAP を指定しない場合は、マップ・ファイルが生成されません。
- .OBJ** リンカーに渡されるオブジェクト・ファイルの名前です。

関連タスク

544 ページの『モジュール定義ファイルの作成』

リンカー・オプションの指定

リンカー・オプションの指定は、小文字、大文字、大/小文字混合、および短形式でも長形式でも構いません。また、オプションの前に付けるスラッシュ (/) の代わりに、ダッシュ (-) を使用することも可能です。

例えば、/DE、/DEB、または /DEBU は、/DEBUG と同じです。また、-DEBUG は、/DEBUG と同じです。以下に参照されるリンカー・オプションの要約には、各オプションの許容できる最も短い形式が示されます。

オプションはスペースまたはタブ文字で区切ります。以下に、その例を示します。

```
cob2 /de -DBGPACK -Map /NOI prog.obj
```

一部のリンカー・オプションおよびモジュール・ステートメントは、数値引数を取ります。標準の C 言語構文を使用した場合は、次の任意の形式で数値を指定することができます。

10 進数

0 または 0x を接頭部に持たない数値。例えば、1234 は 10 進数です。

8 進数 0 (0x ではない) を接頭部に持つ数値。例えば、01234 は 8 進数です。

16 進数

0x を接頭部に持つ数値。例えば、0x1234 は 16 進数です。

関連タスク

231 ページの『プログラムのリンク』

関連参照

307 ページの『第 16 章 リンカー・オプション』

コンパイラーを使用したリンク

COBOL for Windows コンパイラーを起動すると、ソース・コードからオブジェクト・ファイルがコンパイルされた後、リンカーが起動され、オブジェクト・ファイルが .EXE または .DLL ファイルにリンクされます。

コンパイラーは、作成するオブジェクト・ファイルと、コンパイラーのコマンド行で指定されたオブジェクト・ファイルをリンカーに渡します。デフォルトのパラメーターは、リンカーには渡されません。cob2 コマンドの -b オプションを使用して、オプションをリンカーに渡します。

コンパイラーがリンカーを起動しないようにするには、cob2 コマンドの -c オプションを指定します。この後、別のステップでリンカーを起動することができます。

234 ページの『例: リンクでの cob2 の使用』

関連参照

307 ページの『第 16 章 リンカー・オプション』

コマンド行からのリンク

オブジェクト・コード・ライブラリーの作成および管理、インポート・ライブラリーとエクスポート・オブジェクトのペアの作成、およびモジュール定義 (.def) ファイルの生成を行うには、IBM Library Manager (ILIB) を使用します。リンカーは、ILINK コマンドを発行して直接呼び出すことも、cob2 コマンドを使用して間接的に呼び出すことも可能です。

コマンド行からリンカーを起動するときには、リンカーが他のファイル、オプション、またはディレクトリーとして認識できない入力データはすべてオブジェクト・ファイルであるものと想定されます。各ファイルは、スペースまたはタブ文字で区切ります。少なくとも 1 つのオブジェクト・ファイルを入力する必要があります。

リンカーが入力ファイルを検索する対象のディレクトリーを増やすには、コマンド行でドライブまたはそのディレクトリー自体を指定します。ドライブまたはディレクトリーを指定する際には、末尾にスラッシュ (/) または円記号 (¥) を付けます。指定したパスは、LIB 環境変数内にあるパスの前に検索されます。

MAKE ファイルを作成して、プロジェクトの構築に必要な一連の操作 (コンパイルやリンクなど) を編成することができます。MAKE ファイルを使用して、これらすべてのアクションを 1 ステップで呼び出すことができます。

『例: リンクでの cob2 の使用』

『例: リンカー・オプションのオーバーライド』

関連タスク

238 ページの『NMAKE を使用したプロジェクトの更新』

544 ページの『モジュール定義ファイルの作成』

関連参照

235 ページの『リンカーの検索規則』

例: リンクでの cob2 の使用

次の例では、リンクに cob2 を使用する方法を示します。

2 つのファイルをリンクするには、-c オプションを指定せずにそれらのファイルをコンパイルします。例えば、alpha.cbl および beta.cbl をコンパイルしてリンクし、alpha.exe を生成するには、次のように入力します。

```
cob2 alpha.cbl beta.cbl
```

上記のコマンドは、alpha.obj と beta.obj を作成し、その後に alpha.obj、beta.obj、および COBOL ライブラリーをリンクします。リンク・ステップが成功すると、alpha.exe という名前の実行可能プログラムが作成されます。

次のコマンドは beta.cbl をコンパイルします。

```
cob2 alpha.obj beta.cbl mylib.lib gamma.exe
```

また、このコマンドは次のストリングをリンカーに渡します。

```
alpha.obj beta.obj mylib.lib /out:gamma.exe
```

リンクが成功すると、実行可能プログラム gamma.exe が生成されます。

次のコマンドは alpha.dll を生成します。なお、alpha.def ファイルは有効なものとしてします。

```
cob2 -dll alpha.cbl alpha.def
```

関連タスク

233 ページの『コマンド行からのリンク』

例: リンカー・オプションのオーバーライド

次の例では、コマンド行のオプションが環境変数内のオプションをオーバーライドすることを示しています。

```
SET ILINK=/NOI /AL:256 /DE
cob2 test
cob2 /NODEF /NODEB prog
```

上記の最初のコマンドは、環境変数 ILINK をオプション /NOIGNORECASE、/ALIGNMENT:256、および /DEBUG に設定します。

2 番目のコマンドは、ILINK で指定されたオプションを使用して、test.obj をリンクし、test.exe を生成します。

最後のコマンドは、オプション /NOIGNORECASE および /ALIGNMENT:256 に加えて /NODEFAULTLIBRARYSEARCH および /NODEBUG オプションを使用して、prog.obj をリンクし、prog.exe を生成します。コマンド行の /NODEBUG は、環境変数の /DEBUG 設定をオーバーライドします。

関連タスク

233 ページの『コマンド行からのリンク』

リンカーの入出力ファイル

リンカーは、オブジェクト・ファイルに対して、オブジェクト・ファイル同士、または指定したライブラリー・ファイルとリンクし、実行可能出力ファイルを生成します。このファイルは、実行可能プログラム・ファイル (.EXE) またはダイナミック・リンク・ライブラリー (.DLL) のいずれかにすることができます。

リンカーはマップ・ファイルを生成することも可能です。マップ・ファイルには、実行可能出力の内容に関する情報が入ります。

リンカー入力

- オプション
- オブジェクト・ファイル (*.OBJ)
- ライブラリー・ファイル (*.LIB)
- インポート・ライブラリー (*.LIB)
- モジュール定義ファイル (.DEF)

リンカー出力

- 実行可能ファイル (.EXE または .DLL)
- マップ・ファイル (.MAP)
- 戻りコード

リンカーは、IBM COBOL for Windows または IBM PL/I for Windows によって作成されたオブジェクト・ファイルを受け入れます。

リンカーの検索規則

リンカーがオブジェクト (.OBJ)、ライブラリー (.LIB)、またはモジュール定義 (.DEF) ファイルを検索する際には、以下のロケーションでファイルを検索します。

リンカーは以下の順序で検索します。

1. 当該ファイルに対して指定したディレクトリー、またはパスを指定していない場合は現行ディレクトリー。デフォルトのライブラリーには、パス指定は含まれていません。

ファイルとともにパスを指定した場合、リンカーはそのパスだけを検索し、そこでファイルが検出されなければリンクを停止します。

2. コマンド行で直接入力されたディレクトリー。末尾にスラッシュ (/) または円記号 (¥) が付いていなければなりません。

3. LIB 環境変数でリストされたディレクトリー

リンカーがファイルを検出できない場合は、エラー・メッセージを生成してリンクを停止します。

『例: リンカーの検索規則』

関連参照

217 ページの『リンカー環境変数』

『ファイル名のデフォルト』

例: リンカーの検索規則

この例では、4 つのオブジェクト・ファイルをリンクして、FUN.EXE という名前の実行可能ファイルを作成します。

```
FUN.OBJ TEXT.OBJ TABLE.OBJ CARE.OBJ
NEWLIBV2.LIB
C:¥TESTLIB¥
```

リンカーは、NEWLIBV2.LIB を検索してから、デフォルト・ライブラリーを検索して参照を解決します。 NEWLIBV2.LIB とデフォルト・ライブラリーを見付けるため、リンカーは次の順序でロケーションを検索します。

1. 現行ディレクトリー (パスなしで NEWLIBV2.LIB が入力されたため)
2. C:¥TESTLIB¥ ディレクトリー
3. LIB 環境変数でリストされたディレクトリー

関連参照

235 ページの『リンカーの検索規則』

ファイル名のデフォルト

ファイル名を入力しない場合、リンカーはデフォルト名を想定します。

表 27. リンカーで想定されるデフォルトのファイル名

ファイル	デフォルトのファイル名	デフォルトの拡張子
オブジェクト・ファイル	なし。少なくとも 1 つのオブジェクト・ファイル名を入力する必要があります。	.OBJ
出力ファイル	最初のオブジェクト・ファイルのベース名	.EXE
マップ・ファイル	出力ファイルのベース名	.MAP
ライブラリー・ファイル	オブジェクト・ファイルで定義されたデフォルトのライブラリー。デフォルトのライブラリーを定義するには、コンパイラー・オプションを使用します。追加のライブラリーを指定した場合は、デフォルトのライブラリーの前にそれらが検索されます。	.LIB
モジュール定義ファイル	なし。リンカーは、すべてのモジュール・ステートメントに対してデフォルトを受け入れるものと想定します。	.DEF

リンク内のエラーの訂正

PGMNAME(UPPER) コンパイラー・オプションを使用すると、CALL ステートメントで参照されるサブプログラムの名前が大文字に変換されます。リンカーは大/小文字を区別して名前を認識するため、この変換はリンカーに影響します。

例えば Call "RexxStart" は、コンパイラーによって Call "REXXSTART" に変換されます。呼び出し先プログラムの実名が RexxStart の場合、リンカーはこのプログラムを検出できず、REXXSTART が未解決の外部参照であることを示すエラー・メッセージを生成します。

このタイプのエラーは一般に、他のソフトウェア・プロダクトに備わっている API ルーチンを読み出す場合に起こります。API ルーチンの名前に大文字と小文字が混在している場合は、次の両方の処置を行ってください。

- PGMNAME(MIXED) コンパイラー・オプションを使用する。
- CALL ステートメントで、API ルーチンの名前が正しく (大/小文字が正確に) 指定されていることを確認する。

関連参照

『プログラム名内のリンカー・エラー』

リンカーの戻りコード

リンカーは、以下のいずれかの戻りコードを発行します。

表 28. リンカーの戻りコード

コード	意味
0	リンカーは正常に完了しました。エラーは検出されず、警告も出されていません。
4	リンカーが警告を出しました。出力ファイルに問題がある可能性があります。
8	リンカーがエラーを検出しました。リンクは完了している可能性がありますが、出力ファイルを正常に実行することはできません。
12	リンカーが警告を出し、エラーを検出しました (戻りコード 4 および 8 を参照)。
16	リンカーが重大エラーを検出しました。リンクは異常終了しており、出力ファイルを正常に実行することはできません。
20	リンカーが警告を出し、重大エラーを検出しました (戻りコード 4 および 16 を参照)。
24	リンカーがエラーと重大エラーの両方を検出しました (戻りコード 8 および 16 を参照)。
28	リンカーが警告を出し、エラーと重大エラーの両方を検出しました (戻りコード 4、8、16 を参照)。

プログラム名内のリンカー・エラー

デフォルトのリンケージ規約は SYSTEM(STDSCALL) です。これは、コンパイラー・オプション CALLINT(SYSTEM) を使用するときには有効になります。

この規約では、呼び出し先ルーチンの名前が次の 2 つの方法で拡張されます (名前装飾 として知られます)。

- 下線文字 (_) が接頭部として追加されます。
- アト記号 (@) と、引数リストの長さ (バイト単位) を示す 1 桁または 2 桁の数値が接尾部として追加されます。

このリンケージ規約を使用する場合は、呼び出し側プログラムの引数リストが、呼び出し先サブルーチンのパラメーター・リストと正確に一致していることを確認してください。例えば、次のステートメントをコーディングしたとします。

Call SubProg Using Parm-1 Parm-2.

この場合、呼び出し先ルーチンの名前は `_SubProg@8` となりますが、`SubProg` ルーチン自体は次のようにコーディングされているとします。

Procedure Division Using Parm-1 Parm-2 Parm-3.

この場合、システム生成される名前は `_SubProg@12` となります。このように名前が異なると、リンカーは `_SubProg@8` への呼び出しを解決できないため、リンカー・エラーが発生します。

関連参照

254 ページの『CALLINT』

514 ページの『SYSTEM』

NMAKE を使用したプロジェクトの更新

NMAKE は、ソース・ファイルに変更を加えた後でプロジェクトを更新するプロセスを自動化するために使用します。

記述ファイル (または `MAKE` ファイル) と呼ばれる特殊なテキスト・ファイルをセットアップして、他のファイルに従属するファイルと、プログラムを最新の状態にするために実行する必要があるコマンド (`compile` および `link` コマンドなど) を NMAKE に通知します。

NMAKE が正常に実行した後、実行できる実行可能ファイルか、またはリソースとして使用できるダイナミック・リンク・ライブラリーが備えられます。

関連タスク

『コマンド行での NMAKE の実行』

239 ページの『コマンド・ファイルでの NMAKE の実行』

240 ページの『NMAKE の記述ファイルの定義』

コマンド行での NMAKE の実行

NMAKE を実行するには、以下に示す形式でコマンドを発行します。

`nmake options macrodefinitions targets /F filename`

options NMAKE のアクションを変更するオプションを指定する。サポートされるオプションのリストを表示するには、コマンド行に次のコマンドを入力する。

`nmake /?`

macrodefinitions

使用する **NMAKE** のマクロ定義をリストする。スペースを含むマクロ定義は二重引用符で囲むことが必要。

targets

ビルドする 1 つ以上のターゲット・ファイルの名前を指定する。ターゲットをリストしない場合、**NMAKE** は記述ファイル中の最初のターゲットをビルドする。

filename

ファイルの従属関係と、ファイルが最新の状態でない場合に実行するコマンドを指定している記述ファイルの名前を指定する。共通規則では、ファイルに *program.MAK* という名前を指定しますが、任意の名前を付けることができます。ファイル名を指定しない場合、**NMAKE** が *makefile* という名前のファイルを探し、それを使用します。

```
nmake /s "program = flash" sort.exe search.exe
```

上記の例は以下のアクションをとります。

- */s* オプションを指定して **NMAKE** を起動し、コマンド表示を抑制します。
- マクロを定義し、ストリング *flash* をマクロ *program* に割り当てます。
- *sort.exe* および *search.exe* という 2 つのターゲットを指定します。
- *makefile* という名前のファイルを探し、それが使用可能であれば使用します。

コマンド・ファイルでの **NMAKE** の実行

コマンド・ファイルは **NMAKE** へのコマンド行入力を拡張するために使用する応答ファイルです。頻繁に入力する複雑で長いコマンド、またはコマンド行の長さの制限を超えるコマンド行引数のストリング (マクロ定義など) には、コマンド・ファイルを使用します。

コマンド・ファイルを用いて **NMAKE** に入力データを提供するには、次のように入力します。

```
nmake @commandfile
```

commandfile には、通常コマンド行で入力されるものと同じ情報を含むファイルの名前を入力します。

NMAKE は、引数の間に現れる改行をスペースと見なします。最後の行以外の行の末尾に円記号 (¥) を付加すれば、マクロ定義を複数行にまたがって記述できます。スペースを含むマクロ定義は、コマンド行で直接入力する場合と同様に引用符で囲む必要があります。

次に示すのは、*update* というコマンド・ファイルの例です。

```
/s "program ¥  
= flash" sort.exe search.exe
```

このコマンド・ファイルを使用するには、次のコマンドを入力します。

```
nmake @update
```

このコマンドは、以下の項目を使用して **NMAKE** を実行します。

- コマンド表示を抑制する */s* オプション

- マクロ定義 "program = flash"
- sort.exe および search.exe として指定されたターゲット
- デフォルトの記述ファイル makefile

円記号 (¥) を使用すると、マクロ定義を 2 行にわたって記述することができます。

NMAKE の記述ファイルの定義

最も単純な形態では、記述ファイルは、他のファイルに従属するファイルと、ファイルが変更された場合に実行する必要があるコマンドを、NMAKE に通知します。

記述ファイルには、1 から 1048 個の記述ブロックが入っています。記述ブロックは、プログラムのさまざまな部分間の関係を指示し、すべてのコンポーネントを最新にするためのコマンドが含まれています。記述ファイルの形式は次のとおりです。

```
targets . . . : dependents . . .
      command
      command
      command
      . . .
```

例えば、次の記述ファイルを使用して、2 つのファイルをコンパイルおよびリンクすることができます。

```
target.lib: a.cob b.cob
      cob2 a.cob b.cob
      ilink target a.obj b.obj
```

プログラムの実行

COBOL プログラムを実行するには、環境変数を設定し、プログラムを実行して、実行時エラーを訂正します。

1. 必要な環境変数がすべて設定されていることを確認します。

例えば、システム・ファイル名に値を割り当てる環境変数名をプログラムが使用する場合は、その環境変数を設定する必要があります。

2. プログラムを実行します。コマンド行で、実行可能モジュールの名前を入力するか、そのモジュールを呼び出すコマンド・ファイルを実行します。

例えば、コマンド cob2 alpha.cb1 beta.cb1 が成功した場合は、alpha を入力してプログラムを実行することができます。

3. ランタイム・エラーを訂正します。

例えば、デバッガーを使用して、エラーの発生時点でプログラム状態を調べることができます。

ヒント: ランタイム・メッセージが省略されているか不完全な場合は、環境変数 LANG または NLSPATH、あるいはその両方の設定が間違っている可能性があります。

関連タスク

213 ページの『環境変数の設定』

214 ページの『COBOL for Windows の環境変数の設定』

340 ページの『デバッガーの使用』

関連参照

217 ページの『ランタイム環境変数』

783 ページの『付録 I. ランタイム・メッセージ』

COBOL for Windows DLL の再配布

IBM COBOL for Windows を使用して COBOL アプリケーションを開発し、そのアプリケーションを WebSphere Developer for System z がインストールされていない別の Windows システムにデプロイすることを計画している場合は、アプリケーションとともに IBM COBOL ライブラリー DLL を再配布する必要があります。

これらのファイルは、COBOL インストール・ディレクトリーのサブディレクトリー `ship¥cobol¥` 内の、ZIP ファイル `cobship.zip` にあります。(COBOL インストール・ディレクトリーのロケーションは、Windows 環境変数 `WDZ70INSTDIR` で指定されます。) 詳しくは、そのディレクトリーにある `README` ファイルを参照してください。

これらのファイルを再配布する場合は、次の条件に従ってください。

- これらのモジュールのコピーは「現状のまま」提供されます。アプリケーションに関する技術支援は一切行われていません。
- ユーザーによるアプリケーションのコピー (バックアップ目的を除く)、逆アセンブル、逆コンパイル、またはその他の変換を禁止してください。
- オリジナルのファイルまたはモジュールと同じパス名を使用しないでください。
- これらのファイルまたはモジュールのコピーが 1 つでも含まれている場合は、アプリケーションに次のラベルを付けてください。

CONTAINS

IBM COBOL for Windows V7.0
Runtime Modules
(c) Copyright IBM Corporation 1998,2006
All Rights Reserved

ファイルの再配布に関する契約条件の全リストについては、使用許諾契約書を参照してください。

第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行

オブジェクト指向 (OO) アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行は、以下の説明に従って、コマンド行で行うことができます。

関連タスク

『オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル』

244 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの準備』

245 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの実行』

オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル

オブジェクト指向アプリケーションをコンパイルするときは、cob2 コマンドを使用すると、COBOL クライアント・プログラムおよびクラス定義をコンパイルでき、javac コマンドを使用すると、Java クラス定義をコンパイルして、バイトコード (拡張子 .class) を生成できます。

INVOKE ステートメントやクラス定義など OO 構文を含む COBOL ソース・コードや、Java サービスを使用する COBOL ソース・コードをコンパイルするには、THREAD コンパイラー・オプションを使用する必要があります。

クラス定義を含む COBOL ソース・ファイルは、他のクラスまたはアプリケーション定義を含むことはできません。

COBOL クラス定義をコンパイルすると、2 つの出力ファイルが生成されます。

- クラス定義に対するオブジェクト・ファイル (.obj)。
- COBOL クラス定義に対応するクラス定義を含む Java ソース・プログラム (.java)。この生成済みの Java クラス定義は、決して編集しないでください。COBOL クラス定義を変更する場合は、更新された COBOL クラス定義を再コンパイルして、オブジェクト・ファイルと Java クラス定義の両方を再生成しなければなりません。

COPY ステートメントを使用して COBOL クライアント・プログラムまたはクラス定義にファイル JNI.cpy を組み込む場合は、COBOL インストール・ディレクトリーの include サブディレクトリーをコピーブックの検索順序に指定します。(COBOL インストール・ディレクトリーのロケーションは、Windows 環境変数 WDC70INSTDIR で指定されます。) cob2 コマンドの -I オプションを使用するか、SYSLIB 環境変数を設定することにより、include サブディレクトリーを指定できます。

関連タスク

213 ページの『環境変数の設定』

222 ページの『コンパイル済みプログラム』

244 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの準備』

245 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの実行』
479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

関連参照

215 ページの『コンパイラ環境変数』
228 ページの『cob2 オプション』
293 ページの『THREAD』

オブジェクト指向アプリケーションの準備

オブジェクト指向 COBOL アプリケーションをリンクするには、cob2 コマンドを使用します。

オブジェクト指向 COBOL クライアント・プログラムを実行できるよう準備するには、オブジェクト・ファイルと次の 2 つの DLL サイド・ファイルをリンクして、実行可能モジュールを作成します。

COBOL クラス定義を実行できるように準備するには、以下のステップに従ってください。

1. オブジェクト・ファイルをリンクして、実行可能 DLL モジュールを作成します。

結果として生成される DLL モジュールの名前は、*Classname.dll* にする必要があります。*Classname* は外部クラス名です。クラスがパッケージの一部であり、外部クラス名にピリオド (.) が使用されている場合は、DLL モジュール名ではピリオドを下線に変更する必要があります。例えば、Account クラスが com.acme パッケージの一部である場合、外部クラス名 (クラスの REPOSITORY 段落記入項目に定義されている) は com.acme.Account であり、このクラスの DLL モジュール名は com_acme_Account.dll でなければなりません。

2. 生成された Java ソースを Java コンパイラでコンパイルして、クラス・ファイル (.class) を生成します。

Classname に対応するクラス定義が格納されている COBOL ソース・ファイル *Classname.cbl* の場合は、次のコマンドを使用して、アプリケーションのコンポーネントのコンパイルとリンクを行います。

表 29. クラス定義のコンパイルおよびリンクのコマンド

コマンド	入力	出力
cob2 -c -qthread <i>Classname.cbl</i>	<i>Classname.cbl</i>	<i>Classname.obj</i> 、 <i>Classname.java</i>
cob2 -dll <i>Classname.obj</i>	<i>Classname.obj</i>	<i>Classname.dll</i>
javac <i>Classname.java</i>	<i>Classname.java</i>	<i>Classname.class</i>

cob2 コマンドと javac コマンドが正常に発行されると、プログラムの実行可能コンポーネントである、実行可能 DLL モジュール *Classname.dll* とクラス・ファイル *Classname.class* が生成されます。これらのコマンドによって生成されるファイルは、すべて現行作業ディレクトリーに置かれます。

245 ページの『例: COBOL クラス定義のコンパイルおよびリンク』

関連タスク

222 ページの『コンパイル済みプログラム』

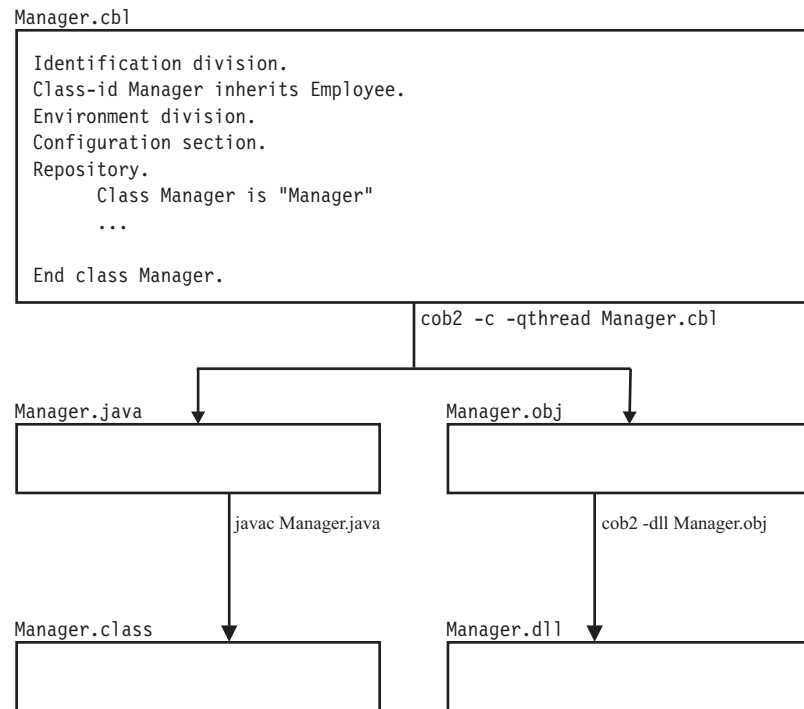
435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』

関連参照

228 ページの『cob2 オプション』

例: COBOL クラス定義のコンパイルおよびリンク

この例は、COBOL クラス定義、Manager.cbl をコンパイルおよびリンクするときに使用するコマンドと生成されるファイルを示しています。



クラス・ファイル Manager.class と DLL モジュール Manager.dll は、アプリケーションの実行可能コンポーネントであり、現在の作業ディレクトリーに生成されます。

オブジェクト指向アプリケーションの実行

オブジェクト指向の COBOL アプリケーションは、コマンド行から実行することができます。

COBOL クラスのための DLL が置かれているディレクトリーを PATH 環境変数で指定します。また、それらの COBOL クラスと関連付けられた Java クラス・ファイルが置かれているディレクトリー・パスを次のように CLASSPATH 環境変数で指定します。

- パッケージの一部ではないクラスの場合は、.class ファイルが収められているディレクトリーでクラス・パスを終了します。

- パッケージの一部であるクラスの場合は、“root” パッケージ (完全なパッケージ名における最初のパッケージ) が収められているディレクトリーでクラス・パスを終了します。
- .class ファイルを含む .jar ファイルの場合は、.jar ファイルの名前でクラス・パスを終了します。

複数のパス・エントリーはセミコロンで区切ります。

オブジェクト指向の COBOL アプリケーションを実行する際には、次の Java リリースがサポートされます。

- IBM 32-bit SDK for Windows, Java 2 Technology Edition, Version 1.3.1 以降
- Sun Java Developers Kit 1.3.1。Java プログラムで始まるアプリケーションが java コマンドによって起動される場合は、java コマンドに -classic オプションを指定する必要があります。

重要: Sun Java Developer Kit 1.4.x は、オブジェクト指向構文を使用する COBOL プログラムには対応していません。

関連タスク

- 『main メソッドで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行』
- 247 ページの『COBOL プログラムで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行』
- 240 ページの『プログラムの実行』
- 213 ページの『環境変数の設定』
- 429 ページの『第 24 章 オブジェクト指向プログラムの作成』
- 474 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの構造化』

main メソッドで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行

COBOL と Java の混合アプリケーションの最初のルーチンが、Java クラスの main メソッドまたは COBOL クラスの main ファクトリー・メソッドである場合は、java コマンドを使用し、main メソッドを含むクラスの名前を指定して、アプリケーションを実行します。

java コマンドは、Java 仮想マシン (JVM) を初期化します。JVM の初期化をカスタマイズするには、以下の例で示すように、java コマンドのオプションを指定します。

表 30. JVM をカスタマイズするための Java コマンド・オプション

目的	オプション
システム・プロパティーを指定する	-Dname=value
ガーベッジ・コレクションについての詳しいメッセージを JVM が生成するよう要求する	-verbose:gc
クラス・ロードについての詳しいメッセージを JVM が生成するよう要求する	-verbose:class
ネイティブ・メソッドおよび他の Java ネイティブ・インターフェース・アクティビティーについての詳しいメッセージを JVM が生成するよう要求する	-verbose:jni
Java の初期ヒープ・サイズを value バイトに設定する	-Xmsvalue

表 30. JVM をカスタマイズするための Java コマンド・オプション (続き)

目的	オプション
Java の最大ヒープ・サイズを <i>value</i> バイトに設定する	<code>-Xmxvalue</code>
Sun Java Developers Kit 1.3.1 の “classic” JVM を使用する	<code>-classic</code>

JVM がサポートするオプションの詳細については、`java -h` コマンドの出力または関連参照を参照してください。

関連参照

JVM options (「*Persistent Reusable Java Virtual Machine User's Guide*」)

COBOL プログラムで始まるオブジェクト指向アプリケーションの実行

COBOL と Java の混合アプリケーションの先頭のルーチンが COBOL プログラムである場合は、コマンド・プロンプトでプログラム名を指定してアプリケーションを実行します。COBOL プログラムのプロセスで JVM がまだ実行されていない場合は、COBOL のランタイムが JVM を自動的に初期化します。

JVM の初期化をカスタマイズするには、`COBJVMINITOPTIONS` 環境変数を設定してオプションを指定します。オプションを区切るには、ブランクを使用します。以下に、その例を示します。

```
export COBJVMINITOPTIONS="-Xms100000000 -Xmx200000000 -verbose:gc"
```

関連タスク

240 ページの『プログラムの実行』

213 ページの『環境変数の設定』

関連参照

JVM オプション (「*Persistent Reusable Java Virtual Machine User's Guide*」)

第 14 章 コンパイラー・オプション

コンパイルは、コンパイラー・オプションを使用するか、またはコンパイラー指示ステートメント (コンパイラー指示) を使用して、指示および制御することができます。

コンパイラー・オプションは、次の表にリストされているプログラムの局面に影響を与えます。各オプションに結び付けられている情報は、そのオプションを指定するための構文を与えるもので、オプション、そのパラメーター、および他のパラメーターとの相互作用を説明しています。

表 31. コンパイラー・オプション

プログラムの局面	コンパイラー・オプション	デフォルト	省略形
ソース言語	252 ページの『ARITH』	ARITH (COMPAT)	AR (C E)
	257 ページの『CICS』	NOCICS	なし
	260 ページの『CURRENCY』	NOCURRENCY	CURR NOCURR
	274 ページの『LIB』	LIB	なし
	279 ページの『NSYMBOL』	NSYMBOL (NATIONAL)	NS (NAT DBCS)
	280 ページの『NUMBER』	NONUMBER	NUM NONUM
	284 ページの『QUOTE/APOST』	QUOTE	Q APOST
	286 ページの『SEQUENCE』	SEQUENCE	SEQ NOSEQ
	287 ページの『SOSI』	NOSOSI	なし
	290 ページの『SQL』	SQL ("")	なし
日付処理	261 ページの『DATEPROC』	NODATEPROC、または DATEPROC (FLAG) (DATEPROC だけが指定された場合)	DP NODP
	299 ページの『YEARWINDOW』	YEARWINDOW (1900)	YW
マップおよびリスト	275 ページの『LINECOUNT』	LINECOUNT (60)	LC
	275 ページの『LIST』	NOLIST	なし
	276 ページの『LSTFILE』	LSTFILE (LOCALE)	LST
	276 ページの『MAP』	NOMAP	なし
	289 ページの『SOURCE』	SOURCE	S NOS
	289 ページの『SPACE』	SPACE (1)	なし
	292 ページの『TERMINAL』	TERMINAL	TERM NOTERM
	297 ページの『VBREF』	NOVBREF	なし
	297 ページの『XREF』	XREF (FULL)	X NOX
オブジェクト・モジュールの生成	260 ページの『COMPILE』	NOCOMPILE (S)	C NOC
	281 ページの『OPTIMIZE』	NOOPTIMIZE	OPT NOOPT
	282 ページの『PGMNAME』	PGMNAME (UPPER)	PGMN (LU LM)
	285 ページの『SEPOBJ』	SEPOBJ	なし

表 31. コンパイラー・オプション (続き)

プログラムの局面	コンパイラー・オプション	デフォルト	省略形
オブジェクト・コード制御	253 ページの『BINARY』	BINARY(NATIVE)	なし
	255 ページの『CHAR』	CHAR(NATIVE)	なし
	258 ページの『COLLSEQ』	COLLSEQ(BIN)	なし
	263 ページの『DIAGTRUNC』	NODIAGTRUNC	DTR NODTR
	274 ページの『FLOAT』	FLOAT(NATIVE)	なし
	279 ページの『NCOLLSEQ』	NCOLLSEQ(BINARY)	NCS(L BIN B)
	293 ページの『TRUNC』	TRUNC(STD)	なし
	299 ページの『ZWB』	ZWB	なし
CALL ステートメントの動作	263 ページの『DYNAM』	NODYNAM	DYN NODYN
デバッグと診断	271 ページの『FLAG』	FLAG(I,I)	F NOF
	272 ページの『FLAGSTD』	NOFLAGSTD	なし
	291 ページの『SSRANGE』	NOSSRANGE	SSR NOSSR
	292 ページの『TEST』	NOTEST	なし
その他	251 ページの『ADATA』	NOADATA	なし
	254 ページの『CALLINT』	CALLINT(SYSTEM,NODESC)	なし
	264 ページの『ENTRYINT』	ENTRYINT(SYSTEM)	なし
	265 ページの『EXIT』	NOEXIT	EX(INX,LIBX,PRTX,ADX)
	277 ページの『MDECK』	NOMDECK	NOMD MD MD(C) MD(NOC)
	283 ページの『PROBE』	PROBE	なし
	287 ページの『SIZE』	8388608 バイト (約 8 MB)	SZ
	293 ページの『THREAD』	NOTHREAD	なし
	297 ページの『WSCLEAR』	NOWSCLEAR	なし

インストール先のデフォルト: 上記のオプションとともにリストされているデフォルトは、製品出荷時のデフォルトです。

パフォーマンスについての考慮事項: BINARY、CHAR、DYNAM、FLOAT、OPTIMIZE、SSRANGE、TEST、および TRUNC コンパイラー・オプションはすべて、実行時パフォーマンスに影響を及ぼす可能性があります。

関連タスク

595 ページの『第 33 章 プログラムのチューニング』

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

矛盾するコンパイラー・オプション

COBOL for Windows コンパイラーは、次の 2 つのうちのいずれかのような矛盾するコンパイラー・オプションを検出することができます。1 つのオプションの肯定形式と否定形式の両方が、優先順位の階層の中で同じレベルで指定されている場合、または互いに排他的なオプションが階層の同じレベルで指定されている場合です。

矛盾するオプションを階層の同じレベルで指定した場合は、最後に指定したオプションの方が有効になります。

互いに排他的なコンパイラー・オプションを同じレベルで指定すると、コンパイラーはエラー・メッセージを生成し、オプションの一方を対立しない値に強制します。例えば、PROCESS ステートメントで OPTIMIZE と TEST の両方を指定すると、指定した順序に関係なく、TEST が有効になり、OPTIMIZE は無視されます。

しかし、高レベルの優先順位で指定されたオプションは、低レベルの優先順位で指定されたオプションをオーバーライドします。コンパイラーは、次の優先順位 (高位から下位の順) に従ってオプションを認識します。

- 1. PROCESS (または CBL) ステートメントで指定されたオプション
- 2. cob2 コマンド呼び出しで指定されたオプション
- 3. COBOPT 環境変数のオプション・セット
- 4. デフォルト・オプション

例えば、COBOPT 環境変数では TEST をコーディングし、PROCESS ステートメントでは OPTIMIZE をコーディングすると、PROCESS ステートメントでコーディングされたオプションと、PROCESS ステートメントでコーディングされたオプションによって強制的にオンにされたオプションの優先順位の方が高いため、OPTIMIZE が有効になります。

表 32. 互いに排他的なコンパイラー・オプション

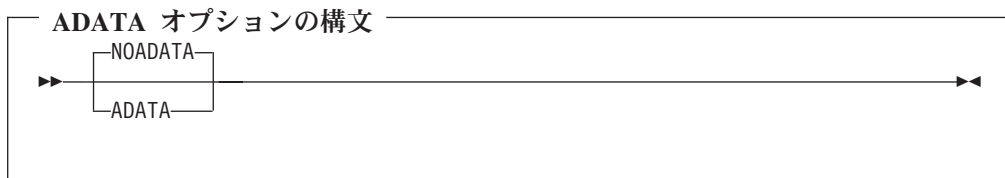
指定される	無視される	強制
CICS	DYNAM	NODYNAM
	NOLIB	LIB
	NOTHREAD	THREAD
MDECK	NOLIB	LIB
SQL	NOLIB	LIB
TEST	OPTIMIZE	NOOPTIMIZE

関連参照

- 215 ページの『コンパイラー環境変数』
- 228 ページの『cob2 オプション』
- 301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

ADATA

ADATA は、コンパイラーに追加のコンパイル情報のレコードを収めた SYSADATA ファイルを作成させる場合に使用します。



デフォルト: NOADATA

省略形: なし

SYSADATA 情報は他のツールによって使用され、必要に応じて ADATA ON が設定されます。SYSADATA ファイルのサイズは、通常、関連するプログラムのサイズに比例します。

ADATA は、PROCESS (CBL) ステートメントでは指定できません。指定できるのは、以下のいずれかの方法に限られます。

- cob2 コマンド・オプションとして
- COBOPT 環境変数

関連参照

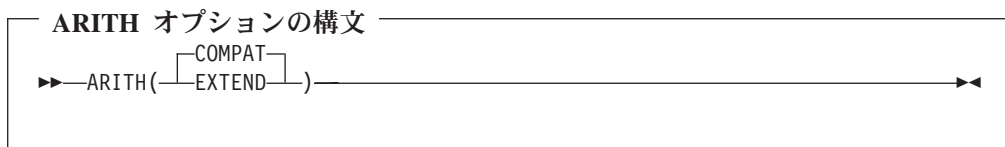
713 ページの『付録 H. COBOL SYSADATA ファイルの内容』

215 ページの『コンパイラ環境変数』

228 ページの『cob2 オプション』

ARITH

ARITH は、整数にコーディングできる最大桁数、および固定小数点の中間結果の場合に使用される桁数に影響します。



デフォルト: ARITH(COMPAT)

省略形: AR(C)、AR(E)

ARITH(EXTEND) を指定すると、次のようになります。

- パック 10 進数、外部 10 進数、 および数字編集のデータ項目の PICTURE 文節で指定できる桁位置の最大数が、18 から 31 へ引き上げられます。
- 固定小数点数値リテラルに指定できる桁数の最大数が、18 から 31 に上がります。以下の場所を含め、数値リテラルが現在許可されているところであればどこでも、長精度の数値リテラルを使用することができます。
 - PROCEDURE DIVISION ステートメントのオペランド
 - VALUE 文節 (長精度 PICTURE を含む数値データ項目に関する)

- 条件名の値 (長精度 PICTURE を含む数値データ項目に関する)
- NUMVAL および NUMVAL-C への引数の中で指定できる桁数の最大数が、18 から 31 に上がります。
- FACTORIAL 関数への整数引数の最大値は、29 です。
- 算術ステートメントの中間結果は、**拡張モード** を使用します。

ARITH(COMPAT) を指定すると、次のようになります。

- パック 10 進数、外部 10 進数、 および数字編集のデータ項目の PICTURE 文節の桁位置の最大数は 18 です。
- 固定小数点数値リテラルに指定できる桁数の最大数は、18 です。
- NUMVAL および NUMVAL-C への引数の中で指定できる桁数の最大数は、18 です。
- FACTORIAL 関数への整数引数の最大値は、28 です。
- 算術ステートメントの中間結果は、**互換モード** を使用します。

関連概念

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

BINARY

BINARY はバイナリー・データ項目の表記に影響を与えます。

BINARY オプションの構文

```

  ┌── NATIVE ──┐
  │             │
  └─ BINARY(S390) ─┘

```

デフォルト: BINARY(NATIVE)

省略形: なし

プラットフォームのネイティブの 2 進数表現形式を使用するには、BINARY(NATIVE) を指定します。 COBOL for Windows の場合、これはリトル・エンディアン 形式 (最大重み数字が最上位アドレスに格納される) になります。

BINARY(S390) は、BINARY、COMP、COMP-4 の各データ項目が常に zSeries、つまりビッグ・エンディアン 形式 (最小重み数字が最上位アドレスに格納される) で表現されることを示します。

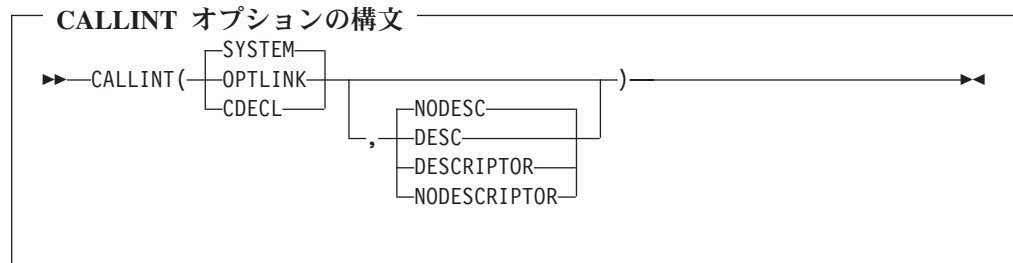
ただし、USAGE 文節の NATIVE キーワードで定義された COMP-5 2 進数データとデータ項目は、BINARY(S390) オプションの影響を受けません。これらは常にプラットフォームのネイティブ形式で格納されます。

関連参照

631 ページの『付録 B. zSeries ホスト・データ形式についての考慮事項』

CALLINT

CALL ステートメントで行う呼び出しに該当する呼び出しインターフェース規約を示す場合や、引数記述子を生成するかどうかを示す場合は、CALLINT を使用します。



デフォルト: CALLINT(SYSTEM,NODESC)

省略形: なし

特定の CALL ステートメントでこのオプションをオーバーライドするには、コンパイラー指示 >>CALLINT を使用します。

(ENTRYINT は、プログラム・エントリー・ポイントまたはエントリー・ポイントの呼び出しインターフェース規約を選択する場合に使用します。)

CALLINT には 2 つのサブオプション・セットがあります。

- 呼び出しインターフェース規約の選択

SYSTEM SYSTEM サブオプションは、プラットフォームの標準システムのリンケージ規約が呼び出し規約となることを指定します。この規約は、Windows ベースのシステム API で使用されるリンケージ STDCALL です。

重要: 呼び出し先プログラムに複数の入り口点がある場合は、この規約を使用できない場合があります。

OPTLINK

OPTLINK サブオプションは、呼び出しインターフェース規約が OPTLINK であることを指定します。OPTLINK は、SYSTEM 規約に代わる高速の規約です。OPTLINK は、既存の IBM C および C++ 関数と、COBOL および PL/I プログラムが使用します。

CDECL

CDECL サブオプションは、呼び出しインターフェース規約が CDECL であることを指定します。CDECL は、Microsoft[®] Visual C/C++ for Windows 関数とのインターフェースに使用されます。CDECL は、Microsoft C および C/C++ 関数のデフォルト規約です。

- 引数記述子が生成されるかどうかの指定

DESC

DESC サブオプションは、CALL ステートメントの各引数に、引数記述子が渡されることを指定します。引数記述子の詳細については、下記の関連参照を参照してください。

重要: オブジェクト指向プログラムでは、DESC サブオプションを指定しないでください。

DESCRIPTOR

DESCRIPTOR サブオプションは、DESC サブオプションと同義です。

NODESC NODESC サブオプションは、CALL ステートメントのどの引数に対しても、引数記述子を渡さないことを指定します。

NODESCRIPTOR

NODESCRIPTOR サブオプションは、NODESC サブオプションと同義です。

関連タスク

516 ページの『COBOL と C/C++ 用のリンケージ規約の設定』

531 ページの『複数の入り口点のコーディング』

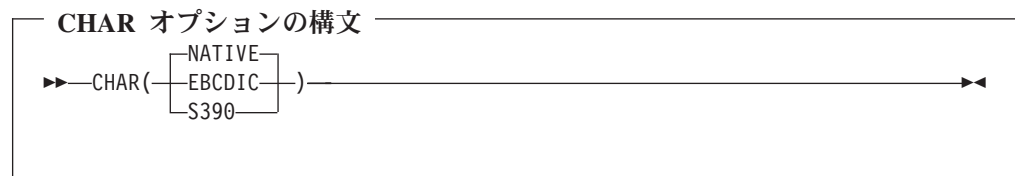
関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

CHAR

CHAR は、USAGE DISPLAY および USAGE DISPLAY-1 データ項目の表記および実行時の処置に影響を与えます。



デフォルト: CHAR(NATIVE)

省略形: なし

プラットフォームのネイティブの文字表現 (ネイティブの形式) を使用するには、CHAR(NATIVE) を指定します。COBOL for Windows の場合、ネイティブ形式は、実行時に有効なロケールによって示されるコード・ページによって定義されます。コード・ページは、単一バイト ASCII コード・ページまたは ASCII DBCS コード・ページです。

CHAR(EBCDIC) と CHAR(S390) は同義です。これらは、DISPLAY および DISPLAY-1 データ項目が zSeries の文字表現 (つまり EBCDIC) であることを示します。

ただし、USAGE 文節の NATIVE 句で定義された DISPLAY および DISPLAY-1 データ項目は、CHAR(EBCDIC) オプションの影響を受けません。これらは常にプラットフォームのネイティブ形式で格納されます。

CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションは、実行時の処理に次のような影響を及ぼします。

- **USAGE DISPLAY および USAGE DISPLAY-1 項目:** USAGE DISPLAY で記述されたデータ項目内の文字は、単一バイトの EBCDIC 形式として処理されます。USAGE DISPLAY-1 で記述されたデータ項目内の文字は、EBCDIC DBCS 形式として処

理されます (後続の記述で、*EBCDIC* という用語は、USAGE DISPLAY の単一バイトの EBCDIC 形式および USAGE DISPLAY-1 の EBCDIC DBCS 形式を指しています)。

- ネイティブ形式でエンコードされたデータは、端末からの ACCEPT で EBCDIC 形式に変換されます。
- EBCDIC データは、端末への DISPLAY でネイティブ形式に変換されます。
- 英数字リテラルおよび DBCS リテラルの内容は、EBCDIC でエンコードされたデータ項目への割り当てのため、EBCDIC 形式に変換されます。
CHAR(EBCDIC) オプションが有効な場合の文字データの比較に関する規則については、COLLSEQ オプションに関する関連参照内の表を参照してください。
- 編集には EBCDIC 文字を使用します。
- 埋め込みには EBCDIC スペースを使用します。英数字操作 (割り当てや比較など) に使用されるグループ項目は、グループ内の基本項目の定義に関わらず、単一バイトの EBCDIC スペースで埋め込まれます。
- USAGE DISPLAY 項目への割り当て、またはこの項目との関係条件において、VALUE 文節内で使用される表意定数 SPACE または SPACES は、1 バイトの EBCDIC スペース (つまり X'40') として扱われます。
- DISPLAY-1 項目への割り当て、またはこの項目との関係条件において、VALUE 文節内で使用される表意定数 SPACE または SPACES は、1 バイトの EBCDIC DBCS スペース (つまり X'4040') として扱われます。
- Class テストは、EBCDIC の値範囲に基づいて実行されます。

• USAGE DISPLAY 項目

- CALL *identifier*、CANCEL *identifier*、または形式 6 SET ステートメント内の *program-name* はネイティブ形式に変換されます (*identifier* で示されるデータ項目が EBCDIC でエンコードされている場合)。
- ASSIGN USING *data-name* の *data-name* で示されるデータ項目内の *file-name* は、ネイティブ形式に変換されます (データ項目が EBCDIC でエンコードされている場合)。
- SORT-CONTROL 特殊レジスター内の *file-name* は、ソートまたはマージ関数に渡される前にネイティブ形式に変換されます (SORT-CONTROL には、暗黙的な定義 USAGE DISPLAY があります)。
- ゾーン 10 進数データ (USAGE DISPLAY を使用した数値 PICTURE 文節) および display 浮動小数点データは、EBCDIC 形式として処理されます。例えば、PIC S9 value "1" の値は、X'31' ではなく X'F1' です。

- **グループ項目:** 英数字グループ項目は、USAGE DISPLAY 項目と同様に扱われます。(英数字グループ項目の USAGE 文節は、グループ自体ではなくグループ内の基本項目に適用されます。)

16 進数リテラルが文字データに割り当てられるか、文字データと比較される場合は、16 進数リテラルが EBCDIC 文字を表すものと想定されます。例えば、X'C1' は、値 'A' を持つ英数字項目と等しくなります。

表意定数 HIGH-VALUE または HIGH-VALUES、LOW-VALUE または LOW-VALUES、SPACE または SPACES、ZERO または ZEROS、および QUOTE または QUOTES は論理的に、EBCDIC でエンコードされたデータ項目の割り当てまたは比較を行うための EBCDIC 文字表現として扱われます。

非数値の DISPLAY 項目間の比較では、照合シーケンスとして、2 進数 (16 進数) 値に基づく文字順序シーケンスが使用され、1 バイト文字の代替照合シーケンスが指定されている場合は、これによって変更されます。

関連タスク

198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』

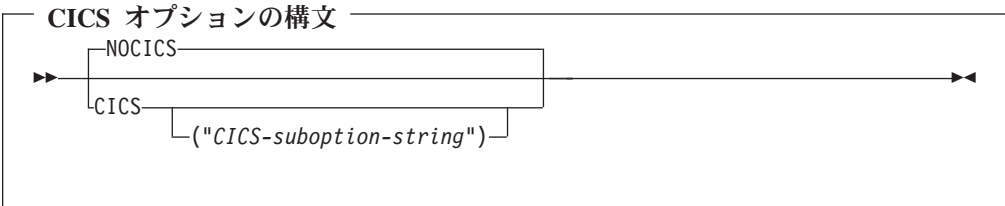
関連参照

631 ページの『付録 B. zSeries ホスト・データ形式についての考慮事項』

258 ページの『COLLSEQ』

CICS

CICS コンパイラー・オプションを指定すると、組み込みの CICS 変換プログラムが使用可能になり、CICS サブオプションを指定できるようになります。COBOL ソース・プログラムに EXEC CICS ステートメントが含まれており、プログラムが分離型の CICS 変換プログラムで処理されていないときは、CICS オプションを使用する必要があります。



デフォルト: NOCICS

省略形: なし

CICS オプションは、CICS プログラムをコンパイルする場合にのみ使用してください。CICS オプションを指定してコンパイルされたプログラムは、非 CICS 環境では実行することができません。

重要: CICS オプションを使用する場合、コンパイラーは TXSeries V6.1 (またはそれ以降) へのアクセスを必要とします。

NOCICS オプションを指定した場合、ソース・プログラム内で検出された CICS ステートメントはすべて診断され、破棄されます。

引用符または単一引用符のどちらかを使用して、CICS サブオプションのストリングを区切ります。

上記の構文は、CBL または PROCESS ステートメントのいずれかで使用できます。CICS オプションを cob2 コマンドで使用する場合、ストリング区切り文字に使用できる文字は一重引用符 (') だけです。(例: -q"CICS('options')")。

長いサブオプション・ストリングを、複数のサブオプション・ストリングに分割して、複数の CBL ステートメントに置くことができます。それぞれの CICS サブオプションは、指定された順に連結されます。例えば、ソース・ファイル mypgm.cbl に以下のコードが含まれているとします。

```
cb1 . . . CICS("string2") . . .  
cb1 . . . CICS("string3") . . .
```

コマンド `cob2 mypgm.cbl -q"CICS('string1')"` を発行すると、コンパイラーは次の CICS サブオプション・ストリングを組み込みの CICS 変換プログラムに渡します。

```
"string1 string2 string3"
```

連結ストリングはシングル・スペースで区切られます。コンパイラーが同じ CICS サブオプションの複数インスタンスを検出した場合は、連結ストリングの中の最後のサブオプション指定が有効になります。コンパイラーでは、連結されたサブオプション・ストリングの長さは 4KB に制限されます。

関連概念

366 ページの『組み込みの CICS 変換プログラム』

関連タスク

362 ページの『CICS のもとで実行する COBOL プログラムのコーディング』

365 ページの『CICS プログラムのコンパイルおよび実行』

関連参照

251 ページの『矛盾するコンパイラー・オプション』

COLLSEQ

COLLSEQ は、英数字および DBCS オペランドを比較するための照合シーケンスを指定します。

COLLSEQ オプションの構文

→→ COLLSEQ(BINARY
LOCALE
EBCDIC) →→

デフォルト: COLLSEQ(BIN)

省略形は、CS(L)、CS(E)、CS(BIN)、CS(B) です。

COLLSEQ に次のサブオプションを指定できます。

- COLLSEQ(EBCDIC): ASCII 照合シーケンスではなく EBCDIC 照合シーケンスを使用します。
- COLLSEQ(LOCALE): (ロケールの照合に関する国/地域別情報と整合した) ロケールに依存する照合を使用します。
- COLLSEQ(BIN): 16 進値の文字を使用します。ロケール設定は影響しません。この設定を行うと、実行時のパフォーマンスが向上します。

|
|
|

STANDARD-1、STANDARD-2、または EBCDIC の英字名を持つソースに PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節を使用する場合は、英数字オペランドの比較では COLLSEQ オプションが無視されます。PROGRAM COLLATING SEQUENCE is NATIVE を指定した場合は、COLLSEQ オプションが適用されます。それ以外の場合は、PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節で指定された英字名がリテラルで定義されているときに、COLLSEQ オプションによって指定された照合シーケンスが使用されます。このオプションは、この英字名で指定されたユーザー定義のシーケンスによって変更されます。(詳細については、ALPHABET 文節の関連参照をご覧ください。)

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節は、DBCS 比較には影響しません。

前述のサブオプション NATIVE は推奨できません。NATIVE サブオプションを指定する場合は、COLLSEQ(LOCALE) が前提となります。

次の表に、PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節が指定されていない場合に、比較に使用されるデータの型 (ASCII または EBCDIC) および有効な COLLSEQ オプションに基づいて、適用できる変換および照合シーケンスをまとめます。このオプションが指定されている場合は、コンパイラー・オプションの指定よりもソースの指定が優先されます。CHAR オプションによって、データが ASCII になるか EBCDIC になるかが決まります。

表 33. 被比較数のデータ型および照合シーケンスが比較に与える影響

被比較数	COLLSEQ(BIN)	COLLSEQ(LOCALE)	COLLSEQ(EBCDIC)
両方とも ASCII	変換は行われません。比較は 2 進数値 (ASCII) に基づきます。	変換は行われません。比較は現行のロケールに基づきます。	両方の被比較数が EBCDIC に変換されます。比較は 2 進数値 (EBCDIC) に基づきます。
ASCII と EBCDIC の混在	EBCDIC の被比較数が ASCII に変換されます。比較は 2 進数値 (ASCII) に基づきます。	EBCDIC の被比較数が ASCII に変換されます。比較は現行のロケールに基づきます。	ASCII の被比較数が EBCDIC に変換されます。比較は 2 進数値 (EBCDIC) に基づきます。
両方とも EBCDIC	変換は行われません。比較は 2 進数値 (EBCDIC) に基づきます。	両方の被比較数が ASCII に変換されます。比較は現行のロケールに基づきます。	変換は行われません。比較は 2 進数値 (EBCDIC) に基づきます。

関連タスク

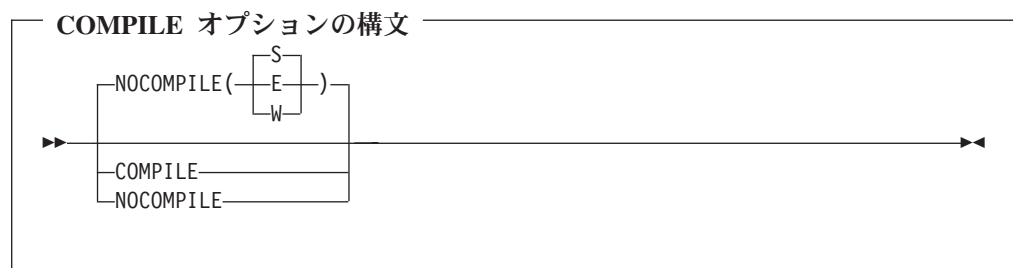
8 ページの『照合シーケンスの指定』
203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

関連参照

255 ページの『CHAR』
ALPHABET 文節

COMPILE

COMPILE オプションは、重大エラーがあっても完全コンパイルを強制的に行う場合に限り、使用してください。すべての診断およびオブジェクト・コードが生成されます。コンパイルの結果として重大エラーが発生した場合は、生成されたオブジェクト・コードを実行しないでください。実行した場合の結果は保証されず、異常終了する場合があります。



デフォルト: NOCOMPILE(S)

省略形: CINOC

NOCOMPILE にサブオプションを指定しないで使用すると、構文検査を要求します(診断だけが作成され、オブジェクト・コードは生成されません)。

NOCOMPILE に W、E、または S を付けて使用すると、条件付き完全コンパイルを行います。コンパイラーが指定されたレベルのエラーを見つけると、完全コンパイル(診断およびオブジェクト・コード) は停止し、構文検査だけを継続します。

無条件 NOCOMPILE を要求すると、オブジェクト・コードが作成されないなので、次のオプションは効力を持ちません。

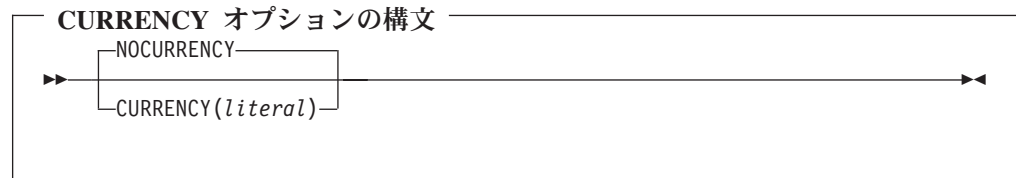
- LIST
- SSRANGE
- OPTIMIZE
- TEST

関連参照

226 ページの『コンパイラー検出エラーに関するメッセージおよびリスト』

CURRENCY

CURRENCY オプションを使用すれば、COBOL プログラムで使用する代替のデフォルト通貨記号を指定することができます。(デフォルトの通貨記号はドル記号 (\$) です。)



デフォルト: NOCURRENCY

省略形: CURRINOCURR

NOCURRENCY を指定すると、代替のデフォルト通貨記号が使用されません。

デフォルト通貨記号を変更するには、CURRENCY(*literal*) を指定します。ここで、*literal* は、単一文字を表す有効な COBOL 英数字リテラル (オプションで 16 進リテラル) です。以下のリストに示すリテラルを指定することはできません。

- 数値 0 から 9
- 英大文字 A B C D E G N P R S V X Z またはその英小文字
- スペース
- 特殊文字 * + - / , . ; () “ = ’
- 表意定数
- ヌル終了リテラル
- DBCS リテラル
- 国別リテラル

プログラムが 1 つの通貨タイプしか処理しない場合には、CURRENCY SIGN 文節の代わりに CURRENCY オプションを使用して、プログラムの PICTURE 文節で使用する通貨記号を指定できます。プログラムで複数の通貨タイプを処理する場合は、CURRENCY SIGN 文節と WITH PICTURE SYMBOL 句を併用して、異なる通貨記号タイプを指定しなければなりません。

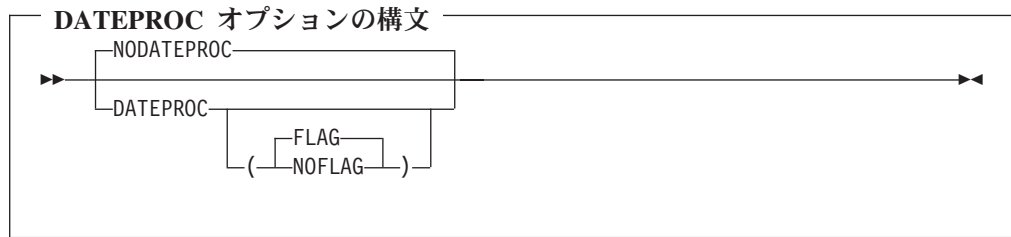
CURRENCY オプションと CURRENCY SIGN 文節の両方をプログラムで使用した場合は、CURRENCY オプションの方が無視されます。CURRENCY SIGN 文節で指定した通貨記号を、PICTURE 文節で使うことができます。

NOCURRENCY オプションが有効なときに、CURRENCY SIGN 文節を省略すると、通貨記号の PICTURE 記号としてドル記号 (\$) が使用されます。

区切り文字: CURRENCY オプション・リテラルは、QUOTE|APOST コンパイラ・オプションの設定に関係なく、単一引用符または二重引用符で区切ることができます。

DATEPROC

DATEPROC オプションは、COBOL コンパイラの 2000 年言語拡張を使用可能にする場合に使用します。



デフォルト: NODATEPROC、または DATEPROC(FLAG) (DATEPROC だけが指定された場合)

省略形: DPINODP

DATEPROC(FLAG)

DATEPROC(FLAG) を指定すると、2000 年言語拡張が使用可能になり、言語エレメントが拡張機能を使用するか、または言語エレメントが拡張機能の影響を受けるたびに、コンパイラーは診断メッセージを作成します。このメッセージは通常は通知レベルまたは警告レベルのメッセージであり、日付依存型処理に関連するステートメントを識別します。日付構造のエラーまたは矛盾の可能性を識別する追加のメッセージが生成されることもあります。

診断メッセージの作成とソース・リスト内またはソース・リストの後にそれらのメッセージが示されるかどうかは、FLAG コンパイラー・オプションの設定に左右されます。

DATEPROC(NOFLAG)

DATEPROC(NOFLAG) を指定すると、2000 年言語拡張は有効になりますが、COBOL ソースにエラーまたは矛盾がない限り、コンパイラーは関連メッセージを作成しません。

NODATEPROC

NODATEPROC は、このコンパイル単位に関して拡張機能を使用可能にしないことを示します。このオプションは、日付関連プログラム構造に、次のような影響を与えます。

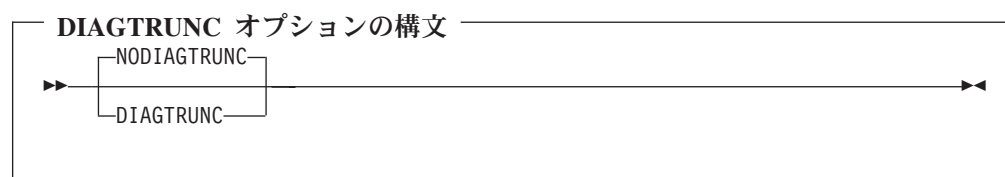
- DATE FORMAT 文節は構文検査されますが、プログラムの実行には影響しなくなります。
- DATEVAL と UNDATE 組み込み関数は無効です。すなわち、組み込み関数によって戻り値は引数の値と同じになります。
- YEARWINDOW 組み込み関数は値 0 を戻します。

関連参照

271 ページの『FLAG』

DIAGTRUNC

DIAGTRUNC を使用すると、受け取り側が数値である MOVE ステートメントの場合に、受け取りデータ項目の整数桁数が送り出しデータ項目またはリテラルよりも少ないときには、コンパイラーは、重大度 4 (警告) の診断メッセージを出します。複数の受け取り側があるステートメントでは、切り捨てられる可能性があるそれぞれの受け取り側ごとにメッセージが出されます。



デフォルト: NODIAGTRUNC

省略形: DTR、NODTR

診断メッセージは、次のようなステートメントに関連した暗黙の移動の場合にも出されます。

- INITIALIZE
- READ . . . INTO
- RELEASE . . . FROM
- RETURN . . . INTO
- REWRITE . . . FROM
- WRITE . . . FROM

送信フィールドが参照変更である場合を除いて、英数字データ名またはリテラルの送り出し側から数値の受け取り側への移動についても、診断が出されます。

TRUNC(BIN) オプションを指定した場合は、COMP-5 の受け取り側についても、2 進数の受け取り側についても診断は行われません。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

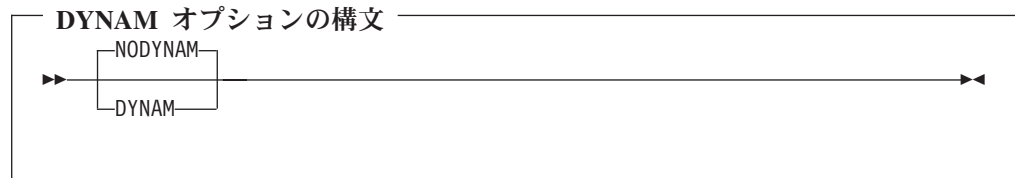
108 ページの『参照修飾子』

関連参照

293 ページの『TRUNC』

DYNAM

DYNAM を使用すると、CALL *literal* ステートメントにより呼び出された、ネストされていない、別々にコンパイルされたプログラムを実行時に動的にロードしたり (CALL の場合)、削除したり (CANCEL の場合) することができます。 (CALL *identifier* ステートメントの場合、常にターゲット・プログラムは実行時にロードされます。このオプションの影響を受けません。)



デフォルト: NODYNAM

省略形: DYNINODYN

DYNAM オプションが有効な場合にのみ、CALL リテラル・ステートメントに対して ON EXCEPTION 句の条件が発生することがあります。

制限: DYNAM コンパイラー・オプションは、分離型または組み込みの CICS 変換プログラムで変換されるプログラムで使用してはなりません。

NODYNAM を使用した場合は、リンカーを通じてターゲット・プログラムが解決されます。

DYNAM オプションを使用した場合、次のステートメントの動作は、

```
CALL "myprogram" . . .
```

次のステートメントと同じになります。

```
MOVE "myprogram" to id-1
CALL id-1 ...
```

関連概念

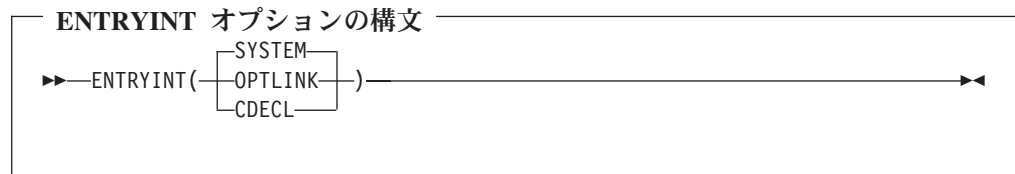
511 ページの『CALL identifier および CALL literal』

関連タスク

541 ページの『DLL の作成』

ENTRYINT

PROCEDURE DIVISION または ENTRY ステートメントの USING 句で、プログラムの入り口点に該当する呼び出しインターフェース規約を指定するには、ENTRYINT を使用します。



デフォルト: ENTRYINT(SYSTEM)

省略形: なし

(CALLINT を使用して、呼び出し用の呼び出しインターフェース規約を選択します。)

SYSTEM SYSTEM サブオプションは、プラットフォームの標準システムのリンケージ規約が呼び出し規約となることを指定します。この規約は、システムの Windows ベースの API で使用されるリンケージ STDCALL です。

重要: 呼び出し先プログラムに複数の入り口点がある場合は、この規約を使用できない場合があります。

OPTLINK

OPTLINK サブオプションは、呼び出しインターフェース規約が OPTLINK であることを指定します。OPTLINK は、SYSTEM 規約に代わる高速の規約です。OPTLINK は、既存の IBM C および C++ 関数と、COBOL および PL/I プログラムが使用します。ネスト済みプログラム用に生成される結合は、常に OPTLINK です。

CDECL CDECL サブオプションは、呼び出しインターフェース規約が CDECL であることを指定します。CDECL は、Microsoft^(R) Visual C/C++ for Windows 関数とのインターフェースに使用されます。CDECL は、Microsoft C および C/C++ 関数のデフォルト規約です。

関連タスク

516 ページの『COBOL と C/C++ 用のリンケージ規約の設定』

531 ページの『複数の入り口点のコーディング』

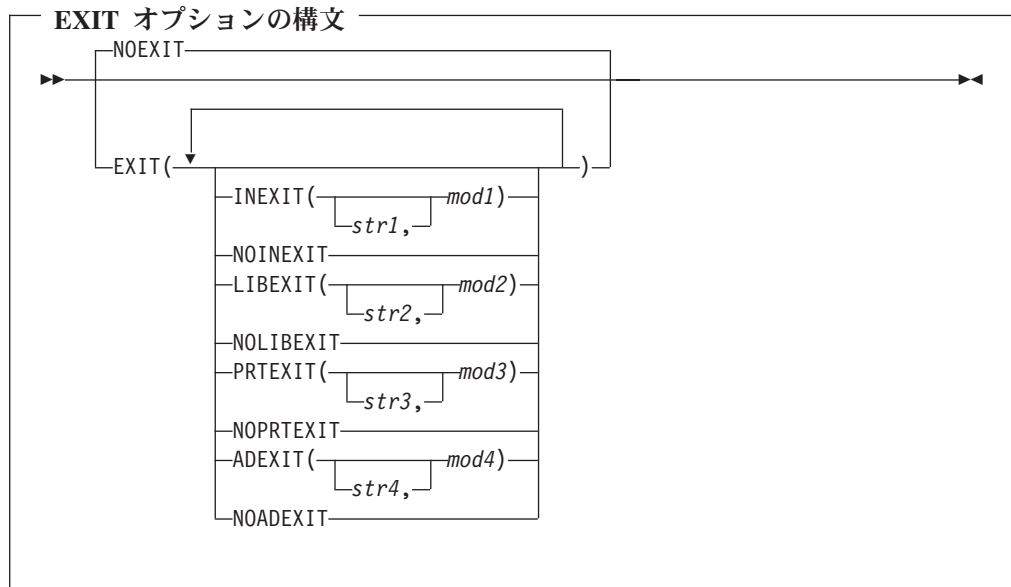
関連参照

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

EXIT

EXIT オプションは、SYSIN、SYSLIB (またはコピー・ライブラリー)、および SYSPRINT の代わりにユーザー提供モジュールをコンパイラーが受け入れることができるようにする場合に使用します。

EXIT モジュールを作成するときには、モジュールが DLL モジュールとしてリンクされていることを確認してから、COBOL コンパイラーで実行してください。EXIT モジュールは、プラットフォームのシステム・リンケージ規約とともに呼び出されます。



デフォルト: NOEXIT

省略形: EX(INXINOINX,LIBXINOLIBX,PRTXINOPRTX,ADXINOADX)

サブオプションをまったく指定せずに EXIT オプションを指定する (つまり、EXIT() を指定する) と、NOEXIT が有効になります。サブオプションは、コンマまたはスペースで区切って任意の順序で指定することができます。サブオプションの肯定形式と否定形式 (INEXIT|NOINEXIT、LIBEXIT|NOLIBEXIT、PRTEXTIT|NOPRTEXTIT、または ADEXIT|NOADEXIT) の両方を指定した場合は、最後に指定された形式が有効になります。同じサブオプションを複数回指定すると、最後に指定したものが有効になります。

SYSADATA の場合、ADEXIT サブオプションは、SYSADATA レコードごとに、そのレコードがファイルに書き込まれた直後に呼び出されることになるモジュールを提供します。

PROCESS なし: EXIT オプションは、PROCESS(CBL) ステートメントでは指定できません。このオプションは、環境変数 COBOPT を使用するか、または cob2 コマンドのオプションとしてのみ指定することができます。

INEXIT(['str1'],mod1)

コンパイラーは、SYSIN ではなく、ユーザー提供のロード・モジュール (mod1 はモジュール名) からソース・コードを読み取ります。

LIBEXIT(['str2'],mod2)

コンパイラーは、library-name または SYSLIB ではなく、ユーザー提供のロード・モジュール (mod2 はモジュール名) からコピーブックを入手します。COPY ステートメントまたは BASIS ステートメントと一緒に使用するためです。

PRTEXIT(['str3'],mod3)

コンパイラーは、プリンター宛先の出力を、SYSPRINT ではなく、ユーザー提供のロード・モジュール (*mod3* はモジュール名) に渡します。

ADEXIT(['str4'],mod4)

コンパイラーは、SYSADATA 出力を、ユーザー提供のロード・モジュール (*mod4* はモジュール名) に渡します。

モジュール名 *mod1*、*mod2*、*mod3*、および *mod4* は、同じものを参照することが可能です。

サブオプション '*str1*'、'*str2*'、'*str3*'、および '*str4*' は、ロード・モジュールに渡される文字ストリングです。これらのストリングはオプションです。これらを使用する場合は、64 文字以内の長さにし、単一引用符で囲む必要があります。任意の文字を使用できますが、組み込む単一引用符は二重にしなければならず、小文字は大文字に変換されます。

文字ストリング形式

'*str1*'、'*str2*'、'*str3*'、または '*str4*' が指定された場合、そのストリングは次の形式で、適切なユーザー出口モジュールに渡されます。ここで、LL はストリングの長さを含むハーフワード (ハーフワード境界) です。次の表に、パラメーター・リスト内に使用される文字ストリングの場所を示します。

LL	ストリング
----	-------

ユーザー出口作業域

出口を使用すると、コンパイラーはユーザー出口作業域を提供します。この作業域を使用して、出口モジュールによって割り振られたストレージのアドレスを保存することができます。これにより、モジュールは再入可能な状態になります。

ユーザー出口作業域は、フルワード境界に常駐する 4 フルワードです。この作業域が 2 進ゼロに初期設定された後、最初の出口ルーチンが呼び出されます。作業域のアドレスは、パラメーター・リストの出口モジュールに渡されます。初期化後、コンパイラーは作業域に参照を行いません。このため、コンパイル時に複数の出口がアクティブになる場合は、作業域を使用するための独自の規則を確立する必要があります。例えば、INEXIT モジュールは作業域の最初のワードを使用し、LIBEXIT モジュールは 2 番目のワードを使用し、PRTEXIT モジュールは 3 番目のワードを使用します。

リンケージ規約

EXIT モジュールは、COBOL プログラム間、ライブラリー・ルーチン間、および COBOL プログラムとライブラリー・ルーチン間で標準リンケージ規約を使用します。呼び出しチェーンを正しくトレースするためには、これらの規則を知る必要があります。

出口モジュールのパラメーター・リスト

次の表に、コンパイラーが出口モジュールとやり取りするために使用するパラメーター・リストの形式を示します。

表 34. 出口モジュールのパラメーター・リスト

オフセット	内容	項目の説明
00	ユーザー出口タイプ	操作を実行するユーザー出口を識別するハーフワード。 1=INEXIT; 2=LIBEXIT; 3=PRTEXIT; 4=ADEXIT
02	命令コード	操作のタイプを示すハーフワード。 0=OPEN; 1=CLOSE; 2=GET; 3=PUT; 4=FIN
04	戻りコード	出口モジュールによって設定されるフルワードで、要求された操作の状況を示します。 0=Successful; 4=End-of-data; 12=Failed
08	データ長	出口モジュールが設定するフルワードで、GET 操作によって戻されるレコードの長さを指定します。
12	データまたは 'str2'	データは、出口モジュールが設定するフルワードで、GET 操作の際にユーザー所有のバッファー内のレコードのアドレスが入ります。 'str2' は OPEN にのみ適用されます。(ハーフワード境界上の) 最初のハーフワードにストリングの長さが入り、その後にストリングが続きます。
16	ユーザー出口作業域	ユーザー出口モジュールでできるように、コンパイラーが提供する 4 フルワードの作業域。
32	テキスト名	完全修飾テキスト名を含むヌル終了ストリングのアドレスが入るフルワード。FIN にのみ適用されます。
36	ユーザー出口パラメーター・ストリング	4 エlement配列のアドレスが入るフルワード。各Elementは、2 バイト長のフィールドの後に、出口パラメーター・ストリングを含む 64 文字のストリングが続く構造になっています。

LIBEXIT の場合は、パラメーター・ストリング配列の 2 番目のElementだけが使用され、LIBEXIT パラメーター・ストリングの長さ、このパラメーター・ストリング自体が格納されます。

INEXIT の使用

INEXIT を指定すると、コンパイラーは初期化時に出口モジュール (*mod1*) をロードし、OPEN 命令コードを使用してモジュールを呼び出します。これにより、モジュールは、処理対象のソースを準備し、OPEN 要求の状況をコンパイラーに戻すことができます。その後は、コンパイラーがソース・ステートメントを要求するたびに、GET 命令コードによって出口モジュールが呼び出されます。出口モジュールは、次のステートメントのアドレスと長さ、または (ソース・ステートメントがそれ以上存在しない場合は) データ終了標識のいずれかを戻します。データ終了が存在する場合、コンパイラーは CLOSE 命令コードを使用して出口モジュールを呼び出し、モジュールがその入力に関するリソースをすべて解放できるようにします。

コンパイラーはパラメーター・リストを使用して、出口モジュールと連絡します。パラメーター・リストは、10 個のフルワードで構成されます。戻りコード、データ

長、およびデータ・パラメーターは、出口モジュールによってコンパイラーに戻され、他の項目はコンパイラーから出口モジュールに渡されます。

パラメーター・リストの内容と各項目の説明については、前述の表を参照してください。

LIBEXIT の使用

LIBEXIT を指定すると、コンパイラーは初期化時に出口モジュール (*mod2*) をロードします。コンパイラーは、COPY または BASIS ステートメントが検出されるたびに、このモジュールを呼び出してコピーブックを入手します。

LIB の使用: LIBEXIT を指定する場合は、LIB コンパイラー・オプションが有効でなければなりません。

最初の呼び出しでは、OPEN 命令コードを使用してモジュールが呼び出されます。これにより、モジュールは指定された *library-name* を処理対象として準備できるようになります。新規の *library-name* が初めて指定された場合にも、OPEN 命令コードが発行されます。出口モジュールは、OPEN 要求の状況を戻りコードによってコンパイラーに渡します。

OPEN 命令コードによって呼び出された出口が戻されると、FIND 命令コードによって出口モジュールが呼び出されます。出口モジュールは、指定された *library-name* 内で要求された *text-name* (または *basis-name*) に位置を設定します。この場所が「アクティブ・コピーブック」になります。位置決めが完了すると、終了モジュールは該当する戻りコードをコンパイラーに渡します。

コンパイラーが GET 命令コードを使用して出口モジュールを呼び出すと、出口モジュールは、アクティブ・コピーブックからコピーされるレコードの長さとアドレスをコンパイラーに渡します。GET 操作は、データ終了標識がコンパイラーに渡されるまで繰り返されます。

データ終了が存在する場合、コンパイラーは CLOSE 要求を発行して、出口モジュールがその入力に関係するリソースをすべて解放できるようにします。

ネスト済み COPY ステートメント: アクティブ・コピーブックからのレコードに、COPY ステートメントを含めることができます。(ただし、ネストされた COPY ステートメントに REPLACING 句を含めたり、REPLACING 句を持つ COPY ステートメントに、ネストされた COPY ステートメントを含めたりすることはできません。) 有効な、ネストされた COPY ステートメントが検出されると、コンパイラーは要求を発行します。

- ネストされた COPY ステートメントから要求された *library-name* が以前にオープンされていない場合、コンパイラーは OPEN 命令コードを使用してこの出口モジュールを呼び出し、その後、新しい *text-name* に対しては FIND を使用します。
- 要求された *library-name* がすでにオープンしている場合、コンパイラーは新しく要求された *text-name* に対して FIND 命令コードを発行します (ここでは OPEN は発行されません)。

コンパイラーは、*text-name* への再帰呼び出しを許可しません。つまり、コピーブックは、そのコピーブックのデータの終わりに達するまでの間、ネストされた一連の COPY ステートメントの中で一度しか指定できません。

出口モジュールは、OPEN または FIND 要求を受け取ると、アクティブ・コピーブックに関する制御情報をスタックにプッシュしてから、要求された操作 (OPEN または FIND) を完了します。今度は、新しく要求された text-name (または basis-name) がアクティブ・コピーブックになります。

データ終了標識がコンパイラーに渡されるまで、一連の GET 要求を使用した通常の方法で処理が続けられます。

ネストされたアクティブ・コピーブックのデータ終了が検出されると、出口モジュールはその制御情報をスタックからポップします。コンパイラーからの次の要求は FIND であるため、出口モジュールは前のアクティブ・コピーブックに位置決めを再設定することができます。

コンパイラーが GET 要求を使用して出口モジュールを呼び出したら、出口モジュールはこのコピーブックから前に渡された同一レコードを渡す必要があります。同一レコードが渡されたことをコンパイラーが検証すると、データ終了標識が渡されるまで、GET 要求を使用して処理が続けられます。

LIBEXIT に使用されるパラメーター・リストの内容と各項目の説明については、前述の表を参照してください。

PRTEXT の使用

PRTEXT を指定すると、コンパイラーは初期化時に出口モジュール (*mod3*) をロードします。この出口モジュールは、SYSPRINT データ・セットの代わりに使用されます。

コンパイラーは、OPEN 命令コードを使用してこのモジュールを呼び出します。これにより、モジュールは、処理を行うための出力先を準備し、OPEN 要求の状況をコンパイラーに戻すことができます。その後は、コンパイラーが行を印刷しようとするたびに、PUT 命令コードによって出口モジュールが呼び出されます。コンパイラーが印刷対象レコードのアドレスと長さを渡すと、出口モジュールは戻りコードによって PUT 要求の状況をコンパイラーに渡します。印刷されるレコードの最初のバイトには、ANSI プリンター制御文字が入ります。

コンパイルが終了する前に、コンパイラーは CLOSE 命令コードを使用して出口モジュールを呼び出し、モジュールがその出力先に関係するリソースをすべて解放できるようにします。

PRTEXT に使用されるパラメーター・リストの内容と各項目の説明については、前述の表を参照してください。

ADEXIT の使用

ADEXIT を指定すると、コンパイラーは初期化時に出口モジュール (*mod4*) をロードします。出口モジュールは、SYSADATA データ・セットに書き込まれるレコードごとに呼び出されます。

コンパイラーは、OPEN 命令コードを使用してこのモジュールを呼び出します。これにより、モジュールは、処理を行うための準備をし、OPEN 要求の状況をコンパイラーに戻すことができます。その後は、コンパイラーが SYSADATA レコードを書き込むたびに、PUT 命令コードによって出口モジュールが呼び出されます。コン

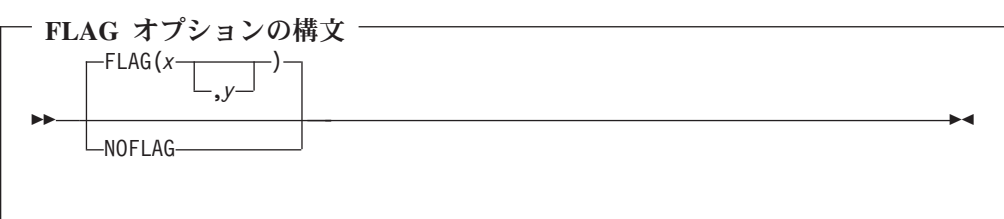
パイラーが SYSADATA レコードのアドレスと長さを渡すと、出口モジュールは戻りコードによって PUT 要求の状況をコンパイラーに渡します。

コンパイルが終了する前に、コンパイラーは CLOSE 命令コードを使用して出口モジュールを呼び出し、モジュールがリソースをすべて解放できるようにします。

ADEXIT に使用されるパラメーター・リストの内容と各項目の説明については、前述の表を参照してください。

FLAG

FLAG(*x*) を使用すると、重大度レベル *x* 以上のエラーに関して診断メッセージをソース・リストの終わりに作成することができます。



デフォルト: FLAG(I,I)

省略形: FINOF

x および *y* は、I、W、E、S、U のいずれかになります。

FLAG(*x*,*y*) を使用すると、重大度レベル *x* 以上のエラーに関して診断メッセージをソース・リストの終わりに作成し、重大度レベル *y* 以上のエラーに関してはエラー・メッセージをソース・リストに直接組み込むことができます。*y* に指定する重大度は、*x* に指定する重大度より低い値にすることができません。FLAG(*x*,*y*) を使用する場合は、SOURCE コンパイラー・オプションも指定する必要があります。

ソース・リスト内のエラー・メッセージは、メッセージ・コードを指す矢印の中にステートメント番号を埋め込むことによって、強調されます。メッセージ・コードの後にメッセージ・テキストが続きます。以下に、その例を示します。

000413	MOVE CORR WS-DATE TO HEADER-DATE
==000413==>	IGYPS2121-S " WS-DATE " was not defined as a data-name. . . .

FLAG(*x*,*y*) が有効である場合は、重大度 *y* 以上のメッセージが、リスト内でそのメッセージの原因となった行の後に組み込まれます。(例外のメッセージについては、以下に示す関連参照資料を参照してください。)

エラーのフラグ付けを抑止する場合は、NOFLAG を使用してください。NOFLAG を使用しても、コンパイラー・オプションのエラー・メッセージは抑止されません。

組み込みメッセージ

- レベル U メッセージを組み込みに指定するのはお勧めできません。レベル U のメッセージの組み込みの指定は受け入れられますが、ソース・リスト内には何のメッセージも作成されません。
- FLAG オプションは、コンパイラ・オプションの処理前に作成された診断メッセージには影響しません。
- コンパイラ・オプション、CBL ステートメントまたは PROCESS ステートメント、または BASIS、COPY、および REPLACE の各ステートメントの処理中に生成された診断メッセージがソース・リストに組み込まれることはありません。このようなメッセージはすべて、コンパイラ出力の先頭に表示されます。
- *CONTROL または *CBL ステートメントの処理中に作成されたメッセージは、ソース・リストに組み込まれません。

関連参照

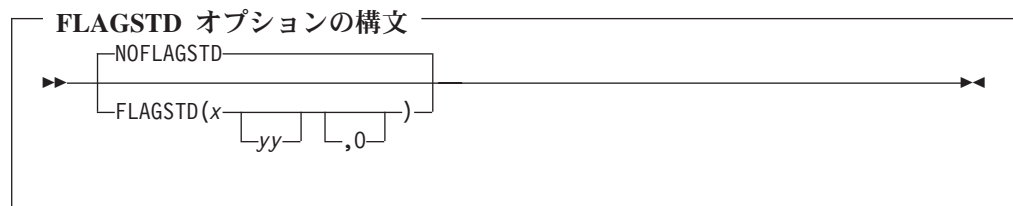
226 ページの『コンパイラ検出エラーに関するメッセージおよびリスト』

FLAGSTD

FLAGSTD は、準拠しているとみなされる COBOL 85 標準のサブセットのレベルを指定し、プログラムに組み込まれている標準 COBOL 85 エLEMENTに関する通知メッセージを取得する場合に使用します。

フラグ付け処理には、次の項目のどれかを指定することができます。

- 連邦情報処理標準 (FIPS) COBOL の選択されたサブセット
- オプション・モジュールのいずれか
- 廃止された言語エレメント
- サブセットとオプション・モジュールの任意の組み合わせ
- サブセットと古くなったエレメントの任意の組み合わせ
- IBM 拡張 (IBM 拡張にフラグが付けられるのは、FLAGSTD が指定され、かつ、「非規格合致外」として識別された場合です。)



デフォルト: NOFLAGSTD

省略形: なし

x は、準拠しているとみなす標準 COBOL 85 のサブセットを指定します。

M 最小サブセットからのものではない 言語エレメントに、「規格合致外」というフラグを付けます。

I 最小サブセットまたは中間サブセットからのものではない 言語エレメントに、「規格合致外」というフラグを付けます。

H 高位サブセットが使用されており、言語エレメントにはサブセットによってフラグが付けられません。IBM 拡張であるエレメントには、「規格合致外、IBM 拡張」というフラグが付けられます。

yy は、単一文字または 2 文字の組み合わせによって、サブセットに組み込むオプション・モジュールを指定します。

D デバッグ・モジュール・レベル 1 のエレメントには、「規格合致外」というフラグを付けません。

N 分割モジュール・レベル 1 のエレメントには、「規格合致外」というフラグを付けません。

S 分割モジュール・レベル 2 のエレメントには、「規格合致外」というフラグを付けません。

S を指定すると、N が含まれます (N は S のサブセットです)。

0 は、廃止された言語エレメントに「廃止」のフラグを付けることを表します。

通知メッセージはソース・プログラム・リストに表示され、以下の情報を示しています。

- ・ エレメントの「廃止」、「規格合致外」、または「非規格合致外」(廃止になり、しかも規格合致外の言語エレメントには廃止のフラグだけを立てます)。
- ・ そのエレメントが含まれている文節、ステートメント、またはヘッダー。
- ・ そのエレメントが含まれる文節、ステートメント、またはヘッダーのソース・プログラム行および開始位置。
- ・ そのエレメントが属するサブセットまたはオプション・モジュール。

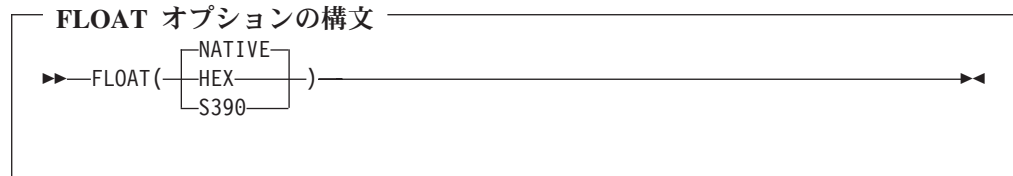
FLAGSTD には、予約語の標準セットが必要です。

次の例では、メッセージ・コードとテキストとともに、フラグ付き文節、ステートメントまたはヘッダーが出てきた行番号と桁が示されています。最下部には、フラグ付けされた項目の合計とそれらのタイプがまとめられています。

LINE	COL	CODE	FIPS MESSAGE TEXT
		IGYDS8211	Comment lines before "IDENTIFICATION DIVISION": nonconforming nonstandard, IBM extension to ANS/ISO 1985.
11.14		IGYDS8111	"GLOBAL clause": nonconforming standard, ANS/ISO 1985 high subset.
59.12		IGYPS8169	"USE FOR DEBUGGING statement": obsolete element in ANS/ISO 1985.
FIPS MESSAGES TOTAL			STANDARD NONSTANDARD OBSOLETE
		3	1 1 1

FLOAT

プラットフォームのネイティブの浮動小数点表記形式を使用するには、`FLOAT(NATIVE)` を使用します。COBOL for Windows の場合、ネイティブ形式は IEEE 形式になります。



デフォルト: `FLOAT(NATIVE)`

省略形: なし

`FLOAT(HEX)` と `FLOAT(S390)` は同義です。これらは、`COMP-1` および `COMP-2` データ項目が一貫して zSeries (つまり 16 進数の浮動小数点形式) で表現されることを示します。

- 16 進数の浮動小数点値は、算術演算 (計算または比較) が行われる前に IEEE 形式に変換されます。
- IEEE 浮動小数点値は、浮動小数点データ・フィールドに格納される前に、16 進形式に変換されます。
- 浮動小数点項目への割り当ては、ソースの浮動小数点データ (外部の浮動小数点など) を必要に応じて 16 進数の浮動小数点値に変換することによって行われます。

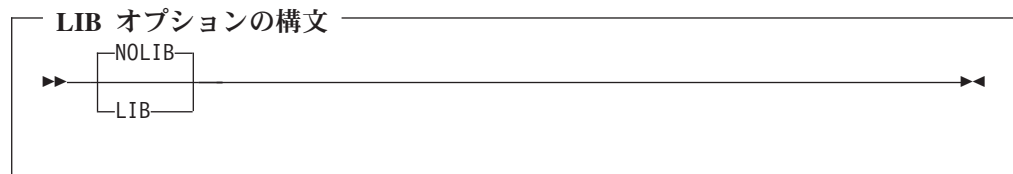
ただし、`USAGE` 文節の `NATIVE` キーワードで定義された `COMP-1` および `COMP-2` データ項目は、`FLOAT(S390)` オプションの影響を受けません。これらは常にプラットフォームのネイティブ形式で格納されます。

関連参照

631 ページの『付録 B. zSeries ホスト・データ形式についての考慮事項』

LIB

プログラムで `COPY`、`BASIS`、または `REPLACE` ステートメントを使用する場合は、`LIB` コンパイラー・オプションを有効にする必要があります。



デフォルト: `NOLIB`

省略形: なし

COPY ステートメントと BASIS ステートメントの場合は、さらに、コピーされたコードをコンパイラーが獲得するライブラリー（複数も可）を定義する必要があります。

- (リテラルではなく) ユーザー定義語で `library-name` が指定された場合は、対応する環境変数を設定して、コピーブックに必要なディレクトリーとパスを指す必要があります。
- COPY ステートメントに対して `library-name` を省略した場合は、`cob2` コマンドの `-Ixxx` オプションを使用して、検索対象のパスを指定することができます。
- リテラルを使用して `library-name` を指定した場合は、そのリテラル値が実際のパス名として扱われます。

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

251 ページの『矛盾するコンパイラー・オプション』

LINECOUNT

`LINECOUNT(nnn)` は、コンパイル・リストの各ページに印刷する行数を指定する場合に使用します。ページ編集を抑止する場合には、`LINECOUNT(0)` を使用してください。

LINECOUNT オプションの構文

▶—`LINECOUNT(nnn)`—▶

デフォルト: `LINECOUNT(60)`

省略形: `LC`

`nnn` は、10 から 255 の整数か、0 でなければなりません。

`LINECOUNT(0)` を指定すると、コンパイル・リストではページ替えが行われません。

コンパイラーは、タイトル用に `nnn` のうちの 3 行を使用します。例えば、`LINECOUNT(60)` を指定すると、57 行のソース・コードが出力リストの各ページに印刷されます。

LIST

`LIST` コンパイラー・オプションは、ソース・コードのアセンブラー言語拡張のリストを作成する場合に使用します。

LIST オプションの構文

▶—`NOLIST`
—`LIST`—▶

デフォルト: NOLIST

省略形: なし

PROCEDURE DIVISION でコーディングした *CONTROL (または *CBL)、LIST、または NOLIST ステートメントは、効力を持ちません。これらはコメントとして扱われます。

アセンブラー・リスト・ファイル: 結果として生成される .asm ファイルの数と名前は、SEPOBJ オプションの設定によって異なります。

SEPOBJ ソース・ファイル内で最初のプログラムに使用されるファイルには、ソース・ファイルの名前が付きます。ソース・ファイル内で後続のすべてのプログラムに使用されるファイルには、対応する PROGRAM-ID の名前が付きます。

NOSEPOBJ

ソース・ファイル内のすべてのプログラムに 1 つのファイルが使用される場合、そのファイルにはソース・ファイルの名前が付きます。

関連タスク

340 ページの『リストの入手』

関連参照

*CONTROL (*CBL) ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

LSTFILE

生成されたコンパイラー・リストを、有効なロケールで指定されたコード・ページでエンコードするには、LSTFILE(LOCALE) を指定します。生成されたコンパイラー・リストを UTF-8 でエンコードするには、LSTFILE(UTF-8) を指定します。

LSTFILE オプションの構文

▶▶ LSTFILE(LOCALE
UTF-8) ▶▶

デフォルト: LSTFILE(LOCALE)

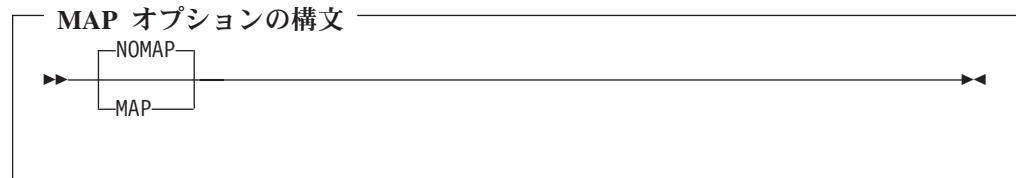
省略形: LST

関連参照

197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』

MAP

MAP を使用すると、DATA DIVISION に定義された項目のリストを作成することができます。



デフォルト: NOMAP

省略形: なし

出力には、以下の項目が含まれます。

- DATA DIVISION のマップ
- グローバル・テーブル
- リテラル・プール
- ネストされたプログラム構造マップ、およびプログラム属性
- プログラムの WORKING-STORAGE および LOCAL-STORAGE のサイズ

MAP 出力を制限したい場合は、DATA DIVISION で *CONTROL MAP または NOMAP ステートメントを使用してください。*CONTROL NOMAP の後のソース・ステートメントは、*CONTROL MAP ステートメントによって出力が通常の MAP 形式に戻されない限り、リストには含められません。以下に、その例を示します。

*CONTROL NOMAP	*CBL NOMAP
01 A	01 A
02 B	02 B
*CONTROL MAP	*CBL MAP

MAP オプションを選択すると、組み込み MAP 報告書もソース・コード・リストに印刷することができます。圧縮 MAP 情報は、DATA DIVISION の FILE SECTION、LOCAL-STORAGE SECTION、および LINKAGE SECTION のデータ名定義の右側に印刷されます。XREF データと組み込み MAP 要約の両方が同じ行にあるときは、組み込み要約の方が先に印刷されます。

344 ページの『例: MAP 出力』

関連概念

329 ページの『第 18 章 デバッグ』

関連タスク

340 ページの『リストの入手』

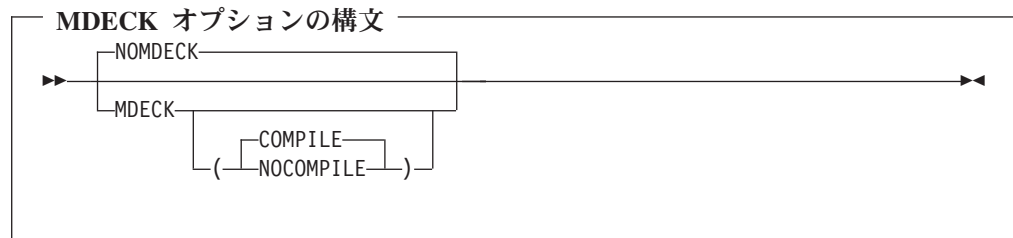
関連参照

*CONTROL (*CBL) ステートメント (『COBOL for Windows 言語解説書』)

MDECK

MDECK コンパイラー・オプションは、ライブラリー処理からの出力 (つまり、COPY、BASIS、REPLACE、または EXEC SQL INCLUDE ステートメントの拡張) をファイルに書き込むよう指定します。

MDECK 出力は、現行ディレクトリーで、COBOL ソース・ファイルと同じ名前を持ち、拡張子が .DEK であるファイルに書き込まれます。



デフォルト: NOMDECK

省略形は、NOMD、 MD、 MD(C)、 MD(NOC)です。

サブオプション:

- MDECK(COMPILE) が有効である場合、コンパイルは、通常、COMPILEINOCOMPIL オプションの設定にしたがって、ライブラリー処理と MDECK 出力ファイルの生成が完了してから継続されます。
- MDECK(NOCOMPIL) が有効である場合、コンパイルは、ライブラリー処理が完了し拡張されたソース・プログラム・ファイルが書き込まれた後に終了します。COMPILE オプションの設定に関わらず、これ以上コンパイラーによる構文検査またはコード生成は行われません。

サブオプションを指定せずに MDECK を指定すると、MDECK(COMPILE) が暗黙に設定されます。

オプション仕様:

PROCESS または CBL ステートメントで MDECK を指定することはできません。このオプションを指定できるのは、以下を使用する場合のみです。

- cob2 コマンド・オプション
- COBOPT 環境変数

MDECK 出力ファイルの内容:

MDECK オプションを、CICS コンパイラー・オプション (組み込みの CICS 変換プログラム) または SQL コンパイラー・オプション (DB2 コプロセッサ) と一緒に使用すると、一般に、COBOL ソース・プログラム内の EXEC CICS または EXEC SQL ステートメントが MDECK 出力にそのまま組み込まれます。ただし、EXEC SQL INCLUDE ステートメントは、COPY ステートメントと同じように MDECK出力に展開されます。

CBL、PROCESS、*CONTROL、および *CBL カード・イメージは、MDECK 出力ファイルの適切な位置に渡されます。

バッチ・コンパイル (単一入力ファイル内に複数の COBOL ソース・プログラムが含まれている) の場合、完全な拡張ソースを含んでいる単一 MDECK 出力ファイルが作成されます。

SEQUENCE コンパイラー・オプション処理はすべて MDECK ファイル内に反映されます。

COPY ステートメントは、MDECK ファイルにコメントとして組み込まれます。

関連参照

251 ページの『矛盾するコンパイラー・オプション』

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

NCOLLSEQ

NCOLLSEQ オプションの構文

```
NCOLLSEQ( [ BINARY | LOCALE ] )
```

NCOLLSEQ は、クラス国別オペランドを比較するための照合シーケンスを指定します。

デフォルト: NCOLLSEQ(BINARY)

省略形: NCS(L)、NCS(BIN)、NCS(B)

16 進値の文字ペアを使用するには、NCOLLSEQ(BIN) を指定します。

有効なロケール値と関連付けられた照合順序のアルゴリズムを使用するには、NCOLLSEQ(LOCALE) を使用します。

関連タスク

190 ページの『2 つのクラス国別オペランドの比較』

203 ページの『ロケール付きの照合シーケンスの制御』

NSYMBOL

NSYMBOL オプションは、リテラルおよび PICTURE 文節で使用する N 記号の解釈を制御し、国別処理や DBCS 処理が必要かどうかを指示します。

NSYMBOL オプションの構文

```
NSYMBOL( [ NATIONAL | DBCS ] )
```

デフォルト: NSYMBOL(NATIONAL)

省略形: NS(NAT|DBCS)

NSYMBOL(NATIONAL) を指定した場合:

- USAGE 文節のない、記号 N のみからなる PICTURE 文節で定義されたデータ項目は、USAGE NATIONAL 文節が指定されている場合のように扱われます。
- N". . ." または N'. . .' の形式のリテラルは、国別リテラルとして扱われます。

NSYMBOL(DBCS) を指定した場合:

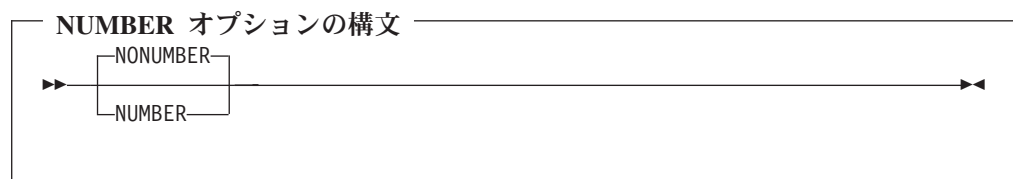
- USAGE 文節のない、記号 N のみからなる PICTURE 文節で定義されたデータ項目は、USAGE DISPLAY-1 文節が指定されている場合のように扱われます。
- N". . ." または N'. . .' の形式のリテラルは、DBCS リテラルとして扱われます。

NSYMBOL(DBCS) オプションは、前のリリースの IBM COBOL との互換性を提供します。NSYMBOL(NATIONAL) オプションにより、前述の言語エレメントの処理がこの点に関して標準 COBOL 2002 に準拠するようになります。

NSYMBOL(NATIONAL) は、Unicode データや Java とのインターオペラビリティのためのオブジェクト指向構文を使用するアプリケーションの場合の推奨オプションです。

NUMBER

NUMBER コンパイラー・オプションは、ソース・コードの中に行番号があり、それらの番号がエラー・メッセージと SOURCE、MAP、LIST、および XREF のリストで必要な場合に使用してください。



デフォルト: NONNUMBER

省略形: NUMINONUM

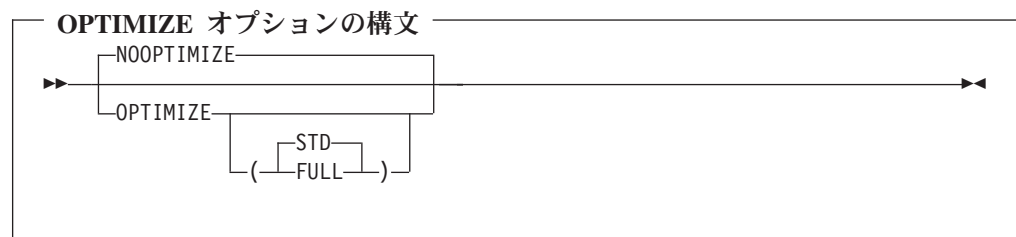
NUMBER を要求すると、コンパイラーは、桁 1 から 6 に数字だけが含まれているかどうか、および番号が数字の照合シーケンスになっているかどうかを検査します。(これに反して、SEQUENCE を使用すると、これらの桁の文字が EBCDIC 照合シーケンスになっているかどうかを検査されます。)行番号が順序どおりになっていないことがわかると、コンパイラーは先行のステートメントの行番号より 1 だけ大きい値の行番号を割り当てます。コンパイラーは、新規の値に 2 つのアスタリスクでフラグを立て、シーケンス・エラーを示すメッセージをリストに組み込みます。シーケンス検査は、先行の行の新しく割り当てられた値に基づいて、次のステートメントから継続されます。

COPY ステートメントを使用する場合、NUMBER が有効なときは、ソース・プログラムの行番号とコピーブックの行番号が対応している必要があります。

ソース・コードの中に行番号がない場合や、コンパイラーにソース・コードの行番号を無視させる場合には、NONUMBER を使用してください。NONUMBER が有効であると、コンパイラーは、ソース・ステートメントの行番号を生成し、それらの番号をリストで参照として使用します。

OPTIMIZE

OPTIMIZE は、オブジェクト・プログラムの実行時間を短縮するために使用します。最適化によって、オブジェクト・プログラムが使用するストレージの量を減らすこともできます。実行される最適化には、定数の伝搬や、結果が使用されない計算の除去などが含まれます。OPTIMIZE を使用すると、コンパイル時間が長くなり、プログラム内のステートメントの順序が変わることがあるので、デバッグの際にはこのオプションを使用しないでください。



デフォルト: NOOPTIMIZE

省略形: OPTINOOPT

サブオプションを付けずに OPTIMIZE を指定すると、OPTIMIZE(STD) が有効になります。

FULL サブオプションは、OPT(STD) で実行される最適化に加えて、コンパイラーが DATA DIVISION から未参照のデータ項目を廃棄し、さらにこれらのデータ項目をそれぞれの VALUE 文節の値に初期化するコードの生成を抑止するように要求します。OPT(FULL) が有効であると、未参照の 77 レベル項目および基本 01 レベルがすべて破棄されます。さらに、どの従属項目も参照されなければ、01 レベルのグループ項目も破棄されます。削除された項目はリストの中で示されます。MAP オプションが有効であれば、データ・マップ情報内の XXXXX の BL 番号は、そのデータ項目が破棄されたことを示します。

推奨: データベース・アプリケーションには、OPTIMIZE(FULL) を使用してください。関連付けられた COPY ステートメントによって未使用の定数が組み込まれた場合は、それらの定数が除去されるため、パフォーマンスを大幅に向上させることができます。ただし、データベース・アプリケーションが未使用のデータ項目に依存する場合は、下記の推奨事項を参照してください。

未使用データ項目: プログラムで未使用データ項目を意図的に利用している場合は、OPT(FULL) を使用しないでください。従来は、次のような 2 つの方法が一般に使用されていました。

- 参照されたテーブルの後に未参照のテーブルを置き、2 番目のテーブルにアクセスするために最初のテーブルの範囲外添え字を使用する (以前の OS/VS COBOL

プログラムで時折使用されていた手法)。プログラムがこの手法を使用しているかどうかを調べるには、SSRANGE コンパイラー・オプションと CHECK(ON) ランタイム・オプションと一緒に使用してください。この問題に対処するには、新しい COBOL の大きなテーブルのコーディング機能を使用して、テーブルを 1 つだけ使用します。

- 目印となるデータ項目を WORKING-STORAGE SECTION に置いて、プログラム・データの始めと終わりを識別できるようにする、あるいはそのデータを使用するライブラリー・ツール用のプログラムのコピーに印を付けてプログラムのバージョンを識別できるようにする方法。この問題を解決するには、これらの項目を VALUE 文節ではなく、PROCEDURE DIVISION ステートメントで初期化します。この方法を使用すると、コンパイラーはこれらの項目が使用されているものと見なし、削除しません。

重大レベル以上のエラーが起こった場合、OPTIMIZE オプションはオフにされます。

OPTIMIZE オプションと TEST オプションは、どちらか一方しか指定することができません。両方を指定した場合は、OPTIMIZE が無視されます。

関連概念

604 ページの『最適化』

関連参照

251 ページの『矛盾するコンパイラー・オプション』

PGMNAME

PGMNAME オプションは、プログラム名と入り口点名の取り扱いを制御します。

PGMNAME オプションの構文

➡ PGMNAME (UPPER
MIXED) ➡

デフォルト: PGMNAME(UPPER)

省略形: PGMN(LUILM)

COBOL for OS/390^(R) & VM との互換性を保つため、LONGMIXED および LONGUPPER もサポートされています。

LONGUPPER は、UPPER、LU、または U と省略することができ、LONGMIXED は、MIXED、LM、または M と省略することができます。

COMPAT: PGMNAME(COMPAT) を指定すると、PGMNAME(UPPER) が設定され、警告メッセージが戻されます。

PGMNAME は、以下のコンテキストで使用される名前の取り扱いを制御します。

- PROGRAM-ID 段落で定義されたプログラム名
- ENTRY ステートメントのプログラム入り口点名

- 以下におけるプログラム名参照:
 - CALL ステートメント
 - CANCEL ステートメント
 - SET *procedure-pointer* TO ENTRY ステートメント
 - SET *function-pointer* TO ENTRY ステートメント

PGMNAME(UPPER)

PGMNAME(UPPER) を使用する場合、PROGRAM-ID 段落で COBOL ユーザー定義語として指定されるプログラム名は、次のようなユーザー定義語に関する通常の COBOL 規則に従っていなければなりません。

- プログラム名の長さは最大 30 文字です。
- 名前で使用される文字はすべて英字、数字、またはハイフンでなければならない。
- 少なくとも 1 文字は英字にする必要があります。
- ハイフンを先頭文字や末尾文字として使用することはできません。

定義または参照のいずれかで、プログラム名をリテラルとして指定する場合は、次のようになります。

- プログラム名の長さは最高 160 文字まで。
- 名前で使用される文字はすべて英字、数字、またはハイフンでなければならない。
- 少なくとも 1 文字は英字にする必要があります。
- ハイフンを先頭文字や末尾文字として使用することはできません。

外部プログラム名は、大文字に変換された英字で処理されます。

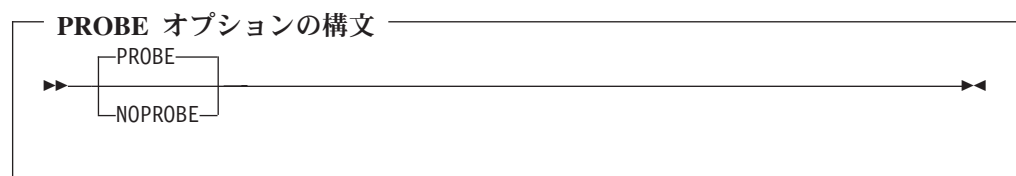
PGMNAME(MIXED)

PGMNAME(MIXED) を使用する場合、プログラム名は、切り捨てられたり、変換されたり、大文字に変換されることなく、現状のまま処理されます。

PGMNAME(MIXED) を使用する場合、すべてのプログラム名定義は、プログラム名のリテラル形式を使用して、PROGRAM-ID 段落または ENTRY ステートメントで指定する必要があります。

PROBE

マルチスレッド環境でプログラムを実行する可能性がある場合は、PROBE を使用します。



デフォルト: PROBE

省略形: なし

PROBE は、スタック・プローブの生成を要求します。スタック上に十分な記憶域がない場合は、この余分のコードにより記憶保護例外が発生します。

NOPROBE は、より効率的なコードを生成するため、非スレッド環境に適しています。ただし、NOPROBE を使用したコンパイルは、プログラムが次の基準のうち少なくとも 1 つに該当する場合だけに実行してください。

- /STACK リンカー・オプションを使用して、すべての WORKING-STORAGE および LOCAL-STORAGE データ項目を格納するために、必要量を超えるメモリーをコミットする場合。
- スタックが常時割り振られることを保証できる場合。例えば、各スレッドの開始時に 1 回だけ実行して、各ページに順次アクセスし、最後のページを保護ページとする保護ルーチンを記述する場合などが考えられます。
- WORKING-STORAGE および LOCAL-STORAGE データ項目は、スタック上に 1KB 未満の記憶域を必要とします。

プログラムが例外を受け取れるため、および WebSphere^(R) Developer for System z^(TM) のデバッグ・パースペクティブが正しく機能するために、スタックの容量を十分に確保する必要があります。

関連タスク

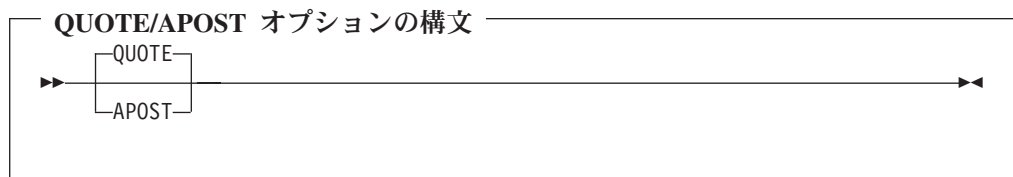
553 ページの『第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備』

関連参照

321 ページの『/STACK』

QUOTE/APOST

QUOTE は、表意定数 [ALL] QUOTE または [ALL] QUOTES が 1 つまたは複数の引用符 (") 文字を表すようにする場合に使用します。APOST は、表意定数 [ALL] QUOTE または [ALL] QUOTES が 1 つまたは複数の引用符 (') 文字を表すようにする場合に使用します。



デフォルト: QUOTE

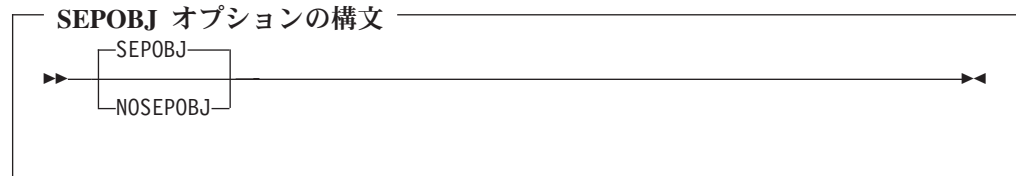
省略形: QIAPOST

区切り文字: APOST または QUOTE オプションが有効であるかどうかに関係なく、単一引用符または二重引用符のいずれかをリテラル区切り文字として使用できます。

リテラルの開始の区切り文字として使用する区切り文字は、そのリテラルの終了の区切り文字としても使用しなければなりません。

SEPOBJ

SEPOBJ は、バッチ・コンパイル内で最外部にある各 COBOL プログラムを、単一のオブジェクト・ファイルとしてではなく個別のオブジェクト・ファイルとして生成するかどうかを指定します。



デフォルト: SEPOBJ

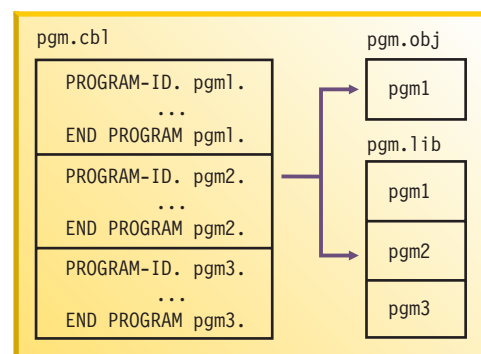
省略形: なし

バッチ・コンパイル

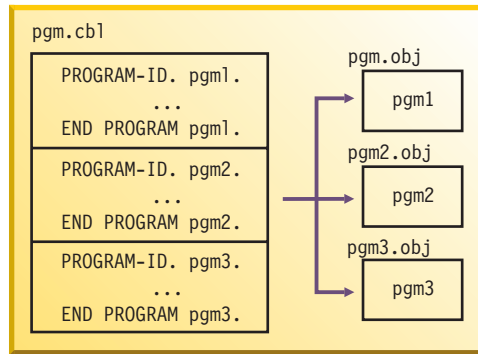
コンパイラーがバッチを 1 回呼び出すことで、複数の最外部プログラム (ネストされていないプログラム) がコンパイルされる場合は、コンパイラー・オプション SEPOBJ によって、そのバッチ・コンパイルのオブジェクト・プログラム出力に対して生成されるファイルの数が決まります。

COBOL ソース・ファイル pgm.cbl に、pgm1、pgm2、pgm3 という名前の 3 つの COBOL 最外部プログラムが含まれているとします。次の図に、オブジェクト・プログラム出力が 2 ファイル (NOSEPOBJ の場合) または 3 ファイルの場合 (SEPOBJ) のどちらで生成されるかを示します。

NOSEPOBJ を使用したバッチ・コンパイル



SEPOBJ を使用したバッチ・コンパイル



使用上の注意

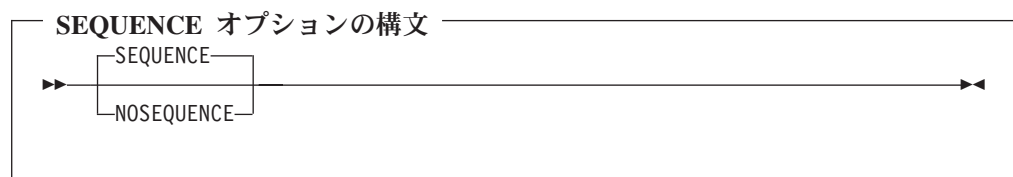
- 上記の例の pgm2 または pgm3 が、別のプログラムからの CALL *identifier* によって呼び出される場合、COBOL 85 標準に準拠するには SEPOBJ オプションを使用する必要があります。
- NOSEPOBJ が有効な場合は、ソース・ファイルの名前に拡張子 .obj または .lib を付けたものが、オブジェクト・ファイルの名前になります。SEPOBJ が有効な場合は、PROGRAM-ID の名前に拡張子 .obj を付けたものが、オブジェクト・ファイル (最初のファイルは除く) の名前になります。
- PROGRAM-ID とオブジェクト・ファイルの名前が一致しない場合、CALL *identifier* で呼び出されるプログラムは、(PROGRAM-ID の名前ではなく) オブジェクト・ファイルの名前で参照されなければなりません。

オブジェクト・ファイルには、当該プラットフォームおよびファイル・システムに対応した、有効なファイル名を付ける必要があります。例えば、FAT ファイル・システムを使用する場合、PROGRAM-ID の名前の長さは 8 文字以内でなければなりません。前述 (NOSEPOBJ を使用した場合) のように、オブジェクト・ファイル名がソース・ファイル名から作成される場合は例外 となります。

SEQUENCE

SEQUENCE を使用すると、コンパイラーはソース・ステートメントの桁 1 から 6 を調べ、各ソース・ステートメントが EBCDIC 照合シーケンスに従って昇順に並んでいるかどうかを検査します。昇順になっていないステートメントがあると、コンパイラーは診断メッセージを出します。

桁 1 から 6 がブランクのソース・ステートメントはこのシーケンス検査には関与せず、したがってメッセージは出されません。



デフォルト: SEQUENCE

省略形: SEQINSEQ

COPY ステートメントを使用する場合、SEQUENCE が有効なときは、ソース・プログラムのシーケンス・フィールドとコピーブックのシーケンス・フィールドが対応している必要があります。

NUMBER と SEQUENCE を使用すると、シーケンス検査は、EBCDIC 照合シーケンスではなく、数字に従って行われます。

この検査と診断メッセージを抑止する場合は、NOSEQUENCE を使用してください。

関連タスク

335 ページの『行シーケンス問題の検出』

SIZE

SIZE は、コンパイルのために使用可能にする主記憶域の量を示すために使用します。

SIZE オプションの構文



デフォルト: 8388608 バイト (約 8MB)

省略形: SZ


nnnnn は 10 進数で、少なくとも 800768 でなければなりません。

nnnK は、1KB 単位で 10 進数を指定します。1KB = 1024 バイトです。受け入れられる最小値は 782K です。

SOSI

SOSI オプションは、リテラル、コメント、および DBCS ユーザー定義語での、値 X'1E' および X'1F' の扱いに影響を与えます。

SOSI オプションの構文



デフォルト: NOSOSI

省略形: なし

NOSOSI NOSOSI を使用すると、値 X'1E' および X'1F' を持つ文字位置がデータ文字として扱われます。

NOSOSI は、COBOL 85 標準に準拠します。

SOSI SOSI を使用すると、COBOL for Windows のシフトアウト (SO) およびシフトイン (SI) 制御文字によって、COBOL ソース・プログラム内の ASCII DBCS 文字ストリングが区切られます。SO 文字と SI 文字は、それぞれ X'1E' と X'1F' のエンコード値を持ちます。

SO 文字と SI 文字は、COBOL for Windows のソース・コードには影響を与えません。ただし、リモート・ファイルが EBCDIC から ASCII に変換されるときデータの処理を正しく行うために、これらの SO 文字と SI 文字がホスト DBCS の SO 文字と SI 文字のプレースホルダーとして機能する場合は例外です。

SOSI オプションが有効な場合は、COBOL for Windows の既存の規則に加えて、次の規則が適用されます。

- すべての DBCS 文字ストリング (ユーザー定義語、DBCS リテラル、英数字リテラル、国別リテラル、およびコメント内) は、SO および SI 文字で区切る必要があります。
- ユーザー定義語には、DBCS 文字と SBCS 文字の両方を含めることはできません。
- DBCS ユーザー定義語の最大長は 14 DBCS 文字です。
- 2 バイトの小文字英字がユーザー定義語内で使用される場合は、それに対応する 2 バイトの大文字英字と同等になります。
- DBCS ユーザー定義語には少なくとも 1 文字を含める必要がありますが、1 バイト表現に、その文字に対応する文字があってはなりません。
- A から Z、a から z、0 から 9、およびハイフン (-) の 1 バイト文字の 2 バイト表現を、DBCS ユーザー定義語に含めることはできません。1 バイト表現でこれらの文字に適用される規則は、2 バイト表現でも適用されます。例えば、ハイフン (-) をユーザー定義語の先頭または末尾文字にすることはできません。
- SOSI コンパイラー・オプションが有効な場合は、X'1E' または X'1F' 値を含む英数字リテラルに対して次の規則が適用されます。
 - X'1E' および X'1F' を使用した文字位置は、SO および SI 文字として扱われます。
 - X'1E' および X'1F' を使用した文字位置は、リテラルの文字ストリング値に含まれます。ただしこれが、16 進数表記で表現されない DBCS や英数字リテラルの一部になっている場合は例外です。
 - SO 文字と SI 文字は、0 個または偶数個の仲介バイトを持つペアでなければなりません (各ペアは SO 文字で始まります)。
 - SO 文字と SI 文字のペアは、ネストすることができません。
- 引用符で区切られた N-literal 内に DBCS の引用符を埋め込むには、DBCS の引用符 1 つを表現するために DBCS の引用符を連続して 2 個使用します。N-literal が引用符で区切られている場合は、このリテラルに単一の DBCS 引用符を含めないでください。この規則は、一重引用符にも適用されます。

- SHIFT-OUT および SHIFT-IN 特殊レジスターは、SOSI オプションが有効かどうかにかかわらず、X'0E' および X'0F' を使用して定義されます。

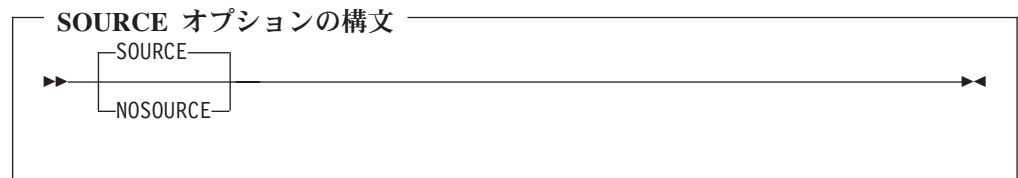
一般に、ホストの COBOL プログラムが SO および SI 文字のエンコード値に依存する場合は、Windows ベースのワークステーションまたは AIX ワークステーションで同じ動作をしません。

関連タスク

500 ページの『ASCII DBCS スtringと EBCDIC DBCS スtringの違いの処理』

SOURCE

SOURCE は、ソース・プログラムのリストを入手する場合に使用します。このリストには、PROCESS または COPY ステートメントによって組み込まれたすべてのステートメントが入ります。



デフォルト: SOURCE

省略形: SINOS

ソース・リストに組み込みメッセージが必要な場合は、SOURCE を必ず指定します。

コンパイラ出力リストにソース・コードを出したくない場合は、NOSOURCE を使用してください。

SOURCE 出力を制限したい場合は、PROCEDURE DIVISION で *CONTROL SOURCE または NOSOURCE ステートメントを使用してください。Source *CONTROL NOSOURCE ステートメントの後のソース・ステートメントは、後続の *CONTROL SOURCE ステートメントによって出力が通常の SOURCE 形式に戻されない限り、リストには含められません。

344 ページの『例: MAP 出力』

関連参照

*CONTROL (*CBL) ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

SPACE

SPACE は、ソース・コード・リストで 1 行送り、2 行送り、または 3 行送りを選択するために使用します。

SPACE オプションの構文



デフォルト: SPACE(1)

省略形: なし

SPACE が意味を持つのは、SOURCE コンパイラー・オプションが有効な場合だけです。

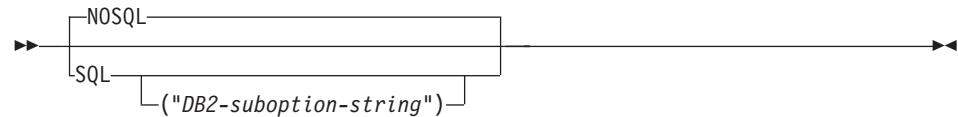
関連参照

289 ページの『SOURCE』

SQL

SQL コンパイラー・オプションを使用すると、DB2 コプロセッサ機能を使用可能にし、DB2 サブオプションを指定できるようになります。 COBOL ソース・プログラムに SQL ステートメントが含まれており、それが DB2 プリコンパイラーで処理されていない場合には、SQL オプションを必ず指定しなければなりません。

SQL オプションの構文



デフォルト: NOSQL

省略形: なし

NOSQL が有効な場合は、ソース・プログラム内で検出された SQL ステートメントは診断され、破棄されます。

DB2 サブオプションのストリングは、引用符または単一引用符を使用して区切ってください。

上記の構文は、CBL または PROCESS ステートメントのいずれかで使用できます。SQL オプションを cob2 コマンドで使用する場合、ストリング区切り文字に使用できる文字は一重引用符 (') だけです (例: -q"SQL('options')")。

関連タスク

355 ページの『第 19 章 DB2 環境用のプログラミング』

358 ページの『SQL オプションを使用したコンパイル』

359 ページの『DB2 サブオプションの分離』

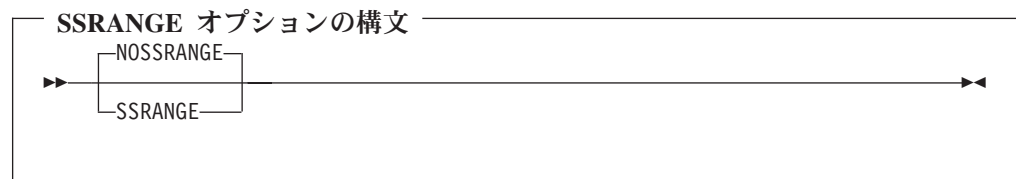
関連参照

251 ページの『矛盾するコンパイラー・オプション』

SSRANGE

SSRANGE を使用すると、添え字 (ALL 添え字を含む) または指標がテーブルの領域外の区域を参照しようとしているかどうかを検査するコードを生成することができます。それぞれの添え字または指標は、個別に妥当性を検査されるわけではありません。むしろ、テーブルの領域外の区域を参照しないようにするために、有効アドレスが検査されます。

定義された最大長の範囲内で参照を行うようにするために、可変長項目も検査されます。



デフォルト: NOSSRANGE

省略形: SSRINOSSR

次の点を確認するために、参照変更式が検査されます。

- 開始位置が 1 以上である。
- 開始位置が、サブジェクト・データ項目の現在の長さより大きくない。
- 長さの値 (指定されている場合) が 1 以上である。
- 開始位置と長さの値 (指定されている場合) がサブジェクト・データ項目の終わりを越えた区域を参照していない。

SSRANGE がコンパイル時に有効であると、範囲検査コードが生成されます。ランタイム・オプションとして CHECK(OFF) を指定すれば、範囲検査を抑制することができます。そうすれば、範囲検査コードはオブジェクト・コードで休止状態になります。オプションとして、範囲検査コードを使用し、予期しないエラーを再コンパイルせずに解決するときに、役立てることもできます。

範囲外条件が検出されると、エラー・メッセージが生成され、プログラムは終了します。

覚え書き: 範囲検査が行われるのは、プログラムを SSRANGE オプションを指定してコンパイルし、かつ CHECK(ON) オプションを指定して実行した場合だけです。

関連概念

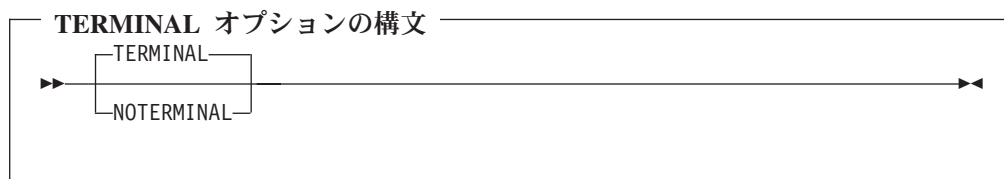
108 ページの『参照修飾子』

関連タスク

335 ページの『有効範囲の検査』

TERMINAL

TERMINAL を使用すると、進行メッセージと診断メッセージをディスプレイ装置に送ることができます。



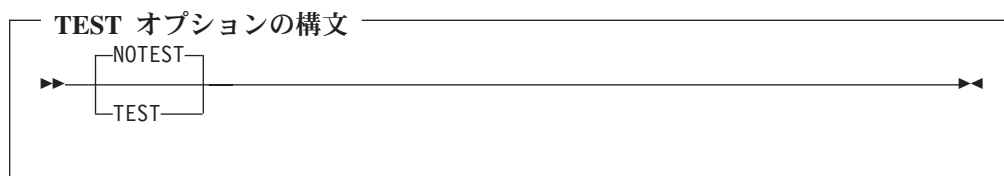
デフォルト: TERMINAL

省略形: TERMINOTERM

この追加の出力が不要な場合は、NOTERMINAL を使用してください。

TEST

TEST を使用すると、デバッガーがシンボリック・ソース・レベルのデバッグを実行できるような、シンボルおよびステートメント情報を含むオブジェクト・コードを生成することができます。



デフォルト: NOTEST

省略形: なし

デバッグ情報を持つオブジェクト・コードを生成しない場合は、NOTEST を使用します。

NOTEST を使用してコンパイルされたプログラムは、デバッガーを使用して実行されますが、デバッグのサポートは限定されます。

WITH DEBUGGING MODE 文節を使用すると、TEST オプションがオフになります。

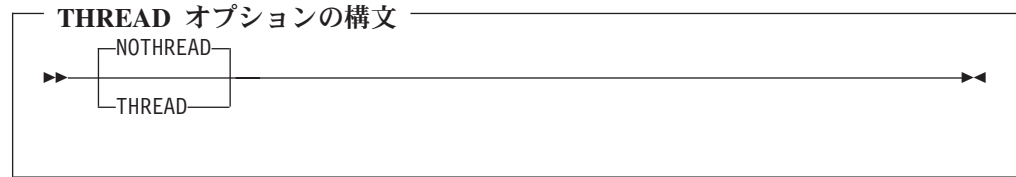
TEST はオプション・リストに表示されますが、競合が発生しているために TEST が無効になる旨を知らせる診断メッセージが発行されます。

関連参照

251 ページの『矛盾するコンパイラー・オプション』

THREAD

THREAD を指定すると、複数のスレッドを持つ実行単位で COBOL アプリケーションを実行できるようになります。



デフォルト: NOTHREAD

省略形: なし

実行単位内のすべてのプログラムは、同じオプション (THREAD または NOTHREAD のいずれか) を使用してコンパイルする必要があります。

THREAD オプションが有効な場合、以下の項目はサポートされません。これらの言語エレメントが検出された場合は、エラーとして診断されます。

- ALTER ステートメント
- DEBUG-ITEM 特殊レジスター
- プロシージャー名が指定されていない GO TO ステートメント
- PROGRAM-ID 文節の INITIAL 句
- RERUN
- 分割モジュール
- STOP リテラル・ステートメント
- STOP RUN
- USE FOR DEBUGGING ステートメント

RERUN は、THREAD を使用した場合はエラーのフラグが立てられますが、NOTHREAD を使用した場合はコメントとして受け入れられます。

CICS TXSeries: THREAD オプションは必須です。

パフォーマンスの考慮事項: THREAD オプションを使用する場合は、自動的に生成される逐次化ロジックのオーバーヘッドが原因で、実行時のパフォーマンスが多少低下することがあります。

関連タスク

365 ページの『CICS プログラムのコンパイルおよび実行』

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

553 ページの『第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備』

TRUNC

TRUNC は、移動および算術演算でのバイナリー・データの切り捨て方法に影響します。

TRUNC オプションの構文



デフォルト: TRUNC(STD)

省略形: なし

TRUNC は、COMP-5 データ項目には効力を持ちません。COMP-5 項目は、TRUNC サブオプションの指定に関係なく、TRUNC(BIN) が有効である場合と同様に処理されます。

TRUNC(STD)

TRUNC(STD) は、MOVE ステートメントおよび算術式の中の USAGE BINARY 受信フィールドにのみ適用されます。TRUNC(STD) が有効であると、算術式の最終結果または MOVE ステートメント中の送信フィールドは、BINARY 受信フィールドの PICTURE 文節の桁数に切り捨てられます。

TRUNC(OPT)

TRUNC(OPT) はパフォーマンス・オプションです。TRUNC(OPT) が有効であると、コンパイラは、データが MOVE ステートメントおよび算術式にある USAGE BINARY 受信フィールドの PICTURE の指定に従うものと想定します。結果は最適な方法で処理され、PICTURE 文節の中の桁数か、またはストレージ内の 2 進数フィールドのサイズ (ハーフワード、フルワード、またはダブルワード) に切り捨てられます。

ヒント: TRUNC(OPT) オプションを使用するのは、2 進数区域に移動されるデータが、2 進数項目に対する PICTURE 文節で定義された値よりも高い精度の値にならないことが確実である場合に限定してください。そうしないと、結果は予測できません。この切り捨ては、想定される最も効果的な方法で実行されます。そのため、結果は、生成される特定のコード・シーケンスに左右されます。特定のステートメントに対して生成されたコード・シーケンスを見なければ、切り捨ての予想は不可能です。

TRUNC(BIN)

TRUNC(BIN) オプションは、USAGE BINARY データを処理するすべての COBOL 言語に適用されます。TRUNC(BIN) が有効な場合、すべての 2 進数項目 (USAGE COMP、COMP-4、または BINARY) は、固有ハードウェア 2 進数項目として、すなわち、それぞれが個々に USAGE COMP-5 と宣言されたものとして処理されます。

- BINARY 受信フィールドは、ハーフワード、フルワード、またはダブルワード境界でのみ切り捨てられます。
- BINARY 送信フィールドは、受け取り側が数値であれば、ハーフワード、フルワード、またはダブルワードとして処理されます。受け取り側が数値でない場合、TRUNC(BIN) は効力を持ちません。
- フィールドの全 2 進内容が重要です。

- DISPLAY は切り捨てを行わずに、2 進フィールドの内容全体を変換します。

推奨事項: 他のプロダクトによって設定される 2 進値を使用するプログラムの場合、推奨オプションは TRUNC(BIN) です。他のプロダクト (DB2、C/C++、および PL/I など) は、COBOL の 2 進数データ項目に、データ項目の PICTURE 文節に従わない値を入れることがあります。データが BINARY データ項目用の PICTURE 文節に矛盾しない場合は、CICS プログラムで TRUNC(OPT) を使用することができます。

USAGE COMP-5 には、個々のデータ項目に TRUNC(BIN) の性質を適用する効果があります。したがって、すべての 2 進数データ項目に対して TRUNC(BIN) を使用することによるパフォーマンス上のオーバーヘッドは、非 COBOL プログラムまたは他のプロダクトやサブシステムに渡されるデータ項目など、一部の 2 進数データ項目にのみ COMP-5 を指定することによって回避できます。COMP-5 の使用は、どの TRUNC サブオプションが有効であっても影響を受けません。

VALUE 文節における大きなリテラル: コンパイラー・オプション TRUNC(BIN) を使用する場合、2 進数データ項目 (COMP、COMP-4、または BINARY) 用の VALUE 文節に指定された数字リテラルは、PICTURE 文節の 9 の数により暗黙指定される値に制限されることはなく、通常、固有 2 進表現 (2、4、または 8 バイト) の容量までの大きさの値を持つことができます。

TRUNC の例 1

```
| 01 BIN-VAR      PIC S99 USAGE BINARY.  
  . . .  
  MOVE 123451 to BIN-VAR
```

次の表に、MOVE 後のデータ項目の値を示します。

データ項目	10 進数	16 進数 ¹	Display
送り出し側	123451	3BIE2101100	123451
受け取り側 TRUNC(STD)	51	33100	51
受け取り側 TRUNC(OPT)	-7621	3BIE2	2J
受け取り側 TRUNC(BIN)	-7621	3BIE2	762J
1. デフォルトの BINARY コンパイラー・オプションを使用した値が示されています。			

ハーフワードのストレージが BIN-VAR に割り振られます。プログラムが TRUNC(STD) オプションでコンパイルされた場合は、この MOVE ステートメントの結果は 51 で、フィールドは、PICTURE 文節に適合するように切り捨てられます。

プログラムが TRUNC(BIN) オプションでコンパイルされた場合、MOVE ステートメントの結果は -7621 です。このような異常に見える結果になるのは、非ゼロの高位桁が切り捨てられたためです。ここでは、生成されたコード・シーケンスは、下位の

ハーフワード量 X'E23B' を受け取り側に移動させるだけです。切り捨てられた新しい値はオーバーフローして 2 進数ハーフワードの符号ビットになるため、値が負の数になります。

123451 は BIN-VAR の PICTURE 文節より高い精度を持つため、この MOVE ステートメントを TRUNC(OPT) オプションでコンパイルしてはなりません。TRUNC(OPT) を使用した場合も、結果は -7621 になります。これは、10 進数の切り捨てを行わないことによって、最高のパフォーマンスが得られたからです。

前提事項: 上記の例は、BINARY(S390) オプションが有効であることを前提とします。

TRUNC の例 2

```
01 BIN-VAR      PIC 9(6)  USAGE BINARY
...
MOVE 1234567891 to BIN-VAR
```

次の表に、MOVE 後のデータ項目の値を示します。

データ項目	10 進数	16 進数 ¹	Display
送り出し側	1234567891	D3102196149	1234567891
受け取り側 TRUNC(STD)	567891	531AA108100	567891
受け取り側 TRUNC(OPT)	567891	001081AA153	567891
受け取り側 TRUNC(BIN)	1234567891	D3102196149	1234567891
1. デフォルトの BINARY コンパイラー・オプションを使用した値が示されています。			

TRUNC(STD) を指定すると、送り出しデータは BINARY 受け取り側の PICTURE 文節に適合するように、6 桁の整数に切り捨てられます。

TRUNC(OPT) を指定すると、コンパイラーは送り出しデータの精度が BINARY 受け取り側の PICTURE 文節の精度よりも大きくないと想定します。この場合、最も効率のよいコード・シーケンスは、TRUNC(STD) が指定されているものとして切り捨てを行うことです。

TRUNC(BIN) を指定すると、BIN-VAR に割り振られた 2 進数フルワードにすべての送り出しデータが収まるため、切り捨ては行われません。

前提事項: 上記の例は、BINARY(S390) が有効であることを前提とします。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

関連タスク

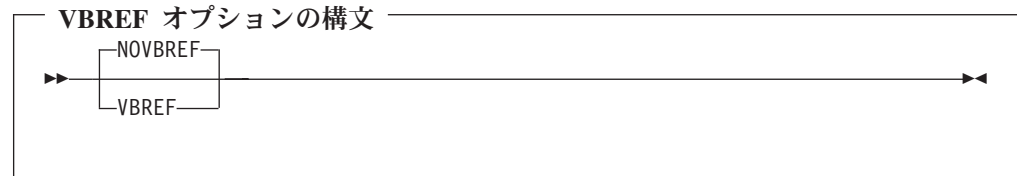
365 ページの『CICS プログラムのコンパイルおよび実行』

関連参照

VALUE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

VBREF

VBREF は、ソース・プログラムの中で使用されるすべての動詞、およびこれらの動詞が使用されている行番号の相互参照を入手するために使用します。また、VBREF はプログラムの中でそれぞれの動詞が使用された回数の合計も出します。



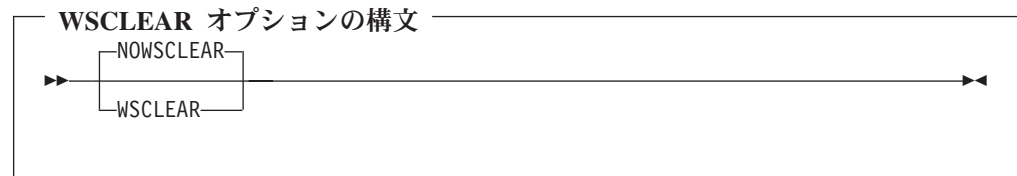
デフォルト: NOVBREF

省略形: なし

コンパイルの効率を高める場合は、NOVBREF を使用してください。

WSCLEAR

WSCLEAR を使用すると、プログラムの初期化時に、そのプログラムの WORKING-STORAGE をクリアして 2 進ゼロにすることができます。ストレージは、VALUE 文節が適用される前にクリアされます。



デフォルト: NOWSCLEAR

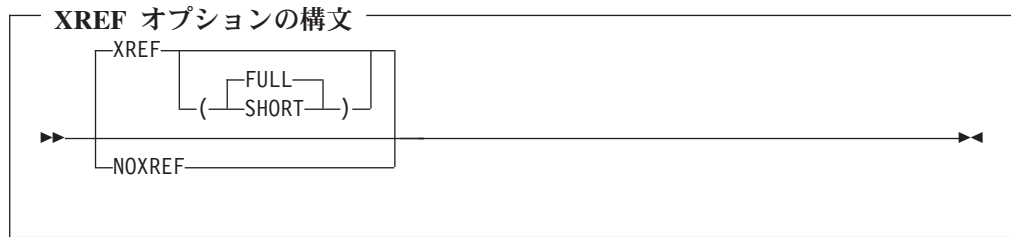
省略形: なし

ストレージのクリア処理をバイパスするには、NOWSCLEAR を使用します。

パフォーマンスの考慮事項: WSCLEAR を使用するとき、オブジェクト・プログラムのサイズやパフォーマンスが懸念される場合は、OPTIMIZE(FULL) も使用することをお勧めします。これにより、DATA DIVISION から未参照のデータ項目をすべて除去するようコンパイラーに命令が出されるため、初期化の時間が短縮されます。

XREF

XREF は、ソート済みの相互参照リストを入手するために使用します。



デフォルト: XREF(FULL)

省略形: XINOX

XREF、XREF(FULL)、または XREF(SHORT) を選択できます。サブオプションを何も指定しないで XREF を指定すると、XREF(FULL) が有効です。

名前は、ロケール設定で示された照合シーケンスの順序でリストされます。この順序を使用して、名前が 1 バイト文字で表現されるか、マルチバイト文字 (DBCS など) を含むかが設定されます。

プログラム内で参照されるすべてのプログラム名、およびそれらが定義されている行番号をリストしているセクションも含まれます。外部プログラム名が識別されます。

XREF と SOURCE を使用した場合は、相互参照情報が元のソースと同じ行に印刷されます。行番号参照またはその他の情報は、リスト・ページの右側に表示されます。組み込み関数を参照するソース行の右側には、IFN という文字と、その関数の引数が定義されている場所の行番号が印字されます。組み込み参照に含められた情報によって、ID が未定義であるか (UND)、1 回を超えて定義されているか (DUP)、項目が暗黙定義であるかどうか (IMP) (特殊レジスターや表意定数など)、プログラム名が外部プログラム名であるかどうか (EXT) がわかります。

XREF と NOSOURCE を使用すると、ソート済みの相互参照リストだけが得られます。

XREF(SHORT) は、相互参照リスト内の明示的に参照されたデータ項目だけを印刷します。XREF(SHORT) は、マルチバイト・データ名とプロシージャ名、および単一バイトの名前に適用されます。

NOXREF を使用すると、このリストは抑止されます。

使用上の注意

- MOVE CORRESPONDING ステートメントで使用されるグループ名は、XREF リストに入れられます。それらのグループの基本名もリストされています。
- データ名の XREF リストでは、文字 M が前に付いている行番号は、そのデータ項目がその行のステートメントによって明示的に変更されたことを示しています。
- XREF リストは追加のストレージを使用します。

関連概念

329 ページの『第 18 章 デバッグ』

関連タスク

340 ページの『リストの入手』

YEARWINDOW

YEARWINDOW を使用すると、COBOL コンパイラーによるウィンドウ化日付フィールド処理に適用する 100 年ウィンドウ (世紀ウィンドウ) の最初の年を指定することができます。

YEARWINDOW オプションの構文

▶—YEARWINDOW(*base-year*)—▶

デフォルト: YEARWINDOW(1900)

省略形: YW

base-year は、100 年ウィンドウの最初の年を表します。次のいずれかの値を使用して、指定する必要があります。

- 1900 から 1999 の間の符号なし 10 進数

これは固定ウィンドウの開始年号を指定します。例えば、YEARWINDOW(1930) は 1930 から 2029 年の世紀ウィンドウを指定します。

- -1 から -99 の負の整数

これは、スライディング・ウィンドウを指定するものです。ウィンドウの最初の年号は、現在の年に負の整数を加算して計算されます。例えば、YEARWINDOW(-80) は、世紀ウィンドウの最初の年がプログラム実行時点の年号より 80 年前であることを指定します。

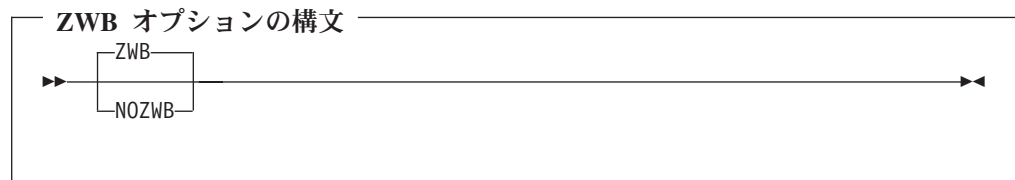
使用上の注意

- YEARWINDOW オプションは、DATEPROC オプションも有効でない限り、効力を持ちません。
- 実行時には、次の 2 つの条件が真でなければなりません。
 - 世紀ウィンドウの開始年号が 1900 年代の年号である。
 - 現在の年号がコンパイル単位の世紀ウィンドウ内にある。

例えば、現在の年号が 2006 年で、DATEPROC オプションが有効な場合に、YEARWINDOW(1900) というオプションを指定すると、プログラムは終了し、エラー・メッセージが出されます。

ZWB

ZWB を使用してコンパイルすると、コンパイラーは、実行時に符号付きゾーン 10 進数 (DISPLAY) フィールドを英数字基本フィールドと比較する前に、そのフィールドから符号を除去します。



デフォルト: ZWB

省略形: なし

I ゾーン 10 進数項目がスケール項目である場合 (すなわち、記号 P をその PICTURE スtring内に含んでいる場合)、比較の際にその項目を使用しても、ZWB の影響を受けることはありません。そのような項目では常に、英数字フィールドとの比較が行われる前に符号が除去されます。

ZWB はプログラムの実行方法に影響します。同じ COBOL ソース・プログラムでも、このオプションの設定によって結果が異なることがあります。

NOZWB は、入力数字フィールドで SPACES をテストする場合に使用します。

第 15 章 コンパイラー指示ステートメント

プログラムのコンパイルを指示するのに役立つコンパイラー指示ステートメントがいくつかとコンパイラー指示が 1 つあります。

以下は、コンパイラー指示ステートメントおよびディレクティブです。

*CONTROL (*CBL) ステートメント

このコンパイラー指示ステートメントは、出力の作成を抑制するかまたは可能にするかを選択します。キーワードの *CONTROL と *CBL は同義語です。

>>CALLINTERFACE 指示

このコンパイラー指示は、引数記述子を生成するかどうかなど、呼び出しのインターフェース規約を指定します。>>CALLINTERFACE を使用して指定された規約は、別の >>CALLINTERFACE 指定が行われるまで有効です。>>CALLINT は、>>CALLINTERFACE の略語です。

>>CALLINTERFACE を使用できるのは、PROCEDURE DIVISION の中だけです。

>>CALLINTERFACE ディレクティブの構文と使用法は、CALLINT コンパイラー・オプションと類似しています。例外は次のとおりです。

- この指示構文には括弧が含まれません。
- この指示は、後述のように、選択した呼び出しに適用できます。
- この指示構文には、キーワード DESCRIPTOR とその変形が含まれます。

サブオプションなしで >>CALLINT を指定すると、使用される呼び出し規約が CALLINT コンパイラー・オプションで区切られます。

例えば、PROG1 が ENTRYINT(OPTLINK) オプションを指定してコンパイルされた COBOL プログラムである場合、>>CALLINT OPTLINK ディレクティブを使用して、PROG1 呼び出しについてのみインターフェースを変更します。

```
>>CALLINT OPTLINK DESC  
CALL "PROG1" USING PARM1 PARM2.  
>>CALLINT  
CALL "PROG2" USING PARM1.
```

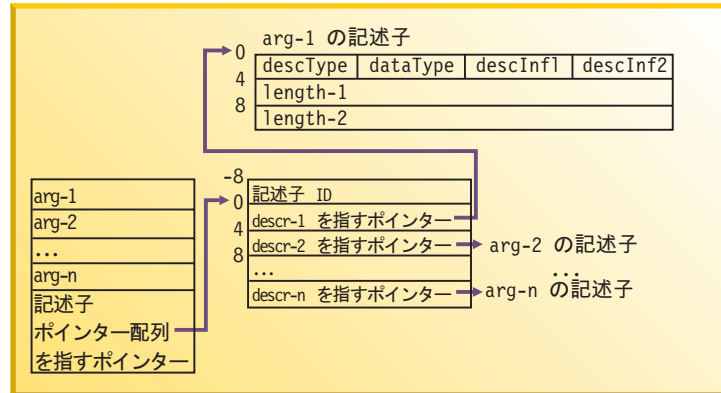
>>CALLINT 指示を指定する場所は、COBOL プロシーチャー・ステートメントが指定可能な場所であればどこでも構いません。例えば、次の構文は有効です。

```
MOVE 3 TO  
>>CALLINTERFACE SYSTEM  
RETURN-CODE.
```

>>CALLINT の影響は、現行のプログラムに限定されます。ネストされたプログラム、または同じバッチ内でコンパイルされたプログラムは、>>CALLINT コンパイラー指示で指定された規則ではなく、CALLINT コンパイラー・オプションを使用して指定された呼び出し規約を継承します。

>>CALLINT SYSTEM DESCRIPTORを使用して呼び出されるルーチンを記述する場合、引数受け渡しの仕組みは次のようになります。

CALL "PROGRAM1" USING arg-1, arg-2, ... arg-n



pointer to descr-n

特定の引数に対する記述子を指します。引数に対する記述子が存在しない場合は 0 になります。

descriptor-ID

このバージョンの記述子を識別するには、COBDESC0 に設定します。これにより、記述子の入力形式が将来変更される場合にも対応できるようになります。

descType

PICTURE X(n) を使用した USAGE DISPLAY、あるいは PICTURE G(n) または N(n) を使用した USAGE DISPLAY-1 の基本データ項目の場合は、X'02' (descElmt) に設定します。それ以外 (数値フィールド、構造体、テーブル) の場合はすべて、X'00' に設定します。

dataType

次のように設定します。

- descType = X'00' の場合: dataType = X'00'
- descType = X'02' で、USAGE が DISPLAY の場合: dataType = X'02' (typeChar)
- descType = X'02' で、USAGE が DISPLAY-1 の場合: dataType = X'09' (typeGChar)

descInf1

常に X'00' に設定します。

descInf2

次のように設定します。

- descType = X'00' の場合: descInf2 = X'00'
- descType = X'02' の場合:
 - CHAR(EBCDIC) オプションが有効で、USAGE 文節内の NATIVE オプションで引数が定義されていない場合: descInf2 = X'40'
 - それ以外の場合: descInf2 = X'00'

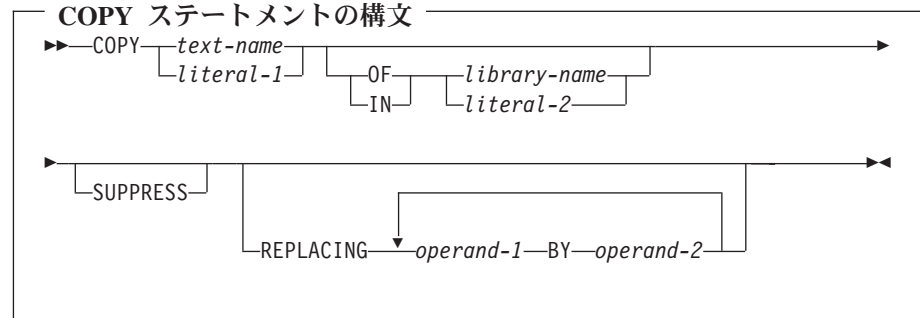
length-1

引数記述子には、固定長引数の引数長か、可変長項目の現行の長さが入ります。

length-2

引数が可変長項目の場合は、その引数の最大長を示します。固定長引数の場合、length-2 と length-1 は等しくなります。

COPY ステートメント



このコンパイラ指示ステートメントは、事前に作成されたテキストを COBOL プログラムに入れます。事前に作成されたテキストを含む *text-name* (コピーブックの名前) を指定する必要があります。例えば、COPY *my-text* のようになります。 *text-name* に修飾子として *library-name* を付けることができます。例えば、COPY *my-text of inventory-lib* のようになります。 *text-name* が修飾されない場合は、SYSLIB の *library-name* が想定されます。 *library-name* および *text-name* に影響を与える事項は次のとおりです。

library-name

library-name をリテラルとして指定した場合、リテラルの内容は実際のパスとして扱われます。ユーザー定義語として *library-name* を指定した場合は、名前が環境変数として使用され、この環境変数の値がコピーブックの位置を指定するパスに使用されます。複数のパス名を指定するには、各パス名をセミコロン (;) で区切ります。

library-name を指定しない場合、このパスは『*text-name*』に説明するとおり 사용됩니다。

text-name

text-name をユーザー定義語として指定した場合、処理は *text-name* に対応する環境変数が設定されているかどうかによって異なります。環境変数が設定されている場合、環境変数の値はコピーブックのファイル名 (およびパス名) として使用されます。

次の 3 つの条件がすべて満たされる場合は、*text-name* が絶対パスとして扱われます。

- *library-name* は使用されません。
- *text-name* がリテラル、または環境変数である。
- 先頭文字が「¥」、または 2 番目の文字が「:」である。

例えば、以下は絶対パスと見なされます。

```
COPY "¥mycpylib¥mytext.cpy" or COPY "d:¥mycpylib¥mytext.cpy"
```

text-name に対応する環境変数が設定されていない場合、コピーブックは次の名前で検索されます。

1. 拡張子 .cpy の付いた *text-name*
2. 拡張子 .cbl の付いた *text-name*
3. 拡張子 .cob の付いた *text-name*
4. 拡張子のない *text-name*

例えば、COPY MyCopy は次の順序で検索を行います。

1. MYCOPY.cpy (前述のとおり、指定されたすべてのパス内)
2. MYCOPY.cbl (前述のとおり、指定されたすべてのパス内)
3. MYCOPY.cob (前述のとおり、指定されたすべてのパス内)
4. MYCOPY (前述のとおり、指定されたすべてのパス内)

-I オプション

それ以外の場合 (*library-name* も *text-name* もパスを示さない場合)、検索パスは -I オプションに依存します。

COPY A と COPY A OF MYLIB を等しくするには、-I%MYLIB% を指定します。

上記の規則に基づくと、COPY "%X¥Y" はルート・ディレクトリー内で検索され、COPY "X¥Y" は現行ディレクトリー内で検索されます。

COPY A OF SYSLIB は COPY A と同じです。-I オプションは、*library-name* 修飾が明示的に指定された COPY ステートメントや、ライブラリー名が SYSLIB のステートメントには影響しません。

library-name と *text-name* の両方を指定すると、コンパイラーは、*library-name* の末尾が ¥ でない場合に、2 つの値の間にパス区切り文字 (¥) を挿入します。例えば、COPY MYCOPY OF MYLIB に次の設定を使用するとします。

```
SET MYCOPY=MYPDS(MYMEMBER)
SET MYLIB=MYFILE
```

この場合、結果的に MYFILE¥MYPDS(MYMEMBER) となります。

PROCESS (CBL) ステートメント

このコンパイラー指示ステートメントは、最も外側の IDENTIFICATION DIVISION ヘッダーの前に置かれるもので、プログラムのコンパイル時に使用されるコンパイラー・オプションを指定します。

関連タスク

7 ページの『ソース・リストのヘッダーの変更』

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

224 ページの『PROCESS (CBL) ステートメントによるコンパイラー・オプションの指定』

関連参照

228 ページの『cob2 オプション』

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

CALLINTERFACE ディレクティブ (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

CBL (PROCESS) ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

*CONTROL (*CBL) ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
COPY ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

第 16 章 リンカー・オプション

リンク処理と、それによって生成されるファイルを制御するには、リンカー・オプションを使用します。各オプションに関する情報は、そのオプションの構文および受諾された略語を示します。オプションとそのパラメーター、および他のパラメーターとの相互作用も示しています。

表 35. リンカー・オプション

オプション	説明	デフォルト	省略形
308 ページの 『/?』	有効なリンカー・オプションのリストを表示します (/HELPと同じ)。	なし	なし
309 ページの 『/ALIGNADDR』	アドレス・アライメントを設定します。	/A:0x00010000	/ALIGN
309 ページの 『/ALIGNFILE』	ファイル・アライメントを設定します。	/A:512	/A
309 ページの 『/BASE』	優先されるロード・アドレスを設定します。	/BAS:0x00400000	/BAS
310 ページの 『/CODE』	実行可能ファイルのセクション属性を設定します。	/CODE:RX	なし
311 ページの 『/DATA』	データのセクション属性を設定します。	/DATA:RW	なし
311 ページの 『/DBGPACK、/NODBGPACK』	デバッグ情報をパックします。	/NODB	/DBI/NODB
312 ページの 『/DEBUG、/NODEBUG』	デバッグ情報を組み込みます。	/NODEB	/DI/NODEB
312 ページの 『/DEFAULTLIBRARYSEARCH、 /NODEFAULTLIBRARYSEARCH』	デフォルトのライブラリーを検索します。	/DEF	/DEFI/NOD
313 ページの 『/DLL』	DLL を生成します。	/EXEC	/EXEC
313 ページの 『/ENTRY』	実行可能ファイルの入り口点を指定します。	なし	/EXEC
313 ページの 『/EXECUTABLE』	実行可能ファイルを生成します。	/EXEC	/EXEC
314 ページの 『/EXTDICTIONARY、 /NOEXTDICTIONARY』	拡張ディクショナリーを使用してライブラリーを検索します。	/EXT	/EXTI/NOE
315 ページの 『/FIXED、/NOFIXED』	メモリー内でファイルを再配置しないようにします。	/NOFI	/FII/NOFI
315 ページの 『/FORCE、/NOFORCE』	エラーが検出された場合でも、実行可能出力ファイルを作成します。	/NOFO	/FOI/NOFO
315 ページの 『/HEAP』	プログラム・ヒープのサイズを設定します。	/HEAP: 0x100000,0x1000	/HEA
316 ページの 『/HELP』	ヘルプを表示します。	なし	/H

表 35. リンカー・オプション (続き)

オプション	説明	デフォルト	省略形
316 ページの『/INCLUDE』	シンボルへの参照を強制します。	なし	/INC
316 ページの『/INFORMATION、 /NOINFORMATION』	リンク処理の状況を表示します。	/NOIN	/II/NOIN
317 ページの『/LINENUMBERS、 /NOLINENUMBERS』	マップ・ファイルに行番号を含めます。	/NOLI	/LI/NOLI
317 ページの『/LOGO、/NOLOGO』	ロゴを表示し、応答ファイルをエコー出力します。	/LO	/LOI/NOL
318 ページの『/MAP、/NOMAP』	マップ・ファイルを生成します。	/NOM	/MI/NOM
318 ページの『/OUT』	出力ファイルに名前を付けます。	最初の .obj ファイルの名前	/O
319 ページの『/PMTYPE』	アプリケーション・タイプを指定します。	/PMTYPE:VIO	/PM
320 ページの『/SECTION』	セクションの属性を設定します。	/CODE および /DATA による設定	/SEC
320 ページの『/SEGMENTS』	セグメントの最大数を設定します。	/SE:256	/SE
321 ページの『/STACK』	アプリケーションのスタック・サイズを設定します。	/STACK: 0x100000,0x1000	/ST
322 ページの『/STUB』	DOS スタブ・ファイルの名前を指定します。	なし	/STU
322 ページの『/SUBSYSTEM』	必要なサブシステムおよびバージョンを指定します。	/SUBSYSTEM: WINDOWS,4.0	/SU
322 ページの 『/VERBOSE、/NOVERBOSE』	リンク処理の状況を表示します。	/NOV	/VERBI/NOV
323 ページの『/VERSION』	実行ファイルにバージョン番号を書き込みます。	/VERSION:0.0	/VER

関連タスク

231 ページの『プログラムのリンク』

/?

有効なリンカー・オプションのリストを表示するには、/? を使用します。このオプションは /HELP と同じです。

/? の構文

▶▶—/?————▶▶

関連参照

316 ページの『/HELP』

/ALIGNADDR

セグメントのアドレス・アライメントを設定するには、/ALIGNADDR を使用します。

/ALIGNADDR オプションの構文

▶▶—/ALIGNADDR:*factor*—◀◀

デフォルト: /ALIGNADDR:0x00010000

省略形: /ALIGN

アライメント係数によって、実行可能ファイル (.EXE) またはダイナミック・リンク・ライブラリー (.DLL) ファイル内のセグメントのメモリー・アドレスが決定されます。各セグメントは、このアライメント係数の倍数で次の未使用値 (バイト単位) に割り当てられます。アライメント係数は 2 の累乗で、512 から 256MB の範囲内でなければなりません。デフォルトの係数は 64 KB です。

/ALIGNFILE

セグメントのファイル・アライメントを設定するには、/ALIGNFILE を使用します。

/ALIGNFILE オプションの構文

▶▶—/ALIGNFILE:*factor*—◀◀

デフォルト: /ALIGNFILE:512

省略形: /A

アライメント係数によって、.EXE または .DLL ファイル内のセグメントの開始位置が決定されます。各セグメントの開始は、ファイルの先頭からアライメント係数の倍数 (バイト単位) で位置合わせされます。アライメント係数は 2 の累乗で、512 から 64KB の範囲内でなければなりません。デフォルトのアライメントは 16 バイトです。

/BASE

実行ファイルの最初のロード・セグメントに対する優先ロード・アドレスを指定するには、/BASE を使用します。使用されるのは、最後に指定されたアドレスのみです。アドレスが指定されない場合は、デフォルトのアドレスが使用されます。

/BASE オプションの構文

▶▶—/BASE:—◀◀
 └─*address*—
 └─*@filename,key*—

デフォルト: /BASE:0x10000

省略形: /BAS

address の代わりに *@filename,key* を指定すると、プログラムどうしがメモリー内でオーバーラップしないように、プログラム・セット (通常は DLL セット) のベースが形成されます。 *filename* は、ファイル・セットのメモリー・マップを定義するテキスト・ファイルの名前です。 *key* は、指定されたキーで始まる *filename* 内の行を指す参照です。メモリー・マップ・ファイル内の各行の構文は次のとおりです。

key address maxsize

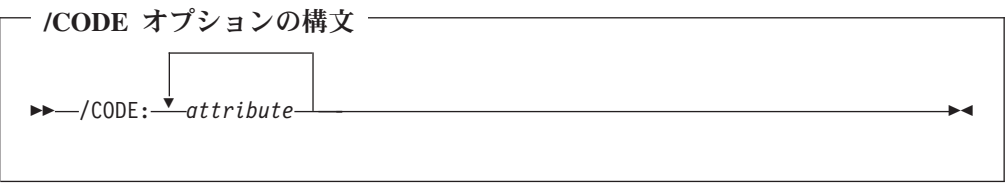
- *key* は、ファイル内の固有の名前です。
- *address* は、仮想アドレス・スペース内のメモリー・イメージの場所です。
- *maxsize* は、メモリーのイメージの最大サイズです。

各エレメントは、1 つ以上のスペースまたはタブで区切ります。メモリー・マップ・ファイル内のコメントはセミコロン (;) で始まり、行の終わりまで続きます。

プログラムのメモリー・イメージが指定されたサイズを超えると、リンカーから警告が出されます。

/CODE

すべてのコード・セクションに対するデフォルトの属性を指定するには、/CODE を使用します。文字は、任意の順序で指定することができます。



デフォルト: /CODE:RX

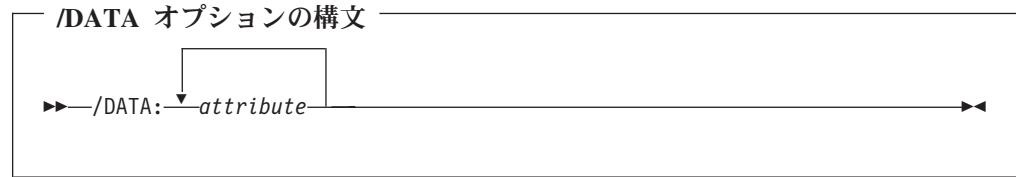
省略形: なし

表 36. コード・セクションの属性

文字	属性
E または X	EXECUTE
R	READ
S	SHARED
W	WRITE ¹
1. この属性は、コード・セグメントにはお勧めできません。	

/DATA

すべてのデータ・セクションに対するデフォルトの属性を指定するには、/DATA を使用します。文字は、任意の順序で指定することができます。



デフォルト: /DATA:RW

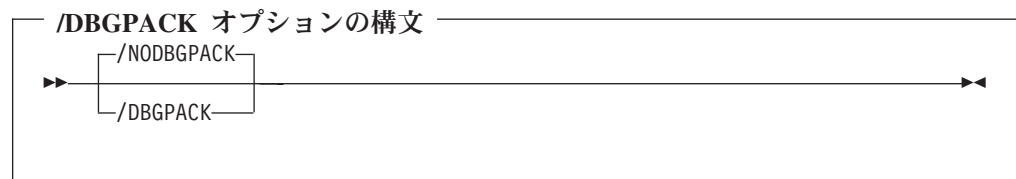
省略形: なし

表 37. データ・セクションの属性

文字	属性
E または X	EXECUTE ¹
R	READ
S	SHARED
W	WRITE
1. この属性は、データ・セグメントにはお勧めできません。	

/DBGPACK、/NDBGPACK

重複するデバッグ・タイプ情報を除去するには、/DBGPACK を使用します。リンカーは、すべてのオブジェクト・ファイルと必要なライブラリー・コンポーネントからデバッグ・タイプ情報を取得し、情報を各タイプにつき 1 つに減らします。これにより、実行可能出力ファイルのサイズを小さくし、デバッガーのパフォーマンスを高めることができます。



デフォルト: /NDBGPACK

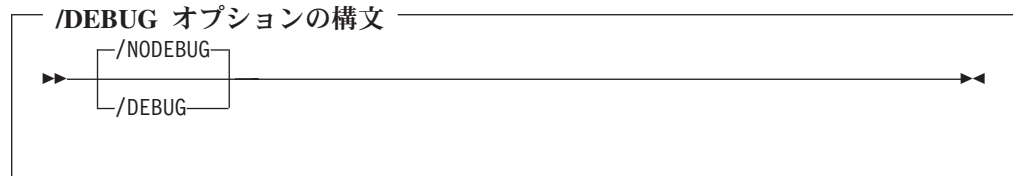
省略形: /DBI/NODB

パフォーマンスについての考慮事項: /DBGPACK を使用してリンクを行うと、情報をパックする時間がかかるため、リンク処理が遅くなります。ただし、デバッグ・タイプ情報がかなり重複している場合は、/DBGPACK を使用すると、出力ファイルに書き込む情報量が減るため、リンク処理を速くすることができます。

デフォルトでは、/DBGPACK を指定するときには、/DEBUG がオンになります。

/DEBUG、/NODEBUG

/DEBUG を使用すると、出力ファイルにデバッグ情報を組み込んで、デバッガーを使用してファイルをデバッグすることができます。リンカーは、シンボリック・データと行番号情報を出力ファイルに埋め込みます。



デフォルト: /NODEBUG

省略形: /DI/NODEB

デバッグの場合は、cob2 オプションの -g を指定します。

/DEBUG を使用してリンクを行うと、実行可能出力ファイルのサイズが増えます。

/DEFAULTLIBRARYSEARCH、/NODEFAULTLIBRARYSEARCH

/DEFAULTLIBRARYSEARCH を使用すると、リンカーが参照の解決時にデフォルトのオブジェクト・ファイル・ライブラリーを検索するように指定することができます。



デフォルト: /DEFAULTLIBRARYSEARCH

省略形: /DEFI/NOD

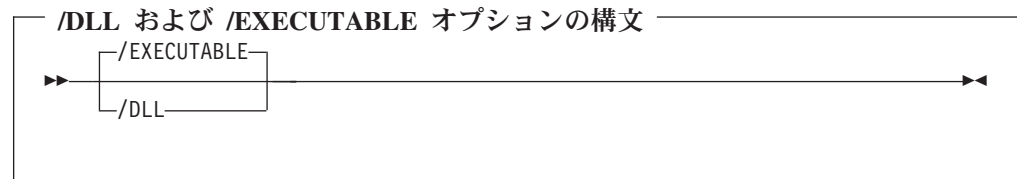
このオプションを使用して *library* を指定すると、リンカーはそのライブラリー名をデフォルト・ライブラリーのリストに追加します。オブジェクト・ファイル用のデフォルト・ライブラリーは、コンパイル時に定義され、オブジェクト・ファイルに埋め込まれます。デフォルトでは、リンカーはデフォルト・ライブラリーを検索します。

/NODEFAULTLIBRARYSEARCH を使用すると、外部参照の解決時にデフォルト・ライブラリーを無視するようリンカーに指示することができます。このオプションを使用して *library* を指定すると、リンカーはこのデフォルト・ライブラリーを無視しますが、残りのデフォルト・ライブラリー（およびオブジェクト・ファイルで定義されたその他のライブラリー）の検索を行います。

library を指定せずに `/NODEFAULTLIBRARYSEARCH` を指定する場合は、IBM COBOL for Windows ランタイム・ライブラリーを含め、使用するすべてのライブラリーを明示的に指定する必要があります。

/DLL

`/DLL` を使用すると、出力ファイルをダイナミック・リンク・ライブラリー (.DLL ファイル) として識別することができます。オブジェクト・ファイルをコンパイルする際には、cob2 オプションの `-d11` を使用してください。



デフォルト: `/EXECUTABLE`

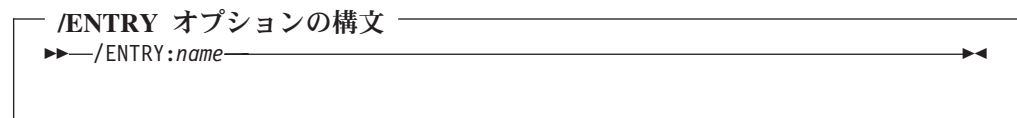
省略形: `/EXEC`

`/DLL` および `/EXEC` を指定する場合は、最後に指定されたオプションのみが有効になります。

`/DLL` または `/EXEC` を指定しない場合、デフォルトでは、リンカーによって .EXE ファイル (`/EXEC`) が生成されます。

/ENTRY

`/ENTRY` を使用すると、実行可能ファイル内の入り口点 (ルーチンまたは関数の名前) を指定することができます。

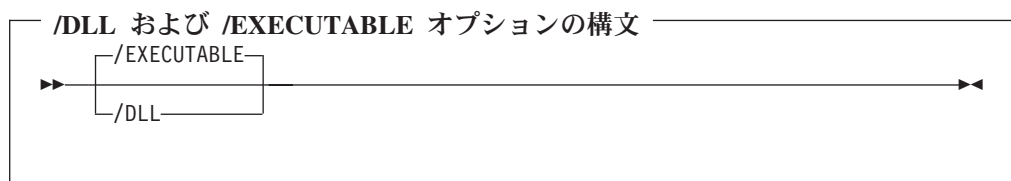


デフォルト: `None`

省略形: `/EN`

/EXECUTABLE

`/EXEC` を使用すると、出力ファイルを実行可能プログラム (.EXE ファイル) として識別することができます。デフォルトでは、リンカーは .EXE ファイルを生成します。



デフォルト: /EXECUTABLE

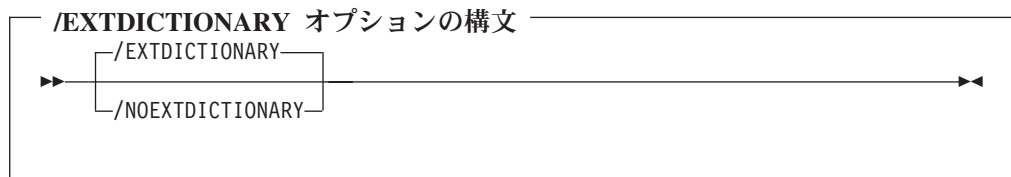
省略形: /EXEC

/DLL を使用して /EXEC を指定する場合は、最後に指定されたオプションのみが有効になります。

デフォルトでは、/EXEC または /DLL を指定しない場合、リンカーによって .EXE ファイルが生成されます。

/EXTDICTIONARY、 /NOEXTDICTIONARY

/EXTDICTIONARY を使用すると、外部参照の解決時にリンカーがライブラリーの拡張ディクショナリーを検索するように指定することができます。拡張ディクショナリーは、ライブラリー内のモジュール関係をリストしたものです。リンカーは、ライブラリーからモジュールをプルすると、拡張ディクショナリーを検査して、そのモジュールがライブラリー内の他のモジュールを必要とするかどうかを調べ、追加のモジュールを自動的にプルします。



デフォルト: /EXTDICTIONARY

省略形: /EXTI/NOE

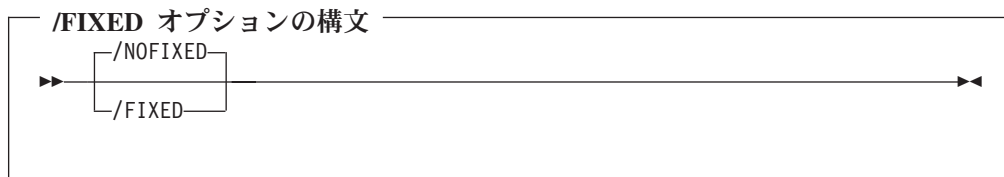
デフォルトでは、リンカーはリンク処理を速くするために拡張ディクショナリーを検索します。

/NOEXTDICTIONARY を使用すると、ライブラリー内の定義をオーバーライドして、独自の定義と置き換えることができます。

2 つの異なる場所で同じシンボルが定義されていると、リンカーによりエラーが出されます。/NOEXTDICTIONARYを使用してリンクを行うと、リンカーは拡張ディクショナリーを検索するのではなく、ディクショナリーを直接検索します。この場合は、参照を個々に解決する必要があるため、リンク処理が遅くなります。

/FIXED、/NOFIXED

/FIXED を使用すると、指定された基底アドレスを使用できない場合にメモリー内でファイルを再配置しないようローダーに指示します。



デフォルト: /NOFIXED

省略形: /FII/NOFI

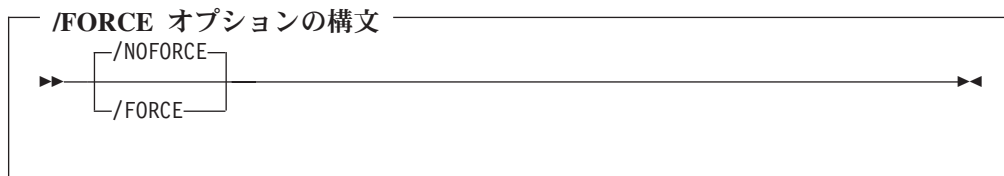
デフォルトでは、リンカーは実行可能ファイルに対して /FIXED を使用し、その他のファイル・タイプに対して /NOFIXED を使用します。

関連参照

309 ページの『/BASE』

/FORCE、/NOFORCE

/FORCE を使用すると、リンク処理中に未解決の外部参照が存在する場合でも、実行可能出力ファイルを生成することができます。



デフォルト: /NOFORCE

省略形: /FOI/NOFO

デフォルトでは、リンカーがエラーを検出した場合は、実行可能出力ファイルが生成されません。

/HEAP

/HEAP を使用すると、プログラム・ヒープのサイズ (バイト単位) を設定することができます。 *reserve* 引数は、予約済み仮想アドレス・スペースの合計を設定します。 *commit* 引数は、最初に割り振る物理メモリーの量を設定します。

/HEAP オプションの構文

▶▶ /HEAP:reserve [,commit] ◀◀

デフォルト: /HEAP:0x100000,0x1000

省略形: /HEA

パフォーマンスの考慮事項: *commit* の値が *reserve* よりも小さいと、必要なメモリー量は減りますが、実行時間は遅くなる可能性があります。

/HELP

/HELP を使用すると、有効なリンカー・オプションのリストを表示することができます。このオプションは /? と同じです。

/HELP オプションの構文

▶▶ /HELP ◀◀

デフォルト: None

省略形: /H

/INCLUDE

/INCLUDE を使用すると、シンボルを指す参照を強制することができます。リンカーは、このシンボルを定義するオブジェクト・モジュールを検索します。

/INCLUDE オプションの構文

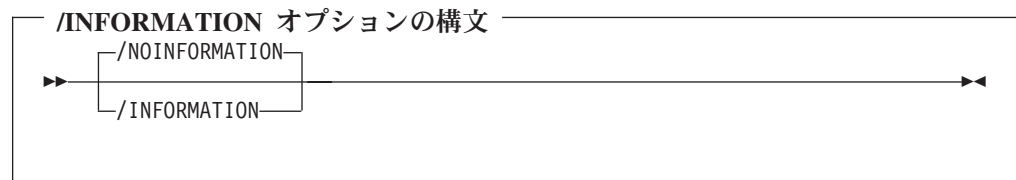
▶▶ /INCLUDE:symbol ◀◀

デフォルト: None

省略形: /INC

/INFORMATION、/NOINFORMATION

/INFORMATION は /VERBOSE と機能的に同等です。ただし、/VERBOSE が優先されます。



デフォルト: /NOINFORMATION

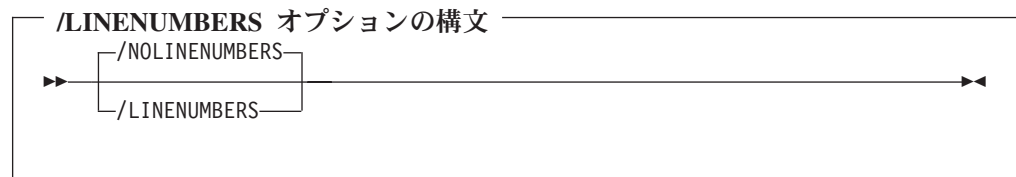
省略形: /II/NOIN

関連参照

322 ページの『/VERBOSE、/NOVERBOSE』

/LINENUMBERS、/NOLINENUMBERS

/LINENUMBERS を使用すると、ソース・ファイルの行番号と関連アドレスをマップ・ファイルに含めることができます。このオプションを有効にするには、リンクするオブジェクト・ファイル内に、すでに行番号情報がなければなりません。



デフォルト: /NOLINENUMBERS

省略形: /LI/NOLI

コンパイル時に、オブジェクト・ファイル内の行番号を含めるには、cob2 オプションの -qNUMBER を使用します (すべてのデバッグ情報を含めるには、cob2 オプションの -g を使用します)。

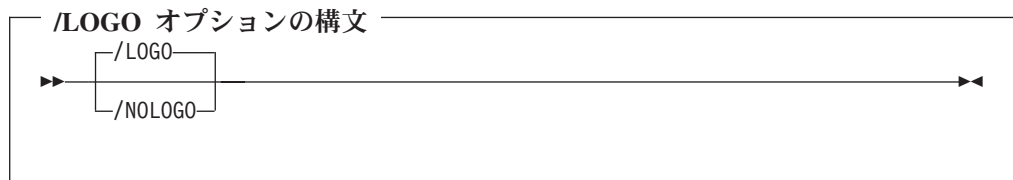
行番号情報を持たないオブジェクト・ファイルをリンカーに処理させると、/LINENUMBERS オプションが無効になります。

/LINENUMBERS オプションは、/NOMAP を指定した場合でも、リンカーがマップ・ファイルを作成するよう強制します。

デフォルトでは、マップ・ファイルには出力ファイルと同じ名前が付けられ、拡張子 .map が付きます。マップ・ファイル名を指定することで、デフォルトの名前をオーバーライドすることができます。

/LOGO、/NOLOGO

/NOLOGO を使用すると、リンカーの起動時に表示される製品情報を抑制することができます。



デフォルト: /LOGO

省略形: /LOI/NOL

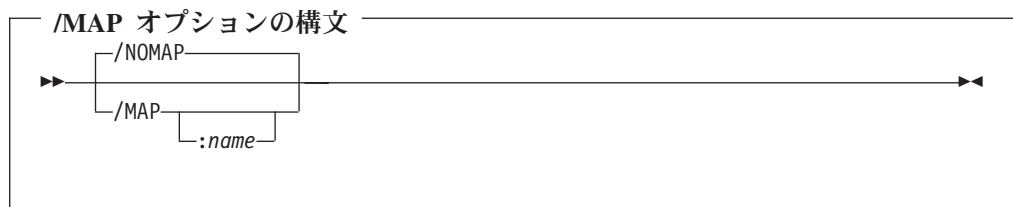
/NOLOGO は、コマンド行上の応答ファイルの前、または ILINK 環境変数内に指定します。応答ファイルの中または後にこのオプションがある場合は無視されます。

デフォルトでは、リンカーはリンク処理の開始時に製品情報を表示し、応答ファイルの読み取り時にファイルの内容を表示します。

他の多くのリンカー・オプションとは違い、/LOGO および /NOLOGO は、応答ファイル内に含めることができません。これらは、コマンド行上で設定する必要があります。

/MAP、/NOMAP

/MAP を使用すると、*name* という名前のマップ・ファイルを生成することができます。マップ・ファイルには、各セグメントの構成と、オブジェクト・ファイルで定義された共通 (グローバル) シンボルがリストされます。各シンボルは、名前順とアドレス順の 2 回リストされます。



デフォルト: /NOMAP

省略形: /MI/NOM

ディレクトリーを指定しない場合は、現行作業ディレクトリーにマップ・ファイルが生成されます。*name* を指定しない場合、マップ・ファイルには実行可能出力ファイルと同じ名前が付けられますが、拡張子 .map が付きます。

デフォルトでは、リンカーはマップ・ファイルを生成しません。

/OUT

/OUT を使用すると、実行可能出力ファイルの名前を指定することができます。

/OUT オプションの構文

▶▶—/OUT:*name*————▶▶

デフォルト: 最初の .OBJ ファイルの名前と適切な拡張子

省略形: /O

name とともに拡張子を指定しない場合は、以下の表に示すように、リンカーによって、生成するファイルのタイプに基づいた拡張子が付けられます。

生成されるファイル	デフォルトの拡張子
実行可能プログラム	.EXE
ダイナミック・リンク・ライブラリー	.DLL

/OUT オプションを使用しない場合、リンカーは、最初に指定されたオブジェクト・ファイルのファイル名と、適切な拡張子を使用します。

/PMTYPE

/PMTYPE を使用して、リンカーが生成する実行可能ファイルのタイプを指定することができます。ダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL) を生成する場合は、このオプションを使用しないでください。

/PMTYPE オプションの構文

▶▶—/PMTYPE:*type*————▶▶

デフォルト: /PMTYPE:VIO

省略形: /PM

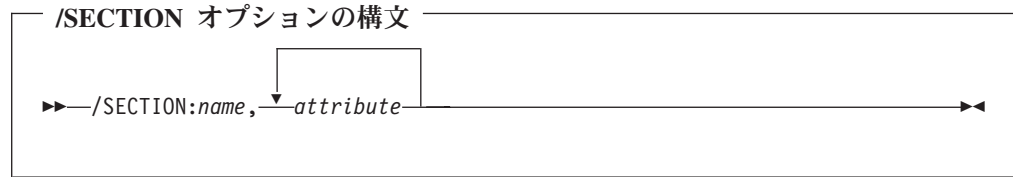
次のいずれかのタイプを指定します。

- PM** 実行可能ファイルをウィンドウ内で実行する必要があります。
- VIO** ウィンドウ内とフルスクリーン内のどちらでも実行可能ファイルを実行できます。
- NOVIO** 実行可能ファイルをウィンドウ内で実行してはなりません。フルスクリーンを使用する必要があります。

実行可能ファイル以外のファイル・タイプに対して /PMTYPE が設定された場合、オプションは無視されます。

/SECTION

/SECTION を使用すると、*name* セクションの記憶保護属性を指定することができます。*(name* には大/小文字の区別があります)。



デフォルト: セグメントのタイプに依存します。

省略形: /SEC

次の表に示されている属性を指定できます。

表 38. 名前付きセクションの属性

文字	属性設定
E または X	EXECUTE ²
R	READ
S	SHARED
W	WRITE ¹
1. この属性は、コード・セグメントにはお勧めできません。 2. この属性は、データ・セグメントにはお勧めできません。	

例えば次のコードは、.EXE ファイル内の `dseg1` セクションに対し、EXECUTE または WRITE 属性ではなく、READ および SHARED 属性を設定します。

```
/SEC:dseg1,RS
```

デフォルトでは、以下の表に示すように、セクションに属性が割り当てられます。

表 39. セクションのデフォルト属性

セグメント	デフォルト属性
コード・セクション	EXECUTE、READ (ER)
データ・セクション	READ、WRITE (RW)、共用なし
CONST32_RO セクション	READ、SHARED (RS)

/SEGMENTS

/SEGMENTS を使用すると、プログラムが所有できるセクションの数を設定することができます。*number* は、1 から 16375 の範囲内で任意の値に設定でき、10 進数、8 進数、16 進数のいずれの形式でも構いません。

/SEGMENTS オプションの構文

▶▶ /SEGMENTS:*number* ◀◀

デフォルト: /SEGMENTS:256

省略形: /SE

セクションごとに、リンカーはセクション情報を追跡するためのスペースを割り振る必要があります。比較的低い境界をデフォルト (256) として使用すると、リンカーはリンク処理を高速で実行できるようになりますが、割り振るストレージ・スペースの量は少なくなります。

256 よりも高いセクション境界を設定すると、リンカーがセクション情報に対して割り振るスペースの量が増えます。この場合、リンク処理は遅くなりますが、プログラムを多数のセクションとリンクできるようになります。

セクション数が 256 よりも少ないプログラムの場合は、*number* をプログラム内の実際のセクション数に設定することで、リンク時間を短縮し、リンカーのストレージ要件を低減することができます。

関連タスク

232 ページの『リンカー・オプションの指定』

/STACK

/STACK を使用して、プログラムのスタック・サイズ (バイト単位)を設定することができます。

/STACK オプションの構文

▶▶ /STACK:*reserve*

[,*commit*]

デフォルト: /STACK:0x100000,0x1000

省略形: /ST

このサイズは、0 から 0xFffffffe の範囲内の偶数でなければなりません。奇数を指定すると、次の偶数に切り上げられます。

reserve は、予約済みの仮想アドレス・スペースの合計を示します。*commit* は、最初に割り振る物理メモリーの量を設定します。

パフォーマンスの考慮事項: *commit* の値が *reserve* よりも小さいと、必要なメモリー量は減りますが、実行時間は遅くなる可能性があります。

/STUB

/STUB を使用して、作成された出力ファイルの先頭に DOS 実行可能ファイルの名前を指定することができます。

/STUB オプションの構文

▶—/STUB:*filename*—▶▶

デフォルト: None

省略形: /STU

デフォルトでは、リンカーは独自のスタブを定義します。

/SUBSYSTEM

/SUBSYSTEM を使用すると、プログラムの実行に必要なサブシステムとバージョンを指定することができます。

/SUBSYSTEM オプションの構文

▶—/SUBSYSTEM:*subsystem*—▶▶

└,*major*—

└*minor*—

デフォルト: /SUBSYSTEM:WINDOWS,4.0

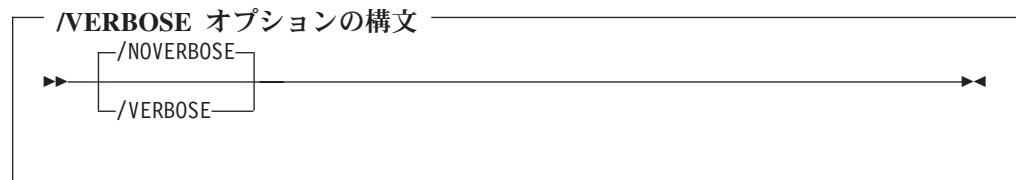
省略形: /SU

major および *minor* はオプションの引数で、サブシステムの必要最低限のバージョンを指定します。*major* および *minor* 引数は、0 から 65535 の範囲内の整数になります。

サブシステム	<i>Major.minor</i>	説明
WINDOWS	3.10	Graphical Device Interface (GDI) API を使用するグラフィカル・アプリケーション
CONSOLE	3.10	Console API を使用する文字モード・アプリケーション

/VERBOSE、/NOVERBOSE

/VERBOSE を使用すると、リンクのフェーズやリンクされるオブジェクト・ファイルの名前とパスなど、リンク処理に関する情報を表示するようリンカーを指定することができます。



デフォルト: /NOVERBOSE

省略形: /VERBI/NOV

リンカーが間違ったファイルを検出したか、またはファイルを間違った順序で検出したためにリンク処理に問題が生じた場合は、/VERBOSE を使用して、リンクされているオブジェクト・ファイルの場所と、それらがリンクされている順序を判別してください。

このオプションからの出力は、stdout に送信されます。Windows の転送シンボルを使用して、この出力をファイルに転送することができます。

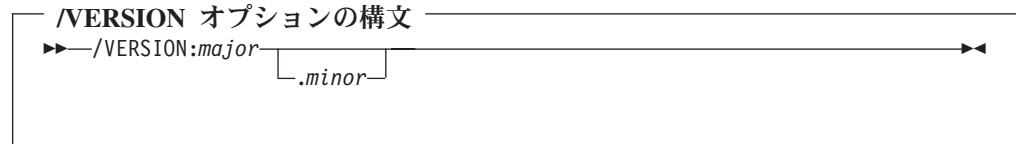
/VERBOSE は /INFORMATION と同じですが、/VERBOSE の方が優先されます。

関連参照

316 ページの『/INFORMATION、/NOINFORMATION』

/VERSION

/VERSION を使用して、実行ファイルのヘッダーにバージョン番号を書き込むことができます。



デフォルト: /VERSION:0.0

省略形: /VER

major および *minor* 引数は、0 から 65535 の範囲内の整数になります。

第 17 章 ランタイム・オプション

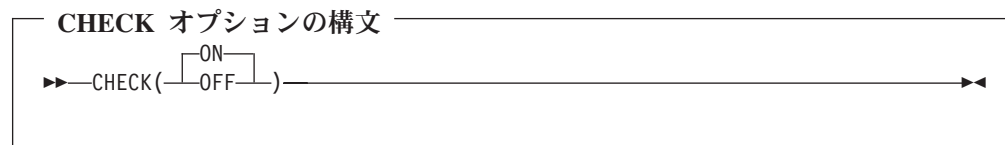
以下の表に示されるランタイム・オプションがサポートされます。

表 40. ランタイム・オプション

オプション	説明	デフォルト	省略形
『CHECK』	エラー検査のフラグを立てます。	CHECK(ON)	CH
326 ページの『DEBUG』	USE FOR DEBUGGING 宣言で指定された COBOL デバッグ・セクションがアクティブかどうかを指定します。	NODEBUG	なし
326 ページの『ERRCOUNT』	重大度 1 (W レベル) の条件が何回発生すると実行単位が異常終了するかを指定します。	ERRCOUNT(20)	なし
327 ページの『FILESYS』	ASSIGN または環境変数のいずれかを通した、明示的なファイル・システム選択が行われないファイルに使用されるファイル・システムを指定します。	FILESYS(STL)	なし
327 ページの『TRAP』	COBOL が例外を代行受信するかどうかを指定します。	TRAP(ON)	なし
328 ページの『UPSI』	COBOL ルーチンを使用するアプリケーションに対して、8 つの UPSI スイッチのオン/オフを設定します。	UPSI(00000000)	なし

CHECK

CHECK により、エラー検査にフラグが設定されます。COBOL では、索引、添え字、参照変更範囲によって、エラー検査が行われます。



デフォルト: CHECK(ON)

省略形: CH

ON ランタイム検査を実行することを指定します。

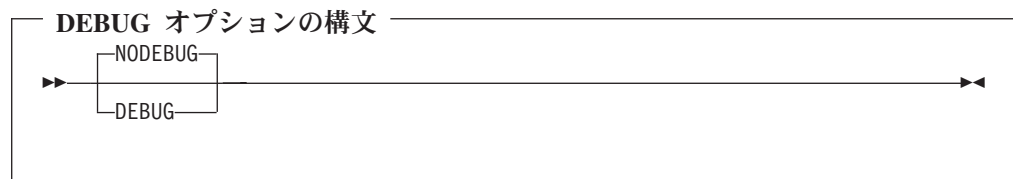
OFF ランタイム検査を実行しないことを指定します。

使用上の注意: コンパイル時に NOSSRANGE が有効だった場合は、CHECK(ON) が無効になります。

パフォーマンスの考慮事項: SSRANGE を使用して COBOL プログラムをコンパイルした後、アプリケーションのテストまたはデバッグを行わない場合は、CHECK(OFF) を指定するとパフォーマンスが向上します。

DEBUG

DEBUG は、USE FOR DEBUGGING 宣言で指定された COBOL デバッグ・セクションがアクティブかどうかを指定します。



デフォルト: NODEBUG

DEBUG デバッグ・セクションをアクティブにします。

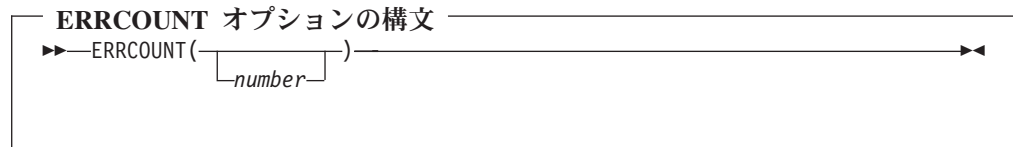
NODEBUG

デバッグ・セクションを抑制します。

パフォーマンスについての考慮事項: パフォーマンスを高めるには、このオプションをデバッグ時だけに使用してください。

ERRCOUNT

ERRCOUNT は、重大度 1 (W レベル) の条件が何回発生すると実行単位が異常終了するかを指定します。



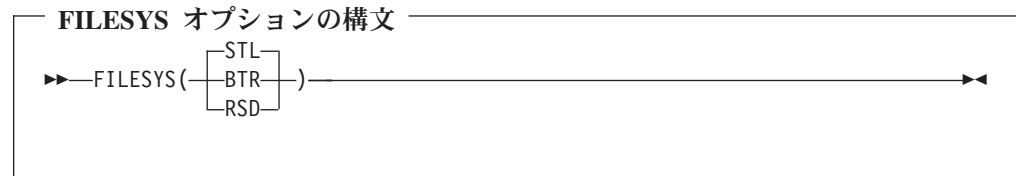
デフォルト: ERRCOUNT(20)

number は、この実行単位の実行中に、各スレッドごとに発生し得る重大度 1 の条件の数です。条件数が *number* を超えると、実行単位が異常終了します。

重大度 2 (E レベル) 以上の条件が発生すると、ERRCOUNT オプションの値に関係なく、実行単位が終了します。

FILESYS

FILESYSは、ASSIGNステートメントまたは環境変数のいずれかを通した、明示的なファイル・システム選択が行われないファイルに使用されるファイル・システムを指定します。このオプションは、順次ファイル、相対ファイル、および索引付きファイルに適用されます。



デフォルト: FILESYS(STL)

BTR ファイル・システムは Btrieve (Pervasive.SQL) です。

STL ファイル・システムは STL です。

RSD ファイル・システムは RSD です。

関連タスク

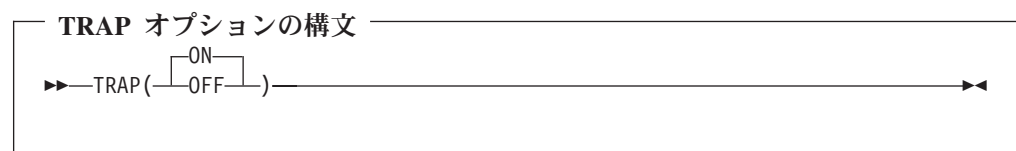
121 ページの『ファイルの識別』

関連参照

217 ページの『ランタイム環境変数』

TRAP

TRAP は、COBOL が例外を代行受信するかどうかを指定します。



デフォルト: TRAP(ON)

TRAP(OFF) が有効であり、なおかつ例外条件を処理する独自のトラップ・ハンドラーを使用しない場合は、これらの条件が発生すると、オペレーティング・システムによるデフォルトのアクションが実行されます。例えば、プログラムが無許可の場所にデータを格納しようとする、デフォルトのシステム・アクションとして、メッセージが出されて処理が終了します。

ON COBOL による例外の代行受信をアクティブにします。

OFF COBOL による例外の代行受信を非アクティブにします。

使用上の注意

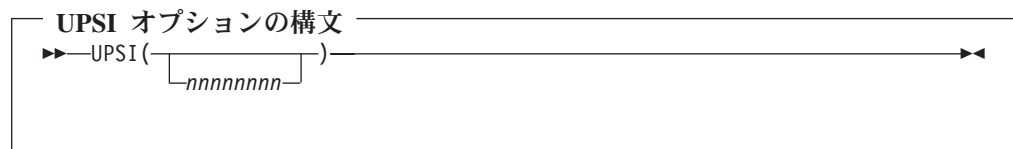
- TRAP(OFF) を使用するのには、プログラムの例外を COBOL が処理する前に分析する必要があります。

- 非 CICS 環境で TRAP(OFF) を指定すると、例外ハンドラーが設定されません。
- (例外診断の目的で) TRAP(OFF) を使用して実行すると、COBOL が TRAP(ON) を必要とするため、多数の副次作用が発生する可能性があります。TRAP(OFF) を使用して実行すると、ソフトウェアで発生した条件、プログラム・チェック、または異常終了が検出されない場合でも、副次作用が発生する可能性があります。TRAP(OFF) が有効な場合にプログラム・チェックまたは異常終了が検出されると、次の副次作用が発生する可能性があります。
 - COBOL によって取得されたリソースが解放されない。
 - COBOL によってオープンされたファイルがクローズしない。このため、レコードが失われる可能性があります。
 - メッセージまたはダンプ出力が生成されない。

このような条件が発生すると、実行単位が異常終了します。

UPSI

UPSI は、COBOL ルーチンを使用するアプリケーションに対して、8 つの UPSI スイッチのオン/オフを設定します。



デフォルト: UPSI(00000000)

それぞれの n は、UPSI スイッチ (0 から 7) のうちの 1 つを表します。左端の n が 1 番目のスイッチを表しています。それぞれの n は 0 (オフ) または 1 (オン) のいずれかになります。

第 18 章 デバッグ

アプリケーションのプログラム動作における問題の原因を判別するには、ソース言語デバッグと対話式デバッグの 2 つの方法を使用することができます。

ソース言語デバッグの場合、COBOL は、デバッグを容易にするいくつかの言語エレメント、コンパイラー・オプション、およびリスト出力を提供します。

対話式デバッグの場合は、Debug Perspective of WebSphere Developer for System z のグラフィカル・デバッグ・インターフェースを使用することができます。

関連タスク

- 『ソース言語によるデバッグ』
- 333 ページの『コンパイラー・オプションを使用したデバッグ』
- 340 ページの『デバッガーの使用』
- 340 ページの『リストの入手』
- 350 ページの『ユーザー出口のデバッグ』
- 351 ページの『アセンブラー・ルーチンのデバッグ』

ソース言語によるデバッグ

さまざまな COBOL 言語機能を使用して、プログラムの障害の原因を正確に示すことができます。

障害のあるプログラムがすでに実動中の大規模なアプリケーションの一部である場合（ソース更新を除外する）は、プログラムの障害部分をシミュレートするような小さいテスト・ケースを作成してください。テスト・ケースでは、以下の問題の検出に役立つようなデバッグ機能をコーディングしてください。

- プログラム・ロジックのエラー
- 入出力エラー
- データ型のミスマッチ
- 初期化されていないデータ
- プロシーチャーの問題

関連タスク

- 330 ページの『プログラム・ロジックのトレース』
- 330 ページの『入出力エラーの検出および処理』
- 331 ページの『データの妥当性検査』
- 331 ページの『初期化されていないデータの検出』
- 332 ページの『プロシーチャーに関する情報の生成』

関連参照

ソース言語のデバッグ（「*COBOL for Windows 言語解説書*」）

プログラム・ロジックのトレース

プログラムのロジックは、DISPLAY ステートメントを追加することによってトレースしてください。

例えば、問題が EVALUATE ステートメントまたは 1 組のネストされた IF ステートメントにあると判断した場合は、それぞれのパスで DISPLAY ステートメントを使用して、ロジック・フローを調べます。問題の原因が数値の計算方法にあると判断した場合は、DISPLAY ステートメントを使用して、いくつかの中間結果の値を検査することができます。

プログラムの中で明示範囲終了符号を使用してステートメントを終了させていた場合は、ロジックはより明確であり、したがってトレースしやすくなります。

例えば、特定のルーチンが開始して終了したかどうかを判別する場合は、プログラムに次のようなコードを挿入してみてください。

```
DISPLAY "ENTER CHECK PROCEDURE"  
.  
  . (checking procedure routine)  
.  
DISPLAY "FINISHED CHECK PROCEDURE"
```

ルーチンが正しく作動していることを確認したら、次の 2 つのうちのいずれかの方法で DISPLAY ステートメントを使用不可にします。

- 各 DISPLAY ステートメントの行の 7 桁目にアスタリスクを置き、コメント行に変換する。
- 各 DISPLAY ステートメントの 7 桁目に D を置き、コメント行に変換する。これらのステートメントを再活動化したい場合は、ENVIRONMENT DIVISION に WITH DEBUGGING MODE 文節を含めると、7 桁目の D は無視され、DISPLAY ステートメントが実施されます。

プログラムを実動に移す前に、使用したすべてのデバッグ・エイドを削除するか使用不可にしてから、プログラムを再コンパイルします。プログラムはより効果的に実行され、使用するストレージは小さくなります。

関連概念

21 ページの『範囲終了符号』

関連参照

DISPLAY ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

入出力エラーの検出および処理

ファイル状況キーは、プログラムのエラーが、ストレージ・メディアで起こっている入出力エラーによるものかどうかを判別するのに役立ちます。

ファイル状況キーをデバッグ・エイドとして使用するためには、各入出力ステートメントの後で、状況キーの値がゼロ以外かどうか検査します。値がゼロでない (エラー・メッセージで報告される) 場合には、プログラム内の入出力プロシーチャーのコーディングを調べる必要があります。状況キーの値に基づいてエラーを訂正するためのプロシーチャーを組み込むこともできます。

問題がプログラムの入出力プロシージャにあると判断した場合は、USE EXCEPTION/ERROR 宣言を組み込んで、問題のデバッグに役立てることができます。その後、ファイルのオープンに失敗すると、適切な EXCEPTION/ERROR 宣言が実行されます。適切な宣言とは、ファイルに固有なものの、あるいはオープン属性 (INPUT、OUTPUT、I-O、または EXTEND) 用に提供されたものです。

それぞれの USE AFTER STANDARD ERROR ステートメントは、PROCEDURE DIVISION の DECLARATIVES キーワードの後のセクションにコーディングします。

関連タスク

162 ページの『ERROR 宣言のコーディング』

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

関連参照

状況キー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

データの妥当性検査

プログラムが非数値データに対して算術を実行しようとしているか、または入力レコードの誤ったデータ型を何らかの方法で受け取ろうとしている可能性がある場合、クラス・テスト (クラス条件) を使用してデータ型を妥当性検査してください。

クラス・テストを使用すると、データ項目の内容が、ALPHABETIC、ALPHABETIC-LOWER、ALPHABETIC-UPPER、DBCS、KANJI、または NUMERIC のいずれであるかを検査できます。データ項目が暗黙的または明示的に USAGE NATIONAL として記述されている場合、クラス・テストは、指定された文字クラスに関連した文字の国別文字表現を検査します。

関連タスク

90 ページの『条件式のコーディング』

195 ページの『有効な DBCS 文字に関するテスト』

関連参照

クラス条件 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

初期化されていないデータの検出

問題の原因がテーブルまたは変数のフィールドに残されたデータにあると考えられるときは、INITIALIZE または SET ステートメントを使用して、テーブルまたは変数を初期化してください。

問題が起きたり起きなかったりし、しかも同一のデータで起きるとは限らない場合、スイッチが初期化されていなかったものの、多くの場合正しい値 (0 または 1) に偶然に設定されることが原因であると考えられます。SET ステートメントを使用してスイッチを初期化するようにすれば、初期化されていないスイッチが問題の原因であると判断できるか、考えられる原因からそのスイッチを除外することができます。

関連参照

INITIALIZE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

SET ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

プロシージャに関する情報の生成

プログラムまたはテスト・ケースに関する情報、およびその実行方法に関する情報は、`USE FOR DEBUGGING` 宣言を使用して生成してください。この宣言を使用すると、ステートメントをプログラムに組み込んで、プログラムの実行時にいつそれらのステートメントを実行しなければならないかを指示することができます。

例えば、プロシージャが何度実行されるかを判別するには、デバッグ・プロシージャを `USE FOR DEBUGGING` 宣言に組み込み、カウンターを使用して、制御がそのプロシージャに渡される回数の記録をとることができます。カウンター技法を使用して、次のような項目を検査できます。

- `PERFORM` ステートメントが実行される回数。特定のルーチンが使用されているかどうか、および制御構造が正しいかどうか。
- ループ・ルーチンが実行される回数。ループが実行されているかどうか、およびループの回数が正確かどうか。

プログラムに、デバッグ行かデバッグ・ステートメント、またはその両方を入れることができます。

デバッグ行 は、桁 7 の D で識別されているステートメントです。プログラムのデバッグ行をアクティブにするには、`ENVIRONMENT DIVISION` の `SOURCE-COMPUTER` 行に `WITH DEBUGGING MODE` 文節をコーディングする必要があります。この文節が含まれていないと、デバッグ行はコメントとしてしか扱われません。

デバッグ・ステートメント とは、`PROCEDURE DIVISION` の `DECLARATIVES` セクションにコーディングされたステートメントです。それぞれの `USE FOR DEBUGGING` 宣言は別個のセクションにコーディングしなければなりません。デバッグ・ステートメントは、次のようにコーディングしてください。

- `DECLARATIVES` セクション内のみ。
- ヘッダー `USE FOR DEBUGGING` の後に置く。
- 最外部のプログラムだけに置く (ネストされたプログラムでは無効です)。デバッグ・ステートメントが、ネストされたプログラムに含まれているプロシージャによって起動されることはありません。

プログラムでデバッグ・ステートメントを使用するには、`WITH DEBUGGING MODE` 文節を指定し、さらに、`DEBUG` ランタイム・オプションを使用する必要があります。ただし、`THREAD` オプションを指定してコンパイルするプログラムでは、`USE FOR DEBUGGING` 宣言を使用できません。

`WITH DEBUGGING MODE` 文節 `TEST` コンパイラー・オプションは、どちらか一方しか使用することができません。両方が存在する場合は、`WITH DEBUGGING MODE` 文節が優先されます。

333 ページの『例: `USE FOR DEBUGGING`』

関連参照

`SOURCE-COMPUTER` 段落 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

デバッグ行 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

デバッグ・セクション (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

`DEBUGGING` 宣言 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: USE FOR DEBUGGING

この例は、DISPLAY ステートメントと USE FOR DEBUGGING 宣言を使用してプログラムをテストする際に必要となるステートメントの種類を示しています。

DISPLAY ステートメントは、端末または出力ファイルに情報を書き込みます。 USE FOR DEBUGGING 宣言は、ルーチンが実行される回数を示すカウンターと一緒に使用されます。

```
Environment Division.
. . .
Data Division.
. . .
Working-Storage Section.
. . . (other entries your program needs)
01 Trace-Msg    PIC X(30) Value " Trace for Procedure-Name : ".
01 Total        PIC 9(9) Value 1.
. . .
Procedure Division.
Declaratives.
Debug-Declaratives Section.
    Use For Debugging On Some-Routine.
Debug-Declaratives-Paragraph.
    Display Trace-Msg, Debug-Name, Total.
End Declaratives.

Main-Program Section.
. . . (source program statements)
Perform Some-Routine.
. . . (source program statements)
Stop Run.
Some-Routine.
. . . (whatever statements you need in this paragraph)
Add 1 To Total.
Some-Routine-End.
```

プロシージャー Some-Routine が実行されるたびに、DECLARATIVES SECTION の DISPLAY ステートメントがこのメッセージを出します。

```
Trace For Procedure-Name : Some-Routine 22
```

メッセージの終わりにある番号 22 は、データ項目 Total の累算された値で、Some-Routine が実行された回数を示しています。デバッグ宣言内のステートメントは、名前を指定されたプロシージャーが実行される前に実行されます。

DISPLAY ステートメントを使用して、プログラムの実行をトレースし、プログラム中のフローを示すこともできます。これを行うには、DISPLAY ステートメントから Total を除去し、DECLARATIVES SECTION の USE FOR DEBUGGING を次のように変更します。

```
USE FOR DEBUGGING ON ALL PROCEDURES.
```

この結果、最外部プログラムのそれぞれの非デバッグ・プロシージャーが実行される前にメッセージが表示されるようになります。

コンパイラー・オプションを使用したデバッグ

特定のコンパイラー・オプションを使用すると、プログラムのエラーの検出、プログラムのさまざまな要素の検出、リストの入手、およびプログラムのデバッグ用準備を行うのに役立ちます。

コンパイラー・オプションを使用して、以下のエラーを検出することができます (オプションは括弧内に示されています)。

- 重複データ名のような構文エラー (NOCOMPIL)
- セクションの欠落 (SEQUENCE)
- 無効な添え字値 (SSRANGE)

コンパイラー・オプションを使用すると、プログラムの次のようなエレメントを検出することができます。

- エラー・メッセージと関連するエラーの場所 (FLAG)
- プログラム・エンティティー定義および参照 (XREF)
- DATA DIVISION のデータ項目 (MAP)
- 動詞参照 (VBREF)

ソースのコピー (SOURCE) または生成されたコードのリスト (LIST) を入手することができます。

TEST コンパイラー・オプションを使用して、プログラムをデバッグ用に準備します。

関連タスク

『コーディング・エラーの検出』

335 ページの『行シーケンス問題の検出』

335 ページの『有効範囲の検査』

336 ページの『診断するエラーのレベルの選択』

338 ページの『プログラム・エンティティー定義および参照の検出』

339 ページの『データ項目のリスト』

340 ページの『リストの入手』

340 ページの『デバッガーの使用』

関連参照

249 ページの『第 14 章 コンパイラー・オプション』

コーディング・エラーの検出

条件付きでコンパイルしたり、構文検査のみを行ったりする場合は、NOCOMPIL オプションを使用してください。SOURCE オプションと一緒に使用すると、NOCOMPIL は、コーディングの間違い (欠落している定義、正しく定義されていないデータ項目、重複するデータ名など) を見つけるのに役立つリストを作成します。

構文のみ検査: プログラムの構文検査のみを行い、オブジェクト・コードを生成しないようにするには、パラメーターなしの NOCOMPIL を使用してください。一緒に SOURCE オプションを指定すると、コンパイラーはリストを作成します。

NOCOMPIL をパラメーターなしで使用すると、LIST、OBJECT、OPTIMIZE、SSRANGE、TEST の各コンパイラー・オプションが抑制されます。

条件付きコンパイル: 条件付きでコンパイルするには、NOCOMPIL(*x*) (ここで、*x* はエラーの重大度レベルの 1 つです) を使用してください。エラーすべてが *x* より低

い重大度である場合に、プログラムはコンパイルされます。使用できる重大度レベルは、S (重大)、E (エラー)、および W (警告) であり、この順序で低くなります。

レベル x またはそれ以上のエラーが発生した場合、コンパイルは停止し、プログラムの構文検査のみが行われます。

関連参照

260 ページの『COMPILE』

行シーケンス問題の検出

順序どおりになっていないステートメントを見つけるには、SEQUENCE コンパイラー・オプションを使用してください。シーケンス中断は、ソース・プログラムのセクションが移動または削除されたことを表します。

SEQUENCE を使用すると、コンパイラーはソース・ステートメント番号を検査し、昇順になっているかどうかを判別します。順序どおりになっていないステートメント番号の横には、2 つのアスタリスクが入れられます。これらのステートメントの合計数がソース・リストに続く診断の最初の行として印刷されます。

関連参照

286 ページの『SEQUENCE』

有効範囲の検査

アドレスが適切な範囲内にあるかどうかを検査するには、SSRANGE コンパイラー・オプションを使用してください。

SSRANGE によって、次のアドレスが検査されます。

- 添え字付きまたは指標付きデータ参照: 所要の要素の有効アドレスが指定されたテーブルの最大境界内にあるかどうか。
- 可変長データ参照 (OCCURS DEPENDING ON 文節を含むデータ項目への参照): 実際の長さが正であるかどうか、そしてグループ・データ項目に対して定義された最大長より短いかどうか。
- 参照変更データ参照: オフセットと長さが正であるかどうか。オフセットと長さの合計がデータ項目の最大長より短いかどうか。

SSRANGE オプションが有効な場合、以下の両方の条件が真であれば、実行時に検査が行われることになります。

- 指標付き、添え字付き、可変長、または参照変更データ項目が含まれている COBOL ステートメントが実行される。
- CHECK ランタイム・オプションが ON である。

参照されたデータが入っているデータ項目の範囲外にあるアドレスが生成されることが検出されると、エラー・メッセージが生成され、プログラムは実行を停止します。メッセージでは、参照されたテーブルまたは ID、およびエラーが発生した行番号が識別されます。エラーの原因となった参照のタイプによっては、追加情報が提供されます。

特定のデータ参照のすべての添え字、指標、および参照修飾子がリテラルであり、データ項目の外側を参照する結果になる場合は、SSRANGE オプションの設定値に関係なく、エラーはコンパイル時に診断されます。

パフォーマンスの考慮: SSRANGE が指定されると、パフォーマンスは少し低下することがあります。これは、それぞれの添え字付きまたは指標付き項目を検査するために必要なオーバーヘッドが余分にかかるためです。

関連参照

291 ページの『SSRANGE』

605 ページの『パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション』

診断するエラーのレベルの選択

FLAG コンパイラー・オプションを使用すると、コンパイル時に診断するエラーのレベルを指定すること、およびエラー・メッセージをリストに組み込みかどうかを指示することができます。すべてのエラーが通知されるようにするには、FLAG(I) または FLAG(I,I) を使用してください。

最初のパラメーターには、発行される構文エラー・メッセージのうち最も重大度レベルの低いものを指定してください。オプションとして、2 番目のパラメーターには、ソース・リストに組み込む構文メッセージのうち最も重大度レベルの低いものを指定します。この重大度レベルは、最初のパラメーターのレベルと同じかそれ以上でなければなりません。両方のパラメーターを指定する場合は、一緒に SOURCE コンパイラー・オプションも指定する必要があります。

表 41. コンパイラー・メッセージの重大度レベル

重大度レベル	結果メッセージ
U (回復不能)	U (メッセージのみ)
S (重大)	すべての S および U メッセージ
E (エラー)	すべての E、S、および U メッセージ
W (警告)	すべての W、E、S、および U メッセージ
I (通知)	すべてのメッセージ

2 番目のパラメーターを指定すると、コンパイラーがエラーを検出するために利用できる情報が十分ある時点で、構文エラー・メッセージ (U レベルのメッセージを除く) がソース・リストに組み込まれます。ライブラリー・コンパイラー・フェーズで出されるメッセージ以外のすべての組み込みメッセージは、それらが参照するステートメントの直後に続きます。エラーがあるステートメントの番号もメッセージに示されます。組み込みメッセージは、ソース・リストの終わりに出される残りの診断メッセージで繰り返されます。

NOSOURCE コンパイラー・オプションを指定した場合は、構文エラー・メッセージはリストの終わりにだけ入れられます。回復不能エラーに関するメッセージはソース・リストに組み込まれません。この重大度のエラーはコンパイルを終了させるからです。

337 ページの『例: 組み込みメッセージ』

関連タスク

226 ページの『コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成』

関連参照

271 ページの『FLAG』

226 ページの『コンパイラ検出エラーに関するメッセージおよびリスト』

225 ページの『コンパイル・エラー・メッセージの重大度コード』

例: 組み込みメッセージ

次の例は、FLAG オプションに 2 番目のパラメーターを指定することによって生成される組み込みメッセージを示しています。要約の中のメッセージのいくつかは複数の COBOL ステートメントに適用されます。

```

LineID  PL SL  ----+*A-1-B--+----2----+----3----+----4----+----5----+----6----+----7--+--8 Map and Cross Reference
.
.
.
000977      /
000978      *****
000979      ***      I N I T I A L I Z E      P A R A G R A P H      **
000980      ***      Open files. Accept date, time and format header lines.      **
000981      IA4690***      Load location-table.      **
000982      *****
000983      100-initialize-paragraph.
000984      move spaces to ws-transaction-record      IMP 339
000985      move spaces to ws-commuter-record      IMP 315
000986      move zeroes to commuter-zipcode      IMP 326
000987      move zeroes to commuter-home-phone      IMP 327
000988      move zeroes to commuter-work-phone      IMP 328
000989      move zeroes to commuter-update-date      IMP 332
000990      open input update-transaction-file      203
==000990==> IGYP52052-S An error was found in the definition of file "LOCATION-FILE". The
reference to this file was discarded.
000991      location-file      192
000992      i-o commuter-file      180
000993      output print-file      216
000994      if loccode-file-status not = "00" or      248
000995      update-file-status not = "00" or      247
000996      updprint-file-status not = "00"      249
000997      1      display "Open Error ..."
000998      1      display " Location File Status = " loccode-file-status      248
000999      1      display " Update File Status = " update-file-status      247
001000      1      display " Print File Status = " updprint-file-status      249
001001      1      perform 900-abnormal-termination      1433
001002      end-if
001003      IA4760      if commuter-file-status not = "00" and not = "97"      240
001004      1      display "100-OPEN"
001005      1      move 100 to comp-code      230
001006      1      perform 500-stl-error      1387
001007      1      display "Commuter File Status (OPEN) = "
001008      1      commuter-file-status      240
001009      1      perform 900-abnormal-termination      1433
001010      IA4790      end-if
001011      accept ws-date from date      UND
==001011==> IGYP52121-S "WS-DATE" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
001012      IA4810      move corr ws-date to header-date      UND 463
==001012==> IGYP52121-S "WS-DATE" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
001013      accept ws-time from time      UND
==001013==> IGYP52121-S "WS-TIME" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
001014      IA4830      move corr ws-time to header-time      UND 457
==001014==> IGYP52121-S "WS-TIME" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
001015      IA4840      read location-file      192
.
.
.
LineID  Message code  Message text
192  IGYP51050-E  File "LOCATION-FILE" contained no data record descriptions.
The file definition was discarded.
899  IGYP52052-S  An error was found in the definition of file "LOCATION-FILE".
The reference to this file was discarded.
Same message on line: 990
1011  IGYP52121-S  "WS-DATE" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Same message on line: 1012
1013  IGYP52121-S  "WS-TIME" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Same message on line: 1014
1015  IGYP52053-S  An error was found in the definition of file "LOCATION-FILE".
This input/output statement was discarded.
Same message on line: 1027
1026  IGYP52121-S  "LOC-CODE" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
1209  IGYP52121-S  "COMMUTER-SHIFT" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Same message on line: 1230
1210  IGYP52121-S  "COMMUTER-HOME-CODE" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Same message on line: 1231
1212  IGYP52121-S  "COMMUTER-NAME" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Same message on line: 1233
1213  IGYP52121-S  "COMMUTER-INITIALS" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Same message on line: 1234
1223  IGYP52121-S  "WS-NUMERIC-DATE" was not defined as a data-name. The statement was discarded.
Messages Total Informational Warning Error Severe Terminating
Printed: 19 1 18
* Statistics for COBOL program FLAGOUT:
* Source records = 1755
* Data Division statements = 279
* Procedure Division statements = 479
Locale = en_US.IBM-850 (1)
End of compilation 1, program FLAGOUT, highest severity: Severe.
Return code 12

```

(1) コンパイラーが使用したロケール。

プログラム・エンティティー定義および参照の検出

XREF(FULL) コンパイラー・オプションを使用すると、データ名、プロシージャー名、またはプログラム名が定義および参照されている場所を見つけることができます。ソート済み相互参照には、そのエンティティーが定義されている行番号およびそのエンティティーへのすべての参照の行番号が入れられます。

明示的に参照されているデータ項目だけを含める場合は、XREF(SHORT) オプションを使用します。

XREF (FULL または SHORT のいずれか) と SOURCE オプションの両方を使用すると、変更された相互参照がソース・リストの右側に印刷されます。この組み込み相互参照は、データ名またはプロシージャ名が定義されている行番号を示します。

プログラム内のユーザー定義語は、アクティブなロケールを使用してソートされます。したがって、照合シーケンスによって、マルチバイト・ワードを含む相互参照リストの順序が決定されます。

MOVE CORRESPONDING ステートメントのグループ名が、XREF リストに表示されます。相互参照リストには、その移動に含まれるグループ名とすべての基本名が含まれます。

347 ページの『例: XREF 出力 - データ名相互参照』

348 ページの『例: XREF 出力 - プログラム名相互参照』

348 ページの『例: 組み込み相互参照』

関連タスク

340 ページの『リストの入手』

関連参照

297 ページの『XREF』

データ項目のリスト

MAP コンパイラー・オプションを使用すると、DATA DIVISION 項目および暗黙に宣言されているすべての項目のリストを作成することができます。

MAP オプションを使用すると、圧縮 MAP 情報が含まれている組み込み MAP 要約が、COBOL ソース・データ宣言の右側に生成されます。XREF データと組み込み MAP 要約の両方が同じ行にあるときは、組み込み要約の方が先に印刷されます。

MAP リストおよび組み込み MAP 要約の各部分は、ソース全体に散在した *CONTROL MAPINOMAP (または *CBL MAPINOMAP) ステートメントを使用して、選択したり禁止することができます。以下に、その例を示します。

```
*CONTROL NOMAP
    01  A
    02  B
*CCONTROL MAP
```

344 ページの『例: MAP 出力』

関連タスク

340 ページの『リストの入手』

関連参照

276 ページの『MAP』

デバッガーの使用

WebSphere Developer for System z ではデバッガーが提供されています。デバッガーを使用して実行可能プログラムの実行をステップスルーできるように COBOL プログラムを準備するには、TEST コンパイラー・オプションを使用します。

あるいは、cob2 コマンドの -g オプションを使用して、デバッガーを使用するためにプログラムを準備することもできます。

関連タスク

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

関連参照

292 ページの『TEST』

リストの入手

コンパイラー・オプションを使用して適切なコンパイラー・リストを要求することによって、デバッグに必要な情報を入手してください。

重要: コンパイラーによって作成されるリストは、プログラミング・インターフェースではなく、容易に変更できるものです。

表 42. コンパイラー・オプションとリストの対応

用途	リスト	内容	コンパイラー・オプション
プログラムに有効なオプションのリスト、プログラムの内容に関する統計、およびコンパイルに関する診断メッセージを検査する。 コンパイル時に有効なロケールを検査する。	短縮リスト	<ul style="list-style-type: none">プログラムに有効なオプションのリストプログラムの内容に関する統計コンパイルに関する診断メッセージ¹ 有効なロケールを示すロケール行	NOSOURCE、NOXREF、NOVBREF、NOMAP、NOLIST
プログラムのテストおよびデバッグを援助する。プログラムのデバッグ後にレコードを得る。	ソース・リスト	ソースのコピー	289 ページの『SOURCE』
特定のデータ項目を見つける。再入可能性または最適化を考慮した後の最終ストレージ割り振りを調べる。プログラムが定義されている場所を見つけ、その属性を検査する。	DATA DIVISION 項目のマッピング	すべての DATA DIVISION 項目および暗黙的に宣言されたすべての項目 組み込みマップ要約 (DATA DIVISION 内の、データ宣言が含まれている行のリストの右マージン) ネストされたプログラム・マップ (ネストされたプログラムが含まれているプログラム)	276 ページの『MAP』 ²

表 42. コンパイラー・オプションとリストの対応 (続き)

用途	リスト	内容	コンパイラー・オプション
名前が定義、参照、または変更されている場所を調べる。プロシージャが参照されているコンテキスト (例えば、動詞が PERFORM ブロックで使用されたかどうか) を判別する。	名前のソート済み相互参照リスト	データ名、プロシージャ名、プログラム名。これらの名前への参照。 組み込みの変更済み相互参照。この組み込み相互参照は、データ名またはプロシージャ名が定義されている行番号を渡す。	297 ページの『XREF』 ^{2,3}
プログラム内の障害のある動詞を見つける。または、プログラムの実行時に移動されたデータ項目のストレージのアドレスを調べる。	コンパイラーによって生成される PROCEDURE DIVISION コードおよびアセンブラ・コード ³	生成されたコード	275 ページの『LIST』 ^{2,4}
特定の動詞のインスタンスを見つける。	アルファベット順の動詞	使用されたそれぞれの動詞、各動詞が使用された回数、各動詞が使用された行番号	297 ページの『VBREF』
<ol style="list-style-type: none"> 1. メッセージを除去するには、コンパイル診断情報のレベルを左右するオプション (例えば、FLAG) をオフにしてください。 2. コンパイル済みプログラムの行番号を使用するには、NUMBER コンパイラー・オプションを使用してください。コンパイラーは、ステートメントが読み込まれるときに、桁 1 から 6 にあるソース・ステートメント行番号のシーケンスを検査します。行番号が順序どおりになっていないことがわかると、コンパイラーは先行のステートメントの行番号より 1 だけ大きい値の番号を割り当てます。新しい値には、2 つのアスタリスクのフラグが付けられます。シーケンス・エラーを示す診断メッセージがコンパイル・リストに入れられます。 3. プロシージャ参照のコンテキストは、行番号の前の文字で示されます。 4. アセンブラー・リストは、ソース・プログラムと同じ名前と拡張子 .asm の付いたファイルに書き込まれます。ただし、SEPOBJ オプションを使用したバッチ・コンパイルの場合は例外です。 			

342 ページの『例: 短縮リスト』

343 ページの『例: SOURCE および NUMBER 出力』

344 ページの『例: MAP 出力』

345 ページの『例: 組み込みマップ要約』

347 ページの『例: ネストされたプログラム・マップ』

347 ページの『例: XREF 出力 - データ名相互参照』

348 ページの『例: XREF 出力 - プログラム名相互参照』

348 ページの『例: 組み込み相互参照』

349 ページの『例: VBREF コンパイラー出力』

関連タスク

226 ページの『コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成』

関連参照

226 ページの『コンパイラー検出エラーに関するメッセージおよびリスト』

285 ページの『SEPOBJ』

例: 短縮リスト

次のリスト内に示された注釈番号は、番号が付いた後続の説明と対応しています。
診断メッセージの原因となったエラーのいくつかは、説明を行うために故意に挿入されたものです。

```
Invocation parameters:      (1)
NOADATA
PROCESS(CBL) statements:
CBL  NOSOURCE,NOXREF,NOVBREF,NOMAP,NOLIST      (2)      IGY00010
Options in effect:         (3)
NOADATA
QUOTE
ARITH(COMPAT)
BINARY(NATIVE)
CALLINT(SYSTEM,NODESCRIPTOR)
CHAR(NATIVE)
NOCICS
COLLSEQ(BINARY)
NOCOMPILE(S)
NOCURRENCY
NODATEPROC
NODIAGTRUNC
NODYNAM
ENTRYINT(SYSTEM)
NOEXIT
FLAG(I)
NOFLAGSTD
FLOAT(NATIVE)
LIB
LINECOUNT(60)
NOLIST
LSTFILE(LOCALE)
NOMAP
NOMDECK
NCOLLSEQ(BINARY)
NSYMBOL(NATIONAL)
NONUMBER
NOOPTIMIZE
PGMNAME(LONGUPPER)
PROBE
NOPROFILE
SEPOBJ
SEQUENCE
NOSOSI
SIZE(2097152)
NOSOURCE
SPACE(1)
SQL
NOSSRANGE
TERM
NOTEST
NOTHREAD
TRUNC(STD)
NOVBREF
NOWORD
NOWSCLEAR
NOXREF
YEARWINDOW(1900)
ZWB

LineID  Message code  Message text      (4)
IGYDS0139-W  Diagnostic messages were issued during processing of compiler options.  These messages are
193  IGYDS1050-E  File "LOCATION-FILE" contained no data record descriptions.  The file definition was discarded.
889  IGYPS2052-S  An error was found in the definition of file "LOCATION-FILE".  The reference to this file
was discarded.
993  IGYPS2121-S  Same message on line: 983
"WS-DATE" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
995  IGYPS2121-S  Same message on line: 994
"WS-TIME" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
997  IGYPS2053-S  Same message on line: 996
An error was found in the definition of file "LOCATION-FILE".  This input/output statement
was discarded.
1008 IGYPS2121-S  Same message on line: 1009
"LOC-CODE" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
1219 IGYPS2121-S  "COMMUTER-SHIFT" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
1220 IGYPS2121-S  Same message on line: 1240
"COMMUTER-HOME-CODE" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
1222 IGYPS2121-S  Same message on line: 1241
"COMMUTER-NAME" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
1223 IGYPS2121-S  Same message on line: 1243
"COMMUTER-INITIALS" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
1233 IGYPS2121-S  Same message on line: 1244
"WS-NUMERIC-DATE" was not defined as a data-name.  The statement was discarded.
Messages Total Informational Warning Error Severe Terminating (5)
Printed: 21 2 1 18
* Statistics for COBOL program SLISTING: (6)
Source records = 1765
Data Division statements = 277
Procedure Division statements = 513
Locale = en US.IBM-850 (7)
End of compilation 1, program SLISTING, highest severity: Severe. (8)
Return code 12
```

- (1) コンパイラ呼び出し時にコンパイラに渡されたオプションに関するメッセージ。このメッセージは、オプションが渡されていない場合には表示されません。
- (2) PROCESS (または CBL) ステートメントの中にコーディングされたオプション。
- (3) このコンパイルの開始時のオプションの状況。
- (4) プログラム診断メッセージ。最初のメッセージは、ライブラリー・フェーズ診断 (ある場合) に言及しています。ライブラリー・フェーズの診断は、常にリストの先頭に示されます。
- (5) このプログラムの診断メッセージのカウントで、重大度レベルによってグループ化されたもの。
- (6) プログラム SLISTING のプログラム統計。
- (7) コンパイラが使用したロケール。
- (8) コンパイル単位のプログラム統計。バッチ・コンパイルを実行する (1 回のコンパイルで複数の最外部 COBOL プログラムを実行する) 場合、戻りコードは、コンパイル全体に関する最高レベルのメッセージ重大度を表します。

例: SOURCE および NUMBER 出力

次に示されているリストの部分では、プログラマーは 2 つのステートメントに順序どおりでない番号を付けています。リスト内の注釈番号は、番号が付いた後続の説明と対応しています。

LineID (2)	PL SL (3)	-----*A-1-B-+-----2-----3-----4-----5-----6-----7- -----8	Cross-Reference (1)
		087000/*****	
		087100*** D O M A I N L O G I C	**
		087200***	**
		087300*** Initialization. Read and process update transactions until	**
		087400*** EOE. Close files and stop run.	**
		087500*****	
		087600 procedure division.	
		087700 000-do-main-logic.	
		087800 display "PROGRAM SRCOUT - Beginning"	
		087900 perform 050-create-stl-master-file.	
		088150 display "perform 050-create-stl-master finished".	
088151**		perform 100-initialize-paragraph	
		088200 display "perform 100-initialize-paragraph finished"	
		088300 read update-transaction-file into ws-transaction-record	
		088400 at end	
	1	088500 set transaction-eof to true	
		088600 end-read	
		088700 display "READ completed"	
		088800 perform until transaction-eof	
	1	088900 display "inside perform until loop"	
	1	089000 perform 200-edit-update-transaction	
	1	089100 display "After perform 200-edit "	
	1	089200 if no-errors	
	2	089300 perform 300-update-commuter-record	
	2	089400 display "After perform 300-update "	
	1	089650 else	
089651**	2	089600 perform 400-print-transaction-errors	
	2	089700 display "After perform 400-errors "	
	1	089800 end-if	
	1	089900 perform 410-re-initialize-fields	
	1	090000 display "After perform 410-reinitialize"	
	1	090100 read update-transaction-file into ws-transaction-record	
	1	090200 at end	
	2	090300 set transaction-eof to true	
	1	090400 end-read	
	1	090500 display "After '2nd READ' "	
		090600 end-perform	

- (1) スケール行では、区域 A、区域 B、およびソース・コード列番号にラベルを付けます。

- (2) コンパイラーが割り当てるソース・コード行番号。
- (3) プログラム (PL) とステートメント (SL) のネスト・レベル。
- (4) プログラムの第 1 から 6 桁 (シーケンス番号域)。

例: MAP 出力

次の例は、MAP オプションからの出力を示しています。その下の説明で使用されている番号は、出力に付けられている番号と対応しています。

Data Division Map

(1)
Data Definition Attribute codes (rightmost column) have the following meanings:
D = Object of OCCURS DEPENDING G = GLOBAL LSEQ= ORGANIZATION LINE SEQUENTIAL
E = EXTERNAL O = Has OCCURS clause SEQ= ORGANIZATION SEQUENTIAL
VLO=Variably Located Origin OG= Group has own length definition INDX= ORGANIZATION INDEXED
VL= Variably Located R = REDEFINES REL= ORGANIZATION RELATIVE

(2) Source LineID	(3) (4) Hierarchy and Data Name	(5) Length(Displacement)	(6) Data Type	(7) Data Def Attributes
4	PROGRAM-ID IGYTCARA-----*			
180	FD COMMUTER-FILE		File	INDX
182	1 COMMUTER-RECORD	80	Group	
183	2 COMMUTER-KEY.	16(0000000)	Display	
184	2 FILLER.	64(0000016)	Display	
186	FD COMMUTER-FILE-MST		File	INDX
188	1 COMMUTER-RECORD-MST	80	Group	
189	2 COMMUTER-KEY-MST.	16(0000000)	Display	
190	2 FILLER.	64(0000016)	Display	
192	FD LOCATION-FILE		File	SEQ
203	FD UPDATE-TRANSACTION-FILE		File	SEQ
208	1 UPDATE-TRANSACTION-RECORD	80	Display	
216	FD PRINT-FILE.		File	SEQ
221	1 PRINT-RECORD.	121	Display	
228	1 WORKING-STORAGE-FOR-IGYTCARA	1	Display	

- (1) データ定義属性コードの説明。
- (2) データ項目が定義されたソース行番号。
- (3) レベル定義または番号。コンパイラーは、次の方法でこの番号を生成します。
 - ・ 階層の第 1 レベルは常に 01 です。レベル 02 から 49 としてコーディングした項目のレベルごとに 1 を加えます。
 - ・ レベル番号の 66、77、および 88、そして標識 FD と SD は変更されません。
- (4) ソース・モジュールでソース順序で使用されるデータ名。
- (5) データ項目の長さ。ベース・ロケーター値。
- (6) 収容構造の先頭からの 16 進変位。
- (7) データ型および使用法。
- (8) データ定義属性コード。定義は DATA DIVISION マップの先頭で説明されています。

関連参照

345 ページの『MAP 出力で使用される用語およびシンボル』

例: 組み込みマップ要約

次の例は、MAP オプションによって作成される組み込みマップ要約を示しています。この要約は、DATA DIVISION の、データ宣言を含む行のリストの右マージンに現れます。

000002	Identification Division.		
000003			
000004	Program-id. EMBMAP.		
000176	Data division.		
000177	File section.		
000178			
000179			
000180	FD COMMUTER-FILE		
000181	record 80 characters.		(1) (2)
000182	01 commuter-record.		80
000183	05 commuter-key	PIC x(16).	16(00000000)
000184	05 filler	PIC x(64).	64(0000016)
000221	IA1620 01 print-record	pic x(121).	121
000227	Working-storage section.		
000228	01 Working-storage-for-EMBMAP	pic x.	1
000229			
000230	77 comp-code	pic S9999 comp.	2
000231	77 ws-type	pic x(3) value spaces.	3
000232			
000233			
000234	01 i-f-status-area.		2
000235	05 i-f-file-status	pic x(2).	2(00000000)
000236	88 i-o-successful	value zeroes.	IMP
000237			
000238			
000239	01 status-area.		8
000240	05 commuter-file-status	pic x(2).	(3) 2(00000000)
000241	88 i-o-okay	value zeroes.	IMP
000242	05 commuter-stl-status.		6(00000002)
000243	10 stl-r15-return-code	pic 9(2) comp.	2(00000002)
000244	10 stl-function-code	pic 9(1) comp.	2(00000004)
000245	10 stl-feedback-code	pic 9(3) comp.	2(00000006)
000246			
000247	77 update-file-status	pic xx.	2
000248	77 loccode-file-status	pic xx.	2
000249	77 updprint-file-status	pic xx.	2
000877	procedure division.		
000878	000-do-main-logic.		
000879	display "PROGRAM EMBMAP - Beginning".		
000880	perform 050-create-stl-master-file.		931

- (1) データ項目の 10 進数の長さ。
- (2) ベース・ロケータ値の先頭からの 16 進変位。
- (3) 特殊定義記号:
 - UND ユーザー名が未定義です。
 - DUP ユーザー名が 1 回を超えて定義されています。
 - IMP 暗黙的に定義された名前 (特殊レジスターまたは表意定数など)。
 - IFN 組み込み関数参照。
 - EXT 外部参照。
 - * NOCOMPILE オプションが有効なため、プログラム名が未解決です。

MAP 出力で使用される用語およびシンボル

次の表は、MAP コンパイラー・オプションによって作成されるリストで使用される用語およびシンボルを説明しています。

表 43. MAP 出力で使用される用語およびシンボル

用語	説明
ALPHABETIC	英字 (PICTURE A)
ALPHA-EDIT	英字編集
AN-EDIT	英数字編集
BINARY	バイナリー (USAGE BINARY、COMPUTATIONAL、または COMPUTATIONAL-5)
COMP-1	単精度内部浮動小数点 (USAGE COMPUTATIONAL-1)
COMP-2	倍精度内部浮動小数点 (USAGE COMPUTATIONAL-2)
DBCS	DBCS (USAGE DISPLAY-1)
DBCS-EDIT	DBCS 編集
DISP-FLOAT	表示浮動小数点 (USAGE DISPLAY)
DISPLAY	英数字 (PICTURE X)
DISP-NUM	ゾーン 10 進数 (USAGE DISPLAY)
DISP-NUM-EDIT	数値編集 (USAGE DISPLAY)
FD	ファイル定義
FUNCTION-PTR	外部呼び出し可能な関数を指すポインター (USAGE FUNCTION-POINTER)
GROUP	英数字 固定長グループ
GRP-VARLEN	英数字 可変長グループ
INDEX	指標 (USAGE INDEX)
INDEX-NAME	指標名
NATIONAL	カテゴリー 国別 (USAGE NATIONAL)
NAT-EDIT	国別編集 (USAGE NATIONAL)
NAT-FLOAT	国別浮動小数点 (USAGE NATIONAL)
NAT-GROUP	国別グループ (GROUP-USAGE NATIONAL)
NAT-GRP-VARLEN	国別可変長グループ (GROUP-USAGE NATIONAL)
NAT-NUM	国別 10 進数 (USAGE NATIONAL)
NAT-NUM-EDIT	国別数字編集 (USAGE NATIONAL)
OBJECT-REF	オブジェクト参照 (USAGE OBJECT REFERENCE)
PACKED-DEC	内部 10 進 (USAGE PACKED-DECIMAL または COMPUTATIONAL-3)
POINTER	ポインター (USAGE POINTER)
PROCEDURE-PTR	外部呼び出し可能なプログラムを指すポインター (USAGE PROCEDURE-POINTER)
SD	ソート・ファイル定義
01-49, 77	データ記述に関するレベル番号
66	RENAMES に関するレベル番号
88	条件名に関するレベル番号

例: ネストされたプログラム・マップ

この例は、MAP コンパイラー・オプションを指定することによって作成される、ネストされたプロシーチャーのマップを示しています。括弧内の番号は、後続の注釈に対応しています。

Nested Program Map

(1)

Program Attribute codes (rightmost column) have the following meanings:

C = COMMON

I = INITIAL

U = PROCEDURE DIVISION USING...

(2)	(3)	(4)	(5)
Source	Nesting	Program Name from PROGRAM-ID paragraph	Program Attributes
LineID	Level		
2		NESTED.	
12	1	X1.	
20	2	X11	
27	2	X12	
35	1	X2.	

(1) プログラム属性コードの説明。

(2) プログラムが定義されたソース行番号。

(3) プログラムのネストの深さ。

(4) プログラム名

(5) プログラム属性コード。

例: XREF 出力 - データ名相互参照

次の例は、データ名のソート済み相互参照を示しています。これは、XREF コンパイラー・オプションによって作成されます。括弧内の番号は、後続の注釈に対応しています。

An "M" preceding a data-name reference indicates that the data-name is modified by this reference.

(1)	(2)	(3)
Defined	Cross-reference of data-names	References
264	ABEND-ITEM1	
265	ABEND-ITEM2	
347	ADD-CODE	1126 1192
381	ADDRESS-ERROR.	M1156
280	AREA-CODE.	1266 1291 1354 1375
382	CITY-ERROR	M1159

(4)

Context usage is indicated by the letter preceding a procedure-name reference. These letters and their meanings are:

A = ALTER (procedure-name)

D = GO TO (procedure-name) DEPENDING ON

E = End of range of (PERFORM) through (procedure-name)

G = GO TO (procedure-name)

P = PERFORM (procedure-name)

T = (ALTER) TO PROCEED TO (procedure-name)

U = USE FOR DEBUGGING (procedure-name)

(5)	(6)	(7)
Defined	Cross-reference of procedures	References

```

877 000-DO-MAIN-LOGIC
943 050-CREATE-STL-MASTER-FILE . . P879
995 100-INITIALIZE-PARAGRAPH . . . P881
1471 1100-PRINT-I-F-HEADINGS. . . . P926
1511 1200-PRINT-I-F-DATA. . . . . P928
1573 1210-GET-MILES-TIME. . . . . P1540
1666 1220-STORE-MILES-TIME. . . . . P1541
1682 1230-PRINT-SUB-I-F-DATA. . . . P1562
1706 1240-COMPUTE-SUMMARY . . . . . P1563
1052 200-EDIT-UPDATE-TRANSACTION. . P890
1154 210-EDIT-THE-REST. . . . . P1145
1189 300-UPDATE-COMMUTER-RECORD . . P893
1237 310-FORMAT-COMMUTER-RECORD . . P1194 P1209
1258 320-PRINT-COMMUTER-RECORD. . . P1195 P1206 P1212 P1222
1318 330-PRINT-REPORT . . . . . P1208 P1232 P1286 P1310 P1370
1342 400-PRINT-TRANSACTION-ERRORS . P896

```

データ名の相互参照:

- (1) その名前が定義されている行番号。
- (2) データ名。
- (3) その名前が使用されている行番号。M が行番号の前に置かれている場合は、データ項目がその位置で明示的に変更されたことを意味します。

プロシージャ参照の相互参照:

- (4) プロシージャ参照のコンテキスト取扱コードの説明。
- (5) そのプロシージャ名が定義されている行番号。
- (6) プロシージャ名。
- (7) そのプロシージャが参照されている行番号およびそのプロシージャのコンテキスト取扱コード。

例: XREF 出力 - プログラム名相互参照

次の例は、プログラム名のソート済み相互参照を示しています。これは、XREF コンパイラー・オプションによって作成されます。括弧内の番号は、後続の注釈に対応しています。

(1)	(2)	(3)
Defined	Cross-reference of programs	References
EXTERNAL	EXTERNAL1.	25
2	X.	41
12	X1.	33 7
20	X11.	25 16
27	X12.	32 17
35	X2.	40 8

- (1) そのプログラム名が定義されている行番号。プログラムが外部の場合は、定義行番号の代わりに EXTERNAL という語が表示されます。
- (2) プログラム名。
- (3) そのプログラムが参照されている行番号。

例: 組み込み相互参照

次の例は、ソース・リストに組み込まれる変更済み相互参照を示しています。相互参照は、XREF コンパイラー・オプションによって作成されます。

LineID	PL	SL	-----*A-1-B-+-----2-+-----3-+-----4-+-----5-+-----6-+-----7- -----8	Map and Cross Reference
000878			procedure division.	
000879			000-do-main-logic.	
000880			display "PROGRAM IGYTCARA - Beginning".	
000881			perform 050-create-stl-master-file.	932 (1)
000882			perform 100-initialize-paragraph.	984
000883			read update-transaction-file into ws-transaction-record	204 340
000884			at end	
000885	1		set transaction-eof to true	254
000886			end-read.	
000984			100-initialize-paragraph.	
000985			move spaces to ws-transaction-record	IMP 340 (2)
000986			move spaces to ws-commuter-record	IMP 316
000987			move zeroes to commuter-zipcode	IMP 327
000988			move zeroes to commuter-home-phone	IMP 328
000989			move zeroes to commuter-work-phone	IMP 329
000990			move zeroes to commuter-update-date	IMP 333
000991			open input update-transaction-file	204
000992			location-file	193
000993			i-o commuter-file	181
000994			output print-file	217
001442			1100-print-i-f-headings.	
001443				
001444			open output print-file.	217
001445				
001446			move function when-compiled to when-comp.	IFN 698 (2)
001447			move when-comp (5:2) to compile-month.	698 640
001448			move when-comp (7:2) to compile-day.	698 642
001449			move when-comp (3:2) to compile-year.	698 644
001450				
001451			move function current-date (5:2) to current-month.	IFN 649
001452			move function current-date (7:2) to current-day.	IFN 651
001453			move function current-date (3:2) to current-year.	IFN 653
001454				
001455			write print-record from i-f-header-line-1	222 635
001456			after new-page.	138

- (1) プログラム内のデータ名またはプロシージャー名の定義の行番号。
- (2) 特殊定義記号:
 - UND** ユーザー名が未定義です。
 - DUP** ユーザー名が 1 回を超えて定義されています。
 - IMP** 暗黙的に定義された名前 (特殊レジスターや表意定数など)。
 - IFN** 組み込み関数参照。
 - EXT** 外部参照。
 - *** NOCOMPILE オプションが有効なため、プログラム名が未解決です。

例: VBREF コンパイラー出力

次の例は、プログラム内のすべての動詞のアルファベット順のリストと、各動詞が参照されている場所を示しています。このリストは、VBREF コンパイラー・オプションによって作成されます。

(1)	(2)	(3)
2	ACCEPT	101 101
2	ADD	129 130
1	CALL	140
5	CLOSE	90 94 97 152 153
20	COMPUTE	150 164 164 165 166 166 166 166 167 168 168 169 169 170 171 171
		171 172 172 173
2	CONTINUE	106 107
2	DELETE	96 119
47	DISPLAY	88 90 91 92 92 93 94 94 94 95 96 96 97 99 99 100 100 100 100
		103 109 117 117 118 119 138 139 139 139 139 139 139 140 140 140
		140 143 148 148 149 149 149 152 152 152 153 162
2	EVALUATE	116 155
47	IF	88 90 93 94 94 95 96 96 97 99 100 103 105 105 107 107 107 109
		110 111 111 112 113 113 113 113 114 114 115 115 116 118 119 124
		124 126 127 129 132 133 134 135 136 148 149 152 152
183	MOVE	90 93 95 98 98 98 98 98 99 100 101 101 102 104 105 105 106 106
		107 107 108 108 108 108 108 108 109 110 111 112 113 113 113 114
		114 114 115 115 116 116 117 117 117 118 118 118 119 119 120 121
		121 121 121 121 121 121 121 121 121 122 122 122 122 122 123 123
		123 123 123 123 123 124 124 124 125 125 125 125 125 125 126
		126 126 126 126 127 127 127 127 128 128 129 129 130 130 130 130
		131 131 131 131 131 132 132 132 132 132 133 133 133 133 133
		134 134 134 134 134 135 135 135 135 135 135 136 136 137 137
		137 137 138 138 138 138 141 141 142 142 144 144 144 145 145
		145 145 146 149 150 150 150 151 151 155 156 156 157 157 158 158
		159 159 160 160 161 161 162 162 162 168 168 168 169 169 170 171
		171 172 172 173 173
5	OPEN	93 95 99 144 148
62	PERFORM	88 88 88 88 89 89 89 91 91 91 91 93 93 94 94 95 95 95 95 96
		96 96 97 97 100 100 101 102 104 109 109 111 116 116 117 117
		117 118 118 118 118 119 119 119 120 120 124 125 127 128 133 134
		135 136 136 137 150 151 151 153 153
8	READ	88 89 96 101 102 108 149 151
1	REWRITE	118
4	SEARCH	106 106 141 142
46	SET	88 89 101 103 104 105 106 108 108 136 141 142 149 150 151 152 154
		155 156 156 156 156 157 157 157 157 158 158 158 158 159 159 159
		159 160 160 160 160 161 161 161 161 162 162 164 164
2	STOP	92 143
4	STRING	123 126 132 134
33	WRITE	94 116 129 129 129 129 129 130 130 130 130 145 146 146 146 146 147
		147 151 165 165 166 166 167 174 174 174 174 174 174 175 175

- (1) その動詞がプログラムで使用されている回数。
- (2) 動詞。
- (3) その動詞が使用されている行番号。

ユーザー出口のデバッグ

ユーザー出口ルーチンをデバッグするには、COB2.EXE ではなく、メインのコンパイラー・モジュール上でデバッガーを使用します。(メインのコンパイラー・モジュールは cob2 によって起動される個別のプロセスです。デバッガーは、1 つのプロセスしかデバッグできません。)

以下の手順を実行します。

1. cob2 とともに -# オプションを使用して、cob2 がメイン・コンパイラー・モジュールを呼び出す方法と、渡されるオプションを調べます。例えば、次のコマンドは、IWZRMGUX ユーザー出口を使用して *pgmname.cbl* をコンパイルし、それをリンクします。

```
cob2 -q"EXIT(ADEXIT(IWZRMGUX))" pgmname.cbl
```

このコマンドを次のように修正します。

```
cob2 -# -q"EXIT(ADEXIT(IWZRMGUX))" pgmname.cbl
```

結果として、以下が表示されます (igycob2 はご使用のユーザー出口を呼び出します)。

```
igycob2 -q"EXIT(ADEXIT(IWZRMGUX))" pgmname.cbl  
ilink /free /no1 /pm:vio pgmname.obj
```

2. ユーザー出口を次のようにデバッグします。

```
idebug igycob2 -q"EXIT(ADEXIT(IWZRMGUX))" pgmname.cbl
```

デバッガーは、デバッグ情報を使用してユーザー出口を構築する場合に、ユーザー出口の開始時に自動的に停止します。

アセンブラー・ルーチンのデバッグ

アセンブラー・ルーチンをデバッグするには、「逆アセンブル」ビューを使用します。アセンブラー・ルーチンにはデバッグ情報がないため、デバッガーは自動的にこのビューに移動します。

「逆アセンブル」ビュー内で、逆アセンブルされたステートメントにブレークポイントを設定するには、接頭部域内をダブルクリックします。デフォルトでは、デバッガーは開始時に、最初のデバッグ可能ステートメントを検出するまで実行します。(デバッグ可能かどうかを問わず) アプリケーション内の最初の命令でデバッガーを停止させるには、`-i` オプションを使用する必要があります。以下に、その例を示します。

```
idebug -i progname
```

第 4 部 データベースへのアクセス

第 19 章 DB2 環境用のプログラミング 355

DB2 コプロセッサ 355

SQL ステートメントのコーディング 356

DB2 コプロセッサを用いた SQL INCLUDE

の使用 357

SQL ステートメントでのバイナリー項目の使用 357

SQL ステートメントの成否の判断 358

コンパイル前の DB2 の起動 358

SQL オプションを使用したコンパイル 358

DB2 サブオプションの分離 359

パッケージ名およびバインド・ファイル名の使用 359

第 20 章 COBOL プログラムの開発 (CICS の場

合) 361

CICS のもとで実行する COBOL プログラムのコー
ディング 362

CICS のもとでのシステム日付の取得 363

CICS での動的呼び出し 363

CICS プログラムのコンパイルおよび実行 365

組み込みの CICS 変換プログラム 366

CICS プログラムのデバッグ 366

第 21 章 Open Database Connectivity (ODBC) 369

ODBC と組み込み SQL の比較 369

バックグラウンド 370

ODBC 対応ソフトウェアのインストールおよび構成 370

COBOL からの ODBC 呼び出しのコーディング:

概要 370

ODBC に適したデータ型の使用 371

ODBC 呼び出しにおける引数としてのポイン
ターの受け渡し 371

例: ODBC 呼び出しにおける引数としてのポ

インターの受け渡し 372

ODBC 呼び出しにおける関数戻り値へのアクセ

ス 373

ODBC 呼び出しにおけるビットのテスト 373

ODBC API 用の COBOL コピーブックの使用 375

例: ODBC コピーブックを使用したサンプル・

プログラム 376

例: ODBC プロシージャ用のコピーブック 377

例: ODBC データ定義用のコピーブック 380

COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC

名 380

ODBC 呼び出しを行うプログラムのコンパイルおよ

びリンク 382

ODBC エラー・メッセージについて 382

第 19 章 DB2 環境用のプログラミング

一般に、COBOL プログラムのコーディングは、プログラムから DB2 データベースにアクセスするかどうかに関係なく同じになります。しかし、DB2 データの検索、更新、挿入、および削除を行い、さらにその他の DB2 サービスを使用するためには、SQL ステートメントを使用しなければなりません。

DB2 と通信するためには、以下の手順を実行します。

- EXEC SQL および END-EXEC ステートメントで区切って、必要なすべての SQL ステートメントをコーディングします。
- DB2 がまだ起動していない場合は、これを起動します。
- SQL コンパイラ・オプションを使用してコンパイルします。
- アプリケーションが DB2 独立型プリコンパイラを使用してコンパイルされた場合は、NODYNAM コンパイラ・オプションを指定してコンパイルします。

COBOL 動的呼び出しでロードされた COBOL DLL で EXEC SQL ステートメントを使用する場合は、1 つ以上の EXEC SQL ステートメントがメインプログラムになければなりません。(呼び出される DB2 API は、COBOL 動的呼び出しを使用してロードすることはできません。)

関連概念

『DB2 コプロセッサ』

関連タスク

356 ページの『SQL ステートメントのコーディング』

358 ページの『コンパイル前の DB2 の起動』

358 ページの『SQL オプションを使用したコンパイル』

DB2 UDB アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング

DB2 UDB アプリケーション開発ガイド: サーバー・アプリケーションのプログラミング

関連参照

263 ページの『DYNAM』

290 ページの『SQL』

DB2 UDB SQL リファレンス第 1 巻

DB2 UDB SQL リファレンス第 2 巻

DB2 コプロセッサ

DB2 コプロセッサを使用すると、別個のプリコンパイラを使用しなくても、組み込み SQL ステートメントが含まれたソース・プログラムをコンパイラが処理するようになります。

コンパイラーは、ソース・プログラム内で SQL ステートメントを検出すると、DB2 コプロセッサとインターフェースします。このコプロセッサが、SQL ステートメントに適したアクションを取り、それらのために生成する固有 COBOL ステートメントをコンパイラーに指示します。

プリコンパイラーを使用するときに適用される COBOL 言語の使用に関する制約事項は、DB2 コプロセッサを使用するときには適用されません。

- EXEC SQL BEGIN DECLARE SECTION ステートメントと EXEC SQL END DECLARE SECTION ステートメントを使用せずに、SQL ステートメントで使用されるホスト変数を識別することができます。
- 複数のネストなし COBOL プログラムを含むソース・ファイルをバッチでコンパイルすることができます。
- ソース・プログラムに、ネストされたプログラムを含めることができます。
- ソース・プログラムに、オブジェクト指向の COBOL 言語拡張を含めることができます。

DB2 コプロセッサを使用するプログラムをコンパイルする際には、SQL コンパイラー・オプションを指定する必要があります。

関連タスク

358 ページの『SQL オプションを使用したコンパイル』

SQL ステートメントのコーディング

SQL ステートメントは、EXEC SQL および END-EXEC で区切らなければなりません。EXEC SQL および END-EXEC 区切り文字はそれぞれ 1 行の中で完結している必要があります。複数行にわたって継続させることはできません。

さらに、以下の特別なステップを実行する必要があります。

- EXEC SQL INCLUDE ステートメントをコーディングして、最外部プログラムの WORKING-STORAGE SECTION または LOCAL-STORAGE SECTION に SQL 通信域 (SQLCA) を組み込んでください。再帰的プログラムや THREAD コンパイラー・オプションを使用するプログラムの場合には、LOCAL-STORAGE をお勧めします。
- SQL ステートメントで使用するすべてのホスト変数を WORKING-STORAGE SECTION、LOCAL-STORAGE SECTION、または LINKAGE SECTION に宣言する。ただし、EXEC SQL BEGIN DECLARE SECTION および EXEC SQL END DECLARE SECTION を指定する必要はありません。
- SQL コンパイラー・オプションを使用するプログラムすべてに、WORKING-STORAGE SECTION または LOCAL-STORAGE SECTION を準備してください。こうしたプログラムが再帰的である場合、または THREAD コンパイラー・オプションを使用する場合、それらには LOCAL-STORAGE SECTION がなければなりません。

制約事項: オブジェクト指向クラスまたはメソッドで SQL ステートメントを使用することはできません。

SQL ステートメントは、ラージ・オブジェクト (BLOB、CLOB など) や複合 SQL に対しても使用することができます。ラージ・オブジェクトのサイズは、1 つのグループまたは基本データ項目で 2 GB までに制限されています。

関連タスク

『DB2 コプロセッサを用いた SQL INCLUDE の使用』

『SQL ステートメントでのバイナリー項目の使用』

358 ページの『SQL ステートメントの成否の判断』

DB2 UDB アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング

DB2 コプロセッサを用いた SQL INCLUDE の使用

SQL コンパイラー・オプションを使用する場合、SQL INCLUDE ステートメントは、ネイティブの COBOL COPY ステートメントと同じように扱われます (使用される検索パスやファイル拡張子など)。

したがって次の 2 行は同様に扱われます。 (EXEC SQL INCLUDE ステートメントを終了させるピリオドは必要です。)

```
EXEC SQL INCLUDE name END-EXEC.  
COPY name.
```

SQL の INCLUDE ステートメント内の *name* は、COPY *text-name* の場合と同じ規則に従い、REPLACING 句を持たない COPY *text-name* ステートメントと同様に処理されます。

COBOL では、SQL INCLUDE の処理に DB2 環境変数 DB2INCLUDE を使用しません。ただし、標準の DB2 コピーブックを使用すれば、他の設定を行う必要はありません。検索規則によって、SYSLIB を library-name として使用する必要がある場合、コンパイラーは、DB2 環境変数 DB2PATH (DB2 のインストール時に設定される) を使用して SYSLIB の設定を拡張し、DB2 組み込みディレクトリーを含めることで、コピーブックを検索します。使用される SYSLIB スtring は、基本的には %SYSLIB%;%DB2PATH;%INCLUDE%COBOL_A となります。

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

COPY ステートメント (『COBOL for Windows 言語解説書』)

SQL ステートメントでのバイナリー項目の使用

EXEC SQL ステートメントで指定するバイナリー・データ項目の場合、データ項目を USAGE COMP-5 として、あるいは USAGE BINARY、COMP、または COMP-4 として宣言できます。

バイナリー・データ項目を USAGE BINARY、COMP、または COMP-4 として宣言する場合は、TRUNC(BIN) オプションおよび BINARY(NATIVE) オプションを使用します。(この技法は、個々のデータ項目で USAGE COMP-5 を使用するよりも、パフォーマンスへの効果が大きくなることがあります。) 代わりに TRUNC(OPT) または TRUNC(STD) (またはその両方) が有効であると、コンパイラーはその項目を受け入れますが、10 進数切り捨て規則のため、そのデータは無効なことがあります。切り捨てがデータの妥当性に影響を与えないようにしなければなりません。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

SQL ステートメントの成否の判断

DB2 は、SQL ステートメントの実行終了後、SQLCA 構造の SQLCODE および SQLSTATE フィールドに入れて戻りコードを送り、操作が成功したか失敗したかを示します。プログラムは戻りコードをテストし、必要なアクションを取らなければなりません。

関連タスク

DB2 UDB アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング

コンパイル前の DB2 の起動

コンパイラーは DB2 コプロセッサと連動するため、プログラムをコンパイルする前に DB2 を起動する必要があります。

コンパイルを行うためにターゲット・データベースに接続する場合は、コンパイルを開始する前に接続するか、またはコンパイラーに接続を実行させることができます。コンパイラーに接続を実行させるには、次のいずれかの方法でデータベースを指定します。

- SQL オプション内に DATABASE サブオプションを使用する。
- DB2DBDFT 環境変数でデータベース名を指定する。

SQL オプションを使用したコンパイル

SQL コンパイラー・オプションで指定されたオプション・ストリングは、DB2 コプロセッサで使用可能になります。ストリングの内容を表示するのは DB2 コプロセッサだけです。

例えば、次の cob2 コマンドは、データベース名 SAMPLE と DB2 オプション USER および USING をコプロセッサに渡します。

```
cob2 -q"sql('database sample user myname using mypassword')" mysql.cb1...
```

次のオプションは、プリコンパイラーにとっては意味があり使用されますが、コプロセッサには無視されます。

- MESSAGES
- NOLINEMACRO
- OPTLEVEL
- OUTPUT
- SQLCA
- TARGET
- WCHARTYPE

関連タスク

『DB2 サブオプションの分離』

『パッケージ名およびバインド・ファイル名の使用』

関連参照

290 ページの『SQL』

プリコンパイル (「DB2 UDB コマンド・リファレンス」)

DB2 サブオプションの分離

複数の SQL オプション指定が連結されているので、(1 つの CBL ステートメントに収まらない可能性がある) 別々の DB2 サブオプションを複数の CBL ステートメントに分離できます。

サブオプション・ストリングに組み込まれるオプションは累積されます。コンパイラーは、複数のソースからのこれらのサブオプションを、指定された順に連結します。例えば、ソース・ファイル mypgm.cbl に以下のコードが含まれているとします。

```
cb1 . . . SQL("string2") . . .  
cb1 . . . SQL("string3") . . .
```

コマンド `cob2 mypgm.cbl -q"SQL('string1')"` を発行すると、次のサブオプション・ストリングが DB2 コプロセッサに渡されます。

```
"string1 string2 string3"
```

連結ストリングはシングル・スペースで区切られます。コンパイラーが同じ SQL サブオプションの複数インスタンスを検出した場合は、連結ストリングの中の最後のサブオプション指定が有効になります。コンパイラーは、連結 DB2 サブオプション・ストリングの長さを 4 KB に限定しています。

パッケージ名およびバインド・ファイル名の使用

SQL オプションで指定できるサブオプションは、package name と bind file name の 2 つです。これらの名前を指定しない場合は、ソース・ファイル名 (非バッチ・コンパイルの場合) または最初のプログラム (バッチ・コンパイルの場合) に基づいてデフォルト名が作成されます。

バッチ・コンパイルの後続のネストなしプログラムについては、各プログラムの PROGRAM-ID に基づいて名前が設定されます。

パッケージ名の場合は、ベース名 (ソース・ファイル名または PROGRAM-ID) が次のように変更されます。

- 8 文字を超える名前は 8 文字に切り詰められる。
- 小文字は大文字に変換される。
- A から Z、0 から 9、または _ (下線) 以外の文字はすべて 0 に変更される。
- 先頭文字が英字でない場合は A に変換される。

したがって、ベース名が 9123aB-cd の場合、パッケージ名は A123AB0C となります。

バインド・ファイル名の場合は、ベース名に拡張子 `.bnd` が追加されます。明示的に指定しない限り、ファイル名は現行ディレクトリーと相対します。

第 20 章 COBOL プログラムの開発 (CICS の場合)

COBOL で作成した CICS アプリケーションは、CICS で実行することができます。

CICS のインストールと構成が完了したら、CICS で実行する COBOL プログラムを準備する必要があります。ステップの概要は次のとおりです。

1. エディターを使用して、以下のようにします。
 - COBOL ステートメントと CICS コマンドを使用して、プログラムをコーディングします。
 - COBOL コピーブックを作成します。
 - プログラムが使用する CICS 画面マップを作成します。
2. `cicsmap` コマンドを使用して、画面マップを処理します。
3. `cicstcl` コマンドの形式のいずれかを使用して、CICS コマンドを変換し、プログラムをコンパイルおよびリンクします。
 - `cicstcl -p` を使用すると、組み込みの CICS 変換プログラムを使用して、変換、コンパイル、およびリンクを行います。
 - `cicstcl` を `-p` フラグを設定しないで使用すると、分離型の CICS 変換プログラムを使用して、変換、コンパイル、およびリンクを行います。
4. CICS アドミニストレーション・ユーティリティーを使用して、アプリケーションのリソース (トランザクション、アプリケーション・プログラム、ファイルなど) を定義します。
5. CICS アドミニストレーション・ユーティリティーを使用して、CICS 領域を開始します。
6. CICS 端末で、アプリケーションと関連付けられた 4 文字のトランザクション ID を入力して、アプリケーションを実行します。

CICS ECI (外部呼び出しインターフェース) を使用してコードを実行する場合は、CICS Client をインストールしておく必要があります。そうしないと、DLL がないためにエラーが検出されます。また、アプリケーションの実行前に CICS Client を起動する必要もあります。

関連概念

366 ページの『組み込みの CICS 変換プログラム』

関連タスク

365 ページの『CICS プログラムのコンパイルおよび実行』

TXSeries for Multiplatforms: CICS Application Programming Guide

TXSeries for Multiplatforms: CICS 管理ガイド Windows システム版

CICS のもとで実行する COBOL プログラムのコーディング

一般に、CICS 環境では COBOL 言語がサポートされています。ただし、CICS で実行する COBOL プログラムをコーディングする際には、注意すべき制約事項と考慮事項がいくつかあります。

制約事項:

- CICS では、オブジェクト指向プログラミング、および Java とのインターオペラビリティはサポートされません。COBOL クラス定義およびメソッドは、CICS 環境では実行できません。
- ソース・プログラムには、ネスト済みプログラムを含めてはなりません。

変数名には EXEC、CICS、または END-EXEC を使用しないでください。またはユーザー指定パラメーターをメインプログラムに対して使用しないでください。さらに、次の COBOL 言語エレメントのいずれも使用しないことをお勧めします。

- ENVIRONMENT DIVISION の FILE-CONTROL 記入項目
- DATA DIVISION の FILE SECTION
- USE 宣言部分 (USE FOR DEBUGGING を除く)

また、CICS 環境では、次の COBOL ステートメントを使用することもお勧めできません。

- ACCEPT format 1
- CLOSE
- DELETE
- DISPLAY
- MERGE
- OPEN
- READ
- REWRITE
- SORT
- START
- STOP *literal*
- WRITE

ACCEPT ステートメントの一部の形式を除き、メインフレーム CICS では上記に示す COBOL 言語エレメントをサポートしません。これらの言語エレメントを使用する場合は、次の制限に注意してください。

- プログラムをメインフレーム CICS 環境に完全に移植することはできません。
- CICS 障害が発生した場合は、上記のステートメントを使用して更新されたリソースに対してバックアウト (失敗したタスクに関連するリソースを復元すること) を実行することができません。

制限事項: 個別の、または統合化された CICS 変換プログラムによって変換され、TXSeries で実行される COBOL プログラムの zSeries ホスト・データ・フォーマット・サポートはありません。

関連タスク

『CICS のもとでのシステム日付の取得』

『CICS での動的呼び出し』

365 ページの『CICS プログラムのコンパイルおよび実行』

366 ページの『CICS プログラムのデバッグ』

CICS のもとでのシステム日付の取得

CICS プログラムでシステム日付を検索するには、形式 2 の ACCEPT ステートメントまたは CURRENT-DATE 組み込み関数を使用してください。

以下の形式 2 の ACCEPT ステートメントのいずれかを CICS 環境で使用して、システム日付を入手することができます。

- ACCEPT *identifier-2* FROM DATE (2 桁年)
- ACCEPT *identifier-2* FROM DATE YYYYMMDD
- ACCEPT *identifier-2* FROM DAY (2 桁年)
- ACCEPT *identifier-2* FROM DAY YYYYDDD
- ACCEPT *identifier-2* FROM DAY-OF-WEEK (1 桁の整数。1 は月曜日を表します。)

次に示す形式 2 の ACCEPT ステートメントを CICS 環境で使用すると、システム時刻を入手することができます。

- ACCEPT *identifier-2* FROM TIME

あるいは、CURRENT-DATE 組み込み関数を使用できます。この組み込み関数も時刻を提供できます。

これらの方法は、CICS 環境と非 CICS 環境の両方で使用できます。

CICS プログラムでは、形式 1 の ACCEPT ステートメントは使用しないでください。

関連タスク

35 ページの『画面またはファイルからの入力の割り当て (ACCEPT)』

関連参照

CURRENT-DATE (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

CICS での動的呼び出し

CICS 環境では、CALL *identifier* ステートメントを使用して、動的呼び出しをすることができます。ただし、COBPATH 環境変数を正しく設定する必要があります。

以下では、alpha が CICS ステートメントを含む COBOL プログラムである例を考えます。

```
WORKING-STORAGE SECTION.  
01 WS-COMMAREA PIC 9 VALUE ZERO.  
77 SUBPNAME PIC X(8) VALUE SPACES  
...  
PROCEDURE DIVISION.  
MOVE 'alpha' TO SUBPNAME.  
CALL SUBPNAME USING DFHEIBLK, DFHCOMMAREA, WS-COMMAREA.
```

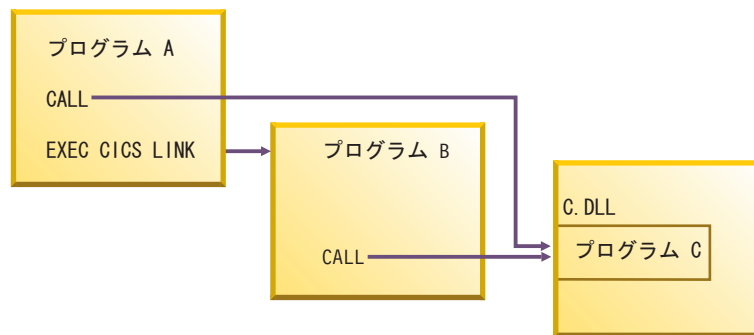

CICS 制御ブロック DFHEIBLK および DFHCOMMAREA (上記に示される) を alpha に渡す必要があります。alpha のソースはファイル alpha.ccp 内にあります。コマンド cicstcl は、alpha.ccp の変換、コンパイル、およびリンクに使用されます。

TXSeries では、cicstcl コマンドによって alpha.ibm cob という DLL が作成されます。alpha.ibm cob が常駐するディレクトリーは、COBPATH 環境変数に組み込む必要があります。また、次のことを行う必要もあります。

- -LIBMCOB フラグと cicstcl を使用する。
- COBPATH 環境変数をシステム環境変数内で設定する。これは、CICS 領域がユーザー環境変数設定を認識しないためです。別の方法として、COBPATH をファイル %var%cics_regions%xxx%environment に設定することもできます。この場合、COBPATH は xxx 領域に対してのみ有効になります。

DLL の考慮事項: 1 つ以上の COBOL プログラムを含む DLL がある場合、これと同じ CICS トランザクション内の複数の実行単位で使用することはできません。これを行うと、予測不能な結果が生じます。次の図は、2 つの異なる実行単位から同一のサブプログラムが呼び出された場合の CICS トランザクションを示しています。

- プログラム A は (C.DLL 内の) プログラム C を呼び出します。
- プログラム A は EXEC CICS LINK コマンドを使用してプログラム B にリンクします。この組み合わせが、同じトランザクション内の新しい実行単位になります。
- プログラム B は (C.DLL 内の) プログラム C を呼び出します。



プログラム A と B はプログラム C の同一コピーを共用するため、コピーの状態が変化すると両方に影響を与えます。

CICS 環境では、実行単位内で初回呼び出し時にのみ、DLL 内のプログラムが初期化 (WSCLEARコンパイラー・オプションと VALUE 文節の両方の初期化) されます。1 つの COBOL サブプログラムが複数回呼び出される場合、呼び出し元のメインプログラムが同一であってもなくても、サブプログラムは初回呼び出し時にのみ初期化されます。それぞれのメインプログラムからの初回呼び出し時に、サブプログラムを初期化する必要がある場合は、サブプログラムの個々のコピーを各呼び出し側プログラムと静的にリンクします。呼び出しのたびにサブプログラムを初期化する必要がある場合は、次のいずれかの方法を使用してください。

- 再初期化するデータを WORKING-STORAGE SECTION ではなく、サブプログラムの LOCAL-STORAGE SECTION に入れる。これは、WSCLEAR コンパイラー・オプションによる初期化ではなく、VALUE 文節による初期化にのみ影響します。
- CANCEL を使用して、サブプログラムの使用後ごとにサブプログラムをキャンセルする。これにより、次の呼び出し時には、そのプログラムが初期状態になります。
- サブプログラムに INITIAL 属性を追加する。

CICS プログラムのコンパイルおよび実行

COBOL for Windows TXSeries プログラムでは、スレッド・セーフ・バージョンの COBOL ランタイム・ライブラリーを使用する必要があります。このようなプログラムをコンパイルする際には、THREAD コンパイラー・オプションを使用します。

TRUNC(BIN) は、CICS で実行する COBOL プログラムに推奨されるコンパイラー・オプションです。ただし、BINARY、COMP、または COMP-4 データ項目の値が切り捨てられていない値で、PICTURE の指定に準拠することが確実な場合は、TRUNC(OPT) を使用することにより、プログラムのパフォーマンスが向上する可能性があります。

EXEC CICS コマンド引数として、BINARY、COMP、または COMP-4 データ項目の代わりに COMP-5 データ項目を使用することができます。COMP-5 データ項目は、BINARY(NATIVE) および TRUNC(BIN) が有効な場合には、BINARY、COMP、または COMP-4 データ項目と同様に扱われます。

CICS Client を使用するプログラムには、PGMNAME(MIXED) コンパイラー・オプションを使用する必要があります。

COBOL プログラムを分離型または組み込みの CICS 変換プログラムで変換する際に、DYNAM、NOLIB、または NOTHREAD コンパイラー・オプションを使用しないでください。それ以外の COBOL コンパイラー・オプションはサポートされます。

ランタイム・オプション: ASSIGN 文節で特定のファイル・システムが選択されていない場合は、FILESYS ランタイム・オプションを使用して、ファイルに使用するファイル・システムを指定します。

関連概念

366 ページの『組み込みの CICS 変換プログラム』

関連タスク

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

TXSeries for Multiplatforms: CICS Application Programming Guide

関連参照

249 ページの『第 14 章 コンパイラー・オプション』

327 ページの『FILESYS』

631 ページの『付録 B. zSeries ホスト・データ形式についての考慮事項』

組み込みの CICS 変換プログラム

CICS コンパイラー・オプションを指定して COBOL プログラムをコンパイルする場合、COBOL コンパイラーは組み込みの CICS 変換プログラムと連動して、ソース・プログラム内のネイティブ COBOL ステートメントと組み込みの CICS ステートメントの両方を処理します。

コンパイラーは、CICS ステートメントを検出したとき、およびソース・プログラム内の重要な地点で、組み込みの CICS 変換プログラムとインターフェースをとります。変換プログラムは適切な処置を行ってから、通常は、生成するネイティブ言語ステートメントを指示してコンパイラーに制御を戻します。

COBOL プログラムを `cicstcl` コマンドを使用してコンパイルする場合、組み込み CICS 変換プログラムを使用するには `-p` フラグを指定します。 `cicstcl -p` コマンドは、CICS コンパイラー・オプションの適切なサブオプションでコンパイラーを呼び出します。

組み込みの CICS ステートメントは、分離型の変換も引き続き可能ですが、組み込みの CICS 変換プログラムを使用することを推奨します。分離型の変換プログラムを使用する場合に適用される一部の制約は、組み込みの変換プログラムを使用の場合には適用されません。および組み込みの変換プログラムの使用には、以下のいくつかの利点があります。

- WebSphere Developer for System z のデバッグ・パースペクティブを使用して、分離型の CICS 変換プログラムによって提供される拡張ソースではなく、元のソースをデバッグすることができます。
- コピーブック内の EXEC CICS ステートメントを個別に変換する必要がありません。
- 変換済みで未コンパイル・バージョンのソース・プログラムに対応する中間ファイルが不要です。
- 出力リストは 2 つではなく 1 つだけ作成されます。
- REPLACE ステートメントを EXEC CICS ステートメントに影響させることができます。
- CICS ステートメントを含むプログラムをバッチでコンパイルできます。

重要: 組み込みの CICS 変換プログラムを使用するには、TXSeries V6.1 (またはそれ以降) が必要です。

関連タスク

362 ページの『CICS のもとで実行する COBOL プログラムのコーディング』

関連参照

257 ページの『CICS』

CICS プログラムのデバッグ

組み込みの変換プログラムを使用して CICS プログラムをコンパイルする場合、分離型の CICS 変換プログラムによって提供される拡張ソースではなく、元のソース・レベルでプログラムをデバッグすることができます。

| 分離型の CICS 変換プログラムを使用する場合は、まず CICS プログラムを
| COBOL に変換します。次いで結果の COBOL プログラムを、他の COBOL プログ
| ラムと同様の方法でデバッグすることができます。

関連概念

329 ページの『第 18 章 デバッグ』

関連タスク

223 ページの『コマンド行からのコンパイル』

TXSeries for Multiplatforms: CICS Application Programming Guide

第 21 章 Open Database Connectivity (ODBC)

Open Database Connectivity (ODBC) は、アプリケーションが構造化照会言語 (SQL) を使用して複数のデータベース管理システムにアクセスできるようにするための、アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) に関する仕様です。COBOL アプリケーションに ODBC インターフェースを使用すると、ODBC インターフェースをサポートするデータベースおよびファイル・システムに動的にアクセスできるようになります。

ODBC を使用すると、1 つのアプリケーションから多数の異種データベース管理システムにアクセスできるため、インターオペラビリティを最大限に高めることができます。このため、特定種のデータ・ソースに限定せずに、アプリケーションの開発、コンパイル、および出荷までを行うことができます。ユーザーはその後、データベース・ドライバを追加して、アプリケーションに必要なデータベース管理システムとリンクすることができます。

ODBC インターフェースを使用すると、アプリケーションはドライバ・マネージャーを通して呼び出しを行うようになります。このドライバ・マネージャーは、アプリケーションの接続先となるデータベース・サーバーに必要なドライバを動的にロードします。その後は、このドライバが呼び出しを受け入れ、指定されたデータ・ソース (データベース) へ SQL を送信し、結果を戻します。

ODBC と組み込み SQL の比較

データベース・アクセス用の組み込み SQL を使用する COBOL アプリケーションは、特定のデータベース用のプリコンパイラまたはコプロセッサによって処理する必要があり、ターゲット・データベースが変更された場合は再コンパイルする必要があります。ODBC は呼び出しインターフェースなので、組み込み SQL を使用した場合は異なり、ターゲット・データベースをコンパイル時に指定することはありません。複数のデータベース用に複数のアプリケーション・バージョンを用意する必要がないだけでなく、ターゲットとするデータベースをアプリケーションが動的に決定することができます。

ODBC の利点は次のとおりです。

- ODBC は、使用するデータベース・サーバーの種類を問わず、一貫性のあるインターフェースを提供します。
- 複数の同時接続を行うことができます。
- アプリケーションが稼働する各データベースとアプリケーションをバインドする必要がありません。COBOL for Windows ではこのバインドを自動的行いますが、自動的に 1 つのデータベースだけにバインドします。接続先データベースを実行時に動的に選択する場合は、別のデータベースにバインドする追加ステップを実行する必要があります。

組み込み SQL には、次のような利点もあります。

- ・ 静的 SQL は一般に、動的 SQL よりもパフォーマンスが高くなります。静的 SQL は実行時に準備する必要がないため、処理とネットワーク・トラフィックの両方を軽減することができます。
- ・ 静的 SQL の場合、データベース管理者はユーザーに対し、使用するテーブルやビューそれぞれに対してアクセス権を与えるのではなく、パッケージに対するアクセス権を与えるだけで済みます。

バックグラウンド

X/Open Company と SQL Access Group は共同で、X/Open Call Level Interface という呼び出し可能 SQL インターフェースに関する仕様を作成しました。このインターフェースの目的は、アプリケーションがどのデータベース・ベンダーのプログラミング・インターフェースにも依存しないようにして、アプリケーションの移植性を高めることです。

ODBC はもともと、Microsoft が X/Open CLI の先行ドラフトに基づいて、Microsoft オペレーティング・システム用に開発したものでした。それ以降は、他社ベンダーが UNIX[®] システムなどの他のプラットフォーム上で動作する ODBC ドライバーを提供してきました。

ODBC 対応ソフトウェアのインストールおよび構成

ODBC を COBOL for Windows でデータ・アクセスできるようにするには、ODBC ドライバー・マネージャーおよびドライバーをインストールし、インストール済み環境に必要な ODBC データベース・ドライバーを追加し、RDBMS クライアント (DB2 UDB、Oracle 7 SQL*NET など) をインストールする必要があります。

ドライバーをインストールしたら、ODBC アドミニストレーター・プログラムを使用して、データ・ソースを構成する必要があります。データ・ソースは、DBMS と、これにアクセスする必要があるリモート・オペレーティング・システムおよびネットワークで構成されます。Windows は複数のユーザーをホストできるため、ユーザーは各自のデータ・ソースを構成する必要があります。構成する特定のドライバーに関する詳細な構成情報については、そのドライバーに関するオンライン・ヘルプの該当するセクションを参照してください。

COBOL からの ODBC 呼び出しのコーディング: 概要

COBOL プログラムから ODBC にアクセスする際には、ODBC に適切なデータ型を使用し、引数を渡す方法、関数の戻り値にアクセスする方法、ビットをテストする方法などを理解する必要があります。IBM COBOL for Windows は、ODBC 呼び出しの実行に役立つコピーブックを用意しています。

関連タスク

- 371 ページの『ODBC に適したデータ型の使用』
- 371 ページの『ODBC 呼び出しにおける引数としてのポインターの受け渡し』
- 373 ページの『ODBC 呼び出しにおける関数戻り値へのアクセス』
- 373 ページの『ODBC 呼び出しにおけるビットのテスト』
- 375 ページの『ODBC API 用の COBOL コピーブックの使用』
- 382 ページの『ODBC 呼び出しを行うプログラムのコンパイルおよびリンク』

ODBC に適したデータ型の使用

ODBC API で指定されたデータ型は、API 定義の ODBC C タイプによって定義されます。示された ODBC C タイプの引数に対応する COBOL データ宣言を示します。

表 44. ODBC C タイプおよび対応する COBOL 宣言

ODBC C タイプ	COBOL 形式	説明
SQLSMALLINT	COMP-5 PIC S9(4)	符号付き短整数 (2 バイトの 2 進数)
SQLUSMALLINT	COMP-5 PIC 9(4)	符号なし短整数 (2 バイトの 2 進数)
SQLINTEGER	COMP-5 PIC S9(9)	符号付き長整数 (4 バイトの 2 進数)
SQLUIINTEGER	COMP-5 PIC 9(9)	符号なし長整数 (4 バイトの 2 進数)
SQLREAL	COMP-1	浮動小数点 (4 バイト)
SQLFLOAT	COMP-2	浮動小数点 (8 バイト)
SQLDOUBLE	COMP-2	浮動小数点 (8 バイト)
SQLCHAR	POINTER	符号なし文字を指すポインター
SQLHDBC	POINTER	接続ハンドル
SQLHENV	POINTER	環境ハンドル
SQLHSTMT	POINTER	ステートメント・ハンドル
SQLHWND	POINTER	ウィンドウ・ハンドル

COBOL の符号なし文字を指すポインターは、ヌル終了文字列を指すポインターになります。ポインター項目のターゲットを PIC X(*n*) と定義します。*n* には、ヌル終了フィールドを表すのに十分な大きさの値を入れます。ODBC API によっては、ヌル終了文字列を引数として渡す必要があります。

zSeries ホスト・データ・フォーマットは使用しないでください。ODBC API は、パラメーターがネイティブ・フォーマットであることを予期します。

関連タスク

『ODBC 呼び出しにおける引数としてのポインターの受け渡し』
373 ページの『ODBC 呼び出しにおける関数戻り値へのアクセス』

ODBC 呼び出しにおける引数としてのポインターの受け渡し

ODBC が受け入れ可能なデータ型の 1 つに対するポインター引数を指定する場合、ポインター BY REFERENCE のターゲットを渡すか、ターゲット項目を指すポインター項目を定義してそれを BY VALUE で渡すか、ターゲットの ADDRESS OF を BY VALUE で渡すかのいずれかを実行する必要があります。

例えば、関数が次のように定義されているとします。

```
RETCODE SQLSomeFunction(PSomeArgument)
```

ここで、PSomeArgument は、SomeArgument を指す引数として定義されています。この引数を SQLSomeFunction に渡すには、次のいずれかの方法を使用します。

- SomeArgument BY REFERENCE を渡す。

```
CALL "SQLSomeFunction" USING BY REFERENCE SomeArgument
```


SomeArgument が入力引数の場合は、代わりに USING BY CONTENT SomeArgument を使用することができます。

- `SomeArgument` を指すポインター・データ項目 `PSomeArgument` を定義する。

```
SET PSomeArgument TO ADDRESS OF SomeArgument
CALL "SQLSomeFunction" USING BY VALUE PSomeArgument
```

- ADDRESS OF SomeArgument BY VALUE を渡す。

CALL "SQLSomeFunction" USING BY VALUE ADDRESS OF SomeArgument

最後の方法を使用できるのは、ターゲット引数 `SomeArgument` が `LINKAGE SECTION` 内のレベル 01 項目の場合のみです。このような場合は、次のいずれかの方法で、アドレス可能度を `SomeArgument` に設定することができます。

- ポインターまたは ID を使用して明示的に設定する。次に例を示します。

```
SET ADDRESS OF SomeArgument TO a-pointer-data-item
SET ADDRESS OF SomeArgument to ADDRESS OF an-identifier
```

- `SomeArgument` を引数として、ODBC 関数呼び出しの実行元プログラムへ渡すことで、暗黙的に設定する。

『例: ODBC 呼び出しにおける引数としてのポインタの受け渡し』

例: ODBC 呼び出しにおける引数としてのポインターの受け渡し

次のサンプル・プログラム部分は、SQLAllocHandle 関数の呼び出し方法を示しています。

```

      . . .
WORKING-STORAGE SECTION.
      COPY ODBC3.

      . . .
01  SQL-RC          COMP-5      PIC S9(4).
01  Henv            POINTER.

      . . .
PROCEDURE DIVISION.

      . . .
      CALL "SQLAllocHandle"
          USING
              By VALUE      sql=handle-env
                          sql=null-handle
              By REFERENCE Henv
          RETURNING      SQL-RC
      IF SQL-RC NOT = (SQL-SUCCESS or SQL-SUCCESS-WITH-INFO)
      THEN
          DISPLAY "SQLAllocHandle failed."
      . . .
      ELSE
          . . .

```

SOLConnect 関数の呼び出し例を次に示します。

例 1:

```
CALL "SQLConnect" USING BY VALUE      ConnectionHandle
                        BY REFERENCE   ServerName
                        BY VALUE       SQL-NTS
                        BY REFERENCE   UserIdentifier
                        BY VALUE       SQL-NTS
                        BY REFERENCE   AuthenticationString
                        BY VALUE       SQL-NTS
RETURNING              SQL-RC
```

例 2:

```
. . .
SET Ptr-to-ServerName          TO ADDRESS OF ServerName
SET Ptr-to-UserIdentifier      TO ADDRESS OF UserIdentifier
SET Ptr-to-AuthenticationString TO ADDRESS OF AuthenticationString
CALL "SQLConnect" USING BY VALUE
                                ConnectionHandle
                                Ptr-to-ServerName
                                SQL-NTS
                                Ptr-to-UserIdentifier
                                SQL-NTS
                                Ptr-to-AuthenticationString
                                SQL-NTS
                                RETURNING
                                SQL-RC
. . .
```

例 3:

```
. . .
CALL "SQLConnect" USING BY VALUE
                                ConnectionHandle
                                ADDRESS OF ServerName
                                SQL-NTS
                                ADDRESS OF UserIdentifier
                                SQL-NTS
                                ADDRESS OF AuthenticationString
                                SQL-NTS
                                RETURNING
                                SQL-RC
. . .
```

例 3 では、Servername、UserIdentifier、および AuthenticationString をレベル 01 項目として LINKAGE SECTION 内で定義する必要があります。

BY REFERENCE または BY VALUE 句は、別の BY REFERENCE、BY VALUE、または BY CONTENT 句によってオーバーライドされるまで、すべての引数に適用されます。

ODBC 呼び出しにおける関数戻り値へのアクセス

ODBC 呼び出しの関数戻り値を指定するには、CALL ステートメントの RETURNING 句を使用します。

```
CALL "SQLAllocEnv" USING BY VALUE Phenv RETURNING SQL-RC
IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
  THEN
    DISPLAY "SQLAllocEnv failed."
    . . .
  ELSE
    . . .
END-IF
```

ODBC 呼び出しにおけるビットのテスト

ODBC API によっては、ビット・マスクを設定し、ビットを照会する必要があります。ライブラリー・ルーチン iwzODBCTestBits を使用してビットを照会することができます。iwzODBCTestBits を呼び出すアプリケーションと IWZODBC.LIB インポート・ライブラリーをリンクする必要があります。

このルーチンを次のように呼び出します。

```
CALL "iwzODBCTestBits" USING identifier-1, identifier-2 RETURNING identifier-3
```

identifier-1

フィールドはテストされます。これは、2 バイトまたは 4 バイトの 2 進数フィールド (つまり、USAGE COMP-5 PIC 9(4) または PIC 9(9)) でなければなりません。

identifier-2

テスト対象のビットを選択するビット・マスク・フィールドです。これは、*identifier-1* と同じ USAGE および PICTURE を使用して定義する必要があります。

identifier-3

テストの戻り値です (USAGE COMP-5 PICS9(4) と定義します)。

- 0** *identifier-2* で選択されたどのビットも、*identifier-1* で ON になっていない。
- 1** *identifier-2* で選択されたすべてのビットが、*identifier-1* で ON になっている。
- 1** *identifier-2* で選択されたビットのうち、1 つ以上のビットが *identifier-1* に対して ON になっていて、1 つ以上のビットが OFF になっている。
- 100** 無効な入力引数が検出された (8 バイトの 2 進数フィールドが *identifier-1* として使用されているなど)。

ODBCOB コピーブック内で定義されたビット・マスクを使用する COBOL 算術式で、1 つのフィールドに複数のビットを設定することができます。例えば、次のステートメントでは、InfoValue フィールド内に、SQL-CVT-CHAR、SQL-CVT-NUMERIC、および SQL-CVT-DECIMAL に対するビットを設定することができます。

```
COMPUTE InfoValue = SQL-CVT-CHAR + SQL-CVT-NUMERIC + SQL-CVT-DECIMAL
```

InfoValue を設定したら、これを 2 番目の引数として、iwzTestBits 関数に渡すことができます。

上記の算術式の各オペランドは、ODBCOB コピーブックで定義されたとおりに、結合解除ビットを表します。結果として、加算では意図したビットが ON になるように設定されます。ただし演算子は論理 OR ではないので、このような算術式ではビットが繰り返されることがないように注意してください。例えば、次のコードを使用すると、InfoValue 上に意図した SQL-CVT-CHAR ビットが指定されなくなります。

```
COMPUTE InfoValue = SQL-CVT-CHAR + SQL-CVT-NUMERIC + SQL-CVT-DECIMAL + SQL-CVT-CHAR
```

呼び出し時に有効な呼び出しインターフェース規約は、CALLINT SYSTEM DESCRIPTOR でなければなりません。

ODBC API 用の COBOL コピーブックの使用

IBM COBOL for Windows ではコピーブックが提供されており、これによって COBOL プログラムからの ODBC 呼び出しを使用して、ODBC ドライバー対応のデータベースに容易にアクセスできるようになります。これらのコピーブックは、そのまま使用することも、変更を加えて使用することも可能です。

以下で紹介するコピーブックは、ODBC Version 3.0 に対応しています。ただし、Version 2.x のコピーブックも付属しているため、ODBC Version 2.x のアプリケーション開発が必要な場合は、Version 3.0 のコピーブックの代わりに使用することができます。

表 45. ODBC コピーブック

ODBC Version 3.0 対応のコピーブック	ODBC Version 2.x 対応のコピーブック	説明	場所
ODBC3.CPY	ODBC2.CPY	シンボルおよび定数	COBOL 用の INCLUDE フォルダ
ODBC3D.CPY	ODBC2D.CPY	DATA DIVISION の定義	COBOL 用の SAMPLES フォルダ内の ODBC フォルダ
ODBC3P.CPY	ODBC2P.CPY	PROCEDURE DIVISION ステートメント	COBOL 用の SAMPLES フォルダ内の ODBC フォルダ

SYSLIB 環境変数に INCLUDE および ODBC フォルダのパスを組み込んで、コンパイラがコピーブックを確実に使用できるようにします。

ODBC3.CPY は、ODBC API に対して記述された定数値のシンボルを定義します。このコピーブックは、ODBC API への呼び出しに使用される定数と、ODBC ガイドで指定されたシンボルをマップします。このコピーブックを使用して、引数と関数の戻り値を指定およびテストすることができます。

ODBC3P.CPY は、ODBC の初期化、エラーの処理、およびクリーンアップに一般に使用される関数 (SQLAllocEnv、SQLAllocConnect、iwzODBCLicInfo、SQLAllocStmt、SQLFreeStmt、SQLDisconnect、SQLFreeConnect、SQLFreeEnv) 向けに用意されている COBOL ステートメントを使用できるようにします。

ODBC3D.CPY には、WORKING-STORAGE SECTION (または LOCAL-STORAGE SECTION) で ODBC3.CPY によって使用されるデータ宣言が含まれています。

これらのコピーブックでは、COBOL 固有の調整がいくつか行われています。

- 下線 (_) はハイフン (-) で置き換えられます。例えば、SQL_SUCCESS は SQL-SUCCESS として指定されます。
- 30 文字を超える名前。

コピーブック ODBC3.CPY を組み込むには、次のように COPY ステートメントを DATA DIVISION 内に指定します。

- プログラムの場合は、COPY ステートメントを WORKING-STORAGE SECTION 内 (プログラムがネストされている場合は最外部プログラム内) に指定します。
- ODBC 呼び出しを行う各メソッドの場合は、COPY ステートメントを、(クラス定義の WORKING-STORAGE SECTION ではなく) メソッドの WORKING-STORAGE SECTION 内に指定します。

『例: ODBC コピーブックを使用したサンプル・プログラム』

380 ページの『例: ODBC データ定義用のコピーブック』

377 ページの『例: ODBC プロシージャ用のコピーブック』

関連参照

380 ページの『COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名』

例: ODBC コピーブックを使用したサンプル・プログラム

以下の例は、3 つの ODBC コピーブックの使用を示しています。

```

cbl pgmname(mixed)
*****
* ODBC3EG.CBL *
*-----*
* Sample program using ODBC3, ODBC3D and ODBC3P copybooks *
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. "ODBC3EG".
DATA DIVISION.

WORKING-STORAGE SECTION.
* copy ODBC API constant definitions
COPY "odbc3.cpy" SUPPRESS.
* copy additional definitions used by ODBC3P procedures
COPY "odbc3d.cpy".
* arguments used for SQLConnect
01 ServerName PIC X(10) VALUE Z"Oracle7".
01 ServerNameLength COMP-5 PIC S9(4) VALUE 10.
01 UserId PIC X(10) VALUE Z"TEST123".
01 UserIdLength COMP-5 PIC S9(4) VALUE 10.
01 Authentication PIC X(10) VALUE Z"TEST123".
01 AuthenticationLength COMP-5 PIC S9(4) VALUE 10.
PROCEDURE DIVISION.
Do-ODBC SECTION.
Start-ODBC.
DISPLAY "Sample ODBC 3.0 program starts"
* allocate henv & hdbc
PERFORM ODBC-Initialization
* connect to data source
CALL "SQLConnect" USING BY VALUE Hdbc
BY REFERENCE ServerName
BY VALUE ServerNameLength
BY REFERENCE UserId
BY VALUE UserIdLength
BY REFERENCE Authentication
BY VALUE AuthenticationLength
RETURNING SQL-RC
IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
MOVE "SQLConnect" to SQL-stmt
MOVE SQL-HANDLE-DBC to DiagHandleType
SET DiagHandle to Hdbc
PERFORM SQLDiag-Function
END-IF
* allocate hstmt
PERFORM Allocate-Statement-Handle
*****

```

```

* add application specific logic here *
*****
* clean-up environment
  PERFORM ODBC-Clean-Up.
* End of sample program execution
  DISPLAY "Sample COBOL ODBC program ended"
  GOBACK.
* copy predefined COBOL ODBC calls which are performed
  COPY "odbc3p.cpy".
*****
* End of ODBC3EG.CBL: Sample program for ODBC 3.0 *
*****

```

例: ODBC プロシージャ用のコピーブック

このサンプルでは、ODBC の初期化、クリーンアップ、およびエラー処理を行うためのプロシージャを示しています。

```

*****
* ODBC3P.CPY *
*-----*
* Sample ODBC initialization, clean-up and error handling *
* procedures (ODBC Ver 3.0) *
*****
*** Initialization functions SECTION *****
ODBC-Initialization SECTION.
*
  Allocate-Environment-Handle.
  CALL "SQLAllocHandle" USING
                                BY VALUE      SQL-HANDLE-ENV
                                BY VALUE      SQL-NULL-HANDLE
                                BY REFERENCE Henv
                                RETURNING     SQL-RC
  IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
  MOVE "SQLAllocHandle for Env" TO SQL-stmt
  MOVE SQL-HANDLE-ENV to DiagHandleType
  SET DiagHandle to Henv
  PERFORM SQLDiag-Function
  END-IF.
*
  Set-Env-Attr-to-Ver30-Behavior.
  CALL "SQLSetEnvAttr" USING
                                BY VALUE      Henv
                                BY VALUE      SQL-ATTR-ODBC-VERSION
                                BY VALUE      SQL-OV-ODBC3
*                                or SQL-OV-ODBC2 *
*                                for Ver 2.x behavior *
                                BY VALUE      SQL-IS-UIINTEGER
                                RETURNING     SQL-RC
  IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
  MOVE "SQLSetEnvAttr" TO SQL-stmt
  MOVE SQL-HANDLE-ENV to DiagHandleType
  SET DiagHandle to Henv
  PERFORM SQLDiag-Function
  END-IF.
*
  Allocate-Connection-Handle.
  CALL "SQLAllocHandle" USING
                                By VALUE      SQL-HANDLE-DBC
                                BY VALUE      Henv
                                BY REFERENCE Hdbc
                                RETURNING     SQL-RC
  IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
  MOVE "SQLAllocHandle for Connection" to SQL-stmt
  MOVE SQL-HANDLE-ENV to DiagHandleType
  SET DiagHandle to Henv

```

```

        PERFORM SQLDiag-Function
    END-IF.
*** SQLAllocHandle for statement function SECTION *****
Allocate-Statement-Handle SECTION.
    Allocate-Stmt-Handle.
        CALL "SQLAllocHandle" USING
            By VALUE      SQL-HANDLE-STMT
            BY VALUE      Hdbc
            BY REFERENCE  Hstmt
            RETURNING     SQL-RC

        IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
            MOVE "SQLAllocHandle for Stmt" TO SQL-stmt
            MOVE SQL-HANDLE-DBC to DiagHandleType
            SET DiagHandle to Hdbc
            PERFORM SQLDiag-Function
        END-IF.
*** Cleanup Functions SECTION *****
ODBC-Clean-Up SECTION.
*
    Free-Statement-Handle.
        CALL "SQLFreeHandle" USING
            BY VALUE SQL-HANDLE-STMT
            BY VALUE Hstmt
            RETURNING SQL-RC

        IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
            MOVE "SQLFreeHandle for Stmt" TO SQL-stmt
            MOVE SQL-HANDLE-STMT to DiagHandleType
            SET DiagHandle to Hstmt
            PERFORM SQLDiag-Function
        END-IF.
*
    SQLDisconnect-Function.
        CALL "SQLDisconnect" USING
            BY VALUE Hdbc
            RETURNING SQL-RC

        IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
            MOVE "SQLDisconnect" TO SQL-stmt
            MOVE SQL-HANDLE-DBC to DiagHandleType
            SET DiagHandle to Hdbc
            PERFORM SQLDiag-Function
        END-IF.
*
    Free-Connection-Handle.
        CALL "SQLFreeHandle" USING
            BY VALUE SQL-HANDLE-DBC
            BY VALUE Hdbc
            RETURNING SQL-RC

        IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
            MOVE "SQLFreeHandle for DBC" TO SQL-stmt
            MOVE SQL-HANDLE-DBC to DiagHandleType
            SET DiagHandle to Hdbc
            PERFORM SQLDiag-Function
        END-IF.
*
    Free-Environment-Handle.
        CALL "SQLFreeHandle" USING
            BY VALUE SQL-HANDLE-ENV
            BY VALUE Henv
            RETURNING SQL-RC

        IF SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS
            MOVE "SQLFreeHandle for Env" TO SQL-stmt
            MOVE SQL-HANDLE-ENV to DiagHandleType
            SET DiagHandle to Henv
            PERFORM SQLDiag-Function
        END-IF.
*** SQLDiag function SECTION *****
SQLDiag-Function SECTION.
    SQLDiag.

```

```

MOVE SQL-RC TO SAVED-SQL-RC
DISPLAY "Return Value = " SQL-RC
IF SQL-RC = SQL-SUCCESS-WITH-INFO
THEN
    DISPLAY SQL-stmt " successful with information"
ELSE
    DISPLAY SQL-stmt " failed"
END-IF
* - get number of diagnostic records - *
CALL "SQLGetDiagField"
    USING
        BY VALUE      DiagHandleType
                        DiagHandle
                        0
                        SQL-DIAG-NUMBER
        BY REFERENCE  DiagRecNumber
        BY VALUE      SQL-IS-SMALLINT
        BY REFERENCE  OMITTED
    RETURNING          SQL-RC
IF SQL-RC = SQL-SUCCESS or SQL-SUCCESS-WITH-INFO
THEN
* - get each diagnostic record - *
    PERFORM WITH TEST AFTER
        VARYING DiagRecNumber-Index FROM 1 BY 1
        UNTIL DiagRecNumber-Index > DiagRecNumber
        or SQL-RC NOT =
            (SQL-SUCCESS or SQL-SUCCESS-WITH-INFO)
* - get a diagnostic record - *
    CALL "SQLGetDiagRec"
        USING
            BY VALUE      DiagHandleType
                        DiagHandle
                        DiagRecNumber-Index
            BY REFERENCE  DiagSQLState
                        DiagNativeError
                        DiagMessageText
            BY VALUE      DiagMessageBufferLength
            BY REFERENCE  DiagMessageTextLength
        RETURNING          SQL-RC
    IF SQL-RC = SQL-SUCCESS OR SQL-SUCCESS-WITH-INFO
    THEN
        DISPLAY "Information from diagnostic record number"
            " " DiagRecNumber-Index " for "
            SQL-stmt ":"
        DISPLAY " SQL-State = " DiagSQLState-Chars
        DISPLAY " Native error code = " DiagNativeError
        DISPLAY " Diagnostic message = "
            DiagMessageText(1:DiagMessageTextLength)
    ELSE
        DISPLAY "SQLGetDiagRec request for " SQL-stmt
            " failed with return code of: " SQL-RC
            " from SQLError"
        PERFORM Termination
    END-IF
    END-PERFORM
ELSE
* - indicate SQLGetDiagField failed - *
    DISPLAY "SQLGetDiagField failed with return code of: "
        SQL-RC
    END-IF
    MOVE Saved-SQL-RC to SQL-RC
    IF Saved-SQL-RC NOT = SQL-SUCCESS-WITH-INFO
    PERFORM Termination
    END-IF.
*** Termination Section*****
Termination Section.
Termination-Function.

```



```

        DISPLAY "Application being terminated with rollback"
        CALL "SQLTransact" USING BY VALUE henv
                                hdbc
                                SQL-ROLLBACK
                                RETURNING SQL-RC
        IF SQL-RC = SQL-SUCCESS
            THEN
                DISPLAY "Rollback successful"
            ELSE
                DISPLAY "Rollback failed with return code of: "
                    SQL-RC
        END-IF
        STOP RUN.
*****
* End of ODBC3P.CPY      *
*****

```

例: ODBC データ定義用のコピーブック

以下のサンプルでは、メッセージ・テキストや戻りコードなどの項目に対するデータ定義を示しています。

```

*****
* ODBC3D.CPY              (ODBC Ver 3.0)          *
*-----*
* Data definitions to be used with sample ODBC function calls *
* and included in Working-Storage or Local-Storage Section *
*****
* ODBC Handles
01 Henv                POINTER          VALUE NULL.
01 Hdbc                POINTER          VALUE NULL.
01 Hstmt               POINTER          VALUE NULL.
* Arguments used for GetDiagRec calls
01 DiagHandleType      COMP-5          PIC 9(4).
01 DiagHandle          POINTER.
01 DiagRecNumber       COMP-5          PIC 9(4).
01 DiagRecNumber-Index COMP-5          PIC 9(4).
01 DiagSQLState.
    02 DiagSQLState-Chars      PIC X(5).
    02 DiagSQLState-Null      PIC X.
01 DiagNativeError     COMP-5          PIC S9(9).
01 DiagMessageText     PIC X(511) VALUE SPACES.
01 DiagMessageBufferLength COMP-5      PIC S9(4) VALUE 511.
01 DiagMessageTextLength COMP-5      PIC S9(4).
* Misc declarations used in sample function calls
01 SQL-RC              COMP-5          PIC S9(4) VALUE 0.
01 Saved-SQL-RC        COMP-5          PIC S9(4) VALUE 0.
01 SQL-stmt            PIC X(30).
*****
* End of ODBC3D.CPY      *
*****

```

COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名

次の表に、30 文字を超える ODBC 名と、それに対応する COBOL 名を示します。

表 46. COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名

ODBC C #define シンボル > 30 文字	対応する COBOL 名
SQL_AD_ADD_CONSTRAINT_DEFERRABLE	SQL-AD-ADD-CONSTRAINT-DEFER
SQL_AD_ADD_CONSTRAINT_INITIALLY_DEFERRED	SQL-AD-ADD-CONSTRAINT-INIT-DEF
SQL_AD_ADD_CONSTRAINT_INITIALLY_IMMEDIATE	SQL-AD-ADD-CONSTRAINT-INIT-IMM
SQL_AD_ADD_CONSTRAINT_NON_DEFERRABLE	SQL-AD-ADD-CONSTRAINT-NON-DEFE

表 46. COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名 (続き)

ODBC C #define シンボル > 30 文字	対応する COBOL 名
SQL_AD_CONSTRAINT_NAME_DEFINITION	SQL-AD-CONSTRAINT-NAME-DEFINIT
SQL_AT_CONSTRAINT_INITIALLY_DEFERRED	SQL-AT-CONSTRAINT-INITIALLY-DE
SQL_AT_CONSTRAINT_INITIALLY_IMMEDIATE	SQL-AT-CONSTRAINT-INITIALLY-IM
SQL_AT_CONSTRAINT_NAME_DEFINITION	SQL-AT-CONSTRAINT-NAME-DEFINIT
SQL_AT_CONSTRAINT_NON_DEFERRABLE	SQL-AT-CONSTRAINT-NON-DEFERRAB
SQL_AT_DROP_TABLE_CONSTRAINT_CASCADE	SQL-AT-DROP-TABLE-CONSTRAINT-C
SQL_AT_DROP_TABLE_CONSTRAINT_RESTRICT	SQL-AT-DROP-TABLE-CONSTRAINT-R
SQL_C_INTERVAL_MINUTE_TO_SECOND	SQL-C-INTERVAL-MINUTE-TO-SECON
SQL_CA_CONSTRAINT_INITIALLY_DEFERRED	SQL-CA-CONSTRAINT-INIT-DEFER
SQL_CA_CONSTRAINT_INITIALLY_IMMEDIATE	SQL-CA-CONSTRAINT-INIT-IMMED
SQL_CA_CONSTRAINT_NON_DEFERRABLE	SQL-CA-CONSTRAINT-NON-DEFERRAB
SQL_CA1_BULK_DELETE_BY_BOOKMARK	SQL-CA1-BULK-DELETE-BY-BOOKMAR
SQL_CA1_BULK_UPDATE_BY_BOOKMARK	SQL-CA1-BULK-UPDATE-BY-BOOKMAR
SQL_CDO_CONSTRAINT_NAME_DEFINITION	SQL-CDO-CONSTRAINT-NAME-DEFINI
SQL_CDO_CONSTRAINT_INITIALLY_DEFERRED	SQL-CDO-CONSTRAINT-INITIALLY-D
SQL_CDO_CONSTRAINT_INITIALLY_IMMEDIATE	SQL-CDO-CONSTRAINT-INITIALLY-I
SQL_CDO_CONSTRAINT_NON_DEFERRABLE	SQL-CDO-CONSTRAINT-NON-DEFERRA
SQL_CONVERT_INTERVAL_YEAR_MONTH	SQL-CONVERT-INTERVAL-YEAR-MONT
SQL_CT_CONSTRAINT_INITIALLY_DEFERRED	SQL-CT-CONSTRAINT-INITIALLY-DE
SQL_CT_CONSTRAINT_INITIALLY_IMMEDIATE	SQL-CT-CONSTRAINT-INITIALLY-IM
SQL_CT_CONSTRAINT_NON_DEFERRABLE	SQL-CT-CONSTRAINT-NON-DEFERRAB
SQL_CT_CONSTRAINT_NAME_DEFINITION	SQL-CT-CONSTRAINT-NAME-DEFINIT
SQL_DESC_DATETIME_INTERVAL_CODE	SQL-DESC-DATETIME-INTERVAL-COD
SQL_DESC_DATETIME_INTERVAL_PRECISION	SQL-DESC-DATETIME-INTERVAL-PRE
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_DAY_TO_HOUR	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-DAY-TO-H
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_DAY_TO_MINUTE	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-DAY-TO-M
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_DAY_TO_SECOND	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-DAY-TO-S
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_HOUR_TO_MINUTE	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-HR-TO-M
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_HOUR_TO_SECOND	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-HR-TO-S
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_MINUTE_TO_SECOND	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-MIN-TO-S
SQL_DL_SQL92_INTERVAL_YEAR_TO_MONTH	SQL-DL-SQL92-INTERVAL-YR-TO-MO
SQL_FORWARD_ONLY_CURSOR_ATTRIBUTES1	SQL-FORWARD-ONLY-CURSOR-ATTR1
SQL_FORWARD_ONLY_CURSOR_ATTRIBUTES2	SQL-FORWARD-ONLY-CURSOR-ATTR2
SQL_GB_GROUP_BY_CONTAINS_SELECT	SQL-GB-GROUP-BY-CONTAINS-SELEC
SQL_ISV_CONSTRAINT_COLUMN_USAGE	SQL-ISV-CONSTRAINT-COLUMN-USAG
SQL_ISV_REFERENTIAL_CONSTRAINTS	SQL-ISV-REFERENTIAL-CONSTRAINT
SQL_MAXIMUM_CATALOG_NAME_LENGTH	SQL-MAXIMUM-CATALOG-NAME-LENGT
SQL_MAXIMUM_COLUMN_IN_GROUP_BY	SQL-MAXIMUM-COLUMN-IN-GROUP-B
SQL_MAXIMUM_COLUMN_IN_ORDER_BY	SQL-MAXIMUM-COLUMN-IN-ORDER-B
SQL_MAXIMUM_CONCURRENT_ACTIVITIES	SQL-MAXIMUM-CONCURRENT-ACTIVIT

表 46. COBOL 用に切り捨てまたは省略される ODBC 名 (続き)

ODBC C #define シンボル > 30 文字	対応する COBOL 名
SQL_MAXIMUM_CONCURRENT_STATEMENTS	SQL-MAXIMUM-CONCURRENT-STAT
SQL_SQL92_FOREIGN_KEY_DELETE_RULE	SQL-SQL92-FOREIGN-KEY-DELETE-R
SQL_SQL92_FOREIGN_KEY_UPDATE_RULE	SQL-SQL92-FOREIGN-KEY-UPDATE-R
SQL_SQL92_NUMERIC_VALUE_FUNCTIONS	SQL-SQL92-NUMERIC-VALUE-FUNCTI
SQL_SQL92_RELATIONAL_JOIN_OPERATORS	SQL-SQL92-RELATIONAL-JOIN-OPER
SQL_SQL92_ROW_VALUE_CONSTRUCTOR	SQL-SQL92-ROW-VALUE-CONSTRUCTO
SQL_TRANSACTION_ISOLATION_OPTION	SQL-TRANSACTION-ISOLATION-OPTI

ODBC 呼び出しを行うプログラムのコンパイルおよびリンク

ODBC 呼び出しを行うプログラムを、コンパイラー・オプション `CALLINT(SYSTEM)` または `>>CALLINT SYSTEM` ディレクティブ、およびコンパイラー・オプション `PGMNAME(MIXED)` を指定してコンパイルする必要があります (ODBC エントリー・ポイントは大/小文字を区別します)。

関連参照

254 ページの『CALLINT』

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

282 ページの『PGMNAME』

ODBC エラー・メッセージについて

ODBC 呼び出しのエラー・メッセージは、ODBC ドライバー、データベース・ソース、またはドライバー・マネージャーから出されます。

ODBC ドライバーについて報告されたエラーは、次のようなフォーマットになっています。ここで `ODBC_component` は、エラーが発生したコンポーネントです。

[*vendor*] [*ODBC_component*] message

このタイプのエラーが出された場合は、アプリケーションが実行した最後の ODBC 呼び出しに問題があるかどうかを検査するか、または ODBC アプリケーション・ベンダーに問い合わせてください。

データ・ソースで発生したエラーには、データ・ソース名が含まれており、次のようなフォーマットになっています。ここで `ODBC_component` は、指定されたデータ・ソースからエラーを受け取ったコンポーネントです。

[*vendor*] [*ODBC_component*] [*data_source*] message

このタイプのエラーが発生した場合は、データベース・システムに対して何らかの誤操作を行ったものと思われます。データベース・システムのマニュアルで詳細を確認するか、またはデータベース管理者にお問い合わせください。この例の場合は、Oracle のマニュアルを確認してください。

ドライバー・マネージャーは、ドライバーとの接続を確立し、要求をドライバーに渡し、結果をアプリケーションに戻す DLL です。ドライバー・マネージャーで発生するエラーは、次のような形式になります。

[*vendor*] [ODBC DLL] message

このタイプのエラーに対処するには、ドライバー・マネージャーのマニュアルを確認してください。

第 5 部 XML と COBOL の連携

第 22 章 XML 入力の処理	387
COBOL での XML パーサー	387
XML 文書へのアクセス	389
XML 文書の構文解析	389
XML-EVENT の内容	391
例: XML イベントの処理	394
XML を処理するためのプロシージャの作成	396
例: XML の構文解析	398
XML-CODE の内容	400
XML-TEXT および XML-NTEXT の内容	403
XML テキストを COBOL データ項目に変換する	403
XML 文書のエンコード方式についての理解	404
XML 文書のコード化文字セット	405
コード・ページの指定	406
XML パーサーが検出する例外の処理	407
XML パーサーによるエラーの処理方法	408
コード・ページの矛盾の処理	410
XML 構文解析の終了	412
第 23 章 XML 出力の生成	413
XML 出力の生成	413
例: XML の生成	416
プログラム XGFX	416
プログラム Pretty	417
プログラム XGFX からの出力	418
XML 出力の拡張	419
例: XML 出力の拡張	420
例: エlement名のハイフンを下線に変換する	423
生成される XML 出力のエンコードの制御	424
XML 出力生成時のエラーの処理	424

第 22 章 XML 入力の処理

XML PARSE ステートメントを使用すると、COBOL プログラム内で XML 入力を処理できます。XML PARSE ステートメントは、COBOL ランタイムの一部である高速 XML パーサーとの間の COBOL 言語インターフェースです。

XML 入力を処理するには、XML パーサーとの間で制御を受け渡しする必要があります。このような制御の受け渡しを開始するには、XML PARSE ステートメントを使用します。このステートメントでは、XML パーサーから制御を受け取り、パーサー・イベントを処理する処理プロシーチャーを指定します。処理プロシーチャーで特殊レジスターを使用して、パーサーと情報を交換します。

XML 入力を処理するには、以下の COBOL 機能を使用します。

- XML PARSE ステートメントは、XML 構文解析を開始して、文書および処理プロシーチャーを識別します。
- 処理プロシーチャーは構文解析を制御します。すなわち、XML イベントおよび関連文書フラグメントを受け取って処理し、オプションで例外を処理します。
- 以下の特殊レジスターは、情報の受け渡しを行います。
 - XML-CODE は、XML 構文解析の状況を判別します。
 - XML-EVENT は、各 XML イベントの名前を受け取ります。
 - XML-TEXT は、英数字文書から XML 文書フラグメントを受け取ります。
 - XML-NTEXT は、国別文書から XML 文書フラグメントを受け取ります。

関連概念

『COBOL での XML パーサー』

関連タスク

389 ページの『XML 文書へのアクセス』

389 ページの『XML 文書の構文解析』

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』

412 ページの『XML 構文解析の終了』

関連参照

695 ページの『付録 F. XML 参照資料』

Extensible Markup Language (XML)

COBOL での XML パーサー

COBOL for Windows ではイベント・ベースのインターフェースが提供されるため、これを使用して XML 文書を構文解析し、さらに COBOL データ構造に変換することができます。

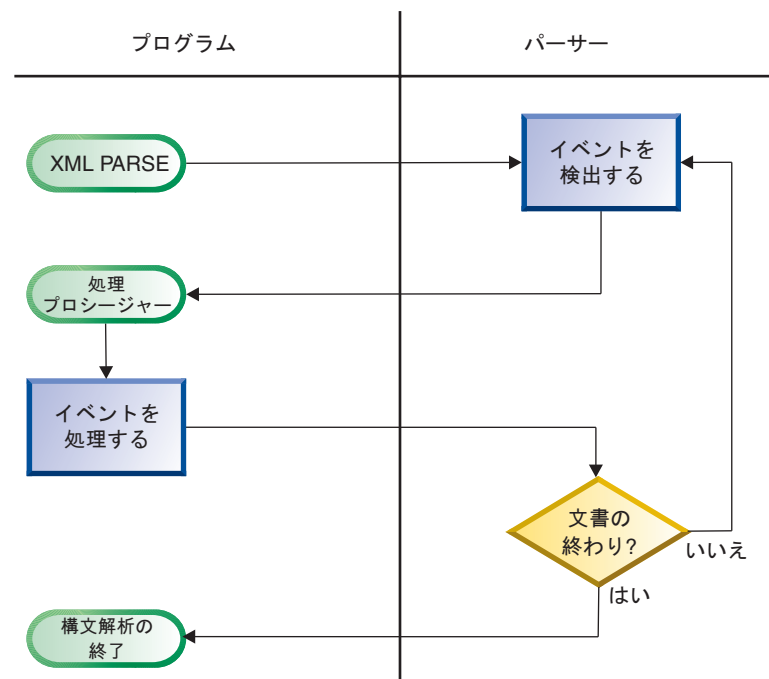
XML パーサーが文書内の (XML イベントに関連付けられた) フラグメントを検出し、作成した処理プロシーチャーによってこれらのフラグメントに対する操作が実

行されます。それぞれの XML イベントを処理するために独自のプロシージャーをコーディングします。この操作の間中、制御がパーサーとプロシージャーの間を行き来します。

パーサーとの受け渡しを開始するには、XML PARSE ステートメントを使用します。このステートメントに処理プロシージャーを指定します。この XML PARSE ステートメントを実行すると、構文解析が開始されてパーサーでの処理プロシージャーが確立されます。プロシージャーが実行されるたびに XML パーサーは XML 文書の解析を継続して次のイベントを報告し、検出したフラグメント (新規エレメントの開始など) をプロシージャーに戻します。XML PARSE ステートメントに、構文解析の終了時に制御を渡したい 2 つの命令ステートメントを指定することもできます。1 つは正常終了の場合、もう 1 つは例外条件が存在する場合のためのステートメントです。

パーサーとプログラム間の基本的な制御の受け渡しを示した高水準な概略図を以下に示します。

XML 構文解析フローの概要



通常、構文解析は XML 文書全体が構文解析されるまで継続されます。

XML パーサーが XML 文書を構文解析する際は、XML 文書のさまざまな側面が整形形式になっているかどうか検査します。文書が整形形式であるのは、XML 仕様書の XML 構文規則に準拠し、その他のいくつかの規則 (終了タグの適切な使用、属性名が固有であることなど) に従っている場合です。

関連タスク

389 ページの『XML 文書へのアクセス』

389 ページの『XML 文書の構文解析』

396 ページの『XML を処理するためのプロシージャーの作成』

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』
407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』
412 ページの『XML 構文解析の終了』

関連参照

703 ページの『XML 準拠』
XML 仕様

XML 文書へのアクセス

XML PARSE ステートメントを使用して XML 文書を構文解析する前に、その文書をプログラムで使えるようにしておく必要があります。文書を取得する一般的な方法としては、プログラムに対するパラメーターから取得する方法や、ファイルから取得する方法があります。

構文解析する XML 文書がファイル内に保管されている場合は、以下に示す通常の COBOL 機能を使用して文書をプログラムのデータ項目に入れてください。

- FILE-CONTROL 記入項目でプログラムに対してファイルを定義します。
- OPEN ステートメントでファイルをオープンします。
- READ ステートメントで、ファイルからすべてのレコードを読み取って、WORKING-STORAGE SECTION または LOCAL-STORAGE SECTION に定義されているデータ項目 (カテゴリー英数字またはカテゴリー国別の基本項目、あるいは英数字グループまたは国別グループ) に入れます。
- (オプション) STRING ステートメントで、個別レコードすべてを 1 つの連続ストリームに結合したり、無関係なブランクを除去したり、可変長レコードを処理したりします。

XML 文書の構文解析

XML 文書を構文解析するには、XML PARSE ステートメントを使用して、構文解析する XML 文書、および構文解析時に発生する XML イベントの処理用プロシージャールを指定します。また、必要に応じて構文解析終了後に行うアクションを指定することができます。

```
XML PARSE XMLDOCUMENT  
  PROCESSING PROCEDURE XMLEVENT-HANDLER  
  ON EXCEPTION  
    DISPLAY 'XML document error ' XML-CODE  
    STOP RUN  
  NOT ON EXCEPTION  
    DISPLAY 'XML document was successfully parsed.'  
END-XML
```

XML PARSE ステートメントで、まず XML 文書文字ストリームを含むデータ項目 (上の例では XMLDOCUMENT) を識別します。DATA DIVISION では、国別 (国別グループ項目またはカテゴリー国別の基本項目のどちらか) として、または英数字 (英数字グループ項目またはカテゴリー英数字の基本項目のどちらか) として ID を宣言することができます。国別の場合は、Unicode UTF-16LE、CCSID 1202 でその内容をエンコードする必要があります。英数字データ項目の場合は、サポートされている

1 バイトの EBCDIC または ASCII 文字セットのいずれかで内容をエンコードする必要があります。詳しくは、以下の関連参照資料のコード化文字セットについての説明を参照してください。

CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションが有効である場合に、項目が英数字データ項目を記述している場合は、ID のデータ記述記入項目で NATIVE キーワードを指定しないでください。CHAR(EBCDIC) が有効で、ID が英数字である場合、ID の内容は EBCDIC でエンコードされているはずです。

エンコード宣言を含まない ASCII XML 文書の構文解析には、現行のランタイム・ロケールによって示されたコード・ページを使用します。エンコード宣言を含まない EBCDIC XML 文書の構文解析には、EBCDIC_CODEPAGE 環境変数で指定されたコード・ページを使用します。EBCDIC_CODEPAGE 環境変数が設定されていない場合は、現行のランタイム・ロケールに対して選択された、デフォルトの EBCDIC コード・ページを使用して構文解析が行われます。

XML 宣言: 構文解析する文書に XML 宣言が含まれている場合、宣言は文書の先頭バイトから開始していなければなりません。ストリング `<?xml` が文書の先頭バイトより後から開始されている場合、パーサーは例外コードを生成します。XML 宣言でコーディングする属性名は、すべて小文字で指定する必要があります。

次に、文書から検出した XML イベントを処理するプロシージャーの名前 (この例では XMLEVENT-HANDLER) を指定します。

さらに、構文解析の終了時に制御を受け取る以下の句のいずれかまたは両方を指定できます。

- ON EXCEPTION は、構文解析中に未処理の例外が発生した場合に制御を受け取ります。
- NOT ON EXCEPTION は、それ以外の場合に制御を受け取ります。

XML PARSE ステートメントを終了するには、明示範囲終了符号の END-XML を使用します。END-XML を使用して、条件ステートメント (例えば、別の XML PARSE ステートメントまたは XML GENERATE ステートメント) 内で ON EXCEPTION 句または NOT ON EXCEPTION 句を使用する XML PARSE ステートメントをネストできます。

パーサーは、XML イベントごとに処理プロシージャーに制御を渡します。処理プロシージャーの終わりに到達すると、制御がパーサーに戻されます。XML パーサーと処理プロシージャー間での制御の受け渡しは、以下のイベントのいずれかが発生するまで継続します。

- XML 文書全体の構文解析が完了したことが、END-OF-DOCUMENT イベントによって示された場合。
- パーサーが文書内にエラーを検出し、EXCEPTION イベントを通知した場合。この場合、処理プロシージャーは、パーサーに制御を戻す前に特殊レジスター XML-CODE をゼロにリセットしません。
- パーサーに戻る前に、特殊レジスター XML-CODE を -1 に設定して、構文解析プロセスを故意に終了した場合。

特殊レジスター: XML-EVENT 特殊レジスターを使用して、パーサーが処理プロシージャーに渡したイベントを判別します。XML-EVENT には、'START-OF-ELEMENT' など

のイベント名が入ります。パーサーは、XML PARSE ステートメントに指定された XML ID のタイプに基づいて、特殊レジスター XML-TEXT または XML-NTEXT に入っているイベントの内容を渡します。

関連タスク

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』
396 ページの『XML を処理するためのプロシーチャーの作成』
198 ページの『ロケール付きのコード・ページの指定』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』
405 ページの『XML 文書のコード化文字セット』
『XML-EVENT の内容』
XML PARSE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML-EVENT の内容

XML 構文解析時にイベントが発生すると、XML パーサーは以下に示されている該当するイベント名を XML-EVENT 特殊レジスターに書き込みます。(イベントは処理プロシーチャーに渡され、イベントに対応するテキストが XML-TEXT 特殊レジスターまたは XML-NTEXT 特殊レジスターのどちらかに書き込まれます。)

ATTRIBUTE-CHARACTER

定義済みエンティティー参照 `&`、`'''`、`'>'`、`'<'`、および `'"'` 用の属性値に出現します。定義済みエンティティーの詳細については、*XML 仕様* を参照してください。

ATTRIBUTE-CHARACTERS

属性値のフラグメントごとに出現します。XML テキストにはフラグメントが入ります。属性値は、通常、単一ストリングのみで構成されます。複数の行に分割されている場合でも同様です。ただし、場合によっては、属性値が複数のイベントで構成されることがあります。

ATTRIBUTE-NAME

有効な名前を認識後、エレメント開始タグまたは空エレメント・タグの属性ごとに出現します。XML テキストには属性名が入ります。

ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER

`'&#dd..;'` または `'&#hh..;'` (*d* は 10 進数字を表し、*h* は 16 進数字を表す) の形式で表された数字参照 (Unicode コード・ポイント、つまり「スカラー値」) 用の属性値に出現します。国別文字のスカラー値が 65,535 (NX'FFFF') より大きい場合、XML-NTEXT には 2 つのエンコード・ユニット (サロゲート・ペア) が入り、長さは 4 バイトになります。このエンコード・ユニットのペアは、2 つで 1 つの文字を表現します。このペアを分割すると無効な文字が作成されますので、分割しないでください。

COMMENT

XML 文書についてのコメントがある場合に出現します。XML テキストには、コメントの開始と終了を示すコメント区切り `<!--` と `-->` に囲まれてデータが入ります。

CONTENT-CHARACTER

定義済みのエンティティー参照 `'&'`、`'''`、`'>'`、`'<'`、および

'"' に対するエレメントの内容に出現します。定義済みエンティティーの詳細については、XML 仕様 を参照してください。

CONTENT-CHARACTERS

このイベントは、XML 文書の基本部分を表します。つまり、エレメント開始タグと終了タグの間の文字データです。XML テキストにはこのデータが含まれており、通常、これは単一のストリングのみで構成されます。複数の行にわたる場合も同様です。エレメントの内容に参照や別のエレメントが含まれている場合、内容全体が複数のイベントで構成されることがあります。パーサーでは、CONTENT-CHARACTERS イベントを使用して、CDATA セクションのテキストをプログラムに渡す場合もあります。

CONTENT-NATIONAL-CHARACTER

'&#dd..;' または '&#hh..;' (*d* は 10 進数字を表し、*h* は 16 進数字を表す) の形式で表された数字参照 (Unicode コード・ポイント、つまり「スカラー値」) 用のエレメントの内容に出現します。国別文字のスカラー値が 65,535 (NX'FFFF') より大きい場合、XML-NTEXT には 2 つのエンコード・ユニット (サロゲート・ペア) が入り、長さは 4 バイトになります。このエンコード・ユニットのペアは、2 つで 1 つの文字を表現します。このペアを分割すると無効な文字が作成されますので、分割しないでください。

DOCUMENT-TYPE-DECLARATION

パーサーが文書タイプ宣言を検出したときに出現します。文書タイプ宣言は、文字シーケンス '<!DOCTYPE' で始まり、右側の不等号括弧 ('>') 文字で終わりますが、この間には内容を記述する複雑な文法規則が入ります。詳細については、「XML 仕様」を参照してください。このイベントの場合、XML テキストには宣言全体 (開始と終了の文字シーケンスを含む) が入ります。これは、XML テキストに区切り文字が含まれる唯一のイベントです。

ENCODING-DECLARATION

オプションのエンコード宣言についての XML 宣言内に出現します。XML テキストには、エンコード値が入ります。

END-OF-CDATA-SECTION

パーサーが CDATA セクションの終了を認識したときに出現します。

END-OF-DOCUMENT

文書の構文解析が完了したときに出現します。

END-OF-ELEMENT

パーサーが、エレメント終了タグまたは空エレメント・タグの終了不等号括弧を認識するたびに一度出現します。XML テキストにはエレメント名が入ります。

EXCEPTION

XML 文書の処理中にエラーが検出されたときに出現します。構文解析が開始される前にシグナル通知されるエンコード矛盾例外については、XML-TEXT (英数字データ項目内の XML 文書の場合) または XML-NTEXT (国別データ項目内の XML 文書の場合) のいずれかが長さ 0 になるか、文書エンコード宣言値のみが入ります。

PROCESSING-INSTRUCTION-DATA

PI ターゲットの直後に始まり、PI 終了の文字シーケンス '?>' の直前で終

わるデータについて出現します。XML テキストには、PI データが入りません。これには末尾の空白文字が含まれますが、先頭の空白文字は含まれません。

PROCESSING-INSTRUCTION-TARGET

処理命令 (PI) 開始の文字シーケンス '<?' 以降にパーサーが名前を認識したときに出現します。PI を使用すると、アプリケーション用の特別な命令を XML 文書に定義することができます。

STANDALONE-DECLARATION

オプションの standalone 宣言についての XML 宣言内に出現します。XML テキストには、standalone 値が入ります。

START-OF-CDATA-SECTION

CDATA セクションを開始するときに出現します。CDATA セクションは、ストリング '<![CDATA[' で開始され、ストリング ']]>' で終了します。CDATA セクションは、XML マークアップとして認識される文字を含むテキストのブロックを「エスケープ」するために使用します。XML テキストには、必ず開始の文字シーケンス '<![CDATA[' が含まれています。パーサーでは、これらの区切り文字で囲まれた CDATA セクションの内容を単一の CONTENT-CHARACTERS イベントとして渡します。

START-OF-DOCUMENT

構文解析する文書の先頭に一度だけ出現します。XML テキストは文書全体であり、これには、LF (改行) や NL (改行) など行制御文字がすべて含まれています。

START-OF-ELEMENT

エレメント開始タグまたは空エレメント・タグごとに一度出現します。XML テキストはエレメント名に設定されます。

UNKNOWN-REFERENCE-IN-ATTRIBUTE

5 つの定義済みエンティティー参照 (前述の ATTRIBUTE-CHARACTER に記載) 以外のエンティティー参照用の属性値に出現します。

UNKNOWN-REFERENCE-IN-CONTENT

定義済みエンティティー参照 (前述の CONTENT-CHARACTER に記載) 以外のエンティティー参照用のエレメントの内容に出現します。

VERSION-INFORMATION

バージョン情報についてのオプションの XML 宣言内に出現します。XML テキストには、バージョン値が入ります。XML 宣言は、使用される XML のバージョンおよび文書のエンコード方式を指定する XML テキストです。

394 ページの『例: XML イベントの処理』

関連概念

403 ページの『XML-TEXT および XML-NTEXT の内容』

関連タスク

389 ページの『XML 文書の構文解析』

396 ページの『XML を処理するためのプロシージャールの作成』

関連参照

XML-EVENT (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

4.6 Predefined Entities (「XML 仕様」)

例: XML イベントの処理

次のサンプル XML 文書は短いものですが、多数の XML イベントを含んでいます。それらのイベントは、構文解析時に発生する順序で文書の後に示してあります。それぞれの XML イベントの正確なテキストは不等号括弧 (<>) で区切られています。

一般に、このテキストは、XML-TEXT または XML-NTEXT のどちらかの内容になります。以降のサンプル XML 文書は、XML-NTEXT を必要とするテキストを含んでおらず、XML-TEXT のみを使用しています。

この例は XML 宣言で始まっています。構文解析する文書に XML 宣言が含まれている場合、宣言は文書の先頭バイトから開始していなければなりません。先頭バイトから開始していない場合、パーサーは例外コードを生成します。XML 宣言でコーディングする属性名は、すべて小文字で指定する必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="ibm-1140" standalone="yes" ?>
<!--This document is just an example-->
<sandwich>
  <bread type="baker&apos;s best" />
  <?spread please use real mayonnaise ?>
  <meat>Ham & turkey</meat>
  <filling>Cheese, lettuce, tomato, etc.</filling>
  <![CDATA[We should add a <relish> element in future!]]>
</sandwich>junk
```

START-OF-DOCUMENT

このサンプル・テキストの長さは 336 文字です。

VERSION-INFORMATION

<<1.0>>

ENCODING-DECLARATION

<<ibm-1140>>

STANDALONE-DECLARATION

<<yes>>

DOCUMENT-TYPE-DECLARATION

サンプルには、文書タイプ宣言はありません。

COMMENT

<<This document is just an example>>

START-OF-ELEMENT

START-OF-ELEMENT イベントとして、次の順序で出現します。

1. <<sandwich>>
2. <<bread>>
3. <<meat>>
4. <<filling>>

ATTRIBUTE-NAME

<<type>>

ATTRIBUTE-CHARACTERS

ATTRIBUTE-CHARACTERS イベントとして出現する順序で示します。

1. <<baker>>
2. <<s best>>

サンプルの type 属性の値は、ストリング 'baker'、単一文字 ' ', およびストリング 's best' という 3 つのフラグメントで構成されます。単一文字のフラグメント ' ' は、ATTRIBUTE-CHARACTER イベントとして個別に渡されます。

ATTRIBUTE-CHARACTER

<<'>>

ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER

サンプルには、数字参照はありません。

END-OF-ELEMENT

END-OF-ELEMENT イベントとして、次の順序で出現します。

1. <<bread>>
2. <<meat>>
3. <<filling>>
4. <<sandwich>>

PROCESSING-INSTRUCTION-TARGET

<<spread>>

PROCESSING-INSTRUCTION-DATA

<<please use real mayonnaise >>

CONTENT-CHARACTERS

CONTENT-CHARACTERS イベントとして、次の順序で出現します。

1. <<Ham >>
2. << turkey>>
3. <<Cheese, lettuce, tomato, etc.>>
4. <<We should add a <relish> element in future!>>

このサンプルでは、「中身」となるエレメントの内容は、ストリング 'Ham'、文字 '&'、およびストリング 'turkey' で構成されます。単一文字のフラグメント '&' は、CONTENT-CHARACTER イベントとして個別に渡されます。この 2 つのストリングのフラグメントには、先頭と末尾の空白があります。

CONTENT-CHARACTER

<<&>>

CONTENT-NATIONAL-CHARACTER

サンプルには、数字参照はありません。

START-OF-CDATA-SECTION

<<<![CDATA[>>

END-OF-CDATA-SECTION

<<]]>>>

UNKNOWN-REFERENCE-IN-ATTRIBUTE

サンプルには、未定義のエンティティ参照はありません。

UNKNOWN-REFERENCE-IN-CONTENT

サンプルには、未定義のエンティティ参照はありません。

END-OF-DOCUMENT

END-OF-DOCUMENT イベント用の XML テキストは空です。

EXCEPTION

例外 (</sandwich> タグに続く不要な「junk」という文字列) が検出された箇所までの、文書の構文解析済みの部分。

関連概念

403 ページの『XML-TEXT および XML-NTEXT の内容』

関連タスク

389 ページの『XML 文書の構文解析』
『XML を処理するためのプロシーチャーの作成』

関連参照

391 ページの『XML-EVENT の内容』
XML-EVENT (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
4.6 Predefined Entities (「*XML 仕様*」)
2.8 Prolog and document type declaration (「*XML 仕様*」)

XML を処理するためのプロシーチャーの作成

処理プロシーチャーには、XML イベントを処理するためのステートメントをコーディングします。

パーサーは、イベントを検出すると、次の表に示す特殊レジスター内の処理プロシーチャーに情報を渡します。これらのレジスターは、データ構造の取り込みと、処理の制御に使用します。

これらの特殊レジスターがネストされたプログラムで使用された場合は、最外部のプログラムで GLOBAL として暗黙的に定義されます。

表 47. XML パーサーが使用する特殊レジスター

特殊 レジスター	内容	暗黙的な定義および使用法
XML-EVENT ^{1,3}	XML イベントの名前	PICTURE X(30) USAGE DISPLAY VALUE SPACE
XML-CODE ²	各 XML イベント用の例外コードまたはゼロ	PICTURE S9(9) USAGE BINARY VALUE ZERO
XML-TEXT ^{1,4}	XML PARSE ID として英数字項目を指定した場合は、XML 文書のテキスト (パーサーが検出したイベントに対応)	可変長基本カテゴリー-英数字項目。 サイズ制限 2,147,483,646 バイト。
XML-NTEXT ¹	XML PARSE ID として国別項目を指定した場合は、XML 文書のテキスト (パーサーが検出したイベントに対応)	可変長基本カテゴリー-国別項目。 サイズ制限 2,147,483,646 バイト。

表 47. XML パーサーが使用する特殊レジスター (続き)

特殊 レジスター	内容	暗黙的な定義および使用法
	<p>1. この特殊レジスターを受け取りデータ項目として使用することはできません。</p> <p>2. XML GENERATE ステートメントでも XML-CODE が使用されます。したがって、処理プロシージャ内で XML GENERATE ステートメントをコーディングする場合、XML GENERATE ステートメントの前に XML-CODE の値を保存し、XML GENERATE ステートメントの後に保存した値をリストアします。</p> <p>3. この特殊レジスターの内容は、CHAR コンパイラー・オプション (EBCDIC、NATIVE、または S390) の設定に従ってエンコードされます。</p> <p>4. XML-TEXT の内容は、以下のようにソース XML 文書のエンコードに依存します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ソース XML 文書が EBCDIC でエンコードされている場合、XML-TEXT の内容は EBCDIC でエンコードされます。 ソース XML 文書が NATIVE 英数字データ項目の ASCII でエンコードされている場合、XML-TEXT の内容は ASCII でエンコードされます。ただし、XML-TEXT の ASCII による内容は、以下のように EBCDIC に変換することができます。 <p>Function DISPLAY-OF(Function NATIONAL-OF(XML-TEXT 819))</p>	

制約事項: 処理プロシージャで、XML PARSE ステートメントを直接実行してはなりません。ただし、INVOKE または CALL ステートメントを使用して、処理プロシージャからメソッドまたは最外部のプログラムに制御が渡る場合、ターゲットとなるメソッドまたはプログラムは同一または別の XML PARSE ステートメントを実行できます。複数のスレッドで実行されているプログラムから、同一または別の XML ステートメントを同時に実行することもできます。

コンパイラーは、各処理プロシージャの最後のステートメントの後に、戻り機構を挿入します。処理プロシージャに STOP RUN ステートメントをコーディングすると、実行単位を終了させることができます。ただし、EXIT PROGRAM ステートメント (CALL ステートメントがアクティブの場合) または GOBACK ステートメントは、パーサーに制御を戻しません。処理プロシージャ内でこれらのステートメントを使用すると、重大エラーが発生する原因となります。

398 ページの『例: XML の構文解析』

関連概念

400 ページの『XML-CODE の内容』

403 ページの『XML-TEXT および XML-NTEXT の内容』

関連タスク

403 ページの『XML テキストを COBOL データ項目に変換する』

185 ページの『国別 (Unicode) 表現と間の間の変換』

関連参照

695 ページの『継続を許可する XML PARSE 例外』

700 ページの『継続を許可しない XML PARSE 例外』

XML-CODE (「COBOL for Windows 言語解説書」)

XML-EVENT (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML-NTEXT (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML-TEXT (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: XML の構文解析

以下の例では、XML PARSE ステートメントおよび処理プロシージャーの基本的な構成を示します。

この XML 文書は、構文解析のフローを確認する目的のソースです。ソースの後に、プログラムの出力結果も示しています。XML 文書とプログラムの出力結果を比較して、パーサーと処理プロシージャーとの間の相互作用を確認し、イベントと文書フラグメントを突き合わせてください。

```
Process flag(i,i)
Identification division.
    Program-id. xmlsampl.
```

```
Data division.
    Working-storage section.
```

```
*****
* XML document, encoded as initial values of data items.      *
*****
```

```
1 xml-document.
2 pic x(39) value '<?xml version="1.0" encoding="ibm-1140"'.
2 pic x(19) value ' standalone="yes"?>'.
2 pic x(39) value '<!--This document is just an example-->'.
2 pic x(10) value '<sandwich>'.
2 pic x(35) value ' <bread type="baker&apos;s best"/>'.
2 pic x(41) value ' <?spread please use real mayonnaise ?>'.
2 pic x(31) value ' <meat>Ham &amp; turkey</meat>'.
2 pic x(40) value ' <filling>Cheese, lettuce, tomato, etc.'.
2 pic x(10) value '</filling>'.
2 pic x(35) value ' <![CDATA[We should add a <relish>'.
2 pic x(22) value ' element in future!]]>'.
2 pic x(31) value ' <listprice>$4.99 </listprice>'.
2 pic x(27) value ' <discount>0.10</discount>'.
2 pic x(11) value '</sandwich>'.
1 xml-document-length computational pic 999.
```

```
*****
* Sample data definitions for processing numeric XML content.  *
*****
```

```
1 current-element pic x(30).
1 xfr-ed pic x(9) justified.
1 xfr-ed-1 redefines xfr-ed pic 999999.99.
1 list-price computational pic 9v99 value 0.
1 discount computational pic 9v99 value 0.
1 display-price pic $$9.99.
```

```
Procedure division.
    mainline section.
```

```
XML PARSE xml-document PROCESSING PROCEDURE xml-handler
ON EXCEPTION
    display 'XML document error ' XML-CODE
NOT ON EXCEPTION
    display 'XML document successfully parsed'
END-XML
```

```
*****
* Process the transformed content and calculate promo price.  *
*****
display ' '
```

```

display '-----***** Using information from XML '
      '*****-----'
display ' '
move list-price to display-price
display ' Sandwich list price: ' display-price
compute display-price = list-price * (1 - discount)
display ' Promotional price: ' display-price
display ' Get one today!'

goback.

xml-handler section.
evaluate XML-EVENT
* ==> Order XML events most frequent first
  when 'START-OF-ELEMENT'
    display 'Start element tag: <' XML-TEXT '>'
    move XML-TEXT to current-element
  when 'CONTENT-CHARACTERS'
    display 'Content characters: <' XML-TEXT '>'
* ==> Transform XML content to operational COBOL data item...
  evaluate current-element
  when 'listprice'
* ==> Using function NUMVAL-C...
    compute list-price = function numval-c(XML-TEXT)
  when 'discount'
* ==> Using de-editing of a numeric edited item...
    move XML-TEXT to xfr-ed
    move xfr-ed-1 to discount
  end-evaluate
  when 'END-OF-ELEMENT'
    display 'End element tag: <' XML-TEXT '>'
    move spaces to current-element
  when 'START-OF-DOCUMENT'
    compute xml-document-length = function length(XML-TEXT)
    display 'Start of document: length=' xml-document-length
      ' characters.'
  when 'END-OF-DOCUMENT'
    display 'End of document.'
  when 'VERSION-INFORMATION'
    display 'Version: <' XML-TEXT '>'
  when 'ENCODING-DECLARATION'
    display 'Encoding: <' XML-TEXT '>'
  when 'STANDALONE-DECLARATION'
    display 'Standalone: <' XML-TEXT '>'
  when 'ATTRIBUTE-NAME'
    display 'Attribute name: <' XML-TEXT '>'
  when 'ATTRIBUTE-CHARACTERS'
    display 'Attribute value characters: <' XML-TEXT '>'
  when 'ATTRIBUTE-CHARACTER'
    display 'Attribute value character: <' XML-TEXT '>'
  when 'START-OF-CDATA-SECTION'
    display 'Start of CData: <' XML-TEXT '>'
  when 'END-OF-CDATA-SECTION'
    display 'End of CData: <' XML-TEXT '>'
  when 'CONTENT-CHARACTER'
    display 'Content character: <' XML-TEXT '>'
  when 'PROCESSING-INSTRUCTION-TARGET'
    display 'PI target: <' XML-TEXT '>'
  when 'PROCESSING-INSTRUCTION-DATA'
    display 'PI data: <' XML-TEXT '>'
  when 'COMMENT'
    display 'Comment: <' XML-TEXT '>'
  when 'EXCEPTION'
    compute xml-document-length = function length (XML-TEXT)
    display 'Exception ' XML-CODE ' at offset '
      xml-document-length '.'
  when other

```

```

        display 'Unexpected XML event: ' XML-EVENT '.'
    end-evaluate
.
End program xmlsaml.

```

構文解析例からの出力: 以下の出力結果では、構文解析の各イベントが、どの文書フラグメントから発生しているかを確認することができます。

```

Start of document: length=390 characters.
Version: <1.0>
Encoding: <ibm-1140>
Standalone: <yes>
Comment: <This document is just an example>
Start element tag: <sandwich>
Content characters: < >
Start element tag: <bread>
Attribute name: <type>
Attribute value characters: <baker>
Attribute value character: <'>
Attribute value characters: <s best>
End element tag: <bread>
Content characters: < >
PI target: <spread>
PI data: <please use real mayonnaise >
Content characters: < >
Start element tag: <meat>
Content characters: <Ham >
Content character: <&>
Content characters: < turkey>
End element tag: <meat>
Content characters: < >
Start element tag: <filling>
Content characters: <Cheese, lettuce, tomato, etc.>
End element tag: <filling>
Content characters: < >
Start of CData: <<![CDATA[>
Content characters: <We should add a <relish> element in future!>
End of CData: <]>>
Content characters: < >
Start element tag: <listprice>
Content characters: <$4.99 >
End element tag: <listprice>
Content characters: < >
Start element tag: <discount>
Content characters: <0.10>
End element tag: <discount>
End element tag: <sandwich>
End of document.
XML document successfully parsed

-----+***** Using information from XML *****+-----

Sandwich list price: $4.99
Promotional price:   $4.49
Get one today!

```




XML-CODE の内容

パーサーから XML PARSE ステートメントに制御が戻されるとき、特殊レジスター XML-CODE には、パーサーまたは処理プロシーチャーによって設定された最新の値が入っています。

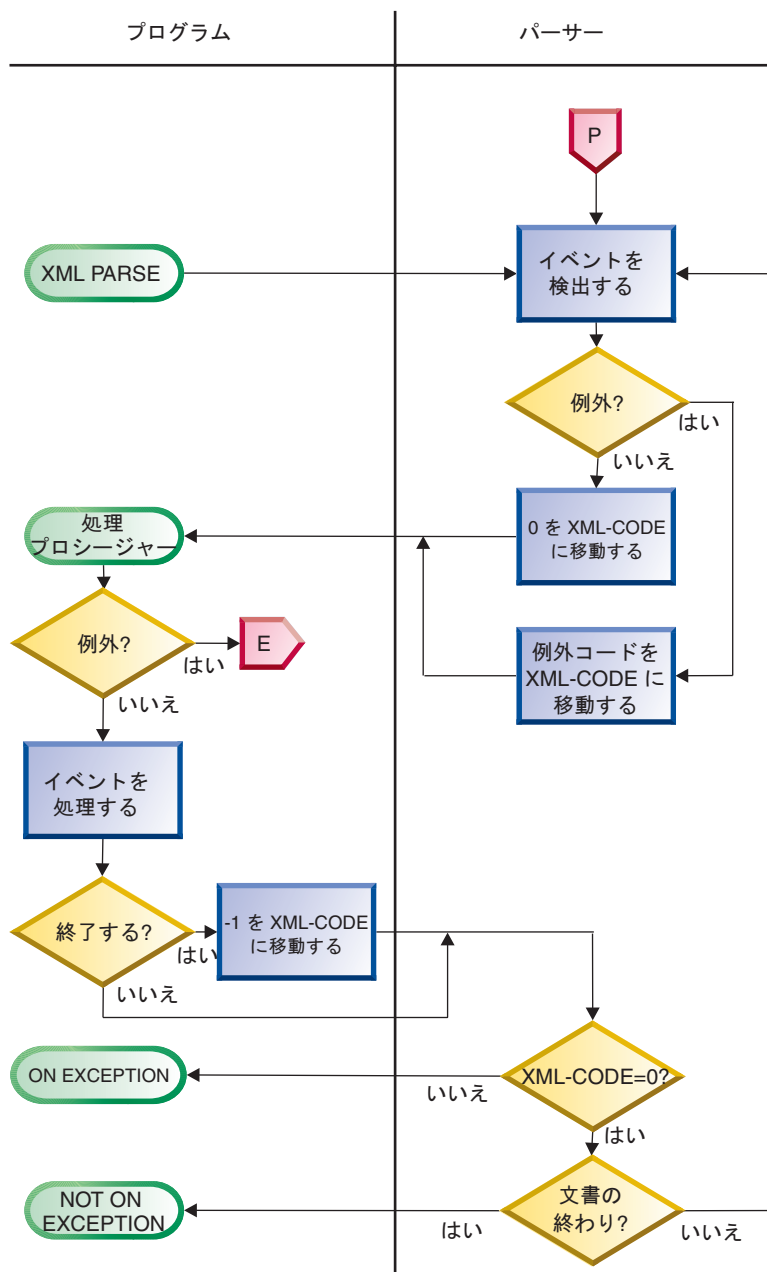
EXCEPTION イベント以外のすべてのイベントにおいて、XML-CODE の値はゼロです。EXCEPTION 以外のイベントに対して、XML パーサーに制御を戻す前に XML-CODE に

-1 を設定した場合、(戻された XML-CODE 値 -1 で指定される) ユーザー開始例外で処理は停止します。イベントから戻る前に XML-CODE をその他の非ゼロ値に変更した場合、結果は保証されません。

EXCEPTION イベントの場合、特殊レジスター XML-CODE は例外コードに設定されます。

次の図では、パーサーと処理プロシージャの間の制御のフロー、およびこれらの間で情報を受け渡しするためにどのように XML-CODE を使用するかを示しています。別ページへの接続記号 (例えば、) は、この情報によって複数のチャートを接続します。特に、 次の図でチャート 409 ページの『XML 例外の制御フロー』に結合し、 410 ページの『XML CCSID 例外のフロー制御』から結合されています。

XML-CODE の使用法を示す、XML パーサーとプログラム間の制御フロー



関連概念

403 ページの『XML-TEXT および XML-NTEXT の内容』

関連タスク

396 ページの『XML を処理するためのプロシージャの作成』

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』

関連参照

695 ページの『付録 F. XML 参照資料』

XML-CODE (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML-TEXT および XML-NTEXT の内容

特殊レジスタ XML-TEXT と XML-NTEXT は、相互に排他的です。パーサーによって XML-TEXT が設定されると、XML-NTEXT は未定義になります (長さ 0)。パーサーによって XML-NTEXT が設定されると、XML-TEXT は未定義になります (長さ 0)。

XML PARSE ID のタイプによって、2 つの特殊レジスタのいずれが設定されるかが決まります。ただし、これは、ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER および CONTENT-NATIONAL-CHARACTER イベントには適用されません。これら 2 つのイベントの場合、XML PARSE ID として指定したデータ項目に関係なく、XML-NTEXT が設定されます。

XML-NTEXT に含まれる国別文字の数を決定するには、LENGTH 関数を使用します。LENGTH OF XML-NTEXT には、文字数ではなく、XML-NTEXT で使用されるバイト数が入ります。

関連概念

400 ページの『XML-CODE の内容』

関連タスク

396 ページの『XML を処理するためのプロシージャの作成』

関連参照

XML-NTEXT (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML-TEXT (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML テキストを COBOL データ項目に変換する

XML データは固定長ではなく、固定形式でもないのので、XML データを COBOL データ項目に移動するときは、特別な技法を使用する必要があります。

英数字項目の場合、XML データを COBOL 項目の左端 (デフォルト) に配置するか、右端に配置するかを決める必要があります。右端に配置する場合は、COBOL 項目の宣言に JUSTIFIED RIGHT 文節を指定します。

数字の XML 値、特に、'\$1,234.00' または '\$1234' といった「修飾」された通貨値には特別な配慮が必要です。この 2 つのストリングは、XML では同じものを意味しますが、COBOL 送信フィールドとしてはまったく別の宣言となる必要があります。XML データを COBOL データ項目に移動するには、以下の技法のいずれかを使用します。

- 適度に規則性のあるフォーマットの場合は、MOVE を使用して、適切な数字編集項目として再定義した英数字項目に移動します。次に、数字編集項目から移動して編集解除することにより、数字 (操作) 項目への最終的な移動を行います。(規則性のあるフォーマットとは、例えば、小数点以下の桁数が同じで、999 より大きい値にはコンマ区切り文字が付くフォーマットです。)
- 英数字の XML データに対して以下の関数を使用すると、高度な柔軟性が簡単に実現できます。
 - NUMVAL を使用して、単純な数字を表現している XML データから単純な数値を抽出およびデコードします。
 - NUMVAL-C を使用して、通貨数量を表現している XML データから数値を抽出およびデコードします。

ただし、これらの関数を使用するとパフォーマンスが下がります。

関連タスク

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

396 ページの『XML を処理するためのプロシージャの作成』

XML 文書のエンコード方式についての理解

パーサーは、文書のエンコードに関する特定の情報ソースを使用して、文書の処理方法を決定します。これらのエンコードの情報源は、互いに整合性がとれている必要があります。パーサーは、矛盾を検出すると、XML 例外イベントをシグナル通知します。

エンコード情報のソースは次のとおりです。

- 基本的な文書エンコード
- 文書を含むデータ項目のタイプ
- 文書エンコード宣言
- 外部コード・ページ (適用可能な場合)
- サポートされるコード・ページ のセット

基本的な文書エンコード には、以下のようなカテゴリーがありますが、パーサーは XML 文書の最初の数バイトを調べていずれであるかを判別します。

- ASCII
- EBCDIC
- Unicode UTF-16 (ビッグ・エンディアンまたはリトル・エンディアンのいずれか)
- これ以外のサポートされないエンコード
- 認識不能なエンコード

文書を含む データ項目のタイプ も関連する情報です。パーサーは、以下の組み合わせをサポートします。

- その内容が Unicode UTF-16 を使用してエンコードされるカテゴリー国別データ項目
- 内容のエンコードに、サポートされる 1 バイトの ASCII コード・ページのいずれかを使用する、ネイティブの英数字データ項目
- 内容のエンコードに、サポートされる 1 バイトの EBCDIC コード・ページのいずれかを使用する、ホストの英数字データ項目

エンコードが UTF-16 であるというディスカバリーによっても、コード・ページ情報 CCSID 1202 UTF-16LE (リトル・エンディアン) が提供されます。Unicode は事実上、単一の大きなコード・ページだからです。したがって、パーサーは UTF-16 文書が国別データ項目であることを検出すると、外部コード・ページ情報を無視します。

ただし、基本的な文書エンコードが ASCII または EBCDIC である場合、正しく構文解析するために、パーサーは特定のコード・ページ情報を必要とします。この追加のコード・ページ情報は、文書エンコード宣言または外部コード・ページから取得されます。

文書エンコード宣言 は、XML 宣言のオプション部分で、文書の先頭にあります。(詳細は、コード・ページの指定についての関連タスクを参照してください。)

ASCII XML 文書の 外部コード・ページ (外部 ASCII コード・ページ) は、現行のランタイム・ロケールによって示されるコード・ページです。EBCDIC XML 文書の外部コード・ページ (外部 EBCDIC コード・ページ) は、次のいずれかになります。

- EBCDIC_CODEPAGE 環境変数で指定されたコード・ページ
- EBCDIC_CODEPAGE 環境変数を設定しない場合は、現行のランタイム・ロケールに対して選択されたデフォルトの EBCDIC コード・ページ

最後に、エンコード方式はサポートされるコード・ページのいずれかである必要があります。(詳しくは、以下の関連参照の XML 文書のコード化文字セットに関する説明を参照してください。)

関連タスク

406 ページの『コード・ページの指定』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

『XML 文書のコード化文字セット』

695 ページの『継続を許可する XML PARSE 例外』

700 ページの『継続を許可しない XML PARSE 例外』

XML 文書のコード化文字セット

国別データ項目の文書は、Unicode UTF-16、CCSID 1202 でエンコードする必要があります。

英数字データ項目の XML 文書は、1 バイトの ASCII または EBCDIC コード・ページのいずれかでエンコードする必要があります (後述の、サポートされるロケールおよびコード・ページの表を参照)。ネイティブの英数字データ項目の文書は、ASCII コード・ページでエンコードする必要があります。ホストの英数字データ項目の文書は、EBCDIC コード・ページでエンコードする必要があります。「言語グループ」列 (表の右端の列) に表意文字言語が指定されていないコード・ページは、1 バイトのコード・ページです。XML 文書は、コード・ページ 1208、Unicode UTF-8 でエンコードすることはできません。

これ以外のコード・ページでエンコードされる XML 文書を構文解析するには、最初に NATIONAL-OF 組み込み関数を使用して、文書を国別文字に変換します。特殊レジスター XML-NTEXT で処理プロシージャに渡されるそれぞれの文書テキスト部分は、DISPLAY-OF 組み込み関数を使用して元のコード・ページに変換することができます。

関連タスク

185 ページの『国別 (Unicode) 表現との間の変換』

406 ページの『コード・ページの指定』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

コード・ページの指定

XML 文書を構文解析するためのコード・ページを指定する方法として推奨されるのは、文書からエンコード宣言を省略し、外部コード・ページ情報に依拠することです。

XML 宣言を省略することにより、異機種システム間で XML 文書のやりとりをする際に、伝送プロセスでやむなく発生する変換を反映するためにエンコード宣言を更新する必要がなくなります。

Unicode は實際上、単一の大規模なコード・ページから構成されるため、Unicode XML 文書では追加のコード・ページ情報は不要です。エンコード宣言を持たない ASCII または EBCDIC XML 文書の構文解析に使用されるコード・ページは、ランタイム ASCII または EBCDIC コード・ページです。

XML 宣言には、XML 文書に対するエンコード情報を指定することもできます。大部分の XML 文書は XML 宣言で開始されます。(XML パーサーは、先頭バイトが XML 宣言で開始されていない XML 文書を検出すると例外を生成します。)エンコード宣言を含む XML 宣言の例を以下に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="ibm-1140" ?>
```

エンコード宣言は、以下のいずれかの方法で指定することができます。

- 先行ゼロ付きまたは先行ゼロなしの CCSID 番号に、オプションで接頭部として次のいずれかのストリング (大文字および小文字の混合は自由) を指定します。
 - IBM-
 - IBM_
 - CCSID-
 - CCSID_
- サポートされる次のいずれかの別名を使用します (大文字および小文字の混合は自由)。

表 48. XML エンコード宣言の別名

コード・ページ	サポートされる別名
037	EBCDIC-CP-US、EBCDIC-CP-CA、EBCDIC-CP-WT、EBCDIC-CP-NL
500	EBCDIC-CP-BE、EBCDIC-CP-CH
1202	UTF-16

関連タスク

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

XML パーサーが検出する例外の処理

XML パーサーが XML-CODE に入れて渡す例外コードが特定範囲内にある場合、処理プロシージャを使用して例外イベントを処理できます。

処理プロシージャで例外イベントを処理するには、次の手順に従います。

1. XML-CODE の内容を検査します。
2. 必要に応じて例外を処理します。
3. XML-CODE を、例外が処理されたことを示すゼロに設定します。
4. パーサーに制御を戻します。これにより、例外条件がなくなります。

このような方法で例外を処理できるのは、XML-CODE に入れて渡される例外コードが以下の範囲の 1 つに含まれる場合 (エンコードの矛盾が検出されたことを示します) のみです。

- 50-99
- 100,001 から 165,535
- 200,001 から 265,535

XML-CODE に渡される例外コードが 1 から 49 の範囲内にある例外に対して、限られた例外処理を行うことができます。この範囲内の例外が発生した後、パーサーは、戻る前に XML-CODE がゼロに設定されている場合でも、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、それ以上標準イベントをシグナル通知しません。XML-CODE をゼロに設定した場合、パーサーは文書の構文解析を続行し、検出した例外をシグナル通知します (これは、文書内で複数のエラーを発見する方法として有効です。) この範囲の例外発生後の構文解析の終了時に、ON EXCEPTION 句に指定されたステートメントがあればこれに制御が渡され、そうでなければ、XML PARSE ステートメントの終わりに制御が渡されます。特殊レジスター XML-CODE には、パーサーが検出した最新の例外のコードが格納されます。

この他の例外では、パーサーは追加のイベントをシグナル通知せず、ON EXCEPTION 句に指定されているステートメントに制御を渡します。この場合、処理プロシージャがパーサーに制御を戻す前に XML-CODE をゼロに設定したとしても、XML-CODE には元の例外番号が設定されます。

例外を処理する必要がない場合は、XML-CODE の値を変更しないでパーサーに制御を戻します。パーサーは、ON EXCEPTION 句で指定されたステートメントに制御権を移動します。ON EXCEPTION 句がコーディングされていない場合、制御は XML PARSE ステートメントの終わりに移動します。

XML-CODE の値を元の例外コード以外の非ゼロ値に設定してパーサーに制御を戻した場合、結果は保証されません。

構文解析の終了時点までに未処理の例外がなかった場合は、NOT ON EXCEPTION 句に指定されたステートメントに制御が渡されます (構文解析の正常終了)。NOT ON EXCEPTION 句をコーディングしなかった場合、制御は XML PARSE ステートメントの終わりに渡されます。特殊レジスター XML-CODE はゼロに設定されます。

関連概念

『XML パーサーによるエラーの処理方法』

400 ページの『XML-CODE の内容』

関連タスク

396 ページの『XML を処理するためのプロシーチャーの作成』

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』

410 ページの『コード・ページの矛盾の処理』

関連参照

695 ページの『継続を許可する XML PARSE 例外』

700 ページの『継続を許可しない XML PARSE 例外』

XML-CODE (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML パーサーによるエラーの処理方法

XML 文書の中にエラーがあるのを検出すると、XML パーサーは XML 例外イベントを生成し、制御を処理プロシーチャーに渡します。

パーサーは、以下の情報を特殊レジスターに入れて提供します。



- XML-EVENT に 'EXCEPTION' が設定されている。
- XML-CODE に数値の例外コードが設定されている。
- XML-TEXT (英数字データ項目の XML 文書の場合) または XML-NTEXT (国別データ項目の XML 文書の場合) には、例外が検出された箇所を含むそれ以前の文書テキストが含まれます。

数値の例外コードが以下のいずれかの範囲にある場合は、処理プロシーチャー内で例外を処理し、構文解析を続けることができます。

- 1-99
- 100,001 から 165,535
- 200,001 から 265,535

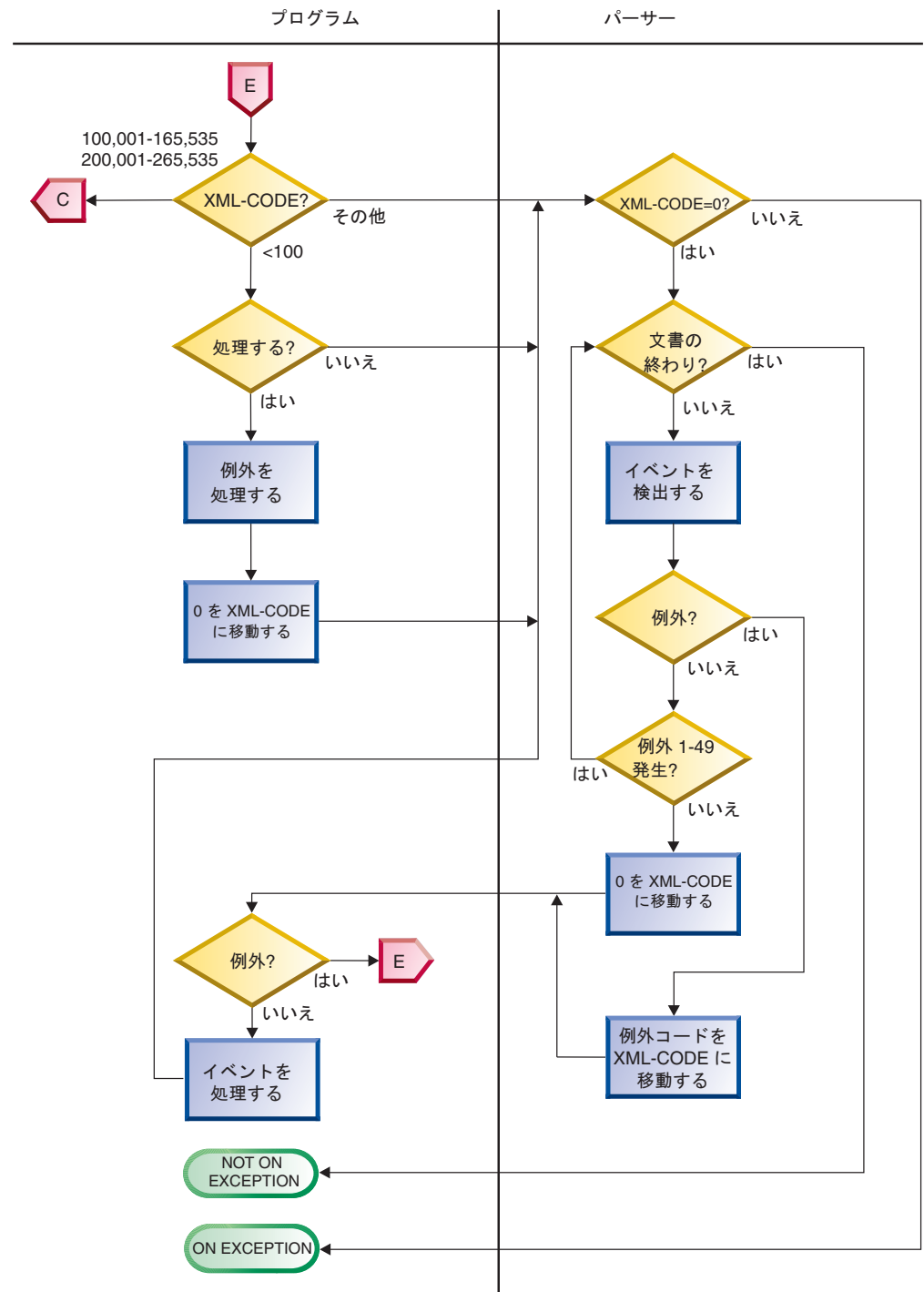
例外コードがその他のゼロ以外の値である場合は、構文解析を続けることはできません。エンコード方式の矛盾の例外 (50 から 99 および 300 から 399) は、文書の構文解析が開始される前にシグナル通知されます。このような例外の場合、XML-TEXT (または XML-NTEXT) は長さがゼロになるか、文書のエンコード宣言値のみが入ります。

1 から 49 の範囲の例外は XML 仕様に基づく致命的エラーです。したがって、ユーザーが例外を処理しても、パーサーは通常の構文解析を続けることはできません。ただし、パーサーでは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーが検出されるまで、その他のエラーの走査を続けます。このような例外の場合、パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベント以外については、追加の標準イベントをシグナル通知しません。

次の図では、パーサーと処理プロシーチャーの間の制御フローをわかりやすく示しています。この図は、特定の例外の処理方法および XML-CODE を使用した例外の識別方法を示しています。別ページへの接続記号 (例えば、) は、この情報によって複数のチャートを接続します。特に、 チャート 410 ページの『XML CCSID

例外のフロー制御』に結合します。この図で、**E** および **U** の両方とも、別ページおよびページ内への接続記号の働きをしています。

XML 例外の制御フロー



関連タスク

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』
『コード・ページの矛盾の処理』
412 ページの『XML 構文解析の終了』

関連参照

695 ページの『継続を許可する XML PARSE 例外』
700 ページの『継続を許可しない XML PARSE 例外』
XML-CODE (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)




コード・ページの矛盾の処理

文書の項目が英数字で XML-CODE の例外コードが 100,001 から 165,535 または 200,001 から 265,535 である場合の例外イベントは、(エンコード宣言で指定された) 文書のコード・ページが、外部コード・ページ情報と矛盾していることを示しています。

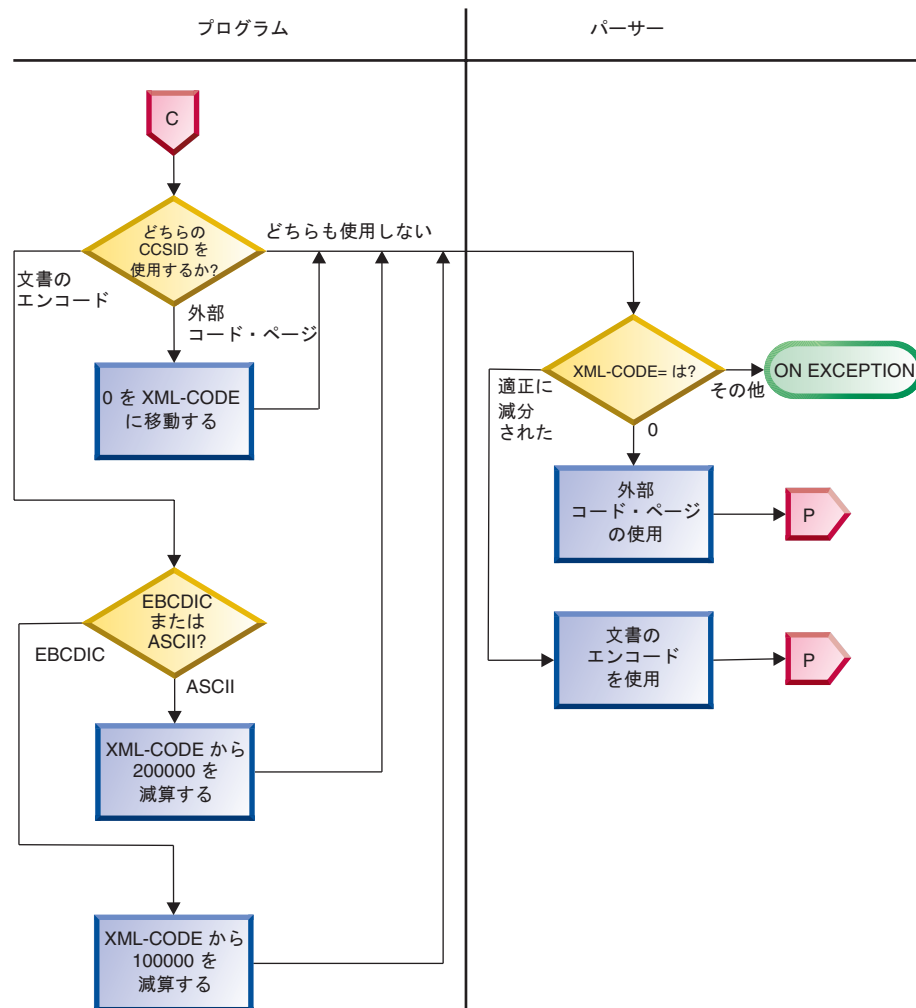
この特別な場合には、XML-CODE の値から 100,000 (EBCDIC コード・ページの場合) または 200,000 (ASCII コード・ページの場合) を減算した値を文書のコード・ページに指定して、構文解析を行うこともできます。例えば、XML-CODE が 101,140 に設定されている場合、文書のコード・ページは 1140 です。別の方法では、パーサーに戻る前に XML-CODE をゼロに設定して、外部コード・ページを使用して構文解析することもできます。

パーサーは、コード・ページ矛盾の例外イベント用の処理プロシーチャーから戻ると、以下の 3 つの処置のいずれかをとります。

- XML-CODE をゼロ値に設定すると、パーサーは、外部 ASCII コード・ページ (文書のデータ項目がネイティブの英数字項目の場合) または外部 EBCDIC コード・ページ (文書のデータ項目がホストの英数字項目の場合) を使用します。
- XML-CODE に文書のコード・ページ (すなわち、元の XML-CODE 値から 100,000 または 200,000 を減算した値) を設定すると、パーサーは文書のコード・ページを使用します。処理プロシーチャーからの戻り時に XML-CODE が非ゼロ値に設定されていたとき、パーサーが処理を続けるのはこのケースに該当する場合だけです。
- それ以外の場合、パーサーは文書の処理を停止し、例外条件とともに制御を XML PARSE ステートメントに戻します。XML-CODE は、当初に例外イベントへ渡された例外コードに設定されます。

次の図は、これらの処置を示しています。別ページへの接続記号 (例えば、) は、この情報によって複数のチャートを接続します。特に、 次の図で 401 ページの『XML-CODE の使用法を示す、XML パーサーとプログラムの間の制御フロー』に結合し、 409 ページの『XML 例外の制御フロー』から結合されています。

XML CCSID 例外のフロー制御



この図では、*CCSID* (コード化文字セット ID) は、コード・ページを示す 1 から 65,536 の値をとります。

関連概念

408 ページの『XML パーサーによるエラーの処理方法』

関連タスク

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』

関連参照

695 ページの『継続を許可する XML PARSE 例外』

700 ページの『継続を許可しない XML PARSE 例外』

XML-CODE (『*COBOL for Windows* 言語解説書」)

XML 構文解析の終了

処理プロシージャで XML-CODE を -1 に設定すると、標準の XML イベント (つまり、EXCEPTION 以外のイベント) からパーサーに戻る前に、構文解析を意図的に終了することができます。この技法は、文書を十分に確認済みである場合、あるいは文書に何らかの不規則性があるためにそれ以上処理を続けても意味がないことがわかった場合に使用します。

この場合、例外条件が存在しても、パーサーは追加のイベントをシグナル通知しません。したがって、ON EXCEPTION 句が指定されている場合は、この句に制御が戻ります。ON EXCEPTION 句の命令ステートメントでは、XML-CODE が -1 であるかどうかを検査できます。これは、ユーザーが意図的に構文解析を終了したことを示します。ON EXCEPTION 句が指定されていない場合、制御は XML PARSE ステートメントの終わりに戻ります。

XML 例外イベント後にも、XML-CODE を変更せずにパーサーに戻ることにより、構文解析を終了できます。この場合、結果は意図的に終了した場合と似ていますが、XML-CODE が例外番号に設定された状態でパーサーが XML PARSE ステートメントに戻る点が異なります。

関連概念

408 ページの『XML パーサーによるエラーの処理方法』

関連タスク

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』

関連参照

XML-CODE (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

第 23 章 XML 出力の生成

XML GENERATE ステートメントを使用して、COBOL プログラムから XML 出力を生成させることができます。XML GENERATE ステートメントでは、生成された XML 出力の文字数のカウントを受け取るフィールドや、例外が発生した場合に制御を受け取るステートメントも指定できます。

XML 出力を生成するには、次のようにします。

- XML GENERATE ステートメントを使用して、ソースおよびターゲットのデータ項目、カウント・フィールド、および ON EXCEPTION ステートメントを識別します。
- 特殊レジスター XML-CODE を使用して、XML 生成の状況を判別します。

COBOL データ項目を XML に変換した結果として生成される XML 出力は、Web サービスにデプロイメントする、ファイルへ書き込む、パラメーターとして別のプログラムへ渡すなど、さまざまな用途に利用することができます。

関連タスク

『XML 出力の生成』

419 ページの『XML 出力の拡張』

424 ページの『生成される XML 出力のエンコードの制御』

424 ページの『XML 出力生成時のエラーの処理』

XML 出力の生成

COBOL データを XML に変換するには、XML GENERATE ステートメントを使用してください。

```
XML GENERATE XML-OUTPUT FROM SOURCE-REC
COUNT IN XML-CHAR-COUNT
ON EXCEPTION
  DISPLAY 'XML generation error ' XML-CODE
  STOP RUN
NOT ON EXCEPTION
  DISPLAY 'XML document was successfully generated.'
END-XML
```

XML GENERATE ステートメントでは、XML 出力を受け取るデータ項目（上の例では XML-OUTPUT）をまず識別します。データ項目は、生成された XML 出力を格納できる十分な大きさに定義します。通常、データ名の長さに応じて、COBOL ソース・データ・サイズの 5 倍から 8 倍に定義します。

DATA DIVISION では、受信 ID を、英数字（英数字グループ項目またはカテゴリー英数字の基本項目のどちらか）として、あるいは国別（国別グループ項目またはカテゴリー国別の基本項目のどちらか）として宣言できます。

外部コード・ページがマルチバイト・コード・ページの場合、あるいは以下の特性のいずれかを持つ COBOL ソース・レコードからのデータが XML 出力に含まれることになる場合、受信 ID は国別でなければなりません。

- クラス国別またはクラス DBCS です。
- マルチバイト名を持っている (すなわち、名前にマルチバイト文字を含むデータ項目)
- マルチバイト文字を含む英数字項目である

受信データ項目が英数字の場合、コンパイル時ロケールおよび実行時ロケールによって示されたコード・ページが同一でなければなりません。

次に、XML フォーマットに変換されるソース・データ項目 (この例では SOURCE-REC) を識別します。ソース・データ項目は、英数字グループ項目、国別グループ項目、あるいはクラス英数字または国別の基本データ項目にすることができます。このデータ項目のデータ記述の中に RENAME 文節を指定しないでください。

ソース・データ項目が英数字グループ項目または国別グループ項目である場合、ソース・データ項目は、基本項目としてではなく、グループ・セマンティクスで処理されます。ソース・データ項目に従属するグループもすべてグループ・セマンティクスで処理されます。

COBOL データ項目の中には、XML に変換されず無視されるものがあります。XML に変換する英数字グループ項目または国別グループ項目の従属データ項目は、次のような場合は無視されます。

- REDEFINES 文節を指定しているか、またはそのような再定義項目に従属しているもの。
- RENAME 文節を指定しているもの。

ソース・データ項目の中の次のような項目も、XML の生成時に無視されます。

- 基本 FILLER (または名前なしの) データ項目
- SYNCHRONIZED データ項目で挿入されている遊びバイト

XML 生成時に無視されない少なくとも 1 つの基本データ項目がなければなりません。無視されないデータに関しては、DATA DIVISION 内で宣言する際に、XML に変換される ID が次の条件を満たすようにしてください。

- それぞれの基本データ項目は、指標データ項目であるか、または次のクラスの 1 つに属しています。
 - 英字
 - 英数字
 - DBCS
 - 数値
 - 国別文字

すなわち、基本項目には、USAGE POINTER、USAGE FUNCTION-POINTER、USAGE PROCEDURE-POINTER、または USAGE OBJECT REFERENCE 句のいずれも記述されていません。

- FILLER 以外のそれぞれのデータ名は、直接の収容グループ内において固有です (それがあある場合)。

- マルチバイト・データ名は、Unicode に変換されたとき、XML 仕様バージョン 1.0 に準拠した名前となる。
- データ項目 (1 つまたは複数) は DATE FORMAT 文節を指定していないか、あるいは DATEPROC コンパイラ・オプションが有効ではありません。

XML 宣言は生成されません。XML を読みやすくするために空白文字 (例えば、改行または字下げ) が挿入されることはありません。

必要に応じて、COUNT IN 句をコーディングして、XML 出力の生成時に充てんされる XML 文字位置の数を取得できます。カウント・フィールドは、PICTURE スtring内に記号 P を持たない整数データ項目として宣言します。カウント・フィールドおよび参照変更を使用して、生成された XML 出力を含む受け取りデータ項目の一部のみを取得できます。例えば、XML-OUTPUT(1:XML-CHAR-COUNT) は、XML-OUTPUT の最初の XML-CHAR-COUNT 文字位置を参照します。

さらに、XML 文書の生成後に制御を受け取るために、以下の句のいずれかまたは両方を指定できます。

- ON EXCEPTION. XML 生成時にエラーが発生したときに制御を受け取る場合。
- NOT ON EXCEPTION. エラーが発生しなかったときに制御を受け取る場合。

XML GENERATE ステートメントを終了するには、明示範囲終了符号の END-XML を使用します。条件ステートメントで ON EXCEPTION または NOT ON EXCEPTION 句を指定している XML GENERATE ステートメントをネストするには、END-XML をコーディングします。

XML への COBOL ソース・レコードの変換が完了するか、またはエラーが発生するまで、XML 生成は継続します。エラーが発生した場合、結果は次のようになります。

- 特殊レジスタ XML-CODE にゼロ以外の例外コードが入ります。
- ON EXCEPTION 句が指定されている場合、これに制御が渡されます。指定されていない場合は、XML GENERATE ステートメントの最後に制御が渡されます。

XML 生成時にエラーが発生しなかった場合、特殊レジスタ XML-CODE にはゼロが入り、制御は、NOT ON EXCEPTION 句が指定されている場合はこの句に、指定されていない場合は XML GENERATE ステートメントの最後に渡されます。

416 ページの『例: XML の生成』

関連タスク

424 ページの『生成される XML 出力のエンコードの制御』

424 ページの『XML 出力生成時のエラーの処理』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

データのクラスおよびカテゴリ (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

XML GENERATE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

XML GENERATE の操作 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

Extensible Markup Language (XML)

例: XML の生成

以下の例は、グループ・データ項目での購入注文の作成をシミュレートし、その購入注文の XML 版を生成します。

プログラム XGFX は XML GENERATE を使用して、ソース・レコードであるグループ・データ項目 purchaseOrder から基本データ項目 xmlPO に XML 出力を生成します。ソース・レコード内の基本データ項目は、必要に応じて文字形式に変換され、変換された文字は、ソース・レコードのデータ名から派生した名前を持つ XML エlement に挿入されます。

XGFX はプログラム Pretty を呼び出します。このプログラムは、処理プロシージャ p を指定した XML PARSE ステートメントを使用しており、XML の内容を一層容易に検査できるよう改行とインデントを含んだ XML 出力をフォーマット設定するようになっています。

プログラム XGFX

```
Identification division.
  Program-id. XGFX.
Data division.
  Working-storage section.
    01 numItems pic 99 global.
    01 purchaseOrder global.
      05 orderDate pic x(10).
      05 shipTo.
        10 country pic xx value 'US'.
        10 name pic x(30).
        10 street pic x(30).
        10 city pic x(30).
        10 state pic xx.
        10 zip pic x(10).
      05 billTo.
        10 country pic xx value 'US'.
        10 name pic x(30).
        10 street pic x(30).
        10 city pic x(30).
        10 state pic xx.
        10 zip pic x(10).
      05 orderComment pic x(80).
      05 items occurs 0 to 20 times depending on numItems.
        10 item.
          15 partNum pic x(6).
          15 productName pic x(50).
          15 quantity pic 99.
          15 USPrice pic 999v99.
          15 shipDate pic x(10).
          15 itemComment pic x(40).
    01 numChars comp pic 999.
    01 xmlPO pic x(999).
Procedure division.
  m.
    Move 20 to numItems
    Move spaces to purchaseOrder

    Move '1999-10-20' to orderDate

    Move 'US' to country of shipTo
    Move 'Alice Smith' to name of shipTo
    Move '123 Maple Street' to street of shipTo
    Move 'Mill Valley' to city of shipTo
    Move 'CA' to state of shipTo
    Move '90952' to zip of shipTo
```

```

Move 'US' to country of billTo
Move 'Robert Smith' to name of billTo
Move '8 Oak Avenue' to street of billTo
Move 'Old Town' to city of billTo
Move 'PA' to state of billTo
Move '95819' to zip of billTo
Move 'Hurry, my lawn is going wild!' to orderComment

Move 0 to numItems
Call 'addFirstItem'
Call 'addSecondItem'
Move space to xmlPO
Xml generate xmlPO from purchaseOrder count in numChars
Call 'pretty' using xmlPO value numChars
Goback
.

Identification division.
  Program-id. 'addFirstItem'.
Procedure division.
  Add 1 to numItems
  Move '872-AA' to partNum(numItems)
  Move 'Lawnmower' to productName(numItems)
  Move 1 to quantity(numItems)
  Move 148.95 to USPrice(numItems)
  Move 'Confirm this is electric' to itemComment(numItems)
  Goback.
End program 'addFirstItem'.

Identification division.
  Program-id. 'addSecondItem'.
Procedure division.
  Add 1 to numItems
  Move '926-AA' to partNum(numItems)
  Move 'Baby Monitor' to productName(numItems)
  Move 1 to quantity(numItems)
  Move 39.98 to USPrice(numItems)
  Move '1999-05-21' to shipDate(numItems)
  Goback.
End program 'addSecondItem'.

End program XGFX.

```

プログラム Pretty

```

Identification division.
  Program-id. Pretty.
Data division.
  Working-storage section.
    01 prettyPrint.
      05 pose pic 999.
      05 posd pic 999.
      05 depth pic 99.
      05 element pic x(30).
      05 indent pic x(20).
      05 buffer pic x(100).
  Linkage section.
    1 doc.
    2 pic x occurs 16384 times depending on len.
    1 len comp-5 pic 9(9).
Procedure division using doc value len.
  m.
    Move space to prettyPrint
    Move 0 to depth posd
    Move 1 to pose
    Xml parse doc processing procedure p

```

```

Goback.
p.
  Evaluate xml-event
  When 'START-OF-ELEMENT'
    If element not = space
      If depth > 1
        Display indent(1:2 * depth - 2) buffer(1:pose - 1)
      Else
        Display buffer(1:pose - 1)
      End-if
    End-if
    Move xml-text to element
    Add 1 to depth
    Move 1 to pose
    String '<' xml-text '>' delimited by size into buffer
      with pointer pose
    Move pose to posd
    When 'CONTENT-CHARACTERS'
      String xml-text delimited by size into buffer
        with pointer posd
    When 'CONTENT-CHARACTER'
      String xml-text delimited by size into buffer
        with pointer posd
    When 'END-OF-ELEMENT'
      Move space to element
      String '</' xml-text '>' delimited by size into buffer
        with pointer posd
      If depth > 1
        Display indent(1:2 * depth - 2) buffer(1:posd - 1)
      Else
        Display buffer(1:posd - 1)
      End-if
      Subtract 1 from depth
      Move 1 to posd
    When other
      Continue
  End-evaluate
.
End program Pretty.

```

プログラム XGFX からの出力

```

<purchaseOrder>
  <orderDate>1999-10-20</orderDate>
  <shipTo>
    <country>US</country>
    <name>Alice Smith</name>
    <street>123 Maple Street</street>
    <city>Mill Valley</city>
    <state>CA</state>
    <zip>90952</zip>
  </shipTo>
  <billTo>
    <country>US</country>
    <name>Robert Smith</name>
    <street>8 Oak Avenue</street>
    <city>Old Town</city>
    <state>PA</state>
    <zip>95819</zip>
  </billTo>
  <orderComment>Hurry, my lawn is going wild!</orderComment>
  <items>
    <item>
      <partNum>872-AA</partNum>
      <productName>Lawnmower</productName>
      <quantity>1</quantity>
      <USPrice>148.95</USPrice>
    </item>
  </items>
</purchaseOrder>

```

```

        <shipDate> </shipDate>
        <itemComment>Confirm this is electric</itemComment>
    </item>
</items>
<items>
    <item>
        <partNum>926-AA</partNum>
        <productName>Baby Monitor</productName>
        <quantity>1</quantity>
        <USPrice>39.98</USPrice>
        <shipDate>1999-05-21</shipDate>
        <itemComment> </itemComment>
    </item>
</items>
</purchaseOrder>

```

関連タスク

387 ページの『第 22 章 XML 入力の処理』

関連参照

XML GENERATE の操作 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML 出力の拡張

XML フォーマットで表したい情報がすでに DATA DIVISION のグループ項目に存在しているが、1 つ以上の要因のためその項目を使用して XML 文書を直接生成できないような状況が、ときとして生じることがあります。

以下に、その例を示します。

- 必要データのほかに、項目には、XML 出力文書とは無関係な値を含んでいる従属データ項目が含まれています。
- 必要データ項目の名前が、外部表示には不適当なものであり、プログラマーにしか意味のないものである可能性があります。
- データ定義が必要なデータ型ではありません。再定義 (XML GENERATE ステートメントでは無視されます) のみが適切なフォーマットになっていると思われます。
- 無関係な従属グループ内で必要データ項目があまりに深くネストされています。XML 出力は、階層ではなく、デフォルトで行われるように「平ら」にする必要があります。
- 必要データ項目があまりに多くのコンポーネントに分割されており、収容グループの内容として出力する必要があります。
- グループ項目は必要情報を含んでいますが、順序が正しくありません。

こうした状態を取り扱うことのできるさまざまな方法があります。1 つの手法として考えられるのは、適切な特性を持つデータ項目を新しく定義し、作成した新しいデータ項目の適切なフィールドに必要なデータを移動することです。しかし、この手法は多少面倒な作業で、元のデータ項目と新しいデータ項目の同期を維持するため注意深い保守作業が必要となります。

幾つかの利点のある代替方法として、元のグループ・データ項目の再定義を準備し、その再定義から XML 出力を生成するという方法があります。このためには、元のデータ記述セットを出発点にして、以下の変更を行ってください。

- 基本データ項目の名前を FILLER に変更するか、またはそれらの名前を削除することにより、生成された XML から基本データ項目を除外します。
- 選択された基本項目およびそれらの基本項目を含んでいるグループ項目に、もっと意味のある適切な名前を付けます。
- 不要な中間グループ項目を除去して、階層を平らにします。
- 種々のデータ型を指定して、必要なトリミング動作が行われるようにします。
- 一連の XML GENERATE ステートメントを使用して、異なった出力順序を選択します。

上記の変更を最も安全に行うには、1 つ以上の REPLACE コンパイラ指示ステートメントを伴う元の宣言の別のコピーを使用します。

『例: XML 出力の拡張』

XML 文書を生成する際に、エレメント名およびエレメント値の中にハイフンを含んでいるものがあります。エレメント値に含まれるハイフンはそのままにして、エレメント名のハイフンを下線に変換したいこともあります。以下に示す例は、その方法を示しています。

423 ページの『例: エレメント名のハイフンを下線に変換する』

関連参照

XML GENERATE の操作 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: XML 出力の拡張

次の例は、XML 出力を向上させる方法を示しています。

以下のデータ構造について考慮してください。構造から生成される XML には、訂正可能な幾つかの問題が含まれています。

```

01 CDR-LIFE-BASE-VALUES-BOX.
   15 CDR-LIFE-BASE-VAL-DATE    PIC X(08).
   15 CDR-LIFE-BASE-VALUE-LINE  OCCURS 2 TIMES.
      20 CDR-LIFE-BASE-DESC.
         25 CDR-LIFE-BASE-DESC1 PIC X(15).
         25 FILLER              PIC X(01).
         25 CDR-LIFE-BASE-LIT   PIC X(08).
         25 CDR-LIFE-BASE-DTE   PIC X(08).
      20 CDR-LIFE-BASE-PRICE.
         25 CDR-LIFE-BP-SPACE   PIC X(02).
         25 CDR-LIFE-BP-DASH    PIC X(02).
         25 CDR-LIFE-BP-SPACE1  PIC X(02).
      20 CDR-LIFE-BASE-PRICE-ED  REDEFINES
         CDR-LIFE-BASE-PRICE    PIC $$$.$$.
      20 CDR-LIFE-BASE-QTY.
         25 CDR-LIFE-QTY-SPACE  PIC X(08).
         25 CDR-LIFE-QTY-DASH   PIC X(02).
         25 CDR-LIFE-QTY-SPACE1 PIC X(02).
         25 FILLER              PIC X(02).
      20 CDR-LIFE-BASE-QTY-ED    REDEFINES
         CDR-LIFE-BASE-QTY      PIC ZZ,ZZZ,ZZZ.ZZZ.
      20 CDR-LIFE-BASE-VALUE     PIC X(15).
      20 CDR-LIFE-BASE-VALUE-ED  REDEFINES
         CDR-LIFE-BASE-VALUE
                                PIC $(4),$$,$$9.99.
   15 CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE-LINE.
      20 CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE PIC X(15).

```

このデータ構造に幾つかのサンプル値を取り込み、XML をそれから直接生成し、その後プログラム Pretty (416 ページの『例: XML の生成』に示されています) を使用してフォーマット設定すると、結果は次のようになります。

```
<CDR-LIFE-BASE-VALUES-BOX>
  <CDR-LIFE-BASE-VAL-DATE>01/02/03</CDR-LIFE-BASE-VAL-DATE>
  <CDR-LIFE-BASE-VALUE-LINE>
    <CDR-LIFE-BASE-DESC>
      <CDR-LIFE-BASE-DESC1>First</CDR-LIFE-BASE-DESC1>
      <CDR-LIFE-BASE-LIT> </CDR-LIFE-BASE-LIT>
      <CDR-LIFE-BASE-DTE>01/01/01</CDR-LIFE-BASE-DTE>
    </CDR-LIFE-BASE-DESC>
    <CDR-LIFE-BASE-PRICE>
      <CDR-LIFE-BP-SPACE>$2</CDR-LIFE-BP-SPACE>
      <CDR-LIFE-BP-DASH>3.</CDR-LIFE-BP-DASH>
      <CDR-LIFE-BP-SPACE1>00</CDR-LIFE-BP-SPACE1>
    </CDR-LIFE-BASE-PRICE>
    <CDR-LIFE-BASE-QTY>
      <CDR-LIFE-QTY-SPACE>1</CDR-LIFE-QTY-SPACE>
      <CDR-LIFE-QTY-DASH>23</CDR-LIFE-QTY-DASH>
      <CDR-LIFE-QTY-SPACE1>.0</CDR-LIFE-QTY-SPACE1>
    </CDR-LIFE-BASE-QTY>
    <CDR-LIFE-BASE-VALUE> $765.00</CDR-LIFE-BASE-VALUE>
  </CDR-LIFE-BASE-VALUE-LINE>
  <CDR-LIFE-BASE-VALUE-LINE>
    <CDR-LIFE-BASE-DESC>
      <CDR-LIFE-BASE-DESC1>Second</CDR-LIFE-BASE-DESC1>
      <CDR-LIFE-BASE-LIT> </CDR-LIFE-BASE-LIT>
      <CDR-LIFE-BASE-DTE>02/02/02</CDR-LIFE-BASE-DTE>
    </CDR-LIFE-BASE-DESC>
    <CDR-LIFE-BASE-PRICE>
      <CDR-LIFE-BP-SPACE>$3</CDR-LIFE-BP-SPACE>
      <CDR-LIFE-BP-DASH>4.</CDR-LIFE-BP-DASH>
      <CDR-LIFE-BP-SPACE1>00</CDR-LIFE-BP-SPACE1>
    </CDR-LIFE-BASE-PRICE>
    <CDR-LIFE-BASE-QTY>
      <CDR-LIFE-QTY-SPACE>2</CDR-LIFE-QTY-SPACE>
      <CDR-LIFE-QTY-DASH>34</CDR-LIFE-QTY-DASH>
      <CDR-LIFE-QTY-SPACE1>.0</CDR-LIFE-QTY-SPACE1>
    </CDR-LIFE-BASE-QTY>
    <CDR-LIFE-BASE-VALUE> $654.00</CDR-LIFE-BASE-VALUE>
  </CDR-LIFE-BASE-VALUE-LINE>
  <CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE-LINE>
    <CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE>Very high!</CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE>
  </CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE-LINE>
</CDR-LIFE-BASE-VALUES-BOX>
```

生成されたこの XML には幾つかの問題があります。

- エレメント名が長く、あまり意味のあるものではありません。
- 不要なデータ、例えば、CDR-LIFE-BASE-LIT や CDR-LIFE-BASE-DTE があります。
- 必要データに、不必要な親があります。例えば、CDR-LIFE-BASE-DESC1 には親の CDR-LIFE-BASE-DESC があります。
- 他の必須フィールドが、あまりに多くのサブコンポーネントに分割されています。例えば、CDR-LIFE-BASE-PRICE には、1 つの金額に対して 3 つのサブコンポーネントがあります。

XML 出力のこのような特性は、ストレージを次のように再定義することにより修正できます。

- 1 BaseValues redefines CDR-LIFE-BASE-VALUES-BOX.
- 2 BaseValueDate pic x(8).
- 2 BaseValueLine occurs 2 times.

```

3 Description pic x(15).
3 pic x(9).
3 BaseDate pic x(8).
3 BasePrice pic x(6) justified.
3 BaseQuantity pic x(14) justified.
3 BaseValue pic x(15) justified.
2 TotalValue pic x(15).

```

上記のデータ値の定義のセットから XML を生成してフォーマット設定した結果は、一層便利なものになっています。

```

<BaseValues>
  <BaseValueDate>01/02/03</BaseValueDate>
  <BaseValueLine>
    <Description>First</Description>
    <BaseDate>01/01/01</BaseDate>
    <BasePrice>$23.00</BasePrice>
    <BaseQuantity>123.000</BaseQuantity>
    <BaseValue>$765.00</BaseValue>
  </BaseValueLine>
  <BaseValueLine>
    <Description>Second</Description>
    <BaseDate>02/02/02</BaseDate>
    <BasePrice>$34.00</BasePrice>
    <BaseQuantity>234.000</BaseQuantity>
    <BaseValue>$654.00</BaseValue>
  </BaseValueLine>
  <TotalValue>Very high!</TotalValue>
</BaseValues>

```

上に示すように、元のデータ定義を直接再定義できます。一般に、元の定義は使用しますが、コンパイラのテキスト操作機能を使用して、元の定義を適宜に変更する方がより安全です。その例を、以下の REPLACE コンパイラ指示ステートメントで示します。この REPLACE ステートメントは複雑に見えますが、元のデータ定義が変更されると、自己保持するという利点があります。

```

replace ==CDR-LIFE-BASE-VALUES-BOX== by
    ==BaseValues redefines CDR-LIFE-BASE-VALUES-BOX==
    ==CDR-LIFE-BASE-VAL-DATE== by ==BaseValueDate==
    ==CDR-LIFE-BASE-VALUE-LINE== by ==BaseValueLine==
    ==20 CDR-LIFE-BASE-DESC.== by ====
    ==CDR-LIFE-BASE-DESC1== by ==Description==
    ==CDR-LIFE-BASE-LIT== by ====
    ==CDR-LIFE-BASE-DTE== by ==BaseDate==
    ==20 CDR-LIFE-BASE-PRICE.== by ====
    ==25 CDR-LIFE-BP-SPACE PIC X(02).== by ====
    ==25 CDR-LIFE-BP-DASH PIC X(02).== by ====
    ==25 CDR-LIFE-BP-SPACE1 PIC X(02).== by ====
    ==CDR-LIFE-BASE-PRICE-ED== by ==BasePrice==
    ==REDEFINES CDR-LIFE-BASE-PRICE PIC $$$.$$.== by
    ==pic x(6) justified.==
    ==20 CDR-LIFE-BASE-QTY.
    25 CDR-LIFE-QTY-SPACE PIC X(08).
    25 CDR-LIFE-QTY-DASH PIC X(02).
    25 CDR-LIFE-QTY-SPACE1 PIC X(02).
    25 FILLER PIC X(02).== by ====
    ==CDR-LIFE-BASE-QTY-ED== by ==BaseQuantity==
    ==REDEFINES CDR-LIFE-BASE-QTY PIC ZZ,ZZZ,ZZZ.ZZZ.== by
    ==pic x(14) justified.==
    ==CDR-LIFE-BASE-VALUE-ED== by ==BaseValue==
    ==20 CDR-LIFE-BASE-VALUE PIC X(15).== by ====
    ==REDEFINES CDR-LIFE-BASE-VALUE PIC $(4),$$,$$9.99.==
    by ==pic x(15) justified.==
    ==CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE-LINE. 20== by ====
    ==CDR-LIFE-BASE-TOT-VALUE== by ==TotalValue==.

```

元の定義セットの 2 番目のインスタンスが後に続いているこの REPLACE ステートメントの結果は、上に示されているグループ項目 BaseValues の推奨再定義と似ています。この REPLACE ステートメントは、不要な定義を除去し、保持すべき定義の変更を行うさまざまな手法の例を示しています。それぞれの状況に適したいずれかの手法をご利用ください。

関連参照

XML GENERATE の操作 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

REPLACE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: エレメント名のハイフンを下線に変換する

ハイフンを含んでいるデータ名を持つ項目のあるデータ構造から XML 文書を生成すると、生成された XML にはハイフンを含んでいるエレメント名が含まれることになります。この例は、エレメント値にハイフンが含まれる場合それをそのままにして、エレメント名のハイフンを変換する方法を示しています。

```
1 Customer-Record.  
2 Customer-Number pic 9(9).  
2 First-Name      pic x(10).  
2 Last-Name       pic x(20).
```

上のデータ構造にいくつかのサンプル値を取り込み、XML をそれから直接生成し、その後プログラム Pretty (416 ページの『例: XML の生成』に示されています) を使用してフォーマット設定すると、結果は次のようになります。

```
<Customer-Record>  
  <Customer-Number>12345</Customer-Number>  
  <First-Name>John</First-Name>  
  <Last-Name>Smith-Jones</Last-Name>  
</Customer-Record>
```

エレメント名はハイフンを含み、エレメント Last-Name の内容もハイフンを含んでいます。

この XML 文書がデータ項目 xmldoc の内容であり、charcnt がこの XML 文書の長さに設定されていると想定した場合、以下のコードを使用することにより、エレメント名の中のすべてのハイフンを下線に変更し、エレメント値は未変更のままにすることができます。

```
1 xmldoc      pic x(16384).  
1 charcnt    comp-5 pic 9(5).  
1 pos        comp-5 pic 9(5).  
1 tagstate   comp-5 pic 9  value zero.  
...  
dash-to-underscore.  
  perform varying pos from 1 by 1  
    until pos > charcnt  
    if xmldoc(pos:1) = '<'  
      move 1 to tagstate  
    end-if  
    if tagstate = 1 and xmldoc(pos:1) = '-'  
      move '_' to xmldoc(pos:1)  
    else  
      if xmldoc(pos:1) = '>'  
        move 0 to tagstate  
      end-if  
    end-if  
  end-perform.
```

データ項目 `xmlDoc` 内の改訂された XML 文書には、以下に示すようにエレメント名の中にハイフンの代わりに下線があります。

```
<Customer_Record>
  <Customer_Number>12345</Customer_Number>
  <First_Name>John</First_Name>
  <Last_Name>Smith-Jones</Last_Name>
</Customer_Record>
```

生成される XML 出力のエンコードの制御

XML GENERATE ステートメントを使用して XML 出力を生成する場合、XML 出力を受け取るデータ項目のカテゴリによって出力のエンコードを制御することができます。

表 49. 生成された XML 出力のエンコード

受信 XML ID の定義	生成される XML 出力のエンコード
ネイティブ英数字	有効なロケールによって示されるコード・ページ
ホスト英数字	有効な EBCDIC コード・ページ ²
国別文字	UTF-16 リトル・エンディアン (UTF-16LE、CCSID 1202) ¹
1. バイト・オーダー・マーク は生成されません。 2. コード・ページを設定するには、EBCDIC_CODEPAGE 環境変数を使用します。この環境変数が設定されていない場合は、現行のロケールと関連付けられた、デフォルトの EBCDIC コード・ページでエンコードが行われます。	

データ項目が XML へ変換される方法および XML エレメント名が COBOL データ名から形成される方法に関する詳細については、XML GENERATE ステートメントの操作に関する以下の関連参照を参照してください。

関連タスク

- 197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』
- 213 ページの『環境変数の設定』

関連参照

- 255 ページの『CHAR』
- XML GENERATE の操作 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

XML 出力生成時のエラーの処理

XML 出力の生成時にエラーが検出された場合、例外条件が存在します。エラー・タイプを示す数値の例外コードが格納される、特殊レジスタ XML-CODE を検査するコードを記述することができます。

エラーを処理するには、XML GENERATE ステートメントの以下の句の一方または両方を使用してください。

- ON EXCEPTION
- COUNT IN

XML GENERATE ステートメントに ON EXCEPTION 句をコーディングした場合、指定された命令ステートメントに制御が転送されます。命令ステートメントをコーディン

グして、例えば、XML-CODE 値を表示できます。ON EXCEPTION 句がコーディングされていない場合、制御は XML GENERATE ステートメントの終わりに移動します。

エラーが発生する場合、XML 出力を受け取るデータ項目が十分大きくないという問題であることがあります。この場合、XML 出力は不完全となり、特殊レジスター XML-CODE にエラー・コード 400 が格納されます。

次のステップを実行することにより、生成された XML 出力を検査することができます。

1. XML GENERATE ステートメントに COUNT IN 句をコーディングしてください。

指定するカウント・フィールドは、XML 生成時に充てんされる XML 文字位置のカウントを保持します。XML 出力を国別として定義した場合、カウントは国別文字位置数 (UTF-16 文字エンコード単位数) であり、そうでない場合、カウントはバイト数です。

2. 参照変更と共にカウント・フィールドを使用して、生成された XML 出力を入れる受信データ項目のサブストリングを指してください。

例えば、XML-OUTPUT が XML 出力を受け取るデータ項目であり、XML-CHAR-COUNT がカウント・フィールドである場合、XML-OUTPUT(1:XML-CHAR-COUNT) は XML 出力を指します。

XML-CODE の内容を使用して、行うべき修正アクションを判別してください。XML 生成中に発生する可能性がある例外の一覧については、以下の関連参照を参照してください。

関連タスク

106 ページの『データ項目のサブストリングの参照』

関連参照

706 ページの『XML GENERATE 例外』

第 6 部 オブジェクト指向プログラムの開発

第 24 章 オブジェクト指向プログラムの作成	429
例: 口座	430
サブクラス	431
クラスの定義	432
クラス定義用の CLASS-ID 段落	434
クラス定義用の REPOSITORY 段落	435
例: 外部クラス名および Java パッケージ	436
クラス・インスタンス・データ定義用の	
WORKING-STORAGE SECTION	436
例: クラスの定義	437
クラス・インスタンス・メソッドの定義	438
クラス・インスタンス・メソッド定義用の	
METHOD-ID 段落	439
クラス・インスタンス・メソッド定義用の	
INPUT-OUTPUT SECTION	439
クラス・インスタンス・メソッド定義用の	
DATA DIVISION	440
クラス・インスタンス・メソッド定義用の	
PROCEDURE DIVISION	441
インスタンス・メソッドのオーバーライド	442
インスタンス・メソッドの多重定義	443
属性 (get および set) メソッドのコーディング	444
例: ゲット・メソッドのコーディング	445
例: メソッドの定義	445
Account クラス	445
Check クラス	446
クライアントの定義	447
クライアント定義用の REPOSITORY 段落	448
クライアント定義用の DATA DIVISION	449
LOCAL-STORAGE または	
WORKING-STORAGE の選択	450
オブジェクト参照の比較および設定	450
メソッドの呼び出し (INVOKE)	452
引数の引き渡し用の USING 句	453
例: COBOL クライアントからの規格合致オブ	
ジェクト参照の引数の引き渡し	454
戻り値の取得用の RETURNING 句	455
オーバーライドされたスーパークラス・メソ	
ッドの呼び出し	456
クラスのインスタンスの作成および初期化	456
Java クラスのインスタンス化	457
COBOL クラスのインスタンス化	457
クラスのインスタンスの解放	458
例: クライアントの定義	459
サブクラスの定義	460
サブクラス定義用の CLASS-ID 段落	461
サブクラス定義用の REPOSITORY 段落	461
サブクラス・インスタンス・データ定義用の	
WORKING-STORAGE SECTION	462
サブクラス・インスタンス・メソッドの定義	462
例: サブクラスの定義 (メソッドに関して)	463

CheckingAccount クラス (Account のサブクラ	
ス)	463
ファクトリー・セクションの定義	464
ファクトリー・データ定義用の	
WORKING-STORAGE SECTION	465
ファクトリー・メソッドの定義	466
ファクトリー・メソッドまたは静的メソッド	
の隠蔽	467
ファクトリー・メソッドまたは静的メソッド	
の呼び出し	468
例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)	468
Account クラス	469
CheckingAccount クラス (Account のサブクラ	
ス)	471
Check クラス	472
TestAccounts クライアント・プログラム	473
TestAccounts クライアント・プログラムが生	
成する出力	474
プロシージャ指向 COBOL プログラムのラッピ	
ング	474
オブジェクト指向アプリケーションの構造化	474
例: java コマンドを使用して実行できる COBOL	
アプリケーション	475
メッセージの表示	475
入カストリングのエコー	476

第 25 章 Java メソッドとの通信	479
JNI サービスへのアクセス	479
Java 例外の処理	481
例: Java 例外の処理	481
ローカル参照とグローバル参照の管理	482
ローカル参照の削除、保管、および解放	483
Java アクセス制御	484
Java とのデータ共用	484
COBOL および Java での相互運用可能なデータ	
型のコーディング	485
Java 用の配列およびストリングの宣言	486
Java 配列の取り扱い	487
例: Java int 配列の処理	489
Java ストリングの取り扱い	490

第 24 章 オブジェクト指向プログラムの作成

オブジェクト指向 (OO) プログラムを書く際には、必要とするクラス、およびクラスが作業を行うのに必要なメソッドとデータを決定する必要があります。

OO プログラムは、オブジェクト (状態と動作をカプセル化するエンティティー) ならびにオブジェクトのクラス、メソッド、およびデータに基づいています。クラスとは、オブジェクトの状態および機能を定義するテンプレートです。通常、プログラムは、あるクラスの複数のオブジェクト・インスタンス (または単にインスタンス)、つまりそのクラスのメンバーである複数のオブジェクトを作成し、それを扱う仕事をします。それぞれのインスタンスの状態はインスタンス・データと呼ばれるデータに保管され、それぞれのインスタンスの機能はインスタンス・メソッドと呼ばれています。クラスでは、そのクラスのすべてのインスタンスが共用するデータ (ファクトリー・データまたは静的 データと呼ばれる)、およびいずれのオブジェクト・インスタンスとも無関係にサポートされるメソッド (ファクトリー・メソッドまたは静的 メソッドと呼ばれる) を定義できます。

COBOL for Windows を使用して、以下のことを行うことができます。

- メソッドとデータを COBOL でインプリメントした状態で、クラスを定義する。
- Java および COBOL クラスのインスタンスを作成する。
- Java および COBOL オブジェクトにメソッドを呼び出す。
- Java クラスまたはほかの COBOL クラスから継承するクラスを書き込む。
- 多重定義メソッドを定義して呼び出す。

COBOL for Windows プログラムで、Java Native Interface (JNI) が提供するサービスを呼び出して、COBOL 言語で直接使用可能な基本オブジェクト指向機能に加えて、Java 指向機能を取得できます。

COBOL for Windows クラスでは、CALL ステートメントをコーディングして、プロシージャ型 COBOL プログラムとインターフェースを取ることができます。したがって、COBOL クラス定義構文は、プロシージャ型 COBOL ロジックのラッパー・クラスを書き込むために特に役立ち、Java から既存の COBOL コードにアクセスすることを可能にします。

Java コードは、COBOL クラスのインスタンスを作成したり、これらのクラスのメソッドを呼び出したり、COBOL クラスを拡張したりすることができます。

制約事項:

- COBOL クラス定義およびメソッドは、EXEC SQL ステートメントを含むことができず、SQL コンパイラー・オプションを使用してコンパイルすることもできません。
- COBOL クラス定義およびメソッドは、EXEC CICS ステートメントを含むことができず、CICS 環境で実行することもできません。CICS コンパイラー・オプションを使用してコンパイルすることはできません。

430 ページの『例: 口座』

関連タスク

432 ページの『クラスの定義』
438 ページの『クラス・インスタンス・メソッドの定義』
447 ページの『クライアントの定義』
460 ページの『サブクラスの定義』
464 ページの『ファクトリー・セクションの定義』
243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

関連参照

Java 言語仕様

例: 口座

銀行にカスタマーが口座を開設し、その口座で預金や引き出しを行うときの例を見てみましょう。口座は、`Account` という名前の汎用クラスで表します。多数のカスタマーが存在します。したがって、`Account` クラスの複数インスタンスが同時に存在すると考えることができます。

必要とするクラスを判別したら、次のステップでは、それらのクラスがそれぞれの作業を実行するために必要なメソッドを判別します。`Account` クラスは以下のサービスを提供する必要があります。

- 口座を開設する。
- 現在の収支を取る。
- 口座に預金する。
- 口座から預金を引き出す。
- 口座状況を報告する。

`Account` クラスの以下のメソッドは、これらの要件を満たします。

init 口座を開設し、それに口座番号を割り当てます。

getBalance

口座の現在の収支を戻します。

credit 指定の金額を口座に預金します。

debit 指定の金額を口座から引き出します。

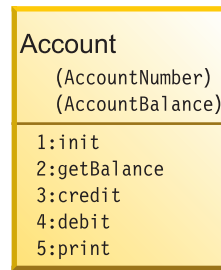
print 口座番号と勘定残高を表示します。

`Account` クラスとそのメソッドを設計すると、クラスはいくつかのインスタンス・データを保持する必要があることがわかります。一般に、`Account` オブジェクトには次のようなインスタンス・データが必要です。

- 口座番号
- 勘定残高
- カスタマー情報: 名前、住所、自宅の電話番号、勤務先電話番号、社会保障番号など

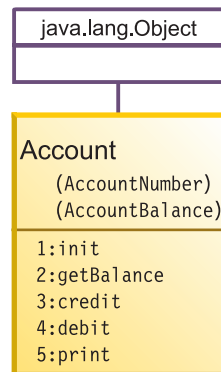
ただし、上記の例を単純化するため、口座番号と勘定残高は、`Account` クラスが必要とする唯一のインスタンス・データであると想定します。

クラスやメソッドを設計するとき、ダイアグラムは役に立ちます。次のダイアグラムで、Account クラスの設計における最初の試みを示します。



ダイアグラムにおいて、括弧内のワードはインスタンス・データの名前です。番号とコロンに続くワードは、インスタンス・メソッドの名前です。

以下の構造は、クラスの相互関係を示しており、継承の階層と呼ばれています。Account クラスはクラス java.lang.Object から直接継承します。



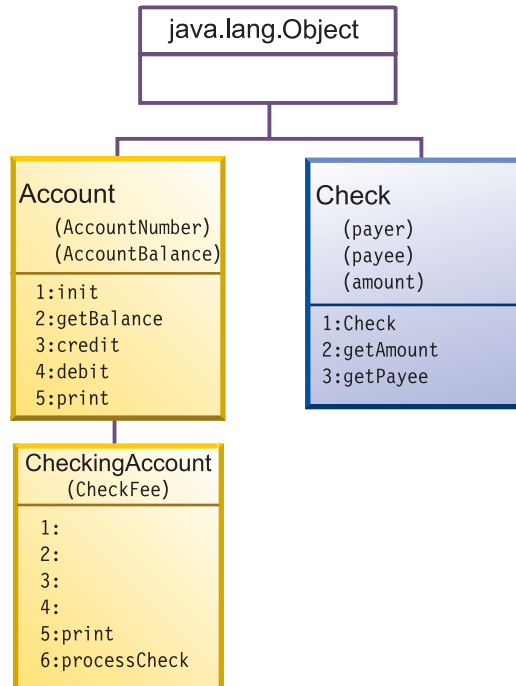
サブクラス

上記の口座の例において、Account は汎用クラスです。ただし、銀行は、当座預金、普通預金、住宅ローンなど、多くの種類の口座を用意することができます。これらの口座のすべてには、口座の一般的特性がある一方で、すべての種類の口座に必ずしも共有されない追加特性が含まれている場合があります。

例えば、CheckingAccount クラスには、すべての口座が持つ口座番号や勘定残高に加えて、口座に書き込まれる各当座に適用される当座手数料がある場合があります。また、CheckingAccount クラスには、当座を処理する（すなわち、金額を読み取る、支払人の借方に記入する、受取人の貸方に記入するなど）メソッドも必要です。したがって、CheckingAccount を Account のサブクラスとして定義し、そのサブクラスが必要とする追加のインスタンス・データやインスタンス・メソッドをそのサブクラスで定義することは意味があります。

CheckingAccount クラスを設計すると、当座をモデル化するクラスの必要性があることに気が付きます。クラス Check のインスタンスは、少なくとも、支払人、受取人、および当座の金額のインスタンス・データを必要とします。

実際のオブジェクト指向のアカウント・システムでは多くの追加クラス（ならびにデータベースおよびトランザクション処理ロジック）を設計する必要があるでしょうが、例を単純化するために省略されています。継承更新ダイアグラムを以下に示します。



番号とコロンの後にメソッド名が記されていないものは、その番号のメソッドがスーパークラスから継承されていることを示します。

多重継承: OO COBOL アプリケーションでは多重継承を使用できません。定義するすべてのクラスは、厳密に 1 つの親を持つ必要があります。java.lang.Object は、すべての継承の階層のルートになければなりません。したがって、OO COBOL アプリケーション内で定義されるオブジェクト指向システムのクラス構造はツリー状です。

445 ページの『例: メソッドの定義』

関連タスク

『クラスの定義』

438 ページの『クラス・インスタンス・メソッドの定義』

460 ページの『サブクラスの定義』

クラスの定義

COBOL クラス定義は、IDENTIFICATION DIVISION および ENVIRONMENT DIVISION、その後にオプションのファクトリー定義とオプションのオブジェクト定義、さらにその後に END CLASS マーカーが続く構成となっています。

表 50. クラス定義の構成

セクション	目的	構文
IDENTIFICATION DIVISION (必須)	クラスの名前。継承情報を提供する。	434 ページの『クラス定義用の CLASS-ID 段落』 (必須) AUTHOR 段落 (オプション) INSTALLATION 段落 (オプション) DATE-WRITTEN 段落 (オプション) DATE-COMPILED 段落 (オプション)
ENVIRONMENT DIVISION (必須)	コンピューター環境を記述する。クラス定義内で使用されるクラス名を、コンパイル単位の外側で判明している、対応する外部クラス名に関連付ける。	CONFIGURATION SECTION (必須) 435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』 (必須) SOURCE-COMPUTER 段落 (オプション) OBJECT-COMPUTER 段落 (オプション) SPECIAL-NAMES 段落 (オプション)
ファクトリー定義 (オプション)	クラスのすべてのインスタンスが共有するデータとオブジェクト・インスタンスとは別々にサポートされるメソッドを定義する。	IDENTIFICATION DIVISION. FACTORY. DATA DIVISION. WORKING-STORAGE SECTION. * (Factory data here) PROCEDURE DIVISION. * (Factory methods here) END FACTORY.
オブジェクト定義 (オプション)	インスタンス・データとインスタンス・メソッドを定義する。	IDENTIFICATION DIVISION. OBJECT. DATA DIVISION. WORKING-STORAGE SECTION. * (Instance data here) PROCEDURE DIVISION. * (Instance methods here) END OBJECT.

SOURCE-COMPUTER、OBJECT-COMPUTER、または SPECIAL-NAMES 段落をクラス CONFIGURATION SECTION に指定すると、それらの段落は、そのクラスが導入するすべてのメソッドを含む、クラス定義全体に適用されます。

クラス CONFIGURATION SECTION は、プログラム CONFIGURATION SECTION と同じ記入項目で構成されています。ただし、クラス CONFIGURATION SECTION には INPUT-OUTPUT SECTION を含めることはできません。INPUT-OUTPUT SECTION の定義は、クラス・レベルでその定義を行うのではなく、それを必要とする個々のメソッドにおいてのみ行います。

上記で説明したように、インスタンス・データとメソッドの定義は、そのクラス定義の OBJECT 段落内で、それぞれ、DATA DIVISION および PROCEDURE DIVISION において、行います。個別のオブジェクト・インスタンスにではなく、クラス自体に関連付けるデータとメソッドを必要とするクラスに、クラス定義の FACTORY 段落内で、別々の DATA DIVISION および PROCEDURE DIVISION を定義します。

各 COBOL クラス定義は、別々のソース・ファイルになければなりません。

437 ページの『例: クラスの定義』

関連タスク

436 ページの『クラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE

SECTION』

438 ページの『クラス・インスタンス・メソッドの定義』

460 ページの『サブクラスの定義』

464 ページの『ファクトリー・セクションの定義』

7 ページの『コンピューター環境の記述』

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

関連参照

COBOL クラス定義構造 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

クラス定義用の CLASS-ID 段落

IDENTIFICATION DIVISION 内の CLASS-ID 段落を使用して、クラスに名前を付け、それに関する継承情報を入力します。

```
Identification Division.           Required
Class-id. Account inherits Base.    Required
```

以下のクラスを識別するには、CLASS-ID 段落を使用してください。

- 定義中のクラス (上記の例の Account)。
- 定義中のクラスがその特性を継承する元の即時スーパークラス。スーパークラスは、Java または COBOL でインプリメントされます。

上記の例において、inherits Base では、Account クラスは、クラス定義内で Base として認識されているクラスからメソッドとデータを継承することを示します。オブジェクト指向 COBOL プログラムにおいて、名前 Base は java.lang.Object を参照するために使用することをお勧めします。

クラス名では 1 バイト文字を使用する必要があり、クラス名は COBOL ユーザー定義語の通常の形成規則に準拠している必要があります。

ENVIRONMENT DIVISION の CONFIGURATION SECTION で REPOSITORY 段落を使用して、スーパークラス名 (例の Base) を外部に判明しているスーパークラス名 (Base の場合の java.lang.Object) に関連付けます。また、オプションとして、定義中のクラスの名前 (例の Account) を REPOSITORY 段落に指定し、その対応する外部クラス名にそれを関連付けることもできます。

すべてのクラスを java.lang.Object クラスから直接的または間接的に引き出さなければなりません。

関連タスク

435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』

関連参照

CLASS-ID 段落 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ユーザー定義語 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

クラス定義用の REPOSITORY 段落

指定された語をクラス定義内で使用するときその語がクラス名であることをコンパイラーに宣言する場合、さらに必要に応じてクラス名を対応する外部クラス名(コンパイル単位の外側で認識されているクラス名)に関係付ける場合に、REPOSITORY 段落を使用してください。

外部クラス名は大/小文字が区別されます。したがって、Java 形成規則に準拠しなければなりません。例えば、Account クラス定義において、以下のようにコーディングします。

Environment Division.	Required
Configuration Section.	Required
Repository.	Required
Class Base is "java.lang.Object"	Required
Class Account is "Account".	Optional

REPOSITORY 段落記入項目では、クラス定義内で Base および Account として参照されるクラスの外部クラス名は、それぞれ、java.lang.Object および Account であることが示されます。

REPOSITORY 段落では、クラス定義において明示的に参照するそれぞれのクラス名ごとに記入項目をコーディングする必要があります。以下に、その例を示します。

- ベース
- 定義中のクラスが継承する元のスーパークラス
- クラス定義内のメソッドで参照するクラス

REPOSITORY 段落記入項目において、名前に非 COBOL 文字が含まれている場合には、外部クラス名を指定しなければなりません。また、Java パッケージの一部である参照クラスごとに外部クラス名を指定しなければなりません。そのようなクラスごとに、外部クラス名をパッケージの完全修飾名として指定し、後にピリオド(.)が付き、続いてその後に Java クラスの単純名が付きます。例えば、Object クラスは java.lang パッケージの一部です。したがって、上記に示したように、その外部名を java.lang.Object として指定します。

REPOSITORY 段落で指定する外部クラス名は、完全修飾 Java クラス名の形成規則に準拠した英数字リテラルでなければなりません。

REPOSITORY 段落記入項目に外部クラス名を組み込まない場合、外部クラス名は以下の方法でクラス名から作成されます。

- クラス名は大文字に変換されます。
- 各ハイフンはゼロに変更されます。
- 数字の場合、最初の文字は以下のように変更されます。
 - 1 から 9 は A から I に変更されます。
 - 0 は J に変更されます。

外部名は英大文字小文字混合で名前付けされます。したがって、上記の例で、クラス Account は外部的には Account (英大文字小文字混合) として認識されます。

オプションとして、定義中のクラス(上記の例の Account)の記入項目を REPOSITORY 段落に組み込むことができます。外部クラス名が非 COBOL 文字を含

む場合は定義中のクラスの記入項目を組み込む必要があり、クラスが Java パッケージの一部となる場合には、完全パッケージ修飾クラス名を指定する必要があります。

『例: 外部クラス名および Java パッケージ』

関連タスク

486 ページの『Java 用の配列およびストリングの宣言』

関連参照

REPOSITORY 段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ID (「*Java 言語仕様*」)

パッケージ (「*Java 言語仕様*」)

例: 外部クラス名および Java パッケージ

次の例では、REPOSITORY 段落内の記入項目から外部クラス名を決定する方法を説明します。

```
Environment division.  
Configuration section.  
Repository.  
    Class Employee is "com.acme.Employee"  
    Class JavaException is "java.lang.Exception"  
    Class Orders.
```

次の表には、ローカル・クラス名 (クラス定義内で使用されるクラス名)、そのクラスを含む Java パッケージ、および関連付けられた外部クラス名が記述されています。

ローカル・クラス名	Java パッケージ	外部クラス名
Employee	com.acme	com.acme.Employee
JavaException	java.lang	java.lang.Exception
Orders	(名前付けなし)	ORDERS

外部クラス名 (REPOSITORY 段落記入項目内のクラス名の後の名前とオプションの IS) は、パッケージ (ある場合) の完全修飾名から構成され、後にピリオドが付き、続いてその後にクラスの単純名が付きます。

関連タスク

435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』

関連参照

REPOSITORY 段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

クラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION

OBJECT 段落の DATA DIVISION 内の WORKING-STORAGE SECTION を使用して、COBOL クラスが必要とするインスタンス・データ (すなわち、クラスのそれぞれのインスタンスごとに割り振られるデータ) を記述します。

IDENTIFICATION DIVISION 宣言の直前に入れる必要がある OBJECT キーワードは、クラスのインスタンス・データおよびインスタンス・メソッドの定義の開始を示します。例えば、Account クラスのインスタンス・データの定義は、以下のようになります。

```
Identification division.
Object.
  Data division.
  Working-storage section.
    01 AccountNumber pic 9(6).
    01 AccountBalance pic S9(9) value zero.
    .
    .
    .
End Object.
```

インスタンス・データは、オブジェクト・インスタンスが作成されるときに割り振られ、Java ランタイムによるインスタンスのガーベッジ・コレクションが行われるまで存在します。

上記に示すように、単純インスタンス・データの初期化は、VALUE 文節を使用して行うことができます。より複雑なインスタンス・データの初期化は、カスタマイズしたメソッドをコーディングし、クラスのインスタンスを作成して初期化して行うことができます。

COBOL インスタンス・データは、Java private 非静的メンバー・データと同等です。他のクラスまたはサブクラス (同じクラス内のファクトリー・メソッドがあればそのメソッドも) は、COBOL インスタンス・データを直接参照することはできません。インスタンス・データは、OBJECT 段落で定義するすべてのインスタンス・メソッドにグローバルです。OBJECT 段落の外側からインスタンス・データにアクセス可能にしたい場合には、アクセスを可能にするために属性 (get または set) インスタンス・メソッドを定義します。

インスタンス・データ宣言のための WORKING-STORAGE SECTION の構文は、プログラムにおける場合と一般的に同じですが、次のような例外があります。

- EXTERNAL 属性を使用することはできません。
- GLOBAL 属性を使用できますが、効力はありません。

関連タスク

456 ページの『クラスのインスタンスの作成および初期化』

458 ページの『クラスのインスタンスの解放』

466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

444 ページの『属性 (get および set) メソッドのコーディング』

例: クラスの定義

次の例では、Account クラスの定義での最初の試みを示します。ただし、メソッド定義は除きます。

```
cb1 thread,pgmname(longmixed)
Identification Division.
Class-id. Account inherits Base.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
  Class Base is "java.lang.Object"
  Class Account is "Account".
*
```

```

Identification division.
Object.
Data division.
Working-storage section.
01 AccountNumber pic 9(6).
01 AccountBalance pic S9(9) value zero.
*
  Procedure Division.
*
*   (Instance method definitions here)
*
End Object.
*
End class Account.

```

関連タスク

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

447 ページの『クライアントの定義』

クラス・インスタンス・メソッドの定義

クラス定義の OBJECT 段落の PROCEDURE DIVISION 内の COBOL インスタンス・メソッドを定義します。インスタンス・メソッドは、クラスのそれぞれのオブジェクト・インスタンスごとにサポートされる操作を定義します。

COBOL インスタンス・メソッド定義は、4 つの部 (COBOL プログラムに類似) とその後の END METHOD マーカーから構成されます。

表 51. インスタンス・メソッド定義の構成

除算	目的	構文
IDENTIFICATION (必須)	メソッドの名前を指定する。	439 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の METHOD-ID 段落』 (必須) AUTHOR 段落 (オプション) INSTALLATION 段落 (オプション) DATE-WRITTEN 段落 (オプション) DATE-COMPILED 段落 (オプション)
ENVIRONMENT (オプション)	メソッド内で使用されるファイル名を、オペレーティング・システムに認識された、対応するファイル名に関連付ける。	439 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の INPUT-OUTPUT SECTION』 (オプション)
DATA (オプション)	外部ファイルを定義する。データのコピーを割り振る。	440 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の DATA DIVISION』 (オプション)
PROCEDURE (オプション)	メソッドによって提供されるサービスを完了するために実行可能ステートメントをコーディングする。	441 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION』 (オプション)

定義: メソッドのシグニチャー は、メソッドの名前およびその仮パラメーターの数と型から構成されています。 (COBOL メソッドの仮パラメーターの定義は、そのメソッドの PROCEDURE DIVISION ヘッダーの USING 句で行います。)

クラス定義内では、各メソッド名を固有にする必要はありませんが、各メソッドに固有のシグニチャーを与える必要があります。(メソッドに同じ名前を与えても、別々のシグニチャーを与えると、メソッドを多重定義 することになります。)

COBOL インスタンス・メソッドは Java public 非静的メソッドと同じです。

445 ページの『例: メソッドの定義』

関連タスク

441 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION』

443 ページの『インスタンス・メソッドの多重定義』

442 ページの『インスタンス・メソッドのオーバーライド』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

462 ページの『サブクラス・インスタンス・メソッドの定義』

466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

クラス・インスタンス・メソッド定義用の METHOD-ID 段落

インスタンス・メソッドを指定するには、METHOD-ID 段落を使用してください。IDENTIFICATION DIVISION 宣言とともに、METHOD-ID 段落の直前に置いて、メソッド定義の開始を表します。

例えば、Account クラス内の credit メソッドの定義は、以下のように開始します。

```
Identification Division.  
Method-id. "credit".
```

メソッド名を英数字または各国語リテラルとしてコーディングします。メソッド名は、大/小文字を区別して処理されるため、Java メソッド名の形成規則に準拠する必要があります。

他の Java または COBOL メソッドもしくはプログラム (すなわち、クライアント) は、メソッド名を使用してメソッドを呼び出します。

関連タスク

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

関連参照

メソッド名の意味 (「Java 言語解説書」)

ID (「Java 言語仕様」)

METHOD-ID 段落 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

クラス・インスタンス・メソッド定義用の INPUT-OUTPUT SECTION

インスタンス・メソッドの ENVIRONMENT DIVISION は、1 つのセクション INPUT-OUTPUT SECTION のみを持つことができます。このセクションは、メソッド定義で使用したファイル名をオペレーティング・システムに認識された、対応するファイル名に関連付けます。

例えば、情報をファイルから読み取ったメソッドを Account クラスが定義した場合には、その Account クラスは、以下のようにコーディングされた INPUT-OUTPUT SECTION を持つと考えられます。

```
Environment Division.  
Input-Output Section.  
File-Control.  
    Select account-file Assign AcctFile.
```

メソッドの INPUT-OUTPUT SECTION の構文は、プログラムの INPUT-OUTPUT SECTION の構文と同じです。

関連タスク

7 ページの『コンピューター環境の記述』

関連参照

INPUT-OUTPUT セクション (『COBOL for Windows 言語解説書』)

クラス・インスタンス・メソッド定義用の DATA DIVISION

インスタンス・メソッドの DATA DIVISION は、FILE SECTION、LOCAL-STORAGE SECTION、WORKING-STORAGE SECTION、および LINKAGE SECTION の 4 つのセクションのうち、任意のもので構成されます。

FILE SECTION

メソッド FILE SECTION では EXTERNAL ファイルしか定義できないことを除けば、プログラム FILE SECTION と同じです。

LOCAL-STORAGE SECTION

メソッドの呼び出しごとに、LOCAL-STORAGE データの別個のコピーを割り振り、そのメソッドからの戻り時に解放します。メソッド LOCAL-STORAGE SECTION は、プログラム LOCAL-STORAGE SECTION に類似しています。

データ項目上の VALUE 文節を指定すると、メソッドの呼び出しのたびに、項目はその値に初期化されます。

WORKING-STORAGE SECTION

WORKING-STORAGE データの単一コピーが割り振られます。データは、実行単位が終了するまで、最後に使われた状態で持続します。メソッドの呼び出しのたびに、呼び出しているオブジェクトまたはスレッドに関係なく、データの同じ単一コピーを使用します。メソッド WORKING-STORAGE SECTION は、プログラム WORKING-STORAGE SECTION に類似しています。

データ項目上の VALUE 文節を指定すると、メソッドの最初の呼び出しのときに、項目はその値に初期化されます。データ項目に対する EXTERNAL 文節を指定することができます。

LINKAGE SECTION

プログラム LINKAGE SECTION と同じです。

インスタンス・メソッドの DATA DIVISION および OBJECT 段落の DATA DIVISION の両方において、データ項目を同じ名前前で定義した場合、そのデータ名に対するメソッド内の参照は、そのメソッド・データ項目だけを参照します。メソッド DATA DIVISION が優先します。

関連タスク

12 ページの『データの記述』

533 ページの『EXTERNAL 文節によるデータの共用』

関連参照

DATA DIVISION の概要 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION

インスタンス・メソッドが提供するサービスをインプリメントするための実行可能ステートメントを、インスタンス・メソッドの PROCEDURE DIVISION にコーディングしてください。

プログラムの PROCEDURE DIVISION でコーディングできるメソッドの PROCEDURE DIVISION において、ほとんどの COBOL ステートメントをコーディングすることができます。ただし、メソッドで以下のステートメントをコーディングすることはできません。

- ENTRY
- EXIT PROGRAM
- 標準 COBOL 85 の以下の古くなったエレメント:
 - ALTER
 - プロシージャー名が指定されていない GOTO
 - SEGMENT-LIMIT
 - USE FOR DEBUGGING

インスタンス・メソッドで EXIT METHOD または GOBACK ステートメントをコーディングして、呼び出し側のクライアントに制御を戻すことができます。両方のステートメントに同じ効果があります。メソッドが呼び出されるときに RETURNING 句が指定されていると、EXIT METHOD または GOBACK ステートメントは、呼び出し側のクライアントにデータの値を戻します。

各メソッドの PROCEDURE DIVISION では、暗黙の EXIT METHOD が最後のステートメントとして生成されます。

メソッドで STOP RUN を指定することができます。この指定を行うと、実行単位内で実行しているすべてのスレッドを含め、実行単位全体が終了します。

メソッド定義の終了は、END METHOD マーカーを使用して行う必要があります。例えば、次のステートメントは credit メソッドの終わりを示します。

```
End method "credit".
```

渡された引数を取得するための USING 句: メソッドの PROCEDURE DIVISION ヘッダーの USING 句に、メソッドの仮パラメーター (ある場合) を指定してください。引数が BY VALUE で渡される指定をしなければなりません。各パラメーターは、メソッドの LINKAGE SECTION で、レベル 01 またはレベル 77 項目として定義します。各パラメーターのデータ型は、Java と相互運用可能な型のいずれかでなければなりません。

値を戻すための RETURNING 句: メソッドの PROCEDURE DIVISION ヘッダーの RETURNING 句に、メソッドの結果として戻されるデータ項目 (ある場合) を指定してください。データ項目は、メソッドの LINKAGE SECTION で、レベル 01 またはレベル 77 項目として定義します。戻り値のデータ型は、Java と相互運用可能な型のいずれかでなければなりません。

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』
『インスタンス・メソッドのオーバーライド』

443 ページの『インスタンス・メソッドの多重定義』

450 ページの『オブジェクト参照の比較および設定』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

関連参照

293 ページの『THREAD』

手続き部のヘッダー (『COBOL for Windows 言語解説書』)

インスタンス・メソッドのオーバーライド

サブクラスで定義されたインスタンス・メソッドは、普通ならサブクラスで利用できる継承されたインスタンス・メソッドを (これら 2 つのメソッドが同じシグニチャーを持っている場合) オーバーライド すると言います。

スーパークラス・インスタンス・メソッド m1 を COBOL サブクラスでオーバーライドするには、スーパークラス・メソッドと名前が同じで、その PROCEDURE DIVISION USING 句 (ある場合) の仮パラメーターの数およびタイプがスーパークラス・メソッドと同じであるサブクラスでインスタンス・メソッド m1 を定義します。(スーパークラス・メソッドが Java でインプリメントされる場合には、対応する Java パラメーターのデータ型と相互運用可能な仮パラメーターをコーディングする必要があります。) クライアントがサブクラスのインスタンスで m1 を呼び出すとき、スーパークラス・メソッドではなく、サブクラス・メソッドが呼び出されます。

例えば、Account クラスは、その LINKAGE SECTION および PROCEDURE DIVISION ヘッダーが以下のような、メソッド debit を定義します。

```
Linkage section.  
01 inDebit    pic S9(9) binary.  
Procedure Division using by value inDebit.
```

CheckingAccount サブクラスを定義し、Account スーパークラスで定義された debit メソッドをオーバーライドする debit メソッドをそれに持たず場合には、pic S9(9) binary として指定された入力パラメーターを必ず 1 つ持つサブクラス・メソッドを定義します。クライアントが、CheckingAccount インスタンスへのオブジェクト参照を使用して、debit を呼び出すと、CheckingAccount debit メソッド (Account スーパークラス内の debit メソッドではなく) が呼び出されます。

メソッド戻り値の有無および PROCEDURE DIVISION RETURNING 句 (ある場合) で使われる戻り値のデータ型は、サブクラス・インスタンス・メソッドとオーバーライドしたスーパークラス・インスタンス・メソッドにおいて同一でなければなりません。

インスタンス・メソッドは、COBOL スーパークラスのファクトリー・メソッドをオーバーライドしてはならないし、Java スーパークラスの静的メソッドをオーバーライドすることもできません。

445 ページの『例: メソッドの定義』

関連タスク

441 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

456 ページの『オーバーライドされたスーパークラス・メソッドの呼び出し』

460 ページの『サブクラスの定義』

467 ページの『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの隠蔽』

関連参照

継承、オーバーライド、および隠蔽 (「Java 言語仕様」)

インスタンス・メソッドの多重定義

クラスでサポートされる 2 つのメソッド (クラスで定義されているか、スーパークラスから継承されたかにかかわらず) は、それらが同じ名前を持っており、シグニチャーが異なる場合には、多重定義 されていると言います。

例えば、別々の一組のパラメーターを使用してデータを初期化するために、クライアントが別々の版のメソッドを呼び出せるようにするときは、メソッドを多重定義 します。

メソッドを多重定義するには、その PROCEDURE DIVISION USING 句 (ある場合) の仮パラメーターの数や型が、同じクラスでサポートされる同一の名前のメソッドと異なるメソッドを定義します。例えば、Account クラスは、必ず 1 つの仮パラメーターを持つインスタンス・メソッド init を定義します。init メソッドの LINKAGE SECTION および PROCEDURE DIVISION ヘッダーは、以下のようになります。

```
Linkage section.  
01 inAccountNumber pic S9(9) binary.  
Procedure Division using by value inAccountNumber.
```

クライアントはこのメソッドを呼び出し、inAccountNumber のデータ型と一致する引数を必ず 1 つ渡して、指定の口座番号 (およびデフォルトの勘定残高ゼロ) で Account インスタンスを初期化します。

ただし、Account クラスでは、例えば、開始の勘定残高も指定できる別の仮パラメーターを持つ、2 番目のインスタンス・メソッド init を定義することができます。この init メソッドの LINKAGE SECTION および PROCEDURE DIVISION ヘッダーは、以下のようになります。


```
Linkage section.  
01 inAccountNumber pic S9(9) binary.  
01 inBalance       pic S9(9) binary.  
Procedure Division using by value inAccountNumber  
                           inBalance.
```

クライアントは、目的のメソッドのシグニチャーと一致する引数を渡して、いずれかの `init` メソッドを呼び出すことができます。

メソッド戻り値の有無は、多重定義したメソッドと共通している必要はありません。また、`PROCEDURE DIVISION RETURNING` 句 (ある場合) で指定する戻り値のデータ型は、多重定義したメソッドと同一である必要はありません。

ファクトリー・メソッドの多重定義は、インスタンス・メソッドを多重定義する場合とまったく同じ方法で行うことができます。

多重定義メソッドの定義および多重定義メソッドの呼び出しの解決に関する規則は、対応する Java 規則に基づきます。

関連タスク

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』
466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

関連参照

多重定義 (「Java 言語仕様」)

属性 (get および set) メソッドのコーディング

`x` のための accessor (get) メソッドおよび mutator (set) メソッドをコーディングして `x` を定義するクラスの外側から、インスタンス変数 `x` へのアクセスを提供することができます。

COBOL のインスタンス変数は *private* です。インスタンス変数を定義するクラスは、インスタンス変数を完全にカプセル化します。したがって、直接アクセスできるのは、同じ OBJECT 段落で定義するインスタンス・メソッドだけです。通常、優れた設計のオブジェクト指向アプリケーションは、クラスの外側からインスタンス変数にアクセスする必要はありません。

public インスタンス変数の概念は、Java および他のオブジェクト指向言語で定義されており、クラス属性の概念は CORBA で定義されていますが、どちらの概念も COBOL には直接サポートされていません。(CORBA 属性 は、変数が読み取り専用でない場合に、変数の値にアクセスするための自動生成 get メソッドと変数の値を変更するための自動生成 set メソッドを持つ、インスタンス変数です。)

445 ページの『例: ゲット・メソッドのコーディング』

関連タスク

436 ページの『クラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION』
17 ページの『データの処理』

例: ゲット・メソッドのコーディング

次の例は、インスタンス・メソッド `getBalance` の `Account` クラスの定義を示しており、これによってインスタンス変数 `AccountBalance` の値をクライアントに戻します。 `Account` クラス定義の `OBJECT` 段落で、`getBalance` および `AccountBalance` が定義されます。

```
Identification Division.
Class-id. Account inherits Base.
* (ENVIRONMENT DIVISION not shown)
* (FACTORY paragraph not shown)
*
Identification division.
Object.
Data division.
Working-storage section.
01 AccountBalance pic S9(9) value zero.
* (Other instance data not shown)
*
Procedure Division.
*
Identification Division.
Method-id. "getBalance".
Data division.
Linkage section.
01 outBalance pic S9(9) binary.
*
Procedure Division returning outBalance.
Move AccountBalance to outBalance.
End method "getBalance".
*
* (Other instance methods not shown)
End Object.
*
End class Account.
```

例: メソッドの定義

次の例は、直前の例に、`Account` クラスのインスタンス・メソッド定義を追加し、`Java Check` クラスの定義を示します。

(直前の例は 437 ページの『例: クラスの定義』でした。)

Account クラス

```
cb1 thread,pgmname(longmixed)
Identification Division.
Class-id. Account inherits Base.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
Class Base is "java.lang.Object"
Class Account is "Account".
*
* (FACTORY paragraph not shown)
*
Identification division.
Object.
Data division.
Working-storage section.
01 AccountNumber pic 9(6).
01 AccountBalance pic S9(9) value zero.
*
Procedure Division.
*
```

```

*    init method to initialize the account:
    Identification Division.
    Method-id. "init".
    Data division.
    Linkage section.
    01 inAccountNumber pic S9(9) binary.
    Procedure Division using by value inAccountNumber.
        Move inAccountNumber to AccountNumber.
    End method "init".
*
*    getBalance method to return the account balance:
    Identification Division.
    Method-id. "getBalance".
    Data division.
    Linkage section.
    01 outBalance pic S9(9) binary.
    Procedure Division returning outBalance.
        Move AccountBalance to outBalance.
    End method "getBalance".
*
*    credit method to deposit to the account:
    Identification Division.
    Method-id. "credit".
    Data division.
    Linkage section.
    01 inCredit pic S9(9) binary.
    Procedure Division using by value inCredit.
        Add inCredit to AccountBalance.
    End method "credit".
*
*    debit method to withdraw from the account:
    Identification Division.
    Method-id. "debit".
    Data division.
    Linkage section.
    01 inDebit pic S9(9) binary.
    Procedure Division using by value inDebit.
        Subtract inDebit from AccountBalance.
    End method "debit".
*
*    print method to display formatted account number and balance:
    Identification Division.
    Method-id. "print".
    Data division.
    Local-storage section.
    01 PrintableAccountNumber pic ZZZZZ999999.
    01 PrintableAccountBalance pic $$$,$$$,$$9CR.
    Procedure Division.
        Move AccountNumber to PrintableAccountNumber
        Move AccountBalance to PrintableAccountBalance
        Display " Account: " PrintableAccountNumber
        Display " Balance: " PrintableAccountBalance.
    End method "print".
*
End Object.
*
End class Account.

```

Check クラス

```

/**
 * A Java class for check information
 */
public class Check {
    private CheckingAccount payer;
    private Account payee;
    private int amount;
}

```

```

public Check(CheckingAccount inPayer, Account inPayee, int inAmount) {
    payer=inPayer;
    payee=inPayee;
    amount=inAmount;
}

public int getAmount() {
    return amount;
}

public Account getPayee() {
    return payee;
}
}

```

関連タスク

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

クライアントの定義

クラス内の 1 つ以上のメソッドからサービスを要求するプログラムまたはメソッドは、そのクラスのクライアントと呼ばれます。

COBOL クライアントまたは Java クライアントで、以下のことを行うことができます。

- Java および COBOL クラスのオブジェクト・インスタンスを作成する。
- Java および COBOL オブジェクトにインスタンス・メソッドを呼び出す。
- COBOL ファクトリー・メソッドおよび Java 静的メソッドを呼び出す。

COBOL クライアントでは、Java Native Interface (JNI) が提供するサービスを呼び出すこともできます。

COBOL クライアント・プログラムは、次のような通常の 4 つの部分で成り立っています。

表 52. COBOL クライアントの構成

除算	目的	構文
IDENTIFICATION (必須)	クライアントの名前。	通常のようにコーディング。ただし、クライアント・プログラムは以下のとおりにする必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> • スレッド対応 (THREAD オプションでコンパイル、スレッド化アプリケーション用コーディングの指針に準拠)
ENVIRONMENT (必須)	コンピューター環境を記述する。クライアント内で使用されるクラス名を、コンパイル単位の外側で判明している、対応する外部クラス名に関連付ける。	CONFIGURATION SECTION (必須) 448 ページの『クライアント定義用の REPOSITORY 段落』 (必須)
DATA (オプション)	クライアントが必要とするデータを記述する。	449 ページの『クライアント定義用の DATA DIVISION』 (オプション)

表 52. COBOL クライアントの構成 (続き)

除算	目的	構文
PROCEDURE (オブ ション)	クラスのインスタンスの作成、オブジェクト参照データ項目の操作、メソッドの呼び出し。	INVOKE、IF、および SET ステートメントを使用してコーディング

459 ページの『例: クライアントの定義』

関連タスク

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

553 ページの『第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備』

479 ページの『第 25 章 Java メソッドとの通信』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

456 ページの『クラスのインスタンスの作成および初期化』

450 ページの『オブジェクト参照の比較および設定』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

468 ページの『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの呼び出し』

関連参照

293 ページの『THREAD』

クライアント定義用の REPOSITORY 段落

指定された語を COBOL クライアントで使用するときにその語がクラス名であることをコンパイラーに宣言する場合、さらに必要に応じてクラス名を対応する外部クラス名 (コンパイル単位の外側で認識されているクラス名) に関係付ける場合に、REPOSITORY 段落を使用してください。

外部クラス名は大/小文字が区別されます。したがって、Java 形成規則に準拠しなければなりません。例えば、Account および Check クラスを使用するクライアント・プログラムにおいて、以下のようにコーディングすることがあります。

```
Environment division.      Required
Configuration section.    Required
    Source-Computer.
    Object-Computer.
Repository.                Required
    Class Account is "Account"
    Class Check   is "Check".
```

REPOSITORY 段落記入項目では、クライアント内で Account および Check として参照されるクラスの外部クラス名は、それぞれ、Account および Check であることが示されます。

REPOSITORY 段落では、クライアントにおいて明示的に参照するそれぞれのクラス名ごとに記入項目をコーディングする必要があります。REPOSITORY 段落記入項目において、名前に非 COBOL 文字が含まれている場合には、外部クラス名を指定しなければなりません。

Java パッケージの一部である参照クラスごとに外部クラス名を指定しなければなりません。そのようなクラスごとに、外部クラス名をパッケージの完全修飾名として指定し、後にピリオド (.) が付き、続いてその後に Java クラスの単純名が付きます。

REPOSITORY 段落で指定する外部クラス名は、完全修飾 Java クラス名の形成規則に準拠した英数字リテラルでなければなりません。

REPOSITORY 段落記入項目に外部クラス名を組み込まない場合、外部クラス名の作成は、クラス定義で外部クラス名が REPOSITORY 段落記入項目に組み込まれていない場合と同じ方法で、クラス名から行われます。外部名は英大/小文字混合で名前付けされます。したがって、上記の例で、クラス Account およびクラス Check は、それぞれ、外部的には Account および Check (英大/小文字混合) として認識されます。

CONFIGURATION SECTION の SOURCE-COMPUTER、OBJECT-COMPUTER、および SPECIAL-NAMES 段落はオプションです。

関連タスク

435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』

関連参照

REPOSITORY 段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

ID (「*Java 言語仕様*」)

パッケージ (「*Java 言語仕様*」)

クライアント定義用の DATA DIVISION

クライアントが必要とするデータを記述するには、DATA DIVISION の任意のセクションを使用できます。

```
Data Division.  
Local-storage section.  
01  anAccount          usage object reference Account.  
01  aCheckingAccount  usage object reference CheckingAccount.  
01  aCheck             usage object reference Check.  
01  payee              usage object reference Account.  
...
```

クライアントはクラスを参照するので、オブジェクト参照 (つまり、クラスのインスタンスへの参照) と呼ばれる 1 つ以上の特別なデータ項目をクライアントは必要とします。インスタンス・メソッドへのすべての要求は、メソッドがサポートされる (すなわち、継承によって定義されているか、または使用可能である) クラスのインスタンスへのオブジェクト参照が必要です。オブジェクト参照をコーディングして COBOL クラスのインスタンスを参照する場合と同じ構文を使用して、Java クラスのインスタンスを参照します。上記の例では、usage object reference という句は、オブジェクト参照データ項目を表します。

上記のコードの 4 つのオブジェクト参照はすべて、クラス名が OBJECT REFERENCE 句の後に現れるので、型式化 オブジェクト参照と呼ばれます。型式化オブジェクト参照の参照先は、OBJECT REFERENCE 句で名前付けしたクラスのインスタンス、またはそのサブクラスのいずれか 1 つに限られます。したがって、anAccount は、Account クラスのインスタンス、またはそのサブクラスのいずれかを参照できます

が、ほかのクラスのインスタンスを参照することはできません。同様に、`aCheck` の参照先は、`Check` クラスのインスタンス、またはそのサブクラスのインスタンスに限られます。

上記に示されていない、別のタイプのオブジェクト参照は、`OBJECT REFERENCE` 句の後にクラス名がありません。そのような参照を汎用 オブジェクト参照と呼びます。すべてのクラスのインスタンスを参照できるという意味です。汎用オブジェクト参照は、非常に限られた環境 (`INVOKE class-name NEW . . .` ステートメントの `RETURNING` 句で使用する時) でしか Java との相互運用が可能ではないので、汎用オブジェクト参照をコーディングするのは避けてください。

`OBJECT REFERENCE` 句で使用するクラス名は、`CONFIGURATION SECTION` の `REPOSITORY` 段落で定義しなければなりません。

関連タスク

『`LOCAL-STORAGE` または `WORKING-STORAGE` の選択』

485 ページの『`COBOL` および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

452 ページの『メソッドの呼び出し (`INVOKE`)』

448 ページの『クライアント定義用の `REPOSITORY` 段落』

関連参照

`RETURNING` 句 (『*COBOL for Windows* 言語解説書』)

LOCAL-STORAGE または WORKING-STORAGE の選択

一般に、クライアント・プログラムが必要とする作業データを定義する場合に、`WORKING-STORAGE SECTION` を使用できます。しかし、プログラムがマルチスレッドで同時に実行できるような場合、代わりに `LOCAL-STORAGE SECTION` にデータを定義することができます。

各スレッドは、`LOCAL-STORAGE` データの別々のコピーへのアクセス権を持っていますが、`WORKING-STORAGE` データの単一のコピーへのアクセス権は共用します。`WORKING-STORAGE SECTION` でデータを定義する場合には、データへのアクセスを同期化するか、または、2 つのスレッドが同時にそのデータへアクセスしないようにする必要があります。

関連タスク

553 ページの『第 30 章 マルチスレッド化のための `COBOL` プログラムの準備』

オブジェクト参照の比較および設定

条件ステートメント、または JNI サービス `IsSameObject` の呼び出しをコーディングして、オブジェクト参照を比較することができ、`SET` ステートメントを使用してオブジェクト参照を設定することができます。

例えば、次の `IF` ステートメントのいずれかをコーディングして、オブジェクト参照 `anAccount` がオブジェクト・インスタンスをまったく参照していないことをチェックします。

```
If anAccount = Null . . .  
If anAccount = Nulls . . .
```


IsSameObject の呼び出しをコーディングして、2 つのオブジェクト参照 (object1 と object2) が同じオブジェクト・インスタンスを指すかどうか、あるいはそれぞれがオブジェクト・インスタンスを指さないかどうかを検査することができます。引数および戻り値が Java と相互運用可能であることを確認し、呼び出し可能サービスへのアドレス可能性を確立するには、IsSameObject への呼び出しより前に、以下のデータ定義およびステートメントをコーディングします。

Local-storage Section.

```
. . .  
01 is-same Pic X.  
   88 is-same-false Value X'00'.  
   88 is-same-true  Value X'01' Through X'FF'.
```

Linkage Section.

Copy JNI.

Procedure Division.

```
Set Address Of JNIEnv To JNIEnvPtr  
Set Address Of JNINativeInterface To JNIEnv  
Call IsSameObject Using By Value JNIEnvPtr object1 object2  
Returning is-same  
If is-same-true . . .
```

メソッド内では、オブジェクト参照と SELF を比較する IsSameObject の呼び出しをコーディングすることにより、メソッドが呼び出されたオブジェクト・インスタンスをオブジェクト参照が指すかどうかを検査できます。

上記の代わりに、Java equals メソッド (java.lang.Object からの継承) を呼び出して、2 つのオブジェクト参照が同一のオブジェクト・インスタンスを参照するかを決定することができます。

SET ステートメントを使用することにより、オブジェクト参照がオブジェクト・インスタンスを指さないようにすることができます。以下に、その例を示します。

Set anAccount To Null.

また、SET ステートメントを使用して、1 つのオブジェクト参照が別のオブジェクト参照と同じインスタンスを参照するように設定することもできます。以下に、その例を示します。

Set anotherAccount To anAccount.

この SET ステートメントによって、anotherAccount は anAccount と同じオブジェクト・インスタンスを参照します。受け取り側 (anotherAccount) が汎用オブジェクト参照である場合、送り出し側 (anAccount) は、汎用オブジェクト参照か、または型式化オブジェクト参照のどちらかになります。受け取り側が型式化オブジェクト参照である場合は、送り出し側も、受け取り側と同じクラス、または、そのサブクラスのいずれか 1 つにバインドされた、型式化オブジェクト参照でなければなりません。

メソッド内では、オブジェクト参照を SELF に設定して、メソッドが呼び出されたオブジェクト・インスタンスをオブジェクト参照が参照するように設定することができます。以下に、その例を示します。

Set anAccount To Self.

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』
479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

関連参照

IsSameObject (「*The Java Native Interface*」)

メソッドの呼び出し (INVOKE)

Java クライアントでは、COBOL でインプリメントされたクラスのオブジェクト・インスタンスを作成し、それらのオブジェクトで標準の Java 構文を使用してメソッドを呼び出すことができます。COBOL クライアントでは、INVOKE ステートメントをコーディングすることにより、Java または COBOL クラスで定義されたメソッドを呼び出すことができます。

```
Invoke Account "createAccount"  
    using by value 123456  
    returning anAccount  
Invoke anAccount "credit" using by value 500.
```

上記に示された最初の例の INVOKE ステートメントは、クラス名 Account を使用して、createAccount という名前のメソッドを呼び出します。このメソッドは Account クラスで定義または継承されている必要があり、次のいずれかの型でなければなりません。

- Java 静的メソッド
- COBOL ファクトリー・メソッド

using by value 123456 という句は、123456 が、値により受け渡されるメソッドの入力引数であることを表します。入力引数 123456 と戻されるデータ項目 anAccount は、(多重定義されているかもしれない) createAccount メソッドの仮パラメーターおよび戻りの型の定義にそれぞれ準拠している必要があります。

2 番目の INVOKE ステートメントは、戻されるオブジェクト参照 anAccount を使用して、インスタンス・メソッド credit (Account クラスに定義されている) を呼び出します。入力引数 500 は、(おそらく多重定義された) credit メソッドの仮パラメーターの定義に準拠しなければなりません。

実行時におけるその値がターゲット・メソッドのシグニチャー内のメソッド名と一致するリテラルとして、または ID として呼び出すメソッドの名前をコーディングします。メソッド名は、英数字または国別リテラルであるか、あるいはカテゴリ・英字、英数字、または国別のデータ項目でなければならず、解釈されるときには大/小文字が区別されます。

INVOKE ステートメントを (上記の 2 番目の例のステートメントのように) オブジェクト参照を使用してコーディングする場合、そのステートメントは次の 2 つの形式のうちのいずれかで始まります。

```
Invoke objRef "literal-name" . . .  
Invoke objRef identifier-name . . .
```

メソッド名が ID である場合には、オブジェクト参照 (objRef) を、指定する型のない USAGE OBJECT REFERENCE として、すなわち、汎用オブジェクト参照として、定義しなければなりません。

オブジェクト参照の参照先のクラスで、呼び出したメソッドがサポートされない場合、INVOKE ステートメントの ON EXCEPTION 句をコーディングしていないときには、重大なエラー条件が実行時に発生します。

オプションの範囲終了符号 END-VOKE を INVOKE ステートメントで使用することができます。

INVOKE ステートメントは、RETURN-CODE 特殊レジスターを設定しません。

関連タスク

- 『引数の引き渡し用の USING 句』
- 455 ページの『戻り値の取得用の RETURNING 句』
- 441 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION』
- 485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』
- 456 ページの『オーバーライドされたスーパークラス・メソッドの呼び出し』
- 468 ページの『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの呼び出し』

関連参照

INVOKE ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

引数の引き渡し用の USING 句

引数をメソッドに渡す場合、INVOKE ステートメントの USING 句に引数を指定してください。それぞれの引数のデータ型が、意図されたターゲット・メソッドの対応する仮パラメーターの型と一致するように、それぞれの引数のデータ型をコーディングしてください。

表 53. COBOL クライアントでの引数の合致

ターゲット・メソッドのプログラミング言語	引数はオブジェクト参照ですか	引数の DATA DIVISION 定義を次のようにコーディングします	制約事項
COBOL	いいえ	対応する仮パラメーターの定義と同じ	
Java	いいえ	対応する Java パラメーターと相互運用可能	
COBOL または Java	はい	ターゲット・メソッドの対応するパラメーターと同じクラスに型式化されるオブジェクト参照	COBOL クライアントでは (Java クライアントとは異なり)、引数のクラスを、対応するパラメーターのクラスのサブクラスにすることができません。

SET ステートメントまたは REDEFINES 文節を使用して、オブジェクト参照引数を対応する仮パラメーターの型と一致させる方法については、以下に参照されている例を参照してください。

454 ページの『例: COBOL クライアントからの規格合致オブジェクト参照の引数の引き渡し』

ターゲット・メソッドが多重定義されている場合、引数のデータ型は、同じ名前を持つメソッドの中から選択するために使用されます。

引数が BY VALUE で渡される指定をしなければなりません。言い換えれば、引数は、呼び出されるメソッドの対応する仮パラメーターが変更されても影響を受けません。

各引数のデータ型は、Java と相互運用可能な型のいずれかでなければなりません。

関連タスク

441 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION』

443 ページの『インスタンス・メソッドの多重定義』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

521 ページの『データの受け渡し』

関連参照

INVOKE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

SET ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

REDEFINES 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: COBOL クライアントからの規格合致オブジェクト参照の引数の引き渡し

以下の例は、COBOL クライアントのオブジェクト参照引数を、呼び出されるメソッドにおける対応する仮パラメーターの予想クラスに合致させる方法を示しています。

クラス C は、1 つのパラメーター (クラス java.lang.Object のオブジェクトへの参照) を持つメソッド M を定義します。

```
...
Class-id. C inherits Base.
...
Repository.
    Class Base          is "java.lang.Object"
    Class JavaObject is "java.lang.Object".
Identification division.
Factory.
...
Procedure Division.
    Identification Division.
    Method-id. "M".
    Data division.
    Linkage section.
    01 obj object reference JavaObject.
    Procedure Division using by value obj.
...

```

メソッド M を呼び出すには、COBOL クライアントは、クラス java.lang.Object のオブジェクトへの参照である引数を渡す必要があります。以下のクライアントは、データ項目 aString を定義していますが、これを M に引数として渡すことができません。aString は、クラス java.lang.String のオブジェクトへの参照だからです。クライアントはまず SET ステートメントを使用して、aString をデータ項目 anObj (クラス java.lang.Object のオブジェクトへの参照) に割り当てます。(java.lang.String は java.lang.Object のサブクラスなので、この SET ステートメントは正しいものです。) その後クライアントは anObj を引数として M に渡します。

```

. . .
Repository.
    Class jstring    is "java.lang.String"
    Class JavaObject is "java.lang.Object".
Data division.
Local-storage section.
01 aString object reference jstring.
01 anObj    object reference JavaObject.
*
Procedure division.
. . . (statements here assign a value to aString)
Set anObj to aString
Invoke C "M"
    using by value anObj

```

SET ステートメントを使用して、クラス java.lang.Object のオブジェクトへの参照として anObj を取得する代わりに、クライアントは、以下のように REDEFINES 文節で aString および anObj を定義することができます。

```

. . .
01 aString object reference jstring.
01 anObj    redefines aString object reference JavaObject.

```

クライアントが値をデータ項目 aString (つまり、クラス java.lang.String のオブジェクトへの有効な参照) を割り当てた後、anObj を引数として M に渡すことができます。

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』
441 ページの『クラス・インスタンス・メソッド定義用の PROCEDURE DIVISION』

関連参照

INVOKE ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)
SET ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)
REDEFINES 文節 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

戻り値の取得用の RETURNING 句

データ項目がメソッドの結果として戻される場合、その項目を、INVOKE ステートメントの RETURNING 句に指定してください。戻される項目は、クライアントの DATA DIVISION で定義します。

INVOKE ステートメントの RETURNING 句に指定する項目は、以下の表に示すように、ターゲット・メソッドが戻す型と合致している必要があります。

表 54. COBOL クライアントでの戻されるデータ項目の合致

ターゲット・メソッド のプログラミング言語	戻される項目はオブジ ェクト参照ですか	戻される項目の DATA DIVISION 定義を次の ようにコーディングします
COBOL	いいえ	ターゲット・メソッドの RETURNING 項目の 定義と同じ
Java	いいえ	戻された Java データ項目と相互運用可能
COBOL または Java	はい	ターゲット・メソッドが戻すオブジェクト参 照と同じクラスに型式化されるオブジェクト 参照

すべての場合において、戻り値のデータ型は、Java と相互運用可能になる型のうちのいずれかでなければなりません。

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

関連参照

INVOKE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

オーバーライドされたスーパークラス・メソッドの呼び出し

ときおりクラス内で、現行クラスで定義された同じシグニチャーを持つメソッドを呼び出す代わりに、オーバーライドされたスーパークラス・メソッドを呼び出さなければならないことがあります。

例えば、CheckingAccount クラスが、その即時スーパークラス Account に定義されている debit インスタンス・メソッドをオーバーライドすると想定します。次のステートメントをコーディングして、CheckingAccount クラスのメソッド内で Account の debit メソッドを呼び出すことができます。

```
Invoke Super "debit" Using By Value amount.
```

debit メソッドのシグニチャーに一致するように、amount を PIC S9(9) BINARY として定義します。

CheckingAccount クラスは、Account クラスに定義されている print メソッドをオーバーライドします。print メソッドには仮パラメーターがありません。したがって、CheckingAccount クラス内のメソッドは、次のステートメントでスーパークラス print メソッドを呼び出すことができます。

```
Invoke Super "print".
```

キーワード SUPER が示しているのは、呼び出す対象は、現行クラスのメソッドではなく、スーパークラス・メソッドであることです。(SUPER は、現在実行中のメソッドの起動に使用されているオブジェクトへの暗黙の参照です。)

430 ページの『例: 口座』

関連タスク

442 ページの『インスタンス・メソッドのオーバーライド』

関連参照

INVOKE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

クラスのインスタンスの作成および初期化

Java または COBOL クラスで定義されたインスタンス・メソッドを使用するには、まずクラスのインスタンスを作成する必要があります。

クラス *class-name* の新しいインスタンスを生成するには、また、作成したオブジェクトへの参照 *object-reference* を取得するには、次の形式のステートメントをコーディングします。ここで、*object-reference* はクライアントの DATA DIVISION に定義されています。

```
INVOKE class-name NEW . . . RETURNING object-reference
```

メソッド内で INVOKE . . . NEW ステートメントをコーディングし、戻されたオブジェクト参照の使用がメソッド起動の期間に限定されていない場合は、JNI サービス NewGlobalRef を呼び出すことによって、戻されたオブジェクト参照をグローバル参照に変換しなければなりません。

```
Call NewGlobalRef using by value JNIEnvPtr object-reference
    returning object-reference
```

NewGlobalRef を呼び出さない場合には、戻されたオブジェクト参照はあくまでもローカル参照にすぎないため、メソッドが戻った後で自動的に解放されます。

関連タスク

『Java クラスのインスタンス化』

『COBOL クラスのインスタンス化』

479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

482 ページの『ローカル参照とグローバル参照の管理』

449 ページの『クライアント定義用の DATA DIVISION』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

関連参照

INVOKE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

Java クラスのインスタンス化

Java クラスをインスタンス化するには、INVOKE . . . NEW ステートメントの USING 句を RETURNING 句の直前にコーディングし、コンストラクターのシグニチャーと一致する引数の型および数を BY VALUE で渡すことにより、クラスがサポートするパラメーター化コンストラクターを呼び出します。

各引数のデータ型は、Java と相互運用可能な型のいずれかでなければなりません。デフォルトの (パラメーターなし) コンストラクターを呼び出すには、USING 句を省略します。

例えば、Check クラスのインスタンスを生成し、そのインスタンス・データを初期化し、生成した Check インスタンスへの参照 aCheck を取得するには、次のステートメントを COBOL クライアントにコーディングすることができます。

```
Invoke Check New
    using by value aCheckingAccount, payee, 125
    returning aCheck
```

関連タスク

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

関連参照

VALUE 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

INVOKE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

COBOL クラスのインスタンス化

COBOL クラスをインスタンス化するには、型式化オブジェクト参照または汎用オブジェクト参照を、INVOKE . . . NEW ステートメントの RETURNING 句に指定でき

ます。ただし、`USING` 句をコーディングすることはできません。インスタンス・データは、クラス定義の `VALUE` 文節に指定されたとおりに初期化されます。

したがって、`INVOKE . . . NEW` ステートメントは、単一のインスタンス・データのみを有する `COBOL` クラスのインスタンスを生成するときに役立ちます。例えば、次のステートメントは、`Account` クラスのインスタンスを作成し、`Account` クラス定義の `OBJECT` 段落の `WORKING-STORAGE SECTION` の `VALUE` 文節に指定されたとおりに、インスタンス・データを初期化し、新しいインスタンスへの参照 `outAccount` を提供します。

```
Invoke Account New returning outAccount
```

`VALUE` 文節だけを使用して初期化することができない `COBOL` クラス・データの初期化を可能にするには、`COBOL` クラスを設計する際に、`FACTORY` 段落にパラメーター化生成メソッドを定義し、`OBJECT` 段落にパラメーター化初期化メソッドを定義する必要があります。

1. パラメーター化ファクトリー生成メソッドで、以下の手順を実行します。
 - a. `INVOKE class-name NEW RETURNING objectRef` をコーディングして、`class-name` のインスタンスを作成し、`VALUE` 文節を有するインスタンス・データ項目に初期値を与えます。
 - b. パラメーター化した初期化メソッドをインスタンス (`objectRef`) 上で呼び出し、指定された引数 `BY VALUE` をファクトリー・メソッドに渡します。
2. 初期化メソッドで、ロジックをコーディングし、仮パラメーターを介して指定された値を使用して、インスタンス・データ初期化を完了します。

`COBOL` クラスのインスタンスを作成して適切に初期化するために、クライアントはパラメーター化ファクトリー・メソッドを呼び出し、`BY VALUE` で目的の引数を渡します。クライアントに戻されるオブジェクト参照は、ローカル参照です。メソッド内にクライアント・コードがあり、戻されるオブジェクト参照を使用するのがそのメソッドの存続期間に限定されない場合、クライアント・コードは、`JNI` サービス `NewGlobalRef` を呼び出すことによって、戻されるオブジェクト参照をグローバル参照に変換しなければなりません。

468 ページの『例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

479 ページの『`JNI` サービスへのアクセス』

482 ページの『ローカル参照とグローバル参照の管理』

452 ページの『メソッドの呼び出し (`INVOKE`)』

464 ページの『ファクトリー・セクションの定義』

関連参照

`VALUE` 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

`INVOKE` ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

クラスのインスタンスの解放

任意のクラスの個々のオブジェクト・インスタンスを解放するために、アクションを実行する必要はありません。したがって、オブジェクト・インスタンスを解放す

るために有効な構文はありません。Java ランタイム・システムは自動的にガーベッジ・コレクションを実行します。すなわち、使用されなくなったオブジェクトのメモリーを再利用します。

ただし、参照済みオブジェクトのガーベッジ・コレクションを許可するために、ネイティブ COBOL クライアント内のオブジェクトへのローカル参照またはグローバル参照を明示的に解放する必要がある場合があります。

関連タスク

482 ページの『ローカル参照とグローバル参照の管理』

例: クライアントの定義

次の例では、Account クラスの小さいクライアント・プログラムを示します。

プログラムは以下を実行します。

- ファクトリー・メソッド `createAccount` を呼び出して、デフォルト収支ゼロの Account インスタンスを作成します。
- インスタンス・メソッド `credit` を呼び出して、\$500 をこの新規の口座に預金します。
- インスタンス・メソッド `print` を呼び出して、口座の状況を表示します。

(Account クラスは、445 ページの『例: メソッドの定義』で示しました。)

```
cb1 thread,pgmname(longmixed)
Identification division.
Program-id. "TestAccounts" recursive.
Environment division.
Configuration section.
Repository.
    Class Account is "Account".
Data Division.
* Working data is declared in LOCAL-STORAGE instead of
* WORKING-STORAGE so that each thread has its own copy:
Local-storage section.
01 anAccount usage object reference Account.
*
Procedure division.
Test-Account-section.
    Display "Test Account class"
* Create account 123456 with 0 balance:
    Invoke Account "createAccount"
        using by value 123456
        returning anAccount
* Deposit 500 to the account:
    Invoke anAccount "credit" using by value 500
    Invoke anAccount "print"
    Display space
*
    Stop Run.
End program "TestAccounts".
```

468 ページの『例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

468 ページの『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの呼び出し』
243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

サブクラスの定義

クラス (サブクラス、派生クラス、または子クラスと呼ばれる) を、別のクラスを特殊化したもの (スーパークラス、基本クラス、または親クラスと呼ばれる) にすることができます。

サブクラスは、そのスーパークラスのメソッドおよびインスタンス・データを継承し、*is-a* 関係によって、そのスーパークラスに関連付けられています。例えば、サブクラス P がスーパークラス Q から継承し、サブクラス Q がスーパークラス S から継承した場合、P のインスタンスは Q のインスタンスであり、また (推移性によって) S のインスタンスでもあります。したがって、P のインスタンスは、Q と S のメソッドおよびデータを継承します。

サブクラスを使用することの利点:

- コードの再利用: 継承を通じて、サブクラスは、スーパークラスにすでに存在するメソッドを再利用することができます。
- 特殊化: サブクラスでは、スーパークラスが処理しないケースを処理するために新規のメソッドを追加することができます。また、スーパークラスが必要としない新規のデータ項目を追加することもできます。
- アクションの変更: サブクラスは、スーパークラスにあるシグニチャーと同じシグニチャーのメソッドを定義して、スーパークラスから継承するメソッドをオーバーライドすることができます。メソッドをオーバーライドするときは、メソッドの実行内容について、いくつかの小さい変更を行うだけの場合、または全面的な変更を行う場合があります。

制約事項: COBOL プログラムでは多重継承を使用することはできません。定義する各 COBOL クラスには、Java または COBOL でインプリメントされた即時スーパークラスは必ず 1 つだけでなければなりません。また、それぞれのクラスは、直接的または間接的に `java.lang.Object` から派生したものでなければなりません。継承のセマンティクスは、Java によって定義されます。

サブクラスの構造および構文は、クラス定義の構造および構文と同一です。サブクラス定義の OBJECT 段落内で、それぞれ、DATA DIVISION および PROCEDURE DIVISION に、インスタンス・データとメソッドを定義します。個別のオブジェクト・インスタンスではなく、サブクラス自体に関連付けるデータとメソッドを必要とするサブクラスに、サブクラス定義の FACTORY 段落内で、別々の DATA DIVISION および PROCEDURE DIVISION を定義します。

COBOL インスタンス・データは `private` です。サブクラスが COBOL スーパークラスのインスタンス・データにアクセスすることができるのは、スーパークラスがそのアクセスを可能にするために属性 (`get` または `set`) インスタンス・メソッドを定義する場合に限られます。

430 ページの『例: 口座』

463 ページの『例: サブクラスの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

- 432 ページの『クラスの定義』
- 442 ページの『インスタンス・メソッドのオーバーライド』
- 444 ページの『属性 (get および set) メソッドのコーディング』
- 462 ページの『サブクラス・インスタンス・メソッドの定義』
- 464 ページの『ファクトリー・セクションの定義』

関連参照

- 継承、オーバーライド、および隠蔽 (「Java 言語仕様」)
- COBOL クラス定義構造 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

サブクラス定義用の CLASS-ID 段落

CLASS-ID 段落を使用して、サブクラスに名前を付け、そのサブクラスがどの即時 Java または COBOL スーパークラスからその特性を継承するのかを示します。

```
Identification Division.                                Required
Class-id. CheckingAccount inherits Account.             Required
```

上記の例で、定義されるサブクラスは `CheckingAccount` です。`CheckingAccount` は、サブクラス定義において `Account` として認識されているクラスのすべてのメソッドを継承します。`CheckingAccount` メソッドが `Account` インスタンス・データにアクセスできるのは、`Account` クラスが、そのアクセスを可能にするために、属性 (get または set) メソッドを指定する場合に限られます。

ENVIRONMENT DIVISION の CONFIGURATION SECTION の REPOSITORY 段落に、即時スーパークラスの名前を指定しなければなりません。オプションとして、外部で認識されているクラスの名前にスーパークラス名を関連付けることができます。また、定義中のサブクラスの名前 (上記の例の `CheckingAccount`) を REPOSITORY 段落に指定し、その対応する外部クラス名にそれを関連付けることもできます。

関連タスク

- 434 ページの『クラス定義用の CLASS-ID 段落』
- 444 ページの『属性 (get および set) メソッドのコーディング』
- 『サブクラス定義用の REPOSITORY 段落』

サブクラス定義用の REPOSITORY 段落

指定された語をサブクラス定義内で使用するときその語がクラス名であることをコンパイラーに宣言する場合、さらに必要に応じてクラス名を対応する外部クラス名 (コンパイル単位の外側で認識されているクラス名) に関係付ける場合に、REPOSITORY 段落を使用してください。

例えば `CheckingAccount` サブクラス定義のこうした REPOSITORY 段落記入項目では、サブクラス定義内で `CheckingAccount`、`Check`、および `Account` として参照されるクラスの外部クラス名は、それぞれ、`CheckingAccount`、`Check`、および `Account` であることが示されます。

```
Environment Division.                                Required
Configuration Section.                               Required
Repository.                                           Required
  Class CheckingAccount is "CheckingAccount"         Optional
  Class Check          is "Check"                    Required
  Class Account        is "Account".                 Required
```

REPOSITORY 段落では、サブクラス定義において明示的に参照するそれぞれのクラス名ごとに記入項目をコーディングする必要があります。以下に、その例を示します。

- 定義中のサブクラスが継承する元のユーザー定義スーパークラス
- サブクラス定義内のメソッドで参照するクラス

サブクラス内の REPOSITORY 段落記入項目をコーディングする場合の規則は、クラス内の REPOSITORY 段落記入項目をコーディングする場合の規則と同一です。

関連タスク

435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』

関連参照

REPOSITORY 段落 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

サブクラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION

サブクラス OBJECT 段落の DATA DIVISION 内の WORKING-STORAGE SECTION を使用して、サブクラスのスーパークラスに定義したインスタンス・データのほかに、サブクラスが必要とするインスタンス・データを記述します。クラスにインスタンス・データを定義するときに使用する構文と同じ構文を使用します。

例えば、Account クラスの CheckingAccount サブクラスのインスタンス・データの定義は、以下のようになります。

```
Identification division.  
Object.  
  Data division.  
    Working-storage section.  
      01 CheckFee pic S9(9) value 1.  
      . . .  
End Object.
```

関連タスク

436 ページの『クラス・インスタンス・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION』

サブクラス・インスタンス・メソッドの定義

サブクラスは、そのスーパークラスからメソッドを継承します。サブクラス定義において、継承したメソッドと同じシグニチャーを有するインスタンス・メソッドを定義して、サブクラスが継承するインスタンス・メソッドをオーバーライドすることができます。また、サブクラスが必要とする新規メソッドを定義することもできます。

サブクラス・インスタンス・メソッドの構造と構文は、クラス・インスタンス・メソッドの構造と構文と同一です。サブクラス定義の OBJECT 段落の PROCEDURE DIVISION にサブクラス・インスタンス・メソッドを定義します。

463 ページの『例: サブクラスの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

- 438 ページの『クラス・インスタンス・メソッドの定義』
- 442 ページの『インスタンス・メソッドのオーバーライド』
- 443 ページの『インスタンス・メソッドの多重定義』

例: サブクラスの定義 (メソッドに関して)

次の例は、Account クラスの CheckingAccount サブクラスのインスタンス・メソッド定義を示しています。

processCheck メソッドは、Check クラスの Java インスタンス・メソッド getAmount および getPayee を呼び出して、チェック・データを取得します。Account クラスから継承した credit および debit インスタンス・メソッドを呼び出して、当座の受取人を貸し方に記入し、支払人を借方に記入します。

print メソッドは、Account クラスに定義されている print インスタンス・メソッドをオーバーライドします。オーバーライドした print メソッドを呼び出して、口座状況を表示し、また当座手数料も表示します。CheckFee は、サブクラスに定義するインスタンス・データ項目です。

(Account クラスは、445 ページの『例: メソッドの定義』で示しました。)

CheckingAccount クラス (Account のサブクラス)

```
cbl thread,pgmname(longmixed)
Identification Division.
Class-id. CheckingAccount inherits Account.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
    Class CheckingAccount is "CheckingAccount"
    Class Check          is "Check"
    Class Account        is "Account".
*
* (FACTORY paragraph not shown)
*
Identification division.
Object.
Data division.
Working-storage section.
01 CheckFee pic S9(9) value 1.
Procedure Division.
*
*   processCheck method to get the check amount and payee,
*   add the check fee, and invoke inherited methods debit
*   to debit the payer and credit to credit the payee:
Identification Division.
Method-id. "processCheck".
Data division.
Local-storage section.
01 amount pic S9(9) binary.
01 payee usage object reference Account.
Linkage section.
01 aCheck usage object reference Check.
*
Procedure Division using by value aCheck.
    Invoke aCheck "getAmount" returning amount
    Invoke aCheck "getPayee" returning payee
    Invoke payee "credit" using by value amount
    Add checkFee to amount
    Invoke self  "debit"  using by value amount.
```

```

    End method "processCheck".
*
*   print method override to display account status:
    Identification Division.
    Method-id. "print".
    Data division.
    Local-storage section.
    01 printableFee pic $$,$$$,$$9.
    Procedure Division.
        Invoke super "print"
        Move CheckFee to printableFee
        Display " Check fee: " printableFee.
    End method "print".
*
    End Object.
*
    End class CheckingAccount.

```

関連タスク

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

442 ページの『インスタンス・メソッドのオーバーライド』

456 ページの『オーバーライドされたスーパークラス・メソッドの呼び出し』

ファクトリー・セクションの定義

個々のオブジェクト・インスタンスではなく、クラス自体と関連付けられるデータおよびメソッドを定義するには、クラス定義で FACTORY 段落を使用してください。

COBOL ファクトリー・データ は、Java `private` 静的データと同じです。データの単一コピーは、そのクラス用にインスタンス生成され、クラスのすべてのオブジェクト・インスタンスに共有されます。クラスのすべてのインスタンスからデータを収集するときは、ごく一般的にファクトリー・データを使用します。例えば、ファクトリー・データ項目を定義して、作成するクラスのインスタンス数の現在高を集計できます。

COBOL ファクトリー・メソッド は Java `public` 静的メソッドと同じです。これらのメソッドは、どのオブジェクト・インスタンスとも無関係に、クラスによってサポートされます。VALUE 文節を使用しただけではインスタンス・データを初期化できないときは、ごく一般的に、ファクトリー・メソッドを使用して、オブジェクトの生成をカスタマイズします。

対照的に、クラスのそれぞれのオブジェクト・インスタンスごとに作成されるデータを定義したり、クラスのそれぞれのオブジェクト・インスタンスごとにサポートされるメソッドを定義したりする場合には、クラス定義の OBJECT 段落を使用します。

ファクトリー定義は、以下の 3 つの部から構成され、その後に END FACTORY ステートメントが続きます。

表 55. ファクトリー定義の構成

除算	目的	構文
IDENTIFICATION (必須)	ファクトリー定義の開始を示す。	IDENTIFICATION DIVISION. FACTORY.
DATA (オプション)	このクラス用に一度割り振られたデータを記述する (クラスのそれぞれのインスタンスごとに割り振られたデータとは正反対)。	『ファクトリー・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION』 (オプション)
PROCEDURE (オプション)	ファクトリー・メソッドを定義する。	ファクトリー・メソッドの定義: 466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

468 ページの『例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

432 ページの『クラスの定義』

457 ページの『COBOL クラスのインスタンス化』

474 ページの『プロシーチャー指向 COBOL プログラムのラッピング』

474 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの構造化』

ファクトリー・データ定義用の WORKING-STORAGE SECTION

FACTORY 段落の DATA DIVISION の WORKING-STORAGE SECTION を使用して、COBOL クラスが必要とするファクトリー・データ、すなわちクラスのすべてのオブジェクト・インスタンスが共有する、静的に割り振られたデータを記述します。

IDENTIFICATION DIVISION 宣言の直前に入れる必要がある FACTORY キーワードは、クラスのファクトリー・データおよびファクトリー・メソッドの定義の開始を示します。例えば、Account クラスのファクトリー・データの定義は、以下のようになります。

```
Identification division.
Factory.
Data division.
Working-storage section.
01 NumberOfAccounts pic 9(6) value zero.
...
End Factory.
```

上記に示すように、単純ファクトリー・データの初期化は、VALUE 文節を使用して行うことができます。

COBOL ファクトリー・データは、Java `private` 静的データと同じです。他のクラスまたはサブクラス (必要に応じて、同じクラス内のインスタンス・メソッドも) は、COBOL ファクトリー・データを直接参照することはできません。ファクトリー・データは、FACTORY 段落で定義するすべてのファクトリー・メソッドにグローバルです。FACTORY 段落の外側からファクトリー・データにアクセス可能にする場合には、アクセスを可能にするためにファクトリー属性 (get または set) メソッドを定義します。

関連タスク

444 ページの『属性 (get および set) メソッドのコーディング』

457 ページの『COBOL クラスのインスタンス化』

ファクトリー・メソッドの定義

クラス定義の FACTORY 段落の PROCEDURE DIVISION に COBOL ファクトリー・メソッドを定義します。ファクトリー・メソッドは、クラスのどのオブジェクト・インスタンスとは無関係に、クラスによってサポートされる操作を定義します。COBOL ファクトリー・メソッドは Java public 静的メソッドと同じです。

一般的には、そのインスタンスが複雑な初期化を必要とするクラスについて、すなわち、VALUE 文節だけの使用では割り当てることができない値に対して、ファクトリー・メソッドを定義します。ファクトリー・メソッド内でインスタンス・メソッドを呼び出して、インスタンス・データを初期化することができます。ファクトリー・メソッドは、インスタンス・データに直接アクセスすることはできません。

ファクトリー属性 (get および set) メソッドをコーディングして、FACTORY 段落の外側からファクトリー・データにアクセス可能にすることができます。例えば、同じクラスのインスタンス・メソッドから、またはクライアント・プログラムからファクトリー・データにアクセス可能にすることができます。例えば、Account クラスはファクトリー・メソッド getNumberOfAccounts を定義して、口座数の現在の集計を戻すことができます。

ファクトリー・メソッドを使用して、Java プログラムからアクセス可能になるようにプロシージャ指向の COBOL プログラムをラップすることもできます。main という名前のファクトリー・メソッドをコーディングすることで、java コマンドを使用してオブジェクト指向アプリケーションを実行したり、Java の標準的な方法に従ってアプリケーションを構成したりすることができます。詳細については、関連タスクを参照してください。

ファクトリー・メソッドの定義では、インスタンス・メソッドを定義するときに用いる構文と同じ構文を使用します。COBOL ファクトリー・メソッド定義は、4 つの部 (COBOL プログラムに類似) とその後の END METHOD マーカーから構成されます。

表 56. ファクトリー・メソッド定義の構成

除算	目的	構文
IDENTIFICATION (必須)	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ (必須)
ENVIRONMENT (オプション)	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ
DATA (オプション)	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ
PROCEDURE (オプション)	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ	クラス・インスタンス・メソッドの場合と同じ

クラス定義内では、各ファクトリー・メソッド名を固有にする必要はありませんが、各ファクトリー・メソッドに固有のシグニチャーを与える必要があります。フ

ファクトリー・メソッドの多重定義は、インスタンス・メソッドを多重定義する場合とまったく同じ方法で行うことができます。例えば、`CheckingAccount` サブクラスは、2 つの版のファクトリー・メソッド `createCheckingAccount`、すなわち、口座を初期化してデフォルトの収支ゼロを設定する版と、開始残高を渡せるようにする版を提供します。クライアントは、意図されたメソッドのシグニチャーと一致する引数を渡して、`createCheckingAccount` メソッドのいずれかを呼び出すことができます。

ファクトリー・メソッドの DATA DIVISION および FACTORY 段落の DATA DIVISION の両方において、データ項目を同じ名前で作成した場合、そのデータ名に対するメソッド内の参照は、そのメソッド・データ項目だけを参照します。メソッド DATA DIVISION が優先します。

468 ページの『例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

474 ページの『オブジェクト指向アプリケーションの構造化』

474 ページの『プロシージャ指向 COBOL プログラムのラッピング』

457 ページの『COBOL クラスのインスタンス化』

438 ページの『クラス・インスタンス・メソッドの定義』

444 ページの『属性 (get および set) メソッドのコーディング』

443 ページの『インスタンス・メソッドの多重定義』

『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの隠蔽』

468 ページの『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの呼び出し』

ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの隠蔽

サブクラスで定義されたファクトリー・メソッドは、普通ならサブクラスで利用できる継承された COBOL または Java メソッドを (これら 2 つのメソッドが同じシグニチャーを持っている場合) 隠蔽 すると言います。

スーパークラス・ファクトリー・メソッド `f1` を COBOL サブクラスで隠すには、スーパークラス・メソッドと名前が同じで、その PROCEDURE DIVISION USING 句 (ある場合) の仮パラメーターの数およびタイプがスーパークラス・メソッドと同じであるサブクラスでファクトリー・メソッド `f1` を定義します。(スーパークラス・メソッドが Java でインプリメントされる場合には、対応する Java パラメーターのデータ型と相互運用可能な仮パラメーターをコーディングする必要があります。) クライアントがサブクラス名を使用して `f1` を呼び出すとき、スーパークラス・メソッドではなく、サブクラス・メソッドが呼び出されます。

メソッド戻り値の有無および PROCEDURE DIVISION RETURNING 句 (ある場合) で使われる戻り値のデータ型は、サブクラス・ファクトリー・メソッドと隠されたスーパークラス・メソッドにおいて同一でなければなりません。

ファクトリー・メソッドは、Java または COBOL スーパークラスに、インスタンス・メソッドを隠してはいけません。

468 ページの『例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

442 ページの『インスタンス・メソッドのオーバーライド』

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

関連参照

継承、オーバーライド、および隠蔽 (「Java 言語仕様」)

手続き部のヘッダー (「COBOL for Windows 言語解説書」)

ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの呼び出し

COBOL ファクトリー・メソッドまたは Java 静的メソッドを COBOL メソッドまたはクライアント・プログラムに呼び出すには、クラス名を INVOKE ステートメントの第 1 オペランドとしてコーディングします。

例えば、クライアント・プログラムは次のステートメントをコーディングして、createCheckingAccount という名前の多重定義 CheckingAccount ファクトリー・メソッドの 1 つを呼び出して、口座番号 777777 および開始残高 \$300 の当座預金を作成することができます。

```
Invoke CheckingAccount "createCheckingAccount"  
  using by value 777777 300  
  returning aCheckingAccount
```

ファクトリー・メソッドを定義する同じクラス内からファクトリー・メソッドを呼び出す場合にも、クラス名を INVOKE ステートメントの第 1 オペランドとして使用します。

実行時におけるその値がメソッド名であるリテラルとして、または ID として呼び出すメソッドの名前をコーディングします。メソッド名は、英数字または国別リテラルであるか、あるいはカテゴリー英字、英数字、または国別のデータ項目でなければならない、解釈されるときには大/小文字が区別されます。

INVOKE ステートメントで名前を付けるクラスで、呼び出したメソッドがサポートされない場合、INVOKE ステートメントの ON EXCEPTION 句をコーディングしないときには、重大なエラー条件が実行時に発生します。

USING 句で COBOL ファクトリー・メソッドまたは Java 静的メソッドに引数を渡すときの適合要件と、RETURNING 句で戻り値を受けるときの適合要件は、インスタンス・メソッドを呼び出す場合と同じです。

『例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)』

関連タスク

452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

関連参照

INVOKE ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

例: ファクトリーの定義 (メソッドに関して)

次の例は、ファクトリー・データおよびメソッドの定義を示すために前の例を更新したものです。

次の更新が示されています。

- **Account** クラスは、ファクトリー・データとパラメーター化ファクトリー・メソッド `createAccount` を追加します。こうすることで、渡される口座番号を使用して **Account** インスタンスの作成が可能になります。
- **CheckingAccount** サブクラスは、ファクトリー・データおよび多重定義のパラメーター化ファクトリー・メソッド `createCheckingAccount` を追加します。
`createCheckingAccount` の 1 つのインプリメンテーションでデフォルトの収支ゼロの口座を初期化し、もう 1 つのインプリメンテーションで開始残高を渡せるようにします。クライアントは、目的のメソッドのシグニチャーと一致する引数を渡して、メソッドを呼び出すこともできます。
- **TestAccounts** クライアントは、**Account** および **CheckingAccount** クラスのファクトリー・メソッドによって提供されるサービスを呼び出して、**Java Check** クラスのインスタンスを生成します。
- **TestAccounts** クライアント・プログラムからの出力を表示します。

(前の例は、445 ページの『例: メソッドの定義』、459 ページの『例: クライアントの定義』、および 463 ページの『例: サブクラスの定義 (メソッドに関して)』でした。)

また、上記の例の完全なソース・コードが **COBOL** インストール・ディレクトリーの **samples** サブディレクトリーに入っています。(Windows 環境変数 **WDZ70INSTDIR** により、**COBOL** インストール・ディレクトリーの場所が指定されます。) この **samples** サブディレクトリー内の **MAKE** ファイルを使用して、コードのコンパイルとリンクを行うことができます。

Account クラス

```
cb1 thread,pgmname(longmixed),lib
Identification Division.
Class-id. Account inherits Base.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
    Class Base    is "java.lang.Object"
    Class Account is "Account".
*
Identification division.
Factory.
Data division.
Working-storage section.
    01 NumberOfAccounts pic 9(6) value zero.
*
Procedure Division.
*
*   createAccount method to create a new Account
*   instance, then invoke the OBJECT paragraph's init
*   method on the instance to initialize its instance data:
Identification Division.
Method-id. "createAccount".
Data division.
Linkage section.
    01 inAccountNumber pic S9(6) binary.
    01 outAccount object reference Account.
*   Facilitate access to JNI services:
    Copy JNI.
Procedure Division using by value inAccountNumber
    returning outAccount.
```

```

*      Establish addressability to JNI environment structure:
      Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
      Set address of JNINativeInterface to JNIEnv
      Invoke Account New returning outAccount
      Invoke outAccount "init" using by value inAccountNumber
      Add 1 to NumberOfAccounts.
      End method "createAccount".
*
End Factory.
*
Identification division.
Object.
Data division.
Working-storage section.
01 AccountNumber pic 9(6).
01 AccountBalance pic S9(9) value zero.
*
Procedure Division.
*
*      init method to initialize the account:
      Identification Division.
      Method-id. "init".
      Data division.
      Linkage section.
      01 inAccountNumber pic S9(9) binary.
      Procedure Division using by value inAccountNumber.
      Move inAccountNumber to AccountNumber.
      End method "init".
*
*      getBalance method to return the account balance:
      Identification Division.
      Method-id. "getBalance".
      Data division.
      Linkage section.
      01 outBalance pic S9(9) binary.
      Procedure Division returning outBalance.
      Move AccountBalance to outBalance.
      End method "getBalance".
*
*      credit method to deposit to the account:
      Identification Division.
      Method-id. "credit".
      Data division.
      Linkage section.
      01 inCredit pic S9(9) binary.
      Procedure Division using by value inCredit.
      Add inCredit to AccountBalance.
      End method "credit".
*
*      debit method to withdraw from the account:
      Identification Division.
      Method-id. "debit".
      Data division.
      Linkage section.
      01 inDebit pic S9(9) binary.
      Procedure Division using by value inDebit.
      Subtract inDebit from AccountBalance.
      End method "debit".
*
*      print method to display formatted account number and balance:
      Identification Division.
      Method-id. "print".
      Data division.
      Local-storage section.
      01 PrintableAccountNumber pic ZZZZZ999999.
      01 PrintableAccountBalance pic $$$,$$$,$$9CR.
      Procedure Division.

```

```

        Move AccountNumber to PrintableAccountNumber
        Move AccountBalance to PrintableAccountBalance
        Display " Account: " PrintableAccountNumber
        Display " Balance: " PrintableAccountBalance.
    End method "print".
*
    End Object.
*
    End class Account.

```

CheckingAccount クラス (Account のサブクラス)

```

cbl thread,pgmname(longmixed),lib
Identification Division.
Class-id. CheckingAccount inherits Account.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
    Class CheckingAccount is "CheckingAccount"
    Class Check          is "Check"
    Class Account        is "Account".
*
    Identification division.
    Factory.
    Data division.
    Working-storage section.
    01 NumberOfCheckingAccounts pic 9(6) value zero.
*
    Procedure Division.
*
*   createCheckingAccount overloaded method to create a new
*   CheckingAccount instance with a default balance, invoke
*   inherited instance method init to initialize the account
*   number, and increment factory data tally of checking accounts:
    Identification Division.
    Method-id. "createCheckingAccount".
    Data division.
    Linkage section.
    01 inAccountNumber pic S9(6) binary.
    01 outCheckingAccount object reference CheckingAccount.
*   Facilitate access to JNI services:
    Copy JNI.
    Procedure Division using by value inAccountNumber
        returning outCheckingAccount.
*   Establish addressability to JNI environment structure:
    Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
    Set address of JNINativeInterface to JNIEnv
    Invoke CheckingAccount New returning outCheckingAccount
    Invoke outCheckingAccount "init"
        using by value inAccountNumber
    Add 1 to NumberOfCheckingAccounts.
    End method "createCheckingAccount".
*
*   createCheckingAccount overloaded method to create a new
*   CheckingAccount instance, invoke inherited instance methods
*   init to initialize the account number and credit to set the
*   balance, and increment factory data tally of checking accounts:
    Identification Division.
    Method-id. "createCheckingAccount".
    Data division.
    Linkage section.
    01 inAccountNumber pic S9(6) binary.
    01 inInitialBalance pic S9(9) binary.
    01 outCheckingAccount object reference CheckingAccount.
    Copy JNI.
    Procedure Division using by value inAccountNumber
        inInitialBalance

```

```

        returning outCheckingAccount.
    Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
    Set address of JNIInterface to JNIEnv
    Invoke CheckingAccount New returning outCheckingAccount
    Invoke outCheckingAccount "init"
        using by value inAccountNumber
    Invoke outCheckingAccount "credit"
        using by value inInitialBalance
    Add 1 to NumberOfCheckingAccounts.
    End method "createCheckingAccount".
*
* End Factory.
*
* Identification division.
* Object.
* Data division.
* Working-storage section.
* 01 CheckFee pic S9(9) value 1.
* Procedure Division.
*
* processCheck method to get the check amount and payee,
* add the check fee, and invoke inherited methods debit
* to debit the payer and credit to credit the payee:
* Identification Division.
* Method-id. "processCheck".
* Data division.
* Local-storage section.
* 01 amount pic S9(9) binary.
* 01 payee usage object reference Account.
* Linkage section.
* 01 aCheck usage object reference Check.
* Procedure Division using by value aCheck.
*   Invoke aCheck "getAmount" returning amount
*   Invoke aCheck "getPayee" returning payee
*   Invoke payee "credit" using by value amount
*   Add checkFee to amount
*   Invoke self "debit" using by value amount.
* End method "processCheck".
*
* print method override to display account status:
* Identification Division.
* Method-id. "print".
* Data division.
* Local-storage section.
* 01 printableFee pic $$,$$$,$$9.
* Procedure Division.
*   Invoke super "print"
*   Move CheckFee to printableFee
*   Display " Check fee: " printableFee.
* End method "print".
*
* End Object.
*
* End class CheckingAccount.

```

Check クラス

```

/**
 * A Java class for check information
 */
public class Check {
    private CheckingAccount payer;
    private Account payee;
    private int amount;

    public Check(CheckingAccount inPayer, Account inPayee, int inAmount) {
        payer=inPayer;
    }
}

```

```

        payee=inPayee;
        amount=inAmount;
    }

    public int getAmount() {
        return amount;
    }

    public Account getPayee() {
        return payee;
    }
}

```

TestAccounts クライアント・プログラム

```

cbl thread,pgmname(longmixed)
Identification division.
Program-id. "TestAccounts" recursive.
Environment division.
Configuration section.
Repository.
    Class Account          is "Account"
    Class CheckingAccount is "CheckingAccount"
    Class Check           is "Check".
Data Division.
* Working data is declared in Local-storage
* so that each thread has its own copy:
Local-storage section.
01 anAccount          usage object reference Account.
01 aCheckingAccount  usage object reference CheckingAccount.
01 aCheck            usage object reference Check.
01 payee             usage object reference Account.
*
Procedure division.
Test-Account-section.
    Display "Test Account class"
* Create account 123456 with 0 balance:
    Invoke Account "createAccount"
        using by value 123456
        returning anAccount
* Deposit 500 to the account:
    Invoke anAccount "credit" using by value 500
    Invoke anAccount "print"
    Display space
*
    Display "Test CheckingAccount class"
* Create checking account 777777 with balance of 300:
    Invoke CheckingAccount "createCheckingAccount"
        using by value 777777 300
        returning aCheckingAccount
* Set account 123456 as the payee:
    Set payee to anAccount
* Initialize check for 125 to be paid by account 777777 to payee:
    Invoke Check New
        using by value aCheckingAccount, payee, 125
        returning aCheck
* Debit the payer, and credit the payee:
    Invoke aCheckingAccount "processCheck"
        using by value aCheck
    Invoke aCheckingAccount "print"
    Invoke anAccount "print"
*
    Stop Run.
End program "TestAccounts".

```

TestAccounts クライアント・プログラムが生成する出力

```
Test Account class
Account:      123456
Balance:      $500

Test CheckingAccount class
Account:      777777
Balance:      $174
Check fee:    $1
Account:      123456
Balance:      $625
```

関連タスク

- 456 ページの『クラスのインスタンスの作成および初期化』
- 466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』
- 468 ページの『ファクトリー・メソッドまたは静的メソッドの呼び出し』
- 243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

プロシージャ指向 COBOL プログラムのラッピング

ラッパー は、オブジェクト指向コードとプロシージャ指向コード間のインターフェースを指定するクラスです。ファクトリー・メソッドは、既存のプロシージャ型 COBOL コード用にラッパーを書き込み、Java プログラムからアクセス可能にするときの便利な方法を提供します。

COBOL コードをラップするためには、以下の手順を実行します。

1. FACTORY 段落を含む単純 COBOL クラスを作成する。
2. FACTORY 段落で、CALL ステートメントを使用してプロシージャ型プログラムを呼び出すファクトリー・メソッドをコーディングする。

Java プログラムは、静的メソッドの呼び出しの式を使用して、すなわち、COBOL プロシージャ型プログラムを呼び出して、ファクトリー・メソッドを呼び出すことができます。

関連タスク

- 432 ページの『クラスの定義』
- 464 ページの『ファクトリー・セクションの定義』
- 466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

オブジェクト指向アプリケーションの構造化

次の 3 つの方法のいずれかで、オブジェクト指向 COBOL 構文を使用するアプリケーションを構造化することができます。

オブジェクト指向アプリケーションは、次のいずれかで始めることができます。

- COBOL プログラム。名前は何でも構いません。

このプログラムを実行するには、コマンド・プロンプトで実行可能モジュールの名前を指定します。

- `main` という名前のメソッドを含む Java クラス定義。`main` は、単一の `String[]` 型パラメーターを持つ `public`、`static`、および `void` として宣言します。

`main` を含むクラスの名前を指定し、0 以上のストリングをコマンド行引数として渡すことで、`java` コマンドでアプリケーションを実行できます。

- `main` という名前のファクトリー・メソッドを含む COBOL クラス定義。`main` は、`RETURNING` 句を指定せず、`java.lang.String` 型のエレメントの配列であるクラスへのオブジェクト参照である単一の `USING` パラメーターを指定して宣言します。つまり、`main` は、事実上、`String[]` 型のパラメーターを 1 つ持つ、`public`、`static`、および `void` です。

`main` を含むクラスの名前を指定し、0 以上のストリングをコマンド行引数として渡すことで、`java` コマンドでアプリケーションを実行できます。

以下の場合には、この方法でオブジェクト指向アプリケーションを構成します。

- `java` コマンドを使用してアプリケーションを実行する。
- アプリケーションが Java クラス・ファイルの `main` メソッドで開始しなければならない環境でアプリケーションを実行する。
- 標準的な Java プログラミング方式に従う。

『例: `java` コマンドを使用して実行できる COBOL アプリケーション』

関連タスク

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

240 ページの『プログラムの実行』

466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

486 ページの『Java 用の配列およびストリングの宣言』

例: `java` コマンドを使用して実行できる COBOL アプリケーション

以下の例では、`main` という名前のファクトリー・メソッドを含む COBOL クラス定義を示します。

いずれの場合も、`main` には `RETURNING` 句がなく、`java.lang.String` 型のエレメントの配列であるクラスへのオブジェクト参照である単一の `USING` パラメーターがあります。これらのアプリケーションは、`java` コマンドを使用して実行できます。

メッセージの表示

```

cbl thread
Identification Division.
Class-id. CBLmain inherits Base.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
    Class Base is "java.lang.Object"
    Class stringArray is "jobjectArray:java.lang.String"
    Class CBLmain is "CBLmain".
*
Identification Division.
Factory.
    Procedure division.
```



```

*
  Identification Division.
  Method-id. "main".
  Data division.
  Linkage section.
  01 SA usage object reference stringArray.
  Procedure division using by value SA.
    Display " >> COBOL main method entered"
    .
  End method "main".
End factory.
End class CBLmain.

```

入カストリングのエコー

```

cbl thread,lib,ssrange
Identification Division.
Class-id. Echo inherits Base.
Environment Division.
Configuration section.
Repository.
  Class Base is "java.lang.Object"
  Class stringArray is "jobjectArray:java.lang.String"
  Class jstring is "java.lang.String"
  Class Echo is "Echo".
*
  Identification Division.
  Factory.
  Procedure division.
*
  Identification Division.
  Method-id. "main".
  Data division.
  Local-storage section.
  01 SAlen          pic s9(9) binary.
  01 I              pic s9(9) binary.
  01 SAelement      object reference jstring.
  01 SAelementlen   pic s9(9) binary.
  01 P              pointer.
  Linkage section.
  01 SA             object reference stringArray.
  01 Sbuffer        pic N(65535).
  Copy "JNI.cpy" suppress.
  Procedure division using by value SA.
    Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
    Set address of JNINativeInterface to JNIEnv
    Call GetArrayLength using by value JNIEnvPtr SA
      returning SAlen
    Display "Input string array length: " SAlen
    Display "Input strings:"
    Perform varying I from 0 by 1 until I = SAlen
      Call GetObjectArrayElement
        using by value JNIEnvPtr SA I
        returning SAelement
      Call GetStringLength
        using by value JNIEnvPtr SAelement
        returning SAelementlen
      Call GetStringChars
        using by value JNIEnvPtr SAelement 0
        returning P
      Set address of Sbuffer to P
      Display function display-of(Sbuffer(1:SAelementlen))
      Call ReleaseStringChars
        using by value JNIEnvPtr SAelement P
    End-perform

```

```
End method "main".  
End factory.  
End class Echo.
```

関連タスク

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

466 ページの『ファクトリー・メソッドの定義』

479 ページの『第 25 章 Java メソッドとの通信』

第 25 章 Java メソッドとの通信

Java との言語間インターオペラビリティを達成するには、Java Native Interface (JNI) のサービスの使用、データ型のコーディング、および COBOL プログラムのコンパイルに関して、特定の規則および指針に従う必要があります。

Java で書き込まれたメソッドを COBOL プログラムから呼び出したり、COBOL で書き込まれたメソッドを Java プログラムから呼び出したりすることができます。Java の基本オブジェクト機能に対応するには、COBOL オブジェクト指向言語をコーディングする必要があります。追加の Java 機能に対応するには、JNI サービスを呼び出すことができます。

Java プログラムはマルチスレッド化され、非同期シグナルを用いる場合があります。したがって、THREAD オプションを使用して COBOL プログラムをコンパイルしてください。

関連タスク

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

『JNI サービスへのアクセス』

484 ページの『Java とのデータ共用』

429 ページの『第 24 章 オブジェクト指向プログラムの作成』

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

553 ページの『第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備』

関連参照

Java 2 Enterprise Edition Developer's Guide

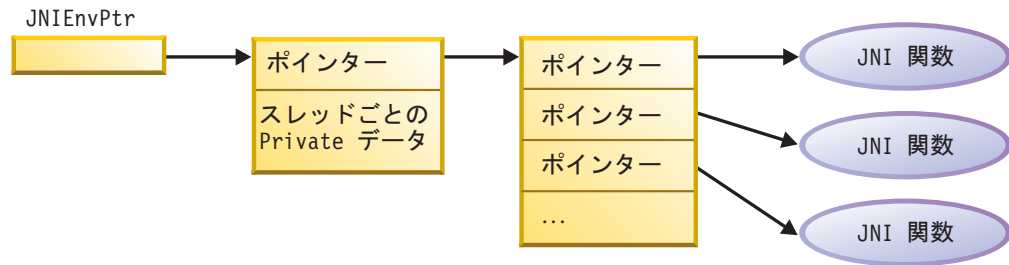
JNI サービスへのアクセス

Java Native Interface (JNI) は、COBOL と Java を併用するアプリケーションを開発する際に使用できる多くの呼び出し可能サービスを提供します。このサービスへのアクセスを円滑に行うには、COBOL プログラムの LINKAGE SECTION に JNI.cpy をコピーします。

JNI.cpy コピーブックには、以下の定義が含まれています。

- Java JNI タイプに対応する COBOL データ定義
- JNINativeInterface、呼び出し可能サービス関数にアクセスするための関数ポインターが含まれている JNI 環境構造

次の図に示すように、JNI 環境ポインターからの 2 つのレベルの間接化技法によって JNI 環境構造を取得します。



特殊レジスタ `JNIEnvPtr` を使用して、JNI 環境ポインタを参照し、JNI 環境構造のアドレスを取得します。`JNIEnvPtr` は、`USAGE POINTER` を使用して暗黙的に定義されます。それを受取データ項目として使用することはできません。JNI 環境構造の内容を参照する前に、以下のステートメントをコーディングして、そのアドレス可能性を確立する必要があります。

```

Linkage section.
COPY JNI
. . .
Procedure division.
    Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
    Set address of JNINativeInterface to JNIEnv
    . . .
  
```

上のコードは、以下の項目のアドレスを設定します。

- `JNIEnv` は `JNI.cpy` が提供するポインタ・データ項目です。`JNIEnvPtr` は、環境ポインタが含まれている COBOL 特殊レジスタです。
- `JNINativeInterface` は `JNI.cpy` に含まれている COBOL グループ構造です。この構造には、JNI 呼び出し可能サービスの関数ポインタの配列が含まれている JNI 環境構造がマップされています。

上記のステートメントをコーディングした後に、関数ポインタを参照する `CALL` ステートメントを使用して、JNI 呼び出し可能サービスにアクセスすることができます。次の例に示すように、環境ポインタを必要とするサービスに、最初の引数として `JNIEnvPtr` 特殊レジスタを渡すことができます。

```

01 InputArrayObj usage object reference jlongArray.
01 ArrayLen pic S9(9) comp-5.
. . .
    Call GetArrayLength using by value JNIEnvPtr InputArrayObj
    returning ArrayLen
  
```

重要: すべての引数を値によって JNI 呼び出し可能サービスに渡します。相互運用可能にするには、引数をネイティブ形式にする必要があります (例えば、データ記述記入項目に `NATIVE` 文節を使用して宣言します)。

一部の JNI 呼び出し可能サービスは、Java クラス・オブジェクト参照を引数として必要とします。クラスに関連付けられたクラス・オブジェクトへの参照を取得するには、以下の JNI 呼び出し可能サービスのどちらかを使用します。

- `GetObjectClass`
- `FindClass`

制限: JNI 環境ポインタはスレッド固有のものです。スレッド間での受け渡しはしないでください。

関連タスク

482 ページの『ローカル参照とグローバル参照の管理』

『Java 例外の処理』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

447 ページの『クライアントの定義』

関連参照

707 ページの『付録 G. JNI.cpy』

Java Native Interface

Java 例外の処理

JNI サービスを使用して、Java 例外を `throw` したり、`catch` したりします。

例外の `throw`: COBOL メソッドから Java 例外を `throw` するには、以下のサービスのどちらかを使用します。

- `Throw`
- `ThrowNew`

`throw` したオブジェクトは、`java.lang.Throwable` のサブクラスのインスタンスにする必要があります。

Java 仮想マシン (JVM) は、呼び出しを含んでいるメソッドが完了して JVM に戻るまで、`throw` された例外の認識も処理も行いません。

例外の `catch`: Java 例外を `throw` した可能性のあるメソッドを呼び出した後、次のステップを実行できます。

1. 例外が発生したかどうかをテストします。
2. 例外が発生した場合は、その例外を処理します。
3. 例外をクリアします (クリアが適切な場合)。

次の JNI サービスを使用します。

- `ExceptionOccurred`
- `ExceptionCheck`
- `ExceptionDescribe`
- `ExceptionClear`

エラー分析を行うには、戻された例外オブジェクトによってサポートされるメソッドを使用します。このオブジェクトは、`java.lang.Throwable` クラスのインスタンスです。

『例: Java 例外の処理』

例: Java 例外の処理

次の例は、Java からの例外を `catch` するための JNI サービスの使用と、エラー分析を行うための `java.lang.Throwable` の `PrintStackTrace` メソッドの使用を示しています。

```

Repository.
    Class JavaException is "java.lang.Exception".
. . .
Local-storage section.
01 ex usage object reference JavaException.
Linkage section.
COPY "JNI.cpy".
. . .
Procedure division.
    Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
    Set address of JNINativeInterface to JNIEnv
    . . .
    Invoke anObj "someMethod"
    Perform ErrorCheck
. . .
ErrorCheck.
    Call ExceptionOccurred
        using by value JNIEnvPtr
        returning ex
    If ex not = null then
        Call ExceptionClear using by value JNIEnvPtr
        Display "Caught an unexpected exception"
        Invoke ex "printStackTrace"
        Stop run
    End-if

```

ローカル参照とグローバル参照の管理

Java 仮想マシンは、ネイティブ・メソッド (COBOL メソッドなど) で使用されるオブジェクト参照を追跡します。この追跡によって、ガーベッジ・コレクションの際、まだ使用中のオブジェクトが解放されないようにします。

オブジェクト参照には、以下の 2 つのクラスがあります。

ローカル参照

ローカル参照は、呼び出したメソッドが稼働している間のみ有効です。ネイティブ・メソッドが戻ると、ローカル参照の自動解放が実行されます。

グローバル参照

グローバル参照は、明示的に削除するまで有効です。グローバル参照は、JNI サービス `NewGlobalRef` を使用して、ローカル参照から作成することができます。

以下のオブジェクト参照は常にローカルです。

- メソッド・パラメーターとして受け取られるオブジェクト参照
- メソッドの RETURNING 値としてメソッドの起動から戻されるオブジェクト参照
- JNI 関数への呼び出しによって戻されるオブジェクト参照
- INVOKE . . . NEW ステートメントを使用して作成するオブジェクト参照

ローカル参照またはグローバル参照のいずれかをオブジェクト参照引数として JNI サービスに渡すことができます。

RETURNING 値としてローカル参照またはグローバル参照のいずれかを戻すメソッドをコーディングできます。ただし、いずれの場合も、呼び出すプログラムが受け取る参照はローカル参照です。

メソッドの起動で USING 引数としてローカル参照またはグローバル参照のいずれかを渡すことができます。ただし、いずれの場合も、呼び出されたメソッドが受け取る参照はローカル参照です。

ローカル参照は、それが作成されたスレッド内でのみ有効です。ローカル参照をスレッドから別のスレッドに渡すことはできません。

関連タスク

479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

『ローカル参照の削除、保管、および解放』

ローカル参照の削除、保管、および解放

ローカル参照は、メソッド内で、随時に手動で削除できます。ローカル参照は、メソッドの LOCAL-STORAGE SECTION に定義したオブジェクト参照内にもみ保管します。

次のデータ項目のいずれかで参照を保管する場合は、SET ステートメントを使用して、ローカル参照をグローバル参照に変換します。

- オブジェクト・インスタンス変数
- ファクトリー変数
- メソッドの WORKING-STORAGE SECTION 内のデータ項目

そうしないと、エラーが発生します。メソッドが戻ったときにこれらのストレージ域は保持されるので、ローカル参照は無効になります。

ほとんどのケースにおいて、メソッドが戻るときに発生するローカル参照の自動解放に依存することができます。ただし、一部のケースにおいては、JNI サービス DeleteLocalRef を使用して、メソッド内のローカル参照を明示的に解放する必要があります。以下に、明示的解放が適切な 2 つの状態を示します。

- メソッドにおいて、ラージ・オブジェクトにアクセスすることで、オブジェクトへのローカル参照を作成します。膨大な計算を行った後で、メソッドが戻ります。このローカル参照は、ガーベッジ・コレクションの間にオブジェクトを解放する妨げになるため、このラージ・オブジェクトを別の計算に必要としない場合には、このオブジェクトを解放してください。
- メソッドに多数のローカル参照を作成しますが、それらのすべてのローカル参照を同時には使用しません。Java 仮想マシンは、各ローカル参照を追跡するためのスペースが必要です。不要になったローカル参照を解放すると、システムがメモリ不足にならないようにすることができます。

例えば、COBOL メソッドにおいて、大規模な配列のオブジェクトをループし、エレメントをローカル参照として検索し、それぞれの反復ごとに 1 つのエレメントを操作します。それぞれの反復後に、配列エレメントへのローカル参照を解放することができます。

ローカル参照およびグローバル参照を管理するには、以下の呼び出し可能サービスを使用してください。

表 57. ローカルおよびグローバル参照の JNI サービス

サービス	入力引数	戻り値	目的
NewGlobalRef	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター ローカルまたはグローバル・オブジェクト参照 	グローバル参照、またはシステムがメモリー不足のときは NULL	入力オブジェクト参照が参照するオブジェクトに新規グローバル参照を作成する
DeleteGlobalRef	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター グローバル・オブジェクト参照 	なし	入力オブジェクト参照が参照するオブジェクトへのグローバル参照を削除する
DeleteLocalRef	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター ローカル・オブジェクト参照 	なし	入力オブジェクト参照が参照するオブジェクトへのローカル参照を削除する

関連タスク

479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

Java アクセス制御

Java アクセス修飾子 `protected` および `private` は、Java Native Interface を使用すると、強制されません。したがって、COBOL プログラムは、Java クライアントからは呼び出し不可能な `protected` または `private` Java メソッドを呼び出すことができます。この使用法はお勧めできません。

Java とのデータ共用

Java データ型と同じものを持つ COBOL データ型を共有することができます。(COBOL データ型には、Java データ型と同じものがありますが、同じでないものもあります。)

次の方法で、データ項目を Java と共用します。

- INVOKE ステートメントの USING 句に引数として渡します。
- Java メソッドから、USING 句のパラメーターとして受け取ります。
- INVOKE ステートメントの RETURNING 値として受け取ります。
- COBOL メソッドの PROCEDURE DIVISION ヘッダーの RETURNING 句の値として戻します。

配列およびストリングを渡したり受け取ったりするには、以下のように、それらをオブジェクト参照として宣言します。

- 特殊配列クラスのうちの 1 つのインスタンスが含まれているオブジェクト参照として、配列を宣言します。
- `jstring` クラスのインスタンスが含まれているオブジェクト参照として、ストリングを宣言します。

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

486 ページの『Java 用の配列およびストリングの宣言』

487 ページの『Java 配列の取り扱い』

490 ページの『Java スtringの取り扱い』
452 ページの『メソッドの呼び出し (INVOKE)』
521 ページの『第 28 章 データの共用』

COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング

COBOL では、Java と通信する際に、特定のデータ型のみを使用することができます。

表 58. COBOL および Java で相互運用可能なデータ型

Java の基本データ型	対応する COBOL データ型
boolean ¹	PIC X の後に以下の形式とまったく同じ 2 つの条件名を記述する。 <i>level-number data-name PIC X.</i> 88 <i>data-name-false</i> value X'00'. 88 <i>data-name-true</i> value X'01' through X'FF'.
byte ¹	1 バイト英数字: PIC X または PIC A
short ³	USAGE BINARY、COMP、COMP-4、または COMP-5、形式 S9(<i>n</i>) の PICTURE 文節付き。ここで、1<= <i>n</i> <=4
int ³	USAGE BINARY、COMP、COMP-4、または COMP-5、形式 S9(<i>n</i>) の PICTURE 文節付き。ここで、5<= <i>n</i> <=9
long ³	USAGE BINARY、COMP、COMP-4、または COMP-5、形式 S9(<i>n</i>) の PICTURE 文節。ここで、10<= <i>n</i> <=18
float ²	USAGE COMP-1
double ²	USAGE COMP-2
char	1 文字基本国別: PIC N USAGE NATIONAL. (国別グループは不可です。)
クラス型 (オブジェクト参照)	USAGE OBJECT REFERENCE <i>class-name</i>

1. boolean 型と byte 型はいずれもそれぞれ PIC X に対応していますが、この 2 つは区別する必要があります。PIC X は、前述の 2 つの条件名を指定して引数またはパラメーターを定義した場合にのみ、boolean 型として解釈されます。それ以外の場合、PIC X データ項目は、Java の byte 型として解釈されます。1 バイトの英数字項目には、EBCDIC またはネイティブ形式の内容を含めることができます。

2. Java 浮動小数点データは、IEEE 浮動小数点として表現されます。INVOKE ステートメント内の引数として渡す浮動小数点データ項目や、Java メソッドからのパラメーターとして受け取る浮動小数点データ項目は、ネイティブ形式でなければなりません。したがって、cob2 コマンドの -host オプションか、または FLOAT(S390) オプションをコンパイラに使用する場合は、データ記述に NATIVE 句を使用して、Java メソッドに渡す (あるいは Java メソッドから受け取る) 浮動小数点データ項目それぞれを宣言する必要があります。

3. INVOKE ステートメント内の引数として渡す 2 進数データ項目や、Java メソッドからのパラメーターとして受け取る 2 進数データ項目は、データ記述内に NATIVE 句を使用して宣言するなどの方法で、ネイティブ形式にする必要があります。2 進数データ項目は、ネイティブ形式の場合にのみ Java と相互運用可能になります。

関連タスク

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

関連参照

228 ページの『cob2 オプション』

253 ページの『BINARY』

255 ページの『CHAR』

274 ページの『FLOAT』

Java 用の配列およびストリングの宣言

Java と通信する場合には、特別な配列クラスで配列を宣言し、jstring でストリングを宣言してください。次の表に示されている COBOL データ型をコーディングします。

表 59. COBOL および Java で相互運用可能な配列およびストリング

Java データ型	対応する COBOL データ型
boolean[]	オブジェクト参照 jbooleanArray
byte[]	オブジェクト参照 jbyteArray
short[]	オブジェクト参照 jshortArray
int[]	オブジェクト参照 jintArray
long[]	オブジェクト参照 jlongArray
char[]	オブジェクト参照 jcharArray
Object[]	オブジェクト参照 jobjectArray
String	オブジェクト参照 jstring

Java とのインターオペラビリティのためにこれらのクラスのいずれかを使用するには、REPOSITORY 段落で項目をコーディングする必要があります。以下に、その例を示します。

```
Configuration section.  
Repository.  
    Class jbooleanArray is "jbooleanArray".
```

オブジェクト配列型に対する REPOSITORY 段落記入項目では、以下のいずれかの形式の外部クラス名を指定しなければなりません。

```
"jobjectArray"  
"jobjectArray:external-classname-2"
```

最初のケースでは、REPOSITORY 記入項目は、配列エレメントが java.lang.Object 型のオブジェクトである配列クラスを指定しています。2 番目のケースでは、REPOSITORY 記入項目は、配列のエレメントが external-classname-2 型のオブジェクトである配列クラスを指定しています。jobjectArray 型の指定と、配列のエレメントの外部クラス名の間の分離文字として、コロンをコーディングします。

次の例は、両方のケースを示しています。例では、oa は、java.lang.Object 型のオブジェクトであるエレメントの配列を定義しています。また、aDepartment は、com.acme.Employee 型のオブジェクトであるエレメントの配列を定義しています。

```
Environment Division.  
Configuration Section.  
Repository.  
    Class jobjectArray is "jobjectArray"  
    Class Employee    is "com.acme.Employee"  
    Class Department  is "jobjectArray:com.acme.Employee".
```

```

. . .
Linkage section.
01 oa          usage object reference jobjectArray.
01 aDepartment usage object reference Department.
. . .
Procedure division using by value aDepartment.
. . .

```

475 ページの『例: java コマンドを使用して実行できる COBOL アプリケーション』

以下の Java 配列型は現在、COBOL プログラムとの相互協調処理にはサポートされていません。

表 60. COBOL および Java で相互運用可能でない配列型

Java データ型	対応する COBOL データ型
float[]	オブジェクト参照 jfloatArray
double[]	オブジェクト参照 jdoubleArray

関連タスク

435 ページの『クラス定義用の REPOSITORY 段落』

Java 配列の取り扱い

COBOL プログラムで配列を表すには、Java タイプの配列に対応するデータ型の単一基本項目が含まれているグループ項目をコーディングします。その配列に適した OCCURS または OCCURS DEPENDING ON 文節を指定します。

例えば、次のコードは、jlongArray オブジェクトから 500 以下の整数値を受け取る構造を指定します。

```

01 jlongArray.
   02 X pic S9(10) comp-5 occurs 1 to 500 times depending on N.

```

特殊な Java 配列クラスのオブジェクトを操作するには、JNI が提供するサービスを呼び出します。サービスを使用して、配列の個々のエレメントにアクセスして設定し、呼び出したサービスを使用して、以下を行います。

表 61. JNI 配列サービス

サービス	入力引数	戻り値	目的
GetArrayLength	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター 配列オブジェクトの参照 	2 進数フルワード整数としての配列の長さ	Java 配列オブジェクト内のエレメント数を取得する
NewBooleanArray、 NewByteArray、 NewCharArray、 NewShortArray、 NewIntArray、 NewLongArray	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター 2 進数フルワード整数としての、配列内のエレメントの数 	配列オブジェクトの参照、または配列を構成できない場合は NULL	新しい Java 配列オブジェクトを作成する

表 61. JNI 配列サービス (続き)

サービス	入力引数	戻り値	目的
GetBooleanArrayElements、 GetByteArrayElements、 GetCharArrayElements、 GetShortArrayElements、 GetIntArrayElements、 GetLongArrayElements	<ul style="list-style-type: none"> • JNI 環境ポインタ • 配列オブジェクトの参照 • ブール項目へのポインタポインタが NULL でない場合は、配列エレメントのコピーが作成されたときは、ブール項目は true に設定される。コピーが作成された場合、変更を配列オブジェクトに書き戻す必要がある場合は、対応する ReleasexxxArrayElements サービスを呼び出さなければならない。 	ストレージ・バッファへのポインタ	配列エレメントを Java 配列からストレージ・バッファに抽出する。サービスにより、ポインタがストレージ・バッファに戻される。ポインタは、LINKAGE SECTION に定義される COBOL グループ・データ項目のアドレスとして使用することができる。
ReleaseBooleanArrayElements、 ReleaseByteArrayElements、 ReleaseCharArrayElements、 ReleaseShortArrayElements、 ReleaseIntArrayElements、 ReleaseLongArrayElements	<ul style="list-style-type: none"> • JNI 環境ポインタ • 配列オブジェクトの参照 • ストレージ・バッファへのポインタ • 2 進数フルワード整数としてのリリース・モード。詳細については、Java JNI の資料を参照。(推奨: 配列の内容をコピーして戻し、ストレージ・バッファを解放するには、0 を指定する。) 	なし。配列のストレージは解放される。	Java 配列から抽出したエレメントが含まれているストレージ・バッファを解放し、条件によっては、更新された配列値を配列オブジェクトにマップして戻す。
NewObjectArray	<ul style="list-style-type: none"> • JNI 環境ポインタ • 2 進数フルワード整数としての、配列内のエレメントの数 • 配列エレメント・クラスに対するオブジェクト参照 • 最初のエレメント値に対するオブジェクト参照。すべての配列エレメントにはこの値が設定されます。 	配列オブジェクトの参照、または配列を構成できない場合は NULL ¹ 。	新しい Java オブジェクト配列を作成する。
GetObjectArrayElement	<ul style="list-style-type: none"> • JNI 環境ポインタ • 配列オブジェクトの参照 • 2 進数フルワード整数としての、起点 0 の配列エレメント索引 	オブジェクト参照 ²	オブジェクト配列内の特定の索引のエレメントを返す。
SetObjectArrayElement	<ul style="list-style-type: none"> • JNI 環境ポインタ • 配列オブジェクトの参照 • 2 進数フルワード整数としての、起点 0 の配列エレメント索引 • 新しい値に対するオブジェクト参照 	なし ³	オブジェクト配列内のエレメントを設定する。

表 61. JNI 配列サービス (続き)

サービス	入力引数	戻り値	目的
1. システムがメモリ不足の場合、NewObjectArray は例外を throw します。 2. 索引が有効でない場合、GetObjectArrayElement は例外を throw します。 3. 索引が有効でない場合、または新しい値が配列のエレメント・クラスのサブクラスでない場合、SetObjectArrayElement は例外を throw します。			

475 ページの『例: java コマンドを使用して実行できる COBOL アプリケーション』

『例: Java int 配列の処理』

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

486 ページの『Java 用の配列およびストリングの宣言』

479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

例: Java int 配列の処理

次の例は、Java 配列クラスと JNI サービスを使用した、COBOL での Java 配列の処理を示しています。

```

cb1 lib,thread
Identification division.
Class-id. OOARRAY inherits Base.
Environment division.
Configuration section.
Repository.
    Class Base is "java.lang.Object"
    Class jintArray is "jintArray".
Identification division.
Object.
Procedure division.
    Identification division.
    Method-id. "ProcessArray".
    Data Division.
    Local-storage section.
    01 intArrayPtr pointer.
    01 intArrayLen pic S9(9) comp-5.
    Linkage section.
        COPY JNI.
    01 inIntArrayObj usage object reference jintArray.
    01 intArrayGroup.
        02 X pic S9(9) comp-5
            occurs 1 to 1000 times depending on intArrayLen.
    Procedure division using by value inIntArrayObj.
        Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr
        Set address of JNINativeInterface to JNIEnv

        Call GetArrayLength
            using by value JNIEnvPtr inIntArrayObj
            returning intArrayLen
        Call GetIntArrayElements
            using by value JNIEnvPtr inIntArrayObj 0
            returning IntArrayPtr
        Set address of intArrayGroup to intArrayPtr

*   . . . process the array elements X(I) . . .

        Call ReleaseIntArrayElements
  
```

```

        using by value JNIEnvPtr inIntArrayObj intArrayPtr 0.
    End method "ProcessArray".
End Object.
End class OOARRAY.

```

Java スtringの取り扱い

COBOL は、Java スtring・データを Unicode で表します。Java スtringを COBOL プログラムで表すには、jstring クラスのオブジェクト参照としてString を宣言してください。続いて、JNI サービスを使用して、COBOL 国別 (Unicode) データまたは UTF-8 データを設定するか、オブジェクトから抽出します。

Unicode 用のサービス: jstring オブジェクト参照と COBOL USAGE NATIONAL データ項目との間の変換を行うには、以下の標準サービスを使用してください。これらのサービスは、ワークステーションとメインフレーム間で移植可能にするアプリケーションに使用します。これらのサービスへのアクセスは、JNINativeInterface 環境構造の関数ポインターを使用して行います。

表 62. jstring 参照と国別データ間の変換サービス

サービス	入力引数	戻り値
NewString ¹	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター COBOL 国別データ項目などの、Unicode スtringへのポインター Stringの文字数。2 進数フルワード 	jstring オブジェクト参照。
GetStringLength	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター jstring オブジェクト参照 	jstring オブジェクト参照の Unicode 文字数。2 進数フルワード。
GetStringChars ¹	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター jstring オブジェクト参照 ブール・データ項目を指すポインター、または NULL 	<ul style="list-style-type: none"> jstring オブジェクトから抜き出された Unicode 文字の配列を指すポインター、または NULL (操作が失敗した場合)。ポインターは、ReleaseStringChars を使用して解放されるまで有効。 ブール・データ項目へのポインターが NULL でないとき、ブール値は、Stringのコピーが作成される場合には true に、コピーが作成されない場合には false に設定される。
ReleaseStringChars	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター jstring オブジェクト参照 GetStringChars から戻された Unicode 文字の配列へのポインター 	なし。配列のストレージは解放される。

1. システムがメモリー不足の場合、このサービスは例外を throw します。

UTF-8 用のサービス: JNI の拡張機能である以下のサービスを使用して、jstring オブジェクト参照と UTF-8 String間の変換を行うことができます。これらのサービスは、メインフレームへ移植可能にする必要のないプログラムで使用します。これらのサービスへのアクセスは、JNI 環境構造 JNINativeInterface の関数ポインターを使用して行います。

表 63. jstring 参照と UTF-8 データ間の変換サービス

サービス	入力引数	戻り値
NewStringUTF ¹	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター ヌル終了 UTF-8 スtringを指すポインター 	jstring オブジェクト参照、またはStringを構成できない場合は NULL
GetStringUTFLength	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター jstring オブジェクト参照 	Stringを UTF-8 形式で表現するのに必要なバイト数 (2 進数のフルワード)
GetStringUTFChars ¹	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター jstring オブジェクト参照 プール・データ項目を指すポインター、または NULL 	<ul style="list-style-type: none"> jstring オブジェクトから抽出した UTF-8 文字の配列へのポインター、または操作が失敗した場合は NULL。ポインターは、ReleaseStringUTFChars を使用して解放されるまで有効。 プール・データ項目へのポインターが NULL でないとき、プール値は、Stringのコピーが作成される場合には true に、コピーが作成されない場合には false に設定される。
ReleaseStringUTFChars	<ul style="list-style-type: none"> JNI 環境ポインター jstring オブジェクト参照 GetStringUTFChars を使用して jstring 引数から派生した UTF-8 Stringを指すポインター 	なし。UTF-8 Stringのストレージが解放されます。
1. システムがメモリー不足の場合、このサービスは例外を throw します。		

関連タスク

479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

486 ページの『Java 用の配列およびStringの宣言』

176 ページの『COBOL での国別データ (Unicode) の使用』

243 ページの『第 13 章 オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル、リンク、および実行』

第 7 部 複雑なアプリケーションを扱う作業

第 26 章 プラットフォーム間でのアプリケーションの移植	495
コンパイルするメインフレーム・アプリケーションの取得	495
実行するメインフレーム・アプリケーションの取得: 概要	497
データ表現による違いの修正	497
ASCII SBCS 文字と EBCDIC SBCS 文字の違いの処理	498
ネイティブ形式と非ネイティブ形式の違いの処理	498
IEEE データと 16 進数データの違いの処理	499
ASCII DBCS ストリングと EBCDIC DBCS ストリングの違いの処理	500
移植性に影響する環境の違いの修正	500
言語エレメントによる違いの修正	501
メインフレーム上で実行するコードの作成	501
Windows ベースのワークステーションと AIX ワークステーション間で移植可能なアプリケーションの作成	502
第 27 章 サブプログラムの使用	505
メインプログラム、サブプログラム、および呼び出し	505
メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入	506
ネストされた COBOL プログラムの呼び出し	507
ネストされたプログラム	507
例: ネストされたプログラムの構造	509
名前の有効範囲	509
ローカル名	510
グローバル名	510
名前の宣言の探索	510
ネストなし COBOL プログラムの呼び出し	510
CALL identifier および CALL literal	511
呼び出しインターフェース規約	512
CDECL	512
OPTLINK	513
SYSTEM	514
COBOL および C/C++ プログラム間の呼び出し	515
環境の初期設定	515
COBOL と C/C++ 間でのデータの受け渡し	515
COBOL と C/C++ 用のリンケージ規約の設定	516
スタック・フレームの縮小と実行単位またはプロセスの終了	517
COBOL および C/C++ のデータ型	517
例: C/C++ DLL を呼び出す COBOL プログラム	518
再帰呼び出しの実行	520
第 28 章 データの共用	521
データの受け渡し	521

呼び出し側プログラムの中での引数の記述	523
呼び出し先プログラムの中でのパラメーターの記述	523
OMITTED 引数に関するテスト	524
LINKAGE SECTION のコーディング	524
引数を受け渡すための PROCEDURE DIVISION のコーディング	525
受け渡されるデータのグループ化	526
ヌル終了ストリングの取り扱い	526
チェーン・リストを処理するためのポインターの使用	527
例: チェーン・リストを処理するためのポインターの使用	527
プロシージャ・ポインターと関数ポインターの使用	530
Windows の制約事項への対処	530
複数の入り口点のコーディング	531
戻りコード情報の引き渡し	532
RETURN-CODE 特殊レジスターの理解	532
PROCEDURE DIVISION RETURNING . . . の使用	532
CALL . . . RETURNING の指定	533
EXTERNAL 文節によるデータの共用	533
プログラム間でのファイルの共用 (外部ファイル)	533
例: 外部ファイルの使用	534
外部ファイルを使用する入出力	535
コマンド行引数の使用	537
例: コマンド行引数	537
第 29 章 ダイナミック・リンク・ライブラリーの構築	539
スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク	539
DLL への参照をリンカーが解決する方法	540
DLL の作成	541
例: DLL ソース・ファイルおよび関連ファイル	542
モジュール定義ファイル	542
実行時の DLL 参照の解決	543
リンク時の DLL 参照の解決	543
DLL のコンパイルおよびリンク	544
モジュール定義ファイルの作成	544
モジュール・ステートメントの予約語	545
モジュール・ステートメントの要約	545
BASE	546
DESCRIPTION	546
EXPORTS	547
HEAPSIZE	548
LIBRARY	549
NAME	549
STACKSIZE	549
STUB	550
VERSION	551

第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備	553
マルチスレッド化	553
マルチスレッド化による言語エレメントの処理	555
実行単位の有効範囲を持つエレメントの処理	555
プログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つエレメントの処理	556
マルチスレッド化を使用した COBOL 言語エレメントの有効範囲	556
マルチスレッド化サポートのための THREAD の選択	557
マルチスレッド化されたプログラムへの制御権移動	557
マルチスレッド化されたプログラムの終了	558
マルチスレッド化による COBOL 制限の処理	558
例: マルチスレッド環境での COBOL の使用	559
thrcob.c のソース・コード	559
subd.cbl のソース・コード	561
sube.cbl のソース・コード	561
第 31 章 COBOL ランタイム環境の事前初期設定	563
永続的な COBOL 環境の初期設定	563
事前初期設定された COBOL 環境の終了	564
例: COBOL 環境の事前初期設定	566
第 32 章 2 桁年の日付の処理	569
2000 年言語拡張 (MLE)	570
この拡張の原則と目標	571
日付に関連したロジック問題の解決	572
世紀ウィンドウの使用	573
例: 世紀ウィンドウ	574
内部ブリッジングの使用	574
例: 内部ブリッジング	575
完全フィールド拡張への移行	575
例: 拡張日付形式へのファイルの変換	576
年先行型、年単独型、および年末尾型の日付フィールドの使用	577
互換性のある日付	578
例: 年先行型日付フィールドの比較	579
その他の日付形式の使用	579
例: 年の分離	580
リテラルを日付として操作する	580
仮定による世紀ウィンドウ	581
非日付の処理	582
符号条件の使用	583
日付フィールドに対する算術の実行	584
ウィンドウ化日付フィールドのオーバーフローの考慮	585
評価の順序の指定	586
日付処理の明示的制御	586
DATEVAL の使用	587
UNDATE の使用	587
例: DATEVAL	587
例: UNDATE	588
日付関連診断メッセージの分析および回避	588
日付処理上の問題の回避	590
バック 10 進数フィールドの問題の回避	590

拡張日付フィールドからウィンドウ化日付フィールドへの移動	591
------------------------------	-----

第 26 章 プラットフォーム間でのアプリケーションの移植

Windows ベースのワークステーションには、IBM メインフレームや AIX ワークステーションとは異なるハードウェアやオペレーティング・システムのアーキテクチャが採用されています。このようなアーキテクチャーの違いのために、COBOL プログラムをこれらのプラットフォーム環境間で移植する際には、いくつかの問題が発生する可能性があります。

以下の関連情報では、開発プラットフォーム間の違いと、移植性の問題を最小限に抑えるための方法について説明します。

関連タスク

『コンパイルするメインフレーム・アプリケーションの取得』

497 ページの『実行するメインフレーム・アプリケーションの取得: 概要』

501 ページの『メインフレーム上で実行するコードの作成』

502 ページの『Windows ベースのワークステーションと AIX ワークステーション間で移植可能なアプリケーションの作成』

関連参照

623 ページの『付録 A. ホスト COBOL との違いの要約』

コンパイルするメインフレーム・アプリケーションの取得

プログラムをメインフレームから Windows ベースのワークステーションに移行して、この新しい環境でコンパイルする場合は、正しいコンパイラー・オプションを選択して、メインフレームでの COBOL 言語の機能を可能にする必要があります。COPY ステートメントを使用して、プログラムの移植に役立てることもできます。

正しいコンパイラー・オプションの選択: COBOL for Windows では、特定のメインフレーム COBOL コンパイラー・オプションが適切でない場合、そのコンパイラー・オプションはコメントとして扱われます。これにより、予測不能な結果が生じる可能性があります。コンパイラーは、オブジェクトに W レベルのメッセージでフラグを立てます。

NOADV NOADV を使用する必要のあるプログラムは装置制御文字に依存するため、一般には移植できません。プログラムが NOADV に依存する場合は、言語仕様がプリンター制御文字をファイルのレベル 01 のレコードの先頭文字として想定しないように、プログラムを修正してください。

メインフレーム COBOL の言語機能の可能化: 次の言語機能は、メインフレーム COBOL では有効ですが、COBOL for Windows でのコンパイル時にはエラーが発生するか、または予測不能な結果が生じる可能性があります。次の表に、考えられる問題に対する解決策を示します。

表 64. メインフレーム COBOL とは異なる言語機能

メインフレーム上の 言語機能	COBOL for Windows の動作	解決策または制約事項
ACCEPT および DISPLAY ステートメント	COBOL 環境変数を検査して、 DISPLAY または ACCEPT ステートメントのターゲットを判別します。	メインフレーム・プログラムが ACCEPT または DISPLAY ステートメントのターゲットとしてホスト DD 名を期待する場合は、値が適切なファイル名に設定された同等の環境変数を使用して、これらのターゲットを定義します。
ASSIGN 文節	<i>assignment-name</i> に基づいたシステム・ファイル名に対し、異なる構文およびマッピングを使用します。	ASSIGN 文節 (「 <i>COBOL for Windows</i> 言語解説書」) を参照してください。
CALL ステートメント	ファイル名を CALL 引数として使用できません。	
CLOSE ステートメント	FOR REMOVAL 句、WITH NO REWIND 句、および UNIT/REEL 句をコメントとして扱います。	これらの句を移植可能プログラムに使用しないでください。
LABEL RECORD 文節	LABEL RECORD IS <i>data-name</i> 句、USE. . . AFTER. . . LABEL PROCEDURE 句、および GO TO MORE-LABELS 句をエラーとして扱います。	z/OS QSAM 対応のユーザー・ラベル処理に依存するプログラムは移植できません。
PROCEDURE-POINTER データ項目	4 バイト (メインフレーム上で 8 バイト) です。	
RERUN 文節	RERUN 文節をコメントとして扱います。	
SHIFT-IN、SHIFT-OUT 特殊レジスター	CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションが有効でないと、これらのレジスターが検出されたときに E レベルのメッセージが出されます。	CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用します。
SORT-CONTROL 特殊レジスター	このレジスターによって識別されたシステム・ファイル名のファイル命名規約に従います。	Windows ワークステーションとメインフレームでは命名規則が異なることに注意してください。
STOP RUN	マルチスレッド・プログラムではサポートされません。	STOP RUN を、C <code>exit()</code> 関数への呼び出しと置き換えます。
WRITE ステートメント	WRITE. . . ADVANCING を環境名 C01-C12 または S01-S05 で指定した場合は、ADVANCING 句を無視します。	

移植の問題に役立つ COPY ステートメントの使用: 多くの場合、COPY ステートメントを使用してプラットフォーム固有のコードを分離すると、移植性の問題を回避することができます。例えば、あるプラットフォーム用のコンパイル時にプラットフォーム固有のコードを組み込み、別のプラットフォーム用のコンパイル時にはその

コードを除外することができます。また、COPY REPLACING 句を使用して、ファイル名などの移植不可能なソース・コード・エレメントをグローバル変更することも可能です。

関連参照

217 ページの『ランタイム環境変数』

623 ページの『付録 A. ホスト COBOL との違いの要約』

COPY ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

実行するメインフレーム・アプリケーションの取得: 概要

ソース・プログラムをダウンロードして Windows ベースのワークステーション上で正常にコンパイルしたら、次にそのプログラムを実行します。多くの場合、ソースを大幅に変更しなくても、メインフレーム上での結果と同じものを取得できます。

ソースに変更を加えるべきかどうかを判断するには、基本的なハードウェアまたはソフトウェア・アーキテクチャーによって異なる COBOL 言語のエレメントや動作の修正方法を理解する必要があります。

関連タスク

『データ表現による違いの修正』

500 ページの『移植性に影響する環境の違いの修正』

501 ページの『言語エレメントによる違いの修正』

データ表現による違いの修正

プログラムに同じ動作をさせるためには、特定のデータ表現方法における違いを理解して、適切な処置を取る必要があります。

COBOL では、符号付きパック 10 進数データをメインフレーム上でも Windows ワークステーション上でも同じ方法で格納します。しかし、外部 10 進数データ、浮動小数点データ、2 進数データ、および符号なしパック 10 進数データは、デフォルトでは異なる方法で表現されます。文字データの表現は、データ項目を記述する USAGE 文節と実行時に有効なロケールによって異なる可能性があります。

大半のプログラムは、データ表現に関係なく、ワークステーション上でもメインフレーム上と同じ動作をします。

関連タスク

498 ページの『ASCII SBCS 文字と EBCDIC SBCS 文字の違いの処理』

498 ページの『ネイティブ形式と非ネイティブ形式の違いの処理』

499 ページの『IEEE データと 16 進数データの違いの処理』

500 ページの『ASCII DBCS ストリングと EBCDIC DBCS ストリングの違いの処理』

関連参照

624 ページの『データ表現』

ASCII SBCS 文字と EBCDIC SBCS 文字の違いの処理

ASCII 文字と EBCDIC 文字のデータ表現の違いによる問題を避けるために、CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用します。

Windows ベースのワークステーションは ASCII ベースの文字セットを使用しますが、メインフレームは EBCDIC 文字セットを使用します。したがって、大半の文字が、次の表に示すように異なる 16 進値を持ちます。

表 65. ASCII 文字と EBCDIC 文字との対比

文字	ASCII の場合の 16 進値	EBCDIC の場合の 16 進値
'0' から '9'	X'30' から X'39'	X'F0' から X'F9'
'a'	X'61'	X'81'
'A'	X'41'	X'C1'
ブランク	X'20'	X'40'

また、次の表に示すように、文字データの EBCDIC 16 進値に依存するコードは、文字データが ASCII 値を持つ場合、ほとんどが失敗してしまいます。

表 66. ASCII での比較と EBCDIC での比較の対比

比較	ASCII の場合の評価	EBCDIC の場合の評価
'a' < 'A'	偽	真
'A' < 'I'	偽	真
$x \geq '0'$	真の場合、 x が数字であるかどうかは示されない	真である場合、 x はおそらく数字
$x = X'40'$	x がブランクかどうかはテストされない	x かどうかはテストされる

このような違いがあるため、文字ストリングのソート結果は EBCDIC と ASCII では異なります。多くのプログラムでは、これらの違いによる影響はありませんが、プログラムが一部の文字ストリングの正確なソート順序に依存する場合は、論理エラーの可能性にも注意する必要があります。EBCDIC 照合シーケンスに依存するプログラムをワークステーションに移植する場合は、PROGRAM COLLATING SEQUENCE IS EBCDIC または COLLSEQ(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用して、EBCDIC 照合シーケンスを取得することができます。

関連参照

255 ページの『CHAR』

258 ページの『COLLSEQ』

ネイティブ形式と非ネイティブ形式の違いの処理

Intel のハードウェア・アーキテクチャを採用したワークステーション上で、2 進整数が格納される形式は、メインフレーム上での格納形式と比較すると、バイトが反転されています。

メインフレームのデータ表現は、ビッグ・エンディアン (数値の最大重み数字が最下位アドレスに格納される) と呼ばれます。Intel のデータ表現は、リトル・エンディアン (数値の最小重み数字が最下位アドレスに格納される) と呼ばれます。

大半のプログラムでは、この違いによる問題は発生しません。ただし、プログラムが整数のバイト単位のエンコード値に依存する場合は、論理エラーの可能性に注意してください。

メインフレームの 2 進数データを使用し、整数値の内部表現に依存するプログラムの場合は、BINARY(S390) コンパイラー・オプションを使用してコンパイルする必要があります。このようなプログラムでは、USAGE COMP-5 タイプを使用しないでください。これは、BINARY(S390) オプションが有効かどうかにかかわらず、ネイティブの 2 進数データ形式として扱われます。

49 ページの『例: 数値データおよび内部表現』

関連参照

253 ページの『BINARY』

623 ページの『付録 A. ホスト COBOL との違いの要約』

IEEE データと 16 進数データの違いの処理

IEEE と 16 進数の浮動小数点データ間の表現の違いによる一般的な問題を回避するには、FLOAT(S390) コンパイラー・オプションを使用します。

Windows ベースのワークステーションは、IEEE 形式を使用して浮動小数点データを表現します。メインフレームは、zSeries の 16 進形式を使用します。次の表に、USAGE COMP-1 データと USAGE COMP-2 データに対する、正規化浮動小数点 IEEE と正規化 16 進数の違いをまとめます。

表 67. IEEE と 16 進数の対比

仕様	COMP-1 データ の IEEE	COMP-1 データの 16 進数	COMP-2 データ の IEEE	COMP-2 データの 16 進数
範囲	1.17E-38* から 3.37E+38*	5.4E-79* から 7.2E+75*	2.23E-308* から 1.67E+308*	5.4E-79* から 7.2E+75*
指数表現	8 ビット	7 ビット	11 ビット	7 ビット
小数部表現	23 ビット	24 ビット	53 ビット	56 ビット
正確性のある桁 数	6 桁	6 桁	15 桁	16 桁
* 値は正数でも負数でも構いません。				

大半のプログラムでは、これらの違いによる問題は発生しません。ただし、データの 16 進数表現に依存するプログラムの場合は、移植時に注意が必要です。

パフォーマンスについての考慮事項: 一般に、zSeries の浮動小数点表記を使用すると、ソフトウェアが zSeries のハードウェア命令のセマンティクスをシミュレートする必要があるため、プログラムの実行速度が遅くなります。これは、特に FLOAT(S390) コンパイラー・オプションが有効で、なおかつプログラムに多数の浮動小数点計算がある場合の考慮事項です。

49 ページの『例: 数値データおよび内部表現』

関連参照

274 ページの『FLOAT』

ASCII DBCS スtringと EBCDIC DBCS スtringの違いの処理

DBCS 文字を含む英数字データ項目のメインフレーム動作を取得するには、CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションと SOSI コンパイラー・オプションを使用します。ASCII DBCS 文字と EBCDIC DBCS 文字のデータ表現の違いによる問題を避けるには、CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用します。

英数字データ項目では、メインフレームの 2 バイト文字スString (EBCDIC DBCS 文字を含む) はシフト・コードで囲まれますが、Windows ベースのワークステーションのマルチバイト文字スString (ASCII DBCS 文字を含む) はシフト・コードではエンコードされません。また、同じ文字の表現に使用される 16 進値も異なります。

DBCS データ項目で、メインフレームの 2 バイト文字スStringはシフト・コードで囲まれますが、文字を表すために使用される 16 進値は、ワークステーションのマルチバイト・スStringで同じ文字を表すために使用される 16 進値とは異なります。

大半のプログラムでは、これらの違いがあっても移植に問題はありません。ただし、プログラムが、マルチバイト・スStringの 16 進値に依存する場合や、英数字スStringに 1 バイト文字とマルチバイト文字が混在することを期待する場合は、コーディングの方法に注意してください。

関連参照

255 ページの『CHAR』

287 ページの『SOSI』

移植性に影響する環境の違いの修正

ワークステーションとメインフレームのプラットフォーム間におけるファイル名や制御コードの違いが、プログラムの移植性に影響する可能性があります。

Windows ベースのワークステーション上のファイル命名規約は、メインフレーム上の命名規約とはかなり異なります。COBOL ソース・プログラム内でファイル名を使用する場合は、この違いが移植性に影響を与える可能性があります。例えば、次のファイル名は Windows ベースのワークステーション上では有効ですが、メインフレーム上では無効です。

```
%users%joesmith%programs%cobol%myfile.cbl
```

メインフレーム上で特定の意味を持たない一部の文字は、Windows ベースのワークステーション上では制御文字として解釈されます。この違いにより、ASCII テキスト・ファイルが誤って処理される可能性があります。ファイルには、次のどの文字も含めないようにしてください。

- X'0A' (LF: 改行)
- X'0D' (CR: 復帰)
- X'1A' (EOF: ファイルの終わり)

装置依存 (プラットフォーム固有) の制御コードをプログラムまたはファイル内に使用する場合は、これらの制御コードをサポートしていないプラットフォームにその

プログラムまたはファイルを移植しようとする、問題が生じる可能性があります。他のプラットフォーム固有コードについても同様ですが、このようなコードはできるだけ分離して、アプリケーションを別のプラットフォームに移行する際に、容易にコードを置き換えられるようにすることが得策です。

言語エレメントによる違いの修正

一般に、移植可能な COBOL プログラムは、Windows ベースのワークステーション上でもメインフレーム上と同様に動作します。ただし、I/O 処理で使用されるファイル状況値の違いには注意してください。

プログラムが状況キー・データ項目に応答する場合は、最初の状況キーと 2 番目の状況キーのどちらに応答するかによって、次の 2 つの問題に注意してください。

- プログラムが最初のファイル状況データ項目 (*data-name-1*) に応答する場合は、*9n* の範囲内で返される値がプラットフォームによって異なることに注意してください。プログラムが特定の *9n* 値 (例えば 97) の解釈に依存する場合は、その値の持つ意味が Windows ベースのワークステーション上とメインフレーム上とは異なる可能性があります。この場合は、一般的な I/O エラーとして任意の *9n* 値にプログラムが応答するように修正してください。
- プログラムが 2 番目のファイル状況データ項目 (*data-name-8*) に応答する場合は、返される値がプラットフォームとファイル・システムの両方によって異なることに注意してください。例えば、STL ファイル・システムは、Windows ベースのワークステーション上では、メインフレーム上の VSAM ファイル・システムとはレコード構造の異なる値を返します。2 番目のファイル状況データ項目の解釈に依存するプログラムは、たいていは移植できません。

関連タスク

162 ページの『ファイル状況キーの使用』

164 ページの『ファイル・システム状況コードの使用』

関連参照

FILE STATUS 文節 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

メインフレーム上で実行するコードの作成

IBM COBOL for Windows を使用して新しいアプリケーションを記述すると、Windows ベースのワークステーションを使用した場合の生産性と柔軟性が向上します。ただし、IBM メインフレーム COBOL でサポートされていない言語機能は使用しないようにする必要があります。

IBM COBOL for Windows がサポートしている言語機能の中には、IBM メインフレーム COBOL コンパイラーでは対応していないものもあります。メインフレーム上で実行するコードを Windows ベースのワークステーション上で作成する場合は、次の機能を使用しないでください。

- DISPLAY-OF または NATIONAL-OF 組み込み関数への引数としてのコード・ページ名
- ASSIGN USING データ名
- PREVIOUS 句を使用した READ ステートメント
- KEY 句で <, <=, または NOT > を使用した START ステートメント

- >>CALLINTERFACE コンパイラ指示

下の各コンパイラ・オプションは、メインフレーム・コンパイラでは使用できません。コードをメインフレームに移植する場合は、ソース・コードに次のどのオプションも使用しないでください。

- BINARY(NATIVE)
- CALLINT
- CHAR(NATIVE)
- ENTRYINT
- FLOAT(NATIVE)
- PROBE

Windows と他のファイル・システムではファイル命名規則が異なることに注意してください。ソース・プログラム内でファイル名をハードコーディングすることは避けてください。この代わりに、各プラットフォーム上で定義する簡略名を使用して、これをメインフレームの DD 名または環境変数にマップします。その後、プログラムをコンパイルして、ソース・コードに変更を加えずにファイル名の変更に対応することができます。

特に、次の言語エレメントでのファイル参照方法を検討してください。

- ACCEPT または DISPLAY ターゲット名
- ASSIGN 文節
- COPY ステートメント (*text-name* および *library-name*)

メインフレーム上のマルチスレッド・プログラムは再帰的でなければなりません。したがって、プログラムをメインフレームに移植して、それをマルチスレッド環境で実行できるようにしたい場合は、ネストされたプログラムをコーディングしないでください。

Windows ベースのワークステーションと AIX ワークステーション間で移植可能なアプリケーションの作成

Windows と AIX の言語サポートはほぼ同じです。ただし、これらのプラットフォーム間にはいくつかの違いがあることに注意してください。

Windows ベースのワークステーションと AIX のワークステーション間で移植可能なアプリケーションを開発する際には、以下の項目について考慮してください。

- ソース・プログラム内にハードコーディングされたファイル名は、問題を引き起こす可能性があります。名前をハード・コーディングする代わりに、簡略名を使用して、ソース・コードを変更せずにプログラムをコンパイルできるようにします。特に、次の言語エレメントでのファイル参照方法を検討してください。
 - ACCEPT および DISPLAY ステートメント
 - ASSIGN 文節
 - COPY (*text-name* および *library-name*) ステートメント
- Windows では、整数をリトル・エンディアン 形式で表現します。AIX では、整数をビッグ・エンディアン 形式で保守します。したがって、整数の内部表現に依

存する Windows COBOL プログラムは、大抵は AIX に移植できません。このような内部表現に依存するプログラムを記述することは避けてください。プログラムが Windows 形式の整数内部表現を扱う必要がある場合は、USAGE COMP-5 データ項目を使用せずに、BINARY(S390) コンパイラー・オプションを使用します。

- Windows では、クラス国別データ項目をリトル・エンディアン形式で表現します。AIX では、クラス国別データ項目をビッグ・エンディアン形式で表現します。したがって、このようなデータ項目の内部表現に依存している COBOL プログラムは、そのほとんどが COBOL for Windows と COBOL for AIX との間で移植できません。このような内部表現に依存するプログラムを記述することは避けてください。

クラス国別データ項目の内部表現に依存しないプログラムは、たいいていの場合、COBOL for Windows と COBOL for AIX との間で移植できますが、ファイル・データをターゲット・プラットフォームの表現に変換する必要があります。

関連参照

253 ページの『BINARY』

第 27 章 サブプログラムの使用

多くのアプリケーションは、ともにリンクされた別々にコンパイルされたプログラムから構成されます。各プログラムが相互に呼び出す場合は、これらは通信できる必要があります。これらのプログラムは制御権を渡す必要があります、また通常は共通データに対するアクセス権を必要とします。

COBOL プログラムどうしが互いの内部にネストされている場合は、プログラム間でのやり取りも可能です。1 つのアプリケーションに必要なサブプログラムをすべて 1 つのソース・ファイルに含めることができるため、必要なコンパイルは 1 回だけで済みます。

関連概念

『メインプログラム、サブプログラム、および呼び出し』

関連タスク

506 ページの『メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入』

507 ページの『ネストされた COBOL プログラムの呼び出し』

510 ページの『ネストなし COBOL プログラムの呼び出し』

515 ページの『COBOL および C/C++ プログラム間の呼び出し』

520 ページの『再帰呼び出しの実行』

関連参照

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

メインプログラム、サブプログラム、および呼び出し

COBOL プログラムが実行単位の最初のプログラムであれば、その COBOL プログラムはメインプログラムです。それ以外の場合は、そのプログラムも実行単位内の他のすべての COBOL プログラムも、サブプログラムです。特定のソース・コードのステートメントまたはオプションが、COBOL プログラムをメインプログラムまたはサブプログラムとして識別することはありません。

COBOL プログラムがメインプログラムであるかサブプログラムであるかは、次の 2 つの理由により重要になることもあります。

- プログラム終了処理ステートメントの影響
- 戻った後に再入する際のそのプログラムの状態

PROCEDURE DIVISION で、あるプログラムから別のプログラム(通常 *subprogram* と呼ばれる)を呼び出すことができ、この呼び出し先プログラム自体からも別のプログラムを呼び出すことができます。別のプログラムを呼び出すプログラムは呼び出し側プログラムと呼ばれ、そのプログラムが呼び出すプログラムは呼び出し先プログラムと呼ばれます。呼び出し先プログラムの処理が完了すると、そのプログラムは制御権を呼び出し側プログラムに戻すか、実行単位を終了することができます。

呼び出し先 COBOL プログラムは、PROCEDURE DIVISION の先頭で実行を開始します。

関連タスク

- 『メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入』
- 507 ページの『ネストされた COBOL プログラムの呼び出し』
- 510 ページの『ネストなし COBOL プログラムの呼び出し』
- 515 ページの『COBOL および C/C++ プログラム間の呼び出し』
- 520 ページの『再帰呼び出しの実行』

メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入

プログラムが最後に使われた状態のままであるか、初期状態のままであるか、およびプログラムがどの呼び出し側に戻るかは、使用する終了ステートメントによって異なる可能性があります。

メインプログラムでの実行を終了するには、メインプログラム内で STOP RUN または GOBACK ステートメントをコーディングする必要があります。STOP RUN は実行単位を終了して、メインプログラムおよび呼び出されたサブプログラムがオープンしたファイルをすべてクローズします。制御権は、メインプログラムの呼び出し元(一般にはオペレーティング・システム)に戻ります。GOBACK は、メインプログラム内で同じ影響を与えます。メインプログラム内で実行される EXIT PROGRAM は影響を与えません。

サブプログラムを終了するには、EXIT PROGRAM、GOBACK、または STOP RUN ステートメントを使用します。EXIT PROGRAM または GOBACK ステートメントを使用する場合は、実行単位を終了せずに、サブプログラムの直接の呼び出し元に制御権が戻ります。呼び出し先プログラム内に次の実行可能ステートメントがない場合は、暗黙的な EXIT PROGRAM ステートメントが生成されます。STOP RUN ステートメントを使用してサブプログラムを終了する場合の影響は、メインプログラムの場合と同じです。つまり、実行単位内の COBOL プログラムがすべて終了され、メインプログラムの呼び出し元に制御権が戻ります。

サブプログラムは、EXIT PROGRAM または GOBACK で終了されると、最後に使われた状態で残されるのが普通です。サブプログラムが実行単位の中で次に呼び出されると、PERFORM ステートメントの戻り値が初期値にリセットされることを除けば、その内部値は終了時のまま残されます(それに対して、メインプログラムは呼び出されるたびに初期化されます)。

プログラムが初期状態になるのは、次のような場合です。

- 動的に呼び出され、その後取り消されるサブプログラムは、次に呼び出されると初期状態になります。
- INITIAL 属性を持つプログラムは、呼び出されるたびに初期状態になります。
- LOCAL-STORAGE SECTION で定義されているデータ項目は、プログラムが呼び出されるたびに、VALUE 文節で指定されている初期状態にリセットされます。

関連概念

- 14 ページの『WORKING-STORAGE と LOCAL-STORAGE の比較』

関連タスク

- 507 ページの『ネストされた COBOL プログラムの呼び出し』
- 520 ページの『再帰呼び出しの実行』

ネストされた COBOL プログラムの呼び出し

ネストされたプログラムを呼び出すことによって、構造化プログラミング技法を使用して、アプリケーションを作成することができます。また、データ項目を不用意に変更しないようにするために、PERFORM プロシージャの代わりに、ネストされたプログラムを呼び出すことができます。ネストされたプログラムの呼び出しには、CALL *literal* ステートメントまたは CALL *identifier* ステートメントを使用します。

ネストされたプログラムは、PROGRAM-ID 段落内で COMMON と指定しない限り、それを直接収容しているプログラムからしか呼び出すことができません。その場合、共通プログラムは、共通プログラムと同じプログラムに（直接的または間接的に）ネストされている任意のプログラムから呼び出すことができます。COMMON として識別できるのは、ネストされているプログラムだけです。再帰呼び出しはできません。

ネストされたプログラム構造を使用する際には、以下の指針に従ってください。

- 各プログラムに IDENTIFICATION DIVISION をコーディングします。他の部はすべてオプションです。
- 必要に応じて、各ネストされたプログラムの名前を固有にしてください。ネストされたプログラムの名前は（名前の有効範囲に関する関連参照で記述されているように）固有である必要はありませんが、名前を固有にしておく、アプリケーションのより容易な保守に役立ちます。任意の有効なユーザー定義語または英数字リテラルをネストされたプログラムの名前として使用できます。
- 必要となる可能性のある CONFIGURATION SECTION 項目は、最外部のプログラムでコーディングします。ネストされたプログラムが CONFIGURATION SECTION を持つことはできません。
- ネストされたプログラムはそれぞれ、収容しているプログラムの中で、収容しているプログラムの END PROGRAM マーカーの直前に配置します。
- END PROGRAM マーカーを使用して、ネストされたプログラムと収容しているプログラムを終了させます。
- ネストされたプログラムに生成されるリンケージは、常に OPTLINK です。CALL *identifier* ステートメントを使用してネストされたプログラムを呼び出す場合は、OPTLINK リンケージ規約をその CALL ステートメントに CALLINT(OPTLINK) コンパイラー・オプション、または >>CALLINT OPTLINK コンパイラー指示を指定して使用するようにしてください。

関連概念

『ネストされたプログラム』

関連参照

509 ページの『名前の有効範囲』

513 ページの『OPTLINK』

254 ページの『CALLINT』

ネストされたプログラム

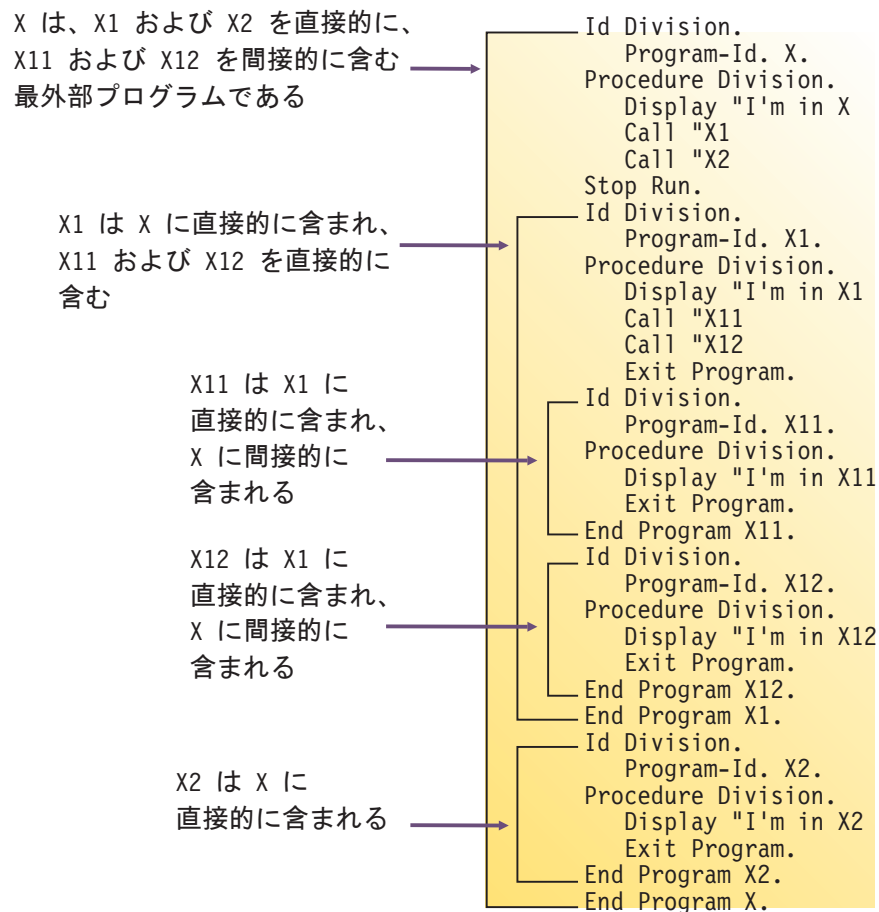
COBOL プログラムには、他の COBOL プログラムをネスト すること、つまり、他の COBOL プログラムを含めることができます。ネストされたプログラム自体にも

他のプログラムを含められます。ネストされたプログラムは、プログラムに直接的に含めることも、間接的に含めることもできます。

呼び出されるプログラムをネストすることには、主に次の 4 つの長所があります。

- ネストされたプログラムは、モジュラー機能を作成し、構造化プログラミング技法を保守する方法を提供します。これらは、PERFORM プロシージャーと同じようにして使用することができます。この場合、制御フローはより構造化されたものになり、ローカル・データ項目を保護することができます。
- ネストされたプログラムは、それをアプリケーションに組み込む前にデバッグすることができます。
- ネストされたプログラムを使用すると、コンパイラーを一度起動するだけでアプリケーションをコンパイルできます。
- COBOL CALL ステートメントのさまざまな形式の中で、ネストされたプログラムへの呼び出しは最高のパフォーマンスを発揮します。

次の例は、直接的および間接的に含まれたプログラムのあるネストされた構造を記述したものです。



509 ページの『例: ネストされたプログラムの構造』

関連タスク

507 ページの『ネストされた COBOL プログラムの呼び出し』

関連参照

『名前の有効範囲』

例: ネストされたプログラムの構造

次の例は、一部のネストされたプログラムが **COMMON** と指定された、ネストされた構造を示しています。

```
Program-Id. A.  
├── Program-Id. A1.  
│   ├── Program-Id. A11.  
│   │   ├── Program-Id. A111.  
│   │   │   └── End Program A111.  
│   │   └── End Program A11.  
│   ├── Program-Id. A12 is Common.  
│   │   └── End Program A12.  
│   └── End Program A1.  
├── Program-Id. A2 is Common.  
│   └── End Program A2.  
├── Program-Id. A3 is Common.  
│   └── End Program A3.  
└── End Program A.
```

次の表に、上記の例で示した構造の呼び出し階層について説明しています。プログラム A12、A2、および A3 は **COMMON** として識別されており、それらに関連する呼び出しはそれぞれ異なります。

対象となるプログラム	対象プログラムが呼び出せるプログラム	対象プログラムを呼び出せるプログラム
A	A1、A2、A3	なし
A1	A11、A12、A2、A3	A
A11	A111、A12、A2、A3	A1
A111	A12、A2、A3	A11
A12	A2、A3	A1、A11、A111
A2	A3	A、A1、A11、A111、A12、A3
A3	A2	A、A1、A11、A111、A12、A2

この例では、次の点に注目してください。

- A2 は A1 を呼び出すことはできません。A1 は共通ではなく、A2 に含まれていないからです。
- A1 は A2 を呼び出すことができます。A2 は共通であるからです。

名前の有効範囲

ネストされた構造における名前は、ローカルとグローバルの 2 つのクラスに分けられます。名前を宣言しているプログラムの有効範囲を超えてその名前が知られているかどうか、クラスによって判別されます。プログラム内で名前が参照された後で、特定の検索シーケンスで名前の宣言を見つけます。

ローカル名

他に宣言されていない限り、名前はローカルです (プログラム名を除く)。ローカル名は、それが宣言されているプログラム内からのみ見る、またはアクセスすることができます。含まれているプログラムおよび収容プログラムが、ローカル名を見たり、アクセスすることはできません。

グローバル名

グローバルである (GLOBAL 文節を使用して示された) 名前は、その名前が宣言されているプログラムと、そのプログラムに直接的および間接的に含まれているすべてのプログラムから可視でありアクセス可能です。したがって、含まれているプログラムは、単に項目の名前を参照するだけで、収容プログラムからの共通データおよびファイルを共用することができます。

グローバル項目に従属するすべての項目 (条件名と指標を含む) は、自動的にグローバルになります。

各宣言が異なるプログラムの中で現れるのであれば、GLOBAL 文節を使用して同じ名前を複数回宣言することができます。同じ収容構造の異なるプログラムに同じ名前を持たせることによって、ネストされた構造における名前のマスキングや隠蔽が可能であることに注意してください。ただし、このようなマスキングによって、名前宣言の検索時に問題が生じることがあります。

名前の宣言の探索

プログラム内で名前が参照されると、その名前の宣言を見つける探索が行われます。探索は、参照が含まれるプログラムで始まり、一致する名前が見つかるまで、順番に収容プログラムへ移って外側へ続けられます。探索は次のプロセスに従います。

1. そのプログラム内の宣言が検索されます。
2. 一致する名前が見つからない場合は、連続する外側の収容プログラムの中で、グローバル宣言だけが検索されます。
3. 一致する最初の名前が検出されると、探索は終了します。一致が検出されない場合、エラーが存在します。

探索はグローバル名に関するものであり、データ項目やファイル結合子などの名前に関連した特定の型のオブジェクトに関するものではありません。オブジェクトの型に関係なく、何らかの一致する名前が見つかったら探索は停止します。宣言されたオブジェクトが予期されたものと違う場合は、エラー状態が存在します。

ネストなし COBOL プログラムの呼び出し

COBOL プログラムは、呼び出し元と同じ実行可能モジュールにリンクされた (スタティック・リンク) サブプログラムか、または DLL で提供された (ダイナミック・リンク) サブプログラムを呼び出すことができます。COBOL for Windows では、DLL からターゲット・サブプログラムを実行時に解決することができます。

ターゲット・プログラムを静的にリンクする場合は、プログラムが呼び出し元の実行可能モジュールの一部になり、呼び出し元とともにロードされます。ターゲット・プログラムを動的にリンクするか、実行時に呼び出しを解決する場合は、ター

ゲット・プログラムがライブラリー内に提供され、呼び出し元のロード時かターゲット・プログラムの呼び出し時にロードされます。

COBOL の CALL *literal* に対してサブプログラムの動的または静的リンクが実行されます。実行時の解決は、COBOL CALL *identifier* に対しては常に実行され、CALL *literal* に対しては DYNAM オプションが有効な場合に実行されます。

関連概念

『CALL *identifier* および CALL *literal*』

539 ページの『スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク』

関連参照

263 ページの『DYNAM』

CALL ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

CALL *identifier* および CALL *literal*

CALL *identifier* を使用すると、呼び出し時に常にターゲット・プログラムがロードされます。この *identifier* には、実行時にネストなしサブプログラム名を含むデータ項目が入ります。CALL *literal* は、静的または動的に解決することができます。この *literal* には、ネストなしターゲット・サブプログラムの明示的な名前が入ります。

CALL *identifier* については、DLL の名前が、ターゲット入り口点の名前と一致している必要があります。

CALL *literal* については、NODYNAM コンパイラー・オプションが有効な場合は、スタティック・リンクとダイナミック・リンクのどちらでも実行できます。DYNAM が有効な場合は、CALL *literal* が CALL *identifier* と同じ方法で解決されます。つまり、ターゲット・サブプログラムは呼び出し時にロードされ、DLL の名前とターゲット入り口点の名前が一致していなければなりません。

これらの呼び出し定義は、COBOL プログラムがネストなしプログラムを呼び出す場合にのみ適用されます。COBOL プログラムがネストされたプログラムを呼び出す場合は、この呼び出しは、システムが介入せずに、コンパイラーによって解決されます。

制約事項: アプリケーション内の 2 つ以上の別々にリンクされた実行可能モジュール (.EXE ファイルまたは .DLL ファイル) は、同一のネストなしサブプログラムを静的に呼び出さないでください。

関連概念

539 ページの『スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク』

関連タスク

510 ページの『ネストなし COBOL プログラムの呼び出し』

541 ページの『DLL の作成』

関連参照

263 ページの『DYNAM』

CALL ステートメント (「COBOL for Windows 言語解説書」)

呼び出しインターフェース規約

使用する呼び出しインターフェース規約により、スタック上に受け渡されるパラメータの順序、データのプログラムへの送信方式、返されるデータのプログラムからの受信方法、および名前の装飾の方式が決定されます。

COBOL プログラムでは、以下の関連参照に示される任意の呼び出しインターフェース規約を使用できます。

- 関連参照
- 『CDECL』
- 513 ページの『OPTLINK』
- 514 ページの『SYSTEM』

CDECL

CDECL 呼び出しインターフェース規約は、多くの Windows C および C++ システムによって使用されています。CDECL では、EAX、ECX、および EDX を除くすべての汎用レジスタが保持されます。

次の規則が CDECL に適用されます。

- すべてのパラメータは、スタック上で受け渡される。
- パラメータは、字句単位の右から左の順番でスタック上にプッシュされる。
- 呼び出し側プログラムが、パラメータをスタックから除去する。
- 浮動小数点値は、浮動小数点レジスタ・スタックのトップ・レジスタである ST(0) に返される。非浮動小数点値を返すすべてのプログラムは、それらを EAX に返す。ただし、サイズが 4 バイト以下の項目を返す特別な場合は除く。非浮動小数点値を返すプログラムは、下の表に示すようにこれらの値を返す。

表 68. CDECL で返される非浮動小数点の項目の場所

項目のサイズ (単位: バイト)	値が戻る場所	コメント
8	EAX-EDX ペア	
5-7	EAX	戻り値用のアドレスは、EAX に隠しパラメータとして受け渡される。
4	EAX	
3	EAX	戻り値用のアドレスは、EAX に隠しパラメータとして受け渡される。
2	AX	
1	AL	

サイズが 5、6、7、または 8 バイトより大きい項目を返すプログラムの場合、戻り値用のアドレスは隠しパラメータとして受け渡され、アドレスは EAX に渡される。

- プログラム名は、オブジェクト・モジュールに現れるときは、下線接頭部によって装飾される。例えば、ソース・プログラムの fred という名前のプログラムは、オブジェクトでは _fred となる。

モジュール定義ファイルでエクスポートまたはインポートのリストを作成する場合は、装飾されたバージョンの名前を使用してください。モジュール定義ファイルで装飾されていない名前を使用する場合は、ILIB ユーティリティに対して、モジュール定義ファイルとともにオブジェクト・ファイルを提供する必要があります。ILIB は、このオブジェクト・ファイルを使用して、各名前が装飾後にどのようなかを判別します。

関連タスク

515 ページの『COBOL および C/C++ プログラム間の呼び出し』
544 ページの『モジュール定義ファイルの作成』

関連参照

254 ページの『CALLINT』
264 ページの『ENTRYINT』
301 ページの『第 15 章 コンパイラ指示ステートメント』

OPTLINK

OPTLINK 呼び出しインターフェース規約は、SYSTEM 規約よりも高速な呼び出しを提供します。

次の規則が OPTLINK に適用されます。

- プログラム名には、疑問符文字 (?) の接頭部が付加される。
- パラメーターは、スタック上で右から左へプッシュされる。
- 呼び出し元は、パラメーターをスタックから除去する。

レジスターは、以下のように使用されます。

- 汎用レジスター EBP、EBX、EDI、および ESI は、呼び出しの全体にわたって保持される。
- 汎用レジスター EAX、EDX、および ECX は、呼び出しの全体にわたっては保持されない。
- 浮動小数点レジスターは、呼び出しの全体にわたっては保持されない。
- 左端の字句単位である 3 つの規格合致パラメーター (規格合致パラメーター は 2 バイトおよび 4 バイトのバイナリー項目とすべてのポインター型) は、それぞれ EAX、EDX、および ECX で渡されます。
- 最大 4 つの浮動小数点パラメーター (最初の 4 つの字句単位) は、浮動小数点レジスター・スタックにおいて、拡張精度 (80 ビット) 形式で受け渡される。他のすべてのパラメーターは、ランタイム・スタック上で受け渡される。
- レジスター内のパラメーター用のスペースはスタック上に割り振られるが、パラメーターはそのスペースにはコピーされない。
- 64 ビットのバイナリー項目を除き、一致する戻り値は EAX に返される。64 ビットのバイナリー項目の場合は、上位 32 ビットが EDX に返され、下位 32 ビットが EAX に返される。
- 浮動小数点戻り値は、拡張精度形式で浮動小数点スタックの一番上のレジスターに戻される。
- 集合を返す呼び出しは、呼び出し元により決定されたストレージ域のアドレスである最初の隠しパラメーターを受け渡す。この領域は返される値になる。ポイン

ターの隠しパラメーターは、常に規格合致外とみなされて、レジスターに受け渡されない。呼び出し先プログラムは、戻る前にこのポインターを EAX にロードする必要がある。

関連参照

254 ページの『CALLINT』

264 ページの『ENTRYINT』

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

SYSTEM

SYSTEM 呼び出しインターフェース規約は、Microsoft Windows のアプリケーション・プログラミング・インターフェースのための標準の呼び出し規約です。CDECL とは異なり、呼び出し先プログラムが、呼び出し側プログラムの代わりにスタックをクリーンアップします。

次の規則が SYSTEM に適用されます。

- すべてのパラメーターは、スタック上で受け渡される。
- パラメーターは、字句単位の右から左の順番でスタック上にプッシュされる。
- 呼び出し先プログラムが、パラメーターをスタックから除去する。
- 浮動小数点値は、浮動小数点レジスター・スタックのトップ・レジスターである ST(0) に返される。非浮動小数点値を返すプログラムは、下の表に示すようにこれらの値を返す。

表 69. SYSTEM で返される非浮動小数点の項目の場所

項目のサイズ (単位: バイト)	値が戻る場所	コメント
8	EAX-EDX ペア	
5-7	EAX	戻り値用のアドレスは、EAX 内で隠しパラメーターとして受け渡される。
4	EAX	
3	EAX	戻り値用のアドレスは、EAX 内で隠しパラメーターとして受け渡される。
2	AX	
1	AL	

サイズが 5、6、7、または 8 バイトより大きい項目を返すプログラムの場合、戻り値用のアドレスは隠しパラメーターとして受け渡され、アドレスは EAX に渡される。

- プログラム名は、下線接頭部、およびパラメーターのバイト数 (10 進数) が後に付いたアットマーク (@) で構成される接尾部によって装飾される。4 バイトより短いパラメーターは、4 バイトに切り上げられる。構造体サイズも、4 バイトの倍数に切り上げられます。

モジュール定義ファイルでエクスポートまたはインポートのリストを作成する場合は、装飾されたバージョンの名前を使用してください。モジュール定義ファイルで装飾されていない名前を使用する場合は、ILIB ユーティリティーに対して、モジュ

ール定義ファイルとともにオブジェクト・ファイルを提供する必要があります。
ILIB は、このオブジェクト・ファイルを使用して、各名前が装飾後にどのような
るかを判別します。

関連タスク

530 ページの『Windows の制約事項への対処』
531 ページの『複数の入り口点のコーディング』
544 ページの『モジュール定義ファイルの作成』

関連参照

254 ページの『CALLINT』
264 ページの『ENTRYINT』
301 ページの『第 15 章 コンパイラ指示ステートメント』
237 ページの『プログラム名内のリンカー・エラー』

COBOL および C/C++ プログラム間の呼び出し

C/C++ で記述された関数は、COBOL プログラムから呼び出すことができ、また、
COBOL プログラムを C/C++ 関数から呼び出すこともできます。以下で参照される
規則とガイドラインでは、これらの言語間呼び出しの実行方法について説明しま
す。

参照される各セクションの“C/C++”への非修飾参照は Microsoft Visual C++ for
Windows に対するものです。

関連タスク

『環境の初期設定』
『COBOL と C/C++ 間でのデータの受け渡し』
516 ページの『COBOL と C/C++ 用のリンケージ規約の設定』
517 ページの『スタック・フレームの縮小と実行単位またはプロセスの終了』

環境の初期設定

C/C++ から COBOL サブプログラムを効率的に繰り返し呼び出すためには、このサ
ブプログラムを呼び出す前に COBOL 環境を事前に初期設定する必要があります。

関連概念

563 ページの『第 31 章 COBOL ランタイム環境の事前初期設定』

COBOL と C/C++ 間でのデータの受け渡し

COBOL データ型には、C/C++ で対応するデータ型があるものと、そうでないもの
があります。COBOL プログラムと C/C++ の関数間でデータを受け渡す場合は、
データ交換を適切なデータ型のみで行うようにしてください。

デフォルトでは、COBOL は、引数を BY REFERENCE で受け渡します。引数を BY
REFERENCE で受け渡す場合は、C/C++ はその引数を指すポインターを取得します。
引数を BY VALUE で受け渡す場合は、COBOL は実引数を渡します。BY VALUE
は、次のデータ型にしか使用できません。

- 英数字
- USAGE NATIONAL 文字

- BINARY
- COMP
- COMP-1
- COMP-2
- COMP-4
- COMP-5
- FUNCTION-POINTER
- OBJECT REFERENCE
- POINTER
- PROCEDURE-POINTER

C/C++ では、パラメーター・リストの変数面を管理する `va_start`、`va_arg`、および `va_end` マクロを使用して、可変個数のパラメーターでプログラムを呼び出すことができます。ただし、呼び出し先プログラムがパラメーター・リストの終了を判断する方法について理解しておく必要があります。例えば、パラメーター・リストの終了を示す `NULL` ポインターを検索するプログラムもあります。COBOL では、パラメーター・リストを `NULL` ポインターで終了しませんが、最後の引数として `BY VALUE 0` を渡すことで、`NULL` ポインターを提供することができます。

関連タスク

521 ページの『第 28 章 データの共用』

関連参照

517 ページの『COBOL および C/C++ のデータ型』

COBOL と C/C++ 用のリンケージ規約の設定

C/C++ と COBOL では、デフォルトのリンケージ規約が異なります。COBOL と C/C++ のプログラム間で呼び出しを行う場合は、リンケージ規約が呼び出し先プログラムと呼び出し側プログラムの間で整合している必要があります。COBOL プログラムのリンケージ規約を設定するには、COBOL コンパイラー指示またはコンパイラー・オプションを使用します。

Microsoft Visual C++ for Windows の関数を呼び出す COBOL プログラムに対しては、`>>CALLINT CDECL` コンパイラー指示、または `CALLINT(CDECL)` コンパイラー・オプションを使用します。

プログラム全体ではなく、特定の呼び出しに対してリンケージ規約を変更したい場合は、コンパイラー指示を使用します。

Microsoft Visual C++ for Windows の関数によって呼び出される COBOL プログラムに対しては、`ENTRYINT(CDECL)` コンパイラー・オプションを使用します。このオプションは、リンケージ規約を Microsoft Visual C++ for Windows の `CDECL` リンケージ規約のものに設定します。IBM C/C++ for Windows 関数によって呼び出される COBOL プログラムに対しては、`ENTRYINT(OPTLINK)` コンパイラー・オプションを使用します。

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』
『COBOL および C/C++ のデータ型』
254 ページの『CALLINT』
264 ページの『ENTRYINT』

スタック・フレームの縮小と実行単位またはプロセスの終了

ある言語で関数を呼び出すと、別の言語のプログラム・スタック・フレームが縮小してしまうような呼び出しは避けてください。

このガイドラインに該当する状況例を次に示します。

- ある言語で記述された一部のアクティブ・スタック・フレームを縮小する場合に、縮小されるスタック・フレーム内に別の言語で記述されたアクティブ・スタック・フレーム (C/C++ `longjmp()`) があるような場合。
- ある言語で記述されたスタック・フレームがアクティブなときに、COBOL の `STOP RUN` や C/C++ の `exit()` または `_exit()` などを発行すると、別の言語で記述された実行単位またはプロセスが終了します。このような場合は、プログラムの呼び出し側に戻ることで、呼び出されたプログラムが終了するような方法で、アプリケーションを構築してください。

C/C++ の `longjmp()`、COBOL の `STOP RUN`、C/C++ の `exit()` または `_exit()` 呼び出しが使用できるのは、操作を開始する言語以外の言語で記述されたアクティブ・スタック・フレームが縮小されない場合に限られます。縮小や終了を開始しない言語の場合は、その他に次のような悪影響が生じる可能性があります。

- 当該言語の通常の `cleanup` または `exit` 関数 (実行単位終了時の COBOL によるファイルのクローズ、強制終了された言語による動的獲得リソースのクリーンアップなど) が実行されない可能性があります。
- ユーザー指定の出口または関数 (デストラクターや C/C++ の `atexit()` 関数など) が出口や終了に対して呼び出されない可能性があります。

一般に、スタック・フレームの実行中に発生した例外は、その例外を招いた言語の規則に従って処理されます。COBOL のインプリメンテーションで COBOL 言語セマンティクスをサポートする場合は、システム・サービスを介した例外の代行受信に依存しないため、`TRAP(OFF)` ランタイム・オプションを指定して、非 COBOL 言語の例外処理セマンティクスを有効にすることができます。

COBOL for Windows は、COBOL ランタイム環境の初期設定時の例外環境を保存し、COBOL 環境の終了時にはその例外環境を復元します。COBOL では、インターフェース言語とツールが同じ規約に従うことを期待します。

関連参照

327 ページの『TRAP』

COBOL および C/C++ のデータ型

次の表に、COBOL および C/C++ で使用可能なデータ型の対応を示します。

表 70. COBOL および C/C++ のデータ型

C/C++ データ・タイプ	COBOL データ・タイプ
<code>wchar_t</code>	USAGE NATIONAL (PICTURE N)

表 70. COBOL および C/C++ のデータ型 (続き)

C/C++ データ・タイプ	COBOL データ・タイプ
char	PIC X
signed char	相当する COBOL データ型なし
unsigned char	相当する COBOL データ型なし
short signed int	PIC S9-S9(4) COMP-5。TRUNC(BIN) コンパイラー・オプションを使用した場合は、COMP、COMP-4、または BINARY が使用可能。
short unsigned int	PIC 9-9(4) COMP-5。TRUNC(BIN) コンパイラー・オプションを使用した場合は、COMP、COMP-4、または BINARY が使用可能。
long int	PIC 9(5)-9(9) COMP-5。TRUNC(BIN) コンパイラー・オプションを使用した場合は、COMP、COMP-4、または BINARY が使用可能。
long long int	PIC 9(10)-9(18) COMP-5。TRUNC(BIN) コンパイラー・オプションを使用した場合は、COMP、COMP-4、または BINARY が使用可能。
float	COMP-1
double	COMP-2
enumeration	レベル 88 に類似するが、同一ではない。
char(n)	PICTURE X(n)
array pointer (*) to type	相当する COBOL データ型なし
pointer(*) to function	PROCEDURE-POINTER またはFUNCTION-POINTER

関連タスク

515 ページの『COBOL と C/C++ 間でのデータの受け渡し』

関連参照

293 ページの『TRUNC』

例: C/C++ DLL を呼び出す COBOL プログラム

以下の例では、CALL ステートメントを使用して C/C++ ダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL) を呼び出す COBOL プログラムを示しています。

この例では、以下の概念を示しています。

- この CALL ステートメントは、呼び出し先プログラムが COBOL または C/C++ で記述されるかどうかを示すものではありません。
- COBOL では、大小混合名を持つプログラムの呼び出しが可能です。
- DLL 内にある C/C++ サブプログラムを呼び出すことができます。

以下のステップを実行して、サンプルを作成して実行します。

1. 以下のソースからファイル sub.c を作成します。このファイルが、DLL になります。

```
#include <windows.h>
#include <string.h>
#include <stdio.h>
```

```

BOOL WINAPI DllMain(HINSTANCE hinstDLL,DWORD,LPVOID);
_declspec (dllexport) int Sub(void);

BOOL WINAPI DllMain (
    HANDLE    hModule,
    DWORD     dwFunction,
    LPVOID    lpNot)
{
    return TRUE;
}

_declspec (dllexport) int Sub(void)
{
    printf ("Hello from sub.%n");
    return 0;
}

```

2. 以下のステートメントを持つ sub.def というモジュール定義ファイルを作成します。この定義ファイルは、Sub を外部入口点にします。

```

LIBRARY Sub

EXPORTS
    Sub

```

3. 以下のコマンドを使用して、DLL をコンパイルします。この結果が、COBOL によって呼び出される sub.dll というファイルになります。

```
c1 /EHsc /LD /DLL /DEF:sub.def sub.c
```

4. 以下のソースを使用して、COBOL プログラムのファイル driver.cb1 を作成して、sub.dll を呼び出します。

```

cb1 CALLINT(CDECL),PGMNAME(MIXED),LIST
    Identification Division.
    Program-Id. "Driver".
    Data Division.
    Working-Storage Section.
    77 rc pic 9(8) usage binary.
    Procedure Division.
        Display "Hello World, from Driver"

        Call "Sub" returning rc
        Display "Sub Returned to Driver"

        Goback.

```

5. 以下のコマンドを使用して、COBOL プログラムをコンパイルして、上で作成した DLL にリンクします。

```
cob2 -g -v driver.cb1 -IMP:sub.lib
```

6. コマンド driver を発行してサンプルを実行します。

関連タスク

539 ページの『第 29 章 ダイナミック・リンク・ライブラリーの構築』

関連参照

228 ページの『cob2 オプション』

512 ページの『CDECL』

CALL ステートメント (『COBOL for Windows 言語解説書』)

再帰呼び出しの実行

呼び出し先プログラムは、その呼び出し側を直接または間接に実行することができます。例えば、プログラム X がプログラム Y を呼び出し、プログラム Y がプログラム Z を呼び出し、そして、プログラム Z がプログラム X を呼び出します。このような呼び出しを再帰的と言います。

再帰呼び出しを行うには、再帰的に呼び出されるプログラムの PROGRAM-ID 段落に RECURSIVE 文節をコーディングするか、または THREAD コンパイラー・オプションを指定する必要があります。THREAD コンパイラー・オプションが指定されていないか、PROGRAM-ID 段落に RECURSIVE 文節がない COBOL プログラムを再帰的に呼び出そうとすると、実行単位が異常終了します。

関連タスク

6 ページの『プログラムを再帰的として識別する』

関連参照

293 ページの『THREAD』

PROGRAM-ID 段落 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

第 28 章 データの共用

実行単位が互いに呼び出す、別々にコンパイルされた複数のプログラムで構成される場合、プログラムは互いに通信できなければなりません。また、通常は共通データにアクセスする必要があります。

ここでは、他のプログラムとデータを共用できるプログラムの作成方法を説明します。ここで言うサブプログラムは、別のプログラムが呼び出す任意のプログラムのことです。

関連タスク

『データの受け渡し』

524 ページの『LINKAGE SECTION のコーディング』

525 ページの『引数を受け渡すための PROCEDURE DIVISION のコーディング』

530 ページの『プロシージャラー・ポインターと関数ポインターの使用』

531 ページの『複数の入り口点のコーディング』

532 ページの『戻りコード情報の引き渡し』

533 ページの『CALL . . . RETURNING の指定』

533 ページの『EXTERNAL 文節によるデータの共用』

533 ページの『プログラム間でのファイルの共用 (外部ファイル)』

537 ページの『コマンド行引数の使用』

484 ページの『Java とのデータ共用』

データの受け渡し

プログラム間のデータの受け渡し方法には BY REFERENCE、BY CONTENT、BY VALUE の 3 つがあり、これらから選択できます。

BY REFERENCE

サブプログラムは、データのコピーを処理するのではなく、呼び出し側プログラムのストレージ内のデータ項目を参照して処理します。BY REFERENCE は、パラメーターに関して 3 つの方法のどれも指定されておらず、暗黙指定されてもいない場合の、パラメーターの想定引き渡しメカニズムです。

BY CONTENT

呼び出し側プログラムは、*literal* または *identifier* の内容だけを渡します。呼び出し先プログラムは、呼び出し側プログラム内の *literal* または *identifier* の値を変更できません。たとえ、*literal* または *identifier* を受け取ったデータ項目を変更する場合でも変更できません。

BY VALUE

呼び出し側プログラムまたはメソッドは、送り出しデータ項目を参照せず、*literal* または *identifier* の値を渡します。呼び出されるプログラムまたはメソッドは、その中のパラメーターを変更できます。しかし、サブプログラムまたはメソッドは送り出しデータ項目の一時コピーへのアクセス権しか持っていないので、どの変更も呼び出し側プログラムの引数には影響を与えません。

プログラムでどのようにデータを処理したいかに基づいて、上記のデータ受け渡し方法のどれを使用するかを決定してください。

表 71. CALL ステートメントでデータを渡す方法

コード	目的	コメント
CALL . . . BY REFERENCE <i>identifier</i>	呼び出し側プログラムの CALL ステートメントの引数の定義と呼び出されるプログラムのパラメーターの定義に、同じメモリーを共用させる。	サブプログラムがパラメーターに対して行う変更は、呼び出し側プログラムの引数に影響を与えます。
CALL . . . BY REFERENCE ADDRESS OF <i>identifier</i>	<i>identifier</i> のアドレスを呼び出し先プログラムに渡します。ここで、 <i>identifier</i> は LINKAGE SECTION 内の項目です。	サブプログラムがアドレスに対して行う変更は、呼び出し側プログラム内のアドレスに影響を与えます。
CALL . . . BY CONTENT ADDRESS OF <i>identifier</i>	<i>identifier</i> のアドレスのコピーを、呼び出し先プログラムに渡します。	アドレスのコピーに任意の変更を加えても <i>identifier</i> のアドレスには影響しませんが、アドレスのコピーを使用する <i>identifier</i> を変更すると <i>identifier</i> が変更されます。
CALL . . . BY CONTENT <i>identifier</i>	ID のコピーをサブプログラムに渡す。	サブプログラムによってパラメーターを変更しても、呼び出し側の ID には影響しません。
CALL . . . BY CONTENT <i>literal</i>	呼び出し先プログラムにリテラル値のコピーを渡す。	
CALL . . . BY CONTENT LENGTH OF <i>identifier</i>	データ項目の長さのコピーを渡す。	呼び出し側プログラムは、その LENGTH 特殊レジスターから <i>identifier</i> の長さを渡します。
次のような BY REFERENCE と BY CONTENT の組み合わせ: CALL 'ERRPROC' USING BY REFERENCE A BY CONTENT LENGTH OF A.	データ項目とその長さのコピーの両方をサブプログラムに渡す。	
CALL . . . BY VALUE <i>identifier</i>	C/C++ プログラムなど、BY VALUE パラメーター・リンケージ規約を使用するプログラムにデータを渡す。	ID のコピーがパラメーター・リストとして直接渡されます。
CALL . . . BY VALUE <i>literal</i>	C/C++ プログラムなど、BY VALUE パラメーター・リンケージ規約を使用するプログラムにデータを渡す。	リテラルのコピーがパラメーター・リストとして直接渡されます。
CALL . . . BY VALUE ADDRESS OF <i>identifier</i>	呼び出し先プログラムに <i>identifier</i> のアドレスを渡す。データに対するポインターを必要とする C/C++ プログラムにデータを渡すのに推奨される方法。	アドレスのコピーに任意の変更を加えても <i>identifier</i> のアドレスには影響しませんが、アドレスのコピーを使用する <i>identifier</i> を変更すると <i>identifier</i> が変更されます。
CALL . . . RETURNING	関数戻り値を使用して C/C++ 関数を呼び出す。	

関連タスク

523 ページの『呼び出し側プログラムの中での引数の記述』

523 ページの『呼び出し先プログラムの中でのパラメーターの記述』

524 ページの『OMITTED 引数に関するテスト』

533 ページの『CALL . . . RETURNING の指定』
533 ページの『EXTERNAL 文節によるデータの共用』
533 ページの『プログラム間でのファイルの共用 (外部ファイル)』
484 ページの『Java とのデータ共用』

関連参照

CALL ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
The USING 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)
INVOKE ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

呼び出し側プログラムの中での引数の記述

呼び出し側プログラムでは、DATA DIVISION の他のデータ項目と同じ方法で、DATA DIVISION で引数を記述します。

引数のためのストレージは、最高位の最外部プログラムにおいてのみ割り振られます。例えば、プログラム A がプログラム B を呼び出し、プログラム B がプログラム C を呼び出すとします。データ項目はプログラム A で割り振られ、プログラム B と C の LINKAGE SECTION で記述され、そのデータの集合を 3 つのすべてのプログラムで使用できます。

ファイルのデータを参照する場合、データが参照される時には、そのファイルはオープンされていなければなりません。

引数を渡すためには、CALL ステートメントの USING 句をコーディングしてください。データ項目を BY VALUE で渡す場合、データ項目は基本項目でなければなりません。

関連タスク

524 ページの『LINKAGE SECTION のコーディング』
525 ページの『引数を受け渡すための PROCEDURE DIVISION のコーディング』

関連参照

The USING 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

呼び出し先プログラムの中でのパラメーターの記述

どんなデータが呼び出し側プログラムから渡されるのか知っている必要があります、さらに呼び出し側プログラムが直接的または間接的に呼び出すそれぞれのプログラムの LINKAGE SECTION でそれを記述する必要があります。

呼び出し側プログラムから渡されるデータを受け取るパラメーターを指定するために、USING 句を PROCEDURE DIVISION ヘッダーの後にコーディングしてください。

引数がサブプログラムに BY REFERENCE で渡される場合、メインプログラムで引き渡しが行われ定義されているもの以外のパラメーターおよびフィールドの間の関係をサブプログラムが指定しても無効です。サブプログラムでは、以下を行うことはできません。

- 対応する引数よりバイト総数が大きくなるようパラメーターを定義する。
- 呼び出し側プログラムから引数として渡されたテーブルの限度を超えるエレメントを参照するような添え字参照を使用する。

- 定義されたパラメーターの長さを超えるデータにアクセスする参照変更を使用する。
- 呼び出し側プログラムで定義された以外のデータ項目にアクセスするためにパラメーターのアドレスを操作する。

これらの規則のいずれかに違反していると、呼び出し側プログラムが **OPTIMIZE** コンパイラー・オプションを指定してコンパイルされている場合に、予期しない結果となります。

関連タスク

『LINKAGE SECTION のコーディング』

関連参照

The USING 句 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

OMITTED 引数に関するテスト

CALL ステートメント内の引数の代わりに **OMITTED** キーワードをコーディングして、1 つまたは複数の **BY REFERENCE** 引数が、呼び出し先プログラムに渡されないように指定することができます。

例えば、プログラム `sub1` を呼び出すときに、2 番目の引数を省略するには、次のステートメントをコーディングします。

```
Call 'sub1' Using PARM1, OMITTED, PARM3
```

CALL ステートメントの **USING** 句の引数は、数および位置において呼び出し先プログラムのパラメーターと一致しなければなりません。

呼び出し先プログラムで、対応するパラメーターのアドレスを **NULL** と比較して、引数が **OMITTED** として渡されたかどうかをテストすることができます。以下に、その例を示します。

```
Program-ID. sub1.
...
Procedure Division Using RPARM1, RPARM2, RPARM3.
    If Address Of RPARM2 = Null Then
        Display 'No 2nd argument was passed this time'
    Else
        Perform Process-Parm-2
    End-If
```

関連参照

CALL ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

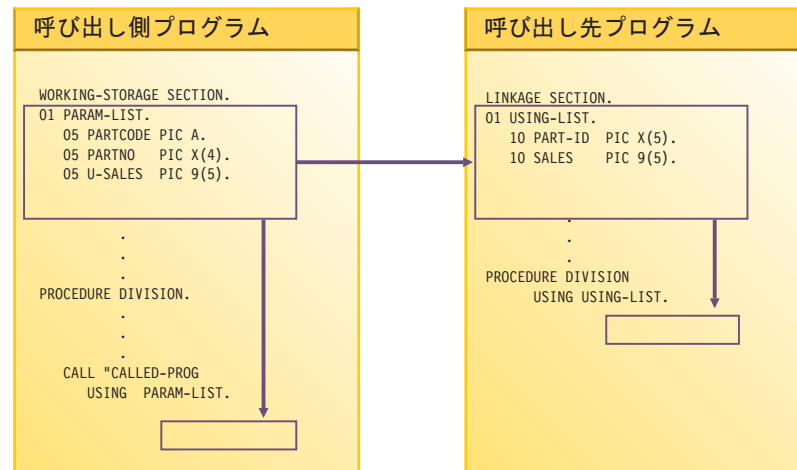
The USING 句 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

LINKAGE SECTION のコーディング

呼び出し側プログラムにある引数と同じ数のデータ名を、呼び出し先プログラムの **identifier** リストにコーディングしてください。位置で同期させます。なぜならコンパイラーは、呼び出し側プログラムの最初の引数を、呼び出し先プログラムの最初の **identifier** に渡し、以下同様に行うからです。

呼び出し先プログラムの identifier リストのデータ名の数、呼び出し側プログラムから渡される引数の数よりも大きいと、エラーになります。コンパイラは引数とパラメーターの突き合わせを試行しません。

次の図は、あるプログラムから別のプログラムにデータ項目が渡される様子を示しています (暗黙的に BY REFERENCE):



呼び出し側プログラムでは、パーツ (PARTCODE) とパーツ・ナンバー (PARTNO) のコードは別個のデータ項目です。それに対して、呼び出し先プログラムでは、パーツのコードとパーツ・ナンバーのコードが 1 つのデータ項目 (PART-ID) に結合されています。呼び出し先プログラムにおける PART-ID への参照は、これらの項目に対する唯一有効な参照です。

引数を受け渡すための PROCEDURE DIVISION のコーディング

引数を BY VALUE によって渡す場合は、サブプログラムの PROCEDURE DIVISION ヘッダーで USING BY VALUE 文節をコーディングしてください。引数を BY REFERENCE または BY CONTENT で渡す場合は、引数の受け渡し方法をヘッダーで指示する必要はありません。

```
PROCEDURE DIVISION USING BY VALUE. . .
```

```
PROCEDURE DIVISION USING. . .  
PROCEDURE DIVISION USING BY REFERENCE. . .
```

上の最初のヘッダーは、データ項目が BY VALUE によって渡されることを示しています。2 番目と 3 番目のヘッダーは、項目が BY REFERENCE または BY CONTENT によって渡されることを示しています。

関連参照

手続き部のヘッダー (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

The USING 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

CALL ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

受け渡されるデータのグループ化

プログラム間で渡す必要があるすべてのデータ項目をグループ化し、それらを 1 つのレベル 01 項目に入れることを考慮してください。そのような処理を行うと、1 個のレベル 01 レコードを渡すことができます。

ただし、データ項目を BY VALUE で渡す場合、データ項目は基本項目でなければならないことに注意してください。

レコード突き合わせの間違いの可能性をより少なくするためには、レベル 01 レコードをコピー・ライブラリーの中に置き、両方のプログラムにそれをコピーするようにします。すなわち、呼び出し側プログラムの WORKING-STORAGE SECTION と呼び出し先プログラムの LINKAGE SECTION の中でコピーします。

関連タスク

524 ページの『LINKAGE SECTION のコーディング』

関連参照

CALL ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

ヌル終了ストリングの取り扱い

ストリング処理動詞を、ヌル終了リテラルおよび 16 進リテラル X'00' とともに使用する場合、COBOL はヌル終了ストリングをサポートします。

ヌル終了ストリング (例えば、C プログラムから渡された) は、次のコードのようなストリング処理メカニズムを使用して処理することができます。

```
01 L      pic X(20) value z'ab'.
01 M      pic X(20) value z'cd'.
01 N      pic X(20).
01 N-Length pic 99      value zero.
01 Y      pic X(13) value 'Hello, World!'.
```

ヌル終了ストリングの長さを決定してから、そのストリングの値と長さを表示するには、次のようにコーディングします。

```
Inspect N tallying N-length for characters before initial X'00'
Display 'N: ' N(1:N-length) ' Length: ' N-length
```

ヌル終了ストリングを英数字ストリングに移動し、ヌルを削除するには、次のようにコーディングします。

```
Unstring N delimited by X'00' into X
```

ヌル終了ストリングを作成するには、次のようにコーディングします。

```
String Y      delimited by size
X'00' delimited by size
into N.
```

2 つのヌル終了ストリングを連結するには、次のようにコーディングします。

```
String L      delimited by x'00'
M      delimited by x'00'
X'00' delimited by size
into N.
```

関連タスク

105 ページの『ヌル終了ストリングの取り扱い』

関連参照

ヌル終了英数字リテラル (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

チェーン・リストを処理するためのポインターの使用

レコード域のアドレスを受け渡す必要がある場合には、ポインター・データ項目を使用することができます。ポインター・データ項目とは、USAGE IS POINTER 文節を使用して定義されているデータ項目、または ADDRESS 特殊レジスターであるデータ項目のいずれかです。

ポインター・データ項目の代表的な適用は、チェーン・リスト (各レコードがそれぞれ次のレコードを指し示す一連のレコード) の処理です。

プログラム相互間のアドレスをチェーン・リストに入れて渡す場合は、NULL を使用して、次の 2 つの方法のいずれかで無効なアドレスの値 (非数値 0) をポインター項目に割り当てることができます。

- データ定義の中で VALUE IS NULL 文節を使用する。
- SET ステートメントの中で送信フィールドとして NULL を使用する。

最後のレコードのポインター・データ項目がヌル値を含んでいるチェーン・リストの場合、リストの終わりを検査するために次のコードを使用することができます。

```
IF PTR-NEXT-REC = NULL  
  . . .  
  (logic for end of chain)
```

リストの終わりに達していない場合、プログラムはレコードを処理して次のレコードに移ることができます。

呼び出し側プログラムから渡されるデータには、無視したいヘッダー情報が含まれていることがあります。ポインター・データ項目は数値ではないので、それらに対して直接に算術演算を行うことはできません。しかし、ヘッダー情報をバイパスするために、SET ステートメントを使用して、渡されたアドレスを増分することができます。

『例: チェーン・リストを処理するためのポインターの使用』

関連タスク

524 ページの『LINKAGE SECTION のコーディング』

525 ページの『引数を受け渡すための PROCEDURE DIVISION のコーディング』

関連参照

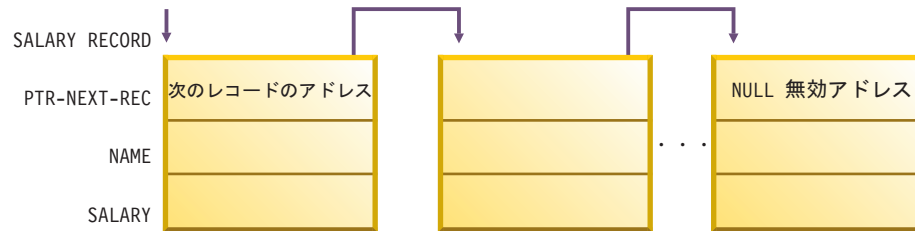
SET ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: チェーン・リストを処理するためのポインターの使用

次の例は、リンク・リスト、つまりデータ項目のチェーン・リストを処理する方法を示しています。

この例では、個々の給与レコードで構成されるデータのチェーン・リストを示しています。次の図は、レコードがストレージの中でどのようにリンクされているかを

視覚化する 1 つの方法を示しています。最後のレコードを除いて、各レコードの最初の項目は次のレコードを指し示しています。最後のレコードの最初の項目は、それが最後のレコードであることを示すために (有効アドレスではなく) ノル値を含んでいます。



これらのレコードを処理するアプリケーションの高水準の論理は、次のようになります。

```

Obtain address of first record in chained list from routine
Check for end of the list
DO UNTIL end of the list
    Process record
    Traverse to the next record
END
  
```

次のコードは、チェーン・リストを処理するこの例で使用される、呼び出し側プログラム `LISTS` の概要です。

```

IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. LISTS.
ENVIRONMENT DIVISION.
DATA DIVISION.
*****
WORKING-STORAGE SECTION.
77 PTR-FIRST          POINTER VALUE IS NULL.          (1)
77 DEPT-TOTAL         PIC 9(4) VALUE IS 0.
*****
LINKAGE SECTION.
01 SALARY-REC.
   02 PTR-NEXT-REC     POINTER.                        (2)
   02 NAME             PIC X(20).
   02 DEPT             PIC 9(4).
   02 SALARY           PIC 9(6).
01 DEPT-X             PIC 9(4).
*****
PROCEDURE DIVISION USING DEPT-X.
*****
* FOR EVERYONE IN THE DEPARTMENT RECEIVED AS DEPT-X,
* GO THROUGH ALL THE RECORDS IN THE CHAINED LIST BASED ON THE
* ADDRESS OBTAINED FROM THE PROGRAM CHAIN-ANCH
* AND CUMULATE THE SALARIES.
* IN EACH RECORD, PTR-NEXT-REC IS A POINTER TO THE NEXT RECORD
* IN THE LIST; IN THE LAST RECORD, PTR-NEXT-REC IS NULL.
* DISPLAY THE TOTAL.
*****
    CALL "CHAIN-ANCH" USING PTR-FIRST                (3)
    SET ADDRESS OF SALARY-REC TO PTR-FIRST            (4)
*****
    PERFORM WITH TEST BEFORE UNTIL ADDRESS OF SALARY-REC = NULL (5)

    IF DEPT = DEPT-X
        THEN ADD SALARY TO DEPT-TOTAL
        ELSE CONTINUE
    END-IF
  
```

SET ADDRESS OF SALARY-REC TO PTR-NEXT-REC

(6)

END-PERFORM

DISPLAY DEPT-TOTAL
GOBACK.

- (1) PTR-FIRST は、NULL の初期値を持つポインター・データ項目として定義されます。CHAIN-ANCH への呼び出しから正常に戻ると、PTR-FIRST には、チェーン・リスト内の最初のレコードのアドレスが入れられます。呼び出しで何か間違いが起こり、PTR-FIRST がチェーンの最初のレコードのアドレスの値を受け取っていないと、PTR-FIRST はヌル値のままであり、プログラムのロジックに従って、レコードは処理されません。
- (2) 呼び出し側プログラムの LINKAGE SECTION には、チェーン・リストのレコードの記述が入っています。さらに、CALL ステートメントの USING 文節を使用して渡される部門コードの記述も含まれています。
- (3) 最初の SALARY-REC レコード域のアドレスを取得するために、LISTS プログラムはプログラム CHAIN-ANCH を呼び出します。
- (4) SET ステートメントのレコード記述 SALARY-REC の基礎となっているのは、PTR-FIRST に含まれているアドレスです。
- (5) この例のチェーン・リストは、最後のレコードに無効アドレスが含まれるようにセットアップされます。チェーン・リスト終了に対するこの検査は、do-while 構造を使用して行われます (最後のレコードのポインター・データ項目には値 NULL が割り当てられる構造になっています)。
- (6) LINKAGE-SECTION 内のレコードのアドレスは、SALARY-REC の最初のフィールドとして送信されるポインター・データ項目によって、次のレコードのアドレスに等しく設定されます。レコード処理ルーチンが繰り返され、チェーン・リスト内の次のレコードが処理されます。

別のプログラムから受け取ったアドレスを増分するには、LINKAGE SECTION および PROCEDURE DIVISION を次のようにセットアップすることができます。

LINKAGE SECTION.

01 RECORD-A.

02 HEADER PIC X(12).

02 REAL-SALARY-REC PIC X(30).

...

01 SALARY-REC.

02 PTR-NEXT-REC POINTER.

02 NAME PIC X(20).

02 DEPT PIC 9(4).

02 SALARY PIC 9(6).

...

PROCEDURE DIVISION USING DEPT-X.

...

SET ADDRESS OF SALARY-REC TO ADDRESS OF REAL-SALARY-REC

この時点では、SALARY-REC のアドレスは、REAL-SALARY-REC、または RECORD-A + 12 のアドレスを基底にしています。

関連タスク

527 ページの『チェーン・リストを処理するためのポインターの使用』

プロシージャ・ポインターと関数ポインターの使用

プロシージャ・ポインター とは、USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節によって定義されるデータ項目です。関数ポインター とは、USAGE IS FUNCTION-POINTER 文節によって定義されるデータ項目です。

ここでは、「ポインター」は、プロシージャ・ポインター・データ項目または関数ポインター・データ項目のどちらかを指します。プロシージャ・ポインター・データ項目または関数ポインター・データ項目は、以下の入り口点の入り口アドレス (ポインター) が入るように設定することができます。

- ・ ネストされていない別の COBOL プログラム。
- ・ 別の言語で作成されているプログラム。例えば、C 関数の入り口アドレスを受け取るためには、CALL ステートメントの CALL RETURNING 形式を使用して関数を呼び出してください。この結果、SET ステートメントの形式を使用してプロシージャ・ポインターに変換できるポインターが戻されます。
- ・ 別の COBOL プログラムの代替入り口点 (ENTRY ステートメントで定義されたものの)。

ポインター・データ項目を設定するには、SET ステートメントを使用する必要があります。以下に、その例を示します。

```
CALL 'MyCFunc' RETURNING ptr.  
SET proc-ptr TO ptr.  
CALL proc-ptr USING dataname.
```

ポインター項目を、CALL *identifier* ステートメントで呼び出されるロード・モジュールの入り口アドレスに設定し、後でプログラムが呼び出されたモジュールをキャンセルしたとします。この場合、ポインター項目は未定義の状態になり、後でその項目を参照しても、結果は信頼できないものになります。

関連参照

PROCEDURE-POINTER 句 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

SET ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

Windows の制約事項への対処

一般に、呼び出しに引数が含まれている場合は、プロシージャ・ポインターまたは関数ポインターによって呼び出されるプログラムに対して SYSTEM (STDCALL) リンケージを使用することはできません。この制約事項は、名前の形成 (名前装飾 とも呼ばれる) に関連する規約によるものです。

STDCALL リンケージを使用すると、入り口名にパラメーター・リストのバイト数を付加することで、名前が形成されます。例えば、参照による引数と値による 4 バイト整数を渡す、abc という名前のプログラムが、パラメーター・リスト内に 8 バイトを持つ場合、生成される名前は _abc@8 になります。SET ステートメントで入り口点に渡される引数を構文的に指定する方法はないため、入り口点のアドレスを指すプロシージャ・ポインターまたは関数ポインターを設定することはできません。したがって、生成される名前には、パラメーター・リスト内のバイト数として '0' が含まれます。入り口点に引数が含まれていると、外部参照が未解決のためリンクが失敗します。

CALLINT コンパイラー指示を使用して、プロシージャ・ポインターまたは関数ポインターを使用した引数を持つプログラムの呼び出しが、OPTLINK 規約を使用するようにしてください。以下に、その例を示します。

```
CBL
  IDENTIFICATION DIVISION.
  PROGRAM-ID. XC.
  DATA DIVISION.
  WORKING-STORAGE SECTION.
  01  PP1 PROCEDURE-POINTER.
  01  HW  PIC X(12).
  PROCEDURE DIVISION USING XA.
* Use OPTLINK linkage:
  >>CALLINT OPTLINK
  SET PP1 TO ENTRY "X".
* Restore default linkage:
  >>CALLINT
  MOVE "Hello World." to HW
  DISPLAY "Calling X."
* Use OPTLINK linkage:
  >>CALLINT OPTLINK
  CALL PP1 USING HW.
* Restore default linkage:
  >>CALLINT
  GOBACK.
END PROGRAM XC.

* Use OPTLINK linkage:
CBL ENTRYINT(OPTLINK)
  IDENTIFICATION DIVISION.
  PROGRAM-ID. X.
  DATA DIVISION.
  LINKAGE SECTION.
  01  XA  PIC 9(9).
  PROCEDURE DIVISION USING XA.
  DISPLAY XA.
  GOBACK.
END PROGRAM X.
```

CALLINT コンパイラー指示と CALLINT コンパイラー・オプションを使用しないと、リンクを実行する際に、_X00 を指す参照が未解決の状態になります。

呼び出し先プログラムが C または PL/I で記述され、STDCALL インターフェースを使用する場合は、呼び出し先プログラム内に pragma ステートメントを使用して、STDCALL 名前装飾を使用せずに名前を形成します。

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

複数の入り口点のコーディング

複数の入り口点 (PROCEDURE DIVISION USING ... および ENTRY xxx USING . . .) を持つ呼び出し側プログラム用の SYSTEM(STDCALL) 規約を常に使用できるわけではありません。

各入り口点のパラメーター数が異なる場合や、呼び出し元が呼び出し先入り口点が想定する数の引数を渡さない場合は、STDCALL 規約により、予測不能な結果が生じる可能性があります。 STDCALL 規約を使用する場合は、呼び出し側プログラムが引数を格納したスタックを、呼び出し先プログラムがクリーンアップする必要があります。

ます。呼び出し先プログラムは渡された引数の数を判断できないため、期待される数の引数を使用します。この数と渡された数が異なると、呼び出し先プログラムはスタックを正しくクリーンアップできません。

複数の入り口点を持つプログラムに共通の出口点を使用することはできないため、入り口点ごとに引数の数が異なると、スタックを正しくクリーンアップする方法を判断することができません。

データ型: STDCALL リンケージは、引数ごとにスタック上で 4 バイトを使用するため、データ型の違いは重要ではありません。

関連参照

514 ページの『SYSTEM』

戻りコード情報の引き渡し

プログラム間で戻りコードを受け渡すには、RETURN-CODE 特殊レジスターを使用します。(メソッドは RETURN-CODE 特殊レジスターに情報を戻しませんが、プログラムへの呼び出しの後でこのレジスターを検査できます。)

また、メソッドの PROCEDURE DIVISION ヘッダーで RETURNING 句を使用して、起動プログラムまたはメソッドに情報を戻すこともできます。PROCEDURE DIVISION . . . RETURNING で CALL . . . RETURNING を指定しても、RETURN-CODE レジスターは設定されません。

RETURN-CODE 特殊レジスターの理解

COBOL プログラムがその呼び出し元に戻ると、RETURN-CODE 特殊レジスターの内容は、呼び出し先プログラムの RETURN-CODE 特殊レジスターの値に従って設定されます。

呼び出し先プログラムによる RETURN-CODE の設定は、COBOL プログラム間の呼び出しに限られます。したがって、COBOL プログラムが C プログラムを呼び出す場合は、COBOL プログラムの RETURN-CODE 特殊レジスターが設定されることは期待できません。

COBOL プログラムと C プログラムで同じように機能させるためには、COBOL プログラムが RETURNING 句を使用して C プログラムを呼び出すようにしなければなりません。C プログラム (関数) が関数値を正しく宣言していれば、呼び出し COBOL プログラムの RETURNING 値が設定されます。

INVOKE ステートメントを使用して RETURN-CODE 特殊レジスターを設定することはできません。

PROCEDURE DIVISION RETURNING . . . の使用

呼び出し側プログラムに情報を戻すには、プログラムの PROCEDURE DIVISION ヘッダーで RETURNING 句を使用してください。

```
PROCEDURE DIVISION RETURNING dataname2
```

上の例で、呼び出し先プログラムが正常にその呼び出し側に戻ると、*dataname2* の値が、CALL ステートメントの RETURNING 句で指定された ID に保管されます。

CALL . . . RETURNING *dataname2*

CALL . . . RETURNING の指定

C/C++ の関数または COBOL のサブルーチンへの呼び出しでは、CALL ステートメントで RETURNING 句を指定することができます。

RETURNING 句のフォーマットは次のとおりです。

CALL . . . RETURNING *dataname2*

呼び出し先プログラムの戻り値は *dataname2* に保管されます。*dataname2* は、呼び出し側プログラムの DATA DIVISION で定義しなければなりません。ターゲット関数で宣言される戻り値のデータ型は、*dataname2* のデータ型と同じでなければなりません。

EXTERNAL 文節によるデータの共用

EXTERNAL 文節を使用すると、別々にコンパイルされたプログラムやメソッド (バッチ・シーケンスのプログラムを含む) がデータ項目を共用できるようになります。EXTERNAL は、WORKING-STORAGE SECTION のレベル 01 のデータ記述にコーディングします。

次の規則が適用されます。

- EXTERNAL グループ項目に従属する項目はそれ自体が EXTERNAL です。
- EXTERNAL データ項目の名前を、同じプログラムの中で別の EXTERNAL 項目の名前として使用することはできません。
- VALUE 文節は、グループ項目または従属項目 (すなわち、EXTERNAL) には指定できません。

実行単位内で、ある COBOL プログラムまたはメソッドの項目のデータ記述が、その項目を含むプログラムのデータ記述と同じ場合は、そのプログラムまたはメソッドはその項目にアクセスして処理できます。例えば、プログラム A に次のデータ記述があるとします。

```
01 EXT-ITEM1      EXTERNAL      PIC 99.
```

この場合、プログラム B は、WORKING-STORAGE SECTION に同じデータ記述を置くことによって、そのデータ項目にアクセスすることができます。

EXTERNAL データ項目へのアクセス権を持っているプログラムは、その項目の値を変更できます。したがって、保護しなければならないデータ項目には、この文節を使用しないでください。

プログラム間でのファイルの共用 (外部ファイル)

実行単位内の別々にコンパイルされたプログラムまたはメソッドがファイルに共通ファイルとしてアクセスできるようにするには、ファイルに EXTERNAL 文節を使用します。

以下の指針に従うことをお勧めします。

- ファイル状況コードを検査するすべてのプログラムの FILE STATUS 文節で、同じデータ名を使用する。
- 同じファイル状況フィールドを検査する各プログラムについて、ファイル状況フィールドのレベル 01 データ定義で EXTERNAL 文節をコーディングする。

外部ファイルを使用すると、次のような利点があります。

- メインプログラムに入出力ステートメントが含まれていなくても、メインプログラムからファイルのレコード域を参照することができます。
- それぞれのサブプログラムが、OPEN や READ のような単一の入出力機能を制御することができます。
- それぞれのプログラムがファイルにアクセスすることができます。

『例: 外部ファイルの使用』

関連タスク

12 ページの『入出力操作でのデータの使用』

関連参照

EXTERNAL 文節 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: 外部ファイルの使用

次の例は、いくつかのプログラムにおける外部ファイルの使用を示しています。それぞれのサブプログラムにファイルの同じ記述が含まれていることを保証するために、COPY ステートメントを使用します。

次の表は、メインプログラムとサブプログラムを説明しています。

名前	機能
ef1	メインプログラム。すべてのサブプログラムを呼び出し、レコード域の内容を検査する。
eflopeno	出力用に外部ファイルをオープンし、ファイル状況コードを検査する。
eflwrite	外部ファイルにレコードを書き込み、ファイル状況コードを検査する。
eflopeni	入力用に外部ファイルをオープンし、ファイル状況コードを検査する。
eflread	外部ファイルからレコードを読み取り、ファイル状況コードを検査する。
eflclose	外部ファイルをクローズし、ファイル状況コードを検査する。

各プログラムは、次の 3 つのコピーブックを使用します。

- efselect は FILE-CONTROL 段落に設定されます。

```
Select ef1
Assign To ef1
File Status Is efs1
Organization Is Sequential.
```

- effile は FILE SECTION に設定されます。

```
Fd ef1 Is External
      Record Contains 80 Characters
      Recording Mode F.
01 ef-record-1.
   02 ef-item-1 Pic X(80).
```

- efwrkstg は WORKING-STORAGE SECTION に設定されます。

```
01 efs1          Pic 99 External.
```

外部ファイルを使用する入出力

```

Identification Division.
Program-Id.
    efl.
*
* This main program controls external file processing.
*
Environment Division.
Input-Output Section.
File-Control.
    Copy efselect.
Data Division.
File Section.
    Copy effile.
Working-Storage Section.
    Copy efwrkstg.
Procedure Division.
    Call "eflopeno"
    Call "eflwrite"
    Call "eflclose"
    Call "eflopeni"
    Call "eflread"
    If ef-record-1 = "First record" Then
        Display "First record correct"
    Else
        Display "First record incorrect"
        Display "Expected: " "First record"
        Display "Found   : " ef-record-1
    End-If
    Call "eflclose"
    Goback.
End Program efl.
Identification Division.
Program-Id.
    eflopeno.
*
* This program opens the external file for output.
*
Environment Division.
Input-Output Section.
File-Control.
    Copy efselect.
Data Division.
File Section.
    Copy effile.
Working-Storage Section.
    Copy efwrkstg.
Procedure Division.
    Open Output efl
    If efs1 Not = 0
        Display "file status " efs1 " on open output"
        Stop Run
    End-If
    Goback.
End Program eflopeno.
Identification Division.
Program-Id.
    eflwrite.
*
* This program writes a record to the external file.
*
Environment Division.
```

```

Input-Output Section.
File-Control.
    Copy efselect.
Data Division.
File Section.
    Copy effile.
Working-Storage Section.
    Copy efwrkstg.
Procedure Division.
    Move "First record" to ef-record-1
    Write ef-record-1
    If efs1 Not = 0
        Display "file status " efs1 " on write"
        Stop Run
    End-If
    Goback.
End Program eflwrite.
Identification Division.
Program-Id.
    eflopeni.
*
* This program opens the external file for input.
*
Environment Division.
Input-Output Section.
File-Control.
    Copy efselect.
Data Division.
File Section.
    Copy effile.
Working-Storage Section.
    Copy efwrkstg.
Procedure Division.
    Open Input efl
    If efs1 Not = 0
        Display "file status " efs1 " on open input"
        Stop Run
    End-If
    Goback.
End Program eflopeni.
Identification Division.
Program-Id.
    eflread.
*
* This program reads a record from the external file.
*
Environment Division.
Input-Output Section.
File-Control.
    Copy efselect.
Data Division.
File Section.
    Copy effile.
Working-Storage Section.
    Copy efwrkstg.
Procedure Division.
    Read efl
    If efs1 Not = 0
        Display "file status " efs1 " on read"
        Stop Run
    End-If
    Goback.
End Program eflread.
Identification Division.
Program-Id.
    eflclose.
*

```



```

* This program closes the external file.
*
Environment Division.
Input-Output Section.
File-Control.
    Copy efselect.
Data Division.
File Section.
    Copy effile.
Working-Storage Section.
    Copy efwrkstg.
Procedure Division.
    Close ef1
    If efs1 Not = 0
        Display "file status " efs1 " on close"
    Stop Run
End-If
Goback.
End Program ef1close.

```

コマンド行引数の使用

コマンド行でメインプログラムに引数を渡すことができます。オペレーティング・システムはメインプログラムを呼び出す際に、引数を含むストリングを使用します。

引数の処理方法は、cob2 コマンドの `-host` オプションを使用しているかどうかによって異なります。

`-host` オプションを指定しない場合は、コマンド行引数はネイティブのデータ形式で受け渡されます。

`-host` オプションを指定すると、Windows では、コマンド行引数を含む EBCDIC ストリングを使用して、すべてのメインプログラムを呼び出します。ストリングの長さは、ビッグ・エンディアン 形式になります。

『例: コマンド行引数』

関連タスク

105 ページの『ヌル終了ストリングの取り扱い』

526 ページの『ヌル終了ストリングの取り扱い』

関連参照

228 ページの『cob2 オプション』

例: コマンド行引数

この例は、コマンド行引数の読み取り方法を示しています。

```

IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. "testarg".
*
ENVIRONMENT DIVISION.
CONFIGURATION SECTION.
*
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
*
linkage section.

```

```

01  os-parm.
   05  parm-len          pic s999 comp.
   05  parm-string.
       10  parm-char      pic x occurs 0 to 100 times
                           depending on parm-len.
*
PROCEDURE DIVISION using os-parm.
  display "parm-len=" parm-len
  display "parm-string='" parm-string "'"
  evaluate parm-string
    when "01" display "case one"
    when "02" display "case two"
    when "95" display "case ninety-five"
    when other display "case unknown"
  end-evaluate
GOBACK.

```

以下のように、このプログラムをコンパイルして実行するとします。

```
cob2 testarg.cbl
```

```
testarg 95
```

結果の出力は、次のとおりです。

```

parm-len=002
parm-string='95'
case ninety-five

```

第 29 章 ダイナミック・リンク・ライブラリーの構築

ダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL) は、頻繁に使用する 1 つ以上の関数のライブラリーとして構築することができます。DLL は、必要に応じてそれらの関数を呼び出し側プログラムに提供できます。

COBOL の用語における DLL とは、最外部プログラムの集合を意味します。最外部プログラムにはネストされたプログラムが含まれている可能性があります。DLL の外部にあるプログラムは、その DLL 内の最外部プログラム (入り口点 と呼ばれる) しか呼び出すことができません。複数の COBOL プログラムをまとめて 1 つの実行可能モジュール (.EXE) としてコンパイルおよびリンクできるのと同様に、1 つ以上のコンパイル済み最外部 COBOL プログラムをまとめてリンクして、DLL を作成することができます。

DLL 内の最外部プログラムはプログラム・ライブラリーの一部であるため、DLL 内の各プログラム (そのような最外部プログラムが 1 つしかない場合も) は、サブプログラム と呼ばれます。

関連概念

『スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク』

540 ページの『DLL への参照をリンカーが解決する方法』

関連タスク

541 ページの『DLL の作成』

スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク

リンクを使用すると、呼び出し側プログラムのソース・コードには含まれていない別のプログラムを呼び出すことができます。呼び出し側プログラムのオブジェクト・モジュールは、実行前または実行中に、呼び出し先プログラムのオブジェクト・モジュールとリンクされます。

スタティック・リンク は、1 つの実行可能モジュール内で、呼び出し側プログラムが呼び出し先プログラムにリンクされる場合に行われます。プログラムのロード時には、オペレーティング・システムによって、実行可能コードおよびデータが含まれる 1 つのファイルがメモリーに格納されます。

プログラムを静的にリンクすると、.EXE ファイルまたはダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL) サブプログラムに、複数のプログラムに対する実行可能コードが含まれます。このファイルには、呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムの両方が含まれます。

スタティック・リンクの主な利点は、必要なものを完備した独立プログラムを作成できることです。言い換えれば、実行可能プログラムを構成する一部分 (.EXE ファイル) は、追跡を行う必要があります。スタティック・リンクには、次のような欠点があります。

- リンクされる外部プログラムは実行可能ファイルに組み込まれるため、ファイルのサイズが大きくなります。
- 実行可能ファイルの動作を変更するには、これらのファイルをリンクし直す必要があります。
- 外部の呼び出し先プログラムは共用できません。複数の呼び出し側プログラムがアクセスを必要とする場合は、重複したプログラム・コピーをメモリーにロードする必要があります。

これらの欠点に対処するには、ダイナミック・リンクを使用します。

ダイナミック・リンクを使用すると、複数のプログラムが実行可能モジュールの単一コピーを共用することができます。実行可能モジュールは、使用側のプログラムから独立しています。複数のサブプログラムを作成して、DLL に組み込むことができます。呼び出し側プログラムは、これらのサブプログラムを、呼び出し側プログラムの実行可能コードの一部であるかのように使用することができます。動的にリンクされたサブプログラムを変更する際には、呼び出し側プログラムの再コンパイルや再リンクを行う必要がありません。

DLL の一般的な使用目的は、多数のプログラムに共通する関数を提供することです。例えば、DLL を使用して、サブプログラム・パッケージ、サブシステム、および他のプログラムとのインターフェースをインプリメントすることや、オブジェクト指向のクラス・ライブラリーを作成することが可能です。

ファイルを動的にリンクする際には、付属のランタイム DLL や独自の COBOL DLL を使用することができます。

関連概念

511 ページの『CALL identifier および CALL literal』
『DLL への参照をリンカーが解決する方法』

関連タスク

541 ページの『DLL の作成』

DLL への参照をリンカーが解決する方法

プログラムをコンパイルするときには、コンパイラーによって、プログラム内のコードに対応するオブジェクト・モジュールが生成されます。外部オブジェクト・モジュールに含まれる任意のサブプログラム (C では関数、他の言語ではサブルーチン) を使用すると、コンパイラーは外部プログラム参照をプログラムのオブジェクト・モジュールに追加します。

リンカーは、これらの外部参照を解決します。インポート・ライブラリー内または DLL のモジュール定義ファイル内で外部サブプログラムへの参照が検出された場合、その外部サブプログラムのコードは DLL 内にあります。リンカーは、DLL への外部参照を解決するために、実行可能ファイルのロード時に DLL コードの場所をローダーに通知する情報を実行可能ファイルに追加します。

参照される DLL は、それらを呼び出す実行可能ファイルのロード時にロードされるか (プリロード)、あるいはそれらが最初に参照されるときにロードされる (呼び出し時のロード) ように作成することができます。ただし、COBOL CALL ステート

メントによる DLL への参照は、リンカーでは解決されません。DYNAM コンパイラー・オプションが有効な場合は、CALL *identifier* および CALL *literal* が実行されるときに、COBOL がこれらの呼び出しを解決します。

関連概念

539 ページの『スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク』

関連タスク

『DLL の作成』

DLL の作成

DLL は、コンパイルされたソース・コードとモジュール定義 (.DEF) ファイルまたはエクスポート (.EXP) ファイルを使用して構築されます。

以下のステップを実行して、DLL を作成して使用します。

1. 他の COBOL ソース・プログラムと同様の記述方法で、DLL サブプログラムのソース・コードを記述します。
2. DLL をコンパイルおよびリンクするための .DEF ファイルまたは .LIB ファイルを作成します。

モジュール定義ファイルを使用することができます。これは、プログラムまたは DLL の名前、属性、エクスポート、およびその他の特性を記述したテキスト・ファイルです。このファイル内では、EXPORTS ステートメントを使用して、プログラムまたは他の DLL が呼び出せる DLL 内のサブプログラムをすべてリストすることができます。

モジュール定義ファイルではなく .LIB ファイルを指定する場合は、cob2 によって .DEF ファイルが作成されます。そうでない場合は、DLL をリンクするために、cob2 に .DEF ファイルを提供する必要があります。これにより、cob2 はインポート (.IMP) ファイルとエクスポート (.EXP) ファイルを生成します。インポート・ファイルは、プログラムで使用される DLL サブプログラムの検索場所をリンカーに通知します。エクスポート・ファイルは、リンカーにどの部分が DLL エクスポートかを通知するバイナリー・ファイルです。

3. プログラム内で DLL への呼び出しをコーディングします。

COBOL プログラムは、リテラルの DLL サブプログラム名ではなく、ユーザー定義の ID に対して呼び出しを行います。ターゲット・サブプログラムの名前が実行時までわからない場合は、このタイプの呼び出しを使用します。

実行時に解決される呼び出しを使用する代わりに、COBOL CALL *literal* を使用することができます。デフォルトでは、リンカーがこれらの呼び出しを解決します。ただし、DYNAM コンパイラー・オプションの設定によって、リンカーがこれらの呼び出しを解決するかどうかが決まります。

- 設定が DYNAM の場合は、呼び出しが CALL *identifier* と同様に扱われ、実行時に解決されます。
- 設定が NODYNAM の場合は、リンカーが CALL *literal* を解決します。リンカーによって呼び出しが解決される場合は、CALL *literal* を使用して DLL 内のサブプログラムを呼び出しても、DLL のオブジェクト・コードはメインプログ

ラムの実行可能モジュールには組み込まれません。CALL *literal* および NODYNAM を使用した場合は、スタティック・リンクも可能です。DLL 内の入り口点に対してこのような呼び出しを行うには、インポート・ライブラリーを使用します。実行時に解決される呼び出しとは異なり、リンク時の解決では、呼び出し先の DLL に複数の入り口点 (最外部プログラム) を含めることができます。

4. DLL をコンパイルし、リンクします。

cob2 を使用して、ソース・ファイルをコンパイルし、DLL を作成します。
cob2 を使用して DLL をコンパイルおよびリンクする際には、すべての DLL ソース・ファイル名とモジュール定義ファイル名を指定します。-d11 オプション (例えば、-d11:TEST) を使用しない限り、最初のソース・ファイルの名前が DLL の名前として使用されます。

『例: DLL ソース・ファイルおよび関連ファイル』

関連概念

511 ページの『CALL identifier および CALL literal』

539 ページの『スタティック・リンクおよびダイナミック・リンク』

540 ページの『DLL への参照をリンカーが解決する方法』

関連タスク

544 ページの『モジュール定義ファイルの作成』

関連参照

263 ページの『DYNAM』

例: DLL ソース・ファイルおよび関連ファイル

次の COBOL ソース・コードは、DLL ソース・サブプログラムの単純な例です。コンパイル時には、DLL に多数の最外部プログラムを含めることができます。各プログラムは、DLL 内のサブプログラムと見なされます。

次の例では、DLL にサブプログラムが 1 つしか含まれていません。MYDLL.DLL という名前の DLL に含まれる、MYDLL という名前のサブプログラムを別のプログラムが呼び出し、このサブプログラムが実行されると、コンピューター画面に MYDLL Entered というテキストが表示されます。

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
PROGRAM-ID. MYDLL.  
PROCEDURE DIVISION.  
    DISPLAY "MYDLL Entered".  
    EXIT PROGRAM.
```

モジュール定義ファイル

コンパイル済みの MYDLL.CBL ソース・プログラムの .DEF ファイルは、DLL を構築するモジュール定義ファイルで特に頻繁に使用されるステートメントを示しています。

```
*****  
;* MYDLL.DEF *  
;* Description: Provides the module definition *  
;* for MYDLL.DLL, a simple COBOL DLL *  
*****
```

```

LIBRARY MYDLL INITINSTANCE TERMINSTANCE
PROTMODE
DATA MULTIPLE READWRITE LOADONCALL NONSHARED
CODE LOADONCALL EXECUTEREAD
EXPORTS
    MYDLL

```

実行時の DLL 参照の解決

次の COBOL ソース・プログラムは、MYDLL.DLL 内の MYDLL を呼び出します。

```

IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. RTDLLRES.
*
*   THIS PROGRAM USES CALL identifier to call a subprogram
*       NAMED MYDLL in a DLL. IT REQUIRES A DLL
*       NAMED MYDLL.DLL.
*
*
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
77 CALLNAM PIC IS X(8).
PROCEDURE DIVISION.
    DISPLAY "Start sample program RTDLLRES".
    MOVE "MYDLL" TO CALLNAM.
    CALL CALLNAM.
    DISPLAY "RTDLLRES successful".
    STOP RUN.

```

この例では、次のステートメントが、MYDLL.DLL という DLL の単一サブプログラム MYDLL を指す参照となります。

```
MOVE "MYDLL" TO CALLNAM.
```

この DLL は、COBPATH 環境変数で定義されるディレクトリー内になければなりません。

リンク時の DLL 参照の解決

次のプログラムは RTDLLRES.CBL と同じですが、ユーザー定義語に対してではなく、.DEF ファイルにエクスポートされたシンボルに対して直接呼び出しが行われる点が異なります。

```

IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. LTDLLRES.
*
*   THIS PROGRAM CALLS A SUBPROGRAM CALLED MYDLL WHICH
*       RESOLVES AT LINK-TIME. THE DLL IN WHICH "MYDLL"
*       IS FOUND IS NOT REQUIRED TO BE NAMED MYDLL.DLL
*
PROCEDURE DIVISION.
    DISPLAY "Start sample program LTDLLRES".
    CALL "MYDLL"
    DISPLAY "LTDLLRES successful".
    STOP RUN.

```

この例にある MYDLL への呼び出しは、MYDLL.DLL に対する直接参照ではありません (ただしこの場合は、DLL が偶然同じ名前になっています)。この呼び出しは、MYDLL.DEF ファイルにエクスポートされたシンボル名 MYDLL に対するものです。MYDLL は、MYDLL.DLL 内の唯一の COBOL サブプログラムの名前でもあります。cob2 を使用して LTDLLRES が構築される際には、リンカーが MYDLL.DLL 内の MYDLL に対する呼び出しを解決します。

DLL のコンパイルおよびリンク

DLL とメインの実行可能プログラムをコンパイルおよびリンクするには、cob2 を使用します。DLL とそれを読み出すプログラムは、別々のステップでコンパイルする必要があります。

次の cob2 コマンドのどちらを使用しても、MYDLL.DLL という名前の DLL が構築されます。

```
cob2 mydll.cbl mydll.def
cob2 mydll.cbl -dll:mydll
```

次の cob2 コマンドは、プログラム RTDLLRES.EXE を構築します。このプログラムは、実行時の解決によって DLL サブプログラム MYDLL を呼び出します。

```
cob2 rtdllres.cbl
```

次の cob2 コマンドは、プログラム LTDLLRES.EXE を構築します。このプログラムは、リンク時の解決によって DLL サブプログラム MYDLL を呼び出します。

```
cob2 ltdllres.cbl mydll.lib
```

モジュール定義ファイルの作成

モジュール定義ファイルには、1 つ以上のモジュール・ステートメントが含まれています。これらのステートメントを使用して、実行可能出力ファイルの属性とファイル内のコードとデータのセグメントの属性を定義し、またファイルにインポートされるか、またはファイルからエクスポートされるデータと関数を識別します。

モジュール定義ファイルではなく .LIB ファイルを指定する場合は、cob2 によって .DEF ファイルが作成されます。そうでない場合は、DLL をリンクするために、cob2 に .DEF ファイルを提供する必要があります。これにより、cob2 は .IMP ファイルと .EXP ファイルを生成します。

次のような場合に、モジュール定義ファイルを使用することができます。

- DLL を作成する場合。
- 実行可能出力ファイルの属性を、オプションだけを使用した場合よりも正確に定義する必要がある場合。例えば、ライブラリーの初期化と終了動作を定義するには、LIBRARY ステートメントを使用します。
- セグメント属性を、オプションだけを使用した場合よりも正確に定義する必要がある場合。

モジュール定義ファイルの作成時には、次の規則に従ってください。

- NAME または LIBRARY ステートメントを使用して、必要な実行可能出力ファイルのタイプを定義します。いずれか一方のステートメントしか使用できず、また、モジュール定義ファイル内で他のステートメントよりも先に使用する必要があります。
- コメントの先頭にはセミコロン (;) を付けます。リンカーは、ファイル内にあるセミコロンで始まる行と、セミコロンの後に続く行内容をすべて無視します。
- すべてのモジュール定義キーワード (NAME、LIBRARY、IOPL など) を大文字で入力します。

- ・ ステートメントに対するテキスト・パラメーターとして、予約語を使用しないでください。例えば、SHARED はキーワードなので、LIBRARY ステートメントを使用してライブラリーに SHARED という名前を付けることはできません。

関連参照

『モジュール・ステートメントの予約語』

『モジュール・ステートメントの要約』

モジュール・ステートメントの予約語

下の各語は、モジュール・ステートメントに対するテキスト・パラメーターとして使用できません。これらの語は、モジュール定義キーワードか、リンカーによる予約語のいずれかになります。

例えば、EXPORTS ステートメントで定義する関数の名前としてこれらの語を使用したり、STUB ステートメントでスタブ・ファイルに名前を付けるために使用することはできません。

モジュール定義キーワードは常に大文字で入力する必要がありますが、これらの語の大/小文字混合形式と小文字形式も同様に予約されています。例えば、CONTIGUOUS、ContiGuous、および contiguous は、以下では大文字形式のみが示されていますが予約済みです。

ALIAS	INITGLOBAL	PRELOAD
BASE	INITINSTANCE	PRIVATE
CLASS	INVALID	PROTECT
CODE	LIBRARY	PROTMODE
CONFORMING	LOADONCALL	PURE
CONSTANT	LONGNAMES	READONLY
CONTIGUOUS	MAXVAL	READWRITE
DATA	MIXED1632	REALMODE
DECORATED	MOVABLE	RESIDENT
DESCRIPTION	MOVEABLE	RESIDENTNAME
DEVICE	MULTIPLES	ROBASE
DEV386	NAME	SECTIONS
DISCARDABLE	NEWFILES	SEGMENTS
DOS4	NODATA	SHARED
DYNAMIC	NOEXPANDDOWN	SINGLE
EXECUTE	NOIOPL	STACKSIZE
EXECUTEONLY	NONAME	STUB
EXECUTE-ONLY	NONCONFORMING	SWAPPABLE
EXECUTEREAD	NONDISCARDABLE	SYSBASE
EXETYPE	NONE	TERMGLOBAL
EXPANDDOWN	NONPERMANENT	TERMINSTANCE
EXPORTS	NONSHARED	UNKNOWN
FIXED	NOTWINDOWCOMPAT	VERSION
HEAPSIZE	OBJECTS	VIRTUAL
HUGE	OLD	VIRTUAL DEVICE
IOPL	ORDER	WINDOWAPI
IMPORTS	OS2	WINDOWCOMPAT
IMPURE	PERMANENT	WINDOWS
INCLUDE	PHYSICAL DEVICE	WRITE

モジュール・ステートメントの要約

下に示したリンカー・モジュール・ステートメントを使用して、モジュール定義ファイルを作成できます。

NONE|SINGLE|MULTIPLE、SHARED|NONSHARED、INITGLOBAL|INITINSTANCE、
TERMGLOBAL|TERMINSTANCE のデフォルトについては、各オプションの詳細で説明し
ます。

表 72. リンカー・モジュール・ステートメントの要約

ステートメント	説明	パラメーター
『BASE』	優先されるロード・アドレスを設定 します。	ロード・アドレス
『DESCRIPTION』	実行可能ファイルを記述します。	記述テキスト
547 ページの 『EXPORTS』	エクスポートされる関数およびデー タを定義します。	項目名 内部名 順序位置 DECORATED CONSTANT パラメーター・サイズ
548 ページの 『HEAPSIZE』	ローカルのヒープ・サイズを指定し ます。	仮想スタック・サイズ 初期物理メモリー
549 ページの 『LIBRARY』	出力をダイナミック・リンク・ライ ブラリー (DLL) として識別しま す。	ライブラリー名 ロード・アドレス
549 ページの『NAME』	出力を実行可能ファイル (EXE) と して識別します。	アプリケーション名 ロード・アドレス
549 ページの 『STACKSIZE』	ローカルのスタック・サイズを指定 します。	仮想スタック・サイズ 初期物理メモリー
550 ページの『STUB』	DOS 実行可能ファイルをモジュール に追加します。	追加するファイル名
551 ページの 『VERSION』	実行可能ファイルにストリングを追 加します。	追加するバージョン番号

BASE

BASE ステートメントを使用すると、モジュールの最初のロード・セグメントに対す
る優先ロード・アドレスを指定することができます。

BASE ステートメントの構文

▶▶—BASE=address—◀◀

このステートメントは、/BASE リンカー・オプションと同じ効果があります。ステ
ートメントとオプションを両方指定した場合は、オプション値よりもステートメン
ト値の方が優先されます。

DESCRIPTION

DESCRIPTION ステートメントを使用すると、作成する .EXE または .DLL ファイル
に指定したテキストを挿入することができます。

DESCRIPTION ステートメントの構文

DESCRIPTION 'text'

DESCRIPTION ステートメントは、ソース制御情報や著作権情報を埋め込む際に便利です。挿入するテキストは 1 行のストリングにし、一重引用符で囲む必要があります。

次の例では、下の行が .DEF ファイル内にある場合は、リンカーが、テキスト Template Program を .EXE または .DLL ファイルに挿入します。

DESCRIPTION 'Template Program'

EXPORTS

EXPORT ステートメントを使用して、作成する DLL からエクスポートされるデータと関数、および I/O ハードウェア特権を使用して実行される関数の名前と属性を定義することができます。

EXPORTS ステートメントの構文

EXPORTS *enm=inn* [*ord*] {*DECORATED* | *CONSTANT*} [*parms*]

他の .EXE または .DLL ファイルが使用できるようにしたい DLL 内の関数やデータに対しては、エクスポート定義を指定します。エクスポートされないデータや関数へは、DLL 内からしかアクセスできません。

EXPORTS キーワードは、エクスポート定義の先頭をマークします。各定義は個別の行に入力します。エクスポートごとに次の情報を指定することができます。

enm データ構成または関数の入り口名。他のファイルがアクセスするときには、この名前を使用します。エクスポートごとに入り口名を指定する必要があります。正しい関数にリンクされるように、各入り口名を装飾することを強くお勧めします。

inn データ構成または関数の内部名。DLL 内に実際に使用される名前です。内部名を指定する場合は、装飾を行う必要があります。内部名を指定しないと、リンカーは内部名が *enm* と同じであると想定します。

ord モジュール定義テーブル内でのデータ構成または関数の順序位置。順序位置を指定しない場合は、入り口名か序数のいずれかでデータ構成や関数を参照することができます。順序位置を使用した方がアクセスが速く、なおかつスペースを節約できる場合があります。

次の 2 つのいずれかの値のみを指定できます。

DECORATED

(デフォルト) 名前を現状のままにすることを示します。関数名には装飾が適用されません。

CONSTANT

エクスポート・エンティティーが関数ではなくデータ項目であることを示します。

parms 関数のパラメーターの合計サイズをワード (バイト数 ÷ 2) 単位で表します。このフィールドが必要となるのは、I/O 特権で関数を実行する場合のみです。オペレーティング・システムは、I/O 特権を持つ関数が呼び出されると、呼び出し元のスタックから I/O 特権関数のスタックへコピーするワード数を *parms* によって判断します。

次の 3 つの関数のエクスポートを定義する例を示します。

- SampleRead
- StringIn
- CharTest

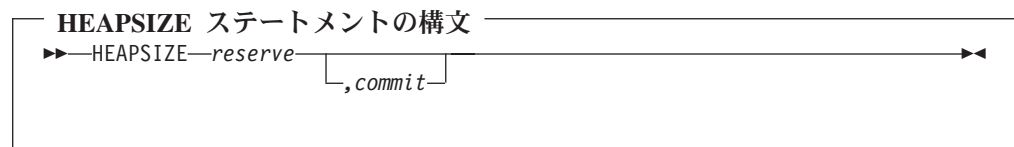
EXPORTS

```
SampleRead = read2bin @8
StringIn = str1 @4
CharTest 6
```

最初の 2 つの関数へは、エクスポート名または序数を使用してアクセスすることができます。なお、モジュールのソース・コード内には、これらの関数がそれぞれ `read2bin` および `str1` として実際に定義されています。最後の関数は I/O 特権で実行されるため、この関数には *parms* (パラメーターの合計サイズ) が 6 ワードとして定義されています。

HEAPSIZE

HEAPSIZE ステートメントを使用すると、アプリケーションのローカル・ヒープのサイズをバイト単位で定義することができます。ヒープ・サイズには、任意の正整数を入力できます。



reserve 予約済みの仮想アドレス・スペースの合計を示します。

commit

最初に割り振る物理メモリーの量を設定します。*commit* の値が *reserve* よりも小さいと、必要なメモリー量は減りますが、実行時間は遅くなる可能性があります。

/HEAP リンカー・オプションで指定された値は、HEAPSIZE ステートメントよりも優先されます。

次の例では、下の行が .DEF ファイル内にある場合は、リンカーがローカル・ヒープを 4000 バイトに設定します。

```
HEAPSIZE 4000
```

LIBRARY

LIBRARY ステートメントを使用すると、出力ファイルを DLL として識別し、オプションとして、名前やライブラリー・モジュールの初期化と終了を定義することができます。

LIBRARY ステートメントの構文

►►—**LIBRARY**—*libname*—◄◄

また、/DLL オプションを使用して、出力ファイルを DLL として識別することも可能です。

LIBRARY ステートメントを .DEF ファイル内で使用する場合は、最初のステートメントにする必要があり、また NAME ステートメントは使用できなくなります。

LIBRARY ステートメント内の BASE パラメーターと、BASE ステートメントの両方を指定すると、BASE ステートメントの方が優先されます。

DLL に名前 `calendar` を割り当てる例を次に示します。

```
LIBRARY calendar
```

NAME

NAME ステートメントを使用すると、実行可能ファイルの名前を定義することができます。

NAME ステートメントの構文

►►—**NAME**—*appname*—◄◄

また、/EXEC オプションを使用して、出力ファイルを .EXE ファイルとして識別することも可能です。

NAME ステートメントを .DEF ファイル内で使用する場合は、最初のステートメントにする必要があり、また LIBRARY ステートメントは使用できなくなります。

実行可能プログラムに名前 `calendar` を割り当てる例を次に示します。

```
NAME calendar
```

STACKSIZE

STACKSIZE を使用すると、プログラムのスタック・サイズをバイト単位で設定することができます。このサイズは、0 から 0xFffffffe の範囲内の偶数でなければなりません。奇数を指定すると、次の偶数に切り上げられます。

STACKSIZE ステートメントの構文

→ STACKSIZE *reserve* [, *commit*] →

reserve 予約済みの仮想アドレス・スペースの合計を示します。

commit

最初に割り振る物理メモリーの量を設定します。*commit* の値が *reserve* よりも小さいと、必要なメモリー量は減りますが、実行時間は遅くなる可能性があります。

プログラムがスタック・オーバーフロー・メッセージを生成する場合は、STACKSIZE ステートメントを使用してスタックのサイズを増やしてください。プログラムがスタックをほとんど使用しない場合は、スタック・サイズを減らしてスペースを節約することができます。

STACKSIZE ステートメントは /STACK リンカー・オプションと同じです。ステートメントとオプションを両方指定した場合は、オプション値よりもステートメント値の方が優先されます。

局所スタックに 4 KB のスペースを割り振る例を次に示します。

STACKSIZE 4096

STUB

STUB ステートメントを使用すると、DOS .EXE ファイルを、作成する .EXE または .DLL ファイルの先頭に追加することができます。

STUB ステートメントの構文

→ STUB 'filename' →

リンカーは、スタブとして指定されたファイル名を次の順序で検索します。

1. 指定したディレクトリー内、またはパスを指定していない場合は現行ディレクトリー内
2. PATH 環境変数でリストされたディレクトリー内

.EXE または .DLL ファイルが DOS で実行されるときには、スタブ関数が必ず呼び出されます。スタブは一般に、DOS モードではプログラムを実行できない旨のメッセージを表示し、プログラムを終了します。

STUB ステートメントを使用しないと、リンカーは独自の標準スタブを同じ目的で追加します。

作成するファイルの先頭に DOS の .EXE ファイル STOPIT.EXE を追加する例を次に示します。


```
STUB 'STOPIT.EXE'
```

VERSION

VERSION ステートメントを使用すると、実行ファイルのヘッダーにバージョン番号を追加することができます。

VERSION ステートメントの構文

▶▶—VERSION—'*file number*'—▶▶

実行可能ファイルに「VERSION 2.3」というテキストを追加する例を次に示します。

```
VERSION '2.3'
```

第 30 章 マルチスレッド化のための COBOL プログラムの準備

COBOL プログラムでプログラム・スレッドを開始または管理することはできませんが、マルチスレッド環境で実行する COBOL プログラムを準備することは可能です。COBOL プログラムは、1 つのプロセス中に複数のスレッドで実行することができます。

マルチスレッド化を実行するための明示的な COBOL 言語は存在しません。したがって、THREAD コンパイラー・オプションでコンパイルします。

THREAD コンパイラー・オプションを使用して COBOL プログラムをコンパイルすると、他のアプリケーションがこれらの COBOL プログラムを呼び出して、これらのプログラムを 1 つのプロセス内の複数のスレッドで実行するか、あるいは 1 つのスレッド内の複数のプログラム呼び出しインスタンスとして実行することができます。したがって、COBOL プログラムを MQ アプリケーションなどのマルチスレッド環境で実行することができます。

559 ページの『例: マルチスレッド環境での COBOL の使用』

関連概念

『マルチスレッド化』

関連タスク

555 ページの『マルチスレッド化による言語エレメントの処理』

557 ページの『マルチスレッド化サポートのための THREAD の選択』

557 ページの『マルチスレッド化されたプログラムへの制御権移動』

558 ページの『マルチスレッド化されたプログラムの終了』

558 ページの『マルチスレッド化による COBOL 制限の処理』

関連参照

293 ページの『THREAD』

PROGRAM-ID 段落 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

マルチスレッド化

マルチスレッド化の COBOL サポートを使用するには、プロセス、スレッド、実行単位、プログラム起動インスタンスの相互関係を理解する必要があります。

オペレーティング・システムおよびマルチスレッド化アプリケーションは、プロセス内の実行フローを処理することができます。実行フローとは、プログラムのすべて、または一部が実行時に発生する一連のイベントです。1 つのプロセス内で実行されるプログラムはリソースを共用することができます。プロセスは操作することができます。例えば、システムがプロセスの実行に使用する時間において、プロセスに高い、または低い優先順位を持たせることができます。

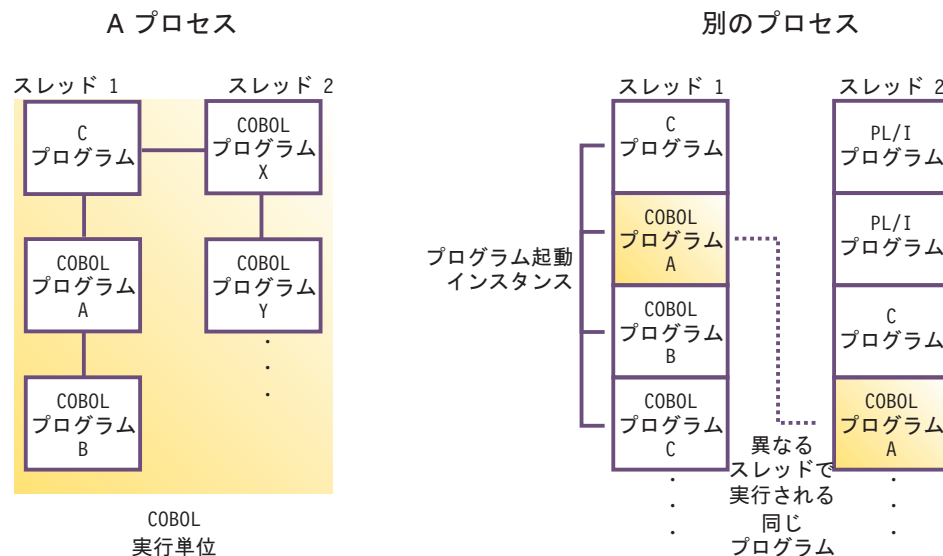
プロセス内で、アプリケーションは 1 つまたは複数のスレッドを開始することができます。スレッドはそれぞれ、そのスレッドを制御するコンピューター命令のス

トリームです。マルチスレッド化プロセスは、1 つの命令ストリーム (スレッド) で始まり、タスクを実行する他の命令ストリームを後で作成することができます。これらの複数のスレッドは並行して実行することができます。スレッド内では、実行プログラムの間で制御権が移動します。

マルチスレッド化環境で、COBOL 実行単位 は、実行中のアクティブな COBOL プログラムが含まれているスレッドを含むプロセスの部分です。COBOL 実行単位は、スレッドのいずれかの実行スタックでアクティブな COBOL プログラムがなくなるまで継続します。例えば、呼び出される COBOL プログラムには GOBACK ステートメントが含まれていて、C プログラムに制御を戻します。実行単位内では、COBOL プログラムは非 COBOL プログラムを呼び出すことができ、逆に、非 COBOL プログラムは COBOL プログラムを呼び出すことができます。

スレッド内では、別々の COBOL および非 COBOL プログラムの間で制御が移動します。例えば、COBOL プログラムは別の COBOL プログラムまたは C プログラムを呼び出すことができます。別々に呼び出されたプログラムはそれぞれ、プログラム起動インスタンス です。特定プログラムのプログラム起動インスタンスは、指定したプロセス内で複数のスレッドに存在することができます。

次の図に、プロセス、スレッド、実行単位、およびプログラム起動インスタンスの間の関係を示します。



マルチプロセッシングまたはマルチスレッド化をマルチタスキング と混同しないように注意してください。マルチタスキングは一般に、アプリケーションの外部動作について述べるときに使用されます。マルチタスキングでは、オペレーティング・システムが複数のアプリケーションを同時に実行しているように見えます。マルチタスキングは、COBOL でインプリメントされるマルチスレッド化とは無関係です。

559 ページの『例: マルチスレッド環境での COBOL の使用』

関連タスク

555 ページの『マルチスレッド化による言語要素の処理』

557 ページの『マルチスレッド化サポートのための THREAD の選択』
557 ページの『マルチスレッド化されたプログラムへの制御権移動』
558 ページの『マルチスレッド化されたプログラムの終了』
558 ページの『マルチスレッド化による COBOL 制限の処理』

関連参照

293 ページの『THREAD』

マルチスレッド化による言語エレメントの処理

COBOL プログラムは 1 つのプロセス内で複数のスレッドとして実行できるため、1 つの言語エレメントが、実行単位の有効範囲またはプログラム呼び出しインスタンスの有効範囲という 2 つの異なる有効範囲で解釈される可能性があります。これら 2 つの有効範囲のタイプは、参照できる項目の場所や、項目がストレージ内で持続する時間を判断する際に重要となります。

実行単位の有効範囲

COBOL 実行単位の実行中は、言語エレメントが持続し、スレッド内の他のプログラムが言語エレメントを使用することができます。

プログラムの呼び出しインスタンスの有効範囲

言語エレメントは、プログラム呼び出しの特定のインスタンス内でのみ持続します。

項目の参照は、その項目が宣言された有効範囲またはその項目が含まれる有効範囲から行うことができます。例えば、実行単位の有効範囲を持つデータ項目は、その実行単位内のプログラム呼び出しの任意のインスタンスから参照することができます。

ある項目は、それが宣言されている項目が持続する限り、ストレージ内に持続します。例えば、プログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つデータ項目は、そのインスタンスが実行中の間だけストレージ内に持続します。

関連タスク

『実行単位の有効範囲を持つエレメントの処理』

556 ページの『プログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つエレメントの処理』

関連参照

556 ページの『マルチスレッド化を使用した COBOL 言語エレメントの有効範囲』

実行単位の有効範囲を持つエレメントの処理

リソースに実行単位の有効範囲 (WORKING-STORAGE で宣言された GLOBAL データなど) がある場合は、アプリケーション内のロジックを使用して、複数のスレッドからそのデータへのアクセスを同期する必要があります。

次のいずれか、または両方の処置をとることができます。

- 実行単位の有効範囲を持つ複数のスレッド・リソースから同時にアクセスしないようにアプリケーションを構成します。

- 別々のスレッドから同時にリソースにアクセスできるようにするには、C またはプラットフォームの関数による機能を使用して、アクセスを同期します。

実行単位の有効範囲を持つリソースを、個々のプログラム呼び出しインスタンス (個々のデータ・コピーを持つプログラムなど) 内で分離させたい場合は、LOCAL-STORAGE SECTION でデータを定義します。これにより、そのデータがプログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つようになります。

プログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つ要素の処理

このような言語要素がある場合は、プログラム呼び出しインスタンスごとにストレージが割り振られます。したがって、1 つのプログラムが複数のスレッド間で複数回呼び出される場合でも、プログラムが呼び出されるたびに、別個のストレージが割り振られます。

例えば、プログラム X が 2 つ以上のスレッドで呼び出される場合、呼び出される X の各インスタンスは専用のリソース・セット (ストレージなど) を取得します。

これらの言語要素と関連付けられたストレージは、プログラム呼び出しインスタンスの有効範囲を持つため、複数のスレッド間でデータにアクセスすることはできません。データ・アクセスの同期化を考慮する必要はありませんが、データを明示的に渡さない限り、プログラムの呼び出し間でこのデータを共用することはできません。

マルチスレッド化を使用した COBOL 言語要素の有効範囲

次の表に、さまざまな COBOL 言語要素の有効範囲をまとめます。

表 73. マルチスレッド化を使用した COBOL 言語要素の有効範囲

言語要素	参照元	存続時間
ADDRESS-OF 特殊レジスター	関連レコードと同じ	プログラム起動インスタンス
ファイル	実行単位	実行単位
索引データ	プログラム	プログラム起動インスタンス
LENGTH OF 特殊レジスター	関連 ID と同じ	関連 ID と同じ
LINAGE-COUNTER 特殊レジスター	実行単位	実行単位
LINKAGE-SECTION データ	実行単位	基本データの有効範囲に基づく
LOCAL-STORAGE データ	スレッド内	プログラム起動インスタンス
RETURN-CODE	実行単位	プログラム起動インスタンス
SORT-CONTROL、SORT-CORE-SIZE、 SORT-RETURN、TALLY 特殊レジスター	実行単位	プログラム起動インスタンス
WHEN-COMPILED 特殊レジスター	実行単位	実行単位
WORKING-STORAGE データ	実行単位	実行単位

マルチスレッド化サポートのための THREAD の選択

マルチスレッド化をサポートするために、THREAD コンパイラー・オプションを使用します。プログラムが 1 つのアプリケーション (MQ アプリケーションなど) によって単一プロセス内の複数のスレッドで呼び出される場合には、THREAD を使用します。ただし、シリアライゼーション・ロジックが自動的に生成されるため、THREAD はパフォーマンスに影響する可能性があります。

COBOL プログラムを複数のスレッドで実行するには、THREAD コンパイラー・オプションを使用して、実行単位内の COBOL プログラムのすべてをコンパイルしなければなりません。THREAD でコンパイルされたプログラムと NOTTHREAD でコンパイルされたプログラムを同じ実行単位内で混同させることはできません。

オブジェクト指向 (OO) のクライアントとクラスをコンパイルする場合は、THREAD オプションを使用します。

CICS TXSeries アプリケーションの場合は、THREAD オプションを使用する必要があります。

言語制限: THREAD オプションを使用する場合は、ある特定の言語エレメントを使用することができません。詳細は、下記の関連参照をご覧ください。

再帰: THREAD コンパイラー・オプションを使用してプログラムをコンパイルする際には、スレッド化環境または非スレッド化環境でプログラムを再帰的に呼び出すことができます。この再帰機能は、PROGRAM-ID 段落内で RECURSIVE 句を指定したかどうかにかかわらず使用できます。

関連タスク

17 ページの『再帰的またはマルチスレッド化されたプログラムでのデータの共用』

243 ページの『オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル』

365 ページの『CICS プログラムのコンパイルおよび実行』

関連参照

293 ページの『THREAD』

マルチスレッド化されたプログラムへの制御権移動

マルチスレッド化環境用に COBOL プログラムを書くときは、適切なプログラム・リンケージ・ステートメントを選択します。

単一スレッド環境の場合のように、実行単位内で最初に呼び出されるとき、および呼び出されるプログラムに対する CANCEL 後に最初に呼び出されるときは、呼び出されるプログラムは初期状態にあります。

一般に、複数のスレッドを開始および管理するプログラムには COBOL 事前初期設定インターフェースを使用することをお勧めします。

プログラムが複数の COBOL スレッドを開始する場合 (例えば、C プログラムが COBOL プログラムを呼び出してデータの入出力を実行する場合) に、COBOL プロ

グラムが不要になったストレージの解放などの環境のクリーンアップを当然行うものとは考えないでください。特に、ファイルが自動的にクローズされるものと考えないでください。このような場合は、アプリケーションが COBOL のクリーンアップを制御できるように、COBOL 環境を事前に初期設定する必要があります。

関連概念

563 ページの『第 31 章 COBOL ランタイム環境の事前初期設定』

関連タスク

『マルチスレッド化されたプログラムの終了』

506 ページの『メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入』

マルチスレッド化されたプログラムの終了

マルチスレッド・プログラムは、GOBACK または EXIT PROGRAM を使用して終了させることができます。

プログラムの呼び出し側に戻るには、GOBACK を使用します。あるスレッド内の最初のプログラムから GOBACK を使用するとき、そのスレッドは終了します。

メインプログラムからの場合を除き、GOBACK と同様に、EXIT PROGRAM を使用します。メインプログラムでは EXIT PROGRAM は無効です。

COBOL 環境が事前に初期設定されていて、COBOL ランタイムが実行単位内にアクティブな COBOL プログラムが他にあるかどうかを判断できる場合は、当該スレッドの最初のプログラムから出される GOBACK で、実行単位を終了する (オープンしている COBOL ファイルをすべてクローズするなど) ための COBOL プロセスが実行されます。実行単位内で呼び出されるすべての COBOL プログラムが、GOBACK または EXIT PROGRAM によって呼び出し元へ戻った場合は、この判断を行うことができます。しかし、この判断は、以下のような特定の条件下では行うことができません。

- (例外や pthread_exit により) アクティブな COBOL プログラムを 1 つ以上持つスレッドが終了した場合
- longjmp が実行された結果、呼び出しスタック内でアクティブな COBOL プログラムが縮小された場合

スレッド化環境で STOP RUN を効率的に実行する COBOL 関数はありません。この動作が必要な場合は、COBOL プログラムから C の exit 関数を呼び出し、ランタイム終了出口の後に _iwezCOBOLTerm を使用することを考慮してください。

関連タスク

506 ページの『メインプログラムまたはサブプログラムの終了と再入』

マルチスレッド化による COBOL 制限の処理

一部の COBOL アプリケーションは、サブシステムまたは他のアプリケーションに依存します。マルチスレッド化環境において、これらの依存性などに起因して、COBOL プログラムに対するいくつかの制限が発生します。

一般的に、実行単位内のアプリケーションに可視であるリソースへのアクセスを同期化する必要があります。この要件の例外には、DISPLAY および ACCEPT があります。これらは複数のスレッドから使用できます。すべての同期は、ランタイム環境によって提供されます。

DB2: DB2 アプリケーションは複数のスレッドで実行できます。ただし、DB2 データにアクセスするために必要な同期を行う必要があります。

SORT および MERGE: SORT および MERGE は、一度に 1 つのスレッドでしかアクティブになりません。ただし、COBOL ランタイム環境では、この制約事項を強制しません。したがって、アプリケーションがそのようにする必要があります。

関連タスク

520 ページの『再帰呼び出しの実行』

例: マルチスレッド環境での COBOL の使用

このマルチスレッド化のサンプルは、1 つの C メインプログラムと 2 つの COBOL プログラムで構成されています。

thrcob.c

2 つの COBOL スレッドを作成し、それらが完了してから終了する C メインプログラム

subd.cbl

thrcob.c で作成されたスレッドによって実行される COBOL プログラム

sube.cbl

thrcob.c で作成されたスレッドによって実行される 2 番目の COBOL プログラム

マルチスレッド化の例を作成および実行するには、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

- thrcob.c をコンパイルする: `cl /MT /c thrcob.c`
- subd.cbl をコンパイルする: `cob2 -qthread -c -dll subd.cbl`
- sube.cbl をコンパイルする: `cob2 -qthread -c -dll sube.cbl`
- DLL で 2 つのプログラムをリンクする: `cob2 -qthread -dll subd.obj sube.obj`
- 実行可能 thrcob.exe をリンクする: `cob2 thrcob.obj subd.lib iwzrllibm.lib`
- プログラム thrcob を実行する: `thrcob`

thrcob.c のソース・コード

```
#define LINKAGE __stdcall
#include <windows.h>
#include <stdio.h>
#include <setjmp.h>
#include <stdlib.h>
#pragma handler(SUBD)
#pragma handler(SUBE)

typedef int (LINKAGE *PRN) (long *);
```

```

long done;
jmp_buf Jmpbuf;

extern void _iwzCOBOLInit(int fcode, PFN StopFun, int *err_code, void *StopArg);
extern void _iwzCOBOLTerm(int fcode, int *err_code);

extern unsigned long LINAGE SUBD(void *);
extern unsigned long LINAGE SUBE(void *);

int LINKAGE StopFun(long *stoparg)
{
    printf("inside StopFun. Got stoparg = %d¥:n", *stoparg);
    *stoparg = 123;
    longjmp(Jmpbuf,1);
}

long StopArg = 0;

void LINKAGE testrc(int rc, const char *s)
{
    if (rc != 0){
        printf("%s: Fatal error rc=%d¥:n",s,rc);
        exit(-1);
    }
}

void LINKAGE pgmy(void)
{
    int rc;
    int parm1, parm2;

    DWORD t1, t2;
    HANDLE hThread1;
    HANDLE hThread2;

    parm1 = 20;
    parm2 = 10;
    _iwzCOBOLInit(1, StopFun, &rc, &StopArg);
    printf( "_iwzCOBOLInit got %d¥:n",rc);

    hThread1 = CreateThread(
        NULL,                                // no security attributes
        0,                                   // use default stack size
        SUBD,                                // thread function
        &parm1,                              // argument to thread function
        0,                                   // use default creation flags
        &t1);                                // returns the thread identifier

    // Check the return value for success.
    if (hThread1 == NULL)
        exit(-1);

    testrc(rc,"create 1");

    hThread1 = CreateThread(
        NULL,                                // no security attributes
        0,                                   // use default stack size
        SUBE,                                // thread function
        &parm2,                              // argument to thread function
        0,                                   // use default creation flags
        &t2);                                // returns the thread identifier

    // Check the return value for success.
    if (hThread2 == NULL)
        exit(-1);

    testrc(rc,"create 2");
}

```

```

printf("threads are %x and %x¥:n",t1, t2);

WaitForSingleObject( hThread2, INFINITE );

WaitForSingleObject( hThread1, INFINITE );

CloseHandle( hThread1 );
CloseHandle( hThread2 );

printf("test gets done = %d ¥:n",done );
_iwzCOBOLTerm(1, &rc);
printf( "_iwzCOBOLTerm expects rc=0, got rc=%d¥:n",rc);
}

main(char *argv,int argc)
{
    if (setjmp(Jmpbuf) ==0) (
        pgmy();
    })
}

```

subd.cbl のソース・コード

```

PROCESS PGMNAME(MIXED)
  IDENTIFICATION DIVISION
  PROGRAM-ID. "SUBD".
  ENVIRONMENT DIVISION.
  CONFIGURATION SECTION.
  SPECIAL NAMES.
    DECIMAL-POINT IS COMMA.
  INPUT-OUTPUT SECTION.
  DATA DIVISION.
  FILE SECTION.
  Working-Storage SECTION.

  Local-Storage Section.
  01 n2 pic 9(8) comp-5 value 0.

  Linkage Section.
  01 n1 pic 9(8) comp-5.

  PROCEDURE DIVISION using by Reference n1.
    Display "In SUBD "

    perform n1 times
      compute n2 = n2 + 1
      Display "From Thread 1: " n2
      CALL "Sleep" Using by value 1000
    end-perform

  GOBACK.

```

sube.cbl のソース・コード

```

PROCESS PGMNAME(MIXED)
  IDENTIFICATION DIVISION.
  PROGRAM-ID. "SUBE".
  ENVIRONMENT DIVISION.
  CONFIGURATION SECTION.
  SPECIAL-NAMES.
    DECIMAL-POINT IS COMMA.
  INPUT-OUTPUT SECTION.
  DATA DIVISION.
  FILE SECTION.
  Working-Storage SECTION.

```

Local-Storage Section.
01 n2 pic 9(8) comp-5 value 0.

Linkage Section.
01 n1 pic 9(8) comp-5.

PROCEDURE DIVISION using by reference n1.

 perform n1 times
 compute n2 = n2 + 1
 Display "From Thread 2: " n2
*Go to sleep for 3/4 sec.
 CALL "Sleep" Using by value 750
end-perform

GOBACK.

第 31 章 COBOL ランタイム環境の事前初期設定

事前初期設定を行うと、アプリケーションが COBOL ランタイム環境を一度初期化した後、その環境を使用して複数の処理を実行してから、その環境を明示的に終了することができます。

事前初期設定を使用すると、C/C++ などの非 COBOL 環境から COBOL プログラムを複数回呼び出すことができます。

事前初期設定には、主に次のような利点があります。

- COBOL 環境を、いつでもプログラム呼び出し可能な状態にすることができる。

COBOL 実行単位内の最初の COBOL プログラムから戻っても、その実行単位は終了しないため、COBOL プログラムが非 COBOL 環境から呼び出される場合でも、最後に使われた状態で呼び出すことができます。

- パフォーマンスが高い。

COBOL ランタイム環境の作成と解除を何度も行うとオーバーヘッドが生じ、アプリケーションの処理速度が遅くなる可能性があります。

非 COBOL プログラムが、COBOL プログラムを最後に使われた状態で使用する必要がある場合は、複数言語アプリケーションに対して事前初期設定サービスを使用します。例えば、COBOL プログラムに対する最初の呼び出し時にファイルをオープンした場合、呼び出し側プログラムは、同じプログラムに対する後続の呼び出し時でも、そのファイルがオープンしていることを期待します。

制約事項: CICS では事前初期設定を行うことができません。

永続的な COBOL ランタイム環境の初期設定と終了を行うには、関連タスクで説明するインターフェースを使用します。事前初期設定された環境で使用される COBOL プログラムが DLL に含まれている場合は、事前初期設定された環境が終了するまで、その DLL を削除できません。

566 ページの『例: COBOL 環境の事前初期設定』

関連タスク

『永続的な COBOL 環境の初期設定』

564 ページの『事前初期設定された COBOL 環境の終了』

永続的な COBOL 環境の初期設定

以下のインターフェースを使用して、永続的な COBOL 環境を初期設定します。

CALL init_routine の構文

```
▶▶—CALL—init_routine(function_code,routine,error_code,token)————▶▶
```

CALL *init_routine* の呼び出し。呼び出しの作成元言語に適した言語エレメントを使用します。

init_routine

初期設定ルーチンの名前: `_iwzCOBOLInit` または `IWZCOBOLINIT` (OPTLINK リンケージ規約を使用)、`_IwzCOBOLInit` (STDCALL リンケージ規約を使用)

function_code (入力)

値で渡される 4 バイトの 2 進数。*function_code* は次のようになります。

- 1 この関数呼び出しの後に呼び出される最初の COBOL プログラムは、サブプログラムとして扱われます。

routine (入力)

実行単位が終了した場合に呼び出されるルーチンのアドレス。この関数に渡されるトークン引数は、実行単位の終了出口ルーチンに渡されます。このルーチンは、実行単位の終了時に呼び出された際に、ルーチンの呼び出し側へ戻らないで、代わりに `longjmp()` または `exit()` を使用する必要があります。このルーチンは、SYSTEM リンケージ規約を使用して呼び出されます。

出口ルーチン・アドレスを指定しない場合は、事前初期設定が失敗したことを示す *error_code* が生成されます。

error_code (出力)

4 バイトの 2 進数。*error_code* は次のようになります。

- 0 事前初期設定は正常に行われました。
- 1 事前初期設定は失敗しました。

token (入力)

上の実行単位の終了時にこのルーチンが呼び出された際に指定された出口ルーチンに渡される 4 バイトのトークン。

関連タスク

『事前初期設定された COBOL 環境の終了』

関連参照

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

事前初期設定された COBOL 環境の終了

以下のインターフェースを使用して、事前初期設定された永続的な COBOL 環境を終了します。

CALL *term_routine* の構文

▶▶CALL—*term_routine*(*function_code*,*error_code*)◀◀

CALL *term_routine* の呼び出し。呼び出しの作成元言語に適した言語エレメントを使用します。

term_routine

終了ルーチンの名前: `_iwzCOBOLTerm` または `IWZCOBOLTERM` (OPTLINK リンケージ規約を使用)、`_IwzCOBOLTerm` (STDCALL リンケージ規約を使用)。

function_code (入力)

値で渡される 4 バイトの 2 進数。*function_code* は次のようになります。

- 1 COBOL の STOP RUN ステートメントが実行されたかのように、事前初期設定された COBOL ランタイム環境をクリーンアップします。例えば、すべての COBOL ファイルがクローズされます。ただし、制御権はこのサービスの呼び出し元に戻ります。

error_code (出力)

4 バイトの 2 進数。*error_code* は次のようになります。

- 0 終了は正常に行われました。
- 1 終了は失敗しました。

事前初期設定ルーチンの呼び出し後に呼び出される最初の COBOL プログラムは、サブプログラムとして扱われます。したがって、この (初期) プログラムからの GOBACK は、ファイルのクローズなどの実行単位の終了セマンティクスをトリガーしません。(STOP RUN などを使用した) 実行単位の終了では、実行単位の出口ルーチンが呼び出される前に、事前初期設定された COBOL 環境が解放されます。

アクティブでない場合: プログラムが終了ルーチンを呼び出した際に、COBOL 環境がまだアクティブでない場合は、この呼び出しは実行には影響を与えず、制御がエラー・コード 0 で呼び出し側に戻されます。

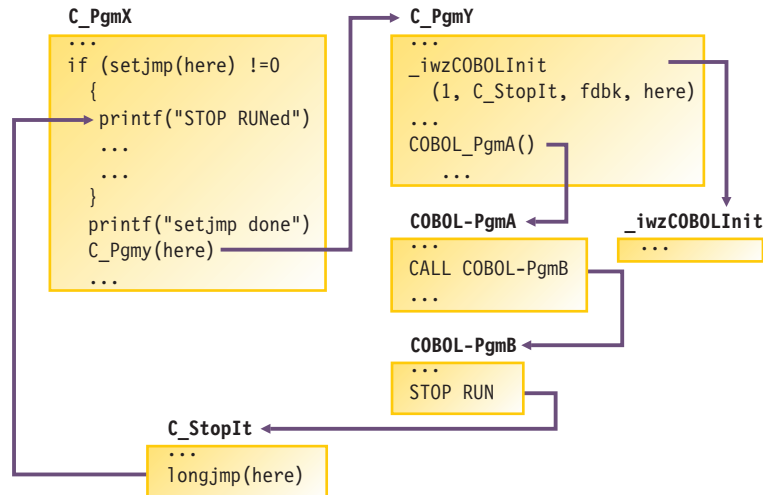
566 ページの『例: COBOL 環境の事前初期設定』

関連参照

512 ページの『呼び出しインターフェース規約』

例: COBOL 環境の事前初期設定

次の図は、事前初期設定された COBOL 環境の仕組みを示しています。この例では、C プログラムが COBOL 環境を初期設定し、COBOL プログラムを呼び出した後、COBOL 環境を終了します。



次の例は、COBOL 事前初期設定の使用法を示しています。C メインプログラムは、COBOL プログラム XIO を数回呼び出します。XIO の最初の呼び出しでファイルをオープンし、2 回目の呼び出しでレコードを 1 つ書き込みます (以下同様)。そして最後の呼び出しで、ファイルをクローズします。その後、C プログラムは C ストリーム I/O を使用して、このファイルをオープンし、読み取ります。

このプログラムをテストおよび実行するには、コマンド・ウィンドウから次のコマンドを入力します。

```
cob2 -c xio.cbl
cl testinit.c xio.obj
testinit
```

結果は次のとおりです。

```
_iwzCOBOLInit got 0
xio entered with x=0000000000
xio entered with x=0000000001
xio entered with x=0000000002
xio entered with x=0000000003
xio entered with x=0000000004
xio entered with x=0000000009
StopArg=0
_iwzCOBOLTerm expects rc=0 and got rc=0
FILE1 contains ----
11111
22222
33333
---- end of FILE1
```

この例では、実行単位が COBOL の STOP RUN で終了するのではなく、メインプログラムが _iwzCOBOLTerm を呼び出したときに終了している点に注意してください。

次の C プログラムは、ファイル testinit.c に入っています。

```

#ifdef _AIX
typedef int (*PFN)();
#define LINKAGE
#else
#include <windows.h>
#define LINKAGE _System
#endif

#include <stdio.h>
#include <setjmp.h>

extern void _iwzCOBOLInit(int fcode, PFN StopFun, int *err_code, void *StopArg);
extern void _iwzCOBOLTerm(int fcode, int *err_code);
extern void LINKAGE XIO(long *k);

jmp_buf Jmpbuf;
long StopArg = 0;

int LINKAGE
StopFun(long *stoparg)
{
    printf("inside StopFun¥:n");
    *stoparg = 123;
    longjmp(Jmpbuf,1);
}

main()
{
    int rc;
    long k;
    FILE *s;
    int c;

    if (setjmp(Jmpbuf) ==0) {
        _iwzCOBOLInit(1, StopFun, &rc, &StopArg);
        printf( " _iwzCOBOLInit got %d¥:n",rc);
        for (k=0; k <= 4; k++) XIO(&k);
        k = 99; XIO(&k);
    }
    else printf("return after STOP RUN¥:n");
    printf("StopArg=%d¥:n", StopArg);
    _iwzCOBOLTerm(1, &rc);
    printf(" _iwzCOBOLTerm expects rc=0 and got rc=%d¥:n",rc);
    printf("FILE1 contains ---- ¥:n");
    s = fopen("FILE1", "r");
    if (s) {
        while ( (c = fgetc(s) ) != EOF ) putchar(c);
    }
    printf("---- end of FILE1¥:n");
}

```

次の COBOL プログラムは、ファイル xio.cbl に入っています。

```

IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID.      xio.
*****
ENVIRONMENT      DIVISION.
CONFIGURATION    SECTION.
INPUT-OUTPUT     SECTION.
FILE-CONTROL.
    SELECT file1 ASSIGN TO FILE1
    ORGANIZATION IS LINE SEQUENTIAL
    FILE STATUS IS file1-status.

. . .
DATA             DIVISION.
FILE SECTION.
FD FILE1.

```

```

01 file1-id pic x(5).
. . .
WORKING-STORAGE SECTION.
01 file1-status pic xx    value is zero.
. . .
LINKAGE SECTION.
*
01 x                PIC S9(8) COMP-5.
. . .
PROCEDURE DIVISION using x.
. . .
    display "xio entered with x=" x
    if x = 0 then
        OPEN output FILE1
    end-if
    if x = 1 then
        MOVE ALL "1" to file1-id
        WRITE file1-id
    end-if
    if x = 2 then
        MOVE ALL "2" to file1-id
        WRITE file1-id
    end-if
    if x = 3 then
        MOVE ALL "3" to file1-id
        WRITE file1-id
    end-if
    if x = 99 then
        CLOSE file1
    end-if
    GOBACK.

```

第 32 章 2 桁年の日付の処理

2000 年言語拡張 (MLE) を使用すれば、COBOL プログラムの簡単な変更を行うだけで日付フィールドを定義できます。コンパイラーは、世紀ウィンドウを使用して整合性を保証したうえで、これらの日付を認識し、作用します。

COBOL プログラムで日付の自動認識が行われるようにするには、以下のステップを実行してください。

1. プログラム内のデータ項目のうち、日付を含むデータ項目のデータ記述記入項目に DATE FORMAT 文節を追加します。比較で使用されないものを含め、すべての日付を DATE FORMAT 文節を使用して識別しなければなりません。
2. 日付を拡張する場合は、MOVE または COMPUTE ステートメントを使用して、ウィンドウ化日付フィールドの内容を拡張日付フィールドにコピーします。
3. 必要であれば、DATEVAL および UNDATE 組み込み関数を使用して、日付フィールドと非日付の間で変換を行います。
4. YEARWINDOW コンパイラー・オプションを使用して、世紀ウィンドウを固定ウィンドウまたはスライディング・ウィンドウとして設定します。
5. DATEPROC(FLAG) コンパイラー・オプションを使用してプログラムをコンパイルし、診断メッセージを検討して、日付処理によって予期しない副次作用が起こっていないかどうかを調べます。
6. コンパイルの結果、通知レベルの診断メッセージだけしかなければ、DATEPROC(NOFLAG) コンパイラー・オプションを使用してプログラムを再コンパイルして、簡潔なリストを作成することができます。

特定のプログラミング手法を使用して、日付処理を利用したり、日付フィールド使用の効果を制御することができます (例えば、日付の比較、日付によるソートとマージ、および日付を伴う算術演算の実行など)。2000 年言語拡張は、比較、移動と保管、増減など、日付フィールドに関してよく使われる操作について、年先頭型、年単独型、年末尾型の日付フィールドをサポートします。

関連概念

570 ページの『2000 年言語拡張 (MLE)』

関連タスク

572 ページの『日付に関連したロジック問題の解決』

577 ページの『年先行型、年単独型、および年末尾型の日付フィールドの使用』

580 ページの『リテラルを日付として操作する』

584 ページの『日付フィールドに対する算術の実行』

586 ページの『日付処理の明示的制御』

588 ページの『日付関連診断メッセージの分析および回避』

590 ページの『日付処理上の問題の回避』

関連参照

261 ページの『DATEPROC』

2000 年言語拡張 (MLE)

2000 年言語拡張 (MLE) とは、西暦 2000 年以降の日付が関係するロジック問題に対処するのに役立つ、DATEPROC コンパイラー・オプションによってアクティブにされる COBOL for Windows の機能のことです。

使用可能にされた場合、言語拡張には以下のものが含まれます。

- DATE FORMAT 文節。この文節は、日付フィールドを識別し、日付における年部分の位置を指定するために、DATA DIVISION 内の項目に追加されます。

DATE FORMAT 文節には幾つかの使用上の制約事項があります。例えば、USAGE NATIONAL を持つ項目にこの文節を指定することはできません。詳細については、以下の関連参照を参照してください。

- 以下の組み込み関数について、関数からの戻り値を日付フィールドとして再解釈すること。
 - DATE-OF-INTEGER
 - DATE-TO-YYYYMMDD
 - DAY-OF-INTEGER
 - DAY-TO-YYYYDDD
 - YEAR-TO-YYYY
- 次の形式の ACCEPT ステートメントにおける概念上のデータ項目 DATE、DATE YYYYMMDD、DAY、および DAY YYYYDDD を日付フィールドとして再解釈すること。
 - ACCEPT *identifier* FROM DATE
 - ACCEPT *identifier* FROM DATE YYYYMMDD
 - ACCEPT *identifier* FROM DAY
 - ACCEPT *identifier* FROM DAY YYYYDDD
- 組み込み関数 UNDATE と DATEVAL。これらは、日付フィールドおよび非日付の選択的再解釈に使用されます。
- 組み込み関数 YEARWINDOW。これは、YEARWINDOW コンパイラー・オプションによって設定された世紀ウィンドウの開始年を検索します。

DATEPROC コンパイラー・オプションは、識別された日付フィールドの特殊な日付中心処理を使用可能にします。YEARWINDOW コンパイラー・オプションは、2 桁のウィンドウ化西暦年を解釈するために使用する 100 年ウィンドウ (世紀ウィンドウ) を指定します。

関連概念

571 ページの『この拡張の原則と目標』

関連参照

261 ページの『DATEPROC』

299 ページの『YEARWINDOW』

日付フィールドの使用に関する制約事項 (『COBOL for Windows 言語解説書』)

この拡張の原則と目標

2000 年言語拡張から最大限の利点を得るためには、これが COBOL 言語に導入された理由を理解する必要があります。

2000 年言語拡張が焦点を当てているのは、次の原則だけです。

- 日付のセマンティクスを使用して再コンパイルされるプログラムは、十分にテストされ、企業にとって価値のある資産です。関連する制限事項は、プログラムの 2 桁の年号が 1900-1999 の範囲に制限されることです。
- 日付の年号以外の部分には特別な処理は行われません。このため、サポートされる日付形式の年号以外の部分は X で表されます。それ以外の表記を使用すると、既存のプログラムの意味が変わってしまうことがあります。提供されている唯一の日付依存型セマンティクスは、プログラムの世紀ウィンドウに関して、日付の 2 桁の年部分を自動的に拡張（および短縮）するということです。
- 4 桁の年号部分を持つ日付が重要になるのは、通常、ウィンドウ化日付と組み合わせて使用される場合です。それ以外の場合、4 桁年号日付と非日付の間に違いはほとんどありません。

これらの原則に基づき、2000 年言語拡張は多数の目標を満たすように設計されています。日付処理問題を解決するために満足しなければならない目標を評価し、それらを 2000 年言語拡張の目標と比較して、アプリケーションがそこからどのように利益を得ることができるかを判別しなければなりません。新規アプリケーション、または既存アプリケーションへの拡張では、もっと後になるまで拡張できない古いデータをアプリケーションで使用している場合を除いて、拡張部分の使用を考慮してはなりません。

2000 年言語拡張の目標は、次のとおりです。

- 現在指定されているアプリケーション・プログラムの実用的な存続期間を拡張します。
- ソース変更を最小限にとどめ、可能であれば、DATA DIVISION の日付フィールドの宣言の増加だけに限定します。世紀ウィンドウ・ソリューションをインプリメントするためには、PROCEDURE DIVISION のプログラム・ロジックを変更する必要がないようにします。
- 日付フィールドを追加するときは、プログラムの既存のセマンティクスを保持しなければなりません。例えば、次のステートメントの場合のように、日付がリテラルとして表される場合、そのリテラルは、比較対象の日付フィールドと互換性があると見なされます（ウィンドウ操作または拡張されます）。

```
If Expiry-Date Greater Than 980101 . . .
```

既存のプログラムは、リテラルとして表された 2 桁年号の日付が 1900-1999 の範囲内にあると想定するので、拡張でこの想定が変更されることはありません。

- ウィンドウ操作機能は長期間の使用を目的としたものではありません。後で実施できる長期の解決策が採用されるまで、アプリケーションの実用的な存続期間を拡張することを意図しています。
- 拡張日付フィールド機能は、ファイルおよびデータベースの日付フィールドの拡張を支援するものとして、長期間の使用を意図しています。

拡張部分は、完全指定または完全な日付中心のデータ型に、認識できるセマンティクス（例えばグレゴリオ暦の月と日の部分）を与えません。拡張部分は、日付の年号部分に特別なセマンティクスを与えるだけです。

日付に関連したロジック問題の解決

日付処理問題を解決するための助けとして、世紀ウィンドウ、内部ブリッジング、または全フィールド拡張を使用する、いずれかのアプローチを採用することができます。

世紀ウィンドウ

世紀ウィンドウを定義し、ウィンドウ化日付を含むフィールドを指定します。コンパイラは、これらのデータ・フィールドの 2 桁の年号を世紀ウィンドウに従って解釈します。

内部ブリッジング

ファイルおよびデータベースはまだ 4 桁年の日付に移行されていないが、プログラムでは 4 桁に拡張した年のロジックを使用したい場合、そのような日付を 4 桁年の日付として処理するための内部ブリッジング手法を使用することができます。

全フィールド拡張

このソリューションは、2 桁の年の日付フィールドを、ファイルおよびデータベースの中で完全な 4 桁の年になるように明示的に拡張した後、そのフィールドをプログラムの中で拡張形式で使用方法です。これは、すべてのアプリケーションについて信頼できる日付処理がなされる唯一の方法です。

ソリューションを達成するためにそれぞれの方法で 2000 年言語拡張を使用できますが、以下に示すように、それぞれに利点と欠点があります。

表 74. 2000 年問題のソリューションの利点および欠点

局面	世紀ウィンドウ	内部ブリッジング	全フィールド拡張
インプリメンテーション	速くて容易ですが、すべてのアプリケーションに合うわけではありません。	データ破壊のリスクがあります。	データベース、コピーブック、およびプログラムに対する変更をすべて同期させる必要があります。
テスト	プログラム・ロジックの変更はないので、テストはほとんど必要ありません。	プログラム・ロジックに行われる変更が直接的なものなので、テストは簡単です。	
修正期間	プログラムは 2000 年を過ぎても機能しますが、長期的なソリューションとはなり得ません。	プログラムは 2000 年を過ぎても機能しますが、永続的なソリューションとはなり得ません。	永続的なソリューションです。
パフォーマンス	パフォーマンスが低下する可能性があります。	良好なパフォーマンスが得られます。	最適なパフォーマンスが得られます。

表 74. 2000 年問題のソリューションの利点および欠点 (続き)

局面	世紀ウィンドウ	内部ブリッジング	全フィールド拡張
保守			保守が容易になります。

574 ページの『例: 世紀ウィンドウ』

575 ページの『例: 内部ブリッジング』

576 ページの『例: 拡張日付形式へのファイルの変換』

関連タスク

『世紀ウィンドウの使用』

574 ページの『内部ブリッジングの使用』

575 ページの『完全フィールド拡張への移行』

世紀ウィンドウの使用

世紀ウィンドウ は、任意の 2 桁年が固有となる 100 年の間隔 (1950 から 2049 など) です。ウィンドウ化日付フィールドについては、YEARWINDOW コンパイラ・オプションを使用して、世紀ウィンドウ開始日を指定することができます。

DATEPROC オプションが有効であると、コンパイラは、プログラムの 2 桁の日付フィールドにこのウィンドウを適用します。例えば、1930-2029 の世紀ウィンドウの場合、COBOL は 2 桁の年号を次のように解釈します。

- 00 から 29 の年の値は、2000 から 2029 として解釈されます。
- 30 から 99 の年の値は、1930 から 1999 として解釈されます。

この世紀ウィンドウをインプリメントするには、DATE FORMAT 文節を使用してプログラム内の日付フィールドを識別し、YEARWINDOW コンパイラ・オプションを使用して、世紀ウィンドウを固定ウィンドウまたはスライディング・ウィンドウとして定義します。

- 固定ウィンドウの場合は、YEARWINDOW オプションの値として 1900 から 1999 の 4 桁の年号を指定します。例えば、YEARWINDOW(1950) は、1950-2049 の固定ウィンドウを定義します。
- スライディング・ウィンドウの場合は、YEARWINDOW オプションの値として -1 から -99 の負の整数を指定します。例えば、YEARWINDOW(-50) は、プログラムが稼働する年の 50 年前に始まるスライディング・ウィンドウを定義します。つまり、世紀ウィンドウは、プログラムが 2006 年に稼働する場合は 1956-2055 となり、2007 年に稼働する場合は自動的に 1957-2056 となるということです。

コンパイラは、識別されている日付フィールドに対する操作に、世紀ウィンドウを自動的に適用します。ウィンドウ操作をインプリメントするための余分のプログラム・ロジックは必要ありません。

574 ページの『例: 世紀ウィンドウ』

関連参照

261 ページの『DATEPROC』

299 ページの『YEARWINDOW』

DATE FORMAT 文節 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

日付フィールドの使用に関する制約事項 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

例: 世紀ウィンドウ

次の例は、DATE FORMAT 文節を使用し、プログラムを変更して自動日付ウィンドウ操作の機能を使用する方法を (太字で) 示しています。

```
CBL LIB,QUOTE,NOOPT,DATEPROC(FLAG),YEARWINDOW(-60)
. . .
01 Loan-Record.
   05 Member-Number   Pic X(8).
   05 DVD-ID          Pic X(8).
   05 Date-Due-Back    Pic X(6) Date Format yyxxxx.
   05 Date-Returned    Pic X(6) Date Format yyxxxx.
. . .
   If Date-Returned > Date-Due-Back Then
     Perform Fine-Member.
```

PROCEDURE DIVISION には変更を加えていません。2 つの日付フィールドに DATE FORMAT 文節を追加した意味は、コンパイラがそれらをウィンドウ化日付フィールドとして認識し、したがって、IF ステートメントを処理するときには世紀ウィンドウを適用するということです。例えば、Date-Due-Back (返却予定日) が 060102 (2006 年 1 月 2 日) で、Date-Returned (返却日) が 051231 (2005 年 12 月 31 日) である場合は、Date-Returned が Date-Due-Back より小さい (前である) ため、プログラムは Fine-Member (会員へ延滞金を科す) 段落を実行しません。(プログラムは、時間通りに DVD が戻されたかどうかを検査します。)

内部ブリッジングの使用

内部ブリッジングの場合、プログラムを適切に構成する必要があります。

以下の手順を実行します。

1. 2 桁年号の日付を持つ入力ファイルを読み取る。
2. これらの 2 桁の日付をウィンドウ化日付フィールドとして宣言し、コンパイラがこれらの日付を自動的に 4 桁年号の日付に拡張できるように、これらを拡張日付フィールドに移動する。
3. プログラムの本体では、すべての日付処理に 4 桁年号の日付を使用する。
4. ウィンドウ操作により日付を 2 桁の年号に戻す。
5. 2 桁年号の日付を出力ファイルに書き込む。

このプロセスは、完全拡張日付ソリューションへの便利な移行パスになり、ウィンドウ化日付を使用するよりもパフォーマンス上の利点もあるかもしれません。

この手法を使用すると、プログラム・ロジックへの変更は最小で済みます。単に、日付を拡張および短縮するステートメントを追加し、また日付を参照するステートメントを、レコードの中の 2 桁年号のフィールドではなく WORKING-STORAGE の中の 4 桁年号の日付フィールドを使用するように変更するだけです。

出力のために日付を変換して 2 桁の年に戻しているため、年が世紀ウィンドウの範囲外になる可能性を考慮しておいてください。例えば、日付フィールドに 2020 年が入っているが、世紀ウィンドウが 1920 から 2019 である場合、日付は世紀ウィンドウの外側になります。年を 2 桁年フィールドに移動させるだけでは誤りになります。この問題が生じないようにするには、COMPUTE ステートメントを使用して日付を保管し、ON SIZE ERROR 句を指定して日付が世紀ウィンドウの外側であるかどうかを検出することができます。

『例: 内部ブリッジング』

関連タスク

573 ページの『世紀ウィンドウの使用』

584 ページの『日付フィールドに対する算術の実行』

『完全フィールド拡張への移行』

例: 内部ブリッジング

次の例は、プログラムを変更して内部ブリッジングをインプリメントする方法を(太字で)示しています。

```
CBL  DATEPROC(FLAG),YEARWINDOW(-60)
      . . .
      File Section.
      FD  Customer-File.
      01  Cust-Record.
           05  Cust-Number      Pic 9(9) Binary.
           . . .
           05  Cust-Date        Pic 9(6) Date Format yyxxxx.
      Working-Storage Section.
      77  Exp-Cust-Date         Pic 9(8) Date Format yyyyxxxx.
      . . .
      Procedure Division.
          Open I-O Customer-File.
          Read Customer-File.
          Move Cust-Date to Exp-Cust-Date.
          . . .
      *****
      * Use expanded date in the rest of the program logic *
      *****
      . . .
          Compute Cust-Date = Exp-Cust-Date
          On Size Error
              Display "Exp-Cust-Date outside century window"
          End-Compute
          Rewrite Cust-Record.
```

完全フィールド拡張への移行

2000 年言語拡張を使用すれば、日付フィールドを完全に拡張するソリューションに向けて段階的に移行することができます。

以下の手順を実行します。

1. 世紀ウィンドウ・ソリューションを適用し、より永続的なソリューションをインプリメントするためのリソースが用意されるまで、このソリューションを使用する。
2. 内部ブリッジング・ソリューションを適用する。これは、ファイルでは 2 桁年号の形式で日付を保持した状態のまま、プログラムの中では拡張日付を使用する方法です。プログラムの本体の中ではロジックにそれ以上の変更を行わないので、全フィールド拡張ソリューションにより容易に進むことができます。
3. ファイル設計およびデータベース定義を、4 桁年号の日付を使用するように変更する。
4. COBOL コピーブックを、4 桁年号の日付フィールドを反映するように変更する。
5. ユーティリティー・プログラム (または特殊な目的の COBOL プログラム) を実行して、古い形式のファイルから新しい形式にコピーする。

6. プログラムを再コンパイルし、レグレッション・テストおよび日付テストを行う。

最初の 2 つのステップを完了したら、それ以降のステップは何回でも繰り返すことができます。すべてのファイルのすべての日付フィールドを同時に変更する必要はありません。この方法では、段階的に変換するファイルを、業務上の必要性または他のアプリケーションとのインターフェースなどを基準にして選択することができます。

この方式を使用する場合は、特別な目的のプログラムを作成してファイルを拡張日付形式に変換する必要があります。

『例: 拡張日付形式へのファイルの変換』

例: 拡張日付形式へのファイルの変換

次の例は、日付フィールドを拡張するとともに、あるファイルから別のファイルにコピーする簡単なプログラムを示しています。日付が拡張されるため、出力ファイルのレコード長は入力ファイルのレコード長より長くなっています。

```
CBL  LIB,QUOTE,NOOPT,DATEPROC(FLAG),YEARWINDOW(-80)
*****
** CONVERT - Read a file, convert the date    **
**           fields to expanded form, write   **
**           the expanded records to a new    **
**           file.                            **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID.  CONVERT.

ENVIRONMENT DIVISION.

INPUT-OUTPUT SECTION.
FILE-CONTROL.
    SELECT INPUT-FILE
        ASSIGN TO INFIL
        FILE STATUS IS INPUT-FILE-STATUS.

    SELECT OUTPUT-FILE
        ASSIGN TO OUTFILE
        FILE STATUS IS OUTPUT-FILE-STATUS.

DATA DIVISION.
FILE SECTION.
FD  INPUT-FILE
   RECORDING MODE IS F.
01  INPUT-RECORD.
   03  CUST-NAME.
       05  FIRST-NAME  PIC X(10).
       05  LAST-NAME   PIC X(15).
   03  ACCOUNT-NUM     PIC 9(8).
   03  DUE-DATE        PIC X(6) DATE FORMAT YYXXXX.    (1)
   03  REMINDER-DATE   PIC X(6) DATE FORMAT YYXXXX.
   03  DUE-AMOUNT      PIC S9(5)V99 COMP-3.

FD  OUTPUT-FILE
   RECORDING MODE IS F.
01  OUTPUT-RECORD.
   03  CUST-NAME.
       05  FIRST-NAME  PIC X(10).
       05  LAST-NAME   PIC X(15).
   03  ACCOUNT-NUM     PIC 9(8).
   03  DUE-DATE        PIC X(8) DATE FORMAT YYYYXXXX.  (2)
```

```

03 REMINDER-DATE    PIC X(8) DATE FORMAT YYYYXXXX.
03 DUE-AMOUNT       PIC S9(5)V99 COMP-3.

WORKING-STORAGE SECTION.

01 INPUT-FILE-STATUS PIC 99.
01 OUTPUT-FILE-STATUS PIC 99.

PROCEDURE DIVISION.

    OPEN INPUT INPUT-FILE.
    OPEN OUTPUT OUTPUT-FILE.

READ-RECORD.
    READ INPUT-FILE
      AT END GO TO CLOSE-FILES.
    MOVE CORRESPONDING INPUT-RECORD TO OUTPUT-RECORD.    (3)
    WRITE OUTPUT-RECORD.

    GO TO READ-RECORD.

CLOSE-FILES.
    CLOSE INPUT-FILE.
    CLOSE OUTPUT-FILE.

    EXIT PROGRAM.

END PROGRAM CONVERT.

```

注

- (1) 入力レコード内のフィールド DUE-DATE および REMINDER-DATE は 2 桁年コンポーネントを持つグレゴリオ日付です。これらは DATE FORMAT 文節で定義されているので、コンパイラーはこれらをウィンドウ化日付フィールドとして認識します。
- (2) 出力レコードには、同じ 2 つのフィールドが拡張日付形式で入れられます。これらは DATE FORMAT 文節で定義されているので、コンパイラーはこれらを 4 桁年号の日付フィールドとして扱います。
- (3) MOVE CORRESPONDING ステートメントは、INPUT-RECORD 内の各項目を OUTPUT-RECORD 内の対応する項目に移動します。2 つのウィンドウ化日付フィールドが対応する拡張日付フィールドに移動されると、コンパイラーは現行の世紀ウィンドウを使用して年号値を拡張します。

年先行型、年単独型、および年末尾型の日付フィールドの使用

年先行型 日付フィールドは、DATE FORMAT 指定が、YY または YYYY とその後に続く 1 つ以上の X で構成される日付フィールドです。年単独型 日付フィールドの日付形式は YY または YYYY だけです。年末尾型 日付フィールドは、DATE FORMAT 文節で 1 つ以上の X とその後に YY または YYYY を指定している日付フィールドです。

年先行型か年単独型のどちらかのタイプの 2 つの日付フィールドを比較するとき、その 2 つの日付には互換性がなければなりません。すなわち、その 2 つは、年以外の文字の数は同じでなければなりません。年部分の桁数は同じである必要はありません。

年末尾型の日付形式は日付の表示によく使われますが、コンピューターにとってはあまり便利ではありません。それは、日付の中で最も比重の大きい部分である年が日付表現における比重の小さい部分になるからです。

年末尾型日付フィールドの機能がサポートされるのは、等しいか等しくないかの比較とある種の代入操作のみです。オペランドは、日付形式が同一（年末尾型）の日付であるか、または日付と非日付でなければなりません。コンパイラ自体には、年末尾型日付の操作のための自動ウィンドウ操作機能は含まれていません。年末尾型日付の算術演算など、サポートされていない方法で使用されると、コンパイラはエラー・レベル・メッセージを提供します。

年末尾型日付のためのより一般的な日付処理が必要な場合は、日付の年部分を分離して処理する必要があります。

579 ページの『例: 年先行型日付フィールドの比較』

関連概念

『互換性のある日付』

関連タスク

579 ページの『その他の日付形式の使用』

互換性のある日付

互換性のある日付 という用語の意味は、日付が使用されているのが DATA DIVISION か PROCEDURE DIVISION かにによって異なってきます。

DATA DIVISION で使用する場合、日付フィールドの宣言、および従属データ項目や REDEFINES 文節などの COBOL 言語エレメントを制御する規則が関係します。次の例では、Review-Year は Review-Date への従属データ項目として宣言することができるので、Review-Date と Review-Year には互換性があります。

```
01 Review-Record.  
   03 Review-Date           Date Format yyxxxx.  
       05 Review-Year Pic XX   Date Format yy.  
       05 Review-M-D  Pic XXXX.
```

PROCEDURE DIVISION での使用は、比較、移動、算術式などの演算で日付フィールドを一緒に使用する方法に関連しています。年先行型および年単独型フィールドに互換性があるとみなされるには、日付フィールドに同じ数の年以外の文字が含まれている必要があります。例えば、DATE FORMAT YYXXXX を持つフィールドは、同じ日付形式の別のフィールドや YYYYXXXX フィールドと互換性がありますが、YYXXX フィールドとの互換性はありません。

年末尾型日付フィールドの場合は、DATE FORMAT 文節が同じである必要があります。特に、ウィンドウ化日付フィールドと拡張年末尾型日付フィールドとの相互演算は許されません。例えば、日付形式が XXXXY 日付フィールドを別の XXXXY 日付フィールドへ移動させることはできますが、 XXXYYY 形式の日付フィールドへ移動させることはできません。

演算の中の日付フィールドに互換性があれば、日付フィールドに対して、または日付フィールドと非日付が組み合わされたものに対して演算を実行できます。例えば、次のように定義されているとします。


```

01 Date-Gregorian-Win Pic 9(6) Packed-Decimal Date Format yyxxxx.
01 Date-Julian-Win    Pic 9(5) Packed-Decimal Date Format yyxxx.
01 Date-Gregorian-Exp Pic 9(8) Packed-Decimal Date Format yyyyxxxx.

```

2 つのフィールドの年以外の数字の数が異なるので、次のステートメントは成立しません。

```
If Date-Gregorian-Win Less than Date-Julian-Win . . .
```

2 つのフィールドの年以外の数字の数が同じなので、次のステートメントは受け入れられます。

```
If Date-Gregorian-Win Less than Date-Gregorian-Exp . . .
```

この場合は、比較が確実に意味のあるものになるようにするために、世紀ウィンドウがウィンドウ化日付フィールド (Date-Gregorian-Win) に適用されます。

非日付を日付フィールドと一緒に使用した場合、非日付は日付フィールドと互換性があると見なされるか、または単純な数値として扱われます。

例: 年先行型日付フィールドの比較

次の例では、ウィンドウ化日付フィールドが拡張日付フィールドと比較されます。

```

77 Todays-Date          Pic X(8) Date Format yyyyxxxx.
01 Loan-Record.
   05 Date-Due-Back      Pic X(6) Date Format yyxxxx.
. . .
   If Date-Due-Back > Todays-Date Then . . .

```

Date-Due-Back には世紀ウィンドウが適用されます。Todays-Date に DATE FORMAT 文節を指定して、それを拡張日付フィールドとして定義しなければなりません。そうしないと、そのフィールドは非日付フィールドとして扱われ、その結果、そのフィールドは年の桁数が Date-Due-Back と同じであるものと見なされます。コンパイラーは 1900-1999 の仮定による世紀ウィンドウを適用するため、矛盾した比較が作成されます。

その他の日付形式の使用

自動ウィンドウ操作に適格であるためには、日付フィールドがフィールドの最初の部分または唯一の部分として 2 桁年を含んでいる必要があります。フィールドの残り (ある場合) は、1 から 4 文字を含んでいる必要がありますが、どんな内容であるかは重要ではありません。

アプリケーションの中に、このような基準に合わない日付フィールドがある場合は、DATE FORMAT 文節によって日付の年部分だけを日付フィールドとして定義するためのコード変更が必要かもしれません。このようなタイプの日付形式の例として、次のようなものがあります。

- 2 桁年、月の省略語を含む 3 文字、および日を表す 2 桁で構成される 7 文字フィールド。日付フィールドには 1 から 4 文字の年以外の文字しか使えないため、この形式はサポートされません。
- 形式 DDMYY のグレゴリオ暦日付。年の部分が日付の最初の部分ではないので、自動ウィンドウ操作は適用されません。このような年末尾型日付は、SORT または MERGE ステートメントではウィンドウ化キーとして全面的にサポートされており、また一部の COBOL 操作でもサポートされています。

このような場合に日付のウィンドウ操作を使用する必要があるなら、日付の年部分を分離するために何らかのコードを追加する必要があります。

『例: 年の分離』

例: 年の分離

次の例は、DDMMYY 形式のデータ・フィールドの年部分を分離する方法を示しています。

```
03 Last-Review-Date Pic 9(6).
03 Next-Review-Date Pic 9(6).
...
Add 1 to Last-Review-Date Giving Next-Review-Date.
```

上のコードでは、Last-Review-Date に 230105 (2005 年 1 月 23 日) が含まれている場合は、ADD ステートメントの実行後には Next-Review-Date に 230106 (2006 年 1 月 23 日) が入ります。これは、次の年次検査 (review) 日付を設定するための簡単な方法です。しかし、Last-Review-Date が 230199 の場合に 1 を加算すると 230200 になり、意図した結果にはなりません。

これらの日付フィールドは年が日付フィールドの最初の部分ではないので、年の部分を分離するための何らかのコードを追加しないと、DATE FORMAT 文節を適用することはできません。次の例では、2 つの日付フィールドの年部分が分離されており、COBOL は世紀ウィンドウを適用して矛盾のない結果を維持できます。

```
03 Last-Review-Date Date Format xxxxyy.
   05 Last-R-DDMM Pic 9(4).
   05 Last-R-YY Pic 99 Date Format yy.
03 Next-Review-Date Date Format xxxxyy.
   05 Next-R-DDMM Pic 9(4).
   05 Next-R-YY Pic 99 Date Format yy.
...
Move Last-R-DDMM to Next-R-DDMM.
Add 1 to Last-R-YY Giving Next-R-YY.
```

リテラルを日付として操作する

ウィンドウ化日付フィールドに、関連付けられたレベル 88 の条件名がある場合、VALUE 文節のリテラルは、1900-1999 の仮定による世紀ウィンドウではなく、コンパイル単位の世紀ウィンドウに対してウィンドウ操作が行われます。

例えば、次のようなデータ定義があるとします。

```
05 Date-Due Pic 9(6) Date Format yyxxxx.
   88 Date-Target Value 051220.
```

世紀ウィンドウが 1950-2049 で、Date-Due の内容が 051220 (2005 年 12 月 20 日) であれば、以下の最初の条件は真に評価され、2 番目の条件は偽に評価されます。

```
If Date-Target. . .
If Date-Due = 051220
```

リテラル 051220 は非日付として扱われるため、1900-1999 の仮定による世紀ウィンドウに対してウィンドウ操作され、1905 年 12 月 20 日を表すことになります。しかし、リテラルがレベル 88 の条件名の VALUE 文節に指定された場合は、このリ

テラルは、それが付加されるデータ項目の一部になります。このデータ項目はウィンドウ化日付フィールドなので、それが参照されるときには、必ず世紀ウィンドウが適用されます。

比較式の中で DATEVAL 組み込み関数を使用してリテラルを日付フィールドに変換することも可能です。その結果生じる日付フィールドは、ウィンドウ化日付フィールドまたは拡張日付フィールドとして扱われるので、比較に矛盾は生じません。例えば、上記の定義を使用すれば、以下の 2 つの条件はどちらも真に評価されます。

```
If Date-Due = Function DATEVAL (051220 "YYXXXX")
If Date-Due = Function DATEVAL (20051220 "YYYYXXXX")
```

レベル 88 条件名では、VALUE 文節に THRU オプションを指定できますが、スライディング・ウィンドウではなく固定世紀ウィンドウを YEARWINDOW コンパイラー・オプションに指定する必要があります。以下に、その例を示します。

```
05 Year-Field Pic 99 Date Format yy.
   88 In-Range          Value 98 Thru 06.
```

この形式の場合、範囲内の 2 番目の項目のウィンドウ操作値は、1 つ目の項目のウィンドウ操作値より大きくなければなりません。ただし、コンパイラーがこの差を検査できるのは、YEARWINDOW コンパイラー・オプションで固定世紀ウィンドウが指定されている場合のみです (例えば、YEARWINDOW(-60) ではなく YEARWINDOW(1940) が指定されている場合)。

ウィンドウ操作の順序に関する要件は、年末尾型日付フィールドには適用されません。年末尾型日付フィールドに対して THROUGH 句を含む条件名 VALUE 文節を指定する場合、2 つのリテラルは通常の COBOL 規則に従っていなければなりません。つまり、最初のリテラルは 2 番目のリテラルより小さくなければなりません。

関連概念

『仮定による世紀ウィンドウ』
582 ページの『非日付の処理』

関連タスク

586 ページの『日付処理の明示的制御』

仮定による世紀ウィンドウ

プログラムがウィンドウ化日付フィールドを使用する場合、コンパイラーは YEARWINDOW コンパイラー・オプションで定義された世紀ウィンドウをコンパイル単位に適用します。ウィンドウ化日付フィールドを非日付と一緒に使用する場合で、コンテキスト上、非日付はウィンドウ化日付として扱う必要がある場合、コンパイラーは仮定による世紀ウィンドウを使用して非日付フィールドを解決します。

仮定による世紀ウィンドウは 1900-1999 であり、これは、一般にはコンパイル単位の世紀ウィンドウと同じではありません。

多くの場合、特にリテラルの非日付の場合、この仮定による世紀ウィンドウは正しい選択です。次の構成では、リテラルは、世紀ウィンドウが例えば 1975-2074 の場合でも、1972 年 1 月 1 日という元の意味を保たなければならない、2072 に変わるべきではありません。

```

01 Manufacturing-Record.
   03 Makers-Date Pic X(6) Date Format yyxxxx.
. . .
   If Makers-Date Greater than "720101" . . .

```

この仮定が正しくても、DATEVAL 組み込み関数を使用することによって年を明示し、警告レベルの診断メッセージ (仮定による世紀ウィンドウを適用することから生じるメッセージ) が出ないようにするのが適切です。

```

If Makers-Date Greater than
   Function Dateval("19720101" "YYYYXXXX") . . .

```

時には、仮定が正しくない場合があります。次の例の場合、Project-Controls が COPY メンバーの中にあり、このメンバーが、西暦 2000 年処理用にまだアップグレードされていない他のアプリケーションによって使用され、このため Date-Target では DATE FORMAT 文節を指定することができないものとします。

```

01 Project-Controls.
   03 Date-Target Pic 9(6).
. . .
01 Progress-Record.
   03 Date-Complete Pic 9(6) Date Format yyxxxx.
. . .
   If Date-Complete Less than Date-Target . . .

```

この例で、Date-Complete が Date-Target より前の日付 (より小) になるようにするには、次の 3 つの条件が真でなければなりません。

- 世紀ウィンドウが 1910-2009 である。
- Date-Complete が 991202 (グレゴリオ日付 1999 年 12 月 2 日) である。
- Date-Target が 000115 (グレゴリオ日付 2000 年 1 月 15 日) である。

ただし、Date-Target は、DATE FORMAT 文節を持っていないので、非日付です。したがって、これに適用される世紀ウィンドウは、仮定による世紀ウィンドウ 1900-1999 であり、1900 年 1 月 15 日として処理されることになります。この結果、Date-Complete は Date-Target より大きいことになり、これは意図した結果ではありません。

この場合には、DATEVAL 組み込み関数を使用して、この比較のために Date-Target を日付フィールドに変換すべきです。以下に、その例を示します。

```

If Date-Complete Less than
   Function Dateval (Date-Target "YYXXXX") . . .

```

関連タスク

586 ページの『日付処理の明示的制御』

非日付の処理

コンパイラーがどのように非日付を扱うかは、その内容によって異なります。

以下の項目は非日付です。

- リテラル値。
- データ記述に DATE FORMAT 文節が含まれていないデータ項目。
- 一部の算術式の結果 (中間または最終的)。例えば、2 つの日付フィールドの差は非日付ですが、日付フィールドと非日付の和は日付フィールドです。

- UNDATE 組み込み関数からの出力。

非日付を日付フィールドと一緒に使用する場合、コンパイラーは非日付を形式が日付フィールドと互換性のある日付、または単純な数値と解釈します。この解釈は、次に示すように、日付フィールドおよび非日付が使われたコンテキストによって異なります。

- 比較

日付フィールドを非日付と比較する場合、非日付は、年と年以外の文字の文字数の点で日付フィールドと互換性があると見なされます。次の例では、971231 という非日付リテラルをウィンドウ化日付フィールドと比較します。

```
01 Date-1    Pic 9(6) Date Format yyxxxx.
...
    If Date-1 Greater than 971231 . . .
```

非日付リテラル 971231 は、Date-1 と同じ DATE FORMAT を持っているかのように処理されますが、開始年 (base year) は 1900 です。

- 算術演算

サポートされるすべての算術演算で、非日付フィールドは単純数値として処理されます。次の例では、Date-2 のグレゴリオ日付に数値 10000 を加算しています。つまり、日付に 1 年が加えられます。

```
01 Date-2    Pic 9(6) Date Format yyxxxx.
...
    Add 10000 to Date-2.
```

- MOVE ステートメント

日付フィールドを非日付に移動することはサポートされません。しかし、UNDATE 組み込み関数を使用してこれを行うことができます。

非日付を日付フィールドに移動する場合、送信フィールドは、年と年以外の文字の文字数の点で、受信フィールドと互換性があると見なされます。例えば、非日付をウィンドウ化日付フィールドに移動する場合、非日付フィールドには 2 桁年と互換性のある日付が入っているものと想定されます。

符号条件の使用

アプリケーションの中には、日付フィールドで、トリガーとして機能する (つまり、ある特殊な処理が必要であることを示す) ゼロ並びのような特殊値を使用するものがあります。

例えば、Orders ファイルで Order-Date に 0 の値を使用すると、レコードはオーダー・レコードではなく顧客合計レコードであることを意味するという場合です。プログラムは、次のように日付を 0 と比較します。

```
01 Order-Record.
   05 Order-Date      Pic S9(5) Comp-3 Date Format yyxxx.
...
   If Order-Date Equal Zero Then . . .
```

しかし、この比較は、リテラル値の Zero が非日付のため、仮定による世紀ウィンドウに対してウィンドウ操作されて値が 1900000 になるので、有効ではありません。

あるいは、次のように、リテラル比較の代わりに符号条件を使用できます。符号条件を使用すると、Order-Date は非日付として扱われ、世紀ウィンドウは考慮に入れられません。

If Order-Date Is Zero Then . . .

このアプローチが適用されるのは、符号条件内のオペランドが算術式ではなく単純な ID である場合だけです。式を指定した場合は、適宜世紀ウィンドウが適用されてその式が最初に評価されます。そのあと、その式の結果に対して符号条件が比較されます。

代わりに UNDATE 組み込み関数を使用しても、同じ結果が得られます。

関連概念

582 ページの『非日付の処理』

関連タスク

586 ページの『日付処理の明示的制御』

関連参照

261 ページの『DATEPROC』

日付フィールドに対する算術の実行

任意の数値データ項目と同様に、数値日付フィールドにも算術操作を実行できます。必要に応じて、世紀ウィンドウが計算に使用されます。

しかし、算術式や算術ステートメントのどこで日付フィールドを使用できるかについては制限があります。日付フィールドが含まれる算術演算は、次のものに限定されます。

- 日付フィールドへの非日付データの加算
- 日付フィールドからの非日付データの減算
- 互換性のある日付フィールドから日付フィールドを減算し、非日付の結果を与えること

以下の算術演算は使用できません。

- 互換性のない日付フィールド間の演算
- 2 つの日付フィールドの加算
- 非日付データからの日付フィールドの減算
- 日付フィールドに適用される単項減算
- 日付フィールドの関係した乗算、除算、またはべき乗計算
- 年末尾型日付フィールドを指定する算術式
- 年末尾型日付フィールドを指定する算術式 (送信フィールドが非日付の場合に、受け取りデータ項目として指定する場合を除く)

日付フィールドの年部分には日付のセマンティクスが提供されていますが、年以外の部分については提供されていません。例えば、値 980831 を含むグレゴリオ暦のウィンドウ操作日付フィールドに 1 を加算すると、980901 ではなく 980832 の結果になります。

関連タスク

『ウィンドウ化日付フィールドのオーバーフローの考慮』
586 ページの『評価の順序の指定』

ウィンドウ化日付フィールドのオーバーフローの考慮

(年末尾型でない) ウィンドウ化日付フィールドが算術演算に関与するときは、世紀ウィンドウに応じて、まずフィールドの年号構成要素の値が 1900 または 2000 だけ増分されたかのように処理されます。

```
01 Review-Record.  
   03 Last-Review-Year Pic 99 Date Format yy.  
   03 Next-Review-Year Pic 99 Date Format yy.  
   . . .  
   Add 10 to Last-Review-Year Giving Next-Review-Year.
```

上の例で、世紀ウィンドウが 1910-2009 で、Last-Review-Year の値が 98 である場合は、1998 を与えるため、まず Last-Review-Year が 1900 だけ増分されたかのようにして計算が進められます。次に、ADD 演算が実行され、2008 の結果が与えられます。この結果は、08 として Next-Review-Year に保管されます。

しかし、次のステートメントを使用すると、2018 という結果になります。

```
Add 20 to Last-Review-Year Giving Next-Review-Year.
```

この結果は、世紀ウィンドウの範囲外になります。結果が Next-Review-Year に保管されると、それ以降に Next-Review-Year が参照された場合に 1918 として解釈されるので、誤りになります。この場合、演算の結果は、ON SIZE ERROR 句が ADD ステートメントに指定されているかどうかによって異なります。

- SIZE ERROR が指定されている場合、受信フィールドは変更されず、SIZE ERROR 命令ステートメントが実行されます。
- SIZE ERROR が指定されていない場合、結果は、左端から桁が切り捨てられて受信フィールドに保管されます。

この考慮事項は、内部ブリッジングを使用するときには大切です。出力ファイルに書き出すために 4 桁年号の日付フィールドを 2 桁に短縮するときは、日付が世紀ウィンドウの範囲内になるようにする必要があります。そうすると、2 桁年号の日付がフィールドで正しく表されるようになります。

適切な計算が行われるようにするには、短縮を行うための COMPUTE ステートメントに、ウィンドウ外条件を処理するための SIZE ERROR 句を指定しなければなりません。以下に、その例を示します。

```
Compute Output-Date-YY = Work-Date-YYYY  
On Size Error Perform CenturyWindowOverflow.
```

ウィンドウ化日付受け取り側についての SIZE ERROR 処理は、世紀ウィンドウの範囲外となるすべての年号値を認識します。すなわち、世紀ウィンドウの開始年より小さい年号値も、世紀ウィンドウの終了年より大きい年号値の場合と同様に、SIZE ERROR 条件を引き起こします。

関連タスク

574 ページの『内部ブリッジングの使用』

評価の順序の指定

算術式の中の日付フィールドに関する制限のために、以前は正常にコンパイルされたプログラムが、今では一部のデータ項目が日付フィールドに変更された結果、診断メッセージが出るようになることがあります。

```
01 Dates-Record.  
   03 Start-Year-1 Pic 99 Date Format yy.  
   03 End-Year-1   Pic 99 Date Format yy.  
   03 Start-Year-2 Pic 99 Date Format yy.  
   03 End-Year-2   Pic 99 Date Format yy.  
   . . .  
   Compute End-Year-2 = Start-Year-2 + End-Year-1 - Start-Year-1.
```

上の例では、評価される最初の算術式は次のものです。

Start-Year-2 + End-Year-1

しかし、2 つの日付フィールドを加算することは許可されません。これらの日付フィールドを解決するためには、括弧を使用して、許可される算術式の部分を分離しなければなりません。以下に、その例を示します。

Compute End-Year-2 = Start-Year-2 + (End-Year-1 - Start-Year-1).

この場合、評価される最初の算術式は次のものです。

End-Year-1 - Start-Year-1

ある日付フィールドから別の日付フィールドを減算することは許可され、非日付の結果が与えられます。次に、この非日付の結果が日付フィールド End-Year-1 に加算され、日付フィールドの結果が与えられ、これが End-Year-2 に保管されます。

日付処理の明示的制御

ある特定条件下でのみ、あるいはプログラムの特定部分でのみ、COBOL データ項目を日付フィールドとして処理したいことがあります。あるいは、アプリケーションに含まれる 2 桁年の日付フィールドを、他のソフトウェア・プロダクトとの対話があるためにウィンドウ化日付フィールドとして宣言できないことがあるかもしれません。

例えば、日付フィールドが、特に解釈のための操作をすることなく純粋な 2 進数の内容によってのみ認識されるコンテキストでは、そのフィールドの日付をウィンドウ操作することはできません。このような日付フィールドには、以下のものがあります。

- DB2 のようなデータベース・システムの検索フィールド
- CICS コマンドのキー・フィールド

逆に日付フィールドを、プログラムの特定の部分では非日付として扱いたいときがあるかもしれません。

COBOL は、このような条件を扱うために 2 つの組み込み関数を提供します。

DATEVAL

非日付を日付フィールドに変換します。

UNDATE 日付フィールドを非日付に変換します。

関連タスク

『DATEVAL の使用』

『UNDATE の使用』

DATEVAL の使用

DATEVAL 組み込み関数を使用して、非日付を日付フィールドに変換できます。その結果、COBOL により関連する日付処理がそのフィールドに適用されます。

この関数の最初の引数には変換対象の非日付を指定し、2 番目の引数には日付形式を指定します。2 番目の引数は、DATE FORMAT 文節の日付パターンの指定に類似した指定を持つリテラル・ストリングです。

ほとんどの場合コンパイラーは、非日付の解釈について正しい仮定をしますが、その仮定に伴って警告レベルの診断メッセージを出します。一般にこのメッセージは、ウィンドウ化日付がリテラルと比較された場合に発生します。

```
03 When-Made          Pic x(6) Date Format yyxxxx.  
..  
If When-Made = "850701" Perform Warranty-Check.
```

リテラルは、互換性のあるウィンドウ化日付と見なされますが、1900 から 1999 の世紀ウィンドウが使われているので、これは 1985 年 7 月 15 日を表しています。DATEVAL 組み込み関数を使用してリテラルの日付の年を明示して、警告メッセージを出さないようにすることができます。

```
If When-Made = Function Dateval("19850701" "YYYYXXXX")  
    Perform Warranty-Check.
```

『例: DATEVAL』

UNDATE の使用

UNDATE 組み込み関数は、日付フィールドを非日付に変換し、日付処理なしでそれを参照できるようにします。

重要: UNDATE を使用するのは最後の手段としてのみにし、できる限り使わないようにしてください。プログラムでの日付フィールドのフローをコンパイラーが見失ってしまうからです。もし見失った場合、日付の比較が正しくウィンドウ操作されないことがあります。

MOVE および COMPUTE では、関数 UNDATE の代わりに DATE FORMAT 文節を使用するようにしてください。

588 ページの『例: UNDATE』

例: DATEVAL

次の例は、フィールドは非日付としておいたまま、比較ステートメントの中で DATEVAL 組み込み関数を使用するのが適切な場合を示しています。

フィールド Date-Copied はプログラム内で何度も参照されるが、その参照の大半で、その値はレコード間で移動されるかまたは印刷のために再フォーマット設定されるに過ぎないものと想定します。1 つの参照箇所においてのみ、(他の日付との比較の目的で) その内容を日付であると見なしています。この場合、このフィール

ドは非日付としておいたまま、比較ステートメントの中で DATEVAL 組み込み関数を使用するのが適切です。以下に、その例を示します。

```
03 Date-Distributed Pic 9(6) Date Format yyxxxx.  
03 Date-Copied      Pic 9(6).  
...  
If Function DATEVAL(Date-Copied "YYXXXX") Less than Date-Distributed ...
```

この例では、DATEVAL は Date-Copied を日付フィールドに変換し、比較を意味のあるものにしています。

関連参照

DATEVAL (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

例: UNDATE

次の例は、日付フィールドを非日付に変換する場合を示しています。

フィールド Invoice-Date は、ウィンドウ操作される年間通算日の日付フィールドです。レコードによっては、00999 の値を含んでいるものがあり、これはレコードが真の送り状レコードではなく、ファイル制御情報を含んでいることを示します。

Invoice-Date には DATE FORMAT 文節があります。プログラム内でのこのフィールドへの参照のほとんどが日付固有であるからです。しかし、制御レコードの有無が検査される場合には、年部分の値が 00 になっていると、混乱を招きかねません。Invoice-Date の値が 00 の年は、世紀ウィンドウに応じて、1900 または 2000 のいずれかを表します。これは、非日付 (例の中ではリテラル 00999) と比較されますが、それは、常に仮定による世紀ウィンドウに対してウィンドウ操作されるため、常に 1900 年を表します。

比較が矛盾した結果にならないようにするためには、UNDATE 組み込み関数を使用して Invoice-Date を非日付に変換しなければなりません。したがって、IF ステートメントがどの日付フィールドも比較しない場合には、ウィンドウ操作を適用させる必要はありません。以下に、その例を示します。

```
01 Invoice-Record.  
03 Invoice-Date      Pic x(5) Date Format yyxxx.  
...  
If FUNCTION UNDATE(Invoice-Date) Equal "00999" ...
```

関連参照

UNDATE (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

日付関連診断メッセージの分析および回避

DATEPROC(FLAG) コンパイラー・オプションが有効な場合は、コンパイラーは日付フィールドを定義または参照するステートメントごとに診断メッセージを作成します。

コンパイラー生成のすべてのメッセージと同じく、日付関連の各メッセージも以下の重大度レベルの 1 つを持っています。

- 通知レベル。これは、日付フィールドの定義または使用に注意を喚起するためのものです。

- 警告レベル。プログラムにコーディングされている情報が不十分なために、日付フィールドまたは非日付に関してコンパイラーがなんらかの仮定を設定したことを示すため、または正しいことを手作業で検査しなければならない日付ロジックの場所を示すためのものです。コンパイルは続行し、仮定は適用されます。
- エラー・レベル。日付フィールドの使い方が誤っていることを表します。コンパイルは継続されますが、ランタイムの結果は予測不能です。
- 重大レベル。日付フィールドの使い方が誤っていることを表します。このエラーが生成される原因となったステートメントは、コンパイルから廃棄されます。

MLE メッセージを最も簡単に使用するには、FLAG オプション設定を使用してコンパイルします。これによって、ソース・リストの中でメッセージの参照する行の直後にメッセージが出力されるようになります。すべての MLE メッセージを表示したり、重大度によって選択したりできます。

すべての MLE メッセージを表示するには、FLAG(I,I) および DATEPROC(FLAG) コンパイラー・オプションを指定します。自分のプログラム内の日付フィールドが MLE でどのように処理されるかを理解するため、最初はすべてのメッセージを表示することをお勧めします。例えば、コンパイル・リストを使用してプログラム内のデータ使用の静的分析をしたい場合は、FLAG (I,I) を使用してください。

しかし、MLE 固有のコンパイルでは FLAG(W,W) を指定することをお勧めします。重大レベル (S レベル) エラー・メッセージとエラー・レベル (E レベル) メッセージはすべて訂正する必要があります。警告レベル (W レベル) のメッセージについては、各メッセージを調べ、以下の指針に従って、メッセージを除去するか、または回避不能なメッセージの場合はコンパイラーが正しい仮定を行うようにしなければなりません。

- 診断メッセージが、DATE FORMAT 文節を持っていないと日付データ項目を示すことがあります。これらの項目に DATE FORMAT 文節を追加するか、またはこれらの項目への参照で DATEVAL 組み込み関数を使用してください。
- 日付フィールドを対象にする比較条件の中、または日付フィールドを含む算術式の中でリテラルを使用する場合には、特別な注意が必要です。リテラル (および非日付データ項目) に DATEVAL 関数を使用して、使用する DATE FORMAT パターンを指定することができます。UNDATE 関数は、最後の手段として、日付中心の動作を望まないコンテキストで使用される日付フィールドを使用可能にするために使用することができます。
- REDEFINES および RENAMES 文節が指定されている場合、日付フィールドと非日付が同じ保管場所を占有していると、コンパイラーは警告レベルの診断メッセージを出すことがあります。このような場合には注意深く調べて、種々の別名の付いたデータ項目のすべての使い方が正しいこと、および非日付と認識された再定義が実際にどれも日付でないこと、またはプログラム内の日付ロジックに悪影響を与えていないことを確認してください。

W レベル・メッセージが出ても気にしなければいいのですが、コードを変更して戻りコード = 0 のコンパイルを達成するのも良い方法です。

警告レベルの診断メッセージを回避するには、以下の簡単な指針に従ってください。

- 日付が入るデータ項目には DATE FORMAT 文節を追加してください。その項目が比較で使用されない場合でもそのようにします。ただし、日付フィールドの使用上の制約事項に関しては、以下の関連参照を参照してください。例えば、暗黙的または明示的に USAGE NATIONAL として記述されているデータ項目では DATE FORMAT 文節を使用できません。
- 日付フィールドが意味をなさないコンテキスト、例えば FILE STATUS、PASSWORD、ASSIGN USING、LABEL RECORD、または LINAGE 項目などでは、日付フィールドを指定しない。指定すると、警告レベルのメッセージが出されて、日付フィールドが非日付として扱われます。
- 日付フィールドの暗黙の別名または明示された別名が、日付フィールドだけからなるグループ項目などの中で互換性があることを確認する。
- 日付フィールドが VALUE 文節を定義されている場合、その値が日付フィールド定義と互換性があることを確認する。
- 非日付を日付フィールドとして扱いたい場合 (例えば、非日付を日付フィールドに移動する場合や、ウィンドウ化日付を非日付と比較する場合など) で、ウィンドウ化日付比較を行う場合は、DATEVAL 組み込み関数を使用する。DATEVAL を使わないと、コンパイラは非日付の使用に関してある仮定を行い、警告レベルの診断メッセージを作成します。その仮定が正しくても、DATEVAL を使用すればメッセージを排除できます。
- 日付フィールドが非日付として処理されるようにしたい場合は、UNDATE 組み込み関数を使用してください。例えば、日付フィールドを非日付へ移動させる場合や、ウィンドウ化比較を行いたくないときに非日付とウィンドウ化日付フィールドを比較する場合などです。

関連タスク

586 ページの『日付処理の明示的制御』

Analyzing date-related diagnostic messages (「*COBOL 2000* 年言語拡張の手引き」)

関連参照

日付フィールドの使用に関する制約事項 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

日付処理上の問題の回避

COBOL プログラムを変更して 2000 年言語拡張を使用する場合、予想外の振る舞いが生じるのを解決するために、プログラムの一部に特別の注意を向けなければならないことがあります。例えば、パック 10 進数フィールドの問題や、拡張日付フィールドからウィンドウ化日付フィールドに移動した場合に起こる問題を、回避することが必要な場合もあります。

関連タスク

『パック 10 進数フィールドの問題の回避』

591 ページの『拡張日付フィールドからウィンドウ化日付フィールドへの移動』

パック 10 進数フィールドの問題の回避

COMPUTATIONAL-3 フィールド (パック 10 進数形式) は、奇数桁数を持つものとして定義されることがよくあります。フィールドがその大きさの数値を保持しない場合でもそうです。それは、内部表現ではパック 10 進数の桁数が常に奇数になっているからです。

例えば、6 桁のグレゴリオ暦日付を入れるフィールドを PIC S9(6) COMP-3 と宣言します。この宣言により、4 バイトのストレージが予約されることになります。しかしプログラマーは、PIC S9(7) を指定しても予約バイトは 4 バイトであることを考慮して、フィールドを PIC S9(7) として宣言し、最高位桁を常に 0 にするようにしているかもしれません。

このフィールドに DATE FORMAT YYXXXX という文節を追加した場合、コンパイラから診断メッセージが出ます。PICTURE 文節内の桁数が日付形式指定のサイズに一致しないからです。その場合、フィールド使用を 1 つずつ慎重に調べる必要があります。高位桁を使わない場合は、単にフィールド定義を PIC S9(6) に変更することができます。使用する場合 (例えば同じフィールドに日付以外の値も入れることがある場合)、他のなんらかのアクションが必要になります。

- REDEFINES 文節を使用して、日付および非日付の両方としてフィールドを定義する (この場合も、警告レベルの診断メッセージが出ます)。
- 日付を入れる別の WORKING-STORAGE フィールドを定義し、数値フィールドを新規フィールドに移動する。
- データ項目に DATE FORMAT 文節を追加せず、それを日付フィールドとして参照するところで DATEVAL 組み込み関数を使用する。

拡張日付フィールドからウィンドウ化日付フィールドへの移動

拡張英数字日付フィールドをウィンドウ化日付フィールドへ移動させる場合、この移動は、英数字移動に関する通常の COBOL 規則に従いません。送信フィールドと受信フィールドのどちらも日付フィールドである場合、移動は通常の左寄せではなく右寄せになります。拡張からウィンドウ操作への (縮小) 移動の場合、年の先頭の 2 桁が切り捨てられることになります。

送信フィールドの内容によっては、このような移動は結果的に誤りを生じることがあります。以下に、その例を示します。

```
77 Year-Of-Birth-Exp Pic x(4) Date Format yyyy.  
77 Year-Of-Birth-Win Pic xx   Date Format yy.  
...  
Move Year-Of-Birth-Exp to Year-Of-Birth-Win.
```

Year-Of-Birth-Exp が '1925' を含んでいる場合、Year-Of-Birth-Win は '25' が含まれます。しかし、世紀ウィンドウが 1930-2029 の場合、Year-Of-Birth-Win のあの参照は 2025 と見なされます。しかし、それは誤っています。

第 8 部 パフォーマンスおよび生産性の向上

第 33 章 プログラムのチューニング	595
最適なプログラミング・スタイルの使用	596
構造化プログラミングの使用	596
一括表示表現	596
シンボリック定数の使用	597
定数計算のグループ化	597
重複計算のグループ化	597
効率的なデータ型の選択	598
効率的な計算データ型の選択	598
一貫性のあるデータ型の使用	599
算術式の効率化	599
指数の効率化	599
テーブルの効率的処理	600
テーブル参照の最適化	601
定数項目と変数項目の最適化	602
重複項目の最適化	602
可変長項目の最適化	603
直接指標付けと間接指標付けの比較	603
コードの最適化	603
最適化	604
含まれているプログラム・プロシーチャーの統合	604
パフォーマンスを向上させるコンパイラー機能の選択	605
パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション	605
パフォーマンスの評価	608
第 34 章 コーディングの単純化	609
反復コーディングの除去	609
例: COPY ステートメントの使用	610
日時の取り扱い	611
日時の呼び出し可能サービスからのフィードバックの取得	612
日時の呼び出し可能サービスからの条件の処理	612
例: 日付の操作	612
例: 出力用の日付形式	613
フィードバック・トークン	614
ピクチャー文字項およびストリング	615
例: 日時のピクチャー・ストリング	617
世紀ウィンドウ	618
例: 世紀ウィンドウの照会および変更	619

第 33 章 プログラムのチューニング

プログラムが分かりやすいものであってこそ、パフォーマンスの評価を行うことができます。制御フローが混乱したプログラムは、理解や維持が困難です。また、制御フローが混乱していると、コードの最適化も禁止されます。

このため、パフォーマンスの向上を直接試みる前に、プログラムのいくつかの局面を評価する必要があります。

1. プログラムの基礎アルゴリズムを調べる。最高のパフォーマンスを得るためには、適切なアルゴリズムが不可欠です。例えば、百万個の品目をソートするような洗練されたアルゴリズムは、単純なアルゴリズムよりも何百万倍も高速になります。
2. データ構造を調べる。データ構造はアルゴリズムに適したものにする必要があります。プログラムが頻繁にデータにアクセスする場合は、可能であれば、データにアクセスするために必要なステップの数を減らします。
3. アルゴリズムとデータ構造を改善したら、パフォーマンスに影響を与える COBOL ソース・コードのその他の詳細を調べる。

より優れたコード・シーケンスを生成し、システム・サービスをより活用するようなプログラムを作成することができます。プログラムのパフォーマンスに影響を与えるのは、次の分野です。

- ・ コーディング技法。これには、最適化プログラムを援助するプログラミング・スタイルの使用、効率的なデータ型の選択、およびテーブルの効率的な処理が含まれます。
- ・ 最適化。OPTIMIZE コンパイラー・オプションを使用してコードを最適化することができます。
- ・ コンパイラー・オプションおよび USE FOR DEBUGGING ON ALL PROCEDURES。特定のコンパイラー・オプションおよび言語は、プログラムの効率に影響を与えます。
- ・ ランタイム環境。どのランタイム・オプションを選択するかについて、またコンパイルされたプログラムの実行方法を制御するその他のランタイム考慮事項について、注意深く考慮してください。
- ・ CICS での実行。EXEC CICS LINK のインスタンスを CALL に変換して、トランザクションの応答時間を短縮します。

関連概念

604 ページの『最適化』

関連タスク

596 ページの『最適なプログラミング・スタイルの使用』

598 ページの『効率的なデータ型の選択』

600 ページの『テーブルの効率的処理』

603 ページの『コードの最適化』

605 ページの『パフォーマンスを向上させるコンパイラー機能の選択』

関連参照

605 ページの『パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション』

325 ページの『第 17 章 ランタイム・オプション』

最適なプログラミング・スタイルの使用

使用するコーディング・スタイルは、最適化プログラムがコードを処理する方法に影響を与えることがあります。構造化プログラミング手法の使用、一括表示表現、シンボリック定数の使用、および定数と重複計算のグループ化によって最適化を向上させることができます。

関連タスク

『構造化プログラミングの使用』

『一括表示表現』

597 ページの『シンボリック定数の使用』

597 ページの『定数計算のグループ化』

597 ページの『重複計算のグループ化』

構造化プログラミングの使用

EVALUATE やインライン PERFORM などの構造化プログラミング・ステートメントを使用すると、プログラムが一層わかりやすいものになり、より線形になった制御フローが生み出されます。すると、最適化プログラムはプログラムのより多くの領域に作用することができるため、より効率のよいコードが与えられます。

トップダウン・プログラミング構成を使用してください。ライン外の PERFORM ステートメントは、トップダウン・プログラミングを行う本来の手段です。ライン外の PERFORM ステートメントがインラインの PERFORM ステートメントと同じくらい効率的になることがよくあります。これは、最適化プログラムがリンケージ・コードを簡略化または除去するためです。

次の構成は使用しないでください。

- ALTER ステートメント
- 逆方向ブランチ (PERFORM が不適當であるループに必要な場合を除く)
- 変則的な制御フローを伴う PERFORM プロシージャー (例えば、プロシージャーの終わりに制御が渡されないために、PERFORM ステートメントに戻れないなど)

一括表示表現

プログラム内で一括表示表現を行うことにより、不要な多数の計算を潜在的に除去することができます。

例えば、次のコードで最初のブロックは 2 番目のブロックよりも効率的になります。

```
MOVE ZERO TO TOTAL
PERFORM VARYING I FROM 1 BY 1 UNTIL I = 10
    COMPUTE TOTAL = TOTAL + ITEM(I)
END-PERFORM
COMPUTE TOTAL = TOTAL * DISCOUNT
```

```
MOVE ZERO TO TOTAL
PERFORM VARYING I FROM 1 BY 1 UNTIL I = 10
  COMPUTE TOTAL = TOTAL + ITEM(I) * DISCOUNT
END-PERFORM
```

最適化プログラムは、一括表示を行いません。

シンボリック定数の使用

プログラム全体で最適化プログラムがデータ項目を定数として認識するようにさせるには、データ項目を VALUE 文節で初期化し、プログラム内のどの場所でもそれを変更しないでください。

データ項目を BY REFERENCE によってサブプログラムに渡すと、最適化プログラムはその項目を外部データ項目として扱い、サブプログラムを呼び出すたびに、その項目が変更されるものと想定します。

リテラルをデータ項目に移動すると、最適化プログラムはそれを定数と見なしますが、それは、MOVE ステートメントに続くプログラムの限られた領域内においてのみです。

定数計算のグループ化

式のいくつかの項目が定数である場合、最適化プログラムがそれらの項目を最適化できることを確認してください。コンパイラーは左から右への COBOL の評価規則に従います。したがって、すべての定数を式の左側に移動させるか、または括弧で囲んでグループ化します。

例えば、V1、V2、および V3 が変数で、C1、C2、および C3 が定数の場合、次の左の式の方が、対応する右の式より望ましいものになります。

効率がよい

```
V1 * V2 * V3 * (C1 * C2 * C3)
C1 + C2 + C3 + V1 + V2 + V3
```

効率がよくない

```
V1 * V2 * V3 * C1 * C2 * C3
V1 + C1 + V2 + C2 + V3 + C3
```

量産用プログラミングでは、式の右側に定数因子を置く傾向がよく見られます。しかしその結果、最適化が行われないために、効率のよくないコードが生成される可能性があります。

重複計算のグループ化

さまざまな式のコンポーネントが重複している場合、コンパイラーがそれらを最適化できることを確認してください。算術式の場合、コンパイラーは、左から右への COBOL の評価規則に従います。したがって、すべての重複を式の左側に移動させるか、または括弧で囲んでグループ化します。

例えば、V1 から V5 が変数の場合、V2 * V3 * V4 の計算は、次の 2 つのステートメントで重複します (共通の副次式と呼ばれます)。

```
COMPUTE A = V1 * (V2 * V3 * V4)
COMPUTE B = V2 * V3 * V4 * V5
```

次の例では、V2 + V3 が共通の副次式です。

```
COMPUTE C = V1 + (V2 + V3)
COMPUTE D = V2 + V3 + V4
```

次の例に、共通の副次式はありません。

```
COMPUTE A = V1 * V2 * V3 * V4
COMPUTE B = V2 * V3 * V4 * V5
COMPUTE C = V1 + (V2 + V3)
COMPUTE D = V4 + V2 + V3
```

最適化プログラムは重複計算を除去することができます。人工的な一時計算を取り入れる必要はありません。不要な処理が入らなければ、プログラムはわかりやすいものになります。

効率的なデータ型の選択

適切なデータ型および PICTURE 文節を選択すると、より効率的なコードを得ることができますが、それは USAGE DISPLAY および USAGE NATIONAL データ項目を、計算に頻繁に使用される領域で使用しない場合に効率的なコードが得られるのと同様です。

一貫性のあるデータ型を使用すると、データ項目での演算中に変換を行う必要性を減らすことができます。また、固定小数点データ型と浮動小数点データ型をいつ使用するかを慎重に判別することで、プログラム・パフォーマンスを向上させることができます。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

関連タスク

『効率的な計算データ型の選択』

599 ページの『一貫性のあるデータ型の使用』

599 ページの『算術式の効率化』

599 ページの『指数の効率化』

効率的な計算データ型の選択

データ項目を主に算術に、または添え字として使用する場合、その項目のデータ記述項目に USAGE BINARY をコーディングしてください。2 進データを処理する操作は、10 進データを処理する操作よりも高速で行われます。

しかし、固定小数点算術ステートメントが大きな精度 (有効数字) の中間結果を持つ場合、コンパイラーは、オペランドをパック 10 進数形式に変換したうえで、10 進数演算を使用します。固定小数点算術ステートメントについては、コンパイラーは通常、精度が 8 桁以下にとどまる場合には、2 進オペランドを使用した簡単な計算に 2 進数算術演算を使用します。18 桁を超えると、コンパイラーは常に 10 進数算術演算を使用します。9 から 18 桁の精度では、コンパイラーはいずれの形式でも使用できます。

BINARY データ項目について最も効率的なコードを作成するには、以下の特性を持たせるようにしてください。

- 符号 (PICTURE 文節の S)。

- 8 桁以下。

8 桁より大きいデータ項目、あるいは DISPLAY または NATIONAL データ項目と一緒に使用されるデータ項目の場合は、PACKED-DECIMAL を使用してください。

PACKED-DECIMAL データ項目について最も効率的なコードを作成するには、以下の特性を持たせるようにしてください。

- 符号 (PICTURE 文節の S)。
- ハーフ・バイトを残さずに正確なバイト数を占めるように、奇数の桁数 (PICTURE 文節の 9 の数)。

一貫性のあるデータ型の使用

異なる型のオペランドに対する演算では、一方のオペランドを他方の型と同じ型に変換する必要があります。各変換ごとにいくつかの命令が必要になります。例えば、いずれかのオペランドは小数点以下の桁数が適切な数になるように位取りを指定する必要があるかもしれません。

両方のオペランドに同じ使用法を与え、さらに適切な PICTURE 指定を与えることで、一貫性のあるデータ型を使用することによって、変換を大部分は回避できます。つまり、比較、加算、または減算を行う 2 つの数値は、同じ使用法を持つだけでなく、さらに小数部の桁数 (PICTURE 文節の V の後の 9 の数) も同じでなければなりません。

算術式の効率化

オペランドをほとんど変換する必要がない場合は、浮動小数点で評価される算術式の計算が最も効率的です。COMP-1 または COMP-2 であるオペランドを使用すると、最も効率のよいコードが作成されます。

浮動小数点データに高速変換を行うには、整数項目を BINARY または PACKED-DECIMAL (9 桁以下) として宣言します。さらに、COMP-1 または COMP-2 の項目から、9 桁以下の固定小数点整数への変換は (SIZE ERROR が有効ではない場合)、COMP-1 または COMP-2 項目の値が 1,000,000,000 未満の場合に効率がよくなります。

指数の効率化

評価をより高速に行い、結果をより正確にするためには、大きな指数のべき乗計算には浮動小数点を使用してください。

例えば、以下に示す最初のステートメントは、2 番目のステートメントより速くかつより正確に計算されます。

```
COMPUTE fixed-point1 = fixed-point2 ** 100000.E+00
```

```
COMPUTE fixed-point1 = fixed-point2 ** 100000
```

これは、浮動小数点の指数があるため、べき乗計算の計算に浮動小数点演算が使用されるからです。

テーブルの効率的処理

いくつかの技法を使用して、テーブル処理操作の効率を向上させ、最適化プログラムに影響を与えることができます。努力の成果が十分報われる可能性があります。テーブル処理操作がアプリケーションの主要部分である場合には特に当てはまります。

次の 2 つの指針は、テーブル・エレメントの参照方法の選択に影響を与えます。

- 添え字付けではなく索引付けを使用する。

コンパイラーは重複する指標や添え字を除去できますが、(たとえ添え字が BINARY であっても) テーブル・エレメントへの元の参照は、指標を使用する方がより効率的です。これは、指標の値にはすでにエレメント・サイズが加味されているのに対して、添え字の値は使用時にエレメント・サイズを乗算しなければならないためです。指標にはすでにテーブルの先頭からの変位が含まれており、実行時にこの値を計算する必要はありません。ただし、添え字の方が理解しやすく維持するのが簡単かもしれません。

- 相対索引付けを使用する。

相対指標参照 (つまり、符号なし数値リテラルが指標名に加えられるか、または指標名から引かれる参照) は、少なくとも直接指標参照と同じ位の速さで、時にはより高速で実行されます。オフセットを含めた代替索引を保管してもメリットはありません。

指標または添え字のいずれを使用する場合でも、以下のコーディング指針は、より良いパフォーマンスを得る助けとなります。

- 定数および重複する指標または添え字を左側に置く。

このようにして実行時の計算を削減もしくは除去することができます。すべての指標または添え字が可変であっても、プログラム内で互いに近接している参照に関して、右端の添え字がもっとも頻繁に変化するように、テーブルを使用してみてください。この方法を使用すると、ストレージ参照のパターンと、ページングも改善されます。すべての指標または添え字が重複している場合、指標または添え字の計算全体が共通副次式になります。

- 関連するテーブルの長さと一致するようなエレメントの長さを指定する。

異なるテーブルに添え字または指標を付けるときは、すべてのテーブルのエレメント長が同じ場合に、最も効率がよくなります。このように、テーブルの最後の次元のスライドは同じであり、最適化プログラムは、1 つのテーブルで計算された右端の指標または添え字を再利用できるようになります。エレメントの長さおよび各次元での出現回数が同じである場合、最後の次元以外は、次元のスライドもまた等しくなり、その結果、添え字計算相互間の共通性はより大きくなります。最適化プログラムは、右端以外の添え字または指標を再使用することができます。

- 指標および添え字検査をプログラムにコーディングすることによって、参照エラーを回避する。

指標および添え字を妥当性検査する必要がある場合は、SSRANGE コンパイラ・オプションを使用するよりも、独自の検査をコーディングする方が速い場合があります。

以下の指針を使用して、テーブルの効率を改善することもできます。

- すべての添え字に 2 進数データ項目を使用する。

添え字を使用してテーブルをアドレッシングする場合は、8 桁以下の BINARY 符号付きデータ項目を使用してください。さらに場合によっては、データ項目の桁数を 4 桁以下にすると、処理時間を短縮できます。

- 可変長テーブル項目に 2 進数データ項目を使用する。

可変長項目を持つテーブルの場合は、OCCURS DEPENDING ON (ODO) のコードを改善することができます。可変長項目が参照されるたびに行われる不要な変換を避けるには、OCCURS... DEPENDING ON オブジェクトに BINARY を指定してください。

- 可能であれば固定長データ項目を使用する。

可変長データ項目を使用する場合、それらの使用頻度が高くなる前に、固定長データ項目にコピーすると、オーバーヘッドを緩和することができます。

- 使用する探索メソッドのタイプに従ってテーブルを編成する。

テーブルが順次に探索される場合には、検索基準を満たす可能性が最も高いデータ値をテーブルの始まりに置くようにします。テーブルが二分探索アルゴリズムを使用して探索される場合は、検索キー・フィールドに基づいてアルファベット順にソートされたテーブルに、データ値を入れてください。

関連概念

『テーブル参照の最適化』

関連タスク

69 ページの『テーブル内の項目の参照』

598 ページの『効率的なデータ型の選択』

関連参照

291 ページの『SSRANGE』

テーブル参照の最適化

COBOL コンパイラは、いくつかの方法でテーブル参照を最適化します。

テーブル・エレメント参照 ELEMENT(S1 S2 S3) (ここで、S1、S2、および S3 は添え字です) の場合、コンパイラは以下の式を評価します。

$$\text{comp_s1} * \text{d1} + \text{comp_s2} * \text{d2} + \text{comp_s3} * \text{d3} + \text{base_address}$$

ここで、comp_s1 は 2 進数に変換された後の S1 の値であり、comp-s2 は 2 進数に変換された後の S2 の値です。以下同様です。それぞれの次元のストライドは d1、d2、および d3 です。ある特定次元のストライドは、その次元での出現番号が 1 だけ違い、かつ他の出現番号が等しいようなテーブル・エレメント相互間の距離 (バイト単位) です。例えば、上記の例の 2 次元のストライド d2 は、ELEMENT(S1 1 S3) と ELEMENT(S1 2 S3) との間の距離 (バイト単位) です。

指標計算は添え字計算に類似していますが、指標値ではそれらの中にストライドを含めているので、乗算をする必要がないという点が異なります。指標計算には、指標をレジスターにロードすることもあります。これらのデータ転送は、個々の添え字計算の項を最適化する場合とほぼ同様に、最適化することができます。

コンパイラーは式を左から右へと評価していくので、定数または重複する添え字が左端にあると、最適化プログラムが計算を除去する可能性が最も高くなります。

定数項目と変数項目の最適化

C1、C2、... は、定数データ項目であり、V1、V2、... は変数データ項目です。したがって、テーブル・エレメント参照 ELEMENT(V1 C1 C2) の場合、コンパイラーは個々の項 comp_c1 * d2 および comp_c2 * d3 だけしか、式から定数として除去できません。

```
comp_v1 * d1 + comp_c1 * d2 + comp_c2 * d3 + base_address
```

しかし、テーブル・エレメント参照 ELEMENT(C1 C2 V1) の場合、コンパイラーは、副次式 comp_c1 * d1 + comp_c2 * d2 全体を、式から定数として除去することができます。

```
comp_c1 * d1 + comp_c2 * d2 + comp_v1 * d3 + base_address
```

テーブル・エレメント参照 ELEMENT(C1 C2 C3) では、添え字はすべて定数なので、実行時に添え字計算は行われません。式は次のとおりです。

```
comp_c1 * d1 + comp_c2 * d2 + comp_c3 * d3 + base_address
```

最適化プログラムを使用すると、この参照は、スカラー (テーブルでない) 項目への参照と同じくらい効率的になります。

重複項目の最適化

テーブル・エレメント参照 ELEMENT(V1 V3 V4) および ELEMENT(V2 V3 V4) では、個々の項 comp_v3 * d2 および comp_v4 * d3 だけが、テーブル・エレメントの参照に必要な式における共通副次式です。

```
comp_v1 * d1 + comp_v3 * d2 + comp_v4 * d3 + base_address  
comp_v2 * d1 + comp_v3 * d2 + comp_v4 * d3 + base_address
```

しかし、2 つのテーブル・エレメント参照 ELEMENT(V1 V2 V3) および ELEMENT(V1 V2 V4) の場合は、副次式 comp_v1 * d1 + comp_v2 * d2 全体が、テーブル・エレメントの参照に必要な 2 つの式間で共通となります。

```
comp_v1 * d1 + comp_v2 * d2 + comp_v3 * d3 + base_address  
comp_v1 * d1 + comp_v2 * d2 + comp_v4 * d3 + base_address
```

2 つの参照 ELEMENT(V1 V2 V3) および ELEMENT(V1 V2 V4) では、式は同じです。

```
comp_v1 * d1 + comp_v2 * d2 + comp_v3 * d3 + base_address  
comp_v1 * d1 + comp_v2 * d2 + comp_v4 * d3 + base_address
```

最適化プログラムを使用すると、同じエレメントへの 2 度目 (およびそれ以降) の参照は、スカラー (テーブルでない) 項目への参照と同じ効率になります。

可変長項目の最適化

従属 OCCURS DEPENDING ON データ項目の入っているグループ項目は可変長です。プログラムは、可変長データ項目が参照されるたびに特殊コードを実行しなければなりません。

このコードはライン外のものなので、最適化の妨げになる可能性があります。さらに、可変長データ項目を処理するためのコードは、固定サイズ・データ項目を処理するコードよりかなり効率が下がり、処理時間も大幅に増加することがあります。例えば、可変長データ項目を比較したり移動したりするためのコードには、ライブラリー・ルーチンの呼び出しが必要なため、固定長データ項目の場合の同じコードよりかなり低速になります。

直接指標付けと間接指標付けの比較

相対指標参照は、直接指標参照と同じくらい迅速に実行されます。

ELEMENT (I5, J3, K2) の直接索引付けには、次のプリプロセスが必要になります。

```
SET I5 TO I
SET I5 UP BY 5
SET J3 TO J
SET J3 DOWN BY 3
SET K2 TO K
SET K2 UP BY 2
```

この処理のため、直接索引付けは、ELEMENT (I + 5, J - 3, K + 2) の相対索引付けよりも効率が悪くなります。

関連概念

604 ページの『最適化』

関連タスク

600 ページの『テーブルの効率的処理』

コードの最適化

プログラムの最終テストの準備ができたなら、OPTIMIZE コンパイラー・オプションを指定して、テスト・コードと実動コードが同一になるようにしてください。

プログラムが再コンパイルされずに頻繁に使用される場合は、開発中にこのコンパイラー・オプションを使用することもできます。しかし、アセンブラー言語の拡張部分 (LIST コンパイラー・オプション) を使用してプログラムの微調整を行う場合を除き、再コンパイルを頻繁に行うと、OPTIMIZE のオーバーヘッドが利点を上回ることがあります。

プログラムのユニット・テストについては、最適化されていないコードをデバッグする方が簡単です。

最適化プログラムがプログラム上でどのように機能するかを見るためには、OPTIMIZE オプションを指定した場合としない場合でのコンパイルを行い、そのうえで生成されたコードを比較します。(アセンブラーで生成コードをリストするよう要求するには、LIST コンパイラー・オプションを使用します。)

関連概念

『最適化』

関連参照

275 ページの『LIST』

281 ページの『OPTIMIZE』

最適化

生成されたコードの効率を改善するには、OPTIMIZE コンパイラー・オプションを使用することができます。

OPTIMIZE によって COBOL 最適化プログラムは以下の最適化を実行します。

- 不必要な制御権移動および非効率的な分岐を除去します。ソース・プログラムを見るだけではわからない、コンパイラーが生成する分岐も含みます。
- 中に含まれている (ネストされた) プログラムに対する CALL ステートメントのコンパイル済みコードを単純化します。可能であれば、最適化プログラムはステートメントをインラインに設定し、リンケージ・コードがなくて済むようにします。この最適化は、プロシージャー統合 と呼ばれます。プロシージャー統合を行えない場合、最適化プログラムは、できるだけ単純なリンケージ (2 つ程度の命令) を使用して、呼び出し先プログラムとの間を往復します。
- プログラムの結果に何の影響も与えない重複計算 (添え字計算や繰り返しのステートメントなど) を除去します。
- プログラムのコンパイル時に定数計算を実行することによって、定数計算を除去します。
- 定数条件式を除去します。
- 連続した項目 (MOVE CORRESPONDING の使用によって頻繁に発生するような) の移動を集約して、単一の移動にします。移動を集約するには、移動元も移動先も連続していなければなりません。
- 参照されないデータ項目を DATA DIVISION から廃棄し、これらのデータ項目をその VALUE 文節に初期化するコードの生成を抑止します。(最適化プログラムがこのアクションを取るのは、FULL サブオプションが指定された場合だけです。)

含まれているプログラム・プロシージャーの統合

含まれているプログラムのプロシージャーの統合では、含まれているプログラム・コードが、含まれているプログラムへの CALL に置き換わります。結果として生じるプログラムは、CALL リンケージのオーバーヘッドもなく、より線形の制御フローとなり、より速く実行されます。

プログラム・サイズ: 含まれているプログラムを複数の CALL ステートメントが呼び出している場合、それぞれのプログラムがこのような各ステートメントと置き換わるのであれば、含まれているプログラムが相当大きくなる可能性があります。最適化プログラムはこの増加を 50 % 以内に制限し、それ以降はプログラムを統合しません。これにより最適化プログラムはその CALL ステートメントに、最適化の次善の策を選択します。リンケージのオーバーヘッドは命令 2 つほどにすることができます。

到達不能コード: この統合の結果として、含まれている 1 つのプログラムが何回も繰り返されることがあります。その後の最適化はプログラムの各コピーで進められるため、コードのコピー先のコンテキストによっては、到達不能な部分が検出されることがあります。

関連概念

601 ページの『テーブル参照の最適化』

関連参照

281 ページの『OPTIMIZE』

パフォーマンスを向上させるコンパイラー機能の選択

パフォーマンス関連コンパイラー・オプションの選択および `USE FOR DEBUGGING ON ALL PROCEDURES` ステートメントの使用は、プログラムの最適化の程度に影響を与える可能性があります。

カスタマイズ済みシステムには、最適なパフォーマンスを得るために特定のオプションが必要なものもあります。以下の手順を実行します。

1. システム・デフォルトの内容を調べるには、プログラムの短縮リストを入手し、リストされたオプション設定値を検討する。
2. プログラムをコンパイルするために、パフォーマンスに関連したオプションを選択する。

重要: COBOL プログラムの調整方法については、システム・プログラマーと相談してください。調整を行って、選択するオプションを、インストール・システムのプログラムに適合するものにします。

考慮する必要があるもう 1 つのコンパイラー機能として、`USE FOR DEBUGGING ON ALL PROCEDURES` ステートメントがあります。これは、コンパイラーの最適化プログラムに大きな影響を与える可能性があります。`ON ALL PROCEDURES` オプションは、プロシージャ名に移動するたびに、余分のコードを生成します。これはデバッグには大変便利ですが、プログラムは非常に大型になり、実質上最適化を抑制する可能性があります。

関連概念

604 ページの『最適化』

関連タスク

603 ページの『コードの最適化』

340 ページの『リストの入手』

関連参照

『パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション』

パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション

以下の表には、それぞれのオプションの目的の要旨、パフォーマンス上の利点と欠点、および使用上の注意（該当する場合）が示されています。

表 75. パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション

コンパイラー・オプション	目的	パフォーマンス上の長所	パフォーマンス上の欠点	使用上の注意
ARITH(EXTEND) 252 ページの『ARITH』を参照	10 進数で許可される最大桁数を増やします	一般には、ありません。	ARITH(EXTEND) を使用すると、中間結果が大きくなるため、すべての 10 進数データ型でパフォーマンスがいくらか低下します。	どれほど低下するかは、使用する 10 進数データの量に直接左右されます。
263 ページの『DYNAM』	サブプログラム (CALL ステートメントによって呼び出された) が実行時に動的にロードされるようにする	サブプログラムが変更されても、アプリケーションをリンク・エディットする必要がないので、サブプログラムの保守が容易になります。	呼び出しはライブラリー・ルーチンを介して行う必要があるため、パフォーマンスがわずかに低下します。	不要になった仮想記憶域を解放するには、CANCEL ステートメントを出してください。
OPTIMIZE(STD) (281 ページの『OPTIMIZE』を参照)	パフォーマンスがよくなるように、生成されるコードを最適化する	一般に、もっと効率的な実行時コードが得られます。	コンパイル時間が長くなること。OPTIMIZE は、NOOPTIMIZE に比べ、コンパイルにかかる処理時間が長くなります。	NOOPTIMIZE は通常、頻繁なコンパイルが必要となるプログラム開発の段階で使用されます。これにより、シンボリック・デバッグも可能になります。実稼働用には、OPTIMIZE の使用をお勧めします。
OPTIMIZE(FULL) (281 ページの『OPTIMIZE』を参照)	生成されたコードをパフォーマンスがよくなるように最適化し、さらに DATA DIVISION も最適化する	一般に、もっと効率的な実行時コードが得られ、ストレージ使用量が少なくなります。	コンパイル時間が長くなること。OPTIMIZE は、NOOPTIMIZE に比べ、コンパイルにかかる処理時間が長くなります。	OPT(FULL) は未使用データ項目を削除しますが、それは、ダンプ読み取り用マーカーとしてのみ使用されるタイム・スタンプまたはデータ項目の場合には、望ましくないことがあります。
NOSSRANGE (291 ページの『SSRANGE』を参照)	すべてのテーブル参照および参照変更式が適切な範囲内にあるかどうかを検査する	SSRANGE は、テーブル参照を検査するための追加コードを生成します。NOSSRANGE を使用すると、コードは生成されません。	なし	一般に、テーブル参照のたびに検査する必要はなく、数度の検査だけで済む場合には、独自の検査をコーディングする方が、SSRANGE を使用するより速くなります。 CHECK(OFF) ランタイム・オプションを使用して、実行時に SSRANGE をオフにすることができます。パフォーマンスを重視するアプリケーションについては、NOSSRANGE の使用をお勧めします。

表 75. パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション (続き)

コンパイラー・オプション	目的	パフォーマンス上の長所	パフォーマンス上の欠点	使用上の注意
NOTEST (292 ページの『TEST』を参照)	WebSphere Developer for System z のデバッグ・パースペクティブをフルに活用するために生成される追加のオブジェクト・コードを回避する。	TEST を使用するとデバッグ情報が追加されるため、オブジェクト・ファイルのサイズが大幅に増えます。プログラムをリンクするときには、デバッグ情報を除外するようにリンカーに指示することができます。これにより、実行可能ファイルのサイズが、NOTEST を使用してモジュールがコンパイルされた場合に作成されるサイズとほぼ同じになります。実行可能ファイルにデバッグ情報が含まれている場合は、実行可能ファイルのサイズが大きくなるためにロードに時間がかかり、ページングが増える場合があります。このため、パフォーマンスがわずかに低下する可能性があります。	なし	TEST を使用すると、NOOPTIMIZE コンパイラー・オプションが強制的に有効になります。実稼働用には、NOTEST の使用をお勧めします。
TRUNC(OPT) (293 ページの『TRUNC』を参照)	算術演算の受信フィールドを切り捨てるためのコードの生成を回避する	余分のコードを生成しないので、一般にパフォーマンスは向上します。	TRUNC(BIN) と TRUNC(STD) はともに、BINARY データ項目が変更されるたびに、余分のコードを生成します。TRUNC(BIN) は、そのパフォーマンスについては COBOL (OS/390 および VM 版) V2 R2 で改善されたとはいえ、上記のオプション中では最も低速のオプションです。	TRUNC(STD) は標準 COBOL 85 に準拠しますが、TRUNC(BIN) および TRUNC(OPT) は準拠しません。TRUNC(OPT) を使用すると、コンパイラーは、データが PICTURE および USAGE の仕様に従っていると見なします。可能な場合は、TRUNC(OPT) を使用することをお勧めします。

関連概念

604 ページの『最適化』

関連タスク

226 ページの『コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成』

605 ページの『パフォーマンスを向上させるコンパイラー機能の選択』

600 ページの『テーブルの効率的処理』

関連参照

53 ページの『ゾーン 10 進数およびパック 10 進数データのサイン表記』

パフォーマンスの評価

プログラムのパフォーマンスの評価に役立つ以下のワークシートに記入してください。各質問に「はい」と答える場合は、おそらくパフォーマンスは向上しています。

パフォーマンスのトレードオフを比較検討する際には、各オプションの機能およびパフォーマンスの利点と欠点を十分に理解するようにしてください。パフォーマンスの向上よりも、機能を重視する場合も多くあります。

表 76. パフォーマンス調整のワークシート

コンパイラー・オプション	考慮事項	はい?
DYNAM	NODYNAM を使用していますか。パフォーマンスのトレードオフを比較検討してください。	
OPTIMIZE	実稼働に OPTIMIZE を使用していますか。OPTIMIZE(FULL) を使用できますか。	
SSRANGE	NOSSRANGE を実稼働に使用していますか。	
TEST	実稼働に NOTEST を使用していますか。	
TRUNC	可能な場合、TRUNC(OPT) を使用していますか。	

関連タスク

605 ページの『パフォーマンスを向上させるコンパイラー機能の選択』

関連参照

605 ページの『パフォーマンスに関連するコンパイラー・オプション』

第 34 章 コーディングの単純化

生産性を向上させるコーディング手法を使用することができます。COPY ステートメント、COBOL 組み込み関数、および呼び出し可能サービスを使用することによって、コーディングの繰り返しを避けることができ、また、算術演算などの複雑なタスクを多数コーディングせずに済みます。

プログラムに頻繁に使用されるコード・シーケンス (共通データ項目のブロック、入出力ルーチン、エラー・ルーチン、または COBOL プログラム全体) が含まれている場合は、それらのコード・シーケンスを一度作成し、それらを COBOL コピー・ライブラリーに入れてください。COPY ステートメントを使用してこれらのコード・シーケンスを取り出し、コンパイル時にプログラムに含めることができます。このようにコピーブックを使用すると、反復コーディングが除去されます。

COBOL は、ストリングおよび数値を扱うためのさまざまな機能を提供します。これらの機能がコーディングの単純化に役立ちます。

日時の呼び出し可能サービスは、日付をフルワード 2 進整数として保管し、タイム・スタンプを長精度 (64 ビット) 浮動小数点値として保管します。これらの形式を使用することにより、算術計算を日時の値に基づいて単純かつ効率的に行うことができます。こうした計算を実行するために、言語ライブラリーの外側でサービスを使用する特別なサブルーチンを書く必要はありません。

関連タスク

56 ページの『数字組み込み関数の使用』

『反復コーディングの除去』

111 ページの『データ項目の変換 (組み込み関数)』

114 ページの『データ項目の評価 (組み込み関数)』

611 ページの『日時の取り扱い』

反復コーディングの除去

保管されたソース・ステートメントをプログラムに組み込むには、COPY ステートメントをプログラムの任意の部で、また任意のコード・シーケンス・レベルで使用します。COPY ステートメントは任意の深さにネストできます。

複数のコピー・ライブラリーを指定するには、環境変数 SYSLIB をセミコロン (;) で区切った複数のパス名に設定するか、あるいは独自の環境変数を定義し、COPY ステートメントに次の句を含めます。

`IN/OF library-name`

以下に、その例を示します。

`COPY MEMBER1 OF COPYLIB`

この修飾句を省略した場合、デフォルトは SYSLIB です。

コンパイル時に COPYLIB を定義する環境変数を設定するには、次の例のようなコマンドを使用します。

```
SET COPYLIB=D:¥CPYFILES¥COBCOPY
```

COPY とデバッグ行: コピーされたテキストをデバッグ行として (例えば、7 桁目に D が挿入されているかのように) 扱わせるには、COPY ステートメントの最初の行に D を入れてください。COPY ステートメント自体をデバッグ行にすることはできません。これに D が入っていても、WITH DEBUGGING モードが指定されていなければ、COPY ステートメントが処理されることはありません。

『例: COPY ステートメントの使用』

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

例: COPY ステートメントの使用

次の例は、COPY ステートメントを使用してライブラリー・テキストをプログラムに含める方法を示しています。

ライブラリー項目 CFILEA が以下の FD 項目から構成されているとしましょう。

```
BLOCK CONTAINS 20 RECORDS
RECORD CONTAINS 120 CHARACTERS
LABEL RECORDS ARE STANDARD
DATA RECORD IS FILE-OUT.
01 FILE-OUT      PIC X(120).
```

以下のようにして、ソース・プログラムに COPY ステートメントを使用すると、テキスト名 CFILEA を取り出すことができます。

```
FD FILEA
    COPY CFILEA.
```

このライブラリー記入項目はプログラムにコピーされ、その結果生じるプログラム・リストは次のようになります。

```
FD FILEA
    COPY CFILEA.
C    BLOCK CONTAINS 20 RECORDS
C    RECORD CONTAINS 120 CHARACTERS
C    LABEL RECORDS ARE STANDARD
C    DATA RECORD IS FILE-OUT.
C    01 FILE-OUT      PIC X(120).
```

コンパイラー・ソース・リストで COPY ステートメントは別個の行に印刷され、コピーされた行の前には C が付けられます。

テキスト名 DOWORK を持つコピーブックが、以下のステートメントによって保管されているとします。

```
COMPUTE QTY-ON-HAND = TOTAL-USED-NUMBER-ON-HAND
MOVE QTY-ON-HAND to PRINT-AREA
```

DOWORK として識別されたコピーブックを取り出すには、次のようにコーディングします。

```
paragraph-name.
    COPY DOWORK.
```

DOWORK プロシージャに入っているステートメントが、*paragraph-name* の後に置かれます。

EXIT コンパイラー・オプションを使用して LIBEXIT モジュールを指定すると、結果がこの章で示されるものと異なることがあります。

関連タスク

609 ページの『反復コーディングの除去』

関連参照

301 ページの『第 15 章 コンパイラー指示ステートメント』

日時の取り扱い

日付または時刻の呼び出し可能サービスを呼び出すには、このサービス用の正しいパラメーターを指定した CALL ステートメントを使用してください。DATA DIVISION 内の CALL ステートメントにそのサービスに必要なデータ定義を使用してデータ項目を定義します。

```
77 argument          pic s9(9) comp.
01 format.
   05 format-length  pic s9(4) comp.
   05 format-string  pic x(80).
77 result            pic x(80).
77 feedback-code     pic x(12) display.
. . .
CALL "CEEDATE" using argument, format, result, feedback-code.
```

上の例では、呼び出し可能サービス CEEDATE によって、データ項目 *argument* にリリアン日付で表された数値が、データ項目 *result* に書き込まれる文字形式の日付に変換されます。データ項目 *format* に含まれるピクチャー・ストリングは、変換形式を制御します。呼び出しの成功/失敗に関する情報は、データ項目 *feedback-code* に戻されます。

日時の呼び出し可能サービスを呼び出すための CALL ステートメントでは、ID ではなくプログラム名のリテラルを使用する必要があります。

プログラムは、標準のシステム・リンケージ規約を使用して、日時の呼び出し可能サービスを呼び出します。したがって、CALLINT(SYSTEM) コンパイラー・オプションを使用してプログラムをコンパイルするか (デフォルト)、>>CALLINTERFACE SYSTEM コンパイラー指示ステートメントを使用する必要があります。

612 ページの『例: 日付の操作』

関連概念

653 ページの『付録 E. 日時呼び出し可能サービス』

関連タスク

612 ページの『日時の呼び出し可能サービスからのフィードバックの取得』

612 ページの『日時の呼び出し可能サービスからの条件の処理』

関連参照

614 ページの『フィードバック・トークン』

615 ページの『ピクチャー文字項およびストリング』

254 ページの『CALLINT』
301 ページの『第 15 章 コンパイラ指示ステートメント』
CALL ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

日時の呼び出し可能サービスからのフィードバックの取得

日時の呼び出し可能サービスでは、フィードバック・コード・パラメーター (オプション) を指定することができます。このサービスが呼び出しの成功/失敗に関する情報を返さないようにするには、このパラメーターに対して OMITTED を指定します。

ただし、このパラメーターを指定せずに、呼び出し可能サービスが失敗した場合は、プログラムが異常終了します。

日時の呼び出し可能サービスの呼び出し時に、フィードバック・コードに OMITTED を指定すると、サービスが成功した場合は RETURN-CODE 特殊レジスタが 0 に設定されますが、サービスが失敗した場合は特殊レジスタが変更されません。フィードバック・コードが OMITTED でない場合は、サービスが成功したかどうかに関係なく、RETURN-CODE 特殊レジスタは常に 0 に設定されます。

613 ページの『例: 出力用の日付形式』

関連参照

614 ページの『フィードバック・トークン』

日時の呼び出し可能サービスからの条件の処理

COBOL for Windows による条件処理は、ホスト上の IBM Language Environment^(R) プログラムにより提供される条件処理とは大幅に異なります。COBOL for Windows は、ネイティブの COBOL 条件処理スキームに従っており、言語環境プログラムにあるサポートのレベルには対応していません。

フィードバック・トークンを引数として渡す場合は、適切な情報が埋め込まれると単に返されます。呼び出しルーチンにロジックをコーディングして、内容を検証し、必要に応じてアクションを実行することができます。条件はシグナル通知されません。

関連参照

614 ページの『フィードバック・トークン』

例: 日付の操作

次の例では、日時の呼び出し可能サービスを使用して日付を別の形式に変換し、このフォーマットされた日付で単純な計算を行う方法を示します。

```
CALL CEEDAYS USING dateof_hire, 'YYMMDD', doh_lilian, fc.  
CALL CEEOCT USING today_lilian, today_seconds, today_gregorian, fc.  
COMPUTE servicedays = today_lilian - doh_lilian.  
COMPUTE serviceyears = service_days / 365.25.
```

上の例では、YYMMDD 形式の雇用日を元にして、従業員の就労年数を計算します。計算は次のようになります。

1. CEEDAYS (日付をリリアン形式へ変換) を呼び出して、日付をリリアン形式に変換します。
2. CEEOCT (現地時間の取得) を呼び出して、現地時間を取得します。
3. today_Lilian から doh_Lilian を減算して (グレゴリオ暦の開始から現地時間までの日数)、従業員の雇用日数を計算します。
4. この日数を 365.25 で除算して、就労年数を求めます。

例: 出力用の日付形式

次のサンプルは、日時の呼び出し可能サービスを使用して、ACCEPT ステートメントから取得された日付をフォーマットして表示します。

多くの呼び出し可能サービスには、旧バージョンの COBOL を使用した場合に大量のコーディングを必要としていた機能が備わっています。それが CEEDAYS および CEEDATE というサービスです。日付をフォーマットする際には、これらを効率的に利用することができます。

```
CBL QUOTE
  ID DIVISION.
  PROGRAM-ID. HOHOHO.
  *****
  * FUNCTION:  DISPLAY TODAY'S DATE IN THE FOLLOWING FORMAT: *
  *           WWWWWWWW, MMMMMMM DD, YYYY                    *
  *                                     *
  *           For example:  MONDAY, MARCH 13, 2006            *
  *                                     *
  *****
  ENVIRONMENT DIVISION.
  DATA DIVISION.
  WORKING-STORAGE SECTION.

  01  CHRDATE.
      05 CHRDATE-LENGTH    PIC S9(4) COMP VALUE 10.
      05 CHRDATE-STRING    PIC X(10).
  01  PICSTR.
      05 PICSTR-LENGTH     PIC S9(4) COMP.
      05 PICSTR-STRING     PIC X(80).

  77  LILIAN PIC           S9(9) COMP.
  77  FORMATTED-DATE      PIC X(80).

  PROCEDURE DIVISION.
  *****
  *   USE DATE/TIME CALLABLE SERVICES TO PRINT OUT          *
  *   TODAY'S DATE FROM COBOL ACCEPT STATEMENT.             *
  *****
  ACCEPT CHRDATE-STRING FROM DATE.

  MOVE "YYMMDD" TO PICSTR-STRING.
  MOVE 6 TO PICSTR-LENGTH.
  CALL "CEEDAYS" USING CHRDATE , PICSTR , LILIAN , OMITTED.

  MOVE " WWWWWWWWZ, MMMMMMMMZ DD, YYYY " TO PICSTR-STRING.
  MOVE 50 TO PICSTR-LENGTH.
  CALL "CEEDATE" USING LILIAN , PICSTR , FORMATTED-DATE ,
    OMITTED.

  DISPLAY "*****".
  DISPLAY FORMATTED-DATE.
  DISPLAY "*****".

  STOP RUN.
```


フィードバック・トークン

フィードバック・トークンには、フィードバック情報が条件トークンの形式で含まれています。呼び出し可能サービスによって設定される条件トークンは呼び出しルーチンに戻され、サービスが正常に完了したかどうかを示します。

COBOL for Windows では、言語環境プログラムと同じフィードバック・トークンを使用します。これは次のように定義されます。

```
01 FC.
  02 Condition-Token-Value.
    COPY CEEIGZCT.
      03 Case-1-Condition-ID.
        04 Severity      PIC S9(4) COMP.
        04 Msg-No       PIC S9(4) COMP.
      03 Case-2-Condition-ID
        REDEFINES Case-1-Condition-ID.
        04 Class-Code   PIC S9(4) COMP.
        04 Cause-Code  PIC S9(4) COMP.
      03 Case-Sev-Ctl    PIC X.
      03 Facility-ID     PIC XXX.
  02 I-S-Info           PIC S9(9) COMP.
```

各フィールドの内容とホスト上の IBM 言語環境プログラムとの違いは、以下のとおりです。

Severity

重大度数を表します。次の値を持ちます。

- 0 情報のみ (あるいは、トークン全体がゼロの場合は情報なし)。
- 1 警告: サービスは、ほぼ正常に完了しました。
- 2 エラーの検出: 修正が試みられましたが、サービスはおそらく正常には完了しませんでした。
- 3 重大エラー: サービスは完了しませんでした。
- 4 クリティカル・エラー: サービスは完了しませんでした。

Msg-No 関連するメッセージ番号です。

Case-Sev-Ctl

このフィールドには、常に値 1 が入ります。

Facility-ID

このフィールドには、常に文字 CEE が入ります。

I-S-Info

このフィールドには、常に値 0 が入ります。

付属のサンプル・コピーブックでは、条件トークンが定義されています。プログラムでネイティブのデータ形式を使用している場合は、ファイル CEEIGZCT.CPY に使用する条件トークンの定義が含まれています。ファイル CEEIGZCT.EBC には、ホストのデータ形式を持つコピーブックが含まれています。このファイルを使用するには、この名前を CEEIGZCT.CPY に変更します。これらのファイルは Samples¥cee ディレクトリーに入っています。

これらのファイル内の条件トークンは、言語環境プログラムに備わっている条件トークンと同じです。ただし、ネイティブのデータ形式の場合は、文字表現が EBCDIC ではなく ASCII になり、2 進数フィールド内のバイトが反転されます。

各呼び出し可能サービスの記述には、シンボリック・フィードバック・コードのリストが含まれます。これらのコードは、サービスの呼び出し時に指定されたフィードバック・コード出力フィールドに戻される場合があります。このほかに、任意の呼び出し可能サービスに対してシンボリック・フィードバック・コード CEE0PD が戻される場合があります。詳細については、メッセージ IWZ0813S を参照してください。

日時の呼び出し可能サービスはすべて、グレゴリオ暦に基づいています。グレゴリオ暦に関連する日付変数には、アーキテクチャー上の制限があります。これらの制限を次に示します。

リリアン日付の開始

リリアン日付範囲の 1 日目は、グレゴリオ暦の 1582 年 10 月 15 日 (金曜日) と同じです。この日付よりも前のリリアン日付は定義されていません。したがって、次のようになります。

- 0 日目 = 1582 年 10 月 14 日 00:00:00
- 1 日目 = 1582 年 10 月 15 日 00:00:00

日付の入力として有効となるのは、1582 年 10 月 15 日の 00:00:00 以降です。

リリアン日付の終了

リリアン日付の終了日は、9999 年 12 月 31 日に設定されます。この日付よりも後のリリアン日付は、9999 年が 4 桁で可能な最大の年であるため定義されていません。

関連参照

783 ページの『付録 I. ランタイム・メッセージ』

ピクチャー文字項およびストリング

いくつかの日時の呼び出し可能サービスには、ピクチャー文字項 (入力データの形式または出力データの必要な形式を示すテンプレート) を使用します。

表 77. ピクチャー文字項およびストリング

ピクチャー項	説明	有効な値	注
Y YY YYY ZYY YYYY	1 桁の年号 2 桁の年号 3 桁の年号 特定元号での 3 桁の年号 4 桁の年号	0 から 9 00 から 99 000 から 999 1 から 999 1582 から 9999	Y は出力に対してのみ有効です。 YY は CEESCEN によって設定された範囲を前提とします。 YYY/ZYY は、<JJJJ>、<CCCC>、および <CCCCCCCC> とともに使用されます。
<JJJJ>	UTF-16 の 16 進数エンコード方式を使用した漢字の日本元号	平成 (NX'5E736210') 昭和 (NX'662D548C') 大正 (NX'59276B63') 明治 (NX'660E6CBB')	YY フィールドに影響します。<JJJJ> が指定されている場合、YY は特定の日本元号の年号を意味します。例えば、1988 年は昭和 63 年に相当します。

表 77. ピクチャー文字項およびストリング (続き)

ピクチャー項	説明	有効な値	注
MM ZM	2 桁の月数 1 または 2 桁の月数	01 から 12 1 から 12	出力の場合は、先行ゼロが抑制されます。入力の場合は、ZM も MM と同じように扱われます。
RRRR RRRZ	ローマ数字の月数	Ibbb-XIIb (左寄せ)	入力の場合は、ソース・ストリングが大文字変換されます。出力の場合は、大文字のみで行われます。 I=Jan、II=Feb、...、XII=Dec
MMM Mmm MMMM...M Mmmm...m MMMMMMMMZ Mmmmmmmz	3 文字の月名、大文字 3 文字の月名、大/小文字混合 3 から 20 文字の月名、大文字 3 から 20 文字の月名、大/小文字混合 末尾ブランクは抑制されます。 末尾ブランクは抑制されます。	JAN から DEC Jan から Dec JANUARYbb から DECEMBERb Januarybb から Decemberb JANUARY から DECEMBER January から December	入力の場合は、ソース・ストリングが必ず大文字変換されます。出力の場合は、M が大文字、m が小文字を生成します。出力には、ブランク (b) が埋め込まれるか (Z が指定されていない場合)、M の数 (最大 20) まで切り詰められます。
DD ZD DDD	2 桁の日付 1 または 2 桁の日付 年間通算日 (ユリウス日付)	01 から 31 1 から 31 001 から 366	出力の場合は、先行ゼロが常に抑制されます。入力の場合は、ZD も DD と同じように扱われます。
HH ZH	2 桁の時間数 1 または 2 桁の時間数	00 から 23 0 から 23	出力の場合は、先行ゼロが抑制されます。入力の場合は、ZH も HH と同じように扱われます。AP が指定されている場合の有効値は 01 から 12 です。
MI	分数	00 から 59	
SS	2 番目	00 から 59	
9 99 999	10 分の 1 の秒数 100 分の 1 の秒数 1000 分の 1 の秒数	0 から 9 00 から 99 000 から 999	丸めなし
AP ap A.P. a.p.	AM/PM 標識	AM または PM am または pm A.M. または P.M. a.m. または p.m.	AP は HH/ZH フィールドに影響します。入力の場合は、ソース・ストリングが必ず大文字変換されます。出力の場合は、AP が大文字、ap が小文字を生成します。
W WWW Www WWW...W Www...w WWWWWWWZ WWWWWWWZ	1 文字の曜日名 3 文字の曜日名、大文字 3 文字の曜日名、大/小文字混合 3 から 20 文字の曜日名、大文字 3 から 20 文字の曜日名、大/小文字混合 末尾ブランクは抑制されます。 末尾ブランクは抑制されます。	S、M、T、W、T、F、S SUN から SAT Sun から Sat SUNDAYbbb から SATURDAYb Sundaybbb から Saturdayb SUNDAY から SATURDAY Sunday から Saturday	入力の場合は、W が無視されます。出力の場合は、W が大文字、w が小文字を生成します。出力には、ブランクが埋め込まれるか (Z が指定されていない場合)、W の数 (最大 20) まで切り詰められます。

表 77. ピクチャー文字項およびストリング (続き)

ピクチャー項	説明	有効な値	注
それ以外	区切り文字	X'01'から X'FF' (X'00' は、日時の呼び出し可能サービスが「内部」使用するために予約済み)	入力の場合は、月、日、年、時間、分、秒、秒の小数部の間の区切り文字として扱われます。出力の場合は、現状のままターゲット・ストリングにコピーされます。
注: ブランク文字は、シンボル <i>b</i> で示されます。			

次の表に、<JJJJ> が指定されている場合に日時サービスによって使用される日本元号の定義を示します。

表 78. 日本元号

各日本元号の 1 日目	年号名	UTF-16 の 16 進数 エンコード方式を使用 した漢字の元号名	有効な年数値
1868-09-08	明治	NX'660E6CBB'	01 から 45
1912-07-30	大正	NX'59276B63'	01 から 15
1926-12-25	昭和	NX'662D548C'	01 から 64
1989-01-08	平成	NX'5E736210'	01 から 999 (01 = 1989)

『例: 日時のピクチャー・ストリング』

例: 日時のピクチャー・ストリング

日時サービスによって認識されるピクチャー・ストリングの例を次に示します。

表 79. 日時のピクチャー・ストリングの例

ピクチャー・ストリング	例	コメント
YYMMDD	880516	
YYYYMMDD	19880516	
YYYY-MM-DD	1988-05-16	1988-5-16 も有効な入力になります。
<JJJJ> YY.MM.DD	昭和 63.05.16	昭和 は日本元号名です。昭和 63 年は 1988 年に相当します。
MMDDYY	050688	
MM/DD/YY	05/06/88	
ZM/ZD/YY	5/6/88	
MM/DD/YYYY	05/06/1988	
MM/DD/Y	05/06/8	1 桁の年号形式 (Y) は、出力に対してのみ有効です。

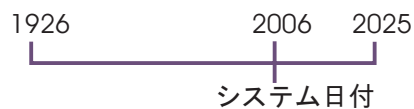
表 79. 日時のピクチャー・ストリングの例 (続き)

ピクチャー・ストリング	例	コメント
DD.MM.YY DD-RRRR-YY DD MMM YY DD Mmmmmmmmm YY ZD Mmmmmmmmmz YY Mmmmmmmmmz ZD, YYYY ZDMMMMMMmzYY	09.06.88 09-VI -88 09 JUN 88 09 June 88 9 June 88 June 9, 1988 9JUNE88	Z は、ゼロおよびブランクを抑制します。
YY.DDD YYDDD YYYY/DDD	88.137 88137 1988/137	ユリウス日付
YYMMDDHHMISS YYYYMMDDHHMISS YYYY-MM-DD HH:MI:SS.999 WWW, ZM/ZD/YY HH:MI AP Wwwwwwwwwz, DD Mmm YYYY, ZH:MI AP	880516204229 19880516204229 1988-05-16 20:42:29.046 MON, 5/16/88 08:42 PM Monday, 16 May 1988, 8:42 PM	タイム・スタンプは、CEESECS および CEEDATM に対してのみ有効です。 CEEDATE とともに使用した場合は、時刻の 位置にゼロが埋め込まれます。CEEDAYS とともに使用した場合は、HH、MI、SS、999 の各フィールドが無視されます。
注: 小文字を使用できるのは、英字のピクチャー項のみです。		

世紀ウィンドウ

2000 年以降の 2 桁年号を処理するために、日時の呼び出し可能サービスではスライド方式を使用しています。この方式では、2 桁年号はすべて、現在のシステム日付よりも 80 年前から始まる 100 年間隔 (世紀ウィンドウ) に属するものと想定されます。

例えば 2006 年では、1926 から 2025 の 100 年間が、日時の呼び出し可能サービスに使用されるデフォルトの世紀ウィンドウとなります。2006 年の場合、26 から 99 が 1926 年から 1999 年、00 から 25 が 2000 年から 2025 年と認識されます。



2080 年までは、2 桁年号はすべて 20nn 年と認識されます。2081 年では、00 は 2100 年と認識されます。

アプリケーションによっては、別の 100 年間隔を設定する必要があります。例えば、銀行で取り扱っている 30 年債の期限が 01/31/26 に設定されているとします。2 桁の年 26 は、上に示した世紀ウィンドウが有効である場合は、1926 として解釈されます。CEESEN 呼び出し可能サービスを使用すると、世紀ウィンドウを変更することができます。もう一方のサービス CEEQCEN は、現行の世紀ウィンドウを照会します。

CEEQCEN および CEESCEN を使用すると、例えばサブルーチンに、親ルーチンとは異なる日付処理間隔を使用させることができます。サブルーチンは、戻る前にこの間隔を前の値にリセットする必要があります。

『例: 世紀ウィンドウの照会および変更』

例: 世紀ウィンドウの照会および変更

CEEQCEN および CEESCEN サービスを使用して、世紀ウィンドウの開始点を照会、設定、および復元する方法の例を次に示します。

この例では、CEEQCEN を呼び出して整数 (OLDCEN) を取得し、現行の世紀ウィンドウが何年前に始まったかを示します。次に、新しい値 (TEMPCEN) で CEESCEN を呼び出して、現行の世紀ウィンドウの開始点を新しい値に一時的に変更します。この世紀ウィンドウは 30 に設定されているため、CEESCEN 呼び出しに続く 2 桁年号は、現行のシステム日付より 30 年前から始まる 100 年間隔に属するものと想定されます。

最後に、一時的な世紀ウィンドウを使用して日付 (例示なし) を処理した後、再度 CEESCEN を呼び出して、世紀ウィンドウの開始点を元の値にリセットします。

```
WORKING-STORAGE SECTION.  
77 OLDCEN PIC S9(9) COMP.  
77 TEMPCEN PIC S9(9) COMP.  
77 QCENFC PIC X(12).  
.  
77 SCENFC1 PIC X(12).  
77 SCENFC2 PIC X(12).  
.  
PROCEDURE DIVISION.  
.  
** Call CEEQCEN to retrieve and save current century window  
CALL "CEEQCEN" USING OLDCEN, QCENFC.  
** Call CEESCEN to temporarily change century window to 30  
MOVE 30 TO TEMPCEN.  
CALL "CEESCEN" USING TEMPCEN, SCENFC1.  
** Perform date processing with two-digit years  
.  
** Call CEESCEN again to reset century window  
CALL "CEESCEN" USING OLDCEN, SCENFC2.  
.  
GOBACK.
```

関連参照

653 ページの『付録 E. 日時呼び出し可能サービス』

第 9 部 付録

付録 A. ホスト COBOL との違いの要約

IBM COBOL for Windows では、一部の項目を Enterprise COBOL for z/OS とは異なる方法でインプリメントしています。詳細については、以下の関連参照を参照してください。

関連タスク

495 ページの『第 26 章 プラットフォーム間でのアプリケーションの移植』

関連参照

『コンパイラー・オプション』
624 ページの『データ表現』
625 ページの『環境変数』
626 ページの『ファイル指定』
626 ページの『言語間通信 (ILC)』
627 ページの『入出力』
627 ページの『ランタイム・オプション』
627 ページの『ソース・コード行のサイズ』
627 ページの『言語エレメント』

コンパイラー・オプション

COBOL for Windows では、コンパイラー・オプション ADV、AWO、BUFSIZE、CODEPAGE、DATA、DECK、DBCS、FASTSORT、FLAGMIG、INTDATE、LANGUAGE、NAME、OUTDD、および RENT (コンパイラーは常に再入可能コードを生成) はコメントとして扱われます。これらのオプションには、I レベルのメッセージ付きでフラグが立てられます。

COBOL for Windows では、NOADV コンパイラー・オプションはコメントとして扱われます。このオプションには、W レベルのメッセージ付きでフラグが立てられます。このオプションを指定すると、WRITE ステートメントを ADVANCING 句とともに使用したときに、アプリケーションに予期しない結果が生じる可能性があります。

OO COBOL アプリケーションの場合は、cob2 コマンドの -host オプション、BINARY、CHAR、または FLOAT コンパイラー・オプションの任意の設定、あるいはその両方を指定することができます。ただし、メソッドの引数またはパラメーター、および JNI サービスに対する引数として使用される 2 進数データ項目や浮動小数点項目は、ネイティブ形式で指定する (例えば、データ記述記入項目に NATIVE 段落を使用する) 必要があります。

関連参照

255 ページの『CHAR』

データ表現

データの表示は、IBM ホスト COBOL と IBM COBOL for Windows の間で異なることがあります。

2 進数データ

COBOL for Windows は、BINARY コンパイラー・オプションの設定に基づいて 2 進数データ型を処理します。

zSeries 形式の 2 進数データ項目を、INVOKE ステートメントの引数またはメソッドのパラメーターとして指定しないでください。これらの引数やパラメーターは、Java データ型と相互運用可能にするために、ネイティブ形式で指定する必要があります。

ゾーン 10 進数データ

ゾーン 10 進数データの符号表現が ASCII と EBCDIC のどちらに基づくかは、CHAR コンパイラー・オプションの設定 (NATIVE または EBCDIC) と、USAGE 文節が NATIVE 句で指定されているかどうかによって決まります。COBOL for Windows では、ゾーン 10 進数データの符号表現の処理は、コンパイラー・オプション NUMPROC(NOPFD) が有効な場合にホスト上で行われる処理と整合性が取れています。

パック 10 進数データ

符号なしパック 10 進数の符号表現は、COBOL for Windows とホスト COBOL とで異なることに注意してください。COBOL for Windows では、符号なしパック 10 進数に対して常に符号ニブル x'C' が使用されます。ホスト COBOL では、符号なしパック 10 進数に対して符号ニブル x'F' が使用されます。Windows と z/OS の間でパック 10 進数を含むデータ・ファイルを共用する場合は、符号なしパック 10 進数ではなく、符号付きパック 10 進数を使用することをお勧めします。

浮動小数点データの表示

FLOAT(S390) コンパイラー・オプションを使用すると、浮動小数点データ項目の表示がネイティブ (IEEE) 形式ではなく zSeries データ表現 (16 進数) であることを指定できます。

zSeries 形式の浮動小数点項目の表示を、INVOKE ステートメントの引数またはメソッドのパラメーターとして指定しないでください。これらの引数やパラメーターは、Java データ型と相互運用可能にするために、ネイティブ形式で指定する必要があります。

国別データ

COBOL for Windows では、国別データに UTF-16 リトル・エンディアン形式を使用します。ホスト COBOL では、国別データに UTF-16 ビッグ・エンディアン形式を使用します。

EBCDIC および ASCII データ

英数字データ項目に EBCDIC 照合シーケンスを指定する際には、次の言語エレメントを使用することができます。

- ALPHABET 文節
- PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節
- SORT または MERGE ステートメントの COLLATING SEQUENCE 句

CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを指定すると、DISPLAY データ項目が zSeries データ表現 (EBCDIC) であることを指定できます。

データ変換用のコード・ページの決定

英字、英数字、DBCS、および国別データ項目の場合は、実行時に有効なロケールから、ネイティブ文字の暗黙変換に使用されるソース・コード・ページが決定されます。

英数字、DBCS、および国別リテラルの場合は、コンパイル時に有効なロケールから、文字の暗黙変換に使用されるソース・コード・ページが決定されます。

DBCS 文字ストリング

COBOL for Windows では、ASCII DBCS 文字ストリングの区切りにシフトイン/シフトアウト文字は使用されません。ただし例外として、次に説明するようにダミーのシフトイン/シフトアウト文字を使用することは可能です。

SOSI コンパイラー・オプションを使用すると、Windows ベースのワークステーションのシフトアウト (X'1E') およびシフトイン (X'1F') 制御文字が、ソース・プログラム内の DBCS 文字ストリング (ユーザー定義語、DBCS リテラル、英数字リテラル、国別リテラル、コメントを含む) を区切るように指定することができます。ホストのシフトアウト (X'0E') およびシフトイン (X'0F') 制御文字は一般に、COBOL for Windows ソース・コードのダウンロード時に、使用するダウンロード方法に応じてワークステーションのシフトアウトおよびシフトイン制御文字に変換されます。

英数字リテラル内に制御文字 X'00' から X'1F' を使用すると、予測不能な結果が生じる可能性があります。

関連タスク

- 197 ページの『第 11 章 ロケールの設定』
- 497 ページの『データ表現による違いの修正』

関連参照

- 255 ページの『CHAR』
- 287 ページの『SOSI』

環境変数

COBOL for Windows は、以下にリストしたいくつかの環境変数を認識します。

- *assignment-name*
- COBMSGS
- COBPATH
- COBRTOPT
- DB2DBDFT

- EBCDIC_CODEPAGE
- LANG
- LC_ALL
- LC_COLLATE
- LC_CTYPE
- LC_MESSAGES
- LC_TIME
- LIB
- LOCPATH
- NLSPATH
- TMP
- TZ

ファイル指定

COBOL for Windows は、すべてのファイルを単一ボリューム・ファイルとして扱います。それ以外のファイル指定はすべてコメントとして扱われます。この変更は、REEL、UNIT、MULTIPLE FILE TAPE 文節、および CLOSE. . .UNIT/REEL に影響します。

言語間通信 (ILC)

ILC は、C/C++ および PL/I プログラムで使用可能です。

次に、言語環境プログラムを持つホスト上で ILC を使用した場合と比較した、Windows ワークステーション上での ILC の動作の違いを示します。

- COBOL の STOP RUN、C の exit()、または PL/I の STOP を使用した場合は、終了動作に違いがあります。
- 調整された条件処理は、ワークステーション上にはありません。COBOL プログラム間で C の longjmp() を使用することは避けてください。
- ホスト上では、プロセス内で呼び出され、なおかつ言語環境プログラムに対応している最初のプログラムが、「メイン」プログラムと見なされます。Windows 上では、プロセス内で呼び出される最初のプログラムが、COBOL によるメインプログラムと見なされます。この違いは、実行単位 (メインプログラムで始まる実行単位) の定義に依存する言語セマンティクスに影響します。例えば、STOP RUN を使用すると、制御権はメインプログラムの呼び出し側に戻りますが、混合言語環境では、前述とは異なる結果になる可能性があります。

関連概念

563 ページの『第 31 章 COBOL ランタイム環境の事前初期設定』

入出力

COBOL for Windows では、STL ファイル・システムおよび Btrieve ファイル・システムを使用することで、順次ファイル、相対ファイル、および索引付きファイルの入出力をサポートしています。行順次の入出力は、プラットフォームのネイティブのバイト・ストリーム・ファイル・サポートを使用することでサポートしています。

ファイル・システムから戻される *data-name* のファイル状況に応じて、サイズや値は異なります。

COBOL for Windows では、磁気テープ・ドライブやディスクット・ドライブを直接はサポートしていません。

ランタイム・オプション

COBOL for Windows では、次のホスト・ランタイム・オプション AIXBLD、ALL31、CBLPSHPOP、CBLQDA、COUNTRY、HEAP、MSGFILE、NATLANG、SIMVRD、STACK は認識されず、無効として扱われます。

ホストでは、STORAGE ランタイム・オプションを使用して、COBOL の WORKING-STORAGE を初期化することができます。COBOL for Windows の場合は、WSCLEAR コンパイラー・オプションを使用します。

関連参照

297 ページの『WSCLEAR』

ソース・コード行のサイズ

COBOL ソース行に含めることのできる文字数は 72 文字未満です。各行は、72 桁目か、または改行制御文字が検出された位置で終了します。

言語エレメント

次の表に、ホスト COBOL コンパイラーと COBOL for Windows コンパイラー間で異なる言語エレメントを示します。

ホスト COBOL の文節および句の多くは構文チェックされますが、これらは COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。これらの文節や句は、ダウンロードした既存のアプリケーションにわずかな影響を与えます。COBOL for Windows では、言語エレメントが機能的な影響を持たない場合でも、ホストの COBOL 言語構文を認識し、処理します。

表 80. Enterprise COBOL for z/OS および COBOL for Windows 間の言語の違い

言語エレメント	インプリメンテーション
ACCEPT ステートメント	COBOL for Windows では、 <i>environment-name</i> および関連する環境変数値 (設定されている場合) によって、ファイル ID が決まります。
APPLY WRITE-ONLY 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。

表 80. Enterprise COBOL for z/OS および COBOL for Windows 間の言語の違い (続き)

言語エレメント	インプリメンテーション
ASSIGN 文節	<i>assignment-name</i> の別構文。ASSIGN. . . USING <i>data-name</i> は、ホスト COBOL ではサポートされません。
BLOCK CONTAINS 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
CALL ステートメント	COBOL for Windows では、ファイル名を CALL 引数として使用できません。
CLOSE ステートメント	FOR REMOVAL 句、WITH NO REWIND 句、および UNIT/REEL 句は構文チェックされますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
CODE-SET 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
DATA RECORDS 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
DISPLAY ステートメント	COBOL for Windows では、 <i>environment-name</i> および関連する環境変数値 (設定されている場合) によって、ファイル ID が決まります。
ファイル状況 <i>data-name-1</i>	ファイル状況 9x の一部の値と意味は、ホスト COBOL と COBOL for Windows とで異なります。
ファイル状況 <i>data-name-8</i>	プラットフォームおよびファイル・システムによって、形式と値が異なります。
LABEL RECORD 文節	LABEL RECORD IS <i>data-name</i> 、USE. . . AFTER. . . LABEL PROCEDURE、および GO TO MORE-LABELS は構文チェックされますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。これらの言語エレメントはコンパイラによって処理されますが、実行時にユーザー・ラベル宣言は呼び出されません。
MULTIPLE FILE TAPE	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。Windows ベースのワークステーションでは、すべてのファイルが単一ボリューム・ファイルとして扱われます。
OPEN ステートメント	REVERSED 句および WITH NO REWIND 句は構文チェックされますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
PASSWORD 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
POINTER、PROCEDURE-POINTER、および FUNCTION-POINTER データ項目	ホスト COBOL では、POINTER および FUNCTION-POINTER データ項目は 4 バイトで定義され、PROCEDURE-POINTER データ項目は 8 バイトで定義されます。COBOL for Windows では、これらのデータ項目のサイズは 4 バイトになります。
READ. . . PREVIOUS	COBOL for Windows でのみ、DYNAMIC アクセス・モードを使用して、相対ファイルまたは索引付きファイルの前のレコードを読み取ることができます。
RECORD CONTAINS 文節	RECORD CONTAINS <i>n</i> CHARACTERS 文節は受け入れられますが、例外が 1 つあります。RECORD CONTAINS 0 CHARACTERS は構文チェックされますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
RECORDING MODE 文節	構文チェックは行われますが、相対ファイル、索引付きファイル、行順次ファイルの場合、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。RECORDING MODE U は構文検査されますが、順次ファイルに対するプログラムの実行には影響しなくなります。
RERUN 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
RESERVE 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。

表 80. Enterprise COBOL for z/OS および COBOL for Windows 間の言語の違い (続き)

言語エレメント	インプリメンテーション
SAME AREA 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
SAME SORT 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
SORT-CONTROL 特殊レジスター	この特殊レジスターの内容は、ホスト COBOL とワークステーション COBOL とでは異なります。
SORT-CORE-SIZE 特殊レジスター	この特殊レジスターの内容は、ホスト COBOL とワークステーション COBOL とでは異なります。
SORT-FILE-SIZE 特殊レジスター	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。この特殊レジスターの値は使用されません。
SORT-MESSAGE 特殊レジスター	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
SORT-MODE-SIZE 特殊レジスター	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。この特殊レジスターの値は使用されません。
SORT MERGE AREA 文節	構文チェックは行われますが、COBOL for Windows でのプログラム実行には影響しません。
START. . .	COBOL for Windows では、IS LESS THAN、IS <、IS NOT GREATER THAN、IS NOT >、IS LESS THAN OR EQUAL TO、IS <= の各関係演算子を使用できます。
WRITE ステートメント	COBOL for Windows では、環境名 C01 から C12 または S01 から S05 を使用して WRITE. . .ADVANCING を指定した場合は、1 行拡張されます。
プラットフォーム環境に既知の名前	<i>program-name</i> 、 <i>text-name</i> 、 <i>library-name</i> 、 <i>assignment-name</i> 、SORT-CONTROL 特殊レジスター内のファイル名、 <i>basis-name</i> 、DISPLAY または ACCEPT ターゲット識別、およびシステム依存名は、それぞれ異なる方法で識別されます。

付録 B. zSeries ホスト・データ形式についての考慮事項

zSeries ホスト・データ内部表現の使用に適用される考慮事項、制約事項、および制限を次に示します。 BINARY、CHAR、および FLOAT コンパイラー・オプションは、zSeries ホスト・データ形式またはネイティブのデータ形式が使用されているかどうかを判別します (COMP-5 項目、または USAGE 文節内の NATIVE 句で定義された項目以外)。(この情報の用語「ホスト・データ形式」と「ネイティブのデータ形式」は、データ項目の内部表現を指します。)

CICS アクセス

CICS を使用すると、さまざまな場所や細分度で、さまざまなデータ変換を選択することができます。例えば、クライアント CICS の変換プログラムのオプションを、サーバー上でさまざまなリソース (ファイル、EIBLK、COMMAREA、一時データ・キューなど) に対して指定することができます。このような選択によって、ホスト・データ表現を使用するか、ネイティブ・データ表現を使用するかが決まります。最適な選択方法に関する固有情報については、該当する CICS のマニュアルを参照してください。

分離または統合された CICS 変換プログラムによって変換され、TXSeries 上で動作する COBOL プログラムでサポートされる zSeries ホスト・データ形式はありません。

日時呼び出し可能サービス

日時の呼び出し可能サービスでは、zSeries ホスト・データ形式の内部表現で使用することができます。呼び出し可能サービスに渡されるパラメーターはすべて、zSeries ホスト・データ形式にする必要があります。日時サービスに対する同一の呼び出しで、ネイティブ・データの内部表現とホスト・データの内部表現を混用することはできません。

浮動小数点のオーバーフロー例外

Windows ワークステーション、および zSeries ホスト上では、浮動小数点データ表現の制限に違いがあるため、FLOAT(HEX) が有効な場合は、2 つの形式間での変換中に、浮動小数点のオーバーフロー例外が発生する可能性があります。例えば、ホスト上で正常に実行できるプログラムをワークステーション上で実行すると、次のようなメッセージを受け取る可能性があります。

IWZ053S An overflow occurred on conversion to floating point

この問題を避けるため、どちらのプラットフォームでも、データ型ごとにサポートされる最大浮動小数点値に注意する必要があります。次の表に、それぞれの制限を示します。

表 81. 最大浮動小数点値

データ型	最大ワークステーション値	最大 zSeries ホスト値
COMP-1	$^{*}(2^{**}128 - 2^{**}4)$ (約 $^{*}3.4028E+38$)	$^{*}(16^{**}63 - 16^{**}57)$ (約 $^{*}7.2370E+75$)
COMP-2	$^{*}(2^{**}1024 - 2^{**}971)$ (約 $^{*}1.7977E+308$)	$^{*}(16^{**}63 - 16^{**}49)$ (約 $^{*}7.2370E+75$)
* 値は正数でも負数でも構いません。		

上記のとおり、ホストの COMP-1 値はワークステーションよりも大きくすることができ、ワークステーションの COMP-2 値はホストよりも大きくすることができます。

DB2

zSeries ホスト・データ形式のコンパイラー・オプションは、DB2 プログラムで使用することができます。

Java とのインターオペラビリティのためのオブジェクト指向構文

2 進数データ項目および浮動小数点データ項目の zSeries 形式は、INVOKE ステートメントの引数または戻り項目として指定する必要はありません。

MQ アプリケーション

zSeries ホスト・データ形式のコンパイラー・オプションは、MQ プログラムで使用しないでください。

ファイル・データ

- EBCDIC データおよび 16 進数/2 進数データは、任意の順次ファイル、相対ファイル、索引付きファイルで読み取りおよび書き込みを行うことができます。自動変換は行われません。
- ホスト・データを含むファイルにアクセスする場合は、コンパイラー・オプション COLLSEQ(EBCDIC)、CHAR(EBCDIC)、BINARY(S390)、および FLOAT(S390) を使用して、これらのファイルから得られる EBCDIC 文字データ、ビッグ・エンディアンの 2 進数データ、および 16 進数浮動小数点データを処理します。

SORT

zSeries ホスト・データ形式 DBCS (USAGE DISPLAY-1 を除く)は、すべてソート・キーとして使用できます。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

関連タスク

485 ページの『COBOL および Java での相互運用可能なデータ型のコーディング』

関連参照

249 ページの『第 14 章 コンパイラー・オプション』

付録 C. 中間結果および算術精度

コンパイラーは、算術ステートメントを、演算子優先順位に従って実行される一連の操作として処理し、それらの演算の結果を入れる中間フィールドをセットアップします。コンパイラーはいくつかのアルゴリズムを使用して、確保する整数および小数部の桁数を判別します。

中間結果は、次の場合に得ることができます。

- 動詞の直後に複数のオペランドが入った ADD または SUBTRACT ステートメント。
- 一連の算術演算または複数の結果フィールドを指定する COMPUTE ステートメント。
- 条件ステートメントまたは参照変更指定に含まれている算術式。
- GIVING オプションおよび複数の結果フィールドを使用する ADD、SUBTRACT、MULTIPLY、または DIVIDE ステートメント。
- 組み込み関数をオペランドとして使用するステートメント。

637 ページの『例: 中間結果の計算』

中間結果の精度は、デフォルト・オプション ARITH(COMPAT) (互換モード と呼ばれる) を使用してコンパイルするか、または ARITH(EXTEND) (拡張モード と呼ばれる) を使用してコンパイルするかによって異なります。

互換モードでの算術演算の計算は、IBM VisualAge^(R) COBOL を使用した場合と変わりません。

- 固定小数点の中間結果の場合は、最大 30 桁が使用されます。
- 浮動小数点組み込み関数は、長精度 (64 ビットの) 浮動小数点結果を戻します。
- 浮動小数点オペランド、分数指数、または浮動小数点組み込み関数を含む式は、浮動小数点でないすべてのオペランドが長精度浮動小数点に変換され、式の計算に浮動小数点演算が使用されるかのように評価されます。
- 浮動小数点リテラルおよび外部浮動小数点データ項目は、長精度浮動小数点に変換されてから処理されます。

拡張モードでの算術演算の計算には、次のような特性があります。

- 固定小数点の中間結果の場合は、最大 31 桁が使用されます。
- 浮動小数点組み込み関数は、拡張精度浮動小数点結果を戻します。(COBOL for Windows の場合は 80 ビットの拡張精度 IEEE 浮動小数点を使用するため、拡張精度浮動小数点結果の正確性は、Enterprise COBOL for z/OS で使用される 128 ビットの拡張精度浮動小数点と比較すると大幅に低くなります。)
- 浮動小数点オペランド、分数指数、または浮動小数点組み込み関数を含む式は、浮動小数点でないすべてのオペランドが拡張精度浮動小数点に変換され、式の計算に浮動小数点演算が使用されるかのように評価されます。
- 浮動小数点リテラルおよび外部浮動小数点データ項目は、拡張精度浮動小数点に変換されてから処理されます。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

60 ページの『固定小数点演算と浮動小数点演算の対比』

関連参照

637 ページの『固定小数点データと中間結果』

642 ページの『浮動小数点データと中間結果』

644 ページの『非算術ステートメントの算術式』

252 ページの『ARITH』

中間結果用の用語

中間結果に関するこうした情報を理解するためには、以下の用語を理解しておく必要があります。

i 中間結果用に保持された整数の桁数。(ROUNDED 句を使用している場合は、正確さを得るために必要なら、整数がもう 1 桁余分に保持します。)

d 中間結果用に保持された小数部の桁数。(ROUNDED 句を使用している場合は、正確さを得るために必要なら、小数部がもう 1 桁余分に保持します。)

dmax 特定のステートメントで、次の項目のうちの最も大きいもの。

- 最終結果フィールド (1 つまたは複数) に必要な小数部の桁数。
- 除数または指数を除き、オペランドに対して定義された小数部の最大桁数。
- 関数オペランドの *outer-dmax*。

inner-dmax

関数に関連して、次の項目のうちの最も大きいもの。

- その基本引数に対して定義された小数部の桁数。
- いずれかの算術式の引数の *dmax*。
- そのいずれかの組み込み関数の *outer-dmax*。

outer-dmax

関数結果がそれ自体の計算の外で演算に寄与する小数部の桁数 (例えば、その関数が算術式中のオペランドであるか、または別の関数への引数である場合)。

op1 生成される算術ステートメントの第 1 オペランド (除算では除数)。

op2 生成される算術ステートメントの第 2 オペランド (除算では被除数)。

i1、*i2* それぞれ *op1* と *op2* 内の整数の数値。

d1、*d2* それぞれ、*op1* および *op2* 内の小数部の桁数。

ir 生成された算術ステートメントまたは演算が実行されたときの中間結果。
(中間結果は、レジスターまたは保管場所のいずれかで生成されます。)

ir1、*ir2*

連続する中間結果。(連続する中間結果は同じ保管場所にすることができます。)

関連参照

ROUNDED 句 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

例: 中間結果の計算

次の例は、コンパイラーが算術ステートメントを一連の操作として実行し、必要に応じて中間結果を保管する方法を示しています。

```
COMPUTE Y = A + B * C - D / E + F ** G
```

結果は、以下の順序で計算されます。

1. F を G でべき乗計算して、*ir1* を得ます。
2. B に C を掛けて、*ir2* を得ます。
3. D を E で割って、*ir3* を得ます。
4. A を *ir2* に足して、*ir4* を得ます。
5. *ir3* を *ir4* から引いて、*ir5* を得ます。
6. *ir5* を *ir1* に足して、Y を得ます。

関連タスク

56 ページの『算術式の使用』

関連参照

636 ページの『中間結果用の用語』

固定小数点データと中間結果

コンパイラーは、中間結果における整数および小数点以下の桁数を決定します。

加算、減算、乗算、および除算

次の表は、加算、減算、乗算、または除算の結果として理論上可能な精度を示しています。

演算	整数桁	小数桁
+ または -	(<i>i1</i> または <i>i2</i>) + 1、どちらか大きい方	<i>d1</i> または <i>d2</i> 、どちらか大きい方
*	<i>i1</i> + <i>i2</i>	<i>d1</i> + <i>d2</i>
/	<i>i2</i> + <i>d1</i>	(<i>d2</i> - <i>d1</i>) または <i>dmax</i> 、どちらか大きい方

算術ステートメントのオペランドを十分な小数桁で定義して、最終結果の正確度が希望どおりになるようにしなければなりません。

次の表は、互換モード (つまり、デフォルトのコンパイラー・オプション ARITH(COMPAT) が有効である場合) で加算、減算、乗算、または除算を伴う算術演算の固定小数点中間結果においてコンパイラーが保持する桁数を示しています。

<i>i</i> + <i>d</i> の値	<i>d</i> の値	<i>i</i> + <i>dmax</i> の値	<i>ir</i> 用に保持される桁数
<30 または =30	任意の値	任意の値	<i>i</i> 整数桁数および <i>d</i> 小数桁数

$i + d$ の値	d の値	$i + d_{max}$ の値	ir 用に保持される桁数
>30	< d_{max} または = d_{max}	任意の値	30- d 整数桁数および d 小数桁数
		<30 または =30	i 整数桁数および 30- i 小数桁数
	> d_{max}	>30	30- d_{max} 整数桁数および d_{max} 小数桁数

次の表は、拡張モード（つまり、コンパイラ・オプション ARITH(EXTEND) が有効である場合）で加算、減算、乗算、または除算を伴う算術演算の固定小数点中間結果においてコンパイラが保持する桁数を示しています。

$i + d$ の値	d の値	$i + d_{max}$ の値	ir 用に保持される桁数
<31 または =31	任意の値	任意の値	i 整数桁数および d 小数桁数
>31	< d_{max} または = d_{max}	任意の値	31- d 整数桁数および d 小数桁数
		<31 または =31	i 整数桁数および 31- i 小数桁数
	> d_{max}	>31	31- d_{max} 整数桁数および d_{max} 小数桁数

指数

べき乗計算は、式 $op1 ** op2$ で表されます。 $op2$ の特性に基づいて、コンパイラは固定小数点数のべき乗計算を次の 3 つのいずれかの方法で処理します。

- $op2$ が小数部で表されている場合は、浮動小数点命令が使用されます。
- $op2$ が整数リテラルまたは定数である場合、値 d は次のように計算されます。

$$d = d1 * |op2|$$

また、値 i は、 $op1$ の特性に基づいて、次のように計算されます。

- $op1$ がデータ名または変数である場合は、次のように計算されます。

$$i = i1 * |op2|$$

- $op1$ がリテラルまたは定数である場合、 i は、 $op1 ** |op2|$ の値の整数の桁数に等しく設定されます。

互換モード (ARITH(COMPAT) を使用してコンパイルする場合) では、コンパイラは i および d を計算し終わると、次の表に示すアクションを取り、べき乗計算の中間結果 ir を処理します。

$i + d$ の値	その他の条件	取られるアクション
<30	任意	ir において、 i の整数桁数および d の小数桁数が保持される。
=30	$op1$ が奇数の桁数を持つ。	ir において、 i の整数桁数および d の小数桁数が保持される。
	$op1$ が偶数の桁数を持つ。	$op2$ が整数データ名または変数である場合と同じアクション (以下を参照)。例外: リテラル 1 の累乗に計算される 30 桁の整数の場合は、 ir において、 i の整数桁数および d の小数桁数が保持される。

$i + d$ の値	その他の条件	取られるアクション
>30	任意	$op2$ が整数データ名または変数である場合と同じアクション (以下を参照)。

拡張モード (ARITH(EXTEND) を使用してコンパイルする場合) では、 i と d を計算し終わると、コンパイラーは、次の表に示すアクションを取り、べき乗計算の中間結果 ir を処理します。

$i + d$ の値	その他の条件	取られるアクション
<31	任意	ir において、 i の整数桁数および d の小数桁数が保持される。
=31 または >31	任意	$op2$ が整数データ名または変数である場合と同じアクション (以下を参照)。例外: リテラル 1 の累乗に計算される 31 桁の整数の場合は、 ir において、 i の整数桁数および d の小数桁数が保持される。

$op2$ が負である場合は、1 という値が予備計算によって作成された結果で除算されます。使用される i と d の値は、上記に示された固定小数点データの除算規則に従って計算されます。

- $op2$ が整数データ名または変数である場合は、 $dmax$ の小数桁数と、30- $dmax$ (互換モード) または 31- $dmax$ (拡張モード) 整数桁数が使用されます。 $op1$ はそれ自体によって ($lop2l - 1$) 回、乗算されます ($op2$ がゼロ以外の場合)。

$op2$ が 0 であると、結果は 1 になります。0 による除算とべき乗計算の SIZE ERROR 条件が適用されます。

9 桁を超える有効数字を持つ固定小数点の指数部は、常に 9 桁に切り捨てられます。指数がリテラルまたは定数である場合、E レベルのコンパイラー診断メッセージが発行されます。それ以外の場合は、実行時に通知メッセージが発行されます。

『例: 固定小数点の算術での指数』

関連参照

636 ページの『中間結果用の用語』

640 ページの『中間結果での切り捨て』

640 ページの『バイナリー・データと中間結果』

642 ページの『浮動小数点データと中間結果』

641 ページの『固定小数点算術で評価される組み込み関数』

252 ページの『ARITH』

SIZE ERROR 句 (「COBOL for Windows 言語解説書」)

例: 固定小数点の算術での指数

次の例は、コンパイラーが、必要に応じて中間結果を保管しながら、ゼロ以外の整数累乗へのべき乗計算を一連の乗算として実行する方法を示しています。

```
COMPUTE Y = A ** B
```

B が 4 であれば、結果は次のように計算されます。使用される *i* と *d* の値は、固定小数点データおよび中間結果に関する乗算規則に従って計算されます (以下を参照してください)。

1. A に A を掛けて、*ir1* を得ます。
2. *ir1* に A を掛けて、*ir2* を得ます。
3. *ir2* に A を掛けて、*ir3* を得ます。
4. *ir3* を *ir4* に移動します。

ir4 は *dmax* の小数桁数を持っています。B は正であるので、*ir4* は Y に移動されます。しかし B が -4 であった場合は、次のような 5 番目の追加ステップが実行されます。

5. 1 を *ir4* で割って、*ir5* を得ます。

ir5 は *dmax* の小数桁数を持っており、Y に移動されます。

関連参照

636 ページの『中間結果用の用語』

637 ページの『固定小数点データと中間結果』

中間結果での切り捨て

中間結果において桁数が互換モードの 30、または拡張モードの 31 を超えるときは常に、コンパイラーは、30 (互換モード) または 31 (拡張モード) 桁までに切り捨て、警告を表示します。切り捨てが実行時に起こった場合は、メッセージが出され、プログラムは実行を続けます。

固定小数点計算で発生する可能性のある中間結果の切り捨てを回避したい場合には、代わりに浮動小数点オペランド (COMP-1 または COMP-2) を使用してください。

関連概念

45 ページの『数値データの形式』

関連参照

637 ページの『固定小数点データと中間結果』

252 ページの『ARITH』

バイナリー・データと中間結果

2 進数オペランドを含む演算で、18 桁を超える中間結果が必要な場合は、コンパイラーは演算を実行する前に、オペランドを内部 10 進数に変換します。結果フィールドが 2 進数である場合、コンパイラーは、結果を内部 10 進数から 2 進数に変換します。

2 進数オペランドが最も効率的であるのは、中間結果が 9 桁を超えない場合です。

関連参照

637 ページの『固定小数点データと中間結果』

252 ページの『ARITH』

固定小数点算術で評価される組み込み関数

コンパイラは、組み込み関数の *inner-dmax* 値および *outer-dmax* 値を関数の特性から決定します。

整数関数

整数組み込み関数は整数を戻します。したがって、この関数の *outer-dmax* は常に 0 です。引数がすべて整数でなければならない整数関数の場合は、*inner-dmax* も常に 0 になります。

次の表に、*inner-dmax* および関数結果の精度を要約します。

関数	<i>Inner-dmax</i>	関数結果の桁精度
DATE-OF-INTEG	0	8
DATE-TO-YYYYMMDD	0	8
DAY-OF-INTEG	0	7
DAY-TO-YYYYDDD	0	7
FACTORIAL	0	30 (互換モード)、31 (拡張モード)
INTEGER-OF-DATE	0	7
INTEGER-OF-DAY	0	7
LENGTH	n/a	9
MOD	0	min(<i>i1 i2</i>)
ORD	n/a	3
ORD-MAX		9
ORD-MIN		9
YEAR-TO-YYYY	0	4
INTEGER		固定小数点引数の場合: 引数より 1 桁大きくなります。浮動小数点引数の場合: 30 (互換モード)、31 (拡張モード)
INTEGER-PART		固定小数点引数の場合: 引数と同じ桁数になります。浮動小数点引数の場合: 30 (互換モード)、31 (拡張モード)

混合関数

混合 組み込み関数とは、結果の型がその引数の型に依存する関数です。引数がすべて数値で、どの引数も浮動小数点でない場合、その混合関数は固定小数点です。(混合関数のいずれかの引数が浮動小数点である場合、その関数は浮動小数点命令によって評価され、浮動小数点結果を戻します。) 混合関数が固定小数点算術演算で評価されたときは、引数がすべて整数であれば結果は整数になり、それ以外の場合は結果は固定小数点になります。

混合関数 MAX、MIN、RANGE、REM、および SUM の場合、*outer-dmax* は常に *inner-dmax* に等しくなります (したがって、引数がすべて整数であれば、両方とも 0 になります)。これらの関数について戻される結果の精度を判別するためには、固定小数点算術演算および中間結果に関する規則 (以下を参照) を、アルゴリズムの各ステップに適用してください。

MAX

1. 最初の引数を関数結果に割り当てる。
2. 残りの引数ごとに、以下の手順を実行してください。
 - a. 関数結果の代数值を引数と比較する。
 - b. 2 つの値のうちの大きな方を関数結果に割り当てる。

MIN

1. 最初の引数を関数結果に割り当てる。
2. 残りの引数ごとに、以下の手順を実行してください。
 - a. 関数結果の代数值を引数と比較する。
 - b. 2 つの値のうちの小さな方を関数結果に割り当てる。

RANGE

1. MAX 用のステップを使用して、最大の引数を選択する。
2. MIN 用のステップを使用して、最小の引数を選択する。
3. 最大の引数から最小の引数を引く。
4. その差を関数結果に割り当てる。

REM

1. 引数 1 を引数 2 で割る。
2. ステップ 1 の結果からすべての非整数桁を除去する。
3. ステップ 2 の結果に引数 2 を掛ける。
4. ステップ 3 の結果を引数 1 から引く。
5. その差を関数結果に割り当てる。

SUM

1. 値 0 を関数結果に割り当てる。
2. 引数ごとに、以下の手順を実行してください。
 - a. その引数を関数結果に足す。
 - b. その和を関数結果に割り当てる。

関連参照

636 ページの『中間結果用の用語』

637 ページの『固定小数点データと中間結果』

『浮動小数点データと中間結果』

252 ページの『ARITH』

浮動小数点データと中間結果

算術式の演算が浮動小数点で計算される場合は、すべてのオペランドが浮動小数点に変換され、しかも浮動小数点命令を使用して演算が行われたかのように、式全体が計算されます。

算術式に関して以下の条件のいずれかが真である場合、浮動小数点命令を使用して算術式が計算されます。

- 受け取り側またはオペランドが COMP-1、COMP-2、外部浮動小数点、または浮動小数点リテラルである。

- 指数に小数部の桁が含まれている。
- 指数が、べき乗計算または除算演算子を含む式であり、かつ d_{max} が 0 より大きい。
- 組み込み関数が浮動小数点関数である。

互換モードでは、式が浮動小数点算術演算で計算される場合、算術演算を評価するために使用される精度は、次のように決まります。

- 受け取り側およびオペランドがすべて COMP-1 データ項目で、式に乗算またはべき乗演算が含まれていない場合には、単精度が使用されます。
- これ以外の場合には、長精度が使用されます。

長精度浮動小数点が算術式の 1 つの演算で使用された場合は、その式のすべての演算は、長精度浮動小数点命令が使用されたかのように計算されます。

拡張モードでは、式が浮動小数点算術演算で計算される場合、算術演算を評価するために使用される精度は、次のように決まります。

- 受け取り側およびオペランドがすべて COMP-1 データ項目で、式に乗算またはべき乗演算が含まれていない場合には、単精度が使用されます。
- 受け取り側およびオペランドがすべて COMP-1 または COMP-2 データ項目で、受け取り側またはオペランドの少なくとも 1 つが COMP-2 データ項目であり、かつ式に乗算またはべき乗演算が含まれていない場合には、長精度が使用されます。
- これ以外の場合には、拡張精度が使用されます。

拡張精度浮動小数点が算術式の 1 つの演算で使用された場合は、その式のすべての演算は、拡張精度浮動小数点命令が使用されたかのように計算されます。

注意: 浮動小数点演算で、指数オーバーフローが発生した中間結果フィールドがあると、ジョブは異常終了します。

浮動小数点演算で評価される指数

互換モードでは、浮動小数点べき乗計算は常に、長精度浮動小数点算術計算を使用して評価されます。拡張モードでは、浮動小数点べき乗計算は常に、拡張精度浮動小数点算術演算を使用して評価されます。

COBOL では、負の数を小数で累乗した値は定義されていません。例えば、 $(-2)^{**}3$ は -8 ですが、 $(-2)^{**}(3.000001)$ は定義されていません。べき乗計算が浮動小数点で行われ、結果が未定義である可能性がある場合には、実行時に指数の値が評価され、それが実際に整数値を持つかどうか判別されます。整数値を持っていない場合には、診断メッセージが出されます。

浮動小数点演算で評価される組み込み関数

互換モードでは、浮動小数点組み込み関数は常に、長精度 (64 ビット) の浮動小数点値を戻します。拡張モードでは、浮動小数点組み込み関数は常に、拡張精度 (80 ビット) の浮動小数点値を戻します。

少なくとも 1 つの浮動小数点引数を持つ混合関数は、浮動小数点算術演算を使用して評価されます。

関連参照

636 ページの『中間結果用の用語』

252 ページの『ARITH』

非算術ステートメントの算術式

算術式は、算術ステートメント以外のコンテキストでも使用できます。例えば、IF または EVALUATE ステートメントを持つ算術式を使用することができます。

このようなステートメントでは、固定小数点データを持つ中間結果および浮動小数点データを持つ中間結果に関する規則が適用されます。ただし、次のような変更があります。

- 省略された IF ステートメントは、省略されていないかのように処理されます。
- 被比較数の少なくとも 1 つが算術式であるような明示比較条件では、*dmax* は、いずれかの被比較数の任意のオペランド (除数と指数を除く) 用に定義された小数部の最大小数桁数になります。以下のいずれかの条件が真である場合は、浮動小数点算術演算の規則が適用されます。
 - いずれかの被比較数のオペランドが COMP-1、COMP-2、外部浮動小数点、または浮動小数点リテラルである。
 - 指数に小数部の桁が含まれている。
 - 指数が、べき乗計算または除算演算子を含む式であり、かつ *dmax* が 0 より大きい。

以下に、その例を示します。

```
IF operand-1 = expression-1 THEN . . .
```

operand-1 が COMP-2 と定義されるデータ名である場合は、*expression-1* には、たとえ固定小数点オペランドしか含まれていなくても、浮動小数点算術演算の規則が適用されます。というのは、これは固定小数点オペランドと比較されるためです。

- ある算術式と別のデータ項目または算術式との間の比較で、関係演算子が使用されない場合 (すなわち、明示的な比較条件がない場合) は、その算術式は、被比較数の属性を考慮に入れずに評価されます。以下に、その例を示します。

```
EVALUATE expression-1
  WHEN expression-2 THRU expression-3
  WHEN expression-4
  . . .
END-EVALUATE
```

上記のステートメントでは、それぞれの算術式は、その特性に応じて、固定小数点または浮動小数点算術で評価されます。

関連概念

60 ページの『固定小数点演算と浮動小数点演算の対比』

関連参照

636 ページの『中間結果用の用語』

637 ページの『固定小数点データと中間結果』

642 ページの『浮動小数点データと中間結果』

IF ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
EVALUATE ステートメント (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)
条件式 (「*COBOL for Windows* 言語解説書」)

付録 D. 複合 OCCURS DEPENDING ON

複合 OCCURS DEPENDING ON (複合 ODO) は、いくつかのタイプが可能です。複合 ODO は、標準 COBOL 85 の拡張としてサポートされます。

コンパイラーによって認められる複合 ODO の基本形式は、以下のとおりです。

- 可変位置項目またはグループ: DEPENDING ON 句を指定した OCCURS 文節で記述されたデータ項目の後に、非従属基本データ項目またはグループ・データ項目が続きます。
- 可変位置テーブル: DEPENDING ON 句を指定した OCCURS 文節によって記述されたデータ項目の後に、OCCURS 文節によって記述された非従属データ項目が続きます。
- 可変長エレメントを持つテーブル: OCCURS 文節によって記述されたデータ項目に、OCCURS 文節に DEPENDING ON 句を指定して記述された従属データ項目が含まれています。
- 可変長エレメントを持つテーブルの指標名。
- 可変長エレメントを持つテーブルのエレメント。

『例: 複合 ODO』

関連タスク

649 ページの『ODO オブジェクト値を変更する際の指標エラーを防止する』

650 ページの『エレメントを可変テーブルに追加する際のオーバーレイを防止する』

関連参照

648 ページの『ODO オブジェクト値の変更の影響』

OCCURS DEPENDING ON 文節 (『COBOL for Windows 言語解説書』)

例: 複合 ODO

次の例は、複合 ODO が現れる場合の可能なタイプを示しています。

```
01 FIELD-A.
   02 COUNTER-1                      PIC S99.
   02 COUNTER-2                      PIC S99.
   02 TABLE-1.
      03 RECORD-1 OCCURS 1 TO 5 TIMES
         DEPENDING ON COUNTER-1      PIC X(3).
   02 EMPLOYEE-NUMBER                PIC X(5). (1)
   02 TABLE-2 OCCURS 5 TIMES         (2) (3)
      INDEXED BY INDX.               (4)
   03 TABLE-ITEM                    PIC 99.  (5)
   03 RECORD-2 OCCURS 1 TO 3 TIMES
      DEPENDING ON COUNTER-2.
   04 DATA-NUM                      PIC S99.
```

定義: この例では、COUNTER-1 は ODO オブジェクト です。つまり、RECORD-1 の DEPENDING ON 文節のオブジェクトです。RECORD-1 は ODO サブジェクト であると言われます。同様に、COUNTER-2 は、対応する ODO サブジェクトである RECORD-2 の ODO オブジェクトです。

上の例に示されている複合 ODO オカレンスのタイプは、次のとおりです。

- (1) 可変位置項目: EMPLOYEE-NUMBER は、同じレベル 01 レコード内の可変長テーブルに続いている (ただし、従属してはいない) データ項目です。
- (2) 可変位置テーブル: TABLE-2 は、同じレベル 01 レコード内の可変長テーブルに続いている (ただし、従属してはいない) テーブルです。
- (3) 可変長エレメントを持つテーブル: TABLE-2 は、従属データ項目 RECORD-2 を含んでいるテーブルであり、この従属データ項目の出現回数は ODO オブジェクトの内容によって異なります。
- (4) 可変長エレメントを持つテーブルの指標名 INDX。
- (5) 可変長エレメントを持つテーブルのエレメント TABLE-ITEM。

長さの計算方法

各レコードの可変部分の長さは、その ODO オブジェクトとその ODO サブジェクトの長さとの積です。例えば、上記に示された複合 ODO 項目の 1 つに参照が行われるたびに、使用される際の実際の長さは、次のように計算されます。

- TABLE-1 の長さは、COUNTER-1 の内容 (RECORD-1 のオカレンスの回数) に 3 (RECORD-1 の長さ) を掛けることによって計算されます。
- TABLE-2 の長さは、COUNTER-2 の内容 (RECORD-2 のオカレンスの回数) に 2 (RECORD-2 の長さ) を掛け、TABLE-ITEM の長さを加算することによって計算されます。
- FIELD-A の長さは、COUNTER-1、COUNTER-2、TABLE-1、EMPLOYEE-NUMBER、および TABLE-2 の長さに 5 を掛けたものを加算することによって計算されます。

ODO オブジェクトの値の設定

グループ内の複合 ODO 項目を参照するには、グループ項目内のすべての ODO オブジェクトを設定しておく必要があります。例えば、上記のコードの EMPLOYEE-NUMBER を参照するには、その前に、COUNTER-1 と COUNTER-2 を設定しておかなければなりません。ただし、EMPLOYEE-NUMBER は ODO オブジェクトに直接依存して値を得るわけではありません。

制約事項: ODO オブジェクトは可変的に配置することはできません。

ODO オブジェクト値の変更の影響

DEPENDING ON 句を指定した OCCURS 文節で記述されたデータ項目の後に、同じグループ内で 1 つ以上の非従属データ項目 (複合 ODO 形式) が続いている場合、ODO オブジェクトの値を変更すると、レコード内の複合 ODO 項目への後続の参照が影響を受けます。

以下に、その例を示します。

- 関係のある ODO 文節を含んでいるグループのサイズは、ODO オブジェクトの新しい値を反映します。
- ODO オブジェクトの新しい値に基づいて、ODO サブジェクトを含んでいるグループへの移動 (MOVE) が行われます。
- ODO 文節で記述された項目に続いている非従属項目の位置は、ODO オブジェクトの新しい値の影響を受けます。(非従属項目の内容を保持するためには、ODO オブジェクトの値が変更される前に、非従属項目を作業域に移動しておき、後でそれらを戻してください。)

ODO オブジェクトの値は、データをその ODO オブジェクトに移動するか、その ODO オブジェクトが含まれているグループに移動すると、変更される可能性があります。また、ODO オブジェクトが READ ステートメントのターゲットであるレコードに含まれている場合にも、その値が変更されることがあります。

関連タスク

『ODO オブジェクト値を変更する際の指標エラーを防止する』
650 ページの『エレメントを可変テーブルに追加する際のオーバーレイを防止する』

ODO オブジェクト値を変更する際の指標エラーを防止する

テーブル内の従属データ項目の ODO オブジェクトの値を変更した後に、複合 ODO 指標名 (つまり、可変長エレメントを持つテーブルの指標名) を参照する場合には、注意してください。

ODO オブジェクトの値を変更すると、テーブルの長さが変わるため、関連する複合 ODO 指標のバイト・オフセットはもう有効ではありません。ですから次のような指標名への参照をコーディングした場合、予防措置を講じなければ、予期しない結果が生じることになります。

- テーブルのエレメントへの参照
- SET *integer-data-item* TO *index-name* 形式の SET ステートメント (形式 1)
- SET *index-name* UP|DOWN BY *integer* 形式の SET ステートメント (形式 2)

この種のエラーを回避するためには、以下のステップに従ってください。

1. 指標を整数データ項目に保管する。(これを行うと、暗黙の変換が行われます。整数項目は、指標のオフセットに対応するテーブル・エレメント出現番号を受け取ります。)
2. ODO オブジェクトの値を変更する。
3. ただちに整数データ項目から指標を復元する。(これを行うと、暗黙の変換が行われます。指標名は、整数項目でのテーブル・エレメント出現番号に対応するオフセットを受け取ります。オフセットは、その時点で有効なテーブルの長さによって計算されます。)

次のコードは、ODO オブジェクト COUNTER-2 が変更される場合の指標名の保管方法と復元方法を示しています (647 ページの『例: 複合 ODO』を参照)。

```
77 INTEGER-DATA-ITEM-1      PIC 99.
...
  SET INDX TO 5.
*      INDX is valid at this point.
```

```

      SET INTEGER-DATA-ITEM-1 TO INDX.
*      INTEGER-DATA-ITEM-1 now has the
*      occurrence number that corresponds to INDX.
      MOVE NEW-VALUE TO COUNTER-2.
*      INDX is not valid at this point.
      SET INDX TO INTEGER-DATA-ITEM-1.
*      INDX is now valid, containing the offset
*      that corresponds to INTEGER-DATA-ITEM-1, and
*      can be used with the expected results.

```

関連参照

SET ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

エレメントを可変テーブルに追加する際のオーバーレイを防止する

同じグループ内で 1 つ以上の非従属データ項目が後に続いている可変オカレンス・テーブル内のエレメントの数を増やす場合には、注意してください。ODO オブジェクトの値を増分し、テーブルにエレメントを追加すると、テーブルの後に続く可変位置データ項目を誤ってオーバーレイする可能性があります。

この種のエラーを回避するためには、次のようにしてください。

1. テーブルの後に続く可変位置データ項目を別のデータ域に保管する。
2. ODO オブジェクトの値を増分する。
3. データを新しいテーブル・エレメントに移動する (必要な場合)。
4. 可変位置データ項目を、それらを保管したデータ域から復元する。

次の例では、テーブル VARY-FIELD-1 にエレメントを追加しますが、このテーブルのエレメントの数は ODO オブジェクト CONTROL-1 に左右されます。VARY-FIELD-1 の後には、非従属可変位置データ項目である GROUP-ITEM-1 が続いており、このエレメントがオーバーレイされる可能性があります。

```

WORKING-STORAGE SECTION.
01 VARIABLE-REC.
   05 FIELD-1                                PIC X(10).
   05 CONTROL-1                              PIC S99.
   05 CONTROL-2                              PIC S99.
   05 VARY-FIELD-1 OCCURS 1 TO 10 TIMES
      DEPENDING ON CONTROL-1                PIC X(5).
   05 GROUP-ITEM-1.
      10 VARY-FIELD-2
         OCCURS 1 TO 10 TIMES
         DEPENDING ON CONTROL-2            PIC X(9).
01 STORE-VARY-FIELD-2.
   05 GROUP-ITEM-2.
      10 VARY-FLD-2
         OCCURS 1 TO 10 TIMES
         DEPENDING ON CONTROL-2            PIC X(9).

```

VARY-FIELD-1 の各エレメントは 5 バイトで、VARY-FIELD-2 の各エレメントは 9 バイトです。CONTROL-1 と CONTROL-2 の両方に値 3 が含まれている場合は、VARY-FIELD-1 および VARY-FIELD-2 のストレージは次のように示すことができます。

VARY-FIELD-1(1)								
VARY-FIELD-1(2)								
VARY-FIELD-1(3)								
VARY-FIELD-2(1)								
VARY-FIELD-2(2)								
VARY-FIELD-2(3)								

VARY-FIELD-1 に 4 番目のエレメントを追加する場合は、次のようにコーディングすれば、VARY-FIELD-2 の最初の 5 バイトのオーバーレイを回避することができます。(GROUP-ITEM-2 は、可変位置 GROUP-ITEM-1 の一時記憶域として働きます。)

```
MOVE GROUP-ITEM-1 TO GROUP-ITEM-2.
ADD 1 TO CONTROL-1.
MOVE five-byte-field TO
    VARY-FIELD-1 (CONTROL-1).
MOVE GROUP-ITEM-2 TO GROUP-ITEM-1.
```

VARY-FIELD-1 と VARY-FIELD-2 の更新後のストレージは次のように示すことができます。

VARY-FIELD-1(1)								
VARY-FIELD-1(2)								
VARY-FIELD-1(3)								
VARY-FIELD-1(4)								
VARY-FIELD-2(1)								
VARY-FIELD-2(2)								
VARY-FIELD-2(3)								

VARY-FIELD-1 の 4 番目のエレメントが VARY-FIELD-2 の最初のエレメントをオーバーレイしていないことに注意してください。

付録 E. 日時呼び出し可能サービス

日時の呼び出し可能サービスを使用すると、現行の現地時間および日付をいくつかの形式で入手し、日時の変換を行うことができます。

使用可能な日時の呼び出し可能サービスを、以下に示します。2つのサービス CEEQCEN と CEESCEN は、2桁の年号 (例えば、1991 を表す 91、2006 を表す 06 など) を扱う予測可能な方法を提供します。

表 82. 日時呼び出し可能サービス

呼び出し可能サービス	説明
CEECBLDY (655 ページの『CEECBLDY - 日付から COBOL 整数形式への変換』)	文字日付値を COBOL 整数日付形式に変換します。1 日目は 1601 年 1 月 1 日で、その後 1 日ごとに値が 1 ずつ増えます。
CEEDATE (659 ページの『CEEDATE - リリアン日付から文字形式への変換』)	リリアン形式の日付を文字値に変換します。
CEEDATM (663 ページの『CEEDATM - 秒から文字タイム・スタンプへの変換』)	秒数を文字タイム・スタンプに変換します。
CEEDAYS (667 ページの『CEEDAYS - 日付からリリアン形式への変換』)	文字日付値をリリアン形式に変換します。1 日目は 1582 年 10 月 15 日で、その後 1 日ごとに値が 1 ずつ増えます。
CEEDYWK (670 ページの『CEEDYWK - リリアン日付からの曜日の計算』)	曜日計算を行います。
CEEGMT (673 ページの『CEEGMT - 現在のグリニッジ標準時の取得』)	現在のグリニッジ標準時 (日時) を取得します。
CEEGMTO (674 ページの『CEEGMTO - グリニッジ標準時から現地時間までのオフセットの取得』)	グリニッジ標準時と現地時間の時差を取得します。
CEEISEC (677 ページの『CEEISEC - 整数から秒への変換』)	2 進数の年、月、日、時、分、秒、ミリ秒を、1582 年 10 月 15 日の 00:00:00 から数えた秒数を表す数値に変換します。
CEELOCT (680 ページの『CEELOCT - 現在の現地日時の取得』)	現在の日時を取得します。
CEEQCEN (682 ページの『CEEQCEN - 世紀ウィンドウの照会』)	呼び出し可能サービスの世紀ウィンドウを照会します。
CEESCEN (683 ページの『CEESCEN - 世紀ウィンドウの設定』)	呼び出し可能サービスの世紀ウィンドウを設定します。

表 82. 日時呼び出し可能サービス (続き)

呼び出し可能サービス	説明
CEESECI (685 ページの『CEESECI - 秒から整数への変換』)	1582 年 10 月 15 日の 00:00:00 から数えた秒数を表す数値を、年、月、日、時、分、秒、ミリ秒を表す 7 つの 2 進整数に変換します。
CEESECS (688 ページの『CEESECS - タイム・スタンプの秒への変換』)	文字タイム・スタンプ (日時) を、1582 年 10 月 15 日の 00:00:00 から数えた秒数に変換します。
CEEUTC (693 ページの『CEEUTC - 協定世界時の取得』)	CEEGMT と同じ
IGZEDT4 (693 ページの『IGZEDT4 - 現在日付の取得』)	4 桁年号を使用した現在日付を YYYYMMDD 形式で戻します。

これらの日時の呼び出し可能サービスはすべて、Enterprise COBOL for z/OS とのソース・コード互換性があります。ただし、条件の処理方法には大きな違いがあります。

日時の呼び出し可能サービスは、以下に表す日付/時刻組み込み関数への追加です。

表 83. 日時組み込み関数

組み込み関数	説明
CURRENT-DATE	現在の日時とグリニッジ標準時からの時間差
DATE-OF-INTEGER ¹	整数で表された日付に相当する標準フォーマットの日付 (YYYYMMDD)
DATE-TO-YYYYMMDD ¹	指定された 100 年間隔に従ったウィンドウ化西暦年を使用した、整数表現の日付に相当する標準フォーマットの日付 (YYYYMMDD)
DATEVAL ¹	整数または英数字で表された日付に相当する日付フィールド
DAY-OF-INTEGER ¹	整数で表された日付に相当する年間通算日フォーマットの日付 (YYYYDDD)
DAY-TO-YYYYDDD ¹	指定された 100 年間隔に従ったウィンドウ化西暦年を使用した、整数表現の日付に相当するユリウス日付 (YYYYMMDD)
INTEGER-OF-DATE	標準フォーマットの日付 (YYYYMMDD) に相当する整数で表された日付
INTEGER-OF-DAY	年間通算日 (YYYYDDD) に相当する整数で表された日付
UNDATE ¹	整数または英数字で表された日付フィールドに相当する非日付
YEAR-TO-YYYY ¹	指定された 100 年間隔に従ったウィンドウ化西暦年に相当する拡張西暦年 (YYYY)
YEARWINDOW ¹	YEARWINDOW コンパイラー・オプションで指定された世紀ウィンドウの開始年
1. DATEPROC コンパイラー・オプションの設定によって動作が異なります。	

関連参照

614 ページの『フィードバック・トークン』

CALL ステートメント (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

関数定義 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」)

CEEGBLDY - 日付から COBOL 整数形式への変換

CEEGBLDY は、日付を表す文字列を 1600 年 12 月 31 日から数えた日数に変換します。日時呼び出し可能サービスの世紀ウィンドウにアクセスする場合や、COBOL 組み込み関数を使用して日付計算を実行する場合には、CEEGBLDY を使用します。

このサービスは CEEDAYS と似ていますが、COBOL 組み込み関数と互換性のある COBOL 整数形式で文字列を戻す点が異なります。

CALL CEEGBLDY の構文

```
▶▶CALL"CEEGBLDY"USINGinput_char_date,—picture_string,—  
▶output_Integer_date,—fc.—◀◀
```

input_char_date (入力)

picture_string の指定に準拠した形式で日付またはタイム・スタンプを表す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字列。

文字列に含まれる文字数は 5 から 255 文字です。

input_char_date には、先行または末尾ブランクを含めることができます。日付の構文解析は、最初の非ブランク文字から始まります (ピクチャー・ストリング自体に先行ブランクが含まれる場合は、CEEGBLDY がその位置を正確にスキップした後、構文解析が始まります)。

CEEGBLDY は、picture_string で指定された日付形式によって判別される有効な日付を解析したら、残りの文字をすべて無視します。有効な日付範囲は、1601 年 1 月 1 日から 9999 年 12 月 31 日です。

picture_string (入力)

input_char_date で指定された日付の形式を示す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字列。

picture_string 内の各文字は、input_char_date 内の文字に対応します。例えば、MMDDYY を picture_string として指定すると、CEEGBLDY は input_char_date の値 060288 を 1988 年 6 月 2 日として読み取ります。

スラッシュ (/) などの区切り文字がピクチャー・ストリング内にある場合は、先行ゼロを省略することができます。例えば、次の CEEGBLDY の呼び出しは、同じ値 141502 (1988 年 6 月 2 日) をそれぞれ COBINTDTE に割り当てます。


```
MOVE '6/2/88' TO DATEVAL-STRING.
MOVE 6 TO DATEVAL-LENGTH.
MOVE 'MM/DD/YY' TO PICSTR-STRING.
MOVE 8 TO PICSTR-LENGTH.
CALL CEECBLDY USING DATEVAL, PICSTR, COBINTDTE, FC.

MOVE '06/02/88' TO DATEVAL-STRING.
MOVE 8 TO DATEVAL-LENGTH.
MOVE 'MM/DD/YY' TO PICSTR-STRING.
MOVE 8 TO PICSTR-LENGTH.
CALL CEECBLDY USING DATEVAL, PICSTR, COBINTDTE, FC.

MOVE '060288' TO DATEVAL-STRING.
MOVE 6 TO DATEVAL-LENGTH.
MOVE 'MDDYY' TO PICSTR-STRING.
MOVE 6 TO PICSTR-LENGTH.
CALL CEECBLDY USING DATEVAL, PICSTR, COBINTDTE, FC.

MOVE '88154' TO DATEVAL-STRING.
MOVE 5 TO DATEVAL-LENGTH.
MOVE 'YYDDD' TO PICSTR-STRING.
MOVE 5 TO PICSTR-LENGTH.
CALL CEECBLDY USING DATEVAL, PICSTR, COBINTDTE, FC.
```

picture_string にコロンやスラッシュなどの文字 (例: HH:MI:SS YY/MM/DD) が含まれる場合はプレースホルダーと見なされますが、それ以外の場合は無視されます。

picture_string に日本元号のシンボル <JJJJ> が含まれる場合は、*input_char_date* の YY の位置に、日本元号での年号が入ります。例えば、1988 年は日本の昭和 63 年に相当します。

output_Integer_date (出力)

COBOL 整数日付 (1600 年 12 月 31 日から数えた日数) を表す 32 ビットの 2 進整数。例えば、1988 年 5 月 16 日は、日数 141485 に相当します。

input_char_date に有効な日付が含まれていない場合は、*output_Integer_date* が 0 に設定され、CEEGBLDY が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

output_Integer_date は整数なので、*output_Integer_date* では日付計算を容易に行うことができます。うるう年や年末偏差は計算に影響しません。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 84. CEEGBLDY のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2EB	3	2507	CEEDAYS または CEESECS に渡されたデータが不十分です。リリアン日付の値は計算されませんでした。

表 84. CEECBLDY のシンボリック条件 (続き)

シンボリック・フィールドバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE2EC	3	2508	CEEDAYS または CEESECS に渡された日付値が無効です。
CEE2ED	3	2509	CEEDAYS または CEESECS に渡された元号が認識されませんでした。
CEE2EH	3	2513	CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EL	3	2517	CEEISEC 呼び出し内の月の値が認識されませんでした。
CEE2EM	3	2518	日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。
CEE2EO	3	2520	CEEDAYS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいは日付ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。
CEE2EP	3	2521	CEEDAYS または CEESECS に渡された <JJJJ>、<CCCC>、または <CCCCCCCC> の元号年数値がゼロでした。

使用上の注意

- CEECBLDY の呼び出しは必ず、戻り値を COBOL 組み込み関数への入力として使用する COBOL プログラムから行ってください。CEEDAYS とは異なり、CEECEBLDY の逆関数はありません。CEECEBLDY は、COBOL ユーザーが日時の世紀ウィンドウ・サービスを COBOL 組み込み関数とともに使用して、日付計算を行う場合にのみ使用されます。CEECEBLDY の逆は、DATE-OF-INTEGGER および DAY-OF-INTEGGER 組み込み関数によって実現されます。
- 1601 年 1 月 1 日よりも前の日付に対して計算を実行するには、各日付の年号に 4000 を加算し、その日付を COBOL 整数形式に変換してから計算します。計算結果が日数ではなく日付になる場合は、計算結果を日付ストリングに変換し、年号から 4000 を減算します。
- デフォルトでは、2 桁の年号は、システム日付より 80 年前から始まる 100 年間にあります。したがって、2006 年の場合、2 桁の年号はすべて 1926 から 2025 年の範囲内の日付を表します。このデフォルトの範囲を変更するには、CEECEBEN 呼び出し可能サービスを使用します。

例

CB L LIB

```
*****
**                                     **
** Function: Invoke CEECEBLDY callable service **
** to convert date to COBOL integer format.   **
** This service is used when using the       **
** Century Window feature of the date and time **
** callable services mixed with COBOL        **
** intrinsic functions.                      **
```

```

**
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLDY.
*
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 CHRDATE.
    02 Vstring-length      PIC S9(4) BINARY.
    02 Vstring-text.
        03 Vstring-char    PIC X
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES
                        DEPENDING ON Vstring-length
                        of CHRDATE.
01 PICSTR.
    02 Vstring-length      PIC S9(4) BINARY.
    02 Vstring-text.
        03 Vstring-char    PIC X
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES
                        DEPENDING ON Vstring-length
                        of PICSTR.
01 INTEGER                PIC S9(9) BINARY.
01 NEWDATE                PIC 9(8).
01 FC.
    02 Condition-Token-Value.
    COPY CEEIGZCT.
        03 Case-1-Condition-ID.
            04 Severity     PIC S9(4) COMP.
            04 Msg-No       PIC S9(4) COMP.
        03 Case-2-Condition-ID
            REDEFINES Case-1-Condition-ID.
            04 Class-Code   PIC S9(4) COMP.
            04 Cause-Code   PIC S9(4) COMP.
        03 Case-Sev-Ctl     PIC X.
        03 Facility-ID      PIC XXX.
    02 I-S-Info             PIC S9(9) COMP.
*
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLDAYS.
*****
** Specify input date and length
**
*****
    MOVE 25 TO Vstring-length of CHRDATE.
    MOVE '1 January 00'
      to Vstring-text of CHRDATE.
*****
** Specify a picture string that describes
**
** input date, and set the string's length.
**
*****
    MOVE 23 TO Vstring-length of PICSTR.
    MOVE 'ZD Mmmmmmmmmmmmmmmmmz YY'
      TO Vstring-text of PICSTR.
*****
** Call CEECBLDY to convert input date to a
**
** COBOL integer date
**
*****
    CALL 'CEECBLDY' USING CHRDATE, PICSTR,
                        INTEGER, FC.
*****
** If CEECBLDY runs successfully, then compute
**
** the date of the 90th day after the
**
** input date using Intrinsic Functions
**
*****
    IF CEE000 of FC THEN
        COMPUTE INTEGER = INTEGER + 90
        COMPUTE NEWDATE = FUNCTION
            DATE-OF-INTEGER (INTEGER)

```

```

        DISPLAY NEWDATE
        ' is Lilian day: ' INTEGER
    ELSE
        DISPLAY 'CEEBLDY failed with msg '
        Msg-No of FC UPON CONSOLE
        STOP RUN
    END-IF.
*
GOBACK.

```

関連参照

615 ページの『ピクチャー文字項およびストリング』

CEEDATE - リリアン日付から文字形式への変換

CEEDATE は、リリアン日付を表す数値を文字形式の日付に変換します。出力は、2006/04/23 などの文字ストリングになります。

CALL CEEDATE の構文

```

▶▶CALL "CEEDATE" USING input_Lilian_date, picture_string,
▶▶output_char_date, fc.

```

input_Lilian_date (入力)

リリアン日付を表す 32 ビットの整数。このリリアン日付は、1582 年 10 月 14 日から数えた日数です。例えば、1988 年 5 月 16 日は、リリアン日数 148138 に相当します。有効なリリアン日付の範囲は 1 から 3,074,324 (1582 年 10 月 15 日から 9999 年 12 月 31 日) です。

picture_string (入力)

output_char_date の必要な形式 (例: MM/DD/YY) を表す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字ストリング。picture_string 内の各文字は、output_char_date 内の文字を表します。スラッシュ (/) などの区切り文字がピクチャー・ストリング内にある場合は、現状のまま output_char_date にコピーされます。

picture_string に日本元号のシンボル <JJJJ> が含まれる場合は、output_char_date の YY の位置に、日本元号での年号が入ります。例えば、1988 年は日本の昭和 63 年に相当します。

output_char_date (出力)

input_Lilian_date を picture_string で指定された形式に変換した結果として生成される、固定長の 80 文字のストリング。input_Lilian_date が無効な場合は、output_char_date がすべてブランクに設定され、CEEDATE が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 85. CEEDATE のシンボリック条件

シンボリック・フィールドバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2EG	3	2512	CEEDATE または CEEDYWK への呼び出しで渡されたリリアン日付値が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EM	3	2518	日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。
CEE2EQ	3	2522	CEEDATE に渡されたピクチャー・ストリング内に元号 (<JJJJ>、<CCCC>、<CCCCCCCC>) が使用されていましたが、リリアン日付値が対応範囲内にありませんでした。元号を判別できませんでした。
CEE2EU	2	2526	CEEDATE によって戻された日付ストリングが切り捨てられました。
CEE2F6	1	2534	CEEDATE または CEEDATM への呼び出しで、月または曜日名に対して指定されたフィールド幅が不十分です。出力はブランクに設定されました。

使用上の注意: CEEDATE の逆は CEEDAYS です。CEEDAYS は文字日付をリリアン形式に変換します。

例

CBL LIB

```

*****
**                                     **
** Function: CEEDATE - convert Lilian date to **
**                                     character format **
**                                     **
** In this example, a call is made to CEEDATE **
** to convert a Lilian date (the number of **
** days since 14 October 1582) to a character **
** format (such as 6/22/98). The result is **
** displayed. The Lilian date is obtained **
** via a call to CEEDAYS. **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLDATE.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01  LILIAN                PIC S9(9) BINARY.
01  CHRDATE              PIC X(80).
01  IN-DATE.
    02  Vstring-length    PIC S9(4) BINARY.
    02  Vstring-text.
        03  Vstring-char  PIC X
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES
                        DEPENDING ON Vstring-length
                        of IN-DATE.
01  PICSTR.
    02  Vstring-length    PIC S9(4) BINARY.
    02  Vstring-text.
        03  Vstring-char  PIC X

```

```

                                OCCURS 0 TO 256 TIMES
                                DEPENDING ON Vstring-length
                                of PICSTR.
01 FC.
  02 Condition-Token-Value.
  COPY CEEIGZCT.
    03 Case-1-Condition-ID.
      04 Severity PIC S9(4) COMP.
      04 Msg-No PIC S9(4) COMP.
    03 Case-2-Condition-ID
      REDEFINES Case-1-Condition-ID.
      04 Class-Code PIC S9(4) COMP.
      04 Cause-Code PIC S9(4) COMP.
    03 Case-Sev-Ctl PIC X.
    03 Facility-ID PIC XXX.
  02 I-S-Info PIC S9(9) COMP.
*
PROCEDURE DIVISION.
  PARA-CBLDAYS.
*****
** Call CEEDAYS to convert date of 6/2/98 to **
** Lilian representation **
*****
MOVE 6 TO Vstring-length of IN-DATE.
MOVE '6/2/98' TO Vstring-text of IN-DATE(1:6).
MOVE 8 TO Vstring-length of PICSTR.
MOVE 'MM/DD/YY' TO Vstring-text of PICSTR(1:8).
CALL 'CEEDAYS' USING IN-DATE, PICSTR,
                     LILIAN, FC.

*****
** If CEEDAYS runs successfully, display result**
*****
IF CEE000 of FC THEN
  DISPLAY Vstring-text of IN-DATE
    ' is Lilian day: ' LILIAN
ELSE
  DISPLAY 'CEEDAYS failed with msg '
    Msg-No of FC UPON CONSOLE
  STOP RUN
END-IF.

*****
** Specify picture string that describes the **
** desired format of the output from CEEDATE, **
** and the picture string's length. **
*****
MOVE 23 TO Vstring-length OF PICSTR.
MOVE 'ZD Mmmmmmmmmmmmmmmz YYYY' TO
    Vstring-text OF PICSTR(1:23).

*****
** Call CEEDATE to convert the Lilian date **
** to a picture string. **
*****
CALL 'CEEDATE' USING LILIAN, PICSTR,
                     CHRDATE, FC.

*****
** If CEEDATE runs successfully, display result**
*****
IF CEE000 of FC THEN
  DISPLAY 'Input Lilian date of ' LILIAN
    ' corresponds to: ' CHRDATE
ELSE
  DISPLAY 'CEEDATE failed with msg '
    Msg-No of FC UPON CONSOLE

```

```

        STOP RUN
    END-IF.

    GOBACK.

```

次の表に、CEEDATE からの出力例を示します。

input_Lilian_date	picture_string	output_char_date
148138	YY YYMM YY-MM YYMMDD YYYYMMDD YYYY-MM-DD YYYY-ZM-ZD <JJJJ> YY.MM.DD	98 9805 98-05 980516 19980516 1998-05-16 1998-5-16 昭和 63.05.16 (DBCS スtring)
148139	MM MMDD MM/DD MMDDYY MM/DD/YYYY ZM/DD/YYYY	05 0517 05/17 051798 05/17/1998 5/17/1998
148140	DD DDMM DDMMYY DD.MM.YY DD.MM.YYYY DD Mmm YYYY	18 1805 180598 18.05.98 18.05.1998 18 May 1998
148141	DDD YYDDD YY.DDD YYYY.DDD	140 98140 98.140 1998.140
148142	YY/MM/DD HH:MI:SS.99 YYYY/ZM/ZD ZH:MI AP	98/05/20 00:00:00.00 1998/5/20 0:00 AM
148143	WWW., MMM DD, YYYY Www., Mmm DD, YYYY Wwwwwwwwww, Mmmmmmmmmm DD, YYYY Wwwwwwwwwz, Mmmmmmmmmz DD, YYYY	SAT., MAY 21, 1998 Sat., May 21, 1998 Saturday, May 21, 1998 Saturday, May 21, 1998

617 ページの『例: 日時のピクチャー・String』

関連参照

615 ページの『ピクチャー文字項およびString』

CEEDATM - 秒から文字タイム・スタンプへの変換

CEEDATM は、1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数を表す数値を、文字ストリングに変換します。出力は、1988/07/26 20:37:00 などの文字ストリングのタイム・スタンプになります。

CALL CEEDATM の構文

```
►—CALL—"CEEDATM"—USING—input_seconds,—picture_string,—  
►—output_timestamp,—fc.—◄◄
```

input_seconds (入力)

1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた (うるう秒は数えない) 秒数を表す、64 ビット長の浮動小数点数。

例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は秒数 86,401 ($24 \times 60 \times 60 + 01$) に相当します。*input_seconds* の有効範囲は 86,400 から 265,621,679,999.999 (9999 年 12 月 31 日の 23:59:59.999) です。

picture_string (入力)

output_timestamp の必要な形式 (例: MM/DD/YY HH:MI AP) を表す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字ストリング。

picture_string 内の各文字は、*output_timestamp* 内の文字を表します。スラッシュ (/) などの区切り文字がピクチャー・ストリング内にある場合は、現状のまま *output_timestamp* にコピーされます。

picture_string に日本元号のシンボル <JJJJ> が含まれる場合は、*output_timestamp* の YY の位置に、日本元号での年号が入ります。

output_timestamp (出力)

input_seconds を *picture_string* で指定された形式に変換した結果として生成される、固定長の 80 文字のストリング。

必要に応じて、出力が *output_timestamp* の長さまで切り詰められます。

input_seconds が無効な場合は、*output_timestamp* がすべてブランクに設定され、CEEDATM が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 86. CEEDATM のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。

表 86. CEEDATM のシンボリック条件 (続き)

シンボリック・フィールドバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE2E9	3	2505	CEEDATM または CEESECI への呼び出し内の input_seconds 値が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EA	3	2506	CEEDATM に渡されたピクチャー・ストリング内に元号 (<JJJ>、<CCCC>、<CCCCCCCC>) が使用されていましたが、入力された秒数値が対応範囲内にありませんでした。元号を判別できませんでした。
CEE2EM	3	2518	日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。
CEE2EV	2	2527	CEEDATM によって戻されたタイム・スタンプ・ストリングが切り捨てられました。
CEE2F6	1	2534	CEEDATE または CEEDATM への呼び出しで、月または曜日名に対して指定されたフィールド幅が不十分です。出力はブランクに設定されました。

使用上の注意: CEEDATM の逆は CEESECS です。CEESECS は、タイム・スタンプを秒数に変換します。

例

CBL LIB

```

*****
**                                     **
** Function: CEEDATM - convert seconds to **
**                                     **
**                                     **
** In this example, a call is made to CEEDATM **
** to convert a date represented in Lilian **
** seconds (the number of seconds since **
** 00:00:00 14 October 1582) to a character **
** format (such as 06/02/88 10:23:45). The **
** result is displayed. **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLDATM.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 DEST          PIC S9(9) BINARY VALUE 2.
01 SECONDS        COMP-2.
01 IN-DATE.
   02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
   03 Vstring-char   PIC X
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES
                        DEPENDING ON Vstring-length
                        of IN-DATE.
01 PICSTR.
   02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
   03 Vstring-char   PIC X
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES

```

```

                                DEPENDING ON Vstring-length
                                of PICSTR.
01 TIMESTP                      PIC X(80).
01 FC.
  02 Condition-Token-Value.
  COPY CEEIGZCT.
    03 Case-1-Condition-ID.
      04 Severity    PIC S9(4) COMP.
      04 Msg-No     PIC S9(4) COMP.
    03 Case-2-Condition-ID
      REDEFINES Case-1-Condition-ID.
      04 Class-Code PIC S9(4) COMP.
      04 Cause-Code PIC S9(4) COMP.
    03 Case-Sev-Ctl  PIC X.
    03 Facility-ID   PIC XXX.
  02 I-S-Info        PIC S9(9) COMP.
*
PROCEDURE DIVISION.
  PARA-CBLDATM.
*****
** Call CEESECS to convert timestamp of 6/2/88 **
** at 10:23:45 AM to Lilian representation **
*****
  MOVE 20 TO Vstring-length of IN-DATE.
  MOVE '06/02/88 10:23:45 AM'
    TO Vstring-text of IN-DATE.
  MOVE 20 TO Vstring-length of PICSTR.
  MOVE 'MM/DD/YY HH:MI:SS AP'
    TO Vstring-text of PICSTR.
  CALL 'CEESECS' USING IN-DATE, PICSTR,
    SECONDS, FC.

*****
** If CEESECS runs successfully, display result**
*****
  IF CEE000 of FC THEN
    DISPLAY Vstring-text of IN-DATE
      ' is Lilian second: ' SECONDS
  ELSE
    DISPLAY 'CEESECS failed with msg '
      Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
  END-IF.

*****
** Specify desired format of the output.      **
*****
  MOVE 35 TO Vstring-length OF PICSTR.
  MOVE 'ZD Mmmmmmmmmmmmmmmz YYYY at HH:MI:SS'
    TO Vstring-text OF PICSTR.

*****
** Call CEEDATM to convert Lilian seconds to   **
** a character timestamp                      **
*****
  CALL 'CEEDATM' USING SECONDS, PICSTR,
    TIMESTP, FC.

*****
** If CEEDATM runs successfully, display result**
*****
  IF CEE000 of FC THEN
    DISPLAY 'Input seconds of ' SECONDS
      ' corresponds to: ' TIMESTP
  ELSE
    DISPLAY 'CEEDATM failed with msg '
      Msg-No of FC UPON CONSOLE

```

```

        STOP RUN
    END-IF.

    GOBACK.

```

次の表に、CEEDATM からの出力例を示します。

input_seconds	picture_string	output_timestamp
12,799,191,601.000	YYMMDD HH:MI:SS YY-MM-DD YYMMDDHHMISS YY-MM-DD HH:MI:SS YYYY-MM-DD HH:MI:SS AP	880516 19:00:01 88-05-16 880516190001 88-05-16 19:00:01 1988-05-16 07:00:01 PM
12,799,191,661.986	DD Mmm YY DD MMM YY HH:MM WWW, MMM DD, YYYY ZH:MI AP Wwwwwwwwz, ZM/ZD/YY HH:MI:SS.99	16 May 88 16 MAY 88 19:01 MON, MAY 16, 1988 7:01 PM Monday, 5/16/88 19:01:01.98
12,799,191,662.009	YYYY YY Y MM ZM RRRR MMM Mmm Mmmmmmmmm Mmmmmmmmmz DD ZD DDD HH ZH MI SS 99 999 AP WWW Www Wwwwwwww Wwwwwwwwz	1988 88 8 05 5 V MAY May May May 16 16 137 19 19 01 02 00 009 PM MON Mon Monday Monday

CEEDAYS - 日付からリリアン形式への変換

CEEDAYS は、日付を表すストリングをリリアン形式に変換します。リリアン形式では、グレゴリオ暦の開始日 (1582 年 10 月 14 日 金曜日) から数えた日数として日付を表します。

CEEDAYS を COBOL 組み込み関数と併用しないでください。CEECBLDY は、組み込み関数を使用するプログラムに使用します。

CALL CEEDAYS の構文

```
►►CALL"CEEDAYS"—USING—input_char_date,—picture_string,—  
►—output_Lilian_date,—fc.—◄◄
```

input_char_date (入力)

picture_string の指定に準拠した形式で日付またはタイム・スタンプを表す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字ストリング。

文字ストリングに含められる文字数は 5 から 255 文字です。

input_char_date には、先行または末尾ブランクを含めることができます。日付の構文解析は、最初の非ブランク文字から始まります (ピクチャー・ストリング自体に先行ブランクが含まれる場合は、CEEDAYS がその位置を正確にスキップした後、構文解析が始まります)。

CEEDAYS は、*picture_string* で指定された日付形式によって判別される有効な日付を解析したら、残りの文字をすべて無視します。有効な日付範囲は、1582 年 10 月 15 日から 9999 年 12 月 31 日です。

picture_string (入力)

input_char_date で指定された日付の形式を示す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字ストリング。

picture_string 内の各文字は、*input_char_date* 内の文字に対応します。例えば、MMDDYY を *picture_string* として指定すると、CEEDAYS は *input_char_date* の値 060288 を 1988 年 6 月 2 日として読み取ります。

スラッシュ (/) などの区切り文字がピクチャー・ストリング内にある場合は、先行ゼロを省略することができます。例えば、次の CEEDAYS の呼び出しは、同じ値 148155 (1988 年 6 月 2 日) をそれぞれ *lildate* に割り当てます。

```
CALL CEEDAYS USING '6/2/88' , 'MM/DD/YY' , lildate, fc.  
CALL CEEDAYS USING '06/02/88' , 'MM/DD/YY' , lildate, fc.  
CALL CEEDAYS USING '060288' , 'MMDDYY' , lildate, fc.  
CALL CEEDAYS USING '88154' , 'YYDDD' , lildate, fc.
```

picture_string にコロンやスラッシュなどの文字 (例: HH:MI:SS YY/MM/DD) が含まれる場合はプレースホルダーと見なされますが、それ以外の場合は無視されます。

picture_string に日本元号のシンボル <JJJJ> が含まれる場合は、*input_char_date* の YY の位置に、日本元号での年号が入ります。例えば、1988 年は日本の昭和 63 年に相当します。

***output_Lilian_date* (出力)**

リリアン日付 (1582 年 10 月 14 日から数えた日数) を表す 32 ビットの 2 進整数。例えば、1988 年 5 月 16 日は、日数 148138 に相当します。

input_char_date に有効な日付が含まれていない場合は、*output_Lilian_date* が 0 に設定され、CEEDAYS が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

output_Lilian_date は整数なので、日付計算を容易に行うことができます。うるう年や年末偏差は計算に影響しません。

***fc* (出力)**

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 87. CEEDAYS のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2EB	3	2507	CEEDAYS または CEESECS に渡されたデータが不十分です。リリアン日付の値は計算されませんでした。
CEE2EC	3	2508	CEEDAYS または CEESECS に渡された日付値が無効です。
CEE2ED	3	2509	CEEDAYS または CEESECS に渡された元号が認識されませんでした。
CEE2EH	3	2513	CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EL	3	2517	CEEISEC 呼び出し内の月の値が認識されませんでした。
CEE2EM	3	2518	日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。
CEE2EO	3	2520	CEEDAYS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいは日付ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。
CEE2EP	3	2521	CEEDAYS または CEESECS に渡された <JJJJ>、<CCCC>、または <CCCCCCCC> の元号年数値がゼロでした。

使用上の注意

- CEEDAYS の逆は CEEDATE です。CEEDATE は、*output_Lilian_date* をリリアン形式から文字形式に変換します。
- 1582 年 10 月 15 日よりも前の日付に対して計算を実行するには、各日付の年号に 4000 を加算し、その日付をリリアン形式に変換してから計算します。計算結果が日数ではなく日付になる場合は、計算結果を日付ストリングに変換し、年号から 4000 を減算します。
- デフォルトでは、2 桁の年号は、システム日付より 80 年前から始まる 100 年間にあります。したがって、2006 年の場合、2 桁の年号はすべて 1926 から 2025 年の範囲内の日付を表します。このデフォルトの範囲を変更するには、CEESCEN 呼び出し可能サービスを使用します。
- *output_Lilian_date* は整数なので、日付計算を容易に行うことができます。うるう年や年末偏差は回避されます。

例

CBL LIB

```
*****
**                                     **
** Function: CEEDAYS - convert date to **
**                               Lilian format **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLDAYS.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 CHRDATE.
    02 Vstring-length      PIC S9(4) BINARY.
    02 Vstring-text.
    03 Vstring-char       PIC X
                           OCCURS 0 TO 256 TIMES
                           DEPENDING ON Vstring-length
                           of CHRDATE.
01 PICSTR.
    02 Vstring-length      PIC S9(4) BINARY.
    02 Vstring-text.
    03 Vstring-char       PIC X
                           OCCURS 0 TO 256 TIMES
                           DEPENDING ON Vstring-length
                           of PICSTR.
01 LILIAN                  PIC S9(9) BINARY.
01 FC.
    02 Condition-Token-Value.
    COPY CEEIGZCT.
        03 Case-1-Condition-ID.
            04 Severity     PIC S9(4) COMP.
            04 Msg-No       PIC S9(4) COMP.
        03 Case-2-Condition-ID
            REDEFINES Case-1-Condition-ID.
            04 Class-Code   PIC S9(4) COMP.
            04 Cause-Code   PIC S9(4) COMP.
        03 Case-Sev-Ctl     PIC X.
        03 Facility-ID      PIC XXX.
    02 I-S-Info             PIC S9(9) COMP.
*
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLDAYS.
*****
** Specify input date and length      **
*****
    MOVE 16 TO Vstring-length of CHRDATE.
    MOVE '1 January 2005'
```



```

                                TO Vstring-text of CHRDATE.

*****
** Specify a picture string that describes      **
** input date, and the picture string's length.**
*****
    MOVE 25 TO Vstring-length of PICSTR.
    MOVE 'ZD Mmmmmmmmmmmmmz YYYY'
      TO Vstring-text of PICSTR.

*****
** Call CEEDAYS to convert input date to a      **
** Lilian date                                **
*****
    CALL 'CEEDAYS' USING CHRDATE, PICSTR,
                          LILIAN, FC.

*****
** If CEEDAYS runs successfully, display result**
*****
    IF CEE000 of FC THEN
        DISPLAY Vstring-text of CHRDATE
          ' is Lilian day: ' LILIAN
    ELSE
        DISPLAY 'CEEDAYS failed with msg '
          Msg-No of FC UPON CONSOLE
        STOP RUN
    END-IF.

    GOBACK.

```

617 ページの『例: 日時のピクチャー・ストリング』

関連参照

615 ページの『ピクチャー文字項およびストリング』

CEEDYWK - リリアン日付からの曜日の計算

CEEDYWK は、リリアン日付の曜日を 1 から 7 までの数字として計算します。

CEEDYWK から戻される数値から、曜日を計算することができます。

CALL CEEDYWK の構文

```

▶▶—CALL—"CEEDYWK"—USING—input_Lilian_date,—output_day_no,—fc.—◀◀

```

input_Lilian_date (入力)

リリアン日付 (1582 年 10 月 14 日から数えた日数) を表す 32 ビットの 2 進整数。

例えば、1988 年 5 月 16 日は、日数 148138 に相当します。

input_Lilian_date の有効範囲は 1 から 3,074,324 (1582 年 10 月 15 日から 9999 年 12 月 31 日) です。

output_day_no (出力)

input_Lilian_date の曜日を表す 32 ビットの 2 進整数 (1 = 日曜日、2 = 月曜日、... 7 = 土曜日)。

input_Lilian_date が無効な場合は、*output_day_no* が 0 に設定され、CEEDYWK が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 88. CEEDYWK のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2EG	3	2512	CEEDATE または CEEDYWK への呼び出しで渡されたリリアン日付値が、対応範囲内にありませんでした。

例

CBL LIB

```
*****
**                                     **
** Function: Call CEEDYWK to calculate the day of the week from Lilian date **
**                                     **
** In this example, a call is made to CEEDYWK to return the day of the week on which a Lilian date falls. (A Lilian date is the number of days since 14 October 1582) **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLDYWK.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 LILIAN PIC S9(9) BINARY.
01 DAYNUM PIC S9(9) BINARY.
01 IN-DATE.
02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
02 Vstring-text.
03 Vstring-char PIC X,
OCCURS 0 TO 256 TIMES
DEPENDENT ON Vstring-length
of IN-DATE.
01 PICSTR.
02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
02 Vstring-text.
03 Vstring-char PIC X,
OCCURS 0 TO 256 TIMES
DEPENDENT ON Vstring-length
of PICSTR.
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
REDEFINES Case-1-Condition-ID.
04 Class-Code PIC S9(4) COMP.
```

```

            04 Cause-Code  PIC S9(4) COMP.
            03 Case-Sev-Ctl  PIC X.
            03 Facility-ID   PIC XXX.
02 I-S-Info                PIC S9(9) COMP.

PROCEDURE DIVISION.
  PARA-CBLDAYS.
** Call CEEDAYS to convert date of 6/2/88 to
**   Lilian representation
  MOVE 6 TO Vstring-length of IN-DATE.
  MOVE '6/2/88' TO Vstring-text of IN-DATE(1:6).
  MOVE 8 TO Vstring-length of PICSTR.
  MOVE 'MM/DD/YY' TO Vstring-text of PICSTR(1:8).
  CALL 'CEEDAYS' USING IN-DATE, PICSTR,
    LILIAN, FC.

** If CEEDAYS runs successfully, display result.
  IF CEE000 of FC THEN
    DISPLAY Vstring-text of IN-DATE
      ' is Lilian day: ' LILIAN
  ELSE
    DISPLAY 'CEEDAYS failed with msg '
      Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
  END-IF.

  PARA-CBLDYWK.

** Call CEEDYWK to return the day of the week on
** which the Lilian date falls
  CALL 'CEEDYWK' USING LILIAN , DAYNUM , FC.

** If CEEDYWK runs successfully, print results
  IF CEE000 of FC THEN
    DISPLAY 'Lilian day ' LILIAN
      ' falls on day ' DAYNUM
      ' of the week, which is a:'
** Select DAYNUM to display the name of the day
**   of the week.
    EVALUATE DAYNUM
      WHEN 1
        DISPLAY 'Sunday.'
      WHEN 2
        DISPLAY 'Monday.'
      WHEN 3
        DISPLAY 'Tuesday'
      WHEN 4
        DISPLAY 'Wednesday.'
      WHEN 5
        DISPLAY 'Thursday.'
      WHEN 6
        DISPLAY 'Friday.'
      WHEN 7
        DISPLAY 'Saturday.'
    END-EVALUATE
  ELSE
    DISPLAY 'CEEDYWK failed with msg '
      Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
  END-IF.

  GOBACK.

```

CEEGMT - 現在のグリニッジ標準時の取得

CEEGMT は現在のグリニッジ標準時 (GMT) を、リリアン日付と、1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数の両方として戻します。戻り値は、他の日時呼び出し可能サービスによって生成および使用される値と互換性があります。

ALL CEEGMT の構文

```
▶▶CALL"CEEGMT"USINGoutput_GMT_Lilian,—output_GMT_seconds,—fc.◀◀
```

output_GMT_Lilian (出力)

グリニッジ (イングランド) の現在の日付をリリアン形式 (1582 年 10 月 14 日から数えた日数) で表す 32 ビットの 2 進整数。

例えば、1988 年 5 月 16 日は、日数 148138 に相当します。システムから GMT を使用できない場合は、*output_GMT_Lilian* が 0 に設定され、CEEGMT が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

output_GMT_seconds (出力)

グリニッジ (イングランド) の現在の日時を 1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた (うるう秒は数えない) 秒数で表す、64 ビット長の浮動小数点数。

例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は秒数 86,401 ($24 \times 60 \times 60 + 01$) に相当します。1988 年 5 月 16 日の 19:00:01.078 は、秒数 12,799,191,601.078 に相当します。システムから GMT を使用できない場合は、*output_GMT_seconds* が 0 に設定され、CEEGMT が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 89. CEEGMT のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2E6	3	2502	システムから UTC/GMT を使用できませんでした。

使用上の注意

- CEEDATE は *output_GMT_Lilian* を文字日付に変換し、CEEDATM は *output_GMT_seconds* を文字タイム・スタンプに変換します。
- このサービスから意味のある結果を得るには、システムのクロックを現地時間に設定し、環境変数 TZ を正しく設定する必要があります。

- CEEGMT から戻される値から、経過時間を計算することができます。例えば、CEEGMT への呼び出しが行われてから、次に同じ呼び出しが行われるまでの経過時間を計算するには、2 つの戻り値の差を計算します。
- CEEUTC はこのサービスと同じです。

例

CBL LIB

```
*****
**                                     **
** Function: Call CEEGMT to get current   **
**           Greenwich Mean Time         **
**                                     **
** In this example, a call is made to CEEGMT **
** to return the current GMT as a Lilian date **
** and as Lilian seconds. The results are   **
** displayed.                             **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. IGZTGMT.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 LILIAN          PIC S9(9) BINARY.
01 SECS           COMP-2.
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity      PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No       PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
    REDEFINES Case-1-Condition-ID.
04 Class-Code   PIC S9(4) COMP.
04 Cause-Code   PIC S9(4) COMP.
03 Case-Sev-Ctl PIC X.
03 Facility-ID  PIC XXX.
02 I-S-Info     PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLGMT.
    CALL 'CEEGMT' USING LILIAN , SECS , FC.

    IF CEE000 of FC THEN
        DISPLAY 'The current GMT is also '
        'known as Lilian day: ' LILIAN
        DISPLAY 'The current GMT in Lilian '
        'seconds is: ' SECS
    ELSE
        DISPLAY 'CEEGMT failed with msg '
        Msg-No of FC UPON CONSOLE
        STOP RUN
    END-IF.

    GOBACK.
```

関連タスク

213 ページの『環境変数の設定』

CEEGMT0 - グリニッジ標準時から現地時間までのオフセットの取得

CEEGMT0 は、ローカル・システムの時刻とグリニッジ標準時 (GMT) の差を表す値を呼び出しルーチンに戻します。

CALL CEEGMTO の構文

```

▶▶CALL"CEEGMTO"USINGoffset_hours,—offset_minutes,—
▶offset_seconds,—fc.◀◀

```

offset_hours (出力)

GMT から現地時間までのオフセットを時間単位で表す 32 ビットの 2 進整数。

例えば太平洋標準時の場合、*offset_hours* は -8 に相当します。

offset_hours の範囲は -12 から +13 (+13 = +12 の時間帯における夏時間調整) です。

現地時間のオフセットを使用できない場合は、*offset_hours* が 0 になり、CEEGMTO が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

offset_minutes (出力)

現地時間が GMT よりも何分進んでいるか、または何分遅れているかを表す、32 ビットの 2 進整数。

offset_minutes の範囲は 0 から 59 です。

現地時間のオフセットを使用できない場合は、*offset_minutes* が 0 になり、CEEGMTO が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

offset_seconds (出力)

GMT から現地時間までのオフセットを秒単位で表す 64 ビット長の浮動小数点数。

例えば、太平洋標準時は GMT よりも 8 時間遅れています。現地時間が標準時で太平洋標準時間帯に属する場合、CEEGMTO は -28,800 (-8 * 60 * 60) を戻します。*offset_seconds* の範囲は -43,200 から +46,800 です。

offset_seconds を CEEGMT で使用すると、現地日時を計算することができます。

システムから現地時間のオフセットを使用できない場合は、*offset_seconds* が 0 に設定され、CEEGMTO が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 90. CEEGMTO のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。

表 90. CEEGMT0 のシンボリック条件 (続き)

シンボリック・フィールドバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE2E7	3	2503	UTC/GMT から現地時間までのオフセットをシステムから使用できませんでした。

使用上の注意

- CEEDATM は *offset_seconds* を文字タイム・スタンプに変換します。
- このサービスから意味のある結果を得るには、システムのクロックを現地時間に設定し、環境変数 TZ を正しく設定する必要があります。

例

CBL LIB

```

*****
**                                     **
** Function: Call CEEGMT0 to get offset from **
**           Greenwich Mean Time to local **
**           time                         **
**                                     **
** In this example, a call is made to CEEGMT0 **
** to return the offset from GMT to local time **
** as separate binary integers representing **
** offset hours, minutes, and seconds. The **
** results are displayed.                 **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. IGZTGMT0.

DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 HOURS          PIC S9(9) BINARY.
01 MINUTES        PIC S9(9) BINARY.
01 SECONDS COMP-2.
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity      PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No       PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
    REDEFINES Case-1-Condition-ID.
04 Class-Code   PIC S9(4) COMP.
04 Cause-Code  PIC S9(4) COMP.
03 Case-Sev-Ctl PIC X.
03 Facility-ID  PIC XXX.
02 I-S-Info     PIC S9(9) COMP.

PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLGMT0.
    CALL 'CEEGMT0' USING HOURS , MINUTES ,
        SECONDS , FC.

    IF CEE000 of FC THEN
        DISPLAY 'Local time differs from GMT '
            'by: ' HOURS ' hours, '
            MINUTES ' minutes, OR '
            SECONDS ' seconds. '
    ELSE

```

```

        DISPLAY 'CEEGMT0 failed with msg '
        Msg-No of FC UPON CONSOLE
        STOP RUN
    END-IF.

    GOBACK.

```

関連タスク

213 ページの『環境変数の設定』

関連参照

CEEGMT (673 ページの『CEEGMT - 現在のグリニッジ標準時の取得』)

217 ページの『ランタイム環境変数』

CEEISEC - 整数から秒への変換

CEEISEC は、年、月、日、時、分、秒、ミリ秒を表す 2 進整数を、1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数を表す数値に変換します。

CALL CEEISEC の構文

```

▶CALL—"CEEISEC"—USING—input_year,—input_months,—input_day,—
▶input_hours,—input_minutes,—input_seconds,—input_milliseconds,—
▶output_seconds,—fc.—

```

input_year (入力)

年を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_year の有効な値範囲は 1582 から 9999 です。

input_month (入力)

年を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_month の有効な値範囲は 1 から 12 です。

input_day (入力)

日を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_day の有効な値範囲は 1 から 31 です。

input_hours (入力)

時を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_hours の有効な値範囲は 0 から 23 です。

input_minutes (入力)

分を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_minutes の有効な値範囲は 0 から 59 です。

input_seconds (入力)

秒を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_seconds の有効な値範囲は 0 から 59 です。

input_milliseconds (入力)

ミリ秒を表す 32 ビットの 2 進整数。

input_milliseconds の有効な値範囲は 0 から 999 です。

output_seconds (出力)

1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた (うるう秒は数えない) 秒数を表す、64 ビット長の浮動小数点数。

例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は秒数 86,401 ($24 \times 60 \times 60 + 01$) に相当します。*output_seconds* の有効範囲は 86,400 から 265,621,679,999.999 (9999 年 12 月 31 日の 23:59:59.999) です。

入力値が無効な場合は、*output_seconds* が 0 に設定されます。

output_seconds をリリアン日数に変換するには、*output_seconds* を 86,400 (1 日分の秒数) で除算します。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 91. CEEISEC のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2EE	3	2510	CEEISEC または CEESECS への呼び出しで時間の値が認識されませんでした。
CEE2EF	3	2511	CEEISEC の呼び出しで渡された日のパラメーターが、指定された年および月に対して無効です。
CEE2EH	3	2513	CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EI	3	2514	CEEISEC の呼び出しで渡された年の値が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EJ	3	2515	CEEISEC 呼び出し内のミリ秒の値が認識されませんでした。
CEE2EK	3	2516	CEEISEC 呼び出し内の分の値が認識されませんでした。
CEE2EL	3	2517	CEEISEC 呼び出し内の月の値が認識されませんでした。
CEE2EN	3	2519	CEEISEC 呼び出し内の秒の値が認識されませんでした。

使用上の注意: CEEISEC の逆は CEESECI です。CEESECI は、秒数を整数の年、月、日、時、分、秒、ミリ秒に変換します。

例

CBL LIB

```

*****
**                                     **
** Function: Call CEEISEC to convert integers **
**           to seconds                    **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLISEC.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 YEAR                PIC S9(9) BINARY.
01 MONTH              PIC S9(9) BINARY.
01 DAYS               PIC S9(9) BINARY.
01 HOURS              PIC S9(9) BINARY.
01 MINUTES            PIC S9(9) BINARY.
01 SECONDS            PIC S9(9) BINARY.
01 MILLSEC            PIC S9(9) BINARY.
01 OUTSECS            COMP-2.
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity          PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No            PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
    REDEFINES Case-1-Condition-ID.
04 Class-Code        PIC S9(4) COMP.
04 Cause-Code        PIC S9(4) COMP.
03 Case-Sev-Ctl      PIC X.
03 Facility-ID       PIC XXX.
02 I-S-Info          PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLISEC.
*****
** Specify seven binary integers representing **
** the date and time as input to be converted **
** to Lilian seconds                        **
*****
    MOVE 2000 TO YEAR.
    MOVE 1 TO MONTH.
    MOVE 1 TO DAYS.
    MOVE 0 TO HOURS.
    MOVE 0 TO MINUTES.
    MOVE 0 TO SECONDS.
    MOVE 0 TO MILLSEC.
*****
** Call CEEISEC to convert the integers **
** to seconds                          **
*****
    CALL 'CEEISEC' USING YEAR, MONTH, DAYS,
                        HOURS, MINUTES, SECONDS,
                        MILLSEC, OUTSECS , FC.
*****
** If CEEISEC runs successfully, display result**
*****
    IF CEE000 of FC THEN
        DISPLAY MONTH '/' DAYS '/' YEAR
        ' AT ' HOURS ':' MINUTES ':' SECONDS
        ' is equivalent to ' OUTSECS ' seconds'
    ELSE
        DISPLAY 'CEEISEC failed with msg '
        Msg-No of FC UPON CONSOLE
        STOP RUN
    END-IF.

GOBACK.

```

CEELOCT - 現在の現地日時の取得

CEELOCT は、現在の現地日時をリリアン日付 (1582 年 10 月 14 日から数えた日数)、リリアン秒数 (1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数)、グレゴリオ文字ストリング (YYYYMMDDHHMISS999) としてそれぞれ返します。

これらの値は、他の日時の呼び出し可能サービスや、既存の組み込み関数と互換性があります。

CEELOCT は、CEEGMT、CEEGMTO、および CEEDATM の各サービスを個別に呼び出すのと同じ機能を実行します。ただし、CEELOCT の呼び出しの方が、はるかに高速です。

CALL CEELOCT の構文

```
►CALL "CEELOCT" USING output_Lilian, output_seconds,
output_Gregorian, fc.◄
```

output_Lilian (出力)

現在の現地日付をリリアン形式 (1 日目は 1582 年 10 月 15 日、148,887 日目は 1990 年 6 月 4 日) で表す、32 ビットの 2 進整数。

システムから現地時間を使用できない場合は、*output_Lilian* が 0 に設定され、CEELOCT が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

output_seconds (出力)

現在の現地日時を 1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた (うるう秒は数えない) 秒数で表す、64 ビット長の浮動小数点数。例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は秒数 86,401 (24*60*60 + 01) に相当します。1990 年 6 月 4 日の 19:00:01.078 は、秒数 12,863,905,201.078 に相当します。

システムから現地時間を使用できない場合は、*output_seconds* が 0 に設定され、CEELOCT が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

output_Gregorian (出力)

現地の年、月、日、時、分、秒、ミリ秒を表す、YYYYMMDDHHMISS999 形式の 17 バイト固定長文字ストリング。

output_Gregorian の形式が必要な形式と合わない場合は、CEEDATM 呼び出し可能サービスを使用して、*output_seconds* を別の形式に変換することができます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 92. CEELOCT のシンボリック条件

シンボリック・フィールドバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2F3	3	2531	システムから現地時間を使用できませんでした。

使用上の注意

- CEEGMT 呼び出し可能サービスを使用して、グリニッジ標準時 (GMT) を判断することができます。
- CEEGMT0 呼び出し可能サービスを使用して、GMT から現地時間までのオフセットを取得することができます。
- CEELOCT により戻される文字値は、既存の組み込み関数から生成される文字値と一致するようになっています。戻される数値を使用して、日付計算を単純化することができます。

例

CBL LIB

```

*****
**                                     **
** Function: Call CEELOCT to get current **
**          local time                 **
**                                     **
** In this example, a call is made to CEELOCT **
** to return the current local time in Lilian **
** days (the number of days since 14 October **
** 1582), Lilian seconds (the number of **
** seconds since 00:00:00 14 October 1582), **
** and a Gregorian string (in the form **
** YYMMDDMISS999). The Gregorian character **
** string is then displayed.             **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLLOCT.
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 LILIAN          PIC S9(9) BINARY.
01 SECONDS         COMP-2.
01 GREGORN        PIC X(17).
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity       PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No        PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
    REDEFINES Case-1-Condition-ID.
04 Class-Code    PIC S9(4) COMP.
04 Cause-Code    PIC S9(4) COMP.
03 Case-Sev-Ctl  PIC X.
03 Facility-ID   PIC XXX.
02 I-S-Info      PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLLOCT.
    CALL 'CEELOCT' USING LILIAN, SECONDS,
                        GREGORN, FC.

```

```

*****
** If CEELOCT runs successfully, display      **
**   Gregorian character string              **
*****
IF CEE000 of FC THEN
  DISPLAY 'Local Time is ' GREGORN
ELSE
  DISPLAY 'CEELOCT failed with msg '
  Msg-No of FC UPON CONSOLE
  STOP RUN
END-IF.

GOBACK.

```

CEEQCEN - 世紀ウィンドウの照会

CEEQCEN は、2 桁の年号値の世紀ウィンドウを照会します。

世紀ウィンドウを変更する場合は、CEEQCEN を使用して設定を取得した後、CEESCEN を使用して現行の設定を保存して復元します。

CALL CEEQCEN の構文

```

▶▶CALL"CEEQCEN"USINGcentury_start,—fc.◀◀

```

century_start (出力)

世紀ウィンドウの基になる年を表す、0 から 100 の整数。

例えば、日時の呼び出し可能サービスのデフォルトが有効な場合、2 桁の年号はすべて、システム日付より 80 年前から始まる 100 年間に属します。この後、CEEQCEN が値 80 を戻します。例えば、2006 年の場合、80 は、すべての 2 桁年号が 100 年間 (1926 年から 2025 年まで) にあることを示します。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 93. CEEQCEN のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。

例

CBL LIB

```

*****
**                                     **
** Function: Call CEEQCEN to query the **
**           date and time callable services **
**           century window           **
**                                     **
** In this example, CEEQCEN is called to query **

```

```

** the date at which the century window starts **
** The century window is the 100-year window **
** within which the date and time callable **
** services assume all two-digit years lie. **
**
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLQCEN.

DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 STARTCW PIC S9(9) BINARY.
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
REDEFINES Case-1-Condition-ID.
04 Class-Code PIC S9(4) COMP.
04 Cause-Code PIC S9(4) COMP.
03 Case-Sev-Ctl PIC X.
03 Facility-ID PIC XXX.
02 I-S-Info PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.

PARA-CBLQCEN.
*****
** Call CEEQCEN to return the start of the **
** century window **
*****

CALL 'CEEQCEN' USING STARTCW, FC.
*****
** CEEQCEN has no nonzero feedback codes to **
** check, so just display result. **
*****
IF CEE000 of FC THEN
    DISPLAY 'The start of the century '
    'window is: ' STARTCW
ELSE
    DISPLAY 'CEEQCEN failed with msg '
    Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
END-IF.

GOBACK.

```

CEESCEN - 世紀ウィンドウの設定

CEESCEN は、世紀ウィンドウを、他の日時の呼び出し可能サービスが使用できる 2 桁年号値に設定します。

次のような場合は、CEEDAYS または CEESECS と組み合わせて CEESCEN を使用します。

- 2 桁の年号を含む日付値を処理する場合 (YYMMDD 形式など)
- デフォルトの世紀間隔が特定のアプリケーションの要件に合わない場合

世紀ウィンドウを照会するには、CEEQCEN を使用します。

CALL CEESCEN の構文

```
CALL "CEESCEN" USING century_start, fc.
```

century_start

世紀ウィンドウを設定する、0 から 100 の整数。

例えば、値 80 の場合は、すべての 2 桁年桁が、システム日付より 80 年前から始まる 100 年間に属します。したがって、2006 年の場合、2 桁の年号はすべて 1926 から 2025 年の範囲内の日付を表すものと想定されます。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 94. CEESCEN のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2E6	3	2502	システムから UTC/GMT を使用できませんでした。
CEE2F5	3	2533	CEESCEN に渡された値が 0 から 100 の範囲内にありませんでした。

例

CBL LIB

```
*****
**                                     **
** Function: Call CEESCEN to set the   **
**           date and time callable services **
**           century window           **
**                                     **
** In this example, CEESCEN is called to change **
** the start of the century window to 30 years **
** before the system date. CEEQCEN is then **
** called to query that the change made. A **
** message that this has been done is then **
** displayed.                             **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLSCEN.

DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 STARTCW          PIC S9(9) BINARY.
01 FC.
02 Condition-Token-Value.
COPY CEEIGZCT.
03 Case-1-Condition-ID.
04 Severity         PIC S9(4) COMP.
04 Msg-No           PIC S9(4) COMP.
03 Case-2-Condition-ID
```

```

                REDEFINES Case-1-Condition-ID.
                04 Class-Code PIC S9(4) COMP.
                04 Cause-Code PIC S9(4) COMP.
                03 Case-Sev-Ctl PIC X.
                03 Facility-ID PIC XXX.
                02 I-S-Info PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLSCEN.
*****
** Specify 30 as century start, and two-digit
** years will be assumed to lie in the
** 100-year window starting 30 years before
** the system date.
*****
MOVE 30 TO STARTCW.

*****
** Call CEEECEN to change the start of the century
** window.
*****
CALL 'CEEECEN' USING STARTCW, FC.
IF NOT CEE000 of FC THEN
    DISPLAY 'CEEECEN failed with msg '
        Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
END-IF.

PARA-CBLQCEN.
*****
** Call CEEQCEN to return the start of the century
** window
*****
CALL 'CEEQCEN' USING STARTCW, FC.

*****
** CEEQCEN has no nonzero feedback codes to
** check, so just display result.
*****
DISPLAY 'The start of the century '
    'window is: ' STARTCW
GOBACK.

```

CEESECI - 秒から整数への変換

CEESECI は、1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数を表す数値を、年、月、日、時、分、秒、ミリ秒を表す 2 進整数に変換します。

文字形式ではなく数値形式の出力が必要な場合は、CEEDATM ではなく CEESECI を使用します。

CALL CEESECI の構文

```

▶▶—CALL—"CEESECI"—USING—input_seconds,—output_year,—output_month,—▶▶
▶—output_day,—output_hours,—output_minutes,—output_seconds,—▶▶
▶—output_milliseconds,—fc.—▶▶

```


input_seconds

1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた (うるう秒は数えない) 秒数を表す、64 ビット長の浮動小数点数。

例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は秒数 86,401 ($24 \times 60 \times 60 + 01$) に相当します。*input_seconds* の有効な値範囲は 86,400 から 265,621,679,999.999 (9999 年 12 月 31 日の 23:59:59.999) です。

input_seconds が無効な場合は、フィードバック・コードを除くすべての出力パラメーターが 0 に設定されます。

***output_year* (出力)**

年を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_year の有効な値範囲は 1582 から 9999 です。

***output_month* (出力)**

年を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_month の有効な値範囲は 1 から 12 です。

***output_day* (出力)**

日を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_day の有効な値範囲は 1 から 31 です。

***output_hours* (出力)**

時を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_hours の有効な値範囲は 0 から 23 です。

***output_minutes* (出力)**

分を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_minutes の有効な値範囲は 0 から 59 です。

***output_seconds* (出力)**

秒を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_seconds の有効な値範囲は 0 から 59 です。

***output_milliseconds* (出力)**

ミリ秒を表す 32 ビットの 2 進整数。

output_milliseconds の有効な値範囲は 0 から 999 です。

***fc* (出力)**

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 95. CEESECI のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2E9	3	2505	CEEDATM または CEESECI への呼び出し内の <i>input_seconds</i> 値が、対応範囲内にありませんでした。

使用上の注意

- CEESECI の逆は CEEISEC です。CEEISEC は、年、月、日、時、分、秒、ミリ秒を表す個々の 2 進整数を秒数に変換します。
- 入力値が秒ではなくリリアン日付の場合は、リリアン日付に 86,400 (1 日分の秒数) を乗算してから、新しい値を CEESECI に渡します。

例

CBL LIB

```
*****
**                                     **
** Function: Call CEESECI to convert seconds **
**           to integers                 **
**                                     **
** In this example a call is made to CEESECI **
** to convert a number representing the number **
** of seconds since 00:00:00 14 October 1582 **
** to seven binary integers representing year, **
** month, day, hour, minute, second, and **
** millisecond. The results are displayed in **
** this example.                         **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLSECI.

DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 INSECS                COMP-2.
01 YEAR                  PIC S9(9) BINARY.
01 MONTH                 PIC S9(9) BINARY.
01 DAYS                  PIC S9(9) BINARY.
01 HOURS                 PIC S9(9) BINARY.
01 MINUTES              PIC S9(9) BINARY.
01 SECONDS              PIC S9(9) BINARY.
01 MILLSEC              PIC S9(9) BINARY.
01 IN-DATE.
   02 Vstring-length    PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
      03 Vstring-char   PIC X,
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES
                        DEPENDING ON Vstring-length
                        of IN-DATE.
01 PICSTR.
   02 Vstring-length    PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
      03 Vstring-char   PIC X,
                        OCCURS 0 TO 256 TIMES
                        DEPENDING ON Vstring-length
                        of PICSTR.
01 FC.
   02 Condition-Token-Value.
   COPY CEEIGZCT.
      03 Case-1-Condition-ID.
         04 Severity    PIC S9(4) COMP.
         04 Msg-No      PIC S9(4) COMP.
      03 Case-2-Condition-ID
         REDEFINES Case-1-Condition-ID.
         04 Class-Code  PIC S9(4) COMP.
         04 Cause-Code  PIC S9(4) COMP.
      03 Case-Sev-Ctl   PIC X.
      03 Facility-ID    PIC XXX.
   02 I-S-Info          PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLSECS.
```

```

*****
** Call CEESECS to convert timestamp of 6/2/88
**   at 10:23:45 AM to Lilian representation
*****
MOVE 20 TO Vstring-length of IN-DATE.
MOVE '06/02/88 10:23:45 AM'
      TO Vstring-text of IN-DATE.
MOVE 20 TO Vstring-length of PICSTR.
MOVE 'MM/DD/YY HH:MI:SS AP'
      TO Vstring-text of PICSTR.
CALL 'CEESECS' USING IN-DATE, PICSTR,
                     INSECS, FC.
IF NOT CEE000 of FC THEN
    DISPLAY 'CEESECS failed with msg '
    Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
END-IF.

PARA-CBLSECI.
*****
** Call CEESECI to convert seconds to integers
*****
CALL 'CEESECI' USING INSECS, YEAR, MONTH,
                     DAYS, HOURS, MINUTES,
                     SECONDS, MILLSEC, FC.
*****
** If CEESECI runs successfully, display results
*****
IF CEE000 of FC THEN
    DISPLAY 'Input seconds of ' INSECS
    ' represents:'
    DISPLAY ' Year..... ' YEAR
    DISPLAY ' Month..... ' MONTH
    DISPLAY ' Day..... ' DAYS
    DISPLAY ' Hour..... ' HOURS
    DISPLAY ' Minute..... ' MINUTES
    DISPLAY ' Second..... ' SECONDS
    DISPLAY ' Millisecond.. ' MILLSEC
ELSE
    DISPLAY 'CEESECI failed with msg '
    Msg-No of FC UPON CONSOLE
    STOP RUN
END-IF.

GOBACK.

```

CEESECS - タイム・スタンプの秒への変換

CEESECS は、タイム・スタンプを表すストリングをリリアン秒 (1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数) に変換します。このサービスを使用すると、2 つのタイム・スタンプ間の経過時間を計算するなどの時間演算が容易になります。

CALL CEESECS の構文

```

▶▶—CALL—"CEESECS"—USING—input_timestamp,—picture_string,————▶
▶—output_seconds,—fc.————▶▶

```

***input_timestamp* (入力)**

picture_string の指定と一致した形式で日付またはタイム・スタンプを表す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字ストリング。

文字ストリングに含められる文字数は 5 から 80 ピクチャー文字です。

input_timestamp には、先行または末尾ブランクを含めることができます。構文解析は、最初の非ブランク文字から始まります (ピクチャー・ストリング自体に先行ブランクが含まれる場合は、CEESECS がその位置を正確にスキップした後、構文解析が始まります)。

picture_string で指定された日付形式によって判別される有効な日付を解析したら、CEESECS は残りの文字をすべて無視します。有効な日付範囲は、1582 年 10 月 15 日から 9999 年 12 月 31 日です。完全な日付を指定する必要があります。有効な時刻範囲は 00:00:00.000 から 23:59:59.999 です。

時刻値の一部または全部を省略すると、残りの値には 0 が代入されます。以下に、その例を示します。

```
1992-05-17-19:02 is equivalent to 1992-05-17-19:02:00
1992-05-17      is equivalent to 1992-05-17-00:00:00
```

***picture_string* (入力)**

input_timestamp で指定された日付またはタイム・スタンプ値の形式を示す、ハーフワード長の接頭部の付いた文字ストリング。

picture_string 内の各文字は、*input_timestamp* 内の文字を表します。例えば、MMDDYY HH.MI.SS を *picture_string* として指定すると、CEESECS は *input_char_date* の値 060288 15.35.02 を 1988 年 6 月 2 日の 3:35:02 PM として読み取ります。スラッシュ (/) などの区切り文字がピクチャー・ストリング内にある場合は、先行ゼロを省略することができます。例えば、次に示す CEESECS への呼び出しはすべて、同じ値をデータ項目 *secs* に割り当てます。

```
CALL CEESECS USING '92/06/03 15.35.03',
                  'YY/MM/DD HH.MI.SS', secs, fc.
CALL CEESECS USING '92/6/3 15.35.03',
                  'YY/MM/DD HH.MI.SS', secs, fc.
CALL CEESECS USING '92/6/3 3.35.03 PM',
                  'YY/MM/DD HH.MI.SS AP', secs, fc.
CALL CEESECS USING '92.155 3.35.03 pm',
                  'YY.DDD HH.MI.SS AP', secs, fc.
```

picture_string に日本元号のシンボル <JJJJ> が含まれる場合は、*input_timestamp* の YY の位置に、日本元号での年号が入ります。例えば、1988 年は日本の昭和 63 年に相当します。

***output_seconds* (出力)**

1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた (うるう秒は数えない) 秒数を表す、64 ビット長の浮動小数点数。例えば、1582 年 10 月 15 日の 00:00:01 は、リリアン形式の秒数 86,401 (24*60*60 + 01) に相当します。1988 年 5 月 16 日の 19:00:01.12 は、秒数 12,799,191,601.12 に相当します。

表現される最大値は 9999 年 12 月 31 日の 23:59:59.999 です。これは、リリアン形式では秒数 265,621,679,999.999 に相当します。

64 ビット長の浮動小数点値は、精度を失うことなく約 16 桁の有効小数桁数を正確に表現することができます。このため、最も近いミリ秒 (15 桁の小数桁数) を正確に使用することができます。

input_timestamp に有効な日付またはタイム・スタンプが含まれていない場合は、*output_seconds* が 0 に設定され、CEESECS が終了して非 CEE000 シンボリック・フィードバック・コードが戻されます。

output_seconds は経過時間を表すので、経過時間の計算を容易に行うことができます。うるう年や年末偏差は計算に影響しません。

fc (出力)

このサービスの結果を示す 12 バイトのフィードバック・コード (オプション)。

表 96. CEESECS のシンボリック条件

シンボリック・フィードバック・コード	重大度	メッセージ番号	メッセージ・テキスト
CEE000	0	—	サービスが正しく完了した。
CEE2EB	3	2507	CEEDAYS または CEESECS に渡されたデータが不十分です。リリアン日付の値は計算されませんでした。
CEE2EC	3	2508	CEEDAYS または CEESECS に渡された日付値が無効です。
CEE2ED	3	2509	CEEDAYS または CEESECS に渡された元号が認識されませんでした。
CEE2EE	3	2510	CEEISEC または CEESECS への呼び出しで時間の値が認識されませんでした。
CEE2EH	3	2513	CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、対応範囲内にありませんでした。
CEE2EK	3	2516	CEEISEC 呼び出し内の分の値が認識されませんでした。
CEE2EL	3	2517	CEEISEC 呼び出し内の月の値が認識されませんでした。
CEE2EM	3	2518	日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。
CEE2EN	3	2519	CEEISEC 呼び出し内の秒の値が認識されませんでした。
CEE2EP	3	2521	CEEDAYS または CEESECS に渡された <JJJJ>、<CCCC>、または <CCCCCCCC> の元号年数値がゼロでした。
CEE2ET	3	2525	CEESECS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいはタイム・スタンプ・ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。

使用上の注意

- CEESECS の逆は CEEDATM です。CEEDATM は、*output_seconds* を文字形式に変換します。
- デフォルトでは、2 桁の年号は、システム日付より 80 年前から始まる 100 年間にあります。したがって、2006 年の場合、2 桁の年号はすべて 1926 から 2025 年の範囲内の日付を表します。この範囲を変更するには、CEESCEN 呼び出し可能サービスを使用します。

例

CBL LIB

```
*****
**                                     **
** Function: Call CEESECS to convert   **
**         timestamp to number of seconds **
**                                     **
** In this example, calls are made to CEESECS **
** to convert two timestamps to the number of **
** seconds since 00:00:00 14 October 1582. **
** The Lilian seconds for the earlier **
** timestamp are then subtracted from the **
** Lilian seconds for the later timestamp **
** to determine the number of between the **
** two. This result is displayed. **
**                                     **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLSECS.

DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01 SECOND1          COMP-2.
01 SECOND2          COMP-2.
01 TIMESTP.
   02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
   03 Vstring-char   PIC X,
                      OCCURS 0 TO 256 TIMES
                      DEPENDING ON Vstring-length
                      of TIMESTP.
01 TIMESTP2.
   02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
   03 Vstring-char   PIC X,
                      OCCURS 0 TO 256 TIMES
                      DEPENDING ON Vstring-length
                      of TIMESTP2.
01 PICSTR.
   02 Vstring-length PIC S9(4) BINARY.
   02 Vstring-text.
   03 Vstring-char   PIC X,
                      OCCURS 0 TO 256 TIMES
                      DEPENDING ON Vstring-length
                      of PICSTR.
01 FC.
   02 Condition-Token-Value.
   COPY CEEIGZCT.
   03 Case-1-Condition-ID.
   04 Severity          PIC S9(4) COMP.
   04 Msg-No           PIC S9(4) COMP.
   03 Case-2-Condition-ID
      REDEFINES Case-1-Condition-ID.
   04 Class-Code        PIC S9(4) COMP.
   04 Cause-Code        PIC S9(4) COMP.
   03 Case-Sev-Ctl      PIC X.
   03 Facility-ID       PIC XXX.
```

02 I-S-Info PIC S9(9) COMP.
PROCEDURE DIVISION.

 PARA-SECS1.

** Specify first timestamp and a picture string
** describing the format of the timestamp
** as input to CEESECS

 MOVE 25 TO Vstring-length of TIMESTP.
 MOVE '1969-05-07 12:01:00.000'
 TO Vstring-text of TIMESTP.
 MOVE 25 TO Vstring-length of PICSTR.
 MOVE 'YYYY-MM-DD HH:MI:SS.999'
 TO Vstring-text of PICSTR.

** Call CEESECS to convert the first timestamp
** to Lilian seconds

 CALL 'CEESECS' USING TIMESTP, PICSTR,
 SECOND1, FC.
 IF NOT CEE000 of FC THEN
 DISPLAY 'CEESECS failed with msg '
 Msg-No of FC UPON CONSOLE
 STOP RUN
 END-IF.

 PARA-SECS2.

** Specify second timestamp and a picture string
** describing the format of the timestamp as
** input to CEESECS.

 MOVE 25 TO Vstring-length of TIMESTP2.
 MOVE '2004-01-01 00:00:01.000'
 TO Vstring-text of TIMESTP2.
 MOVE 25 TO Vstring-length of PICSTR.
 MOVE 'YYYY-MM-DD HH:MI:SS.999'
 TO Vstring-text of PICSTR.

** Call CEESECS to convert the second timestamp
** to Lilian seconds

 CALL 'CEESECS' USING TIMESTP2, PICSTR,
 SECOND2, FC.
 IF NOT CEE000 of FC THEN
 DISPLAY 'CEESECS failed with msg '
 Msg-No of FC UPON CONSOLE
 STOP RUN
 END-IF.

 PARA-SECS2.

** Subtract SECOND2 from SECOND1 to determine the
** number of seconds between the two timestamps

 SUBTRACT SECOND2 FROM SECOND1.
 DISPLAY 'The number of seconds between '
 Vstring-text OF TIMESTP ' and '
 Vstring-text OF TIMESTP2 ' is: ' SECOND2.

 GOBACK.

617 ページの『例: 日時のピクチャー・ストリング』

関連参照

615 ページの『ピクチャー文字項およびストリング』

CEEUTC - 協定世界時の取得

CEEUTC は CEEGMT と同じです。

関連参照

CEEGMT (673 ページの『CEEGMT - 現在のグリニッジ標準時の取得』)

IGZEDT4 - 現在日付の取得

IGZEDT4 は、4 桁年号を使用した現在日付を YYYYMMDD 形式で戻します。

CALL IGZEDT4 の構文

```
▶▶—CALL—"IGZEDT4"—USING—output_char_date.————▶▶
```

output_char_date (出力)

現在の年、月、日を表す、YYYYMMDD 形式の 8 バイト固定長文字ストリング。

使用上の注意: IGZEDT4 は、CICS ではサポートされません。

例

CBL LIB

```
*****
** Function: IGZEDT4 - get current date in the **
**                      format YYYYMMDD.      **
*****
IDENTIFICATION DIVISION.
PROGRAM-ID. CBLED4.

. . .
DATA DIVISION.
WORKING-STORAGE SECTION.
01  CHRDATE                      PIC S9(8) USAGE DISPLAY.

. . .
PROCEDURE DIVISION.
PARA-CBLED4.

*****
** Call IGZEDT4.
*****
CALL 'IGZEDT4' USING BY REFERENCE CHRDATE.
*****
** IGZEDT4 has no nonzero return code to
**   check, so just display result.
*****
DISPLAY 'The current date is: '
      CHRDATE
GOBACK.
```


付録 F. XML 参照資料

ここでは、XML パーサーおよび XML GENERATE ステートメントが特殊レジスター XML-CODE に戻す、XML 例外コードについて記載します。また、パーサーが検査する、XML 仕様の整形形式性制約条件に関する資料も記載します。

関連参照

『継続を許可する XML PARSE 例外』
700 ページの『継続を許可しない XML PARSE 例外』
706 ページの『XML GENERATE 例外』
703 ページの『XML 準拠』
XML 仕様

継続を許可する XML PARSE 例外

以下の表は、XML EXCEPTION イベントに関連し、XML パーサーが XML データの処理を続行可能である場合にパーサーが特殊レジスター XML-CODE に戻す例外コードを示しています。

すなわち、コードは、以下の範囲のいずれかが入っています。

- 1-99
- 100,001 から 165,535
- 200,001 から 265,535

この表には、それぞれの例外と、例外発生後の続行要求時にパーサーが実行するアクションを記述しています。記述の中には、以下の用語を使用しているものがあります。

- 基本的な文書エンコード
- 文書エンコード宣言
- 外部 ASCII コード・ページ
- 外部 EBCDIC コード・ページ

用語の定義については、以下の関連タスクの『XML 文書のエンコード方式についての理解』を参照してください。

表 97. 継続を許可する XML PARSE 例外

コード	説明	継続されるパーサーのアクション
1	パーサーで、エレメントの内容に含まれない空白文字を走査中に、無効文字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。

表 97. 継続を許可する XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明	継続されるパーサーのアクション
2	パーサーで、エレメント内容に含まれない、処理命令、エレメント、コメント、または文書タイプ宣言の無効な開始が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
3	パーサーで、重複する属性名が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
4	パーサーで、属性値にマークアップ文字 '<' が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
5	エレメントの開始および終了タグ名が一致しません。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
6	パーサーで、エレメント内容に無効文字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
7	パーサーで、エレメント内容に、エレメント、コメント、処理命令、または CDATA セクションの無効な開始が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。

表 97. 継続を許可する XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明	継続されるパーサーのアクション
8	パーサーで、エレメント内容に、一致する開始文字シーケンス ' <code><![CDATA[</code> ' のない、CDATA 終了文字シーケンス ' <code>]]></code> ' が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
9	パーサーで、コメント内に無効文字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
10	パーサーで、コメント内に、後にパーサーで、コメント内に、後に ' <code>></code> ' が付いていない文字シーケンス ' <code>'</code> ' (2 つのハイフン) が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
11	パーサーで、処理命令データ・セグメント内に無効文字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
12	処理命令ターゲット名が、小文字、大文字、または大/小文字混合の ' <code>xml</code> ' でした。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
13	パーサーで、16 進文字参照 (形式 <code>&#xddd;</code> の) 内に無効な数字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。

表 97. 継続を許可する XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明	継続されるパーサーのアクション
14	パーサーで、10 進数文字参照 (形式 <code>&#ddd;</code> の) 内に無効な数字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
15	XML 宣言内のエンコード宣言値が小文字または大文字の A から Z で始まっていませんでした。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
16	文字参照が適切な XML 文字を参照していませんでした。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
17	パーサーで、エンティティ参照名に無効文字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
18	パーサーで、属性値に無効文字が見つかりました。	パーサーは、文書の終わりに到達するまで、あるいは継続不能の原因となるエラーを検出するまで、エラーの検出を継続します。パーサーでは、 END-OF-DOCUMENT イベントを除き、追加の標準イベントをシグナル通知しません。
70	基本的な文書エンコードは EBCDIC で、外部 EBCDIC コード・ページがサポートされていますが、文書エンコード宣言ではサポートされる EBCDIC コード・ページが指定されていませんでした。	パーサーでは、外部 EBCDIC コード・ページで指定されたエンコードが使用されます。
71	基本的な文書エンコードは EBCDIC で、文書エンコード宣言ではサポートされる EBCDIC エンコードが指定されていますが、外部 EBCDIC コード・ページはサポートされていません。	パーサーは、文書エンコード宣言で指定されたエンコードを使用します。

表 97. 継続を許可する XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明	継続されるパーサーのアクション
72	基本的な文書エンコードは EBCDIC ですが、外部 EBCDIC コード・ページはサポートされておらず、文書にエンコード宣言が含まれていませんでした。	パーサーは、EBCDIC コード・ページ 1140 (USA、カナダ、... ユーロ国別拡張コード・ページ) を使用します。
73	基本的な文書エンコードは EBCDIC ですが、外部 EBCDIC コード・ページでも文書エンコード宣言でも、サポートされる EBCDIC コード・ページが指定されていませんでした。	パーサーは、EBCDIC コード・ページ 1140 (USA、カナダ、... ユーロ国別拡張コード・ページ) を使用します。
80	基本的な文書エンコードは ASCII で、外部 ASCII コード・ページがサポートされていますが、文書エンコード宣言ではサポートされる ASCII コード・ページが指定されていませんでした。	パーサーでは、外部 ASCII コード・ページで指定されたエンコードが使用されます。
81	基本的な文書エンコードは ASCII で、文書エンコード宣言ではサポートされる ASCII エンコードが指定されていますが、外部 ASCII コード・ページはサポートされていません。	パーサーは、文書エンコード宣言で指定されたエンコードを使用します。
82	基本的な文書エンコードは ASCII ですが、外部 ASCII コード・ページはサポートされておらず、文書にエンコード宣言が含まれていませんでした。	パーサーでは、ASCII コード・ページ 1252 (MS Windows Latin 1) が使用されます。
83	基本的な文書エンコードは ASCII ですが、外部 ASCII コード・ページでも文書エンコード宣言でも、サポートされる ASCII コード・ページが指定されていませんでした。	パーサーでは、ASCII コード・ページ 1252 (MS Windows Latin 1) が使用されます。
92	文書データ項目は英数字でしたが、基本的な文書エンコードは Unicode UTF-16 でした。	パーサーではコード・ページ 1202 (Unicode UTF-16) が使用されます。
100,001 から 165,535	外部 EBCDIC コード・ページおよび文書エンコード宣言に指定された、サポートされる EBCDIC コード・ページがそれぞれ異なっていました。XML-CODE には、エンコード宣言に 100,000 をプラスするためのコード・ページ CCSID が含まれています。	EXCEPTION イベントから戻る前に、XML-CODE をゼロに設定した場合、パーサーでは、外部 EBCDIC コード・ページによって指定したエンコードが使用されます。文書エンコード宣言に対して (100,000 を減算して) XML-CODE を CCSID に設定した場合、パーサーではこのエンコードが使用されます。

表 97. 継続を許可する XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明	継続されるパーサーのアクション
200,001 から 265,535	外部 ASCII コード・ページおよび文書エンコード宣言に指定された、サポートされる ASCII コード・ページがそれぞれ異なっていました。XML-CODE には、エンコード宣言に対する CCSID と、値 200,000 が含まれています。	EXCEPTION イベントから戻る前に、XML-CODE をゼロに設定した場合、パーサーでは、外部 ASCII コード・ページによって指定したエンコードが使用されます。文書エンコード宣言に対して (200,000 を減算して) XML-CODE を CCSID に設定した場合、パーサーではこのエンコードが使用されます。

関連概念

400 ページの『XML-CODE の内容』

関連タスク

404 ページの『XML 文書のエンコード方式についての理解』

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』

継続を許可しない XML PARSE 例外

以下の XML 例外の場合、XML-CODE がゼロに設定されており、例外の処理後に制御がパーサーに返される場合であっても、パーサーからこれ以上イベントが返されることはありません。

制御は、ON EXCEPTION 句で指定されているステートメントに渡されるか、または XML PARSE ステートメント (ON EXCEPTION 句をコーディングしていない場合) の最後に渡されます。

表 98. 継続を許可しない XML PARSE 例外

コード	説明
100	パーサーで、XML 宣言の開始を走査中に、文書の末尾に達しました。
101	パーサーで、XML 宣言の末尾を走査中に、文書の末尾に達しました。
102	パーサーで、ルート・エレメントを走査中に、文書の末尾に達しました。
103	パーサーで、XML 宣言内のバージョン情報を走査中に、文書の末尾に達しました。
104	パーサーで、XML 宣言内のバージョン情報値を走査中に、文書の末尾に達しました。
106	パーサーで、XML 宣言内のエンコード宣言値を走査中に、文書の末尾に達しました。
108	パーサーで、XML 宣言内の standalone 宣言値を走査中に、文書の末尾に達しました。
109	パーサーで、属性名を走査中に、文書の末尾に達しました。
110	パーサーで、属性値を走査中に、文書の末尾に達しました。
111	パーサーで、属性値内の文字参照またはエンティティー参照を走査中に、文書の末尾に達しました。
112	パーサーで、空のエレメント・タグを走査中に、文書の末尾に達しました。
113	パーサーで、ルート・エレメント名を走査中に、文書の末尾に達しました。

表 98. 継続を許可しない XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明
114	パーサーで、エレメント名を走査中に、文書の末尾に達しました。
115	パーサーで、エレメント内容の文字データを走査中に、文書の末尾に達しました。
116	パーサーで、エレメント内容の処理命令を走査中に、文書の末尾に達しました。
117	パーサーで、エレメント内容のコメントまたは CDATA セクションを走査中に文書の末尾に達しました。
118	パーサーで、エレメント内容のコメントを走査中に文書の末尾に達しました。
119	パーサーで、エレメント内容の CDATA セクションを走査中に文書の末尾に達しました。
120	パーサーで、エレメント内容の文字参照またはエンティティー参照を走査中に文書の末尾に達しました。
121	パーサーで、ルート・エレメントの末尾を走査中に、文書の末尾に達しました。
122	パーサーで、文書タイプ宣言の無効の可能性のある開始が見つかりました。
123	パーサーで、2 つ目の文書タイプ宣言が見つかりました。
124	ルート・エレメントの先頭文字が、文字、'_'、または ':' ではありませんでした。
125	エレメントの先頭の属性名の前頭文字が、文字、'_'、または ':' ではありませんでした。
126	パーサーで、エレメント名内に、またはエレメント名の後のいずれかに無効文字が見つかりました。
127	パーサーで、属性名の後に '=' 以外の文字が見つかりました。
128	パーサーで、無効な属性値区切り文字が見つかりました。
130	属性名の前頭文字が、文字、'_'、または ':' ではありませんでした。
131	パーサーで、属性名内に、または属性名の後のいずれかに無効文字が見つかりました。
132	空のエレメント・タグが、'/' の後に続く '>' で終了しませんでした。
133	エレメント終了タグ名の前頭文字が、文字、'_'、または ':' ではありませんでした。
134	エレメント終了タグ名が '>' で終了しませんでした。
135	エレメント名の前頭文字が、文字、'_'、または ':' ではありませんでした。
136	パーサーで、エレメント内容に、コメントまたは CDATA セクションの無効な開始が見つかりました。
137	パーサーで、コメントの無効な開始が見つかりました。
138	処理命令ターゲット名の前頭文字が、文字、'_'、または ':' ではありませんでした。
139	パーサーで、処理命令ターゲット名内に、または処理命令ターゲット名の後のいずれかに無効文字が見つかりました。
140	処理命令が終了文字シーケンス '?>' で終了しませんでした。
141	パーサーで、文字参照またはエンティティー参照内の '&' の後に無効文字が見つかりました。
142	バージョン情報が XML 宣言にありませんでした。

表 98. 継続を許可しない XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明
143	XML 宣言内の 'version' の後に '=' がありませんでした。
144	XML 宣言内のバージョン宣言値が欠落しているか、または不適切に区切られています。
145	XML 宣言内のバージョン情報値が不適切な文字を指定したか、または開始と終了の区切り文字が一致しませんでした。
146	パーサーで、XML 宣言内のバージョン情報値の終了区切り文字の後に無効文字が見つかりました。
147	パーサーで、XML 宣言にオプションのエンコード宣言ではない、無効な属性が見つかりました。
148	XML 宣言内の 'encoding' の後に '=' がありませんでした。
149	XML 宣言内のエンコード宣言値が欠落しているか、または不適切に区切られています。
150	XML 宣言内のエンコード宣言値が不適切な文字を指定したか、または開始と終了の区切り文字が一致しませんでした。
151	パーサーで、XML 宣言内のエンコード宣言値の終了区切り文字の後に無効文字が見つかりました。
152	パーサーで、XML 宣言にオプションの standalone 宣言ではない、無効な属性が見つかりました。
153	XML 宣言内の standalone の後に = がありませんでした。
154	XML 宣言内の standalone 宣言値が欠落しているか、または不適切に区切られています。
155	standalone 宣言値が 'yes' または 'no' 以外の値になっていました。
156	XML 宣言内の standalone 宣言値が不適切な文字を指定したか、または開始と終了の区切り文字が一致しませんでした。
157	パーサーで、XML 宣言内の standalone 宣言値の終了区切り文字の後に無効文字が見つかりました。
158	XML 宣言が正しい文字シーケンス '?>' で終了しなかったか、無効属性が含まれていました。
159	パーサーで、ルート・エレメントの末尾の後に文書タイプ宣言の開始が見つかりました。
160	パーサーで、ルート・エレメントの末尾の後にエレメントの開始が見つかりました。
315	基本的な文書エンコードは UTF-16 ビッグ・エンディアンですが、このプラットフォームではパーサーはビッグ・エンディアンをサポートしません。
316	基本的な文書エンコードは UCS4 ですが、パーサーは UCS4 をサポートしません。
317	パーサーで、文書エンコードを判別できません。文書は破損している可能性があります。
318	基本的な文書エンコードは UTF-8 ですが、パーサーは UTF-8 をサポートしません。
320	文書データ項目は国別でしたが、基本的な文書エンコードは EBCDIC でした。
321	文書データ項目は国別でしたが、基本的な文書エンコードは ASCII でした。

表 98. 継続を許可しない XML PARSE 例外 (続き)

コード	説明
322	文書データ項目はネイティブの英数字データ項目ですが、基本的な文書エンコードは EBCDIC です。
323	文書データ項目はホストの英数字データ項目ですが、基本的な文書エンコードは ASCII です。
500-599	内部エラーこのエラーをサービス担当者に報告してください。

関連概念

400 ページの『XML-CODE の内容』

関連タスク

407 ページの『XML パーサーが検出する例外の処理』

XML 準拠

COBOL for Windows に組み込まれている XML パーサーは、XML 仕様の定義に従った規格合致 XML プロセッサではありません。XML パーサーは、構文解析する XML 文書の妥当性検査を行いません。XML パーサーは、各種の整形式性エラーの検査は行いますが、妥当性検証をしない XML プロセッサに必要とされるアクションのすべてを行うわけではありません。

特に、XML パーサーは、内部文書タイプ定義 (DTD 内部サブセット) を処理しません。したがって、XML パーサーは、デフォルト属性値の提供、属性値の正規化、および事前定義エンティティを除く、内部エンティティの置換テキストの組み込みを行いません。ただし、XML パーサーは、文書タイプ宣言全体を DOCUMENT-TYPE-DESCRIPTOR XML イベントの XML-TEXT または XML-NTEXT の内容として渡します。したがって、アプリケーションは、必要に応じて、これらのアクションを実行することができます。

オプションとして、パーサーを使用すると、プログラムはエラー後に XML 文書の処理を続行することができます。処理の続行を可能にする目的は、XML 文書および処理プロシーチャーのデバッグを容易にすることです。

XML 仕様での定義を要約すると、以下のような、テキスト・オブジェクトは整形式の XML 文書です。

- 概して言えば、XML 文書の文法に準拠している。
- XML 仕様に規定されている明示的な整形式性制約条件をすべて満たしている。
- 文書内で直接的または間接的に参照する、構文解析したエンティティ (テキストのセグメント) がそれぞれ、整形式である。

COBOL XML パーサーでは、文書タイプ宣言を除き、文書が XML 文法に準拠しているかを検査します。文書タイプ宣言は、チェックされない状態でそのままアプリケーションに渡されます。

以下の文書は、XML 仕様からの注釈です。オリジナル URL (www.w3.org/TR/REC-xml) に存在しない内容については、W3C は責任を負いません。注釈はすべて、仕様には含まれておらず、イタリック体で記述されています。

Copyright (C) 1994-2001 W3C^(R) (マサチューセッツ工科大学、フランス国立情報処理自動化研究所 (Institut National de Recherche en Informatique et en Automatique)、慶応義塾大学)、All Rights Reserved. W3C の責任、商標、文書使用、およびソフトウェア・ライセンスの規則が適用されます。 (www.w3.org/Consortium/Legal/ipr-notice-20000612)

また、XML 仕様には、12 事項の明示的な整形形式性制約が記述されています。COBOL XML パーサーが部分的または全面的に検査する制約事項は太字で記述されています。

1. 内部サブセット内のパラメーター・エンティティ (PE): 「内部 DTD サブセットの中では、パラメーター・エンティティ参照は、マークアップ宣言の内部ではなく、マークアップ宣言が発生できる場所でのみ発生できない。(この制約は、外部パラメーター・エンティティの中で発生する参照や外部サブセットには適用されない。)」

パーサーは内部 DTD サブセットを処理しないので、この制約を強制しません。

2. 外部サブセット: 「外部サブセットが存在している場合は、そのプロダクションを extSubset に一致させなくてはならない。」

パーサーは外部サブセットを処理しないので、この制約を強制しません。

3. 宣言と宣言の間のパラメーター・エンティティ: 「DeclSep のパラメーター・エンティティ参照のテキストの置換はそのプロダクションを extSubsetDecl に一致させなくてはならない。」

パーサーは内部 DTD サブセットを処理しないので、この制約を強制しません。

4. **エレメント・タイプの突き合わせ**: 「エレメントの終了タグの名前は、開始タグのエレメント・タイプと一致させなければならない。」

パーサーはこの制約を強制します。

5. **属性指定の一意性**: 「同じ開始タグまたは空エレメント・タグの中に 1 回を超えて現れてよい属性名はない。」

パーサーで、一意性について、指定したエレメント内の最大 10 までの属性名が検査され、この制約は部分的にサポートされます。アプリケーションは、この限度を超える属性名を検査できます。

6. 外部エンティティ参照の禁止: 「属性値は、外部エンティティへの直接的または間接的エンティティ参照を含むことができない。」

パーサーはこの制約を強制しません。

7. 属性値内の '<' の禁止: 「属性値の中で直接的または間接的に参照するエンティティの置換テキストは、'<' を含んではならない。」

パーサーはこの制約を強制しません。

8. **正しい文字:**「文字参照の使用に言及する文字は、そのプロダクションを Char に一致させなくてはならない。」

パーサーはこの制約を強制します。

9. **エンティティの宣言:**「DTD のない文書、パラメーター・エンティティ参照が含まれない内部 DTD サブセットだけしかない文書、または standalone='yes' の文書においては、外部サブセットまたはパラメーター・エンティティ内で発生しないエンティティ参照において与えられている Name が、外部サブセット、またはパラメーター・エンティティ内で発生しないエンティティ宣言の中のものとは一致しなければならない。ただし、整形形式文書は、次のエンティティ amp、lt、gt、apos、quot を宣言する必要はない。一般的エンティティの宣言は、属性リスト宣言内のデフォルト値に現れる、それに対するどの参照よりも先行しなければならない。」

エンティティが外部サブセットまたは外部パラメーター・エンティティで宣言されている場合、妥当性検査をしないプロセッサは、それらの宣言を読み取って処理するよう強制されないことに注意してください。そのような文書の場合、エンティティを宣言しなければならないという規則は、standalone='yes' の場合にのみ整形形式制約です。

パーサーはこの制約を強制しません。

10. **解析済みエンティティ:**「エンティティ参照は、解析対象外エンティティの名前を含んではならない。解析対象外エンティティを参照してもよいのは、ENTITY 型または ENTITIES 型として宣言した属性値の中だけである。」

パーサーはこの制約を強制しません。

11. **再帰の禁止:**「解析されるエンティティは、直接的または間接的を問わず、それ自身への再帰的参照を含めてはならない。」

パーサーはこの制約を強制しません。

12. **DTD 内:**「パラメーター・エンティティ参照が出現してよいのは、DTD の中だけである。」

このエラーは起こらないので、パーサーはこの制約を強制しません。

上記の文書は、XML 仕様からの注釈です。オリジナル URL (www.w3.org/TR/REC-xml) に存在しない内容については、W3C は責任を負いません。上記の注釈はすべて、仕様には含まれていません。本文書は、W3C メンバーや他の関係者による校閲を受け、ディレクターによって W3C 推奨文書として承認されています。本文書は継続的に提供される文書であり、参照資料として使用されたり、別文書で仕様に含まれる資料として引用される可能性があります。仕様の正規版は英語バージョンで、W3C のサイトで確認することができます。翻訳文書については、翻訳上の誤りが含まれる可能性があります。

関連概念

387 ページの『COBOL での XML パーサー』

関連参照

Extensible Markup Language (XML)

2.8 Prolog and document type declaration (「XML 仕様」)

XML GENERATE 例外

XML 生成時に、いずれかの例外コードが特殊レジスター XML-CODE に戻される場合があります。このような例外が発生すると、ON EXCEPTION 句で指定されたステートメント、または、ON EXCEPTION 句をコーディングしていない場合には、XML GENERATE ステートメントの末尾に制御が渡されます。

表 99. XML GENERATE 例外

コード	説明
400	受信は小さすぎて、生成された XML 文書を入れられませんでした。指定されていれば、COUNT IN データ項目に、実際に生成された文字位置のカウントが格納されています。
401	マルチバイト・データ名に含まれている文字が、Unicode に変換されたときに XML エlement 名内で無効となりました。
402	マルチバイト・データ名の先頭文字が、Unicode に変換されたときに、XML エlement 名の先頭文字として無効となりました。
403	OCCURS DEPENDING ON 変数の値が 16,777,215 を超えました。
410	外部コード・ページは、Unicode への変換に対応していません。
411	外部コード・ページは、サポートされる単一バイトの EBCDIC コード・ページではありません。
412	外部コード・ページは、サポートされる単一バイトの ASCII コード・ページではありません。
413	文書データ項目は英数字ですが、実行時のロケールがコンパイル時のロケールと一致していません。
600-699	内部エラーこのエラーをサービス担当者に報告してください。

関連タスク

424 ページの『XML 出力生成時のエラーの処理』

付録 G. JNI.cpy

このリストには、COBOL プログラムから Java Native Interface (JNI) サービスにアクセスすることができる、コピーブック JNI.cpy を記述します。

JNI.cpy には、Java JNI タイプに対応するサンプル COBOL データ定義と、JNI 呼び出し可能サービスにアクセスするための関数ポインターが含まれている JNI 環境構造 JNINativeInterface が含まれています。

JNI.cpy は、COBOL インストール・ディレクトリーの include サブディレクトリーにあります。(COBOL インストール・ディレクトリーのロケーションは、Windows 環境変数 WDC70INSTDIR で指定されます。) JNI.cpy は、C プログラマーが JNI にアクセスするために使用するヘッダー・ファイル jni.h に類似しています。

```
*****
* COBOL declarations for Java native method interoperation *
*
* To use the Java Native Interface callable services from a *
* COBOL program: *
* 1) Use a COPY statement to include this file into the *
*    the Linkage Section of the program, e.g. *
*    Linkage Section. *
*    Copy JNI *
* 2) Code the following statements at the beginning of the *
*    Procedure Division: *
*    Set address of JNIEnv to JNIEnvPtr *
*    Set address of JNINativeInterface to JNIEnv *
*****
*
* Sample JNI type definitions in COBOL
*
*01 jboolean1 pic X.
* 88 jboolean1-true value X'01' through X'FF'.
* 88 jboolean1-false value X'00'.
*
*01 jbyte1 pic X.
*
*01 jchar1 pic N usage national.
*
*01 jshort1 pic s9(4) comp-5.
*01 jint1 pic s9(9) comp-5.
*01 jlong1 pic s9(18) comp-5.
*
*01 jfloat1 comp-1.
*01 jdouble1 comp-2.
*
*01 jobject1 object reference.
*01 jclass1 object reference.
*01 jstring1 object reference jstring.
*01 jarray1 object reference jarray.
*
*01 jbooleanArray1 object reference jbooleanArray.
*01 jbyteArray1 object reference jbyteArray.
*01 jcharArray1 object reference jcharArray.
*01 jshortArray1 object reference jshortArray.
*01 jintArray1 object reference jintArray.
*01 jlongArray1 object reference jlongArray.
*01 floatArray1 object reference floatArray.
```

```

*01 jdoubleArray1  object reference jdoubleArray.
*01 jobjectArray1  object reference jobjectArray.

* Possible return values for JNI functions.
  01 JNI-RC pic S9(9) comp-5.
* success
    88 JNI-OK          value 0.
* unknown error
    88 JNI-ERR         value -1.
* thread detached from the VM
    88 JNI-EDETACHED  value -2.
* JNI version error
    88 JNI-EVERSION   value -3.
* not enough memory
    88 JNI-ENOMEM     value -4.
* VM already created
    88 JNI-EEXIST     value -5.
* invalid arguments
    88 JNI-EINVAL     value -6.

* Used in ReleaseScalarArrayElements
  01 releaseMode pic s9(9) comp-5.
    88 JNI-COMMIT value 1.
    88 JNI-ABORT  value 2.

01 JNIenv pointer.

* JNI Native Method Interface - environment structure.
  01 JNINativeInterface.
    02 pointer.
    02 pointer.
    02 pointer.
    02 pointer.
    02 GetVersion                      function-pointer.
    02 DefineClass                     function-pointer.
    02 FindClass                       function-pointer.
    02 FromReflectedMethod            function-pointer.
    02 FromReflectedField            function-pointer.
    02 ToReflectedMethod              function-pointer.
    02 GetSuperclass                  function-pointer.
    02 IsAssignableFrom               function-pointer.
    02 ToReflectedField              function-pointer.
    02 Throw                          function-pointer.
    02 ThrowNew                       function-pointer.
    02 ExceptionOccurred               function-pointer.
    02 ExceptionDescribe               function-pointer.
    02 ExceptionClear                 function-pointer.
    02 FatalError                     function-pointer.
    02 PushLocalFrame                 function-pointer.
    02 PopLocalFrame                  function-pointer.
    02 NewGlobalRef                   function-pointer.
    02 DeleteGlobalRef                function-pointer.
    02 DeleteLocalRef                 function-pointer.
    02 IsSameObject                   function-pointer.
    02 NewLocalRef                    function-pointer.
    02 EnsureLocalCapacity             function-pointer.
    02 AllocObject                    function-pointer.
    02 NewObject                      function-pointer.
    02 NewObjectV                     function-pointer.
    02 NewObjectA                     function-pointer.
    02 GetObjectClass                  function-pointer.
    02 IsInstanceOf                   function-pointer.
    02 GetMethodID                    function-pointer.
    02 CallObjectMethod               function-pointer.
    02 CallObjectMethodV              function-pointer.
    02 CallObjectMethodA              function-pointer.

```


02 CallBooleanMethod	function-pointer.
02 CallBooleanMethodV	function-pointer.
02 CallBooleanMethodA	function-pointer.
02 CallByteMethod	function-pointer.
02 CallByteMethodV	function-pointer.
02 CallByteMethodA	function-pointer.
02 CallCharMethod	function-pointer.
02 CallCharMethodV	function-pointer.
02 CallCharMethodA	function-pointer.
02 CallShortMethod	function-pointer.
02 CallShortMethodV	function-pointer.
02 CallShortMethodA	function-pointer.
02 CallIntMethod	function-pointer.
02 CallIntMethodV	function-pointer.
02 CallIntMethodA	function-pointer.
02 CallLongMethod	function-pointer.
02 CallLongMethodV	function-pointer.
02 CallLongMethodA	function-pointer.
02 CallFloatMethod	function-pointer.
02 CallFloatMethodV	function-pointer.
02 CallFloatMethodA	function-pointer.
02 CallDoubleMethod	function-pointer.
02 CallDoubleMethodV	function-pointer.
02 CallDoubleMethodA	function-pointer.
02 CallVoidMethod	function-pointer.
02 CallVoidMethodV	function-pointer.
02 CallVoidMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualObjectMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualObjectMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualObjectMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualBooleanMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualBooleanMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualBooleanMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualByteMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualByteMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualByteMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualCharMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualCharMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualCharMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualShortMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualShortMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualShortMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualIntMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualIntMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualIntMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualLongMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualLongMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualLongMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualFloatMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualFloatMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualFloatMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualDoubleMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualDoubleMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualDoubleMethodA	function-pointer.
02 CallNonvirtualVoidMethod	function-pointer.
02 CallNonvirtualVoidMethodV	function-pointer.
02 CallNonvirtualVoidMethodA	function-pointer.
02 GetFieldID	function-pointer.
02 GetObjectField	function-pointer.
02 GetBooleanField	function-pointer.
02 GetByteField	function-pointer.
02 GetCharField	function-pointer.
02 GetShortField	function-pointer.
02 GetIntField	function-pointer.
02 GetLongField	function-pointer.
02 GetFloatField	function-pointer.
02 GetDoubleField	function-pointer.

02 SetObjectField	function-pointer.
02 SetBooleanField	function-pointer.
02 SetByteField	function-pointer.
02 SetCharField	function-pointer.
02 SetShortField	function-pointer.
02 SetIntField	function-pointer.
02 SetLongField	function-pointer.
02 SetFloatField	function-pointer.
02 SetDoubleField	function-pointer.
02 GetStaticMethodID	function-pointer.
02 CallStaticObjectMethod	function-pointer.
02 CallStaticObjectMethodV	function-pointer.
02 CallStaticObjectMethodA	function-pointer.
02 CallStaticBooleanMethod	function-pointer.
02 CallStaticBooleanMethodV	function-pointer.
02 CallStaticBooleanMethodA	function-pointer.
02 CallStaticByteMethod	function-pointer.
02 CallStaticByteMethodV	function-pointer.
02 CallStaticByteMethodA	function-pointer.
02 CallStaticCharMethod	function-pointer.
02 CallStaticCharMethodV	function-pointer.
02 CallStaticCharMethodA	function-pointer.
02 CallStaticShortMethod	function-pointer.
02 CallStaticShortMethodV	function-pointer.
02 CallStaticShortMethodA	function-pointer.
02 CallStaticIntMethod	function-pointer.
02 CallStaticIntMethodV	function-pointer.
02 CallStaticIntMethodA	function-pointer.
02 CallStaticLongMethod	function-pointer.
02 CallStaticLongMethodV	function-pointer.
02 CallStaticLongMethodA	function-pointer.
02 CallStaticFloatMethod	function-pointer.
02 CallStaticFloatMethodV	function-pointer.
02 CallStaticFloatMethodA	function-pointer.
02 CallStaticDoubleMethod	function-pointer.
02 CallStaticDoubleMethodV	function-pointer.
02 CallStaticDoubleMethodA	function-pointer.
02 CallStaticVoidMethod	function-pointer.
02 CallStaticVoidMethodV	function-pointer.
02 CallStaticVoidMethodA	function-pointer.
02 GetStaticFieldID	function-pointer.
02 GetStaticObjectField	function-pointer.
02 GetStaticBooleanField	function-pointer.
02 GetStaticByteField	function-pointer.
02 GetStaticCharField	function-pointer.
02 GetStaticShortField	function-pointer.
02 GetStaticIntField	function-pointer.
02 GetStaticLongField	function-pointer.
02 GetStaticFloatField	function-pointer.
02 GetStaticDoubleField	function-pointer.
02 SetStaticObjectField	function-pointer.
02 SetStaticBooleanField	function-pointer.
02 SetStaticByteField	function-pointer.
02 SetStaticCharField	function-pointer.
02 SetStaticShortField	function-pointer.
02 SetStaticIntField	function-pointer.
02 SetStaticLongField	function-pointer.
02 SetStaticFloatField	function-pointer.
02 SetStaticDoubleField	function-pointer.
02 NewString	function-pointer.
02 GetStringLength	function-pointer.
02 GetStringChars	function-pointer.
02 ReleaseStringChars	function-pointer.
02 NewStringUTF	function-pointer.
02 GetStringUTFLength	function-pointer.
02 GetStringUTFChars	function-pointer.
02 ReleaseStringUTFChars	function-pointer.

02 GetArrayLength	function-pointer.
02 NewObjectArray	function-pointer.
02 GetObjectArrayElement	function-pointer.
02 SetObjectArrayElement	function-pointer.
02 NewBooleanArray	function-pointer.
02 NewByteArray	function-pointer.
02 NewCharArray	function-pointer.
02 NewShortArray	function-pointer.
02 NewIntArray	function-pointer.
02 NewLongArray	function-pointer.
02 NewFloatArray	function-pointer.
02 NewDoubleArray	function-pointer.
02 GetBooleanArrayElements	function-pointer.
02 GetByteArrayElements	function-pointer.
02 GetCharArrayElements	function-pointer.
02 GetShortArrayElements	function-pointer.
02 GetIntArrayElements	function-pointer.
02 GetLongArrayElements	function-pointer.
02 GetFloatArrayElements	function-pointer.
02 GetDoubleArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseBooleanArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseByteArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseCharArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseShortArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseIntArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseLongArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseFloatArrayElements	function-pointer.
02 ReleaseDoubleArrayElements	function-pointer.
02 GetBooleanArrayRegion	function-pointer.
02 GetByteArrayRegion	function-pointer.
02 GetCharArrayRegion	function-pointer.
02 GetShortArrayRegion	function-pointer.
02 GetIntArrayRegion	function-pointer.
02 GetLongArrayRegion	function-pointer.
02 GetFloatArrayRegion	function-pointer.
02 GetDoubleArrayRegion	function-pointer.
02 SetBooleanArrayRegion	function-pointer.
02 SetByteArrayRegion	function-pointer.
02 SetCharArrayRegion	function-pointer.
02 SetShortArrayRegion	function-pointer.
02 SetIntArrayRegion	function-pointer.
02 SetLongArrayRegion	function-pointer.
02 SetFloatArrayRegion	function-pointer.
02 SetDoubleArrayRegion	function-pointer.
02 RegisterNatives	function-pointer.
02 UnregisterNatives	function-pointer.
02 MonitorEnter	function-pointer.
02 MonitorExit	function-pointer.
02 GetJavaVM	function-pointer.
02 GetStringRegion	function-pointer.
02 GetStringUTFRegion	function-pointer.
02 GetPrimitiveArrayCritical	function-pointer.
02 ReleasePrimitiveArrayCritical	function-pointer.
02 GetStringCritical	function-pointer.
02 ReleaseStringCritical	function-pointer.
02 NewWeakGlobalRef	function-pointer.
02 DeleteWeakGlobalRef	function-pointer.
02 ExceptionCheck	function-pointer.

関連タスク

243 ページの『オブジェクト指向アプリケーションのコンパイル』

479 ページの『JNI サービスへのアクセス』

付録 H. COBOL SYSADATA ファイルの内容

ADATA コンパイラー・オプションを使用する場合、コンパイラーはプログラム・データを格納するファイルを作成します。このファイルを使用してコンパイラー・リストではなく、プログラムに関する情報を取り出すことができます。例えば、シンボリック・デバッグ・ツールや相互参照ツールに対応したプログラムに関する情報を取り出すことができます。

715 ページの『例: SYSADATA』

関連参照

251 ページの『ADATA』

『SYSADATA ファイルに影響する既存のコンパイラー・オプション』

714 ページの『SYSADATA レコード・タイプ』

716 ページの『SYSADATA レコード記述』

SYSADATA ファイルに影響する既存のコンパイラー・オプション

いくつかのコンパイラー・オプションは、SYSADATA ファイルの内容に影響を与える可能性があります。

COMPILE

NOCOMPILE(W|E|S) はコンパイルを実行途中で停止し、その結果、特定のメッセージが失われる可能性があります。

EVENTS (互換性を与えるため) EVENTS は ADATA オプションと同じ結果になります (すなわち、ADATA または EVENTS のいずれかが有効である場合、SYSADATA ファイルが生成されます)。

EXIT INEXIT は、コンパイル・ソース・ファイルの識別を禁止します。

TEST TEST を使用すると、SYSADATA ファイルの内容にも影響を与える、追加のオブジェクト・テキスト・レコードが作成されます。

NUM NUM により、コンパイラーは、生成されたシーケンス番号を使用せずに、ソース・レコードの 1 から 6 列の内容を行番号に使用します。無効 (非数値)、または順不同の番号は、直前のレコードより 1 だけ大きな数値で置き換えられます。

以下の SYSADATA フィールドには、NUM|NONUM 設定によってその内容が異なる、行番号が含まれています。

タイプ	フィールド	レコード
0020	AE_LINE	外部シンボル・レコード
0030	ATOK_LINE	トークン・レコード
0032	AF_STMT	ソース・エラー・レコード
0038	AS_STMT	ソース・レコード
0039	AS_REP_EXP_SLIN	COPY REPLACING レコード

タイプ	フィールド	レコード
0039	AS_REP_EXP_ELIN	COPY REPLACING レコード
0042	ASY_STMT	記号レコード
0044	AX_DEFN	記号相互参照レコード
0044	AX_STMT	記号相互参照レコード
0046	AN_STMT	ネストされたプログラム・レコード

タイプ 0038 ソース・レコードには、行番号とレコード番号に関連する 2 つのフィールドが含まれています。

- AS_STMT には、NUM および NONUM の両方に、コンパイラ行番号が含まれています。
- AS_CUR_REC# には、物理ソース・レコード番号が含まれています。

上記の 2 つのフィールドは常に、上記フィールドのすべてにおいて使われるコンパイラ行番号と物理ソース・レコード番号を相関させるために使用されます。

残りのコンパイラ・オプションは、SYSADATA ファイルに直接的な影響は与えませんが、FLAGSAA、FLAGSTD、SSRANGE など、特定のオプションに関連付けられた、別のエラー・メッセージの生成をトリガーする可能性があります。

715 ページの『例: SYSADATA』

関連参照

『SYSADATA レコード・タイプ』

260 ページの『COMPILE』

265 ページの『EXIT』

280 ページの『NUMBER』

292 ページの『TEST』

SYSADATA レコード・タイプ

SYSADATA ファイルには、別々のレコード・タイプに分類されるレコードが含まれています。各レコード・タイプには、コンパイルされる COBOL プログラムに関する情報が提供されます。

各レコードは、以下の 2 つのセクションで構成されます。

- 全レコード・タイプに対して同一の構造を有し、レコードのタイプを識別するレコード・コードが含まれる、12 バイトのヘッダー・セクション
- レコード・タイプによって異なる、可変長データ・セクション

表 100. SYSADATA レコード・タイプ

レコード・タイプ	アクション
719 ページの『ジョブ識別レコード - X'0000'』	ソース・データの処理に使用する環境に関する情報を記述します
719 ページの『ADATA 識別レコード - X'0001'』	SYSADATA ファイルのレコードに関する共通情報を記述します

表 100. SYSADATA レコード・タイプ (続き)

レコード・タイプ	アクション
720 ページの『コンパイル単位の開始/終了 レコード - X'0002'』	ソース・ファイル内のコンパイル単位の開始と 終了のマーク付けを行います
720 ページの『オプション・レコード - X'0010'』	コンパイルに使用するコンパイラー・オプショ ンを記述します
732 ページの『外部シンボル・レコード - X'0020'』	プログラム内のすべての外部名、定義、および 参照を記述します
733 ページの『構文解析ツリー・レコード - X'0024'』	プログラムの構文解析ツリーにノードを定義し ます
747 ページの『トークン・レコード - X'0030'』	ソース・トークンを定義します
761 ページの『ソース・エラー・レコード - X'0032'』	ソース・プログラム・ステートメントのエラー を記述します
761 ページの『ソース・レコード - X'0038'』	単一のソース行を記述します
762 ページの『COPY REPLACING レコー ド - X'0039'』	コピーブック内のテキストとの、 COPY. . .REPLACING <i>operand-1</i> の突き合わせの 結果として、テキスト置換のインスタンスを記 述します
762 ページの『記号レコード - X'0042'』	プログラムに定義される、単一の記号を記述し ます。プログラムに定義される、それぞれの記 号ごとに 1 つの記号レコードがあります。
775 ページの『記号相互参照レコード - X'0044'』	単一の記号への参照を記述します
776 ページの『ネストされたプログラム・ レコード - X'0046'』	プログラムの名前とネスト・レベルを記述しま す
777 ページの『ライブラリー・レコード - X'0060'』	各ライブラリーで使用されるライブラリー・フ ァイルとメンバーを記述します
777 ページの『統計レコード - X'0090'』	コンパイルに関する統計を記述します
778 ページの『EVENTS レコード - X'0120'』	EVENTS レコードは、COBOL/370 TM との互 換性を提供します。レコード形式は、 COBOL/370 と同一ですが、レコードの先頭に 置かれる標準 ADATA ヘッダー、および EVENTS レコード・データの長さを示すフィ ールドが追加されます。

『例: SYSADATA』

例: SYSADATA

次の例に、COBOL プログラムのリストの一部を示します。この COBOL プログラムを ADATA オプションを使用してコンパイルした場合には、関連データ・ファイルに生成されるレコードは、以下の表に示すシーケンスで記述されます。

000001	IDENTIFICATION DIVISION.	AD000020
000002	PROGRAM-ID. AD04202.	AD000030
000003	ENVIRONMENT DIVISION.	AD000040
000004	DATA DIVISION.	AD000050

000005	WORKING-STORAGE SECTION.	AD000060
000006	77 COMP3-FLD2 pic S9(3)v9.	AD000070
000007	PROCEDURE DIVISION.	AD000080
000008	STOP RUN.	

タイプ	説明
X'0120'	EVENTS タイム・スタンプ・レコード
X'0120'	EVENTS プロセッサ・レコード
X'0120'	EVENTS ファイル ID レコード
X'0120'	EVENTS プログラム・レコード
X'0001'	ADATA 識別レコード
X'0000'	ジョブ識別レコード
X'0010'	オプション・レコード
X'0038'	ステートメント 1 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 2 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 3 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 4 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 5 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 6 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 7 のソース・レコード
X'0038'	ステートメント 8 のソース・レコード
X'0020'	AD04202 の外部シンボル・レコード
X'0044'	STOP の記号相互参照レコード
X'0044'	COMP3-FLD2 の記号相互参照レコード
X'0044'	AD04202 の記号相互参照レコード
X'0042'	AD04202 の記号レコード
X'0042'	COMP3-FLD2 の記号レコード
X'0090'	統計レコード
X'0120'	EVENTS ファイル終わりレコード

関連参照

『SYSADATA レコード記述』

SYSADATA レコード記述

関連データ・ファイルに書き込まれるレコードの形式については、以下の関連参照に示されています。

フィールドは、各レコード・タイプを説明する次の記号で表されています。

- C** 文字 (EBCDIC または ASCII) データを表す
- H** 2 バイトの 2 進整数データを表す
- F** 4 バイトの 2 進整数データを表す
- A** 4 バイトの 2 進整数アドレスとオフセット・データを表す
- X** 16 進数 (ビット) データまたは 1 バイトの 2 進整数データを表す

データ型には、境界合わせは一切含まれていません。したがって、上記の暗黙の長さは、長さ指標 (Ln) を含めることで変更される可能性があります。すべての整数データは、ヘッダー・フラグ・バイトの指標ビットによって、ビッグ・エンディアン形式、またはリトル・エンディアン形式になっています。ビッグ・エンディアン形式では、ビット 0 が常に最上位ビットで、ビット n が最下位ビットであることを意味します。リトル・エンディアン は、Intel プロセッサで見られるような“バイト反転” 整数を参照します。

未定義フィールドおよび未使用値はすべて、予約済みです。

関連参照

- 『共通ヘッダー・セクション』
- 719 ページの『ジョブ識別レコード - X'0000'』
- 719 ページの『ADATA 識別レコード - X'0001'』
- 720 ページの『コンパイル単位の開始/終了レコード - X'0002'』
- 720 ページの『オプション・レコード - X'0010'』
- 732 ページの『外部シンボル・レコード - X'0020'』
- 733 ページの『構文解析ツリー・レコード - X'0024'』
- 747 ページの『トークン・レコード - X'0030'』
- 761 ページの『ソース・エラー・レコード - X'0032'』
- 761 ページの『ソース・レコード - X'0038'』
- 762 ページの『COPY REPLACING レコード - X'0039'』
- 762 ページの『記号レコード - X'0042'』
- 775 ページの『記号相互参照レコード - X'0044'』
- 776 ページの『ネストされたプログラム・レコード - X'0046'』
- 777 ページの『ライブラリー・レコード - X'0060'』
- 777 ページの『統計レコード - X'0090'』
- 778 ページの『EVENTS レコード - X'0120'』

共通ヘッダー・セクション

次の表は、全レコード・タイプに共通するヘッダー・セクションの形式を示しています。MVSTM および VSE の場合、各レコードの前に 4 バイトの RDW (レコード記述子ワード) が置かれます。この RDW は通常、アクセス方式によってのみ使用され、ダウンロード・ユーティリティによって、ストリップされます。

表 101. SYSADATA 共通ヘッダー・セクション

フィールド	サイズ	説明
言語コード	XL1	16 高水準アセンブラー
		17 すべてのプラットフォームの COBOL
		40 サポートされるプラットフォームの PL/I

表 101. SYSADATA 共通ヘッダー・セクション (続き)

フィールド	サイズ	説明
レコード・タイプ	HL2	<p>以下のいずれかのレコード・タイプ。</p> <p>X'0000' ジョブ識別レコード ¹</p> <p>X'0001' ADATA 識別レコード</p> <p>X'0002' コンパイル単位の開始/終了レコード</p> <p>X'0010' オプション・レコード ¹</p> <p>X'0020' 外部シンボル・レコード</p> <p>X'0024' 構文解析ツリー・レコード</p> <p>X'0030' トークン・レコード</p> <p>X'0032' ソース・エラー・レコード</p> <p>X'0038' ソース・レコード</p> <p>X'0039' COPY REPLACING レコード</p> <p>X'0042' 記号レコード</p> <p>X'0044' 記号相互参照レコード</p> <p>X'0046' ネストされたプログラム・レコード</p> <p>X'0060' ライブラリー・レコード</p> <p>X'0090' 統計レコード ¹</p> <p>X'0120' EVENTS レコード</p>
関連データ・アーキテクチャー・レベル	XL1	3 ヘッダー構造の定義レベル
フラグ	XL1	<p>.... ..1. ADATA レコード整数は、リトル・エンディアン (Intel) 形式です</p> <p>.... ...1 このレコードは、次のレコードに続行されます</p> <p>1111 11.. 将来の利用のために予約済み</p>
関連データ・レコード・エディション・レベル	XL1	特定のレコード・タイプの新規形式を表すために使用され、通常は 0 です
予約済み	CL4	将来の利用のために予約済み
関連データ・フィールド長	HL2	ヘッダーの後に置かれるデータの長さ (バイト単位)
<p>1. バッチ・コンパイル (一連のプログラム) が ADATA オプションで実行されるときには、それぞれのコンパイルごとに、複数ジョブ識別、オプション、および統計レコードがあります。</p>		

12 バイト・ヘッダーのマッピングには、MVS および VSE のアクセス方式が必要とする、可変長レコード記述子ワードに使用される領域は組み込まれません。

ジョブ識別レコード - X'0000'

次の表に、ジョブ識別レコードの内容を示します。

表 102. SYSADATA ジョブ識別レコード

フィールド	サイズ	説明
日付	CL8	YYYYMMDD 形式のコンパイルの日付
時刻	CL4	HHMM 形式のコンパイルの時刻
プロダクト番号	CL8	関連データ・ファイルを生成したコンパイラーのプロダクト番号
プロダクト・バージョン	CL8	V.R.M 形式の、関連データ・ファイルを生成したプロダクトのバージョン番号
PTF レベル	CL8	関連データ・ファイルを生成したプロダクトの PTF レベル番号 (PTF 番号が利用不可の場合、このフィールドはブランクです。)
システム ID	CL24	コンパイルが実行されたシステムのシステム識別
ジョブ名	CL8	コンパイル・ジョブの MVS ジョブ名
ステップ名	CL8	コンパイル・ステップの MVS ステップ名
PROC ステップ	CL8	コンパイル・プロシージャの MVS プロシージャ・ステップ名
入力ファイル数 ¹	HL2	このレコードに記録した入力ファイルの数 以下の、7 つのフィールドのグループでは、このフィールドの値に従って、 <i>n</i> 回発生します。
...入力ファイル番号	HL2	ファイルの割り当てシーケンス番号
...入力ファイル名長	HL2	次の入力ファイル名の長さ
...ボリューム通し番号 長	HL2	ボリューム通し番号の長さ
...メンバー名長	HL2	メンバー名の長さ
...入力ファイル名	CL(<i>n</i>)	コンパイルの入力ファイルの名前
...ボリューム通し番号	CL(<i>n</i>)	入力ファイルが常駐する (最初の) ボリュームのボリューム通し番号
...メンバー名	CL(<i>n</i>)	該当する場合には、入力ファイル内のメンバーの名前
1. 入力ファイル数が、関連データ・ファイルのレコード・サイズを超える場合、レコードは次のレコードに続行されます。入力ファイルの現行数 (そのレコードの) は、レコードに保管され、レコードは、関連データ・ファイルに書き込まれます。次のレコードには、入力ファイルの残りが含まれます。入力ファイルの数のカウントは、現行レコードのカウントです。		

ADATA 識別レコード - X'0001'

次の表に、ADATA 識別レコードの内容を示します。

表 103. ADATA 識別レコード

フィールド	サイズ	説明
時刻 (2 進数)	XL8	世界時 (UT) は、真夜中のグリニッジ標準時を基準としたマイクロ秒数を表す 2 進数で、下位ビットは 1 マイクロ秒を表します。この時刻は、時間帯から独立したタイム・スタンプとして使用することができます。 Windows および AIX システムでは、フィールドのバイト 5 から 8 のみが、時刻を入れるフルワード・バイナリー・フィールドとして使用されます。
CCSID ¹	XL2	コード化文字セット ID
文字セット・フラグ	XL1	X'80' EBCDIC (IBM-037) X'40' ASCII (IBM-1252)
コード・ページ名長	XL2	後に続く、コード・ページ名の長さ
コード・ページ名	CL(n)	コード・ページの名前
1. 適切な CCS フラグが常に設定されます。CCSID がゼロ以外に設定されると、コード・ページ名の長さはゼロとなります。CCSID がゼロに設定されると、コード・ページ名の長さはゼロ以外の値となり、コード・ページ名が表示されます。		

コンパイル単位の開始|終了レコード - X'0002'

次の表に、コンパイル単位の開始|終了レコードの内容を示します。

表 104. SYSADATA コンパイル単位の開始|終了レコード

フィールド	サイズ	説明
タイプ	HL2	コンパイル単位タイプ。以下のどちらかが使用できます。 X'0000' 開始コンパイル単位 X'0001' 終了コンパイル単位
予約済み	CL2	将来の利用のために予約済み
予約済み	FL4	将来の利用のために予約済み

オプション・レコード - X'0010'

次の表に、オプション・レコードの内容を示します。

表 105. SYSADATA オプション・レコード

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト 0	XL1	1111 1111 将来の利用のために予約済み

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト 1	XL1	<p>1... ビット 1 = DECK、ビット 0 = NODECK</p> <p>.1.. ビット 1 = ADATA、ビット 0 = NOADATA</p> <p>..1. ビット 1 = COLLSEQ(EBCDIC)、ビット 0 = COLLSEQ(LOCALE BINARY) (Windows および AIX のみ)</p> <p>...1 ビット 1 = SEPOBJ、ビット 0 = NOSEPOBJ (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... 1... ビット 1 = NAME、ビット 0 = NONAME</p> <p>.... .1.. ビット 1 = OBJECT、ビット 0 = NOOBJECT</p> <p>.... ..1. ビット 1 = SQL、ビット 0 = NOSQL</p> <p>.... ...1 ビット 1 = CICS、ビット 0 = NOCICS</p>

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト 2	XL1	<p>1... ビット 1 = OFFSET、ビット 0 = NOOFFSET (ホストのみ)</p> <p>.1... ビット 1 = MAP、ビット 0 = NOMAP</p> <p>..1. ビット 1 = LIST、ビット 0 = NOLIST</p> <p>...1 ビット 1 = DBCSXREF、ビット 0 = NODBCSXREF</p> <p>.... 1... ビット 1 = XREF(SHORT)、ビット 0 = XREF(SHORT) ではない。このフラグは、ビット 7 のフラグと組み合わせて使用します。このフラ グによって、XREF(FULL) はオフ状態で示さ れ、ビット 7 のフラグはオン状態で示されま す。</p> <p>.... .1.. ビット 1 = SOURCE、ビット 0 = NOSOURCE</p> <p>.... ..1. ビット 1 = VBREF、ビット 0 = NOVBREF</p> <p>.... ...1 ビット 1 = XREF、ビット 0 = XREF ではな い。ビット 4 以降のフラグも参照。</p>

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト 3	XL1	<p>1... ビット 1 = 指定される FLAG 組み込み診断レベル (FLAG(x,y) のように値 y が指定されます)</p> <p>.1.. ビット 1 = FLAGSTD、ビット 0 = NOFLAGSTD</p> <p>..1. ビット 1 = NUM、ビット 0 = NONUM</p> <p>...1 ビット 1 = SEQUENCE、ビット 0 = NOSEQUENCE</p> <p>.... 1... ビット 1 = SOSI、ビット 0 = NOSOSI (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... .1.. ビット 1 = NSYMBOL(NATIONAL)、ビット 0 = NSYMBOL(DBCS)</p> <p>.... ..1. ビット 1 = PROFILE、ビット 0 = NOPROFILE (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... ...1 ビット 1 = WORD、ビット 0 = NOWORD</p>
オプション・バイト 4	XL1	<p>1... ビット 1 = ADV、ビット 0 = NOADV</p> <p>.1.. ビット 1 = APOST、ビット 0 = QUOTE</p> <p>..1. ビット 1 = DYNAM、ビット 0 = NODYNAM</p> <p>...1 ビット 1 = AWO、ビット 0 = NOAWO</p> <p>.... 1... ビット 1 = 指定済み RMODE、ビット 0 = RMODE(AUTO)</p> <p>.... .1.. ビット 1 = RENT、ビット 0 = NORENT</p> <p>.... ..1. ビット 1 = RES。このフラグは、常に COBOL に設定されます。</p> <p>.... ...1 ビット 1 = RMODE(24)、ビット 0 = RMODE(ANY)</p>

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト 5	XL1	<p>1... 互換性用に予約済み</p> <p>.1.. ビット 1 = OPT、ビット 0 = NOOPT</p> <p>..1. ビット 1 = LIB、ビット 0 = NOLIB</p> <p>...1 ビット 1 = DBCS、ビット 0 = NODBCS</p> <p>.... 1... ビット 1 = OPT(FULL)、ビット 0 = OPT(FULL) ではない</p> <p>.... .1.. ビット 1 = SSRANGE、ビット 0 = NOSSRANGE</p> <p>.... ..1. ビット 1 = TEST、ビット 0 = NOTEST</p> <p>.... ...1 ビット 1 = PROBE、ビット 0 = NOPROBE (Windows のみ)</p>
オプション・バイト 6	XL1	<p>..1. ビット 1 = NUMPROC(PFD)、ビット 0 = NUMPROC(NOPFD)</p> <p>...1 ビット 1 = NUMCLS(ALT)、ビット 0 = NUMCLS(PRIM)</p> <p>.... .1.. ビット 1 = BINARY(S390)、ビット 0 = BINARY(NATIVE) (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... ..1. ビット 1 = TRUNC(STD)、ビット 0 = TRUNC(OPT)</p> <p>.... ...1 ビット 1 = ZWB、ビット 0 = NOZWB</p> <p>11.. 1... 将来の利用のために予約済み</p>

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト 7	XL1	1... ビット 1 = ALLOWCBL、ビット 0 = NOALLOWCBL (Windows および AIX のみ) .1... ビット 1 = TERM、ビット 0 = NOTERM ..1. 1 = DUMP、ビット 0 = NODUMP ...1 11.. 予約済み 1. ビット 1 = CURRENCY、ビット 0 = NOCURRENCY 1 予約済み
オプション・バイト 8	XL1	1111 1111 将来の利用のために予約済み
オプション・バイト 9	XL1	1... ビット 1 = DATA(24)、ビット 0 = DATA(31) .1... ビット 1 = FASTSRT、ビット 0 = NOFASTSRT ..1. ビット 1 = SIZE(MAX)、ビット 0 = SIZE(nnnn) または SIZE(nnnnK) 1.. ビット 1 = THREAD、ビット 0 = NOTHREAD ...1 1.11 将来の利用のために予約済み
オプション・バイト A	XL1	1111 1111 将来の利用のために予約済み
オプション・バイト B	XL1	1111 1111 将来の利用のために予約済み

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト C	XL1	<p>1... ビット 1 = NCOLLSEQ(LOCALE) (Windows および AIX のみ)</p> <p>.1... 将来の利用のために予約済み</p> <p>..1. ビット 1 = INTDATE(LILIAN)、ビット 0 = INTDATE(ANSI)</p> <p>...1 ビット 1 = NCOLLSEQ(BINARY) (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... 1... ビット 1 = CHAR(EBCDIC)、ビット 0 = CHAR(NATIVE) (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... .1.. ビット 1 = FLOAT(HEX)、ビット 0 = FLOAT(NATIVE) (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... ..1. ビット 1 = COLLSEQ(BINARY) (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... ...1 ビット 1 = COLLSEQ(LOCALE) (Windows および AIX のみ)</p>

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
オプション・バイト D	XL1	<p>1... ビット 1 = DLL ビット 0 = NODLL (ホストのみ)</p> <p>.1... ビット 1 = EXPORTALL、ビット 0 = NOEXPORTALL (ホストのみ)</p> <p>..1. ビット 1 = CODEPAGE (ホストのみ)</p> <p>...1 ビット 1 = DATEPROC、ビット 0 = NODATEPROC</p> <p>.... 1... ビット 1 = DATEPROC(FLAG)、ビット 0 = DATEPROC(NOFLAG)</p> <p>.... .1.. ビット 1 = YEARWINDOW</p> <p>.... ..1. ビット 1 = WSCLEAR、ビット 0 = NOWSCLEAR (Windows および AIX のみ)</p> <p>.... ...1 ビット 1 = BEOPT、ビット 0 = NOBEOPT (Windows および AIX のみ)</p>
オプション・バイト E	XL1	<p>1... ビット 1 = DATEPROC(TRIG)、ビット 0 = DATEPROC(NOTRIG)</p> <p>.1... ビット 1 = DIAGTRUNC、ビット 0 = NODIAGTRUNC</p> <p>.... .1.. ビット 1 = LSTFILE(UTF-8)、ビット 0 = LSTFILE(LOCALE) (Windows および AIX のみ)</p> <p>..11 1.11 将来の利用のために予約済み</p>
オプション・バイト F	XL1	<p>1111 1111 将来の利用のために予約済み</p>
フラグ・レベル	XL1	<p>X'00' フラグ (I)</p> <p>X'04' フラグ (W)</p> <p>X'08' フラグ (E)</p> <p>X'0C' フラグ (S)</p> <p>X'10' フラグ (U)</p> <p>X'FF' Noflag</p>

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
組み込み診断レベル	XL1	X'00' フラグ (I) X'04' フラグ (W) X'08' フラグ (E) X'0C' フラグ (S) X'10' フラグ (U) X'FF' Noflag
FLAGSTD (FIPS) 指定	XL1	1... .. 最小 .1... .. 中間 ..1. 高 ...1 IBM 拡張 1... レベル 1 セグメンテーション1.. レベル 2 セグメンテーション1. デバッグ1 廃止
フラグ用に予約済み	XL1	1111 1111 将来の利用のために予約済み
コンパイラー・モード	XL1	X'00' 無条件 Noccompile、Noccompile(I) X'04' Noccompile(W) X'08' Noccompile(E) X'0C' Noccompile(S) X'FF' コンパイル
スペース値	CL1	
3 値オプション用のデータ	XL1	1... .. NAME(ALIAS) 指定 .1... .. NUMPROC(MIG) 指定 ..1. TRUNC(BIN) 指定 ...1 1111 将来の利用のために予約済み

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
TEST(hook,sym,sep) サブオプション (ホストのみ)	XL1	1... TEST(ALL,x) .1... TEST(NONE,x) ..1. TEST(STMT,x) ...1 TEST(PATH,x) 1... TEST(BLOCK,x) 1.. TEST(x,SYM) 1. ビット 1 = SEPARATE、ビット 0 = NOSEPARATE 1 TEST サブオプションのために予約済み
OUTDD 名長	HL2	OUTDD 名の長さ
RWT ID 長	HL2	予約語テーブル ID の長さ
LVLINFO	CL4	ユーザー指定 LVLINFO データ
PGMNAME サブオプション	XL1	1... ビット 1 = PGMNAME(COMPAT) .1... ビット 1 = PGMNAME(LONGUPPER) ..1. ビット 1 = PGMNAME(LONGMIXED) ...1 1111 将来の利用のために予約済み
記入項目インターフェース・サブオプション	XL1	1... ビット 1 = EntryInterface(System) (Windows のみ) .1... ビット 1 = EntryInterface(OptLink) (Windows のみ) ..11 1111 将来の利用のために予約済み

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
CallInterface サブオプション	XL1	1... ビット 1 = CallInterface(System) (Windows および AIX のみ) .1... ビット 1 = CallInterface(OptLink) (Windows のみ) ...1 ビット 1 = CallInterface(Cdecl) (Windows のみ) 1... ビット 1 = CallInterface(System(Desc)) (Windows および AIX のみ) ..1. .111 将来の利用のために予約済み
ARITH サブオプション	XL1	1... ビット 1 = ARITH(COMPAT) .1... ビット 1 = ARITH(EXTEND) 11 1111 将来の利用のために予約済み
DBCS 要件	FL4	DBCS XREF ストレージ要件
DBCS ORDPGM 長	HL2	DBCS 配列プログラムの名前の長さ
DBCS ENCTBL 長	HL2	DBCS エンコード・テーブルの名前の長さ
DBCS ORD TYPE	CL2	DBCS 配列型
予約済み	CL6	将来の利用のために予約済み
変換済み SO	CL1	変換済み SO 16 進数値
変換済み SI	CL1	変換済み SI 16 進数値
言語 ID	CL2	このフィールドには、LANGUAGE オプションからの 2 文字の省略形 (EN、UE、JA、または JP のいずれか) が保持されます。
予約済み	CL8	将来の利用のために予約済み
INEXIT 名長	HL2	SYSIN ユーザー出口名の長さ
PRTEXIT 名長	HL2	SYSPRINT ユーザー出口名の長さ
LIBEXIT 名長	HL2	'Library' ユーザー出口名の長さ
ADEXIT 名長	HL2	ADATA ユーザー出口名の長さ
CURROPT	CL5	CURRENCY オプション値
予約済み	CL1	将来の利用のために予約済み
YEARWINDOW	HL2	YEARWINDOW オプション値
CODEPAGE	HL2	CODEPAGE CCSID オプション値
予約済み	CL50	将来の利用のために予約済み
LINECNT	HL2	LINECOUNT 値
予約済み	CL2	将来の利用のために予約済み

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
BUFSIZE	FL4	BUFSIZE オプション値
サイズ値	FL4	SIZE オプション値
予約済み	FL4	将来の利用のために予約済み
フェーズ常駐ビット バイト 1	XL1	<p>1... ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCLIBR</p> <p>.1.. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCSCAN</p> <p>..1. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCDSCN</p> <p>...1 ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCGROU</p> <p>.... 1... ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCPSCN</p> <p>.... .1.. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCPANA</p> <p>.... ..1. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCFGEN</p> <p>.... ...1 ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCPGEN</p>
フェーズ常駐ビット バイト 2	XL1	<p>1... ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCOPTM</p> <p>.1.. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCLSTR</p> <p>..1. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCXREF</p> <p>...1 ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCDMAP</p> <p>.... 1... ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCASM1</p> <p>.... .1.. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCASM2</p> <p>.... ..1. ビット 1 = ユーザー領域内の IGYCDIAG</p> <p>.... ...1 将来の利用のために予約済み</p>
フェーズ常駐ビット バイト 3 および 4	XL2	予約済み
予約済み	CL8	将来の利用のために予約済み
OUTDD 名	CL(n)	OUTDD 名
RWT	CL(n)	予約語テーブル ID
DBCS ORDPGM	CL(n)	DBCS 配列プログラム名

表 105. SYSADATA オプション・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
DBCS ENCTBL	CL(n)	DBCS エンコード・テーブル名
INEXIT 名	CL(n)	SYSIN ユーザー出口名
PRTEXIT 名	CL(n)	SYSPRINT ユーザー出口名
LIBEXIT 名	CL(n)	'Library' ユーザー出口名
ADEXIT 名	CL(n)	ADATA ユーザー出口名

外部シンボル・レコード - X'0020'

次の表に、外部シンボル・レコードの内容を示します。

表 106. SYSADATA 外部シンボル・レコード

フィールド	サイズ	説明
セクション・タイプ	XL1	<p>X'00' PROGRAM-ID 名 (メイン入り口点名)</p> <p>X'01' ENTRY 名 (2 次入り口点名)</p> <p>X'02' 外部参照 (参照済み外部入り口点)</p> <p>X'04' COBOL では N/A</p> <p>X'05' COBOL では N/A</p> <p>X'06' COBOL では N/A</p> <p>X'0A' COBOL では N/A</p> <p>X'12' 内部参照 (参照済み内部サブプログラム)</p> <p>X'C0' 外部クラス名 (オブジェクト指向 COBOL クラス定義)</p> <p>X'C1' METHOD-ID 名 (オブジェクト指向 COBOL メソッド定義)</p> <p>X'C6' メソッド参照 (オブジェクト指向 COBOL メソッド参照)</p> <p>X'FF' COBOL では N/A</p> <p>タイプ X'12'、X'C0'、X'C1'、および X'C6X' は、COBOL のみ対応です。</p>
フラグ	XL1	COBOL では N/A
予約済み	HL2	将来の利用のために予約済み
記号 ID	FL4	参照を含むプログラムの記号 ID (タイプ x'02' および x'12' の場合のみ)
行番号	FL4	参照を含むステートメントの行番号 (タイプ x'02' および x'12' の場合のみ)
セクション長	FL4	COBOL では N/A
LD ID	FL4	COBOL では N/A
予約済み	CL8	将来の利用のために予約済み
外部名の長さ	HL2	外部名の文字数

表 106. SYSADATA 外部シンボル・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
別名の長さ	HL2	COBOL では N/A
外部名	CL(n)	外部名
別名セクション名	CL(n)	COBOL では N/A

構文解析ツリー・レコード - X'0024'

次の表に、構文解析ツリー・レコードの内容を示します。

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード

フィールド	サイズ	説明
ノード番号	FL4	コンパイラーが生成するノード番号。1 から開始
ノード・タイプ	HL2	ノードのタイプ: 001 プログラム 002 クラス 003 メソッド
		101 見出し部 102 環境部 103 データ部 104 手続き部 105 終了プログラム/メソッド/クラス
		201 宣言本文 202 非宣言本文
		301 セクション 302 プロシージャー・セクション
		401 段落 402 手順段落
		501 文 502 ファイル定義 503 ソート・ファイル定義 504 プログラム名 505 プログラム属性 508 ENVIRONMENT DIVISION 文節 509 CLASS 属性 510 METHOD 属性 511 USE ステートメント

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		601 ステートメント 602 データ記述文節 603 データ入力項目 604 ファイル記述文節 605 データ入力項目名 606 データ入力項目レベル 607 EXEC 記入項目
		701 EVALUATE サブジェクト句 702 EVALUATE WHEN 句 703 EVALUATE WHEN OTHER 句 704 SEARCH WHEN 句 705 INSPECT CONVERTING 句 706 INSPECT REPLACING 句 707 INSPECT TALLYING 句 708 PERFORM UNTIL 句 709 PERFORM VARYING 句 710 PERFORM AFTER 句 711 ステートメント・ブロック 712 範囲終了符号 713 INITIALIZE REPLACING 句 714 EXEC CICS コマンド 720 DATA DIVISION 句
		801 句 802 ON 句 803 NOT 句 804 THEN 句 805 ELSE 句 806 条件 807 式 808 相対索引付け 809 EXEC CICS オプション 810 予約語 811 INITIALIZE REPLACING カテゴリー

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		901 セクションまたは段落名 902 ID 903 英字名 904 クラス名 905 条件名 906 ファイル名 907 指標名 908 簡略名 910 シンボリック文字 911 リテラル 912 関数 ID 913 データ名 914 特殊 レジスター 915 プロシージャー参照 916 算術演算子 917 全プロシージャー 918 INITIALIZE リテラル (トークンなし) 919 ALL リテラルまたは表意定数 920 キーワード・クラス・テスト名 921 ID レベルの予約語 922 単項演算子 923 比較演算子
		1001 添え字 1002 参照変更
ノード・サブタイプ	HL2	ノードのサブタイプ。 セクション・タイプの場合: 0001 CONFIGURATION セクション 0002 INPUT-OUTPUT セクション 0003 FILE セクション 0004 WORKING-STORAGE セクション 0005 LINKAGE セクション 0006 LOCAL-STORAGE セクション 0007 REPOSITORY セクション

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		段落タイプの場合: 0001 PROGRAM-ID 段落 0002 AUTHOR 段落 0003 INSTALLATION 段落 0004 DATE-WRITTEN 段落 0005 SECURITY 段落 0006 SOURCE-COMPUTER 段落 0007 OBJECT-COMPUTER 段落 0008 SPECIAL-NAMES 段落 0009 FILE-CONTROL 段落 0010 I-O-CONTROL 段落 0011 DATE-COMPILED 段落 0012 CLASS-ID 段落 0013 METHOD-ID 段落 0014 REPOSITORY 段落
		環境部文節タイプの場合: 0001 WITH DEBUGGING MODE 0002 MEMORY-SIZE 0003 SEGMENT-LIMIT 0004 CURRENCY-SIGN 0005 DECIMAL POINT 0006 PROGRAM COLLATING SEQUENCE 0007 ALPHABET 0008 SYMBOLIC-CHARACTER 0009 CLASS 0010 ENVIRONMENT NAME 0011 SELECT

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		データ記述文節タイプの場合:
		0001 BLANK WHEN ZERO
		0002 DATA-NAME OR FILLER
		0003 JUSTIFIED
		0004 OCCURS
		0005 PICTURE
		0006 REDEFINES
		0007 RENAMES
		0008 SIGN
		0009 SYNCHRONIZED
		0010 USAGE
		0011 VALUE
		0023 GLOBAL
		0024 EXTERNAL

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		ファイル記述文節タイプの場合:
		0001 FILE STATUS
		0002 ORGANIZATION
		0003 ACCESS MODE
		0004 RECORD KEY
		0005 ASSIGN
		0006 RELATIVE KEY
		0007 PASSWORD
		0008 PROCESSING MODE
		0009 RECORD DELIMITER
		0010 PADDING CHARACTER
		0011 BLOCK CONTAINS
		0012 RECORD CONTAINS
		0013 LABEL RECORDS
		0014 VALUE OF
		0015 DATA RECORDS
		0016 LINAGE
		0017 ALTERNATE KEY
		0018 LINES AT TOP
		0019 LINES AT BOTTOM
		0020 CODE-SET
		0021 RECORDING MODE
		0022 RESERVE
		0023 GLOBAL
		0024 EXTERNAL
		0025 LOCK

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		ステートメント・タイプの場合:
		0002 NEXT SENTENCE
		0003 ACCEPT
		0004 ADD
		0005 ALTER
		0006 CALL
		0007 CANCEL
		0008 CLOSE
		0009 COMPUTE
		0010 CONTINUE
		0011 DELETE
		0012 DISPLAY
		0013 DIVIDE (INTO)
		0113 DIVIDE (BY)
		0014 ENTER
		0015 ENTRY
		0016 EVALUATE
		0017 EXIT
		0018 GO
		0019 GOBACK
		0020 IF
		0021 INITIALIZE
		0022 INSPECT

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0023 INVOKE
		0024 MERGE
		0025 MOVE
		0026 MULTIPLY
		0027 OPEN
		0028 PERFORM
		0029 READ
		0030 READY
		0031 RELEASE
		0032 RESET
		0033 RETURN
		0034 REWRITE
		0035 SEARCH
		0036 SERVICE
		0037 SET
		0038 SORT
		0039 START
		0040 STOP
		0041 STRING
		0042 SUBTRACT
		0043 UNSTRING
		0044 EXEC SQL
		0144 EXEC CICS
		0045 WRITE
		0046 XML

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		句タイプの場合:
		0001 INTO
		0002 DELIMITED
		0003 INITIALIZE. . .REPLACING
		0004 INSPECT. . .ALL
		0005 INSPECT. . .LEADING
		0006 SET. . .TO
		0007 SET. . .UP
		0008 SET. . .DOWN
		0009 PERFORM. . .TIMES
		0010 DIVIDE. . .REMAINDER
		0011 INSPECT. . .FIRST
		0012 SEARCH. . .VARYING
		0013 MORE-LABELS
		0014 SEARCH ALL
		0015 SEARCH. . .AT END
		0016 SEARCH. . .TEST INDEX
		0017 GLOBAL
		0018 LABEL
		0019 DEBUGGING
		0020 SEQUENCE
		0021 将来の利用のために予約済み
		0022 将来の利用のために予約済み
		0023 将来の利用のために予約済み
		0024 TALLYING
		0025 将来の利用のために予約済み
		0026 ON SIZE ERROR
		0027 ON OVERFLOW
		0028 ON ERROR
		0029 AT END
		0030 INVALID KEY

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0031 END-OF-PAGE
		0032 USING
		0033 BEFORE
		0034 AFTER
		0035 EXCEPTION
		0036 CORRESPONDING
		0037 将来の利用のために予約済み
		0038 RETURNING
		0039 GIVING
		0040 THROUGH
		0041 KEY
		0042 DELIMITER
		0043 POINTER
		0044 COUNT
		0045 METHOD
		0046 PROGRAM
		0047 INPUT
		0048 OUTPUT
		0049 I-O
		0050 EXTEND
		0051 RELOAD
		0052 ASCENDING
		0053 DESCENDING
		0054 DUPLICATES
		0055 NATIVE (USAGE)
		0056 INDEXED
		0057 FROM
		0058 FOOTING
		0059 LINES AT BOTTOM
		0060 LINES AT TOP

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		関数 ID タイプの場合:
		0001 COS
		0002 LOG
		0003 MAX
		0004 MIN
		0005 MOD
		0006 ORD
		0007 REM
		0008 SIN
		0009 SUM
		0010 TAN
		0011 ACOS
		0012 ASIN
		0013 ATAN
		0014 CHAR
		0015 MEAN
		0016 SQRT
		0017 LOG10
		0018 RANGE
		0019 LENGTH
		0020 MEDIAN
		0021 NUMVAL
		0022 RANDOM
		0023 ANNUITY
		0024 INTEGER
		0025 ORD-MAX
		0026 ORD-MIN
		0027 REVERSE
		0028 MIDRANGE
		0029 NUMVAL-C
		0030 VARIANCE
		0031 FACTORIAL
		0032 LOWER-CASE

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0033 UPPER-CASE 0034 CURRENT-DATE 0035 INTEGER-PART 0036 PRESENT-VALUE 0037 WHEN-COMPILED 0038 DAY-OF-INTEGERS 0039 INTEGER-OF-DAY 0040 DATE-OF-INTEGERS 0041 INTEGER-OF-DATE 0042 STANDARD-DEVIATION 0043 YEAR-TO-YYYY 0044 DAY-TO-YYYYDDD 0045 DATE-TO-YYYYMMDD 0046 UNDATE 0047 DATEVAL 0048 YEARWINDOW 0049 DISPLAY-OF 0050 NATIONAL-OF
		特殊レジスタ・タイプの場合: 0001 ADDRESS OF 0002 LENGTH OF
		キーワード・クラス・テスト名タイプの場合: 0001 ALPHABETIC 0002 ALPHABETIC-LOWER 0003 ALPHABETIC-UPPER 0004 DBCS 0005 KANJI 0006 NUMERIC 0007 NEGATIVE 0008 POSITIVE 0009 ZERO

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		予約語タイプの場合: 0001 TRUE 0002 FALSE 0003 ANY 0004 THRU
		ID、データ名、索引名、条件名、または簡略名タイプの場合: 0001 REFERENCED 0002 CHANGED 0003 REFERENCED & CHANGED
		初期化リテラル・タイプの場合: 0001 ALPHABETIC 0002 ALPHANUMERIC 0003 NUMERIC 0004 ALPHANUMERIC-EDITED 0005 NUMERIC-EDITED 0006 DBCS/EGCS 0007 NATIONAL 0008 NATIONAL-EDITED
		プロシージャー名タイプの場合: 0001 SECTION 0002 PARAGRAPH
		ID レベルの予約語タイプの場合: 0001 ROUNDED 0002 TRUE 0003 ON 0004 OFF 0005 SIZE 0006 DATE 0007 DAY 0008 DAY-OF-WEEK 0009 TIME 0010 WHEN-COMPILED 0011 PAGE 0012 DATE YYYYMMDD 0013 DAY YYYYDDD

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		<p>算術演算子タイプの場合:</p> <p>0001 PLUS</p> <p>0002 MINUS</p> <p>0003 TIMES</p> <p>0004 DIVIDE</p> <p>0005 DIVIDE REMAINDER</p> <p>0006 EXPONENTIATE</p> <p>0007 NEGATE</p>
		<p>比較演算子タイプの場合:</p> <p>0008 LESS</p> <p>0009 LESS OR EQUAL</p> <p>0010 EQUAL</p> <p>0011 NOT EQUAL</p> <p>0012 GREATER</p> <p>0013 GREATER OR EQUAL</p> <p>0014 AND</p> <p>0015 OR</p> <p>0016 CLASS CONDITION</p> <p>0017 NOT CLASS CONDITION</p>
親ノード番号	FL4	ノードの親のノード番号
左方兄弟ノード番号	FL4	ノードの左方兄弟のノード番号 (ある場合)。なしの場合、値はゼロ。
記号 ID	FL4	<p>以下のタイプのいずれかのユーザー名の場合は、ノードの記号 ID。</p> <ul style="list-style-type: none"> データ入力項目 ID ファイル名 指標名 プロシージャ名。 条件名 簡略名 <p>段落 ID に対応するプロシージャ名を除き、この値は記号 (タイプ 42) レコード内の記号 ID に対応します。</p> <p>他のすべてのノード・タイプの場合、この値はゼロです。</p>

表 107. SYSADATA 構文解析ツリー・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
セクション記号 ID	FL4	修飾段落名参照の場合は、ノードが含まれているセクションの記号 ID。この値は記号 (タイプ 42) レコード内のセクション ID に対応します。 他のすべてのノード・タイプの場合、この値はゼロです。
最初のトークン番号	FL4	ノードに関連付けられた最初のトークンの番号
最後のトークン番号	FL4	ノードに関連付けられた最後のトークンの番号
予約済み	FL4	将来の利用のために予約済み
フラグ	CL1	ノードに関する情報は、以下を参照してください。 X'80' 予約済み X'40' 生成されたノード、トークンなし
予約済み	CL3	将来の利用のために予約済み

トークン・レコード - X'0030'

コンパイラーは、コメント行として扱われる行のトークン・レコードを生成しません。そのような行としては、以下にリストするものがありますが、それらに限定されません。

- ・ コメント行。これは、桁 7 にアスタリスク (*) またはスラッシュ (/) が指定されている行です。
- ・ 以下のコンパイラー指示ステートメント:
 - *CBL (*CONTROL)
 - BASIS
 - >>CALLINT
 - COPY
 - DELETE
 - EJECT
 - INSERT
 - REPLACE
 - SKIP1
 - SKIP2
 - SKIP3
 - TITLE
- ・ デバッグ行。これは桁 7 に D が指定されている行です (WITH DEBUGGING MODE が指定されていない場合)。

表 108. SYSADATA トークン・レコード

フィールド	サイズ	説明
トークン番号	FL4	コンパイラーが生成するソース・ファイル内のトークン番号。1 から開始。ソースにはコピーブックを組み込み済みです。

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
トークン・コード	HL2	<p>トークンの型 (ユーザー名、リテラル、予約語など)。</p> <p>予約語の場合は、コンパイラ予約語テーブル値が使用されます。</p> <p>PICTURE スtringの場合は、特別コード 0000 が使用されます。</p> <p>継続されるトークンの各ピース (最後のピース以外) の場合は、特殊コード 3333 が使用されます。</p> <p>その他の場合は、以下のコードが使用されます。</p> <p>0001 ACCEPT</p> <p>0002 ADD</p> <p>0003 ALTER</p> <p>0004 CALL</p> <p>0005 CANCEL</p> <p>0007 CLOSE</p> <p>0009 COMPUTE</p> <p>0011 DELETE</p> <p>0013 DISPLAY</p> <p>0014 DIVIDE</p> <p>0017 READY</p> <p>0018 END-PERFORM</p> <p>0019 ENTER</p> <p>0020 ENTRY</p> <p>0021 EXIT</p> <p>0022 EXEC</p> <p> EXECUTE</p> <p>0023 GO</p> <p>0024 IF</p> <p>0025 INITIALIZE</p> <p>0026 INVOKE</p> <p>0027 INSPECT</p> <p>0028 MERGE</p> <p>0029 MOVE</p>

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0030 MULTIPLY
		0031 OPEN
		0032 PERFORM
		0033 READ
		0035 RELEASE
		0036 RETURN
		0037 REWRITE
		0038 SEARCH
		0040 SET
		0041 SORT
		0042 START
		0043 STOP
		0044 STRING
		0045 SUBTRACT
		0048 yUNSTRING
		0049 USE
		0050 WRITE
		0051 CONTINUE
		0052 END-ADD
		0053 END-CALL
		0054 END-COMPUTE
		0055 END-DELETE
		0056 END-DIVIDE
		0057 END-EVALUATE
		0058 END-IF
		0059 END-MULTIPLY
		0060 END-READ
		0061 END-RETURN
		0062 END-REWRITE
		0063 END-SEARCH
		0064 END-START
		0065 END-STRING
		0066 END-SUBTRACT
		0067 END-UNSTRING
		0068 END-WRITE
		0069 GOBACK

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0070 EVALUATE
		0071 RESET
		0072 SERVICE
		0073 END-INVOKE
		0074 END-EXEC
		0075 XML
		0076 END-XML
		0099 FOREIGN-VERB
		0101 DATA-NAME
		0105 DASHED-NUM
		0106 DECIMAL
		0107 DIV-SIGN
		0108 EQ
		0109 EXPONENTIATION
		0110 GT
		0111 INTEGER
		0112 LT
		0113 LPAREN
		0114 MINUS-SIGN
		0115 MULT-SIGN
		0116 NONUMLIT
		0117 PERIOD
		0118 PLUS-SIGN
		0121 RPAREN
		0122 SIGNED-INTEGER
		0123 QUID
		0124 COLON
		0125 IEOF
		0126 EGCS-LIT
		0127 COMMA-SPACE
		0128 SEMICOLON-SPACE
		0129 PROCEDURE-NAME
		0130 FLT-POINT-LIT
		0131 言語環境プログラム

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0132 GE
		0133 IDREF
		0134 EXPREF
		0136 CICS
		0137 NEW
		0138 NATIONAL-LIT
		0200 ADDRESS
		0201 ADVANCING
		0202 AFTER
		0203 ALL
		0204 ALPHABETIC
		0205 ALPHANUMERIC
		0206 ANY
		0207 AND
		0208 ALPHANUMERIC-EDITED
		0209 BEFORE
		0210 BEGINNING
		0211 FUNCTION
		0212 CONTENT
		0213 CORR
		CORRESPONDING
		0214 DAY
		0215 DATE
		0216 DEBUG-CONTENTS
		0217 DEBUG-ITEM
		0218 DEBUG-LINE
		0219 DEBUG-NAME
		0220 DEBUG-SUB-1
		0221 DEBUG-SUB-2
		0222 DEBUG-SUB-3
		0223 DELIMITED
		0224 DELIMITER
		0225 DOWN

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0226 NUMERIC-EDITED
		0227 XML-EVENT
		0228 END-OF-PAGE
		EOP
		0229 EQUAL
		0230 ERROR
		0231 XML-NTEXT
		0232 EXCEPTION
		0233 EXTEND
		0234 FIRST
		0235 FROM
		0236 GIVING
		0237 GREATER
		0238 I-O
		0239 IN
		0240 INITIAL
		0241 INTO
		0242 INVALID
		0243 SQL
		0244 LESS
		0245 LINAGE-COUNTER
		0246 XML-TEXT
		0247 LOCK
		0248 GENERATE
		0249 NEGATIVE
		0250 NEXT
		0251 NO
		0252 NOT
		0253 NUMERIC
		0254 KANJI
		0255 OR
		0256 OTHER
		0257 OVERFLOW
		0258 PAGE
		0259 CONVERTING

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0260 POINTER
		0261 POSITIVE
		0262 DBCS
		0263 PROCEDURES
		0264 PROCEED
		0265 REFERENCES
		0266 DAY-OF-WEEK
		0267 REMAINDER
		0268 REMOVAL
		0269 REPLACING
		0270 REVERSED
		0271 REWIND
		0272 ROUNDED
		0273 RUN
		0274 SENTENCE
		0275 STANDARD
		0276 RETURN-CODE
		SORT-CORE-SIZE
		SORT-FILE-SIZE
		SORT-MESSAGE
		SORT-MODE-SIZE
		SORT-RETURN
		TALLY
		XML-CODE
		0277 TALLYING
		0278 SUM
		0279 TEST
		0280 THAN
		0281 UNTIL
		0282 UP
		0283 UPON
		0284 VARYING
		0285 RELOAD
		0286 TRUE

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0287 THEN
		0288 RETURNING
		0289 ELSE
		0290 SELF
		0291 SUPER
		0292 WHEN-COMPILED
		0293 ENDING
		0294 FALSE
		0295 REFERENCE
		0296 NATIONAL-EDITED
		0297 COM-REG
		0298 ALPHABETIC-LOWER
		0299 ALPHABETIC-UPPER
		0301 REDEFINES
		0302 OCCURS
		0303 SYNC
		SYNCHRONIZED
		0304 MORE-LABELS
		0305 JUST
		JUSTIFIED
		0306 SHIFT-IN
		0307 BLANK
		0308 VALUE
		0309 COMP
		COMPUTATIONAL
		0310 COMP-1
		COMPUTATIONAL-1
		0311 COMP-3
		COMPUTATIONAL-3
		0312 COMP-2
		COMPUTATIONAL-2
		0313 COMP-4
		COMPUTATIONAL-4
		0314 DISPLAY-1
		0315 SHIFT-OUT

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0316 INDEX
		0317 USAGE
		0318 SIGN
		0319 LEADING
		0320 SEPARATE
		0321 INDEXED
		0322 LEFT
		0323 RIGHT
		0324 PIC
		PICTURE
		0325 VALUES
		0326 GLOBAL
		0327 EXTERNAL
		0328 BINARY
		0329 PACKED-DECIMAL
		0330 EGCS
		0331 PROCEDURE-POINTER
		0332 COMP-5
		COMPUTATIONAL-5
		0333 FUNCTION-POINTER
		0334 TYPE
		0335 JNIENVPTR
		0336 NATIONAL
		0337 GROUP-USAGE
		0401 HIGH-VALUE
		HIGH-VALUES
		0402 LOW-VALUE
		LOW-VALUES
		0403 QUOTE
		QUOTES
		0404 SPACE
		SPACES
		0405 ZERO

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0406 ZEROES
		ZEROS
		0407 NULL
		NULLS
		0501 BLOCK
		0502 BOTTOM
		0505 CHARACTER
		0506 CODE
		0507 CODE-SET
		0514 FILLER
		0516 FOOTING
		0520 LABEL
		0521 LENGTH
		0524 LINAGE
		0526 OMITTED
		0531 RENAMES
		0543 TOP
		0545 TRAILING
		0549 RECORDING
		0601 INHERITS
		0603 RECURSIVE
		0701 ACCESS
		0702 ALSO
		0703 ALTERNATE
		0704 AREA
		AREAS
		0705 ASSIGN
		0707 COLLATING
		0708 COMMA
		0709 CURRENCY
		0710 CLASS
		0711 DECIMAL-POINT
		0712 DUPLICATES
		0713 DYNAMIC
		0714 EVERY

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0716 MEMORY
		0717 MODE
		0718 MODULES
		0719 MULTIPLE
		0720 NATIVE
		0721 OFF
		0722 OPTIONAL
		0723 ORGANIZATION
		0724 POSITION
		0725 PROGRAM
		0726 RANDOM
		0727 RELATIVE
		0728 RERUN
		0729 RESERVE
		0730 SAME
		0731 SEGMENT-LIMIT
		0732 SELECT
		0733 SEQUENCE
		0734 SEQUENTIAL
		0736 SORT-MERGE
		0737 STANDARD-1
		0738 TAPE
		0739 WORDS
		0740 PROCESSING
		0741 APPLY
		0742 WRITE-ONLY
		0743 COMMON
		0744 ALPHABET
		0745 PADDING
		0746 SYMBOLIC
		0747 STANDARD-2
		0748 OVERRIDE
		0750 PASSWORD

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0801 ARE
		IS
		0802 ASCENDING
		0803 AT
		0804 BY
		0805 CHARACTERS
		0806 CONTAINS
		0808 COUNT
		0809 DEBUGGING
		0810 DEPENDING
		0811 DESCENDING
		0812 DIVISION
		0814 FOR
		0815 ORDER
		0816 INPUT
		0817 REPLACE
		0818 KEY
		0819 LINE
		LINES
		0821 OF
		0822 ON
		0823 OUTPUT
		0825 RECORD
		0826 RECORDS
		0827 REEL
		0828 SECTION
		0829 SIZE
		0830 STATUS
		0831 THROUGH
		THRU
		0832 TIME
		0833 TIMES
		0834 TO
		0836 UNIT

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		0837 USING
		0838 WHEN
		0839 WITH
		0901 PROCEDURE
		0902 DECLARATIVES
		0903 END
		1001 DATA
		1002 FILE
		1003 FD
		1004 SD
		1005 WORKING-STORAGE
		1006 LOCAL-STORAGE
		1007 LINKAGE
		1101 ENVIRONMENT
		1102 CONFIGURATION
		1103 SOURCE-COMPUTER
		1104 OBJECT-COMPUTER
		1105 SPECIAL-NAMES
		1106 REPOSITORY
		1107 INPUT-OUTPUT
		1108 FILE-CONTROL
		1109 I-O-CONTROL
		1201 ID
		IDENTIFICATION
		1202 PROGRAM-ID
		1203 AUTHOR
		1204 INSTALLATION
		1205 DATE-WRITTEN
		1206 DATE-COMPILED
		1207 SECURITY
		1208 CLASS-ID
		1209 METHOD-ID
		1210 METHOD
		1211 FACTORY

表 108. SYSADATA トークン・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		1212 OBJECT 2020 TRACE 3000 DATADEF 3001 F-NAME 3002 UPSI-SWITCH 3003 CONDNAME 3004 CONDVAR 3005 BLOB 3006 CLOB 3007 DBCLOB 3008 BLOB-LOCATOR 3009 CLOB-LOCATOR 3010 DBCLOB-LOCATOR 3011 BLOB-FILE 3012 CLOB-FILE 3013 DBCLOB-FILE 3014 DFHRESP 5001 PARSE 5002 AUTOMATIC 5003 PREVIOUS 9999 COBOL
トークン長	HL2	トークンの長さ
トークン列	FL4	ソース行上のトークンの開始列番号
トークン行	FL4	トークンの行番号
フラグ	CL1	<p>トークンに関する情報は、以下を参照してください。</p> <p>X'80' トークンは継続</p> <p>X'40' 継続されるトークンの最後のピース</p> <p>PICTURE スtringの場合は、ソース・トークンが継続されても、1 つのトークン・レコードしか生成されません。トークン・コード 0000、最初のピースのトークン列と行、完全Stringの長さ、継続なしフラグ・セット、完全Stringのトークン・テキストが与えられます。</p>
予約済み	CL7	将来の利用のために予約済み
トークン・テキスト	CL(n)	実トークン・String

ソース・エラー・レコード - X'0032'

次の表に、ソース・エラー・レコードの内容を示します。

表 109. SYSADATA ソース・エラー・レコード

フィールド	サイズ	説明
ステートメント番号	FL4	エラーのあるステートメントのステートメント番号
エラー ID	CL16	エラー・メッセージ ID (左寄せ、ブランク埋め込み)
エラーの重大度	HL2	エラーの重大度
エラー・メッセージ長	HL2	エラー・メッセージ・テキストの長さ
行位置	XL1	FIPS メッセージに指定される行位置標識
予約済み	CL7	将来の利用のために予約済み
エラー・メッセージ	CL(n)	エラー・メッセージ・テキスト

ソース・レコード - X'0038'

次の表に、ソース・レコードの内容を示します。

表 110. SYSADATA ソース・レコード

フィールド	サイズ	説明
行番号	FL4	ソース・レコードのリスト行番号
入力レコード番号	FL4	現行入力ファイル内の入力ソース・レコード番号
1 次ファイル番号	HL2	このレコードが基本入力ファイルからの場合は、入力ファイルの割り当てシーケンス番号 (ジョブ識別レコード内の入力ファイル <i>n</i> フィールドを参照してください。)
ライブラリー・ファイル番号	HL2	このレコードが COPYIBASIS 入力ファイルからの場合は、ライブラリー入力ファイルの割り当てシーケンス番号。 (ライブラリー・レコード内のメンバー・ファイル ID <i>n</i> フィールドを参照してください。)
予約済み	CL8	将来の利用のために予約済み
親レコード番号	FL4	親ソース・レコード番号。COPYIBASIS ステートメントのレコード番号となります。
親 1 次ファイル番号	HL2	このレコードの親が 1 次入力ファイルからの場合は、親ファイルの割り当てシーケンス番号 (ジョブ識別レコード内の入力ファイル <i>n</i> フィールドを参照してください。)
親ライブラリー割り当てファイル番号	HL2	このレコードの親が COPYIBASIS 入力ファイルからの場合は、親ライブラリー・ファイルの割り当てシーケンス番号。 (ライブラリー・レコード内の COPY/BASIS メンバー・ファイル ID <i>n</i> フィールドを参照してください。)
予約済み	CL8	将来の利用のために予約済み
ソース・レコードの長さ	HL2	後に続く実ソース・レコードの長さ。
予約済み	CL10	将来の利用のために予約済み
ソース・レコード	CL(n)	

COPY REPLACING レコード - X'0039'

REPLACING アクションが実行されるごとに、1 つの COPY REPLACING タイプのレコードが出力されます。すなわち、REPLACING 句のオペランド 1 がコピーブックのテキストと一致するごとに、COPY REPLACING TEXT レコードが書き込まれます。

次の表に、COPY REPLACING レコードの内容を示します。

表 111. SYSADATA COPY REPLACING レコード

フィールド	サイズ	説明
置き換えられたストリングの開始行番号	FL4	REPLACING の結果であるテキストの開始のリスト行番号
置き換えられたストリングの開始列番号	FL4	REPLACING の結果であるテキストの開始のリスト列番号
置き換えられたストリングの終了行番号	FL4	REPLACING の結果であるテキストの終了のリスト行番号
置き換えられたストリングの終了列番号	FL4	REPLACING の結果であるテキストの終了のリスト列番号
オリジナル・ストリングの開始行番号	FL4	REPLACING により変更されたテキストの開始のソース・ファイル行番号
オリジナル・ストリングの開始列番号	FL4	REPLACING により変更されたテキストの開始のソース・ファイル列番号
オリジナル・ストリングの終了行番号	FL4	REPLACING により変更されたテキストの終了のソース・ファイル行番号
オリジナル・ストリングの終了列番号	FL4	REPLACING により変更されたテキストの終了のソース・ファイル列番号

記号レコード - X'0042'

次の表に、記号レコードの内容を示します。

表 112. SYSADATA 記号レコード

フィールド	サイズ	説明
記号 ID	FL4	固有の記号 ID
行番号	FL4	記号が定義または宣言されるソース・レコードのリスト行番号
レベル	XL1	記号の真のレベル番号 (または構造内のデータ項目の相対レベル番号)。COBOL の場合、これは、01 から 49 の範囲、66 (RENAMES 項目の場合)、77、または 88 (条件項目の場合) になります。
修飾標識	XL1	X'00' 固有の名前。修飾は不要。 X'01' このデータ項目は修飾が必須。名前はプログラム内で固有ではありません。このフィールドが適用されるのは、このデータ項目がレベル 01 名ではない 場合のみです。

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
記号タイプ	XL1	<p>X'68' クラス名 (クラス ID)</p> <p>X'58' メソッド名</p> <p>X'40' データ名</p> <p>X'20' プロシージャー名。</p> <p>X'10' 簡略名</p> <p>X'08' プログラム名</p> <p>X'81' 予約済み</p> <p>以下は、上記のタイプの ORed です (該当する場合)。</p> <p>X'04' 外部</p> <p>X'02' グローバル</p>
記号属性	XL1	<p>X'01' 数値</p> <p>X'02' 次のいずれかのクラスの基本文字:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英字 • 英数字 • DBCS • 国別文字 <p>X'03' グループ</p> <p>X'04' ポインター</p> <p>X'05' 指標データ 項目</p> <p>X'06' 指標名</p> <p>X'07' 条件</p> <p>X'0F' ファイル</p> <p>X'10' ソート・ファイル</p> <p>X'17' クラス名 (リポジトリ)</p> <p>X'18' オブジェクト参照</p>

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
文節	XL1	<p>記号定義で指定されている文節。</p> <p>数値 (X'01')、基本文字 (X'02')、グループ (X'03')、ポインタ (X'04')、指標データ項目 (X'05')、またはオブジェクト参照 (X'18') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... 値</p> <p>.1... 索引付き</p> <p>..1. 再定義</p> <p>...1 名前変更</p> <p>.... 1... 発生</p> <p>.... .1.. Occurs キーあり</p> <p>.... ..1. ケースにより発生</p> <p>.... ...1 親で発生</p> <p>両方のファイル・タイプの場合:</p> <p>1... 選択</p> <p>.1... 割り当て</p> <p>..1. 再実行</p> <p>...1 同一領域</p> <p>.... 1... 同一レコード域</p> <p>.... .1.. 記録モード</p> <p>.... ..1. 予約済み</p> <p>.... ...1 レコード</p>

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		簡略名記号の場合:
		01 CSP
		02 C01
		03 C02
		04 C03
		05 C04
		06 C05
		07 C06
		08 C07
		09 C08
		10 C09
		11 C10
		12 C11
		13 C12
		14 S01
		15 S02
		16 S03
		17 S04
		18 S05
		19 CONSOLE
		20 SYSINISYSIPT
		22 SYSOUTISYSLSTISYSLIST
		24 SYSPUNCHISYSPCH
		26 UPSI-0
		27 UPSI-1
		28 UPSI-2
		29 UPSI-3
		30 UPSI-4
		31 UPSI-5
		32 UPSI-6
		33 UPSI-7
		34 AFP-5A

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
データ・フラグ 1	XL1	<p>両方のファイル・タイプの場合、および数値 (X'01'), 基本文字 (X'02'), グループ (X'03'), ポインター (X'04'), 指標データ項目 (X'05'), またはオブジェクト参照 (X'18') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... 再定義</p> <p>.1... 名前変更</p> <p>..1. 同期化</p> <p>...1 暗黙的に再定義</p> <p>.... 1... 日付フィールド</p> <p>.... .1.. 暗黙の再定義</p> <p>.... ..1.. FILLER</p> <p>.... ...1 レベル 77</p>

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
データ・フラグ 2	XL1	<p>数値 (X'01') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... 2 進数</p> <p>.1... 外部浮動小数点 (USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL の)</p> <p>..1. 内部浮動小数点</p> <p>...1 圧縮</p> <p>.... 1... 外部 10 進数 (USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL の)</p> <p>.... .1.. 負の位取り</p> <p>.... ..1.. 数字編集 (USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL の)</p> <p>.... ...1 将来の利用のために予約済み</p> <p>基本文字 (X'02') またはグループ (X'03') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... 英字</p> <p>.1... 英数字</p> <p>..1. 編集英数字</p> <p>...1 グループは独自の ODO オブジェクトを含む</p> <p>.... 1... DBCS 項目</p> <p>.... .1.. グループ可変長</p> <p>.... ..1.. EGCS 項目</p> <p>.... ...1 編集 EGCS</p>

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
		<p>両方のファイル・タイプの場合:</p> <p>1... レコード内の ODO のオブジェクト</p> <p>.1... レコード内の ODO のサブジェクト</p> <p>..1. 順次アクセス</p> <p>...1 ランダム・アクセス</p> <p>.... 1... 動的アクセス</p> <p>.... .1.. 位置指定モード</p> <p>.... ..1. レコード域</p> <p>.... ...1 将来の利用のために予約済み</p> <p>他のすべてのデータ型の場合、フィールドはゼロです。</p>
データ・フラグ 3	XL1	<p>両方のファイル・タイプの場合:</p> <p>1... すべてのレコードが同じ長さ</p> <p>.1... 固定長</p> <p>..1. 可変長</p> <p>...1 未定義</p> <p>.... 1... スパン</p> <p>.... .1.. ブロック</p> <p>.... ..1. 書き込みのみ適用</p> <p>.... ...1 同一ソート・マージ領域</p> <p>他のすべてのデータ型の場合、フィールドはゼロです。</p>

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
ファイル編成	XL1	<p>両方のファイル・タイプの場合:</p> <p>1... QSAM</p> <p>.1... ASCII</p> <p>..1. 標準ラベル</p> <p>...1 ユーザー・ラベル</p> <p>.... 1... VSAM 順次</p> <p>.... .1.. VSAM 索引</p> <p>.... ..1. VSAM 相対</p> <p>....1 行順次</p> <p>他のすべてのデータ型の場合、フィールドはゼロです。</p>
USAGE 文節	FL1	<p>X'00' USAGE IS DISPLAY</p> <p>X'01' USAGE IS COMP-1</p> <p>X'02' USAGE IS COMP-2</p> <p>X'03' USAGE IS PACKED-DECIMAL または USAGE IS COMP-3</p> <p>X'04' USAGE IS BINARY、USAGE IS COMP、または USAGE IS COMP-4</p> <p>X'05' USAGE IS DISPLAY-1</p> <p>X'06' USAGE IS POINTER</p> <p>X'07' USAGE IS INDEX</p> <p>X'08' USAGE IS PROCEDURE-POINTER</p> <p>X'09' USAGE IS OBJECT-REFERENCE</p> <p>X'0B' NATIONAL</p> <p>X'0A' FUNCTION-POINTER</p>
記号文節	FL1	<p>X'00' SIGN 文節なし</p> <p>X'01' SIGN IS LEADING</p> <p>X'02' SIGN IS LEADING SEPARATE CHARACTER</p> <p>X'03' SIGN IS TRAILING</p> <p>X'04' SIGN IS TRAILING SEPARATE CHARACTER</p>

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
標識	FL1	X'01' JUSTIFIED 文節あり。右寄せ属性が有効。 X'02' BLANK WHEN ZERO 文節あり。
サイズ	FL4	このデータ項目のサイズ。この項目がストレージで占有する実バイト数。DBCS 項目の場合、この数は、文字数ではなく、バイト数で示されます。可変長項目の場合、このフィールドには、コンパイラによってこの項目に予約されるストレージの最大サイズが反映されます。「長さ属性」とも呼ばれます。
精度	FL1	固定データ項目または浮動データ項目の精度
スケール	FL1	固定データ項目のスケール因数。小数点の右方の桁数。

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
ベース・ロケータ・タイプ	FL1	ホストの場合:
		01 ベース・ロケータ・ファイル
		02 ベース・ロケータ作業用ストレージ
		03 ベース・ロケータ・リンケージ・セクション
		05 ベース・ロケータ特殊レジスター
		07 変数別索引付き
		09 COMREG 特殊レジスター
		10 UPSI スイッチ
		13 Varloc 項目のベース・ロケータ
		14 外部データのベース・ロケータ
		15 ベース・ロケータ英数字 FUNC
		16 ベース・ロケータ英数字 EVAL
		17 オブジェクト・データのベース・ロケータ
		19 Local-Storage のベース・ロケータ
		20 ファクトリー・データ
		21 XML-TEXT および XML-NTEXT
		Windows および AIX の場合:
		01 ベース・ロケータ・ファイル
		02 ベース・ロケータ・リンケージ・セクション
		03 Varloc 項目のベース・ロケータ
		04 外部データのベース・ロケータ
		05 オブジェクト・データのベース・ロケータ
		06 XML-TEXT および XML-NTEXT
		10 ベース・ロケータ作業用ストレージ
		11 ベース・ロケータ特殊レジスター
		12 ベース・ロケータ英数字 FUNC
		13 ベース・ロケータ英数字 EVAL
		14 変数別索引付き
		16 COMREG 特殊レジスター
		17 UPSI スイッチ
		18 ファクトリー・データ (factory data)
		22 Local-Storage のベース・ロケータ

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
日付形式	FL1	<p>日付形式は以下のとおりです。</p> <p>01 YY</p> <p>02 YYXX</p> <p>03 YYXXXX</p> <p>04 YYXXX</p> <p>05 YYYY</p> <p>06 YYYYXX</p> <p>07 YYYYXXXX</p> <p>08 YYYYXXX</p> <p>09 YYX</p> <p>10 YYYYX</p> <p>22 XXYY</p> <p>23 XXXXY</p> <p>24 XXXYY</p> <p>26 XXYYYY</p> <p>27 XXXXYYYY</p> <p>28 XXXYYYY</p> <p>29 XYY</p> <p>30 XYYYY</p>
データ・フラグ 4	XL1	<p>数値 (X'01') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... ..</p> <p>数値国別</p> <p>基本文字 (X'02') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... ..</p> <p>国別文字</p> <p>.1... ..</p> <p>国別編集</p> <p>グループ (X'03') の記号属性を持つ記号の場合:</p> <p>1... ..</p> <p>国別グループ (Group-Usage National)</p>
予約済み	FL3	将来の利用のために予約済み

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
住所情報	FL4	ホストの場合、ベース・ロケーター番号および変位は以下のとおりです。 ビット 0 から 4 未使用 ビット 5 から 19 ベース・ロケーター (BL) 番号 ビット 20 から 31 ベース・ロケーターの変位 Windows および AIX の場合、W コード SymId。
構造変位	AL4	構造内の記号のオフセット。このオフセットは変数位置指定項目に 0 を設定します。
親変位	AL4	定義中の項目の即時親からのバイト・オフセット。
親 ID	FL4	定義中の項目の即時親の記号 ID。
再定義 ID	FL4	この項目が再定義するデータ項目の記号 ID (該当する場合)。
開始名前変更 ID	FL4	この項目がレベル 66 項目の場合は、この項目が名前変更した開始 COBOL データ項目の記号 ID。レベル 66 項目でない場合、このフィールドは 0 に設定されます。
終了名前変更 ID	FL4	この項目がレベル 66 項目の場合は、この項目が名前変更した終了 COBOL データ項目の記号 ID。レベル 66 項目でない場合、このフィールドは 0 に設定されます。
プログラム名記号 ID	FL4	プログラムのプログラム名の ID またはこの記号が定義されているクラスのクラス名。
OCCURS 最小 段落 ID	FL4	OCCURS の最小値 段落名の PROC 名 ID
OCCURS 最大 セクション ID	FL4	OCCURS の最大値 セクション名の PROC 名 ID
寸法	FL4	寸法の数
予約済み	CL12	将来の利用のために予約済み
値の組のカウント	HL2	値の組のカウント
記号名の長さ	HL2	記号名の文字数
データ名のピクチャー・データ長 または ファイル名の割り当て名の長さ	HL2	ピクチャー・データ内の文字の数: 関連した PICTURE 文節を記号が持たない場合はゼロ。(PICTURE フィールドの長さ。) 長さは、ソース入力内で検出されたときのフィールドを表します。この長さは、複製係数を含んでいない PICTURE 項目の拡張フィールドを表すものではありません。PICTURE スtringの最大 COBOL 長は、50 バイトです。このフィールドがゼロの場合は、PICTURE が指定されていないことを示します。 これがファイル名の場合は、外部ファイル名の文字数。これは、割り当て名の DD 名部分です。ファイル名および ASSIGN USING が指定されている場合は、ゼロ。

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
データ名の初期値の長さ CLASS-ID の外部クラス名の長さ	HL2	記号値の文字の数。記号に初期値がない場合はゼロ。 CLASS-ID の外部クラス名の文字の数
データ名の ODO 記号名 ID ファイル名の場合、ASSIGN データ名の ID	FL4	データ名の場合、ODO 記号名の ID。ODO が指定されていない場合はゼロ。 ファイル名の場合、ASSIGN USING データ名の記号 ID。ASSIGN TO が指定されている場合はゼロ。
キー・カウント	HL2	定義されたキーの数
索引カウント	HL2	索引記号 ID のカウント。指定がない場合は、ゼロ
記号名	CL(n)	
データ名のピクチャー・データ・ストリング または ファイル名の割り当て名	CL(n)	ユーザーが入力したとおりの PICTURE 文字ストリング。文字ストリングには、全記号、括弧、およびレプリカの生成係数が含まれます。 これがファイル名の場合は外部ファイル名。これは、割り当て名の DD 名部分です。
索引 ID リスト	(n)FL4	各索引記号名の ID
キー	(n)XL8	このフィールドには、配列に対して指定するキーを記述するデータが含まれます。以下の 3 つのフィールドは、「キー・カウント」フィールドに指定されている回数だけ繰り返されます。
...キー・シーケンス	FL1	昇順または降順の標識。 X'00' DESCENDING X'01' ASCENDING
...充てん文字	CL3	予約済み
...キー ID	FL4	配列内のキー・フィールドであるデータ項目の記号 ID
データ名の初期値データ CLASS-ID の外部クラス名	CL(n)	このフィールドには、この記号の INITIAL VALUE 文節で指定するデータが含まれます。以下の 4 つの適切なサブフィールドは、「値の組カウント」フィールド内のカウントに応じて繰り返されます。このフィールドのデータの全長は、「初期値の長さ」フィールドに入れられます。 CLASS-ID の外部クラス名。
...第 1 値の長さ	HL2	最初の値の長さ

表 112. SYSADATA 記号レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
...第 1 値のデータ	CL(n)	最初の値。 このフィールドには、ソース・ファイルの VALUE 文節に指定されたとおりに、リテラル (または表意定数) が入ります。このフィールドには、開始/終了区切り文字、組み込み引用符、および SHIFT IN/SHIFT OUT 文字が入ります。リテラルが複数行にわたる場合には、行は 1 つの長いストリングに連結されます。表意定数が指定された場合には、このフィールドには、そのワードに関連付けられた値ではなく、実際の予約語が入ります。
...第 2 値の長さ	HL2	2 番目の値の長さ — THRU 値の組でない場合は、ゼロ
...第 2 値のデータ	CL(n)	2 番目の値。 このフィールドには、ソース・ファイルの VALUE 文節に指定されたとおりに、リテラル (または表意定数) が入ります。このフィールドには、開始/終了区切り文字、組み込み引用符、および SHIFT IN/SHIFT OUT 文字が入ります。リテラルが複数行にわたる場合には、行は 1 つの長いストリングに連結されます。表意定数が指定された場合には、このフィールドには、そのワードに関連付けられた値ではなく、実際の予約語が入ります。

記号相互参照レコード - X'0044'

次の表に、記号相互参照レコードの内容を示します。

表 113. SYSADATA 記号相互参照レコード

フィールド	サイズ	説明
記号長	HL2	記号の長さ
ステートメント定義	FL4	記号が定義または宣言されているステートメント番号 VERB XREF の場合のみ: 動詞カウント。この動詞への参照の合計数。
参照数 ¹	HL2	このレコード内の、後に続く記号への参照の数
相互参照タイプ	XL1	X'01' プログラム X'02' プロシージャ X'03' 動詞。 X'04' 記号またはデータ名 X'05' メソッド X'06' クラス
予約済み	CL7	将来の利用のために予約済み
記号名	CL(n)	記号。可変長。

表 113. SYSADATA 記号相互参照レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
...参照フラグ	CL1	<p>記号またはデータ名参照の場合:</p> <p>C' ' ブランクは参照のみの意味</p> <p>C'M' 修正参照フラグ</p> <p>プロシージャー型記号参照の場合:</p> <p>C'A' ALTER (プロシージャー名)</p> <p>C'D' GO TO (プロシージャー名) DEPENDING ON</p> <p>C'E' (プロシージャー名) を介した、(PERFORM) の範囲の末尾</p> <p>C'G' GO TO (プロシージャー名)</p> <p>C'P' PERFORM (プロシージャー名)</p> <p>C'T' (ALTER) TO PROCEED TO (プロシージャー名)</p> <p>C'U' デバッグ用に使用 (プロシージャー名)</p>
...ステートメント番号	XL4	記号または動詞が参照されているステートメント番号
<p>1. 参照フラグ・フィールドおよびステートメント番号フィールドは、参照フィールドで指示される回数分だけ、発生します。例えば、参照フィールドの数に 10 の値が入っているとき、データ名、プロシージャー、またはプログラム式シンボルの場合には、参照フラグおよびステートメント番号ペアは 10 回発生し、動詞の場合には、ステートメント番号が 10 回発生します。</p> <p>参照数が、SYSADATA ファイルのレコード・サイズを超える場合、レコードは次のレコードに続行されます。レコードの共通ヘッダー・セクションに、継続フラグが設定されます。</p>		

ネストされたプログラム・レコード - X'0046'

次の表に、ネストされたプログラム・レコードの内容を示します。

表 114. SYSADATA ネストされたプログラム・レコード

フィールド	サイズ	説明
ステートメント定義	FL4	記号が定義または宣言されているステートメント番号
ネスト・レベル	XL1	プログラム・ネスト・レベル
プログラム属性	XL1	<p>1... 初期</p> <p>.1.. 共通</p> <p>..1. PROCEDURE DIVISION を使用</p> <p>...1 1111 将来の利用のために予約済み</p>
予約済み	XL1	将来の利用のために予約済み
プログラム名長	XL1	次のフィールドの長さ

表 114. SYSADATA ネストされたプログラム・レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
プログラム名	CL(n)	プログラム名

ライブラリー・レコード - X'0060'

次の表に、SYSADATA ライブラリー・レコードの内容を示します。

表 115. SYSADATA ライブラリー・レコード

フィールド	サイズ	説明
メンバーの数 ¹	HL2	このレコードに記述される COPY/INCLUDE コード・メンバーの数のカウント
ライブラリー名長	HL2	ライブラリー名の長さ
ライブラリー・ボリューム長	HL2	ライブラリー・ボリューム ID の長さ
連結番号	XL2	ライブラリーの連結番号
ライブラリー DD 名長	HL2	ライブラリー DD 名の長さ
予約済み	CL4	将来の利用のために予約済み
ライブラリー名	CL(n)	COPY/INCLUDE メンバーが取り出された元のライブラリーの名前
ライブラリー・ボリューム	CL(n)	ライブラリーが常駐するボリュームのボリューム識別
ライブラリー DD 名	CL(n)	このライブラリーに使用される DD 名 (または同義)
...COPY/BASIS メンバー・ファイル ID ²	HL2	... の後の名前のライブラリー・ファイル ID
...COPY/BASIS 名長	HL2	... の後の名前の長さ
...COPY/BASIS 名	CL(n)	使用されてきた COPY/BASIS メンバーの名前
1. ライブラリーから COPY メンバーが 10 メンバー取り出された場合には、「メンバーの数」フィールドに 10 が入り、「COPY/BASIS メンバー・ファイル ID」フィールド、「COPY/BASIS 名長」フィールド、および「COPY/BASIS 名」フィールドのオカレンスが 10 回出現します。 2. COPY/BASIS メンバーが別のライブラリーから取り出された場合には、それぞれの一意のライブラリーごとに、ライブラリー・レコードは SYSADATA ファイルに書き込まれます。		

統計レコード - X'0090'

次の表に、統計レコードの内容を示します。

表 116. SYSADATA 統計レコード

フィールド	サイズ	説明
ソース・レコード	FL4	処理されたソース・レコードの数
DATA DIVISION ステートメント	FL4	処理されたデータ部ステートメントの数

表 116. SYSADATA 統計レコード (続き)

フィールド	サイズ	説明
PROCEDURE DIVISION ステートメント	FL4	処理された手続き部ステートメントの数
コンパイル番号	HL2	バッチ・コンパイル番号
エラーの重大度	XL1	最高のエラー・メッセージ重大度
フラグ	XL1	1... ジョブ終了標識 .1... クラス定義標識 ..11 1111 将来の利用のために予約済み
EOJ 重大度	XL1	コンパイル・ジョブの最大戻りコード
プログラム名長	XL1	プログラム名の長さ
プログラム名	CL(n)	プログラム名

EVENTS レコード - X'0120'

以前のレベルのコンパイラーとの互換性を持たせるために、イベント・レコードが ADATA ファイルに含まれます。

イベント・レコードには次のタイプがあります。

- ・ タイム・スタンプ
- ・ プロセッサ
- ・ ファイル終了
- ・ プログラム
- ・ ファイル ID
- ・ エラー

表 117. SYSADATA EVENTS TIMESTAMP レコードのレイアウト

フィールド	サイズ	説明
ヘッダー	CL12	標準 ADATA レコード・ヘッダー
レコード長	HL2	続く EVENTS レコード・データの長さ (このハーフワードは除く)
EVENTS レコード・ タイプ TIMESTAMP のレコード	CL12	C'TIMESTAMP'
ブランク・セパレータ ー	CL1	
改訂レベル	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
日付	XL8	YYYYMMDD
時間	XL2	HH

表 117. SYSADATA EVENTS TIMESTAMP レコードのレイアウト (続き)

フィールド	サイズ	説明
分	XL2	MI
秒	XL2	SS

表 118. SYSADATA EVENTS PROCESSOR レコードのレイアウト

フィールド	サイズ	説明
ヘッダー	CL12	標準 ADATA レコード・ヘッダー
レコード長	HL2	続く EVENTS レコード・データの長さ (このハーフワードは除く)
EVENTS レコード・ タイプ PROCESSOR のレコード	CL9	C'PROCESSOR'
ブランク・セパレータ ー	CL1	
改訂レベル	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
出力ファイル ID	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
行クラス標識	XL1	

表 119. SYSADATA EVENTS FILE END レコードのレイアウト

フィールド	サイズ	説明
ヘッダー	CL12	標準 ADATA レコード・ヘッダー
レコード長	HL2	続く EVENTS レコード・データの長さ (このハーフワードは除く)
EVENTS レコード・ タイプ FILE END の レコード	CL7	C'FILEEND'
ブランク・セパレータ ー	CL1	
改訂レベル	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
入力ファイル ID	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
拡張標識	XL1	

表 120. SYSADATA EVENTS PROGRAM レコードのレイアウト

フィールド	サイズ	説明
ヘッダー	CL12	標準 ADATA レコード・ヘッダー

表 120. SYSADATA EVENTS PROGRAM レコードのレイアウト (続き)

フィールド	サイズ	説明
レコード長	HL2	続く EVENTS レコード・データの長さ (このハーフワードは除く)
EVENTS レコード・ タイプ PROGRAM の レコード	CL7	C'PROGRAM'
ブランク・セパレータ ー	CL1	
改訂レベル	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
出力ファイル ID	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
プログラム入力レコー ド番号	XL1	

表 121. SYSADATA EVENTS FILE ID レコードのレイアウト

フィールド	サイズ	説明
ヘッダー	CL12	標準 ADATA レコード・ヘッダー
レコード長	HL2	続く EVENTS レコード・データの長さ (このハーフワードは除く)
EVENTS レコード・ タイプ FILE ID のレ コード	CL7	C'FILEID'
ブランク・セパレータ ー	CL1	
改訂レベル	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
入力ソース・ファイル ID	XL1	ソース・ファイルのファイル ID
ブランク・セパレータ ー	CL1	
参照標識	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
ソース・ファイル名の 長さ	H2	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
ソース・ファイル名	CL(n)	

表 122. SYSADATA EVENTS ERROR レコードのレイアウト

フィールド	サイズ	説明
ヘッダー	CL12	標準 ADATA レコード・ヘッダー
レコード長	HL2	続く EVENTS レコード・データの長さ (このハーフワードは除く)
EVENTS レコード・ タイプ ERROR のレ コード	CL5	C'ERROR'
ブランク・セパレータ ー	CL1	
改訂レベル	XL1	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
入力ソース・ファイル ID	XL1	ソース・ファイルのファイル ID
ブランク・セパレータ ー	CL1	
Annot クラス	XL1	Annot クラス・メッセージの配置
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー入力レコード番 号	XL10	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー開始行番号	XL10	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー・トークン開始 番号	XL1	エラー・トークン開始の桁番号
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー終了行番号	XL10	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー・トークン終了 番号	XL1	エラー・トークン終了の桁番号
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー・メッセージの ID 番号	XL9	
ブランク・セパレータ ー	CL1	
エラー・メッセージの 重大度コード	XL1	

表 122. SYSADATA EVENTS ERROR レコードのレイアウト (続き)

フィールド	サイズ	説明
ブランク・セパレータ	CL1	
エラー・メッセージの 重大度レベル番号	XL2	
ブランク・セパレータ	CL1	
エラー・メッセージ長	HL3	
ブランク・セパレータ	CL1	
エラー・メッセージ・ テキスト	CL(n)	

付録 I. ランタイム・メッセージ

COBOL for Windows のメッセージには、メッセージ接頭語、メッセージ番号、重大度コード、および説明テキストが含まれています。

メッセージ接頭語は、常に IWZ です。重大度コードは、I (通知)、W (警告)、S (重大)、C (クリティカル) のいずれかになります。メッセージ・テキストは、当該条件に関する簡単な説明です。

IWZ2519S The seconds value in a CEEISEC call was not recognized.

上のメッセージ例を以下に説明します。

- メッセージ接頭語は IWZ です。
- メッセージ番号は 2519 です。
- 重大度コードは S です。
- メッセージ・テキストは「The seconds value in a CEEISEC call was not recognized.」です。

日時の呼び出し可能サービスからのメッセージには、シンボリック・フィードバック・コードも含まれています。このコードは、12 バイトの条件トークンのうち、最初の 8 バイトを表しています。シンボリック・フィードバック・コードは、条件のニックネームと考えることができます。呼び出し可能サービスのメッセージには、4 桁のメッセージ番号が含まれています。

コマンド行からアプリケーションを実行する場合に、ランタイム・メッセージを取り込むには、stdout および stderr をファイルに転送します。以下に、その例を示します。

```
program-name program-arguments >combined-output-file 2>&1
```

次の例は、出力内容を別のファイルに書き込む方法を示しています。

```
program-name program-arguments >output-file 2>error-file
```

表 123. ランタイム・メッセージ

メッセージ番号	メッセージ・テキスト
791 ページの『IWZ006S』	行 <i>line-number</i> で、verb 番号 <i>verb-number</i> によるテーブル <i>table-name</i> への参照が、テーブル領域外の領域をアドレス指定しました。
792 ページの『IWZ007S』	行 <i>line-number</i> で、verb 番号 <i>verb-number</i> による可変長グループ <i>group-name</i> への参照が、グループの最大定義長を超える領域をアドレス指定しました。
792 ページの『IWZ012I』	ソートまたはマージの実行中に、無効な実行単位終了が発生しました。
793 ページの『IWZ013S』	ソートまたはマージが要求されましたが、別のスレッドでソートまたはマージを実行中です。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

793 ページの『IWZ026W』	SORT-RETURN 特殊レジスタは参照されませんでしたが、現在の内容は、行番号 <i>line-number</i> でプログラム <i>program-name</i> のソートまたはマージ操作が失敗したことを示しています。ソートまたはマージの戻りコードは <i>return code</i> です。
793 ページの『IWZ029S』	プログラム <i>program-name</i> の行 <i>line-number</i> にある関数 <i>function-name</i> の Argument-1 が 0 未満です。
793 ページの『IWZ030S』	プログラム <i>program-name</i> の行 <i>line-number</i> にある関数 <i>function-name</i> の Argument-2 が正の整数ではありません。
794 ページの『IWZ036W』	プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>line-number</i> で、高位桁位置の切り捨てが発生しました。
794 ページの『IWZ037I』	プログラム <i>program-name</i> の制御フローが、プログラムの最終行を超えました。制御権は、プログラム <i>program-name</i> の呼び出し元に戻りました。
794 ページの『IWZ038S』	行 <i>line-number</i> にある <i>reference-modification-value</i> の参照変更長の値が 1 ではないことが、データ項目 <i>data-item</i> への参照内で検出されました。
795 ページの『IWZ039S』	無効なオーバーパンチ符号が検出されました。
795 ページの『IWZ040S』	無効な分離符号が検出されました。
795 ページの『IWZ045S』	プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>line number</i> で、メソッド <i>method-name</i> を呼び出すことができません。
796 ページの『IWZ047S』	クラス <i>class-name</i> の行番号 <i>line number</i> で、メソッド <i>method-name</i> を呼び出すことができません。
796 ページの『IWZ048W』	指数式で、負の基数が小数で累乗されました。基数の絶対値が使用されました。
796 ページの『IWZ049W』	指数式で、0 の基数が 0 で累乗されました。結果は 1 に設定されました。
797 ページの『IWZ050S』	指数式で、0 の基数が負数で累乗されました。
797 ページの『IWZ051W』	オペランドまたは受信側で指定された小数点位が多すぎるため、プログラム <i>program-name</i> の固定小数点指数演算に有効桁が残っていません。
797 ページの『IWZ053S』	浮動小数点への変換時にオーバーフローが発生しました。
797 ページの『IWZ054S』	浮動小数点例外が発生しました。
798 ページの『IWZ055W』	浮動小数点への変換時にアンダーフローが発生しました。結果は 0 に設定されました。
798 ページの『IWZ058S』	指数オーバーフローが発生しました。
798 ページの『IWZ059W』	9 桁を超える指数が切り捨てられました。
798 ページの『IWZ060W』	高位桁位置の切り捨てが発生しました。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

799 ページの『IWZ061S』	0 による除算が発生しました。
799 ページの『IWZ063S』	<i>program-name</i> の行番号 <i>line-number</i> にある数値編集送信フィールドで、無効な符号が検出されました。
799 ページの『IWZ064S』	コンパイル単位 <i>compilation-unit</i> で、アクティブ・プログラム <i>program-name</i> への再帰呼び出しが試行されました。
800 ページの『IWZ065I』	コンパイル単位 <i>compilation-unit</i> で、アクティブ・プログラム <i>program-name</i> のキャンセルが試行されました。
800 ページの『IWZ066S』	プログラム <i>program-name</i> の外部データ・レコード <i>data-record</i> の長さが、既存のレコード長と一致しませんでした。
800 ページの『IWZ071S』	行 <i>line-number</i> で、verb 番号 <i>verb-number</i> によるテーブル <i>table-name</i> への ALL 添え字付きテーブル参照に、OCCURS DEPENDING ON 次元に対して指定された ALL 添え字があり、オブジェクトの値は 0 以下でした。
800 ページの『IWZ072S』	行 <i>line-number</i> で、 <i>reference-modification-value</i> の参照変更開始位置の値が、データ項目 <i>data-item</i> の領域外の領域を参照しました。
801 ページの『IWZ073S』	行 <i>line-number</i> にある <i>reference-modification-value</i> の参照変更長の値が正数ではないことが、データ項目 <i>data-item</i> への参照内で検出されました。
801 ページの『IWZ074S』	行 <i>line-number</i> にある <i>reference-modification-value</i> の参照変更開始位置の値と <i>length</i> の長さ値により、データ項目 <i>data-item</i> の右端文字を超える参照が行われました。
801 ページの『IWZ075S』	プログラム <i>program-name</i> の EXTERNAL ファイル <i>file-name</i> で矛盾が検出されました。 <i>attribute-1 attribute-2 attribute-3 attribute-4 attribute-5 attribute-6 attribute-7</i> の各ファイル属性が、設定済み外部ファイルのファイル属性と一致しませんでした。
802 ページの『IWZ076W』	INSPECT REPLACING CHARACTERS BY データ名の文字数が 1 ではありません。先頭文字が使用されました。
802 ページの『IWZ077W』	INSPECT データ項目の長さが等しくありません。短い方の長さが使用されました。
802 ページの『IWZ078S』	行 <i>line-number</i> で、verb 番号 <i>verb-number</i> によるテーブル <i>table-name</i> への ALL 添え字付き参照が、テーブルの上限を超えています。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

803 ページの『IWZ096C』	<p>プログラム <i>program-name</i> の動的呼び出しが失敗しました。メッセージには、次のような種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> モジュール <i>module-name</i> のロードが失敗しました。エラー・コードは <i>error-code</i> です。 モジュール <i>module-name</i> のロードが失敗しました。戻りコードは <i>return-code</i> です。 プログラム <i>program-name</i> の動的呼び出しが失敗しました。リソースが不十分です。 プログラム <i>program-name</i> の動的呼び出しが失敗しました。環境内で COBPATH が検出されませんでした。 プログラム <i>program-name</i> の動的呼び出しが失敗しました。入力項目 <i>entry-name</i> が検出されませんでした。 動的呼び出しが失敗しました。ターゲット・プログラムの名前に有効な文字が含まれていません。 プログラム <i>program-name</i> の動的呼び出しが失敗しました。ロード・モジュール <i>load-module</i> が、COBPATH 環境変数で識別されたディレクトリ内にありませんでした。
803 ページの『IWZ097S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 に桁がありません。
803 ページの『IWZ100S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が -1 以下です。
804 ページの『IWZ103S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 0 未満か、または 99 を超えています。
804 ページの『IWZ104S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 0 未満か、または 99999 を超えています。
804 ページの『IWZ105S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 0 未満か、または 999999 を超えています。
804 ページの『IWZ151S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 が 18 桁を超えています。
804 ページの『IWZ152S』	関数 <i>function-name</i> の argument-1 にある列 <i>column-number</i> で、無効な文字 <i>character</i> が検出されました。
805 ページの『IWZ155S』	関数 <i>function-name</i> の argument-2 にある列 <i>column-number</i> で、無効な文字 <i>character</i> が検出されました。
805 ページの『IWZ156S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 0 未満か、または 28 を超えています。
805 ページの『IWZ157S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の長さが 1 ではありません。
805 ページの『IWZ158S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 0 未満か、または 29 を超えています。
805 ページの『IWZ159S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 1 未満か、または 3067671 を超えています。
806 ページの『IWZ160S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 16010101 未満か、または 99991231 を超えています。
806 ページの『IWZ161S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 1601001 未満か、または 9999365 を超えています。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

806 ページの『IWZ162S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 1 未満か、またはプログラムの照合シーケンスの桁数を超過しています。
806 ページの『IWZ163S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が 0 未満です。
807 ページの『IWZ165S』	行 <i>line-number</i> で、 <i>start-position-value</i> の参照変更開始位置の値が、 <i>function-result</i> の関数結果領域外の領域を参照しました。
807 ページの『IWZ166S』	行 <i>line-number</i> にある <i>length</i> の参照変更長の値が正数ではないことが、 <i>function-result</i> の関数結果への参照内で検出されました。
807 ページの『IWZ167S』	行 <i>line-number</i> にある <i>start-position</i> の参照変更開始位置の値と <i>length</i> の長さ値により、 <i>function-result</i> の関数結果の右端文字を超える参照が行われました。
807 ページの『IWZ168W』	SYSPUNCH/SYSPCH は、システムの論理出力装置をデフォルトに取ります。対応する環境変数が設定されていません。
808 ページの『IWZ170S』	DISPLAY オペランドのデータ型が正しくありません。
808 ページの『IWZ171I』	<i>string-name</i> は有効なランタイム・オプションではありません。
808 ページの『IWZ172I』	ストリング <i>string-name</i> は、ランタイム・オプション <i>option-name</i> の有効なサブオプションではありません。
808 ページの『IWZ173I』	ランタイム・オプション <i>option-name</i> のサブオプション・ストリング <i>string-name</i> の文字長は <i>number</i> でなければなりません。デフォルトが使用されます。
809 ページの『IWZ174I』	ランタイム・オプション <i>option-name</i> のサブオプション・ストリング <i>string-name</i> に無効な文字が 1 つ以上含まれています。デフォルトが使用されます。
809 ページの『IWZ175S』	このシステムでは、ルーチン <i>routine-name</i> がサポートされていません。
809 ページの『IWZ176S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が <i>decimal-value</i> を超過しています。
809 ページの『IWZ177S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-2 の値が <i>decimal-value</i> と等しくなっています。
810 ページの『IWZ178S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が <i>decimal-value</i> 以下です。
810 ページの『IWZ179S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が <i>decimal-value</i> 未満です。
810 ページの『IWZ180S』	関数 <i>function-name</i> の Argument-1 の値が整数ではありません。
810 ページの『IWZ181I』	ランタイム・オプション <i>option-name</i> の数値ストリング <i>string</i> で、無効な文字が検出されました。デフォルトが使用されます。
810 ページの『IWZ182I』	ランタイム・オプション <i>option-name</i> の数値 <i>number</i> が、 <i>min-range</i> から <i>max-range</i> の範囲を超過しています。デフォルトが使用されます。
811 ページの『IWZ183S』	_IWZCOBOLInit 内の関数名が戻りを行いました。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

811 ページの『IWZ200S』	ファイル <i>file-name</i> に対する <i>I/O operation</i> の実行中に、エラーが検出されました。ファイル状況は <i>file-status</i> です。
811 ページの『IWZ200S』	入出力エラー <i>error-code</i> により、STOP または ACCEPT が失敗しました。実行単位は終了します。
811 ページの『IWZ203W』	有効なコード・ページが DBCS コード・ページではありません。
812 ページの『IWZ204W』	ASCII DBCS から EBCDIC DBCS への変換中にエラーが発生しました。
812 ページの『IWZ221S』	コード・ページ <i>codepage value</i> の ICU コンバーターをオープンできません。
812 ページの『IWZ222S』	エラー・コード <i>error code value</i> により、ICU を使用したデータ変換が失敗しました。
813 ページの『IWZ223S』	エラー・コード <i>error code value</i> により、ICU コンバーターのクローズが失敗しました。
813 ページの『IWZ224S』	ロケール値 <i>locale value</i> の ICU コレクターをオープンできません。エラー・コードは <i>error code value</i> です。
813 ページの『IWZ225S』	エラー・コード <i>error code value</i> により、ICU を使用した Unicode ケース・マッピング関数が失敗しました。
813 ページの『IWZ230W』	現行のコード・セット <i>ASCII codeset-id</i> から EBCDIC コード・セット <i>EBCDIC codeset-id</i> への変換テーブルを使用できません。デフォルトの ASCII/EBCDIC 変換テーブルが使用されます。
814 ページの『IWZ230W』	指定された EBCDIC コード・ページ <i>EBCDIC codepage</i> がロケール <i>locale</i> と一貫していませんが、要求どおりに使用されます。
814 ページの『IWZ230W』	指定された EBCDIC コード・ページ <i>EBCDIC codepage</i> はサポートされていません。デフォルトの EBCDIC コード・ページ <i>EBCDIC codepage</i> が使用されます。
814 ページの『IWZ230S』	EBCDIC 変換テーブルをオープンできません。
815 ページの『IWZ230S』	EBCDIC 変換テーブルを構築できません。
815 ページの『IWZ230S』	メインプログラムは <i>-host</i> フラグと <i>CHAR(NATIVE)</i> オプションの両方でコンパイルされましたが、これらには互換性がありません。
815 ページの『IWZ231S』	現行のロケール設定の照会が失敗しました。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

815 ページの『IWZ232W』	<p>メッセージには、次のような種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>decimal-value</i> で、データ項目 <i>data-name</i> から EBCDIC への変換中にエラーが発生しました。 プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>decimal-value</i> で、データ項目 <i>data-name</i> から ASCII への変換中にエラーが発生しました。 プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>decimal-value</i> で、データ項目 <i>data-name</i> の EBCDIC への変換中にエラーが発生しました。 プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>decimal-value</i> で、データ項目 <i>data-name</i> の ASCII への変換中にエラーが発生しました。 プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>decimal-value</i> で、ASCII から EBCDIC への変換中にエラーが発生しました。 プログラム <i>program-name</i> の行番号 <i>decimal-value</i> で、EBCDIC から ASCII への変換中にエラーが発生しました。
816 ページの『IWZ240S』	<p>プログラム <i>program-name</i> の基本年が 1900 から 1999 の有効範囲内にありません。スライディング・ウィンドウ値 <i>window-value</i> は、<i>base-year</i> の基本年になります。</p>
816 ページの『IWZ241S』	<p>現行年が、プログラム <i>program-name</i> に使用されている <i>year-start</i> から <i>year-end</i> の 100 年間隔内にありません。</p>
817 ページの『IWZ242S』	<p>XML PARSE ステートメントを開始しようとしたますが、この操作は無効です。</p>
817 ページの『IWZ243S』	<p>XML PARSE ステートメントを終了しようとしたますが、この操作は無効です。</p>
817 ページの『IWZ250S』	<p>内部エラー: JNI_GetCreatedJavaVMs への呼び出しにより、エラー、戻りコード <i>nn</i> が戻されました。</p>
818 ページの『IWZ251S』	<p>内部エラー: <i>n</i> 個のアクティブ Java VM が検出されましたが、期待される数は 1 つだけです。</p>
818 ページの『IWZ253S』	<p><i>nn</i> 個を超える JVM 初期化オプションが指定されました。</p>
818 ページの『IWZ254S』	<p>内部エラー: JNI_CreateJavaVM への呼び出しによりエラーが戻されました。</p>
818 ページの『IWZ255S』	<p>内部エラー: 現行のスレッドが JVM に接続されていないため、GetEnv への呼び出しにより、コード <i>nn</i> が戻されました。</p>
819 ページの『IWZ256S』	<p>内部エラー: JVM バージョンがサポートされていないため、GetEnv への呼び出しにより、コード <i>nn</i> が戻されました。</p>
819 ページの『IWZ257S』	<p>内部エラー: GetEnv への呼び出しにより、認識されていない戻りコード <i>nn</i> が戻されました。</p>
819 ページの『IWZ258S』	<p>内部エラー: GetByteArrayElements が、インスタンス・データを指すポインターを取得できませんでした。</p>
819 ページの『IWZ259S』	<p>インスタンス・データを指す直接ポインターを取得できません。インストール済みの JVM では、pinned (滞留) されるバイト配列はサポートされていません。</p>
819 ページの『IWZ258S』	<p>Java クラス <i>name</i> を検出できませんでした。</p>

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

820 ページの『IWZ813S』	使用可能なストレージが不十分なため、ストレージ取得要求を満たすことができません。
820 ページの『IWZ901S』	メッセージには、次のような種類があります。 <ul style="list-style-type: none">• 重大エラーまたはクリティカル・エラーが発生したため、プログラムが終了します。• プログラムの終了: ERRCOUNT を超えるエラー数が発生しました。
820 ページの『IWZ902S』	システムが 10 進数除算例外を検出しました。
821 ページの『IWZ903S』	システムがデータ例外を検出しました。
821 ページの『IWZ907S』	メッセージには、次のような種類があります。 <ul style="list-style-type: none">• ストレージが不十分です。• ストレージが不十分です。storage 用に number-bytes バイトのスペースを取得できません。
821 ページの『IWZ993W』	ストレージが不十分です。メッセージ message-number 用のスペースを検出できません。
822 ページの『IWZ994W』	メッセージ・カタログ内でメッセージ message-number を検出できません。
822 ページの『IWZ995C』	メッセージには、次のような種類があります。 <ul style="list-style-type: none">• オフセット 0xoffset-value でルーチン routine-name の実行中に、System exception シグナルを受信しました。• 0xoffset-value の場所でコードの実行中に、System exception シグナルを受信しました。• System exception シグナルを受信しました。場所を判別できませんでした。
822 ページの『IWZ2502S』	システムから UTC/GMT を使用できませんでした。
822 ページの『IWZ2503S』	UTC/GMT から現地時間までのオフセットをシステムから使用できませんでした。
823 ページの『IWZ2505S』	CEEDATM または CEESECI への呼び出し内の input_seconds 値が、対応範囲内にありませんでした。
823 ページの『IWZ2506S』	CEEDATM に渡されたピクチャー・ストリング内に元号 (<JJJJ>、<CCCC>、<CCCCCCCC>) が使用されていましたが、入力された秒数値が対応範囲内にありませんでした。元号を判別できませんでした。
823 ページの『IWZ2507S』	CEEDAYS または CEESECS に渡されたデータが不十分です。リリアン日付の値は計算されませんでした。
824 ページの『IWZ2508S』	CEEDAYS または CEESECS に渡された日付値が無効です。
824 ページの『IWZ2509S』	CEEDAYS または CEESECS に渡された元号が認識されませんでした。
824 ページの『IWZ2510S』	CEEISEC または CEESECS への呼び出しで時間の値が認識されませんでした。

表 123. ランタイム・メッセージ (続き)

825 ページの『IWZ2511S』	CEEISEC の呼び出しで渡された日のパラメーターが、指定された年および月に対して無効です。
825 ページの『IWZ2512S』	CEEDATE または CEEDYWK への呼び出しで渡されたりリアン日付値が、対応範囲内にありませんでした。
825 ページの『IWZ2513S』	CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、対応範囲内にありませんでした。
826 ページの『IWZ2514S』	CEEISEC の呼び出しで渡された年の値が、対応範囲内にありませんでした。
826 ページの『IWZ2515S』	CEEISEC 呼び出し内のミリ秒の値が認識されませんでした。
826 ページの『IWZ2516S』	CEEISEC 呼び出し内の分の値が認識されませんでした。
827 ページの『IWZ2517S』	CEEISEC 呼び出し内の月の値が認識されませんでした。
827 ページの『IWZ2518S』	日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。
827 ページの『IWZ2519S』	CEEISEC 呼び出し内の秒の値が認識されませんでした。
828 ページの『IWZ2520S』	CEEDAYS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいは日付ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。
828 ページの『IWZ2521S』	CEEDAYS または CEESECS に渡された <JJJJ>、<CCCC>、または <CCCCCCCC> の元号年数値がゼロでした。
828 ページの『IWZ2522S』	CEEDATE に渡されたピクチャー・ストリング内に元号 (<JJJJ>、<CCCC>、<CCCCCCCC>) が使用されていましたが、リアン日付値が対応範囲内にありませんでした。元号を判別できませんでした。
829 ページの『IWZ2525S』	CEESECS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいはタイム・スタンプ・ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。
829 ページの『IWZ2526S』	CEEDATE によって戻された日付ストリングが切り捨てられました。
829 ページの『IWZ2527S』	CEEDATM によって戻されたタイム・スタンプ・ストリングが切り捨てられました。
830 ページの『IWZ2531S』	システムから現地時間を使用できませんでした。
830 ページの『IWZ2533S』	CEESCEN に渡された値が 0 から 100 の範囲内にありませんでした。
830 ページの『IWZ2534W』	CEEDATE または CEEDATM への呼び出しで、月または曜日名に対して指定されたフィールド幅が不十分です。出力はブランクに設定されました。

IWZ006S

行 *line-number* で、verb 番号 *verb-number* によるテーブル *table-name* への参照が、テーブル領域外の領域をアドレス指定しました。

説明: SSRANGE オプションが有効なときに、このメッセージが出された場合は、固定長テーブルに添え字があるためにテーブルの定義サイズを超えているか、または可変長テーブルの場合はテーブルの最大サイズを超えていることを示します。

添え字の複合に対して範囲検査が実行された結果、テーブルの領域外のアドレスが戻されました。可変長テーブルで、すべての OCCURS DEPENDING ON オブジェクトが最大値になっている場合、このアドレスは定義されたテーブルの領域外にあります。ODO オブジェクトの現行値は考慮されません。個々の添え字に対しては、検査が行われていません。

プログラマー応答: 実行時に評価されるリテラル添え字や変数添え字の値が、失敗したステートメント内の添え字付きデータに対する添え字付き次元を超えないようにしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ007S

行 *line-number* で、verb 番号 *verb-number* による可変長グループ *group-name* への参照が、グループの最大定義長を超える領域をアドレス指定しました。

説明: SSRANGEオプションが有効なときに、このメッセージが出された場合は、OCCURS DEPENDING ON によって生成された可変長グループの長さが 0 未満か、または OCCURS DEPENDING ON 文節で定義された限度を超えていることを示します。

範囲検査は、個々の OCCURS DEPENDING ON オブジェクトに対してではなく、グループの複合長に対して実行されています。

プログラマー応答: 実行時に評価される OCCURS DEPENDING ON オブジェクトが、参照先グループ項目内のテーブルに関する次元の最大オカレンス数を超えないようにしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ012I

ソートまたはマージの実行中に、無効な実行単位終了が発生しました。

説明: COBOL プログラムによって開始されたソートまたはマージの進行中に、次のいずれかが試行されました。

1. STOP RUN が出された。
2. ソートまたはマージを開始した COBOL プログラムの入力プロシージャまたは出力プロシージャで、GOBACK または EXIT PROGRAM が出された。
GOBACK および EXIT PROGRAM ステートメントは、入力プロシージャまたは出力プロシージャによって呼び出されたプログラム内で使用できることに注意してください。

プログラマー応答: 上記のメソッドを使用せずにソートまたはマージを終了するようにアプリケーションを変更してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ013S

ソートまたはマージが要求されましたが、別のスレッドでソートまたはマージを実行中です。

説明: 2 つ以上のスレッドでソートまたはマージを同時に実行することはできません。

プログラマー応答: ソートまたはマージは、必ず同じスレッドで実行してください。あるいは、ソートまたはマージの各呼び出しの前に、ソートまたはマージを別のスレッドで実行しているかどうかを判断するコードを組み込むことができます。ソートまたはマージが別のスレッドで実行中の場合は、そのスレッドが完了するのを待ちます。そうでない場合は、ソートまたはマージを実行することを示すフラグを設定してから、ソートまたはマージを呼び出します。

システム処置: スレッドは終了します。

IWZ026W

SORT-RETURN 特殊レジスターは参照されませんでしたが、現在の内容は、行番号 *line-number* でプログラム *program-name* のソートまたはマージ操作が失敗したことを示しています。ソートまたはマージの戻りコードは *return code* です。

説明: COBOL ソースには、**SORT-RETURN** レジスターへの参照が含まれていません。コンパイラーは、ソートまたはマージの各 **verb** の後でテストを生成します。ソートまたはマージによって、ゼロ以外の戻りコードがプログラムに戻されています。

プログラマー応答: ソートまたはマージが失敗した理由を判断し、問題を修正してください。可能な戻りコードのリストについては 155 ページの『ソートおよびマージ・エラー番号』を参照してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ029S

プログラム *program-name* の行 *line-number* にある関数 *function-name* の **Argument-1** が 0 未満です。

説明: **argument-1** に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: **argument-1** の値が 0 以上であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ030S

プログラム *program-name* の行 *line-number* にある関数 *function-name* の Argument-2 が正の整数ではありません。

説明: argument-1 に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: argument-2 の値が正の整数であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ036W

プログラム *program-name* の行番号 *line-number* で、高位桁位置の切り捨てが発生しました。

説明: 生成されたコードによって、中間結果 (算術演算中に使用される一時記憶域) が 30 桁に切り詰められましたが、切り捨てられた桁の中に、値が 0 でないものがあります。

プログラマー応答: 中間結果の説明については、後述の関連する概念を参照してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ037I

プログラム *program-name* の制御フローが、プログラムの最終行を超えました。制御権は、プログラム *program-name* の呼び出し元に戻りました。

説明: プログラムに終止符 (STOP、GOBACK、または EXIT) がないため、制御権が最後の命令をフォールスルーしました。

プログラマー応答: プログラムのロジックを検査してください。次のいずれかの論理エラーがあると、このエラーが発生する場合があります。

- プログラム内の最後の段落は PERFORM ステートメントの結果として制御権を受け取るものと想定されていたが、論理エラーがあるために、GO TO ステートメントによって分岐された。
- プログラム内の最後の段落が「フォールスルー」パスの結果として実行されたが、段落の末尾にプログラムを終了するためのステートメントがない。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ038S

行 *line-number* にある *reference-modification-value* の参照変更長の値が 1 ではないことが、データ項目 *data-item* への参照内で検出されました。

説明: 参照変更で指定された長さ値が 1 ではありません。この長さ値は 1 でなければなりません。

プログラマー応答: プログラム内の指定された行番号を検査して、参照変更された長さ値がすべて 1 になっていることを確認してください (そうでない場合は、値を修正してください)。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ039S

無効なオーバーパンチ符号が検出されました。

説明: 符号位置の値が無効です。

X'sd' (s は符号表現であり、d は数字を表す) の場合、外部 10 進数 (SIGN IS SEPARATE 文節を指定しない USAGE DISPLAY) についての有効な符号表現は、以下のとおりです。

正:	0、1、2、3、8、9、A、および B
負:	4、5、6、7、C、D、E、および F

内部生成される符号は、正および符号なしの場合は 3、負の場合は 7 になります。

X'ds' (d は数字、s は符号表現を表す) の場合、内部 10 進数 (USAGE PACKED-DECIMAL) COBOL データの有効な符号表現は次のようになります。

正:	A、C、E、および F
負:	B および D

内部生成される符号は、正および符号なしの場合は C、負の場合は D になります。

プログラマー応答: REDEFINES 文節に符号位置が含まれている場合、符号位置を含むグループを移動した場合、または位置が初期設定されていない場合には、このエラーが発生する場合があります。このようなことがないかどうかを検査してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ040S

無効な分離符号が検出されました。

説明: 分離記号を使用して定義されたデータを操作しようとしてしました。符号位置の値はプラス (+) またはマイナス (-) ではありませんでした。

プログラマー応答: REDEFINES 文節に符号位置が含まれている場合、符号位置を含むグループを移動した場合、または位置が初期設定されていない場合には、このエラーが発生する場合があります。このようなことがないかどうかを検査してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ045S

プログラム *program-name* の行番号 *line number* で、メソッド *method-name* を呼び出すことができません。

説明: 現行のオブジェクト参照のクラスに対し、特定のメソッドがサポートされていません。

プログラマー応答: プログラム内の指定された行番号を検査して、現行のオブジェクト参照のクラスが、呼び出されるメソッドをサポートすることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ047S

クラス *class-name* の行番号 *line number* で、メソッド *method-name* を呼び出すことができません。

説明: 現行のオブジェクト参照のクラスに対し、特定のメソッドがサポートされていません。

プログラマー応答: クラス内の指定された行番号を検査して、現行のオブジェクト参照のクラスが、呼び出されるメソッドをサポートすることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ048W

指数式で、負の基数が小数で累乗されました。基数の絶対値が使用されました。

説明: ライブラリー・ルーチン内で、負数が小数で累乗されました。

COBOL では、負の数を小数で累乗した値は定義されていません。当該ステートメントに `SIZE ERROR` 文節があれば、`SIZE ERROR` 命令が使用されますが、実際には `SIZE ERROR` 文節は存在しないため、基数の絶対値が指数に使用されました。

プログラマー応答: 失敗したステートメント内のプログラム変数が正しく設定されていることを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ049W

指数式で、0 の基数が 0 で累乗されました。結果は 1 に設定されました。

説明: ライブラリー・ルーチン内で、0 の値が 0 で累乗されました。

COBOL では、0 の値を 0 で累乗する演算は定義されていません。当該ステートメントに `SIZE ERROR` 文節があれば、`SIZE ERROR` 命令が使用されますが、実際には `SIZE ERROR` 文節は存在しないため、戻り値は 1 になりました。

プログラマー応答: 失敗したステートメント内のプログラム変数が正しく設定されていることを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ050S

指数式で、0 の基数が負数で累乗されました。

説明: ライブラリー・ルーチン内で、0 の値が負数で累乗されました。

0 の値を負数で累乗する演算は定義されていません。当該ステートメントに SIZE ERROR 文節があれば、SIZE ERROR 命令が使用されますが、実際には SIZE ERROR 文節は存在しません。

プログラマー応答: 失敗したステートメント内のプログラム変数が正しく設定されていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ051W

オペランドまたは受信側で指定された小数点位が多すぎるため、プログラム *program-name* の固定小数点指数演算に有効桁が残っていません。

説明: オペランドまたは受信側で指定されている小数点位が多すぎるため、固定小数点計算で生成された結果に有効数字が含まれていません。

プログラマー応答: 必要に応じて、オペランドまたは受け取り側の数値項目の PICTURE 文節を変更して、整数位を増やし、小数点位を減らしてください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ053S

浮動小数点への変換時にオーバーフローが発生しました。

説明: プログラム内で生成された数値が大きすぎて、浮動小数点で表現できません。

プログラマー応答: プログラムを正しく修正して、オーバーフローを回避する必要があります。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ054S

浮動小数点例外が発生しました。

説明: 浮動小数点計算で生成された結果が正しくありません。浮動小数点計算は IEEE 浮動小数点数演算を使用して実行されますが、その際に NaN (非数値) と呼ばれる結果が出る場合があります。例えば、0 を 0 で除算すると、結果は NaN になります。

プログラマー応答: NaN が生成されないように、この演算に対する引数をテストするようにプログラムを修正してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ055W

浮動小数点への変換時にアンダーフローが発生しました。結果は 0 に設定されました。

説明: 浮動小数点への変換時に、負の指数がハードウェアの限度を超えました。浮動小数点値は 0 に設定されました。

プログラマー応答: 必須の処置は特にありませんが、必要に応じて、アンダーフローを回避するようにプログラムを修正してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ058S

指数オーバーフローが発生しました。

説明: 浮動小数点の指数オーバーフローが、ライブラリー・ルーチンで発生しました。

プログラマー応答: 失敗したステートメント内のプログラム変数が正しく設定されていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ059W

9 桁を超える指数が切り捨てられました。

説明: 固定小数点の累乗法では、指数は 9 桁以下でなければなりません。指数が 9 桁に切り詰められましたが、切り捨てられた桁の中に、値が 0 でないものがあります。

プログラマー応答: 必須の処置は特にありませんが、必要に応じて、失敗したステートメント内の指数を調整してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ060W

高位桁位置の切り捨てが発生しました。

説明: ライブラリー・ルーチン内のコードによって、中間結果（算術演算中に使用される一時記憶域）が 30 桁に切り詰められましたが、切り捨てられた桁の中に、値が 0 でないものがあります。

プログラマー応答: 中間結果の説明については、後述の関連する概念を参照してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ061S

0 による除算が発生しました。

説明: ライブラリー・ルーチン内で、0 による除算が行われました。0 による除算は定義されていません。当該ステートメントに SIZE ERROR 文節があれば、SIZE ERROR 命令が使用されますが、実際には SIZE ERROR 文節は存在しません。

プログラマー応答: 失敗したステートメント内のプログラム変数が正しく設定されていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ063S

program-name の行番号 *line-number* にある数値編集送信フィールドで、無効な符号が検出されました。

説明: MOVE ステートメントで、符号付き数値編集フィールドを符号付き数値または数値編集受信フィールドに移動しようとしたましたが、送信フィールド内の符号位置に含まれている文字が、対応する PICTURE に有効な符号文字ではありませんでした。

プログラマー応答: 失敗したステートメント内のプログラム変数が正しく設定されていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ064S

コンパイル単位 *compilation-unit* で、アクティブ・プログラム *program-name* への再帰呼び出しが試行されました。

説明: COBOL では、内部プログラムの再帰呼び出しを行うことはできません。プログラムは実行を開始しましたが、まだ終了していません。例えば、内部プログラム A と B が収容プログラムの兄弟で、A が B を呼び出し、B が A を呼び出すと、このメッセージが出されます。

プログラマー応答: プログラムを調べて、アクティブな内部プログラムへの呼び出しを除去してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ065I

コンパイル単位 *compilation-unit* で、アクティブ・プログラム *program-name* のキャンセルが試行されました。

説明: アクティブな内部プログラムをキャンセルしようとしてしました。例えば、内部プログラム A と B が収容プログラム内の兄弟で、A が B を呼び出し、B が A をキャンセルすると、このメッセージが出されます。

プログラマー応答: プログラムを調べて、アクティブな内部プログラムのキャンセルを除去してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ066S

プログラム *program-name* の外部データ・レコード *data-record* の長さが、既存のレコード長と一致しませんでした。

説明: プログラムの初期化で外部データ・レコードを処理しているときに、実行単位内の別のプログラムで前に外部データ・レコードが定義されており、現行のプログラムで指定されているレコードの長さが、前に定義された長さと異なることが判別されました。

プログラマー応答: 現在のファイルを調べて、外部データ・レコードが正しく指定されていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ071S

行 *line-number* で、verb 番号 *verb-number* によるテーブル *table-name* への ALL 添え字付きテーブル参照に、OCCURS DEPENDING ON 次元に対して指定された ALL 添え字があり、オブジェクトの値は 0 以下でした。

説明: SSRANGE オプションが有効なときに、このメッセージが出された場合は、ALL による添え字付き次元のオカレンス数が 0 であることを示します。

OCCURS DEPENDING ON オブジェクトの現行値に対して検査が実行されます。

プログラマー応答: 当該ステートメントにあるすべての添え字付き項目について、ALL 添え字付き次元の ODO オブジェクトが正数であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ072S

行 *line-number* で、*reference-modification-value* の参照変更開始位置の値が、データ項目 *data-item* の領域外の領域を参照しました。

説明: 参照変更指定の開始位置の値が 1 未満か、または参照変更されていたデータ項目の現行長を超えています。開始位置の値は、参照変更されるデータ項目の文字数以下の、正の整数でなければなりません。

プログラマー応答: 参照変更指定の開始位置の値を検査してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ073S

行 *line-number* にある *reference-modification-value* の参照変更長の値が正数ではないことが、データ項目 *data-item* への参照内で検出されました。

説明: 参照変更で指定された長さ値が 0 以下です。この長さ値は正の整数でなければなりません。

プログラマー応答: プログラム内の指定された行番号を検査して、参照変更された長さ値がすべて正の整数になっていることを確認してください (そうでない場合は、値を修正してください)。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ074S

行 *line-number* にある *reference-modification-value* の参照変更開始位置の値と *length* の長さ値により、データ項目 *data-item* の右端文字を超える参照が行われました。

説明: 参照変更指定の開始位置と長さ値を組み合わせるとアドレス指定された領域が、参照変更されるデータ項目の終わりを超えています。開始位置と長さ値の合計から 1 を引いた値が、参照変更されるデータ項目の文字数以下でなければなりません。

プログラマー応答: プログラム内の指定された行番号を検査して、参照がデータ項目の右端文字を超えないように、参照変更される開始値と長さ値が設定されていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ075S

プログラム *program-name* の EXTERNAL ファイル *file-name* で矛盾が検出されました。
attribute-1 attribute-2 attribute-3 attribute-4 attribute-5 attribute-6 attribute-7 の各ファイル属性が、設定済み外部ファイルのファイル属性と一致していませんでした。

説明: 外部ファイルの 1 つ以上の属性が、その外部ファイルを定義した 2 つのプログラム間で一致していません。

プログラマー応答: 外部ファイルを訂正してください。同じ外部ファイルの定義間でファイル属性の要約について一致させる必要があります。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ076W

INSPECT REPLACING CHARACTERS BY データ名の文字数が 1 ではありません。先頭文字が使用されました。

説明: INSPECT ステートメントの REPLACING 句の中の CHARACTERS 句にあるデータ項目の長さは、1 文字として定義する必要があります。このデータ項目の参照変更指定により、結果として生じる長さ値が 1 になりませんでした。長さ値は 1 でなければなりません。

プログラマー応答: 必要に応じて、失敗した INSPECT ステートメントの参照変更指定を訂正して、参照変更の長さが 1 になるようにしてください。プログラマーによる処置は必須ではありません。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ077W

INSPECT データ項目の長さが等しくありません。短い方の長さが使用されました。

説明: INSPECT ステートメントの REPLACING または CONVERTING 句にある 2 つのデータ項目は、2 番目の項目が表意定数の場合を除き、同じ長さでなければなりません。このようなデータ項目の一方または両方に対して参照変更が行われたため、結果的に長さ値が同じでなくなりました。短い方の長さが両方の項目に適用され、実行が続けられます。

プログラマー応答: 必要に応じて、失敗した INSPECT ステートメント内で長さの等しくないオペランドを調整してください。プログラマーによる処置は必須ではありません。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ078S

行 *line-number* で、verb 番号 *verb-number* によるテーブル *table-name* への ALL 添え字付き参照が、テーブルの上限を超えています。

説明: SSRANGE オプションが有効なときに、このメッセージが出された場合は、多次元テーブルで ALL が 1 つ以上の添え字として指定されているために、参照がテーブルの上限を超えてしまうことを示します。

範囲検査は、添え字の複合と、ALL 添え字付き次元の最大オカレンスに対して実行されています。可変長テーブルで、すべての OCCURS DEPENDING ON オブジェクトが最大値になっている場合、このアドレスは定義されたテーブルの領域外にあります。ODO オブジェクトの現行値は考慮されません。個々の添え字に対しては、検査が行われていません。

プログラマー応答: 実行時に評価される OCCURS DEPENDING ON オブジェクトが、失敗したステートメント内で参照されるテーブル項目に関する次元の最大オカレンス数を超えないようにしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ096C

プログラム *program-name* の動的呼び出しが失敗しました。メッセージには、次のような種類があります。

- モジュール *module-name* のロードが失敗しました。エラー・コードは *error-code* です。
- モジュール *module-name* のロードが失敗しました。戻りコードは *return-code* です。
- プログラム *program-name* の動的呼び出しが失敗しました。リソースが不十分です。
- プログラム *program-name* の動的呼び出しが失敗しました。環境内で COBPATH が検出されませんでした。
- プログラム *program-name* の動的呼び出しが失敗しました。入力項目 *entry-name* が検出されませんでした。
- 動的呼び出しが失敗しました。ターゲット・プログラムの名前に有効な文字が含まれていません。
- プログラム *program-name* の動的呼び出しが失敗しました。ロード・モジュール *load-module* が、COBPATH 環境変数で識別されたディレクトリー内にありませんでした。

説明: 上記の各種メッセージに示されたいずれかの理由で、動的呼び出しが失敗しました。上記に示す *error-code* の値は、LoadLibrary によって設定された最後のエラー・コード値。

プログラマー応答: COBPATH が定義されていることを確認してください。モジュールの存在を確認してください。Windows には、ディレクトリーとファイルを表示するためのグラフィカル・インターフェースがあります。dir コマンドを使用することもできます。ロードされるモジュールの名前と、呼び出される入力項目の名前が一致していることを確認してください。適切な cob2 オプションを使用して、ロードされるモジュールが正しく構築されていることを確認してください。例えば、Windows で DLL を構築する場合は、-dll オプションを使用する必要があります。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ097S

関数 *function-name* の Argument-1 に桁がありません。

説明: 指定された関数の Argument-1 には、少なくとも 1 桁が含まれていなければなりません。

プログラマー応答: 失敗したステートメントで Argument-1 の桁数を調整してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ100S

関数 *function* の Argument-1 の値が -1 以下です。

説明: Argument-1 に使用された値が正しくありません。

プログラマー応答: argument-1 が -1 より大きいことを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ103S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 0 未満か、または 99 を超えています。

説明: Argument-1 に使用された値が正しくありません。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ104S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 0 未満か、または 99999 を超えています。

説明: Argument-1 に使用された値が正しくありません。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ105S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 0 未満か、または 999999 を超えています。

説明: Argument-1 に使用された値が正しくありません。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ151S

関数 *function-name* の Argument-1 が 18 桁を超えています。

説明: 指定された関数の Argument-1 の合計桁数が 18 桁を超えています。

プログラマー応答: 失敗したステートメントで Argument-1 の桁数を調整してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ152S

関数 *function-name* の argument-1 にある列 *column-number* で、無効な文字 *character* が検出されました。

説明: NUMVAL/NUMVAL-C 関数の argument-1 で、小数点、コンマ、スペース、または符号 (+、-、CR、DB) 以外の非数字文字が検出されました。

プログラマー応答: 指定されたステートメントで NUMVAL または NUMVAL-C の argument-1 を調整してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ155S

関数 *function-name* の argument-2 にある列 *column-number* で、無効な文字 *character* が検出されました。

説明: NUMVAL-C 関数の argument-2 で、無効な文字が検出されました。

プログラマー応答: 関数の引数が構文規則に従っていることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ156S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 0 未満か、または 28 を超えています。

説明: 関数 FACTORIAL に対する入力引数が 28 を超えているか、または 0 未満です。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ157S

関数 *function-name* の Argument-1 の長さが 1 ではありません。

説明: ORD 関数に対する入力引数の長さが 1 ではありません。

プログラマー応答: 関数の引数が 1 バイト長であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ158S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 0 未満か、または 29 を超えています。

説明: 関数 FACTORIAL に対する入力引数が 29 を超えているか、または 0 未満です。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ159S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 1 未満か、または 3067671 を超えています。

説明: DATE-OF-INTEGER または DAY-OF-INTEGER 関数に対する入力引数が 1 未満か、または 3067671 を超えています。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ160S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 16010101 未満か、または 99991231 を超えています。

説明: INTEGER-OF-DATE 関数に対する入力引数が 16010101 未満か、または 99991231 を超えています。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ161S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 1601001 未満か、または 9999365 を超えています。

説明: INTEGER-OF-DAY 関数に対する入力引数が 1601001 未満か、または 9999365 を超えています。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ162S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 1 未満か、またはプログラムの照合シーケンスの桁数を超えています。

説明: CHAR 関数に対する入力引数が 1 未満か、またはプログラムの照合シーケンスの最高位桁を超えています。

プログラマー応答: 関数の引数が有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ163S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が 0 未満です。

説明: RANDOM 関数に対する入力引数が 0 未満です。

プログラマー応答: 失敗したステートメントで RANDOM 関数の引数を訂正してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ165S

行 *line-number* で、*start-position-value* の参照変更開始位置の値が、*function-result* の関数結果領域外の領域を参照しました。

説明: 参照変更指定の開始位置の値が 1 未満か、または参照変更されていた関数結果の現行長を超えています。開始位置の値は、参照変更される関数結果の文字数以下の、正の整数でなければなりません。

プログラマー応答: 参照変更指定の開始位置の値と、実際の関数結果の長さを検査してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ166S

行 *line-number* にある *length* の参照変更長の値が正数ではないことが、*function-result* の関数結果への参照内で検出されました。

説明: 関数結果の参照変更で指定された長さ値が 0 以下です。この長さ値は正の整数でなければなりません。

プログラマー応答: 長さ値を確認し、適切な修正を行ってください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ167S

行 *line-number* にある *start-position* の参照変更開始位置の値と *length* の長さ値により、*function-result* の関数結果の右端文字を超える参照が行われました。

説明: 参照変更指定の開始位置と長さ値を組み合わせでアドレス指定された領域が、参照変更される関数結果の終わりを超えています。開始位置と長さ値の合計から 1 を引いた値が、参照変更される関数結果の文字数以下でなければなりません。

プログラマー応答: 参照変更指定の長さ値と実際の関数結果の長さを照合検査し、適切な修正を行ってください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ168W

SYSPUNCH/SYSPCH は、システムの論理出力装置をデフォルトに取ります。対応する環境変数が設定されていません。

説明: COBOL 環境名 (SYSPUNCH/SYSPCH など) は、ACCEPT および DISPLAY ステートメントで使用される簡略名に対応する環境変数名として使用されます。これらは、既存のディレクトリー名ではなくファイルと等しくなるように設定します。環境変数を設定するには、SET コマンドを使用します。

環境変数は、永続的に設定することも一時的に設定することも可能です。

プログラマー応答: SYSPUNCH/SYSPCH が表示画面をデフォルトに取らないようにするには、対応する環境変数を設定してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ170S

DISPLAY オペランドのデータ型が正しくありません。

説明: DISPLAY ステートメントのターゲットとして、無効なデータ型が指定されました。

プログラマー応答: 有効なデータ型を指定してください。次のデータ型は**無効**です。

- USAGE IS PROCEDURE-POINTER で定義されたデータ項目
- USAGE IS OBJECT REFERENCE で定義されたデータ項目
- USAGE IS INDEX で定義されたデータ項目または索引名

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ171I

string-name は有効なランタイム・オプションではありません。

説明: *string-name* は有効なオプションではありません。

プログラマー応答: CHECK、DEBUG、ERRCOUNT、FILESYS、TRAP、および UPSI が有効なランタイム・オプションです。

システム処置: *string-name* が無視されます。

IWZ172I

ストリング *string-name* は、ランタイム・オプション *option-name* の有効なサブオプションではありません。

説明: *string-name* は、認識済みの値セットの中に含まれていませんでした。

プログラマー応答: 無効なサブオプション *string* を、ランタイム・オプション *option-name* から削除してください。

システム処置: 無効なサブオプションが無視されます。

IWZ173I

ランタイム・オプション *option-name* のサブオプション・ストリング *string-name* の文字長は *number of* でなければなりません。デフォルトが使用されます。

説明: ランタイム・オプション *option-name* のサブオプション・ストリング *string-name* の文字数が無効です。

プログラマー応答: デフォルトを使用したくない場合は、有効な文字長を指定してください。

システム処置: デフォルト値が使用されます。

IWZ174I

ランタイム・オプション *option-name* のサブオプション・ストリング *string-name* に無効な文字が 1 つ以上含まれています。デフォルトが使用されます。

説明: 指定されたサブオプション内で、無効文字が 1 つ以上検出されました。

プログラマー応答: デフォルトを使用したくない場合は、有効な文字を指定してください。

システム処置: デフォルト値が使用されます。

IWZ175S

このシステムでは、ルーチン *routine-name* がサポートされていません。

説明: *routine-name* はサポートされていません。

プログラマー応答:

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ176S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が *decimal-value* を超えています。

説明: argument-1 に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: argument-1 の値が *decimal-value* 以下であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ177S

関数 *function-name* の Argument-2 の値が *decimal-value* と等しくなっています。

説明: argument-2 に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: argument-1 の値が *decimal-value* と等しくないことを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ178S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が *decimal-value* 以下です。

説明: Argument-1 に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: Argument-1 が *decimal-value* より大きいことを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ179S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が *decimal-value* 未満です。

説明: Argument-1 に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: Argument-1 が *decimal-value* 以上であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ180S

関数 *function-name* の Argument-1 の値が整数ではありません。

説明: Argument-1 に対して無効な値が使用されました。

プログラマー応答: Argument-1 が整数であることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ181I

ランタイム・オプション *option-name* の数値ストリング *string* で、無効な文字が検出されました。デフォルトが使用されます。

説明: *string* にすべての 10 進数字が含まれていませんでした。

プログラマー応答: デフォルト値を使用したくない場合は、ランタイム・オプションのストリングにすべての数字が含まれるように修正してください。

システム処置: デフォルトが使用されます。

IWZ182I

ランタイム・オプション *option-name* の数値 *number* が、*min-range* から *max-range* の範囲を超えています。デフォルトが使用されます。

説明: *number* が *min-range* から *max-range* の範囲を超えました。

プログラマー応答: ランタイム・オプションのストリングが有効範囲内になるように修正してください。

システム処置: デフォルトが使用されます。

IWZ183S

_iwezCOBOLInit 内の関数名が戻りを行いました。

説明: 実行単位の終了出口ルーチンが、そのルーチンを呼び出した関数 (*function_code* で指定された関数) に戻りました。

プログラマー応答: 実行単位の終了出口ルーチンが、関数に戻るのではなく、*longjump* または *exit* を実行するように関数を書き直してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ200S

ファイル *file-name* に対する *I/O operation* の実行中に、エラーが検出されました。ファイル状況は *file-status* です。

説明: ファイル入出力操作中に、エラーが検出されました。当該ファイルに対して、ファイル状況が指定されておらず、また該当するエラー宣言も有効になっていません。

プログラマー応答: このメッセージで説明されている状態を修正してください。エラーを検出して、ソース・プログラムで適切な処置をとりたい場合は、当該ファイルに *FILE STATUS* 文節を指定してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ200S

入出力エラー *error-code* により、*STOP* または *ACCEPT* が失敗しました。実行単位は終了します。

説明: *STOP* または *ACCEPT* ステートメントが失敗しました。

プログラマー応答: *STOP* または *ACCEPT* が正当なファイルまたは端末を参照していることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ203W

有効なコード・ページが DBCS コード・ページではありません。

説明: 非 DBCS コード・ページが有効な状態で、DBCS データを指す参照が行われました。

プログラマー応答: DBCS データの場合は、有効な DBCS コード・ページを指定してください。有効な DBCS コード・ページを次に示します。

国	コード・ページ
日本	IBM-943
韓国	
中国 (簡体字 - 中国本土)	
中国 (繁体字 - 台湾)	IBM-950

注: 上記のコード・ページは、プラットフォームの特定のバージョンまたはリリースではサポートされない場合があります。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ204W

ASCII DBCS から EBCDIC DBCS への変換中にエラーが発生しました。

説明: ASCII 文字ストリングから EBCDIC ストリングへの変換中にエラーが検出されたため、漢字または DBCS クラス・テストが失敗しました。

プログラマー応答: 有効なロケールと、テスト対象の ASCII 文字ストリングが一貫していることを検証してください。ロケール設定が正しい場合は、特に処置は必要ありません。クラス・テストは、当該ストリングが漢字または DBCS ではないことを正しく示していると思われます。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ221S

コード・ページ *codepage value* の ICU コンバーターをオープンできません。エラー・コードは *error code value* です。

説明: コード・ページと UTF-16 間の変換を行う ICU コンバーターをオープンできません。

プログラマー応答: コード・ページ名 (「*COBOL for Windows 言語解説書*」) に従って、コード・ページ値が有効であることを確認してください。コード・ページ値が有効な場合は、IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ222S

エラー・コード *error code value* により、ICU を使用したデータ変換が失敗しました。

説明: ICU を使用したデータ変換が失敗しました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ223S

エラー・コード *error code value* により、ICU コンバーターのクローズが失敗しました。

説明: ICU コンバーターのクローズが失敗しました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ224S

ロケール値 *locale value* の ICU コレーターをオープンできません。エラー・コードは *error code value* です。

説明: 当該ロケールの ICU コレーターをオープンできません。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ225S

エラー・コード *error code value* により、ICU を使用した Unicode ケース・マッピング関数が失敗しました。

説明: ICU のケース・マッピング関数が失敗しました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ230W

現行のコード・セット *ASCII codeset-id* から EBCDIC コード・セット *EBCDIC codeset-id* への変換テーブルを使用できません。デフォルトの ASCII/EBCDIC 変換テーブルが使用されます。

説明: アプリケーションに、CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用してコンパイルされたモジュールがあります。実行時には、現行の ASCII コード・ページから、EBCDIC_CODEPAGE 環境変数で指定された EBCDIC コード・ページへの変換を処理するための変換テーブルが構築されます。指定されたコード・ページに対

して使用可能な変換テーブルがないか、または EBCDIC_CODE ページの指定が無効なため、このエラーが発生しました。実行は、ASCII コード・ページ IBM-1252 および EBCDIC コード・ページ IBM-037 に基づくデフォルトの変換テーブルを使用して続けられます。

プログラマー応答: EBCDIC_CODEPAGE 環境変数に有効な値が指定されていることを確認してください。

EBCDIC_CODEPAGE を設定しない場合は、デフォルト値の IBM-037 が使用されます。これは、Enterprise COBOL for z/OS で使用されるデフォルトのコード・ページです。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ230W

指定された EBCDIC コード・ページ <i>EBCDIC codepage</i> がロケール <i>locale</i> と一貫していませんが、要求どおりに使用されます。
--

説明: アプリケーションに、CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用してコンパイルされたモジュールがあります。指定されたコード・ページが現行ロケールと同じ言語でないため、このエラーが発生しました。

プログラマー応答: EBCDIC_CODEPAGE 環境変数がこのロケールに対して有効なことを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ230W

指定された EBCDIC コード・ページ <i>EBCDIC codepage</i> はサポートされていません。デフォルトの EBCDIC コード・ページ <i>EBCDIC codepage</i> が使用されます。
--

説明: アプリケーションに、CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションを使用してコンパイルされたモジュールがあります。EBCDIC_CODEPAGE 環境変数の指定が無効なため、このエラーが発生しました。実行は、現行ロケールに対応するデフォルトのホスト・コード・ページを使用して続けられます。

プログラマー応答: EBCDIC_CODEPAGE 環境変数に有効な値が指定されていることを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ230S

EBCDIC 変換テーブルをオープンできません。

説明: 現行システムのインストールに、デフォルトの ASCII および EBCDIC コード・ページ用の変換テーブルが組み込まれていません。

プログラマー応答: コンパイラーおよびランタイムを再インストールしてください。それでも問題が続く場合は、IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ230S

EBCDIC 変換テーブルを構築できません。

説明: ASCII から EBCDIC への変換テーブルはオープンされましたが、変換が失敗しました。

プログラマー応答: 新規ウィンドウから実行を再試行してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ230S

メインプログラムは **-host** フラグと **CHAR(NATIVE)** オプションの両方でコンパイルされましたが、これらには互換性がありません。

説明: **-host** フラグと **CHAR(NATIVE)** オプションの両方でのコンパイルはサポートされていません。

プログラマー応答: **-host** フラグまたは **CHAR(NATIVE)** オプションのいずれかを除去してください。 **-host** フラグは **CHAR(EBCDIC)** を設定します。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ231S

現行のロケール設定の照会が失敗しました。

説明: 実行環境の照会で、有効なロケール設定を識別できませんでした。適切なメッセージ・ファイルにアクセスして照合順序を設定するには、現行ロケールを設定する必要があります。この設定は、日時サービスや EBCDIC 文字のサポートでも使用されます。

プログラマー応答: 次の環境変数の設定を確認してください。

LOCPATH

この環境変数には、**IBMCOBOL¥LOCALE** ディレクトリーが含まれている必要があります。

LANG **IBMCOBW¥LOCALE** ディレクトリーにあるいずれかのディレクトリー名に設定する必要があります。デフォルトは **en_US** です。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ232W

メッセージには、次のような種類があります。

- プログラム *program-name* の行番号 *decimal-value* で、データ項目 *data-name* から EBCDIC への変換中にエラーが発生しました。
- プログラム *program-name* の行番号 *decimal-value* で、データ項目 *data-name* から ASCII への変換中にエラーが発生しました。
- プログラム *program-name* の行番号 *decimal-value* で、データ項目 *data-name* の EBCDIC への変換中にエラーが発生しました。
- プログラム *program-name* の行番号 *decimal-value* で、データ項目 *data-name* の ASCII への変換中にエラーが発生しました。
- プログラム *program-name* の行番号 *decimal-value* で、ASCII から EBCDIC への変換中にエラーが発生しました。
- プログラム *program-name* の行番号 *decimal-value* で、EBCDIC から ASCII への変換中にエラーが発生しました。

説明: CHAR(EBCDIC) コンパイラー・オプションで要求されたとおりに、ID 内のデータを ASCII 形式と EBCDIC 形式間で変換できませんでした。

プログラマー応答: 適切な ASCII および EBCDIC ロケールがインストール済みで、選択されていることを確認してください。ID 内のデータが有効で、ASCII と EBCDIC の両方の形式で表現できることを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。データは未変換形式のままになります。

IWZ240S

プログラム *program-name* の基本年が 1900 から 1999 の有効範囲内にありません。スライディング・ウィンドウ値 *window-value* は、*base-year* の基本年になります。

説明: 現行年と、YEARWINDOW コンパイラー・オプションで指定されたスライディング・ウィンドウ値を使用して 100 年間の範囲を計算しましたが、100 年間の基本となる年が 1900 から 1999 の有効範囲内にありませんでした。

プログラマー応答: アプリケーション設計を調べて、YEARWINDOW オプション値を変更できるかどうかを判別してください。YEARWINDOW オプション値を変更してアプリケーションを実行できる場合は、適切な YEARWINDOW オプション値を使用してプログラムをコンパイルしてください。YEARWINDOW オプション値を変更してアプリケーションを実行できない場合は、すべての日付フィールドを拡張日付に変換してから、NODATEPROC を使用してプログラムをコンパイルしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ241S

現行年が、プログラム *program-name* に使用されている *year-start* から *year-end* の 100 年間にありません。

説明: 現行年が、YEARWINDOW コンパイラー・オプション値で指定された 100 年間の固定範囲内にありませんでした。

例えば、YEARWINDOW(1920) を使用して COBOL プログラムをコンパイルした場合、そのプログラムに使用される 100 年間の範囲は 1920 から 2019 となります。このプログラムを 2020 年に実行すると、現行年がこの 100 年間の範囲内にないため、エラー・メッセージが出されます。

プログラマー応答: アプリケーション設計を調べて、YEARWINDOW オプション値を変更できるかどうかを判別してください。YEARWINDOW オプション値を変更してアプリケーションを実行できる場合は、適切な YEARWINDOW オプション値を使用してプログラムをコンパイルしてください。YEARWINDOW オプション値を変更してアプリケーションを実行できない場合は、すべての日付フィールドを拡張日付に変換してから、NODATEPROC を使用してプログラムをコンパイルしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ242S

XML PARSE ステートメントを開始しようとしたますが、この操作は無効です。

説明: COBOL プログラムによって開始された XML PARSE ステートメントがすでに進行中のときに、同じ COBOL プログラムが別の XML PARSE ステートメントを実行しようとした。1 回の COBOL プログラム呼び出しでアクティブにできる XML PARSE ステートメントは 1 つだけです。

プログラマー応答: 同じ COBOL プログラム内から別の XML PARSE ステートメントを開始しないようにアプリケーションを変更してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ243S

XML PARSE ステートメントを終了しようとしたますが、この操作は無効です。

説明: COBOL プログラムによって開始された XML PARSE ステートメントの進行中に、次のいずれかが試行されました。

- XML PARSE ステートメントを開始した COBOL プログラム内で、GOBACK または EXIT PROGRAM ステートメントが発行された。
- XML PARSE ステートメントを開始したプログラムと関連付けられたユーザー・ハンドラーが、条件ハンドラー再開カーソルを移動した後で、アプリケーションを再開した。

プログラマー応答: 上記のメソッドを使用せずに XML PARSE ステートメントを終了するようにアプリケーションを変更してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ250S

内部エラー: JNI_GetCreatedJavaVMs への呼び出しにより、エラー、戻りコード *nn* が戻されました。

説明: JNI_GetCreatedJavaVMs 関数の呼び出しにより、戻りコード *nn* のエラーが戻されました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ251S

内部エラー: *n* 個のアクティブ Java VM が検出されましたが、期待される数は 1 つだけです。

説明: 複数のアクティブ Java VM が検出されましたが、期待される Java VM は 1 つだけです。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ253S

nn 個を超える JVM 初期化オプションが指定されました。

説明: COBJVMINITOPTIONS 環境変数で指定した Java 初期化オプションの数が最大許容数を超えています。上限は 256 です。

プログラマー応答: COBJVMINITOPTIONS 環境変数に指定するオプションの数を減らしてください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ254S

内部エラー: JNI_CreateJavaVM への呼び出しによりエラーが戻されました。

説明: JNI_CreateJavaVM の呼び出しによりエラーが戻されました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ255S

内部エラー: 現行のスレッドが JVM に接続されていないため、GetEnv への呼び出しにより、コード *nn* が戻されました。

説明: 現行のスレッドが JVM に接続されていないため、GetEnv への呼び出しにより、コード *nn* が戻されました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ256S

内部エラー: JVM バージョンがサポートされていないため、GetEnv への呼び出しにより、コード *nn* が戻されました。

説明: JVM バージョンがサポートされていないため、GetEnv への呼び出しにより、コード *nn* が戻されました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ257S

内部エラー: GetEnv への呼び出しにより、認識されていない戻りコード *nn* が戻されました。

説明: GetEnv への呼び出しにより、認識されていない戻りコード *nn* が戻されました。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ258S

内部エラー: GetByteArrayElements が、インスタンス・データを指すポインターを取得できませんでした。

説明: GetByteArrayElements サービスが、インスタンス・データを指すポインターを取得できませんでした。

プログラマー応答: IBM 担当員に連絡してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ259S

インスタンス・データを指す直接ポインターを取得できません。インストール済みの JVM では、pinned (滞留) されるバイト配列はサポートされていません。

説明: pinned (滞留) されるバイト配列に対応していない、サポートされていない JVM (Sun 1.4.1 など) が使用されています。pinning (滞留) の詳細については、「The Java Native Interface」を参照してください。

プログラマー応答: サポートされる JVM を実行してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ260S

Java クラス *name* を検出できませんでした。

説明: プログラムが、CLASSPATH 環境変数で定義または指定されていないクラス名を参照しています。

プログラマー応答: *name* を参照するプログラムを検査し、その参照を修正するか、欠落している *name.class* クラスを指定してください。

システム処置: アプリケーションの実行は終了します。

IWZ813S

使用可能なストレージが不十分なため、ストレージ取得要求を満たすことができません。

説明: 使用可能なフリー・ストレージが不十分なため、ストレージ取得要求または再割り振り要求を満たすことができません。このメッセージは、ストレージ管理でオペレーティング・システムから十分なストレージを取得できなかったことを意味します。

プログラマー応答: アプリケーションを実行できるだけの十分なストレージを確保してください。

システム処置: ストレージは割り振られません。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE0PD

IWZ901S

メッセージには、次のような種類があります。

- ・ 重大エラーまたはクリティカル・エラーが発生したため、プログラムが終了します。
- ・ プログラムの終了: **ERRCOUNT** を超えるエラー数が発生しました。

説明: それぞれの重大メッセージまたはクリティカル・メッセージの後には、IWZ901 メッセージが続きます。ERRCOUNT ランタイム・オプションを使用した場合に、警告メッセージの数が **ERRCOUNT** を超えると、IWZ901 メッセージも出されます。

プログラマー応答: 重大メッセージまたはクリティカル・メッセージを参照して、**ERRCOUNT** の値を増やしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ902S

システムが 10 進数除算例外を検出しました。

説明: ある数値を 0 で除算しようとしたことが検出されました。

プログラマー応答: プログラムを修正してください。例えば、フラグ付きのステートメントに ON SIZE ERROR を追加します。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ903S

システムがデータ例外を検出しました。

説明: データに無効値が含まれているため、パック 10 進数データまたはゾーン 10 進数データに対する操作が失敗しました。

プログラマー応答: データが有効なパック 10 進数データまたはゾーン 10 進数データであることを確認してください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ907S

メッセージには、次のような種類があります。

- ストレージが不十分です。
- ストレージが不十分です。storage 用に number-bytes バイトのスペースを取得できません。

説明: ランタイム・ライブラリーが仮想メモリー・スペースを要求しましたが、オペレーティング・システムがこの要求を拒否しました。

プログラマー応答: プログラムが大量の仮想メモリーを使用するため、スペースが不足しています。一般に、この問題の原因は特定のステートメントではなく、プログラム全体に関連しています。OCCURS 文節の使用状況を調べて、テーブルのサイズを減らしてください。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ993W

ストレージが不十分です。メッセージ message-number 用のスペースを検出できません。

説明: ランタイム・ライブラリーが仮想メモリー・スペースを要求しましたが、オペレーティング・システムがこの要求を拒否しました。

プログラマー応答: プログラムが大量の仮想メモリーを使用するため、スペースが不足しています。一般に、この問題の原因は特定のステートメントではなく、プログラム全体に関連しています。OCCURS 文節の使用状況を調べて、テーブルのサイズを減らしてください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ994W

メッセージ・カタログ内でメッセージ *message-number* を検出できません。

説明: ランタイム・ライブラリーが、メッセージ・カタログ自体またはメッセージ・カタログ内の特定のメッセージを検出できません。

プログラマー応答: COBOL ライブラリーおよびメッセージが正しくインストールされていることと、LANG および NLSPATH が正しく指定されていることを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。

IWZ995C

メッセージには、次のような種類があります。

- オフセット *0xoffset-value* でルーチン *routine-name* の実行中に、*system exception* シグナルを受信しました。
- *0xoffset-value* の場所でコードの実行中に、*system exception* シグナルを受信しました。
- *system exception* シグナルを受信しました。場所を判別できませんでした。

説明: オペレーティング・システムが、無許可のアクション (保護記憶域にデータを格納しようとしたなど) を検出したか、または割り込みキー (一般には Control + C キーだが、再構成はできない) が押されたことを検出しました。

プログラマー応答: 無許可のアクションがシグナルの原因の場合は、デバッガーでプログラムを実行すると、エラーの発生場所に関する詳細情報を得ることができます。このタイプのエラーの例としては、無効な値を持つポインターなどが挙げられます。

システム処置: アプリケーションは終了します。

IWZ2502S

システムから UTC/GMT を使用できませんでした。

説明: システム・クロックが無効な状態になっていたため、CEEUTC または CEEGMT の呼び出しが失敗しました。現在時刻を判別できませんでした。

プログラマー応答: システム・クロックが無効な状態になっていることをシステム・サポート担当者に連絡してください。

システム処置: 出力値がすべて 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2E6

IWZ2503S

UTC/GMT から現地時間までのオフセットをシステムから使用できませんでした。

説明: (1) 現行のオペレーティング・システムを判別できなかったか、(2) オペレーティング・システムの制御ブロックにある時間帯フィールドに無効なデータが含まれている可能性があるため、CEEGMTO の呼び出しが失敗しました。

プログラマー応答: オペレーティング・システムに格納されている現地時間のオフセットに無効なデータが含まれている可能性があることをシステム・サポート担当者に連絡してください。

システム処置: 出力値がすべて 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2E7

IWZ2505S

CEEDATM または CEESECI への呼び出し内の input_seconds 値が、対応範囲内にありませんでした。

説明: CEEDATM または CEESECI の呼び出しで渡された input_seconds 値が、86,400.0 から 265,621,679,999.999 の範囲内の浮動小数点数ではありませんでした。入力パラメーターは、1582 年 10 月 14 日の 00:00:00 から数えた秒数で表す必要があります。ここでサポートされる最初の日時は 1582 年 10 月 15 日の 00:00:00.000、最後の日時は 9999 年 12 月 31 日の 23:59:59.999 です。

プログラマー応答: 入力パラメーターに含まれている浮動小数点値が 86,400.0 から 265,621,679,999.999 の範囲内にあることを確認してください。

システム処置: CEEDATM の場合は、出力値がブランクに設定されます。CEESECI の場合は、出力パラメーターがすべて 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2E9

IWZ2506S

CEEDATM に渡されたピクチャー・ストリング内に元号 (<JJJJ>、<CCCC>、<CCCCCCCC>) が使用されていましたが、入力された秒数値が対応範囲内にありませんでした。元号を判別できませんでした。

説明: CEEDATM の呼び出しでは、ピクチャー・ストリングは入力値が元号に変換されることを示しますが、指定された入力値は、サポートされる元号の範囲内にありません。

プログラマー応答: サポートされる元号の範囲内にある有効な秒数値が入力値に含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値がブランクに設定されます。

IWZ2507S

CEEDAYS または CEESECS に渡されたデータが不十分です。リリアン日付の値は計算されませんでした。

説明: CEEDAYS または CEESECS の呼び出しで渡されたピクチャー・ストリングに、十分な情報が含まれていませんでした。例えば、CEEDAYS または CEESECS の呼び出しでピクチャー・ストリング 'MM/DD' (月と日のみ) を使用すると、年の値がないためエラーとなります。リリアン日付の値を計算するために最低限必要な情報は、(1) 月、日、年、または (2) 年、ユリウス日のいずれかです。

プログラマー応答: CEEDAYS または CEESECS の呼び出しで指定されたピクチャー・ストリングに少なくとも、(1) 月、日、年、または (2) 年、ユリウス日のいずれかの入力ストリング内の場所が指定されていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィールドバック・コード: CEE2EB

IWZ2508S

CEEDAYS または CEESECS に渡された日付値が無効です。

説明: CEEDAYS または CEESECS の呼び出しで、DD または DDD フィールドの値が当該年/月に対して無効です。例えば、1990 年はうるう年ではないため、'MM/DD/YY' の値が '02/29/90' の場合や 'YYYY.DDD' の値が '1990.366' の場合は無効となります。また、6 月 31 日や 1 月 0 日など、存在しない日付値を指定した場合にも、このコードが戻されることがあります。

プログラマー応答: 入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致していることと、入力データに有効な日付が含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィールドバック・コード: CEE2EC

IWZ2509S

CEEDAYS または CEESECS に渡された元号が認識されませんでした。

説明: CEEDAYS または CEESECS の呼び出しで渡された <JJJJ>、<CCCC>、または <CCCCCCCC> フィールドの値に、サポートされる元号名が含まれていません。

プログラマー応答: 入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致していることと、元号名のスペルが正しいことを確認してください。元号名は、正しい DBCS ストリングでなければならないことに注意してください。'<' の位置には、元号名の先頭バイトが含まれていなければなりません。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

IWZ2510S

CEEISEC または CEESECS への呼び出しで時間の値が認識されませんでした。

説明: (1) CEEISEC の呼び出しの場合は、時のパラメーターに 0 から 23 の範囲内の数値が含まれていませんでした。(2) CEESECS の呼び出しの場合は、HH (時) フ

フィールドの値に 0 から 23 の範囲内の数値が含まれていないか、あるいは“AP” (a.m./p.m.) フィールドが指定されているのに、HH フィールドに 1 から 12 の範囲内の数値が含まれていませんでした。

プログラマー応答: CEEISEC の場合は、時のパラメーターに 0 から 23 の範囲内の整数が含まれていることを確認してください。CEESECS の場合は、入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致することと、時のフィールドに 0 から 23 (“AP” フィールドを使用している場合は 1 から 12) の範囲内の値が含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EE

IWZ2511S

CEEISEC の呼び出しで渡された日のパラメーターが、指定された年および月に対して無効です。

説明: CEEISEC の呼び出しで渡された日のパラメーターに、有効な日数値が含まれていませんでした。年、月、日の組み合わせが、無効な日付値になっています。例えば、1990 年 2 月 29 日、6 月 31 日、0 日などの日付は無効です。

プログラマー応答: 日のパラメーターに 1 から 31 の範囲内の整数が含まれていることと、年、月、日の組み合わせが有効な日付を表していることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EF

IWZ2512S

CEEDATE または CEEDYWK への呼び出しで渡されたりリアン日付値が、対応範囲内にありませんでした。

説明: CEEDATE または CEEDYWK の呼び出しで渡されたりリアン日付値が、1 から 3,074,324 の範囲内の数値ではありませんでした。

プログラマー応答: 入力パラメーターに 1 から 3,074,324 の範囲内の整数が含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値がブランクに設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EG

IWZ2513S

CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、対応範囲内にありませんでした。

説明: CEEISEC、CEEDAYS、CEESECS のいずれかの呼び出しで渡された入力日付が、1582 年 10 月 15 日より前か、9999 年 12 月 31 日より後に設定されていました。

プログラマー応答: CEEISEC の場合は、年、月、日のパラメーターが、1582 年 10 月 15 日以降の日付になっていることを確認してください。CEEDAYS および CEESECS の場合は、入力される日付の形式がピクチャー・ストリング指定と一致することと、入力される日付が対応範囲内にあることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EH

IWZ2514S

CEEISEC の呼び出しで渡された年の値が、対応範囲内にありませんでした。
--

説明: CEEISEC の呼び出しで渡された年のパラメーターに、1582 から 9999 の範囲内の数値が含まれていませんでした。

プログラマー応答: 年のパラメーターに有効なデータが含まれていることと、年のパラメーターに世紀が含まれている (例えば、90 年ではなく 1990 年と指定している) ことを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EI

IWZ2515S

CEEISEC 呼び出し内のミリ秒の値が認識されませんでした。

説明: CEEISEC の呼び出しで、ミリ秒のパラメーター (*input_milliseconds*) に 0 から 999 の範囲内の数値が含まれていませんでした。

プログラマー応答: ミリ秒のパラメーターに 0 から 999 の範囲内の整数が含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EJ

IWZ2516S

CEEISEC 呼び出し内の分の値が認識されませんでした。

説明: (1) CEEISEC の呼び出しの場合は、分のパラメーター (*input_minutes*) に 0 から 59 の範囲内の数値が含まれていませんでした。(2) CEESECS の呼び出しの場合は、MI (分) フィールドの値に 0 から 59 の範囲内の数値が含まれていませんでした。

プログラマー応答: CEEISEC の場合は、分のパラメーターに 0 から 59 の範囲内の整数が含まれていることを確認してください。CEESECS の場合は、入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致することと、分のフィールドに 0 から 59 の範囲内の値が含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EK

IWZ2517S

CEEISEC 呼び出し内の月の値が認識されませんでした。

説明: (1) CEEISEC の呼び出しの場合は、月のパラメーター (*input_month*) に 1 から 12 の範囲内の数値が含まれていませんでした。(2) CEEDAYS または CEESECS の呼び出しの場合は、MM フィールドの値に 1 から 12 の範囲内の数値が含まれていないか、あるいは MMM や MMMM などのフィールドの値に、現在アクティブな各国語で正しいスペルの月の名前または省略後が含まれていませんでした。

プログラマー応答: CEEISEC の場合は、月のパラメーターに 1 から 12 の範囲内の整数が含まれていることを確認してください。CEEDAYS および CEESECS の場合は、入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致することを確認してください。MM フィールドの場合は、入力値が 1 から 12 の範囲内にあることを確認してください。月名 (MMM、MMMM など) を指定する場合は、その月名のスペルまたは省略語が、現在アクティブな各国語で正しく指定されていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EL

IWZ2518S

日時サービスへの呼び出しに無効なピクチャー・ストリングが指定されました。

説明: いずれかの日時サービスの呼び出しで指定されたピクチャー・ストリングが無効です。指定できるのは 1 つの元号文字ストリングだけです。

プログラマー応答: ピクチャー・ストリングに有効なデータが含まれていることを確認してください。ピクチャー・ストリングに複数の元号記述子 (<JJJJ> と <CCCC> の両方など) が含まれている場合は、一方の元号だけを使用するようにピクチャー・ストリングを変更してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EM

IWZ2519S

CEEISEC 呼び出し内の秒の値が認識されませんでした。

説明: (1) CEEISEC の呼び出しの場合は、秒のパラメーター (*input_seconds*) に 0 から 59 の範囲内の数値が含まれていませんでした。(2) CEESECS の呼び出しの場合は、SS (秒) フィールドの値に 0 から 59 の範囲内の数値が含まれていませんでした。

プログラマー応答: CEEISEC の場合は、秒のパラメーターに 0 から 59 の範囲内の整数が含まれていることを確認してください。CEESECS の場合は、入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致することと、秒のフィールドに 0 から 59 の範囲内の値が含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EN

IWZ2520S

CEEDAYS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいは日付ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。

説明: CEEDAYS の呼び出しで渡された入力値が、ピクチャー指定で記述された形式ではありませんでした (例えば、数字のみが期待される場所に非数字があるなど)。

プログラマー応答: 入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致していることと、数値フィールドに数値データしか含まれていないことを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EO

IWZ2521S

CEEDAYS または CEESECS に渡された <JJJJ>、<CCCC>、または <CCCCCCCC> の元号年数値がゼロでした。

説明: CEEDAYS または CEESECS の呼び出しで、YY または ZYY ピクチャー・トークンが指定されている場合で、なおかつピクチャー・ストリングにいずれかの元号トークン (<CCCC> や <JJJJ> など) が含まれている場合は、年の値が 1 以上で、その元号に対して有効な値でなければなりません。この場合、YY または ZYY フィールドは当該元号における年を意味します。

プログラマー応答: 入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致していることと、入力データが有効なことを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

IWZ2522S

CEEDATE に渡されたピクチャー・ストリング内に元号 (<JJJJ>、<CCCC>、<CCCCCCCC>) が使用されていましたが、リリアン日付値が対応範囲内にありませんでした。元号を判別できませんでした。

説明: CEEDATE の呼び出しでは、ピクチャー・ストリングはリリアン日付が元号に変換されることを示しますが、リリアン日付がサポートされる元号の範囲内にありません。

プログラマー応答: サポートされる元号の範囲内にある有効なリリアン日付値が入力値に含まれていることを確認してください。

システム処置: 出力値がブランクに設定されます。

IWZ2525S

CEESECS が数値フィールド内に非数値データを検出したか、あるいはタイム・スタンプ・ストリングとピクチャー・ストリングが一致しませんでした。

説明: CEESECS の呼び出しで渡された入力値が、ピクチャー指定で記述された形式ではありませんでした。例えば、数字のみが期待される場所に非数字がある、a.m./p.m. フィールド (AP、A.P. など) に 'AM' または 'PM' のストリングが含まれていないなどが考えられます。

プログラマー応答: 入力データの形式がピクチャー・ストリング指定と一致していることと、数値フィールドに数値データしか含まれていないことを確認してください。

システム処置: 出力値が 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2ET

IWZ2526S

CEEDATE によって戻された日付ストリングが切り捨てられました。

説明: CEEDATE の呼び出しで、出力ストリングのサイズが足りないため、フォーマットした日付値を格納できませんでした。

プログラマー応答: 出力ストリングのデータ項目が、フォーマットされた日付全体を格納できるだけの十分なサイズになっていることを確認してください。出力パラメーターが、少なくともピクチャー・ストリング・パラメーターと同じ長さになっていることを確認してください。

システム処置: 出力値が出力パラメーターの長さまで切り詰められます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EU

IWZ2527S

CEEDATM によって戻されたタイム・スタンプ・ストリングが切り捨てられました。

説明: CEEDATM の呼び出しで、出力ストリングのサイズが足りないため、フォーマットしたタイム・スタンプ値を格納できませんでした。

プログラマー応答: 出力ストリングのデータ項目が、フォーマットされたタイム・スタンプ全体を格納できるだけの十分なサイズになっていることを確認してください。出力パラメーターが、少なくともピクチャー・ストリング・パラメーターと同じ長さになっていることを確認してください。

システム処置: 出力値が出力パラメーターの長さまで切り詰められます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2EV

IWZ2531S

システムから現地時間を使用できませんでした。

説明: システム・クロックが無効な状態になっていたため、CEELOCT の呼び出しが失敗しました。現在時刻を判別できません。

プログラマー応答: システム・クロックが無効な状態になっていることをシステム・サポート担当者に連絡してください。

システム処置: 出力値がすべて 0 に設定されます。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2F3

IWZ2533S

CEESCEN に渡された値が 0 から 100 の範囲内にありませんでした。

説明: CEESCEN の呼び出しで渡された *century_start* の値が、0 から 100 の範囲内にありませんでした。

プログラマー応答: 入力パラメーターが有効範囲内にあることを確認してください。

システム処置: システムのアクションはとられません。すべての 2 桁年号に対して想定される 100 年間の範囲は変わりません。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2F5

IWZ2534W

CEEDATE または CEEDATM への呼び出しで、月または曜日名に対して指定されたフィールド幅が不十分です。出力はブランクに設定されました。

説明: CEEDATE または CEEDATM 呼び出し可能サービスで、ピクチャー・ストリングに正しいスペルの月名や曜日名が要求される MMM、MMMMMZ、WWW、Wwww などが含まれているにもかかわらず、現在フォーマットされている月名に含まれている文字数が指定フィールド内に収まらない場合は、このメッセージが出されます。

プログラマー応答: フォーマットされる最長の月名または曜日名を格納できるだけの十分な数の M または W を指定して、フィールド幅を増やしてください。

システム処置: 幅が不十分な月名および曜日名フィールドは、ブランクに設定されます。残りの出力ストリングは影響を受けません。処理を続行します。

シンボリック・フィードバック・コード: CEE2F6

関連概念

635 ページの『付録 C. 中間結果および算術精度』

関連タスク

213 ページの『環境変数の設定』

226 ページの『コンパイル・エラー・メッセージのリストの生成』

関連参照

201 ページの『サポートされるロケールおよびコード・ページ』

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

AIX
CICS
COBOL/370
Database 2
DB2
DB2 Universal Database
IBM
Language Environment
MVS
OS/390
System z
TXSeries
VisualAge
WebSphere
z/OS
zSeries

Intel は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

用語集

この用語集に記載されている用語は、COBOL における意味に従って定義されています。これらの用語は、他の言語では同じ意味を持つことも、持たないこともあります。

この用語集には、以下の資料からの用語および定義が記載されています。

- 「ANSI INCITS 23-1985, *Programming languages - COBOL*」 (「ANSI INCITS 23a-1989, *Programming Languages - COBOL - Intrinsic Function Module for COBOL*」および「ANSI INCITS 23b-1993, *Programming Languages - Correction Amendment for COBOL*」で改訂)
- 「ANSI X3.172-2002, *American National Standard Dictionary for Information Systems*」

米国標準規格 (ANS) の定義の前にはアスタリスク (*) を付けています。

この用語集には、Sun Microsystems, Inc が Java および J2EE の用語集用に作成した定義が含まれています。Sun による定義には、その旨が示されています。

[ア行]

アクセス・モード (* access mode). ファイル内でレコードが操作される方式。

遊びバイト (slack bytes). 一部の数値項目の位置合わせが正しく行われるように、データ項目相互間またはレコード相互間に挿入されるバイト。遊びバイトには意味のあるデータは含まれない。コンパイラによって挿入される場合もあれば、プログラマーが挿入する必要がある場合もある。SYNCHRONIZED 文節は、正しいアライメントが必要な場合に遊びバイトを挿入するようにコンパイラに指示する。レコード間遊びバイトは、プログラマーが挿入する。

暗黙の範囲終了符号 (* implicit scope terminator). 終了していないステートメントが前にある場合、その範囲を区切る分離文字ピリオド。または、前にある句の中に含まれるステートメントがある場合、そのステートメントの範囲の終わりをそれが現れることによって示すステートメントの句。

異常終了 (abend). プログラムの異常終了。

移植性 (portability). あるアプリケーション・プラットフォームから別のアプリケーション・プラットフォームに、ソース・プログラムに比較的わずかな変更を加えるだけでアプリケーション・プログラムを移行できる能力。

インスタンス・データ (instance data). オブジェクトの状態を定義するデータ。クラスによって導入されるインスタンス・データは、クラス定義の OBJECT 段落の DATA DIVISION の WORKING-STORAGE SECTION に定義される。オブジェクトの状態には、クラスが導入した、現行クラスによって継承されているインスタンス変数の状態も含まれる。インスタンス・データの個々のコピーは、各オブジェクト・インスタンスごとに作成される。

隠蔽 (hide). サブクラスのファクトリーまたは静的メソッド (親クラスから継承された) を再定義すること。

インライン (inline). プログラムでは、ルーチン、サブルーチン、または他のプログラムに分岐することなく、順次に行われる命令。

ウィンドウ化西暦年 (windowed year). 2 桁の年だけから構成される日付フィールド。この 2 桁の年は、世紀ウィンドウを使用して解釈できる。例えば、06 は 2006 と解釈できる。「世紀ウィンドウ (century window)」も参照。「拡張西暦年 (expanded year)」と対比。

ウィンドウ化日付フィールド (windowed date field). ウィンドウ化 (2 桁) 年を含む日付フィールド。「日付フィールド (date field)」および「ウィンドウ化西暦年 (windowed year)」も参照。

埋め込み文字 (padding character). 物理レコード内の未使用文字位置を埋めるのに使用される英数字または国別文字。

英字 (* alphabetic character). 文字または空白文字。

英字データ項目 (alphabetic data item). 記号 A のみを含む PICTURE 文字ストリングが記述されたデータ項目。英字データ項目は USAGE DISPLAY を持ちます。

英字名 (* alphabet-name). ENVIRONMENT DIVISION の SPECIAL-NAMES 段落のユーザー定義語であり、特定の文字セットまたは照合シーケンス (あるいはその両方) に名前を割り当てるもの。

英数字 (* alphanumeric character). コンピューターの 1 バイト文字セットの任意の文字。

英数字関数 (* alphanumeric function). コンピューターの英数字セットからの 1 つ以上の文字のストリングで値が構成されている関数。

英数字グループ項目 (alphanumeric group item).

GROUP-USAGE NATIONAL 文節なしで定義されたグループ項目。INSPECT、STRING、および UNSTRING などの操作の場合、英数字グループ項目は、実際のグループの内容にかかわらず、その内容すべてが USAGE DISPLAY として記述されているかのように処理されます。グループ内の基本項目を処理する必要のある操作 (MOVE CORRESPONDING、ADD CORRESPONDING、または INITIALIZE など) の場合、英数字グループ項目はグループ・セマンティクスを使用して処理されます。

英数字データ項目 (alphanumeric data item). 暗黙的または明示的に USAGE DISPLAY として記述された、カテゴリ英数字、英数字編集、または数字編集を持つデータ項目を指す一般的な呼び方。

英数字編集データ項目 (alphanumeric-edited data item). 少なくとも 1 つの記号 A または X のインスタンスおよび少なくとも 1 つの単純挿入記号 B、0、または / を含んでいる、PICTURE 文字ストリングで記述されたデータ項目。英数字編集データ項目は USAGE DISPLAY を持ちます。

英数字リテラル (alphanumeric literal). 次のセットからの開始区切り文字を有するリテラル。'、"、X'、X"、Z'、または Z"。この文字ストリングには、コンピューターの有する文字セットの任意の文字を含めることができる。

エレメント (テキスト・エレメント) (element (text element)). 1 つのデータ項目または動詞の記述などのようなテキスト・ストリングの 1 つの論理単位で、その前にエレメント・タイプを識別する固有のコードが付けられたもの。

エンコード・ユニット (encoding unit). 「文字エンコード・ユニット (character encoding unit)」を参照。

演算、操作 (operation). オブジェクトに関して要求できるサービス。

演算符号 (* operational sign). 値が正であるか負であるかを示すために数字データ項目または数字リテラルに付けられる代数符号。

オーバーフロー条件 (overflow condition). ある演算結果の一部が意図した記憶単位の容量を超えた場合に発生する条件。

オープン・モード (* open mode). ファイルに対する OPEN ステートメントが実行されてから、そのファイルに対する REEL または UNIT 句の指定のない CLOSE ステートメントが実行される前までの、ファイルの状態。個々のオープン・モードは、OPEN ステートメントの中で、INPUT、OUTPUT、I-O、または EXTEND のいずれかとして指定する。

オブジェクト (object). 状態 (そのデータ値) および演算 (そのメソッド) を持つエンティティー。オブジェクトは状態と動作をカプセル化する手段である。クラス内の各オブジェクトは、そのクラスの 1 つのインスタンスであると言われる。

オブジェクト参照 (object reference). クラスのインスタンスを識別する値。クラスが指定されなかった場合、オブジェクト参照は一般的なものとなり、任意のクラスのインスタンスに適用できる。

オブジェクト時 (* object time). オブジェクト・プログラムが実行されるとき。「実行時 (run time)」と同義。

オブジェクト指向プログラミング (object-oriented programming). カプセル化および継承の概念に基づいたプログラミング・アプローチ。プロシーチャー型プログラミング技法とは異なり、オブジェクト指向プログラミングでは、何かが達成される方法ではなく、問題を含むデータ・オブジェクトとその操作方法に重点を置く。

オブジェクト・インスタンス (object instance). 「オブジェクト (object)」を参照。

オブジェクト・コード (object code). コンパイラーまたはアセンブラーからの出力。それ自体が実行可能なマシン・コードか、またはその種のコードの作成を目的として処理するのに適する。

オブジェクト・コンピューター記入項目 (* object computer entry). ENVIRONMENT DIVISION の OBJECT-COMPUTER 段落内の記入項目。この記入項目には、オブジェクト・プログラムが実行されるコンピューター環境を記述する文節が入っている。

オブジェクト・プログラム (object program). 問題を解決するためにデータと相互に作用することを目的とする実行可能なマシン言語命令とその他の要素の集合またはグループ。このコンテキストでは、オブジェクト・プログラムとは一般に、COBOL コンパイラーがソース・プログラムまたはクラス定義を操作した結果得られるマシン言語である。あいまいになる危険がない場合には、オブジェクト・プログラム という用語の代わりにプログラム というワードだけが使用される。

オプション・ファイル (* optional file). オブジェクト・プログラムが実行されるたびに必ずしも存在しなくてもよいものとして宣言されているファイル。オブジェクト・プログラムが実行されると、そのファイルの存在の有無が調べられる。

オプション・ワード (* optional word). 言語を読みやすくする目的でのみ特定の形式で含められる予約語。このようなワードが表示されている形式をソース単位内で使用する場合、そのワードの有無はユーザーが選択できる。

オペランド (* operand). (1) オペランドの一般的な定義は、「操作対象のコンポーネント」である。(2) 本書の目的に沿った言い方をすれば、ステートメントや記入項目の形式中に現れる小文字または日本語で書かれた語(または語群)はオペランドと見なされ、そのオペランドによって指示されたデータに対して暗黙の参照を行う。

[力行]

ガーベッジ・コレクション (garbage collection). 参照されなくなったオブジェクトのメモリーを、Java ランタイム・システムが自動的に解放すること。

下位終了 (* low-order end). 文字ストリングの右端の文字。

階層ファイル・システム (hierarchical file system). 階層構造で編成されたファイルとディレクトリーの集合であり、z/OS UNIX システム・サービスを使用してアクセスできる。

外部 10 進数データ項目 (external decimal data item). 「ゾーン 10 進数データ項目 (zoned decimal data item)」および「国別 10 進数データ項目 (national decimal data item)」を参照。

外部コード・ページ (external code page). ASCII XML 文書の場合は、現行のランタイム・ロケールによって示されるコード・ページを指す。EBCDIC XML 文書の場合は、次のいずれかを指す。

- EBCDIC_CODEPAGE 環境変数で指定されたコード・ページ
- EBCDIC_CODEPAGE 環境変数を設定しない場合は、現行のランタイム・ロケールに対して選択されたデフォルトの EBCDIC コード・ページ

外部スイッチ (* external switch). インプリメントする人によって定義され指名されたハードウェアまたはソフトウェア装置であり、2 つの代替状態のいずれかが存在していることを示す。

外部データ (* external data). プログラムの中で外部データ項目および外部ファイル結合子として記述されるデータ。

外部データ項目 (* external data item). 実行単位の 1 つまたは複数のプログラムにおいて外部レコードの一部として記述されるデータ項目であり、その項目が記述されている任意のプログラムから参照することができる。

外部データ・レコード (* external data record). 実行単位の 1 つまたは複数のプログラムにおいて記述される論理レコードであり、そのデータ項目は、それらが記述されている任意のプログラムから参照できる。

外部ファイル結合子 (* external file connector). 実行単位の 1 つまたは複数のオブジェクト・プログラムにアクセス可能なファイル結合子。

外部浮動小数点データ項目 (external floating-point data item). 「表示浮動小数点データ項目 (display floating-point data item)」および「国別浮動小数点データ項目 (national floating-point data item)」を参照。

外部プログラム (external program). 最外部プログラム。ネストされていないプログラム。

カウンター (* counter). 他の数字を使ってその数字分だけ増減したり、あるいは 0 または任意の正もしくは負の値に変更またはリセットしたりできるようにした、数または数表現を収めるために使用されるデータ項目。

拡張西暦年 (expanded year). 4 桁の年だけから構成される日付フィールド。その値には世紀が含まれる (例えば、1998)。「ウィンドウ化西暦年 (windowed year)」と対比。

拡張日付フィールド (expanded date field). 拡張 (4 桁) 年を含む日付フィールド。「日付フィールド (date field)」および「拡張西暦年 (expanded year)」も参照。

拡張部分 (extensions). COBOL 85 標準で記述されるもの以外で、IBM コンパイラーでサポートされる COBOL 構文とセマンティクス。

拡張モード (* extend mode). ファイルに対する EXTEND 句の指定のある OPEN ステートメントが実行されてから、そのファイルに対する REEL または UNIT 句の指定のない CLOSE ステートメントが実行される前までの、ファイルの状態。

型式化オブジェクト参照 (typed object reference). 指定されたクラスまたはそのサブクラスのオブジェクトだけを参照できるデータ名。

カタログ式プロシージャ (cataloged procedure). プロシージャ・ライブラリー (SYS1.PROCLIB) と呼ばれる区分データ・セットに置かれた一連のジョブ制御ステートメント。カタログ式プロシージャを使用すると、JCL をコーディングする時間を節約して、エラーを減らすことができる。

カプセル化 (encapsulation). オブジェクト指向プログラミングでは、オブジェクトの固有の詳細を隠すのに使用される技法。オブジェクトは、基礎構造を露出しくなくても、データの照会と操作を行うインターフェースを提供する。「情報隠蔽 (information hiding)」と同義。

可変位置グループ (* variably located group). 同じレコード内の可変長テーブルに続くグループ項目 (可変長テーブルに従属するわけではない)。グループ項目は、英数字グループでも国別グループでも構いません。

可変位置項目 (* variably located item). 同じレコード内の可変長テーブルに続くデータ項目 (可変長テーブルに従属するわけではない)。

可変オカレンス・データ項目 (* variable-occurrence data item). 可変オカレンス・データ項目とは、反復される回数が可変であるテーブル・エレメントを言う。そのような項目は、そのデータ記述記入項目内に OCCURS DEPENDING ON 文節を持っているか、またはそのような項目に従属していなければならない。

可変長レコード (* variable-length record). ファイル記述項目またはソート・マージ・ファイル記述記入項目が、文字位置の数が可変であるレコードを許容しているファイルに関連付けられているレコード。

環境文節 (* environment clause). ENVIRONMENT DIVISION 記入項目の一部として現れる文節。

環境変数 (environment variable). コンピューター環境の一部の局面を定義する多数の変数のいずれかであり、その環境で動作するプログラムからアクセス可能。環境変数は、動作環境に依存するプログラムの動作に影響を与える。

環境名 (environment-name). IBM が指定する名前であり、システム論理装置、プリンターおよびカード穿孔装置の制御文字、報告書コード、またはプログラム・スイッチ、あるいはそれらの組み合わせを識別する。環境名が ENVIRONMENT DIVISION の簡略名と関連付けられている場合は、その簡略名を、置換が有効な任意の形式で置き換えることができる。

関係 (* relation). 「比較演算子 (relational operator)」または「比較条件 (relation condition)」を参照。

関数 ID (* function-identifier). 関数を参照する文字ストリングと区切り文字の構文的に正しい組み合わせ。関数で表現されるデータ項目は、関数名と引数 (ある場合) によって一意的に識別される。関数 ID は、参照修飾子を含むことができる。英数字関数を参照する関数 ID は、一定の制限に従いつつ ID が指定できる一般フォーマットの中ならばどこにでも指定できる。整数関数または数字関数を参照する関数 ID は、算術式が指定できる一般フォーマットの中ならばどこにおいても指定できる。

関数ポインター・データ項目 (function-pointer data item). 入り口点を指すポインターを保管できるデータ項目。USAGE IS FUNCTION-POINTER 文節で定義されるデータ項目に、関数入り口点のアドレスが含まれる。一般的に、C および Java プログラムと通信するために使用される。

簡略複合比較条件 (* abbreviated combined relation condition). 連続した一連の比較条件において、共通サブジェクトの明示的な省略、または共通サブジェクトと共通関係演算子の明示的な省略によって生じる複合条件。

簡略名 (* mnemonic-name). ENVIRONMENT DIVISION において、指定されたインプリメントする人の名前に関連したユーザー定義語。

キー (* key). レコードの位置を識別するデータ項目、またはデータの順序付けを識別するための一連のデータ項目。

キーワード (* keyword). 予約語または関数名で、その語の現れる形式がソース・プログラムの中で使用されるときには必須である。

疑似テキスト (* pseudo-text). ソース・プログラムまたは COBOL ライブラリーにおいて、疑似テキスト区切り文字によって区切られた一連のテキスト・ワード、コメント行、または区切り文字スペース (疑似テキスト区切り文字を含まない)。

疑似テキスト区切り文字 (* pseudo-text delimiter). 疑似テキストを区切るために使用される 2 つの連続する等号文字 (==)。

記入項目のオブジェクト (* object of entry). COBOL プログラムの DATA DIVISION 記入項目内の一連のオペランドと予約語であり、その記入項目のサブジェクトの直後に続く。

記入項目のサブジェクト (* subject of entry). DATA DIVISION の記入項目内において、レベル標識またはレベル番号の直後に現れるオペランドまたは予約語。

機能 (* function). ステートメントの実行中に参照された時点で決定される値を持つ、一時的なデータ項目。

機能名 (function-name). 必要な引数を指定した呼び出しによって、関数の値が決定されるメカニズムを指名するワード。

基本項目 (* elementary item). それ以上論理的に分割されないものとして記述されるデータ項目。

基本的な文書エンコード (basic document encoding). XML 文書のエンコード・カテゴリで、以下のいずれかとなる。XML パーサーは文書の最初の数バイトを調べて判別する。

- ASCII
- EBCDIC
- Unicode UTF-16 (ビッグ・エンディアンまたはリトル・エンディアンのいずれか)
- これ以外のサポートされないエンコード
- 認識不能なエンコード

基本レコード・キー (* prime record key). 索引付きファイルのレコードを固有なものとして識別する内容を持つキー。

共通プログラム (* common program). 別のプログラムに直接的に含まれているにもかかわらず、その別のプログラムに直接的または間接的に含まれている任意のプログラムから呼び出すことができるプログラム。

切り替え状況条件 (switch-status condition). オンまたはオフに設定可能な UPSI スイッチが、特定の状況に設定されているという命題で、これに関して真理値を判別することができる。

記録モード (recording mode). ファイル内の論理レコードの形式。記録モードは、F (固定長)、V (可変長)、S (スパン)、または U (不定形式) とすることができる。

キロバイト (KB) (kilobyte(KB)). 1 キロバイトは 1024 バイトに相当する。

句 (* phrase). 連続する 1 つ以上の COBOL 文字ストリングを配列したセットで、COBOL プロシーチャー・ステートメントまたは COBOL 文節の一部を構成する。

空白文字 (white space). 文書にスペースを挿入する文字。空白文字には以下のものがある。

- スペース
- 水平タブ
- 復帰
- 改行

- 次の行

Unicode 標準では上記のように呼ばれる。

区切り点 (breakpoint). 通常は命令によって指定されるコンピューター・プログラムの場所であり、プログラムの実行は外部からの介入またはモニター・プログラムによって割り込まれる場合がある。

区切り文字 (* delimiter). 1 つの文字、または一連の連続する文字であり、文字ストリングの終わりを識別し、その文字ストリングを後続の文字ストリングから区切る。区切り文字は、これを使用して区切られる文字ストリングの一部ではない。

句読文字 (* punctuation character). 以下のセットに属する文字。

文字	意味
,	コンマ
;	セミコロン
:	コロ
.	ピリオド (終止符)
“	引用符
(左括弧
)	右括弧
	スペース
=	等号

国別 10 進数データ項目 (national decimal data item). 暗黙的または明示的に USAGE NATIONAL として記述されており、PICTURE の記号 9、S、P、および V の有効な組み合わせを含んでいる、外部 10 進数データ項目。

国別グループ項目 (national group item). 明示的または暗黙的に GROUP-USAGE NATIONAL 文節で記述されたグループ項目。国別グループ項目は、INSPECT、STRING、および UNSTRING などの操作で、カテゴリ国別の基本データ項目として定義されているかのように処理されます。英数字グループ項目内で USAGE NATIONAL データ項目を定義するのとは対照的に、この処理により、国別文字の埋め込みおよび切り捨てが確実に正しく行われます。グループ内の基本項目を処理する必要のある操作 (MOVE CORRESPONDING、ADD CORRESPONDING、および INITIALIZE など) の場合、国別グループはグループ・セマンティクスを使用して処理されます。

国別データ項目 (national data item). カテゴリ国別、国別編集、または USAGE NATIONAL の数字編集のデータ項目。

国別浮動小数点データ項目 (national floating-point data item). 暗黙的または明示的に USAGE NATIONAL として記述されており、浮動小数点データ項目を記述する PICTURE 文字ストリングを持っている、外部浮動小数点データ項目。

国別編集データ項目 (national-edited data item). 少なくとも 1 つの N のインスタンスおよび単純挿入記号 B、0、または / の少なくとも 1 つを含んでいる PICTURE 文字ストリングで記述されている、データ項目。国別編集データ項目は USAGE NATIONAL を持ちます。

国別文字 (national character). (1) 国別リテラルまたは USAGE NATIONAL の UTF-16 文字。(2) UTF-16 で表される任意の文字。

国別文字位置 (national character position). 「文字位置 (character position)」を参照。

組み込み関数 (built-in function). 「組み込み関数 (intrinsic function)」を参照。

組み込み関数 (intrinsic function). よく使用される算術関数のような事前定義関数で、組み込み関数参照によって呼び出される。

クライアント (client). オブジェクト指向プログラミングにおいて、クラス内の 1 つまたは複数のメソッドからサービスを要求するプログラムまたはメソッド。

クラス (* class). ゼロ、1 つ、または複数のオブジェクトの共通の動作およびインプリメンテーションを定義するエンティティ。同じ具体化を共用するオブジェクトは、同じクラスのオブジェクトとみなされる。クラスは階層として定義でき、あるクラスを別のクラスから継承することができる。

クラス階層 (class hierarchy). オブジェクト・クラス間の関係を示すツリーのような構造。最上部に 1 つのクラスが置かれ、その下に 1 つまたは複数のクラスの層が置かれる。「継承階層 (inheritance hierarchy)」と同義。

クラス識別記入項目 (* class identification entry). IDENTIFICATION DIVISION の CLASS-ID 段落内の記入項目であり、クラス名を指定する文節と、選択した属性をクラス定義に割り当てる文節を含む。

クラス条件 (* class condition). 項目の内容がすべて英字であるか、すべて数字であるか、すべて DBCS であるか、すべて漢字であるか、あるいはクラス名の定義においてリストされた文字だけで構成されるかという命題で、それに関して真の値を判別することができる。

クラス定義 (* class definition). クラスを定義する COBOL ソース単位。

クラス名 (オブジェクト指向) (class-name (object-oriented)). オブジェクト指向 COBOL クラス定義の名前。

クラス名 (データの)(* class-name (of data)). ENVIRONMENT DIVISION の SPECIAL-NAMES 段落で定義されるユーザー定義語であり、真理値を定義できる命題に名前を割り当てる。データ項目の内容は、クラス名の定義にリストされている文字だけで構成される。

クラス・オブジェクト (class object). クラスを表す実行時オブジェクト。

グループ化された分離文字 (grouping separator). 容易に読み取れるように、数の桁のグループ単位で分離するために使用される文字。デフォルトは文字のコンマです。

グループ項目 (group item). (1) 複数の従属データ項目で構成されるデータ項目。「英数字グループ項目 (alphanumeric group item)」および「国別グループ項目 (national group item)」を参照。(2) 国別グループまたは英数字グループとして明示的に (またはコンテキストで) 限定されていない場合、この用語は一般のグループを指します。

グローバル名 (* global name). 1 つのプログラムにおいてのみ宣言されるが、そのプログラム、またはそのプログラム内に含まれている任意のプログラムから参照できる名前。条件名、データ名、ファイル名、レコード名、報告書名、およびいくつかの特殊レジスターが、グローバル名となり得る。

ケース構造 (case structure). 結果として生じた多数のアクションの中から選択を行うために、一連の条件をテストするプログラム処理ロジック。

継承 (inheritance). クラスのインプリメンテーションを、別のクラスを基にして使用するメカニズム。定義により、継承するクラスは継承されるクラスに準拠する。COBOL for Windows は多重継承をサポートしない。サブクラスは、必ず 1 つの即時スーパークラスを有する。

継承階層 (inheritance hierarchy). 「クラス階層 (class hierarchy)」を参照。

桁位置 (* digit position). 1 つの桁を保管するために必要な物理ストレージの大きさ。この大きさは、データ項目を定義するデータ記述記入項目に指定された用途によって異なる。

結果 ID (* resultant identifier). 算術演算の結果が収められるユーザー定義のデータ項目。

現行レコード (* current record). ファイル処理では、ファイルに関連したレコード域に使用できるレコード。

言語間通信 (ILC)(interlanguage communication (ILC)). 異なるプログラム言語で書かれた複数のルーチンが通信できること。ILC サポートにより、アプリケーション開発者は、各種言語で書かれたコンポーネント・ルーチンからアプリケーションを簡単に構築することができる。

言語名 (* language-name). 特定のプログラミング言語を指定するシステム名。

コード化文字セット (coded character set). 文字セットを設定し、その文字セットの文字とコード化表現との間の関係を設定する明確な規則の集まり。コード化文字セットの例として、ASCII もしくは EBCDIC コード・ページで、または Unicode 対応の UTF-16 エンコード・スキームで表す文字セットがある。

コード化文字セット ID (coded character set identifier (CCSID)). 特定のコード・ページを識別する 1 から 65,535 までの IBM 定義番号。

コード・ページ (code page). すべてのコード・ポイントに図形文字および制御機能の意味を割り当てるもの。例えば、あるコード・ページでは、8 ビット・コードに対して 256 コード・ポイントに文字と意味を割り当て、別のコード・ページでは、7 ビット・コードに対して 128 コード・ポイントに文字と意味を割り当てることができる。ワークステーション上の英語の IBM コード・ページは IBM-1252 で、ホストは IBM-1047 である。

コード・ポイント (code point). コード化文字セット (コード・ページ) に定義する固有のビット・パターン。コード・ポイントには、グラフィック・シンボルおよび制御文字が割り当てられる。

高位終了 (* high-order end). 文字ストリングの左端の文字。

降順キー (* descending key). 値に基づくキーであり、そのデータが、キーの最高値からキーの最低値まで、データ項目比較規則に従って順序付けられている。

構造化プログラミング (structured programming). コンピューター・プログラムを編成してコーディングするための技法であり、この技法では、プログラムはセグメントの階層で構成され、それぞれのセグメントには 1 つの入り口点と 1 つの出口点がある。制御は、構造の下方へと渡され、階層内のより上位レベルへの無条件分岐は行われない。

構文 (syntax). (1) 意味や解釈および使用の方法に依存しない、文字同士または文字のグループ同士の間の関係。(2) 言語における表現の構造。(3) 言語構造を支配する規則。(4) 記号相互の関係。(5) ステートメントの構築にかかわる規則。

項目 (* entry). 分離文字ピリオドで終了させられる連続する文節の記述セットであり、COBOL プログラムの IDENTIFICATION DIVISION、ENVIRONMENT DIVISION、または DATA DIVISION に書き込まれる。

互換性のある日付フィールド (compatible date field). 互換 という用語の意味は、日付フィールドに適用される場合、それが COBOL のどの部で使用されるかによって異なる。

- DATA DIVISION: 2 つの日付フィールドが同一の USAGE を持ち、以下の条件の少なくとも 1 つを満たしている場合、それらの日付フィールドは互換性があります。
 - 同じ日付形式を持つ。
 - ともにウィンドウ化日付フィールドであり、一方がウィンドウ化西暦年 DATE FORMAT YY だけで構成される。
 - ともに拡張日付フィールドであり、一方が拡張西暦年 DATE FORMAT YYYY だけで構成される。
 - 一方が DATE FORMAT YYXXXX で、他方が YYXX の形式である。
 - 一方が DATE FORMAT YYYYXXXX で、他方が YYYYXX の形式である。

ウィンドウ化日付フィールドは、拡張日付グループであるデータ項目に從属することができる。2 つの日付フィールドに互換性があると言われるのは、從属日付フィールドが USAGE DISPLAY を持ち、グループ拡張日付フィールドの開始より 2 バイト後で始まっており、2 つのフィールドが以下の少なくとも 1 つの条件を満たしている場合である。

- 從属日付フィールドの DATE FORMAT パターンが、グループ日付フィールドの DATE FORMAT パターンと同じ数の X を持つ。
- 從属日付フィールドが DATE FORMAT YY を持つ。
- グループ日付フィールドが DATE FORMAT YYYYXXXX を持ち、從属日付フィールドが DATE FORMAT YYXX を持つ。
- PROCEDURE DIVISION: 2 つの日付フィールドが、ウィンドウ化または拡張できる年部分を除いて、同じ日付形式を持っている場合、それらのフィールドは互換性があります。例えば、DATE FORMAT YYXXXX という形式のウィンドウ化日付フィールドは、以下のものと互換性がある。

- DATE FORMAT YYYYX という形式の別のウィンドウ化日付フィールド。
- DATE FORMAT YYYYXX という形式の拡張日付フィールド。

固定小数点項目 (fixed-point item). PICTURE 文節で定義される数値データ項目であり、オプションの符号の位置、その中に含まれる桁数、およびオプションの小数点の位置を指定するもの。2 進数、パック 10 進数、または外部 10 進数のいずれかのフォーマットをとることができる。

固定長レコード (* fixed-length record). ファイル記述項目またはソート・マージ記述記入項目が、すべてのレコードのバイトの個数が同じであるように要求しているファイルに関連付けられたレコード。

固定ファイル属性 (* fixed file attributes). ファイルに関する情報であり、ファイルの作成時に設定され、それ以降はファイルが存在する限り変更できない。これらの属性には、ファイル (順次、相対、または索引付き) の編成、基本レコード・キー、代替レコード・キー、コード・セット、最小および最大レコード・サイズ、レコード・タイプ (固定または可変)、索引付きファイルのキーの照合シーケンス、ブロック化因数、埋め込み文字、およびレコード区切り文字がある。

コピーブック (copybook). 一連のコードが含まれたファイルまたはライブラリー・メンバーであり、コンパイル時に COPY ステートメントを使用してソース・プログラムに組み込まれる。ファイルはユーザーが作成する場合、COBOL によって提供される場合、または他の製品によって供給される場合とがある。「コピー・ファイル (copy file)」と同義。

コメント記入項目 (* comment-entry). IDENTIFICATION DIVISION 内の記入項目であり、コンピューターの文字セットから任意の文字を組み合わせることができる。

コメント行 (* comment line). 行の標識区域ではアスタリスク (*)、およびその行の区域 A および B ではコンピューターの文字セットの任意の文字で表されるソース・プログラム行。コメント行は、文書化にのみ役立つ。行の標識区域では斜線 (/)、そしてその行の区域 A および B ではコンピューター文字セットの任意の文字で表される特殊形式のコメント行があると、コメントの印刷前に改ページが行われる。

固有照合シーケンス (* native collating sequence). OBJECT-COMPUTER 段落で指定されたコンピューターに関連した、インプリメントする人が定義した照合シーケンス。

固有文字セット (* native character set).

OBJECT-COMPUTER 段落で指定されたコンピューターに関連した、インプリメントする人が定義した文字セット。

コンパイラー (compiler). 高水準言語で記述されたソース・コードをマシン言語のオブジェクト・コードに変換するプログラム。

コンパイラー指示ステートメント (compiler-directing statement). コンパイル時にコンパイラーに特定の処置を行わせるステートメント。標準コンパイラー指示ステートメントには、COPY、REPLACE、および USE がある。

コンパイラー・ディレクティブ (compiler directive). コンパイラーがコンパイル中に特定のアクションをとるための指示。COBOL for Windows で使用されるコンパイラー指示は CALLINTERFACE である。プログラム内で CALLINTERFACE 指示をコーディングして、特定の CALL ステートメントに対して特定のインターフェース規約を使用できる。

コンパイル (* compile). (1) 高水準言語で表現されたプログラムを、中間言語、アセンブリー言語、またはコンピューター言語で表現されたプログラムに変換すること。(2) あるプログラミング言語で書かれたコンピューター・プログラムから、プログラムの全体的なロジック構造を利用することによって、または 1 つの記号ステートメントから複数のコンピューター命令を作り出すことによって、またはアセンブラの機能のようにこれら両方を使用することによって、マシン言語プログラムを生成すること。

コンパイル時間 (* compile time). COBOL コンパイラーによって、COBOL ソース・コードが COBOL オブジェクト・プログラムに変換される時間。

コンパイル用コンピューター記入項目 (* source computer entry). ENVIRONMENT DIVISION の SOURCE-COMPUTER 段落内の記入項目であり、ソース・プログラムがコンパイルされるコンピューター環境を記述する文節が入っている。

コンピューター名 (* computer-name). プログラムがコンパイルまたは実行されるコンピューターを識別するシステム名。

コンポーネント (component). (1) 関連ファイルからなる機能グループ化。(2) オブジェクト指向プログラミングでは、特定の機能を実行し、他のコンポーネントやアプリケーションと連携するように設計されている、再使用可能なオブジェクトまたはプログラム。JavaBeansTM は Sun Microsystems, Inc のコンポーネント作成用アーキテクチャーです。

[サ行]

再帰 (recursion). それ自体を呼び出すプログラム、または、自分で呼び出したプログラムによって直接あるいは間接に呼び出されるプログラム。

再帰可能 (recursively capable). PROGRAM-ID ステートメントで RECURSIVE 属性が指定されていれば、プログラムは再帰可能である (再帰的に呼び出すことができる)。

最後に使われた状態 (last-used state). 内部値がプログラム終了時と同じままで、初期値にリセットされない、プログラムの状態を言う。

再入可能 (reentrant). プログラムまたはルーチンの属性。この属性によって、ロード・モジュールの 1 つのコピーを複数のユーザーが共用できる。COBOL for Windows のコンパイラは、必ず再入可能コードを生成する。

索引付きデータ名 (indexed data-name). データ名とそれに続く 1 つまたは複数の (括弧で囲まれた) 索引名で構成される ID。

索引付きファイル (* indexed file). 索引編成のファイル。

索引名 (* index-name). 特定のテーブルに関係付けられた指標を指名するユーザー定義語。

サブクラス (* subclass). 別のクラスから継承するクラス。継承関係にある 2 つのクラスをまとめて考える場合、継承する側、つまり継承先のクラスをサブクラスといい、継承される側、つまり継承元のクラスをスーパークラスという。

サブプログラム (* subprogram). 「呼び出し先プログラム (*called program*)」を参照。

サロゲート・ペア (surrogate pair). UTF-16 形式のユニコードで、共に 1 つのユニコード図形文字を表すエンコード方式ペアの単位。ペアの最初の単位は上位サロゲートと呼ばれ、第 2 の単位は下位サロゲートと呼ばれる。上位サロゲートのコード値の範囲は、X'D800' から X'DBFF' である。下位サロゲートのコード値の範囲は、X'DC00' から X'DFFF' である。サロゲート・ペアは、Unicode 16 ビット・コード文字セットで表現できる 65,536 文字より多くの文字を表現できる。

算術演算 (* arithmetic operation). ある算術ステートメントが実行されることにより、またはある算術式が計算されることにより生じるプロセスで、そこで与えられている引数に対して数学的に正しい解が求められる。

算術演算子 (* arithmetic operator). 次に示す集合に属する 1 文字、または 2 文字で構成された固定した組み合わせ。

文字	意味
+	加算
-	減算
*	乗算
/	除算
**	指数

算術式 (* arithmetic expression). 数字基本項目の ID、数値リテラル、そのような ID とリテラルを算術演算子で区切ったもの、2 つの算術式を算術演算子で区切ったもの、または算術式を括弧で囲んだもの。

算術ステートメント (* arithmetic statement). 算術演算を実行させるステートメント。算術ステートメントには、ADD、COMPUTE、DIVIDE、MULTIPLY、および SUBTRACT の各ステートメントがある。

参照キー (* key of reference). 索引付きファイルの中のレコードをアクセスするために現在使用されている基本キーまたは代替キー。

参照形式 (* reference format). COBOL ソース・プログラムを記述するに際して標準的な方式を提供する形式。

参照修飾子 (* reference-modifier). 固有のデータ項目を定義する文字ストリングと区切り文字の構文的に正しい組み合わせ。区切り用の左括弧分離符号、左端の文字位置、分離符号のコロン、長さ (オプション)、および区切り用の右括弧分離符号を含む。

参照変更 (reference modification). 新規のカテゴリ英数字、カテゴリ DBCS、またはカテゴリ国別のデータ項目を定義する方法であり、USAGE DISPLAY、DISPLAY-1、または NATIONAL データ項目の左端文字および左端文字位置を基準にした長さを指定して定義する方法です。

式 (* expression). 算術式または条件式。

シグニチャー (signature). (1) ある操作とそのパラメータの名前。(2) あるメソッドの名前とその仮パラメータの数と型。

指数 (exponent). 別の数 (底) をべき乗する指数を示す数。正の指数は乗算を示し、負の指数は除算を示し、小数の指数は数量の根を示す。COBOL では、指数式は記号 ** の後に指数を付けて表す。

システム名 (* system-name). オペレーティング環境と連絡し合うために使用される COBOL ワード。

事前初期設定 (preinitialization). プログラム (特に非 COBOL プログラム) からの複数の呼び出しの準備としての COBOL ランタイム環境の初期設定。この環境は、明示的に終了されるまで終了されない。

実行可能ファイル (executable file (EXE)). 取るべき操作または処置を実行するプログラムまたはコマンドが含まれたファイル。

実行時 (execution time). 「実行時 (*run time*)」を参照。

実行時 (* run time). オブジェクト・プログラムが実行される時。「オブジェクト時 (*object time*)」と同義。

実行時環境 (execution-time environment). 「ランタイム環境 (*runtime environment*)」を参照。

実行単位 (* run unit). 1 つの独立型オブジェクト・プログラム、あるいは COBOL の CALL または INVOKE ステートメントによって相互作用し、実行時に 1 つのエンティティとして機能する複数のオブジェクト・プログラム。

実際の小数点 (* actual decimal point). 10 進小数点文字のピリオド (.) またはコンマ (,) を使用して、または、データ項目内の 10 進小数点のコンマ (,)。

失敗した実行 (* unsuccessful execution). ステートメントの実行が試みられたが、そのステートメントに指定された操作すべてを実行できなかったこと。あるステートメントの実行不成功は、そのステートメントによって参照されるデータには影響を及ぼさないが、状況表示には影響を与える可能性がある。

指定変更 (override). サブクラスのインスタンス・メソッド (親クラスから継承された) を再定義すること。

指標 (* index). その内容が、テーブル内の特定エレメントの識別を表す、コンピューターのストレージ域またはレジスター。

指標付き編成 (* indexed organization). 各レコードが、そのレコード内の 1 つまたは複数のキーの値で識別される、永続論理ファイル構造。

指標付け (indexing). 指標名を使用しての添え字付けと同義。

指標データ項目 (* index data item). 索引名および関連する値をインストール先指定の形式で保管できるデータ項目。

修飾子 (* qualifier). (1) レベル標識と関連付けられるデータ名または名前であり、参照の際に、別のデータ名

(修飾子に従属する項目の名前) と一緒に、または条件名と一緒に使用される。(2) セクション名。そのセクションの中で指定されている段落名と共に参照する際に使用される。(3) ライブラリー名。そのライブラリーと関連付けられたテキスト名と共に参照する際に使用される。

修飾データ名 (* qualified data-name). データ名と、その後に連結語の OF または IN とデータ名修飾子を続けたものが 1 つ以上のセットで続いて構成される ID。

終了クラス・マーカー (end class marker). 語の組み合わせに分離文字ピリオドが続いたもので、COBOL クラス定義の終わりを示す。クラス終了マーカーは次のとおり。

END CLASS *class-name*.

終了メソッド・マーカー (end method marker). 語の組み合わせに分離文字ピリオドが続いたもので、COBOL メソッド定義の終わりを示す。メソッド終了マーカーは次のとおり。

END METHOD *method-name*.

出力ファイル (* output file). 出力モードまたは拡張モードのいずれかでオープンされるファイル。

出力プロシージャ (* output procedure). SORT ステートメントの実行中にソート機能が完了した後で制御が渡されるステートメントの集合、または MERGE ステートメントの実行中に、要求があればマージ機能がマージ済みの順序になっているレコードのうち次のレコードを選択できるようになった後で制御が渡されるステートメントの集合。

出力モード (* output mode). ファイルに対する OUTPUT または EXTEND 句の指定のある OPEN ステートメントが実行されてから、そのファイルに対する REEL または UNIT 句の指定のない CLOSE ステートメントが実行される前までの、ファイルの状態。

順次アクセス (* sequential access). ファイル内のレコードの順序によって規定されている、論理レコードの連続した前後関係順に、論理レコードをファイルから取り出したり、ファイルに書き込んだりするアクセス・モード。

順次ファイル (* sequential file). 順次編成のファイル。

順次編成 (* sequential organization). レコードがファイルに書き込まれるときに確定されたレコードの前後関係によって識別されるような永続的な論理ファイル構造。

順序構造 (sequence structure). 一連のステートメントが、順序どおりに実行されるプログラムの処理ロジック。

条件 (condition). アプリケーションの通常のプログラミングされたフローを変えるもの。条件は、ハードウェアまたはオペレーティング・システムによって検出され、その結果、割り込みが起こる。このほかにも、条件は言語特定の生成コードまたは言語ライブラリー・コードによっても検出できる。

条件 (* condition). 真理値を判別できる、実行時のプログラムの状況。条件がこれらの言語仕様または一般形式の '条件' (*condition-1*, *condition-2*,...) に関連して現れる場合は、次のいずれかである。オプションとして括弧で囲まれた単純条件からなる条件式、あるいは、単純条件、論理演算子、および括弧の構文的に正しい組み合わせ (真理値を判別できる) からなる複合条件。「単純条件 (*simple condition*)」、「複合条件 (*complex condition*)」、「単純否定条件 (*negated simple condition*)」、「複合条件 (*combined condition*)」、および「複合否定条件 (*negated combined condition*)」も参照。

条件句 (* conditional phrase). ある条件ステートメントが実行された結果得られる条件の真理値の判別に基いてとられるべき処置を指定する句。

条件式 (* conditional expression). EVALUATE、IF、PERFORM、または SEARCH ステートメントの中で指定される単純条件または複合条件。「単純条件 (*simple condition*)」および「複合条件 (*complex condition*)」も参照。

条件ステートメント (* conditional statement). 条件の真理値を判別することと、オブジェクト・プログラムの次の処理がこの真理値によって決まることを指定するステートメント。

条件変数 (* conditional variable). 1 つまたは複数の値を持つデータ項目であり、これらの値が、そのデータ項目に割り当てられた条件名を持つ。

条件名 (* condition-name). 条件変数が想定できる値のサブセットに名前を割り当てるユーザー定義語。または、インプリメントする人が定義したスイッチまたは装置の状況に割り当てられるユーザー定義語。

条件名条件 (* condition-name condition). 真理値を判別できる命題で、かつ、条件変数の値が、その条件変数と関連する条件名に属する一連の値のメンバーである命題。

照合シーケンス (* collating sequence). コンピューターに受け入れられる文字がソート、マージ、比較を行う

ため、また索引付きファイルを順次処理するために順序付けられているシーケンス。

昇順キー (* ascending key). データ項目を比較する際の規則に一致するように、最低のキー値から始めて最高のキー値へとデータを順序付けている値に即したキー。

初期状態 (* initial state). 実行単位で最初に呼び出されるときのプログラムの状態。

初期設定プログラム (* initial program). プログラムが実行単位で呼び出されるたびに初期状態に設定されるプログラム。

シンボリック文字 (* symbolic-character). ユーザー定義の表意定数を指定するユーザー定義語。

真理値 (* truth value). 2 つの値 (真または偽) のどちらか一方によって、条件評価の結果を表したもの。

スーパークラス (* superclass). 別のクラスによって継承されるクラス。「サブクラス (*subclass*)」も参照。

数字 (digit). 0 から 9 までの任意の数字。COBOL では、この用語を用いて他の記号を参照することはない。

数字 (* numeric character). 次のような数字に属する文字。0、1、2、3、4、5、6、7、8、9。

数字関数 (* numeric function). クラスとカテゴリーは数字だが、考えられる評価のいくつかにおいて整数関数の要件を満たさないような関数。

数字編集データ項目 (numeric-edited data item). 印刷出力の際に使用するのに適したフォーマットの数値データを含むデータ項目。外部 10 進数字の 0 から 9 の数字、小数点、コンマ、通貨符号、符号制御文字、その他の編集記号から構成される。数字編集項目は、USAGE DISPLAY または USAGE NATIONAL のいずれかで表現できる。

数値データ項目 (numeric data item). (1) 記述により内容が数字 0 から 9 より選ばれた文字で表される値に制限されるデータ項目。符号付きである場合、この項目は +、-、または他の表記の演算符号も含むことができます。(2) カテゴリー数値、内部浮動小数点、または外部浮動小数点のデータ項目。数値データ項目は、USAGE DISPLAY、NATIONAL、PACKED-DECIMAL、BINARY、COMP、COMP-1、COMP-2、COMP-3、COMP-4、または COMP-5 を持つことができます。

数値リテラル (* numeric literal). 1 つまたは複数の数字から構成されるリテラルで、小数点または代数符号あるいはその両方を含むことができる。小数点は右端の文

字であってはならない。代数符号がある場合には、それが左端の文字でなければならない。

ステートメント (* statement). COBOL ソース・プログラムに書かれる、動詞を冒頭に置いた、ワード、リテラル、および区切り記号の構文的に正しい組み合わせ。

スレッド (thread). プロセスの制御下にあるコンピューター命令のストリーム (プロセス内のアプリケーションによって開始される)。

世紀ウィンドウ (century window). 2 桁年号が固有に決まる 100 年間のこと。COBOL プログラマーが使用できる世紀ウィンドウには、いくつかのタイプがある。

- ウィンドウ化日付フィールドについては、YEARWINDOW コンパイラー・オプションを使用する。
- ウィンドウ操作組み込み関数 DATE-TO-YYYYMMDD、DAY-TO-YYYYDDD、および YEAR-TO-YYYY については、引数-2 (argument-2) によって世紀ウィンドウを指定する。

整数 (* integer). (1) 小数点の右側に桁位置がない数値リテラル。(2) DATA DIVISION に定義される数値データ項目であり、小数点の右側に桁位置を含まないもの。(3) 関数の起こりうるすべての評価の戻り値で、小数点の右側の桁がすべてゼロであることが定義されている数字関数。

整数関数 (integer function). カテゴリーが数字であり、小数点の右側の桁位置が定義に入っていない関数。

セクション (* section). ゼロ、1 つ、または複数の段落またはエンティティー (セクション本体と呼ばれる) と、その最初のものの前にセクション・ヘッダーが付いているもの。各セクションは、セクション・ヘッダーとそれに関連するセクション本体から構成される。

セクション名 (* section-name). PROCEDURE DIVISION の中にあるセクションに名前を付けるユーザー定義語。

セクション・ヘッダー (* section header). 後ろに分離文字ピリオドが付いたワードの組み合わせであり、ENVIRONMENT、DATA、または PROCEDURE の各部において、セクションの始まりを示すもの。ENVIRONMENT DIVISION および DATA DIVISION では、セクション・ヘッダーは、予約語の後に分離文字ピリオドを続けたものから構成される。ENVIRONMENT DIVISION で許可されているセクション・ヘッダーは次のとおり。

CONFIGURATION SECTION.
INPUT-OUTPUT SECTION.

DATA DIVISION で許可されているセクション・ヘッダーは次のとおり。

FILE SECTION.
WORKING-STORAGE SECTION.
LOCAL-STORAGE SECTION.
LINKAGE SECTION.

PROCEDURE DIVISION では、セクション・ヘッダーは、セクション名、その後に続く予約語 SECTION、およびその後の分離文字ピリオドから構成される。

宣言部分 (* declaratives). PROCEDURE DIVISION の先頭に書き込まれた 1 つまたは複数の特殊目的セクションの集合であり、その先頭にはキーワード DECLARATIVE が付き、その最後にはキーワード END DECLARATIVES が続いている。宣言部分は、セクション・ヘッダー、USE コンパイラー指示文、および 0 個、1 個、または複数個の関連する段落で構成される。

宣言文 (* declarative sentence). 区切り記号のピリオドによって終了する 1 つの USE ステートメントから構成されるコンパイラー指示文。

選択構造 (selection structure). 条件が真であるか偽であるかに応じて、ある一連のステートメントか、または別の一連のステートメントが実行されるというプログラムの処理ロジック。

ソース項目 (* source item). SOURCE 文節によって指定される ID で、印刷可能な項目の値を提供する。

ソース単位 (source unit). COBOL ソース・コードの 1 単位で、個別にコンパイルできる。プログラムまたはクラス定義。コンパイル単位 と呼ばれる。

ソース・プログラム (source program). ソース・プログラムは、他の形式や記号を使用して表現することができるが、本書では、構文的に正しい COBOL ステートメントの集合を常に指している。COBOL ソース・プログラムは、IDENTIFICATION DIVISION または COPY ステートメントで開始され、指定された場合はプログラム終了マーカーで終了するか、または追加のソース・プログラム行なしで終了する。

ソート・ファイル (* sort file). SORT ステートメントによってソートされるレコードの集まり。ソート・ファイルは、ソート機能によってのみ作成され使用される。

ソート・マージ・ファイル記述記入項目 (* sort-merge file description entry). DATA DIVISION の FILE SECTION の中にある記入項目。レベル標識 SD と、それに続くファイル名、および、必要に応じて、次に続く一連のファイル文節から構成される。

ゾーン 10 進数データ項目 (zoned decimal data item). 暗黙的または明示的に USAGE DISPLAY として記述されており、PICTURE の記号 9、S、P、および V の有効な

組み合わせを含んでいる、外部 10 進数データ項目。ゾーン 10 進数データ項目の内容は、文字 0 から 9 で表され、必要に応じて符号が付きます。PICTURE ストリングが符号を指定しており、SIGN IS SEPARATE 文節が指定されている場合、符号は文字 + または - として表されます。SIGN IS SEPARATE が指定されていない場合、符号は、符号位置の最初の 4 ビットをオーバーレイする 1 つの 16 進数字です (先行または末尾)。

相互参照リスト (cross-reference listing). コンパイラー・リストの一部であり、プログラム内においてファイル、フィールド、および標識が定義、参照、および変更される場所に関する情報が入る。

相対キー (* relative key). 相対ファイルの中の論理レコードを識別するための内容を持つキー。

相対ファイル (* relative file). 相対編成のファイル。

相対編成 (* relative organization). 各レコードが、レコードのファイル内における論理的順序位置を指定する 0 より大きい整数値によって、固有なものとして識別される永続的な論理ファイル構造。

相対レコード番号 (* relative record number). 相対編成ファイル内でのレコードの序数。この番号は、整数の数値リテラルとして扱われる。

想定小数点 (* assumed decimal point). データ項目の中に実際には小数点のための文字が入っていない小数点位置。想定小数点には、論理的な意味があり、物理的には表現されない。

添え字 (* subscript). 整数、(オプションで演算子 + または - 付きの整数が後ろにある) データ名、あるいは (オプションで演算子 + または - 付きの整数が後ろにある) 索引名のいずれかによって表されるオカレンス番号。これによりテーブル内の特定のエレメントを識別する。可変数の引数を認める関数では、添え字付き ID を関数引数として使用する場合は、添え字に ALL を使用することができる。

添え字付きデータ名 (* subscripted data-name). データ名とその後の括弧で囲まれた 1 つまたは複数の添え字から構成される ID。

[タ行]

代替レコード・キー (* alternate record key). 基本レコード・キー以外のキーであり、その内容が索引付きファイル内のレコードを識別する。

ダイナミック・リンク・ライブラリー (dynamic link library (DLL)). リンク時ではなく、ロード時または実行時にプログラムにバインドされる実行可能コードおよびデータが入ったファイル。複数のアプリケーションが DLL 内のコードおよびデータを同時に共用することができる。DLL はプログラムの実行可能 (.EXE) ファイルの一部ではないが、.EXE ファイルを正しく実行するためには必要となる可能性がある。

大容量記憶 (* mass storage). データを順次と非順次の 2 つの方法で編成して保管しておくことができるストレージ・メディア。

大容量記憶装置 (* mass storage device). 磁気ディスクなど、大きな記憶容量を持つ装置。

大容量記憶ファイル (* mass storage file). 大容量記憶メディアに格納されたレコードの集合。

多重定義 (overload). 同じクラスで使用可能な別のメソッドと同一の名前を使い (ただし、異なるシグニチャーを使用して)、メソッドを定義すること。「シグニチャー (signature)」も参照。

単項演算子 (* unary operator). 正符号 (+) または負符号 (-)。算術式の変数や算術式の左括弧の前に置き、それぞれ +1 または -1 を式に乗算する。

単純条件 (* simple condition). 以下のセットから選択される任意の単一条件。

- 比較条件
- クラス条件
- 条件名条件
- 切り替え状況条件
- 符号条件

「条件 (condition)」および「単純否定条件 (negated simple condition)」も参照。

単純否定条件 (* negated simple condition). 論理演算子 NOT とその直後に単純条件を続けたもの。「条件 (condition)」と「単純条件 (simple condition)」も参照。

段落 (* paragraph). PROCEDURE DIVISION では、段落名の後にピリオドが続き、その後に 0 個以上の文が続く。IDENTIFICATION DIVISION および ENVIRONMENT DIVISION では、段落ヘッダーの後に 0 個以上の記入項目が続く。

段落ヘッダー (* paragraph header). 予約語の後に分離文字ピリオドが付いたもので、IDENTIFICATION DIVISION および ENVIRONMENT DIVISION において段落の始まりを示すもの。IDENTIFICATION DIVISION で許可されている段落ヘッダーは次のとおり。

PROGRAM-ID. (Program IDENTIFICATION DIVISION)
CLASS-ID. (Class IDENTIFICATION DIVISION)
METHOD-ID. (Method IDENTIFICATION DIVISION)
AUTHOR.
INSTALLATION.
DATE-WRITTEN.
DATE-COMPILED.
SECURITY.

ENVIRONMENT DIVISION で許可されている段落ヘッダーは次のとおり。

SOURCE-COMPUTER.
OBJECT-COMPUTER.
SPECIAL-NAMES.
REPOSITORY. (Program or Class
CONFIGURATION SECTION)
FILE-CONTROL.
I-O-CONTROL.

段落名 (* paragraph-name). PROCEDURE DIVISION の中の段落を識別し開始するユーザー定義語。

チェックポイント (checkpoint). ジョブ・ステップを後で再始動することができるように、ジョブとシステムの状態に関する情報を記録しておくことができるポイント。

置換文字 (substitution character). ソース・コード・ページからターゲット・コード・ページへの変換の際に、ターゲット・コード・ページで定義されていない文字を表すのに使用される文字。

逐次探索 (serial search). 最初のメンバーから始めて最後のメンバーで終わるように、ある集合のメンバーが連続的に検査される探索方法。

中間結果 (intermediate result). 連続して行われる算術演算の結果を収める中間フィールド。

直接アクセス (* direct access). プロセスが、以前にアクセスされたデータへの参照ではなく、そのデータの位置にのみ依存する方法で、ストレージ・デバイスからデータを入手したり、ストレージ・デバイスにデータを入力したりする機能。

通貨記号 (currency symbol). 数字編集項目内の通貨記号値の部分を示すために、PICTURE 文節で使用される文字。通貨記号は、CURRENCY コンパイラー・オプションで定義するか、ENVIRONMENT DIVISION の SPECIAL-NAMES 段落内の CURRENCY SIGN 文節によって定義することができる。CURRENCY SIGN 文節が指定されない場合、NOCURRENCY コンパイラー・オプションが有効であれば、ドル記号 (\$) がデフォルトの通貨記号値および通貨記号として使用される。通貨記号と通貨符号値は複数定義可能。「通貨符号値 (currency sign value)」も参照。

通貨記号値 (currency-sign value). 数字編集項目に保管される通貨単位を識別する文字ストリング。典型的な例としては、\$, USD, EUR などがある。通貨記号値は、CURRENCY コンパイラー・オプションで定義するか、ENVIRONMENT DIVISION の SPECIAL-NAMES 段落内の CURRENCY SIGN 文節によって定義することができる。CURRENCY SIGN 文節が指定されない場合、NOCURRENCY コンパイラー・オプションが有効であれば、ドル記号 (\$) がデフォルトの通貨記号値として使用される。「通貨記号 (currency symbol)」も参照。

次の実行可能なステートメント (* next executable statement). 現在のステートメントの実行完了後に制御が移される次のステートメント。

次の実行可能な文 (* next executable sentence). 現在のステートメントの実行完了後に制御が移される次の文。

次のレコード (* next record). ファイルの現在のレコードに論理的に続くレコード。

データ記述記入項目 (* data description entry). COBOL プログラムの DATA DIVISION 内の記入項目であり、レベル番号の後に必要に応じてデータ名が続き、その後に必要に応じて一連のデータ文節で構成されるものの。

データ項目 (* data item). COBOL プログラムによってまたは関数演算の規則によって定義されるデータ単位 (リテラルを除く)。

データ文節 (* data clause). COBOL プログラムの DATA DIVISION のデータ記述記入項目に現れる文節で、データ項目の特定の属性を記述する情報を提供する。

データ名 (* data-name). データ記述記入項目で記述されたデータ項目に名前を割り当てるユーザー定義語。一般形式で使用された場合、データ名は、その形式の規則で特に許可されていない限り、参照変更、添え字付け、または修飾してはならないワードを表す。

テーブル (* table). DATA DIVISION の中で OCCURS 文節によって定義される、論理的に連続するデータ項目の集合。

テーブル・エレメント (* table element). テーブルを構成する反復項目の集合に属するデータ項目。

テキスト名 (* text-name). ライブラリー・テキストを識別するユーザー定義語。

テキスト・ワード (* text word). 以下のいずれかの文字から成る COBOL ライブラリー、ソース・プログラ

ム、または疑似テキスト内のマージン A およびマージン R の間の、1 文字または連続した文字のシーケンス。

- スペース以外の区切り記号、疑似テキスト区切り文字、非数値リテラルの開始と終了の区切り文字。ライブラリー、ソース・プログラム、または疑似テキスト内のコンテキストに関係なく、右括弧文字と左括弧文字は常にテキスト・ワードと見なされる。
- 非数値リテラルの場合には、リテラルを囲む左引用符と右引用符を含むリテラル。
- コメント行および区切り記号によって囲まれたワード COPY を除く、その他の連続する一連の COBOL 文字で、区切り記号でもリテラルでもないもの。

手続き部 (PROCEDURE DIVISION). COBOL の部の 1 つで、問題を解決するための命令を記述する。

デバッグ行 (* debugging line). 行の標識区域に文字 D がある行のこと。

デバッグ・セクション (* debugging section). USE FOR DEBUGGING ステートメントが含まれているセクション。

トークン (token). COBOL エディターでは、プログラムにおける意味の単位。トークンには、データ、言語キーワード、ID、またはその他の言語構文の一部を含めることができる。

トークン強調表示 (token highlighting). COBOL エディターでは、さまざまな色やフォントでプログラム言語のトークン・タイプを表示できる機能を指す。この機能を使用すると、プログラムの構造がより明確になる。トークン・タイプの外観をカスタマイズするには、「トークン属性 (Token Attributes)」ウィンドウを使用する。

動詞 (* verb). COBOL コンパイラーまたはオブジェクト・プログラムによってとられる処置を表すワード。

動的 CALL (dynamic CALL). DYNAM オプションを使用してコンパイルしたプログラム内の CALL *literal* ステートメント、またはプログラム内の CALL *identifier* ステートメント。

動的アクセス (* dynamic access). 1 つの OPEN ステートメントの実行範囲内において、特定の論理レコードを、大容量記憶ファイルからは順次アクセス以外の方法で取り出したりそのファイルに入れたりでき、またファイルからは順次アクセスの方法で取り出せるアクセス・モード。

特殊名記入項目 (* special names entry). ENVIRONMENT DIVISION の SPECIAL-NAMES 段落内の記入項目。この記入項目は、通貨記号を指定したり、小数点を選択したり、シンボリック文字を指定したり、インプリメントす

る人の名前をユーザー指定の簡略名と関連付けたり、英字名を文字セットまたは照合シーケンスと関連付けたり、クラス名を一連の文字と関連付けたりするための手段を提供する。

特殊文字 (* special character). 以下のセットに属する文字。

文字	意味
+	正符号
-	負符号 (-) (ハイフン)
*	アスタリスク
/	斜線 (スラッシュ)
=	等号
\$	通貨記号
,	コンマ (小数点)
;	セミコロン
.	ピリオド (小数点、終止符)
"	引用符
(左括弧
)	右括弧
>	より大記号
<	より小記号
:	コロン

特殊レジスター (* special registers). 特定のコンパイラー生成ストレージ域のことで、その基本的な使用法は、具体的な COBOL 機能を使用したときに作り出される情報を記憶することである。

独立項目 (* noncontiguous items). WORKING-STORAGE SECTION および LINKAGE SECTION 内の基本データ項目で、他のデータ項目と階層上の関係を持たないもの。

トップダウン開発 (top-down development). 「構造化プログラミング (structured programming)」を参照。

トップダウン設計 (top-down design). 関連付けられた諸機能が、構造の各レベルで実行されるようにする階層構造を使ったコンピューター・プログラムの設計。

トラブルシューティング (troubleshoot). コンピューター・ソフトウェアの使用中に問題を検出し、突き止め、除去すること。

トレーラー・ラベル (trailer-label). (1) 記録メディア・ユニットのデータ・レコードの後にある、ファイルまたはデータ・セットのラベル。(2) 「ファイル終わりラベル (end-of-file label)」の同義語。

【ナ行】

内部 10 進数データ項目 (internal decimal data item). USAGE PACKED-DECIMAL または USAGE COMP-3 として記述されており、項目を数値として定義する PICTURE 文字ストリング (記号 9、S、P、または V の有効な組み合わせ) を持っている、データ項目。「パック 10 進数データ項目 (packed-decimal data item)」と同義。

内部データ (* internal data). プログラムの中で記述されるデータで、すべての外部データ項目および外部ファイル結合子を除いたもの。プログラムの LINKAGE SECTION で記述された項目は、内部データとして扱われる。

内部データ項目 (* internal data item). 実行単位内の 1 つのプログラムの中で記述されるデータ項目。内部データ項目は、グローバル名を持つことができる。

内部ファイル結合子 (* internal file connector). 実行単位内にあるただ 1 つのオブジェクト・プログラムのみがアクセスできるファイル結合子。

内部浮動小数点データ項目 (internal floating-point data item). USAGE COMP-1 または USAGE COMP-2 として記述されているデータ項目。COMP-1 は、単精度浮動小数点データ項目を定義します。COMP-2 は、倍精度浮動小数点データ項目を定義します。内部浮動小数点データ項目に関連した PICTURE 文節はありません。

名前 (name). COBOL オペランドを定義する 30 文字を超えないで構成されたワード。

二分探索 (binary search). 二分探索では、探索の各ステップで、一連のデータ・エレメントの集合が 2 つに分割される。エレメントの数が奇数の場合には、何らかの適切なアクションが取られる。

入出力状況 (* I-O status). 入出力操作の結果としての状況を示す 2 文字の値を収める概念上のエンティティ。この値は、そのファイルについてのファイル制御記入項目で FILE STATUS 文節を使用することによって、プログラムに使用可能にされる。

入出力ステートメント (* input-output statement). 個々のレコードに対して操作を行うことにより、またはファイルを 1 つの単位として操作することにより、ファイルの処理を行うステートメント。入出力ステートメントには、ACCEPT (ID 句付き)、CLOSE、DELETE、DISPLAY、OPEN、READ、REWRITE、SET (TO ON または TO OFF 句付き)、START、および WRITE がある。

入出力ファイル (* input-output file). I-O モードでオープンされるファイル。

入出力モード (* I-O mode). ファイルに対する I-O 句の指定のある OPEN ステートメントが実行されてから、そのファイルに対する REEL または UNIT 句の指定のない CLOSE ステートメントが実行される前までの、ファイルの状態。

入力ファイル (* input file). 入力モードでオープンされるファイル。

入力プロシージャ (* input procedure). ソートすべき特定のレコードの解放を制御する目的で、SORT ステートメントの実行時に制御が渡されるステートメントの集合。

入力モード (* input mode). ファイルに対する INPUT 句の指定のある OPEN ステートメントが実行されてから、そのファイルに対する REEL または UNIT 句の指定のない CLOSE ステートメントが実行される前までの、ファイルの状態。

ヌル (null). 無効なアドレスの値をポインター・データ項目に割り当てるために使用される表意定数。NULL を使えるところならばどこでも、NULLS を使用できる。

ネイティブ・メソッド (native method). COBOL などの別のプログラム言語で記述されたインプリメンテーションを備える Java メソッド。

ネストされたプログラム (nested program). 他のプログラムの中に直接的に含まれているプログラム。

年フィールド拡張 (year field expansion). 2 桁の年の日付フィールドを、ファイルおよびデータベースの中で完全な 4 桁の年になるように明示的に拡張した後、そのフィールドをプログラムの中で拡張形式で使用する手法。これは、2 桁の年を使用していたアプリケーションに対して確実に信頼できる日付処理を行う唯一の方法である。

【ハ行】

バイト (byte). 特定の数のビット (通常 8 ビット) から成るストリングであり、1 つの単位として処理され、1 つの文字または制御機能を表す。

バイトコード (bytecode). Java コンパイラーによって生成され、Java インタープリターによって実行される、マシンから独立したコード。(Sun)

バイナリー項目 (binary item). 2 進表記 (基数 2 の数体系) で表される数値データ項目。等価の 10 進数は、10 進数字 0 から 9 に演算符号を加えたもので構成される。項目の左端ビットは演算符号。

配列 (array). データ・オブジェクトで構成される集合体。それぞれのオブジェクトは添え字付けによって一意的に参照できる。配列は、COBOL ではテーブルに類似する。

パック 10 進数データ項目 (packed-decimal data item). 「内部 10 進数データ項目 (internal decimal data item)」を参照。

パッケージ (package). 関連する Java クラスの集まり。個々に、または全体としてインポートすることができる。

バッファ (buffer). 入力データまたは出力データを一時的に保持するために使用されるストレージの一部分。

パラメーター (parameter). (1) 呼び出し側プログラムと呼び出し先プログラムの間で受け渡されるデータ。(2) メソッド呼び出しの USING 句内のデータ・エレメント。引数によって、呼び出されたメソッドが要求された操作を実行するために使用できる追加情報を与える。

範囲区切りステートメント (* delimited scope statement). 明示的範囲終了符号を含んでいるステートメント。

範囲終了符号 (scope terminator). PROCEDURE DIVISION の特定のステートメントの終わりを示す COBOL 予約語。これは明示的なもの (例えば、END-ADD など) であることもあれば、暗黙のもの (分離文字ピリオド) であることもある。

反復構造 (iteration structure). ある条件が真である間、あるいはある条件が真になるまで、一連のステートメントが繰り返して実行されるプログラムの処理ロジック。

汎用オブジェクト参照 (universal object reference). どのクラスのオブジェクトでも参照できるデータ名。

比較演算子 (* relational operator). 比較条件の構造で使用される、予約語、比較文字、連続する予約語のグループ、または連続する予約語と比較文字のグループ。使用できる演算子とそれらの意味は次のとおり。

文字	意味
IS GREATER THAN	より大きい
IS >	より大きい
IS NOT GREATER THAN	より大きくない (以下)
IS NOT >	より大きくない (以下)
IS LESS THAN	より小さい
IS <	より小さい
IS NOT LESS THAN	より小さくない (以上)
IS NOT <	より小さくない (以上)

文字	意味
IS EQUAL TO	に等しい
IS =	に等しい
IS NOT EQUAL TO	に等しくない
IS NOT =	に等しくない
IS GREATER THAN OR EQUAL TO	より大きいか等しい (以上)
IS >=	より大きいか等しい (以上)
IS LESS THAN OR EQUAL TO	より小さいか等しい (以下)
IS <=	より小さいか等しい (以下)

比較条件 (* relation condition). ある算術式、データ項目、非数字リテラル、または索引名の値が、他の算術式、データ項目、非数字リテラル、または索引名の値と特定の関係を持つかどうかという命題で、それに関して真理値が判別され得る。「比較演算子 (relational operator)」も参照。

比較文字 (* relation character). 以下のセットに属する文字。

文字	意味
>	より大きい
<	より小さい
=	に等しい

引数 (argument). (1) ID、リテラル、算術式、または関数 ID で、これにより関数の評価に使用する値を指定する。(2) CALL または INVOKE ステートメントの USING 句のオペランドであり、呼び出されたプログラムまたは起動されたメソッドに値を渡すのに使用されます。

ビッグ・エンディアン (big-endian). メインフレームおよび AIX ワークステーションが 2 進データおよび UTF-16 文字を保管する際に使用するデフォルトの形式。この形式では、2 進数データ項目の最下位バイトが最上位のアドレスになり、UTF-16 文字の最下位バイトが最上位のアドレスになる。「リトル・エンディアン (little-endian)」と対比。

日付形式 (date format). 次のいずれかの方法で指定される、日付フィールドの日付パターン。

- DATE FORMAT 文節または DATEVAL 組み込み関数 argument-2 によって明示的に。
- 日付フィールドを返すステートメントおよび組み込み関数によって暗黙的に指定される。詳細については、『日付フィールド』（「COBOL for Windows 言語解説書」）を参照してください。

日付フィールド (date field). 次のうちのいずれか。

- データ記述記入項目に DATE FORMAT 文節が含まれているデータ項目。
- 次の組み込み関数の 1 つで戻される値。

DATE-OF-INTEGER
DATE-TO-YYYYMMDD
DATEVAL
DAY-OF-INTEGER
DAY-TO-YYYYDDD
YEAR-TO-YYYY
YEARWINDOW

- ACCEPT ステートメントの概念上のデータ項目
DATE、DATE YYYYMMDD、DAY、および DAY
YYYYDDD。
- ある種の算術演算の結果。詳細については、『日付フィールドを使用する算術計算』（『COBOL for Windows 言語解説書』）を参照してください。

「日付フィールド (date field)」という用語は、「拡張日付フィールド (expanded date field)」と「ウィンドウ化日付フィールド (windowed date field)」の両方を指す。「非日付データ (nondate)」も参照。

非日付 (nondate). 次のうちのいずれか。

- 日付記述記入項目に DATE FORMAT 文節が含まれていないデータ項目
- リテラル
- UNDATE 関数を使用して変換された日付フィールド
- 参照変更された日付フィールド
- 日付フィールド・オペランドを含む特定の算術演算の結果。例えば、2 つの互換日付フィールドの差

表意定数 (* figurative constant). ある予約語を使用して参照されるコンパイラ生成の値。

表示浮動小数点データ項目 (display floating-point data item). 暗黙的または明示的に USAGE DISPLAY として記述されており、外部浮動小数点データ項目を記述する PICTURE 文字ストリングを持っている、データ項目。

標準 COBOL 85 (Standard COBOL 85). 以下の標準によって定義された COBOL 言語。

- ANSI INCITS 23-1985, *Programming languages - COBOL* は amended by ANSI INCITS 23a-1989, *Programming Languages - COBOL - Intrinsic Function Module for COBOL* によって改訂されました。
- ISO 1989:1985, *Programming languages - COBOL* は ISO/IEC 1989/AMD1:1992, *Programming languages - COBOL: Intrinsic function module* によって改訂されました。

部 (* division). 部の本体と呼ばれる、0 個、1 個、または複数のセクションまたは段落の集合であり、特定の規則に従って形成および結合されたもの。それぞれの部は、部のヘッダーおよび関連した部の本体で構成される。COBOL プログラムには、見出し部、環境部、データ部、および手続き部の 4 つの部がある。

ファイル (* file). 論理レコードの集合。

ファイル位置標識 (*file position indicator). 概念的エンティティであり、索引付きファイルの場合は参照キー内の現行キーの値、順次ファイルの場合は現行レコードのレコード番号、相対ファイルの場合は現行レコードの相対レコード番号が入っている。あるいは、次の論理レコードが存在しないことを示すか、オプションの入力ファイルが存在しないことを示すか、AT END 条件がすでに存在していることを示すか、もしくは有効な次のレコードが設定されていないことを示す。

ファイル記述記入項目 (* file description entry). DATA DIVISION の FILE SECTION の中にある記入項目。レベル標識 FD と、それに続くファイル名、および、必要に応じて、次に続く一連のファイル文節から構成される。

ファイル結合子 (* file connector). ファイルに関する情報が入っており、ファイル名と物理ファイルの間のリンケージとして、さらにファイル名とその関連レコード域の間のリンケージとして使用されるストレージ域。

ファイル制御記入項目 (* file control entry). SELECT 文節と、ファイルの関連物理属性を宣言するすべての従属文節。

ファイル属性対立条件 (* file attribute conflict condition). ファイルに入出力操作の実行を試みて失敗した場合に、プログラムの中でそのファイルに対して指定されたファイル属性が、そのファイルの固定属性と一致しないこと。

ファイル文節 (* file clause). DATA DIVISION の記入項目であるファイル記述項目 (FD 記入項目) およびソート・マージ・ファイル記述項目 (SD 記入項目) のいずれかの一部として現れる文節。

ファイル編成 (* file organization). ファイルの作成時に確立される永続論理ファイル構造。

ファイル名 (* file-name). DATA DIVISION の FILE SECTION の中のファイル記述項目またはソート・マージ・ファイル記述項目で記述されるファイル結合子に名前を付けるユーザー定義語。

ファイル・システム (file system). データ・レコードおよびファイル記述プロトコルの特定のセットに準拠するファイルの集合、およびこれらのファイルを管理する一連のプログラム。

ファクトリー・データ (factory data). いったんクラスに割り振られ、クラスのすべてのインスタンスに共用されるデータ。ファクトリー・データは、クラス定義の FACTORY 段落の DATA DIVISION の WORKING-STORAGE SECTION 内に宣言される。Java private 静的データと同義。

ファクトリー・メソッド (factory method). オブジェクト・インスタンスとは無関係に、クラスによってサポートされるメソッド。ファクトリー・メソッドは、クラス定義の FACTORY 段落に宣言される。Java public 静的メソッドと同義。これらは通常オブジェクトの作成をカスタマイズすることに使用される。

フォーマット (* format). 一連のデータの特定の配置。

複合 ODO (complex ODO). 次のような OCCURS DEPENDING ON 文節の特定の形式。

- 可変位置項目またはグループ: DEPENDING ON オプションを指定した OCCURS 文節によって記述されたデータ項目の後に、非従属データ項目またはグループが続く。グループは英数字グループでも国別グループでも構いません。
- 可変位置テーブル: DEPENDING ON オプションを指定した OCCURS 文節によって記述されたデータ項目の後に、OCCURS 文節によって記述された非従属データ項目が続く。
- 可変長エレメントを持つテーブル: OCCURS 文節によって記述されたデータ項目に、DEPENDING ON オプションを指定した OCCURS 文節によって記述された従属データ項目が含まれている。
- 可変長エレメントを持つテーブルの指標名。
- 可変長エレメントを持つテーブルのエレメント。

複合条件 (* combined condition). 2 つ以上の条件を AND または OR 論理演算子で結合した結果生じる条件。

「条件 (condition)」および「複合否定条件 (negated combined condition)」も参照。

複合条件 (* complex condition). 1 つ以上の論理演算子が 1 つ以上の条件に基づいて作動する条件。「条件 (condition)」、「単純否定条件 (negated simple condition)」、および「複合否定条件 (negated combined condition)」も参照。

複合否定条件 (* negated combined condition). 論理演算子 NOT とその直後に括弧で囲んだ複合条件を続けたもの。「条件 (condition)」と「複合条件 (combined condition)」も参照。

含まれているプログラム (contained program). 別の COBOL プログラム内にネストされる COBOL プログラム。

符号条件 (* sign condition). データ項目や算術式の代数值が、0 より小さいか、大きいか、または等しいかという命題で、それに関して真理値が判別できる。

物理レコード (* physical record). 「ブロック (block)」を参照。

浮動小数点 (floating point). 実数を 1 対の数表示で表す、数を表記するための形式。浮動小数点表記では、固定小数点部分 (最初の数表示) と、暗黙浮動小数点の底を指数で表される数だけ累乗して得られる値 (2 番目の数表示) との積が、実数になります。例えば、数値 0.0001234 の浮動小数点表記は 0.1234 -3 です (ここで、0.1234 は小数部であり、-3 は指数です)。

浮動小数点データ項目 (floating-point data item). 小数部と指数が入っている数値データ項目。その値は、小数部に、指数で指定されただけ累乗された数字データ項目の底を乗算することによって得られる。

部の見出し (* division header). ワードとその後に続く、部の先頭を示す分離文字ピリオドの組み合わせ。部のヘッダーは次のとおり。

IDENTIFICATION DIVISION.
ENVIRONMENT DIVISION.
DATA DIVISION.
PROCEDURE DIVISION.

古くなったエレメント (* obsolete element). 標準 COBOL 85 の COBOL 言語エレメントのうち、標準 COBOL 2002 から削除されたもの。

プログラム (program). (1) コンピューターで処理するのに適した一連の命令。処理には、コンパイラーを使用してプログラムの実行準備をすることやランタイム環境を使用してプログラムを実行することが含まれます。(2) 1 つまたは複数の相互に関係のあるモジュールの論理アセンブリー。同じプログラムの複数のコピーを異なるプロセスで実行することができる。

プログラム識別記入項目 (* program identification entry). IDENTIFICATION DIVISION の PROGRAM-ID 段落内の記入項目であり、プログラム名を指定し、選択されたプログラム属性をプログラムに割り当てる文節が入っている。

プログラム終了マーカー (* end program marker). 語の組み合わせに分離文字ピリオドが続いたもので、COBOL ソース・プログラムの終わりを示す。プログラム終了マーカーは、次のように記述する。

END PROGRAM *program-name* .

プログラム名 (* program-name). IDENTIFICATION DIVISION およびプログラム終了マーカーにおいて、COBOL ソース・プログラムを識別するユーザー定義語または英数字リテラル。

プロシージャ (* procedure). PROCEDURE DIVISION 内にある 1 つの段落または論理的に連続する段落のグループ、あるいは 1 つのセクションまたは論理的に連続するセクションのグループ。

プロシージャ統合 (procedure integration). COBOL 最適化プログラムの機能の 1 つであり、実行されるプロシージャまたは含まれているプログラムへの呼び出しを単純化する。

PERFORM プロシージャ統合とは、PERFORM ステートメントが、実行されるプロシージャによって置き換えられるプロセスのこと。含まれているプログラムのプロシージャ統合とは、含まれているプログラムへの呼び出しがプログラム・コードによって置き換えられるプロセスのこと。

プロシージャ名 (* procedure-name). PROCEDURE DIVISION 内にある段落またはセクションに名前を付けるために使用されるユーザー定義語。プロシージャ名は、段落名 (これは修飾することができる) またはセクション名から構成される。

プロシージャ・ブランチ・ステートメント (* procedure branching statement). ソース・コードの中にステートメントが書かれている順番どおりに次の実行可能ステートメントに制御の移動をせず、別のステートメントに明示的に制御の移動を引き起こすステートメント。プロシージャ分岐ステートメントは次のとおり。
ALTER、CALL、EXIT、EXIT PROGRAM、GO TO、MERGE (OUTPUT PROCEDURE 句付き)、PERFORM および SORT (INPUT PROCEDURE または OUTPUT PROCEDURE 句付き)、XML PARSE。

プロシージャ・ポインター・データ項目 (procedure-pointer data item). 入り口点を指すポインターを保管できるデータ項目。USAGE IS PROCEDURE-POINTER 文節で定義されるデータ項目には、プロシージャ入り口点のアドレスが入っている。一般的に、COBOL プログラムと通信するために使用される。

プロジェクト (project). ダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL) や他の実行可能ファイル (EXE) などのターゲットを作成するのに必要な、データおよびアクションの完全セット。

プロセス (process). プログラムの全部または一部の実行中に発生する一連のイベント。複数のプロセスを並行して実行することができ、1 つのプロセス内で実行されるプログラムはリソースを共用することができる。

ブロック (* block). 通常は 1 つ以上の論理レコードで構成される物理的データ単位。大容量記憶ファイルの場合、ある論理レコードの一部がブロックに入ることがある。ブロックのサイズは、そのブロックが含まれているファイルのサイズと直接関係はなく、そのブロックに含まれているか、そのブロックにオーバーラップしている論理レコードのサイズとも直接関係はない。「物理レコード (physical record)」と同義。

文 (* sentence). 1 つ以上のステートメントの並びで、その最後のものは、分離文字ピリオドで終了する。

文書タイプ定義 (document type definition (DTD)). XML 文書のクラスの文法。「XML 型定義 (XML type definition)」を参照。

文節 (* clause). 記入項目の属性を指定するという目的で順番に並べられた連続する COBOL 文字ストリング。

分離文字 (* separator). 文字ストリングを区切るために使用される、1 文字または連続する 2 文字。

分離文字コンマ (* separator comma). 文字ストリングを区切るために使われる、後ろに 1 つのスペースが続く 1 つのコンマ (,)。

分離文字セミコロン (* separator semicolon). 文字ストリングを区切るために使われる、後ろに 1 つのスペースが続く 1 つのセミコロン (;)。

分離文字ピリオド (* separator period). ピリオド (.) 文字ストリングを区切るために使用されるもの。

ページ (page). データの物理的分離を表す、出力データの垂直分割。分離は、内部論理要件または出力メディアの外部特性、あるいはその両方に基づいて行われる。

ページ本体 (* page body). 行を記述できる、または行送りすることができる (またはその両方ができる) 論理ページの部分。

米国規格協会 (American National Standards Institute: ANSI). 米国で認定された組織が自発的工業規格を作成して維持する手順を設定する組織であり、製造業者、消費者、および一般の利害関係者で構成される。

別個にコンパイルされたプログラム (* **separately compiled program**). あるプログラムが、その中に含まれているプログラムと一緒に、それ以外のすべてのプログラムとは別個にコンパイルされること。

ヘッダー・ラベル (**header label**). (1) 記録メディア・ユニットのデータ・レコードの前にあるファイル・ラベルまたはデータ・セット・ラベル。(2) 「ファイル開始ラベル (*beginning-of-file label*)」の同義語。

編集解除 (* **de-edit**). 項目の編集解除された数値を判別するために、数字編集データ項目からすべての編集文字を論理的に除去すること。

編集済みデータ項目 (**edited data item**). 0 の抑止または編集文字の挿入、あるいはその両方を行うことによって変更されたデータ項目。

編集用文字 (* **editing character**). 次に示す集合に属する 1 文字、または 2 文字で構成される固定した組み合わせ。

文字	意味
	スペース
0	ゼロ
+	正符号
-	負符号
CR	貸方
DB	借方
Z	ゼロの抑止
*	チェック・プロテクト
\$	通貨記号
,	コンマ (小数点)
.	ピリオド (小数点)
/	斜線 (スラッシュ)

変数 (* **variable**). オブジェクト・プログラムの実行によって変更を受ける可能性のある値を持つデータ項目。算術式で使われる変数は、数字基本項目でなければならない。

ポート、移植する (**port**). (1) 異なるプラットフォームで実行できるようにコンピューター・プログラムを変更すること。(2) インターネット・プロトコルでは、Transmission Control Protocol (TCP) プロトコルまたは User Datagram Protocol (UDP) プロトコルと高水準のプロトコルまたはアプリケーションの間の特定の論理結合子。ポートはポート番号によって識別される。

ポインター・データ項目 (**pointer data item**). アドレス値を保管できるデータ項目。これらのデータ項目は、USAGE IS POINTER 文節を使用してポインターとして明示的に定義される。ADDRESS OF 特殊レジスターは、ポインター・データ項目として暗黙的に定義されている。ポインター・データ項目は、他のポインター・データ項目と等価かどうか比較したり、他のポインター・データ項目に内容を移動したりできる。

ボリューム (**volume**). 外部ストレージのモジュール。テープ装置の場合はリール、直接アクセス装置の場合はユニット。

[マ行]

マージ・ファイル (* **merge file**). MERGE ステートメントによってマージされるレコードの集まり。マージ・ファイルは、マージ機能により作成され、マージ機能によってのみ使用できる。

マルチスレッド化 (**multithreading**). コンピューター内で複数のパスを使用して実行を行う並行操作。「マルチプロセッシング (*multiprocessing*)」と同義。

マルチタスキング (**multitasking**). 2 つ以上のタスクの並行実行またはインターリーブ実行を可能にする操作モード。

マルチバイト文字セット (**multibytecharacter set (MBCS)**). さまざまなバイト数で表現される文字を構成するコード化文字セット。例: EUC (Extended Unix Code)、UTF-8、EBCDIC または ASCII で 1 バイト文字および 2 バイト文字が混在して構成される文字セット。

無効キー条件 (* **invalid key condition**). 索引付きファイルまたは相対ファイルに関連するキーの特定値が無効であると判別された場合に生じる、実行時の条件。

明示的範囲終了符号 (* **explicit scope terminator**). 特定の PROCEDURE DIVISION ステートメントの有効範囲を終わらせる予約語。

命令ステートメント (* **imperative statement**). 命令の動詞で開始して、行うべき無条件の処置を指定するステートメント。または明示範囲終了符号によって区切られた条件ステートメント (範囲区切りステートメント)。1 つの命令ステートメントは、一連の命令ステートメントから構成することができる。

メインプログラム (**main program**). プログラムとサブルーチンからなる階層において、プロセス内でプログラムが実行されたときに最初に制御を受け取るプログラム。

メガバイト、MB (* megabyte (MB)). 1 メガバイトは 1,048,576 バイトに相当する。

メソッド (method). オブジェクトによってサポートされる操作の 1 つを定義し、そのオブジェクトに対する INVOKE ステートメントによって実行されるプロシージャ・コード。

メソッド定義 (* method definition). メソッドを定義する COBOL ソース・コード。

メソッドの起動 (method invocation). あるオブジェクトから別のオブジェクトへの通信で、受信オブジェクトにメソッドを実行するように要求するもの。

メソッド見出し記入項目 (* method identification entry). IDENTIFICATION DIVISION の METHOD-ID 段落内の記入項目。この記入項目には、メソッド名を指定する文節が入っている。

メソッド名 (method-name). オブジェクト指向操作の名前。メソッドを起動するのに使用する場合、名前は、英数字リテラル、国別リテラル、カテゴリ英数字データ項目、またはカテゴリ国別データ項目にすることができます。メソッドを定義する METHOD-ID 段落で使用する場合、名前は英数字リテラルまたは国別リテラルにする必要があります。

文字 (* character). 言語のそれ以上分割できない基本単位。

文字 (* letter). 以下の 2 つのセットのいずれかに属する文字。

1. 英大文字:
A、B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、X、Y、Z
2. 英小文字: a、b、c、d、e、f、g、h、i、j、k、l、m、n、o、p、q、r、s、t、u、v、w、x、y、z

文字位置 (character position). 1 文字を保持または表示するために必要な物理ストレージまたは表示スペースの量。この用語はどのような文字のクラスにも適用される。文字の特定のクラスについては、以下の用語が適用される。

- 英数字文字位置。USAGE DISPLAY を使用して表される DBCS 文字。
- DBCS 文字位置。USAGE DISPLAY-1 を使用して表される DBCS 文字。
- 国別文字位置。USAGE NATIONAL を使用して表される文字。UTF-16 の文字エンコード・ユニット と同義。

文字エンコード・ユニット (character encoding unit). コード化文字セット内の 1 つのコード・ポイントに相当するデータの単位。1 つ以上の文字エンコード・ユニットを使用して、コード化文字セットの文字が表現される。エンコード・ユニット と呼ばれる。

USAGE NATIONAL の場合、文字エンコード・ユニットは、UTF-16 の 2 バイト・コード・ポイントに対応している。

USAGE DISPLAY の場合、文字エンコード・ユニットは、1 つのバイトに対応している。

USAGE DISPLAY-1 の場合、文字エンコード・ユニットは、DBCS 文字セットの 2 バイト・コード・ポイントに対応している。

文字ストリング (character string). COBOL 語、リテラル、PICTURE 文字ストリング、またはコメント記入項目を形成する一連の連続した文字。文字ストリングは区切り文字で区切らなければならない。

文字セット (character set). テキスト情報を表すために使用されるエレメントの集合。ただし、コード化表現は想定されていない。「コード化文字セット (coded character set)」も参照。

モジュール定義ファイル (module definition file). ロード・モジュール内のコード・セグメントを記述するファイル。

[ヤ行]

ユーザー定義語 (* user-defined word). 文節やステートメントの形式を満たすためにユーザーが提供する必要のある COBOL ワード。

優先順位番号 (* priority-number). セグメンテーションの目的で、PROCEDURE DIVISION 内のセクションを分類するユーザー定義語。セグメント番号には 0 から 9 までの文字だけしか使用できない。セグメント番号は 1 桁または 2 桁として表すことができる。

ユニット (unit). 直接アクセスのモジュール。その大きさは IBM によって規定されている。

呼び出し可能サービス (callable services). 言語環境プログラムでは、従来の言語環境プログラム定義の呼び出しインターフェースを使用して COBOL プログラムが呼び出すことができる一連のサービス。言語環境プログラムの規則を共用するプログラムはすべて、これらのサービスを使用できる。

呼び出し側プログラム (* calling program). 別のプログラムへの CALL を実行するプログラム。

呼び出し先プログラム (called program). CALL ステートメントの対象となるプログラム。呼び出し先プログラムと呼び出し側プログラムが実行時に結合されて、1 つの実行単位が作成される。

予約語 (* reserved word). COBOL ソース・プログラムの中で使用することができるが、ユーザー定義語またはシステム名としてプログラムの中で使用されてはならないワードのリスト中に挙げられている COBOL ワード。

【ラ行】

ライブラリー名 (* library-name). COBOL ライブラリーの名前を表すユーザー定義語。与えられたソース・プログラムをコンパイルするためにコンパイラーが使用するライブラリーを識別する。

ライブラリー・テキスト (* library text). COBOL ライブラリー内の一連のテキスト・ワード、コメント行、区切りスペース、または区切りの疑似テキスト区切り文字。

ラッパー (wrapper). オブジェクト指向コードとプロシージャ指向コード間のインターフェースを提供するオブジェクト。ラッパーを使用すると、他のシステムがプログラムを再利用したりアクセスしたりできるようになる。

ランタイム環境 (runtime environment). COBOL プログラムが実行される環境。

ランダム・アクセス (* random access). キー・データ項目のプログラム指定値を使用して、相対ファイルまたは索引付きファイルから取り出したり、削除したり、またはそこに入れたりする論理レコードを識別するアクセス・モード。

リール (reel). ストレージ・メディアの個別部分。その大きさはインプリメントする人によって決定され、1 つのファイルの一部、1 つのファイルの全部、または任意の個数のファイルが収容される。「ユニット (unit)」および「ボリューム (volume)」と同義。

リソース (* resource). オペレーティング・システムの制御下に置かれており、実行中のプログラムによって使用できる機能またはサービス。

リテラル (literal). スtringを構成するために配列された文字によって、または表意定数を使用することによって、その値が決められる文字String。

リトル・エンディアン (little-endian). Intel プロセッサが 2 進データおよび UTF-16 文字を保管する際に使

用するデフォルトの形式。この形式では、2 進数データ項目の最上位バイトが最上位のアドレスになり、UTF-16 文字の最上位バイトが最上位のアドレスになる。「ビッグ・エンディアン (big-endian)」と対比。

リリアン日 (Lilian date). グレゴリオ暦の開始以降の日数。第 1 日は 1582 年 10 月 15 日、金曜日。リリアン日フォーマットは、グレゴリオ暦の考案者であるルイジ・リリオにちなんだ名称。

リンク (link). (1) リンク接続 (伝送メディア) と、それぞれがリンク接続の終端にある 2 つのリンク・ステーションの組み合わせ。1 つのリンクは、マルチポイントまたはトークンリング構成において、複数のリンク間で共用できる。(2) データ項目あるいは 1 つまたは複数のコンピューター・プログラムの部分を相互接続すること。例えば、リンケージ・エディターによってオブジェクト・プログラムをリンクして実行可能ファイルを作成すること。

リング (ring). COBOL エディターでは、編集のためにファイル相互間で簡単に移動できるようにしたファイルの集合。

ルーチン (routine). コンピューターに操作または一連の関連操作を実行させる、COBOL プログラム内の一連のステートメント。

ルーチン名 (* routine-name). COBOL 以外の言語で記述されたプロシージャを識別するユーザー定義語。

レコード (* record). 「論理レコード (logical record)」を参照。

レコード域 (* record area). DATA DIVISION の FILE SECTION 内のレコード記述項目で記述されるレコードを処理する目的で割り振られるストレージ域。FILE SECTION では、レコード域の現行の文字位置の数は、明示または暗黙の RECORD 文節によって決められる。

レコード記述 (* record description). 「レコード記述項目 (record description entry)」を参照。

レコード記述項目 (* record description entry). 特定のレコードに関連したデータ記述記入項目全体。「レコード記述 (record description)」と同義。

レコード内データ構造 (* intrarecord data structure). 連続したデータ記述記入項目のサブセットによって定義される、1 つの論理レコードから得られるグループ・データ項目および基本データ項目の集合全体。これらのデータ記述記入項目には、レコード内データ構造を記述している最初のデータ記述記入項目のレベル番号より大きいレベル番号を持つすべての記入項目が含まれる。

レコード番号 (* record number). 編成が順次であるファイル内のレコードの順序数。

レコード名 (* record-name). COBOL プログラムの DATA DIVISION 内のレコード記述項目で記述されるレコードに名前を付けるユーザー定義語。

レコード・キー (record key). 索引付きファイル内のレコードを識別する内容を持つキー。

列 (* column). 印刷行または参照形式行におけるバイト位置。列は、行の左端の位置から始めて行の右端の位置まで、1 から 1 ずつ増やして番号が付けられる。列は 1 つの 1 バイト文字を保持する。

レベル番号 (* level-number). 階層構造におけるデータ項目の位置を示すか、またはデータ記述記入項目の特性を示す、2 桁の数字で表されたユーザー定義語。1 から 49 のレベル番号は、論理レコードの階層構造におけるデータ項目の位置を示す。1 から 9 のレベル番号は、1 桁の数字として書くことも、0 の後に有効数字を付けて書くこともできる。レベル番号 66、77、および 88 は、データ記述記入項目の特性を識別する。

レベル標識 (* level indicator). 特定のタイプのファイルを識別するか、または階層での位置を識別する 2 つの英字。DATA DIVISION 内のレベル標識には、CD、FD、および SD がある。

連続項目 (* contiguous items). DATA DIVISION 内の連続する記入項目によって記述され、相互に一定の階層関係を持っている項目。

ロケール (locale). プログラム実行環境の一連の属性であり、文化的に重要な考慮事項を示す。例えば、文字コード・ページ、照合シーケンス、日時形式、通貨表記、数値表記、または言語など。

論理演算子 (* logical operator). 予約語 AND、OR、または NOT のいずれか。条件の形成において、AND または OR、あるいはその両方を論理連結語として使用できる。NOT は論理否定に使用できる。

論理レコード (* logical record). 最も包括的なデータ項目。レコードのレベル番号は 01。レコードは、基本項目またはグループ項目のどちらでもよい。「レコード (record)」と同義。

[ワ行]

ワークステーション (workstation). エンド・ユーザーが使用するコンピューターの総称 (パーソナル・コンピューター、3270 端末、インテリジェント・ワークステ

ーション、および UNIX 端末を含む)。ワークステーションはメインフレームまたはネットワークに接続されることがよくある。

ワード (* word). ユーザー定義語、システム名、予約語、または関数名を形成する、30 文字を超えない文字ストリング。

割り当て名 (assignment-name). COBOL ファイルの編成を識別する名前で、システムがこれを認識する際に使用する。

[数字]

1 バイト文字セット (single-byte character set (SBCS)). 各文字が 1 バイトで表現される文字のセット。「ASCII」および「EBCDIC (拡張 2 進化 10 進コード) (EBCDIC (Extended Binary-Coded Decimal Interchange Code))」も参照。

2 バイト文字セット (double-byte character set (DBCS)). それぞれの文字が 2 バイトで表現される 1 組の文字。256 個のコード・ポイントで表現される記号より多くの記号を含んでいる言語 (日本語、中国語、および韓国語など) は、2 バイト文字セットを必要とする。各文字に 2 バイトが必要なため、DBCS 文字の入力、表示、および印刷には、DBCS を受け入れ可能なハードウェアおよびサポートされるソフトウェアが必要。

77 レベル記述記入項目 (* 77-level-description-entry). レベル番号 77 を持つ不連続データ項目を記述するデータ記述記入項目。

A

ASCII. 情報交換用米国標準コード。7 ビットのコード化文字をベースとする 1 つのコード化文字セット (パリティ・チェックを含む 8 ビット) を使用する標準コードであり、データ処理システム、データ通信システム、および関連装置の間での情報交換に使用される。ASCII セットは、制御文字と図形文字から構成されている。

IBM は、ASCII に対する拡張 (文字 128 から 255) を定義している。

AT END 条件 (* AT END condition). 次のような特定の条件のもとで、READ、RETURN、または SEARCH ステートメントを実行した場合に引き起こされる条件。

- 順次アクセス・ファイルに対して READ ステートメントを実行中に、そのファイル内に次の論理レコードが存在しない場合、または相対レコード番号中の有効数

字の桁数が相対キー・データ項目のサイズより大きい場合、またはオプションの入力ファイルが存在しない場合。

- RETURN ステートメントの実行中に、関連するソー
ト・ファイルまたはマージ・ファイルについての次の
論理レコードが存在しない場合。
- SEARCH ステートメントの実行中に、関連する WHEN
句のいずれかで指定された条件を満足することなく、
検索操作が終了した場合。

B

Btrieve ファイル・システム (Btrieve file system). アプリケーションに、キー値、順次アクセス方式、またはランダム・アクセス方式によってレコードを管理させる、キー索引付きレコード管理システム。Btrieve は、Pervasive Software から提供されている別売の製品である Pervasive.SQL ファイル・システムを表す IBM の名前です。IBM COBOL for Windows では、Btrieve ファイル・システムによって COBOL 順次ファイルまたは索引付きファイルの入出力言語がサポートされる。

byte order mark (BOM). UTF-16 または UTF-32 テキストの先頭に使用して、後続テキストのバイト・オーダーを示す Unicode 文字。バイト・オーダーには、「ビッグ・エンディアン (big-endian)」または「リトル・エンディアン (little-endian)」がある。

C

CCSID. 「コード化文字セット ID (Coded Character Set Identifier)」を参照。

COBOL 文字セット (* COBOL character set). COBOL 構文を作成する際に使用される文字セット。完全な COBOL 文字セットは、以下にリストする文字で構成される。

文字	意味
0,1, . . . ,9	数字
A,B, . . . ,Z	英大文字
a,b, . . . ,z	英小文字
	スペース
+	正符号
-	負符号 (-) (ハイフン)
*	アスタリスク
/	斜線 (スラッシュ)
=	等号
\$	通貨記号
,	コンマ (小数点)
;	セミコロン
.	ピリオド (小数点、終止符)
”	引用符

文字	意味
(左括弧
)	右括弧
>	より大記号
<	より小記号
:	コロンの

COBOL ワード (* COBOL word). 「ワード (word)」を参照。

CONFIGURATION SECTION (* CONFIGURATION SECTION). ENVIRONMENT DIVISION のセクションであり、ソース・プログラムとオブジェクト・プログラムの全体的な仕様およびクラス定義を記述する。

CONSOLE. オペレーター・コンソールと関連する COBOL 環境名。

D

DATA DIVISION. COBOL プログラムまたはメソッドの 1 つの部。使用するファイルおよびファイルに含まれるレコード、必要となる内部作業用ストレージ・レコード、COBOL 実行単位内の複数のプログラムで使用可能なデータを記述する。

DBCS. 「2 バイト文字セット (double-byte character set (DBCS))」を参照。

DBCS データ項目 (DBCS data item). 少なくとも 1 つの記号 G または少なくとも 1 つの記号 N (NSYMBOL (DBCS) コンパイラー・オプションが有効なとき) を含んでいる PICTURE 文字ストリングで記述されたデータ項目。DBCS データ項目は USAGE DISPLAY-1 を持っています。

DBCS 文字 (DBCS character). IBM の 2 バイト文字セットで定義された任意の文字。

DBCS 文字位置 (DBCS character position). 「文字位置 (character position)」を参照。

DLL. 「ダイナミック・リンク・ライブラリー (dynamic link library (DLL))」を参照。

DLL アプリケーション (DLL application). インポートしたプログラム、関数、または変数を参照するアプリケーション。

DLL リンケージ (DLL linkage). DLL および NODYNAM オプションを使用してコンパイルされたプログラム内の CALL。CALL は、別個のモジュール内のエクスポートされた名前に解決されるか、または、別個のモジュールに定義されたメソッドの INVOKE に解決される。

Do 構造 (do construct). 構造化プログラミングでは、DO ステートメントを使えば、プロシーチャー内の複数のステートメントをグループ化できる。COBOL では、インライン PERFORM ステートメントが同様に機能する。

do-until. 構造化プログラミングにおいて、do-until ループは、少なくとも 1 回は実行され、所定の条件が真になるまで実行される。COBOL では、TEST AFTER 句を PERFORM ステートメントで使用すれば、同様に機能する。

do-while. 構造化プログラミングにおいて、do-while ループは、所定の条件が真である場合、および真である間に実行される。COBOL では、TEST BEFORE 句を PERFORM ステートメントで使用すれば、同様に機能する。

E

EBCDIC (拡張 2 進化 10 進コード) (* EBCDIC (Extended Binary-Coded Decimal Interchange Code)). 8 ビット・コード化文字をベースとするコード化文字セット。

EBCDIC 文字 (EBCDIC character). EBCDIC (拡張 2 進化 10 進コード) セットに含まれているいずれかの記号。

ENVIRONMENT DIVISION. COBOL プログラム、クラス定義、またはメソッド定義の 4 つの主コンポーネントの 1 つ。ENVIRONMENT DIVISION では、ソース・プログラムがコンパイルされるコンピューターと、オブジェクト・プログラムが実行されるコンピューターを記述する。この部では、ファイルの論理概念とそのレコードの間のリンケージ、およびファイルが保管される装置の物理的局面を提供する。

EXE. 「実行可能ファイル (EXE)」を参照。

Extensible Markup Language. 「XML」を参照。

F

FILE SECTION (* FILE SECTION). DATA DIVISION のセクションであり、ファイル記述項目、ソート・マージ・ファイル記述項目、および関連するレコード記述が入っている。

FILE-CONTROL 段落 (FILE-CONTROL paragraph). ENVIRONMENT DIVISION 内の段落であり、この中では、特定のソース単位で使用されるデータ・ファイルが宣言される。

I

IBM COBOL 拡張部分 (IBM COBOL extension). COBOL 85 標準で記述されるもの以外で、IBM コンパイラーでサポートされる COBOL 構文とセマンティクス。

ICU. 「*International Components for Unicode (ICU)*」を参照。

ID (* identifier). データ項目に名前を付けるための文字ストリングと区切り文字の構文的に正しい組み合わせ。関数ではないデータ項目を参照するときは、ID は、データ名と、修飾子、添え字、または参照変更子 (一意的に参照するために必要な場合) から構成される。関数であるデータ項目を参照する際には、関数 ID が使われる。

IDENTIFICATION DIVISION. COBOL プログラム、クラス定義、またはメソッド定義の 4 つの主コンポーネントの 1 つ。IDENTIFICATION DIVISION では、プログラム名、クラス名、またはメソッド名を識別する。IDENTIFICATION DIVISION には、作成者名、インストール、または日付を含めることができる。

IGZCBSO. COBOL for Windows のブートストラップ・ルーチン。このルーチンは、COBOL for Windows プログラムが含まれているモジュールとリンク・エディットしなければならない。

INPUT-OUTPUT SECTION (* INPUT-OUTPUT SECTION). ENVIRONMENT DIVISION のセクションであり、オブジェクト・プログラムまたはメソッドに必要なファイルおよび外部メディアに名前を付け、実行時にデータの伝送および処理に必要な情報を提供する。

International Components for Unicode (ICU). IBM が協賛、支援、および利用するオープン・ソースの開発プロジェクト。ICU ライブラリーは、Windows を含む幅広いプラットフォームに対応する、堅固で充実した機能を持つ Unicode サービスを提供している。

is-a. 継承階層におけるクラスおよびサブクラスの特徴を表す関係。あるクラスに対して is-a 関係を持つサブクラスは、そのクラスから継承する。

I-O-CONTROL 記入項目 (* I-O-CONTROL entry). ENVIRONMENT DIVISION の I-O-CONTROL 段落内の記入項目であり、プログラム実行中に指定のファイルへのデータの伝送と処理を行うために必要な情報を提供する文節が入っている。

I-O-CONTROL (* I-O-CONTROL). ENVIRONMENT DIVISION 段落の名前。この段落では、再実行開始点に

ついでオブジェクト・プログラム要件、複数データ・ファイルによる同じ区域の共用、および単一入出力装置上の複数のファイル・ストレージが指定される。

J

J2EE. 「*Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE)*」を参照。

Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE). Sun Microsystems, Inc. が定義する、エンタープライズ・アプリケーションの開発とデプロイメントのための環境。J2EE プラットフォームは、マルチスレッドの Web ベース・アプリケーションを開発するための機能を提供する、一群のサービス、アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)、およびプロトコルで構成される。(Sun)

Java Native Interface (JNI). Java 仮想マシン (JVM) 内で実行される Java コードが、他のプログラム言語で記述されたアプリケーションおよびライブラリーと連携できるようにするプログラミング・インターフェース。

Java 仮想マシン (Java virtual machine (JVM)). コンパイル済みの Java プログラムを実行する中央演算処理装置のソフトウェア・インプリメンテーション。

JVM. 「*Java 仮想マシン (Java virtual machine (JVM))*」を参照。

K

K. 記憶容量に関連して使われるときは、2 の 10 乗。10 進表記では 1024。

L

LINAGE-COUNTER (* lineage-counter). ページ本体内の現在位置を指す値を収めた特殊レジスター。

LINKAGE SECTION. 呼び出し先のプログラムまたはメソッドの DATA DIVISION 内のセクションであり、呼び出し側プログラムまたはメソッドから使用可能なデータ項目が記述される。これらのデータ項目は、呼び出し側プログラムまたはメソッドおよび呼び出し先プログラムまたはメソッドの両方から参照できる。

LOCAL-STORAGE SECTION (* LOCAL-STORAGE SECTION). DATA DIVISION のセクションであり、VALUE 文節で割り当てられた値に応じて、呼び出し単位で割り振りまたは解放が行われるストレージを定義する。

M

Make ファイル (makefile). アプリケーションに必要なファイルのリストが収められたテキスト・ファイル。make ユーティリティーはこのファイルを使用して、ターゲット・ファイルを最新の変更で更新する。

MBCS. 「マルチバイト文字セット (MBCS) (multibyte character set (MBCS))」を参照。

O

OBJECT-COMPUTER (* OBJECT-COMPUTER). ENVIRONMENT DIVISION にある段落の名前であり、ここではオブジェクト・プログラムが実行されるコンピューター環境が記述される。

ODBC. 「*Open Database Connectivity (ODBC)*」を参照。

ODO オブジェクト (ODO object). 次の例では、X が OCCURS DEPENDING ON 文節のオブジェクト (ODO オブジェクト) である。

```
WORKING-STORAGE SECTION
01 TABLE-1.
   05 X                                     PICS9.
   05 Y OCCURS 3 TIMES
      DEPENDING ON X PIC X.
```

ODO オブジェクトの値によって、テーブル内の ODO サブジェクトの数が決まる。

ODO サブジェクト (ODO subject). 上記の例では、Y が OCCURS DEPENDING ON 文節のサブジェクト (ODO サブジェクト) である。テーブル内の ODO サブジェクトの数である Y の値は、X の値によって決まる。

Open Database Connectivity (ODBC). さまざまなデータベースとファイル・システム内のデータへのアクセスを提供するアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のための仕様。

P

Pervasive.SQL ファイル・システム (Pervasive.SQL file system). Btrieve インターフェースからアクセスできるリレーショナル・データベース・ファイル・システム。「*Btrieve ファイル・システム (Btrieve file system)*」を参照。

private. ファクトリー・データまたはインスタンス・データに適用されるため、そのデータを定義するクラスのメソッドだけがアクセス可能である。

PROCEDURE DIVISION の終わり (* end of PROCEDURE DIVISION). COBOL ソース・プログラムにおいて、それ以後にはプロシージャが存在しない物理的な位置。

R

RSD ファイル・システム (RSD file system). レコード順次区切りファイル・システムは、完全な COBOL 85 標準の順次 I/O 言語や、「*COBOL for Windows 言語解説書*」に記載される全拡張機能 (例外が明示されている場合を除く) を含む、順次ファイルをサポートするワークステーション・ファイル・システムである。RSD ファイルは、固定長レコードの COBOL データ型をすべてサポートしており、大半のファイル・エディターで編集できる。また、他の言語で記述されたプログラムから読み取ることも可能。

S

SBCS. 「1 バイト文字セット (*single-byte character set (SBCS)*)」を参照。

SOURCE-COMPUTER (* SOURCE-COMPUTER).

ENVIRONMENT DIVISION にある段落の名前であり、ここではソース・プログラムがコンパイルされるコンピューター環境が記述される。

SPECIAL-NAMES. ENVIRONMENT DIVISION にある段落の名前。この段落では、環境名がユーザー指定の簡略名と関連付けられる。

STL ファイル・システム (STL file system). 標準言語ファイル・システムは、COBOL および PL/I のネイティブ・ワークステーション・ファイル・システムである。このシステムは、完全な COBOL 85 標準の入出力言語や、「*COBOL for Windows 言語解説書*」に記載される全拡張機能 (例外が明示されている場合を除く) を含む、順次ファイル、相対ファイル、および索引付きファイルをサポートしている。

U

Unicode. 現代世界の各国の言語で記述されるテキストの交換、処理、表示をサポートする汎用文字エンコード標準。UTF-8、UTF-16、UTF-32 など、Unicode を表現する複数のエンコード・スキームがある。COBOL for Windows では、国別データ型の表現として、リトル・エンディアン形式の UTF-16 を使用する Unicode がサポートされている。

UPSI スイッチ (UPSI switch). ハードウェア・スイッチの機能を実行するプログラム・スイッチ。UPSI-0 から UPSI-7 の 8 つのスイッチがある。

W

Web サービス (Web service). 特定のタスクを実行し、HTTP や SOAP といったオープン・プロトコルを介してアクセス可能なモジュラー・アプリケーション。

WORKING-STORAGE SECTION (* WORKING-STORAGE SECTION). 独立項目または作業用ストレージ・レコードあるいはその両方から構成される、作業用ストレージ・データ項目を記述する DATA DIVISION。

X

x. PICTURE 文節内の記号であり、コンピューターの有する文字セットの任意の文字を含めることができる。

XML. Extensible Markup Language。マークアップ言語を定義するための標準メタ言語。SGML から派生した、SGML のサブセットである。XML では、SGML の複雑で使用頻度の低い部分が省略され、文書タイプを扱うアプリケーションの作成、構造化情報の作成および管理、異種コンピューター・システム間での構造化情報の伝送および共有がはるかに容易になっている。XML を使用するとき、SGML で必要とされるような堅固なアプリケーションや処理は不要である。XML は、World Wide Web Consortium (W3C) の主導で開発された。

XML 型定義 (XML type definition). あるクラスの文書に対する文法を規定するマークアップ宣言を含む、または指示する XML エレメント。この文法は、文書タイプ定義または DTD とも呼ばれる。

XML 宣言 (XML declaration). 使用している XML のバージョンや文書のエンコードなど、XML 文書の特性を指定する XML テキスト。

XML データ (XML data). XML エレメントを持つ階層構造に編成されたデータ。データ定義は XML エレメント・タイプ宣言で定義される。

XML 文書 (XML document). W3C XML 仕様で定義される形式のデータ・オブジェクト。

資料名リスト

COBOL for Windows

言語解説書、SC88-4289

プログラミング・ガイド、SC88-4294

関連資料

COBOL

COBOL 2000 年言語拡張の手引き、GD88-7092

DB2 Universal DatabaseTM

IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行、SC88-9137

IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング、SC88-9138

IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド：サーバー・アプリケーションのプログラミング、SC88-9139

IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス、SC88-9140

IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻、SC88-9155

IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻、SC88-9156

Java

The Java Language Specification, Second Edition (Gosling 他著)、java.sun.com/docs/books/jls/second_edition/html/j.title.doc.html

The Java Native Interface、java.sun.com/j2se/1.3/docs/guide/jni/index.html

The Java 2 Enterprise Edition Developer's Guide、java.sun.com/j2ee/sdk_1.2.1/techdocs/guides/ejb/html/DevGuideTOC.html

Persistent Reusable Java Virtual Machine User's Guide, SC34-6201

TXSeries for Multiplatforms V5.1

CICS 管理ガイド Windows システム版、SD88-7385

CICS 管理リファレンス、SD88-7388

CICS アプリケーション・プログラミング・ガイド、SD88-7389

CICS アプリケーション・プログラミング・リファレンス、SD88-7390

CICS 問題判別ガイド、SD88-7394

WebSphere Application Server エンタープライズ版 TXSeries for Windows NT 計画およびインストールの手引き/TXSeries for Multiplatforms 計画とインストールのガイド Windows システム版、SD88-7381

TXSeries for Multiplatforms V6.1

CICS Administration Guide、SC34-6746

CICS Administration Reference、SC34-6724

CICS Application Programming Guide、SC34-6717

CICS Application Programming Reference、SC34-6723

CICS Problem Determination Guide、SC34-6719

インストール・ガイド、SD88-6782

Unicode および文字表現

Unicode、www.unicode.org/

Character Data Representation Architecture: Reference and Registry, SC09-2190

WebSphere Application Server for z/OS

Applications, SA22-7959

XML

Extensible Markup Language (XML),
www.w3.org/XML/

XML specification, www.w3.org/TR/REC-xml/

その他

Btrieve Programmer's Guide

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

【ア行】

アクティブ・ロケール 197

アセンブラー

プログラム

リスト 275, 603

LIST オプションから 603

アセンブラー言語プログラム

デバッグ 351

値の割り当て 27

アドレス

入り口点アドレスを渡す 530

増分 527

プログラム間での受け渡し 527

NULL 値 527

アドレスを増分する 527

アプリケーション、移植

言語の違い 495

プラットフォーム間の違い 495

メインフレームとワークステーション間

コンパイラー・オプションの選択

495

ワークステーション上でのメインフレーム・アプリケーションの実行

497

ワークステーションとメインフレーム間

ワークステーション専用の言語機能

501

ワークステーション専用の名前

502

COPY を使用したプラットフォーム固有のコードの分離 496

Windows と AIX 間 502

アプリケーションの移植

概要 495

環境の違い 500

言語の違い 495

ファイル状況キー 501

プラットフォーム間の違い 495

分離符号の影響 42

マルチタスキング 502

マルチバイト 500

アプリケーションの移植 (続き)

メインフレームとワークステーション間

コンパイラー・オプションの選択

495

ワークステーション上でのメインフレーム・アプリケーションの実行

497

ワークステーションとメインフレーム間

ワークステーション専用の言語機能

501

ワークステーション専用のコンパイラー・オプション 502

ワークステーション専用の名前

502

CICS 362

COPY を使用したプラットフォーム固有のコードの分離 496

SBCS 498

Windows と AIX 間 502

暗黙の範囲終了符号 21

異常終了、ERRCOUNT ランタイム・オプションを使用した誘発 326

一時作業ファイルの場所

TMP による指定 221

一括表示表現 596

移動、制御権の

ネストされたプログラム 507

メインプログラムとサブプログラム

505

呼び出し側プログラム 505

呼び出し先プログラム 505

COBOL プログラム相互間の 507

入り口点

アドレスの受け渡し 530

関数ポインター・データ項目 530

代替、ENTRY ステートメントの 530

定義 539

複数の、制限 531

プロシージャー・ポインター・データ項目 530

呼び出し規約を指示するための

ENTRYINT 265

インスタンス

削除 458

作成 456

定義 429

インスタンス・データ

初期化 456

それをアクセス可能にする 444

インスタンス・データ (続き)

定義 429, 436, 462

private 437

インスタンス・メソッド

オーバーライド 442

多重定義 443

定義 429, 438, 462

呼び出し、オーバーライドした 456

インスタンス・メソッドの多重定義 443

インポート・ライブラリー、cob2 による指定 230

インライン PERFORM

概要 94

例 95

ウィンドウ化日付フィールド

縮小 591

受け渡し、プログラム間でのデータの

アドレス 527

呼び出し側プログラムの引数 523

呼び出し先プログラムのパラメーター

523

BY CONTENT 521

BY REFERENCE 521

BY VALUE

概要 521

制限 523

EXTERNAL データ 533

Java との 484

JNI サービス 480

OMITTED 引数 524

RETURN-CODE 特殊レジスターでの

532

英字データ

国別との比較 192

これを伴う MOVE ステートメント

33

英数字グループ項目

定義 24

GROUP-USAGE NATIONAL なしのグループ 25

英数字データ

これを伴う MOVE ステートメント

33

比較する

国別と 192

照合シーケンスの影響 204

ZWB の影響 299

変換

MOVE による国別への 185

NATIONAL-OF による国別への

186

英数字の日付フィールドの縮小	591	大文字への変換	112	カウント	
英数字比較	90	オブジェクト		生成される XML 文字	415
英数字編集データ		削除	458	文字 (INSPECT)	110
これを伴う MOVE ステートメント		作成	456	拡張モード	42, 635
33		定義	429	格納、頻繁に使用する関数の	539
初期化		オブジェクト参照		カスタマイズ	
例	29	型式化	449	環境変数の設定	213
INITIALIZE の使用	73	設定	451	型式化オブジェクト参照	449
英数字リテラル		汎用	450	各国語サポート	
制御文字	26	比較する	450	メッセージ	201
説明	26	引き渡しの例	454	各国語サポート (NLS)	
マルチバイト内容が含まれる	194	ローカルからグローバルへの変換	457	照合シーケンス	203
英数字リテラルでの制御文字の X 区切り		オブジェクト指向 COBOL		データ処理	171
文字	26	アプリケーションの準備	244	ロケール	197
エラー		オブジェクト指向プログラムの書き込		ロケールおよびコード・ページ値への	
コンパイラー・オプションの競合	251	み	429	アクセス	207
算術	160	コンパイル	243	ロケールおよびコード・ページの指定	
実行時のフラグ設定	325	実行	245	218	
処理	159	制限		ロケールの設定	197
メッセージ・テーブル		CICS	429	ロケール・ベースの照合	203
指標付けを使用した例	76	EXEC CICS ステートメント	429	DBCS	192
添え字付けを使用した例	75	EXEC SQL ステートメント	429	仮定による世紀ウィンドウ、非日付用の	
エラー検査、実行時のフラグ設定	325	SQL コンパイラー・オプション		581	
エラー・メッセージ		429		可変位置グループ	648
各国語の設定	219	リンク		可変位置データ項目	648
コンパイラー		概要	244	可変長テーブル	
形式	227	例	245	値の割り当て	80
作成する重大度レベルの判別	271	Java との通信	485	オーバーレイを防ぐ	650
重大度レベル	225	オブジェクト指向アプリケーションの構造		作成	77
ソースの訂正	225	化	474	例	78
ソース・リストへの組み込み	336	オブジェクト・インスタンス、定義	429	ロードの例	79
フラグを立てる重大度の選択	336	オブジェクト・インスタンスの解放	458	可変長レコード	
リストにおける位置	227	オブジェクト・コード		OCCURS DEPENDING ON (ODO) 文	
リストの生成	226	互換	235	節	601
コンパイラーの指示	226	制御	249	環境、事前初期設定	
ランタイム		生成	260	概要	563
形式	783	オブジェクト・ファイルの互換性	235	例	566
不完全または省略	240	オブジェクト・モジュールへの、追加、外		C/C++ プログラム用に	515
リスト	783	部プログラム参照の	540	環境の違い、zSeries およびワークステーション	500
エンコード				環境変数	
言語文字	175			検索順序優先順位	214
説明	184			コンパイラー	215
XML 出力での制御	424			設定	
XML 文書の	404			「システムのプロパティ」ウィン	
エンコード宣言				ドウ	213
指定	406			ロケール	200
省略を推奨	406			COBOL for Windows 用	214
オーバーフロー条件				SET コマンド	213
ストリングの結合および分割	159			定義	213
CALL	166			ファイルの割り当て	217
UNSTRING	102			ランタイム	217
オーバーライド				リンカー	217
インスタンス・メソッド	442			割り当て名	217
ファクトリー・メソッド	467			CLASSPATH	
オーバーライド、リンカー・オプション				説明	217
の、例	234				

環境変数 (続き)

CLASSPATH (続き)
 Java クラスの場所の指定 245
 COBCPYEXT 215
 COBJVMINIOPTIONS
 説明 217
 JVM オプションの指定 247
 COBLSTDIR 215
 COBMSGs 217
 COBOPT 215
 COBPATH
 説明 215, 218
 CICS 動的呼び出し 363
 COBRTOPT 218
 DB2DBDFT 215
 DB2PATH
 説明 215
 SYSLIB との相互作用 357
 EBCDIC_CODEPAGE 218
 ILINK 231
 LANG 218
 LC_ALL 199, 219
 LC_COLLATE 199, 219
 LC_CTYPE 199, 219
 LC_MESSAGES 199, 219
 LC_TIME 199, 219
 LIB 217, 233
 library-name 215, 303
 LOCPATH 219
 NLSPATH 219
 PATH
 説明 220
 COBOL クラスの場所の指定 245
 SYSIN、SYSIPT、SYSOUT、
 SYSLIST、SYSLST、CONSOLE、
 SYSPUNCH、SYSPCH 220
 SYSLIB 216
 JNL.cpy の場所の指定 243
 TEMPMEM 216
 text-name 215, 303
 TMP 221
 TZ 221
 WDZ70INSTDIR 241
 環境変数の設定用コマンド・ファイル
 214
 環境変数を使用したファイルへのアクセス
 217
 環境名 7
 漢字データのテスト 195
 漢字比較 90
 関数
 頻繁に使用する関数の格納 539
 関数の順序位置 547
 関数ポインター・データ項目
 入り口点の入り口アドレス 530
 定義 530

関数ポインター・データ項目 (続き)

呼び出し可能サービスへのパラメータ
 ーの受け渡し 530
 JNI サービスのアドレッシング 707
 簡略名
 SPECIAL-NAMES 段落 7
 完了コード
 ソート 154
 マージ 154
 関連付け、項目とシステム名 7
 キー
 許容データ型
 MERGE ステートメントでの 152
 OCCURS 文節の 66
 SORT ステートメントでの 152
 ソート用の
 概要 146
 定義 152
 デフォルト 205
 テーブル・エレメントの順序を指定す
 るための 66
 二分探索用の 82
 マージ用の
 概要 146
 定義 152
 デフォルト 205
 記述、コンピューター 7
 記述ファイル 238
 基本的な文書エンコード 404
 逆方向ブランチの回避 596
 行、テーブルの 67
 行順次ファイル
 制約 131
 ファイル・アクセス・モード 129
 編成 129
 行番号 343
 共用
 データ
 概要 521
 再帰的またはマルチスレッド化され
 たプログラムの 17
 名前の有効範囲 509
 パラメーター受け渡しの仕組み
 521
 別のプログラムからの 16
 別々にコンパイルされたプログラム
 間での 533
 別々にコンパイルされたプログラムの
 16
 メソッドから値を戻す 455
 メソッドへの引数の引き渡し 453
 Java との 484
 LINKAGE SECTION のコーディン
 グ 524
 PROCEDURE DIVISION ヘッダー
 525

共用 (続き)

データ (続き)
 RETURN-CODE 特殊レジスター
 532
 ファイル
 名前の有効範囲 509
 EXTERNAL 文節の使用 13, 533
 GLOBAL 文節の使用 13
 切り替え状況条件 90
 国別 10 進数データ (USAGE
 NATIONAL)
 形式 46
 初期化の例 30
 定義 180
 例 41
 国別グループ項目
 英数字グループと比べた場合の利点
 180
 英数字リテラルを伴う VALUE 文節の
 例 75
 概要 180
 基本項目として扱われる
 ほとんどの場合 25, 180
 MOVE の例 34
 国別データのみを含むことができる
 25, 182
 グループ項目として扱われる
 要約 183
 INITIALIZE で 32
 INITIALIZE の例 183
 MOVE CORRESPONDING で 34
 XML GENERATE 414
 これを伴う MOVE ステートメント
 34
 使用
 概要 181
 基本項目として 182
 初期化
 INITIALIZE の使用 32, 73
 VALUE 文節の使用 75
 生成された XML 文書の 413
 テーブルの定義 66
 定義 181
 引数として渡す 526
 例 25
 Java との通信 485
 LENGTH 組み込み関数および 118
 USAGE NATIONAL グループとの対比
 25
 国別データ
 英数字リテラルを伴う VALUE 文節の
 例 117
 外部 10 進数 46
 外部浮動小数点 46
 キーの
 MERGE ステートメントでの 152

国別データ (続き)

キーの (続き)

OCCURS 文節の 66

SORT ステートメントでの 152

組み込み関数を使用した評価 114

検査 (INSPECT) 110

これを伴う MOVE ステートメント
33, 185

最小項目または最大項目の検出 115

指定 176

条件式の 189, 190

初期化の例 29

生成された XML 文書の 413

その参照変更 107

定義 177

比較する

英字、英数字、または DBCS と
192

英数字グループと 192

概要 189

照合シーケンスの影響 206

数値との 191

2 つのオペランド 190

NCOLLSEQ の影響 190

表意定数 179

分割 (UNSTRING) 102

変換

大文字または小文字への 112

概要 185

ギリシャ語の英数字との間、例
187

中国語 GB 18030 との間の 189

DISPLAY-OF による英数字への

186

INSPECT による 110

MOVE による英数字、DBCS、ま
たは整数からの 185

NATIONAL-OF による英数字また
は DBCS からの 186

NUMVAL、NUMVAL-C による数
値への 113

UTF-8 との間の 188

文字の逆順 112

リテラル

使用 178

連結 (STRING) 100

ACCEPT による入力 36

DATE FORMAT 文節と一緒に使用
できない 570

DISPLAY による出力 37

Java との通信 485

LENGTH OF 特殊レジスター 118

LENGTH 組み込み関数および 118

USAGE 文節がない場合の NSYMBOL
コンパイラー・オプション 178

XML 文書のエンコード 404

国別比較 90

国別浮動小数点データ (USAGE
NATIONAL)

定義 46, 180

国別編集データ

これを伴う MOVE ステートメント
33

初期化

例 30

INITIALIZE の使用 73

定義 177

編集記号 177

PICTURE 文節 177

国別または DBCS リテラルの N 区切り

文字 26

国別リテラル

使用 178

説明 26

国別リテラルの NX 区切り文字 26

国/地域別情報の定義 197

組み込み SQL

利点 369

ODBC との比較 369

組み込みエラー・メッセージ 336

組み込み関数

英数字データ項目の変換 111

国別データ項目の変換 111

コンパイルの日付の検出 118

最大または最小項目の検出 115

参照修飾子としての 109

紹介 37

照合シーケンスの影響 207

数字関数

整数、浮動小数点、混合 57

ネストされた 57

引数としてのテーブル・エレメント
57

引数としての特殊レジスター 57

用途 56

例 57

中間結果 641, 643

データ項目の長さの検出 118

データ項目の評価 114

テーブル・エレメントの処理 83

日時 654

ネスト 38

例

ANNUITY 59

CHAR 115

CURRENT-DATE 58

DISPLAY-OF 187

INTEGER 109

INTEGER-OF-DATE 58

LENGTH 58, 116, 118

LOG 59

LOWER-CASE 112

組み込み関数 (続き)

例 (続き)

MAX 58, 84, 115, 116

MEAN 59

MEDIAN 59, 84

MIN 109

NATIONAL-OF 187

NUMVAL 113

NUMVAL-C 58, 113

ORD 115

ORD-MAX 84, 116

PRESENT-VALUE 59

RANGE 59, 84

REM 59

REVERSE 112

SQRT 59

SUM 84

UPPER-CASE 112

WHEN-COMPILED 118

CEELOCT との互換性 680

DATEVAL

使用 587

例 587

UNDATE

使用 587

例 588

組み込み相互参照

説明 340

例 348

組み込みの CICS 変換プログラム

概要 366

呼び出し 361

利点 366

cicstcl -p コマンド 366

組み込みマップ要約 339, 345

クライアント

定義 447

クラス

インスタンス化

COBOL 457

Java 457

インスタンス・データ 436

オブジェクト、JNI による参照の取得
480

定義 429, 432

名前

外部 435, 449

プログラムにおいて 434

ファクトリー・データ 465

ユーザー定義 10

クラス条件

データの妥当性検査 331

テスト

概要 90

漢字の 195

数値の 54

クラス条件 (続き)

テスト (続き)

DBCS の 195

グリニッジ標準時 (GMT)

現地時間までのオフセットの取得

(CEEGMTO) 674

リリアン日付およびリリアン秒の戻り

(CEEGMT) 673

グループ移動と基本移動の対比 34, 182

グループ項目

可変位置 648

国別グループ内で英数字グループを従属させることはできない 182

国別データと比較 192

グループ移動と基本移動の対比 34, 182

グループ項目として扱われる

INITIALIZE で 32

INITIALIZE の例 72

これを伴う MOVE ステートメント 34

初期化

INITIALIZE の使用 31, 72

VALUE 文節の使用 74

テーブルの定義 65

定義 24

引数として渡す 526

グレゴリオ文字ストリング

現地時間の戻り (CEELOCT) 680

例 681

グローバル名 510

ケース構造、EVALUATE ステートメント 87

計算

算術データ項目 598

指標の 70

添え字の 601

重複 597

定数データ項目 597

継承の階層の定義 431

継続

構文検査 260

プログラム 161

言語間通信

COBOL および C/C++ 間 515

COBOL および Java 間の 479

言語機能、デバッグ用の

DISPLAY ステートメント 330

検査、有効データの

条件式 90

数値 54

検索規則、リンカーの 235

例 236

現地時間

取得 (CEELOCT) 680

コーディング

インスタンス・メソッド 438, 462

オブジェクト指向プログラム

概要 429

技法 12, 595

クライアント 447

クラス定義 432

決定 85

効率的 595

コンストラクター・メソッド 466

サブクラス

概要 460

例 463

条件テスト 91

単純化 609

テーブル 65

テスト条件 91

手続き部 17

入出力

概要 133

例 133

ファイルに対する

概要 133

例 133

ファイル入出力 127

ファクトリー定義 464

ファクトリー・メソッド 466

ループ 94

CICS での制約事項 362

CICS のもとで実行されるプログラム

概要 362

システム日付、入手 363

DATA DIVISION 12

DB2 のもとで実行されるプログラム

概要 355

ENVIRONMENT DIVISION 7

EVALUATE ステートメント 87

IDENTIFICATION DIVISION 5

IF ステートメント 85

Java との相互運用が可能なデータ型 485

SQL ステートメント 356

コード

コピー 609

最適化 604

コード化文字セット

定義 175

XML 文書における 405

コード・ページ

アクセス 208

英字データ項目の 198

英数字データ項目の 198

オーバーライド 187

国別データ項目の 199

システム・デフォルト 200

指定 406

コード・ページ (続き)

照会 208

定義 175

文字の使用 198

ユーロ通貨サポート 63

有効 201

ASCII 199

DBCS データ項目の 198

EBCDIC 199

XML 文書での矛盾 410

コード・ポイント、定義 176

構造、INITIALIZE による初期化 31

構造化プログラミング 596

構文エラー

NOCOMPILE コンパイラー・オプションによる検出 334

構文図の読み方 xvi

効率、コーディングの 595

互換性のある日付

比較における 577

MLE を使用した 578

互換モード 42, 635

固定小数点演算

指数 638

比較 61

評価 60

例の評価 62

固定小数点データ

外部 10 進数 46

固定小数点と浮動小数点との間の変換 52

使用計画 598

中間結果 637

パック 10 進数 49

変換と精度 52

2 進数 47

固定世紀ウィンドウ 573

コピーブック 303

検索規則 303

使用 609

探索 228

library-name 環境変数 215

ODBC を使用する場合 375

ODBC3D.CPY の例 380

ODBC3EG.CPY 376

ODBC3P.CPY 377

SYSLIB による検索パスの指定 216

コピー・コード、ユーザー提供モジュールからの取得 266

コピー・ライブラリー

例 610

コプロセッサ、DB2

概要 355

SQL INCLUDE の使用 357

コマンド行の引数

使用 537

コマンド行の引数 (続き)

例 537

コマンド・プロンプト、環境変数の定義
213

小文字への変換 112

コンパイラー

エラー・メッセージのリストの生成
226

制限

DATA DIVISION 12

中間結果の計算 636

日付関連のメッセージ、分析 588

メッセージ

作成する重大度レベルの判別 271

重大度レベル 225

ソース・リストへの組み込み 336

フラグを立てる重大度の選択 336

呼び出し 223

コンパイラー指示ステートメント

概要 20

説明 301

コンパイラー・オプション

移植性のための 495

コンパイラー呼び出しでの 343

指定

環境変数 215

コマンド・ファイルまたはバッチ・

ファイル 224

cob2 コマンド 223

COBOPT の使用 215

状況 343

省略形 249

その表 249

デバッグ用

概要 333

THREAD の制約事項 332

矛盾する 251

ADATA 251

APOST 284

ARITH 252

BINARY 253

CALLINT 254

CHAR 255

CICS 257

CICS の場合 365

COLLSEQ 258

COMPILE 260

CURRENCY 260

DATEPROC 261

DIAGTRUNC 263

DYNAM 263, 606

ENTRYINT 264

EXIT 265

FLAG 271, 336

FLAGSTD 272

FLOAT 274

コンパイラー・オプション (続き)

LIB 274

LINECOUNT 275

LIST 275, 340

LSTFILE 276

MAP 276, 339, 340

MDECK 278

NCOLLSEQ 279

NOCOMPILE 334

NSYMBOL 279

NUMBER 280, 341

OPTIMIZE 281, 603, 605

PGMNAME 282

PROBE 283

PROCESS (CBL) による指定 224

QUOTE 284

SEPOBJ 285

SEQUENCE 286

SIZE 287

SOSI 287

SOURCE 289, 340

SPACE 289

SQL

コーディング・サブオプション

358

説明 290

SSRANGE 291, 335, 605

TERMINAL 292

TEST 292, 340, 605

THREAD

説明 293

デバッグの制約事項 332

パフォーマンス 605

TRUNC 293, 605

VBREF 297, 340

WSCLEAR 297

XREF 297, 338

YEARWINDOW 299

ZWB 299

コンパイラー・リスト

出力ディレクトリーの指定 215

入手 340

コンパイル

オブジェクト指向アプリケーション

例 245

cob2 コマンド 243

統計 343

DLL、例 544

コンパイルおよびリンク

オブジェクト指向アプリケーション

例 245

cob2 コマンド 244

コンパイル時についての考慮事項

エラー・メッセージ

作成する重大度レベルの判別 271

重大度レベル 225

コンパイル時についての考慮事項 (続き)

コンパイラーの指示エラー 226

コンパイルおよびリンク・ステップの
表示 230

コンパイル済みプログラム 228

表示後のコンパイルおよびリンク・ス
テップの実行 230

リンクなしでのプログラムのコンパイ
ル 228

cob2 コマンド・オプション 228

cob2 ヘルプの表示 230

[サ行]

最外部プログラム、DLL 内の 539

再帰呼び出し

コーディング 520

識別 6

LINKAGE SECTION 17

最後に使われた状態

EXIT PROGRAM または GOBACK で
のサブプログラム 506

最大

ファイル・サイズ 131

レコード・サイズ 131

最大項目または最小項目の検出 115

最適化

一括表示表現 596

一貫性のあるデータ 599

逆方向分岐の回避 596

構造化プログラミング 596

コンパイラー・オプションの影響 605

指標計算 601

指標付け 600

添え字計算 601

添え字付け 600

重複計算 597

テーブル・エレメント 600

定数計算 597

定数データ項目 597

トップダウン・プログラミング 596

ネストされたプログラムの統合 604

パック 10 進数 データ項目 599

パフォーマンスにおける意味 601

パフォーマンスへの影響 596

パラメーター引き渡しの影響 524

含まれているプログラムの統合 604

未使用データ項目 281

ライン外の PERFORM 596

ALTER ステートメントの回避 596

BINARY データ項目 598

OCCURS DEPENDING ON 601

最適化プログラム

概要 604

再入可能コード 623

再配布、COBOL for Windows DLL の 241
サイン表記 53
索引付きファイル
 ファイル・アクセス・モード 129
索引付きファイル編成 129
削除、ファイルからのレコードの 141
作成
 オブジェクト 456
 可変長テーブル 77
作成、互換コードの 501
サブクラス
 インスタンス・データ 462
 コーディング
 概要 460
 例 463
サブストリング
 その参照変更 106
 テーブル・エレメントの 107
サブプログラム
 使用 505
 説明 505
 定義 521
 メインプログラム 505
 リンケージ
 共通データ項目 523
 DLL 内 539
 PROCEDURE DIVISION 525
算術
 エラー処理 160
 組み込み関数を使用した 56
 コーディングが容易な COMPUTE ステートメント 55
 日付の計算
 現在のグリニッジ標準時の取得 (CEEGMT) 673
 タイム・スタンプから秒数への変換 (CEESECS) 688
 日付から COBOL 整数形式への変換 (CEEGBLDY) 655
 日付からリリアン形式への変換 (CEEDAYS) 667
算術演算
 MLE を使用した 583, 584
算術式
 括弧で囲まれた 56
 参照修飾子としての 109
 説明 56
 非算術ステートメントでの 644
 MLE を使用した 584
算術比較 61
算術評価
 固定小数点と浮動小数点の対比 60
 精度 635
 中間結果 635
 データ形式の変換 52

算術評価 (続き)
 パフォーマンスに関するヒント 598
 変換と精度 52
 優先順位 56, 637
 例 60, 62
参照修飾子
 組み込み関数、例 109
 としての算術式 109
 としての変数 107
参照変更
 国別データ 107
 組み込み関数 106
 テーブル 69, 107
 範囲外の値 107
 例 108
時間、現地の取得 (CEELOCT) 680
時間帯情報
 TZ による指定 221
シングニチャー
 固有でなければならない 438
 定義 438
時刻情報、形式 219
指数
 固定小数点演算で評価される 638
 パフォーマンスに関するヒント 599
 浮動小数点演算で評価される 643
「システムのプロパティ」ウィンドウ、環境変数の定義 213
システム日付
 CICS のもとで 363
システム名 7
事前初期設定、COBOL 環境の
 概要 563
 終了 564
 初期化 563
 マルチスレッド化 558
 例 566
 CICS での制約事項 563
 C/C++ プログラム用に 515
実行、計算の
 日時サービス 612
実行、DOS での 550
実行時
 パフォーマンスの考慮事項 595
 引数 537
 ファイル名の変更 11
 プラットフォーム間の違い 497
 メッセージ 783
実行する、オブジェクト指向アプリケーションを 245
実行単位
 終了 517
 マルチスレッド化での役割 553
指標
 値を割り当てる 70
 エレメントの変位の計算例 68

指標 (続き)
 初期化 71
 増分または減分 71
 他のテーブルの参照 70
 定義 69
 範囲検査 335
 OCCURS INDEXED BY 文節による作成 70
指標付け
 エレメントの変位の計算例 68
 添え字付けより望ましい 600
 テーブル 70
 定義 69
 例 76
指標データ項目
 添え字や指標として使用できない 71
 USAGE IS INDEX 文節による作成 70
縮小、英数字日付の 591
出力
 概要 127
 ファイルへ 121
出力プロシージャ
 コーディング 150
 制限 150
 例 153
 RETURN または RETURN INTO が必要 150
順次ファイル
 ファイル・アクセス・モード 128
 編成 128
状況コード、ファイル
 概要 164
 例 165
条件式
 EVALUATE ステートメント 85
 IF ステートメント 85
 PERFORM ステートメント 95
条件処理
 日時サービスおよび 612
 ERRCOUNT の影響 326
条件ステートメント
 オブジェクト参照 450
 概要 19
 NOT 句を指定した 20
条件の検査 91
条件名 580
照合シーケンス
 移植性に関する考慮事項 498
 英数字 204
 英数字および DBCS オペランドへの COLLSEQ の影響 258
 国別 206
 国別オペランドへの NCOLLSEQ の影響 279
 国別キーの 2 進数 152

照合シーケンス (続き)

- 国別ソートまたはマージ・キーのバイナリー 206
- 組み込み関数と 207
- 指定 8
- シンボリック文字 10
- 制御 203
- 代替
 - 選択 153
 - 例 9
- 非数値比較 8
- 文字の序数位置 115
- ASCII 9
- DBCS 205
- EBCDIC 8
- HIGH-VALUE 8
- ISO 7 ビット・コード 9
- LOW-VALUE 8
- MERGE 8, 153
- NATIVE 8
- SEARCH ALL 8
- SORT 8, 153
- STANDARD-1 8
- STANDARD-2 8
- 商標 833
- 初期化
 - インスタンス・データ 456
 - 可変長グループ 80
 - 国別グループ項目
 - INITIALIZE の使用 32, 73
 - VALUE 文節の使用 75
 - グループ項目
 - INITIALIZE の使用 31, 72
 - VALUE 文節の使用 74
 - 構造、INITIALIZE による 31
 - テーブル
 - エレメントのすべての出現 75
 - グループ・レベルの 74
 - それぞれの項目の個別の 74
 - INITIALIZE の使用 72
 - PERFORM VARYING の使用 96
 - ランタイム環境
 - 概要 563
 - 例 566
 - 例 28
- 処理
 - チェーン・リスト
 - 概要 527
 - 例 527
 - テーブル
 - 指標付けを使用した例 76
 - 添え字付けを使用した例 75
- 資料名リスト 863
- 診断、プログラムの 343
- シンボリック定数 597

スイッチおよびフラグ

- スイッチをオフに設定する例 93
- スイッチをオンに設定する例 93
- 説明 91
- 単一値のテストの例 92
- 定義 91
- 複数値のテストの例 92
- リセット 92
- 数学
 - 組み込み関数 57, 59
- 数字組み込み関数
 - 整数、浮動小数点、混合 57
 - ネストされた 57
 - 引数としてのテーブル・エレメント 57
 - 引数としての特殊レジスター 57
 - 用途 56
 - 例
 - ANNUITY 59
 - CURRENT-DATE 58
 - INTEGER 109
 - INTEGER-OF-DATE 58
 - LENGTH 58, 116
 - LOG 59
 - MAX 58, 84, 115, 116
 - MEAN 59
 - MEDIAN 59, 84
 - MIN 109
 - NUMVAL 113
 - NUMVAL-C 58, 113
 - ORD 115
 - ORD-MAX 84
 - PRESENT-VALUE 59
 - RANGE 59, 84
 - REM 59
 - SQRT 59
 - SUM 84
- 数字編集データ
 - 初期化
 - 例 30
 - INITIALIZE の使用 73
 - 定義 177
 - 編集記号 43
 - BLANK WHEN ZERO 文節
 - コーディング、数値データでの 177
 - 例 43
 - PICTURE 文節 43
 - USAGE DISPLAY
 - 初期化の例 30
 - 表示 43
 - USAGE NATIONAL
 - 初期化の例 31
 - 表示 43

数値データ

- 外部 10 進数
 - USAGE DISPLAY 46
 - USAGE NATIONAL 46
- 外部浮動小数点
 - USAGE DISPLAY 46
 - USAGE NATIONAL 46
- 国別 10 進数 (USAGE NATIONAL) 46
- 国別との比較 191
- 国別浮動小数点 (USAGE NATIONAL) 46
- ストレージ形式 44
- ゾーン 10 進数 (USAGE DISPLAY) 形式 46
- サイン表記 53
- 定義 41
- 内部浮動小数点
 - USAGE COMPUTATIONAL-1 (COMP-1) 49
 - USAGE COMPUTATIONAL-2 (COMP-2) 49
- パック 10 進数
 - サイン表記 53
 - USAGE COMPUTATIONAL-3 (COMP-3) 49
 - USAGE PACKED-DECIMAL 49
- 表示浮動小数点 (USAGE DISPLAY) 46
- 変換
 - 固定小数点と浮動小数点との間の 52
 - 精度 52
 - MOVE による国別への 185
- 編集記号 43
- 2 進数
 - バイト反転 48
 - USAGE BINARY 47
 - USAGE COMPUTATIONAL (COMP) 47
 - USAGE COMPUTATIONAL-4 (COMP-4) 47
 - USAGE COMPUTATIONAL-5 (COMP-5) 47
 - PICTURE 文節 41, 43
 - USAGE DISPLAY 41
 - USAGE NATIONAL 41
 - USAGE とは無関係に代数値の比較が可能 191
- 数値のクラス・テスト
 - 検査、有効データの 54
- 数値比較 90
- 数値リテラルの説明 26
- スタック・スペース、cob2 コマンドを使用した割り振り 230
- スタック・スペースの割り振り 230

スタック・フレーム、縮小 517
スタック・プロープ、生成 283
スタティック・リンク
 概要 539
 欠点 539
 定義 510
 利点 539
ステートメント
 暗黙の範囲終了符号 21
 コンパイラ指示 20
 条件付き 19
 定義 18
 範囲区切り 19
 明示範囲終了符号 21
 命令ステートメント 19
ステートメントのネスト・レベル 343
スライド、テーブル 601
ストリング
 処理 99
 ヌル終了 526
Java
 宣言する 486
 取り扱い 490
ストレージ
 スタック 283
 引数のための 523
 マッピング 340
スライディング世紀ウィンドウ 573
スレッド化
 および事前初期設定 558
 制御転送 557
 プログラムの終了 558
スレッド環境の要件 283
世紀ウィンドウ
 概要 618
 固定 573
 照会および変更の例 619
 スライディング 573
 非日付用の仮定による 581
 CEECLDY 657
 CEEDAYS 669
 CEEQCEN 682
 CEESCEN 683
 CEESECS 691
制御
 移動 505
 ネストされたプログラム内の 507
 プログラムのフロー 85
制限
 オブジェクト指向プログラム 429
 添え字付け 69
 入出力プロシージャ 150
CICS
 概要 362
 分離型の変換プログラム 366

制限事項、コンパイラの
 ファイル入出力 131
 ユーザー・データ 12
DATA DIVISION 12
整数
 リリアン秒の変換 (CEESECI) 685
静的データ、定義 429
静的メソッド
 定義 429
 呼び出し 468
セクション
 グループ化 97
 説明 18
 宣言 22
セグメントの記憶保護属性 320
設定
 指標 71
 指標データ項目 70
 スイッチおよびフラグ 92
 リンカー・オプション 231
ゼロ比較 583
ゼロ抑制
 BLANK WHEN ZERO 文節の例 43
 PICTURE 記号 Z 43
宣言型プロシージャ
 EXCEPTION/ERROR 162
 USE FOR DEBUGGING 332
全日付フィールド拡張の利点 572
ソース・コード
 行番号 343, 344, 347
 リストの説明 340
ソート
 エラー番号
 考えられる値のリスト 155
 iwzGetSortErrno を使用した取得 154
 完了コード 154
キー
 概要 146
 定義 152
 デフォルト 205
基準 152
終了 158
出力プロシージャ
 コーディング 150
 例 153
診断メッセージ 154
正常終了の判別 154
説明 145
代替照合シーケンス 153
入出力プロシージャに関する制約事
 項 150
入力プロシージャ
 コーディング 148
 例 153
ファイルの説明 147

ソート (続き)
 プロセス 146
ソート記述 (SD) 項目の例 147
ゾーン 10 進数データ (USAGE
 DISPLAY)
 英数字との比較に対する ZWB の影響 299
 形式 46
 サイン表記 53
 例 41
相互参照
 組み込み 340
 データおよびプロシージャ名 338
 動詞 340
 動詞リスト 297
 特殊定義記号 349
 プログラム名 348
 リスト 297
相対ファイル
 ファイル・アクセス・モード 130
 編成 130
添え字
 計算 602
 定義 69
 範囲検査 335
 変数、例 68
 リテラル、例 68
添え字付け
 参照変更 69
 制限 69
 相対 69
 データ名またはリテラルを使用 69
 定義 69
 変数、例 68
 リテラル、例 68
 例 75
属性メソッド 444

[タ行]

代替索引
 定義 129
代替照合シーケンス
 選択 153
 例 9
代替ファイル・システム
 環境変数を使用 217
 ファイル・システム ID 217
ダイナミック・リンク
 概要 540
 定義 510
 利点 540
 DLL 参照の解決 540
ダイナミック・リンク・ライブラリー
 オブジェクト指向のための作成 244

ダイナミック・リンク・ライブラリー (続き)
オブジェクト指向プログラムでの使用 245
関数 539
構築 539
コンパイル、例 544
作成 228
サブプログラムおよび最外部プログラム 539
参照の解決 540
ダイナミック・リンクの概要 540
ファイル、ディレクトリー・パスの設定 218
目的 540
モジュール定義ファイルの作成
概要 541
例 542
リンク、例 544
CALL identifier、例 543
CALL リテラル、概要 541
CICS についての考慮事項 364
cob2 によるコンパイルおよびリンク 542
DLL ソース・ファイルの作成
例 541, 542
Java とのインターオペラビリティでの使用 245
Java とのインターオペラビリティのための 244
-dll cob2 オプション 228
タイム・スタンプ 663, 688
多重継承、許可されていない 432, 460
探索
テーブル
概要 80
逐次探索 81
二分探索 82
パフォーマンス 80
名前の宣言の 510
短縮リストの例 342
ダンプ、TRAP(OFF) の副次作用 327
端末へのメッセージの送信 292
段落
概要 18
グループ化 97
チェーン・リストの処理
概要 527
例 527
違い、ホスト COBOL との 623
置換
データ項目 (INSPECT) 110
ファイル内のレコード 140
置換文字 179
逐次探索
説明 81

逐次探索 (続き)
例 81
チューニング考慮事項、パフォーマンス 605, 606
中間結果 635
中国語 GB 18030 データ
処理 189
重複計算のグループ化 597
直接アクセス
直接指標付け 70
追加、オブジェクト・モジュールへの外部
プログラム参照の 540
追加、スタブ・ファイルの 550
通貨記号
使用 62
複数の文字 62
ユーロ 63
16 進数リテラル 63
データ
受け渡し 521
グループ化 526
形式、数値タイプ 44
形式の変換 52
効率的な実行 595
数値 41
妥当性検査 54
非互換 54
分割 (UNSTRING) 102
命名 13
レコード・サイズ 13
連結 (STRING) 99
データ域、動的 263
データおよびプロシージャ名相互参照の
記述 338
データ型、COBOL と C/C++ との対応 517
データ記述記入項目 12
データ構成の順序位置 547
データ項目
可変位置 648
基本、定義 24
共通、サブプログラム・リンケージの 523
組み込み関数を使用した評価 114
組み込み関数を使用した変換 111
グループ、定義 24
最小項目または最大項目の検出 115
サブストリングの参照 106
参照変更 106
指標によるテーブル・エレメントの参照 69
初期化の例 28
数値 41
分割 (UNSTRING) 102
変換、大文字または小文字への 112
未使用 281

データ項目 (続き)
文字から数値への変換 113
文字のカウント (INSPECT) 110
文字の逆順 112
文字の置換 (INSPECT) 110
文字の変換 (INSPECT) 110
連結 (STRING) 99
Java の型のコーディング 484
データ項目の比較
英数字
照合シーケンスの影響 204
COLLSEQ の影響 258
オブジェクト参照 450
国別
英字、英数字、または DBCS と 192
英数字グループと 192
概要 189
照合シーケンスの影響 206
数値との 191
2 つのオペランド 190
NCOLLSEQ の影響 190
ゾーン 10 進数および英数字、ZWB
の影響 299
日付フィールド 577
DBCS
英数字グループと 206
国別と 206
照合シーケンスの影響 205
リテラル 194
COLLSEQ の影響 258
データ項目の分割 (UNSTRING) 102
データ項目の連結 (STRING) 99
データ操作
文字データ 99
データ定義 344
データ定義属性コード 344
データの検査 (INSPECT) 110
データ表現
移植性 497
影響を与えるコンパイラー・オプション 253
データ名
相互参照 347
MAP リスト内の 344
テーブル
値のロード 71
値の割り当て 73
エレメント 65
エレメントのサブストリングの参照 107
エレメントの参照 69
可変長
オーバーレイを防ぐ 650
作成 77
初期化 80

テーブル (続き)

可変長 (続き)

ロードの例 79

行 67

組み込み関数による処理 83

効率のよいコーディング 600, 601

参照変更 69

指標、定義 69

指標による参照の例 68

初期化

エレメントのすべての出現 75

グループ・レベルの 74

それぞれの項目の個別の 74

INITIALIZE の使用 72

PERFORM VARYING の使用 96

ストライド計算 601

説明 38

添え字、定義 69

添え字による参照の例 68

多次元 66

探索

概要 80

順次 81

逐次 81

パフォーマンス 80

2 進数 82

定義 65

同一エレメント仕様 600

動的ロード 72

配列との比較 38

深さ 67

ループ 96

レコードの再定義 74

列 65

1 次元 65

2 次元 67

3 次元 67

OCCURS 文節による定義 65

テーブルの動的なロード 72

定義

ファイル

概要 133

例 133

定数

計算 597

形象、定義 27

データ項目 597

定義 26

ディレクトリー

エラー・リスト・ファイル 226

パスの追加 228

リンカー検索用 233

DLL のパスの指定 218

適合要件

INVOKE でのオブジェクト参照引き渡しの例 454

適合要件 (続き)

INVOKE の RETURNING 句 455

INVOKE の USING 句 453

出口モジュール

デバッグ 350

ライブラリー名の代わりに使用される場合 269

ロードおよび呼び出し 268

SYSADATA データ・セットのために呼び出される 270

SYSLIB の代わりに使用される場合 269

SYSPRINT の代わりに使用される場合 270

テスト

条件 95

数値オペランド 90

データ 90

UPSI スイッチ 90

手続き部

インスタンス・メソッド 441

クライアント 448

サブプログラムでの 525

ステートメント

コンパイラ指示 20

条件付き 19

範囲区切り 19

命令ステートメント 19

説明 17

用語 17

RETURNING

パラメーターの戻し 17

メソッドでの使用 532

USING

パラメーターの受け取り 17, 523

BY VALUE 525

鉄道線路構文図の読み方 xvi

デバッグ

アセンブラー 351

概要 329

コンパイラー・オプション

概要 333

THREAD の制約事項 332

シンボリック情報の生成 230

デバッガーの使用 340

バッチ機能のアクティブ化 326

ユーザー出口 350

ランタイム・オプション 332

CICS プログラム 366

COBOL 言語機能の使用 329

idebug コマンド 351

デバッグ、言語機能の

クラス・テスト 331

宣言 332

デバッグ行 332

デバッグ・ステートメント 332

デバッグ、言語機能の (続き)

範囲終了符号 330

ファイル状況キー 330

INITIALIZE ステートメント 331

SET ステートメント 331

WITH DEBUGGING MODE 文節 332

統計組み込み関数 59

動詞、プログラムで使用される 340

動詞相互参照リスト

説明 340

動的呼び出し

CICS のもとで 363

DB2 API には使用できない 355

動的ロード、要件 218

特殊機能指定 7

特殊レジスター

組み込み関数の引数 57

ADDRESS 522

JNIEnvPtr 479

LENGTH OF 118, 522

RETURN-CODE 532

SORT-RETURN

ソートまたはマージの終了 158

ソートまたはマージの成功の判別 154

WHEN-COMPILED 118

XML-CODE 396

XML-EVENT 396

XML-NTEXT 396

XML-TEXT 396

特記事項 833

トップダウン・プログラミング

回避するための構成 596

[ナ行]

内部浮動小数点データ

(COMP-1、COMP-2) 49

内部ブリッジ

日付処理用 574

利点 572

例 575

内部ブリッジによる日付処理の利点 572

長さを検出する、データ項目の 118

名前宣言

探索 510

名前装飾

定義 238

CDECL インターフェース規約について 512

SYSTEM インターフェース規約について 514, 530

名前の有効範囲

グローバル 510

実行単位 555

プログラム起動インスタンス 556

名前の有効範囲 (続き)

マルチスレッド化の影響 555

要約表 556

ローカル 510

日時

組み込み関数 654

形式

整数から秒への変換

(CEEISEC) 677

タイム・スタンプから秒数への変換

(CEESECS) 688

秒から整数への変換

(CEESECI) 685

秒から文字タイム・スタンプへの変換

(CEEDATM) 663

文字形式から COBOL 整数形式へ

の変換 (CEECLDY) 655

文字形式からリリアン形式への変換

(CEEDAYS) 667

リリアン形式から文字形式への変換

(CEEDATE) 659

構文 688

サービス

概要 653

計算の実行 612

条件処理 612

条件フィードバック 614

ピクチャー・ストリング 615

フィードバック・コード 612

戻りコード 612

リスト 653

例 613

CALL ステートメントを使用した

呼び出し 611

CEECLDY: 日付から COBOL 整

数形式への変換 655

CEEDATE: リリアン日付から文字

形式への変換 659

CEEDATM: 秒から文字タイム・ス

タンプへの変換 663

CEEDAYS: 日付からリリアン形式

への変換 667

CEEDYWK: リリアン日付からの曜

日の計算 670

CEEGMTO: グリニッジ標準時から

のオフセットの取得 674

CEEGMT: 現在のグリニッジ標準時

の取得 673

CEEISEC: 整数から秒への変換

677

CEELOCT: 現在の現地時間の取得

680

CEEQCEN: 世紀ウィンドウの照会

682

CEESCEN: 世紀ウィンドウの設定

683

日時 (続き)

サービス (続き)

CEESECI: 秒から整数への変換

685

CEESECS: タイム・スタンプから

秒数への変換 688

CEEUTC: 協定世界時の取得 693

RETURN-CODE 特殊レジスター

612

日時の取得 (CEELOCT) 680

二分探索

説明 82

例 83

入出力

エラー後のロジック・フロー 161

エラーの検査 162

概要 121

コーディング

概要 133

例 133

GUI アプリケーション 220

入出力コーディング

エラー処理技法 161

状況コードの検査

概要 164

例 165

正常操作の検査 162

AT END (ファイルの終わり) 句 161

EXCEPTION/ERROR 宣言 162

入力

概要 127

ファイルから 121

入力プロシージャ

コーディング 148

制限 150

例 153

RELEASE または RELEASE FROM

が必要 149

ヌル終了ストリング

処理 526

取り扱い 105

例 106

ネイティブ形式

移植性に関する考慮事項 499

メソッドの引数用 623

BINARY オプション 253

CHAR オプション 255

COMP-5 データ 253

FLOAT オプション 274

JNI サービスの引数用 623

NATIVE 句 253

-host オプションのコマンド行引数への

影響 537

ネストされた COPY ステートメント

269, 609

ネストされた IF ステートメント

コーディング 86

望ましい EVALUATE ステートメント

86

CONTINUE ステートメント 86

NULL ブランチを伴う 85

ネストされた区切り範囲ステートメント

22

ネストされた組み込み関数 57

ネストされたプログラム

移動、制御の 507

指針 507

説明 507

名前の有効範囲 509

マップ 340, 347

呼び出し 507

CALL identifier に OPTLINK を使用

507

ネストされたプログラムの統合 604

ネストされたプログラム・マップ

説明 340

例 347

ネスト・レベル

ステートメント 343

プログラム 343, 347

年のウィンドウ操作

サポートされない場合 579

制御方法 586

利点 572

MLE アプローチ 573

年フィールド拡張 575

年末尾型日付フィールド 577

[ハ行]

バイト反転整数、影響、移植性への 498

バイト・オーダー・マーク 176

配列

COBOL 38

Java

宣言する 486

取り扱い 487

パス名

カタログおよびヘルプ・ファイルの指

定 219

検索順序優先順位 214

コピーブックの検索に使用 228, 303

実行可能プログラムに対する指定 220

複数、指定 215, 303

ライブラリー・テキスト 215, 303

ロケール情報データベースの指定 219

LIB コンパイラー・オプションによる

指定 275

パック 10 進数データ項目

効率的な使用 49, 599

サイン表記 53

バック 10 進数データ項目 (続き)
説明 49
同義語 45
日付フィールドの起こりうる問題 590
バッチ・コンパイル 285
バッチ・デバッグ、アクティブ化 326
パフォーマンス
一貫性のあるデータ型 599
コーディング 595
コンパイラ・オプション
DYNAM 605
FLOAT 499
OPTIMIZE 603, 605
SSRANGE 605
TEST 605
THREAD 293, 605
TRUNC 293, 605
コンパイラ・オプションの影響 605
最適化プログラム
概要 604
算術式 599
算術評価 598
指数 599
実行時の考慮事項 595
データの使用 598
テーブル探索
逐次探索の改善 81
二分と逐次の比較 80
テーブルのコーディング 600
テーブルの処理 601
プログラミング・スタイル 596
変数添え字のデータ形式 69
ライン外 PERFORM とインラインの
比較 95
ワークシート 608
CICS 環境 595
EVALUATE 内の WHEN 句の順序
88
OCCURS DEPENDING ON 601
TEMPMEM 環境変数の使用 216
パラメーター
メインプログラムにおける 537
呼び出し先プログラムの中での記述
523
パラメーター・リスト
ADEXIT 用 270
INEXIT を使用した場合のアドレス
268
PRTEXIT 用 270
範囲区切りステートメント
説明 19
ネストされた 22
範囲終了符号
暗黙的な 21
デバッグでの補助 330
明示的 19, 21

汎用オブジェクト参照 450
ヒープ、サイズの定義 548
ヒープ・スペース、cob2 コマンドを使用
した割り振り 230
ヒープ・スペースの割り振り 230
比較条件 90
引数
メインプログラムに対する 537
呼び出し側プログラムでの記述 523
BY VALUE で渡す 523
OMITTED の指定 524
OMITTED 引数に関するテスト 524
引数として渡すデータのグループ化 526
引数を省略するための OMITTED 句 524
ピクチャー・ストリング
日時サービスおよび 615
非互換データ 54
ビッグ・エンディアン
国別文字の表現 503
整数の表現 498, 502
データ表現の形式 253
定義 48
ビッグ・エンディアン、リトル・エンディ
アンへの変換 176
日付算術演算 584
日付情報、形式 219
日付操作
組み込み関数 38
コンパイルの日付の検出 118
日付のウィンドウ操作
サポートされない場合 579
制御方法 586
利点 572
例 574, 580
MLE アプローチ 573
日付の比較 577
日付フィールド拡張
説明 575
利点 572
日付フィールドの潜在的な問題 590
非日付、MLE での 582
表意定数
国別文字 179
定義 27
HIGH-VALUE の制約事項 179
評価、データ項目の内容の
組み込み関数 114
クラス・テスト
概要 90
数値の 54
INSPECT ステートメント 110
評価の順序
コンパイラ・オプション 251
算術演算子 56, 637
表現
データ 54

表現 (続き)
符号 53
表示浮動小数点データ (USAGE
DISPLAY) 46
標準 COBOL 85
定義 xvi
ピリオド、範囲終了符号としての 21
ファイル
オープン 135
オペレーティング・システムに対する
識別 10
外部 533
環境変数を使用したアクセス 217
コンパイラまたはリンカーに渡され
る 232
サイズ制限 131
識別 121
使用法の説明 11
処理
Btrieve ファイル 123
Pervasive.SQL ファイル 123
RSD ファイル 123
STL ファイル 123
説明 12
名前の変更 11
ファイル位置標識 135, 138
ファイル編成の比較 128
複数、コンパイル 223
プログラム・ファイルを外部ファイル
に関連付ける 7
リンカー 235
レコードの更新 142
レコードの削除 141
レコードの置換 140
レコードの追加 140
レコードの読み取り 138
Btrieve 121
cob2 でサポートされる拡張子 232
COBOL コーディング
概要 133
例 133
Pervasive.SQL 121
RSD 121
STL 121
TRAP ランタイム・オプションの影響
327
ファイル位置標識 135, 138
ファイル拡張子
エラー・メッセージ・リストの場合
226
リンカー・パラメーター 232
ファイル記述 (FD) 記入項目 13
ファイル終了句 (AT END) 161
ファイル状況キー
エラー処理 330

- ファイル状況キー (続き)
 - 状況コードと一緒に使用
 - 概要 164
 - 例 165
 - 正常 OPEN かどうかの検査 162, 164
 - 設定 132
 - 入出力エラーの検査 162
 - Btrieve ファイル 163
- ファイル状況コード
 - 使用 161
 - 02 139
 - 39 165
 - 92 141
- ファイルのオープン
 - 概要 135
 - 環境変数を使用 217
- ファイルへのレコードの追加
 - 概要 140
 - 順次 140
 - ランダムまたは動的に 140
- ファイル変換
 - 2000 年言語拡張での 576
- ファイル編成
 - 概要 127
 - 行順次 129
 - 索引付き 129
 - 順次 128
 - 相対 130
- ファイル・アクセス・モード
 - 行順次ファイル用 129
 - 索引付きファイル用 129
 - 順次 130
 - 順次ファイル用 128
 - 相対ファイル用 130
 - 動的 130
 - 要約テーブル 128
 - ランダム 130
- ファイル・システム・サポート
 - Btrieve 327
 - FILESYS ランタイム・オプションの使用 327
 - Pervasive.SQL 327
 - RSD 327
 - STL 327
- ファクトリー定義、コーディング 464
- ファクトリー・セクション、定義 464
- ファクトリー・データ
 - それをアクセス可能にする 465
 - 定義 429, 465
 - private 465
- ファクトリー・メソッド
 - 隠蔽 467
 - 定義 429, 466
 - プロシージャ・プログラムのラップに使用 474
 - 呼び出し 468
- ファクトリー・メソッドの隠蔽 467
- フィードバック・トークン
 - 日時サービスおよび 614
- 深さ、テーブルの 67
- 複合 OCCURS DEPENDING ON
 - 可変位置グループ 648
 - 可変位置データ項目 648
 - 基本形式 647
 - 複合 ODO 項目 647
- 複数の通貨記号
 - 使用 62
 - 例 63
- 含まれているプログラムの統合 604
- 符号条件
 - 数値オペランドの符号のテスト 90
 - 日付処理での使用 583
- 物理
 - レコード 13
- 浮動小数点演算
 - 指数 643
 - 比較 61
 - 評価 60
 - 例の評価 62
- 浮動小数点データ
 - 移植性 499
 - 外部 46
 - 固定小数点と浮動小数点との間の変換 52
 - 使用計画 598
 - 中間結果 642
 - 内部
 - 形式 49
 - パフォーマンスに関するヒント 599
 - パフォーマンスの考慮事項 499
 - 変換と精度 52
- フラグおよびスイッチ 91
- プラットフォームの違い 500
- ブランチ、暗黙の 94
- プリンター・ファイル 129
- プログラム
 - 入り口点、呼び出し規約 265
 - 決定
 - スイッチおよびフラグ 91
 - ループ 95
 - EVALUATE ステートメント 85
 - IF ステートメント 85
 - PERFORM ステートメント 95
 - 構造体 5
 - サブプログラム 505
 - 診断 343
 - 制約 595
 - ソース・コード・サンプル
 - ダイナミック・リンク・ライブラリ 541
 - 定義ファイル 542
- プログラム (続き)
 - 属性コード 347
 - 統計 343
 - ネスト・レベル 343
 - メイン 505
- プログラム、実行 240
- プログラムの実行 240
- プログラムのドキュメンテーション 7
- プログラム名
 - 指定 5
 - 相互参照 348
 - 大/小文字の処理 282
- プロシージャおよびデータ名相互参照の記述 338
- プロシージャ・ポインター・データ項目
 - 入り口点の入り口アドレス 530
 - 使用する際の規則 530
 - 定義 530
 - 呼び出し可能サービスへのパラメータの受け渡し 530
 - SET ステートメントと 530
 - SYSTEM インターフェース規約 530
 - Windows の制約事項 530
- プロセス
 - 終了 517
 - 定義 553
- 文、定義 18
- 文書エンコード宣言 405
- 分離型の CICS 変換プログラム
 - 制限 366
 - 呼び出し 361
- 分離符号
 - 移植性 42
 - 印刷 42
 - 符号付き国別 10 進数に必要 42
- ベース・ロケーター 345
- ヘルプ・ファイル
 - 各国語の設定 219
 - パス名の指定 219
- 変換、データ項目の
 - 英数字へ
 - DISPLAY による 37
 - DISPLAY-OF を使用した 186
 - 大文字または小文字への
 - 組み込み関数を使用した 112
 - INSPECT による 111
 - 国別から UTF-8 への 188
 - 国別から中国語 GB 18030 へ 189
 - 国別と
 - 中国語 GB 18030 から 189
 - ACCEPT による 36
 - MOVE を使用した 185
 - NATIONAL-OF を使用した 186
 - UTF-8 から 188
 - 組み込み関数を使用した 111
 - コード・ページ間の 114

変換、データ項目の (続き)

- 精度 52
- データ・フォーマット間の 52
- 文字の逆順 112
- INSPECT による 110
- INTEGER、INTEGER-PART による整数への 109
- NUMVAL、NUMVAL-C による数値への 113
- 変換、ファイルの拡張日付形式への例 576
- 変換、文字形式からリリアン日付への (CEEDAYS) 667
- 変換、リリアン日付から文字形式への (CEEDATE) 659
- 変換、CICS を COBOL へ 361
- 変換、COBOL データから XML への概要 413
- 例 416
- 変更
 - ソース・リストのタイトル 7
 - ファイル名 11
 - 文字から数値への 113

変数

- 参照修飾子としての 107
- 定義 23

変数、環境

- コンパイラー 215
- 設定
 - 「システムのプロパティ」ウィンドウ 213
 - ロケール 200
 - COBOL for Windows 用 214
 - SET コマンド 213
- 定義 213
- ランタイム 217
- リンカー 217
- 割り当て名 217
- CLASSPATH 217
- COBCPYEXT 215
- COBJVMINIOPTIONS 217
- COBLSTDIR 215
- COBMSGs 217
- COBOPT 215
- COBPATH
 - 説明 215, 218
 - CICS 動的呼び出し 363
- COBRTOPT 218
- EBCDIC_CODEPAGE 218
- ILINK 231
- LANG 218
- LC_ALL 219
- LC_COLLATE 219
- LC_CTYPE 219
- LC_MESSAGES 219
- LC_TIME 219

変数、環境 (続き)

- LIB 217
- library-name 215, 303
- LOCPATH 219
- NLSPATH 219
- PATH 220
- SYSIN、SYSIPT、SYSOUT、SYSLIST、SYSLST、CONSOLE、SYSPUNCH、SYSPCH 220
- SYSLIB 216
- TEMPMEM 216
- text-name 215, 303
- TMP 221
- TZ 221
- ポインター・データ項目
 - アドレスの受け渡しに使用 527
 - アドレスの増分 527
 - 説明 38
 - チェーン・リストの処理に使用 527
 - NULL 値 527
- 本書のアクセシビリティ xv

[マ行]

マージ

- エラー番号
 - 考えられる値のリスト 155
 - iwzGetSortErrno を使用した取得 154
- 完了コード 154
- キー
 - 概要 146
 - 定義 152
 - デフォルト 205
- 基準 152
- 終了 158
- 診断メッセージ 154
- 正常終了の判別 154
- 説明 145
- 代替照合シーケンス 153
- ファイルの説明 147
- プロセス 146
- マッピング、DATA DIVISION 項目の 340
- マルチスレッド化
 - 概要 553
 - 言語エレメントの有効範囲
 - 実行単位 555
 - プログラム起動インスタンス 556
 - 要約表 556
 - 再帰 557
 - 事前初期設定 558
 - 制御転送 557
 - 制約 558
 - データ・セクションの選択
 - OO クライアントにおいて 450

マルチスレッド化 (続き)

- プログラムの終了 558
- 用語 553
- リソースへのアクセスの同期化 559
- 例 559
- COBOL プログラムの準備 553
- THREAD コンパイラー・オプション
 - いつ選択するか 557
 - での制約事項 293
- マルチスレッド環境での実行 293
- マルチスレッド環境の要件 283
- マルチタスキング、定義 554
- 矛盾するコンパイラー・オプション 251
- 明示範囲終了符号 21
- 命名
 - プログラム 5
- 命令ステートメントのリスト 19
- メインプログラム
 - サブプログラム 505
 - に対する引数 537
 - cob2 による指定 229, 230
- メソッド
 - インスタンス 438, 462
 - オーバーライド 442, 467
 - から値を戻す 442
 - コンストラクター 466
 - シグニチャー 438
 - スーパークラスの呼び出し 456
 - 多重定義 443
 - ファクトリー 466
 - ファクトリーの隠蔽 467
 - 呼び出し 452, 468
 - 渡された引数の取得 441
 - Java アクセス制御 484
 - PROCEDURE DIVISION
 - RETURNING 532
- メッセージ
 - 各国語サポート 201
 - 各国語の設定 219
 - コンパイラー
 - 作成する重大度レベルの判別 271
 - 重大度レベル 225
 - ソース・リストへの組み込み 336
 - 日付関連 588
 - フラグを立てる重大度の選択 336
 - リストの生成 226
 - 2000 年言語拡張 588
 - コンパイラーの指示 226
 - ファイルの指定 217
 - ランタイム
 - 形式 783
 - 不完全または省略 240
 - リスト 783
 - TRAP(OFF) の副次作用 327
 - メッセージ・カタログ
 - パス名の指定 219

目標、2000 年言語拡張の 571
文字セット、定義 175
文字タイム・スタンプ
 リリアン日付の変換 (CEEDATM) 663
 例 664
 リリアン秒への変換 (CEESECS) 688
 例 688
COBOL 整数形式への変換
 (CEEGBLDY) 655
 例 657
文字の逆順 112
モジュール、出口
 ロードおよび呼び出し 268
モジュール定義ファイル
 規則 544
 作成 541, 544
 使用時期 544
 内容 541
 モジュール・ステートメント 545
 予約語 545
モジュール・エクスポート・ファイル
 エクスポート・ファイル、cob2 による
 作成 228
 作成 228, 541
モジュール・ステートメント 545
戻りコード
 コンパイラー 225
 日時サービスからのフィードバック・
 コード 612
 ファイル
 概要 164
 例 165
 DB2 SQL ステートメントからの 358
 RETURN-CODE 特殊レジスター 532,
 612
戻りコード、リンカー 237

[ヤ行]

ユーザー定義の条件 90
ユーザー出口作業域 267
ユーロ通貨記号 63
有効データ
 数値 54
優先順位
 算術演算子 56, 637
曜日、CEEDYWK による計算 670
呼び出し
 インスタンス・メソッド 452
 オーバーフロー条件 166
 コンパイラーおよびリンカー 223
 再帰的 520
 静的 510
 データの受け渡し 521
 動的 510
 日時サービス 611

呼び出し (続き)
 日時サービスに対する 611
 パラメーターの受け取り 523
 引数の受け渡し 523
 ファクトリーまたは静的メソッド 468
 例外条件 166
 JNI サービスへの 479
 LINKAGE SECTION 524
 OMITTED 引数 524
呼び出しインターフェース規約
 概要 512
 CALLINT で指示 254
 CDECL 512
 C/C++ 254
 ENTRYINT で指示 265
 ODBC を使用する場合 382
 OPTLINK 513
 STDCALL 514
 SYSTEM 514
呼び出し可能サービス
 CEEGBLDY: 日付から COBOL 整数形
 式への変換 655
 CEEDATE: リリアン日付から文字形式
 への変換 659
 CEEDATM: 秒から文字タイム・スタ
 ンプへの変換 663
 CEEDAYS: 日付からリリアン形式への
 変換 667
 CEEDYWK: リリアン日付からの曜日
 の計算 670
 CEEGMTO: グリニッジ標準時からの
 オフセットの取得 674
 CEEGMT: 現在のグリニッジ標準時の
 取得 673
 CEEISEC: 整数から秒への変換 677
 CEELOCT: 現在の現地時間の取得
 680
 CEEQCEN: 世紀ウィンドウの照会
 682
 CEESCEN: 世紀ウィンドウの設定
 683
 CEESECI: 秒から整数への変換 685
 CEESECS: タイム・スタンプから秒数
 への変換 688
 CEEUTC: 協定世界時の取得 693
 IGZEDT4: 4 桁年号を使用した現在日
 付の取得 693
 _iwzGetCCSID: コード・ページ ID か
 ら CCSID への変換 208
 _iwzGetLocaleCP: ロケールおよび
 EBCDIC コード・ページ値の取得
 207
呼び出し規約の概要 512
読み取り、ファイルからのレコードの
 順次 138
 動的 138

読み取り、ファイルからのレコードの (続
き)
 ランダム 138

[ラ行]

ライブラリー名、使用されない場合 269
ライブラリー・テキスト
 パスの指定 215, 303
ライン外の PERFORM 94
ラッパー、定義 474
ラッピング、プロシージャール指向プログラ
 ムの 474
ランタイム環境、事前初期設定
 概要 563
 例 566
ランタイム・オプション
 概要 325
 指定 218
 CHECK 325
 CHECK(OFF) 605
 CICS の場合 365
 DEBUG 326, 332
 ERRCOUNT 326
 FILESYS 327
 TRAP 327
 ON SIZE ERROR 160
 UPSI 328
ランタイム・メッセージ
 各国語の設定 219
 形式 783
 言語用のファイルの設定 217
 不完全または省略 240
 リスト 783
リスト
 影響を与えるコンパイラー・オプショ
 ン 249
 組み込みエラー・メッセージ 336
 短縮リストの生成 340
 データおよびプロシージャール名相互参
 照 338
 プログラム名のソート済み相互参照
 348
 ユーザー提供の行番号 341
 MAP 出力で使用される用語 345
リストのヘッダー 7
リテラル
 英数字
 制御文字 26
 説明 26
 マルチバイト内容が含まれる 194
 国別
 使用 178
 説明 26
 使用 26
 数値 26

リテラル (続き)

定義 26

16 進数

使用 178

DBCS

最大長 194

使用 193

説明 26

リトル・エンディアン

国別文字の表現 503

整数の表現 498, 502

データ表現の形式 253

定義 48

リトル・エンディアン、ビッグ・エンディ

アンへの変換 176

リリアン日

現在の現地日時の取得

(CEELOCT) 680

日付から COBOL 整数形式への変換

(CEECBLDY) 655

日付の変換 (CEEDAYS) 667

文字形式への変換 (CEEDATE) 659

曜日の計算 (CEEDYWK) 670

CEESECI への入力としての使用 687

GMT の取得 (CEEGMT) 673

output_seconds の変換 (CEEISEC) 678

リンカー

エラー 237

オブジェクト・ファイルの互換性 235

オプション

指定 232

リスト 307

検索規則 235

検索パス 233

情報の受け渡し 229

パラメーター 232

ファイル 235

プログラム名内のエラー 237

戻りコード 237

呼び出し 223

渡されるファイル 232

DLL への参照の解決 540

ILINK 環境変数を指定したオプション

の設定 231

LIB 環境変数 233

リンカー応答ファイル、内容のエコー出力

317

リンカー・オプション

オーバーライドの例 234

指定 232

設定 231

有効なオプションのリスト 307

/ALIGNADDR 309

/ALIGNFILE 309

/BASE 309

/CODE 310

リンカー・オプション (続き)

/DATA 311

/DBGPACK 311

/DEBUG 312

/DEFAULTLIBRARYSEARCH 312

/DLL 313

/ENTRY 313

/EXECUTABLE 313

/EXTDICTIONARY 314

/FIXED 315

/FORCE 315

/HEAP 315

/HELP 316

/INCLUDE 316

/INFORMATION 316

/LINENUMBERS 317

/LOGO 317

/MAP 318

/OUT 318

/PMTYP 319

/SECTION 320

/SEGMENTS 320

/STACK 321

/STUB 322

/SUBSYSTEM 322

/VERBOSE 322

/VERSION 323

/? 308

リンク

オプション 307

オプションの指定 232

オプションを設定するための ILINK

環境変数 231

コマンド行からの 233

コンパイラーの使用 233

静的 539

動的 540

プログラム 231

DLL、例 544

リンクする、オブジェクト指向アプリケー

ションを

例 245

cob2 コマンド 244

リンク・リスト処理、例 527

リンケージ、データ 517

リンケージ規約

概要 512

コンパイラー・オプション

CALLINT 254

コンパイラー・ディレクティブ

CALLINT 301

ネストされたプログラムの呼び出し用

の OPTLINK 507

COBOL および C/C++ 間の違い 516

COBOL から呼び出される

C/C++ 516

リンケージ規約 (続き)

C/C++ から呼び出される

COBOL 516

ループ

コーディング 94

条件付き 95

テーブルでの 96

明示回数だけ実行 95

do 95

例

CEECBLDY: 日付から COBOL 整数形
式への変換 657

CEEDATE: リリアン日付から文字形式
への変換 660

CEEDATM: 秒から文字形式への変換
664

CEEDAYS: 日付からリリアン形式へ
の変換 669

CEEDYWK: リリアン日付からの曜日
の計算 671

CEEGMT: グリニッジ標準時からの
オフセットの取得 676

CEEGMT: 現在の GMT の取得 674

CEEISEC: 整数から秒への変換 678

CEELOCT: 現在の現地時間の取得
681

CEEQCEN: 世紀ウィンドウの照会
682

CEESCEN: 世紀ウィンドウの設定
684

CEESECI: 秒から整数への変換 687

CEESECS: タイム・スタンプから秒数
への変換 691

IGZEDT4: 4 桁年号を使用した現在日
付の取得 693

_iwbzGetCCSID: コード・ページ ID か
ら CCSID への変換 208

_iwbzGetLocaleCP: ロケールおよび
EBCDIC コード・ページ値の取得
208

例外、代行受信 327

例外条件

CALL 166

XML GENERATE 424

XML PARSE 408

例外処理

Java との 481

レコード

形式 127

サイズ制限 131

説明 12

TRAP ランタイム・オプションの影響
327

列、テーブルの 65

レベル 88 項目

ウィンドウ化日付フィールド用 580

レベル 88 項目 (続き)

条件式 90

スイッチおよびフラグ 91

スイッチをオフに設定する例 93

スイッチをオンに設定する例 93

制約事項 581

単一値のテストの例 92

複数値のテストの例 92

レベル番号 344

ローカル参照、グローバルへの変換 457

ローカル名 510

ロード・アドレス 546

ロード・セグメント 546

ロケール

アクセス 207

値の構文 200

およびメッセージ 201

国/地域別情報の定義 197

サポートされる値のリスト 201

指定 218

照会 207

定義 197

デフォルト 200

リスト表示 338, 343

ロケール・ベースの照合 203

COLLSEQ コンパイラー・オプション
の影響 204

PROGRAM COLLATING SEQUENCE
の影響 204

ロケール情報データベース

検索パス名の指定 219

[ワ行]

ワークステーションおよびワークステーシ
ョン COBOL

ホストとの違い 623

割り当て名、環境変数 217

[数字]

16 進数

移植性 499

16 進数リテラル

国別

使用 178

説明 26

通貨符号として 63

16MB 境界

パフォーマンス・オプション 605

2 桁の年号

有効な値 615

100 年範囲内での照会

(CEEQCEN) 682

例 682

2 桁の年号 (続き)

100 年範囲内の設定 (CEESCEN) 683
例 684

2 進数データ、データ表現 253

2 進数データ項目

一般的な説明 47

効率的な使用 47, 598

中間結果 640

同義語 45

バイト反転 48

2000 年言語拡張

影響を与えるコンパイラー・オプション 249

概念 570

仮定による世紀ウィンドウ 581

原則 571

互換性のある日付 578

日付のウィンドウ操作 569

非日付 582

目標 571

DATEPROC コンパイラー・オプション 261

YEARWINDOW コンパイラー・オプション 299

3 桁の年号 615

4 桁の年号 615

A

ACCEPT ステートメント

入力データの割り当て 35

CICS のもとで 363

GUI アプリケーションでの使用 220

ACCEPT ステートメント、使用される環
境変数 220

ADATA コンパイラー・オプション 251

ADDRESS 特殊レジスター、CALL ステ
ートメント 522

ADEXIT サブオプション、EXIT コンパイ
ラー・オプションの 270

AIX、への移植 502

ALL 添え字

関数引数としてのテーブル・エレメン
ト 57

テーブル・エレメントの反復処理 83
例 84

ALPHABET 文節による照合シーケンスの
設定 8

ANNUITY 組み込み関数 59

APOST コンパイラー・オプション 284

ARITH コンパイラー・オプション

説明 252

ASCII

マルチバイトの移植性 500

EBCDIC への変換 114

SBCS の移植性 498

asm ファイル 276

ASSIGN 文節 10

AT END (ファイルの終わり) 161

ATTRIBUTE-CHARACTER XML イベント
ト 391

ATTRIBUTE-CHARACTERS XML イベント
ト 391

ATTRIBUTE-NAME XML イベント 391

ATTRIBUTE-NATIONAL-CHARACTER
XML イベント 391

B

Base クラス

java.lang.Object に相当 435

java.lang.Object のために使用 434

BASE ステートメント 546

BINARY コンパイラー・オプション 253

BLANK WHEN ZERO 文節

数字編集データを含んだ例 43

数値データ用にコーディングされる
177

Btrieve ファイル

識別 121

処理 123

ファイル状況標識 163

BY CONTENT 521

BY REFERENCE 521

BY VALUE

制限 523

説明 521

有効なデータ型 523

C

CALL ステートメント

エラー処理に関する 166

オーバーフロー条件 166

その中でのプログラム名の処理 282

日時サービスを呼び出すための 611

例外条件 166

BY CONTENT 521

BY REFERENCE 521

BY VALUE

制限 523

説明 521

CALL ID 511

CALL literal 511

CALLINT オプションの影響 254

DYNAM の場合 263

ON EXCEPTION を指定した 166

ON OVERFLOW を指定した 20, 166

RETURNING 533

USING 523

CALLINT コンパイラー・オプション
説明 254
ネストされたプログラムの CALL
identifier を持つ OPTLINK 507
C/C++ 呼び出し用 516
CALLINT ステートメント
説明 301
OPTLINK の使用確保の例 531
CANCEL ステートメント
その中でのプログラム名の処理 282
CBL ステートメント
コンパイラー・オプションの指定 224
説明 301
CBL ファイル拡張子 232
CCSID
定義 176
PARSE ステートメントの 389
XML 文書での矛盾 410
XML 文書の 389, 404, 405
CDECL インターフェース規約
説明 512
CALLINT で指定 254
CDECL サブオプション、CALLINT コン
パイラー・オプション 254
CEECELDY: 日付から COBOL 整数形式
への変換
構文 655
例 655
CEEDATE: リリアン日付から文字形式へ
の変換
構文 659
出力例の表 662
例 660
CEEDATM: 秒から文字タイム・スタンプ
への変換
構文 663
出力例の表 666
例 664
CEESECI 685
CEEDAYS: 日付からリリアン形式への変
換
構文 667
例 669
CEEDYWK: リリアン日付からの曜日の計
算
構文 670
例 671
CEEGMTO: グリニッジ標準時からのオフ
セットの取得
構文 674
例 676
CEEGMT: 現在のグリニッジ標準時の取得
構文 673
例 674
CEEISEC: 整数から秒への変換
構文 677

CEEISEC: 整数から秒への変換 (続き)
例 678
CEELOCT: 現在の現地時間の取得
構文 680
例 681
CEEQCEN: 世紀ウィンドウの照会
構文 682
例 682
CEESECN: 世紀ウィンドウの設定
構文 683
例 684
CEESECI: 秒から整数への変換
構文 685
例 687
CEESECS: タイム・スタンプから秒数へ
の変換
構文 688
例 691
CHAR 組み込み関数の例 115
CHAR コンパイラー・オプション
説明 255
マルチバイトの移植性 500
SBCS の移植性 498
CHECK ランタイム・オプション 325
参照変更 107
パフォーマンスの考慮事項 605
CICS
移植性に関する考慮事項 362
組み込みの変換プログラム
概要 366
呼び出し 361
利点 366
コンパイラー・オプション 365
システム日付、入手 363
制限
オブジェクト指向プログラム 362,
429
概要 362
事前初期設定 563
ネストされたプログラム 362
分離型の変換プログラム 366
DYNAM コンパイラー・オプシ
ョン 264
ダイナミック・リンク・ライブラリー
364
動的呼び出し 363
動的呼び出し用の DFHCOMMAREA
パラメーター 364
動的呼び出し用の DFHEIBLK パラメ
ーター 364
プログラムの開発 361
プログラムのコーディング 362
プログラムのデバッグ 366
分離型の変換プログラム
制限 366
呼び出し 361

CICS (続き)
ホスト・データ・フォーマットはサポ
ートされない 362
ランタイム・オプション 365
COBOL に関係のあるコマンド
cicsmap 361
cicstcl 361
TRAP ランタイム・オプションの影響
327
CICS コンパイラー・オプション
組み込みの変換プログラムを使用可能
にする 366
サブオプションの指定 257
説明 257
マルチオプションの相互作用 251
cicstcl -p コマンドの効果 366
cicsmap コマンド 361
cicstcl コマンド
組み込みの変換プログラム用の -p フ
ラグ 366
CICS プログラムの変換、コンパ
イル、およびリンク 361
CLASSPATH 環境変数
説明 217
Java クラスの場所の指定 245
cob2 コマンド
オブジェクト指向アプリケーションを
コンパイルする場合 243
オブジェクト指向アプリケーションを
リンクする場合 244
オプション
オプションをリンカーに渡す
-b 233
説明 228
-host 228, 537, 623
コンパイルの例 223
サポートされるファイル拡張子 232
説明 223
リンクの例 234
command-line argument format 537
COBCPYEXT 環境変数 215
COBJVMINIOPTIONS 環境変数
説明 217
JVM オプションの指定 247
COBLSTDIR 環境変数 215
COBMSGs 環境変数 217
COBOL
オブジェクト指向
コンパイル 243
実行 245
リンク 244
および C/C++ 515
データ型、C/C++ との対応 517
C/C++ DLL の呼び出し、例 518
C/C++ 呼び出し用のパラメーター・リ
スト 516

COBOL (続き)
C/C++ 呼び出し用のリンケージ 516
Java 479
アプリケーションの構造化 474
コンパイル 243
実行 245
リンク 244
COBOL for Windows
環境変数の設定 214
ランタイム・メッセージ 783
COBOL クライアント
オブジェクト参照引き渡しの例 454
例 468
COBOL 用語 23
COBOPT 環境変数 215
COBPATH 環境変数
説明 215, 218
CICS 動的呼び出し 363
COBRTOPT 環境変数 218
COLLATING SEQUENCE 句
移植性に関する考慮事項 498
国別キーに適用されない 152
ソートおよびマージ・キーへの影響
205
PROGRAM COLLATING SEQUENCE
文節のオーバーライド 8, 153
SORT または MERGE での使用 153
COLLSEQ コンパイラー・オプション
移植性に関する考慮事項 498
英数字照合シーケンスへの影響 204
説明 258
DBCS 照合シーケンスへの影響 205
COMMENT XML イベント 391
COMMON 属性 6, 507
COMP (COMPUTATIONAL) 47
COMPILE コンパイラー・オプション
構文エラーを見つけるための
NOCOMPILE の使用 334
説明 260
COMPUTATIONAL (COMP) 47
COMPUTATIONAL-1 (COMP-1)
形式 49
パフォーマンスに関するヒント 599
COMPUTATIONAL-2 (COMP-2)
形式 49
パフォーマンスに関するヒント 599
COMPUTATIONAL-3 (COMP-3)
説明 49
日付フィールドの起こりうる問題 590
COMPUTATIONAL-4 (COMP-4) 47
COMPUTATIONAL-5 (COMP-5) 47
COMPUTE ステートメント
コーディングが容易な 55
算術結果の割り当て 35
COMP-1 (COMPUTATIONAL-1)
形式 49

COMP-1 (COMPUTATIONAL-1) (続き)
パフォーマンスに関するヒント 599
COMP-2 (COMPUTATIONAL-2)
形式 49
パフォーマンスに関するヒント 599
COMP-3 (COMPUTATIONAL-3) 49
COMP-4 (COMPUTATIONAL-4) 47
COMP-5 (COMPUTATIONAL-5) 47
CONFIGURATION SECTION 7
CONTENT-CHARACTER XML イベント
391
CONTENT-CHARACTERS XML イベント
392
CONTENT-NATIONAL-CHARACTER
XML イベント 392
CONTINUE ステートメント 86
CONTROL ステートメント 301
CONVERTING 句 (INSPECT) の例 111
COPY ステートメント
移植性のための使用 496
説明 303
ネストされた 269, 609
例 610
COPY 名
検索されるファイル拡張子 215
COUNT IN 句
UNSTRING 102
XML GENERATE 425
CURRENCY コンパイラー・オプション
260
CURRENT-DATE 組み込み関数
例 58
CICS のもとで 363
C/C++
データ型、COBOL との対応 517
変数パラメーター・リスト 516
COBOL 515
COBOL からの呼び出し用のリンケージ 516
COBOL から呼び出される DLL、例
518
COBOL との通信 515
COBOL プログラムに対する複数の呼び出し 515
C/C++ 用の可変パラメーター・リスト
516
C/C++ 呼び出し規約 254

D

DATA DIVISION
インスタンス・データ 436, 462
インスタンス・メソッド 440
クライアント 449
グループ・レベルの USAGE
NATIONAL 文節 181

DATA DIVISION (続き)
グループ・レベルの USAGE 文節 25
コーディング 12
項目のマッピング 276, 340
制限 12
説明 12
ファクトリー・データ 465
ファクトリー・メソッド 467
リスト 340
FD 記入項目 12
FILE SECTION 12
GROUP-USAGE NATIONAL 文節 66
LINKAGE SECTION 16
OCCURS DEPENDING ON (ODO) 文節 77
OCCURS 文節 65
REDEFINES 文節 74
USAGE IS INDEX 文節 70
WORKING-STORAGE SECTION 12
DATA RECORDS 文節 13
DATA コンパイラー・オプション
パフォーマンスの考慮事項 605
DATE FORMAT 文節
国別データと一緒にには使用できない
570
自動日付認識に使用 569
DATEPROC コンパイラー・オプション
警告レベル・メッセージの分析 588
説明 261
DATEVAL 組み込み関数
使用 587
例 587
DATE-COMPILED 段落 5
DATE-OF-INTEGER 組み込み関数 58
DB2
オプション 358
コーディングに関する考慮事項 355
コプロセッサ
概要 355
SQL INCLUDE の使用 357
バインド・ファイル名 359
パッケージ名 359
プリコンパイラーには NODYNAM が
必要 355
無視されるオプション 358
SQL ステートメント
概要 355
コーディング 356
バイナリー・データの使用 357
戻りコード 358
SQL INCLUDE 357
DB2DBDFT 環境変数 215, 358
DB2INCLUDE 環境変数 357
DB2PATH 環境変数
説明 215
SYSLIB との相互作用 357

DBCS データ
 エンコード 184
 これを伴う MOVE ステートメント 33
 宣言する 193
 テスト 195
 比較する
 英数字グループと 206
 国別と 192, 206
 照合シーケンスの影響 205
 リテラル 194
 変換
 国別への、概要 195
 リテラル
 最大長 194
 使用 193
 説明 26
 比較する 194
DBCS 比較 90
DEBUG ランタイム・オプション 326
DEF 拡張子、リンカー・パラメーター 232
DESC サブオプション、CALLINT コンパイラー・オプション 254
DESCRIPTION ステートメント 546
DESCRIPTOR サブオプション、CALLINT コンパイラー・オプション 254
DFHCOMMAREA パラメーター
 CICS 動的呼び出しで使用 364
DFHEIBLK パラメーター
 CICS 動的呼び出しで使用 364
DIAGTRUNC コンパイラー・オプション 263
DISPLAY (USAGE IS)
 エンコード 184
 外部 10 進数 46
 浮動小数点 46
DISPLAY ステートメント
 データ値の表示 37
 デバッグでの使用 330
 GUI アプリケーションでの使用 220
DISPLAY ステートメント、使用される環境変数 220
DISPLAY-1 (USAGE IS)
 エンコード 184
DISPLAY-OF 組み込み関数
 ギリシャ語データでの例 187
 使用 186
 中国語データでの例 189
 UTF-8 データでの例 188
 XML 文書での 405
DLL 拡張子、リンカー・パラメーター 232
DLL ファイル
 再配布 241
 ディレクトリー・パスの設定 218

DLL への参照の解決 540
do ループ 95
DOCUMENT-TYPE-DECLARATION XML イベント 392
DOS、での実行 550
do-until 96
do-while 96
DYNAM コンパイラー・オプション
 説明 263
 パフォーマンスの考慮事項 605
 CALL literal への影響 511
 DLL の解決への影響 541

E

E レベルのエラー・メッセージ 225, 336
EBCDIC
 マルチバイトの移植性 500
 ASCII への変換 114
 SBCS の移植性 498
EBCDIC_CODEPAGE 環境変数
 設定 218
 有効な値 201
ENCODING-DECLARATION XML イベント 392
END-OF-CDATA-SECTION XML イベント 392
END-OF-DOCUMENT XML イベント 392
END-OF-ELEMENT XML イベント 392
ENTRY ステートメント
 その中でのプログラム名の処理 282
 代替入り口点の 530
ENTRYINT コンパイラー・オプション
 説明 264
 C/C++ からの呼び出し用 516
ENVIRONMENT DIVISION
 インスタンス・メソッド 439
 クライアント 448
 クラス 435
 サブクラス 461
 照合シーケンスのコーディング 8
 説明 7
 CONFIGURATION SECTION 7
 INPUT-OUTPUT SECTION 7
ERRCOUNT ランタイム・オプション 326
ERRMSG、エラー・メッセージのリストの生成 226
EVALUATE ステートメント
 幾つかの条件をテストする例 89
 ケース構造 87
 コーディング 87
 構造化プログラミング 596
 ネストされた IF と対比 88, 89
 パフォーマンス 88

EVALUATE ステートメント (続き)
 複数値のテストの例 92, 93
 複数条件のテストに使用 85
 複数の WHEN 句の例 89
 THRU 句の例 88
EXCEPTION XML イベント 392
EXCEPTION/ERROR 宣言
 説明 162
 ファイル状況キー 163
EXE 拡張子、リンカー・パラメーター 232
EXIT PROGRAM ステートメント
 サブプログラムにおける 506
 メインプログラムにおける 506
EXIT オプションの ADEXIT サブオプション 267
EXIT コンパイラー・オプション
 説明 265
 文字ストリング形式 267
EXP 拡張子、リンカー・パラメーター 232
exp ファイル、cob2 による作成 228
EXPORTS ステートメント 547
 呼び出し可能サブプログラムのリスト 541

EXTERNAL データ
 共用 533
EXTERNAL 文節
 データ項目の 533
 ファイルの共用の 13, 533
 ファイルの場合の例 534

F

FACTORY 段落
 ファクトリー・データ 465
 ファクトリー・メソッド 466
FD (ファイル記述) 記入項目 13
FILE SECTION
 説明 12
 レコードの説明 12
 DATA RECORDS 文節 13
 EXTERNAL 文節 13
 FD 記入項目 13
 GLOBAL 文節 13
 RECORD CONTAINS 文節 13
 RECORD IS VARYING 13
 RECORDING MODE 文節 13
 VALUE OF 13
FILE STATUS 文節
 使用 162
 状況コードを持つ
 概要 164
 例 165
 ファイルのロード 139
 例 166

FILESYS ランタイム・オプション 327
FILE-CONTROL 段落、例 8
FLAG コンパイラー・オプション
コンパイラー出力 337
使用 336
説明 271
FLAGSTD コンパイラー・オプション
272
FLOAT コンパイラー・オプション 274

G

GB 18030 データ
国別との間の変換 189
処理 189
get メソッドおよび set メソッド 444
GETMAIN のアドレスの保管 267
GLOBAL 文節、ファイルに対する 13,
16
GOBACK ステートメント
サブプログラムにおける 506
メインプログラムにおける 506
GROUP-USAGE NATIONAL 文節
国別グループの初期化 32
国別グループの宣言の例 25
国別グループの定義 181
テーブルの定義 66
Java との通信 485

H

HEAPSIZE ステートメント 548

I

I レベルのメッセージ 225, 336
idebug コマンド、例 351
IDENTIFICATION DIVISION
クライアント 447
クラス 434
コーディング 5
サブクラス 461
必要な段落 5
メソッド 439
リストのヘッダーの例 7
CLASS-ID 段落 434, 461
DATE-COMPILED 段落 5
PROGRAM-ID 段落 5
TITLE ステートメント 7
IEEE
移植性 499
IF ステートメント
コーディング 85
ネストされた 86

IF ステートメント (続き)
複数条件の場合に、代わりに
EVALUATE を使用 86
NULL ブランチを伴う 85
IGZEDT4: 4 桁年号を使用した現在日付の
取得 693
ILIB コマンド
ライブラリーの作成および管理 233
ILINK 環境変数
リンカー・オプションの設定用 231
例 234
ILINK コマンド
リンカーの呼び出し 233
IMP 拡張子、リンカー・パラメーター
232
INEXIT サブオプション、EXIT オプショ
ンの 266, 268
INITIAL 属性 506
ネストされたプログラムへの影響 6
プログラムを初期状態に設定 6
INITIALIZE ステートメント
国別グループ値のロード 32
グループ値のロード 31
テーブルの値のロード 72
デバッグ用の使用 331
例 28
REPLACING 句 72
INPUT-OUTPUT SECTION 7
INSPECT ステートメント
使用 110
例 110
INTEGER 組み込み関数の例 109
INTEGER-OF-DATE 組み込み関数 58
INTEGER-PART 組み込み関数 109
INVALID KEY 句
例 166
INVOKE ステートメント
オブジェクトの作成に使用 456
メソッドの呼び出しに使用 452
ON EXCEPTION を指定した 452,
468
PROCEDURE DIVISION RETURNING
との 532
RETURNING 句 455
USING 句 453
iwzGetSortErrmo を使用したソートまたは
マージ・エラー番号の取得 154

J

Java
インターオペラビリティ 479
オブジェクト配列 486
クラス型 485
グローバル参照
受け渡し 482

Java (続き)
グローバル参照 (続き)
オブジェクト 482
管理 482
JNI サービス 483
サポートされるリリース 246
ストリング
宣言する 486
取り扱い 490
ストリング配列 486
相互運用可能データ型、コーディング
485
データ共用 484
長い配列 486
二重配列 487
バイト配列 486
配列
宣言する 486
取り扱い 487
例 489
配列クラス 484
ブール配列 486
浮動配列 487
短い配列 486
メソッド
アクセス制御 484
文字配列 486
例
配列の処理 489
例外処理 481
例外
処理 481
例 481
catch 481
throw 481
ローカル参照
受け渡し 482
オブジェクト 482
解放 483
管理 482
削除 483
保管 483
マルチスレッド化ごと 483
JNI サービス 483
boolean 型 485
byte 型 485
char 型 485
COBOL 479
アプリケーションの構造化 474
コンパイル 243
実行 245
リンク 244
COBOL での実行 245
double 型 485
float 型 485
int 型 485

Java (続き)
 int 配列 486
 jstring クラス 484
 long 型 485
 short 型 485
Java 仮想マシン
 オブジェクト参照 482
 初期化 246
 例外 481
Java との相互運用が可能なデータ型 485
javac コマンド 243
java.lang.Object
 Base として参照 434
JNI
 オブジェクト参照の比較 451
 クラス・オブジェクト参照の取得 480
 構造環境 479
 アドレス可能度の場合 480
 サービスへアクセス 479
 使用した場合の制限 480
 例外取り扱いサービス 481
 ローカル参照をグローバルに変換 457
 Java ストリング・サービス 490
 Java 配列サービス 487
 Unicode サービス 490
 UTF-8 サービス 490
JNIEncPtr 特殊レジスター 479
JNINativeInterface
 構造環境 479
 JNLCpy 479
JNLCpy
 コンパイル用 243
 リスト 707
 JNINativeInterface の場合 479
jstring Java クラス 484

L

LANG 環境変数 218
LC_ALL 199
LC_ALL 環境変数 219
LC_COLLATE 199
LC_COLLATE 環境変数 219
LC_CTYPE 199
LC_CTYPE 環境変数 219
LC_MESSAGES 199
LC_MESSAGES 環境変数 219
LC_TIME 199
LC_TIME 環境変数 219
LENGTH OF 特殊レジスター
 受け渡し 522
 使用 118
LENGTH 組み込み関数 114
 可変長の結果 116
 国別データを伴う 118
 例 58, 118

LENGTH 組み込み関数 (続き)
 LENGTH OF 特殊レジスターと比較 118
LIB 拡張子、リンカー・パラメーター 232
LIB 環境変数 217
LIB コンパイラー・オプション 274
lib ファイル、cob2 による作成 228
LIBEXIT サブオプション、EXIT オプションの 266, 269
LIBRARY ステートメント 549
library-name
 指定されなかった場合の代替 228
 ライブラリー・テキストのパスの指定 215, 303
LINECOUNT コンパイラー・オプション 275
LINKAGE SECTION
 コーディング 524
 再帰呼び出し 17
 パラメーターを記述するための 523
 THREAD オプションを指定した 17
LIST コンパイラー・オプション
 出力の取得 340
 説明 275
LOCAL-STORAGE SECTION
 クライアント 449, 450
 WORKING-STORAGE との比較
 概要 14
 例 15
 OO クライアント 450
LOCPATH 環境変数 219
LOG 組み込み関数 59
LOWER-CASE 組み込み関数 112
LST ファイル拡張子 226
LSTFILE コンパイラー・オプション 276

M

MAKE ファイル 238
MAP 拡張子、リンカー・パラメーター 232
MAP コンパイラー・オプション
 組み込みマップ要約 340
 出力で使用される記号 345
 出力で使用される用語 345
 使用 339, 340
 説明 276
 ネストされたプログラム・マップ 340
 例 347
 例 344, 347
MAP 出力で使用されるシンボル 345
MAP 出力で使用される用語 345
MAX 組み込み関数
 関数の例 58
 使用 115

MAX 組み込み関数 (続き)
 テーブル計算の例 84
MDECK コンパイラー・オプション
 説明 278
 マルチオプションの相互作用 251
MEAN 組み込み関数
 テーブル計算の例 84
 統計計算の例 59
MEDIAN 組み込み関数
 テーブル計算の例 84
 統計計算の例 59
MERGE 作業ファイル 221
MERGE ステートメント
 概要 145
 説明 151
 ASCENDINGDESCENDING KEY 句 152
 COLLATING SEQUENCE 句 8, 153
 GIVING 句 151
 USING 句 151
METHOD-ID 段落 439
MIN 組み込み関数
 使用 115
 例 109
MIXED サブオプション、PGMNAME の 283
MLE 570
MOVE ステートメント
 基本受信項目を伴う 33
 国別項目を伴う 33
 国別データへの変換 185
 グループ移動と基本移動の対比 34, 182
 グループ受信項目を伴う 34
 算術結果の割り当て 35
 送信項目および受信項目の長さに対する ODO の影響 78
 CORRESPONDING 34
MQ アプリケーション 553

N

NAME ステートメント 549
NATIONAL (USAGE IS)
 外部 10 進数 46
 浮動小数点 46
NATIONAL-OF 組み込み関数
 ギリシャ語データでの例 187
 使用 186
 中国語データでの例 189
 UTF-8 データでの例 188
 XML 文書での 405
NCOLLSEQ コンパイラー・オプション
 国別照合シーケンスへの影響 204, 206
 国別比較への影響 190

NCOLLSEQ コンパイラー・オプション
(続き)

説明 279

ソートおよびマージ・キーへの影響
152

NLSPATH 環境変数 219

NMAKE コマンド

記述ファイルを使用 240

コマンド行上 238

コマンド・ファイルを使用 239

説明 238

NOCOMPIL コンパイラー・オプション
構文エラーの検出に使用 334

NODESC サブオプション、CALLINT コ
ンパイラー・オプション 254

NODESCRIPTOR サブオプション、
CALLINT コンパイラー・オプション
254

NOSSRANGE コンパイラー・オプション
エラー検査への影響 325

NSYMBOL コンパイラー・オプション
国別データ項目の 178

国別リテラルの 178

説明 279

DBCS リテラル用の 178

N リテラルへの影響 26

NULL ブランチ 85

NUMBER コンパイラー・オプション
説明 280

デバッグ用 341

NUMVAL 組み込み関数
説明 113

NUMVAL-C 組み込み関数
説明 113

例 58

O

OBJ 拡張子、リンカー・パラメーター
232

OBJECT 段落

インスタンス・データ 436, 462

インスタンス・メソッド 438

OBJECT-COMPUTER 段落 7

OCCURS DEPENDING ON (ODO) 文節
可変長テーブル作成用 77

最適化 601

単純 77

複合 647

ODO エレメントの初期化 80

ODO オブジェクト 77

ODO サブジェクト 77

OCCURS INDEXED BY 文節による指標
の作成 70

OCCURS 文節

指標作成用の INDEXED BY 句 70

OCCURS 文節 (続き)

多次元テーブルを作成するためにネス
トされた 66

テーブルの定義 65

テーブル・エレメントの定義 66

レベル 01 項目では使用できない 66

ASCENDING|DESCENDING KEY 句
テーブル・エレメントの順序の指定
66

二分探索に必要 82

例 83

ODBC

エラー・メッセージ 382

概要 369

組み込み SQL 369

組み込み SQL との比較 369

ドライバのインストールおよび構成
370

ドライバ・マネージャー 370

バックグラウンド 370

付属のコピーブック 375

例 376

ODBC3D.CPY の例 380

ODBC3P.CPY 377

戻り値へのアクセス 373

呼び出しインターフェース規約 382

利点 369

C データ型のマッピング 371

COBOL からの API の使用 370

COBOL ポインターの受け渡し 371

ODO オブジェクト 77

ODO サブジェクト 77

OMITTED パラメーター 612

ON EXCEPTION 句

INVOKE ステートメント 452, 468

ON SIZE ERROR

ウィンドウ化日付フィールドでの 585

OPEN ステートメント

ファイル状況キー 162

ファイルの可用性 135

OPEN 命令コード 268

OPTIMIZE コンパイラー・オプション
使用 603

説明 281

パフォーマンスの考慮事項 605

パフォーマンスへの影響 603

パラメーター引き渡しの影響 524

OPTLINK インターフェース規約

説明 513

その使用確保の例 531

CALLINT で指定 254

OPTLINK サブオプション、CALLINT コ
ンパイラー・オプション 254

ORD 組み込み関数の例 115

ORD-MAX 組み込み関数

使用 116

ORD-MAX 組み込み関数 (続き)

テーブル計算の例 84

ORD-MIN 組み込み関数 116

P

PATH 環境変数

説明 220

COBOL クラスの場所の指定 245

PERFORM ステートメント

インライン 94

指標を変更するための 71

テーブル用の

指標付けを使用した例 76

添え字付けを使用した例 75

明示回数だけ実行 95

ライン外 94

ループのコーディング 94

TEST AFTER 95

TEST BEFORE 95

THRU 97

TIMES 95

UNTIL 95

VARYING 96

VARYING WITH TEST AFTER 96

WITH TEST AFTER . . . UNTIL 96

WITH TEST BEFORE . . .

UNTIL 96

Pervasive.SQL ファイル

識別 121

処理 123

PGMNAME コンパイラー・オプション
282

PICTURE 文節

国別データを表す N 177

国別編集データ 177

使用される記号の判別 260

数字編集データ 177

数値データ 41

ゼロ抑制用の Z 43

内部浮動小数点に使用できない 42

非互換データ 54

PRESENT-VALUE 組み込み関数 59

PROBE コンパイラー・オプション 283

PROCESS (CBL) ステートメント

コンパイラー・オプションの指定 224

説明 301

矛盾するオプション 251

PROCESSING-INSTRUCTION-DATA XML
イベント 392

PROCESSING-INSTRUCTION-TARGET
XML イベント 393

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文
節

英数字比較への影響 205

PROGRAM COLLATING SEQUENCE 文節 (続き)
 国別オペランドにも DBCS オペランドにも影響しない 9
 国別比較に影響なし 206
 照合シーケンスの設定 8
 デフォルト照合シーケンスのオーバーライド 153
 COLLATING SEQUENCE 句によるオーバーライド 8
 COLLSEQ の相互作用 259
 DBCS 比較に影響なし 205
 PROGRAM-ID 段落
 コーディング 5
 COMMON 属性 6
 INITIAL 属性 6
 PRTEXIT サブオプション、EXIT オプションの 267, 270

Q

QUOTE コンパイラー・オプション 284

R

RANGE 組み込み関数
 テーブル計算の例 84
 統計計算の例 59
 RECORD CONTAINS 文節
 FILE SECTION 記入項目 13
 RECORDING MODE 文節
 QSAM ファイル 13
 REDEFINES 文節を使用して、レコードをテーブルに作成 74
 RELEASE FROM ステートメント
 例 148
 RELEASE との比較 149
 RELEASE ステートメント
 RELEASE FROM との比較 149
 SORT での 148, 149
 REM 組み込み関数 59
 REPLACING 句 (INSPECT) の例 110
 REPOSITORY 段落
 クライアント 448
 クラス 435
 コーディング 7
 サブクラス 461
 RETURN ステートメント
 出力プロシージャで必要 150
 INTO 句を指定した 150
 RETURNING 句
 メソッドでの使用 532
 CALL ステートメント 533
 INVOKE ステートメント 455

RETURNING 句 (続き)
 PROCEDURE DIVISION ヘッダー 442
 RETURN-CODE 特殊レジスター
 受け渡し、プログラム間でのデータの 532
 日時サービスへの呼び出し後の値 612
 プログラム間での戻りコードの共用 532
 INVOKE で設定しない 453
 REVERSE 組み込み関数 112
 RMODE コンパイラー・オプション
 パフォーマンスの考慮事項 605
 ROUNDED 句 636
 RSD ファイル
 識別 121
 処理 123
 制約 131
 RSD ファイル・システム 126

S

S レベルのエラー・メッセージ 225, 336
 SEARCH ALL ステートメント
 指標を変更するための 71
 テーブルは順序付けが必要 82
 二分探索 82
 例 83
 SEARCH ステートメント
 指標を変更するための 71
 逐次探索 81
 テーブルの複数のレベルを検索するためのネスト 81
 例 81
 SELECT OPTIONAL 135
 SELECT 文節
 入出力ファイルの変更 11
 SELF 451
 SEPOBJ コンパイラー・オプション 285
 SEQUENCE コンパイラー・オプション 286
 SET コマンド
 環境変数の定義 213
 パス検索順序 214
 SET 条件名 TO TRUE ステートメント
 スイッチおよびフラグ 93
 例 95, 96
 SET ステートメント
 オブジェクト参照用 451
 指標データ項目を変更するための 70
 指標を変更するための 71
 条件設定用の、例 93
 その中でのプログラム名の処理 282
 デバッグ用の使用 331
 プロシージャ・ポインター・データ項目用 530

SIGN IS SEPARATE 文節
 移植性 42
 印刷 42
 符号付き国別 10 進数データに必要な 42
 SIZE コンパイラー・オプション 287
 SORT 作業ファイル 221
 SORT ステートメント
 概要 145
 説明 151
 ASCENDINGDESCENDING KEY 句 152
 COLLATING SEQUENCE 句 8, 153
 GIVING 句 151
 USING 句 151
 SORT-RETURN 特殊レジスター
 ソートまたはマージの終了 158
 ソートまたはマージの成功の判別 154
 SOSI コンパイラー・オプション
 説明 287
 マルチバイトの移植性 500
 SOURCE および NUMBER 出力の例 343
 SOURCE コンパイラー・オプション 289, 340
 SOURCE-COMPUTER 段落 7
 SPACE コンパイラー・オプション 289
 SPECIAL-NAMES 段落
 コーディング 7
 SQL コンパイラー・オプション
 オブジェクト指向プログラムの制約事項 429
 コーディング 358
 説明 290
 マルチオプションの相互作用 251
 SQL ステートメント
 コーディング 356
 バイナリー・データの使用 357
 戻りコード 358
 DB2 サービスのための使用 355
 SQL INCLUDE 357
 SQLCA
 DB2 からの戻りコード 358
 SQL ステートメントを使用するプログラムについて宣言 356
 SQRT 組み込み関数 59
 SSRANGE コンパイラー・オプション
 参照変更 107
 使用 335
 説明 291
 パフォーマンスの考慮事項 605
 CHECK(OFF) ランタイム・オプションを使用してオフにする 605
 STACKSIZE ステートメント 549
 STANDALONE-DECLARATION XML イベント 393

START-OF-CDATA-SECTION XML イベント 393
START-OF-DOCUMENT XML イベント 393
START-OF-ELEMENT XML イベント 393
STDCALL インターフェース規約
制約事項
 引数を持つプログラム 530
 複数の入り口点 531
名前装飾 530
引数およびパラメーター・リストは一致しなければならない 238
CALLINT で指定 254
ENTRYINT で指定 265
STL ファイル
 識別 121
 処理 123
 制約 131
STL ファイル・システム
 説明 123
 戻りコード 124
STOP RUN ステートメント
 サブプログラムにおける 506
 メインプログラムにおける 506
STRING ステートメント
 オーバーフロー条件 159
 使用 99
 例 100
STUB ステートメント 550
SUM 組み込み関数、テーブル計算の例 84
SUPER 456
SYMBOLIC CHARACTERS 文節 10
SYSADATA
 出力 251
SYSADATA ファイル
 ファイル内容 713
 例 715
 レコード記述 716
 レコード・タイプ 714
SYSADATA レコード
 モジュールの提供 265
 呼び出される出口モジュール 270
SYSIN
 代替モジュールの提供 265
SYSIN、SYSIPT、SYSOUT、
 SYSLIST、SYSLST、CONSOLE、
 SYSPUNCH、SYSPCH 環境変数 220
SYSLIB
 使用されない場合 269
 代替モジュールの提供 265
SYSLIB 環境変数 216
 JNL.cpy の場所の指定 243
SYSPRINT
 使用されない場合 270

SYSPRINT (続き)
 代替モジュールの提供 265
SYSTEM インターフェース規約
制約事項
 引数を持つプログラム 530
 複数の入り口点 531
説明 514
名前装飾 530
引数およびパラメーター・リストは一致しなければならない 238
CALLINT で指定 254
ENTRYINT で指定 265
SYSTEM サブオプション、CALLINT コンパイラー・オプション 254
SYSTEM データ・セット
 メッセージの送信 292

T

TALLYING 句 (INSPECT)、例 110
TEMPMEM 環境変数 216
TERMINAL コンパイラー・オプション 292
TEST AFTER 95
TEST BEFORE 95
TEST コンパイラー・オプション
 説明 292
 デバッグ用に使用 340
 パフォーマンスの考慮事項 605
 マルチオプションの相互作用 251
THREAD コンパイラー・オプション
 オブジェクト指向 COBOL のための 243
説明 293
パフォーマンスの考慮事項 605
Java とのインターオペラビリティのための 243
LINKAGE SECTION 17
TITLE ステートメント
 リストのヘッダーの制御 7
TMP 環境変数 221
TRAP ランタイム・オプション
 説明 327
 ON SIZE ERROR 160
TRUNC コンパイラー・オプション
 説明 293
 パフォーマンスの考慮事項 605
TZ 環境変数 221

U

U レベルのエラー・メッセージ 225, 336
UNDAT 組み込み関数
 使用 587
 例 588

Unicode
 エンコード 184
 説明 175
 データ処理 171
 JNI サービス 490
UNKNOWN-REFERENCE-IN-ATTRIBUTE XML イベント 393
UNKNOWN-REFERENCE-IN-CONTENT XML イベント 393
UNSTRING ステートメント
 オーバーフロー条件 159
 使用 102
 例 103
UPPER サブオプション、PGMNAME の 283
UPPER-CASE 組み込み関数 112
UPSI スイッチ、設定 328
UPSI ランタイム・オプション 328
USAGE 文節
 グループ・レベルの 25
 グループ・レベルの NATIONAL 句 181
 非互換データ 54
INDEX 句による指標データ項目の作成 70
OBJECT REFERENCE 449
USE FOR DEBUGGING 宣言 332
USE FOR DEBUGGING 宣言部 326
USING 句
 INVOKE ステートメント 453
 PROCEDURE DIVISION ヘッダー 441, 525
UTF-16
 エンコード方式、国別データの 176
 定義 176
UTF-8
 国別との間の変換 188
 データ項目の処理 188
 定義 176
 ASCII インバリエント文字のエンコード 176
 JNI サービス 490

V

VALUE IS NULL 527
VALUE OF 文節 13
VALUE 文節
 大きな、TRUNC(BIN) での 295
 外部浮動小数点に使用できない 47
 可変長グループへの割り当て 80
 国別グループでの英数字リテラル、例 75
 国別データを持つ英数字リテラルの例 117

VALUE 文節 (続き)
 テーブルの値の割り当て
 エレメントのそれぞれの出現への
 75
 グループ・レベルの 74
 それぞれの項目に個別に 74
 内部浮動小数点リテラルの初期化 42
 COMP-5 を指定したラージ・リテラル
 48
VBREF コンパイラー・オプション
 出力例 349
 使用 340
 説明 297
VERSION ステートメント 551
VERSION-INFORMATION XML イベント
 393

W

W レベルのメッセージ 225, 336
WDZ70INSTDIR 環境変数 241
WHEN 句
 EVALUATE ステートメント 87
 SEARCH ALL ステートメント 82
 SEARCH ステートメント 81
WHEN-COMPILED 組み込み関数 118
WHEN-COMPILED 特殊レジスター 118
WITH DEBUGGING MODE 文節 326
 デバッグ行用 332
 デバッグ・ステートメント用 332
WITH POINTER 句
 STRING 99
 UNSTRING 102
WORKING-STORAGE SECTION
 インスタンス・データ 436, 462
 インスタンス・メソッド 440
 クライアント 449, 450
 初期化 297
 ファクトリー・データ 465
 マルチスレッド化の考慮事項 450
 LOCAL-STORAGE との比較
 概要 14
 例 15
 OO クライアント 450
WSCLEAR コンパイラー・オプション
 297

X

XML GENERATE ステートメント
 COUNT IN 425
 NOT ON EXCEPTION 415
 ON EXCEPTION 424
XML PARSE ステートメント
 概要 387

XML PARSE ステートメント (続き)
 使用 389
 NOT ON EXCEPTION 408
 ON EXCEPTION 408
XML イベント
 処理 391
 処理プロシーチャー 389
 説明 387
 ATTRIBUTE-CHARACTER 391
 ATTRIBUTE-CHARACTERS 391
 ATTRIBUTE-NAME 391
 ATTRIBUTE-NATIONAL-
 CHARACTER 391
 COMMENT 391
 CONTENT-CHARACTER 391
 CONTENT-CHARACTERS 392
 CONTENT-NATIONAL-
 CHARACTER 392
 DOCUMENT-TYPE-DECLARATION 392
 ENCODING-DECLARATION 392
 END-OF-CDATA-SECTION 392
 END-OF-DOCUMENT 392
 END-OF-ELEMENT 392
 EXCEPTION 392
 PROCESSING-INSTRUCTION-DATA 392
 PROCESSING-INSTRUCTION-TARGET 393
 STANDALONE-DECLARATION 393
 START-OF-CDATA-SECTION 393
 START-OF-DOCUMENT 393
 START-OF-ELEMENT 393
 UNKNOWN-REFERENCE-IN-
 ATTRIBUTE 393
 UNKNOWN-REFERENCE-IN-
 CONTENT 393
 VERSION-INFORMATION 393
XML 構文解析
 概要 387
 コード・ページの矛盾の処理 410
 終了 412
 処理プロシーチャーでの制御フロー
 401
 説明 389
 特殊レジスター 396
 例 394
 例外の処理 407
 CCSID 矛盾の処理 410
 CHAR(EBCDIC) の影響 390
XML 宣言 390
XML 出力
 エンコードの制御 424
 拡張
 エレメント名のハイフンを下線に変
 換する例 423
 基本的原理と技法 419
 データ定義の変更例 420

XML 出力 (続き)
 生成
 概要 413
 例 416
XML 出力の拡張
 エレメント名のハイフンを下線に変換
 する例 423
 基本的原理と技法 419
 データ定義の変更例 420
XML 出力の生成 413
 概要 413
 例 416
XML 処理プロシーチャー
 書き込み 396
 コード・ページの矛盾に関連した 410
 構文解析例外の処理 407
 指定 389
 特殊レジスターの使用 396
 パーサーでの制御フロー 401
 例 398
EXIT PROGRAM または GOBACK で
 のエラー 397
XML PARSE の制約事項 397
XML 生成
 エラーの処理 424
 概要 413
 出力の拡張
 エレメント名のハイフンを下線に変
 換する例 423
 基本的原理と技法 419
 データ定義の変更例 420
 生成される文字のカウント 415
 説明 413
 無視されるデータ項目 414
 例 416
XML 宣言
 エンコード宣言の指定 406
 制約事項 390
XML パーサー
 エラー処理 408
 概要 387
 適合性 703
XML 文書
 アクセス 389
 エンコード 404
 エンコードの制御 424
 外部コード・ページ 405
 拡張
 エレメント名のハイフンを下線に変
 換する例 423
 基本的原理と技法 419
 データ定義の変更例 420
 各国語 404
 基本的な文書エンコード 404
 コード化文字セット 405
 コード・ページの指定 406

XML 文書 (続き)

構文解析

説明 389

例 398

構文解析例外の処理 407

処理 387

生成

概要 413

例 416

パーサー 387

文書エンコード宣言 405

CHAR(EBCDIC) の影響 390

XML 宣言 390

XML 文書の構文解析

概要 387

説明 389

XML 例外コード

構文解析

処理可能でない 700

処理可能な 695

生成 706

XML-CODE 特殊レジスター

コード・ページの矛盾に関連した 410

構文解析での使用 387

構文解析の終了 412

構文解析の例外 408

構文解析の例外コード

エンコードの矛盾 407

処理可能でない 700

処理可能な 695

生成での使用 415

生成の例外 424

生成の例外コード 706

説明 396

内容 400

パーサーと処理プロシーチャー間の制御フロー 401

XML-EVENT 特殊レジスター

構文解析の例外 408

使用 387, 391

使用例 394

説明 396

内容 391

XML-NTEXT 特殊レジスター

構文解析の例外 408

使用 387

説明 396

内容 403

XML-TEXT 特殊レジスター

エンコード 397

構文解析の例外 408

使用 387

説明 396

内容 403

XREF コンパイラー・オプション

説明 297

XREF コンパイラー・オプション (続き)

データおよびプロシーチャー名の検出

338

XREF 出力

データ名相互参照 347

プログラム名相互参照 348

Y

YEARWINDOW コンパイラー・オプション

説明 299

Z

zSeries ホスト・データ形式

考慮事項 631

ZWB コンパイラー・オプション 299

[特殊文字]

*CBL ステートメント 301

*CONTROL ステートメント 301

-b cob2 オプション 229

-c cob2 オプション 228

-cmain cob2 オプション 229

-compre_ok cob2 オプション 228

-dll cob2 オプション 228

-g cob2 オプション

デバッグ用 230

-h cob2 オプション 230

-host cob2 オプション

オブジェクト指向アプリケーションについて 623

コマンド行引数への影響 537

コンパイラー・オプションへの影響 228

ホストのデータ形式 228

-I cob2 オプション

コピーブックの検索 228

-imp cob2 オプション、インポート・ライブラリーの指定 230

-main cob2 オプション

メインプログラムの指定 230

-q cob2 オプション 229

-s cob2 オプション

スタック・スペースの指定 230

-v cob2 オプション 230

-# cob2 オプション 230

-? cob2 オプション 230

.adt ファイル 251

.asm ファイル 276

.CBL ファイル拡張子 232

.DEF 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.DLL 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.EXE 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.EXP 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.exp ファイル、cob2 による作成 228

.IMP 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.LIB 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.lib ファイル、cob2 による作成 228

.LST ファイル拡張子 226

.MAP 拡張子、リンカー・パラメーター 232

.OBJ 拡張子、リンカー・パラメーター 232

/HEAP cob2 オプション、ヒープ・スペースの指定 230

? cob2 オプション 230

>>CALLINT コンパイラー指示

C/C++ 呼び出し用 516

>>CALLINT ステートメント

説明 301

OPTLINK の使用確保の例 531

_iwezGetCCSID: コード・ページ ID から CCSID への変換

構文 208

例 208

_iwezGetLocaleCP: ロケールおよび EBCDIC コード・ページ値の取得

構文 207

例 208



プログラム番号: 5724-L44

Printed in Japan

SC88-4294-00



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12